

遠くの光に踵を上げて



1. 出会い

「おい、もっと急いで行こーぜ」

少年が待ちきれないといった様子でもうひとりの少年を急かす。急かされた方の少年は足取りが重く気が乗らないようである。

「いいよね、ジークは」

深くため息。そしてわざとらしいくらいがっくり肩を落としてみせる。しかしそんな様子もまったく気にとめることもなく、ジークと呼ばれた少年は、もうひとりの少年——リックの腕を掴み引っ張って行く。そして、角を曲がったところで人だかりが目に入った。

「ほら、おまえがトロトロしてるからもう始まってるだろ！」

その語調に興奮をのぞかせながら、より強くリックの腕を引っ張り人だかりへと急いだ。

「ちょっとすみません」

そういとジークは行儀悪く人だかりの山をかき分け中へ進む。リックは周りの人々の冷たい視線を感じ、小さくなりながら、引っ張られるままついていった。その人だかりの中心にはさほど大きくない紙が貼り出されていた。

「王立アカデミー 魔導全科・合格者（成績順）」

その紙のいちばん上にはそう書いてある。この王立アカデミーとは国中から優れた人材を見つけだし育成する目的で設立された、学費等すべて免除のアカデミーである。募集数も少ないため当然毎年ものすごい倍率で、ちなみに今年は183倍であった。そうなのだ。ジークとリックのふたりは、今年この試験を受けたのである。そして、その結果が目の前に貼り出されている。リックはおそろおそろ顔を上げ、下から名前を見ていった。

「……ったー！！！」

片方の手で自分の名前を指差し、もう片方の手でジークの服を強く掴み、辺り中に聞こえる声で叫んだ。

「あったよ！ 受かったよ！！ しかも最下位じゃない！！」

そう叫びながらジークの服を上下に揺さぶり続けた。が、ジークは無反応。リックはそのことに冷静さを取り戻した。嫌な予感、妙な不安を抱きつつジークの顔をゆっくりと振り返る。その顔は一点を見つめ、口を半開きにしたまま、微動すらしない。リックはジークの目線を辿って合格発表の紙に目をやる。その瞬間、深く長く、ため息をついた。

「なんだ、受かってるじゃない。驚かさないでよ」

安堵の表情で、ジークの頭に軽くこぶしを入れる。それがきっかけで我を取り戻したのか、リックに向き直り、勢いよく訴えかけた。

「オレ、トップじゃねえんだよ！！ それも負けた相手が女だぜ！！ なんでだよ！！ 信じられるか？！！」

彼には絶対にトップをとる自信があった。今まで誰にも負けたことがなかったのだ。傍からみればばからしくみえるが、ジークにとっては「初めての敗北」であり一大事なのである。しかも、その相手が「女」であることに、彼はさらに衝撃を強めていた。

「男が女より優れてるなんて、誰が決めたの？」

背後から、凜とした声がした。その声には明らかに不愉快さが滲み出ていた。

「誰だよ」

ジークも負けなくらいに、不愉快さを滲み出させて振り返る。しかし、声の主らしき人物は見当たらない。

「どこを見てるのよ」

声と同時に、踵に何かが当たったような感触。ジークは背後の、自分の真下に近い位置を見下ろした。そこには、いた。自分の腰ほどの位置に頭のある、小さな女の子が。黒い、大きな瞳でじっと睨んでいる。

「ガキが口を出すことじゃねえだろ。こんなところに来てないで、うちに帰れよ」

多少驚いたものの、子供とわかって軽くあしらうつもりだった。だが――。

「私はアンジェリカ＝ナール＝ラグランジェ。あなたを負かせた女よ」

そう。「ジーク＝セドラック」と書かれた上に唯一ある名前、それが「アンジェリカ＝ナール＝ラグランジェ」であった。

2. アンジェリカ＝ナール＝ラグランジェ

私の名前は、アンジェリカ＝ナール＝ラグランジェ。この国では名門といわれるラグランジェ家の一人娘として生まれた。

母は王妃に仕える王宮魔導士、父はこの国を支える高官。世間的には立派な両親も、私に対しては普通の父親、母親でいてくれる。魔導の勉強を強要することもなく、わたしのやりたいようにすればいいと言って、いつも笑いかけてくれていた。私はそんな両親が大好きだし、毎日がとても幸せだった。ただひとつを除いては。

ラグランジェ家の分家、つまり親戚のひとたち――。

親戚たちは両親のこと、そして私のことも毛嫌いしているようだった。

「どうしてこの子だけ、髪も瞳も黒いのかしらね。不吉だわ。呪われている」

顔をあわせるたび聞かされるセリフ。私をもっと子供のときはわからなかったけれど、次第にそこに含まれている意味もわかってきた。つまり、私の両親をはじめラグランジェ家の人間すべての瞳の色は、濃い薄いの違いはあれ例外なくブルーなのだ。ただひとり、私を除いては……。

「あなたは何も心配することはないわ。」

両親は穏やかに私を抱き締める。心地よい安心感。私のことで親戚の人たちになじられても、父も母もまったく動じない。だから、私も気にしないようにしている。

だけど、このまま、言われるままというのは、くやしすぎる。どうにかして私のことを認めさせたかった。誰にも何も言わせないようにしたかった。そうするためには、方法はひとつしかない。

魔導の力を見せつけること――。

ラグランジェ家では魔導が何よりも優先する。父や母に匹敵するだけの力を付ければ、きっと認めざるを得ないと思うし、それに本当の子供であることも証明できるはずだ。魔導の力は遺伝に依るところが大きいらしいから……。

そのためにはどうすればいいか。考えた結果が、王立アカデミーである。

わざわざ王立アカデミーに入学しなくても、私が望みさえすればいくらでも魔導の教育は受けられる環境にはあった。王立アカデミー受験を決めたのは、私の力をはっきりとした基準で示したかったから。最年少で、トップで合格すれば、とりあえず第一段階はクリアできる、そう私は考えた。

だから、私は必死で頑張った。両親に心配されるほどだった。毎日、朝早くから夜遅くまで勉強し、魔導の力もつけていった。

そして、王立アカデミー受験を決意して一年、私は見事、最年少・トップ合格を果たした——

。

3. ジーク＝セドラック

俺の名前は、ジーク＝セドラック。平凡なごく普通の家庭に生まれた。

父も母も魔導の力はないはずだが、なぜか俺には生まれついて魔導の力が備わっていた。父と母にとって、俺は自慢の息子だった。魔導はもちろん勉強でも運動でも、誰にも負けたことはなかった。「1番」は俺の指定席だったし、そこにいることは当然だった。誰かに明け渡すことなど考えもしなかった。そう、あのときまでは……。

家が裕福ではなかったため、本格的に魔導の勉強をするためには学費免除の王立アカデミーへ入るしか選択肢がなかった。いや、この選択肢だけで十分なのだ。王立アカデミーは間違いなくこの国でトップの学校だし、そのうえ学費免除ときたら不満なんかあるはずがない。俺は高校卒業後の進路に王立アカデミーを選択した。それは、俺にとっても、周りにとっても、ごく自然なことだった。

俺の高校から王立アカデミーを受験したのは、俺とリックの二人。リックは俺がただひとり友達といえるヤツだ。

俺は他人にはあまり関心がなかったし、周りも俺に一目置いている風なところがあったので、高校に入るまでは特に仲の良い友達もいなかった。別にそれで構わないと思っていた。そんな俺が高校に入って出会ったのがリックだ。皆が俺を遠巻きに見ているなかで、あいつだけは人懐っこく話し掛けてきて俺の行く先々にくっついてきた。初めのうちは変なやつだと思って適当にあしらっていたのだが、そのうちいつの間にか、一緒にいることが当たり前ようになってきた。俺もこういうふう話し掛けてくれるのは嬉しかったのかもしれない。俺たちが友達といえる関係になるのにそう時間はかからなかった。俺たちはまったく正反対な性格だったが、それだからこそ上手くいったのだろう。

リックは見かけによらずできるヤツだった。成績は当然俺がトップだが、リックはたいてい俺の次、2番だった。それに魔導の方も、俺には及ばないがかなりできる。「ジークと一緒に王立アカデミーに行く」というのがリックの口癖だった。王立アカデミーに受かるかどうかは正直怪しいところだったが、それでもリックの決心は変わらなかった。

結果は……。リックはなんとか合格。俺は……。トップを信じて疑わなかったのに。それも、まさかあんな小さな女の子に負けてしまうとは……。俺の初めての挫折にしては厳しすぎた。免疫の無い俺の心にはこたえすぎるくらいこたえた。楽しいはずのこれからのアカデミー生活は、おかげで真っ暗だ。

4. セカンド・インプレッション

ジークは合格発表の日以来ずっと落ち込んでいた。小さな女の子に負けたことがよほどショックだったらしい。遠くを見て溜め息をつく日々が続いた。両親もリックも、こんなジークを見るのは初めてで、どう対処してよいものやらわからなかった。下手に慰めの言葉を掛けてもよけい傷つけるだけだろうということは想像がついた。

そうこうしているうちに王立アカデミーの入学式の日がやってきた。

「ジーク、急がないと遅れるよ！」

リックが玄関口でジークを急かす。しかし出てくる気配はない。

「ジーク！」

もう一度呼んでみるが返事が返ってこない。リックに不安がよぎる。しばらく待っていたが一向に出てくる気配がないので勝手に上がり、ジークの部屋のある二階に向かう。部屋の戸は開け放たれていて、ジークはその部屋のまん中に座っているのが見えた。リックからは背中しか見えないので、その表情までは察することはできない。しかしリックには、ジークの背中に暗い影のようなものを感じた。

「ジーク、まさか行かないなんて、言わないよね？」

「……」

「ジーク？」

「……ば一か。なにってんだよ。せっかく合格したのになんでフイにしなくちゃいけないんだよ。それに、いつかあのガキにギャフンと言わせなきゃな」

そう言うとリックの方を振り返り、ニヤリと勝ち気な笑みを浮かべた。それを見てリックは安堵するとともに、怒りが込み上げてきた。

「だったら、そんなにゆっくりしてる場合じゃないよ！！ ホントに遅れるよ！！」

ジークとリックは全力疾走でなんとか間に合った。

「せっかくの入学式にこんなヘトヘトになるなんて、もう……」

ぐったりした様子のリック。それとは対照的に息の乱れていないジーク。

「おまえ、体の鍛え方が足りないんだよ」

自分のせいでこうなったことをわかっているのかわかっていないのか、平然と言い放つ。リックは、はいはいといった感じで聞き流す。こんなことにいちいち腹を立ててはジークの親友はつとまらない。

全員揃ったところで、入学者は並ばされることになった。その並び順は、入学試験の成績順であった。ジークにとっては再びの屈辱であるはずだが、ふっきれたのかふっきろうとしているのか、表情には出さなかった。魔導全科の20名がいちばん前、横一列に並ぶ。その後ろに他の学科の生徒たちが並ぶ。ジークの右隣には、アンジェリカがまっすぐ前を見て立っている。ジーク

は横目でその様子をじっと見ていた。なにか決意を秘めた強い瞳、しゃきっと伸ばした背筋。この小さな女の子が、なぜか大きく見えた。ジークは視線を前に移した。

「なあ、おまえ」

小さな声で呼び掛けた。アンジェリカは自分のことだと気付いたのか横のジークを見上げる。ジークは前を向いたままで続けた。

「小さく見えるけど、何歳なんだ？」

アンジェリカも前を向き答えた。

「10歳」

実はこう見えても18くらいだったりして、とちょっと期待を込めて尋ねたが、やはりというかあてが外れた。

「そうだよな」

ジークは自分の悪あがきに苦笑いした。アンジェリカはそんなジークをいぶかしげに見上げた。そして思い出したようにはっとして言った。

「私、アンジェリカって名前があるの。おまえなんて言わないで！」

一生懸命そう言うアンジェリカを見ていると、ジークはなぜだか笑えてきた。そんなジークに不満たっぷりのアンジェリカは頬をふくらませる。

「わかった、わかった。アンジェリカ、だな」

そして、一息おいてさらに言った。

「よろしくな」

その言葉は、自分でも驚くくらいあっさりと言をついて出た。煮え湯を飲まされた相手にこんな言葉を掛けるとは、自分でも意外としかいいようがなかった。

5. 彼女のペース

入学式の後、それぞれの学科ごとに教室に連れられていった。魔導全科の教室は人数の割には広く、ロッカーもひとりひとり与えられていて、そこそこ快適だといえる。

「じゃあ、先生がくるまでここで自由にしててね」

教室まで案内してくれた女性（おそらく先輩）が、にっこり微笑んでそういうと手を振って教室を出ていった。

「ジーク、あの人もこの学校の人かな？ 歳も僕達と同じくらいみたいだったし」

リックは案内してくれた女性の後ろ姿を指さしながら、興味ありげに話しかけてきた。

「そうかもな」

ジークは面倒くさそうに、ぶっきらぼうに答えると、近くの机に腰掛けた。ジークは自分の興味のない話題に対しては、いつもこんなふうには面倒くさそうな生返事をする。リックはそのことをよくわかっていたので、これ以上この会話を続けようとしなかった。こういうリックだからこそ、ジークと上手くやってこられたのだ。

他の人たちはそれぞれ自己紹介を始めているようだった。やはり目立つのか、アンジェリカの周りには特に多くの人が集まっていた。ジークは横目でその様子をうかがっていた。アンジェリカは笑いながら、集まってきた人たちと楽しく会話をしていた。

「あの子、あのラグランジェ家、それも本家の一人娘だって。やっぱりすごいよね」

リックはジークの視線の先に気付いて、アンジェリカの話題を持ち掛けた。

ジークははっとした。言われてみれば、ラグランジェといえば名門中の名門だし、ミドルネームがあることから違和感も持っていた。名前を見たときにどうして気付かなかったのだろうとジークは思った。気付いたからどうというわけでもないのだが、気がつかなかったということ自体が、ジークにとっては情けなく、そしてくやしかった。やはり自分は完璧でなければならないという気持ちが、彼の中にはあるようだ。

あらためてアンジェリカの方に目をやった。その瞬間、二人の視線がぶつかった。ジークは一瞬、驚き、慌てて視線を外した。すると、アンジェリカは自分を取り囲む環を飛び出し、まっすぐ彼の前にやってきた。

「なんだ？」

その声にはまだ多少の動揺を感じ取れる。

「椅子があるのにどうして机の上に座っているの？」

挑発的な笑みを含みつつ、アンジェリカが上目遣いで問いかける。吸い込まれそうな、大きな漆黒の瞳。その様子にジークはまた少し動揺を大きくする。

「俺の勝手だろう」

動揺を悟られないようにアンジェリカから視線を逸らせながら答える。

「行儀が悪いわよ。降りなさいって。ほら！！」

アンジェリカは、そう言いながら彼のふとももをはたいた。予想外のことに驚いて、ジークは座っていた机から半分ずり落ちるような格好になった。

「いてーな！！ なにするんだ！！」

大声でアンジェリカに突っかかっていく。だが、にっこりと笑う彼女を見ると、すっかり毒気を抜かれてしまった。なんだかわからないうちに、完全に彼女のペースに巻き込まれてしまっていた。

6. 嵐・始まり

ガラガラガラ——。

教室の前の引き戸が開き、そこからひとりの男が現れた。太っているわけでも痩せているわけでもないのだが、やたら背は高い。190cmは超していそうだ。その場にいた全員が圧倒された。

男は真ん中の教壇まで進んだ。

「座れ」

彼は短く言った。表情は無表情、言い方は偉そう。この男は先生なのかどうなのか、不安が教室中に広がる。静まり返った中、椅子をひく音だけがあちこちから聞こえた。その音がひとしきりおさまったところで、教壇の男が口を開いた。

「私がここの担任をすることになったラウル＝インバースだ。本職は王宮医師だが、ここの教員が足りないということで駆り出された」

みんながただ驚いている中、ジークは机にひじをついた姿勢で顔をしかめていた。

「医者にセンセイやらせるなんて、ここも案外いい加減だな」

ぼそりと独り言のつもりでつぶやいたが、静まり返った空間には十分すぎるほど響いた。それをきっかけに教室がざわめき始めた。お互い隣どうしで顔を見合わせ、「そうだよな」など口々に言い合っている。リックはジークが起こした騒ぎに困惑したような複雑な表情を浮かべていた。

ラウルと名乗った男は、ただ無表情でそこにいた。

——ダン！！

意外なところから机を叩く音がした。

「なんにも知らないじゃない！！ラウルはすごいんだから！！私たち全員が束になってかかって全然かなわないよ！」

いちばん前の席のアンジェリカが、後ろを振り返りながら力説した。みんながあっけにとられていると、アンジェリカは前に向き直り、ラウルに怒りをぶつけた。

「ラウルも！ どうして反論しないの！」

ラウルはいたって冷静に、静かに言った。

「私が気に入らないというヤツはやめればいい。それだけだ」

その横柄な態度にジークはムツときていた。自分の態度は横柄だが他人の横柄な態度は許せないという、かなり自己中心的な性格である。ふと、ジークはなにかを思い立ったようで、口の片端をつり上げた企みの笑みを見せた。

「実力の程を、確かめさせてもらおうか」

そう言うと、軽快に机の上に飛び乗り、そのまま戦闘体制に入った。高まるジークの魔導に、周りの空気は渦を巻き始める。

「バカ！！こんなところでなにを始めるの！！」

アンジェリカが大声で叫び止めに入ろうとした。が、ラウルに後ろからひょいと抱えられて

しまった。

「ラウル！」

「いいからおとなしくここにいろ」

アンジェリカはラウルの後ろに降ろされた。心配そうな顔をしつつも、おとなしくラウルの言う通りに従っている。強気な彼女にしてはめずらしかった。

リックはジークが本気だということを感じ取り、急いで周りの人間を避難させる。自分では彼を止められないということはわかっていたので、こういうときはサポートにまわるしかなかった。なるべく被害を最小限に抑えるため、他の生徒たちと力を合わせて、教室の壁に沿って結界を張った。

緊張感ぶつかりあう中、ジークの魔力が最高潮に達した。次の瞬間、ジークの伸ばされた両腕の先の手のひらから、大きな熱い光球が飛び出す。それはまったく無防備に突っ立っているラウルに、猛スピードで目掛けて行く。

7. 圧倒

ジークの放った光球に飲み込まれようかというまさにそのとき、ラウルは瞬間的に魔導力を高め、目の前の光球の倍もあろうかという規模の光球をその身体全体からから繰り出した。一瞬にしてジークの光球を飲み込み、それを相殺した。それでもその勢いはとどまらず、ジークに向かって突進していった。そのスピードは、ジークのものとは比べ物にならない。まるで反応できないまま、今度はジークが光球に飲み込まれそうになっていた。そのすんでのところ、その僅かな隙間に透明な結界が張られた。しかし、それも鈍く砕け散る。そして、同時にジークも吹き飛ばされた。

リックたちはただ呆然としていた。一瞬にして起こったことに、考えが追いつかない。目の前は爆風が巻き起こした粉塵で、真っ白に煙っていた。

「ジーク……？ ジーク?!」

リックは大声で名前を呼びながら、粉っぽく、そしてまだ熱さが残る空間へと飛び込んでいった。大きく削れた床、砕け散った机、椅子、壁。ジークの姿は見当たらない。嫌な想像が頭の中を駆け巡り、今にも泣きそうな顔に変化していく。

「ドコ見てんだ……こ……っちだ」

後方からかすかな声が耳に届いた。

「ジーク?!」

瞳を潤ませながら、声の方に振り返った。リックが探していたよりも遥か後方にジークは倒れていた。既にアンジェリカが手当てを始めていたが、服はボロボロで、全身傷だらけだった。

「大丈夫？」

駆け寄りながらリックが尋ねる。

「おまえな、大丈夫そうに見えるか？ これが」

ジークは力なく苦笑いをした。

「腕にひびが入ってそうね。ちゃんと診てもらわなきゃ」

そういうと、アンジェリカは顔を上げた。彼女が投げかけた視線の先には、ラウルの姿があった。しばらくアンジェリカと視線を繋げたあと、ラウルは軽く溜め息をつきジークたちの方へ歩き出した。

リックとジークはその足音を聞きながら、息が出来なくなっていた。リックはともかく、ジークにとっては初めて味わう恐怖心。鼓動さえ凍りつく。足音が止まり、その恐怖が最高潮に達したところで、ジークの身体は宙に浮かんだ。ラウルに抱きかかえられていたのだ。ジークはギョッとした。

「私は医者だといったのを忘れたのか」

ラウルは何の表情も見せずに言った。ジークを軽々と抱えたまま、ボロボロに半壊した教室を

後にした。アンジェリカも黙ってその後ろをついていった。

「……ま、待って。僕も！」

我に返ったリックが小走りで後を追った。

教室に取り残されたその他の生徒たちは、いまだに呆然としたままだった。

「オレたち、ひょっとしてとんでもないところに来たんじゃ……」

その場にいたひとりが、ぽつりつつぶやいた。

8. 初めての

不思議な感覚だった。さっきまで本気で戦っていた相手に、傷を負わされた張本人に、手当てをされている。しかも、その手当ての的確さ、手際の良さは、素人目にも明らかだった。ジークはただその不思議な感覚に飲み込まれたまま、おとなしくなすがままにされていた。

アンジェリカはラウルの横でこまごまと手伝いをしていた。一方のリックはただおろおろしているだけだった。

「たいしたことはない。腕の骨には多少ひびが入っているが、あとはかすり傷だけだ」

一通りの手当てを終え、残った包帯を片づけながらラウルが言った。それを聞いてアンジェリカとリックはそろって安堵の息をもらした。しかし、当の本人のジークは相変わらずぼーっとしているだけだった。

「アンジェリカに感謝するんだな。アンジェリカがいなければ、これごときではすまなかっただろう」

ラウルの続けざまのこの言葉に、ようやくジークが反応した。急に思い出したように、腰掛けていたベッドから勢いよく跳び降り、アンジェリカの方に体を向け、堰を切ったように問い詰め始めた。

「あのすんでのところまで結界を張ったのはおまえか！ あの一瞬でよくあんなことが……」

ジークは驚き、感心したように言った。しかし、視界の隅のラウルに気がつくとはっとしたように彼を指さした。

「というか、おまえとこいつはどういう関係なんだ？！ もしかしてこいつとなにか企んでたのか？ 名門のラグランジェ家の娘がわざわざアカデミーに入ること自体、不自然だよな！」

アンジェリカは怒るというよりも呆れ顔で、一息おいて反撃を始めた。

「助けてもらってありがとうの一言もないのね。それにさっきも言ったと思うけど、『おまえ』じゃなくて『アンジェリカ』。『こいつ』じゃなくて『ラウル』。あと、ラグランジェ家の娘がアカデミーに入っちゃいけないなんてきまりでもあるの？ わたしがここで学びたいと思ったから来たのよ。どうして不自然なの？ 言い掛かりつけないで」

一瞬たじろいだものの、ジークもまだ負けじと切り返す。

「はぐらかすなよ。いちばん肝心なことの答えがないぜ。おま……アンジェリカとこいつの関係だ」

それを聞いて、アンジェリカはくすっと笑った。予想もしない反応に、ジークはいぶかしげな顔を見せる。

「なに、その台詞。奥さんに浮気された亭主みたい」

10歳の子供とは思えない台詞である。どこで覚えたのか謎だ。ジークが対応に悩んでいると、アンジェリカは続けて核心部分の話を始めた。

「私ね、子供の頃からちょくちょく王宮に行っていたのよ」

今でも子供だろう、と突っ込みたかったが続きが気になるのでおとなしく次の言葉を待った。

「両親が用事を済ませるまでの間、ラウルに預けられてたのよ。それで遊んでもらったり、魔導

を教えてもらったりしてたってわけ。ラウルがここの先生になったことは、わたしも今日初めて知ったのよ」

言われてみれば、至極常識的なことだった。さっきまで自分が考えていたことの方が、よっぽど突拍子もない。ジークは苦笑いした。

「よかったね、ジーク！」

さっきまで固唾を飲んで二人のやりとりを聞いていたリックが安堵の表情で声を掛ける。何が良かったのかさっぱりわからないが、ジークはついうなずいてしまった。

「実技の手伝いは難しいけど、ノートくらいなら僕が貸すから」

リックの何気ない一言に、いきなりの現実を突きつけられた。アカデミーに今日入学したばかりで、あいつとやりやっけて教室を半壊させ、しかもその相手は担任で……。ジークは一気に不安に襲われた。せっかく入学したのに即退学にもなりかねないことをやらかしてしまったのだ。ノートがどうか、そんな悠長なレベルの話ではない。

「なあ……」

気まずそうにラウルの背中に呼び掛ける。それだけで、ラウルは彼の心中まで察したようだった。

「安心しろ。人的被害はほとんどない。やめろと言われることはないだろう。ここには個性の強いやつも多く、ときどきこういうことも起こる。呼び出されて注意くらいはされるだろうがな」

それを聞いて、ジークの表情は一気に明るくなった。が、一方リックは冷や汗を浮かべた。

「ときどき起こるって……」

もう苦笑いするしかなかった。

そんなリックのことなどまるで眼中にないらしく、ジークはしばらく考えてから声を張り上げた。

「よし！ 卒業するまでにはおまえに勝つ！」

そう言ってまっすぐラウルを指差したジークには、いつもの自信に満ちた表情が戻っていた。いや、高慢さが消えて挑戦者としての気概が表れている分、前よりいきいきしていた。

このとき初めてジークは目標とすべき相手を見つけたのだ。

9. 箱の中の少女

「おっしゃー！！」

あれから3週間。ジークの腕からギブスが外された。ほぼ完治である。

「まだ無茶はするな。と言っても無駄だと思うが」

ラウルがいちおう釘を刺すが、やはり言っても無駄のようである。ジークはさっそく腕をぶんぶん振り回していた。早く使いたくてうずうずしている様子だ。

「思ったより早かったわね、治るの」

用済みとなったギブスの後片付けをしながら、アンジェリカが言った。

「日頃の鍛え方が違うんだ」

ジークは嬉しそうに言った。その姿は、自信家というより、むしろ無邪気な感じに見えた。アンジェリカは、はいはいといった調子で適当に受け流していた。リックはその後ろで、にこやかな顔をして立っている。

あの事件以来、ジーク、リック、アンジェリカの3人でいることが多くなった。とはいっても仲良しこよしというわけではなく、ジークとアンジェリカはなにかにつけて言い争っている。それをリックがなだめるというパターンだ。それはそれでバランスが取れていていいのかもしれない。

「10歳の女の子相手に、何もそんなにムキにならなくてもいいんじゃないの？」

ふたりきりになったときに、リックはジークにしてみた。

「10歳だろうが女だろうが、ムカつくものはムカつくんだよ」

それがジークの答えだった。

「アンジェリカ?!」

突然リックが素頓狂な声をあげる。

「え? なに？」

いきなり呼ばれたアンジェリカは何ごとかと思ひ、隣のリックを見上げた。リックはジークの背後を指差し固まっている。ジークとアンジェリカは指されたものを探すために振り返った。それを見た途端、口を開いたままでジークも固まった。

「あ、これ今日からだったのね」

アンジェリカだけひとり冷静である。いや、ひとりではなく、後ろの方でカルテの整理をしていたラウルもいたって冷静だった。

「なんだこれ！！」

ジークは驚いてるのか怒っているのか判別がつかないような口調で叫んだ。アンジェリカは、なぜ大声を出すのかわからないといった表情できょとんとしていた。

「公報広告よ」

「じゃなくて!! なんでおまえがってことだ!!」

リックが指を差していた先には、白いワンピースを着たアンジェリカが森の中にたたずんでいる映像があった。テレビという小さな箱の中に。

「史上最年少で王立アカデミー合格。おまけに名門ラグランジェ家のひとり娘だ。まわりが放っておくわけないだろう」

アンジェリカの代わりにラウルが答えた。よほど驚いたのか、二人は反論も返事もできないままただ呆然としている。アンジェリカは本当に不思議そうに首を傾けていた。

「ただの公報広告にちょっと出ただけなのに、なにをそんなに驚いてるの？」

感覚の違い。アンジェリカにとってはちょっと出てみただけという感覚だったが、どちらかといえば田舎町で育ったふたりにとってはテレビの中は別世界。その別世界に目の前の子がいたという事実は、かなりの衝撃だったのだろう。近くに感じ始めていたアンジェリカが、一瞬、遠い人のように思えた。

「……なんでオレには声がかからねーんだ」

しばしの沈黙の後、ジークがぽつりつつぶやいた。アンジェリカとリックは顔を見合わせ、そして吹き出した。

ジークの真意はわからないが、その一言でその場が和んだことは間違いなかった。

10. とまどい

あれ以来、アンジェリカはアカデミー内では知らない人がいない存在になった。もともと史上最年少トップ合格者ということで噂になっていたところに、あの広告が輪を掛けた形となった。普通に歩いているだけでも先輩、他の学科の生徒から先生に至るまで、いろいろな人に頻繁に声を掛けられる。アンジェリカはそういった声を掛けてくる人たちと、笑顔で気軽に話をしている。今まであまり多くの人と接する機会が少なかっただけに、こういったことが嬉しいらしい。

一方のジークはそれが不愉快らしい。ジーク、リック、アンジェリカの3人であることが多いだけに、そういった現場に遭遇することも当然多くなってくる。ジークはそのたびに不満をあからさまにしていた。ときには、話をしているアンジェリカの腕を引き、無理やりその場から引き離したこともあった。本人は授業に間に合わなくなるからと知っているが、それ以外の感情が入っていることは、その顔を見れば明らかである。

「もう！ ヤキモチ焼くのもほどほどにしてほしいわ！」

ジークのあからさまな態度や行動に、アンジェリカも少し困っている様子だった。

「誰がおまえなんかにヤキモチ焼くか。おまえだけチャホヤされてるのが気に入らないんだよ」

「……ジーク。それをヤキモチっていうんだよ」

リックが苦笑いを浮かべながら言った。

アンジェリカだけがチャホヤされているのが気に入らない。ジークは自分の不愉快な感情の理由付けをこう考えていた。が、なにかもやもやしたものが残る。間違っていない。だが、それだけではなにかが足りない。なのに、自分で説明できないのである。そのことが、彼の不愉快な感情を増幅させていた。しかし、彼はこのことを誰にも言わなかった。あえて言わなかったというよりは、言おうと思わなかったのだ。

「そうだ、リック。今日は私たち当番よ。そろそろやらない？」

今日最後の授業が終わって、しばらく外で缶ジュースを飲んでくつろいでいたところで、アンジェリカが切り出した。当番は教室の片づけをすることになっている。今日はアンジェリカとリックがふたりで当番だった。

「そうだね。そろそろ行こうか」

リックのその言葉と同時に、アンジェリカは座っていたベンチから立ち上がった。そして、横に立っていたジークの顔を見上げた。

「ジークは？ どうするの？」

「ん？ ……待ってるよ」

ちょっと迷ったような、歯切れの悪い答え。

「待ってるだけ？ 手伝ってくれないんだったら先に帰っていいわよ」

挑発するように、アンジェリカが切り返す。ジークはすぐに返答することができなかった。

「私を待っていたっていうんならいいけど」

アンジェリカは悪戯っぽく笑いながらそう続けた。

「誰がおまえなんか待ってるか！先に帰るからな！」

売り言葉に買い言葉でとっさに口を突いて出たその言葉に、ジークはあとに引けなくなってそのまま背中を向けて歩き出した。

「ジーク！」

リックのその声にジークは足を止めた。

「またあしたね」

ジークは振り返らず、ぶっきらぼうに片手を上げて、今度は早足で歩き出した。やり場のない怒りと、早くそこから立ち去りたいという思いが、彼にそうさせていた。リックが止めてくれると思ってしまった自分自身に腹が立った。同時に、恥ずかしくも思った。

ジークは今まではいつも自分の思うように、迷いなく行動してきた。だが、最近はとまどいが彼を揺さぶっていた。原因となっている人物はわかっている。が、なぜなのかという理由がまったくわからずにいた。

「ジークって……」

去っていくジークを眺めながら、アンジェリカが問いかけた。

「昔からあんな感じだったの？」

リックは少し首を傾げて考えた。

「最近ちょっとおかしいかも。昔はもっと強引でわがままで自分勝手だったかな」

言いたい放題である。

「そう。あ、そういえば最初に逢ったときってかなりそんな感じだったわよね」

そう言って笑ったアンジェリカの笑顔には、屈託がなかった。

11. 白と黒

年中、気候が温暖で過ごしやすいこの世界。

だが、今朝はいつもと違う。植物には白い霜が降り、吐く息も白い。多少は暑くなったり寒くなったりすることはあるが、ここまで極端に寒くなるということは今までなかった。未知のことが起こっている。人々はいい知れぬ不安に襲われていた。

「凍える……」

アカデミーへ向かう途中のアンジェリカが、口の前を白くしながらぼそりつつぶやいた。息をするだけで肺の奥に突き刺さりそうなほどだ。その一瞬でも体温を奪われていくのを感じ、つぶやいたことを後悔した。その身には脇が閉まらないくらいの重ね着。見た目など気にしている場合ではない。しかも、まだそれでも足りていない様子だ。背中を丸め、アカデミーの門をくぐろうとしたとき、もやの中にジークとリックの姿を見つけた。やはりふたりともみっともないくらいの重ね着をしている。

「おはよう」

語尾が消え入った、覇気のない声でリックが挨拶をした。ジークは身をすくめたまま、声を出さず手のひらだけ軽く上げてみせた。アンジェリカも同じポーズを返す。声を出す気にもなれないようだ。リックにはかすかに笑顔が見えるが、アンジェリカとジークは青白く、今にも死にそうな顔をしていた。

三人同時にアカデミーの門をくぐる。と、突然。何かに包まれたように寒さが和らいだ。暖かいとまでいかないものの、普通に動き、会話ができるくらいだ。3人はお互い顔を見合わせた。

「わけわかんねえことばかりだな」

ほとんど独り言のように、ジークが言った。

「ある種の結界みたいなものかしら」

アンジェリカも独り言のように言う。そう言いながら、見えない何かを探して辺りをきょろきょろ見渡していた。しかし、ちょっとみただけでそう簡単にわかるものではない。アンジェリカもそのことは承知していたので、本気で探そうとしていたわけではなかった。

教室に入ると、三人とも着すぎた服を脱ぎにかかった。

「すごく疲れたわよね。ヨロイでも着てみたいだわ」

「動きづらい分、ヨロイよりもタチが悪いぜ」

そういいながら、ジークとアンジェリカは、脱いだ服を無造作にロッカーに投げ込んでいた。一方、リックは丁寧にたたんでしまっている。彼がふと横を見ると、同じ動作をしてるふたりがいて、思わず笑えてきた。このふたり、似てるな。そう思ったが、思うだけで口には出さなかった。ものすごい剣幕で否定されることは目に見えていたからだ。

ガラガラガラ――。

少しの軋み音を含みながら、前の扉が開いた。

「席につけ」

いつもの調子でラウルが言う。生徒たちはバタバタと慌てて席についた。空席が目立つ。三割くらいは来ていないようだ。

「突然だが」

そう前置きして、ラウルは一息おき、続けた。

「四大結界師のひとり、レイ＝リューリック＝クライスが亡くなった」

教室内は水を打ったように静まり返った。

「柱のひとつを失ったことで、この世界の秩序がバランスを崩した。今朝からの異常な現象は、それによるものだ。近いうちに後任の結界師も決まり、元に戻るだろう」

この世界は四大結界師により支えられ護られていることは、誰もが知るところだ。ただ、その柱を欠いたときにどうなるかということは、ほとんどの者は知らなかった。

「夕方から葬送式を行う。各自それなりの格好をして集まれ。家に帰って着替えてもいいし、ここで貸し出しもしている。いったん解散だ」

そう言っても席を立つものは誰もいなかった。

「アンジェリカ」

呼ばれるままに席を立ち、ラウルについて教室を出ていった。

そして、間もなく生徒たちがざわめきだした。

ラウルの医務室。そのまん中にアンジェリカが立っている。入れたての紅茶をふたつ手にしたラウルが奥から戻ってきた。ひとつをアンジェリカに手渡す。それを無言で受け取り、そして、尋ねた。

「なんで……死んでしまったの？ まだ、若かったわよ」

まっすぐラウルの瞳を見つめる。アンジェリカの大きな瞳はかすかに潤んでいるようにも見えるが、その表情からは感情をうかがうことができなかった。

ラウルは紅茶をひとくち流し込み、一拍の間のあと答えた。

「事故だ。幼い子がオートバイにひかれそうなところを助けて、代わりに自分がはねられた。打ちどころが悪かった」

机の上にティーカップを静かに置く。アンジェリカも同じようにティーカップを置く。その中は手渡されたままの状態、ひとくちもつけられていない。

「魔導の力でオートバイを吹き飛ばすくらいのは出来たはずだが。そうすると、相手が無事ですまないと思ったのだろう。自分より他人の命が大切とはな」

軽く息を吐いて、目を閉じた。

アンジェリカは表情を閉ざしたまま、淡々とつぶやいた。

「私だったら……私が同じ状況になったら……どうするのかしら」

低くたれ込めた空から白いものが舞い落ちる。それが世界を覆い、目に見えるもの総てを白く染め上げ、音さえも掻き消し、静の世界を創り上げていた。

色彩も音も奪い去られたその世界に、ただ追悼の鐘の音だけが響き渡った。

王宮の中庭。ここで葬送式が執り行われる。ここも例外でなく、白く、冷たく、静かだ。そのことがいっそうこの場の厳粛さを増していた。

家族、親族をはじめ、王室関係者、アカデミーの学生など、何百人もの人々が参列している。アンジェリカたちはアカデミーの学生として最後列あたりに並んでいた。

「あんまり面識がなかったからな。いまいちピンと来ねえな」

重苦しい雰囲気の中、ジークは隣のアンジェリカにだけ届くくらいの声でつぶやいた。しばらくの沈黙の後、アンジェリカが口を開く。

「私の父の友人だった」

「え？」

聞き返すジークの声に反応せず、続ける。

「私も、かわいがってもらっていた……なのに」

目を微妙に細める。その後に言葉は続かなかった。

「凍てついた涙」

空から舞い落ちる白いものを誰かがそう呼んでいた。人の温もりに触れて融ける様がそう呼ばせたのだろうか。

再び、鐘の音が鳴り響いた。鋭くまっすぐなその音が、冷たく世界を締めつけた。

12. 蒼い瞳のクラスメイト

「俺、四大結界師を目指すぜ！」

まだ肌寒さの残る中、ジークは顔を上気させ、ひとりで熱くなっていた。ジークとは対照的に、アンジェリカとリックのふたりは、寒さのために身をすくめている。ふたりともあまりジークの話には関心を示さず、ただ黙って歩いているだけだった。それでもジークはおかまいなしに話を続けた。

「かっこいいよな。自分が世界を護るんだぜ」

両方のこぶしを握りしめ、興奮をあらわにしている。そんなジークを横目で見ながら、アンジェリカが冷ややかに言い放った。

「あんな人柱のどこがいいのよ。毎日地味に結界に力を送り続けるだけで、誰もあまりありがたさを実感してくれないじゃない」

それでもジークの熱は冷めることはなかった。

「おまえみたいなお子さまには男のロマンはわかんねえよ。な、リック」

アンジェリカの向こう側にいるリックを覗き込んで、白い歯を見せながら同意を求めた。

だが、リックはから笑いを浮かべた。

「僕もどっちかっていうとアンジェリカの意見の方が……」

「なんだ。おまえもまだまだお子さまだな」

肩をすかさされたジークは、力の抜けた声でひとりごとのように言った。

アカデミーの門をくぐる。そこを境に少し暖かくなっていることは、寒さの和らいだ今でもまだ感じることができる。これも、結界の力なのだろうか。

「でも、現実問題として、難しいんじゃないかなあ」

リックが冷静に分析をする。

「世界でたった四人だけ。しかも滅多なことで交代はないんでしょ」

ジークは口の右端を軽く上げ、不敵な笑みを浮かべると、リックの分析に切り返した。

「いや四人中三人はジジイだし、俺がアカデミーを卒業する頃にはチャンス到来かもな」

「チャンスはいずれ来るとは思うけど、それでもなれるとは限らないわよ」

周りの空気が暖かくなったことで、アンジェリカの口は次第に滑らかになってきた。

一方のリックは、苦笑いしながらも、周りをきょろきょろうかがっている。ふたりが悪びれる様子もなく失礼なことを言っているのを、他の人に聞かれてはしないかと冷や冷やしているのだ。

「いや」

ふたりの二歩前を歩いていたジークは、足を止め、振り返り、胸元で軽く握りこぶしを作った。

「俺はチャンスさえあれば、必ず実現させるぜ」

自信とやる気をその瞳にみなぎらせ、きっぱりと言い放った。

「私も四大結界師を目指してるわよ」

ふいに聞こえたなじみのない声に、三人は一瞬動きを止めた。なじみはないが、その落ち着いた、深みのある声には聞き覚えがあった。

「男じゃないけどね」

というと同時に、教室の扉の内側からひとりの女性が姿を現した。

「……えーと、おまえ……。誰だっけ」

「ショックだなあ。クラスメイトなのに。セリカよ。セリカ＝グレイス」

セリカと名乗った女性は、その言葉とは裏腹に明るく笑っていた。

ジークはあまり他人に関心がないせい、いまだにクラスメイトの顔と名前を覚えきれていない。そんな彼だからわからなかったが、実はセリカはアカデミー内ではかなり知られた存在なのだ。

背が高く、スレンダーなシルエット。利発そうな引き締まった顔立ち。明るい栗色の髪、澄んだ濃青色の瞳。これだけの要素が揃えば否が応にも目立つ。

もちろんアンジェリカとリックも、直接話をすることはほとんどなかったが、彼女のことはクラスメイトとして認識していた。

「セリカさんはどうして四大結界師になりたいの？」

リックが不思議そうに尋ねた。

「ああ」

ひと呼吸おくと、顔をわずかにうつむけて、右手の人さし指を口元に持っていった。わずかな時間、そのポーズで考えたあと、顔を上げ、そして語り始めた。

「私の亡くなった祖父がね、四大結界師のひとりだったのよ。私は現役時代のことは知らないんだけどね」

ふいに目を細めて、懐かしそうに微笑む。

「結界師という仕事にすごく誇りを持ってた人でね。何度も話を聞かされているうちに、私もだんだん憧れを持つようになって」

セリカは三人から顔をそらし、後ろで手を組みながら、軽く肩をすくめた。

「なんか、うまいことすりこまれちゃったのかな」

そう言って、照れ笑いをした。

それまで彼女の話の黙って聞いていたアンジェリカが、遠慮がちに口を開いた。

「あの、もしかして、その人って……」

そこまで言ったところで、セリカは思い出したように目を大きく見開いた。「あ」と言うと同時に、ぼんと手を叩いた。

「そうそう。私の祖父はラグランジェ家の人よ。分家の方だけど。私たちは遠い親戚ってことになるのよね」

セリカはそう言いながら、アンジェリカに親しげな笑顔を投げかけた。アンジェリカは一瞬、戸惑いの表情を見せたが、それはすぐ無表情に覆い隠された。

「へえ。そうなんだあ」

アンジェリカの代わりに、リックの素頓狂な声が飛んだ。彼が続けて何かを言おうとしたとき、そこで始業を告げるチャイムが鳴りだした。

「親戚っていったって、遠いじゃない」

アンジェリカがかぼそい声でつぶやく。しかし、そのセリフはチャイムにかき消され、誰の耳にも届くことはなかった。

13. 闇と静寂のひとつき

アンジェリカたちがアカデミーに入学してから約四ヶ月が過ぎた。あと二週間ほどすると期末休みに入るのだが、その前にひとつ、重要なイベントが待っていた。期末試験である。

図書館の窓際の席。三人は大きな机に並んで座っていた。

「まだやっていくの？」

リックはぐったりと机に伏せる。しかし、隣のふたりは目もくれない。ただ淡々と書物やノートに向かっている。

「もう九時過ぎてるよ」

返事のないふたりに向かって、覇気のない声で畳み掛けた。

「帰りたきゃ、先に帰っていいぜ」

ジークは書物から目をそらすことなく、素っ気なく答えた。

「アンジェリカは？ そろそろ帰った方がいいんじゃない？」

返事のなかったアンジェリカの方に振ってみた。

まだ子供なんだから——そう付け加えようとしたが、やめておいた。それは彼女の最も言われたくない言葉であることがわかっていたからだ。

「そう……。じゃ、先に帰るよ」

机の上に広げていたノート、筆記具を鞆の中にゆっくりと収めていく。

「僕、もうホントに疲れちゃって。ゴメンね」

片眉をひそめ、右手をひたいの前で立て、申しわけなさそうに許しを請う。肝心のふたりは見えていなかったが、そうせざるをえない気持ちだったのだ。

そして音を立てないように立ち上がり、ドアに向かってゆっくり歩き始めた。

「またあしたね」

背後から唐突に聞こえた高い声。リックはその声に振り返った。ようやく顔を上げたアンジェリカが少しだけ笑って、顔の横で小さく手を振っていた。

リックもつられて笑い、同じ動作で返した。少し、安堵の色が見えた。

リックの根性がないというわけではない。アンジェリカ、ジークとの力の差なのだ。

試験期間中の授業は午前のみ。午後は自己鍛練の時間となる。体力トレーニングに魔導力を高めるための瞑想、ヴァーチャル・リアリティ・マシン（通称VRM）と呼ばれる機械でのシミュレーション。それらを日が落ちるまで続け、その後、夜九時過ぎまで、図書館や教室で文献を調べたりノートの整理をしたりする。

そんな生活が、もう一週間も続いていた。

特にVRMでのシミュレーションは、実戦と同程度の体力、精神力、魔導力を使う。それを連日行うということは、力のない者にとっては自殺行為にも等しい。

リックもずっとふたりに付き合っただけで頑張ってきたが、そろそろ限界にきていた。悲しいこと

だが、実力が違い過ぎていたのだ。同じメニューをこなそうとするのが無謀だったといえる。リックは自分自身でそのことは感じ始めていた。

しかし、アンジェリカとジークが楽々はこのメニューをこなしているというわけではない。リックほどではないが、やはり疲労がたまってきている。その体を支えているのは、お互いに対する「負けたくない」という気持ちであった。

「おまえ、まだやっていくのか？」

本をめくる手を止めずにジークが尋ねる。が、アンジェリカの返事を待たずに、続けて言った。

「子供が夜ふかしするなんて、体に悪いぞ」

アンジェリカの動きが一瞬止まる。

「たいして歳も変わらない人に子供扱いされたくないわ！」

ジークの方に向き直り、両こぶしを振り下ろして、怒りをあらわにする。

「たいしてって八つも違うだろ。子供に子供って言って何が悪いんだ」

ジークは冷静に火に油を注ぐ。アンジェリカは思いっきりほほを丸くしていたが、上手い返答を思いつかなかった。仕方なく、怒りを残したまま本に向き直った。

そして、またしばらく、静かに時が過ぎていった。

「俺、そろそろ帰るわ」

静寂をうち破るジークの声。

「おまえはどうする？」

アンジェリカは慌てて正面の壁の掛時計を見る。間もなく十一時になろうとしていた。

いつも帰りを切り出すリックを先に帰してしまったことで、またお互い意地を張り合っていたことで、帰るタイミングをつかめないままこんな時間になってしまっていた。

「私も帰る」

帰ると決めた途端、気が抜けたのか急に眠気が襲ってきた。口元を隠すこともなく、大きくあくびをする。

その様子にジークの緊張もふいに緩む。

「ちょっと！ いま笑ってたでしょ？ なに笑ってるのよ！」

あくびで潤んだ目を拭いながら、アンジェリカが食って掛かった。

「笑ってねえよ」

そう言いつつも、少し戸惑った様子で顔をそむけた。

「ほら、早く片付けろ。行くぞ！」

照れ隠しからか、背中を向け、短くまくし立てる。そしてさっさとドアの方へ歩き出した。

その声につられて、アンジェリカは慌てて鞆の中に本を押し込み、小走りでジークの後を追い

かけた。

ふたり並んで無言のまま歩く。ザッ、ザッ。薄い砂のこすれる音だけが明かりのない空間に響く。

アカデミーの門をくぐり通りに出たところで、アンジェリカは足を止め、ようやく口を開いた。

「それじゃね。またあした」

そう言った目の前を、ふいにジークが横切っていった。

「え？ ちょっ……。ジークのうちはあっちでしょう？」

無言で歩き続けるジークを小走りで追いかける。大きく伸ばされた右手は、体とは反対を指している。

「おまえんちはこっちだろ」

ぼそとぶっきらぼうにつぶやく。送っていく、と素直に言うのが照れくさいらしかった。

「わたし、ひとりで帰れるのに」

笑っているのか怒っているのか戸惑っているのか、微妙な表情と声。ジークの気持ちは嬉しかったが、それを素直に表現するのは照れくさい。また、嬉しいけれども子供扱いされているのではないかという不安や不満もある。それらが入り混じって複雑な表情を作り上げていた。

「まっすぐでいいのか？」

「うん。ずっとまっすぐ」

ジークの斜め後ろをついて歩く。

再び訪れる沈黙。夜の静寂に、ふたりの靴音だけが浮かび上がる。

アンジェリカは何か話をしたい衝動に駆られたが、何を話していいのかわからず、もやもやした気持ちのまま沈黙を続けた。

「俺、こっちの方に来たことはほとんどないんだよな」

静寂を破ったのはジークだった。歩きながら隣の王宮を見上げている。

王宮とアカデミーは隣り合って建っていて、ふたりは今、その前の通りを歩いているのだ。ジークの家は反対方面のため、特別な用でもない限り、こちらに来ることはない。

王宮の門の前に差しかかると、ささやかながら明かりがともっていた。そしてその明かりの下に、見張りの衛兵がふたり立っていた。

不審者に間違われたら嫌だな、そんなことがふとジークの頭をよぎった。だが、というかそれだからこそ、平静を装い通り過ぎようとしていた。

そのとき、ふたりの衛兵が同時にこちらに向けて頭を下げた。予想外の出来事に、ジークは何が起きたかわからず、うろたえてまわりをきょろきょろ見回す。そして目に入ったアンジェリカの様子に、ようやく事情が飲み込めた。

アンジェリカは衛兵に軽く会釈をしていた。そう、つまり、衛兵はジークではなくアンジェリ

かに礼をしていたのだ。考えてみれば当然のことである。

衛兵を後にし、少し離れたところでジークが口を開いた。

「さっきの、お友達か？」

「.....それ、皮肉？」

アンジェリカは、見せつけるように、はあと大きくため息をついた。

「あの人たちは、私じゃなくてラグランジェ家に頭を下げたの。わかっているでしょ」

そうじゃなきゃ、私なんて.....。その言葉は心の中だけにとどめた。

「そういうもんなのか」

ジークは納得しきれないようで、首をかしげていた。

「あ。ここよ、うち」

そう言って、アンジェリカは歩みを止めた。ジークも足を止める。そしてまわりを見渡した。しかし、どこにも民家らしきものは見当たらなかった。

「.....どこだ？」

「だから、ここ」

人さし指で指し示す。その方向を目で追う。見る。見上げる。

「.....これ、まだ王宮だったんじゃないの？」

14. レモンティ

「これ、まだ王宮だったんじゃないの？」

ジークがそう思うのも無理はなかった。おおよそ民家とはほど遠い、白壁の宮殿造りの家。大きさもかなりのものである。

位置もまた紛らわしい。王宮のすぐ隣に横づけされて建っていた。よく見ると仕切りのレンガ壁があるものの、知らない人が見れば、王宮の一部や別館にしか見えないだろう。

ジークはただ呆然と、だらしなく口を開けて見上げていた。

「アンジェリカ！」

そこへ女の人の声が響いた。アンジェリカとは違い、もう少し大人びた感じだ。

「遅かったじゃない。心配していたのよ」

その女の人はアンジェリカの家から出てきたようだった。門を開け、小走りでアンジェリカの元に駆け寄る。

「頑張りたい気持ちもわかるけど、夜はあんまり遅くならないようにして」

「ごめんなさい」

アンジェリカは素直に謝った。ジークはそんな彼女を見たのは初めてだったので、なにか不思議な気持ちを覚えた。

そして、最も気になること。

アンジェリカのお姉さん……か？

あまりじろじろ見るのはどうかと思いつつも、気になって、視線は彼女を追いかけていた。

まず目をひくのはあざやかな金髪。この暗闇でもわずかな光を受けて輝いている。長さは腰くらいまであるだろうか。そしてかすかにウェーブを描いている。黒髪ストレートのアンジェリカとは対照的だ。しかし、そのあどけない顔立ち、小柄で華奢な体つきは、どこことなくアンジェリカと似ている。上半身をカチッと締め、腰からふわりと広がったロングドレスは優美なかわいらしさを、そして大きく開いた胸元はアンバランスな色気を演出していた。

気配を感じたのか、視線を感じたのか、彼女はふいにジークの方に顔を向けた。視線がぶつかる。その瞬間、彼は頭が真っ白になり、体は金縛りにあったように動けなくなった。大きな蒼い瞳が、彼をとらえたまま離さない。それは短い時間だったが、彼にはとても長く感じられた。

「ジークさん、ですね？」

ジークの方に体ごと向き直り、かすかに首を傾げ、ありったけの笑顔で彼に問いかける。その声で、ジークはようやく我にかえった。

「あ、はい。でもどうして俺の名前……」

「アンジェリカから、いつも話は聞いていますから」

急に自分の名前を出されたアンジェリカは、とっさに顔を上げる。

「話なんてしていないわ！……そんなに」

慌てて否定するも説得力はない。彼女は頬をふくらまし、自分の名前を出した相手を、うらめしそうに上目づかいで睨んでいる。

しかし、睨まれた当の本人は、まったくおかまいなしに続ける。

「さ、どうぞ。上がってください」

右手を家の方に向け、左手をジークの背中にそっと添えた。瞬間、ビクッと小さく体を揺らす。そして、前を見たり後ろを見たり、あからさまにうろたえた様子を見せている。

「ただ送ってくれたただけなんだからね！ 遊びにきたわけじゃないんだから！」

アンジェリカが後ろから声を張り上げ、慌てて引き止める。

だが、金髪の彼女は笑顔を崩さなかった。

「いいじゃない。せっかくここまでいらしたんだから。ね？」

そう言って、ジークに同意を求めた。

ジークは戸惑いながらも、うながされるまま歩き出した。アンジェリカはずっと頬をふくらませたままだったが、しばらくすると彼女も後ろをついて歩き出した。

重厚で格調高そうな扉が音を立て、ゆっくりと開いた。光が闇に飛び出し、ジークたちの顔を照らす。

そして目の前に広がった世界に、ジークはまたしても言葉を失った。

まるで別世界。それは、彼のイメージの王宮そのものだったのだ。高い天井、吹き抜け、中央の幅広く白い階段、赤い絨毯、きらびやかなシャンデリア、古いけれどよく手入れされたインテリア。そのすべてが、彼の初めて目にするものだった。

「さ、こちらよ」

通されたのは玄関ホール隣の応接間。白が基調のただ広い部屋の奥にはソファと机、そして漆黒のグランドピアノ。目につくのはそれくらいだ。贅沢な空間の使い方である。

ここだけでも俺んちよりでかいな...

ジークはあたりを見まわしながらそんなことを考えていた。

「お飲物は紅茶でいいかしら」

「はい」

ほとんど条件反射で答える。

「わたしレモンティ」

アンジェリカはそう言うと、無造作に鞆を置いて、応接用の長椅子に身を預けた。

「ジークさんも座ってお待ちくださいね」

その言葉を残し、長いブロンドをなびかせながら、彼女は部屋を去っていった。

広い部屋にアンジェリカとジークのふたりきり。独特の不思議な空気。柱時計の振り子の音が静寂を刻む。

「立ってないで座れば」

「ん？ ああ」

アンジェリカの言葉にうながされて、彼女の斜め前の席に腰を下ろした。そして、目の端で彼女の様子を盗み見る。

「末っ子？」

しばしの沈黙のあと、ジークは唐突に質問をぶつける。アンジェリカはきょとんとしながらも答える。

「わたし？ひとりっ子だけど？」

その答えに、今度はジークがきょとんとする。

「じゃあ、さっきの人は……？」

アンジェリカは話の流れが読めず、わずかに首をかしげる。

「母親だけど？」

「お待たせしました」

大きめのトレイにティーポットとティーカップ三つを載せて、噂の張本人がゆったりとした足取りで戻ってきた。

ジークは口を半分開けたまま、瞬きも忘れて彼女をじっと見ている。

彼女はトレイを静かにテーブルの上に置くと、視線の送り主の方に顔を向けた。彼の何か言いたげな顔を見ると、目をくりっとさせ、疑問を投げかけるように首を傾けた。

「アンジェリカのお母さん……ですか？」

彼女のしぐさに促され、ジークは喉元で止まっていた言葉をようやく口に出した。

「そういえば自己紹介がまだだったわね」

そう言うと、彼女はまっすぐジークの方に体ごと向き直った。

「レイチェル＝エアリ＝ラグランジェです。アンジェリカの母親よ。よろしくね」

ふわりと笑いかけ、優雅に右手を差し出す。ジークは慌ててソファから立ち上がり、同じく右手を出した。

「ジーク＝セドラックです」

そして、柔らかく握手を交わす。そのとき、ジークはようやくほっとした表情を見せた。

「お茶、冷めちゃうわよ」

その言葉以上に冷めた口調で、アンジェリカがふたりに割って入った。両ひじを自分の膝にのせ、ほおづえをついてむすっとしている。

「あら、私がジークさんと仲良くしてたから怒っちゃった？」

レイチェルはいたずらっぽく笑いながら、上体をかがめ、後ろで手を組んでアンジェリカの表情を覗き込んだ。

「別に、怒っていないわ」

レイチェルの追求を避けるように、目を少し伏せる。

「それなら良かった」

弾んだ声、不自然に強調された語尾。なにか含みを持たせたその言い方に、アンジェリカは困惑するものの、表面上は努めて冷静をよそおった。ただ、その瞳だけがわずかに揺れていた。

ひといきおくと、ティーカップを口に運び、レモンティをゆっくりと流し込む。体の中をあた

たかいものが流れていくのを感じながら、静かに目を閉じた。そして、もういちどレモンティを口にした。あたたかさとともに、今度はわずかに含まれていた苦味が口の中に広がっていった。

15. 交錯するそれぞれの想い

「ジーク！きのうは女の人のところに泊まったんだって？！」

アカデミーの門をくぐったところで、リックは大声でわめきながら、ジークの背中へ全速力で駆けていった。

ジークはぎょっとして振り返り、一步後ずさった。しかし、引いた足をすぐに戻すと、体勢を立て直し、逆にリックの方へ一步踏み込んだ。

「おまえは誤解を招くようなことを、そんな大声で言うな！」

そういうと、腕を組んで、はあと大きくため息をついた。

「おふくろが言ったんだな。違うって言ってんのに…」

半ば呆れ顔、半ば諦め顔で、ジークはうなだれる。

「なんだ。違うの？」

リックの問いに、冷めた笑いで返す。

「俺が泊まったのはコイツんち」

親指を斜め下に向ける。その先にはアンジェリカが無表情で立っていた。

「あのあと？」

リックが視線を向けると、彼女は少し目を伏せ、わずかに顔をそらした。そして半開きになっていた唇をほんの少しとがらせると、後ろで手を組み、右足をカツンと地面に軽く打ちつけた。

リックは、彼女のしぐさの意図することがわからず、不思議そうな顔をした。が、ジークはそんな彼女の様子にまったく気づく様子もない。

「なんか、成りゆきでな」

表情を変えずに、ただ冷静に答えている。

「へえ、そうなんだ」

リックは相槌を打ちながらも、アンジェリカの様子が気になって、それ以上深くは聞けなかった。なぜだか聞いてはいけないような気にさせられたのだ。そのまま、リックは押し黙ってしまった。ジークもあえて口を開こうとはしない。

立ち止まったまま、三人に沈黙が流れた。

「いつまでこんなところで立ち話してる気？」

その沈黙を破ったのはアンジェリカだった。小さい声だったけれど、どこか強気を感じさせるその口調はいつもと変わらない。少なくともリックにはそう思えた。彼はようやく少し安堵した。

キーン、コーン——。

「今日はここまでだ」

終業のチャイムと共に授業は切り上げられた。教壇の上のラウルはチョークを投げるように置くと、左手の上に広げられていた教本を勢いよく閉じた。

「明日からは試験だ。それなりに難しいので覚悟しておけ」

その捨てゼリフを残して、教壇を降り歩き出した。そして、扉に手を掛けようとして振り返った。

「アンジェリカ」

静まり返った教室に、その声が響きわたる。

一斉に注目を浴びたアンジェリカは、少し動揺したのか、立ち上がろうとして机の上の本を床に落としてしまった。

慌てて拾うと、それを持ったまま小走りでラウルのもとに駆け寄り、ふたりで教室を後にした。

「前から思ってたけど、あのふたりってどういう関係？」

呆然としていたジークに、セリカは後ろの席から身を乗り出し、声をひそめて話しかけた。

「俺が知るかよ」

ジークはぶっきらぼうに答え、ノートなどを乱暴に鞆に投げ込み始めた。

「なんか、昔の知り合いらしいよ」

ジークの態度を見かねて、リックが横から苦笑いしながら口をはさんだ。

「ふーん、そう」

リックの答えが期待に沿うものではなかったのか、あまり興味がなさそうな相槌を返した。

ジークが鞆を右肩に引っ掛けて立ち上がると、セリカも慌てて鞆をつかんで立ち上がった。

「ジーク。今日も残って勉強とかやっていくんでしょ？」

すでに教室を出ようと歩き始めているジークの背中に向かって声を投げる。

「いや。今日は帰る」

「え？ そうなの？」

意外な答えに呆気にとられている間に、ジークは教室の外に出て行ってしまった。

リックは顔の前で右手を立てた。

「ごめん。今日は機嫌が悪いみたい」

申しわけなさそうな顔を見ると、ジークを追って教室を後にした。

「うまく、いかないわね」

小さな声でセリカがつぶやく。もう彼の姿が見えなくなったその扉を、ただずっと眺めていた。

「ねえ。何の用なの？」

アンジェリカは、ラウルの歩調に合わせるため、ときどき走ったりしながらついていっている。

「顔色が良くない。どうせジークと張り合っただけ無理してたんだろう。今日くらいはゆっくり休め」

その足を止めることなく、ラウルが答える。

「無理なんかしてないわよ」

自分が見くびられたように感じて、不満の色をその声に思いっきり含ませていた。

するとラウルは彼女の方へ向き直り、片ひざを立ててしゃがみこんだ。両手を彼女の肩へのせ、まっすぐ視線を合わせる。

「たまには私のところへ来い」

彼は真顔で言った。

それが本心なのか、それとも自分を説き伏せるためなのか。どちらか判別がつかず、アンジェリカは少し頭が混乱していた。手に持っていた本を抱え込み、ぎゅっと抱きしめる。

そこへ――。

「めずらしいわね。こんなところで会うなんて」

聞き覚えのある声。アンジェリカとラウルが同時に声のした方を振り返る。

「お母さん！」

そこには無邪気な笑顔をたたえたレイチェルが立っていた。彼女は軽く右手を上げて、アンジェリカに応えた。そしてそのあと、その視線を、アンジェリカからラウルへとゆっくりと移す。

「先生、こんにちは」

わざと「先生」と呼んでからかっているのだということは、彼女のいたずらっぽく笑うその表情を見れば一目瞭然だった。

ラウルは無言で立ち上がると、彼女の方に一步踏み出した。

「アンジェリカのこと、よろしくね」

レイチェルはラウルの目をまっすぐ見て、首を小さくかしげながら小さく笑った。

「……ああ」

一拍の間をおいて、彼は静かに答えた。

「アンジェリカはこれからどうするの？」

今度はアンジェリカに話を振る。

「私は、ラウルのところに……」

まだ行くとは決めていなかったが、とっさに口をついて出てしまった。自分の言葉に一瞬とまどう。しかし、考える間もなく続けて畳み掛けられた。

「じゃあ、一緒に帰りましょう。私はこれからアルティナさんのところに行くから……四時すぎくらいかな？ それまでラウルのところにいる」

レイチェルは一方的に話を進めたあと、じゃあねと手を振り去っていった。

ふたりはしばらく彼女の姿を目で追っていた。

姿が見えなくなったところで、アンジェリカがひとりごとのようにつぶやく。

「うち、すぐ近くなのに。わざわざ一緒に帰るって……」

「アンジェリカの家はどうだった？」

ずっと無言で歩いていたが、その沈黙に耐えかねたリックが、ジークに話を切り出す。

「でかかったな」

一言だけの返事。しかし、リックはめげずに質問をした。

「アンジェリカのお父さんやお母さんとは会った？」

「父親は夜勤でいなかったが、母親とは会った」

やはりそっけない返事。しかし、それもよくあることなので、リックはあまり気にしていないようだ。さらに続けて尋ねた。

「お母さんどうだった？ アンジェリカと似てた？」

リックのその問いかけに、ジークはふいにうつむいた。そして、しばらくそのまま考えを巡らせていた。

「.....若かった」

彼はぼつりとそれだけ答えた。

16. 実技試験

「やっぱり朝の空気は気持ちいいな」

ジークは両手を広げ、張りつめた空気を体の奥まで流し込んだ。まだ静かな通りの真ん中を、大きく闊歩する。

隣のリックは、彼とは対照的に弱々しく歩いている。その髪にはまだ寝ぐせがついたままだ。

「なんか、くらくらする」

眩しそうに目を細め、右手の甲を額につける。

今朝、まだ日が昇らない時間に、いきなりジークがやってきて叩き起こされたのだ。朝の空気が吸いたくなかったからおまえも付き合え、そんな理由だった。ジークのわがままに振り回されるのは馴れていたもので、このくらいのことでは別に腹は立たない。しかし、やはり眠いのはどうしようもなく、しきりにあくびが口をついて出た。

「試験までにちゃんと目を覚ましておいた方がいいぞ」

彼の睡眠時間を奪った張本人が忠告した。

今日で試験三日目。最終日である。筆記試験を終え、あとは実技を残すのみとなった。実技試験というだけで詳しい方法はなにも聞いていない。

「実技って何をやるんだろう」

リックはジークと肩を並べて歩きながら、不安をそのまま口にした。

「さあな。でも、どんな試験でも、俺は負けないぜ」

リックとは対照的に自信に満ちた口調。こここのところの自主訓練の手ごたえが、彼に自信を与えていたのだ。

アカデミーの門をくぐる。

まだ早いので、いつもの朝とは様子が違い、ひっそりとしている。人の声はまったく聞こえない。聞こえるのは、自分たちの靴音と、ときどき遠くで小さく響く足音だけだ。

ジークはまっすぐ教室に向かうと、勢いよく扉を開け放った。案の定、教室には人影は見当たらなかった。それを確認すると、鼻から大きく空気を吸い込み、満足げな表情を浮かべる。

「やった。一番乗りだ！」

自分の声が教室に響くのを聞いた後、大またでまっすぐ自分の席へ歩いていった。

リックは、彼の子供っぽさにやや苦笑いしながら、そのあとに続いて歩き出した。自席の机の上に鞆を降ろすと、何気なく窓の外に目をやった。ふいに、見なれた人物がその視界に飛び込んできた。

「あれ？ アンジェリカだ」

ジークもリックの視線を追い、窓の外を見た。そこには、後ろ向きで顔は見えなかったが、確かに彼女とわかる姿があった。

「どこへ行くんだろう」

彼女は教室であるこちら側に背を向けて歩いていた。彼女の向かっている方には、ふたりとも

ほとんど行ったことがない。

彼女の向かう先を、目でまっすぐにたどる。校庭の外れ、大きな木が三本立っているさらにその奥。木々の隙間から、こじんまりとした三角屋根の建物が垣間見える。窓ガラスの代わりにはめ込まれたスタンドグラスが、そこが教会であることを、ささやかながら主張していた。

今までその建物に全く気がつかなかったというわけではないが、少なくともその存在は、今の今まですっかり忘れていた。そのくらい存在感のない場所だった。彼らだけでなく、他の生徒たちもほとんど近づくことはなかった。ひっそりと陰を落としている。

「今さら神だのみかよ」

ジークは茶化そうと思ってそう言った。しかし、思いのほかその声はこわばっていた。

彼が本気なのか冗談なのかわからなかったリックは、軽く笑って相づちを打つだけで、言葉は返さなかった。

声がこわばってしまったことに、ジークは自分で驚きを感じていた。

しかし、理由はわかっていた。

首席入学の彼女が、まだ幼い彼女が、これだけやる気を見せているのだ。脅威を覚えなければいけない。そして、信仰心を持つものが祈るという行為は、瞑想より大きな効力を持つ。自分には真似できない方法で、魔導力を高めているという事実が、彼の焦りを増していた。

もう小さくなったアンジェリカを眺めながら、しばらく立ちつくしていたかと思うと、勢いよく教室を飛び出した。リックは小走りでジークの後を追う。

「どこ行くの？」

リックのその問いに、ジークは足を止めることも振り返ることもなく、ただ短く答えた。

「瞑想だ」

ついに、実技試験のときがやってきた。

ラウルによってクラス一同が集められた場所。そこは校舎の隅にあるヴァーチャルマシンルームのさらに奥、いつもは鍵のかかっている部屋。窓もなく閉塞感が漂っている。ラウル以外は足を踏み入れたのも初めてだった。そこにはヴァーチャル・リアリティ・マシン（通称 VRM）のコクピットがふたつ、少し距離をあけて、向かい合わせに置かれていた。そしてその2つの真ん中に大きな薄型のディスプレイが吊り下げられている。そして、縦横無尽に張り巡らせたケーブルが、物々しさをかもし出している。

その雰囲気圧倒され、みんな押し黙っていた。

その沈黙を破ったのは、ラウルだった。

「実技試験の方法だが……」

生徒たちの反応を確かめるように、少し間をおいて続ける。

「対戦方式で行う」

依然、重苦しい静けさ。誰も口を開くものはいない。

「これは対戦用に改造した VRMだ。対戦の様子は上のディスプレイに映し出される」

ラウルは腕を組み、ゆっくりと生徒の方へ向き直る。

「単に勝敗で評価するのではなく、試合内容で評価する。そのつもりで持てる力をすべて発揮して戦うように。いいな」

相変わらずの威圧的で一方的な口調が、生徒たちに重くのしかかる。

ラウルは左手に抱えていた青いファイルを開いた。紙をめくる音が、密閉された空間に反響する。その手を止め、上から下へざっと眺めると、口を開いた。

「入学時の順位で下から2人ずつ対戦していってもらおう。まずはリックとザズだな」

「うわっ！いきなりだ！」

下から二番目のリックが、動揺して声を上げた。その驚きぶりがおかしくて、アンジェリカは、彼に気づかれないように忍び笑いをした。

リックはやや臆病なせいもあって、実戦形式というものが苦手だった。VRMでの自主訓練も嫌々やっていたくらいだ。ただでさえこんな状態なのに、今回はマシン相手ではなくヴァーチャルとはいえクラスメイトが相手なのである。自分が傷つきたくないが、他人を傷つけたくもない。そんな彼がこの試験を嫌がるのも当然だった。

ジークは、いまにも泣きつかんばかりの表情を見せているリックの背中を軽く押した。

「腹くくって行ってこいよ。あんまりオロオロしてると相手になめられるぞ」

意気揚々とコクピットに向かう対戦相手を横目で気にしながら、ジークはこっそり耳打ちした

。

「あいつより、おまえの方が上なんだからさ」

リックはちょっと困ったように笑った。

「そういうの、よけいプレッシャーだよ」

ジークも彼につられて笑顔になる。そして白い歯を見せながら、こぶしを彼の脇腹に軽くひねり込んだ。

「いいから早く行ってこい」

リックは少し笑って、コクピットへ小走りに駆けていった。

「へえ、仲いいんだ」

アンジェリカはきょとんとしながら、ジークを見上げていた。彼は視線を落とし、彼女をとらえたが、まっすぐ見つめてくるその視線に耐えかねて、すぐに目をそらす。

「いまさらなに言ってんだよ」

彼女に対する返事というよりは、ひとりごとに近い感じだった。腕を組み、顔を少し上げると、まっすぐ口を結んだ。

アンジェリカは、ジークとリックを交互に見た。

「だって今まで仲よさそうなところを見たことなかったんだもの。どうしてこのふたり、一緒にいるんだろうって思っていたわ」

アンジェリカにそんなふうに使われていたのかと、ジークは思わず苦笑いしてしまった。

ウィーン。

シルバーメタリックのコクピットが、機械音を響かせながら、その口を大きく開いた。対戦予定のふたりは、長く傾斜の緩やかなライド部に身を横たえる。すると、開くときと同じように、機械音を響かせて、その口がゆっくりと閉じていった。

ラウルがヘッドセットを装着し、スイッチを入れると、ディスプレイが白く光り、そして徐々にふたりの姿が映し出された。

「おおー」

遠慮がちなどよめきが広がる。

ラウルはヘッドセットのマイクを口元に引き寄せた。

「ふたりとも、準備はいいか」

その問いに、ディスプレイの中のふたりの口が動いた。が、その声は聞こえない。

「ラウル。音声は切れてるんじゃないか」

ジークはディスプレイを親指でさしながら、あきれた様子でラウルに問いかけた。ラウルはヘッドセットを少しずらした。

「そういうふうには作ってある。音声はここからしか聞こえない」

そう答えると、ヘッドセットを人さし指で指し示した。

「案外しょぼいんだな」

ジークはぽつりと言った。少しの驚きと落胆が、その声色からうかがえた。

ラウルは、ジークの相手を切り上げた。ヘッドセットのマイクを親指と人さし指でつまんで固定すると、再びディスプレイの中のふたりを仕切り始めた。

「制限時間は五分間だ。準備はいいな」

ふたりの様子を画面で確認すると、短く、歯切れよく、合図した。

「始め！」

その声に反応して、ふたりは同時に構える。

先に動いたのはザズの方だった。目を閉じ、両手を前に伸ばし、呪文の詠唱を始める。それを見て、リックも同じポーズをとった。

「真っ向勝負か」

ジークは腕を組みながら、冷静にディスプレイを見上げていた。アンジェリカも、隣で彼と同じように腕を組み、同じように見上げていた。

「どうかしら。それじゃ厳しいんじゃない？」

彼女は感想を述べた。音声が入ってこないため、映像だけで推測するしかない。

ザズの両手に光が集まってきた。一方のリックには何の変化もない。ザズのまぶたが勢いよく上がった。何かを叫ぶと、手にためたバスケットボール大の光球をリックに向かって放出した。

それとほぼ同時に、ザズの足首から下と、そのあたりの地面一帯を厚い氷が覆った。ザズは突然、足の動きを封じられ、大きくバランスを崩した。両手をまわし、なんとか体勢を立て直そうとするが、耐えきれずにしりもちをついてしまった。

彼の足をとどめたリックは、自分に向かってくる光球を避けようと、その身を斜めに引いた。

しかし、呪文を唱えていたために動きが遅れてしまい、避けきれず、その半分が右肩に直撃する。その反動で体を後方に吹き飛ばされ、五メートルほど土の地面を土ぼこりをあげながら滑っていった。そして、倒れたまま右肩を押さえ、苦痛に歪んだ顔を見せた。

「あのバカ！」

ジークは苦々しげに、その声をかみ殺した。

ザズは足に熱を集め、氷を溶かそうとしているが、今までこんな経験がないため、なかなか思い通りにいかず、気持ちばかりが焦っている。

リックは身をよじらせて、なんとか立とうともがいている。そして、ようやく片膝を立て上体を起こすと、歯を食いしばり、次の呪文の詠唱に入った。

「そこまで！」

ラウルの声が響く。制限時間の五分が過ぎた合図だった。

リックが小走りに戻ってくる。

「みっともない試合だったね」

自らの試合をそう表現した。落ち込んだ様子でうつむき、短くため息をついている。

「いや、でも制限時間がなければおまえの勝ちだったさ」

めずらしくジークがフォローをする。リックは疲れをにじませながらも、少し笑ってみせた。

「肩、痛いのか？」

右肩を押さえているリックの様子を、いぶかしげに覗き込んで、アンジェリカがたずねる。

VRMの中では、五感のすべてはコンピュータから直接脳に信号が送られる。痛みを感じても、実際に肉体が損傷することはないはずなのだ。

「あ、今は痛くないけど」

右肩を押さえていた手を外す。

「さっきあまりにも痛かったから、なんか、まだ痛みが残ってる気がして」

そう言いながら、自分の試合を思い出し、身震いした。背筋に冷たいものが走るのを感じた。

「やっぱりプログラム相手とは全然違うよ。気持ちも、感覚も、痛みも」

アンジェリカ、ジークの顔を交互に見て、さらに続ける。

「ふたりが戦うとどうなるか。想像するだけで身がすくむ思いだよ」

「ん？」

そうやってジークは腕を組み、少し考え込む。

「そうか。俺の対戦相手ってコイツだったんだ」

自分の中で確認するかのようにつぶやいた。アンジェリカとリックが同時に驚いた顔を向ける。ジークはふたりの表情には気づかず、始まった次の対戦に見入っていた。

「なんで今まで気づかないのよ」

脱力した声が、アンジェリカの口をついて出た。

試験は順に進んでいき、残すは最後の一組のみとなった。

「アンジェリカ、ジーク」

ラウルに名前を呼ばれて、一瞬、お互いの視線を絡ませると、そのまま無言でそれぞれのコクピットへ向かった。ラウルがスイッチを跳ね上げる。ディスプレイにふたりの姿が映し出された。ジークはやや緊張の面持ちだった。

「制限時間は五分間……始め！」

17. 届かなかった5分間

「始め！」

ラウルのその声と同時にふたりは構えた。

ジークは、短く呪文をとえると、自分のまわりに結界を張った。そして間髪入れず、胸の前で両手を向かい合わせにし、早口で呪文の詠唱を始めた。

「結界を張りながら、同時に呪文を唱えられるなんて……」

セリカを始め、それを見ていた生徒の数人が驚きの声をあげた。

「実戦ではこれくらいのことできないと話にならない」

ラウルは冷たく言い放った。ざわめきがピタリと止み、マシンのモータ音だけがあたりに響きわたった。

アンジェリカは構えたまま微動だにせず、ジークの様子を凝視していた。彼の両手の光は次第に大きくなっていき、その手からあふれ始めた。すると、自分のまわりの結界を消滅させ、両手の中の光を一気にアンジェリカに向かって放出した。その光球と彼女が重なったかに見えた、その瞬間。アンジェリカはすさまじいスピードで横に飛び出し、それをかわした。すぐに足を止めたが、勢いに押され、そのまま地面を数メートル滑った。激しく砂ぼこりが巻き上がる。

ジークはかわされることも予想していたらしく、顔色ひとつ変えなかった。伸ばされていた右の手のひらを上に向ける。そして手首を返すと、重そうに歯を食いしばりながら、その手を引いた。

アンジェリカは何か気配を感じ、後ろを振り返った。彼女の目に飛び込んできたものは、自分の方にめがけて突進してくる、かわしたはずのジークの光球だった。

——ジークが操っているんだわ。

彼の様子から、アンジェリカはそう確信した。右へ、左へ、彼女はジグザグに走った。そして、彼女が向きを変えるたび、ジークは右手を動かし、光球の進行方向を変えた。

しかし、その作業は彼にかなりの負担を与えていた。

一度や二度ならともかく、アンジェリカは何度も何度も向きを変え走るのだ。もちろん、これは彼女の戦略である。その戦略にまんまとはまってしまったジークは、次第に疲れの色を濃くしていった。

それを見計らったアンジェリカは、真正面からジークに向かって突進を始めた。焦ったジークは右手をよりいっそう強く引き、光球の向きを変えた。アンジェリカの方、すなわち自分の方へ。アンジェリカの後ろから、大きな光球が自分へめがけて飛んでくるのを見たとき、ジークはようやく彼女の策略に気がついた。

彼が次の行動を起こすより早く、アンジェリカは短く呪文を唱え、その手の中に小さな光球を作り上げていた。彼女はすぐ近くまで迫ったジークをめがけ、それを放出した。それと同時に、ジークは自分の前面に結界を作り上げ、間一髪でそれを弾きとばした。

次の瞬間、ジークの視界からアンジェリカの姿が消えていた。耳障りな砂の摩擦音、舞い上が

る砂ぼこり、そして、脚の内側をこする感触。

彼は気がついた。アンジェリカが勢いにまかせ足からスライディングし、自分の脚の間をすり抜けているのだということに。

背後をとられる！

とっさに振り返ろうとしたそのとき、ふいに強く背中を押された。体の向きを変えようとするところだったため、バランスを崩してしまった。よろけながら2、3歩、乱れたリズムを刻む。

そのとたん、激痛とともに目の前が白くなった。

何かグジューを飲み込んでいく。白く大きな光。それは、彼自身がアンジェリカに向け放ったはずのものだった。アンジェリカと共に自分の方へ向かってきていたことを、すっかり忘れていた。というより、そこまで気がまわらなかったといった方がいいかもしれない。

グジューが熱さと痛みにもがいているところへ、さらに後ろから新たな痛みがやってきた。今度はグジューの背後へまわったアンジェリカが放ったものだった。グジューは弾きとばされ、顔から地面に落ちるとそのまま数メートル、砂ぼこりを巻き上げながら滑った。

うつぶせのまま、わずかに頭を持ち上げ、自分の足元に目をやる。砂煙りにゆらめく小さな影。やがてそこから無表情のアンジェリカが姿を現した。小さいはずのアンジェリカが覆いかぶさるような威圧感を持って近づいてくる。グジューは激痛と恐怖で、もはや考えることも動くこともできない。

アンジェリカは感情のない顔で、倒れている彼を見下ろす。グジューは、彼女と目が合うと、その顔をこわばらせ、歯をガチガチ鳴らした。

しかし、アンジェリカはそんなグジューを見ても全く動じない。両手を空に向かって伸ばし、呪文を唱え始めた。顔を天に向け、最後の言葉を口にする。

ドーン！

光が空を裂き、柱となってグジューを直撃した。

「ひ……」

モニター前の生徒たちの何人ががひきつった声をあげた。

セリカは両手で顔を覆っている。リックは口を半開きにしたまま、画面から目を離せずにいる。

ラウルはVRMのスイッチを切り、ヘッドセットを外して首にかけた。そして、グジューのコクピットへ大きな足どりで歩み寄り、赤いボタンを押した。

機械音を響かせながら、コクピットが開いていく。

そして、グジューのその生身が姿を現した。

彼は目を開けたまま、ピクリとも動かなかった。ラウルはグジューの頬を、数回、軽く叩いたが反応はない。今度は右手で開いたままの目を閉じさせながら、もう片方の手をグジューの首筋に当てた。五秒ほどそうしたあと、ラウルはグジューを両手で抱えた。

扉へ向かおうと振り返ったラウルに、生徒たちは一斉に注目を浴びせた。しかし、彼は構うことなく歩き出した。

「試験はここまで。解散」

扉ぎわでその言葉を残し、ジークを抱えたラウルは部屋を後にした。

ウィーン——。

もうひとつのコクピットがようやく開いた。

「どうかしたの？」

コクピットから上体だけ起こしたアンジェリカが、きょとんとしながら問いかけた。

「あなた！ ちょっとおかしいんじゃないの?!」

目に涙をためたセリカが叫び声をあげる。

「ジークはもう動けなかったのよ！ なのに……あんなに決定的なまでにとどめを刺すなんて！！
どういふつもりなのよ！！ なんとか言いなさいよ！！」

青い瞳が揺れ、その瞳から涙がこぼれ落ちた。アンジェリカは戸惑いながらあたりを見渡す。

恐怖に覆われた顔、怪訝な表情、怯えた瞳……。

彼女はますます混乱した。

「だって、これはバーチャルなんでしょう？」

自信がなさそうに、おそろおそろ疑問をぶつけてみる。

「そうだけど……」

リックが口を開く。

「ジークが意識をなくしたみたいで……ラウルが抱えていったよ」

「え……？」

アンジェリカはそれを聞くと驚きの表情を見せたが、次の瞬間、コクピットから飛び降り、勢いよく走って部屋を出ていった。リックもその後を追った。

ガラガラガシャン！

息をきらせたアンジェリカが、ラウルの医務室の扉を勢いよく開ける。白いパイプベッドに寝かされたジークを見つけると、一目散にその枕元に駆け寄った。

「ごめんなさい……わたし……こんなことになるなんて……！！」

白い布団に顔をうずめ、肩を震わせている。

あとから入ってきたリックが、ラウルに尋ねた。

「ジーク、どうなんですか？」

ラウルはカルテをデスクの上に置きながら答える。

「軽いショック症状だ。心配ない。すぐに目を覚ます」

その声が聞こえていないのか、アンジェリカがずっと肩を震わせ、しゃくりあげ続けている。
ふいに、アンジェリカは、頭の上に何かが置かれたのを感じた。

——暖かい……手？

恐る恐る、顔を上げる。

「なに泣いてんだよ。死んでねーぞ」

天井を向いたまま、アンジェリカの髪をくしゃっと搔き、ジークはいつものようにぶっきらぼうな言葉を口にする。

「実戦だったら確実に死んでいるがな」

ラウルが口をはさむ。重い空気が医務室に淀んだ。

ジークはもう一度アンジェリカの髪を搔き、ラウルを無視するかのように続けた。

「おまえは何も悪くないんだ。俺の力が足りなかったんだよ」

アンジェリカは再びしゃくりあげ

「でも……」

と言いかけた。そのとき。

「ふたりとも悪くない。悪いのはこいつだ」

その場にいた四人が、一斉に声の方を振り向く。

鮮やかな金髪、深い蒼の瞳の男が、親指でラウルを指さし立っていた。ラウルに歩み寄りながら、憤然とした表情で、さらに続けた。

「だから、私はあれには反対だと言っただろう。どこまで安全性が確保されているかわからない代物だぞ。ただでさえ戦闘意欲を冗長させる危険なものだ。戦時中ならともかく、今の世には必要ないだろう。だいたい、リミッターが付いているはずではなかったのか?!」

金髪の男はそこまで一気にまくしたてた。

「死なない程度にな」

責められたラウルの方はまったく表情を変えず、さらりと受け流すように答えた。相手の男はあきらめの表情を浮かべ、ため息をつく。

「とりあえず……リミット値を下げておけ。いいな」

ラウルにそう念を押すと、今度はジークとアンジェリカの方へ歩き出した。

「ジーク君だね。娘がいつもお世話になっている」

後ろからアンジェリカの両肩に手を置き、かがみこむと、品のある笑顔を見せた。

「え……?!」

ジークは慌てて上体を起こそうとした。

「そのまま、そのまま」

両手でジークを制し、ベッドに寝かせる。

「サイファ=ヴァルデ=ラグランジェ。アンジェリカの父だ。魔導省保安課に勤めている。ここから近いのでいつでも訪ねてきてくれ。もちろん家の方にもな」

そういい、サイファはジークの右手をとった。

「ジーク=セドラックです」

ジークははっきりとした口調で自分の名を告げると、お互いそれぞれの手を固く握り合った。サイファがジークに穏やかに笑いかける。ジークの顔にも微かに笑みが浮かんだように見えた。

サイファは立ち上がると、扉に向かって歩き出した。ラウルとすれ違いざま、足を止め、横目で彼を一瞥する。

「大丈夫だとは思いますが、念のため、彼の脳波、心電図のデータを提出しろ。いいな」

そう言い、自分の顔のすぐ横にあるラウルの肩を軽く叩くと、部屋を出ていった。

「サイファ。おまえの欲しがっていたものを持ってきた」

ラウルは無遠慮に部屋の中央まで進み、机の上に書類の束を投げ置いた。

魔導省の塔、その最上階の一室がサイファの部屋だ。広くはないがきちんと整理され、すっきりとしている。

サイファは椅子を後ろ向きにし、外の風景を見ていたが、書類の置かれる音が聞こえると、くると椅子をまわし、それを手にとった。一通り目を通したあと書類を机の上に戻し、深く息を吐く。

「すべて正常値。安心した」

そういうと再び椅子を半回転させた。

「なあ、おまえから見てアンジェリカはどうだ？」

ラウルに背を向けたまま問いかけた。ラウルは大きな机の横をすり抜けると、サイファの横に並んだ。ふたりの目の前には、薄い霧に包まれた世界が一面に広がっていた。

「正直って恐ろしいな。彼女は戦闘が始まるとそれにのめり込んでしまうようだ。レイチェルにもそういうところがあったから遺伝だと思うが。それに加え、あの魔導力、戦闘能力。この国で彼女にかなうものはほとんどいないだろう。父親のおまえですらな」

サイファは背もたれに深く身を預ける。少し、椅子のきしむ音がした。

「それは、仕方のないことだな」

目を閉じ、ゆっくりと息を吐く。

「なあ……」

サイファがそう切り出したあと、しばし沈黙が流れた。ふたりはまっすぐ前を向いたまま、ガラス越しに広がる世界を眺めていた。そして、再び口を開く。

「おまえ、気がついてるんじゃないのか？」

ラウルがをサイファに横目を送る。

「何をだ」

サイファはわずかに目を細め、遠くを見つめた。

「……いや、何でもない」

そう言い、椅子から立ち上がるとラウルの横に並び、彼の背中に手をやった。

「アンジェリカのことを頼むよ。先生」

前を見たまま、サイファは感情を隠した静かな声を落とした。

18. 呪われた子

成績が発表されるのは、実技試験の翌日である。

ジークとリックは普段通りの時間にアカデミーへ来たのだが、そのときには既に玄関ホールにはかなりの人だかりが出来ていた。すべての生徒の成績がこの玄関ホールに張り出されるため、あらゆる学年・学科の生徒が入り混じり、かなりごった返していた。

「あ、もう張り出されてるんだ。魔導科1年ってどこだろう」

リックは落ち着かない様子で首を伸ばし、壁の白い紙を窺おうとした。

早く結果が見たくてたまらない様子のリックとは対照的に、ジークは重い足どりでリックの後ろをついていく。

彼の足のおもりとなっていたものは、昨日の実技試験だった。

アンジェリカを追い越せなかったことは、誰の目にも明らかだ。それどころか順位が下がっていることも考えられる。自分ではアンジェリカ以外の誰にも負けてはいないと思っている。しかし、今日まで忘れていたのだが、この順位をつけているのはラウルだ。入学式当日のあの事件をはじめ、ラウルに対する先生を先生とも思わない言動の数々——。それらを思い出しては、不安を増していた。

「なかなか見えないなあ。ジークも探してよ」

成績表を探すことに夢中になっていたリックは、ジークのそんな様子に気づきもしない。

「ああ」

ジークは気のないあいづちを返した。軽く息を吐き、面倒くさそうに成績表のある方へ目をやろうとした、そのとき。

「あっ」

ざわめきの中から見つけたその小さな声に反応して、ジークは無意識に振り返った。彼の視界に飛び込んできたもの。それは、人だかりの中から弾きとばされるように出てきたアンジェリカだった。

彼女はよろけながら数歩、不規則なリズムを刻み、ジークにぶつかる寸前でその足を止めた。視線を落としていた彼女には足元だけしか見えていなかったが、目の前のそれがジークだとすぐに気がついた。

ゆっくりと顔を上げる。

ふたりの視線がぶつかった。ふいに彼女にとまどいの表情が浮かんだ。

——何か、言わなきゃ。

必死に頭をめぐらせて、ようやく言葉を絞り出した。

「え……と、大丈夫？」

遠慮がちな声でジークに問いかけた。そして、上目遣いで不安げに返答を待った。

「ああ。精密検査もしたけど、なんともないって」

ジークは平静を装って答えた。

「そう。よかった」

アンジェリカのその言葉を最後に、ふたりの言葉が途切れた。重い空気がふたりの間に流れる。向かい合ったまま、わずかに視線だけをずらした状態。そのまま動くことが出来なくなった。ジークはなんとか沈黙を破ろうと焦ったが、焦るだけで少しも頭がまわらない。

「ジーク！ 見てきたよ！」

リックの脳天気な声に、ふたりは金縛りから解かれたように軽くなった。

「よかったね。リック」

アンジェリカはジークを通り越して、その後ろのリックに笑顔を向けた。

「あ、アンジェリカ。もう見てきたんだ？」

「おい、何がよかったんだ？」

話の見えないジークが、ふたりの会話に割って入った。

「順位が5つ上がったんだよ。頑張った甲斐があったなあ。あ、ジークは前とおんなじで2位だったよ」

リックは自分の喜び報告のついでに、ジークの順位もあっさり口にした。

「そうか」

ジークは1位を取れなかった事実に対してはやはり残念に思ったが、それよりも今はほっとした部分が大きかった。そして、意外にラウルは公平だったんだと、わずかに驚きを感じていた。

「ジーク！ 大丈夫なの？」

背後から今日二回目の「大丈夫？」の声。今度はよく通るはっきりした声だった。振り返ると、セリカが小走りに駆けてくるのが見えた。彼女はリックの隣まで来ると足を止めた。

「ああ、なんともない」

ジークはそれだけ言うと、教室へ向かおうと足を踏み出した。途端、セリカの顔が曇った。

「……なに？ まだこの子といるの？」

彼女は嫌悪感をあからさまにして言った。今までジークに隠れて見えていなかったアンジェリカが、セリカの視界に入ったのだ。

「あんな目にあわされて、それでもまだこの子と仲良しこよしでいられるの？ ジーク、あなたどうかしてるわ」

ジークは表情を険しくした。

「おまえには関係ないだろう」

セリカはそう言われたにもかかわらず、構うことなく続ける。

「きのうのことなのに、もう忘れたなんて言うんじゃないでしょうね？ あなたがアンジェリカに対して感じた恐怖感とかを」

ジークはセリカの方にまっすぐ顔を向け、鋭く睨みつけた。そして、もう一度、同じ言葉を繰り返す。

「おまえには関係ないだろう」

その迫力に圧倒され、セリカは言葉を失くす。少しうつむき、思いつめた表情で立ち尽くした。

「リック、アンジェリカ、行くぞ」

そう言い、セリカの横を通り過ぎようとした。彼女はアンジェリカに冷たい視線を向け、言い放った。

「やっぱりあなたは、呪われた子だわ」

ジークとリックは同時に動きを止め、セリカの方を振り返った。

「……呪われた子って、何だ？」

怪訝な顔でセリカに問いかける。

セリカはそこで我に返ったようにはっとした表情を見せた。

「ここで言うべきことじゃなかったわ。ごめん、忘れて」

急におどおどして、小さな声で一気に言った。そして、いつのまにか集まっていた人だかりをかき分け、逃げるように立ち去った。

「おい！ 待てよ！」

ジークは慌てて呼び止めるが、既に遅かった。もやもやした気持ちのままアンジェリカを見ると、彼女は無表情で立ち尽くしていた。目は空を泳ぎ、焦点が合っていない。

「こんなこと、言われなれてるから……なんでもないわ」

アンジェリカは自分に言いきかせるようにつぶやいた。

「行きましょう」

ぎこちない笑顔でそう言うと、人だかりをすり抜けて、その場から去っていった。

ジークとリックは顔を見合わせて頷き合うと、アンジェリカの後を追っていった。

教室まで来たが、ここも彼女にとって安らげる場所とはならなかった。

クラスのほとんどの生徒が、アンジェリカの様子を遠巻きにうかがっていた。腫れ物に触るような、そんな空気が漂っていた。ジークとリックはどうすればいいのかわからず、ただアンジェリカと一緒にいることしかできなかった。しかし、それだけでも彼女の助けになっていたことは確かだった。そして、クラスメイトの中にも「よくわからないけど気にすんなよ」「応援してるからな」と 声を掛けてくれた人がいたことが救いだった。

ガラガラガラ——。

いつものように荒っぽく扉を開け、ラウルが入ってきた。生徒たちは一斉にバタバタと席に着く。しかし、ただひとつ、セリカの席だけは空いていた。

「今日から二ヶ月、アカデミーは休みに入る。課題は特にはない」

何人かが小さく喜びの声をあげた。

「休みをとう使うかはおまえたちの自由だ。アカデミーの施設は休みの間も自由に使える。この意味はわかるな」

威圧感のあるその言葉に、場の空気が一気に張りつめた。ラウルの次の言葉をじっと待っている。

「それではこれで解散だ」

あまりの唐突な解散に、クラス中が呆気にとられた。

「なんなんだ。これだけかよ。今日は何しに来たかわかんねえな」

「成績を見に来たと思えばいいんじゃない？」

ジークとリックがそんなやりとりをしながら、アンジェリカの席へと向かっていた。

「アンジェリカ」

教壇からの声。アンジェリカは目を伏せていたが、その声に反応して前を向いた。ラウルは目で彼女を呼び寄せると、そのまま外へ連れ出した。

「アンジェリカって、ちょくちょくラウルに連れ出されるよね」

「……………」

ジークはリックに言葉を返すことができなかった。

「遅いね」

「いいからおまえは帰れよ」

「そういうわけにはいかないよ」

ジークとリックは、玄関前で壁にもたれかかりながら立っていた。既に何度か同じ会話が繰り返されていた。

段々と外が暗くなっていくのがわかる。

ふたりはアンジェリカの帰りを待つことにしたのだが、正直ここまで遅くなるとは思っていなかった。

「よく考えたらここから帰るとは限らないんじゃないの？ 今日帰るかどうかもわからないし」

「だからおまえは帰れって」

「そういうわけにはいかないよ」

無意味な会話を繰り返していたふたりが、突然動きを止めた。

ひとけのない校舎に響く靴音。

ふたりは同時に勢いよく振り返る。そこには目を丸くしたアンジェリカが呆然と立っていた。

「どうしたの？ ふたりとも」

「おまえを待ってたに決まってるだろ」

ジークは勢いにまかせてそう言ったが、言ったあとで急に照れくさくなった。彼女から顔をそむけ、うつむく。

「遅かったね。どうしてたの？」

リックはジークのあとに続けた。

「えっと……。ラウルと話をして、お茶を飲んで、それから眠くなったからちょっと寝て……」

「おいおい。そのお茶に睡眠薬でも入ってたんじゃないだろうな」

ジークは下を向いたまま腕を組み、ぶっきらぼうに口をはさむ。アンジェリカはかすかに笑顔を見せると、ふたりを追い越して歩き出した。リックは小走りで追いつき、彼女に並んで歩く。

「これから二ヶ月休みだけど、いつでも連絡してよ。ジークのウチにも遊びに来てほしいし」

「なんでオレんちなんだよ」

後ろからのジークの突っ込みを無視して、リックはさらに続ける。

「あ、そうだ。アンジェリカの家にも今度呼んでほしいな。僕、まだ行ったことないし」

「うん」

アンジェリカは小さな声で返事をした。

「……アンジェリカ」

ジークが珍しく、彼女を名前呼び掛けた。しかし、その声は重かった。

彼女は足を止める。

「今朝のことだけどな……」

「ごめんなさい」

背中越しのジークの声を、短い言葉で遮った。そして、少しうつむく。

「……今は、何も言えないの。でも、いつか、きっと……話したいと思っているから」

彼女がとぎれとぎれに絞り出したその言葉を、ふたりはしっかりと受け止めた。

「いつでも、待ってるからな」

そう言って、ジークもリックも、アンジェリカににっこりと笑いかけた。

19. 告白

「え？ これ……？ お城じゃないの？」

アンジェリカの家を目の前にしたリックは、目を丸くして立ち尽くした。ジークは二度目なのでリックほど驚きはしないが、それでもやはりお城と見まがうような家を目の当たりにすると、さすがに圧倒され緊張する。

ギギギギ……。

重たげな扉の軋む音。扉がゆっくりと開いていく。その向こうには小柄な女性が立っていた。鮮やかなブロンドと金色のドレスが風になびき、光と風を受けて輝いている。彼女は扉から飛び出すと、小走りでジークたちの方へ駆け寄ってきた。

「ジークさん！」

ありったけの笑顔をジークに投げかけたその金髪の女性——レイチェルは、門を開き、ふたりを招き入れた。

「そろそろ来るところだと思ったの」

門を閉めながら、はしゃいだ声をあげる。

リックは彼女の後ろ姿をじっと見つめた。ふと、素朴な疑問が沸き上がった。

——この人は誰なんだろう……。

ジークに目で訴えかけようとしたが、彼は目を合わせてくれない。

ずいぶん雰囲気は違うが、顔はちょっと似ているし、やはりアンジェリカのお姉さんなのだろうか。そんなことを考えていたリックに、当の本人が話しかけてきた。

「リックさんですね。初めまして。レイチェル＝エアリ＝ラグランジェです。よろしくお願ひします」

まっすぐにリックの目を見て、右手を差し出した。リックも慌てて右手を差し出し握手を交わした。

「リック＝グリニッチです」

少しうわずった声で自分の名前を返す。レイチェルのまっすぐな瞳と、触れた手の柔らかさに、リックはどぎまぎした。

「あの、お姉さん、ですか？」

リックの言葉足らずな質問に、レイチェルはまず笑顔を返し、それから言葉を続けた。

「アンジェリカの母です」

「え……？」

思いもよらなかった返答に、リックはぼかんとしている。

「よく間違われるのよ。気にしないでね。ね、ジークさん」

急に振られたジークは、「ん……」と短く言葉を詰まらせた。

「アンジェリカ。おふたりがいらしたわよ」

レイチェルは大きな扉を押し開け、広い玄関ホールに声を響かせる。そして右手を家の中の方

へ向けて、ふたりを導いた。

目の前に広がる大きな空間、緩やかなカーブを描く白い階段、赤いじゅうたん、きらびやかなシャンデリア……見なれない光景に、リックは再び呆然と立ち尽くした。一度見ているはずのジークも、その雰囲気には圧倒され、息をのむ。

「いらっしゃい」

少し照れくさそうに、応接間の扉から体半分だけを出し、アンジェリカがあいさつをした。

「入って」

そう言い終わるか終わらないかのうちに、彼女は再び応接間へと姿を消した。

ふたりがとまどっていると、レイチェルがふたりの背中に後ろから片手つつ当て「どうぞ」と促した。

ジークは柔らかい手が触れると、びくりと体をこわばらせた。

レイチェルはジークの背中が揺れたのを感じると、不思議そうに横から覗き込んで尋ねた。

「どうかしたんですか？」

ジークは下方から迫ってきたレイチェルを避けるように少し上を向いた。

「なんでもないです」

少しうわずった声を上げて、あたふたと歩き始めた。

リックはジークの背中に向かって小さく笑うと、小走りで彼のあとを追っていった。

ふいに緩やかなメロディが流れ始める。

——ピアノ……？

「アンジェリカが弾いてるのかな」

リックは隣のジークにだけ聞こえるくらいの声でぼつりつつぶやいた。

応接間に入ると、音の聞こえてくる方を探し、目を向けた。

ふたの開いた漆黒のグランドピアノ。それにもたれかかるようにひじをついて立っているアンジェリカ。弾いているのは——。アンジェリカとピアノの陰に隠れてよく見えない。

リックは頭を右へ左へ動かし、なんとか見ようとささやかにあがいた。

きりのいいところでメロディが止み、ピアノの前に座っていた演奏者が立ち上がった。

「あっ」

ジークとリックの声がシンクロする。

「サイファさん！」

「よく来てくれた。ふたりとも」

そう言い、彼は笑みをたたえながら、ふたりに歩み寄った。

「ピアノ、弾けるんですね！ カッコいいです！」

リックが驚嘆の声を上げる。

「たしなむ程度だよ。こういう家に生まれると習わされるものだ」

左手でソファを示しながら、ふたりをそこへ導き座らせた。そして自分も彼らの向かいに座った。

「アンジェリカも習ってるの？」

リックは、サイファの後ろにちょこんと立っているアンジェリカに尋ねた。

「ううん、私は何も」

「この子は魔導のこと以外、興味がなくてね」

サイファは笑いながら、後ろのアンジェリカの手をとると、軽く握った。

「アンジェリカも立ってないで座れば？」

紅茶を運んできたレイチェルがそう言うと、アンジェリカは素直にサイファの横に座った。

レイチェルは笑顔でひとりひとりに紅茶を配っていく。そしてそれが終わると、アンジェリカの横へ静かに腰を下ろした。アンジェリカは両親に挟まれて、少し気恥ずかしそうにうつむいた。

「学校って楽しそうね。私も行って見たかったわ」

レイチェルは何気なくそう言ったのだが、ジークたちを驚かせるには十分だった。

「学校、行ったことないんですか？」

ジークが口を開くより早く、リックが反射的に尋ねた。

「私はずっと家庭教師だったの。サイファもそうよね」

レイチェルは少し前かがみ気味に横を向き、サイファを覗き込んだ。

「ああ。ラグランジェ家の本家はほとんどそうだな。アンジェリカもアカデミーに入るまでは学校へ行ったことはなかったよ」

「へえ……そうだったんですか。それはうらやましいような、うらやましくないような……」

リックはあごのあたりに右手を添えてうつむき、なにやら真剣に悩む様子を見せた。

「私としては学校へ行ってほしかったけれど、この子がね。なかなか人見知りか激しくて行きたがらなかったんだ」

そう言いながらサイファは、アンジェリカの頭の上に手をのせた。

「人見知りじゃないわ。親しくもない人と楽しくおしゃべりができないだけよ」

「はいはい」

サイファは焦って抗議するアンジェリカをなだめるように、頭をぽんぽんと軽く叩いた。アンジェリカは頬を軽くふくらませて納得いかない様子を見せていたが、それ以上はもう言わなかった。

「ジークさんて無口ですよ。いつもそんな感じなの？」

レイチェルが少し身乗り出して尋ねた。そして、上目づかいでじっとジークを見つめる。

ジークはますます言葉が出なくなった。

「緊張してるんですよ。知った人とじゃないと平和な話なんてあんまりしないし。突っかかっていくことはよくあるんですけど」

代わりにリックが明るく答えた。

それを聞いてジークは視線を落とし、少し考えたあと、ようやく声を発した。

「ていうか、そうじゃなくてな……」

そこまで言うと言葉につまり、また黙り込んでしまった。

「私、無口な人って好きよ」

レイチェルは唐突にそう言うと、ジークに笑いかけた。

ジークは驚きととまどいで表情が固まり、その目だけが泳いでいる。

「レイチェル、いたいけな少年をあまりからかうんじゃないよ」

サイファが穏やかに笑いかけながら言った。

「あら、からかっていないわ。本当のことよ」

レイチェルはきょとんとしている。

「もう！ こんなことのためにふたりに来てもらったわけじゃないでしょ！」

アンジェリカは気恥ずかしさに耐えかねて、耳を少し赤くしながら叫ぶと、ソファから立ち上がった。

そのセリフを聞いて、ふいに彼女の両親の顔が引き締まる。レイチェルのこんな真剣な表情を見るのは、リックはもちろんジークも初めてだった。ただならぬ雰囲気を感じとって、ふたりの表情もかすかにこわばった。

アンジェリカはゆっくり、ジークとリックの方に視線を落とす。

「話すわ。私の……私たちのこと」

「私たちは、外した方がいい？」

レイチェルが、アンジェリカを見上げて静かに尋ねる。

アンジェリカは少し首を振って

「いっしょにいて」

と、かすかな声で言うと、再びソファに腰を下ろした。

しばしの沈黙のあと、アンジェリカが切り出す。

「ふたりとも気づいてるかもしれないけど」

そこまで言うと、少し間をおき、伏せていた目をさらに深く伏せた。

「私は両親のどちらとも髪と瞳の色が違う」

ジークはその言葉につられるように目の前の三人を見比べた。

——本当だ。

彼はそこで初めて違いを認識した。

「でも、隔世遺伝とか、あるんじゃない？」

リックが口を挟む。

アンジェリカは少し寂しそうに笑って、続けた。

「ラグランジェ家はずっと、金の髪、青い瞳を守ってきたの。隔世遺伝だってこんなことありえない。入り込む余地なんてないんだから。だからよ。金の髪や青い瞳が魔導士の象徴みたいに言われるのは。ラグランジェ家の影響らしいわ」

レイチェルとサイファはアンジェリカの話の黙って聞いている。ときどき微かに苦しそうな表情を浮かべては、それを押し込めた。

「しかも黒でしょう？ 闇の色、不吉な色、呪われた色……いろいろ言われたわ。物心がついたときには、呪われた子って呼ばれてた。下手に騒ぎ立てると一族の恥になるから、ラグランジェ家

以外の人にはそういう話はしてはいけないことになってるみたいだけど」

ジークはセリカのことを思い出した。セリカ自身はラグランジェ家の人間ではないが、きっと祖父か誰か、ラグランジェ家の親戚に聞いていたのだろう。

「僕たちに言っちゃってもいいんですか……？」

リックが不安げに尋ねた。

「そういう明確な決まりがあるわけじゃないんだよ。暗黙の了解というやつだな」

サイファがそう補足すると、ジークとリックを交互に、まっすぐ見つめた。

「アンジェリカが君たちに話したいと言ったんだ。私たちはアンジェリカのことを、何よりも尊重したいと思っている。そのことでアンジェリカに何らかの危害が及ぶことがあれば、私たちが全力で守るつもりだ」

ふたりは身じろぎひとつせず、サイファの話をただじっと聞いている。

「まあ偉そうなことを言っているが、私の力が及ばないばかりに、アンジェリカに辛い思いばかりさせてきたわけだが」

自嘲げみに笑みを浮かべ、斜め下に視線を落とした。

アンジェリカは膝の上の両手をぎゅっと握りしめた。そして、首を小さく横に振った。サイファは、今度は柔らかく、しかしどこか寂しげに笑い、彼女の頭にそっと手をのせた。ふたりを見守っていたレイチェルは、包み込むような笑顔を見せると、娘の背中に手をまわして引き寄せた。

「俺は……」

ずっと無言だったジークが、下を向いたまま口を開いた。

「俺は、いいと思う。その黒い髪も黒い瞳も……俺は、好きだ」

その言葉を聞くと、レイチェルはぱっと顔を輝かせた。

「そうでしょう？ 私もかわいいと思うの」

自分のことのように喜ぶレイチェルを、サイファはあたたかく見守った。アンジェリカも、ほっとしたように小さく笑った。そして、顔を上げると、まっすぐジークを見つめた。

「ありがとう」

彼女の少し潤んだ瞳と揺れた声が、ジークの心を突き刺した。

「本当に帰ってしまうんですか？ 泊まっていてくれると思っていたのに」

レイチェルは残念そうに言った。

隣のサイファは、そんな彼女を見て、愛おしそうに目を細めた。そして、彼女の頭に後ろから手をまわし、自分の方へ軽く引き寄せた。

「レイチェル、あんまり彼らを困らせるんじゃないよ。あしたはふたりともバイトだっていうんだから、仕方ないだろう？」

そう言って、優しくなだめた。

「バイトって、何のバイトなの？」

じゃれあう両親を無視して、アンジェリカはジークたちに尋ねた。

「えーっと、せ……」

「リック！！」

アンジェリカの質問に答えかけたリックを、ジークは驚くほどの大声で制した。アンジェリカも、彼女の両親も、目を丸くしている。

ジークも自分の声の大きさに少し動揺した。

「すみませんでした！」

そう一言告げると、リックの腕を引き、慌てて扉の外へ飛び出した。その扉が閉まるのを確認すると、ジークは軽くため息をついた。

「……言っちゃ、まずかった？」

リックのその質問に、ジークは少し顔をそむけ、ぼそりつつぶやいた。

「なんか、カッコ悪いだろ」

再び扉が軋み音をあげる。ふたりがびくりとして振り返ると、中からサイファが姿を現した。

「途中まで送るよ」

とまどっているふたりに、さらに畳み掛ける。

「まだ話したいこと……というか、話さなければならないこともあるしな」

この辺は民家が少ないせいか、日が暮れるか暮れないかの時間にもかかわらず、ひっそりとしている。静寂が三人の足音がいつそう際立たせた。

「君たちみたいな友達ができ良かったよ。今日は来てくれて本当にありがとう」

「いえ、こちらこそ、いろいろごちそうにもなりましたし」

リックが笑顔で答えたあと、ジークは真顔で言葉を続けた。

「アンジェリカの話も聞きました」

サイファはしばしの沈黙のあと、無表情のまま口を開く。

「君たち、アルコールは大丈夫か？」

尋ねられたふたりは、顔を見合わせ、お互い目をぱちくりさせた。

「少しくらいなら平気ですけど？」

リックがとまどいぎみに語尾を上げて答えると、サイファは口の端を少し上げ、にやりと笑ってみせた。

「少し、付き合ってくれるか？」

そう言ったサイファの親指は、暗い路地裏を指していた。

20. 血塗られた家系

サイファに誘われるまま、ふたりは暗い路地裏をついていった。何度か曲がって行き、道はだんだん細く暗くなっていった。漠然とした不安が沸き上がる。リックは落ち着きなく左右をきょろきょろ見回している。一方のジークは、視線だけを動かし、あたりの様子をこっそりとうかがっている。

「この下だよ」

サイファはにこやかな顔で振り返り、親指で斜め下を指した。そこには、地階へ続く薄暗い階段があるだけで、看板などは何も出ていなかった。

ジークとリックは、お互いに何か言いたげな顔を見合わせた。

そんなふたりの様子を楽しむかのように、サイファは笑顔のまま、何も言わずに降りていった。ふたりも、置いていかれないように、慌ててついていった。

短い階段を降りきると、そこにはごく小さな空間があった。使い古された木製の扉だけがあった。

サイファはその扉を開け、中に入っていった。そのすぐ後ろから、ふたりも足を踏み入れた。テーブルが三つほどとカウンター数席。客も数人ばかり入っている。何も心配する必要のない、ごくありきたりな酒場だった。ありきたりでないのは狭さだけである、ジークたちは、ようやく少し緊張が緩んだ。

「あら、お久しね。サイファ」

「ごぶさたしています」

サイファは声を掛けてきた女性のいるカウンターへと近づいた。

その女性は、歳は40ほどだろうか。若くはないが、長い艶やかな髪をたたえた美しい人だ。話ぶりからいって、おそらくこの女主人だろう。

彼女はサイファに背を向け、グラス片づけながら尋ねた。

「どう？ ウチの娘は元気でやってる？」

「ええ、それはもう。毎日怒ったり笑ったり、相変わらずですよ」

サイファは茶化すように、抑揚をつけて返事をした。

「そう。サイファがそういうんなら心配ないわね。……ところで」

そこまで言うと、彼女は急にくるりと振り返った。そして、右手でほおづえをつき、まっすぐふたりを見据え、ニッと笑った。

「後ろのふたりは新人くん？」

「いえ、アカデミーの生徒です。娘の友人ですよ」

「へえ、アンジェリカの。良かったじゃない」

サイファはふたりの後ろにまわり込んだ。そして、右手でジーク、左手でリックの肩を抱き、にこやかに紹介を始めた。

「こちらはジーク君とリック君。そしてこちらは王妃様の母君のフェイさん」

「……え？」

ふたりは同時にサイファに振り向いた。

「あははははは」

その様子がおかしかったのか、女主人が豪快な笑い声をあげた。

「驚くのも無理ないわ。とうてい王族に関わりあるようには見えないわよねえ。でも娘は娘、私は私。娘はどうであれ、私はただの酒場の女だから」

「そういえば、王妃様は酒場の娘だとかいう噂、聞いたことなかった？」

リックははっとして、ジークに問いかけた。だが、ジークが答えるより早く、女主人のフェイが割って入った。

「噂じゃないわ、本当のことよ。でも勝手ね。王宮の連中も世間も。半ば強引に連れ去っておきながら、酒場の娘だの、父親がいないだの、財産目当てだのごちゃごちゃと。やりきれないわよ」

吐き捨てるように、一気に不満をぶちまける。

「すみません」

サイファは穏やかな笑顔のまま、頭をわずかに下げた。

「別にあなたが悪いわけじゃないでしょ」

フェイはわずかにため息をつき、素っ気なく言った。

「そこら辺の空いてる席に座ってちょうだい」

「個室をお願いしたいんですけど、空いてますか？」

それを聞いて、フェイの動きが一瞬止まった。そして、すぐに表情を緩めると、軽く息を吐いた。

「空いてるわよ。好きに使って」

サイファは一礼すると、ふたりを引き連れ、カウンターの奥へ入り込んでいった。

「なんか……店というより普通のおうちみたいですね」

手あかの付いた木製のタンス、小さめの机、古びたソファ。リックの言うとおりに、そこは酒場という雰囲気とは少し遠い感じだった。

サイファはふたりの背中を軽く押し、ソファの方へ導く。

「ここはお店ではないんだよ。フェイさんの家の応接間兼リビングルームなんだ」

「え？ それって……」

開いた入口からフェイが顔だけ覗かせた。リックの言葉をさえぎると、自分の大きな声を部屋に響かせる。

「サイファが個室個室ってうるさいから、仕方なく貸してあげてんの。これだからおぼっちゃんも困るわ」

半ば諦めたような投げやりな口調だが、どこかあたたかみを感じた。

「すみません」

サイファはにこやかに謝った。そして、満面の笑みを彼女に向けた。

「……っとな、いつもその笑顔にごまかされるわね」

フェイは、気だるく無造作に髪をかきあげた。

「で、サイファはいつものでいいわね。おふたりさんは？」

「僕はカルアミルクお願いします」

リックは即答した。

「俺は、スクリュードライバーで」

ジークは少し考えながら答えた。

「オーケー。ちょっと待っててね」

ウィンクをひとつ残して、フェイはその扉口から姿を消した。

「この店は昔から王宮で働く者たちの隠れ家的な場所なんだよ」

サイファはソファに身を預けて、くつろいだ様子を見せた。

「看板とか何もなかったもので、ちょっとびっくりしました」

リックはようやく安堵して笑顔を見せた。ジークも無言でほっとした表情を浮かべる。

「フェイさんも、娘の王妃様も、口は悪いけどいい人たちだよ。今度、王妃様にも会ってみるか？ 紹介するよ」

「えっ?!」

ジークとリックが同時に驚きの声をあげた。

「おまちどう」

そこへ、トレイにグラスを3つのせ、フェイが勢いよく入ってきた。

「ごゆっくり」

机の上にグラスを乱暴に置くと、大きな足どりで戻っていった。扉口でふいに立ち止まり、ゆっくり振り返ると、今までとは違った張りつめた表情でサイファを見つめた。

「ここ、閉めとくから。用があったら呼んで」

「ありがとうございます」

フェイとは対照的に、サイファは微笑みを崩さずに答えた。

バタン、と軽めの音を立てて扉が閉じられた。

「フェイさんは察してくれているんだ。私が個室を要求するときは、重大な話をするときだとね」

サイファはそう説明をした。彼の口元は笑っていたが、その目はふたりを突き刺すほどの鋭さを持っていた。

グラスの氷がカランと音を立てて崩れた。

「アンジェリカが泣いたときのことを憶えているか？」

サイファの問いかけに、ふたりは黙って頷いた。

「あの子は泣かない子なんだ」

「泣かない子？」

リックがおうむ返しに尋ねた。

「親族にいろいろ言われてきたということは、さっきアンジェリカが言ったとおりだが、そんな目にあっても彼女は涙ひとつ見せない。ただ感情を押し殺したような顔でじっと耐えている」
「強いんですね」

リックがあいづちを打った。

しかしサイファは、うなだれて首を横に振った。

「そうじゃないんだ。嵐が去ったあと、アンジェリカは意識を失うように眠りについて、そのままなかなか目を覚まさない。ひどいときは3日も眠ったままだった」

ジークが息を飲む。胸の鼓動がだんだん大きくなっていくのを感じた。

「ラウルによれば自衛本能だそうだ。自分の許容以上のことがなだれ込んできたために、自衛のため脳が活動を停止する……自分が壊れる前にな。ここで無理に起こしてしまうと、彼女を壊してしまうかもしれない。だから待つしかないんだ。とてもつらいよ。もう永遠にこのまま目覚めないかもしれないと、心臓を搔きむしられる気持ちで、ただ待つことしか出来ない」

サイファは眉間にしわを寄せた。

ジークはサイファの心情、アンジェリカの心情を思い、息が止まりそうになった。

リックもうつむき、苦しうに眉根を寄せた。そして唐突にはっとすると顔を上げた。

「もしかして、こないだラウルのところで寝てたっていうのも……」

「そうだ。それもな。何かを察したようで、ラウルがアンジェリカを呼んで、見ていてくれたそうだ」

ジークの頭にもやがかかったように感じた。ラウルの新たな面を知るたび、彼のことがだんだんわからなくなっていく。

「そんなアンジェリカが泣いたんだよ。君のことでね」

サイファはゆっくり顔を上げ、まっすぐジークを見つめた。

ジークの心臓が飛び出しそうな勢いで打った。

「それを見て、私は決めたんだ。君たちに託そうと」

そう言うと、少しうつむき、自嘲気味に笑った。

「もちろんそれは私たち親のエゴイズムだということは、十分承知している。君たちがそれを受け止める義務はない。もし背負いきれなくて、逃げ出しても、見捨てても、君たちを責めるつもりはない」

ジークはサイファの言っていることが理解できず、ただ頭が混乱するばかりだった。わずかに震えながら、ゆっくりと口を開いた。

「どういうこと、なんですか？」

それだけの言葉を、喉の奥から絞り出した。

「すべてを知ったうえで、アンジェリカと仲良くしてほしい。もっと言えば、あの子のことを救ってほしい……。私たちの勝手な望みだよ」

ジークは何かを言おうと、言葉を探したが、見つからなかった。

リックもただ呆然としているだけだった。

「とりあえず飲もうか」

重くなったその場の雰囲気は払拭しようと、サイファは努めて明るく言った。そして、まだ一口も手のつけられていないグラスを持ち上げた。グラスの外側についていた水滴が滴り落ちた。

「君たちも」

にっこりと笑って左手を差し出し、ふたりにもグラスを取ることを促した。ふたりは言われるがままに、グラスを手を取った。

「乾杯」

サイファは静かに言い、グラスを合わせた。そして、バーボンを少し流し込むと、再び口を開いた。

「これから話すことは、アンジェリカ個人のことではなく、ラグランジェ家全体に関わることだ。これはラグランジェ家以外の人に漏らすことは絶対に禁じられている。ラグランジェ家の中でも知っている人間はそう多くないんだ。だから、必ず他言無用でお願いするよ。親兄弟にも」

ジークもリックもグラスを持ったまま、動きが止まっていた。これから話される内容が何なのか想像もつかない。緊迫した空気が、ふたりを息苦しくさせる。

「もし、私が君たちに話したことが知れたら……。私も君たちも、命を狙われることになるかもしれない」

サイファはまっすぐジークを見据えた。その瞳の真剣さが、彼の言っていることが決して大きさではないということを物語っていた。

ジークはサイファから目をそらすことなく、まっすぐ見つめ返した。

「わかりました」

感情を抑えた低い声で、そう返事をした。

リックは歯をくいしばり、無言でうなずいた。

サイファは再びバーボンを口にした。そしてグラスをそっと机に戻すと、深く息を吐き、話の続きを始めた。

「長老会、というものがラグランジェ家にはあってね。最重要事項はここで決定されるんだ。構成員は五人だが、誰であるかは明かされていない。家族にも秘密らしいので、本当に構成員どうししか知らないことになるな。まあ私には何人かの察しはついているが……」

そこまで言うと、少し目を伏せて考え込んだ。だが、すぐに顔を上げると、じっとふたりを見つめた。その目には強い光が宿っていた。

「その長老会に殺されかけたことがあるんだよ、アンジェリカは。生まれたばかりの頃にね」

「そ、んな……」

思わずリックが声をもらす。

「長老会だという確証はないが、私は間違いないと思っている。彼女の髪の色と瞳の色を知り、生まれてこなかったことにしようと思ったのだろう」

サイファは目を閉じて、息を吸い込んだ。そして、少し前かがみになり、膝の上で手を組んだ。

「ところが、錯乱したレイチェルが、逆にその暗殺者をあやうく殺しかけてしまってね。まあ自

分の子供が首を絞められている場面に遭遇して、錯乱するなという方が無理な話だが」

「一度だけ、ですか？」

ジークは冷静を装ったつもりだったが、激しい鼓動の影響を受けて、その声は揺れていた。

「ああ。それ以降は一度も襲われていない。だからといって不安がなくなったというわけではないよ。ラウルにアカデミーの担任を頼んだもの私だ。アンジェリカを見ていてもらえるようになる」

そう言ったあと、サイファはにっこり笑った。

「ラウルが担任になったことは、君たちには迷惑だったと思うが」

「いえ」

ジークは反射的に答えた。なぜそう答えてしまったのか、自分でもわからなかった。いや、この状況で迷惑だなどと言えるはずがない。

彼の複雑な表情を見て、サイファは再びにっこりと微笑んだ。ジークは、彼に心の内を見透かされたように感じて、ばつが悪そうに下を向いた。

「まあ、飲んで」

サイファはふたりにすすめると、自らもグラスを取り、残り少なくなったバーボンを一口で飲み干した。カラカラと音をさせながら、ゆっくりとグラスを置く。ジークとリックも、それに続いて少しだけ口をつけるとグラスを置いた。ふたりとも衝撃的な話を聞いたばかりで、悠長に飲むなどという気分にはなれなかった。

サイファはゆっくり目を閉じた。

「実はね……」

その不安を煽るような切り出しに、ふたりの緊張が一気に高まった。無言で次の言葉を待つ。

「まだ話したいことはあるんだよ」

サイファはじっとジークを見つめた。

「まだあるんですか？」

リックは驚きを隠しきれなかった。サイファは彼に振り向くと、穏やかな表情を浮かべた。

「今日は一気にたくさん話しすぎたね。この話はまた今度にしよう」

「今、聞かせてください！」

ジークは机に手をつき、身を乗り出して叫んだ。横でリックが目を丸くしている。ジークははっとして、その身を戻した。そして、うつむきながら、小さな声で付け足した。

「……気になりますから」

サイファは再びジークを見つめた。ジークはその瞳の深さに、吸い込まれそうな感覚をおぼえた。

「では、あと少しだけ付き合ってもらおうとしよう」

ジークとリックは息を飲んで頷いた。

「ラグランジェ家には婚約制度というものがあってね。本家の子は皆、10歳までに婚約者を決めなければならないんだ。相手は分家からと決まっているし、本人の意向など全く無視される」

「え……。それじゃ、アンジェリカも？」

リックは驚き、焦って尋ねた。

「いや、まだ決めていない。というか、決めるつもりもないよ」

サイファはにっこりする。

「おかげで、今、あちこちからせつつかれて大変だよ。でも、あの子には自分で自分の幸せを見つけてほしい。それが私たちの願いだ」

穏やかだがきっぱりとした口調で言い切った。リックはほっとしたように笑顔を見せた。ジークは小さく首を縦に振った。

しかし、サイファの顔にふと暗い影が広がった。小さく息を吐くと、低い声で話し始めた。

「ただ、それは理想論であり、現実となると、それを阻むものが出てくる」

ジークとリックは固唾を飲んで耳を傾けた。今度は一体どんな話なのだろうと、考えるだけで息苦しくなる。

「私が生まれるより前の話だが」

両手を口の前で組み、少しうつむいた。

「本家の娘で、決められた婚約者でない人と一緒に逃げた……。俗っぽく言えば駆け落ちだな。そういうことをした人がいたんだ」

サイファはうつむいたまま淡々と話し続けた。しかし、サイファの冷静さとは裏腹に、ジークの鼓動は何か煽られるように、どんどん強くなっていった。

「だが」

短く強い調子で言うと、サイファは上目づかいにジークに視線を送る。

「それから間もなく、相手の男が亡くなった」

サイファは、ジークの瞳を射抜くような強さで見つめた。

「表向きは事故死、ということになっているが、おそらくは……」

「長老会、ですね」

リックが硬い表情でゆっくりと言った。その額には冷や汗がにじんでいる。

「ああ」

サイファは激しい感情を懸命に押さえ込みながら、低い声で返事をした。

「ここまでのことをやってきたからこそ、ラグランジェ家を、金の髪を、青い瞳を、守ってこられたのだと思うよ。いったいどれだけの人間が血と涙を流してきたのか……。こんなもののために」

サイファは嫌悪感をあらわにすると、自分の横髪を無造作に掴み、ひねりながら引っ張った。

「私たちは何があっても全力で守るつもりだが、守りきれぬ保証はどこにもないんだ。ときどき思うよ。ラグランジェ家のしきたりに従って、おとなしくしていた方が、彼女のためなのかもしれない、とね」

「そんなことは、ないと思います」

ジークはときおり言葉を詰まらせながら言った。サイファはその言葉を聞くと、にっこり笑った。

「そうだな。これからは、もう迷わなくて済みそうだ」

「もっとゆっくりしていけばいいのに」

外へと続く階段を前にして、見送りのフェイは少し残念そうに言った。

「彼らがあした、バイトがあるっていうのでね」

サイファがそう言うと、リックが申しわけなさそうに軽く頭を下げた。

「そう。君たち、ひとりでもいいからいつでもいらっしゃい」

フェイは挑発的な笑みを浮かべると、下からふたりを覗き込んだ。

「はい」

少し頬を紅潮させながら、リックが返事をした。ジークもその返事に合わせて頷いた。

三人はフェイに見送られながら、短い階段を上がり、通りに出た。辺りはもうすっかり暗くなっていた。もともと薄暗い道だったが、灯りがほとんどないため今はすっかり闇である。

「ところで、何のバイトかは教えてもらえないのかな」

サイファはふたりを振り返ると、いたずらっぽい笑顔を見せた。

ふたりは互いに顔を見合わせると、ジークが小さく頷いた。リックがサイファの方に向き直る。

「あの……平たくいうと、着ぐるみショーです。魔導が使えることが条件だったので、僕たちにはちょうどよかったんです。アカデミー魔導全科の生徒だって言ったら即OKでした」

「意外なところで恩恵が受けられるものだね」

サイファがにこやかに相槌を打った。

「はい。僕もこんなに効力があるとは思いませんでした。それで着ぐるみショーなんですけど。どういうものかという、いま子供たちに人気の戦隊もので、魔導の力をつかって怪人を倒し世界の平和を守るっていうストーリーなんです。僕がイエローでジークがブルーで……」

「そんなことどうでもいいだろ！」

だんだん嬉しそうに話したリックを、ジークはあわてて止めた。彼は恥ずかしそうにうつむいた。しかし、わずかに顔を上げると、サイファの様子をこっそり窺った。サイファは穏やかな笑顔をたたえたまま、ふたりを見守っていた。

「俺、アンジェリカに言います。ちょっと恥ずかしくてあんまり言いたくなかったんですけど、アンジェリカの秘密だけ聞いておいて、自分のことは言わないっていうのもやっぱり卑怯な気がしますし」

サイファは笑顔で頷いた。

「きっと喜ぶよ、あの子」

靴音を響かせながら通りを歩く。ジークは前に行くサイファの背中をじっと見つめながら、意を決したように口を開いた。

「ひとつだけ、聞いてもいいですか？」

「なんだ？」

サイファは足を止め、顔だけジークに振り返った。

「どうして、アンジェリカの髪と瞳は黒いんですか？」

沈黙があたりを包んだ。リックは顔から血の気が引いた。なんてことを訊くのだと焦った。しかし、サイファは動揺することなく、にっこりと笑った。

「それは、私には答えることのできない質問だ」

そう答えると、再び前を向き、なにごともしなかったかのように歩き出した。

ジークには、その微妙な言いまわしの意味することはわからなかったが、もうこのことについては触れてはいけないような、そんな気にさせられた。

21. それぞれの理由

「しつこいようだけどな。ウチはホントに狭いし、汚いぞ」

「私のところが普通じゃないってことくらいわかってるわ」

アンジェリカを真ん中に、右側にジーク、左側にリックと、三人が並んで歩いている。雲の切れ間からのぞいた太陽が、彼らの後ろに短い影を作っていた。

ジークはズボンのポケットに両手を突っ込み、難しい顔をしながら背中を丸めた。

「普通のウチと比べても、狭いんだよな」

力のない声で言うと、ひとり苦笑いをした。アンジェリカは横目で少しジークを見上げた。

「私は気にしないけど？」

「俺が気にするんだよ」

「ふーん」

そう言いながら、彼女は首を軽くかしげた。

リックはそのふたりのやりとりを、ただ微笑みながら眺めていた。

彼らはアカデミーの前でアンジェリカと待ち合わせ、一緒にジークの家へ向かっていた。

アンジェリカは今までアカデミーと王宮くらいにしか行ったことがなかった。狭い路地裏、ひしめきあう家々、慌ただしく行き交う人々……初めて目にするそれらの光景に、彼女は少なからず高揚感を覚えていた。しかし、それを悟られるのは恥ずかしいような気がして、表情には出さなかった。

「ずいぶん歩いたけど……」

「もうすぐだ。疲れたのか？」

ジークは隣のアンジェリカに顔を向け、挑発するように笑った。

「10歳の女の子にはきついよね」

さらにリックが追いうちをかけた。悪気はなかったのだろうが、アンジェリカは子供扱いされたと感じてムツとした。重くなった足を懸命に動かし、少しも遅れまいと必死でついていく。

「別に疲れてなんか……。毎日この距離を歩いて通っているのかと思って」

「慣れればそうたいした距離でもないよ。ね、ジーク」

「まあな。いい運動にもなるし」

ふたりは事もなげに行ってのけた。アンジェリカは口をきゅっと結び、意識的に大股で歩き出した。

「あれ？」

リックが素頓狂な声をあげながら、前を指さした。そしてゆっくりジークの方に顔を向けた。

「おばさん、立ってるよ」

ジークは足を止め、リックの指す方を見た。そのとたん、顔から血の気が引いた。そして、唐突にもものすごい勢いで走り出した。リックは小走りで後を追っていった。アンジェリカも何がな

んだかわからないまま、それに続いた。

「おい！なんでこんなところに立ってんだよ」

ジークは眉間にしわを寄せ、その女性に詰め寄った。しかし、彼女は全く動じることなく、平然としていた。

「あんたがカノジョを連れてくるなんて初めてだから、気になっちゃって何も手につかないのよね」

「だから彼女じゃねえって言ってんだろ。少しは人の話を聞けよ」

ジークは低い声でさらに詰め寄った。

「ジークのお母さん？」

アンジェリカは隣のリックを見上げ、小さな声で尋ねた。

「そう、レイラさんっていうの。あのふたりの親子ゲンカはいつものことだから、気にしない方がいいよ」

リックは優しく笑いかけながら答えた。

レイラは華奢で小柄だが、力強さを感じさせる女性だった。黒髪を後ろでひとつにまとめ、八分丈のパンツ姿で活発に颯爽と身をこなす。そして、その表情は自然でいきいきとしていた。ジークとは違い、とても人なつこそうに見えた。

「おばさん、こんにちは！」

リックは元気のいい声を投げかけた。レイラは目の前の息子をよけるように体を傾けると、顔をパッと輝かせた。

「こんにちは、リック。その子ね！」

アンジェリカを見るなりにっこりと微笑んだ。

「ずいぶん小さいお嬢さんだけど、どこから連れてきたの？」

興味津々にそう言いながら、ひじでジークの脇腹を小突いた。

「人を誘拐犯みたいに言うなよ」

ジークは冷めた口調で言った。すでに疲れ切っている。リックはアンジェリカの肩に手を回し、にっこりと笑った。

「僕らのクラスメイトなんです」

アンジェリカはおずおずと一礼した。

「え？ホント？こんなにちっちゃいのに？」

「あんまりちっちゃいちっちゃい言うと、キレるからな、こいつ」

ジークは乾いた笑いを浮かべた。

「あ、ごめんね」

レイラは軽く謝ると、アンジェリカの前に歩み出た。そして、とまどう彼女の手を取り、軽快に歩き出した。

「お……おい！」

ジークは後ろから慌てて追っていった。

「遠慮しないでどうぞ」

レイラは木の扉を勢いよく開けた。そして、狭く薄暗い玄関に、アンジェリカたちを招き入れた。

「なんでおまえが仕切ってたんだよ」

半ば諦め口調で、ジークがつぶやいた。

「母親に向かっておまえとは何よ。ほら、あんたもさっさと入んなさい」

「……息子に向かってあんたってのはいいのかよ」

レイラは息子の言葉を背中で聞き流しながら、アンジェリカの方をじっと見つめていた。

「どこかで……会ったことある気がするんだけどなあ」

「え？」

アンジェリカはレイラを振り返った。

「やっぱり絶対にどこかで見たことあるのよね」

身をかがめて、よりいっそう深く、アンジェリカを覗き込んだ。

「あの……私は、記憶にないですけど」

ふたりのそんな会話を聞いていたリックが、ふいに口を挟んだ。

「テレビじゃないですか？ アンジェリカはテレビの広告に出てたから」

レイラは目を大きく見開くと、手をぽんと打った。

「そう！ 謎のCM美少女！」

「その俗っぽい言い方はなんなんだ！」

ジークは耳を赤くしながら叫んだ。しかし、レイラは息子の声など耳に入らない様子で、あごに手をあて考え込んでいた。

「ちょっと待って。そうするとこの子、ラグランジェ家のお嬢さんてことになるけど……」

「そうなんです」

リックはあっさり肯定した。

「うっそお！」

レイラは両手を頬にあて、家の外まで突き抜けんばかりの声をあげた。ほとんど悲鳴ととってもよかった。勢いよく後ろのジークを振り返り、胸ぐらを掴むと、力まかせに揺さぶった。

「あんたって子は！ ラグランジェ家のお嬢さんになんてことを！！」

「俺が何をしたっていうんだよ」

「あの、私、なにもされてませんから」

アンジェリカは、レイラのあまりの取り乱しように驚き、彼女を鎮めようと、とっさにそう言った。しかし、彼女の勢いはおさまらなかった。

「こんな狭くて汚いところに連れ込んでんじゃないの！」

「本人が来たって言ったんだよ」

「本当に私が来たって言ったんです」

ジークは面倒くさそうに投げやりな態度で答えていたが、アンジェリカはレイラを落ち着けようと必死だった。レイラはようやくジークから手を離れた。そして、軽くため息をつくとき、自分

の額に手をのせた。

「……なんだか頭痛がしてきた。ねえリック？ ジークが変なことしないか見張っててよ」

「自分の息子がそんなに信用ならねえのかよ」

ジークは深くため息をついた。うつむきながらレイラの横をすり抜けた。

「行こうぜ」

階段の前まで来ると、左手を軽く上げ、アンジェリカとリックを呼び寄せた。そして、細い階段を慣れた足どりで駆け上がっていった。

二階はジークの部屋になっていた。

そこには小さな勉強机と椅子があるだけで、他にはなにもない。しかし、もともとが狭い部屋なので、三人がくつろぐのが精一杯といったところだ。

ジークは開け放たれた戸口で、無造作に靴を脱ぎ散らかした。

「一応、この部屋は土足厳禁だから」

そう言って部屋に入っていき、奥であぐらをかいた。リックはとまどうアンジェリカの肩をぼんと軽く叩いた。アンジェリカは促されるまま靴を脱ぎ、部屋の真ん中にゆっくりと歩み入った。そして、ぐるりと部屋を見渡した。

「座れば」

「……地べたに？」

「椅子でもいいぜ」

ジークは親指で隣の椅子を指した。アンジェリカはその椅子に目を向けた。しかし、しばらくの沈黙のあと、スカートを押さえながらその場に座った。

「思ったより片づいてるわね」

彼女はもう一度あたりを見まわしながら言った。リックは戸口近くに座りながら、小さく笑った。

「昨日は大変だったけどね」

「リック。おまえそれ以上は言うなよ」

ジークはこわばった笑顔でリックに軽く睨みをきかせた。だが、リックはただにこにここと、余裕の笑顔で受け流していた。

「わたし、片づける前の方が見たかったな」

アンジェリカは少し残念そうに、そしてジークを困らせるように、ややわざとらしく抑揚をつけて言った。

「お嬢ちゃんがそんなの見たら卒倒するわよ」

開いたままの戸口から、レイラが顔をのぞかせた。その両手にはそれぞれ缶ジュースが2本ずつ乗せられていた。

「ほれ」

彼女はジークとリックに1本ずつ投げてよこした。そして、アンジェリカの前まで歩いていくと、しゃがんで、彼女と視線を合わせた。とまどう彼女ににっこりと笑いかけると、缶ジュース

スを差し出した。

「さっきはごめんね」

「いえ」

アンジェリカは両手でそれを受け取った。

「ラグランジェ家のお嬢さんにわざわざこんなところに来てもらうなんて、ホント、申しわけなかったわね」

「そう思うんなら缶のまま持ってくるなよ」

あきれ顔のジークが、後ろから突っ込みを入れる。レイラは横目で息子を睨みつけたが、すぐに笑顔に戻った。

「でも、来てくれて嬉しいわ。女の子のお友達なんて初めてだし。たいしたおもてなしは出来ないけど、あなたさえ良ければいつでも来てね」

「はい」

アンジェリカは小さく頷いて答えた。そんな彼女を、レイラは満面の笑みで見つめた。

「ホント、かわいいわー」

アンジェリカは面と向かって誉められることに馴れていなかったのも、こういうときの対処の仕方がわからなかった。彼女は笑顔どころか、少し怯えたような表情を見せていた。だが、レイラにはそれが新鮮で、よりいっそうかわいらしく見えた。

「ホント、抱きしめたいくらい。もうウチの娘にしたいわ！ほら、私とちょっと似てない？」

自分の顔を指さし、ジークを振り向いて同意を求めた。だが、ジークは完全に呆れ返った。

「図々しいにもほどがあるぞ」

あさっての方を向いたまま、乾いた声で言った。

「それじゃ、邪魔者は去るとしますか」

レイラはすっと腰を上げ、出ていこうとした。が、何かを思いついたように、急に振り返ると、不敵な笑みを浮かべた。

「暇になったら、その押し入れを開けると面白いものが出てくるかも。じゃ！」

それだけ言うと、逃げるようにドタドタと階段を降りていった。

「おい！」

ジークは片膝を立て身を乗り出したが、すでにレイラの姿は見えなくなっていた。

「……ったく。何しに来たんだか」

急に疲れが襲ってきて、ジークはぐったりとうなだれた。そして、ちらりとアンジェリカに目を向けた。

「悪かったな」

頭を押さえ、ぶっきらぼうにそう言った。アンジェリカは無言で首を大きく横に振った。自分の気持ちをうまく言葉にすることができず、ただそうすることしか出来なかった。

「あのふたり、似てないようで、似てるでしょ。あんまり人の話を聞かないところとか」

リックはアンジェリカに顔を向け、明るい声で言った。その声につられて、アンジェリカは小さく笑った。

しかし、ジークは不本意だと言わんばかりに眉をひそめ、首をかしげた。

「俺はあそこまでひどくないぞ」

リックとアンジェリカは顔を見合わせると、ふたりして首をすくめた。

「お父様は今日はいらっしゃらないの？」

「あ？ もう死んでるけど。言ってなかったか？」

あっさりそう言うと、缶ジュースのプルタブを引っ張り開けた。

「……ごめんなさい」

アンジェリカはしゅんとしてうなだれた。

「別に気にすんな。もうだいぶ経つしな。俺が10歳のときだったから、8年くらいか」

10歳……。今の私と同じ歳で父親を亡くした……。私が今、父を亡くしたとしたら？ 耐えられる？ そんなことを考えて、アンジェリカは息苦しく押しつぶされそうになった。

「ホントに気にすんなって」

うつむいて押し黙ってしまったアンジェリカに、ジークは少し困ったように声を掛けた。彼女はゆっくりと顔を上げ、まっすぐジークに視線を投げかけた。

「もしかしてバイトしてるっていうのも、それと関係があるの？」

「まあ……な」

「僕は単なる趣味みたいなものだけだ」

リックはちょっと申しわけなさそうに、頭をかきながら笑って言った。

「ああ、着ぐるみショーとかだったわよね。どうしてそんなにジークが恥ずかしがってるのか、よくわからないんだけど」

「でしょ？」

リックは嬉しそうに、声を大きくして言った。

「ていうか、おまえ見たことないんだろ？」

ジークはアンジェリカを指さして、低い声で言った。それを聞いて、リックは顔をパッと輝かせた。

「アンジェリカ！ 今度見においでよ」

「だ——！！ おまえは余計なことばかり！」

ジークは耳を赤くして叫んだ。

「そんなにイヤなら、他のバイトにすればいいのに」

アンジェリカが冷静に、もっともなことを言った。

「いや……あれ、な、ワリがいいんだ……」

ジークは急にトーンが下がり、口ごもりだした。だが、そこですぐに開き直り、いつもの調子に戻った。

「長期休暇のときくらいにしかバイト出来ないしな。休暇中でも勉強もしないといけないし……だから少しでもワリのいいバイトを選ぶのは当たり前だろ」

「お母さまのため？」

「母親のためっていうか……なんだろう。自分の生活する分くらいは、そろそろ自分で稼がない

とな。まあ母親のためっていうのもあるか。あんな感じだけど、それなりに苦労してきたのは知ってるしな。若ぶっててもそろそろ歳なんだ。少しくらいは楽させてやらないとな」

「それ、おばさんが聞いたら、きっと激怒すると思うよ」

リックは苦笑いしながら言った。ジークいたずらっぽく白い歯を見せて笑った。

アンジェリカは少し面食らっていた。こんなに軽い調子で自分のことをペラペラと話すジークを見たのは初めてだった。不思議なものを見るように、ただぼうっとジークを眺めていた。

ジークはアンジェリカのそんな様子に気づいていなかった。ジュースで喉を潤すと、さらに話を続けた。

「だから俺は、何がなんでもアカデミーに行かなければならなかった」

「どうして？」

「は？」

突然の質問に、ジークは驚いてアンジェリカの方を見た。まさかこんなわかりきったことを聞かれるとは思っていなかったのだ。

「どうして……って、そりゃ授業料免除なんて他にないだろ？ それにアカデミーを出れば、いいところにも就職できるしな」

そこまで言って気がついた。アンジェリカはそんなことなど考える必要もないのだ。だから、わからなくても無理はない。そうすると、今度は逆に疑問がわき上がってきた。

「おまえは？ なんでアカデミー？」

「え……」

アンジェリカはまっすぐジークを見たまま動きを止めた。そして一瞬遠くを見やると、ゆっくりと目を伏せた。

「見返してやりたかったの……。呪われてなんかいない、私はラグランジェ家の子だって証明したかった。アカデミーでいちばんを取れば、それができるって思ったのよ」

アンジェリカとラグランジェ家の状況を知っていたふたりには、彼女の短い言葉に凝縮されたその重さが、痛いほどわかった。ジークは思いつめた表情のアンジェリカにかける言葉を見つけられなかった。

しかし、今、彼女を悩ませていたことは、ふたりが想像していたものとは違っていた。

「私はアカデミーに入学するべきじゃなかったのかもしれない」

「は？ なに言ってんだ、おまえ」

ジークは驚きのあまり、声を荒げ問いつめるような口調で言った。

「私が入学しなければ、ジークみたいな境遇の人がひとり、救われたかもしれないでしょ」

「ばっ……かか！」

大きな声で叫びかけて、ぐっと抑えた。

「試験に受かって入って来たんだろ。それでいいじゃねえか。誰も文句なんて言わねえよ」

軽くため息をつくと、うつむいているアンジェリカをじっと見つめた。

「それに、おまえにはおまえの理由があるだろうが」

アンジェリカはわずかにびくりと体を揺らした。

「そうそう。理由なんて人それぞれでいいんじゃない？ どの理由が良くて、どれが悪いなんてこと、ないと思うよ」

リックは彼女を覗き込むようにして、優しく言葉をかけた。

「だいたいそんな殊勝なおまえは、見てて気持ち悪い」

「なによそれ！ どういう意味？！」

いつものジークの憎まれ口。アンジェリカには、それがわざとなのだとわかった。だが、素直に嬉しいという感情を見せるのはちょっとくやしい気がして、頬をふくらませ、口をとがらせて見せた。

22. 突然の訪問者

「ジークさん、いらっしゃいますか？」

背後から掛けられた聞き覚えのない声。玄関先を竹ぼうきで掃いていたレイラは、手を止めゆっくりと振り返った。

そこに立っていたのは、すらっと背の高い少女だった。明るい栗色の髪と深い濃青色の瞳が、上品さを漂わせている。彼女は少しぎこちない笑みを浮かべて、レイラの返事を待っていた。

レイラはしばらく、彼女のすっきりとした顔立ちに見とれていた。顔だけではない。細く長い手足、透き通るような白い肌、深い色の瞳……。そのすべてに見とれていたのだ。しばらくそうしていたが、ふと我にかえると、勢いよく家の中に駆け込んでいった。

「ジーク！！ ジーク！！」

とんでもない大声で叫びながら、レイラはドタドタと階段を駆け上がっていった。ジークは彼女に冷ややかな視線を投げかけた。

「何だ？ 空から鯛でも降ってきたのか？」

「あんたにすっごい美人さんが会いに来てんのよ！」

「……？ アンジェリカじゃないのか？」

「違う違う、彼女だったら一回会ってるしわかるわよ。あんたと同じか、ちょっと上くらいのべっぴんさんよ」

ジークは訝しげに、斜め上に目をやった。

「セールスかなんかじゃねえのか、それ」

「セールスでもなんでもいいから、とにかく早く行ってきなさいよ！ 見るだけでも得した気分になるわよ」

レイラはなぜだか上機嫌だった。彼女に急かされるまま、ジークは階段を降りていった。面倒くさそうに頭をかき、ため息をつく。

「あ？」

ジークは、玄関口に立っている来客を目にすると、一瞬、驚きの表情を見せた。

「久しぶり」

それはセリカだった。少しばつが悪そうにしていたが、それでもなんとか笑顔を見せようとした。しかし、ジークはそれに応えようとしなかった。むっとして体ごと横に向き、腕を組みながら壁にもたれかかった。

「なんで俺の家、知ってた？」

「名簿に住所が載ってるわ」

彼女はあっさりとした。ジークは名簿の存在などすっかり忘れていた。

「今、何してたの？」

今度はセリカが尋ねた。

「勉強」

ぶっきらぼうに一言だけ答えた。そしてそれきり口を開こうとはしなかった。沈黙がふたりの

間に流れる。

セリカは居心地の悪さを感じながらも、無理に笑顔を作ってみせた。

「少し、話がしたいんだけど」

ジークは無表情でしばらく沈黙を保っていた。だが、ふいにセリカとは別の方から視線を感じ、そちらに振り向いた。そこには、階段の上の方から、興味津々に身を乗り出しているレイラがいた。ジークは思いきり呆れ顔を彼女に向けた。そして、ふうとため息をつく、壁から体を離れた。

「外へ出よう」

ジーンズのポケットに軽く手を突っ込み、セリカを追い越すと、大きな足どりで外へ出ていった。セリカはレイラに向かい、丁寧に一礼すると、ジークのあとについて出ていった。

「へえ……。なんだかワケありっぽいじゃない？」

レイラはほおづえをつき、わくわくしながらふたりの姿を見送った。

ジークはポケットに手を入れたまま、無言で歩き続けた。セリカはその五歩ほど後ろを歩いていた。それ以上、近づくことを許さない、そんな空気を彼の背中に感じとっていたのだ。

十分くらい歩き続け、鉄棒と砂場しかない小さな公園に辿りついた。隣が森のためか、昼間にもかかわらず、薄暗くひんやりとしている。ひとけもなく、鳥のかん高い鳴き声だけが響いていた。

ジークは自分の腰ほどの高さの鉄棒にもたれかかり、腕を組んだ。

「話って何だ？」

セリカを見ることなく、斜め下に視線を落としたまま、低いトーンで切り出した。

「あの日のこと……ごめんなさい」

セリカは平静を装っていたが、その声はわずかに揺らいでいた。

「謝る相手が違うんじゃないのか」

ジークは、低い声ではっきりと言った。その声からは、あからさまな苛立ちが滲んでいた。セリカのいう「あの日」というのが、長期休暇前の成績発表の日ということはすぐにわかった。あのとき、確かにセリカに対して怒りを表していたのは自分だった。だが、彼女の謝るべき相手は、彼女が最も傷つけた相手、すなわちアンジェリカである、そうジークは思ったのだ。

セリカは凶星をつかれて押し黙った。アンジェリカにも謝る、それが正しいのだとわかっているながら、どうしてもそう答えることができなかった。

風がふたりの間を吹き抜ける。

セリカの薄地のワンピースがパタパタと音を立ててはためいた。その軽い音にあおられるように、セリカの鼓動はどんどん速くなっていった。早く何か言わなければ……。追い立てられるように、懸命に言葉を探した。

「わ……たし……」

言いたいことも定まらないまま、セリカはうわずった声で切り出した。そして、眉根を寄せると、苦しそうに大きく息を吸い込んだ。

「自分でも、わからないの。どうして、あんなことを言ったのか……。自分が自分でなくなるような……」

少しづつ息を吐きながら、消え入りそうな声で言葉をつなげた。ジークは彼女に顔を向けると、鋭い視線を突き刺した。

「そんないいわけをするために、わざわざ来たのか？」

セリカは再び言葉を失った。彼女の目の前に、一瞬、闇が広がった。

ジークは勢いをつけて鉄棒から体を離し、そのまま数歩前へ出た。そして、セリカに背中を見せたまま、静かに口を開いた。

「おまえ、四大結界師になりたいとか言ってたな」

セリカは、彼がなぜ急にその話を持ち出してきたのかわからず、不安げに顔を曇らせた。

「……ええ」

自信のない声で小さく答えた。

「おまえには世界を任せられない。俺が阻止する」

静かに、しかしはっきりと、ジークは言い放った。そして、彼女を残しその場を立ち去った。

「……何やってんだ、おまえ」

ジークは目を見開いた。リックは、公園の外側にある並木の根元にしゃがんでいた。その姿勢のままジークを見上げ、困ったように笑ってみせた。

ジークの表情が、驚きから呆れへと変化した。

「覗いていたのか。悪趣味」

「おばさんにきいたらキレイな子と出ていったっていうから、ここかなと思って来てみたんだけど、とても出ていける雰囲気じゃなくて、つい……」

一通りのいいわけを済ませると、リックは膝を伸ばして立ち上がった。

「でも、あそこまで言うことなかったんじゃない？ 泣いてたよ」

「泣いてたのか？」

「まだ泣いてるよ。ほら、ここから見えるよ」

リックは木陰に身を隠しながら、公園の中を指さした。

「見ねえよ。見たくねえ。見るもんか」

少し苛立って、ジークは早口でまくしたてた。

「おかえり！」

レイラは歯切れよく声をかけた。ミシンがけの手を止め、玄関から入ってきた足音に目を向ける。

「ああ、ただいま」

ジークは母親を見ることなく、疲れた声で返した。

「おじゃまします」

リックはジークに続いて家に入り、にこやかにと挨拶すると、軽く頭を下げた。レイラは彼に

笑顔を返すと、再びミシンがけを始めた。だが、すぐにその手を止めた。よく通る大きな声を、再びジークに向けた。

「あんまり女の子を泣かすもんじゃないわよ！」

それを耳にしたとたん、ジークは昇りかけていた階段をとびおりた。

「おまえも覗いてたのか！」

耳を真っ赤にしながら叫ぶジークに、レイラは一瞬驚いたが、すぐにいたずらっぽい笑顔に変わった。

「へえー、泣かしたんだ。テキトーに言ってみただけなんだけど、当たっちゃったわけね！やるわね、この色男！」

ジークはただ啞然とするしかなかった。

23. 長い一日

長かった休みも終わり、今日から再びアカデミーでの学園生活が始まる。休み明けというのは、たいてい条件反射的に少しの憂鬱を伴う。

ジークも例外ではなかった。今朝からずっと、体の奥底に鉛が沈んでいるような、いいようのないもやもやしたものを感じていた。しかし、アカデミーに近づくにつれ、彼は次第に思い出してきた。自分はどれほどここへ来たかったのか、ということを一――。

「ここへ来るのも二ヶ月ぶりなんだな」

アカデミーの門をくぐり、校舎を仰ぎながら、ジークが感慨深く言った。

「新鮮な気持ちだよ。なんだか入学の日のことを思い出すなあ」

リックもつられて顔をあげると、深く息を吸い込んだ。

「もしかして、全然来てなかったの？」

背後から、驚きを含んだ高い声が聞こえた。

「ああ。二ヶ月間まったくな」

ジークはそう言いながら、ゆっくりと振り返った。そこには、案の定、呆れ顔のアンジェリカが立っていた。

「どうりで全然会わなかったわけね」

小さく独り言のようにつぶやくと、ふたりの間をすり抜けて歩き出した。ジークとリックは顔を見合わせた。そして、すぐに小走りで彼女を追った。

「ますます、差を広げるわよ」

アンジェリカは、前を向いたまま口をとがらせた。

「アカデミーには行ってなかったけど、勉強してなかったわけじゃないぜ」

ジークも前を向いたままで反論した。そして、口の端を上げ、自信のほどをその顔に表した。

「ふ……ん。ならいいけど」

アンジェリカは軽く受け流した。

「なんだおまえ。信用してねえな！」

ジークは彼女に振り向き、大きな声で叫んだ。それでもアンジェリカは冷静だった。ちらりとジークに目をやると、つんとした言った。

「いずれ結果は出るわ」

「ホントにかわいくねえなっ」

「まあまあ。せっかく久しぶりに会ったんだから」

リックがなだめた。

「そういえばアンジェリカ。ちょっと背が伸びたんじゃない？」

アンジェリカは突然そう言われて、とまどいながらも、少しはにかんで見せた。

「休み前から2cmくらいかな」

「やっぱり?! そうかあ、成長期だもんね」

ふたりのやりとりの間、ジークはぼかんと口を開けていた。彼女の身長が伸びていることなど

、ジークは気づきもしなかった。それどころか、それを知ってもまだよくわからないでいる。そんな些細なことに気がついたリックに驚いた。しかし、それよりも、彼女が成長するというところに、なぜだか不思議な違和感を覚えていた。

「なに？」

視線を感じとったアンジェリカが、ジークを見上げながら目を細め、訝しげに尋ねた。

「んなもん、普通わかるかよ！」

ジークは再び前を向き、どたどたと大股で歩き始めた。

「なに怒ってるのかしら。相変わらずわけがわからない」

アンジェリカは口をとがらせた。リックに顔を向け、首をかしげて見せた。しかし、リックはただにこにここと笑顔を浮かべているだけだった。

玄関口をくぐると、その中はたくさんの生徒であふれていた。毎日のようにアカデミーへ来ていたアンジェリカも、これには懐かしさを覚えざるをえなかった。休み中は人もまばらで、こんな活気はなかったのだ。

「いいよね。こういう活気って。負けてられないなって気になる」

リックは鼻から息を吸い込み、小さく気合いを入れた。だが、ジークはあまり興味がないようだった。ジーンズのポケットに手を突っ込んだまま、ぶっきらぼうに口を開いた。

「そうかあ？ まあ俺は元々そこら辺にいる奴らには負けてないけどな」

「ちょっと違うような気がするけど」

リックは軽く首をかしげ、苦笑いをした。一方のアンジェリカは、冷めた目でジークを一瞥した。しかし、それとは逆に、口元はふいに緩みそうになる。彼女は慌てて口をとがらせ、それをごまかした。

ジークはまっすぐ前を向いたままで、そんなふたりの様子に気づいてもいなかった。

「あ……」

突然、彼は小さく声をあげた。そして、規則的だった足の動きが、前に踏み出すことを躊躇するように緩やかになった。

アンジェリカは、声につられて何気なく振り向いた。ジークは奥歯を強く噛み締め、ややうつむきながらも、ちらちらと前を気にしていた。前に目をやると、そこには同じようにうつむいているセリカが立っていた。彼女の顔には、暗い陰が差していた。

「なにか、あったの？」

初めはジークに尋ねたが、答えが返ってこなかった。続いて、反対側のリックを覗き込んだ。

「いや、僕の口からはちょっと……」

リックは横目でジークを気にしながら、苦笑いして首を傾げた。アンジェリカは、自分の知らないところで何かが起こったのだと察した。気にはなったが、ジークにも、リックにも、それ以上尋ねることはできなかった。

ジークは立ち止まっているセリカと無言ですれ違った。彼女の姿が視界から消えると、ゆっく

りと顔を上げ、ほっとしたように大きく息をついた。

「そういえば、あしたは試験だな」

唐突に、ややぎこちなく切り出すと、リックも慌ててそれに同調した。

「そうだったね。でも今回はペーパーだけだから心配はないよね」

彼の言葉で、アンジェリカは期末試験での出来事を思い出してしまった。きゅっと胸を締めつけられる。しかし、彼に悪気がないことはわかっていたので、あえて気がつかないふりをした。

だが、ジークは違った。

「おまえ、ケンカ売ってんのか？」

あからさまに不愉快だという表情を、リックに向けた。そのときようやくリックは気がついた。

「ごめん！ そういうつもりじゃなかったんだけど……。本当にゴメン！ アンジェリカもごめんね」

「あ、私は別に……」

アンジェリカは何と答えていいのかわからず、消え入りそうな声でそう答えることしかできなかった。ジークは謝られて、すっかり機嫌が直っていた。

「今度またVRMで対決することがあっても、この前のようなことにはならないぜ。ていうか、負けねえぜ」

初めはリックに向かって言っていたが、途中でアンジェリカに視線を移した。そして、強気にニヤリと笑ってみせた。彼はすっかりいつもの調子を取り戻していた。

アンジェリカは安堵した。それと同時に、負けず嫌いの性分が顔を出した。

「私だって、負けるわけにはいかないんだから」

まっすぐにジークを見て、きっぱりと言い放った。

「ずいぶん大口を叩いているな」

彼の背後から、冷たい声が降ってきた。あまり聞きたくなかった声だ。頭頂から首筋、背中へと、何か走ったような感覚に襲われた。奥歯に力を入れ、眉をひそめながら、ゆっくりと振り返る。

やはり、ラウルだった。

左脇に書物を抱え、無表情でジークを見おろしていた。

「おまえがそう簡単にアンジェリカに勝てるとは思えないがな」

「さあ、それはどうかな」

ジークは、ラウルの圧倒的な存在感に気おされながらも、負けじと必死に強気を保っていた。しかし、ラウルは気が抜けるほどあっさりとした返事をした。

「そうか。それは楽しみだ」

その言葉が本気なのか嫌味なのか、ジークにはわからなかった。感情がまったく読み取れない。難しい顔で考え込んだ。ラウルはその脇を追い越し、さっと行ってしまった。ジークは眉をひそめ、ラウルの後ろ姿を睨んだ。

「何しに来たんだか、アイツ」

「通りかかっただけでしょ」

アンジェリカは軽く答えると、急にジークに背を向けた。

「おい、どこ行くんだよ」

ジークの呼び声に、アンジェリカは顔だけ振り向き、睨みながら右手で上のプレートを指さした。

「……トイレか」

ふたりは並んで壁にもたれかかりながら、アンジェリカを待っていた。ジークは腕を組んで、何か考えごとをしているようだった。リックは彼の邪魔をしないように、おとなしく雑踏を眺めていた。

「担任って、ずっと変わらないものなのか？」

ジークが唐突に疑問を口にした。

「さあ……。でもなんで？」

リックはジークに振り向いた。

「なんでって、おまえはアイツが担任でもいいのか？」

「僕は別にイヤじゃないけど？」

「ああそうか。めでたいヤツだな」

ジークは乾いた笑いを浮かべると、投げやりに言った。

——ドドン！

突然、激しい爆音とともに大量の粉塵が舞い上がり、彼らの視界をさえぎった。ざわめきがそこから沸き上がる。誰も何が起こったのかわからなかった。

ジークとリックは嫌な予感がした。

「アンジェリカ！」

ジークは口に手の甲をあて、目を細めながら、粉塵の中へ飛び込んでいった。壁が崩れ、瓦礫が小さな山を作っている。その瓦礫の下に、誰かが倒れているのがうっすらと見えた。体の半分が瓦礫に埋もれているようだ。

「アンジェリカ?!」

ジークはその人影に駆け寄り屈み込んだ。しかし、それはアンジェリカではなくセリカだった。

「しっかりしろ！」

声を掛けながら、彼女の上に乗ったコンクリート片を取り除いていく。あとから駆けつけた生徒たちもそれを手伝った。

「こっちにもいるぞ！」

誰かが奥の方から叫んだ。ジークは「頼む」と言い残すと、声のする方へ飛んでいった。

「アンジェリカ！」

今度は確かにアンジェリカだった。体をくの字に折り曲げ、右の脇腹を両手で押さえている。そして、その指の間から鮮血が流れ、彼女のまわりに赤い水たまりを作っていた。

突然の出来事に、ジークは頭の中が真っ白になった。何が起きているのかわからなかった。何をすればいいのかわからなかった。世界が遠く離れていくようだった。誰かが「止血！」と叫ぶ声も遥か遠くに聞こえた。

「先生が来たよ！通して！」

人だかりの後ろで、リックが声を張り上げた。ラウルは生徒たちを強引に押しのけて現場に向かった。まずアンジェリカの元へ行き、傷口、脈などを、素早く診ていった。そして、勢いよく立ち上がると、持っていた担架のひとつをジークに投げてよこした。

「それでアンジェリカを私のところへ運べ」

ラウルはそう命令しながら、もうひとりの患者のもとへ向かった。

「ジーク、行こう」

リックに促されて、ジークは我にかえった。慌てて担架を広げた。

ジークとリックは、ラウルの医務室へアンジェリカを運び込んだ。セリカも他の生徒によって、ここに運び込まれた。

ジークたちは片隅で黙って突っ立っていた。クリーム色の薄いカーテンで仕切られた向こう側に、ふたつのベッドとラウルの影が見えた。ラウルは忙しく動きまわり、手際よくふたりの処置をしているようだった。

——ガラガラガシャン。

激しい音がして扉が開き、そこからサイファとレイチェルが姿を現した。それと同時に、仕切りの向こうからラウルが出てきた。

「アンジェリカは？！無事か？！」

サイファはラウルを目にすると、一目散に駆け寄った。

「ああ、命に別状はない。そのうち意識は戻るだろう」

ラウルは冷静にそう答えると、親指でカーテンの方を指した。サイファは急いでカーテンの内側へ入っていった。レイチェルはラウルをじっと見つめていた。その大きな瞳からは今にも涙がこぼれそうだった。ラウルがその細い肩に手をのせると、彼女はこくりと頷いた。ゆっくりとカーテンをくぐり、アンジェリカのベッド際へ歩いていった。

「しばらく待っていてくれ」

ラウルはカーテン越しに声を掛け、医務室から出ていった。

ジークは、わずかに開いたカーテンの隙間から、ベッドに横たわるアンジェリカの姿を見た。もとより白い肌が、血の気を失い、よりいっそう白さを増していた。まるで人形のように、まったく生気が感じられなかった。ジークの鼓動が不安でどんどん大きくなっていった。

——ラウルが大丈夫だと言っていた、大丈夫だ、大丈夫なんだ……。

懸命に自分にそう言い聞かせた。そうしなければ自分を保つことができなかった。

長い沈黙が続いた。

ジークには、外のざわめきが別世界のことのよう聞こえていた。

「どうしてこんなことに……」

ふいに沈黙が破られた。サイファは胸の奥から絞り出すように言った。やり場のなくやしさと悲しさをその言葉に込めた。

ジークは現実に戻された。そして、ある考えが彼を支配し始めた。こぶしに力を入れ、固く握りしめる。うつむいたその額に汗がにじんだ。

「俺のせい……、かも、しれない」

こらえきれなくなって、途切れ途切れに言葉を吐いた。

「君のせいだとは思っていないよ。いつでもどこでも一緒というわけにはいかないだろう」

カーテン越しに聞こえたサイファの声は、いたって冷静だった。しかし、反対にジークの感情は高ぶっていた。胃の中で何かが暴れまわるような気持ち悪さを感じ、少し前かがみになった。

「俺がセリカを怒らせたからだ。だから……」

「まさか！いくらなんでもそんなムチャクチャなこと……」

リックは言葉を詰まらせた。「ありえない」と断定することができなかった。ただ「あってほしくない」と願うだけで精一杯だった。

「どうやらおまえのせいではないようだ」

ジークは驚いて顔を上げた。いつの間にかラウルが戻ってきていた。

シャッと軽い音を立ててカーテンが開いた。そこからサイファとレイチェルが姿を現した。

サイファが何かを言いかけたが、ラウルがそれを遮った。ふたりにソファを勧め、自分自身も椅子に腰を下ろした。そして、腕を組み、静かに説明を始めた。

「状況から判断するとふたつのことがわかる。セリカがアンジェリカを刺したこと、それに抵抗するためにアンジェリカがとっさに魔導の力を暴発させたこと。このふたつはほぼ間違いないだろう」

サイファは、食い入るようにラウルを凝視しながら、努めて冷静に尋ねた。

「状況というのは？」

「ひとつは、セリカがナイフを握っていたこと。そしてそのナイフが著しく黒く焦げていたこと。もうひとつは、アンジェリカの足場だけ残し、まわりの床がえぐれていたこと。アンジェリカ自身もナイフの傷以外は受けていない。最後に、セリカの損傷は体の前面のみだということ。それも主に腕だ」

サイファは納得したように頷いた。

「でも、どうしてセリカさんは……」

レイチェルは、今にも泣き出しそうな震える声でつぶやいた。ラウルはそれに答えるように、

話を続けた。

「今しがた、彼女の家に連絡を入れたのだが、彼女の祖父の様子普通ではなかった。連絡を受けても驚きもせず、まっさきにアンジェリカの生死を確認してきたのだ。そして無事だとわかると、明らかに落胆したような返事をしていた」

「じゃあ、セリカはおじいさんの命令で……？」

信じられない気持ちを含みながら、リックはおそるおそる尋ねた。

「事態は、それよりももっと深刻かもしれない」

ラウルは不吉な言葉を返した。

「今さっき、ざっと調べてみたのだが、彼女の祖父は催眠術が使えるらしいな。ふたりきりになったとき、何らかのアクションを起こすようにインプットするというのは常套手段だ」

リックはその話を聞きながら、わずかに首をかしげた。

「もしそうだとすると、セリカのおじいさんが、アンジェリカに何の恨みがあるんですか？」

ラウルはまっすぐサイファを見た。ふたりの視線が絡み合う。サイファはその視線に何かを感じとった。

「話してくれ。彼らには、私たちのことはだいたい話してある。心配は無用だ」

サイファに促され、ラウルは視線を落としてから口を開いた。

「セリカの父親は十年前に亡くなっている。アンジェリカが生まれた3日後だ」

「それって、まさか……」

レイチェルは目を見開いて、ラウルを見た。そして、そのままの姿勢で硬直した。彼女の顔から徐々に血の気が引き、小さな唇が小刻みに震え始めた。

サイファは、横にだらりと放り出された彼女の手を取り、自分の膝の上に乗せた。そしてその上に、自らの手を重ねた。彼女を落ち着かせたかったのと同時に、そうすることで彼自身も心を鎮めたかったのだ。

「まだ私の憶測でしかない。あとで彼女の祖父に直接聞いてみるが、そうだとすると素直に答えるとは思えないな」

ラウルはやや前かがみになり、まっすぐにサイファを見た。そして、重い声でつけ加えた。

「長い一日になるかもしれない」

サイファもまっすぐに視線を返し、表情を引き締め目で頷いた。それと同時に、膝に乗ったレイチェルの手に、微かな力が入るのを感じた。彼は、無言で彼女を抱き寄せ、その頭に頬を寄せた。

ジークとリックは、三人の間に入り込む余地を見つけないことができず、ただその場に立ちつくした。

24. 10年前の傷跡

応急処置の後、セリカは別室に移された。アンジェリカと同じ部屋に置いておくのは危険だというラウルの判断だった。

ジークは、セリカのことにも心配ではあったが、やはりアンジェリカのそばを離れることはできなかった。リックとともに、医務室の隅で立ったまま彼女を見守っていた。近くに行きたい気持ちはあったが、彼女の家族に遠慮してした。

コンコン――。

医務室の扉をノックする弱い音が聞こえた。ラウルが扉を開けると、そこにはくたびれた白衣を身にまとった、年配の医者らしき人物が立っていた。小柄で白髪、背中もやや丸くなっている。医者にしては頼りなく見えるとジークは思った。

ラウルはその男に、二、三の言葉をかけると、持っていたカルテを手渡した。男はカルテに目を通すと、小さく二度うなずいた。そして、ラウルに短く何かを言うと、その場を立ち去った。

ラウルは静かに扉を閉めた。

「ああ見えても優秀な医者だ。セリカの方は彼に任せることにした」

それでもジークとリックに安堵の表情はなかった。

サイファはアンジェリカのベッド脇に座り、彼女をじっと見守っていた。レイチェルも彼と並んで座り、アンジェリカの手を優しく握っていた。心配そうに顔を曇らせ、祈るように右手を胸に当てている。

「サイファ」

ラウルは後ろから呼びかけた。サイファは表情を引き締め、振り向いた。ラウルは腕を組み、目でこちらに来るよう合図をした。サイファはそれに応じ、大きな足どりでラウルへと向かった。レイチェルは、不安げにサイファの背中を目で追った。

ラウルとサイファは互いに顔を近づけ、小声で言葉を交わした。その話の途中、サイファは何度か小さく頷いていた。そして、ふたりで連れ立って足早に出ていった。

「お役所仕事があるのよ。ごめんなさい」

レイチェルはジークたちに説明した。ふたりに心配させまいとしてか、無理に笑顔を作っている。

「いえ……」

ジークはそう返事をするだけで精一杯だった。彼女の健気な様子に、胸が詰まる思いだった。

彼女のいう「お役所」とは、サイファの勤めている魔導省保安課のことだった。アカデミー内で起こったこととはいえ、これほど大きな事件を放置しておくわけにはいかないのだろう。サイファも責任ある立場として、また関係者として、顔を出さざるをえない状況であることは想像

がついた。

レイチェルは、アンジェリカの手を両手で包み込んだ。沈痛な面持ちで、血の気のない顔を見つめている。レイチェルの顔色もショックと疲れで、かなり白くなっている。ジークはレイチェルの方も心配になってきた。

ふと気がついて、レイチェルはジークたちに振り返った。

「おふたりとも、もう帰ってもいいのよ。いろいろとありがとうございました」

そう言って、丁寧に深々と頭を下げた。ジークはあわてた。

「いえ、あの、俺たち、ここにいたいんです」

「そうです。このまま帰るなんて出来ません！」

リックも懸命に力を込めて言った。レイチェルの表情が柔らかく緩んだ。

「では、せめて座ってください」

ふたりは促されるままに、アンジェリカのベッドの隣に腰を下ろした。

近くで見るアンジェリカは、ますます人形のようにだった。肌だけではなく、唇さえも色をなくしていた。顔も体も、微動すら感じられない。息をしているのかさえわからなかった。そして、透明な管につながった針が、彼女の左腕の内側に刺されたまま、テープで固定されていた。その部分は赤紫に変色し、やや腫れているように見えた。それがあまりにも痛々しくて、ジークは思わず目をそらした。そして、爪が食い込むくらいにこぶしを強く握りしめ、奥歯を噛みしめた。

そのまま、どれくらいの時間が経っただろうか。その場にいた誰も口を開かなかった。時間が止まったかのように続く沈黙。ときどき聞こえる衣擦れの音だけが、かろうじて三人を現実世界につながり止めていた。

ガラガラガラ――。

ゆっくりと入口の扉が開いた。

ラウル、続いてサイファが入ってきた。サイファはレイチェルのそばまで来ると、片膝をつき、彼女と視線を合わせた。

「相手のご家族の方が見えたそうだ」

静かに、しかしはっきりとした口調で言った。その目はまっすぐレイチェルを捉えていた。

レイチェルは小さく頷いて立ち上がった。その張りつめた表情には、先ほどまでの弱々しさは感じられなかった。

「すまないが」

レイチェルに見とれていたふたりに、サイファは重々しく声を掛けた。ふたりははっとしてサイファに振り向いた。

「私たちが戻るまで、アンジェリカについていてやってくれないか」

「はい！ 任せてください！」

リックは力を込めて返事をした。ジークは真剣な表情で、こくりと首を縦に振った。

「ありがとう」

サイファはにっこりと笑いかけた。だが、すぐにけわしい表情に戻った。

「行くか」

ラウルを見上げ、レイチェルの肩に手をまわした。三人は互いに顔を見合わせると、連れ立って医務室をあとにした。

王宮の地下へと続く長い階段を下り、三人は大きく重厚な扉へと辿り着いた。ラウルはその中央に両手をあて、ゆっくりと押し開けた。その向こう側には薄明かりが灯っていた。

「娘は?!」

セリカの母親と思われる女性が、ソファから勢いよく立ち上がった。

「まだ会わせることはできない」

ラウルは静かに言った。

部屋にいたもうひとりの人物——セリカの祖父は、座ったまま上目遣いにラウルを睨みつけた。そして、順に入ってきたサイファ、レイチェルへと視線を移していった。

サイファとレイチェルは、セリカ側の家族に一礼すると、向かいのソファに腰を下ろした。セリカの母親もそれにつられて、崩れるように腰を下ろした。

「今回の事件は、セリカ本人の意思で起こしたものではないと、私は考えている」

ラウルは、ソファに座っている老人を目だけで見下ろした。老人は、頭を斜めに持ち上げ、鋭い視線を返した。

「ウォーレン＝グレイス。数少ない催眠術師のひとりだな」

「もう引退したがな」

静かな言葉のやりとりの間、セリカの母親はただひとり、落ち着きのない表情を浮かべていた。訝しげな顔を、ラウル、そして義父のウォーレンへと向けた。

「おまえがセリカに催眠術をかけ、アンジェリカを襲わせた」

ラウルはウォーレンを冷たく見下ろして言った。

「ふっ」

ウォーレンは小さく鼻で笑った。

「言い掛かりも甚だしい」

「動機は十年前」

ラウルはウォーレンの言葉をさえぎるように、声を大きくして続けた。

「息子のリカルド＝グレイスをラグランジェ家へ刺客として差し向けた。目的は生後間もないアンジェリカ＝ナル＝ラグランジェ抹殺のためだ。しかし、目的を遂げる前に、レイチェル＝エアリ＝ラグランジェに見つかってしまい、彼女の逆襲を受けた。リカルドはなんとか家へ辿り着いたが、そのときの傷がもとで三日後に死亡」

セリカの母親は、ラウルに顔を向けたまま凍りついた。その目は大きく見開かれ、膝の上ののせられた手は小刻みに震えていた。

「今回の事件は、十年前の復讐のために企てられたのだろう」

ラウルはウォーレンをじっと見据えて言った。しかし、彼はどっしりと腰を下ろしたまま、まったく動揺した様子を見せない。

「息子は事故で死んだ。おまえが何を言っているのか、さっぱりわからんな」

「おまえが認めなければ、セリカが罰を受けることになるが」

「脅しか。だが、どう言われても、違うものは認めようがない。だからといって、あの子が自分の意思でやったとは限らんだろう。誰か、他の催眠術師に操られていたのかもしれない」

ウォーレンがわずかに口の端を吊り上げたのを、ラウルは見逃さなかった。

「他の人間には動機がない」

「動機ならワシにもない。息子が死んだのは事故だ」

——ガタン！

今まで黙って座っていたレイチェルが立ち上がり、ローテーブルの上に右ひざをのせた。

「私が、殺したのよ」

冷たく虚ろな目でウォーレンを見下ろした。そして、今度は左ひざをのせた。そのままドレスを引きずりながら、彼の目の前まで進んでいく。

「あなたの息子さんを殺したのは、私です」

そう言って、右手を自らの胸に当てた。口を真一文字に結ぶウォーレンに、覆いかぶさるように屈みこみ、顔を近づけた。

「レイチェル！ もういい！」

サイファはしばらく成り行きを見守っていたが、耐えかねて声を上げた。手を伸ばし、彼女を引き戻そうとする。しかし、その手をラウルが強く掴んで止めた。サイファはキッと彼を睨みつけた。ラウルは彼女を利用してウォーレンから真実を引き出そうとしている。そのことはわかっていた。だが、このままではレイチェルがどうなるかわからない。それでも、これしか方法がないとしたら……。サイファは唇を噛みしめた。そして、すぐにでも行動を起こせるよう構えたと、彼女とウォーレンの一挙手一投足を凝視した。

「私が憎いのでしょうか？」

レイチェルは無表情のまま、さらに煽った。彼女の口から漏れた息が、ウォーレンの立派な口ひげを揺らした。

「娘を傷つけただけでは、満足なんて出来ないでしょう？」

ウォーレンの肩が小さく揺れた。

「詳しく話して差し上げましょうか。あの日あの部屋で起こったことを」

冷たい声と挑発するような視線が、ウォーレンの脳を凍らせた。瞬きすら忘れ、眼前のレイチェルをその瞳に映し続けた。

——パサッ。

レイチェルの髪が、肩からはらりと落ち、ウォーレンの頬をかすめた。その感触が、彼を現実に戻した。同時に、心の留め金が弾け飛んだ。

ウォーレンは顔を歪めると、勢いよく引いた右手に、白い光球を作った。間髪入れず、レイチ

エルに向けて放とうとする。その瞬間、横からの光が、彼を弾き飛ばし、壁に叩きつけた。その光はサイファとラウルが同時に放ったものだった。

ウォーレンは小さくうめき声を上げると、その場に倒れ込んだ。レイチェルは、糸が切れたマリオネットのように、テーブルの上に崩れ落ちた。

「レイチェル！」

サイファはテーブルに飛び乗り、彼女の上半身を抱き起こした。頬に手を当て、心配そうに覗き込む。レイチェルはぼんやりと天井を見つめていた。その瞳から一筋の涙が流れ落ちた。サイファは親指で彼女の目尻を拭った。そして、彼女を強く、優しく抱きしめた。

ラウルはウォーレンへと歩み寄った。

「もう、言い逃れは出来ないな」

ウォーレンはよろよると体を起こし、ラウルを睨みつけた。ラウルは腕を組み、冷たい目で見下ろした。

「知っていると思うが、催眠術を使つての犯罪は重罪だ」

「……化け物め」

ウォーレンがそう吐き捨てたのと同時に、重厚な扉がゆっくりと開いた。そこから三人の男が入ってきた。彼らはサイファに一礼すると、ウォーレンへと歩いていった。そのうちのふたりがウォーレンを両側から抱えて立ち上がらせると、もうひとり正面から呪文を唱えた。指先から現れた白い光の糸が、ウォーレンの両手を縛り上げた。三人は、そのまま彼を取り囲み、連行していった。

残されたセリカの母親は、凍りついた表情でウォーレンの後ろ姿を見送っていた。

「何も知らなかったのだな」

ラウルの言葉に、彼女は眉根を寄せて頷いた。

「十年前のことは、事故でないとは思っていましたが。お義父さまが何かを隠していることも感じていました。ただ、いくら聞いても答えてはくれなかった……」

言葉の最後がかすれた。彼女は涙をこらえ、肩を小刻みに震わせた。

「来い。セリカに会わせる」

ラウルは開け放たれた扉へ足を進めた。彼女も立ち上がり、弱々しい足どりでその後続いた。

ラウルは追い越しぎわに、サイファの背中を軽く叩いた。

25. 新しい傷

「遅いよな」

ジークが長い沈黙を破った。向かいのリックは、彼の表情を盗み見ると、すぐに目を伏せた。

「心配ないよ。ラウルもいるんだし」

前向きな言葉とは裏腹に、その声は弱々しく説得力がなかった。

ジークはアンジェリカの寝顔に目をやった。もう何回目だろうか。アンジェリカを見て、下を向いて——ずっとその繰り返しだった。彼はぼんやりと思った。彼女の顔をこんなにじっくり眺めたのは今日が初めてかもしれないと。

「このままずっと起きないなんてこと、ないよね」

さっきよりもいっそう力のない声で、リックがつぶやいた。ジークはカッとしてその声に振り向いた。

「ラウルが言ったこと聞いてなかったのかよ。大丈夫だって言ってただろうが」

腹の奥から低い声を絞り出し、怒りを抑えながら、その言葉を噛みしめた。眉間にしわを寄せると、うつむいたリックを睨みつける。

リックは少し顔を上げると、不安げに眉をひそめた。

「そうじゃなくて……。前にサイファさんが言ってたこと。眠ったままなかなか起きなくなるって……」

ジークは小さく息をのみ、動きを止めた。あのとときの、息を詰まらせたサイファの表情が頭をよぎった。顔をこわばらせ下唇を噛むと、再びアンジェリカに目を向けた。

——ガガガッ。

静寂の中、突如、濁った音が響き渡った。ジークのビクリとして振り向いた。それは、隣のリックが立てた音だった。彼は椅子から立ち上がり、ジークに笑いかけていた。

「何か食べるものを買ってくるよ。朝から何も食べてなかったよね」

ジークは、そう言われて初めて自分の空腹感に気がついた。リックはカーテンをくぐろうとして動きを止めた。

「そういえばさ。言葉をかけるとか、手を握ってあげるとか、そういうことがいいらしいよ」

「は？」

唐突なリックの言葉に驚き、ジークは振り返った。それと同時に、リックの手から落ちたカーテンが、ふたりの間を仕切った。揺れるクリーム色の布の向こうで扉の開閉する音がして、リックは医務室を出ていった。

ジークは口を開けたまま呆然としていた。ふと我にかえり、ついさっきの記憶を反芻する。頭の中で、リックの言葉が再び流れた。

「……わけわかんねえやつ」

そうつぶやくと、背もたれに体を預けた。その動作の中、視界の端にアンジェリカが映った。彼は、自分の顔が熱くなるのを感じた。ジークは彼女の閉じられたまぶたを横目で見つめた。

「いつまでも寝てると、すぐに追い越すからな」

小さな声でそう言うと、手の甲でアンジェリカの頬を優しく二回たたいた。彼女の頬は少し冷たかった。

しばらくしてリックが戻ってきた。

「どう？」

カーテンをくぐり椅子に座ると、買ってきたサンドイッチのひとつをジークに手渡した。

「いや、なんとも……」

ジークはリックと目を合わせずに、サンドイッチを受け取った。そして袋を開けると、勢いよくかぶりついた。リックもそれに続いてサンドイッチを口にした。

ふたりは無言で食べ続けた。

「パンくず、こぼしてる」

微かに聞こえたかぼそい高音。ふたりはパンを口に入れたままで、すべての動きを止めた。そして、同時に声のした方へ振り向いた。

「アンジェリカ！！目が覚めたか！！大丈夫か！！平気か！！」

ジークは身を乗り出して、黒い瞳を確認しながら一気にまくしたてた。

「ちょっと、口から食べかけのものを飛ばさないでよ」

声こそ弱かったが、彼女の口調はいつもと変わらなかった。

リックは慌てて口の中のサンドイッチを流し込んだ。

「でも、ホント大丈夫？痛む？」

そう言って、少し覗き込むようにして、彼女の表情を窺った。

「私、刺されたんだっけ」

アンジェリカは抑揚のない声でそう言うと、ベッドに横たわったまま頭だけを動かした。ジーク、リック、点滴、そしてベッドまわりをゆっくりと見渡していく。

「ラウルの医務室ね、ここ。……ラウルは？」

ジークは答えに詰まり、難しい顔をした。だが、リックはすぐに明るい声で答えた。

「ちょっと前までいたんだけど、何か用があったみたいで出ていったんだ。ご両親も一緒だよ。ご両親、ずっと付き添ってくれてたよ」

「リックも、ジークも、ずっといてくれてたんだ」

アンジェリカは天井をじっと見ながら、無表情でつぶやくように言った。

「……ありがとう」

彼女はリック、ジークへと、順番に目を移した。そして、微かに笑顔を見せた。

ジークはほっとすると同時に、胸が締めつけられるように感じた。

ガラガラガラ――。

扉が開く音。続いて複数の足音が聞こえた。

リックは椅子から飛び上がるように立ち上がると、カーテンの切れ目から飛び出した。

「アンジェリカが目を覚めました！」

リックのその声のあと、小走りに駆ける音が近づいてきた。そして、シャッと軽い音とともに、カーテンが勢いよく開いた。

そこに姿を現したのは、サイファとレイチェルだった。ふたりの表情には、焦りと不安が入り混じっていた。しかし、アンジェリカが目が開いているのを確認すると、安堵の息をもらし、そこでようやく柔らかい表情を見せた。

アンジェリカは両親と目を合わせると、少しためらうように笑った。

「よかっ……た……」

レイチェルは言葉を詰まらせ、瞳を潤ませた。

ジークは椅子から立ち上がり席を譲った。サイファとレイチェルは、両側からアンジェリカの枕元に進むと、腰を下ろし、それぞれ彼女の手を取った。

「ごめんね」

レイチェルは、アンジェリカの手を両手で強く包み、それを額につけると目を閉じた。その姿は祈っているようにも見えた。サイファはアンジェリカの前髪をそっとかき上げ、にっこりと微笑んだ。

「彼らを送ってくるよ」

柔らかい声でそう言って立ち上がった。アンジェリカもにっこり微笑み、こくりと小さく頷いた。

「すっかり遅くなってすまない。門のあたりまで送るよ」

サイファはジークたちに振り返って言った。ふたりは無言で頷いた。

「またあしたね」

リックは軽く右手を上げ、アンジェリカに明るい声を投げかけた。アンジェリカは、レイチェルの助けを借りて、上半身をわずかに起こした。そして、にっこりと右手を上げて応えた。ジークも少し照れくさそうに視線を外しつつも、同じく右手を上げた。

「やはり、セリカの祖父が仕組んだことだったよ」

暗く静まり返った廊下に足音を響かせながら、サイファが声をひそめて言った。

「セリカはどうなるんですか？」

リックもまわりを気にしながら、小声で尋ねた。

「彼女も被害者だ。罪に問われることはないだろう」

それを聞いたふたりは、同時に軽く息をもらし表情を緩めた。

「君たちには本当に申しわけないと思っている。我々のことに巻き込んでしまった」

「巻き込まれたなんて、思っていません」

リックは即座に切り返した。いつになく、強くはっきりとした口調だった。ジークは少し驚きながらも、それに同意して頷いた。

「アンジェリカは大切な友人です」

リックはそうつけ加えた。きっぱりと言い放たれたその言葉に、ジークはただ頷くことしか出来なかった。彼はそんな自分を少し情けなく思った。

「君たちのような友人がいて、本当に良かった」

サイファはふたりに微笑んだ。

三人は王宮からアカデミーを通り、外へと出た。ひんやりした風が、頬を撫で、髪を揺らした。

ジャッ、ジャッ——。

校庭の薄い砂の上を、音を立てて歩いていく。門のところまで来ると、サイファは足を止め、ふたりに振り向いた。

「申しわけないが、私は戻らなければならない。ここで失礼するよ」

サイファは笑顔を作った。そして、少し真剣な顔になり、ふたりをじっと見つめた。ジークも、リックも、その瞳の強さに気おされ、一言も発することが出来なかった。

「これから、私はアンジェリカに事件の顛末を伝えなければならない」

重い言葉だった。

「あした、また来てもらえるか？」

「……はい！」

少しの間のあと、ふたりは同時に返事をした。サイファはわずかに口元を緩め、目を細めた。

「ありがとう」

そして、ジークとリックを両脇から抱きしめた。

魔導省の塔。その最上階の一室にあるサイファの部屋。ラウルは明かりもつけずに、窓際に立ち外を眺めていた。

ガチャ——。

扉が開き、そこからサイファが無言で歩み入ってきた。奥まで進むと椅子に座り、背もたれに身を預けた。椅子の軋む音が、静まり返った部屋に響いた。

「すまなかったな。席を外してもらって」

サイファは、ラウルに背を向けたまま静かに言った。ラウルも振り返ることなく口を開いた。

「アンジェリカの様子はどうだった」

「泣くでもなく、動揺するでもなく、ただ無表情で聞いていたよ。……だからこそ、怖いよ」

サイファは目を伏せた。そして、軽く息を吐くと、再び視線を上げた。

「レイチェルはどうだ」

ラウルは腕を組み、外を眺めながら、低い声で言った。サイファは上を向いたまま目を閉じた。

「アンジェリカの前では気丈に振る舞っていた。だが、自分を責めているよ。すべては自分のせいだと思っているようだ」

そして、ゆっくりと目を開くと眉根を寄せた。

「十年前、か……」

そうつぶやき、遠くを見やった。

「だが、まだすべては明らかになってはいない」

ラウルのその言葉に、サイファは息を止めた。ラウルは淡々と続けた。

「あれもウォーレンが催眠術を使い、息子を仕向けたとも考えられる」

「……そうだな。そして、ウォーレンにそれを命じたのはラグランジェ家の人間だろう」

そう言い終わるや否や、サイファは椅子を半回転させた。そして、ラウルの大きな背中に、鋭い視線を投げつけた。

「今さら蒸し返す気か？ レイチェルを傷つけるだけだ」

「そのつもりはない。安心しろ」

ラウルはサイファに振り返った。窓枠にもたれかかり、まっすぐに彼の目を見つめた。サイファも負けじと強く見つめ返した。いや、見つめ返すというよりは、睨んでいるという方が近かった。

「私は時折、おまえのことがたまらなく憎くなる」

サイファは低い声で言った。その顔には複雑な表情を浮かべている。しかし、ラウルは表情ひとつ変えなかった。

「そうか」

その一言だけ口にする、扉へと足を進めた。そして、ドアノブに手をかけたところで動きを止めた。

「アンジェリカの傷だが」

ラウルは背を向けたまま、静かに口を切った。サイファはアームレストをぐっと掴んだ。けわしい顔で次の言葉を待つ。

「多少、跡が残る」

ラウルは淡々と言った。しばらくそのままで待ったが、サイファは何の反応も返さなかった。ただ、沈黙が続くだけだった。ラウルはちらりと振り返り、椅子に座る彼の横顔を一瞥した。そして、扉を開けると部屋を出ていった。

サイファは奥歯を食いしばり、右足で床を蹴った。

26. 後味の悪い別れ

あれから十日が経った。

アンジェリカはまだアカデミーへは来ていない。ジークとリックは毎日アカデミー帰りに、そしてアカデミーのない日もわざわざ出かけ、彼女の家へ様子を窺いに行っていた。

「今日も来てくれたんだ」

淡々とした声。アンジェリカは上半身をベッドから起こした。そして、薄いレースのカーテン越しに、ふたりに微かな笑顔を見せた。

「おまえが来ないからだろ」

ジークはぶっきらぼうにそう言うと、乱暴にカーテンを捲し上げた。仏頂面で中に入り、ベッドの隣の椅子にどっかりと腰を下ろす。その隣に、リックも静かに座った。

初めは何もかもに面くらった。だが、無駄に広い部屋も、天蓋つきのベッドも、十日もすればすっかり見なれる。もうふたりとも、そわそわしたり緊張したりはしていなかった。

「おまえ、いくつ持ってるんだ。パジャマ」

ジークはアンジェリカをじっと見ていたかと思うと、唐突にそんな質問を投げかけた。

「うん。毎日違うもの着てるよね」

リックも興味ありげに少し身を乗り出した。

「さあ。もともとはそんなになかったはずなんだけど。最近は毎日新しいものなの」

アンジェリカは顔を下に向け、自分が身につけているものをじっと見つめた。今日はフリルのついたピンクのネグリジェだった。

「気を遣ってくれているのかしら」

ふと寂しそうに笑い、小さな声でつぶやいた。

「あのなあ。そういうのは気を遣ってるとは言わねえんだよ」

ジークは少し眉根を寄せて、強い調子で言った。アンジェリカは目を丸くしてジークに顔を向けた。ジークは真剣な、少し怒ったような顔で、まっすぐにアンジェリカを見つめていた。

「おまえの方が気を遣ってるんじゃないのか」

「そうそう。素直にありがとうって思えばいいんだよ。ご両親だってアンジェリカに喜んでほしいんだから、ね」

リックは横からにっこりと笑いかけた。

アンジェリカは少し驚いたような顔で聞いていたが、やがて恥ずかしそうにはにかんだ。

アンジェリカはアカデミーの出来事やラウルの様子を聞いたがった。リックは彼女の知りたいたことをひとつひとつ丁寧に話した。ジークはときどき割って入るものの、ほとんど聞いているだけだった。こういう状況説明を伴う話をするのは苦手なのだ。

「……まだ、来られねえのか」

ふたりの会話の切れ目に、ジークは少しためらいがちに口を開いた。リックは何か言いたげな顔で眉をひそめると、ジークの脇腹をひじでつついた。そして、今そんなことを言わなくても、と表情と口の動きで合図を送った。しかし、ジークはアンジェリカを見つめたまま、リックの腕をこっそり払いのけた。そんなふたりのやりとりを見て、アンジェリカはこらえきれずに吹き出した。

「来週から行っていいって、お許しが出たわ」

リックは当のアンジェリカ以上に、嬉しそうに顔を輝かせた。

「良かった！ アンジェリカがいないと、ジークがつまらなそうなんだよね」

「おい！ 俺のことを言うなよ！」

ジークは慌てふためいてがなり立てた。次第に彼の耳は赤くなっていった。しかし、否定はしなかった。

「そういえば、試験の結果が出たんじゃない？ どうだったの？」

アンジェリカは、思い出したようにふたりに尋ねた。

ジークは横目でちらりと彼女を見たが、すぐに視線をそらした。

「おまえには関係ないだろ」

その表情にわずかに陰を落とし、低い声で言った。

「なによそれ」

アンジェリカは不愉快さをあらわにして口をとがらせた。リックはジークに振り向き、驚いて大きな声を上げた。

「なんで？！ 一番だったのに！」

「不戦勝なんて意味ねえんだよ！」

ジークは間髪入れずに切り返した。

「不戦勝？」

アンジェリカがぎょとんとしながら尋ねた。一方のリックは、にっこりと彼に笑いかけていた。

ジークはふたりの視線から逃れるように下を向き、奥歯を噛みしめた。そして、再び耳が熱くなっていくのを感じた。

「ねえ、不戦勝って？」

アンジェリカは少し首をかしげた。

「あ、そうだ。今日のノートのコピー」

ジークはわざとらしく話題をそらすと、リックの太ももを手の甲で軽く二度たたいた。リックは促されるまま、鞆の中を探し始めた。

「ちょっとごまかさないでよ」

「はい、これ」

ジークに食って掛かろうとしたアンジェリカに、リックは紙の束を手渡した。

「……ありがとう」

アンジェリカは小さな声でお礼を言った。話の腰を折られ、勢いを削がれてしまった。ごまかされたような気もしたが、それ以上ジークを追求することをやめた。

「アンジェリカなら、これくらいの遅れなんてすぐに取り戻せるよね。頑張っ！ 本当、嬉しいよ。アンジェリカだけでも戻ってきてくれるんだから」

リックはにっこりと笑った。

「だけでも？」

ジークとアンジェリカが同時に同じ言葉を発した。

「それってどういう意味だよ」

ジークは眉をひそめて尋ねた。

「ああ、セリカはやめちゃうんだよね」

リックはあっさりと言った。

ジークもアンジェリカも声が出なかった。

ジークはごくりと唾を飲み込むと、ようやく口を開いた。

「やめるって……。アカデミーをか？」

「そう」

「バカかおまえ！ そんな大事なことは早く言えっつーの！！」

「あ、ごめん」

ジークのあまりの勢いに気おされ、リックは目をぱちくりさせ体を後ろに引いた。

「くそっ」

ジークは小さく舌打ちすると、勢いよく立ち上がり、走って部屋を出ていった。アンジェリカとリックは呆然と彼の後ろ姿を見送った。

「リック、本当なの？」

アンジェリカの声には、驚きと疑いの色が含まれていた。

「うん、本人から聞いたから。もう決意を固めてるみたいだったよ」

「そう……。ジークは止めに行ったのよね」

「多分ね」

アンジェリカは目を伏せた。そしてゆっくりと長い瞬きをした。

「止められるのかしら」

「アンジェリカはどっちがいいの？」

「やめるべきじゃないと思うわ。でも……」

アンジェリカはベッドの上で膝を抱えた。そして、無表情で淡々と続けた。

「やめるって聞いて、私は少しほっとした」

感情を押し込めたアンジェリカの横顔を見ながら、リックは穏やかに微笑んだ。

「自分を責めることはないよ」

ジークはアンジェリカの家を飛び出し、全速力でアカデミーの前までやってきた。

「くそ、まだ遠いぜ」

息をきらせながら、アカデミーの奥に目をやった。セリカが入院しているのは、アカデミーを抜けた王宮側の一室だ。ジークは深呼吸をして息を整えると、再び走り出した。

薄暗く長い廊下の遠くに、ふたつの人影が表れた。そのうちのひとつはセリカだった。ジークは彼女の少し手前で足を止めた。肩を大きく上下させる彼を見て、セリカは目を丸くした。

「どうしたの？ 怖い顔をして」

彼女は自分の胸元に手をやった。その袖口からは白い包帯がのぞいた。

「アカデミーをやめるって、本当か？」

ジークはまっすぐセリカを見据えた。セリカもまっすぐに視線を返した。

「お母さん、先に行って。門のところで待ってて」

彼女はジークの方を向いたまま、隣の母親に言った。母親は少し不安げにセリカを見上げたが、彼女の言う通りにその場を立ち去った。

足音が十分に小さくなったのを確認すると、セリカは大きく深呼吸した。

「今日で退学することにしたわ」

五歩先のジークに届かせるように、はっきりとした声で答えた。そして、にっこりと笑って見せた。

「逃げんのかよ。四大結界師になりたいっていう夢はどうしたんだよ」

怒りを含ませた低い声。ジークは彼女を睨みつけた。しかし、セリカは笑顔を崩さなかった。

「そうね。もう逃げることにしたの。私の夢なんて、その程度のものだったってことね」

「……………」

ジークが返す言葉に詰まっていると、セリカがくすくすと笑い出した。彼は呆気にとられた。

「ごめんなさい。あなたが引き止めに来てくれるなんて思わなかったから。嬉しくてつい……」

セリカは笑いながら、目尻を濡らしていた。ジークは彼女から目をそらした。

「俺はライバルが減ってくれてありがたいけどな」

セリカは精一杯の笑顔を見せた。

「良かった。最後にあなたの役に立てて」

ジークは下唇を噛んでうつむいた。

「やめんなよ。後味悪いだろ」

「ごめんなさい。もう決めたことなのよ」

セリカは少し真面目な顔になり、それから寂しそうに笑った。

「今度どこかでばったり会ったら声かけてよね」

ジークは返事も出来ず、ただうつむいたままだった。

「それじゃ」

セリカは表情を堅くすると、一步一步、踏みしめるように歩き出した。ひとけのない廊下に、彼女の足音だけが響く。ジークの左手とセリカの左手が、かすめるぎりぎりですれ違った。触れ

てはいなかったが、ジークはその手の甲に確実に彼女を感じ取った。次第に遠のく足音を聞きながら、言葉にならないもやもやしたものが募っていった。

「おい！」

こらえきれなくなったジークは、自分でもわけのわからないまま、ありったけの声を張り上げセリカを呼び止めた。そして、勢いをつけ振り返った。

セリカは歩みを止めた。右足を踏み出したまま、固まったように動かない。

ジークは彼女を呼び止めておきながら、次の言葉が出てこなかった。

長い、長い沈黙が流れる。時間が止まったように、ふたりとも微動だにしない。

「あ……」

沈黙を破ったのは、ジークのかすれた声だった。

「アンジェリカに、会っていかねえのかよ」

冷たい廊下に精一杯の声が響いた。セリカは目を閉じ、まぶたを震わせた。

「会えない……。会えるわけがない！」

背中を向けたままで叫び、走り出した。止まることなく廊下の角を曲がると、そのまま見えなくなった。足音も次第に小さくなり、やがて聞こえなくなった。

ジークは薄暗い廊下にひとり残され、後味の悪さを噛みしめていた。

27. 狂宴

アンジェリカが再びアカデミーへ行くようになって数日が過ぎた。以前と変わらず、ジークと言い合ってみたり、三人で笑ってみたり、そんな日々を過ごしていた。ただ、三人とも、なんとなくセリカの話だけは避けていた。

「まったくラウルのやつ、あれで教えてるつもりか？」

アカデミーから門に向かいながら、ジークは大声で不満をわめき散らした。並んで歩いていたリックとアンジェリカは、顔を見合わせて苦笑いをした。

校庭の中ほどまで来たところで、ジークは怪訝な顔を見せた。ふいに後ろを振り返る。だが、近くには誰もいない。

「何？」

アンジェリカもつられて後ろを見た。

「いや、アイツら、誰を見てんのかと思ってよ。どうもこっちを見ているような気がするんだけど、気のせいだよな」

ジークは門の方に目を向けて言った。そこには男が三人立っていた。いずれも、鮮やかな金髪だった。中央の少年は、ジークと同じくらいの歳だろうか。残りのふたりはそれよりやや幼く見える。中央のリーダーらしき少年に、付き従うように立っていた。

アンジェリカは彼らを見ると顔をこわばらせた。

「お久しぶりです、お嬢さま」

前に立っていた少年が、含みのある微笑みを浮かべた。

「何しに来たのよ」

アンジェリカは彼らと目を合わそうとせず、突き放すように言った。

「そんなつれない返事はないんじゃないですか。明日は楽しみにしてますよ」

少年は、アンジェリカの正面に回り込み、腰を屈めて覗き込んだ。アンジェリカの目の前で、彼の柔らかい金髪が風になびいた。彼女はさらに顔をそむけた。

「まさかとは思いますが、アカデミーを理由に出てこない、なんてことはないですよ。ゆっくり話をする機会なんて、こんなとき以外ありませんから」

優しい口調とは裏腹に、その表情には意味ありげな下卑た笑いが浮かんでいた。

「それでは明日、会いましょう」

彼はそう言うと、隣のジークに振り向いた。あごをしゃくり見下すような視線を向ける。ジークがムッとすると、彼は片方の口の端を上げにやりと笑った。そして、ふたりの少年を従え、その場を去っていった。

ジークは激しい嫌悪感と苛立ちを感じた。腕を組み、眉をひそめる。

「なんだあいつら。知り合いか？」

小さくなった三人の後ろ姿を睨みつけながら、アンジェリカに尋ねた。

「親戚よ。ラグランジェ家の分家の人。私の婚約者になる予定」

「なにっ！！」

「……だった人。お爺さまが勝手に話を進めてたらしいんだけど、今はその話もなくなったから」

アンジェリカは淡々と話した。ジークは少し恨めしそうに彼女を睨んだ。

「おまえ、あんまり驚かせるなよ」

「え？」

「いや、なんでもない」

ジークは噴きだした額の汗を拭おうと手を上げかけた。だが、ふいに手を止め、静かに下ろした。

「明日は何があるの？」

リックはアンジェリカの横顔を見つめながら、心配そうに尋ねた。

「年に一度のラグランジェ家の集まり」

「……それ、行かない方がいいんじゃないかねえのか？」

ジークはサイファの話を出していた。アンジェリカはショックを受けると眠ったまま目を覚まさなくなる、彼はそう言っていた。親戚たちに蔑まれている彼女だ。そんな集まりに行けば、きっとまた酷いことを言われるに違いない。そうすれば、また――。

「どうして？ 私は出るわよ」

アンジェリカは事も無げに言った。ジークはむっとした表情をアンジェリカに向けた。

「おまえ、本当は弱いくせにどうしてそう強がるんだよ！ そのせいでどれだけみんなが心配してるかわかってんのか？！」

今度はアンジェリカが怒りをあらわにした。眉を吊り上げ、ジークに詰め寄る。

「なによそれ。弱いってどういうこと？ どうしてジークにそんなことが言えるの？！」

ジークはサイファから聞いたとは言い出せず、ただ押し黙るしかなかった。

「じゃあ、なんかあったらこの言葉を思い出せ」

しばしの沈黙のあと、ジークは唐突に切り出した。そして、不思議そうに見上げるアンジェリカの鼻先に、人差し指をビシッと突き当てた。

「勝ち逃げは許さねえ！」

「……はあ？」

アンジェリカは一瞬、目をぱちくりさせて驚いたが、そのあとしだいに怪訝な表情に変わっていった。リックは少し呆れてため息をついた。

「ジーク、もっと気の利いた言葉とか、ないの？」

「うるせえな！ なら自分が言えればいいだろう」

アンジェリカはふたりの言い合いを聞きながら、小さく首を傾げた。

その夜、アンジェリカは早めにベッドに入った。

「アンジェリカ、何度も言ったけど、今年は学校に行っているという理由もあるし、無理に出なくてもいいのよ」

レイチェルはベッドサイドに座り、布団を掛け直しながら優しく言った。しかし、アンジェリカはゆっくりと首を横に振った。

「いいえ、出るわ」

レイチェルはそんなアンジェリカを見て、つらそうに少しだけ笑い、彼女の前髪を掻きあげた。

「私たちのことなら気にしなくていいのよ」

アンジェリカは再び首を振った。そして、まっすぐレイチェルを見つめた。

「そうじゃないの。私は逃げたくないだけ」

レイチェルはもう何を言っても無駄だと悟った。

「それじゃ、明日のためにゆっくり休んで」

精一杯の笑顔でアンジェリカの頬を撫でると、ゆっくりと立ち上がり、明かりを消して部屋をあとにした。

翌日。ラグランジェ家は朝から準備でバタバタしていた。

料理などはほとんど雇いの者が行っていたが、それでもサイファとレイチェルは指示を出さなければならなかったし、自分たちの身支度もしなければならなかった。

夕方になり、次々とゲストが訪れ始めた。みなラグランジェ家の一族である。やはり、アンジェリカに対する態度は一様に冷たかった。あからさまに侮蔑の態度を向ける者、冷ややかな眼差しを向ける者、視界に入れようとしめない者……。

——こんなこと、もう慣れっこだわ。

アンジェリカは何度も自分にそう言い聞かせた。そして、次第に感情の扉を閉ざしていった。

宴が始まると、ホール内は宝石箱のようにきらめいた。色とりどりのドレス、胸元や指で光を放つダイヤモンド、そしてそのダイヤモンドさえくすませるほどの鮮やかな金の髪。それらがホール中を舞い、さまざまな光の乱反射を作り出していた。

そこかしこで談笑が聞こえる中、アンジェリカは刺すような視線と中傷の言葉を避け、隅でひっそりと立っていた。今の彼女にとって、そこがいちばん落ち着ける場所だった。オレンジジュースの入ったグラスを両手で握りしめ、ただひたすら時間が過ぎるのを待った。

「私はおまえたちが不憫で仕方がない。十年もの間、こんな……」

「いくらお父さまでも、アンジェリカの前でそのようなことを口にしたら許さないわよ」

レイチェルは、サイファを交えて自分の父親と話をしていた。会話の内容は自然とアンジェリカのことになっていた。

「アンジェリカもそろそろ 11になる。いいかげんに決めたらどうかね、許婚を」

サイファは少し困ったように肩をすくめた。

「その話は無駄だとわかっているでしょう」

「君らも強情だな」

笑顔をとたえる娘夫婦を見て、半ば諦めるようにため息をついた。

「あの子の意思を尊重してやるのが私たちの教育方針です。あの子はいずれ自分で選びますよ」

サイファとレイチェルは目を見合わせてくすりと笑った。

「それならどうだ。ふたりともまだ若いんだ。もうひとりくらい……」

「お父さま、この場にふさわしくない話題ですわ」

レイチェルは軽く怒ったような表情を作り、父親をたしなめた。サイファはカクテルを一口流し込んだ。そして、微笑みを浮かべながら、きっぱりとした口調で言った。

「それはアンジェリカを傷つけることになります。私にそのつもりはありません」

レイチェルは手にしていたカクテルに視線を落とした。微かに揺れる表面を見つめながら小さく頷く。口元に浮かべた笑顔は、どこか寂しげに見えた。

レイチェルは彼女の母親に呼ばれ、ホールをあとにした。残されたサイファはガラスの扉を開け、義父をバルコニーへ誘った。外はもうすっかり暗くなっていた。生ぬるい風が頬を撫で、髪をなびかせた。

「伝統あるラグランジェ家をここで途絶えさせる気か」

娘の前では見せなかった厳格な表情で、義父は話の続きを切り出した。しかし、サイファはその雰囲気には飲まれることなく、柔らかい笑顔で返した。

「悪い風習や形だけにしがみつくだらいたら、それも悪くないと思っています」

義父は柵に背を向け、そこに体重を預けた。そして、空を見上げて目を閉じ、ゆっくり鼻から息を吐いた。

「君はもっと分別のある男だと思っていたよ」

サイファは柵に両ひじを寄せ、目を細めて遠くを見やった。

「私はただ、私たちが幸せになる方法を選択しているだけです」

義父は無言でうつむいた。サイファは真剣な顔を彼に向け、さらに淡々と続けた。

「あなたは娘の幸せを望まない父親ではないはずですが。ただ、あなたにも立場というものがある。もしかするとあなたが一番おつらいのかもしれない」

「なんの話だ」

義父は唸るような低い声でそう言うと、横目でサイファを刺すように睨んだ。しかし、彼はその視線を軽く受け流し、穏やかな笑顔を浮かべた。

「心当たりがなければ聞き流してください」

義父は何か言いたげな表情を見せたが、こらえるように顔をそむけた。

「さすがに目立つな、黒づくめは」

その声に反応し、アンジェリカは顔を上げた。少し離れたところに立っていたのは、昨日の三人組だった。

「おっとそれ以上寄るなよ。こっちまで呪いがうつってしまうからな」

三人とも、にやにやと意地悪く笑っていた。アンジェリカは彼らを一瞥すると、黙ったまま再びうつむいた。

「おまえの周りでは次々と事件が起こるな。それが呪われてる何よりの証拠だろう。おまえ自身もそろそろ気がついてるんじゃないのか。だからそんな喪服みたいな黒い服を選んでるんだろう」

近くにいた大人たちには、そのセリフは耳に届いていた。だが、誰も止めるものはいなかった。大半は聞こえない振りをしていた。そして、残りは下卑た好奇のまなざしでその様子を見ていた。

「これは喪服じゃない。痛みを忘れないためよ」

アンジェリカは、静かに、ささやかに反論をした。

「恨みがましいお嬢さまだな。アカデミーに入ったからっていい気になるなよ。あんなものコネに決まってるだろう。そもそもアカデミーってやつもたいしたことないのかもな」

アンジェリカの反論が、少年をさらに饒舌にした。離れたまま上半身をかがめ、覗き込むように顔を突き出した。

「昨日いっしょにいたお友達も冴えないヤツらだったよな。まあ、おまえのような穢れたヤツには、ああいう低俗な輩が似合っているがな」

アンジェリカは目を閉じ、ひたすら耐えていた。彼女のまぶたは細かく震え、身体の中で熱いものが暴れ始めていた。

少年は調子に乗り、次第に音量を上げていった。

「なんとか言ったらどうだ。おまえみたいな穢れた血は、ラグランジェ家にいる資格はないんだよ。みんな言ってるさ。おまえが呪われているのは……」

——ガラガラガラガシャン！ ゴン！！

彼の頭上から銀食器が降り注いだ。そして、最後に大きな銀製のプレートに頭を打たれ、膝から崩れた。ぬめりのある黄色いかけらとべとついた液体が彼を伝った。それはプリンだった。隣のふたりは驚いて、後ずさりした。

「あら、ごめんなさい。手が滑ってしまったわ」

あたりが静まり返ったところに、レイチェルの声が響いた。その声は少し弾んでいるようにも聞こえた。

「あなたわざとやったわね！」

色白で痩せた年配の女性が、レイチェルに近づきながらヒステリックに叫んだ。その女性は少年の母親だった。

しかし、レイチェルが臆することはなかった。

「いいえ、手が滑っただけですわ」

笑顔のまま、きっぱりと言いきった。あまりに堂々としていたので、逆に少年の母親の方が

怯んだ。

レイチェルはしゃがんで膝をつくと、ハンカチを取り出し、彼の顔をそっと拭いた。薄い布を通して、彼女の細く柔らかい手の感触が伝わってきた。彼の鼓動はドクンと大きく打った。レイチェルはさらに顔を近づけ、彼を下から覗き込んだ。彼の鼓動はもっと大きく早く、心臓が破れんばかりに打ち始めた。顔が上気していく。彼女に目を向けることすら出来ない。

レイチェルはにっこりと微笑み掛け、穏やかに言った。

「熱々のシチューでなくて、本当に良かったわね」

少年は背筋に氷水を流し込まれたように、体の芯から震えが走った。レイチェルはすっと立ち上がると、少年に手を差し出した。

「替えの服をお貸しします。どうしたの？ さあ行きましょう」

「触るなっ！」

少年はレイチェルの手を払いのけ、よろけながら立ち上がると扉の方へ駆け出した。熱湯と氷水を同時に浴びせられたように感覚が麻痺していた。体中に鳥肌を立てながら、顔からは汗を滴らせていた。

取り残されたふたりの少年も慌てて彼を追って走り出した。

レイチェルはアンジェリカにこっそりとウインクした。

「まったく、品のないこと。子が子なら親も親ですわ。親からして穢れているようね」

少年の母親はこめかみに青筋を立て、早口でまくしたてた。しかし、レイチェルは涼しい顔でまったく気にも留めていない。彼女はそれがなおのこと気に入らなかつた。

「私の娘を悪く言わんでくれるか」

背後から低い声が聞こえた。彼女は口をへの字に折り曲げ、肩ごしにその男を睨んだ。

「でしたら、もっときちんと教育なさったらどうです」

「おまえの子供の方がよっぽど品がないと思うがな。幼な子をいじめて楽しんでいるようでは将来が思いやられる」

「それは……」

彼女は言葉を詰まらせた。そして、思いきり顔をしかめると、身を翻しその場をあとにした。

「ありがとう、お父さま」

レイチェルは父親に近づきながら、にっこりと微笑んだ。

「おまえには私の助けなど必要なかっただろうがな」

そう言い無愛想に娘を一瞥すると、彼女に背を向けた。彼女は父のその大きな背中に額をつけた。

「お父さまが庇ってくださったことが、何より嬉しいわ」

レイチェルは囁くように言った。彼は背中に熱い吐息を感じた。ふいに、振り返って娘の頬を両手で包み込みたい衝動に駆られた。しかし、彼は前を向いたまま微動だにしなかつた。

「おまえに触発されたのかもしれん」

彼はその言葉を残し、再び人の群れへと消えていった。

アンジェリカは息苦しさに耐えかねてホールの外へ出た。中に比べると幾分ひんやりとしていて、ほてりを冷ますにはちょうど良い。しばらくそこで休憩をとったらまた戻るつもりでいた。しかし――。

「おい、逃げるのか？」

いちばん聞きたくなかった声が、耳を貫いた。アンジェリカはゆっくりと声のした方へ顔を向けた。

「プリンまみれですごんだって迫力ないわよ」

濡れタオルを手にプリンのかげらと格闘していた少年に、冷ややかな視線を浴びせた。彼の目に、怒りの炎が冷たく燃えた。

「ちょっとこっちへ来い」

低い声でそう言うと、顎をしゃくった。しかし、アンジェリカは冷たく見ているだけで、動くとはしなかった。

「近づいたら呪いがうつるんじゃないの？」

少年は口の端をわずかに上げた。

「その減らず口も今にきけなくしてやるさ」

少し楽しそうな色を含ませそう言うと、隣のふたりに顎をしゃくり、横柄に指示を出した。ふたりは小走りでアンジェリカの両隣まで来ると、彼女の上腕をつかみ、少年の前まで引きずってきた。

アンジェリカは感情のない瞳で彼を見上げた。

少年は彼女の首に手をかけると、そのまま壁に叩きつけた。アンジェリカは後頭部を殴打した痛みと、喉を押さえつけられた苦しさに、思いきり顔をゆがめた。

——ビリビリビリッ。

耳障りな音が耳をつんざいた。少年はアンジェリカの左の袖を引きちぎっていた。そして、その袖を彼女の前に掲げると、見せつけるように彼女の眼前で手を放して落とした。

「兄上、ちょっと趣味が悪いんじゃない？」

少年に付き従っていた弟のひとりが、驚いて引きぎみに言った。

「こんなガキに興味はないさ。ただちょっとおしおきをするだけだ」

ニヤリと不敵な笑みを浮かべそう言うと、そのままの表情でアンジェリカに向き直った。

「安心しろ、お嬢さま。俺もバカじゃない。法律に引っかからない程度……いや、揉み消せる程度のことまでしかやらない」

アンジェリカは怖れるでもなく怯えるでもなく、ただ無表情で少年をその瞳に映していた。そして、ふいに口を開き、平らな声で言った。

「まだ甘ったるい匂いがするわよ」

少年はカッとなり頬を紅潮させた。ほとんど反射的に、彼女の頬を手の甲で殴りつける。

「チッ、泣けばまだかわいいものを」

アンジェリカは殴られたまま横を向いてうなだれていた。少年はそれを嫌悪の表情で睨みつけた。

「こうなったら泣くまでやってやる」

彼は意地になっていた。あらわになった彼女の細い左肩を乱暴に掴むと、小さくこもった声で呪文を唱え始めた。その手と肩の間から白い光が漏れる。それは次第に熱を帯びていった。アンジェリカの額から幾筋もの汗が滴り落ちた。目をつぶり、歯を食いしばり、灼ける痛みを耐えた。

「くっ……」

アンジェリカは小さく声を漏らした。

その途端、肩から手が離れた。少年の体はアンジェリカから引き離され、対壁の大きなスタンドグラスにガシャンと打ちつけられた。

それはサイファの仕業だった。

「何をしている、おまえ」

サイファは喉の奥から声を絞り出し、少年の胸ぐらを乱暴に掴み押し上げた。爪が食い込むくらいに右手を固く握りしめ、今にも振り上げんばかりに震わせていた。

「やるのか？ やりたければやれよ。魔導省のお偉いさんが無抵抗の若者に暴行したとなれば、ただでは済まないぜ」

少年は気持ち悪いくらい冷静に言うと、意地悪く挑むような目で笑った。

——ガシャン！

サイファのこぶしは彼の頬と耳をかすめ、背後のスタンドグラスにめり込んでいた。そこから亀裂が広がり、いくつものかけらがカラカラと崩れ落ちた。サイファは彼にくつつかんばかりに顔を近づけた。その瞳にみなぎる激しい憎悪に、少年は一瞬で凍りついた。

「あまり頭にくると、何もかもどうでもよくなるかもしれない」

本気だ——。

彼は本能的にそう思った。そして、同時にかつてないほどの激しい恐怖を感じた。

サイファはゆっくりとこぶしを引くと、彼に背を向け歩き出した。そして、呆然としていたアンジェリカを抱え上げた。

「今日のことは忘れない。レオナルド＝ロイ＝ラグランジェ」

背中を向けたまま、サイファは静かに言った。少年は膝を折り、ガラスのかけらの上へへたり込んだ。

28. 踏み出した一歩

「幸い、軽いやけどだけだったよ。跡も残りそうもない。今は部屋で眠っている」
サイファはそう言うと、軽く息を吐きながら、疲れたようにソファに腰を落とした。

「良かった……とっていいのかわからないけど」

レイチェルの顔にも疲労の色が浮かんでいた。安堵の息をつき、少しだけ笑うと、すぐに複雑な表情に戻った。

「どうして自分の身を守ろうとしないのかしら」

サイファの向かいにレイチェルも腰を下ろした。彼女は目を伏せ考え込んだ。サイファはちらりと彼女に目をやると、前屈みにうつむいた。両膝の上で肘をつき、額の前でその手を組んだ。

「この前の事件が、彼女に悪影響を与えているのかもしれない」

「セリカさんの？」

レイチェルはまっすぐにサイファを見た。サイファも顔を上げレイチェルと視線を合わせた。
「ああ、似ているだろう。六年前のあの事件と。自分の身を守ろうとして、魔導の力を暴発させ相手を傷つけてしまった。そのショックで、相手を傷つけることを必要以上に恐れるようになり、何をされてもひたすら耐えることしかできなくなる」

レイチェルはその話を聞きながら、顔から徐々に血の気が引いていった。ただでさえ白い彼女の肌は、今や青みがかっているようにさえ見えた。

「……どうするの？」

こわばった声でようやくそれだけ言った。彼女は湧き上がる湧き上がる恐怖心を鎮め、冷静に振る舞おうとしていた。

「今のところ、あくまで私の推測にすぎない。あれこれ言ってみたところで、私たちは医者ではないからね。ラウルに相談してみるよ。できればあのときのようなことは避けたいのだが……」

サイファは口元で両手を組み、目を伏せ深く考え込んだ。

夜が明けた。リビングにはいつも通りの風景が広がっていた。窓からは光が差し込み、光沢のある白いテーブルをよりいっそう輝かせていた。赤いティーポットからはほのかに甘い香りが漂う。いつもと違うことはただひとつ。そこにはアンジェリカがいなかった――。

「来ないね、アンジェリカ。ラグランジェ家の集まりってきのうだけのはずだけど」

一時間目が終わっても、教室の中にアンジェリカの姿はなかった。リックはアンジェリカの屋敷のある方角に顔を向けながら、心配そうに言った。

「だからやめろって言ったのに。くそっ……」

ジークは肘をつき、眉間にしわを寄せうつむいた。リックもつられて目を伏せた。沈黙が流れ、ふたりに重い空気がのしかかった。

「もしかしたら、アイツだったら何か聞いてるかもな」

ジークは視線だけを上げ、教室から出て行こうとしているラウルの後ろ姿を目で追った。リッ

クはジークの視線をたどり、ラウルを目にすると小さく頷いた。

「そうだね。ラウルってラグランジェ家のホームドクターみたいな感じだし」

ジークは頬を膨らませ、難しい顔をした。

「あんまりヤツとは関わりたくねえけど……」

そう言いながらも、意を決したように立ち上がり、ラウルを追って走っていった。リックも少し遅れて後を追った。

「おい！ラウル」

呼ばれたラウルは足を止め、顔だけわずかに声の方へ向けた。そして、走り寄るジークを一瞥すると、再び背を向け歩き始めた。

ジークはむっとしながらも小走りでラウルについていき、背中越しに声を投げかけた。

「アンジェリカのこと、何か聞いてねえか？」

「さあな」

ラウルは短く一言だけ答えた。ジークは怪訝な表情で、さらに問い詰めた。

「ホントに知らねえのか。知らないんだったら『何の話だ』とか聞いてくるのが普通じゃねえか？」

「万が一知っていたとしても、それをおまえに話す義務はない」

ラウルは大股で歩きながら、振り返ることなく冷たく言い放った。

ジークは足を止めた。両こぶしをきつく握り締める。そして、だんだんと離れていくラウルの背中を睨みつけた。

「やっぱりおまえなんかに聞かなきゃよかったぜ！」

大きな声で捨てゼリフを吐くと、床を思いきり蹴りつけた。奥歯を噛みしめ、踵を返し、肩をいからせながら教室へと戻って行った。

「へらへら笑ってんじゃねーよ！」

扉付近で談笑していたグループに、すれ違いざまに当たり散らしながら自分の席まで行くと、その椅子に乱暴に身を投げた。とぼっちりを受けた三人は、突然のことに目を丸くしていた。

「ごめん、ちょっとカリカリしてるから」

リックは顔の前に右手を立て、肩をすくめて申しわけなさそうな表情を見せた。そして、少し遅れて席に着こうとした。だが、そのときジークがふいに立ち上がり、再び教室を出て行った。

リックも慌てて後を追った。

ジークは両手をジーンズのポケットに突っ込み、ずんずんと進んでいく。

「どこ行くの？」

ジークを小走りで追いかけているが、リックは短く尋ねた。

「トイレだ」

「トイレならあっちだよ」

リックは進行方向と反対側を指差した。ジークは無視して歩き続けた。

「……どこまでついてくる気だ」

「僕もトイレ」

リックはジークの横に並ぶとにっこり笑った。

「やっぱり起きてこないわね」

レイチェルは不安な表情で、アンジェリカの部屋のある二階に顔を向けた。

「ああ」

サイファは重い声で短く返事をした。その一言だけで、彼が心配していることは容易に読み取れた。

「当然よね。あんなことがあったんだもの」

レイチェルはサイファに背中を向け、寂し気にうっすら自嘲の笑みを浮かべた。

「私、もう一度アンジェリカの様子を見てくるわ」

彼女は一転して明るい声を作ると、サイファに振り返り、にっこり笑って見せた。しかし、無理をしている彼女の姿はなおさら痛々しい——。サイファはそう感じた。

「私も行くよ」

すっと立ち上がると、レイチェルの後ろからついて行った。

——パタパタパタ。

ふたりが玄関ホールまで来ると、階上から軽い足音が聞こえた。そして、すぐにその足音の主が姿を現し、大きな階段を駆け降りてきた。

「アンジェリカ！」

レイチェルは目を見開いて娘の名を呼んだ。

「どうして起こしてくれなかったの？ 完全に遅刻だわ」

アンジェリカは冷静にそう言うと、驚いている両親とすれ違い、リビングへと小走りで向かった。残されたふたりは互いに顔を見合わせると、はっとして彼女の後を追った。

アンジェリカは鞆を開け、その中を確認していた。

「大丈夫なの？」

レイチェルは、恐る恐る、彼女の顔を覗き込んだ。彼女はそんな母親を不思議そうに見ると、自分の肩に手を当てて、落ち着いた声で言った。

「こんなの怪我のうちにも入らないわよ」

レイチェルはますます困惑した。

「そうじゃなくて……」

「え？」

アンジェリカは首をかしげ、きょとんとしていた。レイチェルはそれを見て、短く息を吐き、表情を緩めた。そして、彼女の頭を優しく撫でた。

「朝ごはんだけは食べていきなさいね」

アンジェリカは大急ぎでトーストを口に運んだ。サイファはほおづえをつき、微笑みながらその様子を見ていた。彼女はどういうわけか軽やかな明るい表情をしていた。まるで、何かを吹っ切ったかのようにだった。

「なんだかご機嫌だね。いい夢でも見たのかな」

サイファにそう問われて、アンジェリカは手を止めた。そして、トーストを見つめたままわずかに頬を緩めた。

「内緒」

サイファとレイチェルは顔を見合わせた。しかし、アンジェリカは両親のそんな様子を気にする素振りも見せず、黙々とトーストを食べた。

「行ってきます」

最後のひとかけらを口に放り込むと、早口でそう言い、鞆をつかんで椅子から立ち上がった。そして、軽快な足音を立て、ふたりの間を走り抜けた。

「あ、いってらっしゃい！」

レイチェルは慌てて彼女の背中に声を投げかけた。部屋の外に出ると、すぐに彼女の姿は見えなくなり、やがて扉の軋む音が聞こえた。

「これって、どう考えればいいのかしら。あんなことがあったばかりなのに」

レイチェルはいったん首をかしげると、うつむいて視線を落とした。

「私たちに心配をかけまいとして、無理をして振る舞っていると考えられなくもないが……」

サイファはそう言いながら、アンジェリカの座っていた席を見つめた。そして、ふいに優しい顔を見せた。

「私は信じたいよ。今日のあの子の嬉しそうな表情は」

レイチェルも穏やかに笑って頷いた。

「ええ、そうね。そうよね。ラウルには楽観的すぎるって怒られそうだけど」

そう言って、首をすくめておどけて見せた。

アンジェリカは緩いペースで走りながらアカデミーへ向かっていた。生ぬるい向い風を受け、少し息苦しさを感じた。しかし、それでも走ることをやめなかった。彼女の気持ちはアカデミーへと焦っていた。

ふと前を見やったとき、長くまっすぐな道の遠くにふたつの影を見つけた。彼女はまさかと思いつつ、走るスピードを上げ、そのふたつの影に近づいていった。

「ジーク、リック！」

アンジェリカは少し息を切らして言った。目の前には仏頂面のジークと笑顔のリックが立っていた。リックは軽く右手を上げ「おはよう」といつもの挨拶で迎えた。彼女は何度か深く息を吸って吐いて呼吸を整えると、ふたりの顔を交互に見て付け加えた。

「アカデミーは？」

「あーっと、えーと……」

ジークは彼女から目をそらしながら、いいわけを考えていた。ここまで来てトイレなどといういいわけは通じない。焦れば焦るほど頭の中が真っ白になっていく。

「もしかして、私を迎えにきてくれたの？」

アンジェリカがさらに追いうちをかけた。ジークは「ばっ……」と何かを言いかけて、口をつ

ぐんだ。彼の耳は次第に赤くなっていった。

リックは後ろから楽しむようにジークの様子を見ていた。

「行くんだろ、アカデミー」

ジークはあさっての方に目をやったまま早口でそう言うと、踵を返し歩き始めた。アンジェリカは下を向いて小さく笑うと、小走りでジークに駆け寄り並んで歩いた。

「ジークの言ったこと、少しわかった気がしたわ」

「え？」

ジークはアンジェリカの方に顔を向けかけたが、慌てて前へ向き直った。まだ彼の顔はほんのり熱を帯びていた。しかし、アンジェリカはそんな彼の様子に気がついていなかった。前を向いたまま、淡々と言葉を続けた。

「迷惑、かけてたのかなって」

「そんなこと言ったか？」

アンジェリカはジークの問いに答えるかわりに、にっこりと満面の笑みを向けた。それは、レイチェルがよく見せる表情だった。ジークはとまどった。彼女のこんな顔は今まで見たことがなかった。

「だからって、逃げるのはやっぱり嫌だけど」

彼女は少し硬い顔に戻り、ひとつひとつと噛み締めるように言葉をつなげた。そして、ふいに足を止めた。ジークは怪訝に振り返った。

アンジェリカは両足を少し開いて、しっかりと大地を踏みしめるように直立していた。胸元で鞆を抱え、まっすぐにジークを見つめた。

「だから、もっと、強くなるわ」

静かな声に強い決意を秘めた真剣な表情。ジークの鼓動は大きく強く打った。

「それから……」

アンジェリカは口ごもりながら、はにかんで視線を外した。しかし、すぐにジークに目を戻して言った。

「ありがとう」

「ん、ああ……？」

何に対する「ありがとう」かわからないまま、ジークは反射的に返事をしてしまった。そんなジークを見て、リックは隣でにこにこ笑っていた。

「早く行きましょう！」

アンジェリカは照れをごまかすように早口で言うと、白いミニスカートををはためかせながらジークの隣を駆けていった。

「おい、待てよ！」

ジークも慌てて駆け出し、全速力で彼女を追いかけた。

29. 3人目の招待客

「誕生パーティ？ おまえの？」

ジークが素っ頓狂な声をあげた。

「他に誰がいるっていうの」

アンジェリカは彼の反応に少しむっとし、冷めた声で言い返した。

「なんでおまえ、そんなガキくさいことやるんだよ」

ジークはさらに彼女の神経を逆なでする言葉を口にし、面倒と言わんばかりに後頭部を掻いた。

——アンジェリカはまだ子供なのに。

リックはそう思ったが、口には出さなかった。ただ、彼女の実年齢をすっかり忘れているジークがおかしくて、こっそりと笑った。

「別に嫌だったらいいのよ。無理に来てほしいなんて、言ってないんだから……」

アンジェリカはうつむくと、不機嫌な声で口ごもった。彼女の耳は、ほんのり赤く染まっていた。

「嫌っていうか……」

今度はジークが口ごもった。

「なに？」

アンジェリカはジークを見上げ、短く問い詰めるように言った。彼は眉をひそめ、困り顔で少し首をかしげた。

「俺、そういうの行ったことねえんだよ。どうすりゃいいのかってのがな……」

思いがけないジークの情けない発言に、アンジェリカは気が抜けた。少し呆れて息を吐くと、冷めた目で再び彼を見上げた。

「別にどうもしなくていいわよ。来るだけで」

ジークはアンジェリカの視線から逃げるように顔をそらし、何か言いたげな顔をしていた。しかし上手く言葉にすることができずにそのまま押し黙った。

「ジーク、心配しなくても僕がついてるからさ」

リックに笑いながらそう言われて、ジークは急に自分が情けなく思えた。

「別におまえについててもらわなくても大丈夫だ」

意識して声を大きくし、今さらながら虚勢を張って見せた。リックはそんなジークににっこりと笑いかけた。そして、今度はその向こう側のアンジェリカを覗き込んだ。

「僕たちの他には誰を呼んでるの？」

「あなたたちだけ……あっ、もうひとりいたわ」

その言葉につられて、ジークもアンジェリカに顔を向けた。

「誰？」

リックの質問に、アンジェリカは何か含み笑いのようなものを返した。

「ふたりのよく知っている人よ」

はっきりと答えないうえに、意味ありげな笑顔。ジークはからかわれているような気がして苛立ちを感じた。

「だから誰なんだよ！」

ジークは語気を荒げた。しかし、アンジェリカは動じることもなく、ただにこにこ笑っていた。

「そのうちわかるわ」

彼女は楽しそうにそう言うと、「じゃあね」と右手を上げ、ふたりを残し小走りで家へと帰っていった。

ふたりは無言で彼女の背中を見送った。

「誰だと思う？」

彼女の姿が小さくなったところで、リックがぽつりつつぶやいた。ジークは腕を組み、小さくうなった。

「まさか……セリカ、ってことはないよな」

リックも腕を組み、首をかしげて考え込んだ。

「アンジェリカの表情からすると、ラウルって可能性の方が高いんじゃないかな」

ジークは眉根を寄せ、あからさまに嫌悪の表情を見せた。

「ヤツか……。確かにな。なんか気が重くなってきた」

「アンジェリカが名前を言わなかったのも納得がいくしね」

「どういうことだ？」

「ほら、ラウルが行くって聞いたら、ジークは行かないとか言い出しかねないよね」

ジークはため息をつき、重い足取りで踵を返すと、ゆっくり家へと歩き始めた。リックもその歩調に合わせて並んで歩いた。

「ラウルって、そんなに悪い人じゃないと思うけど」

いつも思っていたことが、ふいに口をついて出た。言った後で、またジークの機嫌を損ねたかなと少し後悔した。

案の定、ジークの機嫌はますます悪くなった。

「悪いとは言ってねーよ。ただ気に入らねえだけだ」

むすっとした表情でそう吐き捨てた。リックはなぜ気に入らないのかという理由が聞きたかったのだが、これ以上追求するのはやめておいた。

「お帰り！ ジーク！」

「なんだ、その格好……」

家の扉を開けた瞬間、ジークは絶句した。

ラフなパンツ姿しか見せたことのない母親が、突然ワインレッドのベロア調ワンピースで出迎えたのである。彼が言葉を失うのも無理はなかった。

「うっふっふ。私もまだまだイケるでしょ。もう二十年くらい前のなんだけどね。あのころは私

も着飾ったりしていたものよ。あの唐変木を振り向かせるのは大変だったんだから」

彼女は防虫剤の匂いを振りまきながら、回転してスカートをひらめかせた。

「だから、なんでその二十年前の服を、いま着てるんだよ」

ジークはだんだんいらつき始めていた。今日はアンジェリカといい、母親といい、わけがわからないことだらけだった。

「今度これを着て行こうかと思ってね。引っ張り出してきて試しに着てみたのよ」

レイラは全身を鏡に映して嬉しそうに声を弾ませた。

「そんなもの着てどこに行くんだ？」

ジークはますます苛立ちが募っていった。話が一向に見えてこない。

突然、レイラは顔を突き出し、ジークを下から覗き込んだ。そして意味ありげにニヤリと笑った。ジークは少し身をのけぞらせた。

「あんたも呼ばれてるでしょ？ アンジェリカちゃんの誕生日」

「……ちょっと待て」

ジークは一気に頭に血が上っていくのを感じた。

「なんでおまえが行くんだ？ そもそもなんで知ってたんだ……？」

「私もお呼ばれしてるからに決まってんでしょ」

ジークの重い声での質問に、レイラは極めて軽い調子で返した。

ジークは苛立ちは爆発した。

「なんでだよ！ ほとんど面識もないくせに呼ばれるわけねーだろ！」

レイラはそんなジークのわめき声を軽く聞き流した。そして、さらに信じがたいことを口にした。

「実はあんたに内緒で行ってきたのよねー、アンジェリカちゃんのお見舞い。そこであちらのご両親と仲良くなっちゃって」

そう言うと嬉しそうにVサインをジークに突きつけた。

「なっ……嘘つけ！ そんな話、俺、聞いてねえぞ」

ジークは顔を真っ赤にしながら、必死で反論した。信じられないというよりは信じたくないという気持ちがそうさせていた。

「そりゃそうでしょ。黙ってたし。彼女にも口止めしといたからね」

ジークは一気に脱力した。レイラならそのくらいの行動力はある。内緒にしておいてあとで驚かせようという子供じみたことも、いかにも彼女のやりそうなことだ。もうここまでくるとジークは信じざるを得なかった。

「楽しみよね、ジーク！」

無邪気にはしゃぐレイラを残し、ジークはよろよろと二階へ上がっていった。

レイラは行動が読めない。何をしでかすかわからない。わけのわからないことを口走りかねない。自分の過去を誰よりも知っている人間であるから怖い。サイファ、レイチェルと何を話していたのか、アンジェリカに何か妙なことを言っていないだろうか。考えれば考えるほど不安に押

しつぶされそうになる。

そして、今度は一緒に行くことになるのである。自分の知らないところで勝手にあることないと言われるのも嫌だが、目の前でむちゃくちゃな言動をされたり自分のことをからかわれたりするのはもっと困る。

三人目の招待客はラウルのほうがはるかにまじだった。今さらながらジークはそう思った。

30. プレゼント

とうとうアンジェリカの誕生パーティ当日がやってきた。

レイラは張り切って、鼻歌まじりで髪をセットしたり化粧をしたりしていた。ジークは化粧をした母親の姿などほとんど見たこともなく、どうなるのだろうと不安な気持ちで眺めていた。

「ところでジーク、あんたプレゼントは何にした？」

レイラは鏡を覗き込みながら、腕を組み扉口に立っているジークに声を掛けた。

「は？ そんなものねーよ」

「……あんたまさかパーティに呼ばれておきながら、手ぶらで行くつもりじゃないでしょうね」

レイラは手を止め、ゆっくりとジークに顔を向けた。ジークは彼女の視線から逃げるように目を伏せた。

「アンジェリカは来るだけでいいって言ったんだよ」

「ああ！ 情けないっ！」

レイラは身をのけぞらせると、額に手を当て、オーバーアクションで嘆いた。そして、鏡台から立ち上がり、驚いて身構えるジークに、化粧途中の顔を下から突きつけた。

「いい？ ジーク」

レイラは腰に手を当て、眉をひそめ、よりいっそうジークに顔を近づけた。ジークは右手で彼女を制止すると、斜め後ろに身を引いた。

「プレゼントは物じゃない、気持ちなのよ。自分のために、自分のことを想いながら選んでくれた気持ちが嬉しいわけ。わかる？」

レイラは人さし指をジークの鼻先に突きつけた。

「何もむやみやたらにプレゼント攻撃しろって言ってんじゃないのよ。誕生日は何を祝う日かわかってる？」

「ひとつ歳をとったことを祝う日だろ」

「浅ーいっ！」

ジークの脳天に空手チョップが入った。

「ってーな！ 何しやがる！」

「もちろんそれもあるわよ。でも大事ななのは、その人が生まれてきたこと、今生きていることに感謝するってことなのよ。だから大事な人の誕生日は特別なわけ」

「……」

「うだうだ言ってないで、ほら、さっさと買って来る！」

ジークの体を玄関に向けると、背中を平手で目一杯バチンと叩いた。彼は数歩よろけて前へ出ると、顔だけ振り返り母親を見た。レイラは満面の笑みで手を振っていた。

「リックには先に行ってもらうから」

ジークはレイラに押し切られる形で家を出た。

「ったく……。何を買えばいいか見当もつかねえ」

あてもなく町を歩きながら、ぶつぶつと独り言を口にした。

「そういえば」

ジークは突然はっとした。

「俺、両親に誕生日プレゼントなんてもらったことあったか……？」

「お、買ってきたね」

無言で帰ってきたジークの手に小さめの袋がぶら下がっているのを目ざとく見つけ、レイラは声を弾ませた。ジークはそれを隠すように後ろにまわすと、仏頂面をレイラに向けた。彼女は化粧を終え、服も着替え、すっかり準備を整えていた。

化けた――。

ジークは彼女の変貌ぶりに驚いたが、あえてそのことには触れなかった。

「今度の俺の誕生日にはプレゼント用意しとけよ」

「なに言ってるのよ。毎年ケーキ焼いてあげてるでしょ。愛情を込めて。まあ半分は私が食べたいからだけど」

ジークは何も言えなかった。

「ところで、どう？」

右手で横髪をはね上げ、左手を腰に当てると、レイラはポーズをとった。

「若作りしすぎだろ」

ジークは毒づいた。しかしレイラはあははと豪快に笑い飛ばした。

「素直じゃないわね。アンタも」

そう言ってジークの肩に手を置いた。

「ていうか、こんなことしてる場合じゃないだろ。もう走っていっても間に合わないな……」

「大丈夫。アレがあるでしょ」

彼女がウインクしながら指差した先には大型のバイクがあった。それはジークの父親の形見だった。

ジークは顔から血の気が引いた。

「ペーパードライバーのくせに何言ってんだよ」

「あら。免許があることには変わらないでしょ」

息子の心配をよそに、嬉々としながらバイクを外へ運び出した。そしていったん部屋の奥へ戻ると、レイラはライダースーツにヘルメットを装着して出てきた。ヘルメットはともかくライダースーツなんてどこにあったのか、ジークは不思議でならなかった。

「さ、後ろ乗りなさい」

レイラはバイクにまたがると、ジークにヘルメットを投げてよこした。ジークは乗りたくなかった。しかし乗らなければ確実に間に合わない。少しの葛藤の後、彼は渋々ヘルメットを被った。

「安全運転、頼むぜ」

レイラの後ろにまたがりながら、ジークは祈るように言った。

「まーかせて。自称A級ライセンスの腕を見せてあげるわ」

「自称ってなんだよ！わけわかんね……うわっ！！」

ジークの叫び声を残し、バイクは豪快なエンジン音とともに猛スピードで走り去った。

ふたりの乗ったバイクは、アンジェリカの家の前で止まった。

レイラはヘルメットをとり、頭を振ると髪を風になびかせた。

「どう？私の運転」

「スピード出しすぎ。急発進しすぎ」

ジークはぐったりして言った。そんな息子を見ながら、レイラは小さく笑った。

「ふふ。昔リュークにも同じこと言われた」

「そりゃ親父でも誰でも言いたくなるぜ」

ジークは大きくため息をついた。

「ジーク！」

後ろからリックが手を振りながら走ってきた。

「やっぱりさっき追い抜いていったのってジークたちだったんだ。このバイクってお父さんの形見の？」

「ああ。俺もまさかこれが動くとは思わなかったけどな」

ジークは額の汗を手の甲で拭った。

「ちゃんといつでも走れるように手入れしてたのよ」

レイラは愛おしげに車体を撫でた。

「いらっしゃい」

いつの間にか門まで出迎えにきていたレイチェルが笑顔で声を掛けた。

「レイチェル！」

レイラはレイチェルに走り寄り、覆いかぶさるように小柄な彼女を抱きしめた。

「何やってんだよ！」

母親のあまりの馴れ馴れしさに驚き、ジークは声をあげた。レイラはジークを振り返るとニヤリと笑った。

「ははーん。アンタうらやましいんでしょ」

「は？」

「それではジークさんも」

レイチェルは無防備な笑顔で、ジークに向かって両手を広げた。

「な……」

ジークは一歩脚を引いたまま硬直した。そして彼の耳はだんだん赤くなっていった。レイチェルとレイラは顔を見合わせると、ふたりしてあははと声を立てて笑った。

「遊ばれてるね」

リックは気の毒そうに笑った。

レイチェルに先導され、三人は玄関までやってきた。

「いらっしやい」

赤いワンピースを着て、赤いリボンを頭につけ、いつもより華やかなアンジェリカが出迎えた。彼女は少し恥ずかしそうにはにかんでいた。

「かぁーわいー！」

レイラは両手を広げてアンジェリカに走りよろうとした。しかしジークが後ろからレイラの肩を押さえた。

「待て」

「何よ。ヤキモチ妬くくらいなら自分が行けばいいでしょ」

「バカ！ そんなんじゃねえよ！」

ジークの耳はまたしても赤くなっていった。

アンジェリカはそんなふたりのやりとりをきょとんと見ていた。

「まあまあ、親子喧嘩はそのくらいにして」

奥からサイファが姿を現した。彼はアンジェリカに歩み寄ると、後ろから彼女の両肩に手をのせ、ジークたちになっこり微笑んだ。

「どうぞお入りください」

「どうもー、お邪魔しまーす」

レイラは右手を上げ軽い調子で挨拶すると、応接間へと入っていった。そのあとに仏頂面のジークと笑顔のリックも続いた。

応接間にはすっかりパーティの準備が整えられていた。

「すごーい！」

ご馳走の山を目の前にして、レイラは目を輝かせた。

「はしゃぐな！」

ジークは恥ずかしそうにレイラを制止した。しかし、レイラはジークの言葉など耳に入っていないようだった。

「まずは乾杯ね！」

「なんでオマエが仕切ってるんだよ！」

レイラはジークを無視して、レイチェルとともに乾杯の準備を始めた。

「えー、それでは。アンジェリカの11歳の誕生日を祝して、乾杯！」

「乾杯！」

なぜかレイラが音頭をとり、みんなで乾杯をした。ジークだけは納得のいかない顔でレイラを睨んでいた。

「そうそう。忘れないうちに渡しておかなきゃ」

レイラは鞆をがさごそかき回すと、赤とピンクのリボンがかかった黒い箱を取り出した。

「お誕生日おめでとう！」

レイラがその箱を差し出すと、アンジェリカはとまどって両親を振り返った。両親はふたりともにっこりとうなずいた。

「ありがとうございます」

まだ少し驚きながらも、嬉しそうにその箱を両手で受け取った。

「開けてもいいですか？」

「どうぞどうぞ」

アンジェリカは丁寧にリボンをほどき、蓋をゆっくりと持ち上げた。

「わあ！」

その中には深紅の革靴が1足入っていた。つま先が丸く、かわいらしいデザインだった。

「私の手作りなのよ、それ」

「ありがとうございます！」

実際にプレゼントを目にして、よりいっそう彼女の感情は高ぶった。

「サイズはほんのちょっとだけ大きく作ってあるから。それがピッタリになった頃には……ね！
ジーク」

「はあ？ 何に対して同意を求めているのか、わけわかんねーよ」

ジークは眉をひそめた。

アンジェリカも何のことだかわからずにぼかんとしている。

レイラはひたすらニコニコ笑っていた。

「僕もプレゼント持ってきたよ」

言葉が途切れたところで、リックが割って入った。

「ごめんね。リボンとか何もかけてないんだけど……」

そう言いながら、茶色いそっけない紙袋をアンジェリカに差し出した。

「ありがとう！ 開けていい？」

リックがうなずいたのを見ると、アンジェリカは口止めのテープをゆっくりとはがし、中味を取り出した。

「この本……」

「アンジェリカがよく図書館で読んでたなと思って。もしかしてもう持っていたりする？」

「ううん、欲しかったの。ありがとう！ すごく嬉しい！」

ジークはリックがプレゼントを用意していたことに、多少ショックを受けていた。

「ほれ、アンタも出しなさい」

レイラは息子の背中をバシッと叩いた。

「いいよ俺はあとで……」

ジークは弱々しく口ごもった。

「なあーに言ってんの！ あとでなんて忘れるでしょ！ 今にしなさい、今に！」

レイラの迫力に負け、ジークは鞆を手にとった。しかし興味津々で覗き込んでいるレイラとリ

ックに気がつくのと、鞆を隠すようにして立ち上がった。そしてアンジェリカを手招きすると、応接間の外へと出て行った。

アンジェリカは目をぱちくりさせていたが、すぐに彼を追って外へ出て行った。

ジークは扉を背にしゃがみ込み、頭を抱えていた。

「どうしたの？」

「何を買えばいいのか見当がつかなくて、とりあえず長持ちしそうなものにしてみたけど、そうじゃないかもしれねえ……」

アンジェリカはジークの言っていることが理解できずに、首をかしげた。

「まあとりあえず渡しとく。気に入らなかったら捨ててくれ」

ジークは鞆の中から小さな袋を取り出し、アンジェリカに手渡した。

「ありがとう。見ていい？」

「あ！ 待て！ 俺が帰ってからにしてくれ」

ジークの懇願するような目を見て、アンジェリカはしばらく考えていた。そして「わかったわ」とにっこり微笑んだ。

「部屋に置いてくるわね」

アンジェリカは階段を駆け上がっていった。

「中はまだ見るなよ！」

ジークは下から念を押した。

「ジークのプレゼントって何だったんですか？」

リックがレイラに尋ねた。

「私も知らないのよね。でもあの子、こういうことに関してはバカだから、きっと普通じゃ思いもつかないようなしょうもないものに違いないわ」

レイラはふふっと楽しそうに笑った。

「何かしら、私も楽しみだわ」

レイチェルも後ろから話に加わった。サイファはさらにその後ろで、にこにこ笑顔を浮かべていた。

「ホントあの子バカだけど、温かく見守ってやってちょうだいね」

そう言ったレイラの顔が、ふいに柔らかくなった。

ギィ……という鈍い音がして扉が開いた。そこにいた四人は、いっせいにその扉の方を見た。

ジークは皆と視線を合わせないよう目を伏せて入ってきた。

「ジーク！ どうだった？」

レイラは遠くから大きな声で尋ねた。

「渡した」

ジークは素っ気なく答えた。

「で？ で？ 反応は？」

下世話な興味を隠そうともせず、レイラはジークににじり寄った。

「あー！！もう俺に話し掛けるな！おまえに話し掛けられるだけで13倍疲れんだよ！」

「まー！！なによ13って中途半端な数字は！10か15のどっちかにしなさいよ！ホント割り切れない男だわ！！」

「おまえには不吉な13がお似合いなんだよ！」

「もうふたりともやめようよ。よそのうちまで来て喧嘩することないじゃない」

エスカレートしてきたふたりの言い合いに、リックは焦って止めに入った。そして、申しわけなさそうにサイファとレイチェルに目をやった。だが、ふたりには迷惑がっている様子はなく、くすくすとあまり声を立てないように笑っていた。リックは少しほっとした。

「どうしたの？」

いつの間にか戻ってきたアンジェリカがリックに尋ねた。

「ただの親子喧嘩。いつものことだから気にしないで」

リックは苦笑いを浮かべた。

「もう子供たちは放っておいて、私たちは私たちがオトナな会話を楽しみましょ」

さんざんジークと子供じみたことを言い合ったあと、レイラはサイファとレイチェルのところへやってきた。そしてふたりの間に入り、彼らの肩に手を回し引き寄せた。

「レイラさんはバイクにお乗りになるんですね」

レイチェルは顔を少し上げ、大きな瞳でレイラを見た。

「最近は全然乗ってなかったけどね」

レイラは首をすくめた。

「よろしければバイク、見せていただけませんか？」

レイチェルの思いがけない言葉に、レイラは顔をぱっと輝かせた。

「もちろん！サイファも行きましょ」

三人は連れ立って部屋を出て行った。

外はほんのり薄暗くなっていた。ジークとのことで熱くなっていたレイラには、ひんやりした風が心地よく感じた。

「わあ、近くで見たのって初めてですわ」

レイチェルはしゃがみ込んでまじまじとバイクを観察した。

「これ、死んだダンナの形見なのよ」

「それでは、旦那さんの影響で？」

「出会って間もない頃だけだね。そりゃもう必死で免許を取ったわよ。恋する乙女のパワーってヤツ？」

「まあ」

レイチェルはにっこり笑った。

「旦那さんはお仕事もバイク関連だったのですか？」

サイファが尋ねると、レイラはまっすぐ彼の目を見ながら答えた。

「そう。小さな町工場で技術者やってたわ。けっこう強い魔導力も持ってたらしいんだけど、そっちには全く興味がなかったみたい」

レイラは肩をすくめた。

「そういうのって、全く使えない私から見ると腹が立つわけよ。なんで才能を腐らせておくのかって。それでいちど怒ったことがあるの」

そう言いながら彼女は、思い出したように笑っていた。

「それで、アイツなんて答えたと思う？」

「え？ なんて答えたのですか？」

レイチェルはレイラを見上げた。彼女はハンドルにひじを寄せ、どこか遠くを見つめていた。「初めて魔導が使えたときより、初めて自転車に乗れたときの方が嬉しかったんだ、って。ほんと、バカでしょ」

レイラは肩をすくめ、すこし照れくさそうに笑った。

「素敵なお話ですね」

レイチェルは目を細めて微笑んだ。

「何話してんだらうな」

ジークは肉にかぶりつきながら、窓越しに親たちを見ていた。声は聞こえなかったが、楽しそうに笑いながら話をしていることはその様子から容易にわかった。

「ジークの子供のころの話だったりして」

窓際でジークと並んで外を見ていたアンジェリカがぼそりと言った。

「なんでだよ」

ジークは外に目を向けたまま、今度はポテトを食べ始めた。アンジェリカは彼をを見上げると、いたずらっぽく笑った。

「私もいろいろ聞いたけど、結構おもしろかったわよ」

ジークの動きが止まった。

「え？ どんな話？ 僕も聞きたい」

リックが身を乗り出した。

「ちょっと待て！リックはそこにいろよ」

額にうっすら汗をにじませながら、ジークは右手でリックを制止すると、アンジェリカの手を引き、部屋の隅まで引っ張ってきた。

「で、何の話を聞いたんだ？」

動揺を隠すように腕を組み、彼女から目をそらしながら、ジークは低い声で言った。アンジェリカは少し遠くを見て考えるような素振りを見せると、淡々と語り始めた。

「いろいろあるけど、自分で掘った落とし穴にはまって足をくじいてさらに生き埋めになりかけたとか、魔導の力を使って魚を焼こうとしてテーブルまで燃やしちゃって火事になりかけたとか、あと.....」

「あー！！もういいもういい！！」

ジークの顔はみるみるうちに真っ赤になった。

「とにかく！リックには言うなよ！いいな！」

アンジェリカに人差し指を突きつけ、大声でわめき立てた。

「なんだか仲間はずれみたいでかわいそう」

アンジェリカは口をとがらせ、不満げに言った。

「かわいそうなのは俺じゃねーかよ」

ジークはくたびれたような乾いた笑いを浮かべた。

「ごめんね、リック。口止めされちゃった」

アンジェリカはリックのところへ戻ると、両手を顔の前で合わせて謝った。

「もしかしてその話って落とし穴とかのじゃない？」

リックはさらりと言った。

「！！なんでオマエっ……！」

アンジェリカの後ろで、ジークは口を開けたまま硬直していた。

「ずいぶん前だけど、レイラさんから聞いたことがあるよ」

リックはにっこりとジークに笑いかけた。

「あんのヤロー……」

ジークは窓に張りついて、外で楽しそうに談笑している母親を睨んだ。

パーティが終わる頃には、すっかり外が暗くなっていた。

「長居しちゃってごめんなさいね」

レイラは軽い調子で言った。彼女は来たときと同様、ライダーズーツを身に付けていた。

「いえ、とても楽しかったですわ」

レイチェルの言葉にサイファも頷き、付け加えた。

「またいつでもいらしてください」

レイラはウインクで答えると、大きなエンジン音を轟かせながら、バイクでひとり走り去った。

。

「アンジェリカ、またあしたね」

リックが笑顔で右手を挙げた。アンジェリカも笑顔で返した。

「ふたりとも、本当にありがとう」

ジークはアンジェリカをじっと見つめた。そして無言で右手を挙げると、背中を向け歩いていった。

アンジェリカと彼女の両親は、ジークとリックの背中を小さくなるまで見送った。

アンジェリカは、家に戻ると小走りで自分の部屋へと駆けていった。そして、ジークのプレゼ

ントが入った袋を手を取った。袋の口を開け、中を覗き込む。

「……サボテン？」

彼女は袋の中に手を入れ、ゆっくりとそれを取り出した。それは、鉢植えのミニサボテンだった。アンジェリカは渡してくれたときのジークの表情とサボテンを重ね合わせ、ひとりで声を立てて笑った。

ひとしきり笑い終わると、彼女はそれを南側の窓際に置いた。

「ありがとう、ジーク。頑張って長持ちさせるわ」

彼女はサボテンに向かって、とびきりの笑顔を見せた。

31. 動揺

アカデミーの正門脇を取り囲むように、人だかりが出来ていた。ざわめきの中からときおり悲鳴にも似た歓喜の声が上がる。

「そっか。今日が合格発表だったんだ」

少し離れたところからその様子を眺めていたリックが、小さく頷きながらつぶやいた。隣にいたジークもじっと群衆を見つめていた。

一年前の合格発表のとき、アンジェリカと出会った。そして初めて味わった敗北。傷つけられたプライド。

最悪の出会いだった。

そのときまで信じていたものが、いかに小さなものだったのか——。あれからいろいろな経験を重ねた今なら、素直にそれを認めることができる。しかしそのときはただ、自分を負かした小生意気な少女を憎らしく思うことしか出来なかった。

「あれからもう一年になるんだね」

リックの声でジークは我にかえった。リックも一年前のことを思い出していたのだろう。その声からは近くて遠い日々を懐かしむ気持ちががにじみ出ていた。

「おはよう」

いつの間にか近くまで来ていたアンジェリカがふたりに声を掛けた。そして、少し肩をすくめて見せた。

「すごい人ね。去年はここまで多くなかったと思うけど」

合格発表を見ようと押し合う人々は、正門前まで溢れ返っていた。受験生だけでなく、その家族や興味本位の在校生も多く集まっていたようだった。

その中からひとりの少年が身をかがめ、つまずきながら出てきた。背が高く、痩せてひょろりとしている。クラスメイトのダンだった。

「アンジェリカ、おはよう！」

アンジェリカに気がつくのと、手を振りながらまっすぐに走り寄ってきた。もみくちゃにされた髪を手ですき直していたが、あまり効果はなかった。

「おはよう」

アンジェリカは挨拶を返しながら、不思議そうに首を傾げた。彼とはあまり話をしたこともなく、特に仲が良いというわけではなかった。

「今、そこで合格発表を見てきたんだけどさ」

ダン興奮ぎみにまくしたてた。両こぶしを強く握りしめ、顔を輝かせている。

「すげーな！今年も入ってきたんだな、ラグランジェ家の子。しかもふたりも！」

「え？」

アンジェリカはダンを見上げ、目を見開いた。

「うそ？誰?!」

踵を上げて一歩ダンに踏み出すと、短く問い詰めた。彼はアンジェリカの激しい反応に少した

じろいだ。

「あ、ああ。女と男とひとりづつだったかな。名前は……、えーと、なんだっけ」

そう言うと、何とか思い出そうと、目を閉じ額に手を当てた。

しかし、アンジェリカは彼を待たず、群衆へ向かって走り出した。ジークとリックも、眉をひそめ顔を見合わせると、そのあとを追っていった。

「思い出した！ 男の方はレ……」

ダンが目を開けたときには、もう周りには誰もいなかった。

アンジェリカは人垣に阻まれ、中に進めずにいた。

「ワリィ、ちょっと開けてくれ」

ジークがアンジェリカをかばうように後ろから肩を引き寄せると、無理やり道をこじ開けながら進んでいった。

「ちょっ……」

ジークの強引なやり方に、アンジェリカはとまどいの声を上げた。

リックはジークの背中にくっつくようにしてついていった。「すみません」としきりに周りに謝っていたが、あまり効果はなかったようだった。押しのけられた人々は文句を言いながら、ジークたちを睨んでいた。しかし、何人かはアンジェリカに気がつき「ラグランジェ家の……」と囁きあっていた。

刺すような視線を背中に浴びながら、三人はいちばん前に躍り出た。

アンジェリカは壁に張られた紙を見上げた。

「ユールベル＝アンネ＝ラグランジェ……？ 誰かしら。聞いたことがない」

いちばん上に書かれた名前を読み上げ、アンジェリカは首を傾げた。そしてもうひとりを探すべく、すぐに下へと目を走らせた。今度はいちばん下にラグランジェの名前を見つけた。

「レオナルド？！ どうしてあいつが……」

そう言うと、身を翻し、今度は自力で人垣をかきわけ出ていった。

「どうしたの？」

アンジェリカを追って出てきたリックが、彼女の小さな背中に声を掛けた。ジークはただじっとアンジェリカの後ろ姿を見つめていた。

アンジェリカはゆっくりと振り返った。

「今までラグランジェ家の子がアカデミーに入ったことなんてなかったのに、今年はふたりもいるのよ。どう考えても変よ」

静かにそう言うと、眉をひそめうつむいた。

「見張り……ってこと？」

リックは声を低くして尋ねた。アンジェリカは口元に手を添え、さらに深くうつむいた。

「そこまではどうか分からないけれど」

アンジェリカが続けて何かを言いかけたとき、背後からの声がそれを遮った。

「お久しぶりです、お嬢様」

聞き覚えのある声だった。胸に黒い気持ちが広がっていくのを感じながら、アンジェリカはゆっくり振り向いた。

「いったいどういうつもり？」

彼女が睨みつけた先に立っていたのは、パーティでアンジェリカの肩を傷つけた少年、レオナルドだった。

ジークは一度見ただけだったがはっきりと覚えていた。ラグランジェ分家の嫌味な奴だ。そしてアンジェリカと結婚することになっていたかもしれない男……。

こいつなのか？ アカデミーに合格したのは。

ジークはアンジェリカの後ろで腕を組み、目つきを悪くしてそのブロンドの男を凝視していた。

「そんなに怖い顔をしないでください」

レオナルドはアンジェリカに笑顔を向けた。ジークやリックのことは視界に入っていないようだった。

「あなたのその外ヅラの良さには敬服するわ」

アンジェリカは苦々しくそう言うと、よりいっそうきつく睨んだ。その瞬間、レオナルドの顔に陰がさした。

「この前はやりすぎたと思っている。申しわけなかった」

嫌味に丁寧でもなく、蔑むでもなく、自然な口調だった。

思いがけない反応に、アンジェリカはとまどいを隠せなかった。しかし、今まで積み重ねてきたものがある。にわかにそれを信じるわけにはいかなかった。

「何を企んでいるの？ アカデミーに潜入して、しおらしさをよそおって」

アンジェリカは背筋を伸ばし、腕を組み、まっすぐにレオナルドを睨みつけた。少しの隙も見せないように気を張る。レオナルドはそんなアンジェリカから目をそらし、遠くの空を目を細めて眺めた。

「ただ証明しかっただけだ。お……」

「確かにあなたの言っていたとおり、アカデミーはたいしたことがないって証明されたみたいね」

アンジェリカはレオナルドの言葉を遮り、精一杯の嫌味を突きつけた。そして、しばらく彼の反応をうかがっていた。しかし、彼は無表情のままアンジェリカに背を向け、何も言わずその場を立ち去った。

アンジェリカはどうしても声を掛けられなかった。小さくなっていく彼の背中をただぼんやりと見ていた。

「なんかあったのか？ アイツと」

ジークの声で現実に戻された。

「うん……まあ、いろいろと」

アンジェリカにしてはめずらしく歯切れの悪い答えだった。ジークはそれがさらにひっかかった。

「いろいろって何だよ」

背中を向けたままのアンジェリカに、低い声で問い詰めた。

しかし、彼女はほとんど上の空で、「たいしたことじゃないわ」とつぶやくように言っただけだった。そして、深く考え込んだまま、アカデミーの門へと歩き出した。

ジークはその日ずっと機嫌が悪かった。そして、アンジェリカは考え込んだまま難しい顔で黙り込んでいた。三人はほとんど会話らしい会話をしていなかった。

授業を終え帰り支度をしていたリックは、アンジェリカを気にしながら、ジークにそっと耳打ちした。

「怒ってる場合じゃないと思うんだけど」

ジークは無言のままむすっとしていた。リックはさらに畳み掛けた。

「アンジェリカは不安なんだよ。怖がってるんだよ」

「……おまえ、俺にどうしろっていうんだよ」

ジークもアンジェリカを気にして横目で見ながら、声をひそめてリックに突っかかった。

「別にどうしろとは言わないけどね」

リックはとぼけたような口調で言った。それからアンジェリカに振り向き、明るく声を掛けた。

。

「ねえアンジェリカ。屋上、行ってみない？」

「え？」

ぼんやりしていたアンジェリカは、ふと我にかえるとリックに顔を向けた。彼はアンジェリカににっこりと笑いかけた。

「行こうよ、屋上」

柔らかい彼の声を聞きながら、アンジェリカは怪訝な顔をして首を傾げた。

「行っちゃいけないんじゃないの？」

「大丈夫。ジークがなんとかしてくれるから」

「おいっ！勝手に決めるなよ！」

リックの勝手な言いように、ジークは焦って身を乗り出した。そしてリックの肩越しに、アンジェリカと目が合った。気まずさを感じながら、なぜかふたりとも視線をそらすことが出来なかった。

「わかったよ。行こうぜ」

そう言ってわざとらしくため息をつくと、ズボンのポケットに手を突っこみ、教室の外へと出ていった。

「行こう」

リックに促されて、アンジェリカは彼とともに小走りで後を追った。

屋上へと続く階段は、いつものように封鎖されていた。

錆びた鎖がゆるく三重に渡され、その中央に「立入禁止」と書かれたプレートが斜めに架かっていた。プレートはほこりにまみれ、薄汚れていた。

しかし、阻んでいるものはそれだけではなかった。

「結界まで張らなくてもいいのにな」

鎖の背後はうっすら青白く光っていて、そこに結界が張られていることを示していた。

「でもかなり緩い結界だと思うわ。これくらいなら簡単に解除できるわよ」

アンジェリカはそう言うと、あたりをうかがった。誰もいないことを確認すると、手のひらを結界に向け、呪文を唱えようとした。

「待てよ」

ジークはアンジェリカの手をつかみ、それを止めた。

「なによ？」

「俺がやる。もしばれたら……まずいからな」

今度はジークが手を伸ばし、結界に向け呪文を唱えた。シュッとかすれた音とともに中央部分から広がるように光が消えていった。

ジークとリックは鎖をまたいだ。

アンジェリカは後に続こうとして足を止めた。そしてじっと鎖を見つめた。彼女がまたぐには高すぎる。しかしくぐるとほこりまみれになりそうだ。

「足あげろよ」

頭上から声が降ってくるのと同時に、アンジェリカの体が宙に浮いた。ジークが両脇から彼女の体を持ち上げていた。驚きながらも彼女は言われた通り、素直に足を折り曲げ膝を上げた。彼女はずっと自分の足元を見ていた。鎖を越えると静かに体を降ろされ、再び地に足がついた。

アンジェリカが顔を上げたとき、ジークはもう彼女に背中を向け歩き始めていた。

リックは前を向いたまま、ずっとにこにこしていた。

「……んだよッ！」

ジークは耳を赤くし、中途半端に声をひそめて彼に食ってかかった。

「別に」

リックはすました声で答えると、再びにっこり笑った。ジークはからかわれているような気がして、むすっとした顔のままよけいに耳を赤くした。アンジェリカもその後ろでかすかに頬を染めていた。

階段を登りきったところに、鉄製の錆びた扉があった。

ジークとリックは三本のかんぬきを抜き、扉を押した。ギギギ、と嫌な音をさせながら扉が動き、間から白い光が差し込んできた。

アンジェリカは右手を光にかざすと目を細めた。

リック、ジーク、アンジェリカは順番に屋上へ出た。

眼前にも頭上にも遮るものはない。その恐いくらいの解放感に、アンジェリカは息を呑んだ。「んー！」

中央へ走っていくと、リックは両手を伸ばし大きく息を吸った。

「おまえ、ホント好きだな、屋上」

ジークは腕を組み、浅く息を吐くと、少しあきれたような視線をリックに向けた。しかしリックはにこにこしたままおかまいなしだった。

「だって見てみてよ。この爽快感って他にないよ。それにいつもの景色がいつもとちょっと違って見えるのも好きなんだ。アカデミーのは初めてだけど、今まででいちばん見晴らしがいいよ」

そういうと顔を上げ、再び深く息を吸った。

アンジェリカも少し踵を上げて、思いきり息を吸い込んでみた。体の中を風が吹き抜けた。彼女は空を見上げて目を細めた。

ジークは柵にもたれかかりながら、アンジェリカの様子を見ていた。彼女の笑顔に、彼の表情もつられて緩んだ。しかし、リックが遠くから自分の方を見ていることに気がついて、バツが悪そうにうつむいた。彼の耳は再び赤くなっていた。

「ジークは屋上きらいなの？」

下を向いている彼に気がついて、アンジェリカは走り寄っていった。ジークは顔を少しそらせた。

「いや。嫌いじゃない、けど……」

アンジェリカが覗き込んできたので、ジークはさらに顔をそらせた。

「……………」

ジークは横目でアンジェリカをちらりと見た。

「少しは元気が出たみたいだな」

「あ、うん。……ありがとう」

アンジェリカは少しのとまどいを含んだ声で、ぽつりぽつりと答えた。

「礼はリックに言えよ」

彼女から顔をそむけたまま、ジークはぶっきらぼうに言葉を吐いた。アンジェリカはジークにどう接したらいいのかわからず、困って目を伏せた。

「無理にとは言わねえけど」

ジークは柵に身を預け、空を見上げた。

「悩んでることがあったら俺らに話せよ。解決は出来ねえかもしれないけど」

ジークはずっと仏頂面だった。しかし、アンジェリカはその横顔から照れの表情を見つけた。彼女はにっこりと笑った。

「おまえたちか」

よく通る低い声。扉から姿を現したのはラウルだった。リックはしまったという表情で振り返った。

「俺が無理やり連れてきたんだよ」

ジークはラウルを睨んで言い放った。アンジェリカは驚いて隣のジークを見上げた。

「だろうな」

ラウルは腕を組み、自分を激しく睨む少年をゆったりと見下ろした。ジークは負けじと視線をいっそう鋭くした。

「いえっ、行こうって言ったのは僕です！」

そう言いながら、後ろからリックが必死の顔で駆け寄ってきた。しかし、ラウルは冷めた目をジークに向けたまま、口を開いた。

「どっちでも構わないが、結界を解除したらすぐに張っておけ。他の者にわからないようになってっきり怒られるものだと思っていたリックは拍子抜けしてしまった。

ラウルはアンジェリカに視線を移した。

「アンジェリカ。話しておきたいことがある」

アンジェリカは小さくこくりと頷いて、ラウルの方へ歩きかけた。しかし、ふいにジークに肩をつかまれ、後ろに押し戻された。

「今日は行かせねえ」

そう言うとアンジェリカを後ろ手でかばうようにしながら、一步前へ踏み出した。背筋を伸ばし、口をまっすぐに結んで、ラウルの前に立ちはだかった。

「ジーク！ なに勝手なこと言ってるの？！」

アンジェリカはジークの背中を軽く叩いた。

「話があるならここで言えよ」

ジークは挑むように言った。彼の額には薄く汗がにじんでいた。

ラウルは眉ひとつ動かさずに、じっと彼を見ていた。そして、アンジェリカに視線を移すと、静かに口を開いた。

「ユールベルには気をつけろ」

ラウルはそれだけ言うと、身を翻し、扉をくぐって戻っていった。

「待って！ どういうこと？！ ユールベルって誰なの？！」

アンジェリカはジークを振り切り、ラウルを追いかけようとした。しかし、しっかりと腕をつかまれ引き止められた。

「離してよ！」

彼女はヒステリックに叫んだ。

「あしたでもいいだろう」

ジークは彼女の腕をつかんだままうつむき、小さな声で言った。

「ジークは私の気持ちなんて全然わかってない！」

こみ上げる感情のまま、アンジェリカは再び叫びを上げた。その声はわずかに揺らいでいた。それに呼応するように、ジークも感情を高ぶらせ声を荒げた。

「おまえだって俺の気持ちわかってねーだろ！」

アンジェリカはジークを睨みつけた。その瞳はわずかに潤んでいた。

「ラウルに反抗したいだけじゃない！」

ジークの手が緩んだ。アンジェリカの腕が、そこからするりと抜けた。彼女は数歩下がり、息苦しさをこらえるような顔でジークを見た。しかし、うつむく彼の顔には陰が落ち、表情を読みとることが出来なかった。

アンジェリカはしばらくジークを見つめていたが、意を決したように踵を返すと、ラウルを追って扉をくぐった。

ジークはもたれ掛かっていた柵を、ガツンと力を込めて叩き、歯をくいしばった。

32. 友の思い、親の思い

「本当にごめんなさい！ わざとじゃない……のよ？」

アンジェリカは顔の前で両手を合わせると、申しわけなさそうに、上目づかいでジークとリックを見た。

「てっきりジークが怒らせたからだと思ってた」

リックはちらりとジークを見ると、何か言いたげに目に笑いを含ませた。それから、アンジェリカに向き直るとにっこり笑いかけた。

ジークは顔を伏せ、耳を赤くしていた。

昨日の夕方、アンジェリカはジークの制止を振り切り、ラウルの後を追っていった。そしてその途中、自分たちが解除した結界を元に戻していった。いや、新たに結界を張り直したといった方が正しいだろう。そして、それは元のものとは比べものにならないほど強力なものだった。

彼女が意識をしてやったというわけではない。何気なく扉を閉めるくらいのつもりで張った結界だった。しかし、ジークとリックを屋上に締め出すには十分な強さを持っていた。ふたりがかりでもなかなか破ることができず、悪戦苦闘していたところへ二年の担任が通りかかり、助けられたというわけだ。

ついでに大目玉をくらってしまったことは言うまでもない。

それでも、どんなに問い詰められても、ふたりはアンジェリカのことは一言も口にはしなかった。

「ほとんど無意識だったのよ」

アンジェリカは肩をすくめた。

「多分、ラウルが元に戻しておけて言ったことが、頭に残っていたからだと思うけど」

「これもアイツの計算だったんじゃないかねえかと疑っちまうくらいだな」

ジークは小声でぼそぼそと言うと、乾いた笑いを浮かべた。

三人は食堂の隅のテーブルに席をとった。

「それで、ユールベルとかいう子のことは何か聞いたの？」

昼食をのせたトレイを机に置きながら、リックが尋ねた。

アンジェリカは椅子に腰を降ろすと、ほおづえをついた。

「それが全然。少し診察して、よくわからない質問をいくつかされて、それだけ。いくら聞いても答えてくれなかったわ」

不機嫌にそう言うと、コップを手に取り、水をひとくち飲んだ。ジークは勢いよくパンを頬張り、スープを流し込んだ。

「あんな気になることを言っというて、どういうつもりなんだかな」

「うん……」

さすがにアンジェリカも、これには同意せざるをえなかった。言葉を呑み込み、フォークでサラダをつつきながら、目を伏せていた。

「そのラウルの質問って、どんな質問だったの？」

リックはスープを片手に、少し頭を低くしてアンジェリカを覗き込んだ。

彼女は瞬きをしながら小首を傾げた。

「小さい頃のこととか……憶えているかどうか確かめたかったみたいだけど、よくわからないわ」

「ラグランジェ家のことなら、サイファさんかレイチェルさんに聞けばいいんじゃないのか？」

ジークは名案を思いついたといわんばかりにパッと顔を輝かせ、プチトマトを突き刺したフォークでアンジェリカを指した。

「もちろん聞いたわよ」

彼女は当然のこのように言った。しかし、その声からは明らかに不満を感じとれた。さらに顔を曇らせ、頬をふくらませると、背もたれに身を預けた。

「でも全然。昔に何度か顔を見かけただけであまり知らないとか言っていたけど、絶対にあやしいわ。何かを隠してるみたいだったし……」

フォークを握りしめたまま、しばらく考え込んでいたかと思うと、突然机に手を置き、身を乗り出した。

「ねえ」

「ん？」

ジークとリックは口にパンを頬張ったまま、アンジェリカを見た。

「ふたりから聞いてくれないかしら。私には言わなくても、ふたりになら話してくれるかもしれない」

アンジェリカの思いつめた表情に、ふたりは言葉を発することができなかった。そもそも彼女が人に何かを頼むということ自体がめったにないことだ。どれほど彼女が必死であるかは察して余りある。

「ね？」

彼女は不安げに言葉をつけ加えると、返事のないふたりをじっと見つめた。

「あ……ああ」

ジークはぎこちなく頷いた。

授業が終わり、皆それぞれ帰り支度を始めていた。ジークも鞆を開け、本をしまおうとしていた。そこへ――。

「ジーク」

教壇からの無愛想な声が彼を呼んだ。ジークは顔を上げ、声の主に対抗するかのよう、精一杯の仏頂面を見せた。

ラウルはそれ以上、何も言わなかった。教壇からただ無表情でジークを見ていた。その目が彼を呼んでいた。ジークはしぶしぶ立ち上がり、教壇へと歩いていった。ラウルは二つ折にされた

紙切れを、人さし指と中指の間に挟んで差し出した。

「サイファからの預かりものだ」

ジークは少し眉をひそめると、それをそっと引き抜いた。

「アンジェリカに悟られぬように、ということだ」

言うことだけ言うと、ラウルは教本を脇に抱え、さっさと出て行ってしまった。

ジークはしばらく怪訝な顔でラウルの姿を目で追っていたが、ふいに自分の手元に視線を戻し、渡された紙を広げてみた。

——本日、リックと二人で例の酒場へ。

中央に短くそれだけ書かれていた。そしてその右下にはサイファのサインが入っていた。ジークはそれを一握りすると、ズボンのポケットに突っ込んだ。

「どうしたの？」

振り返ると、アンジェリカが大きな瞳で不安げにじっと見つめていた。

「ああ……。きのうのお小言だ。心配するな」

うつむき加減で少し早口にそう言うと、ジークは帰り支度の続きを始めた。

三人は並んで歩き、外に出た。

正門の隣にはまだ合格発表の紙が張ってあった。ちらほらと見に来ている人もいる。

その中にひときわ目を引く、鮮やかな金の髪の少女がいた。アンジェリカよりやや年上くらいだろうか。半そでの白いワンピースから伸びた腕と脚は、折れそうに細い。緩くウェーブを描いたブロンドは腰まで達している。右の瞳は深い森の湖を思わせる蒼色、そして左目は白い包帯で覆い隠されていた。

——ユールベル……か？

ジークはなぜだかそう直感した。そして、隣のふたりも同じように直感していた。

気配を察したのか、少女がゆっくりと三人の方へ振り向いた。長いブロンドが風になびき、光を受け、きらきらと輝いた。

アンジェリカは息を呑んだ。

「あら、アンジェリカ。今から帰るの？」

背後からの声。調子が狂うくらいに明るい。アンジェリカが目を丸くして振り返ると、そこには優しく微笑むレイチェルが立っていた。

「どうしたの?!」

アンジェリカは驚いて、思わず語気を強くした。アカデミーの正門からレイチェルが出てくるなど、思いもしなかった。

「今日はこちらに来る用事があったのよ」

レイチェルはにっこり笑った。

「一緒に帰りましょう」

アンジェリカはこくと頷いた。レイチェルはジークとリックに一礼し、「それでは」と屈託

のない笑顔で言った。そして、アンジェリカの背中に手をまわすと、歩みを促した。

そのとき、アンジェリカは向かいの包帯少女がじっとこちらを見ていることに気がついた。いや、そんな気がただけかもしれない。少女は無表情で、目の焦点もはっきりとは合っていない様子だった。

アンジェリカは落ち着かない気持ちになった。言いしれぬ不安、恐怖にも似た感情が湧き上がる。なぜだか、ふいに母親の表情をうかがった。

レイチェルは穏やかに笑みを浮かべていた。

アンジェリカはようやく安堵して表情を緩めた。

そのとき、少女の口元が微かに笑ったことには、誰も気がつかなかった。

「僕たちも帰ろうか」

ふたりの背中を見送ったあと、リックはジークに振り向いて言った。ジークは無言でズボンのポケットに手を突っ込んだ。

「呼ばれてんだ」

ポケットからくしゃくしゃに丸まったままの紙を取り出し、リックに手渡した。彼は丁寧にそれを広げ、そこに書かれている文字を目で追った。そして顔を上げると、ジークと視線を合わせた。

「ユールベル……のことかな」

「さあな。とりあえず行ってみるか」

ジークは狭い路地に足を向けた。

次第に寂しくなる道を、ふたりは黙って進んでいった。しばらく歩き続け、看板も出ていない古びた建物に辿り着いた。外からはわかりづらいが、その地階が『例の酒場』である。

以前、サイファに連れられてここに来た。王宮で働く者たちの隠れ家的な場所であることはそのときに知った。

ジークは少しこわばった面持ちで、扉を押し開けた。

「いらっしゃい」

長い黒髪の女主人フェイが、カウンターから気だるく声を掛けた。ふたりは店に入ると軽く会釈をした。そして狭い店内をぐるりと見渡した。

「サイファなら個室で待ってるよ」

ニッと悪戯っぽく、そしてどこか艶っぽく笑うと、フェイはカウンターの奥を親指で指した。

「ほら、ぼーっとしてないで。おいで」

まるで母親が子供をたしなめるような口調で言うと、笑ってふたりを手招きした。

カウンターの奥に『個室』はある。

しかし本来そこは店ではなく、フェイの応接間兼リビングルームなのだ。サイファが重要な話

をするとき、無理をいって使わせてもらっているらしい。

そして、今回も個室である――。

「少年ふたりのお届けー」

抑揚のない声でそう言うと、フェイはジークとリックの背中を軽く押した。サイファはソファに座っていたが、ふたりの姿を見ると立ち上がり、にっこり微笑みかけた。

「ごゆっくり」

フェイは目を細めてサイファを一瞥すると、カウンターへと消えていった。

「突然、呼び出してしまってすまない」

サイファはにっこり笑って、手を向かいのソファに差し出し、ふたりに座るよう促した。

「いえ……」

リックが重い声で答え、ふたりはソファに腰を降ろした。続いてサイファも静かに座った。

「察しはついていると思うが……」

ふたつのグラスに氷を入れ、ウィスキーを注ぐと、ふたりに差し出した。

「アンジェリカのことだ」

サイファをじっと見つめたまま、ジークはわずかに頷いた。

「単刀直入に言おう」

サイファはいったん目を閉じ、深く息を吐くと、まっすぐにジークとリックを見つめた。

「アカデミーをやめさせようと思っている」

予想を超えたその言葉に、ふたりは凍りついた。逆に、心臓は口から飛び出さんばかりに激しく打っていた。

「アカデミーをやめたからといって、君たちとの縁が切れるわけではないよ」

ふたりの様子を察して、サイファは優しくつけ加えた。

「でも、アンジェリカの……」

リックが身を乗り出して何かを言いかけたが、ジークの手がそれを制した。

「わけを、聞かせてもらえますか？」

ジークは努めて冷静に言った。だが、その声は少しうわずっていた。

サイファは前を向いたまま、視線だけを落とした。

「申しわけないが、それはできない」

そのにべもない答えにも、ジークは怯まなかった。

「きのうラウルが言ってました。ユールベルには気をつけろと。それと関係があるんじゃないですか？」

「ラウル……。そんなことを言ったのか」

サイファは前のめりにうつむくと、目を閉じ、深くため息をついた。

「しかし、これ以上は教えるわけにはいかない。なにがなんでもアンジェリカに悟られるわけに

はいかないのだ。君たちを信用していないわけではないが、アンジェリカがしつこく食い下がってきたら、つい言うてしまうことも考えられるだろう」

ジークは今日の昼のことを思い出していた。サイファから聞き出してほしいと頼んだアンジェリカの必死の表情が頭をよぎった。確かに、それに関してはサイファの言うとおりかもしれない。しかし……。

「アンジェリカにはどう説明するんですか？ 何の説明もないのでは、納得しないと思いますけど」

ジークが言おうとしていたことを、先にリックが口にした。

「納得か……。納得しないのなら、それはそれで仕方がない」

サイファは自らに言い聞かせるように、そう言った。リックは膝の上にのせた両こぶしを強く握りしめた。

「サイファさんはさっき言いましたよね。アンジェリカがアカデミーをやめても、僕たちとの縁が切れるわけではないと。それはユールベルという子にも当てはまるのではないですか？ アカデミーをやめたからといって、逃げられるものなんですか？ それともずっとアンジェリカを家に閉じ込めておくつもりですか？」

リックは一気にまくしたてた。彼にしてはめずらしく語気が荒く、少し怒っているようにも聞こえた。ジークでさえ、こんなリックを見ることはほとんどなかった。

サイファは目を細めて、それをじっと聞いていた。リックの言葉が途切れると、彼はゆっくり口を開いた。

「もしそれしか手立てがないのなら、私はそうするだろう」

「俺が守ります」

ジークがサイファの言葉をさえぎるように、きっぱりと言った。口を堅く結んで、まっすぐにサイファの瞳に視線を送った。

リックは目を見開いて、隣のジークに振り向いた。

「アカデミーにいる間は、俺が守ります」

ジークはもう一度、噛みしめるように繰り返した。

サイファはふっと表情を緩めた。

「ありがとう。気持ちはとても嬉しいよ」

そう言うてうつむき、少し寂しそうに笑った。

「しかし、アンジェリカの記憶までは、守ることはできないだろう」

「記憶？」

ジークは怪訝に尋ね返した。サイファは顔を上げ、鋭い目つきで、まっすぐにふたりに向き直った。

「私たちは、アンジェリカの記憶の一部を消した」

「……え？」

ジークとリックは、彼の言ったことが、とっさに理解できなかった。

「正確に言えば、記憶そのものを消したわけではない。思い出すためのルートを断ったというところだな」

サイファは淡々と説明を続けた。ふたりは口を半開きにしたまま、呆然として彼を見つめた。「だから、記憶がよみがえる可能性は十分にある。ユールベルに関われば関わるほど、その危険性は大きくなるだろう」

「そこまでして隠しておきたい事実って……」

リックはそこで言葉を詰まらせた。そして、尋ねかけるような目をサイファに向ける。

「少ししゃべりすぎたようだ」

サイファはグラスを取り、半分ほど残っていたウィスキーを一気に飲み干した。グラスの中の氷がカランと音を立てて回った。ジークもその音に誘われ、グラスを手にとった。冷たい感触。今が現実であることを、あらためて思い知らされた気がした。

「君たちの話は意見としてもらっておく。もう一度、レイチェルともよく相談してみるよ」

サイファはにっこりと笑ってみせた。今までの話がすべて嘘ではないかと思えるほど、暗い陰などみじんも感じさせなかった。しかし、次の瞬間、彼は遠くを見やり、どことなく寂しげな表情を見せた。

「今度は楽しい話をしながら飲みたいものだな」

リックはわずかに笑顔を作って頷いた。しかし、ジークは手にしたグラスに目を落とし、思いつめた顔で考え込んだ。琥珀色の表面には、彼の不安げな瞳が映し出されていた。

33. 説得

「おはよう、アンジェリカ……ってその荷物どうしたの？」

非常識に大きなリュックサックを背負ったアンジェリカを見て、リックは目をぱちくりさせて尋ねた。まるで山登りにでも行くかのような格好である。

「家出、するの」

彼女はうつむいたまま、不機嫌に低い声で言った。そして、ずり落ちそうになったストラップをつかみ、肩を揺らして背負い直した。

「家出？」

ジークはきょとんとして聞き返した。アンジェリカは顔を少しだけ上げると、上目づかいでじっと彼を見つめた。

「アカデミーをやめろって言うのよ」

「あ……」

ジークは小さく声をもらすと、隣のリックと顔を見合わせた。

サイファからその話を聞かされたのが数日前。ふたりの説得により、もう一度考えると言っていたが、やはり結論は変わらなかったらしい。

「驚かないのね。もしかして、知ってたの？」

アンジェリカは訝しげに眉をひそめた。下から覗き込むようにして、ふたりを睨み上げる。リックはたじろぎ、半歩下がった。

「驚きすぎて声が出なただけだよ」

額に冷や汗をにじませながらも、なんとか取り繕った。ジークも調子を合わせて頷いた。

しかし、アンジェリカは疑いのまなざしをやめなかった。腰に手を当て、下から顔をつきつけた。それでも、ふたりは何も答えようとしなかった。リックは微笑み、ジークは仏頂面を見せられている。

やがて彼女は「まあいいわ」とつぶやき、アカデミーへと歩き始めた。ジークとリックも、ほっとしながら、彼女の両側に並んだ。

「そうだわ。どちらかの家に泊めてほしいんだけど」

彼女は両脇のふたりを交互に見た。

「あー、僕のところはダメかな。親がうるさいし」

リックは焦りを笑顔で隠し、すばやく言い逃れた。

「それじゃ、ジークの家にするわ」

アンジェリカは、さも当然のこのように言った。ジークは疲れたようにため息をついた。

「『するわ』って言われても困るんだよ。俺んち狭いの知ってるだろ？ 布団だってねえよ」

「気にしないで。ソファで寝るから」

ジークの迷惑顔を無視して、アンジェリカは話を進めた。ジークは再び大きくため息をついた

。

「あのなあ、ソファなんて贅沢品、ウチにはねえよ」

アンジェリカはそれでも引かなかった。

「じゃ、ジークの隣で寝かせてもらうわ」

「ばっ、バカか！！」

ジークは顔を一気に上気させた。その隣でリックは声を殺して笑っていた。

「なによ、意地悪！」

アンジェリカは思いきり頬をふくらませた。そして、まっすぐ前を見ながら腕を組むと、再び口を開いた。

「いいわ。ラウルのところに泊めてもらうことにする」

ジークは一気に熱が引いていくのを感じた。

「ていうか、そういう問題じゃねえ。家出なんてダメだ」

急に真剣な表情になると、アンジェリカに人さし指を向け、彼女をたしなめた。しかし、それはかえって火に油を注ぐ形になってしまった。

「私がアカデミーをやめさせられてもいいって言うの？！」

アンジェリカは感情を高ぶらせ、ジークに噛みついた。

「そうよね、ジークにとってはしょせん他人事ですものね！」

——バン！！

突き放したようにアンジェリカがそう言い終わると同時に、ジークは持っていた自分の鞆を地面に叩きつけていた。

アンジェリカは驚いて彼を見上げた。

「なんにも知らねえで、勝手なことを言ってんじゃねえ。俺は……」

ジークはうつむいたまま、かすれがすれに言葉を吐いた。叫びたい衝動を、喉の奥で必死に押しえつけていた。

アンジェリカは動揺しながらも、反論をやめなかった。

「私の知らないことって何よ。この間からみんな、誰も、私になんにも教えてくれなくて……。それで何をわかれって言うのよ！！勝手なのはどっちよ！！」

今度はジークが驚き、アンジェリカを見た。彼女の、何かに耐えているような悲痛な表情。それは触れるだけで崩れ落ちそうな、そんな脆さを感じさせた。ジークの胸は激しく締めつけられた。

「悪かった」

静かにそう言うと、彼は叩きつけた鞆を拾い上げた。そしてアンジェリカの背負っているリュックサックを後ろから持ち上げた。

「え？」

「重いだろ。持つよ」

少しとまどいながらも、彼女は素直にリュックサックから腕を抜いた。

「でも、家出はダメだ。逃げたって何の解決にもならねえだろ」

ジークはリュックサックを左肩に掛けながら言った。アンジェリカは無言でうつむき、暗い顔で考え込んだ。

「もう一度よく話し合ってみようぜ。俺たちも一緒に行くから、な」

めずらしく優しい口調でそう言うと、ジークはアンジェリカの肩に手をのせた。リックもうなずいて、反対側から彼女の肩に手を置いた。アンジェリカは硬い表情で小さくうなずいた。

「しかしこれ、本気で重いな。よくこんなものを背負ってここまで……」

驚き半分、呆れ半分でジークはつぶやいた。

終業を告げるベルが鳴った。

「今日はここまでだ」

教壇のラウルは手に持っていた教本を閉じ、バンと机の上に叩きつけるように置いた。それを合図に、生徒たちは帰り支度やおしゃべりを始める。教室はざわめきで満たされていった。

「さあ、気合い入れるか」

小さく独り言をつぶやいて、ジークは自らを奮い立たせた。その勢いで、教本を鞆の中へ乱暴に放り込むと、急いで席を立った。

「アンジェリカ」

ジークは彼女に駆け寄った。だが、彼女は椅子から立ち上がり、教壇をじっと見つめていた。そこにいるのは、もちろんラウルである。

「俺たちじゃ頼りにならねえか？」

ジークは少しムツとしながら尋ねた。アンジェリカはそれでもラウルから目を離さなかった。

「簡単なことじゃないのよ」

前を向いたまま、彼女は小さな声で言った。

ラウルは視線を感じたのか、彼女の方へ歩き出した。ジークは向かってくるラウルを睨みつけた。しかし、彼は全く意に介していないようだった。

「私に何か用か」

ラウルはアンジェリカの前にひざまづき、彼女と視線を合わせた。アンジェリカは無表情で小さく首を横に振った。

「また、今度ね」

「……そうか」

ラウルは何か言いたげなアンジェリカの表情を察していたが、それ以上の追求はしなかった。彼は静かに立ち上がると、教室をあとにした。

「もし今日の説得が失敗したら、そのときはラウルに頼むけど……怒らないでね」

ラウルがいた辺りに視線を残したまま、アンジェリカは抑揚のない声で言った。ジークは何も言葉を返すことが出来なかった。

「さーて、乗り込むか」

アカデミーの門から出たところで、ジークは右のこぶしを左の手のひらにパチンと打ちつけて

気合いを入れた。アンジェリカの大きなリュックサックをジークが背負い、そのかわりにジークの鞆をアンジェリカが持っていた。

ジークはストラップをぐいと引っ張り、背中を揺らして背負い直すと、口を真一文字に結び、アンジェリカの家の方角をきつく睨みつけた。ジークの迫力に圧倒され、リックは少し引きぎみに苦笑いした。

「今からそんなに張り切ってるよ、着く頃には疲れちゃうんじゃない？」

「なに言ってるんだ。おまえも気合い入れろよ。そんなことじゃ勝てねえぞ！」

ジークは眉間にしわを寄せ、弱気なリックの鼻先に人さし指を突きつけた。リックは笑顔を張りつかせたまま一歩下がった。勝ち負けの問題じゃないのにと思いながらも、あえて口には出さなかった。

「おまえもだぞ」

今度は少し穏やかな声で、後ろのアンジェリカに振り向いた。

「わかってるわ」

ジークと目を合わせることなく、アンジェリカは硬い表情で静かに言った。

「こんにちは」

明るい声が3人を不意打ちした。振り返ると、そこにはレイチェルが笑顔で立っていた。右手を顔の横で広げ、小さく左右に振っている。

彼女は合格発表の翌日から、毎日のように現われていた。初めは「用があった」という彼女の言葉を信じていたが、こんなにも続くのは不自然である。アンジェリカを迎えに来ているのだということは、もはや明らかだった。

しかし、ジークもリックも、そしてアンジェリカも、それについて尋ねることは出来ないでいた。

「一緒に帰りましょう」

レイチェルはにっこり笑いかけた。しかし、アンジェリカは目を伏せて、頬をふくらせた。

「家出するって言ったのに……」

「あら、本気だったの？」

レイチェルは笑顔で受け流した。

「あの」

ジークはとまどいながらも声を掛け、ふたりに割って入った。レイチェルは大きくまばたきをする、にっこりとしてジークに顔を向けた。そして首を少し傾げ、話の続きを促した。ジークは頭に血がのぼっていくのを感じた。

「あ、え……と。今日は俺たちも一緒に行きます。サイファさんを説得、じゃなくて……えーと、話したいことがあるんです」

「とても大事なことです」

隣からリックがつけ加えた。

「サイファは今日は遅くなるかもしれないけど、それでも良いかしら」

「待ちます」

ジークは間髪入れずに答えた。

ジークとリックは、アンジェリカ、レイチェルとともに、彼女たちの家へ行った。サイファの帰りが遅いということで、レイチェルに勧められ、ふたりは夜ごはんをご馳走になった。

そのあと、サイファを待ちつつ、アンジェリカの部屋で勉強を始めた。丸いローテーブルに三人が等間隔に座り、それぞれ本やノートを広げ、無言で読み進めていた。ときおりページをめくる音だけが部屋に響く。ジークは落ち着かない気持ちになりながらも、ふたりの邪魔をしないように、なるべく本に集中しようとしていた。

しばらくそうやって勉強していたが、やがてリックがそわそわし始めた。こっそりと、だが何度も腕時計を目にしていた。

彼のそんな様子にジークが気づいた。

「帰ってもいいぜ」

リックは迷いながら目を伏せたが、少し考えて「うん」とうなずいた。そしてアンジェリカに目を向けると、申しわけなさそうに眉をひそめ「ごめんね」と謝り、慌てて机の上のものを鞆にしまい始めた。

ふたりはリックを見送ったあと、再び座って本を広げた。

「リック、どうしたの？」

アンジェリカが尋ねた。ジークは一瞬ためらったが、やがて口を開いた。

「……こないだ母親が倒れたらしいんだ。あいつはあいつでいろいろ大変みたいだぜ」

思いもしなかった言葉に驚き、アンジェリカは目を大きく見開いてジークを見た。しかしすぐに目を細めて気弱にうつむいた。

「おまえが気にすることはねえよ。無理に連れてきたわけじゃないんだし」

「うん……でも、大丈夫なの？ お母さんは」

彼女は不安そうに尋ねた。ジークは机にほおづえをつき、顎を上げると、どこか上の方を見やった。

「どうなんだろうな。俺、向こうの親とはあんまり親しくしてねえんだ。俺のことあんまり良く思ってねえみたいだし」

「どうして？」

アンジェリカはそう尋ねながら、気がついた。リックの両親のことが話題にのぼったことは、今までほとんどなかったということに――。

「俺、ガラが悪いし、不良だと思われてんだ」

ジークはほおづえをついたままアンジェリカを見ると、笑いながらそう言った。彼女にはその笑顔がどこか寂しげに見えた。

「ま、思い当たる節もいろいろあるんだけどな。あいつんちの窓ガラス三枚くらい割ったし、壁に穴も開けたな。あ、わざとじゃねえぞ」

「……ウチは壊さないでよ」

アンジェリカは呆れ顔で言った。

そのとき、外でガタンと音が鳴った。続いて、話し声がかすかに耳に届いた。アンジェリカとジークは顔を見合わせた。

「行くか」

「策はあるわけ？」

「気合いだ」

アンジェリカは不安を感じながらも、ジークとともに部屋をあとにした。

サイファは驚きもせず、ジークを暖かく迎えてくれた。

「来ると思っていたよ」

疲れも見せずにつこり笑って、ジークにソファを勧めた。その後ろでレイチェルも穏やかな微笑みを浮かべていた。ふたりの雰囲気飲み込まれないよう、ジークは精一杯気持ちをとがらせた。

ジークとサイファはほぼ同時に腰を落とした。ふたりはテーブルを挟んで向かい合せになっている。アンジェリカはジークの隣にちょこんと座った。そして、空いていたサイファの隣に、レイチェルがゆっくりと腰を下ろした。

「さて、ジーク。察しはついてるが、君の話を知ろうか」

一見、穏やかな表情に見えたが、その瞳は鋭く、真剣さをうかがわせた。ジークはまっすぐに見つめ返した。

「アンジェリカはアカデミーをやめたくないと言っています。家出までしようとしていました。それなのに、何の説明もなくやめさせるのはあんまりではないですか？」

これではこの前と同じことを繰り返しているだけだ……。ジークは歯がゆかった。しかし、口下手なジークに上手い説得の言葉など、そう簡単に出てくるわけもない。

「子供の危険をあらかじめ回避するのが親の役割なんだよ」

サイファは優しく、だがきっぱりと言った。

「それは……だから……俺がなんとか守ります」

ジークは隣を気にしながらも、サイファから目をそらさずに、まっすぐ言葉をぶつけた。

アンジェリカは驚いて隣のジークを見上げた。目をぱちくりさせながら、彼の真剣な横顔を見つめた。

「だが、君には君の本分がある」

サイファは静かに反論した。

「アンジェリカのボディガードではない。常にアンジェリカのまわりに気を配るというわけにもいかないだろう。例えば、女子トイレにまでついていくことは出来ない——」

「お父さん！！」

アンジェリカは叫んだ。サイファはセリカの事件を指して言っているのだ——そこにいる全員

がすぐにわかった。ジークは何も返すことが出来ず、うつむいて押し黙った。

「すまない。君を責めているわけではないんだ。だが、事実だ」

サイファは短くとどめを刺した。ジークはまるで冷たい手で心臓を掴まれたかのように感じた。声などとても出なかった。

「私が自分で気をつけるわ。隙なんて見せない」

横からアンジェリカが強気に言い放った。強い光を込めた目で、サイファを挑むように見つめている。

「いいことを思いついたわ！」

突然、レイチェルが緊張感を融かすようなはしゃいだ声をあげた。

「ボディガードをつけるというのはどうかしら？」

「嫌よ！ 私は普通に学園生活がおくりたいの！」

アンジェリカは即座に言い返した。レイチェルは娘の反撃にしゅんとしておとなしくなった。

「……ねえ」

アンジェリカは一息つくと、再びサイファに顔を向けた。サイファはゆったり構え、彼女の次の言葉を待っていた。

「生きていくって、誰でも多少の危険は伴うものなんじゃないの？ ふたりとも過保護だと思うわ」

「アンジェリカ、多少ではないよ。おまえの場合」

サイファは優しく諭すように言った。しかし、アンジェリカは納得しなかった。

「だから！ それがなんなのかわからないのよ！！」

いらついで叫ぶアンジェリカを見て、サイファの表情は、一瞬、曇った。しかしすぐにポーカーフェイスを装うと、話を続けた。

「おまえは分家の連中に良く思われてはいない。わかるだろう？」

「……ユールベルって子なんでしょう？」

アンジェリカは静かにそう言うと、周りの反応をうかがった。しかし、誰も口を開かない。レイチェルはうつむき、ジークはサイファの様子をうかがっていた。そして、そのサイファはアンジェリカをまっすぐ見つめていた。

アンジェリカはごくりと唾を飲み込んだ。

「何を隠しているの……？ 本当に、本当に、どうして……。もう、いいかげんにしてよ！！」

初めは静かに切り出したが、次第に感極まっていった。言葉もまともに出てこない。最後にはただわけもわからず叫ぶだけだった。

それでも他の三人には動きはなかった。

アンジェリカはふいに自分以外の世界が止まってしまったかのような感覚にとらわれた。

「アカデミーに入る前までは、私はほとんど部屋の中でひとりで過ごしていた」

彼女は独り言のようにつぶやいた。そして、虚ろにソファから立ち上がると、ゆっくりと歩き始めた。

「それが私にとっては当たり前だったし、別に寂しいとは思っていなかった。……でも」

足を止め振り返り、大きな瞳でジークを見つめた。ジークの鼓動はドクンと強く打った。
「外の世界を知ってしまったから、もう今さらあんな孤独な生活に戻れない。お父さんとお母さんは優しいけれど、それだけじゃ駄目なの！」

アンジェリカは視線をレイチェルへ、それからサイファへと流した。

「どうしてもアカデミーをやめさせるっていうのなら……」

彼女はゆっくりと大きく呼吸をした。

「私、死ぬわ」

落ち着いた声。だが、決意を秘めた激しい瞳。それは、彼女が軽い気持ちで言っているのではないということを表していた。

「アンジェリカ！ 落ち着いて！ 別にアカデミーをやめたからって、ジークさんたちと会えなくなるわけでもないのよ。ジークさん、会いに来てくださいますよねっ？」

レイチェルは慌ててジークに同意を求めた。

「そ、そうだぞ！ 早まるな！ な？！」

「ちょっとジーク！ 両親を説得しに来たんじゃなかったの？！」

アンジェリカは驚いた声をあげながら、半分呆れていた。

「あ、いや……その……。とにかく死ぬなんてダメだ。な？」

ジークはしどろもどろになりながら、それでもなんとか思いとどませようと必死に訴えかけた。

「わかった。私たちの負けだ」

冷静にことの成り行きを見守っていたサイファが、突然「負け」を宣言した。

「ここで頑固に突っぱねて、肝心のアンジェリカを不幸にしてしまっちは、本末転倒だからね」

サイファはそう言うと、アンジェリカににっこり笑いかけた。

「サイファ……」

彼の唐突な方向転換に、レイチェルはとまどいを隠せなかった。

「もうこうする以外に術はないよ。誰に似たのか頑固だからね、あの子は」

サイファは笑って肩をすくめた。しかし、レイチェルはまだ不安そうに顔を曇らせている。

「それに、私たちの不安は単なる邪推かもしれない、だろう？」

サイファは彼女を安心させるように、優しく耳打ちをした。それから真剣な目になると、ジークに向き直った。

「頼んだよ」

ジークはずっしりとのしかかるものを感じながらも、それに負けないよう背筋を伸ばした。

アンジェリカはジークを玄関先まで見送るために、彼とともに外へ出た。外はすっかり暗くなっている。冷たい風がふたりの髪を揺らした。

「死ぬ気なんて、なかったんだろ」

「本気だったわよ」

お互い前を向き、視線を合わせないまま、淡々とした口調で言った。

「二度と言うなよ、あんなこと。……卑怯だぞ」

「卑怯？」

アンジェリカはジークの横顔を見上げた。しかし、ジークは無言で門に向かって足を進めた。アンジェリカもその横について歩いた。

「人質にとって脅すヤツらと変わんねえだろ」

ジークは歩きながらぼそりと言った。

アンジェリカはうつむいた。ジークの言うことはもっともだった。でも……じゃあ、どうすれば良かったの？ やりきれない思いを抱え、沈んだ表情を見せた。

カラン――。

ジークは門の留め具を外すと、すぐに外へと出た。アンジェリカは内側から留め具を元に戻した。

「何の役にも立てなくて……悪かった」

ジークは彼女に背を向けたまま言った。

アンジェリカの胸に熱いものがよぎった。門の格子を両手で掴み、顔を近づけると、歩き去るジークに向かって叫んだ。

「私、嬉しかった！ 私のことを守るって言ってくれて！！」

ジークは振り返ることなく、遠くで右手を上げた。次第に小さくなる彼の姿は、やがて闇に掻き消されていった。

アンジェリカは門に張りついたまま、ずっと彼の背中を見送っていた。

34. 友達だった

ガチャッ。

ラウルはロックもせずに扉を開け、蛍光灯の光が満ちた部屋へ足を踏み入れた。

魔導省の塔、その最上階の一室。サイファは中央の机につき、書類に目を通していたが、その音につられ、わずかに顔を上げた。しかし、ラウルの姿を確認すると、何もなかったかのように再び手元に視線を戻した。そして、羽ペンを手に取り、書類の上に走らせ始めた。

ラウルは後ろ手で扉の鍵を閉めた。

「おまえの欲しがっていたものだ」

サイファの方へ歩を進めながら、四つ折にされた紙をかざした。それを見て、サイファはようやくニッコリ笑った。

「恩に着るよ」

ラウルがそれを机に置くと、サイファは間髪入れず手に取って広げた。数枚にわたるその紙には、細かい文字や数字がびっしり書き込まれていた。左上には「極秘」と判が捺してある。本来、朱色で捺されているはずだが、その紙には黒く写っていた。どうやら原本ではなくコピーのようだ。

「ばれたら私はクビだ」

ラウルは腕を組み、食い入るように文字を追っているサイファを冷ややかに見下ろした。

「私もクビどころでは済まないだろうな」

サイファはさらりとそう言うと、顔を上げた。そして、ラウルに挑戦的な視線を投げかけ、小さくニッと笑った。

「でも、おまえなら上手くやってくれると思った」

「勝手なことばかり言うな。おまえはそうやってすぐに私を利用する」

ラウルはむっとして言い返した。

「そうだな。なら今度はコーヒーでも入れてもらおうか」

サイファは冗談とも本気ともつかない口調でそう言うと、再び極秘文書に目を通し始めた。

「……用がないのなら帰るぞ」

「急ぐ必要はないのだろう？ 久しぶりにここから朝焼けを見ていったらどうだ。椅子はそこだ」

サイファは紙から目を離さずに、部屋の隅に立て掛けられたパイプ椅子を指さした。

「それからコーヒーはその戸棚の中」

今度は返す手で反対側を指さした。

ラウルがコーヒーを淹れ終わる頃、サイファも最後の一枚を読み終えた。

「何かわかったか」

「いいや。だが、真実に近づくヒントにはなった」

そう言うと、サイファはくしゃっと紙を握って丸め、短く呪文を唱えた。手の中央から白い閃光が走り、その紙は一瞬にして細かな灰となり飛び散った。

「一度見ただけ、か。相変わらず覚えが早いな」

ラウルは淹れたてのコーヒーをふたつ持って歩いてきた。そのひとつをサイファへ差し出す。彼はにっこり笑ってそれを受け取った。

ラウルは蛍光灯を消し、カーテンを開けた。

大きな窓に映し出された空は、まだ深い紺色だった。しかし、地平に近い部分はだいぶ薄くなり始めていた。まもなく夜が明ける――。

サイファは薄暗がりの中でコーヒーを一口飲むと、ほっとして大きく息を吐いた。

「おまえの淹れるコーヒーは最高だ」

「話せ。気がついたことがあるのだろう」

ラウルは彼に振り向いた。暗がりの中にほんのりと浮かび上がったサイファの端整な横顔から、笑みはもう消えていた。

「いくつかある。最も気になったのは、おまえも気がついたらろうが、魔導耐性値だ。この値のみが突出している。他の数値との差を考えたら異常だ。よほど片寄った訓練を行ったか、あるいは長年にわたって異常な状況下に置かれたか、だな」

サイファはひとことひとこと丁寧に述べていった。そして一区切りつくと、コーヒーを口に運んで、小さく息を吐いた。

「思い当たることがあるのか」

ラウルが尋ねると、一瞬、サイファの瞳に陰がさした。

「彼女の家の二階には、常に結界が張られていた。おまけに偽装されていたんだ。おかげで最近まで気がつかなかったよ」

冷静に答えたが、その中に若干の自責がにじんでいた。ラウルは無表情で彼を見つめ、パイプ椅子に腰を下ろした。ギシ、と安っぽい音が響いた。

「彼女はずっとその結界の中にいたということか」

「ああ、おそらく」

サイファは息を吐きながら、背もたれに身を預けた。目を細め、天井を見つめる。

「二階すべてに結界、しかも常時、そのうえ偽装となるとかなり厄介だろう」

「バルタスなら出来るよ。そこまでの労力を払って結界を張る理由、そして結界を悟られたくない理由として、考えられるのはふたつ」

サイファは淡々と言い、指を二本立てた。

「ひとつは家族ぐるみで秘密裏に特訓をしていた。もうひとつは、何らかの理由で彼女をそこに閉じ込めていた」

指折りながら可能性を上げる。ラウルは腕を組み、口を開いた。

「魔導耐性値のみが高いことを考慮すると、後者だろうな」

「私もそう思う。あれ以来、ずっと彼女を見かけなかったからね」

サイファは同意した。ラウルは彼にちらりと視線を走らせた。

「彼女の目的はおまえたちへの復讐か」

「私たちだけではないかもしれない」

サイファは眉根を寄せ、重々しい表情を見せた。

ラウルは立ち上がり、窓枠に手をついた。外はもうだいぶ明るくなっていた。東の空は赤く染まり、濃青色へとグラデーションが広がる。そして灰色の雲が相反する色を繋ぐ。夜明けのごく短い時間にだけ見せる、色鮮やかな光景だ。

サイファも椅子をまわし、ラウルの隣でその光景を眺めた。朝の光を浴び、柔らかく表情を緩める。

「これが夜勤の唯一の楽しみなんだ」

「所詮は作り物だ」

ラウルは目を細めて、遠く、空の果てのその向こうを見つめていた。

「故郷が恋しくなったか？」

サイファは挑発するように声を掛けた。ラウルはムツとして背を向け、大股で戸口に向かって歩き始めた。

「いつか見せてくれないか。作り物ではない、果てない空というやつを」

サイファは去りゆくラウルの背中に声を投げかけた。ラウルは扉に手を掛け、顔だけわずかに振り返った。眉をひそめサイファを睨みつける。

「あまり私をからかうな」

サイファは返事をする代わりに、にっこりと満面の笑顔を返した。

「……ジーク。気持ちは嬉しいけど、そんなのじゃ今日一日だってもたないわよ」

アンジェリカは、一歩前を歩くジークの背中に、少し困ったように声を掛けた。ジークはずっと左右をきょろきょろ見渡し、すぐにでも応戦できるよう少しも気を抜かないで構えている。

「いつ何があるかわからねえだろ」

「それはそうだけど……」

アンジェリカはリックと顔を見合わせ肩をすくめた。リックも苦笑いしながら、同じポーズを返した。

今日がアカデミーの入学式である。すなわち、今日からユールベルやレオナルドが、このアカデミーに通ってくるということだ。ジークの過度の警戒はそのためだった。

「リック、後ろ見てるか？」

ジークは前を向いたまま、張りつめた声でリックに問いかけた。

「ちゃんと見てるから心配しないで」

リックはアンジェリカと並んで歩きながら、軽く答えた。ふたりは再び顔を見合わせて、声を立てずに笑いあった。

「お嬢さま」

背後からの声に、アンジェリカの笑顔が凍りついた。

「いいかげん、私につきまとうのはやめたら？」

思いきり顔をしかめて振り返ると、その声の主、レオナルドを睨みつけた。レオナルドは硬い表情で棒立ちになっていた。柔らかいブロンドだけが、風になびき揺れている。

前を歩いていたジークは、慌ててふたりの間に割って入った。右手でアンジェリカを庇い、レオナルドをキッと睨みつけた。

「リック！ 見てたんじゃなかったのかよ！」

「平気よ」

リックが口を開くより先に、アンジェリカが冷たく言った。

「こいつはラグランジェ家の敷地内でしか強気に出られないんだから」

行く手を阻むジークの腕を静かに下ろし、彼女は一步前を出た。顔を上げ、強い意志を秘めた瞳をレオナルドに向けた。

「もう、おまえをどうこうするつもりはない。この前おまえに謝ったのは本心だ」

レオナルドは静かに言った。

「どういう心境の変化？」

アンジェリカは腕を組み、疑わしげに眉をひそめた。

「子供じみたことは、もう卒業するってことさ」

「……………」

「同じラグランジェ家の者どうし、仲良くしよう」

あまりにも意外なレオナルドの言葉に、アンジェリカは動揺を隠せなかった。

「関係ないわ」

乾いた声でそれだけ言うと、踵を返そうとした。だが、ふとあることが頭をよぎり、再びレオナルドに顔を向けた。

「あなた、ユールベルって知ってる？」

隣のジークは驚いてアンジェリカに振り向いた。アンジェリカはまっすぐレオナルドを見上げ、彼の答えをじっと待っていた。レオナルドは怪訝な顔をしながらも、アンジェリカから目をそらさずに口を開いた。

「今年アカデミーに入る子だろう？ でも、もう何年も見てないし、よく知らないな」

「そう」

アンジェリカは、これ以上何も聞きだせそうもないと判断し、レオナルドに背を向けようとした。そのとき――。

「でも、おまえたちは友達なんだろう？」

アンジェリカは唐突に脳と心臓をわしづかみにされたように感じた。額に汗がにじんで、目の前がかすみ、足がよろけた。

「アンジェリカ！」

ジークが崩れ落ちるアンジェリカを支えた。リックも反対側に回りこんで、彼女に手をまわした。

「大丈夫、軽いめまいよ」

アンジェリカはふたりを心配させまいと嘘をついた。しかし、ふたりはすぐに見破った。彼女の身に起こったことは、ただのめまいなんかではない。もしかしたら、サイファの言っていた「アンジェリカの記憶」に関係があるのかもしれない。

ジークはやりきれない思いを怒りに変え、レオナルドにぶつけた。

「テメエ、でたらめ言ってんじゃねえ！」

胸ぐらをつかみ、額がくつつかんばかりに顔を近づけた。暴力的な行為に慣れていないレオナルドはたじろいだ。だが、すぐにジークの手を払いのけ、襟をビシッと引っ張り形を整えた。

「そう思うなら他の人に聞いてみればいいだろう」

そう言ったあと、ジークを流し見て、鼻先で小さく笑った。

「いい気なもんだ、ナイト気取りか。上手いこと取り入ったな。ラグランジェ家にひいきにされれば、なにかと都合がいいだろう？」

「な……に？」

ジークは固くこぶしを握りしめた。目の前の薄ら笑いの男に、このこぶしをめり込ませたい。その衝動を抑えるのに必死だった。

「いいかげんにして！」

アンジェリカがリックの手を振りほどき、ふたりの間に飛び出してきた。レオナルドと向かい合い、息の届く距離まで間をつめると、下から睨み上げた。

「これ以上、私たちに絡むようなら、私が平手打ちをおみまいするわ」

アンジェリカは低い声で言うと、勢いをつけて背を向けた。彼女の舞い上がった黒髪が、レオナルドの胸元をかすめた。

ジークとリックもレオナルドを一睨みした。ふたりはアンジェリカを追いかけ、三人で玄関へと歩いていった。

アンジェリカは授業もうわの空で、ずっと考え込んでいた。

ユールベルっていう子と私が友達？ 本当なの？ だとしたら、どうして私は何も覚えていないの？ そして、あの痛みはなんだったの？ あのときのレオナルドのセリフを思い出すたびに、頭に鈍痛が走る。頭の中に薄い靄がかかったように、何かが見えそうで、見えなくて、もどかしい。

ラウルはそんな彼女の様子に気がついていて、休憩時間になるとこっそりリックを呼び出した。ジークよりは素直に話してくれると踏んだのだろう。

「何かあったのか？」

人通りのなくなったところで、ラウルが切り出した。リックは話していいものか、少し迷っていた。ジークが知ったら怒りそうだ。だが、ラウルはラグランジェ家の事情にも詳しい。それに、アンジェリカの主治医でもある。彼は気持ちを決めた。今朝起きたことを、一通り要点をかいつまんでラウルに説明した。

「わかった。もう行っていい」

ラウルはそう言っただけで、リックの話について何もコメントはしなかった。

「……アンジェリカは大丈夫なんですか？」

リックはおずおずと尋ねた。それが、彼のもっとも気になることだった。

「おまえたちにできるのは、一緒にいてやることだけだ」

はぐらかされたと思ったが、それ以上の追求はしなかった。もういくら尋ねても無駄だと思ったからだ。答えなかったのが彼の意思なら、そう簡単に気持ちを変えたりはしない。

リックはラウルに一礼すると、教室へと戻っていった。

昼になり、三人は食堂へ向かった。

「もういいのか、その、体は」

ジークは言葉を選びながら尋ねた。

「ええ、ただの軽いめまいなもの」

アンジェリカは笑ってみせた。

角を曲ったところで、ジークは背の低い誰かとぶつかった。

「あっ……」

かぼそい声を出して、相手の子はよろけて横に崩れた。

「大丈夫か……あっ」

ジークは息を呑んだ。ウェーブを描いた鮮やかな金髪、右目を覆った包帯、折れそうに細い脚と腕——。これは、多分、ユールベルだ。

他のふたりもそのことに気がついたようだ。アンジェリカは息を呑み、顔をこわばらせていた。

ジークは自分の後ろにアンジェリカを隠した。

「ごめんなさい。片目がふさがっているから距離感がつかめなくて」

少女は弱々しい声でそう言うと、ほこりを払いながら立ち上がった。

「あ、アンジェリカじゃない」

彼女は、ジークの後ろのアンジェリカを目ざとく見つけた。ジークはアンジェリカを後ろにかばったまま、じりじりと後ずさった。

「私、ユールベルよ。忘れたの？」

アンジェリカを見つめ、平坦な声でそう言うと、一步、また一步と近づいてきた。

「どういうつもりだ」

ジークは低くうなった。

「どういうって……私はただ、久しぶりに会った友達と再会を祝いたいだけよ」

友達、という言葉に、三人は敏感に反応した。

アンジェリカは再び頭と胸に激しい痛みを感じた。そのうえ、頭の中をぐるぐる掻き回されているように気持ちが悪い。視界が狭まり、目を開いているのに真っ暗でなにも見えなくなった。

ジークの背中をつかみ、寄りかかるように倒れこんだ。

「お、おい！」

ジークは後ろ手でアンジェリカを支えながら、ゆっくりと膝をつき、彼女をその場に座らせた。それから素早く振り向くと、ふらつく彼女の上半身を支えた。ジークの腕に身を預け、アンジェリカは息苦しそうに喘いだ。

「体調が芳しくないようね。積もる話はまた今度にしましょうか」

リックは呆然とユールベルを見つめた。彼女はさらに一方的に話を続けた。

「また昔みたいに楽しく笑いあえるといいわね」

ユールベルは白いワンピースのスカートを軽く持ち上げると、膝を曲げ、頭を垂れた。

「それではまた……小さな先輩」

その言葉を残し、彼女はその場を立ち去った。

ジークは遠ざかる軽い足音を後ろに聞きながら、くやしそうに歯を食いしばった。

「さっぱりわからねえ。ユールベル……あいつは終始無表情で淡々としていた。言葉づかいは普通なのに、まったく感情がこもっていないみたいだ。なんかちぐはぐで調子を狂わされる」

「うん。本気なのか、冗談なのか、からかっているのか、全然わからないね」

リックは軽く握った手を口元にあて、深く考え込んだ。

ジークの腕の中で、アンジェリカが身をよじった。

「私は、なにか、大切なことを、忘れているのかもしれない……」

ほとんど声にならない声で、アンジェリカはつぶやいた。

「今はなにも考えるな」

ジークはアンジェリカの頭に優しく手を置いた。

アンジェリカは目を細め、まぶたを震わせ、白い天井を見つめていた。

35. 敵状視察

「アンジェリカ、大丈夫かな」

食堂へ向かう途中、リックがぼつりつつぶやいた。

ジークは暗い顔でうつむいた。今日、アンジェリカは休んでいる。きのうあんなことがあったばかりだ。仕方がない。そうは思っても不安は募る。もしかしたら……。

「アカデミーにはもう来ない方がいいのかもしれないね」

ジークはリックを鋭く睨みつけた。リックはうろたえながらも、自分の考えを説明した。

「だってアカデミーにいたら、ユールベルって子と顔を会わさないわけにはいかないし」

ジークは苦々しく歯噛みした。

「僕もアンジェリカの気持ちは尊重したいよ。でも、あそこまでひどいとは思わなかったし」

リックの言っていることは正論だ。反論の余地もない。それどころか、ジーク自身も同じことを考えていた。だが、だからといって、感情的にはどうしても納得ができなかった。

「でも、俺は、どうにかしてやりたい」

ジークは言葉にすることで、決意を確かなものにしようとしていた。

「……うん」

リックは弱々しくうなずいた。どうやって？ と尋ねたかったが、切り出すことが出来なかった。

ジークはまっすぐ前を向き、こぶしを小さく握りしめて気合いを入れた。

そのとき、ジークはユールベルの後ろ姿を見つけた。鮮やかな長い金の髪は、探そうと思わなくても目についてしまう。食堂へと続く廊下の先で、彼女はひとりで歩いていた。

「ジーク?!」

急に走り出したジークを追って、リックも走った。彼はまさかと思ったが、その不安は的中していた。

「ユールベル、ちょっといいか」

ジークはユールベルの背後から声を掛けた。彼女は眼帯の巻かれていない側から、ゆっくりと振り返った。それと同時に、微かに甘いにおいがあたりに舞った。彼女は真面目な顔のジーク、そして、その後ろでおろおろしているリックを順に眺めた。

「アンジェリカはいないのね」

「ああ、休んでる」

ジークの声は硬かった。ユールベルはしばらく無言で、彼のこわばった表情を見つめていた。

「わかったわ」

彼女はそう言うと、食堂へ足を向けた。

「なに考えてるの?!」

リックは責め立てるような口調でジークに耳打ちした。

「敵を知らなきゃ対策の立てようもねえだろ」

ジークも小声で返事をした。そして、彼女の後について食堂へ入っていった。リックもしぶしぶ後を追った。

三人はそれぞれ昼食を乗せたプレートを手にも、丸テーブルについた。普段ならアンジェリカ座っているはずの位置にユールベルが座っている。背筋をまっすぐ伸ばし、顔は正面、手は膝の上にそろえられている。文句のつけようがないくらい正しい姿勢だ。

ジークは落ち着かない気持ちとともに、軽い緊張を覚えた。

「それで、私に何の話なの？」

ユールベルはジークとリックの間を見つめて、静かに口を開いた。

ジークは何から話し始めればいいのか迷い、黙りこくってしまった。そんなジークを、リックは軽く睨みつけた。声を出さずに口を動かしている。無言でジークを急き立てているようだった。

ジークは困ったように首を傾げ、腕を組んだ。

「えーと、だな」

ユールベルはジークに顔を向け、開いている方の目を細めた。透き通った蒼の瞳に陰が落ちる。それに呼応して、ジークの鼓動は強くドクンと打った。大きく息を吐き心を鎮めてから、ユールベルを見つめ返した。

「きのう言ってただろ。アンジェリカと友達だったって。あれは本当か」

「もちろんよ」

ユールベルは間髪入れずに答えた。

「今は、昔の友情を取り戻したいと思っているわ。いけない？」

「いけなくはない、けども……」

「でも、何年も会ってなかったのはどうして？」

ユールベルの勢いに押されているのジークを見かねて、リックが隣から口を挟んだ。ユールベルは視線をリックへと流した。

「会いたくても会えない状況だったのよ」

表情のない顔の中で、その瞳だけが冷たく、そしてどこか寂しげな光をたたえていた。

「どういうこと？」

リックは眉をひそめた。

「これ以上は言いたくないわ。知りたいのならバルタスに聞いて」

「誰なんだよ、バルタスって」

ジークはいらついて尋ねた。

「半分、私と同じ遺伝子を持つ人」

ユールベルは顔を上げ、虚ろに遠くを見た。ジークとリックは一瞬、顔を見合わせた。

「父親……ってこと？」

「その言い方は好きじゃないわ」

それきり言葉が途切れた。

ジークは伏目がちにユールベルの様子をうかがっていた。何かがあると思ったが、尋ねることは出来なかった。リックも目を伏せ、複雑な表情で口をつぐんでいた。

「……お父さんのこと、嫌いなの？」

長い沈黙のあと、うつむいていたリックがぼつりと言った。それからゆっくりと顔を上げるとユールベルをじっと見つめた。

「話題を変えて」

彼の視線に応えることなく、ユールベルは遠くを見たまま短く言った。リックは膝の上に置いた両手をぎゅっと握りしめた。

「じゃあ……その包帯はどうしたの？」

「ものもらいよ」

ユールベルはあっさり答えを返した。だが、その答えは嘘に違いない。ふたりともそう思った。

「何週間か前に見かけたときも、包帯してたぜ。ずっとものもらいなのかよ」

ジークが食ってかかった。しかし、ユールベルはまったく動じることはなかった。

「そうよ」

その機械的な声に、ジークは眉をひそめた。

「おまえなんでそんな無表情なんだよ。笑いもしない、怒りもしない。しゃべり方もずっと一本調子。おかしいだろ」

ユールベルはゆっくりジークへと顔を向けた。右の瞳が彼をとらえた。ジークは小さく息を呑んだ。

「無表情なんかじゃないわ。あなたにも、何度も笑いかけてるでしょう？」

ジークはとまどったように、リックに目をやった。彼は小刻みに首を横に振った。リックにも彼女が笑っているようには見えなかったらしい。

彼女はからかっているのか？ それとも本気なのか……？

ジークは再びユールベルに向き直った。険しい表情で彼女を覗き込む。

「おまえ、笑ってるつもりなのか？ 全然、笑えてねえぞ」

ユールベルはぴくりと眉を動かした。

「笑っていたでしょう？ どうしてそんなことを言うの？」

ジークの胸にチクリと小さなとげが刺した。しかし、彼は続けた。

「いや、笑ってない。鏡を试试看」

「……いや」

弱々しくかすれた声。ユールベルの蒼い瞳が揺れ、顔がこわばった。白いワンピースから伸びた細い腕は小刻みに震えていた。

「鏡はいや、鏡はきれい……」

消え入りそうな声で何度もそうつぶやきうつむいた。今まで何を言っても動じた様子を見せなかった彼女が、突然、感情を表した。そのことがかえってジークたちを動揺させた。

「ユールベル？」

ジークはうつむいた彼女を覗き込んで、恐る恐る声を掛けた。

「……っ！」

何かに気がついて、彼女は大きく息を呑み、身をのけぞらせた。その表情は怯えたように引きつっている。彼女の右目は水の注がれたグラスを凝視していた。

「ユールベル？」

今度はリックが声を掛けた。

「……嫌……いやぁあっ！！」

彼女は甲高い声を張り上げ、目をそむけながらテーブルの上のグラスをなぎ払った。それは宙を跳び、ジークを襲った。とっさに手でかばったので顔への直撃は免れた。だが、割れた破片が彼の腕と頬を切った。

「……ってえ」

ジークはよろけながら椅子から立ち上がろうとして、床に膝をついた。顔からは浴びた水が、腕からは血がしたたっていた。

「ジーク！」

リックは椅子から飛びおり、ジークに駆け寄った。

「平気だ。かすり傷だ」

ジークは落ち着いていた。リックの方がうろたえていた。

「かすり傷なわけないよ！ポタポタ血が落ちてる。ラウルのところへ行こう！」

「大丈夫だって言ってんだろ」

その言葉とは裏腹に、ジークの顔からは血の気が失せていた。

バリッ、バリッ……。

ユールベルが破片を踏みしめながら、ジークに近づいてきた。そして、ジークの目の前で膝をついた。

「おまえその辺、破片と血……」

そう言われても、ユールベルはおかまいなしだった。彼女の白いワンピースは、裾から赤く染まっていった。

彼女は白いレースをあしらったハンカチを取り出し、ジークの腕の傷口を縛り始めた。彼女が動くたび、甘い匂いがふわりと舞い上がった。それは血の匂いと混じりあい、ジークに奇妙な感覚を与えた。

ジークの腕は不格好に縛られた。

ユールベルは手を止め顔を上げた。彼の視線を捉えると、ぐいと顔を近づける。息の触れ合いそんな距離。ジークは鼓動が止まったかのように感じた。ユールベルは、血が滲んだジークの頬にそっと指を置いた。

「ごめんなさい。私のことを嫌いにならないで」

あごのあたりに、微かに彼女の吐息がかかった。ジークの頭はぐらりと揺れた。腕の痛みさえ忘れてしまいそうだった。

「すみません！先生いますか！」

リックがドンドンと医務室の扉を叩いた。

ガラガラ――。

姿を現わしたラウルは、黙ってふたりを見おろした。顔をそむけ立っているジークの腕は赤く染まっている。そのことに気がつくと、面倒くさそうにため息をついた。

「またおまえか」

ジークはうつむいたまま顔をしかめた。

「入れ」

ラウルは短くそう言うと、ガーゼや消毒薬などを手際よく準備し始めた。

「ジーク、ほら！」

リックに促され、ジークはしぶしぶ医務室に入った。

「それほど深くはないな。すぐに治る」

ジークの腕に包帯を巻き終わると、絆創膏を投げてよこした。

「頬にはそれでも貼っておけ」

ジークは仏頂面でラウルを睨んだ。

――コンコン。

軽いノックのあと、すぐに扉が開いた。そこから姿を見せたのはサイファだった。

「来客中か？」

そう言いながらも、彼は遠慮することなく部屋に入ってきた。ジークとリックが会釈をすると、彼は穏やかな笑顔を返した。腕の包帯や血まみれの服を見ても、そのことには触れなかった。ジークは少しほっとした。

「今、終わったところだ。おまえは何の用だ」

ラウルはため息まじりに言った。

「相談したいことがあってね」

サイファはにっこりと微笑んだ。だが、目は笑っていなかった。それに気がついたのはラウルだけだった。

「じゃあ、僕たちは戻ります」

リックがそう言って、ふたりは立ち上がった。

「すまないな」

サイファは軽く詫びた。そして、ふいに尋ね掛けた。

「ジーク、腕はどうしたんだ？」

「……ガラスで切りました」

ジークはどう答えようか迷ったが、経緯を伏せたまま事実のみを述べた。その声は重く沈んでいた。だが、サイファはそれ以上の追求はしなかった。

「そうか、お大事に」

短くそれだけ言った。

「あの」

ジークはとまどいながら切り出した。

「アンジェリカ、あしたは来ますか？」

「体調次第だが、なるべく行かせるよ。おそらく大丈夫だろう」

サイファは再びにっこり笑った。ジークはその答えに安堵して、つられるように微かに表情を緩めた。

「あんなことを言っているのか」

ラウルは後片づけをしながら、背後のサイファに問いかけた。ジークとリックは出ていったので、ここにはふたりきりしかない。サイファは窓枠にひじをつき、外の景色を眺めていた。

「相談したいのは、そのことなんだ」

彼は空を見上げながら、ぽつりぽつりと言った。

ラウルは椅子に腰を下ろすと、サイファの方へ体を向けた。それに呼応するかのよう、サイファもさっと振り向いた。思いつめたような真剣な表情。しかし、それとは対照的な昼下がりの穏やかな風、柔らかな光が、彼の鮮やかな金の髪を上品に煌めかせている。

「アンジェリカの、開きかけた記憶の扉を、もう一度閉じることは出来るか？」

ラウルは眉をひそめた。

「いつまでも嘘をつき通せるものではないだろう」

「隠し通すさ」

サイファは少しの迷いも見せずに答えた。ラウルはギィと軋み音を立て、背もたれに身をあずけた。そして、無表情で口を開いた。

「ここまで来たら、思い出させるべきだと思うがな。もう幼い子供ではない。今の彼女なら耐えられるだろう」

サイファは目つきを険しくしてラウルを睨んだ。

「それはおまえの憶測でしかない。失敗が許されることではないんだ」

「記憶を消すにも危険は伴う。忘れたのか」

「おまえは一度も失敗していない」

サイファはめずらしくむきになっているように見えた。しばらくふたりは無言で視線を戦わせていた。

「アカデミーが終わったら、家に来てくれ」

厳しい表情のまま、サイファは有無を言わさぬ口調で言い切った。そして、ラウルとすれ違い、戸口へ足を進めると、扉を開こうとしてふいに手を止めた。

「私はこれからバルタスに会ってくる」

「あまり派手に動くな」

ラウルは背を向けたまま静かに言った。

「忠告、感謝する」

サイファに微かな笑顔が浮かんだ。

煌々と蛍光灯が照らす、天井の低いオフィス。十人ほどが机を並べるその奥に、がっちりした男が大きな机を構えていた。

サイファは、部屋に入るとつかつかと彼の前へ進んでいった。書類やペンの音がやみ、あたりはしんと静まり返った。そこにいた全員がサイファに視線を注いだ。

「お久しぶりです。バルタス事務官」

バルタスと呼ばれた男は、うつむいて苦い顔をした。しかし、すぐに厳格な表情を繕い、前を向いた。

「何の用だ」

威厳に満ちたよく通る低音。だが、サイファは畏縮することなく、にっこりと笑いかけた。

「少し外でお話ししませんか？」

「もう昼休みは終わった。仕事でないのなら帰ってくれ」

取りつく島もないあしらい方。それでもサイファは引かなかった。

「半分は公用、と言っていいかもしれません」

意味ありげにそう言うと、真剣なまなざしで挑むように笑ってみせた。バルタスは無言で席を立った。

「すぐに戻る」

フロア内の部下たちにそう言い残し、サイファと連れ立ってその場を後にした。

ふたりが部屋を出ると、残された者たちは色めき立って、口々に話を始めた。

王宮の外れにある小さな森。その中にひっそりとたたずむ散歩道をふたりで辿る。あたり一面にうっすらと緑のフィルタがかかり、枝葉の隙間からもれる光がまだら模様を映し出していた。

「君は、何を知っている」

先に口を開いたのは、前を歩くバルタスだった。

「あなたの家の偽装結界のことだけです」

サイファがそう言うと、バルタスの足は止まった。彼は空を仰ぎ、大きく息を吐いた。

「私を罰しに来たのか」

サイファはバルタスの背中を見つめた。大きいけどどこか頼りなく、哀愁が漂っているように見えた。

「公用と言ったのは、あなたを連れ出すため。ことを大きくするつもりはありません」

バルタスは腰に手を当てうつむいた。

「……だろうな。ラグランジェ家の恥を公にすることなどできまい。それに、そのおかげで君の娘が今日まで何事もなく暮らせてこられたのだからな」

そう言いながら、自嘲ぎみに鼻先で小さく笑った。

「否定はしません」

サイファは冷静に答えた。

「それでも、もっと早く気づくべきだったと思います」

その言葉を聞くと、バルタスはゆっくり振り向いた。サイファは彼と目を合わせた。そしてさらに話を続けた。

「どうして今になって結界を解いたのですか。そして、彼女をアカデミーに通わせるわけは……。私が伺いたいのはそれだけです」

サイファの真剣なまなざしがバルタスに突き刺さる。彼は重い口を開いた。

「あの子はもう私の手には負えない。すべてはあの子の意思なのだ。私には何を考えているのかわからんよ」

何もかも諦めたような言い方。サイファは彼のそんな様子を見て決意を固めた。

「今度、お宅の方へうかがいます。もう門前払いをする理由はないでしょう」

「ああ、歓迎するよ。今はあの子とふたりきりでね。正直、気が滅入る」

バルタスはやりきれなさを滲ませた。

「奥さんと息子さんは？」

「妻の実家に身を寄せている。そうする以外に守りようがないからな」

風が吹き、葉のこすれる音が、ざわざわと上から降りそそぐ。バルタスは寂しげに笑った。

「呪われているのは、君の娘でなく、私の娘の方かもしれんな」

36. 甘い憂鬱

「おはよう」

背後からの晴れやかな声が、ジークとリックの足を止めた。ふたりははっとして同時に振り返った。

「アンジェリカ！良かった、元気そうで」

リックは彼女の笑顔を目にすると、ほっとして言った。

「全然たいしたことなかったみたい。ラウルも大丈夫だって」

アンジェリカは肩をすくめて明るく笑った。だが、そんな彼女を見ても、ジークの心配は拭えなかった。

アンジェリカは三日間、アカデミーを休んでいた。「全然たいしたことない」のなら、三日間も休む必要があるだろうか。念のためといわれればそうかもしれない。だが、そうではないかもしれない。

気がかりなことは他にもあった。アンジェリカが明るすぎる、ジークはそう思った。あんなことがあったばかりなのに、彼女に不安はないのだろうか。なぜそんなに屈託なく笑えるのだろうか。

「ジーク？ どうしたの？」

ふたりの間に滑り込んできたアンジェリカが、難しい顔のジークを不思議そうに見上げた。ジークはその声で我にかえった。ふいに、下から覗き込むアンジェリカと目が合った。近くで見ても彼女の顔色は良かった。肌は白いが、頬はほんのり桜色。そしてバラ色の可憐な唇はつややかに輝いている。

「いや、元気そうでよかった」

顔をそらし、そっけなく言うと、ジークは再び歩き始めた。

「なに、あれ」

アンジェリカは彼の後ろ姿にまばたきを送りながら、きょとんとつぶやいた。リックは小さく笑った。

「多分、照れてるんだと思うよ」

「ふーん……？」

アンジェリカはよくわからないままそう返事をして、軽く首を傾げた。

「おい！ 何やってんだ！！ 遅刻するぞ！！」

ジークは振り返り、一向についてこないふたりに向かって叫んだ。

「ごめん、いま行く！」

リックは笑顔で手を振り答えると、アンジェリカとともに小走りで駆け出した。

終業のベルが鳴り、一時間目が終わった。

アンジェリカはノート、教本をトントンと揃えると、それらを机の中にしまいこんだ。それから、いつものように後方のジークに目をやった。しかし、その席には誰もいない。そのまわり

にもジークはいない。今までそんなことは一度もなかったのに——。彼女に不安がよぎった。

「あれ？ ジークはどこ行ったの？」

リックも教室をきょろきょろ眺めまわしながら、アンジェリカに近づいてきた。

「さあ……授業中はいたと思うんだけど」

彼女は目を伏せて、小さな声で答えた。隠そうとしても隠しきれない不安感が、その声に滲んでいた。

リックはそれに気がつき、急に笑顔を作った。

「きっとお手洗いだよ。そんなに心配することはないって」

「別に心配なんてしてないわ」

アンジェリカは精一杯の強がりを見せた。

ジークは一年生の教室へ来ていた。後ろの扉から中を窺うと、近くでしゃべっていた女の子ふたりに声を掛けた。

「悪い。ユールベルを呼んできてもらえるか」

そう言って、窓際の席でひとり外を眺めているユールベルの後ろ姿を指さした。ふたりの女の子は、頬を赤らめながら少しとまどったように返事をすると、連れ立ってユールベルのもとへ駆けて行った。

ジークは壁にもたれ掛かり、腕を組んでため息をついた。別に悪いことをしているわけではない。そう自分に言い聞かせても、若干の後ろめたさは拭えない。

「あなたが会いに来てくれるとは思わなかったわ」

ユールベルの声が、ジークを現実に戻した。白いワンピースのユールベルは、棒立ちでジークをじっと見つめた。相変わらず彼女の左目は白い包帯に覆われている。

ジークは話を切り出そうとしたが、まわりの注目を浴びていることに気がつき、口をつぐんだ。そして、場所を探すため、あたりをぐるりと見渡した。

「あっちで話そう」

好奇の目を向ける一年生に睨みをきかせながら、ユールベルを階段の裏へと連れて行った。

「腕は大丈夫？」

先に話しかけたのはユールベルだった。彼女は、ジークの長そでの上からそっと手をのせた。包帯の感触を感じると、顔を上げ、ジークの目を見つめた。

「ごめんなさい」

「いや、平気だ。傷は浅い」

スピードを上げた心拍に急ぎ立てられるように、ジークは短く早口で言った。ユールベルはゆっくりと目を細めた。

「私のことを嫌いにならないで」

前回の別れ際と同じ言葉。だが、あのときとは違って、ほんの少しだが感情がこもっているように感じられた。

ユールベルは両腕をジークの背中にまわし、彼の胸に顔をうずめた。

突然のことに驚いたジークは、不格好に両肘を張ったまま、行き場をなくした手を宙にさまよわせていた。背中に置かれた細い腕、細い指、腕をくすぐる柔らかな金髪、鼻をくすぐる甘い匂い、薄地の服を通して感じられる微かな体温、押しつけられた柔らかな胸、胸にかかる熱い吐息……。ジークは全身でユールベルを感じた。だんだんと遠のく現実。それでも正気を保とうと、彼の頭は必死でもがいた。そして、ようやく思い出した。自分がなぜここに来たのかを。「ハンカチ……」

ジークはつぶやくように言うと、ズボンのポケットから手のひら大の紙包みを取り出した。

ユールベルはそれに目を移した。それから顔を上げ、ジークの瞳をじっと見つめた。彼が下を向けば息が触れ合いそうな距離。ジークは少しでも離れようと、背筋を伸ばして顔を前に向けた。

「このまえ借りたやつ、ダメにしちまったんだ。悪い。なるべく似たやつを選んだつもりだ」

ジークは平静を装い、低いトーンで言った。しかし、速いスピードで打つ鼓動までは隠し切れない。彼女には伝わってしまっているだろう。そう意識すると、心臓はますます強く活動する。「私のせいだから、そんなことは気にしなくても良かったのに。優しい人ね」

ユールベルはジークの手から紙包みを受け取ると、ようやく体を離した。ジークはほっとして小さく息を吐いた。「借りを作りたくなかっただけだ」——ジークがそう言おうとした、そのとき。

ユールベルはぎこちなく笑いかけた。ジークは目を見開いた。先日、彼女が笑っていると主張しても、見た目はずっと無表情だった。笑えないのかと思った。だが、今は確かに笑っている。「あなたの言ったとおりだったわ。私は笑えてなかった」

彼女は目を伏せてそう言うと、大きくまばたきをしてジークと視線を合わせた。

「だから、今、きちんと笑えるように練習しているの」

ジークは彼女の蒼の瞳に強い意志を感じた。少なくともそのことに関しては、疑う気になれなかった。

「そうか、頑張れよ」

ジークも微かな笑顔を返した。

「ありがとう」

ユールベルは大事そうにハンカチを両手で握りしめ、再び笑ってみせた。まだ少しぎこちない。だが、ジークの目には、さっきよりも表情が柔らかくなっているように映った。

ジークは自分の教室に戻るために、階段をのぼっていた。

「どんな手を使ったんだ。教えてくれないか」

その声にジークが顔を上げると、踊り場から男が見下ろしていた。レオナルドだった。腕を組んで壁にもたれかかり、嫌みたらしくニヤリと笑っている。ユールベルと話していたところを覗いていたに違いない。

ジークはひと睨みすると、無視をして通り過ぎようとした。だが、レオナルドは素直に逃がしはしなかった。

「ユールベルまでこんなに早く手なずけるとはな。アンジェリカだけでは物足りないか。それともラグランジェ家に乗っ取るつもりか」

レオナルドは挑発的に畳み掛ける。それでもジークは必死に気持ちを抑えていた。だが、その壁も次のレオナルドの言葉で弾け飛んだ。レオナルドはニヤリと笑い、身を乗り出すと、ジークの耳もとでささやくように言った。

「さっきのこと、アンジェリカに言ったらどうなる？」

ジークはレオナルドの胸ぐらに掴みかかり、そのまま壁に叩きつけた。レオナルドは後頭部を打ち顔をしかめた。だが、歯を食いしばったジークのくやしそうな表情を見ると、満足げにせせら笑った。

「悪いのはこっちか？ 言われて困るようなことをしていた自分はどうなんだ」

レオナルドはさらに追いつめた。

ジークは何も言葉が出なかった。レオナルドから手を離すと、背を向けこぶしを握りしめた。

「言いたきゃ勝手に言えよ」

吐き捨てるようにそう言ったあと、少しの間をおいて続けた。

「俺は何も悪いことはしてねえ」

今度は自分に言い聞かせるように、言葉を噛みしめながら言った。しかし、それと同時に、後ろめたさを感じていたのも事実だった。

「あ、ジーク！」

アンジェリカは教室に入ってきたジークと目が合い、声を上げた。ジークはアンジェリカに伝えることなく、むすっとしたまま黙って席についた。

「どこへ行っていたの……？」

アンジェリカはおずおずと尋ねた。

「トイレだ」

ジークはぶっきらぼうにそう答えた。だが、その目は明らかに彼女から逃げていた。アンジェリカは不安そうに目をしばたかかせながら、遠慮がちに覗き込もうとした。

「だめだよアンジェリカ。あんまりジークを追いつめちゃ」

リックが優しく彼女を諭した。

ジークはどきりとした。リックが何を言い出すつもりなのかと気が気でなかった。しかし、下手に口出しするのも恐い。彼は成り行きを見守るしかなかった。

リックはアンジェリカににっこり笑いかけて言った。

「おなかの調子が悪いなんて、恥ずかしくて言えないんだから」

「違っ……！ リックおまえ何言い出すんだ！！」

ジークは一気に顔を上気させて、椅子から立ち上がった。リックがなぜそう言い出したのかわからず、頭が混乱していた。そんなふうには推測しただけなのだろうか。それとも自分をからかっているだけなのだろうか。

リックは頭に手を置き、明るく笑った。

アンジェリカはそんなふたりを見て、腕を組み、呆れたようにため息をついた。しかし、その表情は安堵で和らいでいた。

ジークはそこで初めて気がついた。リックが自分のためにひと芝居打ってくれたのだということに。リックにも何も言っただけではいかなかったのだが、アンジェリカより付き合いの長い彼には、何か察するものがあったのだろう。そのごまかし方には納得がいかなかったが、それでもジークは感謝した。

キーン、コーン——。

始業のベルが鳴った。

「始まったぞ。おまえら席に戻れ」

ジークは照れ隠しに、大袈裟に手を振って追いはらった。その拍子に、シャツの袖口から白い包帯がチラリとのぞいた。アンジェリカはそれを目ざとく見つけた。

「どうしたの、それ」

彼女は指さしながら近づいた。

「ああ……」

ジークは一瞬、腕を隠そうとしたが、すぐに思いとどまった。隠した方が不自然であることに気がついたからだ。

「割れたコップで切った。たいしたことねえよ」

努めて冷静に言ったが、アンジェリカの反応はなかった。

「アンジェリカ？」

「……え？ ううん、なんでもない」

彼女は早口でそう言うと、パタパタと小走りで席に戻っていった。

甘い、におい——。

ジークに近づいたとき、微かにふわりと甘い匂いがした。懐かしいような、それでいて落ち着かない気分させられる。

何の匂い——？

アンジェリカは得体のしれない不安が静かに胸に広がっていくのを感じた。

37. 渴いた心

その日は休日だった。

厚手のカーテンの隙間から光の帯が差し込み、さわやかに朝を告げる。こんな日は小鳥のさえずりが目覚ましがりだ。

アンジェリカは、淡いピンクのネグリジェのまま階段を下りた。

「おはよう、アンジェリカ」

レイチェルはミルクティーを入れながら、にこやかに笑いかけた。

「お父さんは？」

アンジェリカは広いダイニングを見渡しながら、椅子に座った。

「用があるって、少し前に出かけたわよ」

レイチェルはカップを載せたソーサーを、アンジェリカの前に差し出した。アンジェリカはそれを手に取り、ミルクティーを口に運んだ。ほっとする香りと温かさ。頬を緩ませ、ふうと小さく息をついた。

レイチェルは隣に腰を下ろしながら、その様子を愛おしそうに見つめた。それから少し身を乗り出し、彼女を覗き込んで口を開いた。

「ね、アルティナさんが久しぶりにあなたに会いたがっているの」

「王妃様が？」

そう聞き返したが、たいして驚いた様子でもなかった。レイチェルが王妃アルティナの付き人をしていることもあり、彼女は小さい頃からよく王宮へ遊びに行っていた。だが、アカデミーに入学してからは、ほとんどアルティナとも会っていない。

「一緒に行かない？ 小さな王子様も待っているわ」

暗い気持ちさえ吹き飛ばすような、レイチェルの明るい声と笑顔。

この人が私のお母さんで良かった——。

そんな思いが、アンジェリカの胸にじわりと広がった。

サイファはひとりバルタスの家へ来ていた。門前で立ち止まり、屋敷の二階を見上げてみる。だがもうそこからは、偽装結界も、通常の結界も感じられなかった。

扉の前まで進み、呼び鈴を鳴らす。奥で重みのある音が鳴り響いた。やがて軽い足音が聞こえ、扉が開いた。

「おじさま、来てくださって嬉しいわ」

中から飛び出してきたユールベルが、サイファに抱きついた。ノースリーブの白いワンピースが風を受け、ふわりと丸みを作る。

「何度も訪ねてくれていたのに、いつもあの人が追い返してしまっていてごめんなさい。もう来てもらえないかと思っていたわ」

そう言うと、サイファの胸に頬を押し当て、目を閉じた。サイファは彼女の頭を軽くなでると、少し離れて立っているバルタスに会釈した。ユールベルはそれに気がつくや、冷たく固いまな

ざしをバルタスに流した。彼の顔には疲労の色が浮かんでいた。

「行きましょう」

ユールベルは再びサイファに向き直ると、彼の手を取り、軽い足取りで応接間へと駆けて行った。そして二人掛けのソファにサイファを座らせると、彼女もその隣に腰を下ろした。体半分をサイファに向け、甘えるように寄りかかる。サイファはよけることも突き返すこともせずに、自然なままでそこにいた。

「おじさま、コーヒーと紅茶、どちらがいい？」

「紅茶をお願いしますよ」

サイファはユールベルの顔を見て、にっこり笑いかけた。ユールベルも微かに笑顔を返した。だが、それはほんの一瞬のことだった。すぐにいつもの無表情に戻った。

「バルタス、紅茶ふたつ」

召使いにでも言うかのような命令口調。それでもバルタスは何の反論もせず、黙って奥へと姿を消した。大きな背中には何の威厳もない。工作中とは別人のようだった。

「ユールベル」

「なあに、おじさま」

ユールベルは体を伸ばし、サイファに顔を近づけた。サイファはユールベルの瞳を見つめて、真剣な表情になった。

「私たちのことを恨んではいないのかい？」

その言葉を聞くと、ユールベルはぱちくりと瞬きをした。

「恨むだなんて」

彼女は細い腕をたどたどしく伸ばす。ぎこちなくサイファの首へとまわし引き寄せると、彼の肩に顔をうずめた。そして、彼の耳もとでささやくように言った。

「あれは事故だったのよ」

サイファは複雑な面持ちで、彼女のゆるやかに流れるブロンドを見つめていた。

バルタスが無言で戻ってきた。カタカタと小刻みな音を鳴らしながら、カップがふたつ乗せられたプレートを、慣れない手つきで運ぶ。

ユールベルはサイファから離れ、向かいのソファに座り直した。

上品で繊細な花柄のカップとソーサーを、それに似つかわしくない大きな手でふたりに差し出す。

ユールベルは冷めた目で、その様子を眺めていた。

「終わったら出て行って」

驚くほど冷たい声だった。

バルタスは背中を丸めて立ち上がった。無愛想なままサイファに会釈をすると、プレートを小わきに抱えて応接間をあとにした。

サイファはカップに手を伸ばそうとした。だが、ユールベルはそれを遮るように、横からサイファに抱きついた。

「私、おじさまのピアノが聴きたい」

サイファはにっこり笑って答えた。ユールベルもつられてわずかに笑顔になった。

「おじさまこっち」

サイファの手を引っ張り、部屋の隅に置いてあるアップライトピアノへと誘う。彼女の軽い足どりから、浮かれているさまが見てとれた。

ユールベルが黒塗りの椅子を引くと、サイファはそこに腰を下ろした。鍵盤の蓋を開け、音と感触を確かめるように軽く鳴らしてみる。だが、その手はすぐに止まった。

「ユールベル、このピアノ、調律が出来ていないよ」

サイファはユールベルを振り返る。ユールベルは少しの間、動きを止めていたが、やがて扉の方へ走っていった。

「バルタス、どういうこと？ 調律が出来ていないって」

部屋の外に向かって大きめの声で問いつめる。

バルタスはすぐに戸口に姿を現わした。彼はユールベルを静かに見下ろして言った。

「ピアノは七年間一度も触っていない」

次の瞬間、ユールベルの平手打ちがとんだ。細腕を思いきり伸ばし、背伸びをしておの平手打ち。たいした威力はないだろう。それでも、サイファを驚かせるには十分だった。それでも彼は動じた様子は見せなかった。

「道具さえ貸していただければ、私が調律しますよ」

サイファは立ち上がり、バルタスに声をかけた。

「道具もない」

バルタスはにべもない返事をした。

「最低」

ユールベルは冷たく彼を見上げた。

「それでは来週、私が道具持参でうかがいますよ」

サイファはバルタスににっこり笑いかけた。

「おじさまにそんなことさせられない。バルタス、調律師を呼んでおいて」

その命令を残し、ユールベルはサイファのもとへ戻っていった。そして再びサイファの背中に手をまわし抱きついた。

「ごめんなさい。ピアノはまた今度聴かせてくださる？」

「もちろんだよ」

サイファは優しくユールベルの頭をなでた。

ユールベルはサイファから少しも離れようとはしなかった。ソファに座った彼の膝に頭をのせ、彼の脚を指でたどり、その感触を確かめていく。

「おじさまが私のお父さまだったら良かったのに」

ユールベルはポツリともらした。サイファから彼女の表情は見えなかった。横顔には長い金髪が無造作にかかり、さらに包帯が邪魔をしていた。

「私、アンジェリカがうらやましくて仕方がない」

再び彼女はポツリと言った。

「君も知っているだろう、あの子の立場は」

「でもアンジェリカにはおじさまがいる。私には何もない」

彼女のあらわになった細い肩が、ほんの少し揺れた。

「そういえば、アンジェリカ。私のことをすっかり忘れていたわ。寂しかった……」

サイファの顔がけわしくなった。だが、それは一瞬。すぐに元の表情に戻った。ユールベルの頭に優しく手を置き、もう片方の手で彼女の顔にかかった髪をそっとかきあげる。

「申しわけない。あれはあの子にとっては辛すぎる過去なんだ。勝手に言うようだが……そっとしておいてほしい」

ユールベルはだるそうに体を起こし、サイファの膝の上に、横向きに座った。体をねじり、彼の首に腕をまわすと、額が付きそうな距離でまっすぐ見つめた。

「彼女だけずるい」

そう言ったあと、サイファを引き寄せ、頬と頬を触れ合わせた。

「でも、おじさまがそういうなら、私はそうするわ」

「ありがとう」

サイファは彼女の華奢な背中に手をまわした。

「さて、私はそろそろおいとまするよ」

サイファの膝の上に身を投げ出しまどろんでいたユールベルは、驚いて身を起こした。

「そんな、行かないで。ずっとここにいて」

彼に顔を突きつけ懇願する。サイファはにっこり微笑んだ。

「そういうわけにはいかないよ」

彼の右手がユールベルの頬を包み込んだ。

「また来るから」

そう言うと、サイファは立ち上がった。だが、その右手をユールベルがつかむ。すがりつくような右の瞳。

「また来るから」

サイファは同じ言葉を繰り返し、にっこりと笑った。ユールベルの手から力が抜け、サイファの手はするりと抜けた。

サイファは少し歩くと振り返った。

「その目、一度きちんと診てもらった方がいい。今度、ラウルのところへ行っておいで」

それだけ言うと、今度は立ち止まらずに部屋を出ていった。

玄関でバルタスが扉を開け待ちかまえていた。

「すっかり迷惑をかけてしまった」

気力のない低い声。彼が疲れ切っていることは明らかだった。

「いいえ。こちらこそ邪魔いたしました」

サイファは会釈をして外へと出た。まだずいぶん明るく、日没までは時間があるようだ。風もなく穏やかで静かな空に、小鳥が弧を描いて飛んでいった。

「……あまりあの子の言うことを信用しない方がいい」

バルタスは声をひそめてそう言うと、間髪入れずに扉を閉めた。

サイファはしばらく扉を見つめていた。それから顔を上げ二階を見上げた。窓にはすべて暗色のカーテンが掛けられていた。

「おかえりなさい！」

扉の開く音を聞きつけ、アンジェリカが二階から駆け下りてきた。

「ただいま、アンジェリカ」

サイファは優しい笑顔を見せた、

「今日は何をしていたんだい？」

「王妃様と王子様に会ってきたわ」

アンジェリカは嬉しそうに軽いステップを踏みながら、サイファの横に並んだ。だが、その途端、彼女の顔から笑みが消えた。とまどい、怯えたようにうつむき、体をこわばらせる。

「アンジェリカ？」

「ううん、なんでもない」

彼女は首を横に振りながらそう答え、小走りで二階へ戻っていった。

「お帰りなさい」

今度はレイチェルが笑顔で迎えた。

「あら？ アンジェリカが降りて来なかった？」

「降りてきてたんだが……。また戻っていったよ」

「そう。王子様のお相手で疲れたのかしら」

レイチェルは首をかしげた。

ふたりは奥の書斎に場所を移した。扉には内側から鍵をかけた。それからテーブルを挟み、向かい合わせに座った。

「それで、どうだったの？ 彼女」

レイチェルが静かに尋ねた。

「アンジェリカをどうこうする気はなさそうに見えた。だが……」

サイファは机にひじをつき、口元で両手を組むと、わずかに目を伏せた。

「バルタスには信用するなと言われたよ」

レイチェルは少し身を乗り出して、サイファを覗き込む。

「サイファは大丈夫だと思ったのでしょうか？」

「自信はない。嘘を言っているようには見えなかった。ただ……」

彼は言葉を切った。そして、少しの間をおいて続けた。

「彼女の精神状態はまともとはいいがたいからな」

「そうですね」

レイチェルは顔を曇らせた。

「やはりしばらく様子を見るしかないだろう」

サイファはそう言ったきり口をつぐんだ。レイチェルも同じく暗い表情で目を伏せた。重い空気がふたりにまとわりつき、動きを封じているかのようだった。

「ラウルにも言っておかなければな」

サイファは唐突に切り出した。

「え？」

レイチェルは顔を上げた。サイファもゆっくりと顔を上げ、彼女と視線を合わせた。

「ラウルにも関わりがあることだろう、多少はね」

「そう、ね」

「ユールベルには言っておいた。ラウルに目を診てもらおうようにとね。それが吉と出るか凶と出るかはわからないが、もしかしたら……」

レイチェルの表情に、ふいに陰が落ちた。

「心配かい？」

サイファは優しい笑顔で尋ねた。レイチェルは目を伏せ、ぼつりと言った。

「そんなこと、聞かないで」

「そうだね」

サイファは彼女の頭にそっと手を置いた。

レイチェルは、突然はっとして目を見開いた。自分の頭を撫でているサイファの手を取り、袖口を鼻に近づけた。

「サイファ、この甘い匂い……」

彼女は悲しげにそう言うと、小さくため息をついた。

「彼女の匂いが移ったのね」

サイファは焦ったように匂いを嗅いだ。だが、自分ではよくわからなかった。困惑した顔をレイチェルに向ける。

「君にはわかるのか？」

「ええ、自分では気がつきにくいのかしら」

「アンジェリカが急に二階へ戻っていったのはこれが原因、ということか」

サイファは自分のしでかした大きな失敗に顔をしかめた。後悔を隠すことなく、その表情にあわらにする。

「思い出してはいないと思うが……」

彼は祈るように両手を組んだ。

「でも、匂いとそれに結びついた感情というものは、なかなか切り離せないものだわ。こういうことが続けば、もしかしたら記憶もよみがえってしまうかもしれない」

少し沈んだ声で、レイチェルは冷静に述べた。

サイファは立ち上がった。

「シャワーを浴びてくる」

そう言うと、扉へ向かって歩き出した。

「サイファ」

レイチェルは憂いを含んだ瞳を向け、気遣わしげに呼びかけた。サイファはドアノブに手をかけたまま、顔だけ振り返り、にっこりと笑ってみせた。いつもとなんら変わる事のない笑顔。だが、レイチェルはその裏に隠された自嘲と自責を見逃さなかった。いたたまれなさに、思わず立ち上がり駆け出した。そして、後ろから彼をぎゅっと抱きしめた。

サイファは突然のことに驚いたが、その表情はすぐに和らいだ。愛おしげに、彼女の手の上に、自分の手を重ねた。

サイファはふいに幼い日々を思い出した。自分が落ち込んでいたときは、何も言わずとも、いつも彼女はこうやって抱きしめてくれた。どんなに表面を取り繕っても、彼女だけは本当の自分を見透かしていた。彼女がいるからこそ、自分を見失わずにいられる——そんな気さえしていた

。

「ありがとう」

そう言った彼の声は、とても穏やかであたたかかった。

38. 仕組まれた孤独

「見えるようになる見込みはないな」

ラウルは新しい包帯をユールベルに巻きつけながら、淡々と診察結果を述べた。

「そう」

彼女は無表情に返事をした。

ラウルは包帯を巻き終わると椅子に座り、正面から彼女と視線を合わせた。互いに無言で見つめ合い、目をそらそうとしない。沈黙が続く。

「……何か、言いたいことでもあるの？」

先に口を開いたのはユールベルだった。

「あなたのことは嫌いだよ。その目……。すべてを見透かされているみたい」

「見透かされて困ることでもあるのか」

ユールベルの表情がわずかに険しくなった。

「あなたにもあるんじゃないの？ 秘密の多いひと……」

そう言いながらゆっくりと立ち上がり、横からラウルの膝の上へ腰を下ろした。彼の首に手をまわし、ぐいと顔を近づける。息の触れ合う距離で、ふたりは互いの瞳をまっすぐに見つめた。

ユールベルは腕に力を入れ、体を伸ばすと、ふいにラウルと軽く唇を触れ合わせた。

「私のことは嫌いではなかったのか」

ラウルに驚いた様子はなかった。声に少しの乱れもなかった。

「大嫌いよ」

ユールベルは手の甲で唇を拭いつつ、ラウルの膝から降りた。そして、少し走って足を止めると、包帯で隠れていない側から顔半分だけ振り返った。

「……あなたは？」

「さあな」

ラウルは彼女に背を向けたまま、感情なく言った。

ユールベルはしばらく彼の後ろ姿を見つめていた。しかし、それ以上なにも言わず、静かに部屋をあとにした。

昼休みの終わりを告げるベルが鳴った。

「あ、鳴っちゃったわ」

「おい、早くしろよ！」

ジークはもたつくリックを急かした。

「ごめん！」

リックはあたふたと準備をして立ち上がった。そして、三人そろって教室から廊下へバタバタと飛び出した。

「午後からは図書室だ。早く行け」

突如、背後から降りかかる低い声。ジークは顔をしかめた。その声を聞くだけで無条件に腹

が立った。

「今から行こうとしてんだよ！」

反抗心をむき出しにして、わめきながら振り返った。だがその瞬間、ラウルは三人の間をすり抜け、颯爽と通り過ぎていった。

「くっそ、本当に頭にくるヤツだぜ」

ジークは苦々しげに顔をしかめた。

その横で、アンジェリカは呆然とラウルの後ろ姿を目で追っていた。息をすることも、瞬きをすることも忘れていたかのようだった。

彼女のただならぬ様子に気がついたのはリックだった。

「アンジェリカ、どうしたの？」

なるべく刺激をしないよう優しく声を掛けた。

「え、あ……別にどうもしてないわ。急がなきゃ」

アンジェリカは我にかえると、小さな声でそう言った。そして、その場から逃げるように、慌てて早足で歩き始めた。

ジークとリックは目を見合わせ、怪訝に首を傾げた。

——また、あの匂い……どうして？

アンジェリカは息が詰まりそうだった。胸の鼓動が次第に早くなった。不安でたまらなかった。今の自分の表情をふたりに見せないよう早足で歩き続けた。

その後のアンジェリカは、ずっとわの空だった。ラウルが何かを言っても、まるで耳に届いていない。本をパラパラめくっても、内容はまったく頭に入っていない。

「アンジェリカ、帰らないの？」

リックが覗き込んで声を掛けた。ジークはその横で腕を組んで立っていた。

アンジェリカははっとしてあたりを見た。気がつかないうちに授業時間が終わっていたようだった。まわりがざわついていることに、そのときようやく気がついた。

「あ……帰るわ」

そう言って立ち上がろうとしたアンジェリカの肩に、リックはそっと手をのせた。そして穏やかに微笑みかけた。

「いいよ、座ってて。本は僕が返してくるから」

「ごめんなさい。……ありがとう」

奥の本棚へ向かっていく背中に、アンジェリカはとまどいがちに感謝の言葉を送った。

残されたジークとアンジェリカの間には、どことなく気まずい空気が流れていた。ふたりとも無言のまま、リックが帰ってくるのを待った。

「一年のかわいい子、なんていったっけ。あの包帯の」

「ああ、確かユールベルとかいう名前だったな」

隣の机での会話が、聞くともしに耳に入ってきた。話しているのはクラスメイトたちだった

。授業が終わり、そのまま雑談に興じているようだった。

「出よう」

ジークは身をかがめ、アンジェリカに耳打ちした。しかし、アンジェリカはそれには反応を示さなかった。ユールベルのうわさ話から耳が離せなかったのだ。

「そうそう、その子と担任が昼休みに並んで歩いてるのを見たんだよ」

「担任って、ラウル？」

アンジェリカは立ち上がり、唐突にその会話に割って入った。

「おい！」

ジークは慌てて止めようとしたが、アンジェリカは無視して隣の机へと駆けていった。

会話をしていた三人は驚いた表情を浮かべたが、すぐに笑顔になり、手招きをして彼女を迎え入れた。

「そうだよ。王宮の方に行ったから、ラウルの医務室に行ったんじゃないかな」

黒髪の少年が、アンジェリカに席を譲りながら答えた。その後ろから、茶髪の少年が身を乗り出してきた。

「そういえば君もアイツと親しいようだけど、ラグランジェ家ってみんなそうなのか？」

「.....そんなことはない、けど」

アンジェリカは目を伏せ、言葉を濁した。

「な、ユールベルってどんな子なんだ？」

今度は反対側の少年が身を乗り出し、浮かれた声で尋ねた。

「俺も気になる、それ。すごい不思議な感じの子だよな」

「あの包帯も気にならないか？」

「おまえ包帯好きだよなあ」

三人はアンジェリカをほったらかし、興奮ぎみにユールベルのことで盛り上がった。アンジェリカは逃げ出したい気持ちでいっぱいだったが、立ち上がるきっかけをつかめないでいた。

ふいに彼女の腕が、後ろから引っ張られた。

「帰るぞ」

ジークは低い声でぶっきらぼうに言った。

アンジェリカはそんな彼を見て、ほっとしたように表情を緩めた。彼女は腕を引かれるまま椅子を降りた。そのとき――。

「ジーク！ 金髪の女の子が外で待ってるぜ！」

戸口からクラスメイトが大声でジークを呼んだ。図書室にいたほとんどが声の方に振り向いた。大声で呼んだ彼は、いたずらっぽく白い歯を見せて笑っている。ジークをからかうためにわざと大声で言ったのだろう。開かれた扉の向こうに、金髪と白いワンピースの後ろ姿がちらりと覗いた。

「ジーク！ 今のユールベルだろ?!」

「おまえら知り合いなのか？」

「紹介してくれよ、ていうか、もしかしておまえら.....」

ジークはアンジェリカの腕をつかんだまま動きを止めていた。

——どうすればいいんだ。

野次馬連中はどうでもよかった。ただ、アンジェリカのことだけが心配だった。ここで誤解されるくらいなら、初めから本当のことを話しておけばよかった。そう強く後悔した。

アンジェリカは表情を隠すかのように、深くうつむいた。

「待ってろよ。すぐに戻ってくるから」

ジークはアンジェリカの腕を放した。

「いいな、待ってろよ」

彼女に言い聞かせるように念を押すと、ジークは走って出ていった。

だが、アンジェリカはジークの言葉に従わなかった。彼の姿が見えなくなると、乱暴に鞆をつかみ、反対側の扉から出ていった。長い廊下を駆け抜け、角を曲がったところで足を止めた。窓に手をつき、肩で大きく息をする。ガラス越しのずっと先に、ジークと彼に寄り添うユールベルの姿が小さく見えた。

——あの甘い匂い……。ユールベル、だったの？

アンジェリカの熱い吐息でガラスは白く曇った。そして、ふたりの姿はその霞に掻き消され見えなくなった。

ジークは野次馬に睨みをきかせながら、図書室に戻った。ユールベルの方は特に何もなかった。ただ会いたかったというだけだった。彼女が何を考えているのか、ジークにはさっぱりわからなかった。

ジークはアンジェリカがいたはずの場所に戻った。だが、そこに彼女の姿はなかった。代わりにリックが腕組みをして立っていた。

「……アンジェリカは？」

嫌な予感を胸いっぱい膨らませながら、ジークはおそろおそろ尋ねた。

「出ていったらしいよ」

リックはそっけなく答えた。

「あのバカ……待ってろって言ったのに」

顔をしかめてそう言うジークを、リックは冷ややかに見つめた。

「バカはどっちだよ。さっき来てたのってユールベルなんでしょ」

彼にしてはめずらしく辛辣な言葉。ジークは凶星をつかれた恥ずかしさと、いいわけをしたい焦りとで、顔を真っ赤に上気させた。

「勝手に来たんだよ！ ほっとくわけにもいかねえだろ！ アンジェリカにはあとでちゃんと話すつもりだったんだよ。この前のこともな」

この前のことというのは、ハンカチを返すためにユールベルに会いに行ったことである。リックには事後ではあったが話をしてあった。もちろん、こと細かにすべてを伝えたわけではない。それは誰にも言っていないし、言うつもりもなかった。知っているのは覗いていたレオナルドだけ……。

「どうしたの？」

思いきり眉をひそめたジークに、リックはいぶかしげな視線を送った。

「いや。一応、教室の方を見に行ってみようぜ」

ジークは鞆をつかんで早足で図書室を出ていった。

アンジェリカは帰る気になれず、ふらふらと当てもなくアカデミー内をさまよっていた。そして気がつくと、アカデミーの隅にある小さな礼拝堂の前へと来ていた。

顔を上げ、全体を見渡す。木々に囲まれ、こじんまりとした三角屋根の建物。もともと古びてはいたが、気のせいかなよりいっそう寂れたように感じられた。以前はよくここへ祈りに来ていたが、最近は足を運ぶこともめっきり少なくなっていた。

——こんなときだけ頼ろうなんて、虫が良すぎるかしら。

ほんの少し罪悪感を感じながら、木製の重い扉をゆっくり押し開けた。ひんやりとした空気、礼拝堂独特の静けさ。彼女はそれが好きだった。

カツーン、カツーン。靴音を響かせ、中に足を踏み入れた。

「え……？」

彼女はあるものを目にし、小さく驚きの声を上げた。そして、即座に体を引いて身構えた。

最後列の長椅子。そこに少女が横たわって眠っていた。白いワンピース、長く緩やかなウェーブを描いた金の髪、頭に巻きつけられた白い包帯。間違いなくユールベルだ。白地のワンピースの上には、スタンドグラスの色とりどりの光が落ち、幻想的な模様を映し出していた。

アンジェリカは息が止まりそうだった。しかし、彼女にはどうしても確かめたいことがあった。おそるおそる、そっと近づく。

ドッ、ドッ、ドッ……。

体中が脈打つのを感じながら、それでも近づくのをやめない。

ドッ、ドッ、ドッ……。

ユールベルの上で身をかがめ、彼女の首筋に顔を近づける。

ドクン！！

心臓が飛び出しそうなほど強く打った。顔をこわばらせて、後ずさりをする。

——やっぱり、あの匂い、この人のだった……。

アンジェリカは呆然として立ち尽くした。

気配を感じたのか、ユールベルが目を覚ました。長椅子にうつぶせになったまま、目の前の少女の足元をじっと見つめた。徐々に顔を上げていく。そして、ふたりの視線がぶつかった。冷たい蒼い光。アンジェリカは凍りついたように動けなかった。

「アンジェリカ、どうしてここへ」

ユールベルは気だるくぼんやりと言った。アンジェリカは引きつったように息を吸った。

「あ……あなたこそ、どうしてこんなところで」

唇を震わせ、渴いたのどから擦れた声を絞り出した。

ユールベルはゆっくり身を起こした。

「なるべく家にいたくないから。あなたは？」

「……祈りに来ただけよ」

アンジェリカは次第に落ち着きを取り戻した。冷静になると、今度は不愉快な気持ちがこみ上げてきた。眉をひそめてユールベルを睨みつける。

しかし、ユールベルはまるで表情を変えなかった。

「あなたとふたりきりなんて、何年ぶりかしら」

楽しむような口調でそう言い、かすかに笑いかけた。アンジェリカはますます表情を硬くした。

「いったい何を企んでいるの？ 私と仲良くしたいなんて嘘なんでしょう」

「どうしてそんなことを」

かすかな笑顔を保ったまま聞き返す。アンジェリカにはそれがかえって薄気味悪く思えた。

「ジークやお父さんやラウルに近づいている」

責めるようなきつい口調。それでもユールベルの顔色は変わらなかった。

「私が仲良くしてはいけないの？ どうして？ あなたのものってわけではないでしょう」

「私が言ってるのはそういうことじゃない！」

アンジェリカは一気に頭に血がのぼり、こぶしを握りしめて叫んだ。ユールベルは無表情で彼女を見上げた。

「欲張りなひと」

一瞬、その瞳に鋭い光が宿った。アンジェリカは斬りつけられたかのように身がすくんだ。額に薄く汗がにじんだ。

「……質問を、変えるわ」

アンジェリカは息を整え、気持ちを立て直すと、静かに言葉が続けた。

「私とあなたの間になにかあったのか、教えて」

ユールベルを正面にとらえ、まっすぐ彼女の瞳を見つめる。額ににじんだ汗が頬を伝った。

ユールベルは不敵にうっすらと笑みを浮かべた。

「教えたいのはやまやまだけど、おじさまとの約束があるから」

「おじさま……お父さん？」

「そうよ」

ユールベルはさらに畳み掛ける。

「私たちふたりの秘密の約束」

アンジェリカの鼓動がドクンと強く打った。ユールベルは無表情のまま顔を上げ、どこか遠くを見つめた。

「おじさま、今度はいつ来てくださるのかしら。楽しみだわ。ピアノも聴かせてくださるって。でも、頻繁に会えないのが残念ね」

夢見ごちにそう言ったあと、急に冷たい表情になりアンジェリカを見据えた。

「あなたのせいよ」

アンジェリカは彼女の迫力にたじろぎ、あとずさりをした。ユールベルはすぐに元の無表情

に戻った。

「でもまあいいわ。ジークとは毎日でも会えるんだから」

アンジェリカは胸を押さえ、再びじりじりとあとずさった。半開きにした口をわずかに動かし何かを言おうとしているようだったが、声が出てこなかった。やがて踵を返しユールベルに背を向けると、その場から走り去っていった。

ユールベルは外に飛び出したアンジェリカの後ろ姿を、虚ろな目で見送った。

アンジェリカは走った。脇目も振らず走った。校庭を一直線に横切り、門から飛び出した。

「あっ……！」

彼女は門の外で立ち止まっていた男の背中にぶつかった。

「ごめんなさい」

慌てて謝り、顔を上げる。その瞬間、彼女ははっとして目を見開いた。

「レオナルド！」

アンジェリカがぶつかった男はレオナルドだった。彼の方も少し驚いていたようだった。

「ひとりとはめずらしいな」

「ちょうど良かった」

アンジェリカは深く息をして、呼吸を落ち着けた。

「私、家出したいんだけど、どこかいいところはない？」

「……は？」

レオナルドの声が素っ頓狂に裏返った。

39. 家出

「ここって、あなたの家じゃないの」

アンジェリカの目の前には、彼女の家ほどではないが、かなり立派な邸宅が広がっていた。レオナルドの家である。拍子抜けしたような、あきれたような顔で彼を見上げた。

「他にあてはない」

「なるほどね」

アンジェリカはため息まじりに言った。レオナルドはムツとして彼女を見下ろした。

「嫌なら帰るんだな」

「この際、仕方ないわね」

アンジェリカは腕を組みながら再びため息をついた。お願いする立場であるはずの彼女が、なぜか偉そうな態度をとっていた。ケンカを売っているも同然な物言い。レオナルドにとっては面白いはずがない。

「本当に可愛げのないやつだな」

顔をしかめて彼女をひと睨みすると、玄関へと歩き始めた。

アンジェリカは玄関先で足を止めた。少し怯えたような表情で中を見渡す。彼女がここに入るのは初めてだった。自分のことを疎ましく思う人たちの家。いわば敵の本拠地である。彼女が躊躇するのも無理はない。

「どうした。入らないのか？」

「入るわよ」

レオナルドに弱味を見せるわけにはいかない。アンジェリカは精一杯、突っ張った。不安な気持ちを押し隠し、前方を睨みつけながら、堂々と見えるよう大きな足どりで歩いていった。

「二階だ」

ふたりが階段をのぼっていると、下でガチャンと大きな音がした。驚いて振り向くと、下で女の人が青い顔でこちらを見上げていた。レオナルドの母親だった。彼女の足元には壊れたティーポットやカップが散らばっていた。

「どうして、その子……」

彼女は震える声でつぶやいた。アンジェリカの顔が曇った。

「何をしに来たの！うちまで呪われるわ、出て行ってちょうだい！レオナルドあなた何を考えているの？！」

金切り声でまくしたてる。レオナルドは母親に冷たい視線を送ると、無視して階段を上ろうとした。しかし、アンジェリカが呆然と立ちつくしていることに気がつき、彼女の手を引き、声を掛けた。

「行くぞ」

「でも……」

アンジェリカは横目で階下を見下ろしながら口ごもった。

「気にするな」

レオナルドは吐き捨てるようにそう言うと、アンジェリカの手を強く引いて二階へと駆け上がっていった。

「レオナルド！」

ヒステリックな声が背中に突き刺さったが、ふたりはもう振り返らなかった。

レオナルドに促されて、アンジェリカは二階の奥の部屋へ入った。彼女の部屋には及ばないが、それでもかなり広めの部屋。全体に白が基調となっている。本棚に机、ベッド、ソファなどがゆとりをもって配置され、すっきりと清潔感にあふれていた。これがレオナルドの部屋であるとは、アンジェリカには意外に思えた。

「座れよ」

レオナルドはベッドに腰を下ろしながら、アンジェリカにソファを勧めた。

「勘違いするなよ、さっきのこと。おまえを庇ったわけじゃない」

「反抗期ってわけ？」

アンジェリカはソファの背もたれに体重を預けた。レオナルドは疲れたように息をつき、顔をしかめながら頭をかいた。

「反抗期は向こうの方だ。アカデミーに入ったのが気に入らないらしくてな。ますますヒステリックになってきている」

アンジェリカはあの金切り声を思い出し、少しレオナルドに同情した。同時に、ふと疑問がよぎった。

「そもそもどうしてアカデミーに行こうなんて思ったわけ？ 前に訊いたときははぐらかされたけど」

「はぐらかしてなんかいないさ」

レオナルドはベッドに手をつき、胸をそらして上を仰いだ。

「あのとき言ったとおりだ。子供じみた強がりはやめにして、事実を受け入れることにしたのさ。から威張りしている自分が情けなく思えたんだな」

そこでいったん言葉を切り、軽く一息ついた。そして、アンジェリカに視線を流し、さらに話を続けた。

「正直、今はおまえにはかなわないだろう。だが、いつか正々堂々とおまえを負かしてやろうと思ってな。そのために同じ舞台を選んだのさ」

「はあ……」

アンジェリカは気の抜けた相槌を打った。あまりに意外で呆然とした。彼が語ったことは、彼女にとって想像もしないことだった。

しかし、どこかで聞き覚えのある話だと思った。彼女は瞬きをしながら考えを巡らせた。ふとジークの顔が、声が、頭をかすめた。

アンジェリカはそれを打ち消すように、激しく頭を横に振った。

「何をやっているんだ」

「……別に」

不思議そうに尋ねるレオナルドから目をそらし、軽く口をとがらせた。

「思えばおまえとまともに会話をしたことなんてなかったな」

レオナルドはニッと笑った。アンジェリカは無表情で、彼にちらりと目を向けた。

「そうね、妙な感じだわ。……そうだわ」

急に何かを思いついたようにレオナルドに振り向いた。

「一度あなたに訊いてみたかったんだけど」

「何でしょうか、お嬢さま」

レオナルドはこの状況を楽しむようにニヤリとし、からかうような口調で言った。

しかし、アンジェリカは真剣な表情で彼を見据えていた。

「私のどこが嫌い？」

「は？」

今度はレオナルドが驚き、素頓狂な声をあげた。

「嫌いなんでしょう？ 私のこと」

さも当然のように、冷静にくり返す。レオナルドは答えに窮し、渋い顔をして首を傾げた。

「嫌いというか……話していると頭にくるのは事実だが……」

「はっきりしないわね」

アンジェリカは冷ややかな視線を向けた。レオナルドは焦りから頬を紅潮させ、彼女を睨み返した。

「自分はどうなんだ」

「私はあなたのことが嫌いよ」

アンジェリカは事もなげに、さらりと言った。

「……ずいぶんはっきり言うな」

レオナルドは言葉を失い、とっさに返事ができなかった。好かれていると思っていたわけではないが、面と向かって言われるとさすがに動揺してしまう。

「当然よ。あれだけ嫌なことを言われ、嫌なことをされれば、誰だって嫌いになるわ。肩のやけどだって痛かったんだから」

眉間にしわを寄せ、口をとがらせながらそう言うと、レオナルドに焼かれた肩を手で押さえて見せた。

「あー、悪かったと言っただろう」

思いきり顔をしかめ頭をかくと、面倒くさそうに言った。

「でも……」

憂いを含んだアンジェリカの声に反応して、レオナルドは手を止めた。

「今は嫌いなあなたと一緒にいる方が気が楽だわ」

誰に向けるともなく、寂しげな儂い笑顔を浮かべる。

「これ以上、裏切られなくてすむもの」

レオナルドは複雑な面持ちで、彼女の横顔を見つめた。

夜も遅くなり、ふたりは部屋を暗くして寝ていた。レオナルドは自分のベッドで、アンジェリカはソファで、それぞれ静かに寢息を立てている。

「レオナルド！レオナルド！！」

部屋の外から金切り声が響き、扉が勢いよく開けられた。廊下から明かりが広がり、部屋を薄く照らす。

「……んだよ」

レオナルドは半分寝ぼけて、目をほとんど閉じたまま上体を起こした。白いシルクのパジャマが薄明かりに反射した。

「お嬢さまのお迎えが……」

レオナルドの母親が震える声で言いかけた。と同時に、後ろから怖い顔をした男性が姿を現した。サイファだった。彼は無遠慮に部屋に踏み入り、ぐるりとあたりを見まわした。そして、奥のソファにアンジェリカを見つけると、早足で歩み寄った。静かに膝をつき、彼女の顔を覗き込んだ。その寝顔を目にすると、表情を和らげ、小さく安堵の息をもらした。

「帰るよ、アンジェリカ」

サイファは彼女の耳もとで優しくささやいた。アンジェリカはようやく目を覚ました。

「……どうして……ここは、どこ……？」

ぼんやりした頭でサイファの顔を確認する。そして、ゆっくりとあたりを見まわした。見慣れない天井、見慣れない部屋。ようやく思い出してきた。ここがどこなのか、なぜ自分がここにいるのか――。

「わたし、家出したのよ。だから帰らない……帰りたくないの」

横になったまま体を丸め、サイファから視線をそらせた。

「言いたいことがあるのなら聞くよ」

優しい声、穏やかな表情。だが、その中にどことなくつらそうなものを感じて、アンジェリカの胸に痛みが走った。しかし、彼女にも意地があった。素直に帰るわけにはいかない。目をきつく閉じ、首を横に振った。

「とりあえず帰ろう」

サイファはにっこりと笑いかけ、アンジェリカへと手を伸ばした。だが、彼女はその手をピシヤリと払いのけた。

「帰らない」

震える声で思いつめたように言うと、毛布を頭からかぶり背中を向けた。

「本人が帰らないと言っているだろう」

今まで黙って見ていたレオナルドが、ベッドの上から口をはさんだ。サイファは勢いよく振り返ると、激しく彼を睨みつけた。

「おまえは黙っている」

ぞっとするほど冷たい瞳、冷たい声。レオナルドはすくみ上がり、言葉をなくした。

サイファは再びアンジェリカに向き直った。毛布ごしの背中にそっと手を置き、顔を近づけ哀

願した。

「お願いだ、一緒に帰ってくれ」

アンジェリカは毛布の奥で首を横に振った。

「お願い、しばらくそっとしておいて」

感情のないその声に、サイファは拒絶を感じた。今は何を言っても無駄かもしれない。引き裂かれるような胸の痛みをこらえながら、彼女の背中からそっと手を引いた。

「……わかった。あしたは帰っておいで。待っているから」

サイファは無理に笑顔を作り、穏やかに言った。そのあと、真剣な表情になると、まっすぐ彼女の後ろ姿に目をやった。

「これだけは信じてほしい。私たちは誰よりもアンジェリカのことを大切に思っている」

そう言うと、もういちど彼女の背中に手を置いた。そして、静かに立ち上がり、その場をあとにした。

アンジェリカは遠ざかる足音を耳にして、急に不安に襲われた。だが、振り返ることはしなかった。

サイファは部屋を出る間際、目とあごでレオナルドを呼びつけた。彼は一瞬、躊躇したが、素直に従った。音を立てないようベッドを降り、サイファに続いて部屋を出ていった。

サイファ、レオナルド、彼の母親の三人は、階段を降りたところで足を止めた。

「理解ある父親を演じるのは大変ですね」

レオナルドは鼻先で笑いながら言った。

「何を企んでいる」

サイファはレオナルドに振り向くと、低くうなるような声で詰め寄った。

レオナルドは背筋に寒気を感じ、ごくりと息をのんだ。宴の日のことが彼の脳裏によみがえった。額に汗がにじむ。それでも不敵ににやりと笑って見せた。

「行くあてもなく困っていたお嬢さまをお助けしただけですよ」

サイファはレオナルドの胸ぐらに掴みかかりたい衝動に駆られた。だが、理性でそれを堪えた。手のひらに爪が食い込むほど、強くこぶしを握りしめた。

「わかっているだろうな。娘に何かしてみろ。ただではおかない」

こみ上げてくるものを抑えながらそう言うと、冷たく切りつけるような視線でレオナルドを睨みつけた。レオナルドの心臓はぎゅっと縮みあがった。体全体に寒気と痺れが走り、額からは冷や汗が吹き出した。それでも彼はサイファに挑むことをやめなかった。

「何もするつもりはありませんよ。あなたとは違いますから」

「な……に？」

「レオナルド！！ いいかげんにしなさい！！」

金切り声がふたりの会話を遮った。

「サイファさんも、今日のところはお引き取り願います。お嬢さまは丁重にお預かりしておきますから」

彼女は疲れた顔で、突き放すように言った。サイファはその言葉を耳にして、ようやくいつもの冷静さを取り戻した。そして、彼女に深々と頭を下げた。

「夜分にお騒がせして申しわけありませんでした。アンジェリカのこと、よろしく願いいたします」

丁寧にそう言うと、扉を開け外へと出ていった。

レオナルドが部屋に戻ると、アンジェリカは両膝を抱え、毛布にくるまり、ちょこんとソファに座っていた。不安そうな表情で、おずおずと尋ねかける。

「お父さんは？」

「帰った」

「そう……」

安堵と落胆の入り混じった息をつき、目を伏せた。そして、曇った顔を膝の上に乗せると、小さくひとりごとをつぶやいた。

「やっぱり帰ればよかったかしら」

レオナルドは扉を閉めた。部屋はたちまち真っ暗になった。カーテンの隙間からのぼんやりしたわずかな光で、なんとかお互いの姿を確認することだけはできる。

「そんなことでは、なめられるぞ。一日くらいまともに家出をしてみろ」

レオナルドはそう言いながらベッドに入った。

「そうね」

アンジェリカは寂しげに目を細めた。

「おやすみなさい」

彼女は深めに布団をかぶっているレオナルドに声を掛けた。だが、彼からの返事はなかった。

40. 不条理な交渉

「来たよ！」

リックは目を凝らして遠くを見ながら声をあげた。そして、アカデミーの門柱に寄りかかっているジークの肩を、急かすように軽く二度たたいた。ジークは腕組みをしながら暗い顔でうつむいていたが、彼に促されると、顔を上げその視線を追った。朝靄の中に小さな影がふたつ、だんだんと近づいてくる。ひとつはアンジェリカ、そしてもうひとつは……。

「あら、おはよう、ジーク」

恐い顔で仁王立ちしているジークを見上げて、アンジェリカは少しとぼけたようにあいさつをした。

「なんでコイツと一緒にんだ。まさかきのうおまえが泊まったのって、コイツのところじゃねえだろうな」

ジークはアンジェリカと並んで歩いていたレオナルドを指さしながら彼女に詰め寄った。レオナルドは眉をひそめて、鼻先に突きつけられた指を払いのけた。ジークはあからさまにむっとして、レオナルドを睨みつけた。

「そうよ。いいでしょう、別に」

アンジェリカはつんとしてそう答えた。しかし、それと同時にふと疑問を感じた。ジークの口ぶりは、まるで自分が家出をしたことを知っているかのようだった。父親に聞かされたのかも知れない。だが、それならなぜレオナルドのところにいたことは知らなかったのだろう。

「良くねえよ！」

ジークの大きな声がアンジェリカの思考を現実に戻した。

「なんでよりによってコイツなんだよ！ ラウルならまだわかる……いや、アイツも良くねえが……」

出だしの勢いはどこへいったのか、次第に歯切れ悪く口ごもっていった。アンジェリカは呆れ顔で彼を眺めていた。

レオナルドは何かを思いつき、小さくニヤリと笑った。

「こんなやつらは放っておいて早く行こうか、アンジェリカ」

優しさを装ってそう言いながら、アンジェリカの肩を強く引き寄せた。彼女は不意をくらい、よろけてレオナルドの胸に寄りかかる格好になった。

ジークは目を大きく見開き、息をのんだ。言葉は出てこなかった。リックも隣で目をぱちくりさせていた。

「ふざけないで」

アンジェリカは体勢を立て直すと、レオナルドの手を冷たく払いのけた。

彼の小さな悪だくみはあっさりと崩れ去った。ジークに反発している今の彼女なら乗ってくるかもしれないと思ったが、にべもなく拒絶された。ジークへ精神的なダメージを与えたかったのだが、逆に自分の方が軽くダメージを受けてしまった。

少し寂しそうな彼を残し、アンジェリカは早足で歩き出した。無表情でジークとリックの間を突っ切っていく。ふたりは慌てて彼女を追った。レオナルドもその後ろからついていった。

「きのうのこと、怒ってるんだろ」

ジークは神妙な面持ちで、後ろから静かに声を掛けた。「きのうのこと」とは、図書室でアンジェリカを残しユールベルに会いに行ったことだ。そのときに彼女はいなくなった。だから、それが原因としか考えられなかった。わずかに見える彼女の横顔をちらりと窺う。その表情から感情は読み取れなかった。

「怒っているわけじゃないわ」

アンジェリカは前を向いたまま答えた。小さいがはっきりとした声だった。それでもジークはその言葉を素直に受け取っていいものか迷っていた。

彼女は淡々と話を続けた。

「ただ少しショックだっただけ。ジークのことだけじゃなくて……いろいろあったのよ」

ジークは強く締めつけられる思いがした。

「裏切ったわけじゃない。わけを話す」

耐えきれなくなった彼は、思わず弁解めいたことを口にした。

「いいわもう。だいたいわかったから」

「わかったって……」

そこまで言って、ジークははっとした。眉をひそめ、嫌な顔で後ろを振り返る。

「まさかおまえが言ったのか、あのときのこと……」

押し殺した声でそう言い、レオナルドを苦々しげに睨みつけた。ユールベルにハンカチを返しに行ったとき、レオナルドは一部始終を見ていた。そして、そのことをアンジェリカに言いかねない様子だった。自分を嫌っている彼のことだ。あることないことを吹き込み、アンジェリカと自分を引き離そうとしても不思議ではない。

「あのときのことって？ レオナルドが何か知ってるの？」

アンジェリカは足を止め振り向いた。ふたりを眺めながら、きょとんとして尋ねた。

「え？」

今度はジークがきょとんとした。

「くっ……はっはははは！ 自爆とは愚かな奴だ」

レオナルドは空に向かい、はじけたように高笑いをした。

彼の言うとおりの自爆だった。レオナルドは何も言ってはいなかったようだ。ジークはやり場のない悔しさを抱え、歯をくいしばり耳を赤くした。目の前の嫌味な男を、ただ恨めしく睨むことしかできない。

「なんだ、逆恨みか？」

レオナルドはせせら笑いながらジークを挑発した。斜めにあごを上げ、ニヤニヤした目を流す。ジークはこぶしをぐっと握りしめ、煮えたぎる気持ちを抑え込んだ。

「話してくれなくてもいいわよ」

アンジェリカは無表情で言った。

「え？」

ジークは驚いて振り返った。さっきからどうもアンジェリカの様子がおかしい。まるで自分にまったく興味がないかのようだ。もしかしたら、もう愛想をつかされてしまったのだろうか。ほんの一瞬のうちにそんな考えが頭を駆け巡った。

アンジェリカはジークから目をそらせた。

「だいたい見当がつくもの」

ため息まじりにそう言うと、腕を組んだ。

「どうセユールベルに振り回されたって話なんでしょう？」

ジークは彼女がそう考えていることに驚いた。口調からして、怒りの矛先は自分ではなくユールベルに向いているようだ。何か知っているのだろうか。それともユールベルとの間に何かあったのだろうか。

「……いや、そうじゃなくてな」

なんと説明しようか迷いつつ、口を切った。振り回されたといえばそうだが、それだけではない。だが、下手にユールベルを弁護するようなことを言っただけでは、アンジェリカの機嫌を損ねてしまうだろう。

アンジェリカは視線を戻し、大きな瞳を彼に向けた。何かを秘めたような真剣な表情。彼はごくりと息を呑み、言葉を失った。

「ジークのことは信じてる。それでいいじゃない」

アンジェリカは真顔でそう言ったあと微かに笑った。そして、ジークに背中を向け、アカデミーへと駆けていった。

夕方になり、終業を告げるベルが鳴った。

アンジェリカは帰り支度をすると、ジークの席へと小走りで向かった。しかし、彼はだらしなく大口を開けてあくびをすると、机の上に腕を投げ出し突っ伏した。

「ずいぶん眠そうね」

アンジェリカはこんなジークを見るのは初めてだった。彼は机の上で、再び大あくびをした。

「さっきの授業、ずっと寝てたよね。ラウルに気づかれてたよ」

リックは彼を見下ろして笑いかけた。ジークもつられて表情を緩めた。

「まあ、あいつも今日くらいは大目に見てくれるだろ」

「今日くらいって？」

アンジェリカはきょとんとして尋ねた。

「あ……」

今日のジークは口を滑らせてばかりだった。リックは肩をすくめ苦笑いした。

「実は、きのう、アンジェリカがいなくなったことで大騒ぎだったんだよ。ラウルもあまり寝てないんじゃないかな。クラスメイト全部に連絡してるはずだし。ジークも責任を感じてずっと……」

「リック！」

ジークの強い制止により、リックはそこで言葉を止めた。大まかな説明は仕方ないにしても、彼女の負担になるだけの余計な話はしてほしくない——ジークはそう思った。しかし、アンジェリカはそれだけ聞けば十分だった。

「……ごめんなさい」

下を向き小さな声でぼそりと謝った。急にまわりからの視線が気になり始めた。落ち着かない。今すぐこの教室を出たい、そんな衝動に駆られた。

しかし、ふたりはそのことに気がつかなかった。彼女が真摯に謝っているのだとしか思っていなかった。リックはにっこり笑いかけた。ジークも机に伏せたまま顔だけ横に向け、ほんの少し笑ってみせた。アンジェリカはとまどいながらぎこちない笑顔を作って返した。

「でもよりによってレオナルドのところだったとは思わなかったよ」

リックは意外だということを強調するように、大げさな抑揚をつけて言った。

「ああ、でもおかしいとは思ったぜ。サイファさん、教えてくれなかったからな。アンジェリカを見つけた場所」

ジークは体を起こし、帰り支度を始めた。教本を無造作に鞆に放り込む。

「そりゃ、言えないよね」

そう言ってリックはくすくす笑った。ジークは何がそんなにおかしいのかと思いつつも、つられてなんとなく笑った。

アンジェリカはその会話を聞いて、ようやく今朝の謎が解けた。家出をしたことは知っていたのに、レオナルドのところにいたことは知らなかった——。それはこういうことだったのだ。ただ、なぜサイファが黙っていたのかということまでは、彼女には理解できなかった。

「今日はちゃんと帰るんだろ」

ジークはアンジェリカに振り向いて尋ねた。

「ええ、そのつもりよ」

アンジェリカは鞆を後ろ手に持ちかえた。一晩の家出だけでだいぶ気は済んだ。これ以上、両親やジークたちに心配や迷惑をかけるわけにもいかない。それに、逃げたところで何も解決などしない。冷静になってそのことがよくわかった。

「送っていく」

ジークは立ち上がり、鞆を肩に引っ掛けた。

「え？ いいわよ別に。眠いんでしょう？」

アンジェリカは少しあせったように、早口でそう言った。しかし、ジークは彼女に顔を向けると、にっと白い歯を見せた。

「またいなくなれたら、それこそ眠れねえからな」

アンジェリカには返す言葉がなかった。観念したようにため息をつく、暗い声でぼそぼそと言った。

「帰る前に、寄るところがあるんだけど……」

「どこだ？ 一緒に行くぜ」

アンジェリカは上目遣いでじっとジークを見つめた。

「……ユールベルのところ」

「え？」

ジークの笑顔が凍りついた。

「ジーク、本当についてくるわけ？ ジークがいると話がしづらいんだけど……」

アンジェリカは眉をひそめて困ったような顔を見せた。

「ひとりで行かせるわけにはいかねえよ」

ジークは前を向いたまま冷静にそう言った。だが、内心は穏やかではなかった。アンジェリカはともかく、ユールベルはどういう言動をとるのか読めないだけに怖い。アンジェリカの前で、また抱きつかれでもしたら、自分はどのような態度をとればいいのか。考えると頭が痛くなった。

リックも一緒なのが唯一の救いだった。いてくれるだけでありがたい。ユールベルとアンジェリカの間にひとりなど、とてもいたたまれない。ジークはさすがのような気持ちで彼を見た。リックがその視線に気がつき振り向くと、ジークは慌てて目をそらせた。

一年生の教室に着いた。授業が終わってから時間が経っているせいか、残っている生徒はもう半分以下になっていた。

三人は戸口から覗き込んでユールベルを探した。しかし、姿は見当たらない。

「なんだ？」

教室に残っていたレオナルドが、立ち上がって声を掛けた。

「あなたに用なんてないわよ。私が探しているのはユールベル」

アンジェリカは目もあわさず冷たくあしらった。レオナルドはむっとして、恨めしそうな視線をジークとリックに向けた。ジークも負けじと睨み返した。

「彼女なら帰ったはずだ」

レオナルド再び席につくと、ぶっきらぼうに言った。

ジークは拍子抜けした。もっと嫌味を言ったり、突っかかったりしてくるかと思った。それどころか、頼んでもいないのに、彼女のことを親切に教えてくれた。素直にそれを信じていいものか疑問に思ったが、どちらにしろジークにとって嬉しい情報だった。ユールベルが帰ったと聞けば、アンジェリカもあきらめるだろう。ほっとして安堵の息をもらした。

アンジェリカは踵を返し、玄関へと向かった。

「帰るんだな？」

ジークの声は弾んでいた。

「居場所の見当はついているわ」

アンジェリカはまっすぐ前を見据えて言った。そして、さらに足を速め、迷いなく進んでいった。

三人はアカデミーの外れにある小さな礼拝堂へやってきた。ジークもリックも、ここへはほとんど来たことがない。ふたりはさびれた建物を眺めまわした。

「こんなところにいるのか？ そもそもなんでそう思うんだ？」

アンジェリカはジークの問いに答えず、無言で扉を押し開けた。

「ユールベル、いるんでしょう？」

アンジェリカの声が小さな礼拝堂の中に反響した。しかし返事はなかった。それきり静まり返った。

「いないんじゃないの？」

リックが後ろから覗き込んで、あたりを見渡した。

「もう帰ろうぜ」

ジークはいらついた様子で急かした。

——コトン。

どこかで小さな音がした。アンジェリカに緊張が走った。

——ギギ……。

いちばん後ろの長椅子から、金の髪がむくりと現れた。そして、合間からのぞく白い包帯。ユールベルだ。彼女は顔を上げ、三人を虚ろに見つめた。

「ジーク、来てくれたのね」

ユールベルはぼうっとした調子でそう言うと、長椅子の上に立ち上がった。さらに背もたれに素足を掛けてのぼり、まっすぐに背筋を伸ばしたままつま先立ちをした。薄地の白いワンピースとウェーブを描いた金色の髪が、風を受け、緩やかに舞う。そして左から差し込むステンドグラスの光は、彼女を色とりどりに輝かせた。風が吹くたびに形を変え、きらめきを放っている。

——天……使……。

そんな言葉がふとジークの脳裏をよぎった。彼はだらしなく口を開けて彼女を見上げている。リックも惚けた顔で、彼女を瞳に映している。アンジェリカだけが固唾を飲んで、ユールベルの次の行動にそなえ身構えた。

ユールベルは目を細めてジークを見下ろすと、わずかに表情を緩めた。そして、顔を天に向け瞳を閉じると、体を伸ばしたまま、前に倒れていった。

ジークは吸い込まれるようにそれを見ていた。しかし、彼女の足が背もたれから離れたのを目にすると、はっと我にかえた。

「危ねえ！」

ジークは彼女の落下地点に滑り込み、ぎりぎりで彼女を受け止めた。冷たい床の上でふたりは重なった。

「げほっ」

ジークは苦しそうにむせた。

「ジーク！」

アンジェリカとリックが同時に叫び、駆け寄った。

「な……なんでもねえ。ちょっと打っただけだ」

ジークはまだ苦しそうに顔をしかめ、つぶれた声で言った。

ユールベルは彼の胸の上で肩を震わせくすくすと小さく笑っていた。そして、かぼそい指を彼の頬に這わせ、小さな声でささやいた。

「あなたなら、助けてくれると思った」

喉元にかかる熱い息、鼻をくすぐる甘い匂い。平静を装ってはいたが、耳元が紅潮していくのは止められなかった。

「ユールベル、あなたどういうつもり?!」

アンジェリカは耐えかねて叫んだ。しかし、ユールベルは答えなかった。

ジークはユールベルを抱きかかえながら体を起こして座った。そして、小さく息をつくとき、脚の上の彼女をそこから下ろそうとした。しかし、彼女はジークの背中に手をまわし、離してはくれない。彼はそれを振り切るほど非情にはなれなかった。

「あ……あのな……」

そんな困りきった弱々しい声をもらすのが精一杯だった。

「あなたに用があってここに来たのは私よ」

アンジェリカは今度は冷静に言った。腕を組み、ユールベルを冷たく見下ろした。

ユールベルはジークの肩ごしにアンジェリカを見上げて、うっすらと不敵に笑った。アンジェリカは一気にカッと頭に血が上った。組んだ腕の中で強くこぶしを握りしめ、きゅっと下くちびるを噛んだ。

ジークは背中に妙な空気を感じ、冷や汗がにじんできた。

「あのな、ユールベル……」

彼は再びそう切り出した。だが、彼女はまわした手の力をよりいっそう強めた。無言の返事。ジークは言葉を続けられなかった。

「ユールベル、私の話を聞いて」

アンジェリカは低く抑えた声で言った。しかし、そこからは隠しきれない苛立たしさがにじんできた。

「聞いているわよ」

ユールベルはジークに寄りかかったまま返事をした。その声はどこか愉しげで、まるで挑発しているかのようだった。

アンジェリカは軽く目を閉じたため息をついた。それからゆっくりとまぶたを上げ、強いまなざしをユールベルに向けた。

「私と対戦してほしいの、VRMで」

ユールベルの瞳に鈍い光が宿った。

「た……対戦?!」

「なに言ってんだおまえ!」

リックとジークは驚いた声をあげながら、アンジェリカに振り向いた。

VRM（ヴァーチャル・リアリティ・マシン）は仮想空間を作り出し、そこへ現実世界の人間を投影させる機械である。神経信号を読みとり仮想空間に即時に反映させる。また、仮想空間で受けた刺激は、そのまま神経信号として脳に送られる。それにより触覚も痛覚もリアルに感じることができるのだ。以前、アンジェリカとジークが戦ったとき、許容を超える信号によりジークが失神するという事件があった。ヴァーチャルとはいえ危険な代物であることは間違いない。

ユールベルは動じていなかった。

「目的は何？」

彼女がそう言うと同時に突風が吹き込み、アンジェリカの髪を後ろからさらさらと舞い上がらせた。そして、スカートのはためく音があたりに広がった。やがて風がやみ、もとの静けさを取り戻すと、アンジェリカはゆっくりと口を開いた。

「私が勝ったら……昔、私たちの間に起こったことを教えて」

その真剣なまなざしに、ユールベルは意味ありげな笑顔を返した。

「私におじさまとの約束を破れというの？」

「ええ。あなたも相応の望みを出してくれていいわ」

アンジェリカは負けじと強気な態度を示した。

「そうね……」

ユールベルはそう言いながら、アンジェリカの反応を愉しむかのようにもったいつけた。

「私は……ジークをもらうわ」

彼の肩に口を押し当て、上目遣いでアンジェリカを見つめた。明らかにアンジェリカを挑発している。

しかし、アンジェリカは冷静だった。その挑発にはのらなかった。

「ジークは関係ないでしょう。他のことにして」

あきれたと言わんばかりに、わざと大きくため息をついて見せた。だが、ユールベルは引かなかった。

「関係あるかどうかなんて知ったことじゃない。ジークがほしい、ただそれだけ。他の条件では受けないわよ。どうするの？」

アンジェリカはきゅっと口を結び、難しい顔で考え込んだ。そして、ひとつの結論を出した。

「……わかったわ」

「おい！『わかったわ』って何だよ！俺の意思はどうなるんだ！！」

ジークは振り返り、焦って大声でまくしたてた。彼女がそんな条件を受けるとは微塵も思わなかった。驚くと同時にどこか寂しい気持ちになった。

「悪いけどジーク、条件をのんで。絶対に私が勝つから」

強い意志を秘めた瞳をまっすぐジークに向ける。彼は困ったように目をそらせた。

「随分な自信ね。私のことなんて何も知らないのに」

ユールベルは冷たい笑顔を浮かべた。しかし、アンジェリカは眉ひとつ動かさなかった。

「あなたがどんな力を持っていようと私が勝つ。それだけよ」

自らに言い聞かせるようにその言葉を噛みしめると、ユールベルをじっと見下ろした。

「待てよ。俺は取引の道具に使われるなんてゴメンだぜ。俺にはなんのメリットもねえしな！」

ジークはやってられないとばかりに、床に手をつけて上を向き、投げやり口調で言った。アンジェリカは一瞬きょんととして、それから緩く頷きながら考え込んだ。

「じゃあこうするわ。私が勝ったら、何でもひとつジークの言うことをきく。それでどう？」

「そんなの不公平よ」

ユールベルは間髪入れずにアンジェリカのあとに続けた。そして、ジークに顔を近づけた。

「私が勝ったら、私がジークの願いをかなえるわ」

「お、おまえらに頼みたいことなんてなんもねーよ！」

ジークはユールベルから逃れるように体を後ろにそらせた。

「……お願い、ジーク」

今までとは違うアンジェリカの弱々しい声。ジークは思わず振り向いた。

「私、どうしても自分の過去を知りたいの。なくした記憶を埋めたいの」

思いつめた表情、泣きそうな声、哀願する瞳。こんなものを見せられては拒否することなどできない。どうすればいい……。ジークはくちびるを噛みしめた。

「あの、取り込み中、悪いんだけど」

リックが遠慮がちに口をはさんできた。

「大事なことを忘れてない？ VRMでの人間と人間の対戦はもう禁止されてるんだよ」

リックの言うとおりであった。アンジェリカとジークの一件が原因なのかはわからないが、それからしばらくして通達が出た。VRMの使用は対プログラム（仮想人間）のみに限定するというものだ。

アンジェリカはそれを忘れていたわけではなかった。

「ラウルに頼めばなんとかなるわ」

彼女はしれっとして言った。

「ならなかったら？」

「……そのときは、そのときよ」

何か、彼女には思うところがありそうだった。リックの心に不安が広がった。

「いいわね、そういうことで」

アンジェリカはユールベルとジークに向き直り、強く念押しした。ユールベルは返事の代わりに挑戦的な笑みを返した。ジークは相変わらず困り顔で返答に迷っていた。

「それじゃ、ユールベル」

アンジェリカは冷たく無表情にそう言うと、背を向け外へと出ていった。

リックはジークに目配せした。ジークは我にかえり、脚の上のユールベルを下ろそうとした。それを察知した彼女はまた腕を伸ばしてきたが、今度はそれを阻止した。

「悪いな」

短くそう言うと、さっと立ち上がり、リックと連れ立って走り去った。

ユールベルはオレンジ色に照らされたジークの後ろ姿を無言で見送った。

ザッ、ザッと砂を踏みしめながら、三人は校庭を横切り門へと向かう。空は赤く染まり、三つの長い影を地面に映し出していた。

「本気……なんだよね？」

リックは横からアンジェリカを覗き込みながら、おそろおそろ尋ねた。

「もちろんよ」

彼女は前を向いたまま、きっぱりと言い放った。

「おっまえなあ……。どうしてくれるんだよ。意味わかってねえんだろ。ユールベ……」

「ジークをひとりじめにしたいってことでしょうか？ まったく子供じみたことを言ってくれるわ」

アンジェリカはジークの言葉を遮り、やや感情的にまくしたてた。

「……まあ……そう……だな」

歯切れ悪く、ジークはあいまいな返事をした。彼女の考えはどこかずれているような気がしたが、それを指摘するだけの確信が、彼の側にもなかった。ユールベルが何を考えているか、それは彼女自身にしかわからないことだ。

「だいたいジークがついてきたから、ややこしいことになったんじゃない」

アンジェリカはおさまらない怒りの矛先をジークに向けた。

「俺が悪いってのかよ！！」

「私にはこんなにえらそうなのに、どうしてユールベルには強気に出ないのよ」

「そ……そんなことねえだろ！」

「自覚がないわけ？！」

「関係ねーだろ！！」

リックは隣であきれたように苦笑いしていた。このくらいの言い合いは日常茶飯事である。そして、こんなことではふたりの絆は壊れないということを、リックはわかっていた。

ひとしきり言い合いをしたあとで、アンジェリカは思いついたように、小さく「あっ」と声をもらした。

「お父さんやお母さんには言わないでよね」

ジーク、そしてリックへと、念を押すように視線を送った。

「さあな。サイファさんに問いつめられたらしゃべっちゃうぜ、俺は」

ジークは頭の後ろで手を組んで、空を見上げた。

「僕たちが黙ってても、ラウルが黙ってないと思うよ。頼むんでしょ？ VRMのこと」

リックはアンジェリカの横顔を見つめた。

「もちろんラウルには口止めするわ。何がなんでもね」

強い決意を秘めた表情。それを見たふたりは、もう彼女を止めることはできない、そう思った

。

ジークの心には不安が渦巻いていた。戦い自体はもちろんだが、それ以上に彼女の望みが心配だった。サイファが過去のことをひた隠しにしているのは、アンジェリカのことを思っていることだろう。それを彼女が知ってしまうのは、果たして彼女のためになるのだろうか。だからとい

って彼女の負けを望むわけにはいかない。

「大丈夫よ、ジーク。絶対に勝つから。私を信じて」

アンジェリカはジークを見上げてにっこり笑った。

「……ああ」

ジークは複雑な顔でそう返事をする事しかできなかった。

41. 迷走

「どうして?!」

アンジェリカはそう叫んで一步前へ踏み出した。

「当たり前だ。そう決まっている」

ラウルは彼女を見ようともせず、机に向かったまま書類にペンを走らせていた。窓からの赤みがかった光が、彼の端正な横顔を照らす。何の感情もない表情。ユールベルは眉をひそめた。その後ろで、ジークとリックは曇った顔を見合わせた。

しかし、アンジェリカは、これくらいでは諦めなかった。

「そんなのわかっているわよ。だからラウルにお願いしているの」

強い視線を向け、強い口調で食い下がる。ラウルは横目で彼女を一瞥すると、あきれたようにため息をついた。

「おまえたち親子は、よほど私をクビにしたいらしいな」

「ラウルならうまくやってくれるって信じているわ」

アンジェリカはにっこりと満面の笑みを浮かべた。ラウルの手が止まった。机に向かったまま、再び小さくため息をついた。

「サイファに似てきたな」

アンジェリカはきょとんとして瞬きをした。だが、再びにっこりと笑って、照れたように肩をすくめた。

「使わせてくれるわよね、VRM」

彼女の口調は、ほとんど確信しているかのようだった。だが、ラウルの返答によって、その確信はあっさりと打ち砕かれた。

「駄目だ」

彼は迷いなくきっぱりと言い放った。

アンジェリカは口をとがらせ、不満げに彼を睨みつけた。しかし、やがてその瞳は決意を秘めた鋭いものへと変わっていった。

「だったらリアルで戦うまでよ」

「リアルって、おまえ何いってんだ!」

後ろからジークがうろたえながら叫んだ。リックも同様に驚き、大きく見開いた目を彼女に向けた。ユールベルは少しうつむいて、不敵にふっと笑った。

しかし、肝心のラウルは何の反応も示さなかった。アンジェリカは彼を覗き込むと、さらに畳み掛けた。

「私は本気よ。どちらかが死ぬかもしれないわ」

冷静に、重々しく言葉をつなげた。

「いいのね?」

それでもラウルが動じることはなかった。

「私には関係のないことだ」

冷たく突き放した言葉。机に向かったまま、アンジェリカに視線を向けもしない。

アンジェリカは目を閉じ、唇をかみしめた。

「わかったわ」

かすかに揺らぐ声。抑え込んだ怒りがにじんでいる。彼女はくるりと背を向けると、ジークとリックの間をすり抜け、大股で戸口へと歩いていった。引き戸を怒りまかせにガシャンと開け、そのまま医務室をあとにした。

ユールベルもそのあとに続き、静かに外へと出ていった。

ジークはけわしい目つきで、ラウルをじっと睨んでいた。

「おい、アンジェリカは本気だぜ」

低く、静かな声でうなった。

「おまえに言われなくてもわかっている」

ラウルは相変わらず書類に向かったまま、そっけなく答えた。

「だったらなんとかしろよ！」

ジークはそう言うと同時に、机にこぶしを叩きつけた。ゴッ、とスチールの机が鈍い音を立てる。机との接点から腕へと一気に痺れが駆け抜けた。ジークの目にうっすら涙が浮かんだ。しかし、歯を食いしばり必死でこらえた。ここで痛がっては格好がつかない。

ラウルはゆっくり腕から顔へとジークを見上げた。彼は怒りと痛みをすべて瞳に込め、まっすぐにぶつけてきていた。ラウルも逃げることなく、鋭く凍りつくような視線を返した。

「おまえは他人に頼るだけか」

ジークはカッと頭に血が上った。

「見損なったぜ！」

「それは元からだろう」

ラウルの冷静な態度と反比例するかのようになり、ジークはますます熱を帯びていった。

「今までよりもっと見損なったってことだ！！」

大声でそう叫び、足早に医務室を飛び出した。

「ジーク！！」

リックは慌てて彼のあとを追っていった。

「待ってよ、ジーク！」

ジークはリックの呼びかけを無視し、逃げるように足を進めた。彼には自らの逆上の理由がわかっていた。もちろんラウルは腹立たしい。しかし、それ以上に、何も出来ない自分自身に腹を立てているのだ。ラウルの指摘でそのことに気づかされたことが、さらに許せなかった。奥歯をかみしめ、爪が食い込むほどにこぶしを握りしめる。

「アンジェリカとユールベルがどこへ行ったかわかっているの？！」

「……あ」

背後からのリックの問いかけに、ジークははっとして足を止めた。

アンジェリカとユールベルは並んで廊下を歩いていた。

「リアルでの戦いに変更するけど、異存はないわね」

アンジェリカは前を向いたまま、はっきりとした声で尋ねた。

「ヴァーチャルでは物足りないと思っていたくらいよ」

ユールベルは目を細め、遠くを見つめると小さく笑った。

「いつのまにか、ずいぶん笑うようになったじゃない」

隣の彼女をちらりと盗み見ると、アンジェリカはつんとして言った。しかし、ユールベルはにっこりと顔いっぱい笑ってみせた。

「ジークのおかげよ」

アンジェリカは目を見開いて足を止めた。動けなかった。言葉が出なかった。

ユールベルも少し先で足を止め、振り返った。そのときにはすでにいつもの冷たい顔に戻っていた。

「だから、私にはジークが必要なの」

淡々とそう言うと、再び前を向いて歩き出した。

アンジェリカの額には生ぬるい汗がにじんでいた。

渡り廊下を歩ききると、白い立方体状の建物に辿り着いた。側面に窓はなく、一面コンクリートで覆われている。

アンジェリカは白い扉にかけられた古びた南京錠を手にとった。小さく呪文を唱える。手の内側が光り、一瞬でその錠は砕け落ちた。

重量感のある両開きの扉を、アンジェリカ、ユールベルが片方ずつ手にとり、ゆっくりと開いた。さらに内扉を押し開くと、まぶしいくらいの真っ白な空間があらわれた。白い壁、白い床、白い天井、それ以外は何もない。

「この道場なら心置きなく戦えるでしょう」

「そうね」

道場と呼ばれたこの建物は内側に強い結界が張っており、魔導の力が外にもれない仕組みになっている。また、そもそもが特別に丈夫に作られているため、物理的な力にも極めて強いという特性も持ち合わせている。まさに道場と呼ぶにふさわしい建物なのだ。

だがここは、教師の監視下でなければ使用してはならない。アンジェリカとユールベルも当然そのことは知っていた。しかし、今の彼女たちには、そのような規則を気にかける余裕などなかった。

「決着は、降参かテンカウントでどう？」

アンジェリカはまっすぐユールベルを見据えた。彼女は頭の後ろで包帯を固結びにしながらかけるく答えた。

「誰がカウントをとるの？ それに降参する気なんてないでしょう？」

「気絶するか、死ぬまでね」

アンジェリカはユールベルの言葉に被せるように訂正した。ユールベルは口端を上げ、挑むような目を向けた。

ガタン！

大きな音を立て、内扉が弾けるように開いた。

「やっぱりここか！」

ジークは入り口でけつまづきながら、慌ててアンジェリカに駆け寄った。そして、彼女の両手首をきつく掴み上げると、覆いかぶさるように顔を近づけにじり寄った。

「なによ！」

アンジェリカは手を振り払おうと力を入れたがびくともしない。視線を上げると、ぶつかりそうなくらい近くに、ジークのけわしい顔があった。

「俺が認めるのはVRMまでだ。現実世界での決闘なんて絶対やらせねえ。力づくでも止めてやる」

アンジェリカは大きな瞳を見開き、顔を上げ首を伸ばした。お互いのひたいが髪の毛ごしに触れ合った。ジークは少し身をひいた。

「ジークに止められる？」

静かだが凜とした声。そして冷たく鋭い表情。ジークの背中に痺れが走った。その一瞬をつかれ、アンジェリカに手を振りほどかれた。彼女は手が放れると素早く後方に飛び退き、ジークから離れた。

「始めるわよ、ユールベル！」

ユールベルはその声に呼応するかのようになり、両手を高々と上げ、呪文を紡ぎ始めた。それとほぼ同時に、アンジェリカも両手を前方に突き出し、口を開いた。

「くそっ！」

ジークは短く叫ぶと、早口で呪文を唱え始めた。

「ちょっと、三人とも！」

もはやリックに為すすべはなかった。ただそう叫ぶのが精一杯だった。

三つ巴の戦いが始まる――。

緊張が高まったその瞬間、三人はそれぞれ呪文をフェードアウトさせた。静寂があたりに広がる。怪訝な表情で、かわるがわる視線を合わせた。リックの制止を受け入れたわけではなさそうだった。

「どうしたの？」

リックは後ろからおそるおそるジークに声を掛けた。

「……全然、使えねえんだ、魔導の力が」

ジークはわけがわからないといった様子で手のひらを見つめ、ひたすら首を傾げていた。

「どうやらこの空間は魔導を無効化するみたいね」

アンジェリカがまわりを大きく見渡ししながら、ジークとリックの元に戻ってきた。

「そんなことできんのかよ」

ジークは眉をひそめた。

「実際ここがそうなんだから、できるんでしょうね。すべての魔導を無効にするなんて、ただの

おとぎ話かと思っていたけど……」

「食えない男ね」

ユールベルもそう言いながら、ジークたちのところへ歩いてきた。

「え？」

アンジェリカが振り向いた。

「こんなことができるのはラウルくらいよ。どうりで落ち着きはらっていたわけだわ」

ユールベルの声は淡々としていたが、どこか楽しんでいるかのようにも聞こえた。

ジークは、ラウルの態度と言葉を思い出すにつけ、ふつつつと怒りが沸き上がってきた。

「あいつ……ふざけやがって……。ホントに食えねえヤツだぜ」

うつむいて歯ぎしりをしながら小さくうなり、こぶしを強く握りしめた。

「どうするの？」

ユールベルは腕を組み、アンジェリカに向き直った。

「とりあえず、ここを出ましょう。なんだか落ち着かないわ」

アンジェリカはひじを抱え、肩をすくめた。

「もう決闘はあきらめた方がいいんじゃない？」

リックが後ろから声を掛けた。しかし、ふたりの少女は彼を一瞥しただけで、扉に向かって歩き始めた。彼の寂しげな背中に、ジークはため息をつきながら手を置いた。

空は道場に入る前より赤みを増していた。ジークとリックは顔を上げ、大きく腕を伸ばし深呼吸した。しかし、アンジェリカとユールベルは、気を緩めることなく話し始めた。

「結界なんかなくても外で戦えばいいでしょう。他に被害が及ぶことを恐れているわけ？」

「すぐにばれるからダメね。あっさり止められて、こってりお説教よ」

「じゃあ、やっぱり VRMしかないのかしら」

「ええ」

ふたりの意見が一致したところで、そろって足を踏み出した。その後ろを、ジークとリックはついて歩いた。

四人はヴァーチャルマシンルームにやってきた。対戦用ではない、通常の VRMがずらりと並んでいる。そのうちいくつかはコクピットが閉じられ、実際に作動しているようだった。

その部屋を突っ切り、奥の古びた扉へと足を進めた。この向こう側に、対戦用 VRMが置かれている。

「当たり前だけど、鍵がかかっているよ」

リックはそう言ったあとで、道場の壊されていた鍵を思い出した。嫌な予感がした。だが、止める間もなくユールベルが呪文を唱え、鍵を砕いてしまった。壊れた鍵を床に落とし、ぽつりと言った。

「これでおあいこね」

「え……ああ」

アンジェリカは生返事をした。おそらくはアンジェリカが道場の鍵を壊したことに對して言っているのだろうとは思ったが、彼女にはユールベルがそんなことにこだわる理由がよくわからなかった。

ギィ——。

アンジェリカはそろりと扉を開いた。そのとたん、顔をしかめて激しく咳き込んだ。他の三人も思わず後ずさりをした。

その部屋が長い間使われていないことは一目瞭然だった。つんとカビくさい匂い、床やマシンを覆うほこり、天井からぶら下がる蜘蛛の巣の残骸、虫の死骸……。部屋の中央に置かれているふたつのコクピットは、まるで骨董品のように見える。

「一年も経ってねえのにこれかよ！いくらなんでもたまりすぎだろ、ほこり！」

ジークはやけになり、勢いよくどかどかと踏み入った。足を下ろすたび、白いものが床から舞い上がった。

「ジーク、やめてよ！」

アンジェリカは両手で鼻と口をふさぎ、眉根にしわをよせた。窓のないこの部屋では、簡単に換気もできない。

ジーク以外の三人も、彼に続きこわごわと部屋に入っていった。アンジェリカはずっと口をふさいだままである。目にはうっすら涙さえ浮かんでいた。

「本当に動くのかよ。腐ってんじゃねえのか？」

ジークはコクピットの外側をバンと平手打ちした。すると再びあたりにほこりが舞い上がった。アンジェリカは無言で彼をうらめしそうに睨んだ。

ユールベルはふたつのコクピットのまわりを、ゆっくりとまわって観察していた。

「このコードをここにさして、そっちのコードはそこ」

指をさしながら、誰にともなく指示を送る。しかし、誰も反応しない。ジークとリックはゆっくり顔を見合わせると、同時にため息をついた。ふたりはしぶしぶしゃがみこみ、言われたとおりに配線していった。ほこりだらけの床に這いつくばっての作業で、手もひざも白く汚れてしまった。

「ふたつのコクピットをつなげるメインケーブルがないんじゃない？」

アンジェリカが口を手で覆いながら、コクピットの下方を覗き込んで言った。

「どこかにあるはずよ、探して」

ユールベルは腕を組み、命令口調で言った。

「はいはい」

ジークは投げやりに答えた。コクピットの下に手を伸ばしまさぐる。

「これ、そうかなあ」

ジークの反対側で、リックが声を上げた。彼が掲げた手には丸めた太いケーブルが握られていた。

「ちょっと切れてるみたいだけど」

彼の言うとおりに、被覆部が破れ導線がむき出しになり、切れかかっている部分がある。アンジ

エリカはコネクタ部分を手にとり、コクピットのそれと見比べた。

「形状的にはピッタリね。他にないならこれでやってみましょう」

「大丈夫なのかよ」

ジークは文句を言いながらもケーブルを受け取り、リックとともにふたつのコクピットに差し込んでいった。

「いいかしら？」

ユールベルが確認をとり、電源ボタンに手を伸ばした。

「そのボタンを押したら爆発するぞ」

「ラウル?!」

戸口から腕組みをしたラウルがあらわれた。

「あれで諦めるわけではないと思ったが」

「だったら協力して！」

アンジェリカはラウルへと駆け寄った。

「これ以上、物を壊されても困るからな」

ラウルは足元の砕けた南京錠に目を落とした。

「じゃあ！」

アンジェリカはぱっと顔を輝かせた。

「メインケーブルは私の部屋にある」

「部屋のどこ?!」

アンジェリカはすぐにでも飛び出していきそうな勢いで、返事を急かした。

「私がとってくる」

ラウルはアンジェリカの肩に手を置き、落ち着かせた。そして、奥にいる、ほこりまみれのジークに目を移した。

「その間にここをなんとかしておけ」

「なんとかって、どうすんだよ」

ジークは彼を睨みつけながら、いつもの調子で食ってかかった。ラウルは涼しい顔で廊下を指さした。

「清掃道具はあっちだ」

ラウルが出ていったあと、四人は言われたとおり素直に掃除を始めた。ユールベルとアンジェリカがほうきで掃き、ジークとリックはぞうきんがけをする。

「なんか、うまくこき使われてるような気がする……」

ジークは納得がいかない表情で、ぶつぶつと独り言を口にした。

「文句を言ってないで手を動かしてよ。ラウルの機嫌を損ねたら終わりなんだから」

アンジェリカにたしなめられると、ムツとして、むきになって床を拭き始めた。そんな彼の様子をリックはにこにこ笑いながら見ていた。

「いいんじゃないの？ 掃除くらい」

「俺はあいつのやり方が気にいらねえんだよ！」

ジークはぞうきんを持つ手に怒りを込め、ますます勢いよく拭いていった。

アンジェリカとユールベルは、ほうきをぞうきんに持ち替えた。アンジェリカは右側の、ユールベルは左側のコクピット内部を拭き始めた。

ここが自分の戦場になる——。アンジェリカは手に力を込めた。

ふいに顔を上げると、コクピットの向こう側のユールベルと目が合った。彼女は何も言わなかったが、負けないという強い意志がその瞳から感じられた。しかし、アンジェリカも負けるわけにはいかない。その思いを瞳に込め、強い視線を返した。

扉を開けラウルが入ってきた。ケーブルとキーボード、そしてヘッドセットを小脇に抱えている。

「てめえ、わざとのんびりしてたんじゃないやねえだろうな！」

ジークは黒く汚れたぞうきんを握りしめて立ち上がった。

「まだ隅の方にほこりが残っているぞ」

ラウルは彼に顔を向けることなく、まっすぐ正面のVRMへ向かった。ジークはラウルの背中を睨みつけた。

「しばらく調整をする。その間、掃除を続けている」

ラウルはメインケーブルを繋ぎ替え、電源を入れた。キーボードを本体に繋ぎ、軽快にキーを叩く。前方の大型ディスプレイに、見たこともない画面があらわれた。ラウルの指に連動して画面に文字が表示され、ウィンドウが次々と開いては閉じていった。

「見てないで手を動かさせ」

ラウルはディスプレイを見たままで、後ろの四人に言った。四人は慌てて掃除を再開した。

狭い部屋にカタカタとキーボードの音が響く。

「完了だ」

「本当?!」

アンジェリカはぞうきんを間に両手を組んだ。

「対戦は私のルールに従ってもらう。それが条件だ」

ラウルはアンジェリカに振り向き、無表情でそう言った。彼女はあごを引き、表情を引き締めた。ユールベルも後ろでじっと彼を見つめていた。

ラウルは言葉を続けた。

「決着がつくのは以下の三つのとき」

リックは張りつめた空気を感じ、ごくりと喉を鳴らした。

「一つ目は、どちらかが降参の意思を示したとき。二つ目はスリーカウントダウン。カウントは私がとる。三つ目はリミッターが働いたとき」

ユールベルの眉がぴくりと動いた。

VRMでは仮想空間で受けた刺激を、神経信号として脳に送る仕組みになっている。リミッターは制限値を超える信号がきたときに、超過分をカットする役割を担う。すなわち、一度の攻撃で強いダメージを受け、この装置が働いたとき負けとするというのが、ラウルのルールだった。

「制限値はどのくらいにセットしてあるの？」

ユールベルは上目遣いでラウルを睨んだ。ラウルは彼女の視線を真正面から受け止めた。

「適正值だ。現実世界で受ければ間違いなく意識をなくす」

その回答を聞きしばらく考えていたが、やがて彼女は強気な微笑みを浮かべた。

「リミッターなんて納得いかないけど、仕方ないわね」

そう言って、アンジェリカに振り向いた。

「私もそれでいいわ」

アンジェリカはラウルを見上げて、真剣な表情を見せた。

「よし、準備だ」

ラウルの声を合図に、ふたりはコクピットに乗り込んだ。

ジークはアンジェリカのコクピットに駆け寄った。

「頑張れよ！ アンジェリカ！」

白い歯を見せ、ガッツポーズを送る。アンジェリカも勝ち気な笑顔でガッツポーズを作り、ジークのこぶしとコツンと合わせた。

ユールベルは隣のコクピットからその様子をじっと見ていた。無表情でただ見つめるだけ。リックにはそれが無性に悲しく映った。しかし、彼女に「頑張ってる」などと声をかけるわけにもいかない。彼は、ただ見送ることしか出来なかった。

コクピットのふたが閉まり、ディスプレイにふたりの姿が映し出された。ラウルはヘッドセットを手にとった。

「ラウル……。それ、もうひとつないのか？」

ジークはめずらしく穏やかに尋ねた。

「ない」

ラウルはそっけなく返事をする、ヘッドセットを装着した。仮想空間への音声入出力ができるのは、このヘッドセットだけである。ジークは諦めずにしつこく詰め寄った。

「せめて外部スピーカーとかねえのか？」

「ない」

再びそっけない返事。ジークは目の前の大きな背中を、突き刺さんばかりに睨みつけた。

ラウルはヘッドセットのマイクを口元に固定した。

「始め！」

短い掛け声が狭い部屋に響いた。ジークとリックは息を呑み、複雑な気持ちで大きなディスプレイを見上げた。

42. 騙し合い、そして

「始め！」

ラウルのその声と同時に、アンジェリカとユールベルは距離をとって身構えた。白い空に果てなく広がる薄茶色の地面。他には何もない。

ユールベルは短く呪文を唱えると、両手を揃えて前に突き出した。手のひらが白く光り、そこから頭くらいの大きさの光球が飛び出した。アンジェリカは後ろに飛びのきながら、両手を前へと伸ばし、同じ呪文で応戦した。

——ドン！

ふたりの真ん中で、互いの光球がぶつかった。爆発が起こったかのように、あたり一面を白い光が飲み込んだ。

その光に乗じて、アンジェリカは素早くユールベルの後ろに回り込んだ。気を集中させると、小さな声で長い呪文を唱え始めた。ユールベルはまだ無防備な背中を見せている。

——勝てる！

アンジェリカがそう思ったとき、ユールベルは左脇下から右手を突き出し、白い光を放射した。後ろ向きだったにもかかわらず、その光は少しのずれもなくまっすぐ目標へと突き進んだ。思いがけない攻撃に、呪文詠唱中だったアンジェリカは反応が遅れた。とっさに結界を張ることができなかった。両腕で身をかばったが、体ごとはじきとばされ宙を舞った。数メートル後方の地面に背中から叩きつけられると、そこからさらに数メートル、砂ぼこりを巻き上げながら滑っていった。アンジェリカの顔が苦痛に歪んだ。

「ワン、ツー」

ラウルはすかさずカウントを取り始めた。

「おいっ！」

彼女に聞こえないとは知りつつも、ジークは思わず声を上げた。

ラウルが三つ目のカウントを口にするより早く、アンジェリカは勢いよく飛び起きた。そして、その勢いのまま即座に反撃をしかけた。しかし、ユールベルは余裕だった。予測していたかのように、青白く光る結界を張り、向かってくる赤い炎を消滅させた。

アンジェリカに驚きと焦りの色が浮かんだ。まだしびれる左腕を押さえながら、息を荒くしていた。

「なに押されてんだよ、おまえ！」

ジークはディスプレイに向かってわめき立てた。だが、もちろん彼女には届かない。

「スリーカウントなんて短すぎるじゃねえか！」

今度はラウルに食ってかかった。しかし、ラウルはディスプレイに目を向けたままで、ジークのことなど完全に無視していた。

「ユールベル、かなり手強そうだね」

リックはなぜか声をひそめてジークに近寄った。

「ああ……。アンジェリカの行動がまるきり読まれているみたいだったぜ」

「うん、頭が良さそうだし、耳もいいんだろうね」

ふたりの口から出た言葉は、さらに自分たちを不安の深みへと落とし入れた。ジークは下唇を噛みしめ、祈るような気持ちでディスプレイを見上げた。

「俺はまだ、信じてるぜ」

その言葉はリックに向けられたものであり、アンジェリカに向けられたものであり、同時にジーク自身に言い聞かせるものでもあった。

ユールベルは青白い光に守られたまま、その内側で呪文を唱え始めた。指先までピンと伸ばした左手をまっすぐアンジェリカに向け、右手は大きく弧を描きながら後方へと引いた。

あれは――。

アンジェリカはピンときた。ユールベルの声は聞き取れなかったが、彼女のポーズには見覚えがある。アンジェリカもすぐに呪文を唱え始めた。両手を上空に向け、高々と掲げる。静かな緊迫感が一面に張りつめた。ジークもリックも、ディスプレイを見上げながら固唾を飲んだ。

先に唱え終わったのはアンジェリカだった。掲げた手の上に集めた魔導の力を、ゆっくりとユールベルに向け、勢いよく放った。白い帯がすさまじい速度で伸びる。だが彼女に届く一歩手前で結界にはじきとばされた。しかし、同時に結界も消滅した。

ユールベルは右目を見開き、明らかに驚きの表情を見せた。それでも呪文の詠唱を止めることはなかった。

アンジェリカはもう次の呪文の詠唱に入っていた。今度はさらに短い呪文だった。またしてもユールベルより早く唱え終わり、再び彼女に向けて放った。

しかし、どういうわけかユールベルはよけようとも防ごうともせず、目を閉じ呪文を唱え続けていた。白い光球が彼女に迫る。それでも動かない。ついに無防備な状態のユールベルに直撃した。白い光に飲み込まれ、はじきとばされるのが見えた。が、それと同時に砂ぼこりが巻き上がり、その後の彼女の姿は見えなくなった。だが直撃したことは間違いない。防ぐこともなくまともに受けたのでは、無事であるはずはない。アンジェリカは目を凝らして、砂ぼこりの奥を見つめた。

薄曇りの向こう側で、何かが光った。

――何？

アンジェリカが目を細めたその瞬間。薄茶色に濁った空間から、彼女の胸を目がけ、白い光の矢が飛び出してきた。とっさに上体をねじり、間一髪でかわした。――かに見えたが、完全にはよけきれず、白い閃光は彼女の左肩をかすめていった。

「ううあああ――！！！」

アンジェリカは絞り出すような悲鳴を上げ、肩を押さえてうずくまった。

「アンジェリカ！！」

ジークとリックは同時に叫んだ。ふたりの顔から一気に血の気が引いていった。彼らにアンジェリカの声は聞こえない。しかし、彼女の表情や様子を見ているだけで、つんざくような叫び声が聞こえてくるようだった。

ジークは居ても立ってもいられず、後ろからラウルに突進し、ヘッドセットに手を伸ばした。どうにかしてアンジェリカに声を届かせたい、その一心だった。しかし、あと少しというところで、ラウルのひじがジークのみぞおちにめり込んだ。

「うっ……」

ジークは冷や汗をにじませうずくまった。ラウルに一撃をくらわされたところを押さえ、歯を食いしばる。

「おとなしく見ている」

ラウルはディスプレイに目を向けたまま、振り返ることもなく、冷たく言い放った。

「大丈夫？」

リックはジークを心配そうに覗き込み、彼の背中に手を置いた。ジークはリックの顔を目にすると、徐々に落ち着きを取り戻した。

「俺よりもアンジェリカだ。やばいかもしれねえな」

ジークは声をひそめた。リックは重々しくうつむいた。

「アンジェリカの攻撃をまともに受けて、それでも呪文を唱え続けるなんて、普通できないよ。それにユールベルのあの呪文で……」

「通常レベルの結界なら簡単に貫くほど強大な威力はあるが、その分、バカ長い呪文と、半端ねえ集中力と、強大な魔導力に耐えられるだけの身体がいるとかいう、あんまり使えねえヤツだな」

ジークは言葉にすればするほど絶望が近づいてくるように感じ、それ以上は何も言えなくなった。リックも同じように感じたのか、口をつぐんで黙りこくってしまった。ジークはみぞおちを押さえながら立ち上がり、再びディスプレイを見上げた。

砂ぼこりがおさまり、ユールベルの姿が次第にあらわになった。彼女もまったく平気というわけではなさそうだった。足元はふらつき、息もあらい。

ユールベルはこわばった表情で、茶色い靄にうっすらと浮かんだ人影をじっと見つめた。それがアンジェリカと判別できるようになるまで、そう時間はかからなかった。アンジェリカは片膝をつき、左肩を押さえ、頭をガクンと垂れ下げていた。肩を上下に揺らしているところから察すると、まだ意識はなくしていないらしい。

外した――。

ユールベルは右目を細め、焦りの色を見せた。

アンジェリカはその表情を見逃さなかった。痛みをこらえて立ち上がり、強気にユールベルに挑みかけるようににやりと笑ってみせた。

「あてが外れて残念そうね」

息苦しさをごまかすように、早口で一気に言った。彼女の額から頬へと、幾筋もの汗が伝った

。

「あなたこそ」

ユールベルはあごを上げ、目一杯の余裕を装った。実際アンジェリカより、かなり余裕はあったのだろう。

アンジェリカはあごを引き、ユールベルを上目遣いで一睨みすると、自分のまわりに白く光る結界を張った。そして、その内側で攻撃呪文を唱え始めた。ユールベルも同じように結界を張り、呪文を唱え始めた。

ガクン。

アンジェリカはその途中で膝を折り、前のめりに倒れると、地面に手をついた。集まりかけていた魔導力も拡散し、結界も消滅した。

「アンジェリカ！！」

ジークは声の限り叫んだ。しかし、どんなに叫んでも彼女には届かない。

ユールベルは勝ち誇ったように口角を上げると、目を閉じ、よりいっそう魔導に集中した。彼女の両手の中の光球がぐんぐん大きくなっていく。

アンジェリカは片膝を立て、地面に手をつき、前傾姿勢でユールベルの様子をうかがっていた。彼女が目を閉じているのを確認すると、突然、地面を強く蹴って駆け出し、一気に加速した。一瞬のうちに結界をすり抜け、ユールベルの懐まで入り込む。そして、右手を彼女の脇腹に押し当て、短く呪文を唱えた。アンジェリカの指の間から白い閃光がもれる。

ユールベルは目を見開いて息を止めた。だが、その攻撃を防ごうとはしなかった。ぎゅっと唇を噛みしめると、すぐに呪文の続きを唱え始めた。

——効かない？！

アンジェリカは焦った。手を離さず、もういちど同じ呪文を口にした。ユールベルの腹部に、再び白い閃光が押しつけられる。同時に、ユールベルは両手を振り上げ、白い光球をアンジェリカの背中に勢いよく振り下ろした。アンジェリカは間一髪で薄く結界を張ったものの、それも弾き飛ばされ、光球ごと地面に叩きつけられた。

「アンジェリカ！！」

ジークが叫ぶと同時に、ラウルはカウントを取り始めた。

「ワン、ツー」

ユールベルは容赦なく二発目を撃ち込んだ。だがアンジェリカは地面を転がり、ぎりぎりでかわした。その勢いで立ち上がると、後ろへ飛び下がって身構えた。

ユールベルは脇腹の痛みをこらえながら、鼻先で軽く笑った。

「わかったかしら。私の体は人並み外れて魔導を受け付けにくいだよ。あなたの何倍もね」

「目に見えない薄い結界でもまとっているのかと思ったけど、なるほど、種も仕掛けもなかったわけね」

アンジェリカも余裕の笑顔で返そうと思ったが、その瞬間、背中に痛みが走り、逆に顔をしかめることになってしまった。深呼吸をして息を整えると、今度はかすかに笑ってみせた。

「だったら話は早いわ」

アンジェリカはユールベルに背を向けた。

「どういうつもり?!」

ユールベルはきつい口調で問いつめた。それは戸惑いからきているということは明らかだった。アンジェリカが降参するとはとても思えない。だとしたらなぜ背中を見せるのか。何か彼女に考えがあるのだろうか。でもそれがなんなのか、わからない……。ユールベルは次第に手のひらが湿ってくるのを感じた。

アンジェリカは自分の目の前、すなわちユールベルとは反対側に四角い板状の結界を作った。結界は通常、対象物（自分であることが多い）のまわりを囲うように張るものである。こんな奇妙な結界はあまり見ない。

ユールベルは、アンジェリカの拳動のすべてに目を奪われていた。それでも冷静さは失っていなかった。彼女の後ろ姿を見ながら、自分のまわりに静かに結界を張った。

アンジェリカはユールベルに向き直った。彼女の目をまっすぐ見据えながら、腕を伸ばし、呪文を唱え始めた。向かい合わせた手のひらが白く光り、その間に魔導力が集まる。かなり大きい。

ユールベルは内側にもう一つ結界を張り二重化した。アンジェリカの背後の四角い結界が不気味に白く光る。ユールベルの額に汗がにじんだ。これだけ念を入れても落ち着かない。

アンジェリカは頭よりも大きくなった光球を、自分の体に引きつけた。

——来る!

ユールベルの緊張が高まったそのとき、アンジェリカは地面を蹴り、体を半回転させた。そして、結界で作った四角い壁に向かって全魔導力を放射する。白い光はアンジェリカと結界の間で大きく膨張し、その反動で彼女の小さな体は弾丸のように吹き飛んだ。まっすぐ、ユールベルへと向かう。アンジェリカは彼女に体ごとぶつかり、腹部にひじを突き立てた。

その瞬間、ヒューンという音とともにディスプレイがブラックアウトした。続いて静電気がパチパチと軽い音を立てた。

「て……停電か?」

ジークは自信なさげにそう言って、あたりを見渡した。しかし、部屋の明かりは消えていない。

ラウルはヘッドセットを外し、振り返った。

両側のコクピットのふたがウィーンと機械音を立てながら、ゆっくりと開いていった。中から姿を現したアンジェリカとユールベルは、ポカンとした顔でラウルを見ている。

「ユールベル側のリミッターが働いて、システムが停止した」

ラウルの説明に反応する者は誰もいなかった。全員がぎょとんとして彼を見つめている。ラウルは言葉を付け足した。

「つまり、アンジェリカの勝ちだ」

ジークの表情がパッと輝いた。

「やったな！」

ゆっくりと身を起こそうとしているアンジェリカに駆け寄り、コクピットから抱え上げると外に降ろした。

「ヒヤヒヤさせやがって！」

その言葉とはうらはらの思いきりの笑顔。ジークはアンジェリカの額に、軽くこぶしをねじ込んだ。

「もう！ けっこう体中痛いんだから、ちょっとはいたわってよ」

そう言って頬をふくらませたアンジェリカも、やはり笑っていた。

「……納得いかない」

ユールベルはコクピットのふちに手を掛け、体を起こしながら声を震わせた。

「あんなの……魔導じゃないじゃない！」

彼女はラウルを見上げ、必死に訴えた。

「戦いにルールはない」

ラウルは腕を組み、冷めた声で言った。

「魔導以外の要素を軽視したのが、おまえの敗因だ。魔導耐性は高いが、身体的な能力は低い。その自覚があるのなら、魔導のみを遮る通常結界ではなく、あらゆる物質を遮断する高度な結界を使うべきだった」

ユールベルに返す言葉はなかった。それでも、やはり納得はできない。身をかがめ腹部を押さえながら、よろよろとコクピットから降りると、アンジェリカを鋭く睨み上げた。

「えっ?!」

リックはユールベルのポーズを見て、驚きの声を上げた。彼女は両手を前に突き出していた。そして、リックの懸念どおり、呪文を唱え始めた。緩やかなウェーブを描いた金の髪と、後ろで結ばれた白い包帯が、空気の対流を受けて舞い上がる。

「やめろ！」

ジークとリックはアンジェリカをかばうように立ちはだかった。ふたりは同時に結界を張り、さらにアンジェリカも結界を張り、三人のまわりに三重化した結界ができた。

ユールベルの手に魔導の力が集まり、白い光を放つ光球がふくらんでいく。

「大丈夫なの？」

リックは不安げに尋ねた。

「部屋までは守れねえな」

ジークは前を向いたまま、いたずらっぽくニッと笑ってみせた。

ラウルは無表情でユールベルへと近づいていった。無言で彼女を冷たく見下ろした。そして、右手で光球を握りつぶし消滅させると、左手で彼女の腕をひねり上げた。

あっというまの出来事に、ジークとリックは呆気にとられた。

「……う……ああああ——!!!」

ユールベルはラウルに腕をつかまれたまま、うつむき、絶叫して泣いた。喉の奥から絞り出す

ような激しい慟哭が、ジークたちを揺さぶった。

「おまえたちは行け」

ラウルは後ろで立ち尽くす三人に言った。しかし、誰も動かない。

「行け！」

今度は振り向き、凄みをきかせた低音で命令した。

ジークはアンジェリカの肩に手をまわすと、渋る彼女を促し、三人で連れ立って部屋から出た。ユールベルの泣き叫ぶ声が、次第に遠くなっていった。

ユールベルの号泣は、徐々にすすり泣きへと変わっていった。そして、膝から崩れ落ちるようにぺたんと床に座り込んだ。ラウルは彼女を抱き上げ、ヴァーチャルマシナールームをあとにした。

。

ラウルは自分の医務室に戻ると、ユールベルをパイプベッドの白いシーツの上に降ろした。

「落ち着いたら帰れ」

ユールベルはうなだれたまま、首を小さく横に振った。肩から髪が落ち、合間から折れそうな白い首筋がのぞいた。

「勝手にしろ」

ラウルは無表情でそう言って立ち去ろうとした。だが、ユールベルの細い腕が、彼の長い髪をつかみ、引き止めた。

「……私を……救って……」

消え入りそうな儂い声。ラウルは彼女の腕を、肩を、首筋を、背中を、じっと見つめた。

「私におまえは救えない」

ユールベルの手から力が抜け、ぱたんとベッドの上に落ちた。それきり彼女は動かなかった。

ラウルは背中を向け、後ろ手で仕切りの白いカーテンを閉めた。そして、立ち止まることなく奥へと消えていった。

43. 過去への扉

「いつまで寝ているつもりだ」

すっかり身支度を整えたラウルが、奥の部屋から出てきた。そのまま足を止めず窓ぎわまで進むと、ガラス戸をガラガラと開ける。ひんやりした空気が、柔らかな光をかきわけ流れ込んできた。ふわりと揺らめいた白い仕切りカーテンには薄い影が映っていた。返事はなかったが、ユールベルがそのベッドで寝ていることは間違いない。

シャッ——。

ラウルはカーテンを半分だけ開いた。ユールベルは布団も掛けず、髪も服も乱したままで横たわっていた。両手両足は無造作に投げ出され、まくれ上がった白いワンピースから、白い上腿があらわになっている。そして、虚ろに開かれた右目は、何も映していないかのように生気をなくしていた。

ラウルは彼女の体の上に、大きな白いタオルを落とした。冷たくなった肌を包み込む、暖かく柔らかな感触。ユールベルはゆっくりとラウルに顔を向けた。

チャリン。

彼の手から枕元に何かが投げ置かれた。ユールベルはラウルを見つめたまま、そろそろと手を伸ばす。冷たく固い、小さなもの。それは輪につながれた鍵ふたつだった。

「私はアカデミーへ行く。食事をとるなり、シャワーを浴びるなり好きにしろ。出るときは鍵を閉めていけ」

ラウルはそれだけ言うと、医務室の扉を開け出ていった。

ユールベルは手にした二つの鍵をじっと見つめた。ひとつは医務室の鍵、もうひとつは……ラウルの部屋の鍵？ ラウルの部屋は医務室の奥にある。ほとんど壁と同化している目立たない扉が入口らしい。ラウルがそこから出入りするのを何度か見かけたことがあった。しかし、一度も入ったことはない。

ユールベルは鍵を軽く握り、気だるそうに身を起こした。そして奥の扉をじっと見つめた。

キーン、コーン——。

「午前はここまでだ」

ラウルは教本を閉じ、机の上でトンとそろえると、小脇に抱え教室をあとにした。彼が歩く間にも、次第に廊下は賑やかになっていく。喧噪から逃れるように角を曲がると、そこにはユールベルが待ちかまえていたかのように立っていた。

ラウルは彼女を一瞥し、そのまま通り過ぎようとした。だが、ユールベルは彼の前に飛び出し、行く手を阻んだ。顔を上げ、深い茶色の瞳をじっと見つめる。そして、チャランと小さな音をさせながら、二つの鍵をラウルの鼻先に掲げた。

「机の上のサンドイッチ、食べてしまったわよ」

「好きにしろと言った」

ラウルは目の前の鍵をひったくるように奪い取った。

「もしかして、私のために作っておいてくれたの？」

ユールベルは無表情で尋ねた。ラウルも無表情で彼女を見下ろした。

「用がないのならもう行くぞ」

冷たくそう言うと、左足を横に踏み出し、彼女を通り過ぎようとした。

その瞬間、白いワンピースが風を受けふわりと舞い上がる。ユールベルはラウルに飛び込んでいた。彼の胸に顔をうずめ、背中に手をまわす。そのとき、彼女の長い髪が、ラウルの手に触れた。冷たい。まだ生乾きだった。

「やっぱりあなたのことは嫌い」

ユールベルはラウルの胸元で、淡々とつぶやくように言った。

「そうか」

ラウルは感情のない声で短く返した。

ふたりのまわりがざわつき始めた。遠まきに見ている生徒たちは、興奮しつつ声をひそめて話し合ったりしている。ここはアカデミーの廊下、ふたりは教師と生徒。騒がれるのも当然である。

しかし、ユールベルはまったく意に介していないように見えた。顔を上げ、ラウルを見つめる。そのまま焦茶の長い横髪をぐいと下にひっぱり、彼の顔をすぐ近くまで引き寄せた。甘い匂いがラウルの鼻をくすぐる。それでも彼はまるで表情を変えない。

ユールベルはわずかに眉をぴくりと動かし睨みつけた。そして、つま先立ちして首を伸ばすと、唇を触れ合わせた。

まわりからどよめきが起こった。

彼女はすぐに顔を離し、今度は平手打ちをくらわせた。パンと軽い音が響く。それと同時にあたりは静まった。

しかし、ラウルはまったく動じていなかった。

ユールベルは手の甲で口を拭いながら後ずさりし、彼を睨みつけた。

「さようなら」

小さな声でそう言うと、踵を返し去っていった。

「なんか外が騒がしくねえか？」

ジークはざわめく廊下に目を向けた。しかし、席に座ったままでは、ほとんど外は見えず、何が起こったのか確認することは出来なかった。

「ちょっと話をそらさないでよ！」

アンジェリカはジークの机に両手をつき、身を乗り出した。軽く口をとがらせた顔を、ぐいっと近づける。

「あ、ああ、ユールベル、な」

ジークは体を引き、背もたれに寄りかかりながら、しどろもどろに言葉を返した。

「負けを認めてなかったみたいだし、難しいかもしれないね」

言葉の続かないジークの代わりに、リックが横から冷静に答えた。

アンジェリカは彼に顔を向け、小さく首をかしげた。

「悔しいのはわかるけど、いきなり暴走したり泣き出したり、わけがわからないわ、彼女」

「……きっと」

リックは目を伏せた。

「寂しくて、情緒不安定、なんじゃないかな。なんか……わかるんだ」

ぽつり、ぽつりと言葉を落とし繋いでいく。感情を押し隠したような表情。しかし、すぐに我にかえったように微笑みを作ってみせた。

ジークは腕を組んでうつむいた。

「ふーん」

アンジェリカはあまり納得していないような薄い返事をした。

「でも！」

一転、今度は力を込めて切り出した。腰のあたりで握りこぶしを作り、気合いを入れる。

「何がなんでも約束は守ってもらうんだから」

「……………」

ジークはうつむいたまま考え込んだ。彼女とユールベルの間に何があったのかは知らない。彼自身も気にはなる。だが、サイファがひた隠しにしていることを考えると、やはり知らない方がいいのではないか。いや、知ってはいけないのではないか。そんなふうに思えてくる。しかし、それではアンジェリカが納得するはずはない。今までもさんざん止めようとしてきたが、すべて無駄に終わった。頑固で、強情で、言い出したらきかない。ただ、今回の件に関しては、彼女の気持ちもわかる。だから、つらい。

「私は守るわよ、約束」

アンジェリカの弾んだ声が、ジークを現実に戻した。とっさに顔を上げると、彼女はにっこりと笑いかけてきた。

「約束？」

ジークが聞き返すと、アンジェリカは目を丸くした。

「忘れたの？ ほら、ジークのいうことをなんでもきくって言ったでしょう？」

「ああ、あれか」

ジークは気の抜けた声で返事をした。そんなことはすっかり忘れていた。

「俺はおまえに頼みたいことなんて何もねえって」

「だめよ！ 私はちゃんと約束を守りたいの」

アンジェリカは腰に手をあて、前かがみにジークを覗き込むと、少し怒ったように口をとがらせてみせた。

「約束っておまえが勝手に決めただけだろ！」

ジークは食ってかかった。

またふたりの言い合いが始まる——リックはそわそわし始めた。だが、アンジェリカは反論することなく、再びにっこりと笑いかけた。

「考えておいてね」

ジークの胸はドクンと強く打った。少し耳を赤くしながら、腕を組んで、困ったようにうつむいた。

「さ、食堂へ行きましょう」

アンジェリカは背筋を伸ばして明るくそう言うと、扉に向かって歩き始めた。ジークも立ち上がり、リックとともにあとを追った。

「あっ……」

アンジェリカは教室を出たところで、小さく声を上げ足を止めた。続いて出てきたふたりも、はっとして足を止めた。三人の視線の先には、壁に寄りかかり、じっとこちらを見つめるユールベルがいた。あいかわらず左目は包帯で覆われている。彼女は壁から背を離すと、そっと歩み寄ってきた。ジークは右足をわずかに後ろに引き、小さく身構えた。

「きのうは取り乱してしまっておめんなさい」

ユールベルは無表情で詫びの言葉を口にした。だが、アンジェリカはそれを信じようとしなかった。疑いのまなざしを彼女に向けた。

「約束は守ってくれるんでしょうね」

「ええ、負けは負けだもの。仕方ないわ」

意外なほどあっさりしていた。あっさりしすぎている。

「そう、良かった」

アンジェリカは固い声で返事をした。疑いはまだ拭えない。

「ついて来て。見せたいものがあるの。それから話をするわ」

ユールベルは踵を返そうとした。

「今から？」

驚きを含んだアンジェリカの問いに、ユールベルは足を止め、彼女を見つめた。

「そうよ」

素っ気なく答えると、背中を向け歩き始めた。アンジェリカは彼女の後ろ姿を見つめていたが、やがて黙って足を踏み出した。

「午後の授業はどうすんだよ」

ジークが後ろから声を掛けたが、何の反応もなかった。無視をして歩き続けている。こうなったらもう止められない。

「しょうがねえなあ」

困ったように眉根を寄せ、ため息をつく。そして、リックとともに彼女についていこうとした。

すると、ユールベルが振り返り、ふたりに鋭い視線を向けた。

「あなたたちは駄目よ」

「は？」

ジークとリックは顔を見合わせた。

「私が約束したのはアンジェリカだけ。あなたたちに話すとは言ってないわ」

「なっ……」

ジークは口を開けたまま、カクカクと震わせた。

「じゃ、アンジェリカも行かせねえぞ！ 一人だなんて危険だ。行かせられるか！」

大声でまくし立てるジークに、アンジェリカはむっとして振り返った。

「勝手なこと言わないでよ！ せっかく手に入れたチャンスなのよ。ふいになんてしないわ」

彼女は強気に言い放った。ジークはますます頭に血がのぼった。

「少しは自覚しろ！ 今までどれだけ危険な目に遭ってきたと思ってんだ！」

アンジェリカを指さしながら、怒り顔をつきつける。しかし、彼女は引くどころか、さらに顔を近づけた。

「わかってるわよ。それでも行かなきゃならないの。絶対にゆずれない」

強い意志を秘めた目を彼に向ける。ジークはその漆黒の瞳をじっと見つめると、何かをこらえるように奥歯を食いしばった。彼女は微動だにしない。

「勝手にしろ！」

ジークは吐き捨てるようにそう言うと、背を向け腕を組んだ。

「ジーク！」

はらはらしながら二人のやりとりを聞いていたリックは、投げやりになったジークを見て、たまらず叫んだ。しかし、彼に反応はない。

「アンジェリカ！」

今度は彼女に振り向き、声を掛けた。アンジェリカは微笑みを浮かべた。

「大丈夫よ。心配しないで」

その言葉を残し、ユールベルとともに歩き去っていった。

「行かせちゃっていいの?！」

リックはジークに詰め寄った。彼は腕を組んでうつむき、唇を噛みしめていた。

「俺には、止められねえよ」

ジークの声には、隠せない悔しさがにじんでいた。

午後の始まりを告げるベルが鳴った。

ふたりは暗い顔で席についていた。ジークは無意識に、アンジェリカの席に目を向ける。しかし、何度見ても、そこは空いたままだった。

ラウルがガラガラと引き戸を開け入ってきた。教壇に立ち、教本を机に置くと、無言で教室を見渡した。

「自習にする」

唐突にそう言うと教壇を降り、まっすぐジークのもとへ歩いてきた。彼にはその理由がわかった。体中に緊張が走る。

「来い」

そして、今度は反対側のリックに顔を向けた。

「おまえもだ」

ふたりはこわばった顔を見合わせて、立ち上がった。

教室から目の届かないところまで来ると、ラウルは足を止め振り返った。

「アンジェリカはどこへ行った」

腕を組み、ふたりを見下ろす。

「知らねえよ」

ジークは顔をそむけ、ふてくされながら言った。リックは慌てて一歩前へ出た。

「ユールベルと一緒に出ていきました。でも行き先は知りません」

「なぜ止めなかった」

ラウルの低い声に、リックはびくっと体を震わせた。

「と……止めました。でも……」

「俺らのいうことをきくようなヤツじゃねえよ」

ジークは後ろから吐き捨てるように言った。だが、その奥には自嘲の色が滲んでいた。

ラウルは陰の落ちたジークの横顔を見て、軽くため息をついた。

「何か手がかりになるようなことは言っていなかったか」

リックはうつむいて考え込んだ。

「……あ、なんか、見せたいものがあるとか」

ラウルの目が鋭く光った。

「ユールベルがそう言ったのか？」

「はい、多分……」

迫力に押され、自信なく答える。

「わかった。おまえたちは戻れ」

ふたりは何も言えず、黙ってとぼとぼと戻っていった。

アンジェリカとユールベルは並んで歩いていた。お互い何も言葉を交わそうとしない。広めの道だが、人通りは少なく、ただふたりの単調な足音だけが耳に響いていた。

「どこへ行くの？ けっこう歩いたけど」

アンジェリカが沈黙を破った。不安を悟られないようにまっすぐ前を向き、平静を装っている。

。

「私の家よ」

ユールベルも前を向いたままで静かに答えた。アンジェリカは彼女の横顔をちらりと見て、すぐに前に向き直った。

「私とあなたが友達だったって、本当なの？」

小さいが凜とした声で尋ねる。

「しつこいわね、あなたも」

ユールベルは淡々と返した。アンジェリカはわずかに眉をひそめた。

「ピンと来ないのよ」

ユールベルは目を閉じうつむくと、小さく笑った。

「そうね」

ゆっくりと顔を上げ、遠くを見つめる。

「最初にあなたに近づいたのは、あなたが『呪われた子』だったから。両親を困らせたかったというところかしら」

「……そう」

別に何かを期待していたわけではない。だが、そんなことに利用されたのだとは思ってもしなかった。やりきれない気持ちが胸にわだかまる。

「それからあなたの家にたびたび遊びに行くようになったわ。あなたの家に行けば、おじさまに会えたもの」

ユールベルはあごを上げ、遠くを見たまま微笑んだ。

「なるほど、そういうことだったのね」

アンジェリカは精一杯、強気に答えた。

「さあ、ここよ」

そこには、二階建ての屋敷があった。アンジェリカの家と比べると、はるかに小さいが、それでも世間一般からすれば大きい方である。

ユールベルは門を開き、中へと進んでいった。アンジェリカもあとに続く。小鳥のさえずり、草の匂い、風の音、ふたりの足音。外界とは切り離された場所に来てしまったようで、彼女は落ち着かない気持ちになった。

石畳を歩き、玄関まで来ると、ユールベルは鍵を取り出した。鍵穴に差し込み、ゆっくりと回す。ガチャリという音を確認すると、扉を引き開けた。重量感のある扉が、ギィと音を立てる。

「どうぞ」

ユールベルは右手を家の中に向け、アンジェリカを促した。アンジェリカは緊張しながら、足を踏み入れた。

「お茶でも飲む？」

ユールベルは扉を閉めながら尋ねた。しかし、アンジェリカにそんな余裕はなかった。

「私に見せたいものって何？」

顎を引き、上目づかいで睨みながら、抑えた声で尋ね返した。

「急かすわね。まあいいわ」

無表情でそう言うと、家の中へと進んでいく。そして、脇の階段を数段上がると、顔だけ振り向いた。

「こっちよ」

アンジェリカは喉が渇いていくのを感じながら、ユールベルに続き、階段をのぼっていった。薄暗く、空気は湿っている。おまけに妙な匂いもする。息がつまりそうだ。嫌な予感が胸をよぎ

った。

階段を上がりきり、そのまま真っすぐ歩いて、突き当たりの部屋の前までやってきた。部屋といっても扉はない。元々はあったと思われるが、その付近がまわりの壁もろとも崩れ、あたり一面に瓦礫が散乱している。中は暗くてよく見えない。

「入って」

ユールベルの声に押され、アンジェリカは足元を見ながら、おそるおそる歩み入った。

「……っ」

つんと鼻をつく匂い。思わず鼻と口を手でふさいだ。窓はすべて厚手の遮光カーテンで覆われ、さらにその内側には、鉄格子がはめられている。床には、本や服らしきものが一面に散乱していた。他には小さなテレビと本棚、ボロボロに破れた布団くらいだ。

アンジェリカは絶句した。

「ようこそ私の部屋へ」

ユールベルの冷たい声が、後ろから突き刺さる。

「私は7年間、ずっとここにいた。閉じ込められていたのよ」

瓦礫を踏みしめ、部屋の中へ歩み入ると、隅にひっそりと置かれていたぬいぐるみを手にとった。

アンジェリカははっとした。薄茶色の柔らかな毛並み、愛らしい表情、足裏の刺繍。薄汚れてはいるが、自分が持っているものと同じテディベアに間違いない。

「おじさまにもらったものよ。これだけが私の心の支えだった」

ユールベルは愛おしげに抱きしめた。

「閉じ込められていたって、どうして……」

アンジェリカは混乱する頭から言葉を探る。

ユールベルはテディベアのほこりを軽くはらうと、壁を背にして座らせた。

「きっかけは7年前。私とあなたの間起きたこと」

屈めた上体をゆっくり起こし、アンジェリカに顔を向ける。そして一歩、二歩、静かに近づいていった。

アンジェリカは息をひそめた。額に汗がにじむ。

ユールベルは頭の後ろに手を回し、包帯をほどき始めた。頭のまわりでくるくると手をまわす。やがて、はらりと白い布が床に落ち、左目があらわになった。

アンジェリカは息をのみ、引きつった顔であとずさった。

「こわい？ あなたがやったのよ」

焦点の合わない蒼い瞳、まぶたから目尻にかけての焼けただれたような痕。ユールベルは見せつけるように、さらに間をつめた。

「わ、たし……が？ うそ、そんな、こと……」

アンジェリカはとぎれとぎれに言葉を絞り出した。渴いた喉に、声がかえる。

「事実よ」

ユールベルは感情のない声で言った。

「そんな……私が……どう、して……」

アンジェリカは瓦礫に蹴つまずきながら後ずさり、部屋から出ていった。しかし、ユールベルは手を後ろで組み、軽いステップで瓦礫を踏み越え、あっという間に距離を縮めた。

「あなた馬鹿？ 考えてもみなさいよ。どうしておじさまがそんなに隠したがっていたのか」

彼女はさらににじり寄った。

「おじさまは、毎月、律儀に謝りに来ていたわよ」

アンジェリカは目を見開いた。

「……うそ」

額からにじんだ汗が、頬を伝い流れ落ちる。

「嘘だと思うなら、おじさまにきいてみれば」

ユールベルは足を踏み出した。アンジェリカはさらに後ずさる。その足は、ガクガクと震えていた。

「私もおじさまも苦しんできたのに、当のあなただけ、全部忘れて楽しく生きている。いい気なものね」

淡々とした口調だが、右の瞳は鋭く光り、アンジェリカをとらえていた。

「ラグランジェ本家の娘が、他人に一生消えない傷を負わせた。そんな醜聞、公にすることなんて出来ない。私はその証拠となるもの。だから、隠された」

ユールベルは顔を突き出し、アンジェリカを覗き込んだ。

「わかる？ 私はあなたの犠牲になったのよ」

アンジェリカの体は小刻みに震えていた。うっすらと開かれた口からは、何の言葉も出てこない。浅く息をするのが精一杯だった。

「返して、私の7年、私の目、私の顔……」

ユールベルは両手を伸ばし、アンジェリカの首に指を這わせた。細く冷たい感触。背筋に痺れが走る。もう何も考えられない。アンジェリカは本能だけで、ほとんど無意識に、足を後ろに引いた。

しかし、そこには床は続いていなかった。

足を踏み外し、後ろに倒れていく。ユールベルはとっさに手を伸ばした。しかし、それも間に合わず、アンジェリカの体は、頭や体を打ちつけながら、階下へと落ちていった。彼女はピクリとも動かない。

ユールベルは呆然として、その場にへたりこんだ。焦点の合わない虚ろな瞳が、空をさまよう。

「あなたが、悪いのよ……」

彼女はうわごとのようにつぶやいた。

44. 血のつながり

ギィ……。

重いきしみ音を立てながら、玄関の扉が開いた。薄暗い家の中に、光の帯が伸びる。そして、その光を遮る大きな影。

「いるのか、ユールベ……」

一步、足を踏み入れるなり、バルタスは絶句した。彼の視線の先には、仰向けに倒れたアンジェリカの小さな体があった。そのまわりには、どす黒い血だまりが広がっている。

彼は慌てて駆け寄り、彼女の白い首筋に手を当てた。そして、こわばった顔で立ち上がると、そこから続く階段をゆっくりと見上げていった。

最上段の、動かない白い小さな影。ユールベルが呆然として座り込んでいた。その左目にいつもの包帯はなく、焼けただれたまぶたがあらわになっている。

「……おまえが、やったのか」

バルタスは、喉の奥から乾いた声を絞り出した。

「……違う」

ユールベルはかすかに首を横に振り、小さな声をもらした。

「違う」

今度ははっきりとした声でそう言うと、おびえた顔で、強く首を横に振った。

「私じゃない、私はやってない！！ 違うわ！！」

ひきつった叫び声をあげながら、両手で頭を抱え込み、肩を震わせた。

王宮内の緊急医療室。その扉の前でバルタスはうつむき、こぶしを握りしめ、仁王立ちをしていた。ユールベルは彼の足元で膝を抱え、小さく座っている。左目はいつものように、白い包帯で覆われていた。

長い廊下の向こう側から、カッカッと鋭い靴音を響かせながら、サイファが走ってきた。

「申しわけない」

バルタスは、息をきらせたサイファに頭を下げ、大きな背中を丸めた。

「アンジェリカは、どうなんだ」

焦る気持ちを抑え、呼吸を整えながら、極力冷静に尋ねる。

「入ったきりで、まだ何もわからない」

「そうか……」

サイファは苦しそうに目を細め、緊急医療室の頑丈そうな扉を見つめた。

「本当に、申しわけない……」

「それより経緯を聞かせてくれ」

大きな体を萎縮させ、弱々しくうつむくバルタスに、サイファは強い視線を向けた。バルタスは下を向いたまま、訥々と話し始めた。

「昼すぎ、ラウルから連絡が入った。ユールベルとアンジェリカが、家に向かったらしいので、

念のため見てきてくれ、と」

ラウルの名を聞いて、サイファはぴくりと眉を動かした。

「それで、行ってみたら、お嬢さまが階段の下で倒れていた。二階にはユールベルが座り込んでいた……。あの子の左目の包帯は、ほどかかれていたよ」

バルタスは眉根を寄せ、口を真一文字に結んだ。

サイファは、大きな体の後ろで、小さくうずくまっているユールベルに目をやった。

「彼女が突き落としたのか？」

ぎりぎりまで声をひそめて尋ねる。

「状況から考えればそうだろう。だが、あの子はやっていないの一点張りだ」

バルタスも声のトーンを落とした。そして、顔だけわずかに振り返り、ユールベルを流し見た。彼女はその視線から逃れるように、両手で頭を抱え込み、体を小刻みに震わせ始めた。

「ユールベル」

サイファが静かに声を掛けた。ユールベルの体がぴくりと揺れた。

「君は……」

「サイファ！！」

廊下に響いた高い声が、彼の言葉を遮った。

「レイチェル！」

サイファが振り返ると、彼女は息をきらせ、苦しそうに走り込んできた。

「アンジェリカは？！」

彼の胸にすがりつき、潤んだ瞳で見上げる。サイファは優しく彼女の肩を抱いた。

「まだわからない。でも、きっと大丈夫だよ」

力を込めてそう言うと、かすかに笑いかけた。しかし、無理をしていることは明らかだった。レイチェルはうつむいて、何かをこらえたような小さな声を漏らした。

カツーン、カツーン。

冷たく無機質な靴音が、あたりに響いた。

サイファは顔を上げ、レイチェルは振り返り、その音のする方を見た。細身で背の高い女性が、ボリュームのある巻き毛のブロンドを揺らしながら、ゆっくりとしたペースで近づいてきた。膝丈のタイトスカートが、彼女のすらりとした脚をよりいっそう強調する。

「ユリア……」

そうつぶやいたサイファの脇を通りすぎ、バルタスの前で足を止めた。そして、腕を組み、冷やかに彼の足元を見下ろした。

「あなた、お嬢さまを突き落としたんですって？」

ユールベルは驚き、顔を上げた。彼女はその女性を見た瞬間、激しくおびえ、壁に身を寄せ震え出した。

「ユリア、やめないか」

「どれだけみんなを不幸にすれば気が済むの、この厄病神！」

バルタスの制止を無視し、彼女はおびえるユールベルに言葉を突き刺した。

「違う！ 私はやってない！！」

ユールベルは震えながら声を張り上げた。頬に涙が伝い落ちる。それでもユリアは容赦なかった。

「いくら泣いたって、あなたの言うことなんて誰も信じないわよ！」

「本当に、やってない……のに……どう、して……」

ユールベルはしゃくりあげながら、切れ切れの言葉を並べた。そんな彼女を、ユリアは顔をしかめてにらみつけた。

「泣きたいのはこっちよ。どうしておとなしく閉じ込められててくれなかったのよ。あなたが出てきたせいで、家族はめちゃくちゃだわ」

ユリアはいらついて、左足で床を蹴りつけた。ユールベルはびくっとして体をこわばらせた。「生きる価値のない人間のくせに……。それどころか生きていてはみんなの迷惑なのよ！ わかってるの？！」

ユールベルは顔を歪ませ、目をつぶり、幾筋もの涙を流した。

「私だって、好きで生まれてきたわけじゃない……」

震える小さな声でそう言ったあと、苦しそうに浅い息を繰り返す。

「こんな……こと、なら、生まれてきたくなんかなかったわよ！！」

壁に寄りかかり、顔を伏せたまま、精一杯の声で悲痛に訴えた。

しかし、それでもユリアの冷酷な態度に変わりはない。

「こっちだって、あなたみたいな子だとわかっていれば、生まなかつたわよ」

小さく舌打ちして、吐き捨てるように言った。ユールベルは耳をふさぎ、体を丸め、床にうずくまった。

「そこまで言うんだったら、いっそ殺してくれればよかったのよ」

虚ろにそう言うユールベルに、ユリアはさらに追いうちをかける。

「死にたかったらね、勝手にひとりで死になさい！」

身を屈め、彼女の頭の上から大声を浴びせかける。耳をふさいでも、それを防ぐことはできなかった。手から力が抜け、床に落ちる。

「何度も死のうと思った。でも、死ねなかった……」

小さなうめき声とともに、すすり泣き始めた。

「度胸もないくせに、偉そうに言ってるんじゃないわよ」

ユリアは嫌悪感を丸出しにした。威嚇するように激しく右足を踏み出し、白いワンピースの裾を踏みつける。

ユールベルの肩がぴくりと動いた。それと同時にすすり泣きがやんだ。ゆっくりと体を起こし、顔を上げると、泣き腫らした右目でユリアを睨み上げた。

「度胸がないのは、そっちだって同じじゃない」

今までとは違う、落ち着いた静かな声。だが、その奥には、激しい怒りが渦巻いているのが感じられた。ユールベルはワンピースの裾を引っ張り、ユリアの足から引き抜いた。ふたりの鋭い

視線がぶつかりあう。

「私を殺さなかったのは、あなたが臆病だったから。罪を背負いたくなかったから。だから、私を閉じ込めた」

ゆらり体を揺らしながらスローモーションで立ち上がると、ふらつきながら一步前へ踏み出した。顔を上げ、ありったけの怒りをこめた瞳を、まっすぐユリアにぶつける。ユリアに初めて動揺の色が浮かんだ。

ユールベルは高鳴る鼓動を感じながら、意を決して口を開いた。

「手を汚さず、自分が楽になれる方法を選んだ卑怯者なのよ、あなたは！！」

「うるさい！！」

逆上したユリアは、握りこぶしを振り上げた。ユールベルは声にならない悲鳴をあげた。逃げるように後ろによろめくと、壁にぶつかり、頭を抱えて崩れ落ちた。

振り上げられたユリアの腕を、後ろからサイファが掴んだ。

「精神的、肉体的虐待、あげくの果ての監禁だったのか……」

その声には、やりきれなさがにじんでいた。

「あなたは、あの子のことを、何も知らないのよ！」

ユリアはサイファの手を振りほどいた。彼に掴まれていた部分を見つめながら、深くうつむいた。

「あの子のことを知れば、誰だってこうするわ」

淡々と、うわごとのように言う。そして、急に勢いよく振り返ると、声のトーンを上げた。

「ご存知？！」

サイファを激しく睨み、眉間にしわを寄せた。

「あの子はね、自分の弟さえも手に掛けようとしたのよ。まだ伝い歩きしかできない幼い弟を、階段から突き落としたのよ！！」

「違う！ 私はやっていない！！」

後ろでユールベルは再び泣き叫んだ。

「……どうして、私たちに相談してくれなかったのですか」

黙って顔をそむけているバルタスに、サイファは悲しい眼差しを送った。しかし、その言葉に反応したのはユリアだった。

「きれいごとを言わないで！ あなただって憎いでしょう？！」

一步サイファに踏み込み、顔を突きつける。しかし、彼はまったく動じることはなかった。

「彼女はやっていないと言っています」

冷静に、まっすぐユリアの瞳を見つめる。そのことが、よけいに彼女の頭に血をのぼらせた。

「そんなたわごと！ 信じているの？！」

サイファは後ろで小さくうずくまるユールベルに、そっと目を向けた。

「君は、アンジェリカに真実を話した。アンジェリカはその話に驚いて、階段を踏み外した。そうだとすれば、君を責める理由はない」

ユールベルは驚いて顔を上げた。呆然とサイファを見つめる。彼女の瞳から、大粒の涙がこぼ

れ落ちた。

ユリアは眉をひそめ、サイファを睨んだ。そして、短く投げやりなため息をついた。

「どこまでお人好しなの、あなたは。万が一、それが事実だとしても、あなたの娘をこんな目に遭わせたのは、あの子のせいに違いはないでしょう」

サイファの顔つきが険しくなった。

「彼女を追いつめたのは、我々、そして、あなた方だ」

ユリアは反抗的な視線を返した。しかし、サイファは真っ向からそれを受け止めた。

「申しわけありませんが、お帰りいただけますか」

丁寧だが、有無をいわせない強い口調。ユリアは一瞬たじろいだ。しかしすぐにサイファをキッと睨みつけた。

「私だって、来たくて来たわけではありませんから」

そう言うのと背中を向け、ヒールの音を響かせた。しかしすぐに足を止め、顔だけ振り返った。その視線は、バルタスに向けられていた。

「さっさとあの子を追い出してちょうだい。そうしない限り、私もアンソニーも戻りませんから」

一方的に言い放つと、返事を待たずに早足で去っていった。

「すまない。君たちに謝罪させようと思って呼んだのだが……」

覇気のない声。バルタスは、サイファとレイチェルに頭を下げた。疲れきったように肩を落とし、大きな背中を丸めている。

「ひどい……実の……血のつながった親子なんでしょう？」

レイチェルは小刻みに震える唇から、かぼそい声を漏らした。その顔は透き通るほどに青白く、今にも倒れそうだ。

サイファはうつむいた。

「血のつながりなんて、関係ないさ」

かすかな声で、早口につぶやく。レイチェルははっとして振り向いた。しかし、さらりと流れる金の髪が、彼の横顔を隠し、表情をうかがうことはできなかった。

「血がつながっているからこそ、よけいに憎しみが深くなる、ということもある」

バルタスは重々しくそう言った。うなだれたままで顔を見せない。レイチェルはくたびれた彼の姿を、寂しげに見つめた。

サイファは、膝を抱えうずくまっているユールベルのもとへ歩いていった。彼女の前まで来ると、片膝をつき、目線を合わせた。

「すまない。君にはずいぶんつらい思いをさせてしまった」

ユールベルの瞳にあたたかいものがじわっとにじんだ。目を閉じうつむくと、手の甲にぽたりと雫が落ちた。

「おじ……さま……」

震える声でそう言うと、大きくしゃくりあげた。

「ごめん……なさい……約束、やぶってしまって……」

サイファはそっと微笑みかけると、泣き続けるユールベルの頬に手を置いた。

プシュー。

空気の抜けるような音とともに扉が開き、中からラウルが現れた。後ろで数人の医療スタッフが、慌ただしく動き回っている。

「アンジェリカは?!」

レイチェルはラウルに駆け寄り、すがるように白衣を掴むと、泣き出しそうな顔で見上げた。ラウルはなだめるように、レイチェルの細い肩に両手を置いた。そして、真剣な眼差しをサイファに向けた。

「肩、腕と肋骨2本の骨折、それと頭部外傷だ。骨折はたいしたことはないが、問題は、頭の方だ。脳挫傷を起こしている」

「脳挫傷……」

レイチェルはかすれた声で、聞き慣れない単語を繰り返す。鼓動がしだいに速く、強くなっていく。

「助かるのか」

サイファが抑えた声で尋ねた。口調は冷静だったが、表情からは抑えきれない焦りがにじんでいた。

「私を信じろ」

ラウルは、強い漆黒の瞳をサイファに向けた。彼はまっすぐにそれを受け止め、小さくうなずいた。

「アンジェリカに会わせて!」

レイチェルは再びラウルの白衣を掴むと、大きな澄んだ瞳で必死に訴えた。

「入れ」

ラウルがそう言うや否や、彼女は小走りで医療室に駆け込んでいった。サイファとラウルも、続いて入っていった。

アンジェリカは大きなガラス窓の向こう側にいた。天井も床も白い、真っ白な部屋。白いパイプベッドと白いシーツの間に、黒髪の少女は横たわっていた。右腕にはギプスと包帯、左腕には点滴、頭には包帯とネット、口は酸素吸入マスクで覆われている。その他、心電図の装置などが彼女を取り囲んでいた。物々しく、痛々しいその状態を見て、サイファもレイチェルも言葉をなくした。

しばらくふたりはガラスに張りつくようにして見ていた。

「中へは、入れないの?」

レイチェルがふいにポツリと言った。

「今は刺激を与えたくない」

ラウルは間髪入れずに返事をした。レイチェルは、ウェーブを描いた長い髪を舞い上がらせながら振り返ると、潤んだ瞳で彼を見つめた。

「おとなしくするわ、だから……」

彼女は涙で揺らぐ声で懇願した。しかし、ラウルは無言で背を向け、次の点滴の準備を始めた。レイチェルは、ゆっくりと目を伏せながら、うつむいていった。

「ここから見守ろう」

サイファは後ろから彼女の肩を抱き寄せた。

数時間が過ぎた。

ふたりは長椅子に腰掛け、アンジェリカの様子をガラス越しに見つめていた。彼女はまだ一度も目を開いていないし、微動さえしていない。

「アンジェリカは?!」

静寂を切り裂く切迫した声が、入口の方から響いてきた。続いて小刻みな足音。ジークとリックが姿を現した。彼らはあたりを見渡し、サイファとレイチェルと見つけると、その前のガラス窓に、一目散に駆け寄った。痛々しいアンジェリカの姿。リックは呆然と立ち尽くした。ジークはガラスに両手をつき、肩を震わせながらうなだれた。

「頭を打っているようだ。だが、ラウルは大丈夫だと言っている。信じよう」

サイファは静かに口を開いた。だが、その言葉も、ジークたちの慰めにはならなかった。

「俺のせいだ……。俺が止めてれば……!!」

「僕も、何も出来なかった……」

ふたりの顔が歪んだ。ジークは、ガラスの上で握りしめたこぶしを震わせた。

「君たちの責任ではないよ」

サイファは長椅子から立ち上がると、ふたりの間に並び、それぞれの背中に手を置いた。

「真実を隠そうとした、私が悪かったんだ」

ガラスの向こう側を見つめながら、自らを責めるように、アンジェリカに詫びるように、そう言った。

「責任なら私にもある」

奥から歩いてきたラウルが、後ろから口を挟んだ。

「ユールベルは……」

「やめて!!」

突然、レイチェルが悲鳴のような叫び声をあげた。サイファたちが驚いて振り返ると、彼女は固く目を閉じ、頭を小さく横に振っていた。

「誰のせいとか、そんなことより……」

顔を上げ、揺れる瞳で四人を見つめる。

「今は祈ってください。アンジェリカの回復を……」

胸の前で両手を組み、震えるまぶたを閉じた。

さらに数時間が過ぎた。

それでも状況は何一つ変わらなかった。四人は長椅子に座り、ただ見守ることしかできない。

時計の秒針の音が、やけに大きく聞こえる。

ジークは隣のサイファを気にしながら、反対側のリックに耳打ちした。

「リック、おまえはそろそろ帰れ」

「でも……」

リックは声をひそめて口ごもる。彼との間をつめ、ジークはさらに畳みかける。

「ここにおまえがいてもいなくても、何も変わらねえんだ。でも家の方は、そうはいかねえだろ」

リックは難しい顔で考え始めた。

「帰りなさい、リック君」

ジークの向こう側に座っているサイファが、少し身を屈め、リックに微笑みかけた。どうやらふたりの会話は、彼に筒抜けだったらしい。ジークの声が大きかったわけではなく、この場が静かすぎたのだ。ジークは少しばつが悪そうに目を伏せた。

その隣で、リックはためらいがちに口を開いた。

「……はい。すみません」

少しの迷いはあったが、彼は素直に甘えることにした。

「ジーク君も」

「俺は帰りません」

サイファの言葉を遮り、きっぱりと言い切った。強い意志を秘めた瞳を彼に向ける。しばらく、互いの視線の探り合いが続いた。

「……わかった」

サイファは前を向き、長椅子から立ち上がった。ジークもつられるようにして立ち上がり、彼の端整な横顔を、不安そうに見つめた。サイファは恐いくらいの真剣な表情で振り向いた。

「だが、家に連絡だけは入れておくんだ」

ジークは、その静かな迫力に押され、無言でこくりとうなずいた。サイファは少し笑顔を見せて、彼の肩に優しく手を置いた。

サイファ、レイチェル、ジーク、リックの四人は、連れ立って緊急医療室から出てきた。そこには、入る前と同じように、扉の前で仁王立ちをしているバルタスと、その足元で膝を抱えるユールベルがいた。サイファとレイチェルは、彼らを目にするなり、はっと息をのんで目を見開いた。まだここにいるとは思っていなかった。それどころか、存在を忘れていたといってもいい。

ジークとリックは、ユールベルの姿をなるべく目に映さないようにして避けていた。

「それではリック君、気をつけて。今日はありがとう」

サイファが礼を述べると、レイチェルはその隣で深々とおじぎをした。

「また、あしたの朝に来ます」

申しわけなさを顔いっぱい広げ、リックはぺこりと頭を下げた。

「アカデミーまで一緒に行くぜ。家に連絡しないとイケねえし」

リックにそう言ったあと、ジークはサイファに振り向き、目を合わせた。

「家に連絡したら、すぐ戻ります」

「心強いよ」

サイファは柔らかい笑顔を返した。

去り行く少年たちの後ろ姿が小さくなると、サイファはバルタスに振り向いた。

「あなたももう結構です。お帰りください」

感情のない、淡々とした口調。銅像のように動かなかったバルタスが、じわりと首を動かし下を向いた。

「すまない……」

喉の奥で声がかすれた。組んでいた両腕をほどき、足元で小さくなっている娘に目をやった。

「ユールベル、行こう」

自分の名が呼ばれると、彼女はぴくんと体を揺らした。

「彼女は私が預かる」

突然の背後からの声。サイファもレイチェルも、驚いて声のする方に振り返った。

「ラウル……おまえ何を……」

いつのまにか扉の奥に立っていたラウルを見つめ、サイファは言葉を詰まらせた。ラウルは大腿で歩いて出てきた。バルタスを冷たく一瞥すると、腕を組み、サイファと向かい合った。

「2、3日だけだ。おまえはその間に、入寮の手続きを済ませろ」

「アカデミーの寮か」

サイファはようやく合点がいった。独り言のようにそう言うと、顎に手を当て考え込んだ。

「だがあそこには、遠隔地の者しか入れないはずだ」

「なんとかしろ」

ラウルは、たいした問題ではないかのように、あっさり言っただけだった。

「……わかった」

サイファは深刻な顔で考えを巡らせながら、小さくうなずいた。レイチェルは心配そうに彼を見上げた。それに気がつくと、彼はにっこり笑いかけ、彼女の肩に手を回した。

「そういうことだ」

ラウルはバルタスに向き直り、短く言った。その声には、一切の反論を受けつけない強さがあった。

「娘を……よろしく頼む……」

バルタスは力なく言った。

ラウルはユールベルの前まで歩いていき、かがみ込むと、彼女の華奢な体を軽々と抱き上げた。ユールベルは細い腕を伸ばし、すがりつくようにラウルの首に手を回した。そして、何かにおびえるように、彼の肩に顔をうずめた。金の髪と白い包帯が緩やかに揺れる。ラウルは彼女を庇うようにして三人とすれ違おうと、長い廊下を歩いていった。

45. 一ヶ月

煌々としたした蛍光灯の下。レイチェル、サイファ、ジークは、長椅子に並んで座り、祈るようにガラス越しのアンジェリカを見守っていた。彼女はまだ一度も目を覚ましていない。

サイファは腕時計をちらりと見た。

隣のジークも、つられるように掛け時計に目を走らせた。そのとき初めて朝になっていたことに気がついた。窓のないこの部屋では、時間を感じる術はない。いつもならそろそろ家を出ようかという時間。だが、まるで実感がない。当たり前の日常が、遠い昔のこのように思える。

「レイチェルを頼む」

ぼんやりしていたジークの耳もとで、サイファがささやいた。

ジークは我にかえり、小さく「え？」と聞き返したが、それと同時に彼は立ち上がり、出てってしまった。

こんなときに……。

ジークは冷たく遠ざかる靴音を聞きながら、わずかに顔をしかめた。

「サイファは自分のやるべきことがわかっているのよ」

長椅子の端に座っていたレイチェルが、にっこり笑いかけてきた。まるで心を見透かされているような言葉。ジークはとまどいながら目を伏せた。

「そう、ですよ」

彼女が正しい、サイファが正しい。そんなことはすぐにわかった。感情論だけでは何も解決しない。一瞬でもサイファを責めてしまった自分は、アンジェリカのために何ができるというのか。情けなさに顔を歪め、深くうなだれる。

「俺には……ここにいることしかできない」

責められるべきは自分だ。膝の上で握りしめたこぶしが、小刻みに震えた。

「私もよ」

レイチェルも短い言葉で同調した。

ジークははっとして顔を上げた。あまりに声が沈んでいたのが驚いたのだ。だが、声だけではなかった。疲れきった表情、血の気のない真っ白な顔。今にも倒れそうに見えた。

「レイチェルさん……少し、休んだ方がいいですよ」

ジークが心配そうに声を掛けると、彼女は急に笑顔を取りつくろった。

「私はまだ平気です。ジークさんこそ休んでください」

努めて明るく返事をしたが、やはり疲れは隠せない。声いつもの張りがなかった。

「……毛布か何か、もらってきます」

ジークは微かに笑みを見せると立ち上がった。

「ジーク！」

大きな声、大きな足音とともに、リックが緊急医療室に駆け込んできた。

「シッ！ 声でけえよ！ ようやく寝たんだ」

ジークは人さし指を口の前に当て、声をひそめてたしなめた。

彼の肩には、毛布を羽織ったレイチェルが寄りかかり、静かに寝息を立てていた。

「あ、ごめん」

リックも声をひそめて謝ると、長椅子に腰を下ろした。ガラス窓の向こうに目を向ける。そこには、酸素吸入マスクや点滴、検査用の器具をつけたアンジェリカが横たわっていた。

「アンジェリカ、どうなの？」

「まだ一度も目を覚ましてねえ」

ジークは暗く沈んだ声で返答した。彼女を見つめながら、苦しげに目を細める。

「でも大丈夫さ、あいつなら、きっと……」

自分に言い聞かせるようなジークの言葉に、リックも無言で力強く頷いた。

ジークは、肩に寄りかかるレイチェルに、同意を求めるような気持ちで視線を送った。だが、血の気のない顔をした彼女を見ていると、自分が彼女を安心させるくらいでないといけないと思直した。

コンコン――。

急かすようなノックのあと、返事を待たず、即座に扉が開かれた。サイファがあたりを見渡しながらかしこみに入ってきた。

「ユールベルは？」

「奥だ」

机でカルテを眺めていたラウルは、そのままの姿勢で親指を立て、肩ごしに後ろを示した。

サイファは無言で歩み寄り、隣の丸椅子に腰掛けた。

「入寮の件だが、やはり頼んでも無理だった。アカデミーは平等でなければならないという原則がある以上、特別扱いはできないそうだ」

ラウルは机に向かったまま、小さくため息をついた。

「能書きはいい。それで引き下がったわけではないだろう」

サイファはわずかに口の端を上げた。

「彼女の住民票を遠隔地に移すことにした。移す先は知り合いに頼んで、すでに快諾を得ている。あとは手続きだけだ。役人たちは嫌な顔をしていたが、拒否することもできないだろう」

「明日には入寮できるんだな」

「いや……」

歯切れの悪いサイファの返事に、ラウルは初めて顔を上げた。

「一ヶ月たたないと、空きがないらしい」

「一ヶ月か」

ラウルは続けて何かを言おうとしたが、サイファがすばやくそれを遮った。

「安心しろ。事情を話して相談したら、その間は、寮長さんが個人的に預かってくれることになった」

ラウルは腕を組み、静かに考え始めた。

「他に方法はないだろう」

いつになく悩む彼を見て、サイファは後押しするように付け加えた。すると、ラウルは急に立ち上がり、何も言わず奥の部屋へと消えていった。

「いやっ！私を見捨てないで！ここにいさせて！」

話を聞いたユールベルは、泣きじゃくりながらラウルに縋り付いた。彼の上衣を引きちぎらなければかりにきつく握り、顔をうずめ、細い肩を大きく上下させている。ラウルはそんな彼女の様子を、ただ黙って見下ろしていた。

ユールベルはしばらく嗚咽を続けていたが、やがてすすり泣きへと変わっていった。

「おね……がい……」

下を向いたまま、泣き疲れた声で、無反応のラウルに最後の哀願をする。もう声も出す力も残っていない。

ラウルはようやく口を開いた。

「一ヶ月だけだ。そのあとは寮へ入れ。それ以上の我が侘は聞かない」

ユールベルはおそろおそろ顔を上げた。いつもと同じ、感情のない厳しい顔。考えの読めない顔。急に受け入れる気になったのは、憐憫からだろうか。だが、理由などどうでもよかった。小さくこくと頷いた。

ラウルが医務室に戻ると、サイファはカルテを手に取り眺めていた。机の上に置きっぱなしにしていたアンジェリカのものだ。ラウルは背後からそれを取り上げた。

「それで？」

サイファは何事もなかったかのように振り返り、短く尋ねた。

ラウルは机の上にカルテを投げ置くと、その場で腕を組んだ。

「一ヶ月、私が預かる。そのあと寮へ入れる」

サイファは目を見開いてラウルを見上げた。

「何を考えている」

椅子から立ち上がり、厳しく問いつめるように彼を睨んだ。

しかし、ラウルは平然としていた。

「ユールベルが了承しなかった。こうするしかない」

それでもサイファは納得できないでいた。眉をひそめ、ためらいがちに口を開く。

「……彼女は、15歳だったな」

「それがどうした」

ラウルは冷たく睨み返した。

しかし、サイファは怯むことなく、真正面からそれを受け止めた。

「入院ということにしておく」

事務的な口調でそう言うと、背を向け戸口へと歩いていった。扉に手を掛けたところで、顔だけわずかに振り返った。腕を組んだままのラウルに視線を流す。

「昨日のことも問題になっている。これ以上、騒ぎが大きくなると庇いきれない」
淡々と忠告を残し、サイファは医務室をあとにした。

ラウルはいったん部屋に戻って着替えると、ユールベルを残したまま外へ出て行った。アンジェリカの治療のためなのか、アカデミーの仕事のためなのか、ユールベルにはわからなかった。彼女は一日中、ソファの上で膝を抱えていた。用意されていた食事にも手をつけなかった。

夜もだいぶ更けてきた頃、ようやくラウルが戻ってきた。じっと座ったままのユールベルに、冷たい一瞥を送る。そのまま、何も言わずに寝室へ入っていった。

ユールベルは声を掛けてくれることを期待していた。だが、それは叶わなかった。そんなことを期待した自分が情けなく思えた。ただ、憐れんで置いてくれただけなのに——抱えた膝に顔を埋め、小さくなる。

「おまえはそこで寝ろ」

背後から声が聞こえた。ラウルが寝室から毛布を持って戻ってきていた。驚いて振り返ったユールベルに、その毛布を投げてよこした。

ユールベルはそれをそっと抱きしめた。あたたかかった。少し、泣きそうになった。

ボタン、と扉を閉める音がした。

ユールベルは思わず振り返った。彼の後ろ姿を目で追った。しかし、もう振り返ってはくれなかった。彼はリビングの明かりを消し、書斎へと入っていった。扉の隙間から細い光が漏れる。暗い部屋の片隅で、ユールベルはぼんやりとその光を見ていた。

それから数時間が過ぎた。

ユールベルはまだ眠っていなかった。いや、眠れなかった。ソファの上で毛布にくるまり、あいかかわらず膝を抱えている。

ガチャッ——。

書斎の扉が開き、中からラウルが出てきた。そして、すぐに隣の寝室に入ってしまった。ユールベルのことなどまったく気に掛けていないようだ。寝室の明かりは、いったんついて、すぐに消えた。

ユールベルは自分の肩を抱きしめながら、膝に顔をうずめた。

音も光もない世界、ひとりぼっちの私。何も変わらない……。

彼女は耐えきれなくなって立ち上がった。毛布を抱え、寝室の扉をそっと開く。

暗い中、ラウルはベッドの上にあった。しかし、眠ってはいなかった。頭の後ろで手を組み、天井を見つめている。

ユールベルは目を細め、毛布をぎゅっと強く抱きしめた。足音を立てないように、そっと近づく。毛布を引きずるこもった音だけが奇妙に広がる。ラウルは彼女に気付いていないわけではなかったが、彼女に顔を向けることはなかった。ずっと天井を見つめたまま、まったく動かない

。ユールベルは毛布を落とし、おずおずとベッドへ入り込んだ。大きな体の隣で、小さく体を丸める。

「寝るときくらい包帯をとったらどうだ」

ふいに、思いがけない言葉が降ってきた。目が熱くなり、鼻の奥がつんとした。頭を彼の脇腹にそっと寄せる。ラウルは片手で彼女の包帯をほどいた。

7日が経った。

アンジェリカはまだ目を覚ましていなかった。しかし、もう峠は越えている。緊急医療室から一般病室へ移されていた。

ジークとリックは、アカデミーが終わると、毎日様子を見に来ていた。もちろん今日も来ている。レイチェルとともに、白いパイプベッドを囲んで座っていた。その中央で、小さな体を横たえ、アンジェリカは静かに目を閉じている。まだ点滴は受けているが、酸素吸入マスクはすでに外されていた。本当にただ眠っているようにしか見えない。

ガラガラ――。

勢いよく扉が開き、ラウルが入ってきた。彼はジークたちを下がらせると、慣れた手つきで点滴パックの交換を始めた。

「先日の検査でも異状はなかった。原因はやはり心的なものだろう」

手を動かしながら、淡々と結果報告をする。

「目を覚ますのを待つしかないってことね」

レイチェルは冷静に受け止めた。

ジークとリックはうつむいて陰を落とした。以前にもこんなことが何度かあったと、サイファから聞いたことがある。だが、一週間も目覚めないのは今回が初めてではないか。

「暗くならないで」

ふたりの様子を察知したレイチェルが、声を掛けてきた。

「怪我が原因でないのなら、きっといつか目覚めてくれるわ。この子はそんなに弱くないもの」

そう言って、にっこり笑ってみせた。

ふたりは驚いてレイチェルを見た。そして、つられるように、少しぎこちなく笑った。ジークは彼女の強さを、心底うらやましく思った。

「おまえたち、最近、課題の提出率が悪いぞ」

ラウルの低い声が、穏やかな雰囲気壊した。

ジークはムツとして眉間にしわを寄せた。

「おまえだって、最近、自習が多いじゃねえか」

怒りまかせに、ついそう言い返したが、言ったとたんに後悔した。それはすべてアンジェリカの診察のためである。そんなことはわかっていたはずだった。

レイチェルは申しわけなさそうに目を伏せた。そんな彼女を見て、ジークはますます強く後悔した。

「あ、でも、みんな自習で喜んでるし」

リックは慌てて取り繕おうとした。しかし、あまりフォローにはなっていない。病室がしんと静まり返った。

「あしたは提出しろ」

ジークたちの言葉は無視し、端的に要求のみを告げると、ラウルは病室をあとにした。

「課題、ここでなさって」

レイチェルはにっこり微笑みかけた。とまどうふたりに畳み掛ける。

「たくさんあるのでしょうか？」

「でも……」

ジークは口ごもりながら、眠ったままのアンジェリカをちらりと見た。

「机もあることだし、じっとしているだけなら、ここで課題をやったほうがいいでしょう？ アンジェリカも、ジークさんたちに負けられないって、目を覚ますかもしれないわ」

同意を求めるようにちょこんと首を傾けると、屈託なく笑ってみせた。少なくとも、ふたりにはそう見えた。

ジークは彼女の明るさに救われた思いだった。

「今日の分だ」

ラウルは、部屋の隅に座るユールベルの前に、プリントの束をバサリと投げ置いた。そして、ソファに腰を下ろし、ゆったりと背もたれに身を預けると、彼女をじっと見下ろした。

「少しはやっているのか」

ユールベルは膝を抱えてうつむき、固い顔で首を横に振った。

「アカデミー、やめようかしら」

「駄目だ」

ぽつりと落とされたかぼそい言葉を、ラウルは間髪入れずはねつけた。

「どうして」

ユールベルは顔を上げ、苦しげに目を細めた。

それでも彼はまったく表情を変えない。

「寮に入れなくなる」

そんな何の温度も感じさせない言葉を返すだけだった。

ユールベルは泣き出すのをこらえるように顔を歪めた。

「……ずっとここにいたい」

震える声で訴えかける。

「私には私の都合がある」

ラウルは冷たく突き放すように答えた。

「お願い、何でもするから」

ユールベルは揺れる瞳で、すぐるように食い下がる。

「駄目だ」

取りつく島もなかった。再びうつむき、膝に顔をうずめる。

「もう、アカデミーにいる意味なんてないのに」

「復讐だったのか」

ラウルはソファにもたれかかり、顎を上げ、小さくなった彼女を冷ややかに見下ろした。だが、彼の口調からは、見下した気持ちや、責める意味合いは感じられなかった。

「……わからない。アンジェリカがいるって知って、私も行かなければって思ったの。何がしたかったのか、自分でもわからない」

ユールベルは膝から少し顔を離すと、記憶をたどるように言葉を紡いでいった。

「でも、アカデミーで楽しそうに笑うアンジェリカを見たとき、思ったのよ」

膝を抱える手を震わせ、指が食い込まんばかりに力を込めた。

「うらやましい、くやしい、憎い、って」

強く、静かに言葉を並べた。昂る感情を、喉の奥で抑え込んでいた。

「それで復讐か」

ラウルの声のトーンは、先ほどとまったく変わっていなかった。

「……そう、かもしれない……わからない」

ユールベルは下を向いたまま、眉根を寄せた。

それきり、ふたりの会話は途切れた。

音のない空間、動かないふたり。時間の感覚さえ失われていく。

どれくらいの間、そうしていただろう。長かったかもしれないし、短かったかもしれない。

ユールベルはそろりと立ち上がり、静かにラウルの元へ歩いていった。真正面からじっと見つめながら、地べたに足を放り投げて座り込んだ。

ラウルはソファに大きくもたれかかったまま、両脚の間の彼女に目を落とした。

「私、まだ言っていないことがある」

ユールベルは、一度ゆっくりと目を伏せてから、再び視線を上げた。

「……アンジェリカに、嘘をついたの。私が閉じ込められていた理由」

怯えるように瞳が震える。それでも、逃げずにラウルと向かい合った。

「あなたのせいだ……って。あなたの犠牲になったんだって責めたわ」

「そうか」

ラウルは聞き返すこともなく、ただそれだけ言った。

しかし、ユールベルはまだ何か言いたそうにしていた。苦しそうに目を細める。

「それに、もしかしたら……」

彼女はためらいながら言葉を続けた。

「アンジェリカが階段を踏み外すように、私が追いつめたのかもしれない。そういう気持ちがあったのかもしれない。やっぱり私のせいななのかもしれない」

そこまで言うと、首を深く曲げうつむいた。横髪が肩から落ち、顔に陰を作る。

「なぜ私に言う。サイファに話すかもしれないぞ」

「……苦しかったから」

ユールベルは消え入りそうな声でそう言った。

8日目。

授業が終わり、ジークはいつものように病室へ走ってきた。勢いよくガラガラと扉を開け、中に飛び込む。

「こんにちは。今日はリックは来られなくて……」

そこまで言って気がついた。レイチェルの向こうに見覚えのない人が座っている。流れる長い銀の髪に白い肌。そして、強い目元に凜とした強さを感じさせる、きれいな女の人だ。レイチェルよりも年上に見えるが、彼女が若く見えることを考えると、実際は同じくらいなのかもしれない。

「この子がジーク君？ 想像どおりだわ」

彼女は身を乗り出し、興味深げにジークを観察した。

「え……と」

ジークは困惑したようにレイチェルに目を向け、助けを求めた。彼女はにっこり微笑んだ。

「こちらは……」

「アルティナよ。レイチェルの仕事仲間ってところね。よろしく」

銀髪の女性は、紹介される前に自ら名乗った。そして、立ち上がってずっと前に出ると、ジークに右手を差し出した。身の丈はジークと同じくらいある。女性にしてはかなり高い。

「よろしくお願いします……」

彼女の勢いに押されつつ、ジークも右手を差し出し、握手を交わした。

「レイチェルからキミの話をよく聞いていて、いつか会いたいと思っていたのよね」

アルティナと名乗った女性は、嬉々としてそう言った。レイチェルも後ろでにこにこ笑っている。

ジークはなんとなく居たたまれないような気持ちになった。いったい自分について、どんな話をしていただろうか。気になって仕方がなかったが、尋ねることはできなかった。

コンコン。

その音に三人は振り向いた。

そこにいたのはラウルだった。全開になったままの扉をノックし、戸口に立っていた。その後ろには、白い人影が見え隠れする。ユールベルだ。ジークは驚いて声も出なかった。

「すまないが、アンジェリカと話をさせてやってほしい」

ラウルは目線で後ろのユールベルを指し示した。さすがのレイチェルも動揺を隠せない。視線を泳がせ、返答に困っている。

「私がついている。心配するな」

彼女の不安を察し、ラウルはそう付け加えた。

レイチェルはしばらく彼を見つめると、ふっと表情を緩めた。

「私たちは外で待ってればいいのね」

「レイチェル！」

アルティナは長い銀髪を振り乱して振り向いた。

しかし、レイチェルはにっこり笑って受け止めた。

「出ましょう。ジークさんも」

うつむいて顔をしかめるジークに、レイチェルは明るく声を掛けた。アンジェリカに優しい笑顔を向けると、腰を上げ、病室を出ていく。彼女に続き、アルティナとジークもしぶしぶ戸口へ向かった。

ジークはラウルを思いきり睨みつけた。しかし、前を歩いていたアルティナの行動は、もっとわかりやすかった。前を向いたまま、すれ違いざまにこぶしを一発、彼の脇腹に勢いよくねじ込んだ。

「無神経」

小さな声でそうつぶやくと、腕を引っ込め、何事もなかったかのように歩いていった。ラウルも眉ひとつ動かさず、何事もなかったかのように平然としている。

ジークは睨むことも忘れ、呆然とその光景を目にしていた。あのラウルにこんなことができる人間がいるなど信じられなかった。

「ジーク！」

アルティナの不機嫌な声に呼ばれ、ジークは我にかえった。慌てながら小走りで外へ出た。すれ違いざま、ちらりと横を見ると、ユールベルが顔を背けてうつむいているのが見えた。頭の後ろで結ばれた白い包帯が、微かに揺れていた。

ラウルが彼女の華奢な背中を押し、ふたりで中に入ると扉が閉められた。

ジークは納得のいかない顔で窓枠に手を掛け、ガラス越しに中庭を見下ろした。手入れが行き届いた豊かな緑の草木に、中央の噴水が輝きを与えている。穏やかな安らぎの空間。しかし今は、その美しい風景もはるか遠く、別世界のように感じる。

「……ずいぶん信用しているんですね、ラウルのこと」

レイチェルはきょとんとしたが、すぐになっこりと笑顔になった。

「ええ」

自信を持って返事をする。そして、ジークの隣に並び、窓ガラスに手を置くと、まだ青い空を見上げた。

「レイチェルは人が良すぎるのよ」

アルティナは彼らの後ろで壁にもたれかかり、腕を組むと、大きくため息をついた。

「あいつが何か悪いことを企んでいるとは思わないけどさ。なーんか気に入くないのよね、いろいろと」

まるで自分の気持ちを代弁しているかのような彼女の言葉。ジークは急に親近感を覚えた。

「それ、すごくわかります」

ありったけの実感をこめて同意した。

「お、なかなかワカルね、キミは」

アルティナは身を乗り出し、ジークに人さし指を向けると、にやりと笑った。

「アカデミーでもあいつはいつでも偉そうに命令口調で」

「どう見ても教師に向いているとは思えないわよね」

ふたりはラウルの話で盛り上がっていった。レイチェルは会話に加わらなかったが、止めることもせず、にこにこしながらそのやりとりを聞いていた。

ガラガラ――。

扉が開き、中からラウルが姿を現した。その後ろには、隠れるようにユールベルがくっついていて。誰とも目を合わそうとせず、怯えたようにうつむいていた。

「すまなかったな」

ラウルはレイチェルの瞳をじっと見据えて言った。彼女は言葉の代わりに笑顔を返した。

ユールベルはラウルの腕をそっと引っ張った。ラウルは彼女の肩に手を回し、三人の視線から庇うようにして立ち去った。

「さ、気を取り直して戻りましょ」

「あ、あの……」

ジークは病室に戻ろうとするアルティナとレイチェルを、遠慮がちに呼び止めた。言いにくそうにためらっていたが、決意を固めると、思いきって切り出した。

「ついできていうか……俺もアンジェリカとふたりで話をさせてもらえませんか」

レイチェルは驚いたように、ぽかんとして動きを止めた。

ジークは、言わなければよかったと後悔した。耳が熱くなっていく。今すぐここから逃げ出したい気持ちになった。

「どうぞ」

レイチェルは穏やかににっこり笑って答えた。その後ろで、アルティナは意味ありげににやりと笑っていた。とてつもなく恥ずかしかったが、今さら引き返せない。ジークはほてった顔を隠すように、急いで病室に入り、扉を閉めた。

ふう――。

大きく息をつくとき、ベッド横の椅子に腰掛けた。アンジェリカの顔をじっと覗き込む。眠っているだけのような安らかな表情。手の甲で、彼女の頬にそっと触れてみる。温かい、生きている。当たり前なことだが、それを感じることでようやく安心できた。

「約束、おぼえてるか？」

そっと語りかける。当然だが、返事はない。寂しさを感じながら、一方的に話を続けた。

「あれだけ威勢のいいこと言ってたんだからな、守れよ」

彼の耳は再び赤味を帯びていく。少しためらったあと、言葉を続けた。

「俺の願いは……」

「何を話しているのかしら、ジークさん」

「さ、何かしらね」

レイチェルとアルティナは、並んで窓の外を眺めながら、弾んだ声で楽しそうに言葉を交わす。外はもうだいぶ暗くなってきている。

「話か……話だけじゃなかったりして」

「えっ?!」

「冗談だって」

ふたりは顔を見合わせると笑いあった。

9日目。

この日はリックも一緒だった。授業が終わったあと、ふたりで病室へと駆けて行った。

ガラガラ――。

「こんにちは」

ふたりは口をそろえて挨拶をした。しかし、中に目をやった瞬間、ジークは固まった。

「やっと来たわね、バカ息子」

椅子に座るレイチェルの隣に立っている黒髪の女。それは、まぎれもなくジークの母親、レイラだった。息子たちに向かって軽く右手を上げている。

「……なっ……なんでおまえが来てんだよっ！」

「ジーク、声、大きすぎ！」

思わずカー杯の声で叫んだジークを、リックが後ろからたしなめた。しかし、ジークはそれどころではない。

「アンジェリカちゃんのお見舞いに決まってんでしょ。あと、レイチェルにも会いたかったしねっ」

レイラは嬉しそうにそう言うと、レイチェルを後ろからぎゅっと抱きしめた。レイチェルはにっこり笑顔でなすがままだった。

「離れる！」

ジークは青筋を立てて叫んだ。

「あーやだね、男の嫉妬は。みっともない」

「だーれが嫉妬だ、コノヤロウ」

握りこぶしを震わせ、顔を引きつらせながら母親を睨みつける。

「だいたいどうやって入ってきたんだ。ここ、王宮だぜ」

「ほっほっほ。あんたに行けて、私に行けないところなんて、あるわけないでしょ」

高笑いをして、答えになっていない答えを返す母親に、ジークの苛立ちはさらに募った。

「ふたりとも、中に入ってください」

まだ戸口に立ったままのふたりに、レイチェルが優しく声を掛けた。

ジークはすでに疲れきった様子で、ため息をつきながらベッドに近づいていった。うつむいたり、顔をそらしたり、なるべく母親とは目を合わせないようにしている。しかし、あるものを目にして、再びがっくり疲れが襲ってきた。

「……その非常識なモノ。持ってきたのオマエだろ」

呆れ顔で指さした白いプランターには、色とりどりのチューリップが植わっていた。

「あら、よくわかったわね」

レイラはきょとんとして、ジークを見た。

「オマエ以外ありえねえだろ！」

「やあねえ。カルシウム不足かしら」

力いっぱい怒鳴るジークを、母親は軽く受け流した。彼はますます頭に血をのぼらせた。

「根の生えたものは、お見舞いには縁起が悪いって知らねえのか？！」

「へえ、意外と物知りねえ。でも、私はそんなこと気にしないし」

レイラはカラッと笑った。

「見舞われた方が気にすんだよ！！」

「いえ、私も気にしていませんから」

レイチェルが割って入った。

ジークの勢いは一気にそがれた。彼女は優しいのでそう言ってくれているだけだとは思ったが、その気持ちが無駄にすることもできない。彼は押し黙るしかなかった。不完全燃焼である。

「ほれみなさい。これなら文句もないでしょ」

レイラは気分よさげに胸を張った。

「だいたい切り花なんて、命を切り取ったものでしょ？ そんなものを持ってくる方がよっぽど縁起でもないと思うわよ。土に根を下ろしてこそその命。その生命力が人間にも活力を与えるわけよ」

独自の論理を展開する母親を、ジークはもう相手にする気にはなれなかった。ふてくされて適当に聞き流していた。しかし、リックは目を輝かせて、大きく頷きながら聞いていた。

「それに、そっちのサボテンの方がどうかと思うけど？」

レイラが目線をたどると、プランターの横にミニサボテンがちょこんと鎮座していた。

——あれは……。

ジークの鼓動がどくと強く打った。

「それはお見舞いではないんです。アンジェリカが大切にしているものなので、家から持ってきたんですよ」

レイチェルはにっこり笑った。

「へえ……意外と変な趣味があるのね」

レイラはまじまじとミニサボテンを覗き込んだ。

「うるさいな！ 帰れよ！」

ジークは顔を真っ赤にしてわめいた。

レイチェルは下を向いてくすくす笑っていた。その様子からすると、彼女はサボテンの出所をわかっているらしい。

「アンタには関係ないでしょ。何でそんなに顔が赤いわけ？」

「っ……」

レイラの素朴な質問に、ジークは言葉を詰まらせた。くやしさを顔いっぱいに広げる。

「ごめんね、アンジェリカちゃん。このバカがうるさくって」

レイラはジークの後頭部をバシッとたたいた。

ジークは完全に負けた。

「それにしても……。本当に眠っているだけみたいに見えるわね」

レイラは体をかがめて覗き込んだ。

「ええ、眠っている状態とまったく同じなんです。どこかが悪いから目覚めないというわけでもないそうです」

「まさに眠り姫ね。こっちは王子様なんてガラじゃないけど」

その場にいた三人は、いっせいにジークに振り向いた。

「な、なんだよそれ」

ジークは三人の視線に気圧されて、わけもわからずうろたえていた。

「アンタ、眠り姫の話、知ってる？」

レイラは静かに問いかけた。

「おとぎ話か？ んなもん知らねーよ」

「ふーん……」

いつもはああいえばこういうレイラが、このときに限っては、意味ありげな相づちを打っただけだった。気味が悪い。ジークは妙な不安に襲われた。

「じゃ、私はそろそろ帰るわ。また来るわね」

「おい待てよ！ 何が言いたかったんだよ！」

「それじゃ！」

ジークの呼びかけを、レイラはにこやかに無視した。戸口で大きく手を振ると、元気よく去っていった。

「……リック」

ジークは低い声で呼んだ。

「え？ 僕もあんまり知らないよ。100年間眠り続けたお姫様を、通りすがりの王子様が助けたって話だと思うけど」

「100年？！ あのバカまた縁起でもねえことを！」

本気で驚いたらしく、素頓狂な声を上げた。

「いや、言いたいのはそこじゃなくて……」

リックとレイチェルは、顔を見合わせて、少し困ったように笑った。

「俺が通りすがりっていいたいのか？」

「それもちょっと……」

ジークは腕を組んで考え込んだ。

「……王子はどうやってお姫さまを目覚めさせたんだ？」

「それは……知らないよ」

リックはしれっとして言った。

「おまえ、本当に知らないのか？」

疑いの眼差しを向け、ぐいっと顔を近づける。リックは焦りながら、逃げるように身を引いた

。
「自分で調べればいいじゃない。ね、レイチェルさん」

「ええ」

にこにこ笑顔を交わすふたりを見て、ジークは確信した。リックもレイチェルも知っている。知っていて教えないのだ。相手がリックひとりだったら詰問するところだが、レイチェルの手前、それも気が引ける。

——自分で調べるか。

疲れたようにため息をつき、静かに眠るアンジェリカの姿をそっと見つめた。もし俺に出来ることがあるのなら、どんなことだって……。ジークは決意を新たにした。

10日目。

「ジーク、遅いよ！」

振り返ったリックを、ジークは恨みがましく睨みつけた。足どりが重い。走る気にはなれなかった。

「こんにちは！」

リックは元気よく病室の扉を開けた。その後ろから、疲れた様子のジークが続く。だが、ふたりは中を見て足を止めた。

「……なんでおまえが来てんだよ！」

ジークは昨日と同じセリフを吐いた。しかし、向けられた相手は、昨日とは違う。金髪細身の後ろ姿。レオナルドだ。短い髪をさらりと流しながら、不機嫌な表情で振り返った。

「親戚の見舞いに来たらいけないのか」

「……」

ジークは言葉に詰まった。くやしさいっぱいに睨みつける。そんな彼を、レオナルドは顎を上げ、冷たく見下ろした。

「おまえこそ、よくレイチェルさんに会わず顔があるな」

「なに？」

ジークの額に冷たい汗がにじんだ。

「いい気になって、ナイトぶっておきながら、このザマだ。女の子ひとり守れない奴が、偉そうにしないでもらいたいものだ」

「レオナルド！！」

レイチェルは立ち上がり、彼の背中に厳しい顔を向けた。

「よしなさい。ジークさんに非はありません！」

凜とした声で、きっぱりと言い放った。

レオナルドはうつむいて振り返り、彼女に深々と頭を下げた。そして、無言で部屋をあとにした。

「すみません、不快な思いをさせてしまって」

レイチェルは申しわけなさそうに、ジークを気づかった。しかし、彼は顔に影を落とし、うな

だれていた。リックも心配そうに見ていたが、かける言葉が見つからなかった。

「言われて当然のことです」

ジークは力なく自嘲した。

レイチェルはまっすぐ彼に近づいていった。光をたたえた強い瞳を向ける。そして、彼の右手をとり、自らの両手で包み込んだ。

「私たちは、ジークさんのせいだとは思っていません。そんなふうに自分を責めないで」

絹の手袋ごしだったが、彼女の温かさがほんのり伝わってきた。しかし、それでも彼の心は融けなかった。

「でも、レオナルドに言われたことは事実です」

かたくななジークに、レイチェルはふっと柔らかく笑いかけた。

「もしそう思うのであれば、アンジェリカが目覚めるように、たくさん祈ってください」

彼女はジークの手を引き、椅子に座らせた。リックもほっとした様子で、隣に腰かけた。

「それで、王子様はどうするのか、わかりました？」

レイチェルは椅子に腰を下ろしながら、笑顔で問いかけた。ジークの顔は一気に上気した。思わず目の前で眠るアンジェリカから目をそらす。

「俺、からかわれてただけなんですよね……」

「僕、図書館に付きあわされたあげく、げんこつで殴られちゃいました」

リックはそう言いながら、とても楽しそうだった。レイチェルも楽しげに、ふふっと笑った。

「でもわかりませんよ。何がきっかけになるかなんて」

ジークは困り顔で、ますます赤くなっていった。

「そんなこと言って、サイファさんが聞いたら……」

ココン。ノックと同時に扉が開いた。

ジークは何気なく振り返った。そのとたん、彼は派手な音を立てて椅子から転げ落ちた。

「大丈夫か？ ジーク君」

扉を開けたサイファは、驚いて歩み寄ると、手を差し伸べて助け起こした。

ジークは顔を赤くしたまま、彼を見ようとしなかった。

リックとレイチェルは、顔を見合わせて笑っていた。

「どうしたんだ？」

サイファはふたりをかわるがわる見ると、不思議そうに尋ねた。レイチェルは、彼を見上げてにっこりとした。

「サイファは親バカだって話をしていたところだったのよ」

「今さらそんな話か」

さも当然のようにそう言うと、彼女の隣に腰を下ろした。

「サイファさん、よく仕事を抜け出してきているみたいですけど、大丈夫なんですか？」

リック自身、ここでサイファとときどき顔を合わせていたし、レイチェルの話からすると昼間もよく来ているらしい。彼が心配することではないが、気にはなった。

「仕事はきちんとやっているよ。それに、抜け出しているわけではなく、ちょっと立ち寄ってい

るだけだ」

そう言って、いたずらっぽくにと笑ってみせた。

「ずいぶん遠まわりしているみたいだけどね」

レイチェルも笑って付け加えた。

「それにしても……」

サイファは、ベッドで眠り続けるアンジェリカに目を移した。

「もう10日になるのか」

彼女の額に手をのせ、なでるようにそっと前髪をかきあげる。サイファはそれ以上何も言わなかったが、彼の気持ちはその場にいる全員に痛いほど伝わっていた。伝わっていたというよりも、それがみんなの共通の思いであった。

29日目。

暗い寝室。ラウルはベッドの上で仰向けになっていた。頭の後ろで手を組み、天井を見つめている。その隣には、膝を曲げたユールベルが、そっと寄り添うように、体を横たえていた。

「まだ、意識が戻らないの？」

「ああ」

ユールベルは肩をすくめ、背中を丸めた。

「ずっと、このままだったら……」

「そうはならない」

ラウルはきっぱりと言った。

「どうして……？」

「私は医者だ」

ジリリリリリリ——。

けたたましいベルの音が、静寂を切り裂く。ラウルは手を伸ばし、枕元の受話器を取った。

「……わかった。今行く」

それだけ言って受話器を置くと、ユールベルをまたいでベッドを降りた。暗いままの部屋で、手早く着替え始める。

「どこへ行くの？」

ユールベルは手をついて体を起こすと、彼の後ろ姿に問いかけた。その声は小さく、どこか怯えているようだった。

ラウルは無表情で振り返った。

「アンジェリカのところだ」

30日目。

「いいのかなあ、自習さぼって」

「いいんだよ。朝から自習にするアイツが悪いんだ」

ジークとリックは、アンジェリカの病室に向かっていった。

「……ていうか、気になるんだよ。最近はず習もなくなってたのに、もしかしたら、アンジェリカに何か……」

それ以上、言葉が続けられなかった。嫌な予感が止まらない。

「そんな、考えすぎじゃないの？」

そう言いながらも、リックは不安に顔を曇らせた。

「だったら、いいんだけどな」

ジークは足を速めた。

コンコン。

ノックをしたが、返事はなかった。

「誰もいないのかな。面会時間外だし……」

リックは嫌な想像を、必死で抑え込んだ。

コンコンコン。

ジークは再びノックをする。やはり返事はない。

「チッ」

小さく舌打ちすると、耐えきれなくなって、勢いよく扉を開けた。

ガラガラガラ——。

扉がレールを走る音が、いつもより大きく感じた。そして、病室がいつもより眩しく感じた。

「おはよう」

「……」

「ちょっと、寝過ぎしちゃったみたい」

「……アンジェリカっ?!」

ふたりは同時に叫んだ。白いパイプベッドで上半身を起こし、少し恥ずかしそうにはにかんでいる黒髪の少女。それは間違いなくアンジェリカだった。声はところどころかすれていたが、久しぶりに見た黒い大きな瞳は、少しも変わっていない。

ふたりは我にかえると、慌ててベッドに駆け寄った。

「お……起きて大丈夫なのか？」

「無理しないで」

「うん、平気。腕はまだ治っていないみたいだけど」

アンジェリカは、ギプスの腕を少し持ち上げ、にっこり答えた。それから、少しの笑顔を残したまま、真面目な表情になり、ふたりをじっと見つめた。

「……ごめんね」

「ああ」

「うん」

それ以上の言葉はなかったが、それだけで十分だった。

「おまえたち、自習はどうした」

ラウルは隅の椅子で足を組み、カルテに記入をしながら淡々と尋ねた。ふたりとも、彼がいたことにまったく気がついていなかった。そして、レイチェルとサイファがいたことにも、そのとき初めて気がついた。

レイチェルは本当に嬉しそうに、ほっとしたように、心から幸せそうな顔をしていた。大きく光る瞳に涙をたたえながら目を細めている。サイファは彼女の肩に手を回し、やはり幸せそうに目を細めていた。

「今日くらい堅いことを言うなよ」

「おまえはいつでも融通を利かせすぎだ」

ラウルはカルテを小脇に抱えて立ち上がり、笑顔のサイファとちらりと視線を合わせると、無表情で病室から出ていった。

ココン。

軽いノックのあと、サイファは返事を待たずに扉を開き、勝手に医務室の中へと入っていった。そして、いつものように、ラウルの隣の丸椅子に腰を掛けた。

「アンジェリカと一緒にいなくていいのか」

ラウルは机に向かったまま、ペンを走らせる手を止めずに言った。

「時間なら、これからいくらでもあるよ」

サイファは伸びやかな表情で、晴れ晴れと笑った。それから、急に真剣な顔になると、奥の部屋へ続く扉に目をやった。

「.....彼女は元気にしているのか」

その質問に、ラウルは手を止めた。

「少しは落ち着いた。アンジェリカの意識が戻って安堵しているようだ」

「あしたで約束のひと月だ。朝に迎えに来るが、いいな？」

サイファは事務的に確認の言葉を口にすると、ラウルの横顔をじっと見つめた。

「もう我が侘を言わせはしない」

ラウルはそう言って振り向き、真正面からサイファと目を合わせた。

夜が深まった頃、ラウルは明かりの消えた寝室へ入っていった。

彼のベッドには、当たり前のようにユールベルが眠っていた。背中を丸め、膝を抱えるようにしている。許可したわけでもないのに、彼女はいつも勝手に入り込んでいた。しかし、それを咎めたこともなかった。

彼女を起こさないように、そっとまたいで奥へと移動し、仰向けに寝ようとした。ベッドがかすかに軋み音を立てる。

「.....今晚が最後なの？」

目を覚ましたのか、もともと眠っていなかったのか、ユールベルが突然声を掛けてきた。彼女は体を丸め、頭を下げていたため、その表情を窺うことはできなかった。

「ああ、そうだ」

ラウルは頭の後ろで手を組み、その身をベッドに投げ出した。反動で、ベッドは大きく数回弾んだ。

「私、どうしても寮に入らなければいけないの？」

「もう決めたことだ」

ユールベルはあきらめたのか、それ以上しつこくは言わなかった。

「一度も、笑わなかったわね」

「互いにな」

「……でも、ありがとう」

ぽつりと静寂の水面に言葉を落とす。ラウルは何も答えなかった。

「最後にひとつだけ、お願いをしてもいい？」

「おまえの我が侷はもう何も聞かない」

ラウルは天井を見つめたまま、静かにはねつけた。

「そう……」

それきりユールベルは口をつぐんだ。

アンジェリカが目覚めてから7日が経った。一週間、弱った身体をリハビリし、今日が初登校である。まだ完全には回復していないが、彼女自身が強く希望して、なんとかラウルの許可をもらったのだ。右腕はまだギプスで固められ、白い布で首から吊り下げられている。

「頑張って遅れを取り戻さないとね！」

彼女は上機嫌でギプスを振り回した。

「ほんっとーに無理すんなよな」

「わかってるわ」

無邪気な笑顔を見せるアンジェリカに、ジークは疑いの眼差しを向けた。リックは、そんなジークを見て、こっそり小さく笑っていた。

「あれ？ ユールベル、よね」

アンジェリカはふいに目を止めた。自分たちの教室とは逆方向へ行く、金髪の後ろ姿。頭には白い包帯が巻かれている。

「おいっ！！」

ジークが止めるより早く、アンジェリカは駆け出していた。病み上がりとは思えないほど素早い。残されたふたりも、慌ててあとを追った。

「ずいぶん感じが変わったわね」

後ろから声を掛けられたユールベルは、ゆっくりと振り返った。いつもの素っ気ない白いワンピースではなく、シャツにベスト、プリーツのミニスカートという出で立ちだった。

「先輩……寮の先輩が、これにしなさいって言ったから……」

視線が服に集中しているのを察し、彼女はいいわけめいたことを口にした。

「私もこっちの方がいいと思うわ」

にっこり笑うと、アンジェリカは左手を差し出した。ユールベルはその手と顔を交互に見つめた。表情には出さなかったが、明らかにとまどっているのがわかった。

「安心して。今さら仲良くしましょうっていうんじゃないのよ。おあいこってことで、どうかしら」

それでも彼女はまだ呆然としたままで、差し出された手に応えようとはしない。アンジェリカは手を下ろした。

「本当の話、聞いたわ。あなたのことも」

その言葉に、ユールベルの顔が一瞬こわばった。

「自分のせいではなくてはっとした？ それとも同情？」

目を伏せ、自嘲ぎみに吐き捨てる。

「そうね。両方とも、かしら」

アンジェリカは淡々と答えた。ユールベルは、はっとして視線を上げた。まさか認めるとは思わなかった。

「あなたの目を傷つけたのは私だけ」

彼女は真剣な表情で、そう付け加えた。

「それと……。思い出したのよ、少しだけ。昔のことをね」

ユールベルの鼓動はドクンと強く打った。

「あなたと私、楽しそうに笑っていた。あなたはどうだったかわからないけれど、私にとってはたったひとりの友達だった」

まっすぐユールベルを見つめてそう言うと、ふっと寂しそうに笑った。ユールベルは口を開きかけてうつむいた。

「それじゃ」

アンジェリカはにっこり笑うと踵を返し、ジーク、リックとともに去っていった。

「いつか、わだかまりが融けるといいね」

リックは優しく声を掛けた。しかし、アンジェリカはあまり聞いていないようだった。何か難しい顔で考えごとをしている。

「あっ、思い出した」

「何だ？」

ジークは隣のアンジェリカに振り向いた。

「ユールベルと対決したときの約束。ほら、ジークの言うことをひとつ、何でも聞かって言ったでしょう？」

アンジェリカは、ずっと何か忘れていた気がして引っかかっていた。ようやく思い出せて、すっきりした顔をしている。

しかし、ジークはとたんに困り顔になった。

「あ……あれはいいんだよ、もう……」

歯切れ悪く口ごもった。

「よくないわよ。約束は守らなきゃ」

「じゃなくて。もう終わったんだよ」

面倒くさそうにうつむき、無造作に頭をかいた。

「終わった？ どういうこと？」

そう言って下から覗き込んでくるアンジェリカに、ジークは耳を赤らめた。

「うるせえな！ 覚えてねえオマエが悪いんだよ！」

顔まで赤くなっていくのを感じ、彼は慌てて話を切り上げようとした。

アンジェリカはわけがわからず、リックに助けを求めて振り向いた。しかし、彼もさっぱりわからない。首をかしげ、肩をすくめて見せた。

「いいわ。よくわからないけれど、そういうことにしてあげる。今日は特別ね」

アンジェリカは、にっこりジークに笑いかけた。彼はほっとして息をついた。

「さ、早く教室に行かなきゃ」

「おいっ！ だから病み上がりで走るなって！」

ジークは駆け出した彼女を追いかけながら声を掛けた。

「いいの。これもリハビリよ」

アンジェリカは短いスカートをひらめかせながら、くるりと振り返った。屈託のない満面の笑み。ジークの心に温かい光が広がっていった。

46. 月の女神

「落ち着いてください」

何度かその言葉を繰り返し、サイファは受話器の向こうの相手を懸命になだめていた。冷静な声だが、やや疲れが滲んでいる。

レイチェルは少し離れたソファに浅く腰掛け、心配そうに彼の後ろ姿を見つめていた。

「とにかくそちらへ向かいます……はい、すぐに」

静かにそう言うと、軽くため息をつきながら受話器を戻した。仕事が長引き、ようやく帰って来られたと思ったら、息つく間もなくこの電話である。彼のため息も当然のことだった。

「何があったの？」

レイチェルは早足で彼に歩み寄った。そっと腕に手を置き、端正な横顔をまっすぐ見上げる。

サイファは難しい表情で考えを巡らせていた。わずかにうつむくと、顎に手をあてる。

「状況がつかめないんだ。アルティナさんの言うことも、興奮していて要領を得ない」

レイチェルは首を傾げ、顔を曇らせた。

そのことに気がつく、サイファはにっこりと笑顔に向けた。彼女の細く白い手を取り、安心させるように軽く握る。

「とにかく行ってくるよ」

「私も行きましょうか？」

レイチェルは、まだ不安顔で、彼を見つめていた。

「いや、君はここにいてくれ。こんな夜中にアンジェリカをひとり家に残すわけにもいかないだろう」

サイファは彼女の頬に手を置くと、再び笑顔を見せた。それに、どれほどの効果があるかはわからなかった。

「まさか、本当だったとは……」

サイファは目の前の光景に唖然としながら、ようやくその一言をつぶやいた。

「なによ、私の言うことを信じてなかったわけ?!」

感情的な甲高い声が、彼を責める。声の主はアルティナ。彼をこの広間に呼びつけた張本人だ。

「いや、しかし……」

サイファは彼女の怒りを受け流すと、前を見つめながら言葉を詰まらせた。彼の視線の先にいたのはラウルだった。そして、その腕の中には、まだ生後まもないと思われる赤子が眠っていた。

「本当に、おまえが育てるつもりなのか」

サイファは動揺を心の中に押し隠し、静かに問いかけた。

「問題はないだろう」

ラウルは突っぱねるように短く言った。うんざりしているように見える。すでにアルティナに

何度も訊かれたのだろう。

「大アリよ！」

アルティナは頭に血を上らせると、大声で怒鳴りつけた。長い銀髪を艶やかに煌かせながら、今にも掴みかからんばかりの勢いで足を踏み出す。

サイファは興奮する彼女の前に右手を広げ、無言でその動きを制した。ラウルを庇ったわけではない。彼が締め上げられようが殴られようが知ったことではないが、それより今は状況を把握するのが先だと思ったのだ。

彼女は苦々しい顔をしながらも、おとなしく従った。

「確認したいのだが、本当に捨てられていたのか？」

「こんなものとともに籠に入れられていたら、捨てられているとしか考えられないだろう」

ラウルは赤子を抱えたまま、手にしていたものをサイファに示した。

それは、二つ折にされた小さな紙切れだった。薄いクリーム色で、安っぽいメモ用紙のように見える。

サイファはラウルの手からそれを抜き取り、慎重に広げた。その中央には、短く一文だけ走り書きがしてあった。

「この子をよろしくお願いします……か。誰か特定の人物に宛てた手紙とも考えられるな」

「まさか、あなたの隠し子ってわけじゃないでしょうね」

アルティナは腕を組み、思いきり疑いのまなざしでラウルを睨み上げた。しかし、彼はまったく動じなかった。いつもどおりの冷たい瞳で睨み返す。

「この子が置かれていたのは養護施設の前だ」

「じゃあ養護施設に頼んだってことじゃない！ なに勝手に連れてきてるのよ！」

アルティナは大きな声を張り上げた。

「養護施設の前であろうと公道だ。親から育てることを放棄され、公道に放置されたこの子は誰のものでもない。拾う拾わないは私の自由だ」

屁理屈をこねるラウルに苛つきながら、アルティナは反論をぶつける。

「あなたの気まぐれで、その子の将来を台なしにするわけにはいかないわ！ あなたにまともな子育てができるわけじゃない！」

彼女の感情はますます昂っていった。

一方のラウルはいたって冷静だった。

「私は医者だ」

あまりに単純で素っ気ない返答に、アルティナの怒りは沸点に達した。

「そういう問題じゃない！！ あんたがまともに愛情を注いであげられるとは思えないって言うんのよ！！」

感情を爆発させたあと、顔をしかめ、深くため息をついた。疲れたように前髪を掻きあげる。長い銀髪がさらりと頬を撫でた。そして、落ち着きを取り戻すと、今度は諭すように静かに語りかけた。

「悪いことはいわない。その子のためを思うなら養護施設に預けた方がいいわ」

しかし、ラウルはそれを聞き入れようとはしなかった。

「養護施設なら幸せに育つという保証がどこにある」

「あなたが育てたら不幸せになることなら私が保証してあげる」

アルティナは間髪入れずに言い返した。腕を組み、あごを斜めに上げ、挑戦的な目で彼を睨みつける。

ラウルも一歩も引かず、鋭い視線を返した。

「ちょっと待てラウル」

激しく火花を散らすふたりの間に、サイファが割って入った。

「私との約束はどうするつもりなんだ。アンジェリカが卒業するまで担任を引き受けてくれると言っただろう」

背筋を伸ばしてラウルと向かい合い、はっきりとした口調で問いつめる。

「まさか、その子を背負って教壇に立つつもりか？」

「ぷっ……あはははは！」

アルティナは突然吹き出すと、腰に手をあて、上体を折り曲げながら豪快に笑った。

サイファはその声に驚いて振り向いた。

「アルティナさん、私は真面目に……」

「ごめんごめん。でも想像したらおかしくて」

彼女は軽い調子で謝ったが、いまだに笑ったままだった。少し息苦しそうにしながら、目尻を拭う。

しかし、彼女につられ、サイファもその様子を思い浮かべてしまった。耐えきれず、鼻先で小さく吹き出す。

そんなふたりを、ラウルはムツとしながら冷たく見下ろした。

「心配するな。昼間は人を雇うつもりだ」

「ベビーシッターをか？」

サイファは真面目な表情に戻り、ラウルと目を合わせた。

「バカね。自分ひとりで世話できないんだったらやめなさいよ」

アルティナは呆れたように、そう切り返した。そして、真剣なまなざしをラウルに向けると、さらに言葉を続ける。

「人を雇うくらいなら、養護施設の方がよっぽどましだわ」

ラウルもサイファも何も返さなかった。その場に静かな緊張が広がっていった。

「ふ……ぎゃああ！」

突然の、悲鳴にも似た泣き声。ラウルの腕の中からその静寂は切り裂かれた。金縛りから解放されたかのように、アルティナは大きく数回まばたきをした。そして、ため息まじりにふっと笑うと、表情を和らげた。

「一時休戦ね」

「ふふ、かわいー。やっぱりいいわね、女の子」

アルティナは赤子を抱きかかえ、哺乳瓶でミルクを飲ませていた。いつもの気の強そうな表情からは想像がつかないほど、緊張感なく顔を緩ませている。彼女にも母性本能は備わっているようだ。

サイファとラウルは、その隣で木製のベビーベッドを組み立てていた。以前、アルティナの息子が使っていたものである。彼女に頼まれて倉庫から引っ張り出してきたのだ。

「ねえ、ラウル。私、いいこと思いついちゃった」

片膝を立て、木枠をはめ込む後ろ姿に向かって、アルティナは、いたずらっぽく笑いかけた。しかし、ラウルは振り返ることも手を止めることもなく作業を続けた。

アルティナは、構わず一方的に語りかける。

「あなたがアカデミーに行ってるあいだ、私がこの子を預かることにするわ」

これにはさすがのラウルも驚いた。息を吞んで彼女に振り向く。

「おまえ、何を……」

「アルティナさん、何を言ってるんですか」

ラウルの言葉を遮ったのはサイファだった。

「クレフザードに無断で、またそんな勝手なことを……」

「平気、平気。何も養子にしようってんじゃないのよ」

彼女はあっけらかんと笑うと、軽く受け流した。腕に抱いた赤ん坊の顔を覗き込み、小さな指を優しく包み込む。

「アルスにも友達が欲しいと思っていたところだし、ちょうどいいわ」

赤ん坊に向かって同意を求めるように「ねっ」と言うと、小さく首を傾けた。その表情は、優しい母親のそれだった。

ラウルは腕を組んで眉をひそめると、冷たく彼女を見下ろした。

「断る。願い下げだ。生意気なおまえの息子のおもちゃにされるのはごめんだ」

アルティナは顔を上げ、ニヤリと口の端を上げた。

「さっそく過保護な親を気取ってるってわけ？」

ラウルは何も言い返さず、じっと睨みつけた。

しかし、アルティナは急に真剣な顔になると、まっすぐ彼の瞳を見返した。

「冷静に考えてみて。悪い話じゃないと思うけど？ ここなら何ひとつ不自由させない」

自信を持ってキッパリと言い切る。

ラウルはそれでも微動だにせず、ただじっと彼女を見つめるだけだった。

「私が気に入らないのなら、レイチェルに預けると思えばいいわ。実際はふたりで面倒を見るようなものだし」

アルティナは挑発的な口調で、さらに畳み掛ける。

「雇われベビーシッターより、私たちの方が愛情をもって育てられる。自信はあるわよ」

ラウルは腕を組んだまま考え込んでいた。いちど目蓋を閉じ、再びゆっくりと開く。そして、静かに口を開いた。

「……わかった」

「決まりね！」

アルティナはぱっと顔を輝かせた。しかし、すぐに申しわけなさそうにはにかむと、サイファに振り向いた。

「サイファ、レイチェルに事情を話しておいて。それと、勝手に決めてごめんねって」

そう言うと、小さく肩をすくめて見せた。

サイファは大きくため息をついた。

「レイチェルはともかく、クレフザードはどうするんですか」

「あっちは大丈夫。拗ねたらテキトーになだめておくから」

アルティナは余裕たっぷりの笑顔で、右手をひらひら上下にはためかせた。

「もう少し大切にしてくださいよ。あなたの夫でしょう」

サイファは半ば呆れたように、再びため息をついた。

アルティナは聞こえなかったのか聞こえないふりなのか、返事をすることなく歩き出した。そして、ラウルに赤ん坊をそっと手渡すと、さらにその先へ向かって足を進めた。

「ベッドは出来たわね」

組み立てられたベビーベッドを覗き込み、強度を確かめるように力を込めて揺らした。

「うん、まだ十分使えるわね」

そうつぶやくと、にっこり笑ってラウルに振り向いた。

「ラウル、これあげるわ。あとで届けるから」

静まり返った薄暗い廊下に、ふたつの足音が大きく響く。並んで歩くふたりと、腕の中の小さなひとり。白い月の光が、無彩色にその姿を照らし、ぼんやり浮かび上がらせる。

「アルティナが何を考えているのか、まるでわからない」

ラウルは淡々とつぶやいた。

サイファはラウルの腕の中の赤ん坊に目を向けた。表情を緩めながら、同時に疲れたように小さく息を吐いた。

「私がおまえの方がわからないよ。何をそんなに執着してるんだ」

ラウルはそれに対し何も答えなかった。前を向いたまま、無表情で歩き続ける。

サイファはうつむき、考え込んだ様子で黙り込んだ。やがて、再び顔を上げると、まっすぐ遠くを見つめた。

「あのときユールベルを救えなかったことに対する贖罪か？ それとも今さら寂しくなって家族がほしくなったとでも？」

「理由などない」

はっきりそう言い切る彼の横顔を、サイファはちらりと盗み見た。

「深く追及はしない。だが、一時の気まぐれだった、で済むことではないんだ。もう一度、慎重に考えてみる」

「慎重に考えての結論だ」

ラウルは感情なく言い放った。

そこで、ちょうど彼の医務室に着いた。ふたりは足を止めた。

「またな」

サイファはラウルと目を合わせ、それから赤ん坊に視線を移し、柔らかく笑いかけた。

「レイチェルにまで迷惑をかけることになった。すまない」

ラウルはサイファを見つめ、わずかに目を細めると、静かに詫びの言葉を口にした。ラウルにしてはめずらしいことだった。

サイファは小さく笑ってうつむいた。

「本当にな」

そう言うと、彼から顔をそむけ、窓の外を見上げた。ほのかに青く光る月が浮かんでいた。それほどの光量があるわけでもないが、なぜか眩しく感じられた。思わず目を細める。

「レイチェルは、迷惑とは思わないだろうけどね」

ふいに言い足された言葉。

ラウルはわずかに目を伏せた。何かを言おうと口を開きかける。

だが、その瞬間、サイファがにっこり微笑みかけて尋ねた。

「その子の名前は考えたのか？」

ラウルは少し間を置いて「ああ」と言うと、赤ん坊の寝顔を見つめ、それから窓の外を見上げた。

「ルナ、にしようと思っている。月の女神の名だ」

「ルナか。いい名だ」

サイファは再びにっこりと笑って見せた。

「なんだって?!」

ジークは廊下の真ん中で目を大きく見開き、顎が外れんばかりの勢いで叫んだ。近くを通りかかった数人が、彼の声に驚いて振り向いた。

ジークと同様に、隣のリックも目を見開いていた。彼は何も言葉を発せず、ただぼかんとしていた。

「やっぱりびっくりするわよね。私もいまだに信じられないもの」

アンジェリカは、ふたりの反応を冷静に受け止めた。

「ど……どうということ、だ？」

ジークは混乱と焦りで、言葉を詰まらせながら聞き返した。

「だから、ラウルに娘ができたって。捨てられてた子らしいんだけど」

「あ……養子ってこと？」

リックが拍子抜けしたように尋ねた。

「そうよ。えっ……どうしたの？」

アンジェリカは不思議そうにきょとんとしてジークを見た。彼は壁に手をつき、崩れそうな体をなんとか支えていた。

「まぎらわしい言い方すんなよな！」

顔を少し赤らめ、八つ当たりぎみにそう言うと、体勢を立て直して壁にもたれかかった。うつむきながら腕を組み、眉間にしわを寄せる。

「いや、でも、それにしても、信じられねえな。あいつが子育てしてるところなんて、想像もつかねえ……」

彼は難しい顔で考え込んだ。次第に上体を折り曲げ、小刻みに体を震わせ始める。そして、一気に体を起こして天井を仰ぐと、額を手のひらで押さえた。笑いながら苦い顔をしている。

「なにやってるの、ジーク」

アンジェリカは怪訝な顔で、その百面相の様子を眺めていた。

「想像しちまった」

彼はそのままの姿勢で、噛みしめるようにつぶやいた。

「なんとなく、わからなくもないよ」

リックも同調して苦笑いした。

「ラウルってまったく生活感がないもんね。ごはんなんて絶対に作ってなさそうだし」

「そんなことないみたいよ」

アンジェリカはリックに振り向いた。

「すごく上手だってお母さんが言ってたわ」

「本当に？」

「嘘だろ？」

ふたりは逆の言葉で同時に聞き返した。

「うん、私は知らないんだけどね」

彼女もあまり実感はないという口ぶりだったが、疑っているわけではなさそうだった。

ジークは苦々しげに奥歯を軋ませた。

「あのやろう、料理まで出来るのか。あつたま来るな。とことん嫌味なやつだぜ」

それから急に顔を上げ、ぱっと表情を明るくすると、弾んだ声をあげた。

「よし！ 医務室までからかいに行くか！」

「え？」

アンジェリカの口からついて出た小さな声に、とまどいの色が滲んでいたことを、リックは聞き逃さなかった。

「どうしたの？」

「うん……なんかちょっと複雑っていうか、心の準備が出来てないっていうか……」

微妙に顔を曇らせながら言葉を詰まらせていたが、やがてそれを笑顔で掻き消した。

「でも行くわ。赤ちゃん、見てみたいし」

ジークとリックは、お互い疑問を含んだ顔で、視線を送りあった。ふたりとも、彼女のとまどいが何なのか気になっているようだ。

それに気づいたアンジェリカは、うろたえてほんのり顔を上気させた。

「行きましよう！」

彼女は早口でそう言うと、ふたりの腕を軽く引っ張って急かした。

ガラガラガラ――。

「おい、ラウル。娘を見に来たぜ！」

扉を開けると同時に、ジークは楽しげに元気よく呼びかけた。からかってやろうという意気込みがありありとわかる。その後ろから、リックとアンジェリカも中を覗き込む。

だが、医務室にいたのはラウルではなかった。

「あら？ ジーク君じゃない」

「あ、どうも、こんにちは」

「赤ちゃんを見にいらしたのね」

白いパイプベッドの上に、アルティナとレイチェルが並んで座っていた。アルティナはスタンドカラーで膝下まである細身の青い上衣に幅広の白いパンツ、レイチェルはいつもと同じでスカート部分がふっくらと広がったドレスを身につけていた。レイチェルの腕には小さな赤ん坊が抱かれている。ふたりは笑顔でジークたちを迎え入れた。

まわりの騒がしさに、赤ん坊が目を覚ましたようだった。小さな口を大きく開けて、あくびをしているような仕種が見てとれた。

ジークはめずらしいものを見るかのように、目を大きく見開き、口を半開きにし、呆けた状態で眺めている。アンジェリカはその隣で、顔をほころばせていた。

しかし、リックだけは、いまだに扉付近で棒立ちになり、顔をこわばらせていた。

「どうしたの？ リック」

彼の異変に気づいたアンジェリカが声を掛けた。ジークもつられて振り返った。

「そうか、おまえは初めてだったな。アルティナさんだ」

リックに彼女を示し紹介する。紹介されたアルティナは、にこにこしながら、顔の横で小さく手をひらひらさせた。

「レイチェルさんと一緒に王宮で働いてるんですね？」

「ええ、そうよ」

ジークが確認すると、彼女は笑いながら返事をした。レイチェルも隣でくすくす笑っていた。

「王妃様……ですよね」

リックはごくりと息を吞んで、ようやく口を開いた。

「はあ？ なに言ってんだ、おまえ」

「ジークこそ何を言っているの？ 王妃アルティナ＝ランカスターよ。知らなかったの？」

アンジェリカは訝しげにそう言った。

今度はジークが固まった。

「う……うそ……だ、って、こないだは……」

ぎこちなく、アルティナへと振り向く。鳩が豆鉄砲を食ったような顔。彼女はおなかを抱えて笑い出した。

「ごめんね、隠してて。王妃様扱いされるのがあんまり好きじゃないから、ついね。でもレイチ

エルと一緒に働いてるっていうのは嘘じゃないのよ」

そういえば、レイチェルは王妃の付き人をやっていると聞いたことがある。ジークは今になってようやく思い出した。

アルティナはひとしきり笑ったあと、背筋を伸ばして立ち上がり、右手を差し出した。

「あらためてよろしくね。アルティナ＝ランカスターよ」

彼女はジーク、リックと力強く握手を交わした。

「全然、気がつかなかった……」

ぼそりとつぶやいたジークに、リックは呆れ顔で冷たい視線を送った。

「自分の国の王妃様だよ？ 顔も知らないなんて信じられないよ」

「うるせえ！ 俺はラジオ派なんだ！」

ジークは顔を赤らめながら、必死のいいわけをした。

「でも王妃様ともあろう方が、どうしてこんなところへ？」

リックは、再び腰を下ろしたアルティナに視線を向けた。

「こんなところで悪かったな。一応ここも王宮の敷地内だ」

馴染みのある冷たい声が、背後から降りかかる。

リックはどきりとして振り返った。いつのまにか奥からラウルが出てきていた。まっすぐ自分の机に向かい、書類を投げ置くと、椅子にどっかりと座った。

「ラウル、赤ちゃん、触ってもいい？」

「ああ」

アンジェリカは体を屈め、胸を高鳴らせながら覗き込んだ。赤ん坊はぱっちり目を開き、レイチェルの腕の中で軽く握った手をパタパタ動かした。

「わあ……」

感嘆の声をあげながら、アンジェリカはそっと手を近づける。

「すごーい！ 柔らかい！ この手ちっちゃい……あ、ほら、私の指を握ってるわ！」

彼女はいつになく興奮ぎみに実況をした。

レイチェルはそんな娘を愛おしげに目を細めて見つめていた。

「ルナっていうのよ」

「かわいい名前ね」

アンジェリカは屈託のない笑顔を見せた。隣のリックも、赤ん坊の頬をつつきながら、和やかに笑った。

「うん、ホントかわいいね。ジークもおいでよ」

数歩下がって眺めている彼を、手招きで呼んだ。しかし、彼は困ったような顔で立ち尽くしたままだった。

「いや、俺はいい……」

消え入りそうな弱々しい声。リックはきょとんとして見上げた。

「どうして？」

ジークはリックの視線から逃れるように、顔をそむけた。

「……怖えんだよ」

「はあ??」

思いもしなかったジークの返答に、リックは思いきり素頓狂な声をあげた。

ジークは耳を真っ赤にしてうつむき、口をとがらせた。

「どう扱ったらいいか、わかんねえんだよ。なんか、触ったら壊れそうじゃねえか」

ぼそぼそとはっきりしない声で言う。

リックは深くため息をつくと、背中を丸め、肩を大きく落としてみせた。

「なんか、僕、情けなくて涙が出そうだよ」

「撫でるくらいじゃ、壊れたりしないわよ」

ふたりのやりとりを聞いていたアルティナが、笑いながら口を挟んできた。

「いらっしゃい。これは命令よ」

いたずらっぽくウインクをしてニッと笑うと、人さし指でくいとジークを呼びつけた。

王妃に命令と言われては、拒絶するわけにもいかない。ジークはしぶしぶ近づき、おそるおそる手を伸ばした。まわりの興味津々な視線を受け、よけいに緊張が高まってきた。ごくりとのどを鳴らす。そして、赤ん坊のほほにそっと触れた。

その瞬間、ジークははっとして目を見開いた。口をすぼめ、細く息をもらす。

「どう？抱っこしてみる？」

「やめろ。そんなへっぴり腰で出来るわけないだろう。落とされでもしたら取り返しがつかない」

アルティナの提案を、ラウルは間髪入れずに却下した。

ジークはさすがに何も言い返せなかった。ラウルの言うとおりで。言い返す余地もない。それに、そんな恐ろしいことをせずに済んで、ほっとしている部分も大きかった。

ガラガラガラ——。

再び医務室の扉が勢いよく開いた。その場にいた全員が、いっせいに振り向いた。

「本当だったのね……」

ユールベルは赤ん坊に目を向けると、落胆したようにつぶやいた。息をきらせながら、思いつめた表情で、まっすぐラウルへと足を進める。他の人の存在は、目にも入っていないらしい。

「ひどいわ！私のことは追い出したのに、どうして?!」

緩やかにウェーブを描いた長い金髪を揺らし、激しく詰め寄る。しかし、ラウルは椅子の背もたれに身を預けたまま、少しも動かなかった。ただ、彼女を冷たく見つめるだけである。

「おまえにとやかく言われる筋合いはない」

まったく感情を感じさせない口調で、そう言い捨てた。

ユールベルの、包帯で覆われていない方の瞳が、大きく光を反射する。

「……私より、その子を選んだってこと？」

ラウルは何も答えなかった。

ユールベルは、肩を、腕を、唇を、瞳を震わせた。そして、細い腕を大きく振りかぶると、

力いっぱい平手打ちを喰らわせた。ラウルの顔が横向きになり、赤味を帯びたほほに、焦茶の髪がさらさらと掛かった。

ユールベルは急に怯えたように顔を歪めると、二、三步、じりじりと後ずさった。そして、潤んだ目でキッとひと睨みし、背を向け一気に走り去っていった。

ジークたちは、突然巻き起こった嵐を、ただ呆然と見ていた。

「あーあ、泣かしちゃった。追いかけてなくていいの？ 可愛らしいコイビト」

アルティナは含み笑いをした。

「からかうな」

ラウルは椅子を回し、机に向かうと、書類整理を始めた。

「あ、まずい！」

腕時計を見たたん、アルティナが大声をあげた。

「もう会議が始まっちゃってる！」

パイプベッドから跳び降り、銀の髪を振り乱しながら扉へと駆け出す。

「じゃ、私は行くから。あとはよろしく！」

戸口で振り返り、早口でまくし立てながら敬礼のポーズをとると、返事も待たず慌ただしく走って出ていった。

「王妃様が会議……ですか？」

リックは軽く驚きながら、レイチェルに尋ねた。

「自主的に行っているのよ。煙たがられているみたいだけど」

彼女は寂しげに笑い、肩をすくめる代わりに首を傾けてみせた。

「それでもアルティナさんはあきらめないの。腐った王宮を叩き直すんだって息巻いてるわ。とってもまっすぐで素敵な人よ」

「王宮、腐ってるんですか？」

ジークの率直な疑問に、レイチェルは何も答えず、ただ笑顔を返すだけだった。その笑顔に物憂げなものを感じ、それ以上、追求することは出来なかった。

「おまえたちももう帰れ。そんなに暇なら課題を追加するぞ」

ラウルは椅子から立ち上がり、腕を組むと、威嚇するように三人を見下ろした。

「言われなくても帰るぜ！」

ジークは反発心をあらわにすると、踵を返し、扉に向かっていった。肩をいからせ、わざとドタドタと足音をさせる。リックとアンジェリカも苦笑いしながらそれに続いた。アンジェリカは後ろ手で扉を閉めかけて、ちらりと顔半分振り返った。

「また見に来てもいい？」

「たまにならな」

ラウルはぶっきらぼうに答えた。

彼女はほっとしたように、にっこりとした。

「私もそろそろ帰るわ」

レイチェルはパイプベッドから立ち上がると、ラウルに赤ん坊を手渡した。

「月の女神の名前なのね」

その小さな女神ににっこり笑いかけると、柔らかいほっぺを指でつついた。小さな手が空を舞う。喜んでいいのかどうかはわからないが、反応があったことが嬉しかった。

彼女はふいに少し真面目な顔になった。じっとラウルを見上げて尋ねる。

「ふるさとが恋しくなったの？」

透きとおった蒼い大きな瞳で、彼の濃色の瞳をつかまえる。

「いや……」

ラウルは彼女を見つめたまま、うわごとのようにつぶやいた。体を動かすことも、視線をそらすこともできない。息が止まる。意識のすべてが蒼の瞳に捕えられていた。それは、あのときと同じ感覚——。

レイチェルはやわらかく微笑んだ。

そのことで、彼の見えない拘束は解けた。気づかれないように小さく息をつく。

「お茶でも飲んでいかないか」

ふと、そんな言葉が自然と口をついて出た。昔のように——と続けようとしたが、それは声にせず呑み込んだ。理性は消えていなかった。

「ラウルが誘ってくれるなんてめずらしい」

彼女は嬉しそうに無邪気な笑顔を見せる。こういう表情は、子供のときとほとんど変わっていない。

「……でも、やっぱり帰るわ。ありがとう」

そう言って、もう一度、穏やかににっこり笑うと、背を向けて歩き出した。

「レイチェル」

ラウルは彼女の小さな背中に呼びかけた。

「おまえにまで迷惑をかけることになってしまって、すまない」

レイチェルは扉に手を掛け、静かに振り返る。

「もし、ほんの少しでもあなたを救う手助けになるのなら、私は嬉しいわ」

そして、包み込むように、優しく微笑んだ。

「その子がラウルの女神になってくれるといいわね」

その言葉を残し、レイチェルはそっと扉を閉めた。すりガラスの向こうの影が、揺れて流れた。

。ラウルの瞳には、まだ彼女の残像が焼きついていました。

47. 彷徨う心

「どうせ治らないんでしょう」

ユールベルは床に視線を落とし、投げやりにそう言った。彼女はラウルに呼ばれ、医務室に来ていた。左目まわりの治療のためである。

「目は見えるようにはならないが、目のまわりの傷跡は、きちんと治療を続ければ、多少ましになるだろう」

ラウルは真新しい白い包帯を、彼女の左目から頭にぐるぐると巻きつけ、後頭部で手早く結んだ。そして、長く柔らかい金髪に、手ぐしを通して整えた。

「完全に治らないのなら、どっちでも同じことよ」

悲観的な発言をやめない彼女に、ラウルはもう何も言わなかった。椅子を回転させ、机に向かうとカルテを書き始めた。

「……あのひとたちは、どうしているの」

ユールベルは下を向き、ぽつりとつぶやいた。

「気になるのか」

ラウルは机に向かったまま、手を止めずに尋ねた。

「忘れたいから訊いているのよ。答えてくれないのなら別にいいわ」

ムツとしたように彼を睨み、それでも努めて冷静に答えた。

「ユリアたちは家に戻った」

ラウルは静かに口を開いた。ユールベルは目を伏せ、自嘲ぎみに薄笑いを浮かべた。

「仲良く三人で暮らしているってわけね。私の存在なんて、初めからなかったかのように……。想像がつくわ」

ラウルはペンを置くと、ギィと軋み音を立てて椅子を回し、再びユールベルに体を向けた。

「バルタスは、おまえには申しわけないことをしたと言っていた」

「しらじらしい言葉ね」

うつむいたまま小さくつぶやく。

「昔も今も、私ではなくユリアを選んだくせに」

顔にかかるウェーブを描いた髪、華奢な細い肩。ラウルはうなだれる彼女をじっと見下ろした。

「でも勘違いしないで」

ふいに早口でそう言うと、ユールベルは顔を上げ、ラウルと目を合わせた。

「ひとりになってほっとしているのよ。殴られることも、すべてを否定されることも、恐怖に怯えることもないもの」

無表情で淡々と言葉をつなぐ。

「でも……私がいない人間であることに変わりはない。誰も私のことなんて選ばないのよ」

揺れる蒼い瞳、濡れた小さな唇を、まっすぐラウルに向ける。助けを求めるような、拒絶するような、矛盾した表情。彼はそれを正面から受け止めた。

「今はそれでも、今後はわからないだろう」

「下手な慰めだわ」

ユールベルはわずかに目を伏せた。

「事実を言っているだけだ」

ラウルは感情なく言った。

「あなたが私を選ばないというのも事実ね」

「そうだな」

それきり言葉が途切れ、沈黙が続いた。互いに向かい合って座っているが、顔を合わせてはいない。ユールベルはうつむき、ラウルはそれをじっと見下ろしている。ふたりはそのまま動こうとしない。長い静寂。木々のざわめきが遙か遠くに聞こえる。

ユールベルは膝の上でスカートの裾をきつく握りしめた。こぶしが小刻みに震える。

「……もっ、と……優しくしてくれてもいいじゃない！」

唐突に悲痛な叫び声をあげると、勢いよく立ち上がった。丸椅子がガシャンと大きな音を立てて倒れた。

それでもラウルは眉ひとつ動かさなかった。

「偽りの優しさに何の価値もない」

「偽りでも、何もないよりはましよ！」

ユールベルは泣きそうに眉をひそめながら、再び叫んだ。体の横でこぶしを作り震わせる。ラウルは冷たい目で彼女を見つめた。

「だったら他の奴に頼むんだな」

——パン！

ラウルのほほにユールベルの平手打ちがとんだ。じわりと赤味が差していく。それでも彼の表情は動かなかった。

ユールベルは顔を歪ませ、ラウルの足元に泣き崩れた。

「追い返されると思うぜ」

ジークは顔をしかめた。

「この前から一週間たってるじゃない」

アンジェリカは反論した。

「一週間じゃ“たまに”ってことにはならないと思うけど……」

リックは遠慮がちに口を挟んだ。

三人は並んで歩きながらラウルの医務室に向かっていった。アンジェリカの希望である。またラウルの娘に会いたいと言い出したのだ。あれから一週間しか経っていない。ジークとリックは気が進まなかったが、アンジェリカは言い出したらきかない。ふたりは仕方なく付き合うことにしたのだった。

「いいわよ。私ひとりで行くから。ふたりは帰って」

明らかに乗り気でないふたりを見て、アンジェリカはふてくされた。

「そういうわけにはいかねーんだよ」

ジークはたしなめるように、アンジェリカの頭を軽く小突いた。彼女は一瞬カッとなり彼を睨んだが、同時にその言葉の重みを理解し、押し黙ってしまった。

三人は無言のまま医務室の前まで来た。ジークはためらいなくガラガラと扉を引いた。が、半分のところで手を返し、そのまま扉を閉めてしまった。

「え?! 何?!」

後ろにいたアンジェリカは、何が起こったのかわからず、とまどいの声をあげた。大きな黒い瞳を瞬かせる。そして、彼の背中に手を置き、横顔を不安そうに見上げた。

「先客がいた。帰るぞ」

ジークはぶっきらぼうに、しかし、わずかに声をひそめてそう言った。

「先客ってだれ？」

アンジェリカが尋ねても、ジークは表情を固めたまま答えようとはしない。

「.....なんか変よ、ジーク。何を隠しているの？」

「別に何も隠してねえって！ いいから帰るぞ。あしたまた来ればいいだろ」

扉の前に立ちただかり、むきになって彼女を遠ざけようとする。そしてやはり自分の声の音量を気にしながら話している様子だった。明らかに彼の行動は不自然である。

「うそ！ 絶対なにか隠しているわ！ どうして?! 何なの?!」

アンジェリカは手を伸ばし、強引に扉に手を掛けようとした。だが、ジークに手首を掴まれ、阻まれた。彼女はキッときつく睨みつけた。彼はうつむいて下唇を噛んだ。

「アンジェリカ、今日は帰ろうよ。何も今日じゃなきゃダメってわけじゃないんだし」

リックはなんとか彼女をなだめようと、にっこり笑顔を作って、穏やかに説得を始めた。

ガラガラガラ――。

そのとき突然、内側から扉が開いた。

「別に気を遣ってくれなくてもいいのよ」

そこから姿を現したのはユールベルだった。泣きはらした右目、涙の跡、乱れた髪。三人は言葉を発することが出来なかった。

「もっとも、どっちに気を遣ったのかわからないけど」

そう言って、ジークに手首を掴まれたままのアンジェリカに視線を送った。彼女の鼓動は大きくドクンと打った。

「出る」

ユールベルの後ろに大きな影が現れた。ラウルである。彼は彼女の背中を押して外に出すと、彼自身も医務室から出た。ユールベルが睨んでいたが、構うことなくポケットから鍵を取り出した。

「何をしに来た」

扉に鍵をかけながら、後ろの三人に問いかける。

「ルナちゃんに会いに来たのよ」

アンジェリカは、ジークの手を振り切り、はっきりした声で答えた。しかし、ラウルは背を向けたまま、振り返ろうとしなかった。

「これから迎えに行くところだ。今日は帰れ」

にべもなく突き放す。そして、王宮の奥へと足を踏み出した。

ユールベルは去りゆく彼の袖を、すがるようにそっと掴んだ。しかし彼は冷淡に振り払うと、大きな足どりで遠ざかっていった。ユールベルはその後ろ姿を、目を細めながら見つめていた。

「もしかして、おまえ……」

ジークは彼女の横顔を見ながら、怪訝な表情で切り出した。

「ラウルのことが好きなのか？」

「冗談じゃないわ。どうしてあんな冷たい人を」

ユールベルは即座に否定した。

「私が好きなのは……」

ゆっくりとジークに振り向き、まだ涙の乾ききっていない瞳で彼を捉える。

「あなただけよ」

彼女は静かに言葉を落とした。ジークはその瞬間、体に痺れが走り、動くことも声を出すことも出来なかった。

「まだそんなことを言っているの？ いったい何を企んでいるわけ?!」

アンジェリカはいらついた様子で食ってかかった。

「別にあなたに信じてもらえなくても構わないわ」

ユールベルは目を閉じ軽く受け流した。そして再びジークに目を向ける。

「ジーク、あなたにだけ信じてもらえれば」

まっすぐに向けられた、強くはかなげなまなざし。ジークには、何かを企んでいるようにはとても思えなかった。

「でも……」

ユールベルはうつむき、かぼそい声で続けた。

「あなたが私を選ばないことはわかっているわ」

「なに勝手に決めてんだよ」

ジークはとっさに言い返した。ユールベルはかすかに寂しげに笑ってみせた。

「少しは希望を持っていいってこと？」

そう言う顔を上げ、再び彼を見つめた。しかし、彼は答えることが出来なかった。とまどい、逃げるように、視線をそらせる。

ユールベルは目を伏せると、無表情で足を踏み出した。ジークと腕が触れ合わんばかりの距離ですれ違う。彼女の髪がふわりと揺れ、甘い匂いが彼の鼻をくすぐった。

ジークははっとして振り返り、小さくなる彼女の後ろ姿を目で追った。

「ジーク、まさか本気にしているんじゃないでしょうね」

アンジェリカは眉をひそめてジークを覗き込んだ。しかし、彼は困惑したように目をそらせた。

「俺にはわからねえよ」

ぶっきらぼうに吐き捨てる、目を閉じ深くうつむいた。それからゆっくりと顔を上げると、じっとアンジェリカを見つめた。真剣な、不安そうな、思いつめたような、何か言いたげな表情。

「なに？」

アンジェリカは少し驚いたように、きょとんとして尋ねた。

「いや、何でもねえ」

ジークはぼそりつつぶやくように言うと、ポケットに手を突っ込み歩き始めた。

ラウルは預けたルナを迎えに、アルティナの部屋に来ていた。王妃の部屋だけあって、落ち着きがあり格調高い内装だ。床には繊細な模様が織り込まれた厚みのある絨毯が全面にひかれ、壁や家具には細やかな装飾が施されている。中央には白い丸テーブルが置かれ、そのまわりには三脚の椅子が囲んでいた。どれもかなりの年代物ではあるが、しっかりと手入れは行き届いている。

「待ってて。いまお茶を入れるわ」

レイチェルはにっこり微笑んで、奥へ引っ込んだ。

ラウルはルナを抱きかかえ、白い椅子に座った。ルナはすやすやと無垢な顔で眠っている。彼はその表情をじっと見つめた。

レイチェルがトレイを持って戻ってきた。トレイの上にはティーポットとティーカップ三つが載せられていた。テーブルの中央にそれを置くと、ラウルの隣に腰を下ろした。

「偽りの優しさは必要だと思うか」

ラウルの突然の問いかけに、レイチェルは驚いて目をぱちくりさせた。しかし、すぐに元の穏やかで優しい表情に戻った。

「私は必要ないと思っているわ。そんなの悲しいだけだもの。でも、それでも必要としている人もいるのかもしれないわね」

ラウルの瞳を正面から見据えて答える。そして、さらに見透かすように、濃色の瞳の奥深くを探った。

「……ユールベル？」

その短い問いに、ラウルは何も答えなかった。しかし、それが答えに他ならない。

「あなたは医者としての役目は果たしているわ。じゅうぶんすぎるほどよ」

レイチェルはティーポットを手に取り、カップに注ぎ始めた。

「彼女のことを特別に想っていないのなら、これ以上深入りすべきではないんじゃないかしら。人の心はそう簡単に救えるものではない……あなたがいちばんよく知っているでしょう？」

そう言った彼女の顔に、ふいに影がさした。しかし、すぐにそれを掻き消すように笑顔を作ると、ティーカップのひとつをラウルに差し出した。彼は無言で受け取ると、その中の透きとお

る紅い水に目を落とした。水面に映った自分の姿が細かに波打った。

「……私は感謝している」

静かだが、はっきりした声。レイチェルは目を大きく見開いて彼を見た。

「本当……？ 信じていいの？」

ラウルは言葉の代わりに、まっすぐなまなざしを送った。レイチェルは胸に手を当て、ほっとしたように、にっこりと微笑んだ。

「お待たせー！」

明るい声を張り上げて、アルティナが入ってきた。

「楽しそうね。何の話？」

彼女は空いている椅子に腰かけて脚を組んだ。

「昔話よ」

レイチェルはにっこり笑うと、紅茶の入ったティーカップを差し出した。

「そっか。ラウルってレイチェルの家庭教師だったんだっけ」

アルティナは横目でラウルを見ながら、ティーカップを手にとり口をつけた。ラウルはアルティナを無視し、腕の中のルナに目を向けた。

「サイファの家庭教師をやっていたこともあるのよ、ね」

レイチェルはちょこんと首を傾けて、ラウルに笑いかけた。

「ああ」

ラウルは顔を上げると、無表情のままで返事をした。アルティナは興味津々で身を乗り出した。

「へえー。それは初耳だわ。いったい何人の教え子がいるわけ？」

「ふたりだけだ」

「あとアカデミーの子たちね」

レイチェルはにっこり笑って付け加えた。

「いっそ本格的に転職しちゃえば？」

アルティナは机にひじをついて、いたずらっぽく白い歯を見せた。ラウルは少しムツとしたように、彼女を見下ろした。

「好きで教師をやっているわけではない」

「医者は好きでやっているの？」

「ああ。ここに来てからずっとだ」

ラウルがこんなふうに分かることを語るのはめずらしい。どこか遠くを見やり、昔を思い返しているようにも見える。アルティナはほおづえをついたまま、ぐいと顔を突き出し、上目遣いでじとっと見つめた。

「噂じゃ、300年くらい前からここに居座ってるって聞いたけど？」

「だいたいそんなものだ」

ラウルにためらいはなかった。前を向いたまま、たいしたことではないかのようにさらりと答

える。

アルティナはふいに真顔になった。

「……あなたは、どこから来たの？」

身を起こし、静かに言葉を落とす。しかし、今度は何も答えてはくれなかった。

「つらくはないの？」

彼女は質問を変えた。ラウルはわずかに視線を向けた。

「だって教え子や子供が自分より先に老けていって死んじゃうわけでしょ？」

彼の視線を捉えると、アルティナは急に勢いづいて語りかけた。

「仕方のないことだ」

ラウルはただ感情なくそう言った。レイチェルは寂しそうに微笑んだ。

「あなたより……その子の方がつらいのかもしれないわね」

彼女はラウルの腕の中で眠る赤ん坊に視線を落とした。そして、小さな彼女の小さな手を取り、そっと握手を交わした。

「それ以前に問題はいろいろあるわよ」

アルティナはあごに手をあて、難しい顔をした。そして、下からラウルを覗き込み、人さし指を突きつけた。

「親のことを訊かれたらどうするつもり？」

声を低めて問いかける。しかし、彼はまったく動じることはなかった。

「正直に答えるだけだ」

「おまえは捨てられていたんだ……って？」

「下手に隠しだてするよりはいいだろう」

ラウルは、もぞもぞと動き出したルナを抱え直し、額をなでた。

「まあ、そうだけど……」

アルティナは不安を顔いっぱい広げると、ほおづえをつき口をとがらせた。

「あなた子供相手でも容赦なさそうだから心配なのよね」

「きっと大丈夫よ」

レイチェルはにっこり大きく微笑んだ。

「それでも今は愛されているんだって実感できるくらい、たくさん愛情を注いであげればね」

ガラス窓から差し込んだ斜陽が、人通りの少なくなった廊下を紅く染める。ユールベルはうつむいて、逃げるように早足で歩いていた。金の髪が紅の光に照らされ、歩調に合わせてきらきら煌めく。

カツーン、カツーン――。

正面から響く靴音。ユールベルはその音につられて顔を上げた。廊下の先には、小脇に本を抱えたレオナルドがいた。図書館帰りのようだ。彼の方も彼女の存在に気づいたが、ちらりと目をあわせただけで、特に気を留めるわけでもなく足を進めた。

しかし、ユールベルは彼に向かって一直線に駆けていくと、両手を伸ばして飛びついた。彼の

首に腕をまわし、しがみつくように顔をうずめる。

レオナルドは突然の出来事に対処できず、棒立ちになったままだった。彼女の甘い匂いが嗅覚を刺激する。彼女のあたたかい吐息が首筋にかかる。そして、彼女の胸の柔らかさが、数枚の服を通して感じられる……。頭のとっぺんから背中にかけて、痺れが駆け抜けていった。

「私のことを、好きになって」

体を通して、彼女の震える声が伝わってきた。

「おまえのことは、よく知らない」

レオナルドは精一杯の理性を総動員し、冷静を装った。しかし、ユールベルはさらに腕に力を込めた。

「私もあなたのことはよく知らないわ」

静かに、無感情に、虚ろに、かぼそい声でつぶやく。レオナルドは、彼女の中に、限りなく深い闇を見たような気がした。

48. 幸せの虚像

「ジーク君！」

馴染みのない声が、後ろから彼を呼んだ。透き通った可愛らしい感じの声である。

並んで歩いていた三人はいっせいに振り返った。そこに立っていたいたのは、横だけ長めの黒髪ショートボブ風の少女だった。くりっとした黒い瞳をジークに向け、はつらつとした笑顔を見せている。アカデミーの生徒らしいが、クラスメイトではない。

「誰だ？ なんで俺の名前……」

ジークは眉をひそめ、怪訝なまなざしを送った。アンジェリカが知らない人に声を掛けられることはよくあるが、ジークにはほとんどない。彼がいぶかしがるのも当然だった。

「あははっ。君、けっこうな有名人よ。行動派手だもん」

彼女は軽く笑い飛ばした。行動が派手ということには、ジークにもいろいろと心当たりはあった。入学早々ラウルに楯突いて腕を折ったり、VRMで気を失いかつぎこまれたり、ところ構わずアンジェリカと大声で言い合ったり、何かと目立つことは多かったかもしれない。しかし、まだ不信感は拭えない。

「で、おまえは誰なんだよ」

じとっと睨みながら、ぶっきらぼうに尋ねた。彼女はにっこりと笑った。

「君らの1コ上のターニャ＝レンブラント。ユールベルのルームメイトよ」

三人の顔に緊張が走った。

「何の用……ですか？」

ジークの口調が変わった。ひとつ上の先輩と聞き、丁寧になった。しかしそれだけではない。明らかにこわばっている様子が見受けられた。

「あの子、ここ三日、寮に帰ってきてないのよ」

「えっ？」

アンジェリカは思わず聞き返した。ターニャは彼女に視線を移し、困ったように笑いながら肩をすくめた。

「アカデミーには来てるんだけどね。どこにいるのか、どうしてなのか、きいても何も答えてくれないの」

そこまで言うと、ふいに彼女の顔に影が落ちた。それでもためらいがちに言葉を続ける。

「ただ、あなたのせいじゃないの……って言うだけで」

わずかに目を伏せ、軽く数回まばたきをした。アンジェリカはその姿を無表情でじっと見つめていた。

「ラウルのところじゃねえのか？」

ジークは隣のアンジェリカに向かって、同意を求めるように軽くそう言った。

「それはないんじゃない？ ルナちゃんがいるんだし」

彼女はちらりと視線を返し、淡々と否定した。

「そうか、そうだよな」

ジークは引きつり笑いを浮かべると、焦ったように同意した。

「でも、じゃあ、どこだっていうんだ？ あいつ他に行くあてなんて……」

「それを知りたいわけじゃないのよ」

ターニャが口をはさんだ。三人は驚いて彼女に顔を向けた。

「ただ帰ってきてほしいだけ」

小さく肩をすくめると、さびしそうに笑ってみせた。

「でね、ジーク君。キミにお願いしたいのよ」

急に元気な声になると、腰に手をあて少し前かがみになり、ジークを下から覗き込んだ。ジークは勢いに押され、わずかに身を引いた。

「ユールベルに帰ってきてくれるように頼んでくれないかな。キミの言うことならきくんじゃないかと思うから」

「……なんで俺なんだよ」

ジークはターニャから目をそらし、はっきりしない声でごによごによと口ごもった。彼女に向かってというよりも、ほとんどぼやきである。

しかし、彼女は意味ありげにニッと笑った。

「とぼけたって無駄よ、知ってるんだから。ユールベルがキミのこと好きだって。キミ自身も聞いているはずよね」

「関係ない……ですよ」

ジークは顔をそらせたまま、ますます表情を暗くした。アンジェリカのことを気になったが、振り向くことはできなかった。

「そんな冷たいこと言わないの！」

ターニャは両手でジークの顔をはさみ、強引に自分の方へ向けた。軽く口をとがらせ、わざと怒ったような顔を作ると、まっすぐ彼の目を見つめた。

「いいでしょ、そのくらい。お願いね！」

言い終わると同時にパチンと彼の両頬を叩くと、にっこりと笑いかけた。ジークは突然のことに、ただ驚いて呆然とするだけだった。鼓動の高鳴りはまだ鎮まらない。

「じゃね」

ターニャが踵を返そうとしたところで、ジークはようやく口を開いた。

「どうしてそんなに一生懸命なんですか？」

ターニャは黒い瞳をくりっとさせて、不思議そうに彼を見た。

「だって仲間だもん。それ以上の理由が必要？」

立ち去るターニャの後ろ姿を見送りながら、三人は廊下に立ち尽くしていた。

「ジーク、どうするつもり？」

アンジェリカは冷静な口調で尋ねた。

「どうって言われてもなあ……」

考えあぐねた苦い顔で腕を組み、そっとアンジェリカを盗み見た。彼女は心情の読めない表

情で、廊下の先を見つめていた。

「……どうしたらいいと思う？」

ジークは恐る恐る、だがそれを悟られないように尋ねた。

「私にきかれても……」

アンジェリカは少しとまどったように口ごもった。

「いいんじゃないの？ 言うだけ言ってみれば」

リックは軽い調子でさらりと言った。ジークは不満そうな目つきを彼に流しながら、ため息をついた。

「まあ気が重いけど仕方ないか」

「じゃあ、これから会いに行く？」

「いや、そのうちどこかでばったり会うだろ」

「やる気ないね」

リックは苦笑いした。

「でもどうしてユールベルは家を出ていっちゃったんだろう。何かあったのかな」

「さっきの彼女のせい……かも」

アンジェリカはぼつりぼつりつつぶやいた。

「え？ いい人そうに見えたけど」

「そうじゃなくて」

そう言ったあと、顔を曇らせて一瞬ためらいを見せた。だが、すぐに気を取り直し、冷静に言葉をつなげた。

「ほら、黒い髪に黒い瞳だったでしょう。私と同じで」

感情を表に出さず、何も気にしていないかのように装う。そんな彼女を見て、ジークは胸が締めつけられた。

「バーカ、考えすぎだっ」

つかえを吹き飛ばすように声を張り上げると、アンジェリカの頭をコツンと軽く小突いた。

カツン、カツン――。

ひときわ耳につく靴音につられ、三人は顔を上げ前方を見やった。その靴音の持ち主はレオナルドだった。そして、彼の隣にはユールベルがいた。彼女はさすがのように彼の袖をつかみ、一緒に歩いている。

三人は一様にぼかんとして彼らを見た。向こうもこちらに気づいたらしい。レオナルドは冷たい視線を送りながら、そのまままっすぐ歩き続ける。

「さっそくばったり会っちゃったね」

リックはなんとか平静を取り戻した。

「ていうかよ……」

ジークはレオナルドを睨みつけた。レオナルドはジークの前まで来ると足を止めた。彼もジークを睨みつけている。リックとアンジェリカは不安そうにふたりを見守っていた。

「めずらしい取り合わせだな。テメー、ユールベルのことはよく知らないとか言ってなかったか？」

ジークは腕を組みあごを上げ、ふてぶてしい態度で疑念を突きつけた。レオナルドは小馬鹿にしたように、鼻先でせせら笑った。

「知らなかったさ。三日前まではな」

ジークははっとした。三日という言葉で、ふたつの事柄がつながった。眉をしかめ、信じたくないという顔で、ユールベルに視線を移す。

「……まさか、コイツのところにいるのか？」

彼女は無反応で、ただ彼を静かに見つめるだけだった。

「おまえには関係のないことだ」

レオナルドはユールベルの肩を引き寄せ、反対の手でジークを払いのけようとした。

「待てよ」

ジークはその手首を素早くつかむと、ギリギリときつく力をこめた。

「どういうことだ。何を考えてる。説明しろ」

レオナルドは顔をしかめながら、ジークの手を振りほどいた。彼の手首には指の形が白くくっきりと残っていた。ムツとして不機嫌をあらわにし、冷たく一瞥した。

「みっともないな。嫉妬か？」

「そんなんじゃねえよ」

ジークは少しむきになって否定した。そして、レオナルドにかばわれるようにして身を寄せているユールベルに目を移した。真剣な表情で語りかける。

「ユールベル、なんとかいう寮の先輩が心配してたぞ」

「ターニャさんだよ」

リックは間髪入れずに補足した。ジークはユールベルに向かったまま話を続けた。

「帰れよ。こんなヤツのところにいたってロクなことにならねえ。自棄になんな」

真摯で静かな説得。それでもユールベルは眉ひとつ動かさない。ただじっと視線を返すだけだった。

「何も知らないくせに、いいかげんなことを言うな」

レオナルドはユールベルを背中に隠し、ジークを鋭く睨みつけた。ジークもカチンときて睨み返した。

「テメーこそユールベルの何を知ってるってんだ」

それを聞くと、レオナルドはうつむいて目を閉じ、ふっと小さく笑った。

「おまえよりは知っているかもな」

彼の余裕の態度と意味ありげな言い方が、ジークを不快にさせた。しかし、それ以上の深い追求の言葉は、なぜか出てこなかった。ただ苦い顔を見せることしかできない。

レオナルドは再び顔を上げた。まっすぐジークの目を見つめ、小さく口を開く。

「ふたりだけで話をしたい」

思いもかけない言葉に、一瞬ジークは目を見開いた。しかし、すぐにニッと口端を上げ、挑む

ように不敵に笑いかけた。

「いいぜ。テメエとは一度じっくり話をつけたかったんだ」

「ちょ……ジーク！！」

アンジェリカは慌てふためいた。ジークの背に軽く握った手をのせ、後ろから見上げる。それでも彼は振り返らない。真剣な表情で何かを考えている。

「リック、アンジェリカを送ってやれ。家までだぞ」

ジークは静かな低い声で、背後のリックに告げた。

「うん、わかった」

リックは身を引き締めて答えた。しかし、アンジェリカがそんなことを素直にきくはずがない。

「勝手に決めないでよ！」

甲高い声をあげ、ジークの正面にまわり込んだ。

「私も行くわよ」

強気な瞳を彼に向ける。しかし、彼も少しも引かない。

「それじゃ意味ねえだろ！これは俺とヤツとの問題なんだ」

ジークは親指でレオナルドを指さした。

そのレオナルドは、ジークに背を見せ、ユールベルと向き合っていた。彼女の頬を手で包み込み、何かを耳打ちする。そして、無表情の彼女の口元に、自分の唇を軽く重ねた。

三人は啞然として言葉を失った。

レオナルドはユールベルから離れ、ジークに向き直るとあごで彼を促した。ジークはその横柄な態度にムツとして舌打ちした。互いに嫌な顔を作りながら、ふたりは連れ立ってどこかへ歩いていった。

リックは、いまだ呆然としているアンジェリカの肩にポンと手を置いた。彼女はようやく我にかえった。

「で、あなたは何を企んでいるわけ？」

アンジェリカはユールベルに振り向くと、腕を組み強気な態度で挑んだ。ユールベルはまだジークたちの消えていった方を眺めていた。

「ジークが駄目だとわかると、今度はレオナルドに好きだとか言って味方につけた。それで、どうするつもり？」

問いつめるように語気を強める。額に冷たい汗がにじむ。

「アンジェリカ、帰ろう」

リックは焦ったように口をはさんだ。しかし、アンジェリカは彼を無視し、彼女の答えを待った。

ユールベルは右目を細め、ゆっくりとアンジェリカに振り向いた。

「言っていないわよ。レオナルドに好きだなんて」

「えっ……」

アンジェリカは小さく声をもらす。

「私が好きなのはジークだけ。何度も言わせないで」

透き通った蒼い瞳をアンジェリカに向け、淡々とそう言った。無表情で何を考えているのかわからないが、少なくとも嘘を言っているようには聞こえなかった。アンジェリカは何も返すことができず、黙り込んでしまった。

沈黙が続く。

アンジェリカがこらえきれず目を伏せると、それを契機にしてユールベルは歩き去っていった。

「帰ろうよ、アンジェリカ」

リックは後ろから声をかけた。あたたかく包み込むような声。アンジェリカはこくと頷いた。

「なんだか何もかもよくわからなくなってきたわ」

アンジェリカはオレンジがかった空を仰いで、口をとがらせた。冷たくなってきた空気が頬を撫で、黒い髪をさらさらと流す。家まではまだ遠い。

「何もかもって？」

並んで歩いていたリックが、彼女に目を移しながら尋ねた。

「ユールベルのことも、レオナルドのことも、自分のことも、よ」

「自分？」

アンジェリカはうつむき顔を曇らせた。

「ユールベルと仲良くしたいと思っていたわ。昔のように、また笑いあえたらって」

ふっと小さくため息をつく。

「でも実際彼女を目の前にすると、なんだか頭にきてばかり」

リックを見上げ、寂しそうに笑うと肩をすくめた。リックはそんな彼女を見て、ふいに表情を和らげた。

「仕方ないよ。彼女、ジークのこと好きだとか言ってるしね」

「……？ どういうこと？」

アンジェリカはきょとんとして目をぱちくりさせた。リックはその反応に驚いた。それと同時に、どうやら自分は口を滑らせてしまったらしいことに気がついた。

「え……と、うーんと、なんて言ったらいいのかな」

あたふたしながら、どうやって取り繕おうかと言葉を探す。しかし、アンジェリカはそんなリックに構うことなく、さっさと話題を変えた。

「でも、ユールベルが言っている好きって、何か少し違う気がするの。リックはどう思う？」

「難しいことを訊くね」

リックは答えに困って、ごまかし笑いをした。アンジェリカは再び空を仰いだ。

「好きとか嫌いって、いちばん単純でわかりやすい感情だと思っていたのに……」

リックはそんな彼女を優しく見守るように、にっこりと笑顔を浮かべた。

「そうだね。単純だから奥が深いのかもしいないね」

「おい、どこまで行く気だ」

ジークはむすっとして言った。もうアカデミーを出てから30分近く歩き続けている。しかも、彼の家とは正反対の来たこともない道だ。紅く染まった空を、藍色の闇が侵食していく。不安と不満が募る。

「誰にも聞かれないところだ。もう歩き疲れたのか？」

レオナルドは嫌味たらしくニヤリと笑った。ジークは一瞬カッと頭に血がのぼったが、なんとか自制し、掴みかかろうとする衝動を抑えた。

「やわなおぼっちゃんと一緒にすんな」

うつむいて小石を蹴り、吐き捨てるように言った。

やがて視界の開けたT字路に差しかかった。ところどころ薄汚れた白いガードパイプが、道にそって長く続いている。レオナルドはその切れ目から幅の狭い石段を通り、下へ降りて行った。ジークも後に続いた。急に視界が白くなり、まぶしさに目を細める。そこにはさらさらと音を立てる清流と、白い川原が広がっていた。歩きながらあたりを見回す。片側は川、片側は土手、あとは川原が広がるのみ。確かにここなら誰かが近づいて来れば、砂利を踏みしめる音ですぐにわかるだろう。ジークは悔しいが納得した。

レオナルドは川原の真ん中まで来ると立ち止まった。ジークもその後ろで足を止めた。ふたりの影は土手近くまで長く伸びている。

「さて……」

レオナルドは腰に手をあてうつむくと、面倒くさそうにゆっくり振り返った。ジークは体中に緊張を走らせ、小さく身構えた。

「困ったことに、ユールベルはおまえのことが好きらしい」

「は??」

思いきり対決する気になっていたジークは、肩すかしを喰らわされたように感じた。

「こんなバカでがさつで品性のかけらもない奴のどこがいいのか、まるで理解できないがな」

「んだと?!」

レオナルドが冷たい顔で淡々と畳みかけると、ジークはカッとして声を荒げた。しかしすぐにはっとして眉をひそめた。

「って、ちょっと待て。じゃあ、おまえとユールベルの関係はなんなんだ」

「さあな。何なんだろうな」

レオナルドはズボンのポケットに手を突っ込み、深くうつむくと、足元の小石を蹴りつけた。とぼけているのか、本心なのか、ジークには判断がつかなかった。ただ、まだ聞かなければならないことはある。キッと顔を引き締めた。

「おまえら、三日前まではほとんど面識もなかったとか言ってたな。それが……」

レオナルドの瞳の奥を探るように、じっと鋭く睨めつける。

「この三日間に何があった。何を企んでやがる」

声を低めて問いつめた。レオナルドは冷たく睨み返した。

「おまえは消えろ」

答えの代わりに、唐突の命令。

「な……に?!」

「二度とユールベルの前に現れるな。おまえのことを忘れない限り、あいつは幸せにはなれない」

ふたりの間を冷たい風が通り抜けた。互いに目をそらそうとはしない。レオナルドはさらに付け加えた。

「あいつは俺が救ってやる」

どこか思いつめたような言葉。いつものような刺々しさはない。ジークには、それが嘘や出任せだとは思えなかった。

「俺だって、会うつもりなんかねえよ。仕方ねえだろ。同じアカデミーに通ってんだぜ」

困ったように眉をひそめる。いつものように喧嘩腰で突っかかる気にはなれなかった。だが、レオナルドには歩み寄るつもりはなかった。

「ならアカデミーを辞めろ」

ひどく短絡的に命令する。ジークは途端にいきり立った。

「テメー勝手なこと言ってんじゃねえ! そっちこそ辞めろ!」

「おまえのせいで辞めるなんて、まっぴらだ」

「言い出したのはそっちだろ!」

わがままに噛み合わない受け答えをするレオナルドに、ジークはますます憤激して大声をあげた。

互いに、熱く冷たく睨み合う。

やがてジークは目を伏せ、ふうっとわざとらしくため息をついた。それから再び顔を上げると、厳しい視線を突きつける。

「ユールベルが好きなら、テメー自身でなんとかするんだな。勝ち目がねえからって、俺に消えろだなんて、甘ったれんな」

レオナルドは絶句した。歯をぎりぎりと軋ませ、悔しそうにジークを睨みつける。そして、低く唸るように言った。

「……おまえは首を突っ込みすぎなんだよ。ラグランジェ家にな」

ジークは少し驚いたように目を見開いた。

「アンジェリカのこと、ユールベルのこと、俺たち一族の問題だ。よそ者が関わるべきことじゃない」

抑えきれない嫌悪感と激しい拒絶を表情で示す。ジークは腕を組み、冷たく睨み返ししながら、小さく息をついた。

「別に首を突っ込むつもりはなかったぜ。結果的にそうなっただけだ」

「どうせあいつがペラペラしゃべったんだろう」

レオナルドは顔をしかめて、吐き捨てるように言った。ジークは目を瞬かせた。

「あいつ？」

「能天気なご当主サマさ」

いらつきを隠さず、蔑むように言った。

「……サイファさんのことか？」

「あいつには当主としての自覚がない。ラグランジェ家内部のことを軽々しく部外者に口外して、それがどれほど危険なことか考えもしない」

ズボンのポケットに手を突っ込み、ジークに背を向けると、川原の小石を蹴り飛ばした。いくつか飛び散ったうちのひとつが小さく弧を描き、ぽとんと清流に飛び込む。乱された水面は、すぐに緩やかな流れに呑み込まれた。

「ラグランジェ家が、名門としてこれだけ長く続いてきたのは、なぜだかわかるか」

川面を見つめながら、ジークに問いかける。ジークには答えがわからなかった。口を結び、ただ沈黙を返す。レオナルドは顔半分だけ振り返り、鋭い視線を流した。

「保守的で閉鎖的だったからだ」

ジークの背筋に冷たいものが走った。

「家の不祥事は内々で処理する。決して部外者には口外しない。それが厳格なルール。それをあいつは……」

のどから絞り出すような声でそこまで言うと、言葉を詰まらせた。柔らかな金髪が、風を受け緩やかに波打つ。

ジークは額に汗をにじませ、レオナルドの後ろ姿をじっと見据えた。

「俺にはサイファさんの方が、よっぽど正しく思えるぜ」

レオナルドは鼻先で笑った。

「正しいか正しくないかなんて意味がないさ。家を守ることがすべてなんだからな」

ジークは眉をひそめた。その言葉に対する嫌悪感、レオナルドに対する不快感、得体の知れない恐怖感がわき上がる。

「サイファさんが守りたいのは、家じゃなくて、家族なんだろう」

「笑わせるな！ その家族を不幸にしたのは、あいつ自身なんだぞ！！」

突如、大声をあげると、感情まかせにジークに振り返った。その瞳には、激しい怒りが宿っていた。ジークは目を見張り、絶句した。

「アンジェリカが呪われた子と言われているのも、あいつが……」

レオナルドはそこまで言って口をつぐんだ。ふいに目をそむける。

「な……に？ なんだオイ！」

ジークは彼に詰め寄った。

「しゃべりすぎたな」

レオナルドはそう言って再び背を向けようとしたが、ジークがそれを許さなかった。胸ぐらに掴みかかり、乱暴に引き寄せる。

「最後まで言えよ！ 力づくでも吐かせるぞ！」

さらにじりじりと顔を近づけていく。そして、右のこぶしを彼の視界にねじ込んだ。

「おまえにはこぶしでも魔導でも、負ける気がしねえぜ」

しかしレオナルドは平然としていた。胸ぐらをつかまれたまま冷笑する。

「やれるものならやってみろ。この暴力野郎」

「……くっ」

ジークは奥歯を軋ませながら、やり場のないこぶしを震わせた。

「くそっ！！」

空に向かい叫び声をあげると、レオナルドを川に突き飛ばした。彼はバランスを崩し、背中から浅瀬に倒れ込んだ。その体の上をせせらぎが走り、あっというまに全身ずぶ濡れになった。水は身を切るように冷たい。顔をしかめながら、川底に手をつき、重々しく上体を起こした。柔らかくカールした髪から水滴が滴り落ちる。ゆっくりと顔を上げると、ジークを睨み上げた。

ジークは不機嫌な顔で睨み返した。そして、小さく舌打ちすると、背を向け歩き出した。

「バカが、一生ひとりで悩んでろ！！」

レオナルドは去りゆく後ろ姿に言葉を吐き捨てた。

ジークは重い足どりで石段をのぼっていった。ふいに気配を感じ、顔を上げると、上の道路にユールベルの姿を見つけた。なぜ彼女がここに……。ジークは一瞬どまどったが、レオナルドが彼女に何かを耳打ちしていたことを思い出した。どういうつもりかはわからないが、おそらくあのときに行き先を告げたのだろう。

彼女はためらうことなくトントンと細い石段を降りてきた。ふたりは向かい合い、足を止めた。

「レオナルドのところに行くのか？ ……やめろよ」

複雑な表情で、疲れたように力なく言った。ユールベルは無表情でジークを見下ろした。

「そう思うのなら止めて」

「止めてるじゃねえか」

「行動で示して」

まっすぐジークを見つめる。彼女が何を望んでいるのか、だいたいの察しはついた。

「悪い……」

ジークは逃げるように目をそらした。

ユールベルはそれ以上、何も言わなかった。狭い石段で、腕をぶつけながらすれ違おうと、小走りで駆け降りていった。頭の後ろで結ばれた白い包帯を揺らしながら、岸に上がろうとしたレオナルドに走り寄っていく。ザプザプと靴のまま、水際に踏み入れる。

「濡れるぞ」

「そういう気分よ」

ユールベルはレオナルドの首に腕をまわし、すがるように抱きついた。レオナルドから滴る水とびしょ濡れの服が、彼女をじわりと濡らす。彼女の体温が、冷えた彼の体に安堵をもたらす。レオナルドは彼女の背中に手をまわし、その手に力を込めた。

49. 光と闇

「今回こそは、絶対に勝てると思ったのによ」

ジークは張り出された成績を覗き込み、納得のいかない面持ちで口をとがらせた。リックとアンジェリカは顔を見合わせ、互いに肩をすくめて笑った。

「何度見たって結果は変わらないって」

「そうよ。朝もあれだけしつこく見てたじゃない」

「わかってるよ！」

ふたりから逃れるように背を向けると、ジーンズのポケットに手を突っ込み歩き出した。ふたりも小走りでジークについていった。柔らかな日の射す廊下を、三人は並んで歩く。今日はテスト結果の発表のみで授業はない。まだ昼前だが、すでに帰った生徒も多く、人影はまばらである。

「だいたいおまえ、一ヶ月もアカデミー休んだくせに、なんであんな点とれんだよ」

ジークは半ば呆れたような口ぶりでそう言った。

「もちろん、頑張ったからよ。ジークに負けるわけにはいかないし」

アンジェリカは彼を見上げてにっこりと笑いかけた。ジークは慌てて目をそらせた。

「おっ……俺だって、まだあきらめたわけじゃねえぞ！卒業までには、おまえに勝ってやるからな！」

耳のあたりを赤らめながら、こぶしを握りしめ、早口でまくし立てた。

「うん」

アンジェリカは再びにっこりと笑いかけた。

三人は食堂まで来ると、カウンターで飲み物を買って、窓際のテーブルに席を取った。広い食堂内はがらんとしていた。ジークたちの他には数組いるだけである。聞こえるのは遠くのかすかな話し声と、木々のざわめきくらいだった。

「あしたから長期休暇だな」

ジークはほおづえをつき、窓の外に目をやった。青葉の深い緑が、風に揺れながら光を受け、きらきらと輝いている。

「ふたりとも、今年もまた働くの？」

アンジェリカはジークの視線を追いかけながら尋ねた。

「あっ、そうだ……」

ジークは鞆を開け、中をかきまわしながら何かを探し始めた。

「あった、これ」

そう言って、しわだらけのチラシを机の上に置いた。白い紙に黒い文字が打たれただけの、そっけないものである。アンジェリカとリックは顔を近づけて覗き込んだ。

「俺、ここに採用されたんだ。時給いいんだぜ」

ジークは嬉しそうに白い歯を見せてニッと笑った。

「王立魔導科学技術研究所……？ ああ、魔導を科学的に解明しようとしているところね！」

アンジェリカはぱっと顔を上げた。しかし、リックはまだチラシを目で追っていた。小さく書かれた文字を指さす。

「この仕事内容、必要データの提供……って何？」

アンジェリカも指で示された部分に目を落とした。

「要はモルモットってこと？」

「い、嫌な言い方すんなよ」

ジークは顔を引きつらせながら苦笑いした。

「でも、面白そうなところよね」

アンジェリカはめずらしくはっきりと興味を示した。リックはコーヒーを飲みながら、少し驚いたように彼女を見た。

「だろ？ 普通に入ろうとしても、入れてもらえねえからな。アルバイトついでに、いろいろ見学してこようって魂胆だ」

ジークはわくわくした様子で、子供のように無邪気に笑った。

「……私も、行こうかな」

アンジェリカは目を伏せ、ほほをほんのり赤らめながら、ためらいがちに言った。ジークは目をぱちくりさせながら彼女を見た。

「もう遅えぜ。応募期間は過ぎてるし、募集はひとりだし。ま、どっちにしろ、おまえは年齢制限で引っかかるけどな」

淡々とそう言うと、ジークはチラシの下の方を指さした。アンジェリカとリックは同時に覗き込んだ。そこにははっきり「18～22歳」と書かれていた。アンジェリカは口をとがらせ、ほほをふくらませた。ジークに振り向いたリックも、なぜか怒ったような顔をしている。

「ジーク、ちょっとひどくない？ アルバイトのこと、何も言ってくれないなんて」

「悪かったよ」

ジークは少し体を引くと、バツが悪そうに笑った。そして、少し恥ずかしそうに目をそらし、声のトーンを落として続けた。

「前もって言って、落とされたらみっともねえだろ」

ふたりは呆れ顔をジークに向けた。

「でも残念だよ。今年もジークとショーをやるのを楽しみにしてたのに」

「俺はほっとしてるぜ。おまえと違って好きでやってたわけじゃねえし。あんな恥ずかしい、なんとかレンジャーなんてよ」

ジークは去年のことを思い出し、苦い顔をした。

「冷たいなあ」

本気で落胆しているリックを見て、アンジェリカはくすりと笑った。

「まあ、今年はひとりで頑張れよな。俺は俺でバリバリ働くからよ」

ジークはリックの背中をポンと叩いた。リックはため息をついて、コーヒーを口に運んだ。

「ねえ、二ヶ月間ずっと働くつもりなの？」

「ん？ ああ。休日はあるけどな」

「そう……」

アンジェリカは下を向き、ティーカップを両手でとった。そして、緩やかに揺れる琥珀色の水面をじっと見つめた。

「少し、寂しいわね」

ジークははっとして彼女を見た。それから慌てたようにうつむくと、ブラックのコーヒーをスプーンでかきまぜ始めた。

「と、ときどきは連絡するから、よ」

「うん」

アンジェリカは顔を上げ、にっこりと笑った。そしてふいに何かを思いついた様子で、ティーカップを机に置くと身を乗り出した。

「ねえ。今年も誕生パーティやるんだけど、来てくれるわよね？ 休暇中になっちゃうんだけど、ふたりの都合のいい日に合わせるから」

長期休暇の時期は学年によって異なる。去年は休暇後だったが、今年は休暇中にあたるのだ。

「うん、もちろん！」

リックは即答した。しかしジークは暗い顔でうつむいていた。彼はレオナルドの言葉を思い出していた。家族を不幸にしたのはサイファ自身だと……。レオナルドを信用しているわけではない。だが、気になるのも事実だ。心のどこかでサイファを疑っている自分がある。アンジェリカの家に行けば、当然、彼と顔をあわすことになるだろう。普通に振る舞えるのだろうか。

「……嫌なの？ プレゼントとかはいいから、来てくれるだけでいいんだけど……」

アンジェリカはだんだんと声を小さくしながらそう言うと、不安を顔いっぱい広げた。ジークはその声で我にかえった。慌てて返事をする。

「行く、行くぜ、もちろん。悪い、考えごとした」

彼女を安心させるようににっこり笑顔を作って見せた。ややぎこちなかったが、それでもアンジェリカはほっとしたように表情を和らげた。

「そういや、今年も呼ぶつもりか？ アイツ……」

「あいつって、レイラさん？」

ジークはけわしい表情でうなずいた。

「もちろんよ。お見舞いに来てもらったお礼もちゃんとしたいし」

嬉しそうに弾んだ声で答えた。反対に、ジークはますます沈んでいった。レイラは自分勝手に自己中心的で、おまけに非常識だ。しかし問題はそれだけではない。息子、つまりジークの恥ずかしい過去をたっぷり握っているのである。そのうえ彼をからかって楽しむという悪趣味だ。リックはまだしも、アンジェリカと会わすことはなるべく避けたい。だからといって、呼びたがっているのにやめろとは言えない。ジークは無理だと思いつつも、何事もないよう祈るしかなかった。

「そうだ、ラウルにも声を掛けなきゃ」

アンジェリカは軽く言った。

「なっ……！ 呼ぶつもりか？！」

ジークは思わず声を張り上げた。目を見開き、口を開けっ放しにして、彼女を見つめる。

「たぶん来てくれないけど、一応ね。去年も断られちゃったし」

アンジェリカは冷静に答えると、ティーカップを手にとり、だいぶぬるくなった紅茶を一気に飲み干した。

「今から行ってくるわね、ラウルのところ」

にっこり笑って立ち上がり、空のティーカップを持って返却口に向かった。

「待てよ、オイ！」

ジークとリックは慌てて残りのコーヒーをあおり、彼女のあとを追った。

「ジーク、どうするの？ 万が一、ラウルが来ることになったら」

リックは、前に行くアンジェリカを気にしながら、声をひそめて尋ねた。ジークは顔をしかめて頭をかいた。

「だからって、行かねえわけにはいかないだろ」

「よかった」

リックはにっこりと笑った。

「レオナルド、おまえは外で待っている」

ラウルは戸棚から包帯を取り出しながら、窓際で腕を組んでいるレオナルドに命令した。

「いいのよ、彼は」

丸椅子に座ってラウルを待ちながら、ユールベルは感情なく言った。ラウルはそれ以上、何も言わなかった。新しい包帯と薬瓶を手にとると、ユールベルの前に腰を下ろした。彼女の頭の後ろに手を伸ばし、左目を覆っている包帯をほどきにかかる。

レオナルドは窓枠に手をつき、外に顔を向けた。樹々の深緑が風に揺れ、ざわざわと複雑な音を掻き鳴らす。

「今、レオナルドのところにいるのか」

「そうよ」

ラウルはユールベルの包帯を取り外し、彼女の見えない目をあらわにすると、そのまわりの消毒を始めた。オキシドールの匂いがあたりに広がる。彼女はそのくらからするような匂いが好きだった。無意識に深く吸い込む。胸を少し上下させただけで、背筋はピンと伸ばし、前を向いたまま微動だにしない。ラウルは新しい包帯を手にとると、彼女に巻きつけ始めた。

「寮を引き払え。入寮待ちの生徒は山ほどいる。おまえが一ヶ月で入れたのは、サイファが裏で手をまわしたからだ」

それを言い終わると同時に、包帯の方も結び終わった。彼女の髪に手ぐしを通し、軽く整える。ユールベルは目を細めてじっと彼の瞳を見つめたが、彼はそれに応じることなく片づけを始めた。

「どうしてあなたはいつも、そんなに冷たいことしか言えないの？」

「だったらひとつ忠告しておく。レオナルドはやめておけ」

ラウルは手を止めず、淡々となんの感情も見せずに言った。レオナルドは驚いて振り向き、彼の背中を睨みつけた。

「どういう意味だ」

「おまえには荷が重すぎる。ユールベルを受け止めるだけの器ではないということだ」

ラウルは背を向けたまま、冷たく言い放った。

「そう言うのなら、あなたが私を受け止めてよ」

レオナルドが答えるより早く、ユールベルは抑揚のない声でそう言った。レオナルドは目を見開いて彼女を見た。彼の表情にははっきりと動揺の色がにじんでいた。そんな彼の様子を気にかけることもせず、ユールベルはラウルの膝に横向きに座り、彼の首に手をまわした。

「受け止めて、くれる……？」

じっと目を見合わせると、彼と唇と軽く重ね合わせる。それから彼の耳に口づけし、吐息とともに何かをささやいた。ラウルはまったく表情を動かさない。ユールベルは再び彼の瞳を見つめると、今度は深く長い口づけをした。互いが触れ合うかすかな音だけが静かに流れる。やがてゆっくりと顔を離すと、彼の広い胸にそっと身を預け、彼の肩ごしにレオナルドを冷たく一瞥した。

。

レオナルドはようやく我にかえった。目の前で起きていることは夢ではない。現実だ。

「やめろ！！」

ふたりに駆け寄ると、乱暴に引き離れた。ユールベルはよろけて床に倒れこんだ。

「なぜだ……どうしてなんだ！！」

体をこわばらせ両こぶしを握りしめ、大声で叫ぶと彼女に振り返った。彼女は倒れこんだままの姿勢で、床を見つめていた。

「俺よりもラウルの方がましということか？ それとも、俺を試しているのか？」

レオナルドは喉の奥で息を詰まらせたように、不安定に震えた声で問いつめた。ユールベルははっとして顔を上げかけたが途中でやめ、逆にさらに深くうなだれた。緩やかなウェーブを描いた長い髪が床に落ちる。

「やっぱり、私、だめみたい」

ぽつりぽつりと短い言葉をつなぐ。レオナルドは怪訝な表情を浮かべた。

「あのひとの言うように、どうしようもない人間だわ」

彼女は吐き捨てるようにそう言うと、床についた手をぎゅっと強く握りしめた。そのこぶしも肩も、小刻みに震えている。

「違う！ そんなことは……」

レオナルドは慌てて否定した。しかし、彼女はより大きく肩を震わせた。

「もう、見放していいわよ、私なんか……」

隠そうとしても隠しきれない涙声。レオナルドはうつむき顔をしかめた。

「……見放してほしいのか？」

苦しそうにそう尋ねると、ユールベルは小さな声ですすり泣き始めた。静かな医務室の中、彼女の嗚咽のみが響く。レオナルドは何かをこらえるようにきつく目を閉じていたが、やがて決意

を固めたように、ゆっくりと目を開いた。そして彼女の体を起こし、ぎゅっと強く抱きしめた。
「たとえどんなに拒絶されたとしても、俺はあきらめない。やっと見つけたんだ。あきらめてたまるか！」

震える彼女を抱き上げて立たせると、向かい合ってしっかりと手をつないだ。そして、もう一方の手で、彼女の頭を自分の肩に引き寄せた。

「見てろ、ラウル。おまえが間違っていたことを、いつか証明してやる」

ラウルを睨みつけ、低く静かにそう言った。そして、ユールベルの手を引き、戸口へ足を進めた。

レオナルドが扉を開けると、そこに黒髪の少女が立っていた。

「あなた……」

ユールベルは驚き、まだ涙が乾ききっていない右目を大きく見開いた。その少女はユールベルのルームメイト、ターニャだった。泣きそうな、怯えたような顔をしている。何か言いたそうに口を開けるが、言葉が出てこない。代わりにユールベルが端的な一言を突きつける。

「つけてきたのね」

凶星をつかれたターニャはますます言葉をなくした。逃げるようにうつむき、目を閉じまぶたを震わせた。

レオナルドはユールベルの手を引き、戸口をまたいで廊下に出ると、後ろ手で扉を閉めた。もうラウルと面倒な話はしたくない。彼が出しゃばってこないことを祈った。

「聞いてたんでしょ」

ユールベルは返事を待たずに、さらに冷たく尋ねた。

「……ぬ、盗み聞きなんてするつもりじゃなかった……けど……ごめんなさい、悪かったわ」

ターニャはこわばった顔で、無理やり笑顔を作った。しかしユールベルはそれを受け入れなかった。突き放すような冷たい瞳を向ける。

「もう私には構わないで」

「私は、あなたが心配で……！」

「放っておいて！ あなたもわかったでしょう、私がどんな人間か。もう構わないで！！」

ユールベルはむきになって言い返した。こんな感情的な彼女を見たのは、ターニャは初めてだった。しかし、それに驚いている場合ではない。

「あんなの聞いたら放っておけるわけじゃない！！」

ターニャも負けずに言い返した。そして、ユールベルにまっすぐな黒い瞳を向け、悲しげに顔を歪ませた。

「どうして……？ どうしてそんなに自分を傷つけるの？ どうしてそんなに近づく人を拒絶するの？」

その言葉はユールベルを突き刺した。青い顔でターニャを睨みつける。

「あなたにはわからないわ！！」

レオナルドの手を引っ張り、アカデミーの方へ駆けていった。遠ざかるふたりの足音を聞きな

がら、ターニャは両手で顔を覆い、肩を震わせ、その場に崩れ落ちた。

「ねえ、あれ……」

「あ、こないだの」

アンジェリカが指さした先には、黒髪の少女が座り込んでいた。顔は見えなかったが、おそらくターニャに間違いない。三人は急いで走り寄った。ジークは、うつむきないている彼女の肩を揺すった。

「どうした、オイ！ ラウルに何かされたのか？！」

「ちょっと、どうしてラウルを疑うわけ？！」

アンジェリカはジークに突っかった。しかし、ジークがそう思うのも無理はなかった。ここはラウルの医務室の前である。こんなところで泣いていれば、ラウルが何かしら関わっていると考えるのも当然だろう。

しかし、ターニャは首を横に振った。

「私が悪いの……ユールベルを傷つけちゃった……」

三人は互いに顔を見合わせた。彼女のその言葉だけでは、どういうことなのかよくわからない。しかし、それ以上、彼女に話をきける雰囲気ではなかった。

リックはハンカチを差し出した。ターニャは驚いたように彼を見上げた。しかし、泣いてぼろぼろの顔を手の甲で隠しながら、慌ててうつむいた。

「……持ってる、から……」

しゃくりあげながらそう言うと、スカートのポケットから薄い桜色のハンカチを取り出し、無造作に顔に押しあてた。三人はどうすればいいかわからず、ただ黙って彼女を見下ろしていた。

「君たち、ユールベルの事情に詳しいの？」

涙を拭って落ち着きを取り戻したターニャは、うつむいたまま冷静に尋ねた。三人の表情に緊張が走った。

「まあ、ある程度は……」

ジークはためらいがちに答えた。

「私は、寮に入るのは家庭の事情としか聞いてないんだけど、あの子の心には、そうとう深い闇があるような気がするの」

ターニャは沈んだ声でそう言うと、ハンカチを握りしめた。

「虐待……でも受けていたんじゃないのかな。背中にもおなかにも古傷があったし、あの目だっ
てきつと……」

アンジェリカは頭から一気に血の気の引いていくのを感じた。青白くこわばった顔でうつむく。額には冷たい汗がにじんでいる。ジークとリックも無言でうつむいた。

ターニャはそれを肯定の返事ととったようだった。

「やっぱり放ってなんておけない……！ でも、どうすれば……」

両手でハンカチをきつく握りしめ、下唇を噛みしめた。そして眉根にしわを寄せ、目をきつく

つぶった。ひざの上に涙が数滴こぼれ落ちた。

「ごめんなさい……ごめんなさい……」

レオナルドの手を引き走るユールベルは、泣きながらつぶやくように繰り返した。レオナルドは逆にユールベルの手を引き、抱き寄せた。

「何も言うな」

彼女の背中にまわす手に力を込め、彼女の頭に頬を寄せた。全身で彼女を感じようと、彼女を包み込もうとする。しかし、彼女は小刻みに震えたまま、頬に涙を伝わせた。

「私、自分がわからない……こわい……」

怯えたように消え入りそうな声で、たどたどしく言葉を紡ぐ。

「おまえが見失ったら、俺が見つけてやる。だから、安心しろ」

思いつめたふうにならんと、歯をくいしばり、眉間にしわを寄せた。しかし、それを悟られないように、彼女の肩に顔をうずめた。そのまま小さく呼吸をして息を整える。ユールベルは、彼のあたたかい吐息を感じ、いくぶん落ち着いてきたようだった。いつものように無感情な声で、ぼつりぼつりと話し始めた。

「彼女にだけは、知られたくなかった……あんな私……」

「誰だ。あのおせっかいの偽善者は」

レオナルドは思い出しながら顔をしかめ、嫌悪感をあらわにした。

「寮のルームメイトよ。いいひとだわ。とても良くしてくれた」

ユールベルはそこまで言うと、レオナルドの背中に細い腕をまわした。どこか迷ったように、ぎこちなく力を込める。

「でも、私には眩しすぎる。彼女の光が、私の闇を深くするのよ」

「関わらなければいいさ」

レオナルドはきっぱりとそう言うと、ユールベルを強く抱きしめた。

50. リング

「ようこそ、いらっしゃいませ」

レイチェルが門まで、レイラ、ジーク、リックを出迎えた。

今日はアンジェリカの誕生パーティである。三人は連れ立ってやってきた。ジークとリックはまるきり普段着だが、レイラはひとり気合いを入れて、ワインレッドのベロア調ワンピースで若づくりをしている。

「約束のモノ、ちゃんとしてきたわよ」

レイラはウインクをしながら、底の広い白無地の紙袋をゆっくりと掲げた。がさつな彼女にしてはめずらしく丁寧に扱っている。レイチェルはにっこり微笑みながらそれを受け取った。

「ありがとうございます。面倒なことを頼んでしまってすみません」

「なんの、なんの。こっちも楽しかったし、ね！」

レイラはジークとリックに振り返り、同意を求めた。

「はいっ！」

リックは元気よく返事をした。だがジークはむすっとして顔をそむけた。

「どうしたんです？」

レイチェルはきょとんとして尋ねた。

「いいの、いいの、気にしないで。自分の不甲斐なさにへこんでるだけだから」

「え？ 不甲斐なさって？」

「ふふっ、あとでわかるわよ」

レイラは白い歯を見せて、いたずらっぽくニッと笑った。

重厚な扉を開け、レイチェルは三人を中に招き入れた。ジークの家がすっぽり入るのではないかというほどの玄関ホール、緩やかなカーブを描く幅広の白い階段、それと対照的な赤い絨毯、きらびやかなシャンデリア。いつもながら圧倒される光景だ。

「アンジェリカ？ みなさんがいらしたわよ」

レイチェルが声をかけると、アンジェリカは応接間の扉から、ちょこんと顔だけ出した。少し困ったような顔で、恥ずかしそうに笑っている。

「大丈夫だよ、ほら」

サイファは優しくそう言うと、後ろからアンジェリカの肩を抱き、玄関ホールに連れ出した。

「……………」

三人は目を見開いて、呆けたように見つめた。

彼女は深紅のロングドレスをまとっていた。腰からふんわりと広がったベルライン、肩を柔らかく包み込むパブスリーブは、レイチェルと同じシルエットである。黒いチョーカーについた小さなバラが、可愛らしいアクセントになっている。いつも身軽なミニスカートやミニのワンピースばかり着ている彼女のドレス姿に、三人は思いぎり意表をつかれた。

「やっぱり変よね。着替えてくる！」

無言の視線に耐えきれなくなったアンジェリカは、顔を真っ赤にして逃げようとした。

「かわいいわ！ すっごいかわいい！！」

「うん、似合ってるよ！」

レイラとリックは我にかえり、顔をぱっと明るくすると、口々にそう言った。しかし、ジークはいまだ無言のままである。

「ジーク、あんたもそう思うでしょ」

「え……ああ、まあ……」

レイラは気を利かせてジークに振ったが、彼は目を伏せ、曖昧に口ごもった。アンジェリカは顔を曇らせうつむいた。

「やっぱり変なのね……」

「あははっ、気にしないで。あのバカ照れてるだけなのよ。かわいってくらい素直に言えばいいのに。なーに意識しちゃってんだか」

「てっ……テメーなに言ってんだ！！」

ジークの顔は一瞬にして上気した。

「さっ、バカは放っというて行きましょ」

レイラは先頭を切って、すたすたと応接間に向かった。まるで自分の家のような所作である。サイファとリックは笑いながらそのあとに続いた。

アンジェリカは不安そうにジークに振り向いた。彼はまだ火照った顔を下に向けたままである。しかしわずかに顔を上げ、ちらりと彼女を見ると、右手でOKのサインを送った。アンジェリカはハッとしたあと、安堵したように表情を緩めた。長いドレスの裾を少し上げ、小走りで応接間に駆けていくと、戸口で振り返った。

「ジークも早く！」

弾んだ声で呼び掛けると、屈託のない笑顔を彼に向けた。ジークは表情が崩れそうになるのを抑えながら、早足で応接間に向かった。

レイチェルは後方で、見守るようにあたたかく微笑んでいた。

広い応接間には、大きな長方形のテーブルがセッティングされ、その上には数々のごちそうが並んでいた。

「まずは、乾杯ね！」

レイラは勝手に仕切り始めた。いつものことである。ジークはあきれて突っ込む気にもなれなかった。

全員に飲み物が行き渡ると、レイラは高々とシャンパングラスを掲げた。

「それでは、アンジェリカちゃんの12歳の誕生日を祝して……かんぱーい！！」

ひときわ高い声を張り上げて、嬉しそうにみんなとグラスを合わせてまわった。

「ったく、本人よりはしゃいでどうするんだ」

ジークはため息をつくとき、やけっぱちで大きな骨付き肉にかぶりついた。レイラはそう言われても気になどしない。ただ、そんな息子を眺めながらふとつぶやいた。

「12歳かぁ……。ジークが12のときって何やってたかしら」

「……頼むから何も思い出さなよ」

いつかの悪夢がよみがえり、ジークは額に冷や汗をにじませた。その隣でアンジェリカはくすりと笑った。そして、グラスを置くと、レイラに走り寄った。

「レイラさん、これ」

彼女はスカートを持ち上げ、赤い革靴を見せた。

「あ、去年プレゼントした靴ね！良かった、似合って！もうサイズはピッタリ？」

「まだ少しだけ大きいんだけど、せっかくだから。この靴に合わせてドレスを作ったの」

ほんのりと頬を染めながら、照れたようにはにかんだ。

「靴に合わせて作るんなら、スカートは短い方が良かったんじゃないか？ そんだけ長かったら隠れちまうだろ」

ジークは口に食べ物を入れモゴモゴさせたまま、後ろから冷静に突っ込んだ。レイラはキッと彼を睨んだ。

「もう、アンジェリカちゃんの生足が見たいからって、いやらしい子ね！」

茶化したようにそう言うと、肩をすくめ、わざとらしくため息をついた。

ジークは喉に食べ物をつまらせ、げほげほと激しくむせた。

「言ってねーだろ！」

顔を赤くしながら涙目で必死に叫んだ。みんなどっと笑った。ただ、アンジェリカだけはひとりぽかんとしていた。

「ねえ、ナマアシって何？」

「……えっ?!」

尋ねられたリックは、驚いて言葉を詰まらせた。

「うーん、まあ、足とおんなじ意味じゃないのかな」

困ったように笑いながら、そう言ってお茶を濁した。その様子をレイラはにこにこしながら眺めていた。

「ほーんと、かわいいわぁ。ね、ウチの娘にならない？」

落ち着こうとしてお茶を飲んでいたジークは、再びむせ返った。

「む……むちゃくちゃ言うな!!」

「そんなに無茶かしら、ねえ？」

レイラは含み笑いをしながら、サイファとレイチェルに振り向いた。

「まだしばらくは手元に置いておきたいですよ」

「将来はわかりませんがね」

ふたりはくすくす笑いながら返事をした。ジークはその場から逃げ出したい気持ちでいっぱいだった。アンジェリカがどんな反応を示しているのかも気になった。しかし、ただ紅潮した顔を隠すようにうつむくことしかできなかった。

「私、養子に出されちゃうの？」

アンジェリカはきょとんととしてそう言った。それを聞いて、今度はまわりがぽかんとした。そ

して次の瞬間、どっと笑いが起こった。ひととき大きな声で笑っているのがレイラであることは言うまでもない。

「上、行くぞ！」

たまりかねたジークは、とまどうアンジェリカの腕をつかみ、戸口へ走っていった。

「おい、リック！」

「え？ 僕も？」

ソファに座ってくつろいでいたリックは、嫌な顔もせず立ち上がり、呼ばれるまま彼のあとを追った。

三人は二階のアンジェリカの部屋にやってきた。あいかわらず広い部屋である。ジークの部屋が10個は入るかもしれない。何度か来ているが、久々だったせいか、ジークもリックも少し驚いていた。

「ねえ、さっきの話だけど」

アンジェリカの声が呆けていたジークを現実に戻す。

「あれはただの冗談だ。悪ノリって言うか……とにかく気にすんな！ な！」

「そんなので納得できるわけじゃない」

頬をふくらませ、ジークを睨んだ。そしてふいにリックに目を移した。

「僕に聞かないでよ。言ったらジークに殺されちゃうから」

彼は笑顔であっさり拒否をした。

「まあ、なんていうか、あいつらは俺をからかっているわけで、おまえが気にすることはねえってことだ」

「そうかしら？ 私が笑われているみたいだったけど」

アンジェリカは疑いのまなざしを送る。ジークは逃げるように目をそらせた。策もつき困り果てているところに、リックが助け舟を出した。

「ジークの言っていることは本当だよ。それは保証する」

「まあ、リックがそう言うなら」

多少の疑念を残しつつも、アンジェリカは引き下がった。

「来たばかりなのに、なんかもうぐったりだぜ」

ジークはそう言って、出窓の飾り棚に手をつきうなだれた。

「ごめんね」

アンジェリカは後ろからぽつりと言った。

「なんでおまえが謝るんだよ。どっちかっていうと、謝らなきゃいけないのは俺の方だろ。俺の母親が引っかきまわしてんだからよ」

ジークは母親の所業を思い出して、苦々しく顔をしかめた。ある程度のことは覚悟をしていたが、彼女はその一歩先を行っていた。

「ふたりともそんな渋い顔しないで、ぱっと楽しくやろうよ！」

リックは急に明るい声を張り上げた。

「大変なこともいっぱいあるけど、今日くらいは全部忘れてさ」

付け加えたその一言に、ジークが過敏に反応した。キツときつく睨みつける。あえて「大変なこと」を思い出させるような配慮のない言い方が許せなかった。リックもようやく自分の失言に気がついた。

「あ、僕、食べるものでも取ってくるねっ！」

焦ったようにそう言うと、リックはすばやく部屋から逃げ出した。パタンと扉の閉まる音がすると、ジークは腕を組み、深くため息をついた。

「……ったくよ」

そっとアンジェリカに振り向くと、彼女は少しとまどったように肩をすくめて笑った。

「そんなに気を遣ってくれなくてもいいのに」

「……平気なのか？」

ジークはためらいがちに声を掛けた。

「いろいろ考えちゃうことはあるけどね」

そう言ってかすかに笑ってみせると、窓の外に視線を流した。どこか遠くを見ているような、どこも見えていないような、捉えどころのない表情。笑みは消えていたが、無表情というのとはどこか違う。

「この前、ラグランジェ家が集まるパーティがあったの。毎年開催しているものなんだけど」

ガラス窓に手を伸ばし、そっと目を伏せる。

「レオナルド、今年は来なかった」

「良かったじゃねえか」

ジークは軽く言った。しかし、アンジェリカは不満そうに口をとがらせた。

「基本的に一族の者はみんな参加する義務があるのよ。今までレオナルドは毎年来てたし。そう、いつも私をいじめるのを楽しみにしてたわね」

「ちったあマシな人間になったってことだろ。おまえをいじめるより、もっと大切なことを見つけたんじゃないか？」

ジークは飾り棚に手をつき、背筋を伸ばすと、真剣な顔を外に向けた。昼下がりの柔らかい光が彼を包む。

「それって、ユールベル？」

アンジェリカは彼の横顔を見上げた。

「多分な」

ジークは外を見つめたままで答えた。

「そういえば、ユールベルの家族は来てたわよ。あのお母さん、普通に楽しそうに笑ってた。なんだか、やりきれなかったわ」

つらそうに目を細め、うつむく。

「ユールベル、幸せになってくれるといいんだけど」

「レオナルドに頑張ってもらうしかねえだろうな」

ジークは投げやりな感じでそう言うと、ため息をつき視線を落とした。アンジェリカはそっと顔を上げ、じっと彼を見つめた。

「でも、ユールベルはジークのことが好きだって……」

とたんにジークは表情をけわしくして振り向き、彼女を睨みつけた。

「だから何なんだ」

「え？」

「おまえ、俺にどうしろっていうんだ。俺の気持ちはどうなるんだよ。人の気も知らねえで！」

ジークの突然の感情の高ぶりに、アンジェリカはわけがわからずぽかんとしていた。

「あ……悪かった」

ジークは冷静を取り戻すと、ばつが悪そうに彼女から顔をそむけた。そのとき、ふいにミニサポテンが目に入った。もっとも窓に近いところに置かれ、太陽の光をたっぷり浴びている。濃い緑のピンと伸びたとげが、元気であることを主張していた。ジークの表情はふっと和らいだ。ジャケットのポケットに右手を突っ込み下を向いた。

「ねえ、俺の気持ちって？ ユールベルのことが嫌いなの？」

アンジェリカは無遠慮に覗き込んできた。ジークは慌てて顔をそむけ、ポケットから手を出した。

「そうじゃねえよ。どうでもいいだろう。蒸し返すなって」

冷静を装って、その話題から逃げようとしていたが、アンジェリカがそう簡単に許すはずはない。

「いきなり怒鳴っておいて、それはないんじゃない？」

腰に手をあて口をとがらせながら、わざと怒ったようにそう言うと、小さくくすりと笑った。

「ホント悪かったって。ったく……」

ジークはちらりと彼女を見て、耳元を赤らめた。そして小さく口を開いた。

「……………れよ」

「えっ？ なに？ 聞こえなかった、もう一回」

アンジェリカは顔を上げ、背伸びをしながら彼に踏み込んだ。大きな黒い瞳をまっすぐ彼に向ける。

「バっ……！ そんな近づくなっ！」

ボリュームのあるドレスのスカートに、彼の脚が埋もれていく。ジークは逃げるように上体をそらせ、片足を引いた。

「ジーク！ アンジェリカ！！」

「うわあっ！！」

扉を開けリックが元気よく戻ってきた。ジークは焦って妙な叫び声をあげた。

「どうしたの？」

リックはぜいぜいと息の荒いジークを、不思議そうに見た。

「ノックくらいしろ！！」

「あ、ごめん」

あまり悪いとは思っていないような、軽い調子で答えた。

「食べるものを取りに行ったんじゃないの？」

アンジェリカは手ぶらの彼を見て尋ねた。

「うん、今からケーキを出すから、ふたりとも降りてこいって」

「……俺はいいよ」

ジークは目をそらせ、小声でぼそっとつぶやくように言った。

「なに言ってるの！」

アンジェリカはにっこり笑いかけると、彼の手をとり駆け出した。

「お待たせしました」

レイチェルは白い箱を手に載せて、応接間に入ってきた。

「私のわがまま、きいてくれてありがとう」

アンジェリカは嬉しそうに、ジークとリックに礼を述べた。ケーキはふたりが作ったものだった。今年の誕生日プレゼントは手作りケーキがいい、アンジェリカがそうリクエストしたのだ。ジークがプレゼントのことで悩まなくてもいいようにという彼女なりの配慮でもあった。

「私が付きっきりでみっちり監修したから、味は保証するわよ」

レイラは人さし指を立ててウインクした。

「見た目はちょっとアレだけどね」

「仕上げはジークに任せちゃったからね」

リックも同調して苦笑いした。ジークは背を向けたまま、何も言わなかった。

「さあ、開けますよ」

レイチェルは机の上に白い箱を置き、そっと蓋を上を持ち上げた。

「……」

「……持ってくるときに崩れてしまったのかしら？」

「いやいや、元々こうだったのよ」

レイラは腕を組み、笑いながら言った。

そのケーキはデコレーションと呼ぶには、あまりにもお粗末な状態だった。まわりには生クリームが無造作に塗りたくられ、ぼってりと厚い部分もあれば、スポンジが見えている部分もある。そして、やはり無造作にイチゴが載せられている。立っていたり転がっていたり統一がとれていない。そして、どれも中途半端に生クリームにまみれていた。とてもおいしそうには見えない。

「でも大丈夫よ。絶対においしいから」

レイラは自信たっぷりに胸をはった。

「そうよね。見た目じゃないわよね」

アンジェリカはケーキを眺めながらぼつりと言った。

「ろうそくは立てる？」

レイチェルが尋ねると、アンジェリカは恥ずかしそうに首を横に振った。

「いいわ。もう子供じゃないんだし」

ジークは何か言いたげに彼女を見た。

「なに？」

「なんでもねえよ」

ジークは再び顔をそむけた。

レイチェルはケーキを六つに切り分け皿に取り、みんなにひとつずつ渡していった。

「まずはアンジェリカから食べてね」

レイラがにっこり笑ってそう言うと、アンジェリカはこくんと頷き、緊張ぎみにケーキのひとつかけらを口に運んだ。

「あ！おいしい！」

「でしょ！」

レイラは腰に手をあて、背筋を伸ばすと、満足げに笑った。

「疑ってただろ、おまえ」

「ちょっと、ね」

ジークがじとっと睨むと、彼女は肩をすくめて笑った。

「本当においしいわ、これ」

「味だけなら、パティシエ顔負けだな」

レイチェルとサイファは、見た目の悪いケーキを口々に褒めた。ジークとリックは顔を見合わせて、ほっとしたように胸をなで下ろした。

「しかし、この子の不器用は誰に似たのかしら。両親とも手先は器用なのに」

レイラはケーキを口に放り込みながら、あきれたようにつぶやいた。

彼女の言うことは間違っていない。ジークの母親、つまりレイラは、内職で服や靴を作っていて、細かい作業はお手のものだ。ああ見えて料理も上手い。ジークの父親は、もう亡くなっているが、生前は腕のいい二輪車修理工だった。

しかし、ジークも負けてはいない。彼女に振り向くと、にっと笑ってみせた。

「じゃあおまえの自己中な性格は誰に似たんだよ。じいさんもばあさんも、物腰の柔らかい人だったのにな！」

「ほほう、言うようになったじゃない？」

レイラはなぜか嬉しそうだった。

はしゃぎながらたっぷりごちそうを食べたあと、ジークたちはソファでゆったりとくつろいでいた。サイファのピアノの音色が心地よく眠気を誘う。まどろむアンジェリカの隣で、ジークは大口を開けてあくびをしている。さらにその隣では、リックが目を閉じピアノの音色に耳を傾けている。

「アンジェリカ」

レイチェルが小さな箱を持ってやってきた。

「ん……なあに？」

彼女は眠そうな目をこすりながら座り直した。

「プレゼントってわけじゃないんだけど」

レイチェルはそう言うと、手にしていた小さな箱の蓋を開け、彼女に差し出した。その中には、白く光るごつごつしたリングがおさまっていた。きれいに輝いてはいはいるが、デザインはかなり古めかしい。アンジェリカは不思議そうに母親を見上げた。

「……指輪？」

隣でぼんやりしていたジークは、その一言でぱっと勢いよく飛び起きた。

「どうしたの？」

アンジェリカは目を丸くした。ジークは彼女の持っているものを見て、とまどったような表情を浮かべた。

「12歳の女の子にシルバーリングを贈るならわしがあることは知っているかしら？」

レイチェルはにこにこしながら、ふたりに尋ねた。アンジェリカは首を横に振った。

「僕、知ってます」

リックが隣から口をはさんできた。

「確か、魔よけと幸福のお守りとして贈るんですしたよね。今はもうすたれかかっているとか」

レイチェルはにっこり笑った。

「じゃあこの指輪はそのならわし？」

アンジェリカは指輪を取り出し、光にかざした。表面の模様が乱反射を起こし、きらきらと煌めきを放つ。

「そう。私が12歳のときに受け継いだものよ。ずっと代々受け継がれてきたの。こんな仰々しい指輪、毎日のはめているわけにはいかないと思うけど、大切に保管はしておいてね」

レイチェルの話を聞きながら、左手の中指にその指輪をはめてみた。引っかかることなく、すっぽりと奥まで滑っていった。どうやら彼女の指には大きすぎるらしい。

「わかったわ。そういえば、シルバーには魔よけの力があるって聞いたことがあるわね」

「あっ、それ、シルバーじゃなくてプラチナなのよ」

レイチェルは肩をすくめた。

「え？ でもさっきシルバーリングを贈るって……」

アンジェリカは目をぱちくりさせた。

「本来はそうなんだけど、どうしてかしらね。多分、シルバーより変質しにくいからだと思うけど」

「ふーん、案外いいかげんなのね」

指を広げて指輪を眺めながら、ぽつりと言った。レイチェルとリックは苦笑いをした。しかし、ジークは思いつめたような難しい顔でうつむいていた。

ピアノの音がやみ、サイファが近づいてきた。

「楽しそうだな」

にっこりと微笑むと、ジークの前のソファに腰を下ろした。レイチェルもその隣に寄り添うように座った。

「ジーク君は今、魔導科学技術研究所で働いているんだって？」

サイファは含み笑いをジークに向けた。ジークに不安と緊張が走った。

「はい、そうですけど……」

「いろいろ噂は聞いているよ。やんちゃな子が入ってきて、手を焼いているって」

「えっ？」

ジークは驚いて短く声をあげた。しかし、考えてみれば、あの研究所は魔導省の管轄にある。魔導省に勤めているサイファとつながりがあっても不思議ではない。

「ジーク、いったい何をやらかしたわけ？」

アンジェリカは笑いながら彼を覗き込んだ。ジークは少し身を引いた。

「別に何もやってねえよ。ただ、そっちの仕事をやらせてくれとか、他の部屋や施設を見せてくれとか頼んだだけだ。全部、断られたけどな」

「月払いの給料を週払いに変更させたとも聞いたぞ。無断で制限区域に立ち入ろうとしたこともあったらしいじゃないか」

サイファはニッと口角を上げた。

「え、あ、すみません……」

ジークは少しびくつきながら謝った。だが、サイファは別に彼を責めるつもりはなかった。

「今度、連れて行ってあげるよ。制限区域の施設。簡単な見学くらいになると思うが」

「本当ですか?!」

ジークは身を乗り出した。

「私も行きたい!」

アンジェリカも続いて身を乗り出した。サイファはすまなさそうに笑うと、彼女の頭にそっと手を乗せた。

「さすがにまったくの部外者を入れるわけにはいかないよ」

「そう……」

あからさまに落胆した様子でうなだれ、ソファの背もたれに身を沈めた。

「おまえ、まだまだこれからいくらでもチャンスはあるだろ。そんな顔するなって」

ジークは右手を上げかけて、そっと戻した。

「うん、そうね」

アンジェリカは沈んだ声で返事をした。

「さて、そろそろ帰るか」

ジークはリックに振り向いた。リックもこくりとうなずいた。

「あれ? レイラさんは？」

「あ、そういえば……」

ジークはすっかり忘れていた。

「レイラさんでしたら、あちらですわ」

レイチェルがにっこり笑って指し示した方を見てみると、長いソファで横になり、ぐっすり眠っているレイラがいた。体に掛けられたタオルケットは、おそらくレイチェルが気をきかせてくれたものだろう。ジークはカッと顔が熱くなるのを感じた。

「どうりで静かだと思ったぜ」

ズボンのポケットに手を突っ込み、やや背中を丸めて、母親のもとへ近づいていった。

「おい、起きろよ。ひとんちでくつろぎすぎだぞ」

「……もう、朝？」

レイラは大きくあくびをして目をこすりながら起き上がった。まだ目は虚ろで、ぼんやりとしているようだ。

「寝ぼけてんじゃねえぞ。そろそろ帰るぜ」

「ジークさん、まだゆっくりしていってくださいっても良いのですよ」

「これ以上、迷惑をかけるわけには……ていうか、本当にすみません……」

ジークは申しわけなさそうに背中を丸めて、レイチェルに頭を下げた。彼女は首を横に振ると、にっこり笑って彼を見上げた。アンジェリカとサイファも、その光景を眺めながら微笑んでいた。

「いろいろありがとう。楽しかったわ」

アンジェリカは両親の間に立ち、来客に最後の礼を述べた。

「僕らの方こそ楽しかったよ。ね、ジーク」

「ああ」

ジークはふいにアンジェリカから目をそらせた。頬をなでる冷たい風が、頭の芯をはっきりとさせる。そして、それは、夢のようなひとときの終わりを自覚させた。まだかすかに明るさの残る空に、カラスの鳴き声が寂しげに響く。

「また、今度ね」

アンジェリカは寂しさを押し隠し、にっこり笑ってみせた。

「……あんまり水やりすぎんなよ」

「えっ？」

「またなっ」

ジークはぶっきらぼうに右手を上げると、背を向け歩き出した。リックも彼女に手を振りながら、ジークのあとを追った。

「来年もまた呼んでね！」

レイラも大きく手を振りながら去っていった。

「水って何の話？」

レイチェルはちょこんと首をかしげてアンジェリカを見た。

「さあ？ 何なのかしら」

アンジェリカは本当にわけがわからないといった様子で、口を軽くとがらせ腕を組むと首を傾げた。

水、水、水……。

心の中でつぶやきながら、後ろで手を組み、アンジェリカは自分の部屋へ戻っていった。「水をやるなっていったらサボテンだけど、何かおかしくなっていたのかしら。今朝は元気だったはずだけど」

うーんと唸って首を傾げながら窓際に歩いていった。そして出窓の飾り棚を覗き込む。

「なに、これ」

ミニサボテンの鉢の隣に、見覚えのない小さな箱が無造作に転がっていた。手に取り、そっと蓋を開く。

「……えっ？」

その中に入っていたものはリングだった。レイチェルからもらった指輪とは明らかに別のものだ。なんの飾りもない、シンプルで細い銀色の輪。

「これだったのね」

アンジェリカはくすりと笑った。彼のいくつかの不可解な言動がひとつにつながった。

「もう、まわりくどすぎよ」

半ばあきれたようにそう言うと、左手の中指にそのリングをはめてみた。彼女の指には少し大きかったが、それでも満足そうだった。スカートをひらめかせ、くるりと一回転し、ふかふかのベッドに背中から倒れ込んだ。そして、くすくす笑いながら、まっすぐ上に左手を掲げた。

「宝物がもうひとつ増えた」

アンジェリカは目を閉じ、大切そうに銀の指輪を胸元に抱えた。

51. 国家機密

「はい、それじゃ 10分の休憩ね」

甘ったるい女性の声が、スピーカーを通し狭いブース内に響いた。ジークはヘルメットを取り、それを足元に置くと、扉を押し開けた。

「いいデータが取れてるわ。君を採用したのは正解みたいね」

今度はスピーカー越しではなく生の声。髪をアップにし、ヘッドセットをつけた女性が、にこにこしながら近づいてきた。かっちりとしたパンツスタイルのユニフォームだが、その声のせいか、丸顔のせいか、不思議と柔らかい印象を受ける。彼女はジークに冷えた缶コーヒーを差し出した。

「あ、どうも」

ジークはそれを受け取ると、その場ですぐにプルタブを起し開け、立ったままごくごく飲みだした。そして、ふうと一息つくと、額ににじんだ汗を手の甲で拭いた。

「ごめんね。ブース内は冷房がきかなくて」

彼女はヘッドセットを外し、首にかけると、打ち合わせ用の白い机にもたれかかった。ジークは椅子を引き、横向きに腰を下ろした。

「気が散るので静かにしてください！」

少し離れたところでモニタに向かっていた若い男が、怒りを含んだ声を発した。ジークがうんざりしたように振り向くと、その男は無言で睨みつけてきた。

「うるさいのはあなたの方でしょ！ ったく、いつもいつも……」

彼女はむっとして言い返した。腕を組み、口をとがらせ、彼を睨みつける。そしてジークに振り向くと、申しわけなさそうに笑ってみせた。

「ごめんね。気にしないで」

その瞬間、ガコンとスチール机を蹴飛ばす音が聞こえた。

「やあ、ジーク君。頑張っているか？」

聞き覚えのある声に、彼ははっとして顔を上げた。

「サイファさん！」

ジークは椅子から立ち上がり、小さくペコリとおじぎをした。隣の彼女も、慌てて机から飛び下り、勢いよく頭を下げた。短い栗色のポニーテールがひょこりと飛び跳ねる。

「この前の約束を果たしに来たよ」

「本当ですか?!」

ジークの顔がぱっと輝いた。そんな彼を、彼女は驚いたように見つめていた。彼女だけではない。フロア内の人間すべてが注目していた。遠くでかすかなざわめきが起こる。

「サイファ殿、今日はどのようなご用件ですか？」

茶色い口ひげをたくわえた中年の男が、後ろで手を組み、ゆっくりと近づいてきた。

「突然ですみません、ゴードン所長」

「あなたはいつも突然ですな」

サイファがにっこり笑いかけると、所長はもともと細い目をさらに細くした。

「今日は彼に下を見学させようと思ひまして。構いませんか？ もちろん私が同伴します」

ジークの肩にサイファの手がのせられた。こんなにも注目を浴びてしまっていることに、ジークは少なからぬとまどいを感じていた。驚嘆のまなざし、羨望のまなざし、嫉妬のまなざし、嫌悪のまなざし。さまざまな感情が突き刺さる。彼はそれらから逃れるようにうつむいた。

「ジークとお知り合いで？」

「娘の友達なんですよ」

サイファは屈託なくそう言った。ジークは顔を上げることができなかった。サイファの言っていることは間違っていない。だがこの流れでは、娘の友達だから特別扱いをされているように聞こえる。いや、実際そうかもしれない。しかし、そう思われることには抵抗があった。

「彼を信用できますか？」

所長はちらりとジークを一瞥すると、サイファに耳打ちをした。

「あなたはどう思います？」

サイファはジークから少し離れると、声をひそめて聞き返した。

「人間にはどんな裏があるかわかりませんか」

所長は慎重にそう言うと、再びジークを見た。しかし、サイファは軽く笑い飛ばした。

「彼はそんなに器用ではありませんよ」

「あなたがそうおっしゃるのでしたら」

ジークにはその会話はところどころしか聞こえなかった。だが、自分についての話であることは、ふたりの素振りで見える。気にはなったが、尋ねられる雰囲気ではない。

「私もついて行って構いませんか」

所長はサイファから体を離し背筋を伸ばすと、よく通る声を張り上げた。

「もちろんです」

サイファもそれに呼応するような、少し大きめの声で答えた。そしてジークに振り返ると、にっこり笑って手招きで呼んだ。

「あなたは規則を何だと思っているんですか！」

突然、若い声がサイファをなじった。その声の主は、先ほどジークに難癖をつけてきた男だった。彼はサイファを激しく睨みつけたが、笑顔で軽く受け流された。

「そう固いことを言うな。なんだったら君も来るか？」

「行きません！」

若い男はむきになって拒絶した。

「そうか、残念だな」

サイファはそれだけ言うと、あっさり彼に背を向けた。

サイファ、所長、ジークの三人は、研究所をあとにし、薄暗い廊下に出た。

「彼にはずいぶんと嫌われているようですね」

「優秀だが、神経質で頭が固いのが難点で」

前を歩くサイファと所長は、笑いながら話をしていた。

ジークは少し後ろめたい気持ちになっていた。ただのアルバイトである自分がこんなに特別扱いされても良いのだろうか。他のみんなが不快に思っていないだろうか。そんなことを、もやもやした気持ちで考え込んでいた。

やがて、地下へと続く階段に辿り着いた。階段の前には黄色の線が引かれ、それより向こう側は立入禁止区域であることを示している。

ふいにサイファが振り返った。真剣なまなざしでジークに問いかける。

「ジーク、ここで見たことは他言無用だ。もちろんアンジェリカやリックにもだ。守ることができるか？」

「はい」

緊張しながらも、まっすぐ視線を返す。サイファは探るように彼の瞳を見つめていたが、しばらくするとにっこり微笑んだ。

「よし、じゃあ行こう」

ジークは顔をこわばらせながら、黄色の線をまたいだ。

薄暗い階段を降りると、そこにはいかにも頑丈そうな扉があった。サイファはココンと軽くノックし、ドアノブをまわし開けた。煌々とした明かりとともに視界が開ける。ジークの目に中の光景が飛び込んできた。

「……上と変わらないですね」

ジークは拍子抜けしたようにぽつりつつぶやいた。たくさん並んだコンピュータ、実験ブース、会議用の机。すべて上の研究室にあるものと同じだ。ただし、部屋自体は上よりも狭く、かなり雑多な印象を受ける。彼にはどのあたりが機密なのか理解できなかった。

「扱っている研究の内容が、上より機密レベルの高いものなんだよ。コンピュータの処理能力も上とは比べものにならない」

ジークの心を見透かしたかのように、サイファはそう説明をした。それでもジークは落胆の色を隠せなかった。見た目からしてもっとインパクトのある何かを期待してしまっていたのだ。

「サイファさん、今日はどのようなご用件ですか？」

チーフの襟章をつけた男が声を掛けてきた。見た感じではサイファと同じくらいの年齢だろうか。こざっぱりと白衣を着こなしたさわやかなその姿は、散らかった研究室には不釣り合いに見える。

「今日はただの見学ですよ。気にせず仕事を続けてください」

サイファはにっこり笑いかけると、ゆっくり見回り始めた。所長はチーフと仕事の話をはじめたようだった。黙って突っ立っていても仕方がないので、ジークもサイファについて見てまわることにした。彼の後ろから邪魔にならない程度に覗き込む。モニタを見てもジークに研究の内容はわからない。だが、サイファはそれについて研究員と議論をし、指示を出したりしている。優れた魔導士でありながら、科学技術にも精通しているようだ。ジークは研究所より、彼のこの方

が気になり始めていた。

「すまない、退屈していたか？」

サイファは、ジークがぼうっとしているのに気がつくと、振り向いて声を掛けた。

「いえ……」

ジークは少し耳元を赤らめると、うつむいて言葉を濁した。

「次へ行くとするか」

サイファは振り返り、軽く右手を上げ、離れたところにいる所長に合図を送った。

「……え？」

ジークは意味がわからず聞き返した。

「行くだろう？ レベルA区域」

サイファは、逆に不思議そうに聞き返してきた。

「レベルA区域……？」

「知らなかったのか。セキュリティレベルによって、フロアが分かれているんだ。上がレベルC区域、ここがレベルB、この下がレベルAだ。下はここよりさらに機密レベルが高くなっている」

彼は淡々と説明をした。

所長はチーフとの話を切り上げ、サイファの方へやってきた。

「行きますか」

「ええ」

ジークは、並んで歩くふたりのあとをついていった。

サイファは入ってきた方とは反対側の扉を開けた。そこには暗く細い下り階段だけがあった。階段の前には橙色の線が引かれている。ここから先がレベルA区域という印のようだ。一步踏み出すと、ひんやりした空気が肌にしみてきた。

「足元に気をつけて」

サイファは初めてのジークを気づかうと、靴音を響かせながら、暗闇へと降りていった。所長はジークを先に行かせると、そのすぐあとをついていった。

階段を降りきると、鉄製の物々しい扉が行く手をふさいでいた。サイファは体重をかけ、ゆっくりと押し開けた。

「あっ、VRMですね！」

ジークは開きかけた扉の奥にある機械を見つけ、弾んだ声をあげた。

「そう。ここでVRMを作り、魔導発動の仕組みを研究している」

三人は煌々と光のともったレベルA研究室へ足を踏み入れた。上の研究室とはかなり趣きが違う。未完成のVRMが二体中央に置かれ、そこから多数のケーブルが伸び、絡み合い、大小さまざまなコンピュータにつながれていた。床には工具や計測器が雑然と転がり、足の踏み場もないほどだ。奥の大きなマシンが轟々と唸りを上げている。ひとりはチーフの襟章をつけ、デスクトップコンピュータに向かっている。ひとりは右手に持った小さな機械で何かを計測している。そして、もうひとりは、絡み合ったケーブルの上に寝そべり、VRMの下部にコードを接続しようと

していた。

「あっ、サイファさん！」

コンピュータに向かっていたチーフが驚いた声をあげ立ち上がると、他のふたりも慌てて立ち上がろうとした。だが、サイファはそれを制した。

「今日は見学に来ただけだ。そのまま続けて」

そう言うと、三人に向かってにっこりと笑いかけた。

「アカデミーのもここで作ったんですか？」

ジークは後ろから尋ねた。

「ああ」

サイファは前を向いたまま、腕を組んで答えた。

「神経、脳波、血流、細胞の変化から、体の動きと魔導の発動と制御を的確にシミュレートする。君たちは何気なく使っているだろうが、すさまじい技術の結晶だよ、これは。それゆえ一般に販売することも、他で作らせることも一切ない」

サイファに指摘されたとおり、ジークは深く考えず何気なく使っていた。言われてみれば、確かにすごそうな技術である。だが、彼には難しすぎて理解できそうもない。

「実はこれ、ラウルの理論に基づいて作られたんだよ」

「ラウルの?!」

思わぬところで思わぬ人の名前が出てきたことに、ジークはとまどいを感じた。

「彼の理論は私たちの何十年も先を行っているものだったよ。彼が我々の科学水準を20年、30年引き上げたといっても過言ではないだろう」

VRMを見下ろしながら、サイファは淡々と語った。ジークは眉をひそめ、けわしい表情を作った。

「何者なんですか。いろいろ怪しすぎませんか」

「さあ、何者なんだろうね。この国ではない、遠いところからやって来たらしいが」

サイファはVRMに片手をかけながら、ケーブルを踏みしめ、ゆっくりそのまわりを歩き始めた。

「しかし何かを企むには長すぎるだろう、300年は」

「300年?!」

ジークは素っ頓狂な声をあげた。サイファは足を止め、少し驚いたような顔で振り返った。

「知らなかったのか？ ラウルがこの国にやって来て、およそ300年だそうだ。その間、姿はまるで変わっていないらしい」

若く見えるがかなり年がっているという噂は聞いたことがあったが、まさか300年とは思ってもしなかった。ジークはただただ驚くばかりで、声も出なかった。

「何を考えてやって来たのかはわからないが、悪いやつではないと思っているよ」

サイファはそう付け加え、にっこり笑ってみせた。VRMを挟んだ向こう側から、所長がさらに一押しした。

「私もその意見に賛成だ。金にも地位にも名誉にも、まるで揺るがされることのない、数少ない

人間だよ」

ジークはうつむき口を結んだ。

「だいたい何かを企てようとしている男が、赤ん坊を引き取って育てようとするか？」

サイファは軽く笑いながら言った。それでもジークは深く考え込んだままだった。思いつめたように眉根にしわを寄せる。

「洗脳して何かをさせようとか……」

真面目な顔でふいにぼつりつぶやいた。サイファはきょとんとして彼を見た。そして、次の瞬間、上を向いて大笑いした。

「あっははははは。そんなまわりくどいことをする必要があると思うか？ ラウルが本気を出せば、こんな国などあっというまに崩壊させられるよ」

「サイファさんは……」

「足元にも及ばないさ。みんなで束になってかかっても無理だろうね」

確かにラウルが強大な魔導力を持っていることはわかる。しかし、いくらなんでもそれは言いすぎなのではないかとジークは疑っていた。サイファでさえ足元にも及ばない力など想像もつかない。自己の謙遜なのだろうか、相手の過大評価なのだろうか。それとも事実なのだろうか……。そんなことを考えていると、サイファは優しく、しかしどこかはかなげに、ふっと笑いかけた。

「君も本当は感じているのだろう？ ラウルが悪い人間ではないと。好き嫌いは別にして」

そう問かけられると、ジークはうつむき、ぎゅっと結んだ口を歪ませた。そして、そのまま何も答えることができなかった。

「さあ、次へ行こうか」

サイファは明るく声を弾ませると、ジークの背中をポンと叩いた。

「レベルS区域へも行くおつもりで？」

所長は重々しく声を低め、鋭い視線をサイファに向けた。しかし、彼は笑顔でそれを受け止めた。

「ついでですからね。何かあれば、責任は私が負いますよ」

そう言って、ジークの肩に手をかけた。

「まだ先があるんですか？」

ジークはサイファに視線を流しながら尋ねた。先ほどの話では、レベルA区域の話までしか出てこなかった。

「そうだよ。ごく限られた者しか立ち入りを許可されていない区域だ」

サイファはジークの肩を抱えたまま、奥の鉄壁の前までやってきた。ドアノブも、手に掛けるものも、何もない。これは扉なのだろうか。ジークはぐるりと見回しながらいぶかった。サイファは、そんな彼ににっこり笑いかけると、その鉄壁の端に埋め込まれた、四角く黒いプラスチック板のようなものに親指を押しあてた。ピピッと小さな電子音が聞こえたかと思うと、プシューという空気音がそれに重なった。次の瞬間、鉄の塊が唸りを上げ、中央から上下に分かれてい

った。

「さあ行こう」

サイファは呆気にとられているジークの背中を軽く押した。呆然としながらも、彼は促されるままに足を前に進めた。三人が奥に入ると、再び鉄壁が轟音を上げ、元に戻った。

「あんな若い子を連れて行って、どうするつもりなんですかね」

レベルA区域で、研究員のひとりが、閉じられた壁を見つめながら首をひねった。そういう彼自身もまだけっこう若いように見える。

「サイファさんのことだ。何か考えがあつてのことだろう」

コンピュータに向かったまま、チーフは冷静に答えた。

鉄壁の奥には、レベルBからレベルAへ向かうときと同じように、細く暗い下り階段があった。今度もやはり線が引かれていた。色は赤のようである。暗みに沈んでしまつて、いまいちわかりづらい。

サイファが先頭になって下り、その後ろにジーク、最後に所長と続いた。一段ごとに空気が冷え込んでいく。サイファが下りきると、それに呼応するかのようになり、明かりがともった。明るすぎるくらいの蛍光灯の光。ジークは反射的に右手をかざすと、顔をしかめながら目を細めた。

「これは……」

目が慣れてきたジークの視界に映つたものは、オレンジ色の液体が入った巨大な円筒だった。人間がひとり中で泳げるくらいのはある。自分たちを取り囲むように、四体がそびえ立っていた。中の液体は静かに循環しているようだった。モーターの低い振動音が腹に響いてくる。

「魔導の源となる物質、エネルギー増幅素子だよ」

サイファはさらりと言った。ジークは圧倒され、口を半開きにして、そのオレンジ色の円筒を見上げていた。概念としてしか知らなかった物質が、目の前に、それも大量にその存在を示している。なぜだか得体の知れない恐怖を感じた。畏怖の念に近いかもしれない。なぜ、どうして、どうやって……。いろんな疑問が矢継ぎ早に頭を駆け巡るが、まったく言葉が出てこなかった。

「我々は純度99.75%まで精製することに成功している」

サイファは感情なくそう言うと、円筒のガラス面に軽く手を置いた。手のひらがオレンジ色の光に染まる。

「アカデミーで習つただろう。体内のエネルギーをこの素子で増幅させ放出するのが魔導の基本。この素子を持たずに生まれた者は、いくら努力をしても魔導を使えるようにはならない」

「何のために、これ……」

ジークはようやくそれだけの言葉を絞り出した。背中に寒気を感じながら、額には汗がにじむ。サイファは顔だけわずかに振り返った。真剣な表情で、鋭い視線を突きつける。

「この国を守らなければならない。来たる脅威に備え、出来る限りの対抗手段を準備する。それが私たちの仕事だ」

「これを、どうやって……」

ジークの声はかすかに震えていた。

「体内に注入すれば、一時的に強大な魔導を発動できるようになるだろう。理論上はね」
オレンジ色の液体を見上げ、サイファは淡々と語った。

「理論上……」

ジークはおうむ返しにつぶやいた。

「誰も試したことがないんだ。拒絶反応や副作用が起こる可能性が未知数でね。人体実験が禁止されているんだよ」

サイファは再び振り返ると、意味ありげに小さく笑った。ジークの心臓は飛び出しそうなほどに強く打った。そして、次第に鼓動が速くなっていった。

——まさか、俺に？

こんなに楽なのに、こんなに時給がいいなんて、よく考えるとおかしい話だ。何か裏がある、どうしてそう思わなかったのか。いつかのアンジェリカの言葉がフラッシュバックする。

——モルモットってこと？

ジークは小刻みに震える唇から、声にならない息を漏らすと、おびえるように瞳を揺らした。そんな彼をさらなる深みへ突き落とすように、サイファは冷たい視線を送った。

「決めるのは君だ。我々の未来のためにその身を捧げるか、それとも今日のことをすべて記憶から抹消しここから出ていくか……。たとえ君が後者を選んでも、私は君を責めはしない」

いつもの柔和な表情からは想像もつかないほどの冷酷で厳しい瞳。

「さあ、どうする？」

無表情で決断を迫る。彼の言葉がぐらぐら頭に響く。何も考えられない。ただひたすら恐怖を感じていた。でも何か……何かを言わなければ……。

「サイファ殿、少々悪ふざけが過ぎやしませんか？」

沈黙を打ち破ったのは所長だった。細い目をさらに細くして、ややあきれたような顔をサイファに向ける。サイファはにっこりと笑った。

「あまりに彼が怯えるもので、つい調子にのってしまいました」

所長もつられて笑い出す。

「いやしかし、なかなか見事な演技でしたぞ。いつ首を切られても安心ですな」

「主演男優賞でも狙いましょうか」

ふたりは顔を見合わせて笑いあった。

「……え……あ……」

ジークは話が飲み込めずにとまどった。

「すまない。冗談だったんだよ」

サイファはにこにこしながら振り返った。ジークは呆然としたまま、目をぱちくりさせた。

「……どこ、から？」

「君に実験台を頼んだけりからだよ。今はこれを結晶化して使用できないか、またハンドオン装置を作成できないかという方向で進められている」

ジークはようやく安堵した。強く打つ鼓動を鎮めようと小さく息をつく。しかし、そう簡単に

落ち着かせてはもらえないようだ。

「いずれ人体実験を行うときが来るかもしれないが……」

サイファは不吉な言葉を付け加えた。茶化しているふうではない。今度の言葉は本心なのではないか。ジークに再び緊張が走った。

「そういえば君は四大結界師を目指しているそうだな」

「目指してるってというか、そうなれたらいいっていうくらいですけど……」

ジークは突然、自分のことに話を振られてどきりとした。自信なさげにおそるおそる答える。普段、リックやアンジェリカの前では大口を叩いているが、さすがにサイファの前では畏縮してしまうらしい。

「だったら、いい予行演習になったかもしれないな」

サイファはニッと笑いかけた。オレンジ色の円柱にもたれかかり腕を組む。

「案外、知られていないことだが、四大結界師は物理的、環境的だけでなく、政治的にも国を支えている」

ジークもそのことは知らなかった。少し驚いたような顔を見せると、サイファはさらに説明を続けた。

「王族に次ぐ大きな権限を与えられていてね。単に魔導力を注ぎ込むだけの楽な仕事ではないんだよ。仕事の大部分は政治的なものだといってもいい」

サイファは淡々と話を続ける。

「それゆえ、こういった残酷な選択を突きつけられることも、少なからずあるだろう」

ジークは呆然としていた。

「君には度胸とハッキリと決断力が足りないな。これから少しづつ身につけていくといいだろう」

サイファはにっこり笑って、ジークの肩にぽんと手をのせた。その瞬間、ジークは膝から崩れ落ち、その場にへたり込んだ。

52. 遺恨

「本当に悪かったね」

サイファはジークの肩を抱き、笑いながら謝った。

サイファ、所長、ジークの三人は、一階の研究室に戻ってきていた。サイファが現れたときと同様、他の研究員たちの注目を浴びている。ジークは気になって仕方なかったが、サイファはまるで気にしていないかのように、平然と話を続ける。

「そうだ。今から飲みに行かないか。もちろん私のおごりだ」

チャンスかもしれない、ジークはとっさにそう思った。以前レオナルドが言っていたことを尋ねる絶好の機会だ。

「はい」

「よし、さっそく行くか」

サイファはジークの肩にのせた手を、力を込めて揺らした。

「定時まであと30分ありますけどお？」

やたらジークやサイファに突っかかってくる若い研究員が、今回も嫌みたらしくけちをつけてきた。しかし所長がそれを制した。

「いいんだ。サイファ殿、どうぞ連れて行ってください」

「感謝します。この埋め合わせはまた」

サイファはにっこり笑うと、とまどうジークの肩を抱いて外へ出ていった。

ふたりの背中を睨みつけるようにして見送ると、若い研究員は所長にくっついてかかった。

「どうしていつも好き勝手やらせておくんですか！ ラグランジェ家の当主だからですか？！ それとも魔導省のお偉いさんだからですか？」

所長はおだやかに目を細めて答えた。

「おまえは知らないだけだ、彼のことを。我々が彼の家や地位にかしずいていると思うか？」

若者は複雑な表情で下唇を噛みしめた。そんな彼を見て、所長は真面目な顔で付け加えた。

「いずれ、おまえにもわかる時がくるだろう」

陽の落ちかけた寂れた路地裏を、サイファとジークは並んで歩く。ジークがここに来たのはずいぶんと久しぶりだった。不安からか、ついあたりを見回してしまう。あいかわらず人の姿はほとんどない。

看板すら出ていない、薄汚れた建物。その地下がフェイの酒場だ。サイファ、ジークと続いて扉をくぐった。

「お久しぶりです、フェイさん」

サイファは、カウンターにひじをついている黒髪の女性に声を掛けた。

「あら、ずいぶんと久しぶりじゃない。娘は元気なの？」

「ええ、元気すぎるほどですよ。たまには会いに来てください」

「あんなところ、冗談じゃないよ」

彼女はほおづえをついたまま、けだるそうに吐き捨てた。この人がこの酒場の女主人フェイである。彼女は王妃アルティナの母親だ。雰囲気は似ているが、フェイの方がだいぶくたびれた感じである。

まだ早い時間のためか、客は誰もいない。

サイファはつつかと店の中に入っていき、カウンターの丸椅子に腰を掛けた。ジークもその隣に座った。

「おすすめのブランデーをいただけますか？」

「そう言うと、いちばん高いやつにするよ。ストレートでいいね」

およそ客相手とは思えないほどぶっきらぼうなフェイに、サイファはにっこり笑顔で答えた。

「ジーク、君は？」

「えーと、じゃあ、スクリュードライバーで」

フェイは返事をする事なく背を向けた。棚から取り出したボトルを開け、ブランデーグラスに深みのある濃い琥珀色の液体を注ぐ。そして、今度はカラカラと音をさせながら、手慣れた様子でスクリュードライバーを作り始めた。

ジークは何とはなしにそれを眺めていた。

彼女は手早く作り終わると、二つのグラスをふたりの前に置いた。そしてつまみを一皿、ふたりの間に置いた。サイファはグラスを手のひらで包み込むように持つと、それをジークに向けた。ジークも細長いカクテルグラスを手にとった。ふたりは互いに目を見合わせると、無言でグラスを軽く合わせた。

「今日はどうだった？」

サイファは一口つけたあと、ジークに向かいにっこりと笑いかけた。

「知らない世界を見たような気分です。あんなに科学技術が進んでいるなんて、思いもしませんでした」

ジークはふいに思いつめたような顔でうつむいた。

「いずれは、誰でも道具の助けを借りながら、魔導が使えるようになるってことですか」

グラスを持つ手に力を込め、眉をひそめる。そんな彼を見て、サイファはふっと小さく笑った。

「そうはならない。というか、させないつもりだ。少なくとも私の生きている間はね」

彼は右手のブランデーグラスをそっと揺らした。芳醇な香りが立ちのぼる。

「剣や弓とはわけが違う。新しい力を手に入れ、暴走する愚か者がわんさと出てくることは想像に固くない。我々のような魔導を扱える者は、真っ先に標的になるだろうね。秩序は崩壊し、混沌がこの国を覆うだろう。悪くすれば国がつぶれかねない」

ジークは下を向いたまま、はっとした。彼はそこまでのことを考えていたわけではなかった。単に魔導が使えることの価値が薄れていくのではないか、つまり、自分の価値がなくなってしまうことを懸念していた。言われてみれば、確かにサイファの言うとおりのことだ。彼は自分の小ささを痛感した。

「研究はあくまで有事のときのだめだ。何も起こらなければ使うつもりもない。だから厳重に管理しているんだよ」

サイファはジークを安心させるように、にっこりと笑いかけた。

——カランカラン。

扉が開き、中年の男三人が連れ立って入ってきた。三人ともサイファと同じ濃青色の服を着ている。

「おお、サイファ殿。こんなところで会うとはめずらしいですな」

その中のひとりが、サイファを見つけると親しげに声を掛けてきた。

「いつも誘ってもめったに来ないだろう」

「サイファ殿は愛妻家ですからなあ」

「あれだけ若くて可愛い嫁をもらえば、それも仕方ないだろう」

三人は口々に勝手なことを言い出した。

「いえ、仕事が忙しいんですよ」

サイファはうろたえることなく、冷静に笑顔で切り返した。

「そういうことにしておきますよ」

三人は彼を見ながら少しにやつくと、奥の丸テーブルについた。

「誰ですか？」

ジークは後ろをこっそり盗み見た。

「魔導省育成科の連中だ。毎日のように飲んでばかりだよ」

サイファは感情なくそう言うと、ブランデーに口をつけた。

レイチェルの話題が出てきたことで、ジークは目的を思い出した。

「……聞きたいことが、あるんですけど」

こわごわと切り出し、サイファの反応をうかがった。彼はまるで顔色を変えることなく、ジークに振り向いた。

「なんだ？」

ジークは少しためらったが、やはり思いきって尋ねる決心を固めた。

「レオナルドが言っていたことで、俺は信じてるわけじゃないんですけど、少し気になって」

レオナルドの名前が出ると、サイファの瞳に一瞬、鋭い光が宿った。ジークは気押しされそうになりながらも話を続けた。

「アンジェリカが呪われた子と言われているのも、家族を不幸にしているのも、全部サイファさんのせいだと……」

まわりを気にしながら声をひそめる。サイファは目を伏せ、思いつめたような顔で考え込んだ。

「レオナルドがそう言ったんだな」

彼は視線を落としたまま、落ち着いたしっかりした声で念を押した。

「はい」

ジークは首を縦に振った。サイファの言動に不安を覚えつつも、否定してくれることを期待していた。期待というより強い希望といった方がいいかもしれない。レオナルドの言うようなことが事実であるはずがない。ずっとそう思ってきた。今はその確証が欲しかった。

しかし、サイファが口にしたのは望んでいたものとは違う言葉だった。

「彼が言っていることには心当たりがある」

ジークの頭に、ガツンと衝撃が走った。

——カランカラン。

再び扉が開き、ふたり連れが入ってきた。服装からすると、今度も役人のようだ。

サイファはカウンターの向こうのフェイに声を掛けた。

「フェイさん。個室を貸していただけますか」

「特別料金を上乘せするわよ」

彼女はため息をつきながらも、親指で奥を指した。

「行こう」

サイファはグラスを持ったまま立ち上がり、ジークの肩に手をおいた。ジークの鼓動は心臓を突き破りそうなほど強く打っていた。奥に行くということは、まわりに聞かれたくない話ということだ。真実は知りたい。だが怖い。ただ否定をしてほしかっただけなのに、こんなことになるなんて……。しかしもう後戻りはできない。彼は覚悟を決め、無言でサイファのあとをついていった。

サイファが個室と呼ぶ部屋、すなわちフェイの応接間兼リビングルームへやってきた。サイファはためらいなく奥へ進み、古びたソファに腰を下ろす。そして、ジークにも向かいのソファをすすめた。彼は気後れしながらも、それを悟られないようにと必死だった。だが、その努力も虚しく、あからさまに動きがぎこちない。なんとかソファに座り、顔だけは平静を取り繕ってみせた。

「レオナルドが言っていたことだが……」

サイファはためらったように言葉を詰まらせた。ジークの緊張は一気に高まった。ごくりと喉を鳴らす。

「結婚する前に子供が出来たんだよ」

「……はい？」

あまりにも予想を超えた答えに、ジークは素頓狂な声を上げ、啞然としていた。その内容にも驚いたが、今までの話とどうつながっているのかまるでわからない。

サイファは琥珀色の小さな水面に目を落とし、自嘲げみに小さく笑うと話を続けた。

「当時、親戚たちに、まことしやかに言われたものだよ。モラルに反する行いが、神の怒りを買って、子供が呪われてしまったんだとね」

ようやくつながりが見えてきた。レオナルドはこのことを言っていたのだ。ジークはようやく納得した。

サイファは顔を上げると、グラスを持ったまま両手を広げ、肩をすくめてみせた。

「おかしいだろう？ 魔導でさえ科学で解明されようとするこの時代に、呪いなどバカバカしいにもほどがある。アンジェリカは呪われてなどいない」

サイファはいつになく感情的にまくしたてた。

「レイチェルを苦しい立場に追い込んでしまったのは、私のせいだと言えるかもしれないがね」

ふいに寂しげな表情を浮かべると、ブランデーを一気に飲み干した。

「そう、ですか」

ジークは何と言っていいかわからなかった。複雑な顔で目を伏せる。だが、少しほっとしていた。サイファがレイチェルたちを裏切るようなことをしていたわけではなかったのだ。家族を想う気持ちはきっと本物だろう。

サイファは立ち上がり、戸口へ向かうと、ブランデーのボトルを持って戻ってきた。ソファにどっかりと腰を下ろすと、ボトルの蓋を開け、自分でグラスに注ぎ始めた。

「しかしまだにそんなことを言っているとは、そうとう根にもたれているようだな」

ふっと軽く笑い、グラスに口をつけ傾けた。

「レオナルドに、ですか？」

「ああ、君は知らないんだな」

ふと気づいたようにそう言うと、右手にのせたグラスを揺らし、琥珀色の波を立てた。

「レオナルドはレイチェルのことが好きだったんだよ。小さいころから、おそらくつい最近までずっとね」

表情ひとつ動かさずに説明をする。そして、残りのブランデーを一気にあおった。

ジークは驚いて声も出なかった。今日は驚きっぱなしである。

「家が近かったこともあって、レイチェルはよくレオナルドと遊んでやっていたんだ」

サイファは再びボトルを手にとりグラスに注いだ。

「その頃には、すでに私とレイチェルが結婚することは決まっていたし、レオナルドもそれを知っていたはずだが、幼さゆえに実感できなかったんだろう」

右手の上にグラスをのせると、それを目の高さに掲げ、蛍光灯にかざした。郷愁を誘うセピア色が、彼の顔を彩る。

「それが、16の若さでいきなり結婚だ。引き離されたように感じて、ショックを受けたんだろうな」

右手をゆっくりとまわし、グラスの中でブランデーを転がす。立ちのぼる深く豊かな香りに包まれながら、そっと目を伏せると微かに自嘲した。

「それからだよ、彼がひねくれだしたのは。私を目の敵にし、その矛先はアンジェリカにも向けられたよ。私に対しては構わないが、アンジェリカを傷つけることだけは別だ。許すわけにはいかない」

きっぱりと言い切ると、再び一気に飲み干した。

——カラン。

スクリュードライバーの氷が崩れて音を立てた。ジークはすっかりその存在を忘れていた。水

滴に覆われたグラスを手にとり、一口、二口、流し込んだ。上の方は氷が融けて、やや水っぽくなっていた。

「今、ユールベルはレオナルドのところに住んでいるらしいな」

「はい。きっと今はユールベルのことが……」

「少し、心配だな。けっこう思いつめるタイプでね」

サイファの話を書くにつれ、ジークがレオナルドに対して抱いていたイメージが変わってきた。彼にもいろいろと抱えているものがあり、理由があった。それでもやはり好きにはなれないと思うが、少しは理解できたような気がした。

サイファはほおづえをつき、ジークを見つめながら、目を細めてかすかに笑みを浮かべた。

「君は素直だな」

「え？」

「少しは疑うことを覚えた方がいい」

ジークははっとした。

「あ……すみません。レオナルドの言葉を真に受けたわけじゃなかったんですけど」

彼は申しわけなさそうに頭を下げた。しかしサイファは、彼ではなくどこか遠くを見ているようだった。

「私が真実を言っているとは限らないぞ」

意味ありげなその言葉が、ジークを不安に陥れた。彼は何を意図しているのだろうか。自分を試しているのだろうか。彼の表情からは何も読み取れない。

「……どういうことですか？」

息が詰まりそうになりながら尋ねる。

「簡単に人を信用しない方がいいということだ」

サイファは真面目な顔でそう言いながら、ブランデーのボトルに手を掛けた。

「嘘をついているわけじゃないんですよね？」

「どうかな」

少しも表情を動かすことなくはぐらかす。ジークには、彼が何を考えているのかまるでわからなかった。しかし、もうこれ以上の追求などできない。どうすればいいのかわからない。すっかり困り果て、うつむいて口をつぐんでしまった。

「悪い、飲み過ぎたようだ」

サイファはブランデーに手を掛けたまま、深々と頭を下げた。そして、ゆっくりソファの背もたれに身を預けると、天井を仰ぎ、額に手の甲をのせた。

「大丈夫ですか？」

「ああ」

ジークが立ち上がろうとしたそのとき、フェイが両手に皿を持って入ってきた。サイファの様子を目にしたあと、机の上に視線を移す。

「あきれた。この短時間でこんなに飲むなんて」

半分以下になったボトルを覗き込み、ため息まじりに言った。

「何があったか知らないけど、いい大人なんだから自制しなさい。君も止めなさい」

料理が盛られた皿を机の上に置きながら、母親のようにふたりをたしなめた。

「すみません」

ジークは小さく頭を下げ、素直に謝った。しかし、いいわけしたい気持ちも少しはあった。サイファは顔色が変わらないので、酔っているかどうか見た目ではわかりづらい。どう止めたらいいというのだろう。そう思ったが、口には出さなかった。

「水を持ってくるわ」

フェイはその言葉を残し、戻っていった。

「サイファさん……」

ジークは遠慮がちにそっと声を掛けた。目を閉じている彼を見て、眠ってしまったのではないかと思った。だが、彼はしっかり意識を保っていた。

「大丈夫だよ、心配ない」

目を閉じたままだったが、いつものはっきりした口調だった。

「俺のせい、ですか？」

ジークはよくわからないまま、そう尋ねていた。不安そうに顔を曇らせる。

「君は悪くないよ」

サイファはなだめるように優しく答えた。

フェイが水を持って戻ってきた。

「あのときみたいなのはごめんだからね」

そう言いながら、サイファにグラスを差し出した。彼は体を起こすと、にっこり笑ってそれを両手で受け取った。

「もうあんな昔のことは忘れてください」

「思い出させるようなことをするからよ」

フェイはブランデーのボトルとグラスを手にとった。

「これはおあずけ。料理はどうする？ 食べられるようなら持ってくるけど」

「ええ、お願いします」

サイファがにこやかにそう言うと、フェイは小さく笑って再び戻っていった。彼女のこんな表情を見たのは、ジークは初めてだった。

「昔ね、一度だけ酔いつぶれたことがあったんだよ。みっともない話さ」

サイファはひとくち水を飲むと、笑いながら自ら語った。気になっているけれど聞きづらそうなジークの素振りを察してくれたようだった。

「サイファさんでもそんなことあるんですね」

ジークは驚いたような、妙に感心したような様子で、そんな言葉を漏らした。

「失望したか？」

「いえ、なんだか安心しました」

安心したというのが適切な表現かどうかはわからない。だが、それはジークの本心だった。非の打ちどころのない人だと思っていたサイファにも、こんな失敗があったのだ。それを知ること、ほっとしたと同時に親しみもわいてきた。

「ジーク、君にお願いがある。今日の話はアンジェリカには内緒にしておいてくれ。レオナルドのこともな」

「……言えませんよ」

ジークは少し耳元を赤らめて目をそらせた。たとえ言えといわれても、自分の口からはとても言えない。

「そうか、そうだな」

サイファは下を向き、愉快そうに吹き出して笑うと、フォークを手にとりサラダをつついた。

53. 辿り着く場所

「そろそろ支度しなければ遅刻だぞ」

自室に戻ってきたレオナルドは、いまだベッドで布団をかぶるユールベルに声をかけた。丸テーブルに置かれた朝食は手つかずのままである。

「どうした。気分でも悪いのか」

レオナルドは顔色をうかがおうと覗き込むが、彼女は顔をそむけ、より深く布団にもぐり込んだ。

「今日は休むわ」

布団の中からくぐもった声が聞こえた。

「体調が悪いのか。だったら俺も休むよ」

わずかにのぞいた後頭部の金髪をそっとなでる。

「いいの。あなたは行って」

「放っておけるか」

「お願い。ひとりになりたい気分なの」

静かに懇願する。レオナルドは目を細め、じっと彼女を見つめた。

「……わかった」

しばしの沈黙のあと、ぽつりとそのひとことを落とした。そして、布団をわずかに下げると、彼女のほほに軽く口づけた。

「何かあったら下の母親に遠慮なく言うんだ」

返事はなかった。しかし、それを求めることはしなかった。再び彼女の頭に手を置いた。

「行ってくる」

レオナルドは後ろ髪を引かれる思いで部屋をあとにした。

「今日はその子どうしたの？」

ひとり階段を降りるレオナルドに、階下を通りかかった母親が尋ねた。

「彼女、体調が悪いようなんだ。面倒を見てやってほしい」

「まったくやっかいなことばかり……」

母親は顔をしかめてため息をついた。その態度にレオナルドはむっとしたが、彼女の機嫌を損ねないようぐっところえた。

「仕方ないだろう」

リビングルームから野太い声が響いてきた。レオナルドは無意識に眉をひそめ、開いていた扉から中に目を向けた。そこにはどっしりとソファに腰を下ろし、大きく新聞を広げる父親がいた。気難しい横顔に冷徹な瞳。いつもどおりの表情である。

「サイファに頼まれたんだからな」

レオナルドははっと目を見開き、とたんに顔を曇らせた。

「あんな若造でもラグランジェ家当主だ。命令には逆らえん。そうでなければ、とっくに放っぼ

り出している」

父親は苦々しげに顔をしかめると、二つ折にした新聞をテーブルに叩きつけた。

「おまえは昔からやっかいごとばかり持ち込むな」

ソファにもたれかかり腕を組むと、戸口に立つ息子に冷めた視線を投げつけた。

「だいたいバルタスのところの娘は死んだという噂だったろう。足はついているのか？」

そのひとことで、レオナルドは一気に頭に血をのぼらせた。父親を激しく睨みつけ、奥歯をぎりぎりとしめつける。しかし、彼には何の効力もなかった。むしろ怒らせただけである。

「なんだ、その態度は。文句があるなら一人前になってから言え！」

迫力のある低音に威圧され、レオナルドは身をすくませる。くやしいが、何も言い返せなかった。

ユールベルはベッドから降り、ふらふらと光の差し込む窓に歩み寄った。まぶしさに右目を細めながら、窓枠に指を掛け、外を見下ろした。レオナルドの後ろ姿が見える。彼は門の手前で振り返り、大きく右手を振った。彼女もつられて手を上げかけたが、すぐに元に戻してうつむいた。

ギィ……。

ユールベルは音のする方を見た。扉がゆっくりと開く。そこから姿を現したのは、レオナルドのふたりの弟だった。彼女はほとんどをレオナルドの部屋で過ごしている。そのため、同じ家に住んでいるものの、他の家族とはときどきすれ違うくらいで言葉を交わしたこともない。大きい方のロルフはユールベルと同じくらいの年頃だ。なぜか敵意をむき出しにして、彼女を睨みつけている。小さい方のマックスは、そんな兄の後ろでただおろおろしている。

ロルフは意を決したようにごくりと喉を鳴らすと、ずかずかと部屋に入ってきた。まっすぐにユールベルへと向かう。そして勢いよく彼女の胸ぐらを掴み上げた。ブチブチッという鈍い音とともにボタンがはじけ飛び、薄地のネグリジェの襟ぐりが大きく開いた。

「おまえが来てから兄貴がおかしくなったんだよ。何を企んでいるんだ」

「別に、何も」

冷静に答える彼女を見て、ロルフはさらにカッとなった。胸ぐらを掴んだ手を振りおろし、床に叩きつけるように倒した。そして、彼女に馬乗りになると、細い首に手を掛けた。

「返せよ、兄貴を……。昔の兄貴を！」

歯をくいしばり、額に汗をにじませ、ギリギリと指に力をこめる。ユールベルは苦しそうに眉根にしわを寄せるが、抵抗もせず声も発しない。

「ロルフ兄さん！」

マックスの呼びかけで我にかえり、はっとして手を緩めた。彼女の白い首には、くっきりと指の跡が残っていた。彼女はゆっくりと右目を開き、無表情でじっと彼を見つめた。

「き……気味わるいんだよ！」

彼女の視線にうろたえながら叫ぶと、左目の包帯に手を掛け、乱暴にむしり取り始めた。

「この包帯も怪しいんだ！！」

ユールベルは無抵抗だった。ゆるく結ばれていた包帯はすぐに頭から外れた。左目があらわになる。

「……っ！！」

焦点の定まらない瞳、焼けただれた跡。ロルフはぎょっとして後ろに飛び退いた。マックスも息をのんで後ずさった。

「包帯の下に傷があるのは当たり前だ……。レオナルドはそう言ったわ」

ユールベルは仰向けのまま、虚ろに天井を見つめてつぶやいた。弟たちは言葉に詰まり、口を真一文字に結んだ。

「言われなくても、もうすぐ消える」

ユールベルは、かぼそく息をするように言葉を吐いた。ロルフは腹立たしげに顔を歪ませた。

「とっとと出ていけ！」

精一杯、気張ってそう吠えたと、走って部屋を出ていった。マックスも、おろおろしながらロルフのあとを追った。

ドタン。

再び扉が閉じられ、ユールベルはひとりになった。仰向けになったまま、少しあごを上げ、ガラス越しの四角い空を見上げる。

——すぐに、消えるわ。

そのままの姿勢でベッドの下に手を伸ばし、そこに隠してあった茶色の小瓶を握りしめた。

アンジェリカはひとりでアカデミーに来ていた。長期休暇中だが、図書室で自主学習をするためである。

「あ、アンジェリカ！」

玄関を抜けるとすぐに、後ろから呼び止められた。怪訝な顔で振り返る。

「えーっと……ターニャ、だったかしら」

「覚えていてくれてありがとう」

彼女は人なつこくにっこりと笑いかけてきた。

「二年生は長期休暇中じゃなかったの？ あ、そっか。あなたもユールベルの様子を見に来たのね」

返事を待たずに勝手に決めつける彼女に、アンジェリカはあきれ顔を向けた。

「私は図書室に用があって……」

「あ、レオナルド！！」

アンジェリカの話のをさえぎり、ターニャは大きな声をあげた。彼女の視線は、アンジェリカを通り越した向こう側に向けられていた。アンジェリカも彼女の視線をたどり、振り返った。

「またおまえか……」

レオナルドはあからさまにうんざりした様子で、沈んだ声を発した。しかし、ターニャはそんなことは一向におかまいなしだ。にこにこ笑顔で彼に近づいた。

「あら、ユールベルは？」

あたりを見回しながら尋ねる。

「今日は休みだ」

「どうして？」

「おまえに会いたくなかったのかもな」

ターニャはむくれて唇をとがらせた。

「それで、放ってきちゃったわけ？」

「仕方ないだろう。ひとりになりたいと言っているんだ。母親に面倒を見てくれるよう頼んである」

そこまで言うと、深くため息をついた。

「いいかげん俺たちのことは放っておいてくれないか」

しかしターニャは引き下がらなかった。

「私はユールベルが心配なの！ キミと傷をなめあうような関係が続けても彼女のためにならない。もっと明るい場所に出て、生きてると楽しいことがいっぱいあるんだってこと、教えてあげるべきよ」

オーバーに両手を広げて力説した。そんな彼女に、レオナルドは嫌悪感をあらわにした。片眉をひそめ睨みつける。

「おまえに何がわかる。勝手な思い込みで毎日つきまとうのはやめてくれ」

「少し、同情するわね」

アンジェリカはぽつりと言った。

「ちょっとアンジェリカ！ あなたどっちの味方なのよ！」

ターニャは驚いた声をあげ振り返った。まるで裏切られたといわんばかりの勢いだ。

しかしアンジェリカは冷静を保ったままだった。

「どっちでもないわ。それじゃ、私は図書室に行くから」

そっけなく返事をして背中を向けようとする、レオナルドが腕を掴んで止めた。

「……なによ」

むっとして見上げると、彼は困ったような、とまどったような、複雑な表情を見せた。

「一緒に来てくれ……ラウルのところへ」

「ひとりで行けばいいじゃない」

「ユールベルの薬をもらいに行くんだ」

「だから、ひとりで行きなさいよ」

アンジェリカがレオナルドの瞳を探ろうとすると、彼は視線をそらせ、ばつが悪そうにうつむいた。

「もしかして、怖いの？」

「ばっ……バカを言うな！ 怖いんじゃない。苦手なだけだ！」

必死の彼を、アンジェリカは冷やかに見つめた。

「ふーん、まあいいけど」

勝手なレオナルドの頼みなど断ってもよかったが、彼女自身、久しぶりにラウルの顔が見たい

気持ちになっていた。

「私もついていっちゃおっと」

ターニャは目一杯かわいらしく言ってみたが、レオナルドは冷ややかだった。

「おまえは来るな」

それでも彼女はめげなかった。いたずらっぽくにと笑う。

「ついて行くんじゃないくて、私も先生に用があるって言ったら？」

レオナルドはチッと舌打ちした。何を言っても無駄だと思った。逃れるように背を向け歩き出す。

「痛っ！手を放してよ。逃げやしないわ」

アンジェリカはレオナルドの手を振りほどいた。彼は一瞬、寂しげな表情を浮かべた。

「鍵がかかっているわね」

ラウルの医務室の前まで来たが、通常の鍵に加え、外からも南京錠が掛けられている。中に入らないことは明らかだ。レオナルドは軽く舌打ちした。

「どこへ行ってるんだ」

「仕方ないじゃない。ラウルだって暇じゃないんだから。出直すしかないわね」

淡々とそう言って振り返ると、何かを見つけ、驚いたように前方を指さした。

「レオナルドのお母さんよね？」

彼は白く細い指を目でたどった。その先にいたのは確かに彼の母親だった。階段から降りてきたところのようだ。

「なんでこんなところに……」

彼女が王宮に来ることなどめったにない。よりによって、ユールベルの面倒を見るように頼んだ日になぜ……。そんな疑問が頭をもたげた。そして、それは次第に怒りへと変わっていった。

母親はレオナルドに気がつくやうに、無言で近づいてきた。少し離れたところで足を止め、疲れきった表情で目を伏せた。

「ユールベルを放っておいて、こんなところで何をしてるんだ」

レオナルドは責めるように語気を強くした。

「違うのよ……ユールベルが……」

三人は怪訝な顔を彼女に向けた。

「くっ……！いつまで待てばいいんだ！！」

レオナルドは苛立ち叫びながら、白く大きな扉にこぶしを叩き込んだ。

「状況だけでも教えてくれ！！」

再びドンドンと扉を叩く。

「待つしかないわ」

アンジェリカは小さくつぶやいた。彼女の顔は暗い。隣では、壁にもたれて座り込んだターニャが、浅くしゃくり上げている。

「あなたはもう行っていいわよ。授業が始まっているし」

アンジェリカは横目で彼女を見下ろした。

「放って行けるわけじゃない！」

ターニャは感情的に声をあげると、激しく嗚咽を始めた。

ガチャン。

金属音があたりに響いた。ターニャははっとして立ち上がった。レオナルドは睨むように扉を凝視した。

「静にしろ。ここをどこだと思っている」

ゆっくりと開いた扉から姿を現したラウルは、開口一番そう言った。レオナルドは返事をする事なく、ラウルの脇をすり抜けて中に駆け込んでいった。ターニャもすぐあとに続いた。アンジェリカも少し遅れ、歩いて中に入っていった。

「ユールベル！大丈夫か？！ユールベル！」

「ユールベル！」

レオナルドとターニャは何度も呼びかけた。アンジェリカは少し離れたところから、その様子を黙って見ていた。彼女は今朝のネグリジェのまま、白いパイプベッドに横たわっていた。胸元のボタンがいくつなくなっていたが、今のレオナルドにはそれに気づく余裕はなかった。顔の左側には白いタオルが無造作にかぶせられていた。左目の傷を隠すための配慮だろう。顔色はまるで血が通っていないかのように白い。それがふたりの不安を煽る。

「ユールベル！」

何度目かの呼びかけで、彼女はうっすら右目を開いた。数度まばたきをする。そして、必死のふたりを瞳に映すと、そこから視線をそらせた。

「睡眠薬20錠や30錠では死ねない」

ラウルは腕を組み、淡々と言った。レオナルドとターニャは驚いて振り返る。ラウルはさらに言葉を続けた。

「死にたいのならもっと確実な方法を選ぶんだな」

「おまえ！それが医者のことか！！」

レオナルドはラウルに向き直り、激しく非難した。両こぶしを強く握りしめ震わせながら、掴みかかりたい衝動をぎりぎりで抑え込んだ。しかし、ラウルは眉ひとつ動かさなかった。

「生きることが幸せとは限らない。本人が死にたいと言うなら、勝手にすればいい」

平然とそんなことを言っただけ。レオナルドは歯ぎしりをしながら睨みつけた。

「……だったら……どうして、私を助けたの……」

ようやく聞き取れるほどの小さなかすれた声。ターニャははっとして、ユールベルに視線を戻した。彼女は薄暗がりの白い天井を、無表情で見つめていた。

「本気かどうかは本人にしかわからないからだ。だから確実な方法を選べると言っている」

ラウルは腕を組んだまま、横たわる彼女を見下ろした。

「私は医者だ。目の前に患者がいれば治療をする。それだけだ」

レオナルドはずっとラウルを睨み上げていた。しかし、言葉は出てこなかった。

ターニャは黒く濡れた瞳で、ユールベルを覗き込んだ。

「ねえ、ユールベル。あなた……本当に、死のうとしたの？」

まばたきをするだけでこぼれ落ちそうなほどの涙をたたえ、震える声で問いかける。ユールベルは目をそらせたまま、小さな口を開いた。

「そうしなければ、いけなかったから」

「……バカ！！」

ターニャは大きな声で叫ぶと同時に、彼女の頬をパシンと思いきりはたいた。左目にかぶせられていたタオルが床に落ちる。レオナルドとアンジェリカは目を見開いて息を止めた。

「わけわかんないこと言わないでよ！！」

涙をあふれさせながら、目一杯の声で叫び、再び手を上げる。レオナルドは我にかえり、慌てて彼女を後ろから羽交い締めにした。

「おまえ！ 何をするんだ！！」

「自分から死を選ぶなんて、絶対に許せないんだから！！」

おかつぱの黒髪を振り乱し、涙で顔をぐちゃぐちゃにしながら、狂ったように泣き叫ぶ。レオナルドは暴れる彼女を押さえつけたまま、外に連れ出した。

ラウルはユールベルの左目に新しいタオルを掛けた。

しばらくしてレオナルドはひとりで戻ってきた。疲れたように小さくため息をつく。壁に立て掛けてあったパイプ椅子をユールベルの隣で広げ、ゆっくりと腰を下ろした。

「大丈夫か？」

彼女の少し赤くなったほほに、そっと手をあてる。わずかに熱を帯びている。

「ユールベル、どうしてだ」

無反応のままの彼女の細い手を取り、そっと問いかける。感情をおさえた静かな声。刺激をしないように細心の注意をはらう。

「何か、あったのか？ ……それとも……俺、か？」

わずかに顔を曇らせると、ぎゅっと彼女の手を握り、じっと顔色をうかがった。

「あなたには感謝している」

細くかすれた声が、血の気をなくした唇からこぼれた。

「でもやっぱり、私は生きてはいけない人間……。いつか、消えようと思っていた」

「なんでそうなるんだよ……。昔のことなんてもう忘れろよ。間違っていたのはあいつらなんだ！」

つぶやきから次第に感情的になっていき、ついには涙声まじりで訴えた。潤んだ瞳を隠すように、慌ててうつむく。

「やっぱり、俺じゃ、駄目なのか……」

引き寄せた彼女の手に、祈るように自らの額をつけた。冷たさがしみた。シーツの上にひとつぶがこぼれ落ちた。

「あきらめるの？」

アンジェリカが後ろから声を掛けた。何も答えないレオナルドの背中を見つめ、さらに静かに言葉をつなげる。

「ターニャはあきらめないわよ、きっと」

彼の背中にはみっともないくらい小さく丸められ、いつもの偉そうな態度は影をひそめている。

アンジェリカは気配を感じ、何気なくユールベルに目を移した。ふたりの視線がぶつかる。ユールベルはふいに目をそらせた。アンジェリカの顔がわずかに曇る。しかし、すぐに元の表情に戻った。

「ごめんなさい。私の顔なんて見たくないわね。出ていくわ」

平静にそう言うと、踵をひるがえし、まっすぐ出口へ向かった。

アンジェリカは内側の鍵を開け、大きな扉を引き廊下に出た。ターニャは扉を背に膝をかかえ、ときどき大きく肩を震わせしゃくり上げている。

「笑ったり怒ったり泣いたり、忙しいわね」

アンジェリカは扉を閉めながら、彼女を見下ろした。

「と……とんでもないことしちゃった……私、わたし……」

ターニャは言葉を詰まらせ、より強くしゃくり上げた。

「悪くないかもしれない。あなたの気持ちが伝われば……」

「違う……違うのよ！」

泣きながら声を震わせ、必死に訴える。

「何が？」

アンジェリカは壁にもたれかかり、再び彼女を見下ろした。

「彼女のためじゃない……我を失っただけ……」

ようやく聞き取れるくらいのはっきりしない声でぼそりと言うと、それきり口をつぐんでしまった。ただ肩を揺らし、すすり上げるだけだった。

ガラガラガラ――。

処置室からラウルを出てきた。アンジェリカは顔を上げ、彼を見つめた。ラウルもまっすぐ視線を返す。

「アンジェリカ、おまえは帰れ」

「……そうね」

彼女はひとことそう言うと、ためらいなく背を向け歩き去った。

彼女の姿が見えなくなると、ラウルは隣で膝を抱えるターニャに視線を移した。

「ターニャ＝レンブラント。思い出した」

彼女は口を半開きにして顔を上げた。泣きはらした目で彼を見上げる。何かを聞いたような表情。ラウルは淡々と答えた。

「十数年前に会っている」

彼女ははっとして、さらに大きく目を見開いた。それから苦しげに顔をしかめると、ゆっくりとうつむいた。

「……あの頃のことは、あまり覚えていません」

ラウルは前を向き、腕を組んだ。

「ユールベルにおまえのことを話そうと思う」

彼女は膝に顔をうずめた。

「同情を引くようなまねは、嫌……です……」

ぽつりぽつりと言葉を落とす。そして小さく鼻をすする。ラウルは前を向いたまま、わずかに目を伏せた。

「おまえのためではない。ユールベルのためだ」

ターニャは膝を抱えたまま動かなかった。ラウルも返事を求めなかった。静寂が広がる。まるで時間が止まったかのような光景。窓の外を流れる雲だけが、現実であることを示している。かすかに遠くの笑い声が届いては消えた。

「……先……生」

長い沈黙を破ったのは、かすれたターニャの声だった。ラウルは視線だけを彼女に落とした。黒髪のとやが形を変え流れる。

「先生に、おまかせします……」

彼女は思いつめたようにそう言うと、さらに深く顔を沈めた。

パイプベッドに横たわったままのユールベルと、その隣で椅子に座りうつむくレオナルド。ふたりは無言でラウルの話を聞いていた。彼は淡々と事実のみを話した。

「——そういうことだ」

長くはない話をそう結ぶと、再び処置室から出ていった。

残されたふたりは、無言のまま口を開こうとはしなかった。ユールベルは無表情で天井を見つめ、レオナルドは暗い顔でうつむく。背中に感じる冷たい空気、無機質なただっ広さ、薄暗い明かり。それらが彼の不安を呼び起こす。無造作に放り出された彼女の手を、温もりを求めるように自らの手を重ねた。彼女は無反応だった。

長い長い沈黙のあと、ユールベルはぽつりつつぶやくように言った。

「寮に戻るわ」

「！！」

レオナルドはものすごい形相で、椅子から立ち上がった。大きく口を開けるものの、とっさに声が出なかった。口をパクパクさせる。

「なっ……なんでだ！！」

乾いた喉から絞り出すように叫ぶと、片膝をつき、彼女を覗き込んだ。不安に押しつぶされそうな、今にも泣きそうな顔を隠もしない。

「もっと、彼女のことが知りたくなかったのよ」

ユールベルの声はしっかりとしていた。

「俺はどうなるんだ！ ひとりにしないでくれ！」

彼女の手にすがりつき、必死に訴えた。しかし、彼女は表情を変えることはなかった。ゆっくり目を閉じる。

「あなたはひとりじゃない……」

レオナルドは顔をしかめ、首を横に振り、ベッドに突っ伏した。

翌日――。

ユールベルは小さな鞆を持って、寮へと向かった。隣にはレオナルドが付き添っている。門の前で、ふたり並んで古びた建物を見上げた。

「ユールベル！！」

寮から出てきたターニャが大きく手を振りながら走り寄ってきた。そして、ユールベルにとびつくつと、泣きながら抱きしめた。

「きのうはごめんね……！ 痛かったよね」

「あなたのこと、聞いたわ」

ユールベルはまっすぐ前を見つめながら言った。ターニャは彼女の肩の上でこくりとうなずいた。わずかに顔がこわばった。ユールベルの背中にまわした手に力をこめる。

「楽しそうに笑っている人はみんな、幸せに生きてきた人だと思っていた」

ユールベルは落ち着いた声でそう言うと、ひと息ついてさらに続けた。

「私も、あなたみたいに笑えるようになるかしら」

ターニャは彼女から体を離すと、涙を残したままでにっこり笑った。

「うん、大丈夫。焦らずゆっくりとね。みんなでいっぱい楽しいことしよう！」

ユールベルはとまどいながらも、かすかに目でうなずいた。そして、彼女の顔をじっと見つめると、ゆっくりと口を開いた。

「……それと……嬉しいときに、泣いてみたいわ」

ターニャはきょとんとしたあと、恥ずかしそうに笑いながら涙をぬぐった。

「ユールベル！」

今度は寮母が大きな体を揺らして走ってきた。

「心配させるんじゃないよ！ この不良娘が！！」

腰に手をあて、口をふくらませ、怒り顔を作る。だが、すぐに表情をやわらげ、優しくにっこり笑った。

「おかえり」

あたたかい声でそう言うと、ぎゅっと抱きしめた。彼女のふくよかな体に、細身のユールベルはうずもれた。

「おい、おばさん。ユールベルが苦しんでいる」

寮母はユールベルを放すと、いぶかしげにレオナルドを見た。

「あんたかい、ユールベルをたぶらかした男は」

「人聞きの悪いことを言うな」

レオナルドはむっとして睨みつけた。

「言うておくが、俺はあきらめないからな」

「言うておくけど、寮内は男子禁制だからね」

ターニャはいたずらっぽく白い歯を見せて、にっと笑った。レオナルドは彼女に振り向き、うざったそうに顔をしかめた。

「そのくらいわかっている」

あからさまに不機嫌でぶっきらぼうな言葉。それでもターニャと寮母は、なぜかにここにこしていた。

「レオナルド」

ユールベルは一步前に出た。レオナルドの鼓動はドクンと強く打った。彼女に振り返り、じっと見つめる。白いワンピースが風を受けふわりと舞い、金髪の緩やかなウェーブが波を打つ。

「ありがとう。それと、ごめんなさい」

彼女はまっすぐに彼を見据えた。左目は包帯に覆われているが、右の瞳は強い光を宿している。ゆっくりまばたきをすると、再び彼と目を合わせ、レオナルドに向かって足を進めた。そして、彼の肩に手を掛け、踵を上げると、軽く口づけた。

「ありがとう」

彼女は感謝の言葉を繰り返した。

レオナルドは彼女の背中に手をまわし、そっと抱きしめた。

「アカデミーには来いよ」

柔らかい日ざしがふたりを包む。ターニャは目を細めてその光景を眺めていた。

「そうか、寮に戻ったのか」

サイファは椅子の背もたれに身を沈め、目を閉じた。

「私はレオナルドが救ってくれることを期待していたんだがな」

肘掛けにひじをつき、手にあごをのせる。その後ろで、ラウルは窓枠に手をつき、大きなガラス越しに外を見下ろしていた。

「そうすれば、あいつのレイチェルへの想いも完全に消滅するだろう、ということか」

「あいかわらず鋭いな」

サイファは前を向いたまま、悪びれずにははたと笑った。ラウルは彼に向き直ると、窓に寄りかかった。背もたれからのぞく金色の髪を見つめる。そして、腕を組むと、小さくため息をついた。

「レイチェルのこととなると、おまえはいつも身勝手になる」

「……いつも、でもないだろう？」

顔半分だけ振り返り、冷たい視線を流す。ラウルはそれを無表情で受け止めた。だが、答えは

返さなかった。

サイファは急ににっこり笑顔を作ると、話題を変えた。

「で、おまえはどんな手を使ったんだ」

ラウルは顔をそむけ、窓の外に目を逃した。

「昔の患者を利用した。卑怯な方法だ」

「昔の患者？」

サイファは椅子を回し、ラウルに向き直った。しかし、彼はガラスの向こう側をじっと見つめたままだった。

「守秘義務がある」

サイファはそれ以上の追求はしなかった。椅子から立ち上がり、ラウルの隣に足を進め、窓から外を眺めた。ラウルは窓を背にしたまま、腕を組んでいる。

「何にせよ、これでひと安心だな」

サイファはラウルににっこりと笑いかけた。しかし、ラウルは厳しい表情を崩さない。

「まだ立ち上がっただけにすぎない。歩き出すのはこれからだ」

「確かに、立ち止まったり、つまずいたり、転んだりすることもあるだろう」

真剣な顔でそう言ったあと、ふっと表情を和らげた。

「だが、人の優しさを素直に受け入れられるようになったのなら心配はない。彼女には支えてくれる人もいるだろう」

「おまえがそんな青臭いことを言うとはな」

ラウルがサイファを流し見ると、彼は再びにっこりと笑った。

「たまにはいいだろう。希望を持つのも悪くないよ」

開けた視界に広がる青い空。そこに流れる白い雲。サイファは、幾度となく見ているはずのその光景を、まぶしそうに眺めていた。そして、ラウルの肩に手をのせると、ぐっと力をこめた。

54. 小さなライバル

「なんだったんだよ、今日の試験」

ジークは思いきり疲れた声をあげながら、手を伸ばし机に突っ伏した。隣にやってきたリックは乾いた笑いを張りつけている。

「うん、やたら難しかったよね」

「一応、全部埋めたけど、合っている自信はないわ」

アンジェリカもめずらしく不安そうだった。三人はそろってため息をついた。

「ラウルのやつ、難しい問題で俺たちが苦しむのを見て、憂さ晴らしでもしてんじゃねえか？」

ジークは体を起こし、ほおづえをついた。口をとがらせ、眉をひそめ、不愉快感をあらわにしている。

「まさか」

笑いながらリックはそう答えたが、強く否定することは出来なかった。いつもだったら真っ先に反論するはずのアンジェリカは、口を閉ざしたままだ。頭の中で試験問題のことを考えているらしく、ジークたちの会話はうわの空だった。

「帰るか！」

ジークは嫌な気持ちを払拭するかのようには声を張り上げ、勢いよく立ち上がった。鞆をつかんで肩に引っ掛けると、戸口に向かって歩き出した。リックもそのあとに続く。

「あ、待って」

我にかえったアンジェリカが、後ろからふたりを呼び止めた。

「ルナちゃんのところへ行かない？」

振り返ったふたりに、小首を傾げながら尋ねた。しかし、ジークの反応はつれないものだった。

「この時間じゃ、まだラウルのところにはいないだろ」

「だからお母さんたちのところに行くの。ちゃんと許可ももらったし」

アンジェリカは、うきうきした笑顔を見せた。それでもジークの反応は鈍かった。

リックは少し考えたあと、はっとして口を開いた。

「それってまさか、王妃様のところ……ってこと？」

「そう。大丈夫よ、話は通しておいてくれるって」

「でも、僕たちが行ってもいいのかなあ」

「気にしなくてもいいわよ」

アンジェリカは事も無げにさらりと言った。しかし、リックは笑いながら顔をこわばらせていた。名門ラグランジェ家のアンジェリカと違って、ただの一般民間人の自分が王妃様の部屋に行くなんて、本当に許されるのだろうか。そのことだけが心配だった。しかし、よく考えてみると、王妃様も元一般民間人である。もしかしたら、だから、そのあたりのことには寛大なのかもしれない。リックは必死の理由づけをして、そう思うことにした。

「俺、パス」

一生懸命に考えを巡らせていたリックの隣で、ジークはあっさりとした。あからさまに気がのっていない声だ。アンジェリカはむっとして口をとがらせた。

「どうしてよ」

「あしたも試験があるだろ。そんなことしてる場合じゃねえよ」

彼が本当にそう思っているかどうかはわからない。だが、少なくともアンジェリカには言いわけじみた理由に聞こえた。彼女はますます不機嫌になっていった。ほほを限界までふくらませる。しかし、それ以上、強く誘うことはしなかった。

「……まあいいけど。行きましょう、リック」

「そうだね」

リックがにっこり笑うと、アンジェリカもつられて笑顔になった。ふたり並んで廊下へと出ていく。振り返りもせず遠ざかる後ろ姿を、ジークはじっと見つめていた。

「……待て。やっぱり俺も行く」

ジークはふたりに駆け寄り、無理やり間に割って入った。

「もうっ！ ジーク、ちょっと変よ」

彼に弾かれたアンジェリカは、眉をひそめ、彼を睨みつけた。

「気が変わったんだよ」

ジークはあさっての方向を見たまま、ぶっきらぼうに言い返した。

三人は並んで王宮を歩いていた。その道すがら、アンジェリカはユールベルのことをふたりに話した。長期休暇中のことだったので、ふたりは知らなかったのだ。彼女も詳しいことを知っているわけではなかったのだ、話せたのは睡眠薬で自殺を図ったことと、寮に戻ったという事実だけだった。

「そっか……」

リックは言葉少なにあいづちを打った。多少、ショックを受けている様子がうかがえた。ジークもけわしい顔つきでうつむいた。

「今はどうしてるんだ？」

「うん。ちゃんとアカデミーには来ているみたいよ。何回か見かけたわ」

「まあ、良かったじゃねえか」

しかし、アンジェリカは納得していないようだった。

「さあ、どうかしら。心の傷なんて治るものじゃないわ。一生、抱えていくのよ」

感情を見せないように、無表情で淡々と語った。リックはそんな彼女の横顔をじっと見つめた。

「でも、上手くつきあっていくことは出来るよね？」

彼が自分のことを言っているのだと、アンジェリカはすぐにわかった。顔を曇らせ目を伏せる。

「私だって、どうなるかわからないわ」

「おまえは大丈夫だ」

ジークはきっぱりと言い切った。アンジェリカはそれが気に入らなかった。

「簡単に言わないでくれる？」

「大丈夫だ」

ジークはもういちど言い切った。それからポケットに手を突っ込んでうつむく。

「俺……ら、がいるだろ」

ぎこちなく言葉をつなげる。アンジェリカはとまどいながら、複雑な表情を浮かべた。そう言われても自信がなかった。怖かった。それでも、彼の気持ちに応えるように、なんとか微笑みを作ってみせた。

「そういえば、レオナルドはどうしてるの？」

ジークの話を聞いて、リックはふいにレオナルドのことを思い出した。ジークはその名前を耳にすると、露骨に嫌な顔をした。

「どうでもいいだろ、あんな奴のこと」

アンジェリカが口を開くより早く、ジークは不機嫌に吐きすてた。一刻も早くその話題を打ち切りたいようだった。その徹底した嫌い方がおかしくて、リックはこっそりと笑った。

「なんか他に楽しい話はねえのかよ」

「あ、そうだわ」

ジークが話題の催促をすると、アンジェリカはふいに何かを思い出し、ぱっと顔を輝かせた。首にかかっていた細い銀の鎖を引っ張り、服の中から小さなリングを取り出す。彼女はそれを親指と人さし指でつまみ、ほほに軽くくっつけると、無邪気な笑顔を見せた。ジークは困惑して顔を赤らめながら、目を泳がせていた。

「まだお礼を言っていなかったわね。ありがとう」

「あ、ああ……」

「え？ なになに？ それどうしたの？」

リックが興味津々で首を伸ばしてきた。

「ジークからの誕生日プレゼントよ。サイズがちょっと大きかったからネックレスにしてみたの」

アンジェリカは屈託なく嬉しそうに話した。隣でジークは大きく口を開け、声にならない叫びをあげながら動きを止めた。みるみるうちに顔が真っ赤になっていく。

リックは驚いたように、しげしげとジークを見た。

「へえ、そうだったんだ」

ジークは彼の視線から逃れるように顔をそむけた。そうする以外になかった。

ふいに、アンジェリカの前に、無言で手のひらが差し出された。ジークのものだ。何かを催促しているようだが、アンジェリカには彼の意図がわからなかった。目をそらせている彼に、きょとんとした表情を向ける。

「それ、貸せよ。サイズを直してきてやる」

彼女を見ようともせず、ぶっきらぼうにぼそぼそと言った。そんな彼に、アンジェリカはにっこりと笑いかけた。

「いいわよ、このままで。いつかちょうど良くなると思うから」

ジークは思わず彼女に振り向いた。まっすぐに視線が合うと、慌ててすぐに目を伏せた。

ラウルの医務室を通り過ぎ、さらに王宮の奥へと向かった。ジークもリックも、ここまで来るのは初めてである。途中には何人もの衛兵がいたが、皆、アンジェリカに一礼し、すんなりと通してくれた。アカデミーにいると忘れてしまうが、やはりアンジェリカは名門ラグランジェ家の娘なのだと思います。だが、彼女自身はそういう目でみられることを快く思っていない。ジークたちはそのことを知っていたので、あえて口には出さなかった。

奥に進むにしたがって、次第にあたりは格調高くなっていく。柱は荘厳で存在感があり、それでいて繊細な装飾が施されている。階段は幅広く緩やかなカーブを描き、手すりにはやはり細やかな模様が彫り込まれている。そして、なんといっても圧巻なのが、空間の使い方である。横にも縦にも壮大に広がる、贅沢でただっ広い空間。そこにたたずむ人間を圧倒させるには十分すぎるスケールだ。足音が高く遠い天井に大きく反響する。ふたりの緊張感は否が応にも高まっていた。

階段を上がり突きあたったところに、大きな重量感のある扉があった。もちろんここにも優美な装飾が一面に施されている。両脇には、槍を持ち、剣を携えた厳い衛兵がひとりずつ、背筋を伸ばして立っていた。アンジェリカが現れるとふたりそろって一礼したが、すぐに元の姿勢に戻り、それ以降は微動だにしない。

アンジェリカは扉についた丸い鉄輪を打ちつけ、応答を待った。

「いらっしやい」

ゆっくりと開いた扉から、レイチェルが姿を現した。いつも通りのドレス、いつも通りの笑顔。ジークもリックも、少しだけ緊張がほどけた。ふたりがぺこりと頭を下げると、彼女は優しく微笑み返した。

「ルナちゃん、いる？」

「ええ」

レイチェルが招き入れると、アンジェリカは小走りで駆け込んでいった。ジークもリックも、緊張しながらぎこちなく足を踏み入れた。

「こんにちは！」

「そんなに急がなくても逃げやしないわよ」

王妃アルティナはテーブルにひじをつき、軽快に走るアンジェリカを眺めながら目を細めた。

「今日は賑やかになりそうね」

「すみません、僕たちまで来てしまって」

遅れてやってきたリックは、申しわけなさそうに頭を下げた。ジークも続いて頭を下げる。

「いいのよ。私は賑やかな方が好きなんだから」

アルティナは白い歯を見せた。

「……寝ているのね」

ルナのベッドを覗き込んで、アンジェリカは少し落胆した声を出した。ルナはベッドの中央で、すやすやと寝息を立てて眠っていた。できれば目を開いたところが見たかった。そして、いろんな反応が見たかった。それでも、ひとまわり大きくなった赤ん坊を目にして、嬉しそうに顔をほころばせた。隣にやってきたリックも、にっこりしながら見下ろした。

「だいぶ大きくなったわよね」

「うん」

ふたりは笑顔を見合わせた。

「ほっぺぷくぷく」

アンジェリカはルナの丸い頬を、人さし指で軽くつついた。その感触の柔らかさに、ますます表情が弛んでいく。

「あんまり触ると起こしちゃうよ」

リックは優しくたしなめた。アンジェリカは素直に手を引っ込めた。

「ん？」

リックはふくらはぎに何か当たったのを感じて振り返った。

「おまえがジークか？」

むっつりと不機嫌顔の小さな男の子が、腕組みをしながらリックを睨み上げていた。

「あら、アルス。久しぶりね」

アンジェリカがにっこりと笑いかけたが、少年はちらりと彼女を見ただけで、笑顔を返さない。

「アルスって……王子様？」

リックは目をぱちくりさせながら、アンジェリカに問いかけた。

「そうよ。アルティナさんと似ているでしょう？」

確かに銀の髪は、アルティナと同じ輝きを放っている。だが、目つきは王子の方がかなり悪い。

「おい、おまえがジークかって聞いてるんだよ」

返答もせずふたりで話していることにいらついているようだった。ますますふてぶてしい態度で再び尋ねる。リックは屈み込んで、小さな王子に人なつこい笑顔を近づけた。

「ジークは僕じゃなくて、あっちの人だよ」

リックは離れたところで窓の外を眺めているジークを指さした。

アルスははてくてくと歩いていくと、背後からジークのふくらはぎあたりに蹴りを入れた。

「てっ……何だテメーは」

ジークは振り返り、むっつり顔の小さな少年を目にすると、思いきり睨みつけた。しかし少年も負けてはいない。口をへの字に曲げ、睨み返す。

「ぜんぶおまえのせいだ！」

そう言って、再びジークを蹴り上げた。

「って一な！いきなり何なんだよ！」

その様子を眺めていたアルティナは、愉快にあははと笑った。

「そのくらいは許してやって。アンジェリカがめったに来なくなって、寂しい思いをしてたんだから」

ジークは目を見開いて、少年とアルティナを交互に見比べた。

「え、こいつ……いや、えっと……王子ですか？ でも何で俺……オイ、蹴るな！」

「おまえがアンジェリカをひとりじめにしてたんだろう！」

「は？」

そうか、こいつ、アンジェリカのことが……。ジークはふとサイファから聞いた昔話を思い出した。なんとなく似ている。幼い日のレオナルドがこのチビ王子、レイチェルさんがアンジェリカ、そして、サイファさんが俺……。ジークはそこまで考えて、一気に顔を上気させた。

「あ、なんか顔が赤いぞ。変な想像してたんだろう！ ア……んんっ！」

ジークは騒ぎだした王子の口を手でふさぎ、体ごと抱えて、部屋の隅へと走っていった。

「なにをするんだ！」

口をふさぐ手が離れると同時に、王子は勢いよく噛みついた。

「おまえが変なことを言い出すからだ！」

ジークは壁を背にしゃがみこみ、アルスと同じ目線で言い返した。アルスはじとっとジークを見つめた。

「おまえ、アンジェリカのことを好きなんだろ？」

「……おまえみたいなガキンちょには関係ねえ」

あまりにもストレートな問いかけに、ジークは絶句し動揺した。しかし、それを悟られないよう平静を装って、ぶっきらぼうに返事をした。だが、アルスのごまかされなかった。いたずらな顔をのぞかせてニッと笑う。

「認めたら譲ってやってもいいぜ」

「バーカ。譲るとか譲らなねえとか、アンジェリカはモノじゃねえだろ」

ジークはアルスのおでこを人さし指で軽く弾いた。

「あ、デコピンした」

離れたところからふたりの様子をうかがっていたリックが、ぽつりとつぶやいた。だいぶ遠いため、ジークたちの会話は聞こえない。

「あの、いいんですか？ 放っておいて」

アルティナに振り返り、不安そうに尋ねた。彼女は椅子の背もたれにゆったりと身を預け、余裕の笑顔を見ている。

「いいの、いいの。懐かしいわね、デコピン」

「なに？ デコピンって」

アンジェリカはリックを見上げた。彼は苦笑いしながら首を傾げた。そんなくだらないことを彼女に教えていいものかどうか迷った。

「けっ、えらそうに。おまえよりオレの方が、アンジェリカと長いつきあいなんだよ」

アルスはひたいをさすりながら強がり、くやしませに愛な対抗意識を見せた。ジークはむっとして眉根を寄せた。

「笑わせんな。たいして違わねえだろ。それに俺の方が一緒にいた時間は長いはずだぜ。アカデミーにいる間、ずーっと一緒なんだからな！」

最後は勝ち誇ったように言い放った。そんな大人げない彼に、小さな王子は冷めた目を向けた。

「なんだ、やっぱり好きなんじゃん」

「……黙れよ、ませガキ」

ジークは顔を赤らめながら睨みつけた。すっかりアルスのペースである。

「うわさのジークがこんな男らしくないヤツだとは思わなかった。好きなら好きって言えよな」

頭の後ろで手を組み、あきれたようにわざとらしくため息をついた。その小憎たらしい態度に、ジークは逆さ吊りにしてやりたい衝動に駆られた。だが、もちろんそんなことは出来ない。

「おまえみたいなガキンちょにはわからねえだろうが、大人には複雑な事情ってモンがあるんだよ」

そう言いわけをするのが精一杯だった。しかし、自分で自分のことを「大人」と言ったことに、違和感とむずがゆさを覚えた。微妙に身体をよじらせる。

「オトナの事情ってなんだよ」

アルスは横柄に腕を組み、ジークを睨んだ。

「ガキにはわからねえって言ったろ」

ジークはそっけなく答えた。アルスはさらに目つきを悪くして睨みつける。

「ガキって言うな」

「ガキはガキだろ」

「……アンジェリカに洗いざらいぶちまけるぞ」

「ぐっ……」

アルスが切り札を出すと、ジークは言葉に窮した。完全にジークの負けである。

「ガキじゃなくてアルスって呼べよな」

小さな王子は、楽しそうに白い歯を見せた。

「お茶が入っているわよ」

部屋の中央に戻ってきたジークとアルスに、レイチェルはにっこり微笑んで声を掛けた。

「あ、すみません」

ジークはティーカップが用意された席についた。座るなり喉を潤すようにひとくち流し込むと、ふうとため息をついた。アルティナは隣でひじをつき、にこにこしながら彼を見つめていた。向かいにはアンジェリカとリックも座っている。

「ふたりで何の話だったの？」

レイチェルは、席につかず通り過ぎようとするアルスに声を掛けた。

「男と男のひみつの話だ。な、ジーク」

「……ああ」

なぜか得意げにそう言うアルスに、ジークは素直に同意した。その言い方に多少の不満はあったものの、秘密にしておいてくれるのはありがたかった。

「なによそれ」

アンジェリカは冷めた声でつぶやいた。しかし、それ以上、詮索することはしなかった。ジークは心の中で、そっと胸を撫で下ろしていた。

アルスは駆け足でルナのベッドへ向かった。木の格子の間隙から、ルナの様子をうかがう。

「あ、目を覚ましたぞ」

「本当?!」

アンジェリカとリックも慌てて駆け寄り、上から覗き込んだ。ルナの青い大きな瞳が、見えないふたりを捉えて止まった。

「あ、こっちを見ているわ!」

アンジェリカが歓喜の声をあげた。

「ね、抱き上げてもいい?」

アンジェリカはレイチェルに振り返って許可を求めた。

「重いわよ? リックさん、手伝ってあげてもらえるかしら」

「はい」

レイチェルは少し不安そうだったが、アンジェリカはうきうきしていた。リックの服を引っ張り、早くと急かす。リックはルナを抱き上げると、そっと彼女に手渡した。細い腕にずっしりと重みがかかる。

「ん……けっこう重たいわね」

「大丈夫?」

リックが手を差し出したまま、心配そうに尋ねる。アンジェリカはにっこりと笑顔を返した。ルナはくりっとした瞳で、アンジェリカをじっと見つめた。不思議なものでも見るかのように、ずっと目を離さない。アンジェリカはそれが可愛くてたまらなかった。自然と顔がほころぶ。アルスは背伸びをしていたが、届くはずもなく、ルナの背中しか見えない。

「ジーク、俺を持ち上げてくれ」

「めんどくせえなあ」

お茶を飲んですっかり落ち着いていたジークは、やる気のない声を漏らした。アルスは横目でジークを非難するようなまなざしを送った。

「アンジェリカ、あのな、ジークが……」

「わーっ!! わかったって!!」

転げ落ちるように椅子から飛び降り、王子の元へ駆け寄る。そして、彼の希望どおり後ろから抱え上げ、ルナの顔が見えるようにしてやる。

「おまえ性格わるいぞ」

ジークが小声でそう言うと、アルスはにっと笑った。

「ルナ、オレだぞ」

アルスが優しく声をかけると、ルナは彼に目を向け、小さな手を伸ばした。彼はその手をつかまえて、そっと柔らかく握った。ルナの表情が動き、かすかに笑顔を見せた。

「へへっ、かわいいよな」

「ああそうだな」

ジークは気のない返事をした。

ギィ……。

扉の開く音に、皆が振り向く。そこから姿を現したのはラウルだった。彼は無言で部屋へ進み入ってきた。まっすぐにルナを抱いたアンジェリカの元へと向かう。

「アンジェリカ」

「うん……バイバイ」

彼女は腕の中の赤ん坊に別れをささやいた。名残惜しそうにしながらも、素直にラウルに手渡した。ルナはラウルと目が合うと、はっきりと笑顔になり、嬉しそうに手足をばたつかせた。

「あーうー」と何かを伝えたがっているような声も発していた。

「おまえたち、あしたの試験の準備は出来ているのか」

ルナの様子に目を奪われていた三人は、ラウルのその言葉で急に現実に戻された。

「今日の試験はなんだったんだよ。あんなもん習ってねえぞ」

ジークは抱えていた王子を下ろしながら文句を言った。ラウルの返答は、案の定すげないものだった。

「習ったことばかりやっても駄目だ」

「なんだそりゃ」

反抗心からそんな反応をとって見たが、ラウルの言うことも一理あるとジークは思った。だが、素直に認めるのはくやしいので、そんな素振りは見せないようにした。

「世話になったな」

ラウルはレイチェルとアルティナに振り返った。レイチェルはにっこり笑った。

「もう少しゆっくりしていったら？」

「いや、今日は帰ることにする」

ラウルは早々に立ち去ろうとしたが、レイチェルが立ち上がるのを見て、その場にとどまった。ラウルの前まで来ると、彼女は背伸びをしてルナを覗き込んだ。笑顔で小さく手を振って、別れの挨拶をする。

「もう帰っちゃうの？」

アンジェリカは寂しそうに尋ねた。

「おまえたちも、もう帰れ」

「そうだね、ジーク、帰ろうか」

「ああ」

ジークは考えごとをしながら虚ろに返事をした。

「私はお母さんと帰るから」

アンジェリカはそう言って、ふたりに手を振った。リックとジークも小さく手を振り返した。

「ジーク、また来るんだろ？」

アルスは一歩進み出て、ジークを見上げた。

「さあな。そんなに暇じゃねえからな」

ジークは王子と目を合わさずにそっけなく言った。本当は、身分不相応なところに何度も出入りなど出来ないという思いがあったが、それは口には出せなかった。出してはいけないような気がした。

ルナを抱いたラウルと、ジーク、リックは並んで歩いていた。互いに、一緒に帰りたいと思っているわけではなかったが、方向が同じなので必然的にそうってしまった。燃えるようなオレンジ色の空がジークたちを照らし、廊下に長い影を作る。

「ジーク、王子様になつかれちゃったみたいだね」

「俺が来ればアンジェリカも来るとでも思ってんだろ」

ジークは無感情に言った。リックはあごに人さし指をあて、首をひねった。

「そうかなあ。ジークに来てほしそうだったけど」

それについてのジークの返答はなかった。

話が途切れ、沈黙が三人をつつむ。ルナもなぜかおとなしい。バラバラな靴音が、不安定なリズムを刻む。リックは何か気まずいものを感じていた。ジークとふたりなら、話が途切れても沈黙が続いても平気だが、ラウルがいることで、いつもと違う空気が流れていた。

ラウルの医務室の前まで来ると、リックは内心ほっとした。無言で扉を開けるラウルに、リックは小さく礼をした。ジークは前を向いたまま、あえて視線をそらせている。

「あまり深く関わるな」

背中を向けたまま、ラウルは唐突にそう言った。忠告とも脅しともとれる言葉。ジークは驚いて振り向く。

「どういうことだ」

低い声でうなるように問いつめる。しかし、ラウルは答えることなく医務室へ入っていった。ジークがあとを追おうとすると、ピシャリと扉が閉められた。残されたふたりは、とまどう顔を見合わせた。

55. 新たな再会

「ジーク、早く！！」

「なんでそんなに急いでんだよ」

小走りで急かすリックを面倒くさそうに見ると、ジークは大きな口を開けてあくびをした。

この日はいつもより1時間も早くリックに叩き起こされ、朝食も口にしないまま家を出た。なぜこんなに急ぐのか、ジークにはまったく理由がわからなかった。リックに尋ねても、ごまかされたり、はぐらかされたりするだけで、まともに答えてくれない。彼のそわそわした落ち着かない様子を見ると、何かあるのだろうとは思ったが、そのうちわかるだろうと、しつこく問いつめることはしなかった。

アカデミーの近くまで来ると、いつになく賑やかなことに気がついた。始業時間よりだいぶ早いにもかかわらず、人だかりが出来ている。

「そうか、今日は合格発表か。知り合いが受験したのか？」

「ん……まあね」

リックは歯切れ悪く認めた。

「ジーク！ リック！」

人だかりの中から出てきたアンジェリカが、手を振りながら駆け寄ってきた。

「おう、おまえも早いな」

「また変なのが入ってくるんじゃないかって、心配で落ち着かなくて」

アンジェリカは笑いながら肩をすくめた。「変なの」とは、ラグランジェ家の人間を指しているのだと、ふたりにはすぐにわかった。去年はレオナルドとユールベルのふたりが入学してきた。そのせいで、いろいろな騒動に巻き込まれた。彼女が心配するのも無理はない。

「いたのか？」

ジークは緊張した面持ちで尋ねた。しかし、彼女は小さく笑って、首を横に振った。

「今年は知った人間はいなかったわ」

「そうか、良かったな」

ジークはほっと息をついて胸を撫で下ろした。

「ジークたちは？」

「ああ、リックの知り合いが受験したらしい……だろ？」

同意を求めてリックを振り返ったが、すでに彼は合格発表を見に向かっていて。人だかりにもぐり込んでいく背中が見えた。しかし、そこはアンジェリカが出てきたのとは違うところだ。

「あっちは確か、医学科ね」

彼の消えていった方に目をやりながら、彼女はぽつりとおつぶやいた。

ジークは不意をつかれたように感じた。リックの知り合いも、自分たちと同じ魔導全科だと勝手に思い込んでいたのだ。医学に興味のあるリックの知り合いとなると、ますます見当がつかない。怪訝な顔で軽く首をひねると、小走りでリックの後を追った。アンジェリカもその後に続

いて走り出した。

医学科の合格発表を見ている群衆は、魔導全科より少なく、かき分けるのもまだ楽な方だった。

「よかったね、おめでとう！」

リックの声が聞こえる。彼は誰かと手を取りあって喜んでいるようだった。相手は人垣に阻まれてよく見えない。

「ありがとう！」

返ってきたのは女性の声だった。どこかで聞き覚えのある声。まさか、と思いながら、ジークは乱暴に目の前の人を押し除ける。そして、目に飛び込んできたのは、明るい栗色の髪、濃青色の瞳、すらりと伸びた手足の……。

「セリカ?!」

ジークとアンジェリカは同時に声を発した。ふたりとも驚いて目を見開き、呆然とした。セリカは一年生のときに事件を起こし、自主退学した元クラスメイトだ。それがなぜ再びアカデミーに、しかも魔導全科ではなく医学科に……。

「あら、久しぶりっ」

ふたりに気がついたセリカは、にっこりと笑いかけた。リックも振り返ると、照れたような笑顔を見せた。

ジークは腕を組んで、リックの背中に蹴りを入れた。

「どういうこった」

「説明すると長くなるんだけど……」

リックはごまかし笑いを浮かべながら逃げようとしたが、ジークは容赦しなかった。青筋を立て、引きつった顔でニヤリと笑い、逃げ腰の彼にぐいと迫った。

「幸い時間はたっぷりあるぜ」

リックは早く来てしまったことを少し後悔した。

ジーク、リック、アンジェリカ、セリカの四人は、アカデミーの食堂に来ていた。アンジェリカとセリカは紅茶だけだったが、朝食がまだだったジークとリックはサンドイッチも頼んでいた。窓際の丸テーブルに席をとり、腰を下ろす。始業前という時間のため、食堂内は昼どきの喧噪が嘘のような静けさだった。ジークたちの他には、奥に数人いるだけである。

「で、どういうことなんだよ」

ジークは慚然として切り出すと、さっそくサンドイッチにかぶりついた。

「うーん、どこから話したらいいのかな……」

「アカデミーを辞めてから、私、花屋でアルバイトしてたの」

リックが悩んでいると、隣のセリカが切り出した。

「その花屋で感動の再会ってか」

ジークはたっぷりサンドイッチをほおばったまま、皮肉めいた調子で口をはさんだ。

「もう、ジーク。とりあえずおとなしく聞いてよ」

大人げない彼を、アンジェリカがたしなめた。ジークはムツとしながらも、反論はしなかった。無言でサンドイッチを口に運ぶ。

セリカは多少とまどいながらも、話を続けることにした。

「私は主に配達の仕事だったの。ときどきアカデミーや王宮にも行くことがあって、ものすごく嫌だったんだけど、仕事だから仕方ないでしょ？ 帽子を目深にかぶって、ばれないようにこそこそ行ってたわけ」

セリカはそこまで言うと、紅茶を手にとり一息ついた。彼女の話を受けて、今度はリックが説明を始めた。

「で、一年くらい前だったかな。僕たちが二年になってしばらくした頃だね。図書室に行く途中で、そんな彼女を見かけて後を追ったんだ。ジークたちには、忘れ物をしたからって先に行ってもらったと思う」

「そういえばあったわね、そんなこと。リックが忘れ物なんてめずらしいと思ったもの」

アンジェリカは、忘れかけていた過去の疑問が解決して、すっきりした顔を見せていた。一方のジークは相変わらず不機嫌なままだった。腕を組み、リックを横目で睨む。

「なんでそんな嘘をついたんだよ」

「……だって、ジークやアンジェリカとは、顔をあわせづらいかなと思って」

少し遠慮がちに、しかしはっきりとそう言った。確かにリックの言うとおりで。ジークには思い当たることがあった。目を伏せ、口をつぐむ。

リックは紅茶をひとくち飲むと、話を続けた。

「それから、セリカと会うようになったんだ。お互いの悩みとかを相談しあったりね」

「リックの母親のことも聞いたわ」

セリカはそう言いつつ、不安そうにちらりとリックをうかがった。彼はその不安を払拭するように、にっこりと頷いた。彼女も頷き返して話を続けようとしたが、そのときふいに割り込みが入った。

「母親のことって？」

アンジェリカが疑問を投げかけた。リックはまっすぐ彼女に顔を向けて答える。

「ジークは知ってるんだけど、僕の母親、倒れて入院してたんだ」

「そういえば、ジークがそんなこと言っていたかしら」

アンジェリカは独り言のようにつぶやくと、口元に手を添えて、遠い記憶を探った。ジークは自分が話したかどうか覚えていなかったのだから、だんまりを決めこんだ。彼女から逃げるように、そっと視線をそらす。

リックはそんな彼を見て小さく笑った。それから再び彼女に向き直ると、少し補足をした。

「もともと体が弱くて入院することが多かったんだけど、このときの入院は長引いちゃってね」

セリカはその後を引き継いで、話を続けた。

「リック、アカデミーの勉強とお母さんの世話で、だいが参っているみたいだったのよね。だから、私がお母さんのことをお手伝いすることにしたの。アルバイトは夕方早くに終わっちゃ

うし、時間は持て余してたから」

少し照れくさそうに笑って肩をすくめた。リックは彼女に優しく笑いかけた。

「本当にすごく助かったよ」

「お母さん優しい方だし、いろんな話も聞けて、私も楽しかったわよ」

ふたりは顔を見合わせて笑顔を交わした。

「おいっ、続き！」

いらついたように急かすと、ジークはサンドイッチを口いっぱいほおばった。ふたりはきょとんとして彼に目をやり、再び顔を見合わせると、くすりと笑いあった。

「続きよね。えっと……それで病院に通うようになって、医療現場を間近で見るうちに、こういうのもいいなって思うようになったの」

セリカはジークを眺めながら、昔を懐かしむように目を細め、微かに笑みを浮かべた。

「おまえには世界を任せられない、なんてジークには言われちゃったけど、目の前の人を助けるのなら、私にもできるんじゃないかってね」

ジークはげほげほとむせ、涙目になりながら、慌ててティーカップを手にとった。

「ジーク、ずいぶんきついことを言ったわね」

アンジェリカが驚いてジークを見た。彼は目尻を拭いながら、しきりに首をかしげていた。

「……言ったか？ 俺」

「ひっどーい、忘れたの?!」

セリカはわざと怒ったような顔を作ったが、すぐに吹き出してあははと笑った。その様子からすると、自分を責めているわけではないようだ。ジークは安堵してほっと息をついた。

「それから半年くらいかな。一生懸命、必死で勉強したわ。母とふたりきりだし、アカデミー以外に行く金銭的余裕はないのよね。魔導全科を受けたときより、ずっと真面目にやったんじゃないかなあ」

ゆっくりとほおづえをつき、遠くを見やる。いろいろと大変だったはずだが、それを思い返す彼女の表情はすがすがしいものだった。

「で、合格よ」

ほおづえをVサインに変えウインクする。そして、真面目な顔でリックに向き直ると、穏やかに微笑んだ。

「リックが支えてくれたおかげよ」

「ううん、セリカが努力した結果だよ」

ジークは冷めた目でふたりを見ながら、リックのサンドイッチを奪ってかぶりついた。

「親友だと思ってたのに、俺らにはまったくの秘密かよ」

口にサンドイッチを入れたまま、行儀悪く文句をつける。

「ごめんね」

「リックを責めないで。私が頼んだのよ、言わないでって」

申しわけなさそうに弱い声で謝るリックを、セリカが慌ててかばった。そして、淡々と語り出す。

「まだ気持ちの整理がついてなかったし、あなたたちがどんな反応をするのかも怖かったのよ」

ふいにジークとアンジェリカの表情に翳りがさした。それを見て、セリカは焦って追加した。

「あっ、今はもう大丈夫よ」

そう言ったあと、今度は彼女の顔に陰が落ちた。

「アンジェリカにはまだ恨まれてるかもしれないけど……」

「初めから恨んでなんかいないわ」

アンジェリカは少しムツとしてセリカを見た。そしてきっぱりと言い放つ。

「ただ、あなたのことが苦手なだけよ」

セリカは一瞬、啞然としたが、すぐにくすくすと笑い出した。

「あなたのそういうところ、嫌いじゃないわ」

机に両ひじをつき、アンジェリカをじっと見つめる。

「ずいぶん大人っぽくなったわね」

「えっ？」

唐突に思いがけないことを言われて、アンジェリカはきょとんとした。セリカは組んだ両手の上にあごを乗せ、意味ありげな笑みを口元に浮かべた。

「あなたにはいい女になってもらわなきゃって思ってたけど、心配なかったわね」

「どういう意味？」

「ふふっ、私のプライドの話。詳しいことはジークに聞いてみて」

紅茶を飲んでいたジークは思いきりむせ込んだ。

「……テメー、それ仕返しのもりか」

ジークは半分困ったように眉をひそめると、顔を紅潮させながら、上目づかいでセリカを睨んだ。彼女は楽しそうに屈託なく笑った。

「どういうこと？」

何がなんだかわからないアンジェリカは、いらついた様子で、ジークとセリカを交互に見た。ジークは片手で頭を抱え込み、セリカはただにこにここと笑っている。ふたりとも答えてくれそうもない。もっと強い調子で問いつめようとした、そのとき。

キーン、コーン——。

始業のチャイムが鳴った。

「えっ?! もうこんな時間?!」

リックは腕時計を見て、顔から血の気が引いた。ジークは飛び上がるように立ち上がった。

「行くぞ! おいっ」

「あ、うん」

釈然としないまま、アンジェリカも席を立った。

「じゃ、セリカ、またあとでね」

リックは軽く右手を上げた。

「ええ」

セリカは手を振って、三人を見送った。

キーン、コーン——。

終業のチャイムが鳴った。ラウルは教本を閉じ、机の上に叩きつけるように置いた。

「今日はこちらまでだ。レポートは今週中に提出だ。忘れるな」

鋭い目で、静まり返った教室を見渡す。返事がないのはいつものことだ。それを要求しているわけではない。ひととおり睨みをきかせると、教本と資料を小脇に抱え、大きな足どりで教室をあとにした。

「レポート多すぎなんだよ」

ジークはぶつくさと文句を言いながら、鞆の中に筆記具と教本、ノートを放り込む。リックとアンジェリカは、いつものようにジークの席にやってきた。

「図書室、寄ってくださる？ レポートやらねえとな」

「そうね。今回は量が多いから、早めにやっておかなきゃ」

アンジェリカは小さく肩をすくめた。ジークは軽くため息をつく、鞆を閉じて立ち上がった。

「ごめん、僕はちょっと……」

リックは申しわけなさそうに眉根を寄せ、顔の前で両手を合わせた。ジークはすぐにピンと来た。

「ああ、セリカか？」

「うん、ホントごめんね」

焦ったように早口でそう言うと、手を振りながら、いそいそと小走りで出ていった。

「……なんかショックよね」

「何がだ？」

ジークはアンジェリカに振り向いた。彼女は不機嫌に、そしてどこか寂しげに、顔を曇らせた。

「私たちといるより、セリカといる方が楽しいみたい」

「楽しいんだろ」

ジークはさも当然という調子でさらりと言った。しかし、アンジェリカは納得がいかない。むっとして口をとがらせる。

「ジークはそれでいいの？」

「仕方ねえだろ」

「セリカのこともずっと内緒にされていたのよ？」

「そりゃ初めは頭にきたけどな。セリカに頼まれたから言えねえって事情もあったわけだし」

確かに彼の言うとおりのことである。それでもアンジェリカの気はおさまらなかつた。頬をふくらませ、八つ当たりぎみに彼を睨み上げる。

ジークは鞆を肩にかけ、わずかにうつむいた。

「やきもち、焼いてるのか？」

「……そうかも」

彼が静かに問いかけると、アンジェリカは真面目な顔で考え、短くぽつりと返事をした。

「行くぞ」

ジークは突然にそう言って、教室を出ようと歩き出した。

「え？」

彼女が思わずもらしたその声に、彼の足が止まった。しかし、振り返ることなく、平静を保った声で言葉を落とした。

「図書室、行くんだろ」

「あ、うん」

彼女は我にかえったように頷くと、鞆を抱えて、ジークの元まで駆けていった。

「ジーク」

開け放たれた扉から、リックがひょいと顔をのぞかせた。ジークは狭い部屋の中央で横になり、教本を眺めていた。まわりにはうずたかく積まれた本や雑誌の山、散乱した服、食べかけのスナック菓子などで、足の踏み場もない。

「ああ、入れよ」

ジークは気の抜けた声で返事をする、起き上がってあぐらをかいた。

「ごめんね、今日は。セリカが合格したらお祝いしてあげるって約束だったんだ」

リックはそんなことを言いながら、靴を脱いで、部屋に足を踏み入れた。脱ぎ散らかした服を脇にどけ、自分が座るスペースを作る。いつものことなので、もうすっかり手慣れている。

「気にしてねえよ」

「だよね」

予想外の反応に、ジークは面くらった。啞然としてリックを見上げる。彼はにこにこしながら腰を下ろした。

「たまには僕がないのもいいでしょ？」

「どういう意味だ」

けわしい目つきでリックを睨む。しかし、彼はとぼけた調子で返した。

「あれ？説明してほしいの？」

「……いや、いい」

ジークは耳元を赤らめながら目をそらせ、複雑な表情でうつむいた。

「アンジェリカは……けっこうショックだったみたいだぜ」

「うん、もともとセリカのことを良く思ってなかったもんね」

リックは寂しげな笑顔を浮かべた。ジークは下を向いたまま、難しい顔で考え込んでいた。

「いや、もしかしたら、あいつは……」

「なに？」

言葉を詰まらせたジークに、続きを促す。しかし、彼は額に手をあて顔をしかめた。

「何でもねえよ」

ぼそりとそう言い、ふいに缶ジュースを放り投げた。リックはゆるい放物線を描いたそれを受け取ると、ジークの横顔をうかがった。何か思い悩んでいる様子が見て取れる。しかし、尋ねても機嫌が悪くなるだけで、答えてはくれないだろう。過去の経験上、そのあたりのことはよくわかっていた。気にはなったが、この場はそっとしておくことにした。

「それじゃ、もう帰るね。レポートやらなくちゃ」

「ああ、頑張れよ」

立ち上がるリックにちらりと目を向け、けだるそうに右手を上げた。リックは靴をはきながら、缶ジュースを持った右手を上げて答えた。

「ジークもね」

にっこり笑いかけてくるリックの顔を、ジークはまともに見ることが出来なかった。

56. ふたり

「賑やかだね」

リックは鞆を手に、ジークの席へとやってきた。明るい窓の外で、たくさんのはしゃいだ声が弾けている。

「ああ、今日は入学式だからな」

ジークは鞆に教本を投げ込みながら、たいして興味なさそうに答えた。

「なんかいいよね。こういうはつらつとした元気な声って。新鮮な気持ちになれるよ」

「なにじじくさいこと言ってんだよ、おまえ」

ジークが呆れた視線を送ると、リックは少し恥ずかしそうに、ごまかし笑いを浮かべた。

「なに？ 私の声じゃ元気になれないっていうの？」

アンジェリカが口をとがらせながら、後ろからひょっこり顔をのぞかせた。しかし、目は怒っていない。すぐに、にっこりと笑顔に変わった。リックも優しく笑顔を返した。

「メシ、食ってくだろ？」

ジークは立ち上がり、鞆を肩にかけると、ふたりに振り向いた。今日は試験のため、午前のみとなっている。ジークとリックの家は遠いため、こういうときは食べてから帰ることが多いのだ。

しかし、今日のリックはいつもと反応が違った。

「ごめん、僕はセリカと約束してるんだ」

少し申しわけなさそうに、しかしどこか浮かれた声を返す。そのとき、アンジェリカの顔がわずかに曇ったのを、ジークは見逃さなかった。目を伏せ、少し考えると、静かに返事をする。

「……なら、仕方ねえな」

アンジェリカの表情がさらに曇った。

「ごめんね」

リックは軽く右手を上げると、そそくさと出ていった。

「そんな暗い顔してんじゃねえよ」

「別に、してないわよ」

アンジェリカはムツとしてジークを見上げた。彼も不機嫌さを顔中に広げている。

「鏡、見てみるよ」

「……」

ぶっきらぼうに言い放った彼のセリフに、彼女は言葉を失い、わずかにうつむいた。強がってはみたが、彼の言うとおりにあることに、彼女自身も気がついてた。

「そんなに嫌なら、行くなって言えばよかっただろ」

感情を抑えた低い声が、追いうちをかける。彼女はカッとして、彼を睨み上げた。

「そんなの言えるわけじゃない」

「だったらあきらめろ」

冷静をよそおったその声は、わずかに震えていた。だが、彼女はそれに気づく余裕はなかった。怒りまかせに声を張り上げる。

「どうしてそんなに冷たいことを言うの?!」

「ばっかやろう! そんな顔を見せられるこっちの身にもなってみろ!」

アンジェリカの感情的な責め言葉が、ジークの壁を崩した。抑えていた感情を一気に噴出させる。

「なに、そんなことで怒っているの?! わけがわからない!」

彼女は少しうろたえながらも、負けじと甲高い声をあげた。そして、激しく彼を睨みつけると、ぷいと背を向け、教室を出ていこうとした。

ジークはとっさに彼女の手首をつかんだ。

「なによ!」

「俺が、悪かった」

ジークは深くうつむき、噛み殺すように言った。

アンジェリカは大きく目を見開いて、彼を見上げた。ジークがこんなにすぐに自分から折れるなどめずらしい。いや、めずらしいどころか、今までなかったことだ。その衝撃が、彼女の怒りを吹き飛ばした。

「私も……ごめんなさい」

どまどつたような小さな声で、彼女も謝った。

ジークは顔を上げ、ぎこちなく笑いかけた。アンジェリカも安堵して、表情を緩めた。

「気晴らしに、どっか外に行かねえか? いま食堂に行っても、リックたちと鉢合わせるだろうし」

勢いづくジークに、アンジェリカは軽く首をかしげる。

「でも、あしたも試験よ」

「実技だけだろ」

ジークは引かなかった。

「まあ、そうだけど……」

アンジェリカはあいまいに答えながら、うつむき迷っている。ジークは、じっと彼女の返事を待った。

「……そうね、行くわ」

迷いを吹っ切ってそう答えると、にっこりと笑顔を見せた。

「ジークたちを放ってきて良かったの?」

セリカとリックは、食堂の窓際の席で、向かい合って昼食をとっていた。ちょうど昼どきということもあり、食堂内は空席が見つけれられないほど混み合っている。それはいつもの光景だが、騒がしさはいつも以上だった。しかし、嫌な騒がしさではない。元気の良い新入生たちが、食堂内を歩き回りながら見学しているのが原因のようだ。

リックは、いつもより心持ち声を張って答える。

「悪いとは思ってるけど、でも正直、僕がいない方がいいのかなって思うときもあるんだ」

「そうなの？」

セリカはロールパンを持った手を止め、驚いたように彼に目を向けた。彼は少し寂しそうに笑ってうつむいた。

「ジークは人一倍、人目を気にするんだ。僕がいたんじゃ、ちょっとしたことでも、なかなか行動を起こせないんだよね」

「なんか、わかる気がするわ」

セリカがそうあいづちを打つと、リックは下を向いたまま小さく笑った。フォークでサラダをつつきながら、話を続ける。

「この前も、アンジェリカに誕生日プレゼントを渡すだけなのに、僕に隠れてこそこそやってたみたいだし」

セリカはその光景を想像し、ふふっと笑った。いかにもジークらしくて微笑ましい。

「だからときどきは、ふたりきりにしてあげるのも、いいんじゃないかなって」

「あら、なあに？ それじゃ、私と一緒にいるのはジークのため？」

セリカはいたずらっぽい笑みを浮かべ、下から覗き込みながら、からかうように問いかけた。リックはたじろぎもせず、にこりと笑いかけた。

「まさか。もちろんセリカと一緒にいたいからだよ」

セリカは欲しかった答えをもらって、嬉しそうに、幸せそうに笑った。

「ジーク、もうずいぶん歩いたんだけど、どこまで行く気？」

アンジェリカは不審がって尋ねた。アカデミーを出てから、すでに一時間は歩いている。

「もうすぐだ」

ジークは茶色の紙袋を掲げ、にっと笑ってみせた。その紙袋には、途中で買ったサンドイッチが入っている。空腹を煽るその行為に、アンジェリカはムツとした。頬をふくらませ、うらめしそうに睨み上げる。

「着いたぜ」

ジークは細い道を渡り、薄汚れたガードパイプに手をかけた。アンジェリカも、彼の隣で、そっとガードパイプに手をのせた。下から涼風が吹き上がる。彼女はとっさに目を閉じ、再びゆっくりと開いた。開けた視界に飛び込んできたものは、その先に広がる光景。驚いたように大きく目を見開き、そして次第に笑顔へと変わっていく。

「いい景色だろ」

ジークはアンジェリカに振り向き、白い歯を見せ笑いかけた。下方には、白い川原と透明なせせらぎが、遠くまで広がっていた。水面に光が反射してきらきらと輝きを放ち、緩やかな流れはさらさらと軽やかな音を立てている。

ここは以前、レオナルドとジークがふたりきりで話し合ったところである。ジークにとって、いい思い出の場所とはいいがたい。しかし、それでもここへ来たのは、単純にこの風景が好きだったからだ。このせせらぎの音を聞きたいと思ったのだ。

アンジェリカは屈託なくジークに笑いかけた。

「あっちの階段から降りよう」

彼は、ガードパイプの切れ目を指さした。ふたりはそこからのびる幅の狭い石段を伝って、川原へと降りていった。

ジャ……。

砂利というには少し大きすぎる白い小石が、濁った音を響かせる。

「うわ、ぐらぐらして足がとられるわ」

スニーカーのジークと違って、革靴を履いているアンジェリカは、よりいっそう歩きづらいのだろう。こわごわと慎重に、でも楽しそうに、足を進めていく。

「もしかして、川原を歩くの、初めてか？」

「そうよ、悪い？」

「別に悪かねえよ」

世間知らずのお嬢さんと馬鹿にされた気がして、アンジェリカは不機嫌になりジークにつっかかる。彼は慌ててそれを否定した。

ふたりは、安定の良い大きめの岩を選んで、それを椅子がわりにすることにした。腰を下ろし、買ってきたサンドイッチにかぶりつく。

「外で食べるのもいいわよね。こういうの、ピクニックっていうのかしら」

「ま、そんなもんだな」

ふたりは顔を見合わせて笑いあった。澄んだ空気が、気持ちも明るく爽快にさせる。

サンドイッチを食べ終わると、ジークは岩の上で仰向けに寝転がった。アンジェリカもそれを見て、同じように寝転がり、息を大きく吸い込んだ。適度に温まった岩肌が、心地よく眠りを誘う。ジークは大きくあくびをしながら伸びをした。アンジェリカは横目でそれを見ながら、くすりと笑った。

「試験はどうだった？」

アンジェリカはぽつりと尋ねた。ジークは上を向いたままで答えた。

「まあまあ、だな」

「私も」

ジークは頭の後ろで手を組み、大きく深呼吸をした。目を細めて空を見つめる。

「あいかわらず、あいつの試験はパターンが読めねえっていうか、パターンがねえっていうか……」

「きっと私たち、すごく鍛えられているわね」

「だろうな」

アンジェリカは笑いながら言ったが、ジークはため息まじりに返事をした。そして、再び目を細めて遠くを見やる。

「入学してから二年間、おまえには一度も勝ててねえけど……」

アンジェリカは、ゆっくりジークに振り向いた。彼は、決意を秘めた瞳を、まっすぐ空に向けていた。

「今年こそは勝つつもりだぜ」

静かに、しかし強気に、そう言い切った。

「年下の女に負けるのが許せないとか、まだ思ってるの？」

それは最初に会ったときにジークが言っていたことだった。彼は自分に対してずっと対抗意識を燃やしていたが、根底にはそういう気持ちがあるからではないか。そんなこと、今さらどうでもいいことかもしれない。だが、アンジェリカは少し気になっていた。

「そんなんじゃないわよ。一回くらい勝つとかなないと、格好がつかねえっていうか……」

「かっこつけたいから勝ちたいの？」

「あー、そういう意味じゃなくて、なんていうか……」

「私、手は抜かないわよ」

アンジェリカのその言葉に反応して、ジークは思わず振り向いた。彼女は体ごと横向きになり、大きな漆黒の瞳でじっと彼を見つめていた。かすかに挑発的な表情。ジークはどきりとして、慌てて空に向き直った。

「あたりめえだ。そんなんで勝っても、意味ねえからな」

わずかに声がうわずっていた。彼は赤みのさした顔を隠すように、頭の後ろで手を組んだまま、顔の横でひじを立てた。

「うん」

アンジェリカも再び仰向けになり、まぶたを閉じて大きく空を吸い込んだ。

遠くで子供たちのはしゃぐ声が聞こえてきた。アンジェリカは起き上がって、声のする方に目をやった。数人の子供たちが、浅瀬を素足で走り回ったり、水を掛け合ったりしている。

「気持ち良さそう。私も裸足になろうかしら」

「危ねえぞ。何が落ちてるかわからねえし」

ジークも体を起こした。

「じゃ、手だけひたしてくるわ」

アンジェリカは右手を広げてにっこり笑うと、岩から飛び降り、川辺に向かって走り出した。

「おい、走ると危ねえぞ！」

ジークは慌てて追いかけた。

「平気よ。もう慣れたわ」

そう言って振り返ったとたん、足元が不安定に滑り、体のバランスを失った。

「あっ」

「おい！」

ジークは地面を強く蹴り、彼女に手を伸ばした。が、それと同時に、足を滑らせ、前につんのめった。そして、助けるつもりだった彼女の足に蹴つまずき、派手な音を立て、頭から浅瀬に突っ込んだ。全身を水流が飲み込み、あっというまにずぶ濡れになってしまった。

一方のアンジェリカは、水の中に手と膝をついただけで、体はほとんど濡れずにすんでいた。顔についた水滴を腕で拭いながら立ち上がる。そして前を向くと、ジークの惨状が目に入って

きた。すぐには声が掛けられず、しばらく呆然と眺めていた。

「大丈夫……？」

ジークはざぶざぶと音を立てながら立ち上がった。全身から雫が流れ落ちる。

「……っ……あははっ！」

「誰のせいだと思ってんだよ」

耐えきれずに吹き出したアンジェリカを、ジークはじとっと睨んだ。

「ごめんなさい。でもあんまり情けない顔をしてるから……ふふふっ」

謝りながらも笑いを止められない。

「あったまきた」

ジークは小さくつぶやくようにそう言うと、うつむいてその場にしゃがみ込んだ。アンジェリカは怪訝な顔で近づき、そっと覗き込んだ。

「ジーク？」

彼女の呼びかけに、彼はわずかに顔を上げた。上目づかいで不敵に笑う。アンジェリカは嫌な予感がして、後ろに下がろうとした。そのとき――。

「くらえっ！」

ジークは両手で水をすくい、彼女に向け、思いきり放った。

「やっ……ちょっ……ジーク！」

とっさに手で防いだものの、かなりの量を顔に浴びてしまった。再び水を掛けようとするジークから逃げようと、背を向け一歩踏み出そうとした。そのとき、再び小石に足をとられ、彼女の体が傾いた。

「きゃっ」

ジークは倒れそうな彼女の体を、後ろから抱きとめた。

「だから走るなって！」

「だってジークが！」

彼女は水滴を振りまきながら、勢いよく振り返った。

「……」

思ったよりずっと近くにジークの顔があった。驚いて無言で前に向き直る。彼女は気まずいものを感じ、彼から離れようとした。しかし、彼女にまわされた彼の腕が、それを阻んだ。気のせいか、さらに力が込められたように感じた。背中には服ごしに水がしみてきた。冷たくはない。体温と鼓動が伝わってくる。早い鼓動。それに呼応するかのよう、彼女の鼓動も強く早くなっていく。息苦しくて、声を出すこともできない。沈黙が続く――。

「さ、そろそろ帰るか！」

ジークは明るく声を張り上げると、アンジェリカから手を放した。

「風邪ひかねえうちにな」

そう言いながら、彼女を残し、さっさと岸へ上がっていった。上着を脱ぎ、ねじって絞ると、ザッと音を立てて水が流れ落ちた。靴と靴下も脱ぎ、同様に水を絞る。

アンジェリカは、まだ水辺で呆然と立ち尽くしていた。軽く握った左手で、胸を押さえる。

なんだったの、今の――。

ジークのいなくなった背中に、冷たい風が吹きつけ、熱を奪い去っていった。

ラウルが扉を開けようとする、中から初老の男が出てきた。白髪まじりの金髪をこざっぱりと刈りそろえ、濃青色のローブを品よく着こなしている。背筋をピンと伸ばし、青い瞳をラウルに向け、鋭く睨みつけた。

しかし、ラウルは気にとめることなく、入れ違いにサイファの部屋へ入っていった。魔導省の塔。その最上階の個室だ。広くはないが、きちんと整理されている。ただ、机の上には、書類やファイルが乱雑に広げられていた。

「たまにはおまえの方から出向いたらどうだ」

「誰かさんにやっかいごとを頼まれたせいで忙しくてね」

サイファは立ち上がり、ラウルの前に歩いていくと、書類の束で彼の肩を軽く叩いた。

「おまえの娘に関する手続きはこれで全てのはずだ。一部希望どおりにはいかなかったが、これが精一杯だ。あとで確認しておいてくれ」

ラウルはそれを受け取ると、パラパラと目を通した。

「ずいぶん時間がかかったな」

「これでも嫌みを言われながら、強引に押し通したんだぞ。もう少しいたわりの言葉が欲しいところだよ」

サイファは笑いながら肩をすくめた。しかし、すぐに真面目な顔になり、腕を組んだ。一歩前に出て、ラウルと反対向きで肩を並べる。

「入口ですれ違った男を見たか？」

「ラグランジェ家分家の隠居だろう」

ラウルには質問の意図がわからなかった。隣のサイファに視線を流す。彼は、無表情でまっすぐ前を向いたまま、わずかに目を細めた。

「私の母方の祖父。そして、長老会との連絡係だ」

長老会という言葉をきいて、ラウルの瞳に強い光が宿った。けわしい顔をサイファに向ける。

「何を言ってきた」

「くだらないお小言だよ。アンジェリカの婚約者を早く決めろ、ここ最近はこればかりだ」

サイファはラウルに振り向き、まいったというふうに関手を広げ、おどけて見せた。しかし、彼の真意を、ラウルは見抜いていた。

「不満そうだな」

「動きがないのが不気味だ」

「ジークたちを餌にして、長老たちをおびき出すつもりか」

核心をついた質問に、サイファは驚きの表情を見せた。しかし、すぐに顎を引き、挑みかけるようにニヤリと笑った。

「おまえにしては気づくのが遅かったな」

ラウルは彼を冷たく睨んだ。その無言の問いかけに、サイファは冷静に答える。

「初めて会ったときから、いや、会う前から、利用させてもらうつもりだったよ。そうでなければ、会ったばかりの彼らに長老会のことを話したりはしなかった」

「レイチェルを……アンジェリカを悲しませることになってるか」

「私が利用しなくても、いずれは目をつけられるさ。万が一のとき、早い方が傷は浅くてすむ」
真剣な顔でそう言ったあと、にっこり笑って追加した。

「彼がアンジェリカを託すに足る男か試す意味合いもあったんだがね」

それから再び張りつめた表情に戻った。

「しかし、動きがないのではどうしようもない」

「おまえが思うほど、彼らは愚かではないということだ」

ラウルは諭すように言った。サイファは上を仰いで、軽くため息をついた。

「だが、このままおとなしくしているとも思えない。私が彼らを見殺し続ければ、いずれ実力行使に出るだろう」

強く前を見据え、淡々と語った。

「おまえの目的は復讐か」

ラウルは腕を組み、目を細めて視線を流した。サイファはふっと笑って目を閉じた。

「だとすれば……」

後ろの机に右手をつく。

「最初のターゲットはおまえだ」

シュッ——。

空を切る音。サイファは机の上のペーパーナイフをとり、ラウルの喉を目がけて突き出した。先端が喉に当たるか当たらないかのギリギリのところで、ピタリと止まる。彼は眉をひそめ、ラウルを睨みつけた。だが、ラウルは微動だにしない。眉ひとつ動かさず、サイファを見下ろす。ふたりは、そのまま無言で対峙した。

先に動いたのはサイファだった。ふいに目を閉じ、表情をやわらげると、手を下ろした。

「私は復讐ではなく、幸せになるための行動を選んだ。それはこれからも変わらないよ」

ナイフを机の上に置き、にっこりと笑った。

「では、私も餌か」

ラウルは無表情で尋ねた。サイファは一瞬きょとんとして、それから吹き出した。

「獲物より強くては、餌にならないだろう」

笑いながら、ラウルの肩をポンと叩いた。

「おまえは、私が遠慮も気遣いも心配もしなくていい、唯一の存在だ」

「少しは遠慮くらいしてほしいがな」

ラウルは冷たい視線を送った。しかし、サイファはにっこりと笑顔を返した。

「おまえがいてくれて良かったよ」

深く気持ちを込めてそう言うと、ラウルの肩に手をかけ、ぐっと力をこめた。

傾いた陽の光は、空と街並みを紅く染める。そして、大きなガラス窓を通して、ふたりの横顔をも彩った。

57. 臆病なすれ違い

「ごめんね。今日はセリカと約束があるから」

リックは鞆を肩に掛けながら、ジークの席にやってきてそう言った。セリカの入学以来、放課後は彼女とふたりで図書室や食堂に寄ったり、一緒に帰ったりすることが多くなっていた。

「ああ」

「またあしたね」

ジークは座ったまま軽く返事をし、アンジェリカは小さく手を振って見送った。リックは笑顔で手を振り返すと、そそくさと教室を出ていった。アンジェリカは、彼の姿が見えなくなったあとも、ずっとその戸口を見つめていた。そして、ジークは、そんな彼女の横顔を見つめていた。

「図書室、寄ってくか？」

彼は不安を押し隠し、明るい声を作って誘い掛けると、椅子から立ち上がった。彼女は振り向くことなく、その場で目を伏せた。

「今日は帰るわ」

「そうか」

まただ——。最近、アンジェリカが自分を避けている。ジークはそう感じていた。三人一緒のときは、今までと何ら変わりなく接してくれているが、ふたりきりになろうとはしないのだ。しかし、確信があるわけではない。気のせいかもしれない。

「送ってく」

「あ、私、お母さんのところに寄っていくからいいわ」

アンジェリカは王宮の方を指さした。彼女の母レイチェルは、付き人として王妃の部屋にいる。誘われでもしない限り、ジークには行くことのできない場所だ。

「それじゃ、ね」

「ああ」

アンジェリカはぎこちなくはにかんで手を振ると、小走りで教室をあとにした。

「つくしょう……！」

ひとり教室に残されたジークは、顔をしかめながら、両手で頭をぐしゃぐしゃと掻いた。

なんだって俺は、あんなこと——。

ジークは頭を抱え込み、がっくりと大きくなだれた。

「アンジェリカ！」

リックはアカデミーの門の脇に立っているアンジェリカに走り寄った。

「休みの日に呼び出したりしてごめんね」

彼女は口元で両手を合わせ、申しわけなさそうにリックを見上げた。

「うん、それはいいけど、どうしたの？」

彼はにっこりと笑顔を返した。本当はセリカとの約束をキャンセルしてここへ来たのだが、それは言わないことにした。彼女がジーク抜きで自分だけをこんなふうに呼び出すなんて、今まで

なかったことだ。何か、よほどのことがあるに違いない。リックはそう思った。

「うん……こんな話、リックは困るだけだと思うんだけど……」

アンジェリカは歯切れ悪く口ごもった。いつもはっきりとした物言いの彼女にしてはめずらしい。

「気にしないでよ。言うだけでアンジェリカの気持ちが高くなるんだっただけさ」

彼女が負担に感じないよう、リックは軽い調子で笑って返した。アンジェリカもつられるようにかすかに笑った。

「え？ ジークが怖い？」

ガタン——。

バスケットボールがバックボードに当たり、リングをかすめ、外側へ跳ね落ちた。人気のない休日の校庭に、ジャッと砂をこする濁った音が鳴る。アンジェリカは小走りで跳ねるボールを追いかけていった。

「どういうこと？」

リックは彼女の背中に問いかけた。しかし返事はない。ボールをつかまえた彼女は、ドリブルで方向転換をすると、再びバスケットに向けて放った。大きなボールが、青空に大きく弧を描いていく。

ダン——。

今度はリングにぶつかり跳ね返った。ワンバウンドでキャッチすると、砂ぼこりのついたそれをぎゅっと抱え込む。

「自分でもよくわからないの」

彼女は顔に陰りを落とし、かぼそい声でつぶやいた。

「三人一緒だと平気なんだけどね。ふたりになると、急に怖くなっちゃって」

「何か、あったの？」

うつむく彼女の横顔を見つめながら、リックはできる限りの平静を装って尋ねた。

「そういうわけじゃ……だから、よくわからないのよ」

そう言って顔を上げると、困ったように肩をすくめて笑ってみせた。リックは目を伏せ、口元に手を添えると、真剣な表情で考え込んだ。

「やっぱり困らせちゃったわね」

彼女は苦笑いしながら、ゆるくチェストパスをした。

「困ってるわけじゃないよ」

リックは両手でパスを受け取ると、安心させるようににっこりと笑顔を作った。しかし、彼女は申しわけなさそうに、再び小さく肩をすくめた。

「そんなに悩んでくれなくてもいいわ。聞いてくれただけでありがたいもの」

リックは、そんなふうに気を遣う彼女がよけいに心配だった。ボールを脇に抱え、じっと彼女を見つめる。

「これからどうするの？」

「うん、いつまでも逃げているわけにはいかないわよね。とりあえずジークに謝るわ。あからさまに避けちゃったから、傷つけたかもしれないし」

じっくり考えながら、気丈にしっかりと答える。それでもリックの不安は拭えなかった。

「大丈夫なの？ 根本的な解決になってないけど」

「なんとかなるわ、きっと」

アンジェリカは笑ってみせた。しかし、どこか強がりを含んでいるようにも感じられた。

リックはバスケットに向き直ると、膝のバネを使って全身でボールを投げた。まっすぐバックボードに当たり、リングを半回転すると、白いネットに吸い込まれていった。勢いを失ったボールが地面に落ちて弾む。しだいに小刻みになるバウンドを、アンジェリカはぼんやりと眺めていた。

リックは静かに口を開いた。

「ねえ、ジークのことが嫌いになったわけじゃないよね」

「もちろんよ」

彼女ははっきりと自信を持って答えた。彼はさらに畳み掛ける。

「ジークを怖いと思う理由はわからないんだよね」

「……ええ」

今度は目を伏せ、とまどいがちに顔を曇らせた。リックはあごに手をあてると、小さく首をかしげた。

「もしかしたらさ、怖いのはジークじゃなくて、自分の気持ちなんじゃない？」

「え？ 自分の気持ち？」

アンジェリカはきょとんとした顔を上げ、目をぱちくりさせた。

「それが何なのか、僕にはわからないけどね」

リックはにっこりと微笑んだ。彼女は呆然とした。風が黒髪をさらさらと吹き流し、くすぐるように頬を撫でる。

自分の気持ち——。

そう思うだけで、なぜか鼓動が強く打つ。

「ジークが怖いなんて、そんなはずないよ。そう思わない？」

そう付け足したリックの言葉に、彼女ははっとした。

「……そうよね。そうなのよ。そんなことあるはずないのよ。どうして私がジークを怖がらなきゃいけないわけ?!」

次第に自分の中で怒りがエスカレートしていき、リックに向かってこぶしを握りまくし立てた。彼女の勢いにやや気押しされながらも、彼は冷静に返事をした。

「でしょ？ もう一度、ジークのことをよく見てみるといいと思うよ」

「……うん、そうね」

アンジェリカはにこっと笑った。ふいに足元にコツンと何かが当たった。風に吹かれてゆっくりと転がり戻ってきたバスケットボールだった。彼女はそれを拾い上げると、額のあたりからバスケットに狙いをつけ、両手で押し出すように放った。オレンジ色のボールは大きく弧を描き、

まっすぐ白いネットに吸い込まれていった。

ダン——。

ボールが地面を打つと同時に、彼女はぱっと顔を輝かせ、リックに振り返った。彼も笑顔で応えた。

「に入ったね」

「リックに負けられないもの」

アンジェリカは軽快な足どりで彼に駆け寄り、隣に並んだ。

「ありがとう」

後ろで手を組み、うつむいてはにかむ。

「私、リックに大丈夫だって言ってほしかったのかもしれない」

そう言って彼を見上げると、屈託なく笑いかけた。

「きのうはセリカと一緒にだったのか？ 何度か連絡したんだぜ」

ジークは、爽やかな朝に似つかわしくない仏頂面で小石を蹴った。

「何か用だったの？」

並んで歩くリックが振り向くと、ジークは逃げるように視線をそらせた。

「……相談ていうか……ちょっとな」

小さな声でぼそりと答える。

「なに？」

リックははっきりしないジークに、答えを促した。追い詰められた彼は、うつむいたまま目を細める。

「やっぱりいい……なんでもねえよ！」

拒絶するように、半ば投げやりに言い捨てた。リックは迷いながらも、思ったことをぶつけてみる。

「もしかして、アンジェリカのこと？」

「……なんでだよ」

平静を装ったつもりだったが、明らかに動揺がにじんでいた。

「やっぱりそうなんだ」

リックがぼつりつつぶやいた言葉を、ジークは否定しなかった。思いつめた表情でアスファルトの地面を見つめる。

「実はさ、僕、きのうアンジェリカと会ってたんだ」

「なに？」

思いがけないリックの話に、ジークは驚きを隠せなかった。彼に振り向き、足を止める。リックもその場に立ち止まった。

「相談を受けてたんだよ。もしかして、そのことと関係があるんじゃない？」

ジークははっとした。歯をくいしばり、顔をしかめ、頭をおさえる。そして、絞り出すように声を発した。

「アンジェリカ、なんて……」

「うん……ジークが怖い、って。何かあったわけじゃなく、そう思う理由もわからないんだって」

リックは淡々と答えながらも、頭を抱える彼を、心配そうに見ていた。

「ねえ、何があったの？」

眉根を寄せ、けわしい顔で、ジークはしばらく考え込んでいた。そして、迷いながら口を開いた。

「あいつが、転びかけたとき……とっさに後ろから抱きとめた。そしたら、なんか妙な空気になっちゃって……」

「それだけ？……じゃないみたいだね」

リックは、彼のこわばった顔を見て悟った。しかし、ジークは口を閉ざしたまま、自分から語ろうとはしなかった。

「そのとき思わず抱きしめちゃった、とか？」

「おまえっ、なんで……！」

リックの当てずっぽうを聞いたとたん、ジークは顔を真っ赤にして後ろに飛び退いた。

「あ、そうなんだ」

「ちっ、違う！ほんの一瞬なんだ！そんなつもりはなくて、本当についていうか」

これ以上ないくらいに顔を赤らめ、あたふたとちぐはぐな言い訳をする。そのみっともなさに、自分自身ですぐに気がついた。両手でぐしゃっと髪を掴み、その場に崩れるように座り込んだ。

「俺、自分のバカさ加減がほんと嫌になった……。何も言わねえって決めたのに……これじゃ……」

頭を抱え込んだまま、背中を丸め、力なく消え入りそうにつぶやいた。

「それでわかったよ。アンジェリカはそのことを無意識に感じとってとまどってたんだね」

「そうじゃねえ！」

リックが納得しかけたところで、ジークは急に強く否定した。

「そうじゃねえんだ。あいつは、おまえのことが好きなんだよ……だから……」

「……え？」

リックは本気で聞き違えたと思った。ジークはいらついて、アスファルトにこぶしを叩きつける。

「だから！あいつが好きなのはおまえなんだよ！」

「……それ、本気で言ってるの？」

「冗談でこんなことが言えるか！」

再び地面を叩きつけ、膝に顔をうずめた。リックは怪訝な表情で、空を見上げた。

「ジークの勘違いだと思うけどなあ」

「おまえは知らねえだろ！おまえがセリカに会いに行くときの、あいつの寂しい顔を！」

あくまで信じようとしないうリックに、ジークの怒りは高まっていく。それでも、リックはどう

しても納得がいかなかった。首をかしげ、考えを巡らせた。

「思うんだけどさ、アンジェリカって、恋愛とかまだよくわかってないんじゃないかな。そういう部分、きっとすごく子供なんだと思う」

「……………」

ジークは反論できなかった。言われてみれば、確かにそういう気もする。

「だから、まだ誰のこともそんなふうに思ってるわけじゃないんだよ、きっと」

リックはそう言って、ジークににっこり笑いかけた。だが、ジークはうなだれて、こぶしを膝の上で震わせていた。

「だとしても、もう……ダメだ……」

たとえリックの言うとおりでとしても、自分が避けられているという事実は変わらない。自分の軽率な行動が招いた結果だ。すべてが終わった——。ジークは目の前が真っ暗になっていた。

「大丈夫だよ」

リックはそう言って、再びにっこりと笑いかけた。

「そんなに簡単に壊れたりしないって」

ジークの前に手を差しのべる。

「行こう。遅刻するよ」

いっそのままだこかへ逃げ出してしまいたい。そう思ったが、ジークには逃げ出す度胸すらなかった。暗い気持ちのままリックの手をとり、重い腰を上げ、鉛の足を引きずるように歩き出した。

「おはよう」

ふたりが教室に入ると、アンジェリカが駆け寄ってきた。

「今日はちょっと遅かったわね」

「ジークがもたついちゃってね」

リックは軽く陽気に言った。からかわれているのか、責められているのか、ごまかしてくれているのか、ジークにはわからなかった。だが、本当のことを言われるよりは、はるかにいい。

「……悪かったな」

無愛想にぽつりとそうつぶやいた。

「どうしたの？ 元気がないみたいだけど。体調でも悪いの？」

アンジェリカは、いつもよりおとなしいジークを見て、心配そうに顔を覗き込んだ。

「別に、普通だ」

顔をそむけ素っ気なく返事をする、すたすたと自分の席へ足を進めた。アンジェリカはきょんととして、彼の背中を見つめた。

「ごめんね。ちょっと機嫌が悪いみたい」

「そう……」

リックは気づかってくれたが、彼女の不安は拭えなかった。

きっと、私のせい——。

アンジェリカは顔を上げ、泣き出しそうな気持ちを胸の奥へ仕舞い込んだ。

キーンコーン——。

終業のチャイムが鳴った。

「じゃ、僕はこれで」

リックは素早く帰り支度を整えると、ふたりに手を振り教室を出ていった。

ジークは小さく舌打ちした。今朝あんな話をしたばかりなのに、何の配慮も遠慮もなく、さっさとセリカのところへ行ってしまったリックを苦々しく思った。そして、アンジェリカとの橋渡しをしてくれるのではないかと期待をしてしまった自分の甘さに腹が立った。

「ジーク」

いつのまにか、アンジェリカが席の前に立っていた。ジークは椅子に座ったまま、顔を上げることさえ出来なかった。机の上の鞆に乗せた手には、じわりと汗がにじんできた。

「図書室に寄っていかない？」

思いがけない言葉だった。とっさに顔を上げ、彼女の表情を確かめた。快活な笑顔は、まっすぐ自分へと向けられている。

「ね？」

アンジェリカはさらになっこり笑うと、ジークの瞳をじっと見つめ、腰をかがめて顔を近づけた。

「な……な……」

ジークがうろたえた声をあげると、アンジェリカは両手ではさむように、彼の両頬をピタンと叩いた。彼は呆然としたが、ヒリヒリする頬の痛みで、すぐに我にかえった。

「な、なにしやがる！！」

アンジェリカはあははと笑いながら、くるりとまわってジークから離れた。短いスカートがひらりと舞い、ふわりと落ち着く。

「ごめんね」

その一瞬、ふいに真面目な表情をのぞかせたが、すぐになっこりと柔らかい笑顔に変わった。

「……ああ」

ジークはそれだけの返事をするのが精一杯だった。

……もう、平気だから。アンジェリカは心の中で小さくつぶやいた。そして、ぱっと晴れやかな顔を上げる。

「行くんでしょ？ 図書室」

はつらつと問いかけてくる彼女を見て、ジークもようやく表情を和らげた。

「ああ」

安堵の息をつき、鞆を肩に掛けながら立ち上がった。その顔には、もう暗い陰はなかった。

「二階の改修、完了しました」

作業着姿の若い男が、帽子をとり、ひょっこりと顔をのぞかせた。その部屋では、三人がダイニングテーブルを囲み、静かに食事をとっていた。

「ご苦労さま」

その中のひとり、ユリアは、微笑みを浮かべて立ち上がり、玄関まで彼を見送りに行った。残ったふたり、バルタスとその息子アンソニーは、黙々と食事を続けた。玄関からユリアの笑い声がかすかに聞こえた。

「アンソニー、あなたの部屋、二階に移してもいいわよ。行きたがっていたでしょう？」

ユリアは戻ってくるなり上機嫌でそう言いながら席についた。

アンソニーは、まだあどけない顔に、暗く思いつめた表情を浮かべ、沈むようにうつむいた。そして、手を止めると、重々しく口を開いた。

「二階にいた人は、どうなったんですか」

——ガシャン。

ユリアはフォークを皿の上に取り落としした。顔から血の気が引いていた。手はわななき、視線は空を泳いでいる。その表情に浮かんでいたのは、明らかに怯えだった。

「……誰も、いなかったわよ」

乾いた喉の奥から言葉を絞り出した。平静を装ったつもりだったが、その声はわずかに震えていた。

バルタスは無反応だった。ユリアを気に掛ける素振りも見せず、無言で新聞を広げた。

アンソニーは両親の態度に、ますます不信感を募らせた。顔に苦悩の色を浮かべると、ためらいながらも、心の中に秘めていた疑念を切り出した。

「あのとき、二階の部屋を壊して出てきた包帯の人……僕の姉なんじゃ……」

「黙りなさい」

ユリアは冷たくピシャリと言い放ち、刺すように睨みつけた。

アンソニーはびくりと体をこわばらせた。それでも母親の言いなりにはならなかった。おそるおそる言葉を紡いでいく。

「僕には、姉がいた。そんな記憶がかすかにあります」

「うるさい！！」

彼女はまるで悲鳴のような叫び声をあげて立ち上がると、大きく手を振り上げ、アンソニーの頭をなぎ払った。彼の華奢な体は、吹っ飛ぶように椅子から転げ落ち、床に倒れ込んだ。

「いないったらいないのよ！！」

ユリアは怒りまかせに机のへりにグラスを叩きつけ、次々と割っていった。バリン、ガシャン、と派手な音が部屋中に響いた。

アンソニーは軽い脳震盪で起き上がることができないでいた。その上に、容赦なくガラスの破片が降り注いでいく。鋭利な破片のいくつかは、彼を切り、血をにじませた。

「うっ……」

倒れ伏したままの少年から、わずかに苦悶のうめきが漏れた。

ユリアはそれを耳にすると、はっと我にかえった。自分が起こした行動の結果を目の当たりにし、息をのんだ。

「く……うっ……！」

喉を詰まらせたような唸り声を発すると、彼女は両手で顔を覆い、嗚咽を始めた。

「お願い……お願いだから、いい子でいて……！こんなことさせないで！！」

膝から崩れ落ち、体を折り曲げ、背中を震わせる。

「あなたを愛しているわ。だから——」

アンソニーは薄れゆく意識の中で、ぼんやりと母親の言葉を反芻した。

バルタスの新聞をめくる音が、静まった部屋に響いた。

外から聞こえる小鳥のさえずりが、気持ちを晴れやかにさせる。その日はそんな朝から始まった。

「行ってくるよ」

「行ってらっしゃい」

レイチェルは愛くるしい笑顔でサイファを見上げた。彼は、薄桜色の頬に軽く口づけし、重い扉を押し開けた。

——ゴン。

鈍い音と同時に、扉を開ける手に抵抗を感じた。向こう側で何かがぶつかったらしい。ふたりは顔を見合わせた。

サイファは薄く開いた隙間から首を出し、用心しながら外を窺った。

「君は……！」

そこには、額を押さえた少年がうずくまっていた。

「こんな朝早くに、お客さん？」

二階から降りてきたアンジェリカは、来客用のティーカップにお茶を注ぐ母親を見て、不思議そうに尋ねた。

「ええ、ほら、早く行かないと遅れるわよ」

レイチェルは動揺することなく答え、さりげなく会話をそらせた。アンジェリカは掛時計に目をやると、小さくあっと声を漏らした。

「行ってきます！」

「気をつけて」

「え？」

玄関に向かおうと急いでいたアンジェリカは、思わず足を止め振り返った。気をつけて、という言葉に引っかかりを感じたのだ。普段はこんなことを言わないのに……。怪訝な顔で母親を見

つめた。

「行ってらっしゃい」

レイチェルはにっこりとして言い直した。アンジェリカは少しとまどっていたが、もう一度「行ってきます」と言い、玄関へ走っていった。

レイチェルがサイファの書斎に入ると、少年はあわてて額の濡れタオルを取り、ソファから立ち上がった。

「すみません」

「いいえ」

ペコリと頭を下げた少年に、レイチェルは穏やかに微笑みかけ、お茶を差し出した。そして、再び座るよう促した。

サイファは、皮張りの柔らかい椅子に腰掛け、大きなデスクにひじをついた。ソファに座る少年をじっと見つめる。彼は行儀よく背筋をぴんと伸ばし、緊張した面持ちでサイファを窺っていた。

「念のため確認するが、バルタスの息子、アンソニーだな」

「はい。すみません、こんな時間に……」

アンソニーは畏縮し、肩をすくませ小さくなった。

サイファはにっこりと満面の笑みを浮かべた。

「おかげで仕事には遅刻だよ」

「すみません……」

「もう、サイファったら」

レイチェルはサイファをたしなめた。彼女にはいたずら心からの言葉だとわかるが、この少年にはそのような余裕はないだろう。

サイファは笑いながらすぐに撤回した。

「ごめんごめん、気にしてないよ。それより……」

声のトーンが真剣なものに変わった。アンソニーはびくりとした。

「何か話があって来たのだろう？」

サイファは、身をすくめる少年の瞳を探った。だが、アンソニーは無言でうろたえるばかりだった。覚悟も決まらないまま、ここに来てしまった。そして、この場でもまだ迷っていた。額にうっすら汗がにじんできた。

レイチェルは、後ろから彼の肩に優しく手をのせた。

「緊張しなくてもいいのよ。それとも、私は出てみましょうか？」

「いえ！ いてください！」

少年はあわてて振り返り、幼さの残る顔で、すがるようにレイチェルを見上げた。サイファとふたりきりにされては、ますます何も言えなくなってしまいそうだった。

「わかったわ」

彼女はアンソニーの隣に腰を下ろし、覗き込むようにしてにっこりと笑いかけた。

彼は再びうつむいた。固く口を結び、何かを懸命に考えているようだった。やがて、意を決したように顔を上げると、まっすぐサイファに目を向けた。

「僕は、真実を知りたいんです」

サイファは冷静な表情で彼を見つめた。続きを促しているようだった。

アンソニーはもう逃げなかった。サイファの視線を受け止め、しっかりとした口調で話し始める。

「一年前、僕の家を二階を壊して出てきた人がいるんです。誰なんですか？ なぜあそこにいたんですか？ もし、何か知っていたら教えてください。両親は何も話してくれません。でも、様子がおかしくて……何かを隠していると思うんです」

一気にそれだけ話しきると、強い光を宿した瞳で訴えた。

サイファはため息をつき、物憂げに遠くを見やると、噛みしめるように静かに言った。

「真実か……」

そして、厳しい表情をアンソニーに向けた。

「真実は時として残酷なものだよ。知らない方が良かった、ということもあるかもしれない」

隣で聞いていたレイチェルの表情に、一瞬、翳りが落ちた。

「君にはそれを受け止める覚悟があるか？」

サイファは少年の瞳の奥に問いかけた。蛇に睨まれた蛙のように、アンソニーは身がすくんで動けなくなった。恐怖心が彼を呑み込む。喉はからからに乾燥し、手先足先は感覚をなくしていた。それでも、真実を知りたいという強い思いが、彼をつき動かした。膝にのせたこぶしをぎゅっと握りしめた。

「僕の家で起こったことだから……知らなければいけないんじゃないかって……」

「知ってどうする」

ようやくの返答を即座に切り返され、今度こそ答えに窮した。うつむき、眉根にしわを寄せ、唇をきつく噛みしめた。膝にのせたこぶしは、小刻みに震えていた。何か答えなければ……そう思うものの、頭が真っ白になり、何も考えられなかった。

サイファは紙とペンを取り、さらさらと走り書きをした。そして、それを二つに折ると、アンソニーに差し出した。

「君が探し求める人は、ここにいる」

アンソニーは顔を上げ、きょとんとした。

「私がしてやれるのはここまでだ。あとは君次第だよ」

「ありがとうございます！」

顔をぱっと輝かせ、デスクに走り寄った。サイファの手から紙切れを受け取ると、ペコリと頭を下げた。震える手でそっと紙を開く。そこには、どこかの住所が書かれていた。

「ひとつ言っておくが、そこは男子禁制だ。気をつけるんだぞ」

「男の子は入っちゃダメってことよ」

目をぱちくりさせているアンソニーを見て、レイチェルがくすりと笑って付け加えた。

「アンソニー」

「はい」

サイファの呼びかけに、アンソニーはしっかりと返事をした。

「両親とは仲良くやっているか」

その質問に一瞬ぼかんとしたが、すぐになっこりと微笑んで見せた。

「はい、僕のことを愛してると言ってくれます」

「そうか」

サイファもになっこりと微笑み返した。

「ユールベルっ！」

寮の門をくぐろうとしていたユールベルは、無言で振り返った。それと同時に、呼びかけたターニャが、後ろから飛びつくように腕を絡ませてきた。からりと笑顔を弾けさせている。ユールベルもつられてかすかに口元を緩めた。

「今日はひとり？ レオナルドは？」

たいていは一緒にいるはずの彼がいないことに気がつき、ターニャはあたりを見回しながら尋ねた。ユールベルは前を向いたまま、ぼつりと言った。

「補習」

「補習っ?!」

ターニャの声は裏返った。アカデミーで補習など、今まで聞いたことがなかった。

「進級がやばかったとか？」

「そうみたいね」

ユールベルは淡々と答えた。

「じゃあさ、久しぶりにふたりでアイス食べに行こっか」

「あなた、本当にアイスクリームが好きね」

ユールベルの声は、少し呆れたような調子だったが、ターニャは気にしなかった。断らなかったことを、肯定の返事と捉えた。

「決まりね！ 鞆だけ置いてこよ！」

明るく笑って強引に話を進めると、ふたりで腕を組んだまま門をくぐった。

玄関ポーチに差しかけたところで、突然、脇の植え込みから何かが飛び出してきた。ふたりはとっさに飛び退いて、防御の姿勢をとった。

「だ、誰?!」

ターニャが少しうろたえたように呼びかけた。

それは、猫や犬ではなく、人間だった。まだあどけない顔の少年である。澄んだ青の瞳は、まるで疑うことを知らない子供のようだった。そして、細く柔らかい金髪には、いくつもの木の葉が絡みついている。植え込みのものだろう。

ユールベルは息を止め、目を見開いた。

「君！ 男の子は入ってきちゃダメなのよ。そんなところで何してたの」

ターニャは叱るようにそう言った。

しかし、少年の耳にはまるで届いていないようだった。彼はユールベルだけを見ていた。彼女に向かって、一步、前に進み出る。

「僕は、アンソニー＝ウィル＝ラグランジェです。あなたは？」

ユールベルは固まった表情のまま、何も答えなかった。

「あなたは、僕の姉ではないんですか？」

「……私に、家族はいない」

こわばった口元から、小さな声を漏らした。

アンソニーは、その答えに納得しなかった。

「僕は二階に行ってはいけないと、ずっと言われてきました。その二階を壊して出てきたのはあなただった。そのときのことは覚えています」

「知らない……」

「なぜなんですか？ 何があったんですか？ どうなっていたんですか？」

「やめて！ 関係ないわ！」

次々とに畳み掛けてくるアンソニーの勢いに、ユールベルは取り繕う余裕をなくした。おびえたように頭を抱え込み、小刻みに何度も横に振り続けた。

「待って、待って！」

ターニャがふたりの間に割って入った。

「君たちの間に何があったか知らないけど、ここで言い争うのはまずいわ」

ふたりの肩を軽く叩き、交互に目を見ると、ねっ、と同意を求め、落ち着かせた。

「君が必死なのはわかるけど……」

そう言いながら、アンソニーを見てくすりと笑い、髪に絡みついた葉っぱを取ろうと手を伸ばした。

そのとたん、彼は顔をこわばらせ、固く目をつぶり、肩をすくませ、体を硬直させた。

ユールベルははっとした。

——まさか、この反応。

どくんと強く心臓が打った。嫌な予感に、体中から汗がにじんだ。

「見せて！」

短くそう言うと、唐突にアンソニーに掴みかかった。

「ちょっと、ユールベル?!」

ターニャの制止も聞かず、ユールベルは乱暴に彼の上衣をまくり上げた。そして、あらわになった背中に目を落とす。

——やっぱり……！

ぎゅっと服を掴んだ彼女の右手は、小刻みに震え出した。

「どう……して……あなたは幸せなはずだと……」

「これって、まさか……」

ターニャは眉をひそめた。

彼の背中や脇腹には、いくつかの古い傷跡、そして最近のものと思われる切り傷と打撲の痕

があった。

アンソニーは困惑して、上目づかいでふたりを見た。

「あの、これは……僕が良い子じゃなかったから……」

「違う！ 良い子とか良い子じゃないとか……誰にもこんなことをする権利なんてない！」

ユールベルは唇を噛みしめ、涙をにじませた。しかし、すぐに手の甲でそれを拭い、表情をキッと引き締めると、アンソニーの手を引き走り出した。

「どこ行くの？！ ねえ、ユールベルっ！」

「来ないで！」

あとを追おうとするターニャを、強い語調で牽制すると、そのまま走り去って行った。

「どこへ行くんですか」

不安がるアンソニーの質問にも答えず、ユールベルは彼の手を引き走り続けた。アカデミーを突っ切り、王宮へと駆け込んでいく。

「ラウル！」

医務室の扉を開くなり、声の限りに叫んだ。そして、アンソニーを中へ押しやり、背中をまくって見せた。

「この子を助けて」

真摯にまっすぐラウルを見つめる。

「そういうことか」

彼はそれを見るなり、彼女の言わんとすることを悟った。机にひじをのせ、小さくため息をついた。

「その傷と打撲の手当てはする」

ユールベルは眉をひそめた。彼は無表情で言葉を続けた。

「だが、それ以上のことは求めるな。サイファに頼め」

「いまさら、おじさまにどんな顔をして会えっていうの。あなたしかいないから、だから頼んでいるのに！」

「だったら、あきらめるんだな」

——パン！

ユールベルは、彼の頬に大きく平手打ちをした。奥歯を噛みしめ、激しく睨みつける。

「勝手に助けたかと思えば、冷たく突き放したり……いつも勝手に気まぐれで……」

唸るようにそう言うと、目に溢れんばかりの涙をため、浅い呼吸を繰り返す。

「やっぱりあなたなんて大嫌い！」

精一杯の声で叫ぶと、大粒の涙をこぼしながら、もういちど平手打ちをした。ラウルはなすがままでそれを受け止めた。左頬にはわずかに赤みがさしていた。

ユールベルはくるりと踵を返すと、アンソニーの手を引き、走って出ていった。

——どうしよう。

ラウルの医務室から離れると、途方に暮れて壁を背に座り込み、ぐったりとうなだれた。

アンソニーはその隣に膝をつき、心配そうに覗き込んだ。

「姉さん……」

「違う」

彼女は否定した。しかし、アンソニーはそれを信じなかった。

「だって、僕のことでこんなに一生懸命になってくれている」

ユールベルはさらに頭を沈めた。

「……あなたのことを憎んでさえいたのに……あなたひとり幸せだと……」

アンソニーは当惑した。彼女の言うことがよくわからなかった。しかし、なんとか元気づけようと笑ってみせた。

「僕は大丈夫。怒られたのは僕が悪かったからなんです。母さんは僕を愛してくれているって」

「違うわ。愛していたら、そんなことはしない」

ユールベルはゆっくりと静かに、だが、はっきりと言い切った。

アンソニーの顔に怯えたような色が浮かんだ。彼も、今まで何の疑問も持たなかったわけではない。ただ、そう信じることで耐えてきたのだ。しかし、それも今、崩れ去ろうとしていた。

ユールベルは彼をじっと見つめると、立ち上がり、その手を強く握った。

「おじさま……」

ユールベルはおそるおそる扉を開けた。魔導省の塔、最上階の一室にあるサイファの部屋。広くはないが、整然と片付けられている。その奥に彼は座っていた。訪問者に気がつくと、立ち上がって出迎えた。

「やあ、ユールベル。久しぶりだね。アンソニーも一緒か」

サイファの、以前と少しも変わらない笑顔に、ユールベルの胸は締めつけられた。アンソニーはぎこちなくおじぎをした。今朝、押し掛けたばかりのサイファに、成り行きとはいえ再び助けを求めることになってしまい、アンソニーはばつの悪さを感じていた。

「私が今さらおじさまに会わず顔なんてないってことは、わかっているわ」

ユールベルはうつむき、つらそうに顔を歪ませた。

「でも、この子を助けてほしくて……この子は私と同じなの！」

必死にそう訴えかけると、再度アンソニーの上衣をまくって背中を見せた。

サイファは驚いたように目を見開いた。

「まさか……」

思わずそんな言葉が口をついた。今まで少しも気がつかなかった。彼とは滅多に顔を会わずことはないが、少なくとも今朝は対面して話もした。両親のことも尋ねた。それなのに気づけなかったのは、不覚といわざるをえない。

「あの、これは、僕が言うことをきかなかったからで……」

「そんなの関係ないって言ってるでしょう?!」

ユールベルは涙声で叫んだ。

サイファは片膝をつき、アンソニーの小さな肩に手をのせた。そして、まっすぐに彼と視線を合わせた。

「母親につけられた傷なんだな？」

「……はい」

アンソニーはとまどいながらも、わずかに頷いた。

「おじさま……」

ユールベルはさすがのようにサイファを見つめた。彼女にとって、頼る人はもう彼しかいない。断られたら——そう思うと怖くてたまらなかった。

サイファは立ち上がり、腕を組むと、ゆっくりと彼女に顔を向けた。

「君が、守るんだ」

「え……？」

「アンソニーが家を出る。君が寮を出る。そして君たちがふたりで暮らす」

「えっ?!」

「ユールベルがアカデミーに行っている間は、そうだな、アンソニー、君も学校へ通うか。なに、生活費の心配はいらないよ。両親にきっちりと出させるからね」

サイファは大きくにっこりと笑いかけた。

呆気にとられていたユールベルは、我にかえると必死で訴えた。

「無理！ そんなのできないわ！！ 私がこの子の面倒を見るなんて！！」

目をきつくつぶり、首を大きく横に振った。

サイファは彼女の頬を両手で包み込み、自分に顔を向けさせた。真剣な表情で、彼女の瞳を覗き込む。

「私もできうる限りの助力はする。しかし、彼を守ってやれるのは君しかいないんだよ、ユールベル」

頬から沁み入る優しい温もりが、彼女の心を落ち着けた。少し考えたあと、静かに尋ねた。

「私ができないって言ったら、どうなるの？」

「施設へ預けることになるだろう」

「……………」

その方が彼のために良いのではないか、ユールベルはそう考え始めていた。何もできない自分よりも、施設の方が適切にケアをしてくれるはず……。

「あの、僕は、どうしても家を出なくてはいけないんだったら、施設へ行くよりも、姉さんと暮らしたい」

横からアンソニーがおずおずと話しかけてきた。ユールベルは表情を凍らせた。

「私に家族はいないわ。何度言わせるの」

「あなたが姉でないというなら、それでもいいです。でも、僕は、あなたといたいです」

まっすぐに自分を見つめてくる、まっすぐなアンソニーの言葉に、ユールベルは押しつぶされそうだった。

「……どうして……今日、会ったばかりじゃない……」

うわ言のようにつぶやいた。

アンソニーは無邪気な顔で笑った。

「僕のことになんか一生懸命になってくれている。だから、姉さんはいい人に違いありません」

ユールベルは、一瞬、言葉をなくした。

「……バカよ。どこまでお人好しなのよ。なんにも知らないくせに……。それに私は姉さんじゃないって……」

そこで言葉が途切れた。そして、うっと小さくうめき声をあげたかと思うと、両手に顔をうずめ、泣き崩れた。サイファは彼女の前に膝をつき、震える細い両肩に手をのせた。

「ユールベル、君ならできるよ。君は優しく強い子だ」

「おじさまっ！！」

ユールベルはサイファにすがりついて泣いた。まるで子供のように、大声をあげて泣きじゃくった。サイファは彼女を優しく撫でた。

やがて、ユールベルは泣き疲れ、次第にすすり泣きへと変わっていった。その間、サイファはずっと彼女を支え、頭を抱いていた。

「何かあったら、些細なことでも、遠慮なく相談しにおいで。アンソニー、君もだ」

ユールベルは彼の腕の中で小さくうなずいた。アンソニーも、その隣でこくりと頷いた。

「私、おじさまの子供に生まれてきたかった」

「父親とってくれて構わないよ」

ユールベルは涙が止まらなかった。

大きな窓の外では、紅の空に沈みゆく斜陽が、一筋の輝きを放っていた。それは、部屋の中にも差し込み、三人の姿を赤く照らすと、長い長い影を作った。

「あ……」

ジークは小さく声をあげ、足を止めた。アンジェリカとリックには、すぐにその理由がわかった。

「久しぶりに嫌なヤツに会っちゃったぜ」

ジークは、思いきりしかめた顔を、相手に見せつけた。

「それはこっちのセリフだ」

向かいから歩いてきたレオナルドも、同じく顔をしかめて言い返した。隣のユールベルは、無表情で三人を見ていた。

「おまえが同学年でなくてつくづく良かったぜ。毎日、顔を会わすなんて反吐が出る」

ジークは虫の居所が悪いのか、いつになく突っかかり毒づいた。レオナルドも負けじと応戦する。

「同感だ。せいぜい留年しないよう気をつけてくれよ」

「あら、知らないの？」

アンジェリカが割り込んだ。

「ジークは、こう見えても優秀なのよ。意外と真面目だし。心配しなくても留年なんてしないわよ」

ジークは複雑な顔で腕を組んだ。

「おまえ……フォローはありがてえけど、その言い方、なんか引かかる……」

「え？ なにが？」

彼女に他意はないようだった。

「ねえさーん！！」

アンジェリカよりもやや小さいくらいの少年が、大きく手を振り玄関から入ってきた。そして、ユールベルのもとへ走り寄った。

「勝手に入ってきたちゃダメって言ってるじゃない」

「じゃあ早く帰ろう」

少年は、にこにこしながら彼女の手を引いた。

「それに姉さんと呼ぶのはやめてって」

「だって、姉さんは姉さんだし」

そんな会話をしながら、ふたりは外へ出ていった。

「弟……いたの？」

呆気にとられていたリックが、アンジェリカに振り向いて尋ねた。

「あの子、見たことある気はするけど……」

彼女も驚いていたようだった。

「なんだ、テメーと一緒に帰らねえのかよ。弟にとられたか」

ジークはレオナルドを意地悪くからかった。彼はムツとして睨みつけた。

「バカを言うな。俺は……他の用があるだけだ」

「おーい！」

ターニャが廊下の向こうから、手を振ってやってきた。そして、あたりを見回しながら尋ねた。

「ユールベルは？」

レオナルドはむっとしたまま、親指で外を指した。その方向に目をやると、ユールベルの後ろ姿が遠くに小さく見えた。ちょうどアンソニーに手を引かれて門を出るところだった。

「あーもう。せっかく一緒に帰ろうと思ったのに。せっかちなあ、弟くんは」

「どうなっているの？」

アンジェリカはターニャを見上げた。

「ああ、君たちは知らなかったんだっけ。ユールベルは寮を出て、弟と一緒に住んでるのよ」

「ええっ?!」

「どうして？」

「大丈夫なのかよ！」

三人は口々に尋ねた。ターニャはくすりと笑った。

「詳しいいきさつは聞いてないけどね。でも元気にやってるわよ。寮のすぐ近くだから、うちの寮母さんがまめに面倒を見に行ってるみたいだし、私たちもしょっちゅう遊びに行ってるから」

そう言うと、ふと表情を和らげた。

「私はさびしくなったけど、あの子にとっては良かったんじゃないかなって思う。表情が明るくなったもの」

「自分の気持ちを押しつけるだけじゃ、ダメだったってことだな」

ジークはあさっての方を向き、とぼけた調子でしれっと言った。誰とは言わなかったが、レオナルドのことを指しているのは明らかだった。彼は耳元を赤らめ、奥歯を軋ませると、ジークをキッと睨みつけた。しかし、返す言葉はなかった。

ターニャはふいにレオナルドに振り返った。

「そういえば、こんなところでのんびりしてていいの？ 君、補習でしょ？」

「……補習？」

三人はいっせいに声をあげ、レオナルドを見た。彼は思いきり狼狽し、ますます顔を上気させると、逃げるように走り去っていった。

59. 個人指導

「……勝てねえ」

貼り出された試験結果を見て、ジークはがっくりうなだれた。今回は今まで以上に、そしてこれ以上はないくらいに、懸命に取り組んだ。今年こそはアンジェリカに勝ちたい、その一心だった。しかし、結果はいつものように、アンジェリカがトップである。

「そんなに落ち込むことないじゃない。ジークが頑張っていたのは知っているけど、私だって頑張ったんだから」

アンジェリカは慰めるふうでもなく、さらりと軽く言った。当然と言わんばかりの口調である。ジークは同意することも反論することもなく、無言で肩を落としたままだった。

——習ったことばかりやっても駄目だ。

いつかのラウルの言葉が、ふいに頭をかすめた。もちろん、習ったことばかりでなく、独学でもいろいろとやってきたつもりだ。しかし、やはり自分ひとりでは限界があるのではないか。

「ジーク？」

うつむいたまま無反応のジークを、アンジェリカは心配そうに覗き込んだ。

「そうとうショックを受けてるみたいだね」

リックは苦笑いした。

「よし！ 決めた！」

突然、ジークは右のこぶしをぐっと握りしめ、ぱっと顔を上げた。暗く淀んでいただけの先ほどまでとはまるで違う、何かを吹っ切ったような表情。そして、その瞳には強い決意がみなぎっていた。

「決めたって、何を？」

アンジェリカは驚いて、少し引きぎみに尋ねた。ジークは彼女の鼻先に、ビシッと人さし指を突きつけた。

「もう勝つためには手段を選ばねえ！ 見てろよ！」

そんな捨てゼリフを残し、ドタバタとアカデミーの中へ走り去っていった。残された二人は、呆然と彼の背中を見送ると、互いに顔を見合わせた。

「手段を選ばないって、どういうことなの？」

「さあ。たいしたことじゃないと思うけど……」

再び廊下の奥へ目を向けたが、もう彼の姿は見えなくなっていた。

「ラウル！！」

ジークは医務室の引き戸を開くと同時に、興奮ぎみに声を上げた。ラウルは机に向かい、カルテの整理をしていた。騒々しいジークの登場にも、まるで反応を示さず、一瞥をくれることすらなかった。

ジークは医務室に踏み入ると、さらに感情を高ぶらせ、ラウルの横顔に向かって思いつめたように訴えた。

「俺に……俺にもっと魔導を教えてくれ！」

「断る」

ラウルの返事はにべもないものだった。ジークはしばらく啞然としていたが、次第に沸々と怒りがこみ上げてきた。

「こっちだってテメェなんか頼りたくねえよ！でも仕方ねえから頭を下げて頼んでるんだぜ。もうちょっと考えてくれてもいいじゃねえか！」

「それはおまえの都合だ」

「ぐっ……」

ジークは言葉に詰まった。歯を食いしばり、額にうっすらと汗をにじませる。

「そ……それでも引き下がるわけにはいかねえんだ！」

ラウルはくるりと椅子をまわし、ジークに向き直った。机に片ひじをつき、長い脚をおもむろに組むと、じっと彼を見上げた。

「なぜそこまで魔導を学びたいと思う」

「……しょ、将来のためだ」

「嘘つきに用はない。帰れ」

ラウルは再び机に向かうと、カルテ整理の続きを始めた。

ジークは、頭から熱湯と冷水を一度に浴びせられたかのように感じた。慌てふためき、顔を紅潮させながら、再び訴えかけた。

「待ってくれ！あの、えっと……アンジェリカに勝ちてえんだよ！！」

「おまえの青くさい理由につきあってやる義理はない。帰れ」

ラウルは手を止めることもなく、冷たい拒絶の言葉を返すだけだった。

ジークは怒りでさらに顔を赤くした。まるで無関心のラウルに、声を荒げて噛みつく。

「じゃあどんな理由だったらいいなだよ！！」

「やあ、ラウル」

突然、聞き覚えのある声が割り込んだ。開き放たれたままの戸口から、サイファが顔を覗かせていた。

「ジーク君も。こんなところで会うとは奇遇だな」

にこにこ人なつこい笑顔を振りまき、遠慮なく歩み入ってきた。ジークは驚きながらも、わずかに頭を下げた。

「何の用だ」

ラウルは、笑顔の訪問者を思いきり睨みつけた。

「つれないな。たまには足を運べと言ったのはおまえだろう」

サイファはおどけたようにそう言うと、立てかけてあった折り畳みパイプ椅子を広げ、ラウルとジークの間に腰を下ろした。ラウルはあからさまに不機嫌な様子で、さらに激しく睨みつけた。

。

「用もないのに来いとは言っていない」

それでもサイファはまったく動じることはなかった。余裕の笑顔を崩すことなく、ラウルに向

き直った。

「ホット二つ頼むよ」

「喫茶店に行け」

「おまえが淹れたコーヒーが飲みたいんだよ」

サイファはにっこりと邪気なく笑いかけた。ラウルはため息をついて立ち上がり、奥の自室へと引っ込んでいった。

あのラウルが、いいようにあしらわれている……。

ジークはありえないものを見たような不思議な気持ちでいっぱいだった。目の前のことが信じられなかった。

「ジーク、君も座ったらどうだ」

「あ、はい」

ジークもパイプ椅子を広げ、サイファの隣に座った。

「君はどうしてここへ？」

サイファに問われて、ジークはぎくりとした。緊張で顔がこわばる。

「ラウルに個人的に指導をしてもらおうと思って……」

「ずいぶん思いきった決断だな。どういう心境の変化だ？」

彼がラウルを嫌っていることは、サイファも知っていた。そんな嫌いな相手に教を請うなど、よほどのことに違いない。そう考えるのは当然のことだろう。

「ア……アンジェリカに、どうしても勝ちたくて……」

ジークはびくつきながらも正直に答えた。ラウル同様、サイファも嘘が通じる相手ではないと感じたからだ。だが、こんなことを言って気を悪くしないだろうか……。彼は不安で息が詰まりそうになった。

「そうか」

サイファはそう言って笑った。

「君の気持ちはわかるよ。男として」

ジークは安堵すると同時に、居たたまれない気持ちになった。まるで、自分の気持ちをすっかり見透かされているようである。しかし、この場から逃げることはできない。上気した顔を隠すように、深くうつむくだけだった。

ガタン。

ラウルがコーヒーカップをふたつ持って、奥から出てきた。

「飲んだらさっさと帰れ」

ぶっきらぼうにそう言うと、机の上にカップを置いた。サイファはその片方をジークに差し出した。

ふたつって、ひとつは俺の分だったのか……。

彼は恐縮しつつ受け取った。なんてことはない、ごく普通のコーヒーのようだ。ラウルの淹れ

たコーヒーか、と奇妙な気分でひとくち飲んでみる。ぴくりと眉が動いた。意外にも、今まで飲んだどのコーヒーよりもおいしかった。

「ジークを教えることにしたんだって？」

サイファはゆったりと目を閉じ、コーヒーの香りを楽しみながら尋ねた。ラウルはムツとしながら、椅子に身を投げた。

「引き受けた覚えはない」

「引き受ければいいだろう」

「私は暇ではない。軽く言うな」

ラウルはこれ見よがしにカルテを手を取った。サイファは涼しい顔でコーヒーを口に運び、一息ついて彼を見上げた。

「医者はおまえひとりじゃない。それに、雑用くらいならジークが手伝ってくれるさ。ルナはもう少し長く預かってくれるよう、私からアルティナさんに頼んでおこう。他に何かあるか？」

一気にそう言うと、勝ち誇ったようにニヤリと笑った。ラウルは、凍りついた瞳で、刺すように睨みつけた。それから、疲れたようにため息をつくど、カルテを机に投げ置いた。

「一ヶ月だけだ。それに試験対策はしない。完全な実戦訓練だ」

「なるほど。そうでなければ、他の生徒に対して不公平になると考えてだな」

サイファは真面目な顔でうなずき、ジークに振り返った。

「どうする？ この条件でやるか？」

「あ……はい！ ありがとうございます！」

ジークは座ったまま、大きく頭を下げた。

「行くぞ。早く支度をしろ」

ラウルは立ち上がり、ジークを見下ろした。

「今からかよ?!」

「私が厳しいことくらい知っているだろう」

ジークはさっそく後悔しそうになっていた。

「頑張れよ、ジーク」

サイファはジークの肩をポンとたたいた。ジークはペコリと頭を下げた。

「いろいろとありがとうございました」

「暇があれば様子を見に行くよ」

サイファはにっこり笑いかけると、ラウルに目を移した。

「アルティナさんには話をしておくよ」

しかし、ラウルは返事をする事なく、サイファを睨みつけただけだった。それでも彼はまったく気にしていない様子だった。にっこりと笑顔を返すと、王宮の奥へと消えていった。

ラウルは無言で歩き始めた。ジークもそのあとに続く。

「どこへ行くんだ？」

「来ればわかる」

アカデミーへ入り、渡り廊下を渡りきると、白く四角い建物の前へやってきた。道場だ。魔導耐性に優れた、また物理的にも頑丈な建物である。通常、実際に魔導を使った訓練時に使用する。実戦訓練を行うと宣言したラウルがここを選んだのは当然だろう。

入口の大きな南京錠を開け、ふたりは中へと足を踏み入れた。何もない真っ白なだけの四角い部屋。抛り所になるものが何もないせいか、不安定な気持ちになる。足元がふわふわとしているような感覚。異空間に来たような錯覚にさえ陥る。

「授業でも言ったことがあるが」

大きく反響したラウルの声が、ジークを現実に戻した。

「魔導と身体能力は関係ないと思われがちだが、身体能力が低くても、実戦では使いものにならない」

ジークは真剣なまなざしを彼に向けた。

「一対一の戦いでは言うまでもないが、後方支援の場合でも、相手に的確に対応するためには、判断力、瞬発力、動体視力、魔導力のどれが欠けても致命的だ。さらに戦いが長引けば、持久力がものをいう。魔導力が残っていても、体力がなくなれば、攻撃することも防御することもできない」

「ああ」

ここまでは何度か授業でも聞いた話だった。

「腹筋 200回、背筋 100回、腕立て伏せ 200回、スクワット 100回、ランニング 50周」

「……は？」

ジークはぽかんと固まった。ラウルは腕を組み、冷たい視線を送った。

「やるのか、やらないのか」

「やるよ！ やりゃいいんだろ！」

ジークはむくれながら、ただっ広い部屋の真ん中で、ひとりさびしく腹筋を始めた。

「……50周！ これで終わったぞ！」

ぜいぜいと息をきらせながらそう叫ぶと、崩れるようにその場にへたり込んだ。白く冷たい床に、ぽたぽたと汗が流れ落ちる。情けなくへばった少年を、ラウルは冷ややかに見下ろした。

「時間がかかったな」

「るっせー。テメーがやってみろってんだ」

両手両足を投げ出して仰向けになり、胸を大きく上下させながら真っ白な天井を見つめた。

「次は実戦形式だ」

ジークはげほげほとむせた。

「今すぐかよ！」

上体を起こし、すぐるようにラウルを見上げる。彼は無表情で視線を返した。

「10分休憩。水分の補給をしておけ」

感情なくそう言うと、大きな足どりで道場の外へ出ていった。ジークはほっとして息をついた

10分が経ち、ふたりは再び道場の中央で向かい合っていた。

「で、どうやるんだよ。実戦形式って」

ジークは短い休憩で、すっかりやる気を取り戻していた。何よりも魔導を使えるのが嬉しかった。単なる体力づくりよりも、ずっと楽しい。

ラウルは腕を組んで、まっすぐジークを見据えた。

「私を殺す気でかかって来い。一発でもかすめられたら、今日の訓練は終わりだ」

「願ったり叶ったりだぜ」

ジークは不敵にニヤリと笑ってみせた。そして、即座に軽いステップで後方に下がり、ラウルとの間合いをとった。彼から目を離すことなく、短く呪文を唱え、両の手を向かい合わせる。すると瞬時に光が集まり、頭の大きさほどの光球になった。

「やあっ！！」

気合いを入れて叫び、ラウルに向けそれを放出した。

しかし、すでに彼は前面に薄い結界を張っていた。

ドッ——。

光球が結界に衝突し、鈍い音を立てた。大気が激しく振動する。あたり一面に白煙が巻き上がった。

ジークは間髪入れずに、次の呪文の詠唱に入った。顔前で両手を向かい合わせ、その間に光を集めていく。

「ぐあっ！！」

突然、ジークは濁った悲鳴を上げ、吹き飛ばされるように後ろに倒れ込んだ。白煙の中から伸びた光の帯が、彼の左腕を直撃したのだ。焼けるような痛みが彼を襲う。袖が落ち、剥き出しになった上腕部は、真っ赤になり、さらに裂傷をも負っていた。ゆっくりと血が滴り、白い床に赤い点を描いていく。

「攻撃に気をとられ防御をおろそかにするなど、新入生レベルだな」

次第に煙が晴れていき、その向こうからラウルが姿を現した。あきれ顔でジークを睨みつけている。

ジークは言い返すことができなかった。ラウルの言うとおりの。攻撃を当てることばかりに熱くなり、防御のことは完全に思考から抜け落ちていた。しかし、これで頭が冴えてきた。

「テメーも俺を殺すつもりってことか」

「自惚れるな。そのつもりなら、おまえなどとっくに死んでいる」

ジークは勢いをつけて飛び起き、それと同時に炎を放った。不意打ちのつもりだったが、ラウルは慌てることなく結界を張り、それを防いだ。

——正面からじゃ、いくらやっても無理だな。

ラウルを睨みつけたまま呪文を唱え、右手を前に突き出す。ジークの前面に、かすかに青みがかかった結界が張られた。かなり厚い。向こう側が屈折して見える。

ラウルは腕を組んだまま、無言で成り行きを眺めていた。

ジークはさらに別の呪文を唱えると、右手を高く大きく掲げた。その手のひらの上で、白い煙をまとった光球が、次第に大きく育っていく。

「行けえっ！！」

腕を振り下ろし、頭の三倍ほどの大きさになった光球を前方に放った。

ジュワッ！！

水が焼けるような音と同時に、結界も光球も消滅し、その代わりにあたり一面、純白の濃霧で覆われた。

——今だ！

ジークは全速力でラウルの背後にまわり込む。霧の海の上に、彼の焦茶色の頭がうっすらと見えた。こちらに気づいてはいないようだ。

——とれる！

右手に小さな白い光を蓄え、ラウルに襲いかかるべく、身を屈めて飛び出した。

ゴワッ！！

奇妙な音がしたその瞬間、ジークは体中に激しい痛みを感じた。いつのまにか、後方の壁に叩きつけられていたのだ。

「うっ……」

くぐもった声でうめき、壁からはがれるように、その場に倒れ伏した。起き上がろうとしても、わずかに顔を上げるのがやっとだ。頭を打ったために、軽い脳震盪を起こしているらしい。まぶたを震わせながらうっすらと片目を開けると、視界がぐらぐら揺れていた。

「防御をおろそかにするなと言ったはずだ」

ラウルは腕を組んだまま振り返り、冷たく見下ろした。濃霧はすでにさっぱりと消えていた。

「今日はこれまでだな」

「バ……カやろう……俺は、まだ……」

倒れたまま右手を上に向け、苦しうにあえぎながら、小さな声で呪文を唱え始めた。光が集まりかけたその手のひらを、ラウルは上から踏みつけた。

「ぐあっ！」

「ドクターストップだ」

感情のない声でそう言うと、ジークの体を肩に担ぎ上げた。

「あ……歩け、るっ……！」

「立てもしないくせにどうやって歩く」

「く……そっ……！」

ジークは目の前の大きなラウルの背中に、こぶしを叩きつけた。だが、それは弱々しいものだった。そして、それきりぐったりとなった。

苦しい……胸が……息ができな……い……。

ジークはうっすらと目を開いた。ぼんやりとした彼の視界に、誰かの輪郭が映った。

母さん……？ アンジェリカ……？

次第に焦点が合ってくる。ぼやけた人影から、次第にはっきりとした形が現れてきた。

「……………?!」

ジークは驚いて目を見開いた。相手もくりくりした目をさらに丸くして、きょとんと彼を見つめている。ラウルの小さな娘・ルナだ。なぜか自分の胸の上に乗っかっていた。どうりで息苦しかったわけだ。

「動くな」

ラウルはベッド脇でジークの脈を見ていた。ふいに振り向いた彼の口に、もう片方の手で体温計を突っ込んだ。

ジークは体温計をくわえたまま、頭を左右に動かし周囲をうかがった。どうやらここはラウルの医務室らしい。あのまま気を失って、ベッドまで運んでこられたのだろう。

「異状なし」

ラウルはカルテに何かを書き込むと、今度は体温計を引き抜いた。

「熱も平熱だな」

「おい、普通、ケガ人の上に赤ん坊を乗せるかよ」

「目の届くところはそこしかない」

ラウルはしれっと言って、ルナを抱き上げた。ルナは嬉しそうに声をあげて笑い、ラウルの顔に小さな手を伸ばした。

「それにたいした怪我ではない。左腕の骨折以外は、浅い切り傷、軽い火傷、それに打撲程度だ」

「骨折?!」

ジークは自分の左腕を見た。上腕部に白い包帯が丁寧に巻かれている。

「少しヒビが入っているだけだ。すぐに治るだろう」

「……これじゃ、当分、休業はお預けだな」

ジークは天井を見つめ、沈んだ声でつぶやいた。ラウルは、そんな彼を、冷めた目で見下ろした。

「腕など使えなくても、いくらでもやることはある。それとも逃げ出すのか」

「いや……望むところだ」

ラウルの挑発に、ジークはみるみる生氣を取り戻した。挑むようにニッと口角を上げると、ぐっと右手を握りしめ、自分自身に気合いを入れた。

「道場でのことは覚えているか」

ラウルに問われ、ジークの顔がとたんに曇った。横目でラウルをうかがいながら、言葉を濁しつつ尋ねかけた。

「ああ、でも何で……ってというか何が……」

「おまえの浅知恵など、誰にでもわかる」

ジークはムツとしたが、ここは大人しくこらえた。

「ごく簡単に言えば、あの結界は温水、それに冷気の塊をぶつけ、濃霧を発生させた。その霧に

身を隠し、私の背後にまわり込む。空気より重い霧は次第に下がり、私の頭が真っ先に視界に現れる。そこを狙い、不意打ちを仕掛ける作戦だった。そんなところだろう」

「……」

ジークはぐうの音も出なかった。ここまで完全に読まれているとは思わなかった。

「私は全方位に風を起こした。熱や氷では、おまえを死に至らしめてしまうからな。おまえは風に飛ばされ、壁に叩きつけられたということだ」

「全方位……」

ジークは呆然としてつぶやいた。ラウルは簡単に言っているが、かなり非常識である。暴発ではなく、意図的にこんなことができる人物は、この国に数えるほどしかいないだろう。あらためてラウルの力量を見せつけられた。くやしいが、認めざるをえない。

ラウルは、腕の中で動きまわるルナを抱え直した。

「家には連絡を入れておいた」

「たいしたケガじゃねえのに、よけいなことを……って、もう朝か?!」

ジークは慌てて飛び起き、再びあたりを見まわした。今まで意識してなかったが、確かにすっかり明るくなっていた。細く開いた窓からは、ひんやりとした新鮮な空気が入り込み、薄いカーテン越しの柔らかい光がのどかに揺れている。

「今ごろ気がついたのか」

ラウルはため息まじりに言った。

「ジーク!!」

すでに教室で自席についている彼のもとへ、リックとアンジェリカが走り寄ってきた。

「聞いたよ。ずいぶん思いきったね」

「言ったろ。手段は選ばねえって」

ジークはぶっきらぼうに返事をした。

「その腕、大丈夫なの？ 軽いヒビって聞いたのに」

三角巾で首から吊るされた腕を見て、アンジェリカは心配そうに覗き込んだ。

「ああ、たいしたことねえよ。念のためっていうか、あいつが大袈裟なだけだ」

ジークは左腕を軽く上げてアピールし、彼女を安心させるよう笑顔を作ってみせた。それでも、アンジェリカの不安は拭えなかった。

「でも初日からこれじゃ、あと一ヶ月も耐えられるの？ 泊まり込みで修業なんて」

「……泊まり込み？」

ジークは怪訝な表情で聞き返した。

「あれ？ そう聞いたけど？ はい、これ」

横から口をはさんできたリックが、かさばる大きなリュックサックをジークに差し出した。ジークはますます怪訝に眉をひそめた。

「何だ？」

「おばさんから預かってきたんだよ。着替えだって言ってたけど」

「おい、どうなってんだよ。俺は泊まり込むなんて言ってねえぞ！」

そこまで言って、ジークははっとした。思いきり顔をしかめて舌打ちをする。

「アイツの仕業か」

アンジェリカはその様子を眺めながら、わずかに顔を曇らせた。

「じゃあな」

授業が終わると、ジークは元気いっぱい、張り切ってラウルの後についていった。あれだけラウルを嫌っている人間とはとても思えない。

アンジェリカは複雑な思いでふたりを見送った。次第に小さくなるふたつの後ろ姿を、ずっと目で追っていた。

「さ、帰ろっか」

リックは優しく声を掛け、にっこりと微笑んだ。

「ええ」

アンジェリカは虚ろに返事をし、うつむいて踵を返した。しかし、数歩進んだだけで、すぐにその足を止めた。

「どうしたの？」

「やっぱり私、お父さんのところに寄っていくわ」

そう言って王宮の方を指さし、再び方向転換した。

「お父さん！」

「アンジェリカ?!」

思いつめた表情で部屋に駆け込んできたアンジェリカに、サイファは驚いて立ち上がった。彼女が魔導省の塔まで訪ねてくることなど、今までなかったことだ。早足で歩み寄りながら、急く気持ちを抑えつつ尋ねる。

「どうした? 何かあったのか？」

「私に魔導を教えて! 厳しく鍛えてほしいの！」

サイファは呆気にとられた。

「ジークはラウルのところに泊まり込んで、厳しい修業をしているの。このままじゃ、私、負けてしまうかも……」

「泊まり込んで？」

「ええ、そう。お父さんが忙しいのは知っているわ。だから、無理は言わない。休みの日とか、空いた時間だけでいいから。お願い！」

アンジェリカは漆黒の大きな瞳で、真摯にサイファを見上げた。

「まいったな」

彼は腰に手を当てうつむくと、困惑したように笑った。かわいい娘に厳しく指導することなど、自分にはできそうもない。いや、そもそも魔導を使っただけの戦いなど、本当はさせたくないのだ。しかし、引き受けるまで彼女は引き下がらないだろう。そういう頑固な性格だ。とりあえず、

この場は承諾しておくしかない。

「わかったよ。厳しくとはいかないだろうけどね」

アンジェリカの頭に手をのせると、にっこりと笑いかけた。彼女も安心したように、表情を緩めて笑った。

「うんと厳しくしてね！」

無邪気にそう言うと、小走りで部屋を後にした。

——ジーク、君はずいぶんと大変な相手を選んだものだな。

サイファは小さくふっと笑うと、椅子に身をしずめ、天井を仰いだ。

「50周！終わった！」

ジークは体を折り曲げ、はあはあと息をきらせた。

「座れ」

ラウルに言われ、ジークは白く冷たい床に腰を下ろした。そして、目の前のラウルを見上げた。無表情で腕を組み、まっすぐに立っている。ただでさえ大きい彼が、よりいっそう大きく見えた。まさにそびえ立つといった表現がふさわしい。

ジークは息を呑んだ。

「おまえの最大の弱点は精神面だ。魔導を扱う際の集中力が足りない。無駄が多く、うまく魔導力を高められていない」

ラウルは顔を前に向けたまま、視線だけを落とした。ジークは彼と目が合うと、背筋に冷たいものが走った。思わず身震いをする。

ラウルは目を閉じ、息をついた。

「感情にとらわれやすいのも問題だな。感情を高ぶらせることがあっても、常に冷静な部分を残しておかなければならない。感情に支配されるのではなく、感情を利用しろ」

ジークは難しい顔で、彼を見上げた。

「.....だから、どうすればいいんだよ」

「まずは瞑想で精神を鍛える」

「瞑想か.....」

ジークは苦虫を噛み潰したように、思いきり顔をしかめた。体を動かし魔導を使うことは楽しい。そのための勉強も嫌いではない。だが、瞑想だけはどうしても好きになれない。何もしない、何も考えないという状態が、どうにも耐えられないのだ。

「身体の緊張を弛め、雑念をなくし、眉間あたりに意識を集中させろ。あとはひたすらその状態を持続し、少しずつ高めていく」

「んなこと、わかってるよ！」

ジークはその場であぐらをかき、背筋を伸ばして目を閉じた。

「.....なあ、何分くらいやるつもりなんだ？」

三分と経たないうちに、ジークは口を開いた。

「雑念は捨てる」

「……」

ラウルの言葉により、ジークの心にさらなる雑念が沸き上がった。

頭が……熱い……そうか、意識を集中させているから……ってか、痛っ！

ジークははっとして目を開き、勢いよく頭を上げた。目の前には、はじきとばされるようにして尻もちをついたルナがいた。大きく澄んだ瞳を思いきり丸くして、ジークをじっと見つめている。彼女の小さな指には、ジークの髪が数本、絡みついていた。

「おまえの仕業か」

ジークは軽くため息をついた。

「昼寝にしては遅すぎるな」

頭上から重い声が降ってきた。

「うっ……」

ジークはおそろおそろ顔を上げた。仁王立ちのラウルが、無表情でこちらを見下ろしている。ジークの顔から血の気が引いた。

「瞑想と睡眠の違いはわかっているのか」

「悪かったよ！ そんなイヤミな言い方しなくてもいいだろ！」

そう突っかかりながらも、ばつが悪そうに顔を赤らめた。

ラウルは、ジークの膝の上に這い上がろうとしていたルナを抱き上げた。

「状態としては、ふたつは非常に近い。違いは意識の集中があるかないか、それだけだ。だが、そこが肝心だ」

「やあ、ここにいたのか」

入口からひょっこりサイファが姿を現した。右手を上げ、人なつこい笑顔を見せている。

「医務室にいなかったから探したよ」

「何をしに来た」

軽い調子で入ってきたサイファを、ラウルは冷たく睨みつけた。

「仕事帰りに寄ってただけだよ。ジークを泊まり込みで修業させると聞いたんで、どういう風の吹きまわしかと思ってね」

サイファは、意味ありげにニッと笑ってラウルを見た。

「なんのことだ。そんなつもりはない」

ラウルは素っ気なく答えた。しかし、ジークはこの言葉に驚いた。

「は？ おまえが俺の母親に言ったんだらう？ だから着替えまで用意して……」

「知らんな。私は、腕を骨折したこと、今夜はこちらに泊ませること、一ヶ月修業することを伝えたまでだ」

ジークはなんとなくわかった気がした。おそらく母親の方が勘違いをしたのだ。早とちりはレイラの得意技である。その結論にたどり着くと、思いきり脱力し、一気に疲労感が襲ってきた。

「まあ、今さら帰るのも何だし、今日は泊めてくれよ」

ジークはぐったりした声で言った。しかし、ラウルの返事はずれないものだった。

「野宿でもしろ」

「なっ……！ ユールベルは泊めてやってくせに、俺はダメなのかよ！」

「状況が違う」

ラウルは冷たくあしらうと、ふいにサイファを見た。

「おまえのところに泊めてやれ。元はといえば、おまえが口出ししたのが原因だ」

「私は構わないが、どうだ？ ジーク」

「えっ……」

ジークは少し気が引けていた。何から何までサイファの世話になりっぱなしである。それに、アンジェリカに勝つための修業なのに、そのために彼女の家泊めてもらうなど、何か間違っ
てはいないだろうか。

「遠慮はするな。ゲストルームはたくさんあるんだ」

サイファは、迷いを見せるジークを後押しした。

「あ……はい……」

ジークは流されるように、あいまいな返事をした。

「決まりだな」

サイファはにっこりと笑った。

「様子を見にきてよかったよ」

サイファとジークは、薄暗い廊下を並んで歩いていた。夜も遅いため、王宮内はすっかり静寂
に包まれている。人の姿もほとんどなく、要所に見張りの衛兵が立っているくらいだ。

「そんなことだろうと思ったんだ。ラウルが君を泊めてやるなど、考えられなかったからね」

ジークは怪訝な顔をサイファに向けた。

「いや、気を悪くしないでくれ。あいつが自分の部屋に招き入れるのは、よほど気を許した相手
だけなんだよ」

サイファは安心させるように、ジークの背中に手を置いた。

「まあ、ユールベルは別だろうけどね。彼女に関しては、ラウルも責任を感じていたようだし、
そういう意味合いだろう」

ジークは、サイファの端正な横顔を見つめた。

「サイファさんは？」

「ないよ」

驚くくらい素っ気なく答えた。そして、それ以上、その話題を広げることはなかった。

「おはよう」

アンジェリカがいつものようにダイニングに入ると、そこにはなぜかジークがいた。ものすご
い勢いで、パンにかぶりついている。彼女は我が目を疑った。戸口で固まったまま、呆然として
いる。

「おう」

口にもものを入れたままで、ジークが声を掛けてきた。三角巾で吊った左手を軽く上げる。やはり、どう見てもジークである。

「どうして？ どうしてジークがウチにいるの？」

「まあ、成り行きだ」

アンジェリカは、不思議そうにぼうっと彼を見つめながら、その隣に座った。近くで見ても、やはりジークである。

レイチェルは、紅茶をカップに注ぎながら、静かに言った。

「これから一ヶ月、ジークさんにはウチに泊まってもらうことにしたのよ」

「ええっ？ ずっと？！」

「……嫌なのか？」

ジークは手を止め、不安そうに尋ねた。

「そうじゃないけど……なんかヘンな感じ」

アンジェリカは両手でほおづえをつくると、複雑な表情で頬をふくらませた。

「言っておくけど、私は負ける気ないから」

「俺だって！」

レイチェルはそんなふたりを見ながら、くすくすと笑っていた。

60. 最後の夜

それから毎日、ジークは個人指導を受けていた。アカデミーが終わると、ラウルとともに道場へ行き、夜遅くまで修業をする。その合間や終了後に、ルナの世話や雑用を押しつけられることもあった。そして、日付けが変わるころ、こっそりとラグランジェ家へ戻って休み、朝になるとアンジェリカとともに朝食をとり、アカデミーへ向かう。そんな繰り返しだった。

ラウルの厳しさは、ジークの体を見れば一目瞭然だった。大きな怪我は初日の骨折のみだが、細かい生傷が絶えることはなかった。連日、違う場所に絆創膏が貼られていった。

ジークは何かにつけラウルへの不平不満を口にしてはいたが、それでもどこか楽しそうだった。

「これで約束の一ヶ月は終わりだ」

ラウルは無表情で言い放った。

ジークは道場の中央に汗だくで座り込んだ。そして、うなだれるように声なくうなずいた。

「……そういや、すげえ呪文とか、何も教えてくれなかったよな」

肩を揺らし、荒く呼吸をしながら、ふいに思い出したようにつぶやいた。

外に出ようとしていたラウルは、戸口で足を止めた。わずかに振り返り、ジークを冷たく一瞥した。

「おまえには無理だからだ。そういうことは基礎ができてから言え」

「ほんっとーに頭にくるな、オマエ」

ジークは力なく笑った。

「魔導力もないくせに、無理に高等呪文を使えば、下手をすると体が吹っ飛ぶ。欲張らないことだ」

ラウルは、背を向けたまま淡々と忠告をすると、再び歩き始めた。

「ラウル！」

ジークは顔を上げ、呼びかけた。しかし、彼は少しも振り返ることなく、長い髪をなびかせ道場を出ていった。

「お、おいっ！」

ジークは慌てて立ち上がり、後を追った。

「ラウル！！」

外に飛び出し、彼の後ろ姿を見つけると、さらに大きな声で呼び止めた。

「俺……この一ヶ月……感謝してる」

振り向かないその背中に、少し照れくさそうにしながら、真顔で不器用な言葉を送った。

ラウルは一呼吸ののち、静かにつぶやいた。

「あしたは雨だな」

「……っんだと？！」

ジークの怒号が闇に響いた。

「お疲れさま、ラウル先生」

からかい口調でにこにこ医務室へ入ってきたサイファに、ラウルは冷ややかな視線を送った。だが、ため息ひとつつただけで、すぐに机に向き直り、書類整理の続きを始めた。

「追い返そうとしないところを見ると、何か話したいことがあるんだな？」

サイファはにやりと笑いながら机にひじをつき、身を屈めてラウルを覗き込んだ。ラウルはわずかに眉をひそめると、間近に迫った端正な顔を、容赦なくファイルで払いのけた。それでも懲りない彼を見て、呆れたようにため息をつく、静かに口を切った。

「今度の試験で対戦型 VRMを使いたい」

サイファの顔から笑みが消えた。

「馬鹿を言うな。あれはすでに禁じた。おまえも忘れたわけではないだろう」

早口でそう捲し立てると、けわしい表情でじっとラウルを見つめた。彼はゆっくりと振り向き、まっすぐに視線を返した。

「だからおまえに相談している」

ふたりは強く睨むように、目で探り合った。互いに譲らない。無言の長い対峙が続く。そこに流れていたものは、時を刻むかすかな音だけだった。

先に視線をそらせたのはサイファだった。小さく息をつき、窓際へと足を進めた。細く開いたカーテンの隙間から、外へと目を向ける。あたりはすっかり闇に包まれ、木々の枝葉は黒く不気味にざわめいていた。

「彼がアンジェリカに勝てるとでも？」

腕を組み、窓枠に寄りかかりながら、冷静な口調で尋ねた。

「それを試したい」

ラウルは即答した。サイファは目を細め、冷たく彼を流し見た。

「悪趣味だな。アンジェリカを戦わせるために、おまえに預けたわけではない」

「アカデミーとはそういうところだ」

ラウルは机に向かったまま、悪びれずに答えた。サイファは睨みつけはしたが、反論することはなかった。いや、できなかったのだ。なぜアカデミーが設立されたのか、彼はそれを知っていた。

アカデミーとは、国中から才能のある者を集め、無償で高度な教育を施す、唯一無二の王立校である。その目的のひとつは、国による優秀な人材の育成、そして囲い込みだ。ほとんどの卒業生が国の機関で働いているという事実が、そのことを物語っている。そしてもうひとつ。一般には知られていないことだが、有事の時の人材確保である。兵器開発のために工学科が作られ、兵士に最先端医療を施すために医学科が作られ、そして、前線で戦う魔導士を育成するために魔導全科が作られた。それが、そもそもの成り立ちである。つまり、魔導全科の者は、本来、戦うことが義務づけられているのだ。

ただ、平和が長く続いているこの国で、有事のことを真剣に考えているものなど、今はほとんどいない。サイファも楽観しているわけではなかったが、特に憂慮しているわけでもなかった。そうでなければ、いくら本人の強い希望とはいえ、アンジェリカを受験させたりはしなかっただ

ろう。

「……リミット値の設定はこちらで行う。それと、試験の様子はモニターさせてもらう。いいな」

多少の動揺を心の内側に押し隠し、感情を見せず条件のみを突きつけた。静かだが、有無を言わさない強い口調である。

「好きにしろ」

ラウルも冷静に無表情で答えた。

しかし、サイファはその答えに不快感を示した。一瞬、ムツとした表情を浮かべ、疲れたようにため息をついた。

「好き嫌いではなく仕事だ。ヴァーチャルとはいえ、娘が戦っているところなど、目にしたくないよ。趣味の悪いおまえと一緒にするな」

「気になってはいるのだろう」

ラウルの問いかけに、サイファはわずかに眉をひそめた。

「多少はな」

抑えた声でそう答えると、自嘲ぎみにふっと笑いながらうつむいた。そして、小さくぽつりとつぶやいた。

「私もおまえのことは言えないか」

修業が終わり、ジークはラグランジェ家へ戻ってきた。ここに世話になるのも、今晚が最後である。足音を立てないよう廊下を歩きながら、この一ヶ月のことを思い返していた。ラグランジェ家の人たちと顔をあわせるのは、基本的に朝食のときだけだったが、それでも今までより多くの面を知ることができた。

当然といえば当然なのかもしれないが、ラグランジェ家には家政婦と料理人、そして庭師が雇われているようだった。考えてみれば、これほど広い家のことをレイチェルとサイファだけでこなすなどということはありえない。ただ、住み込みではなく通ってきているようで、ほとんど姿を見たことはなかった。

サイファの仕事が大変そうだという事もわかった。サイファは魔導省に勤めており、かなり上の役職に就いている。だが、どうやら早番というものがあるらしく、週の半分はジークが起きるよりも早く家を出ていた。帰りが遅くなることも、たびたびあるらしい。

そして、サイファとレイチェルは本当に仲が良かった。ジークがいることも気にせずに、サイファはレイチェルを抱きしめたり、頬に口づけしたりしていた。初めのうちは、そんなふたりを見ていちいち照れていたジークだったが、そのうち次第に馴れてきた。もちろん、不快に感じたことはなく、むしろ微笑ましく羨ましく思えた。あるとき、アンジェリカにちらりとその話題を振ってみたところ、「普通じゃないの？」ときょとんとして聞き返されてしまった。幼いころから見なれていれば、普通だと思うのは当然だろう。

ジークはそんなふうを考えごとをしながら、彼が借りているゲストルームへと入っていった。特別に広いわけではないが、彼にとっては十分すぎるくらいだった。自分の家よりも広く、きれ

いで、清潔で、とても快適だった。

——トントン。

ジークが着替えようと服に手を掛けたところで、部屋の扉がロックされた。こんな時間に……サイファさんか？ ジークは不思議に思いながら扉を開けた。

「おまえ……まだ起きていたのか」

そこに立っていたのはアンジェリカだった。薄桜色のネグリジェを見にまとい、かすかに笑みを浮かべていた。

「帰ってくるのを待っていたのよ。今日で最後でしょう？ せっかくだから話でもしない？」

「あっ……ああ」

思いがけないことだった。ジークはうろたえて声がうわずった。

「よかった」

アンジェリカはにっこり笑って部屋に入ろうとした。しかし、ジークは彼女の前に腕を伸ばし、それを阻んだ。

「何よ？」

アンジェリカは口をとがらせて、ジークを見上げた。彼は、困ったような弱ったような顔で、目を泳がせていた。

「部屋ん中はまずいだろ」

「どうして？」

「ベランダに出よう、なっ？」

焦りながらなだめすかすジークを見て、アンジェリカはいぶかしげに眉をひそめた。

「なにか変よ、ジーク。まさか部屋の中に変なものを持ち込んだりしていないわよね」

彼女の的外れな勘ぐりに、ジークは気が抜けた。

「んなわけねーだろ！」

「ふーん……まあいいけど」

まだ完全に疑惑は晴れていないようだが、とりあえずこれ以上の追求はなさそうだった。ジークはほっと胸を撫で下ろした。

廊下の突き当たりにあるガラス戸を開け、ふたりはベランダへと出た。大きな屋敷だけあって、さすがにベランダも広い。ジークは一通り見渡して、感嘆の息をついた。

前へと進んでいき、ふたりは並んで手すりにひじをのせた。真夜中ではあったが、ほのかな月の光に照らされて、互いの表情は十分に識別できる。顔を上げると、生け垣の向こうに王宮が見えた。ここからごく近くにあるように感じる。実際に近いのかもしれない。ジークは頭の中で地図を描き始めた。

「冷えるわね」

夜風が頬を撫でると、アンジェリカは肩をすくめ、小さく身震いした。ジークは彼女に振り向き、あらためてその格好を目にした。薄地のネグリジェ一枚である。

「そんな薄着で来るからだろ」

「だって外に出るつもりなんてなかったのよ」

アンジェリカはムツとして言い返し、頬をふくらませた。確かに、外に出るつもりはなかった彼女を、外に連れ出したのはジークである。彼女の言い分はもっともだった。

ジークは自分の上着を脱ぐと、顔をそむけたまま、無言でアンジェリカに差し出した。

「え？ありがとう」

少し面くらった様子だったが、彼女は素直に受け取った。

「ちょっと汗くさいかもしれねえけど.....って、ニオイ嗅ぐなよ！」

「このくらいなら大丈夫よ」

焦るジークを後目に笑顔でそう言うと、その上着に腕を通した。やはり、小柄なアンジェリカにはかなり大きかった。肩が落ちていうえ、袖から指先さえも出ていない。それを見て、彼女はくすりと笑った。ジークもつられて笑った。

「ぶかぶかね」

どこか嬉しそうにそう言うと、袖をまくり上げ、手先を出した。

「それで、どうだったの？ ラウルの修業」

「ああ.....大技とか必殺技とかは教えてくれなかった」

アンジェリカは目をぱちくりさせて、彼を見上げた。

「そんなのを期待していたの？」

「もともとそういうつもりだったんだよ」

ジークは恥ずかしそうにしながら、ぶっきらぼうに答えた。

「まあでも基本をみっちりやったし、少しは力がついたと思うぜ。試験でも少しは役立てばいいけどな」

「うん。きっと役に立つわよ。でも、私は負けないけど」

アンジェリカはにっこりと無邪気に笑いかけた。ジークの胸はドクンと強く打った。彼女の顔をまともに見ていられなかった。

「サイファさんに指導してもらったんだって？」

前に向き直り、視線を空に逃がしつつ尋ねた。

「ええ、でも三回だけよ」

「俺もサイファさんに教わりたかったぜ。ラウルよりよっぽどまともそうだし」

しかし、アンジェリカは何か思うことがあるようだった。軽く首をひねり、難しい顔を見せる

。「どうかしら？ 教えるのには向いてないかも.....」

「どういうことだ？」

意外な評価に驚き、ジークは瞬きをしながら振り向いた。彼女は眉尻を下げて、弱ったように肩をすくめて笑った。

「優しすぎるのよ」

「あ、それは相手がおまえだからだろ。娘だから」

サイファはいかにも娘に甘そうだった。しかし、他の人には厳しく的確に指導してくれるのではないか。ジークはそんな期待を抱いていた。ただ、忙しそうなので、実際に教えることは無理だろう。

「どうして？ 私は厳しくしてって言ったわよ」

彼女は不満げに言い返した。

「そう言われても、できなかったんじゃないか？ かわいい娘なわけだし」

ジークの答えに、彼女はまるで納得できなかった。ますます不機嫌になり、頬をふくらませてむくれた。

「なによそれ。私のためを思うなら、言うとおりに厳しくしてくれてもいいじゃない」

ジークは苦笑いするしかなかった。しかし、一息つくと急に真面目な顔になり、空を見上げて静かに切り出した。

「俺、サイファさんには感謝してる」

アンジェリカはそっと振り向き、彼の横顔を見つめた。ジークは遠くを見ていたかと思うと、ふいに目を伏せ、小さく息を吐いた。

「何から何まで世話になりっぱなしだ。今回だって一ヶ月も……。帰ろうと思えば帰れるのに、なんか甘えちまって」

「だって、ジークの家は遠いんだもの。毎日、遅くまで修業をして、それから帰ったんじゃ大変よ」

アンジェリカにそう言ってもらえて、ジークは少し救われたように感じた。わずかに表情を弛める。

「ね？ いっそずっとうちに住んじゃうってのはどう？」

アンジェリカは無邪気に大胆な提案をした。いいことを思いついたといわんばかりに、顔を輝かせている。

せっかく弛んだジークの表情は、一瞬で固まってしまった。

「お父さんもジークのことを気に入ってるみたいだし、きっと賛成してくれるわ」

ジークの様子に気づいていないのか、彼女は満面の笑みで話を続けた。

「あ、いや……さすがにそういうわけにはいかねえよ」

ジークは落ち着かない様子で、引きぎみに口を開いた。これ以上、サイファやレイチェルに迷惑をかけるわけにはいかない。第一、サイファが賛成してくれるとも思えない。自分が気に入ってもらえているかどうか自信がない。

「どうして？ いい話だと思うけど」

アンジェリカは不思議そうに尋ねた。ジークは弱った。

「母親をひとりにしとくのも心配だし……」

つい、そんないいわけが口をついた。嘘ではない。確かにそれもあるんだ。そう自分に言い聞かせた。

「そう、残念」

アンジェリカは少し沈んだ声で答えると、顔を上げ、にこっと笑った。

ジークの脳天に痺れが走った。笑顔を返そうとしたが、後めたさがブレーキをかけた。なんともいえない表情のまま、ただ立ちつくしていた。

「風邪、ひいたの？」

アンジェリカは、心配そうにジークを覗き込んだ。

「えっ？」

「さっきからぼうっとしてるし、顔も赤いわよ。熱があるんじゃない？」

「あ……ああ、そうかもな」

ジークはわざとらしく鼻をすすってみせた。

「修業が大変だったから、疲れが出たのよ。もうゆっくり寝た方がいいわね」

アンジェリカは身を翻し、中へ戻ろうとした。しかし、ジークは彼女の腕をつかんで止めた。

「え？」

「あ……」

突然、腕をつかまれたアンジェリカは、驚いて彼を見上げた。だが、彼の方も自分自身の行動に驚いていた。考えるより先に、体が動いていたのだ。しかし、なぜその行動を起こしたのか、その理由ならわかる。

「ここで熱を冷ますよ。もう少し……今日は最後、だろ？」

「もう、悪化しても知らないわよ」

アンジェリカは口をとがらせながら、たしなめるように言った。しかし、そのあとくすりと笑って、屈託のない笑顔を見せた。

サイファはようやく帰ってきた。もう零時を回っている。玄関の扉を開けて中に入ると、正面階段を忍び足で降りてくるレイチェルと目が合った。

「ただいま。どうしたんだい？」

レイチェルは人さし指を立てて口に当て、声を出さないよう注意を促すと、彼のもとに駆け寄った。

「お帰りなさい」

にっこり笑って彼を見上げながら、声をひそめて言った。サイファは笑顔で彼女を抱きしめ、髪を撫でた。

「ただいま。でも本当にどうしたんだ？何かあったのか？」

彼も、声をひそめつつ尋ねた。

「上で何か音がするから、様子を見に行ったの」

「それで？」

レイチェルは、彼の腕の中でくすりと笑った。

「ふたりがベランダで話をしていたわ」

「こんな時間に起きているのか、アンジェリカ」

サイファは目を丸くし、思わず二階を見上げた。

レイチェルは彼の頬を両手で包み、自分の方へ向き直らせた。

「固いことを言わないで。アンジェリカだって、いつまでも小さな子供じゃないわ」

そう言って、にっこりと笑いかけた。サイファもふっと表情を弛めた。

「そうだな。今日くらいは」

そして、彼女の肩に手をまわし、並んで歩き始めた。

「そういえば、私たちもあったな、ベランダで」

「私は、今のアンジェリカと同じ年齢だったわ」

「そうだったな」

サイファは少しばつが悪そうに笑った。

「あのころに戻りたい？」

ふいにレイチェルはそんなことを尋ねかけた。大きな青い瞳で、不安そうにサイファを見上げている。

サイファは彼女の頭を抱き寄せた。

「今が幸せだよ」

「.....ありがとう」

レイチェルはそっと彼に寄りかかった。

61. 潜在能力

コン、コン――。

魔導省の塔。その最上階の一室がゆっくりとロックされた。それに続き、若い男の声が、固く張り上げられた。

「カイル＝ハワードです」

「入りたまえ」

机に向かい書類を眺めていたサイファは、手を止めず静かに答えた。

一拍ののち、おずおずと扉が開き、カイルと名乗った男が入ってきた。彼は、サイファと同じ濃青色の上下を身につけていた。緊張した面持ちで一礼すると、背筋をすっと伸ばした。そのまま息を止め、次の言葉を待つ。

「君は魔導、医学、工学のいずれにも通じているそうだな」

サイファは顔を上げ、まっすぐカイルの瞳を見つめた。彼の顔はたちまち上気した。

「はい。すべてアカデミー終了程度です」

「君には今日一日、私と行動をとともにしてもらおう」

「えっ？」

思いがけない指示に、カイルは目を見開いて聞き返した。サイファはきびきびと端的に説明を始めた。

「アカデミー魔導全科で、対戦型VRMを使用し試験を行うことになっているのだが、そのVRMの設定と試験の監視を我々が行う」

カイルは頬を赤らめたまま、ぱっと表情を明るくした。

「はいっ！ 光栄です！ 頑張ります！」

鳶色の瞳を輝かせ、力を込めて畳み掛けるように答えた。

サイファは二枚の書類を差し出した。

「私が作った設定案だ。確認をして、問題があれば指摘してほしい」

カイルは前に進み、両手で受け取ると、その紙に視線を落とした。赤みがかった茶髪がさらりと頬にかかる。先ほどとは別人のような真剣なまなざしで、ひとつひとつ丁寧に、しかし素早く目を通していった。

「リミット値が若干低めですが、アカデミー生が対象なら妥当な線でしょう。問題はありません」

そう言って顔を上げ、サイファに書類を返した。

「よし、これで行くでしょう」

彼は、受け取った書類をファイルにはさみ、小脇に抱えた。

「これから実機に設定をしに行く。ついて来い」

「はい」

颯爽と歩くサイファの後ろを、カイルは小走りでついていった。

サイファたちは、アカデミー校舎の隅にある、ヴァーチャルマシンルームへと足を進めた。そこにはVRMの白いコクピットがずらりと並んでいた。人間どうしの対戦用ではなく、コンピュータが相手をするものだ。そのうちのいくつかは蓋が閉じていた。まだ始業前だが、生徒が自主訓練をしているらしい。

ふたりはその間を突っ切り、奥の扉へとやってきた。普段は鍵がかかっている、立ち入りが禁止されている場所だ。しかし今日は鍵が外れている。サイファは扉を開け、薄暗い部屋へと踏み入った。カイルもすぐあとに続いた。

「遅いぞ」

狭い部屋の奥で、腕を組んだラウルが待ち構えていた。彼の両隣にはコクピット、頭上には大きな薄型ディスプレイが架かっている。サイファはにっこりと笑顔を見せた。

「そう時間はかからないよ。優秀なパートナーと一緒にだからな」

カイルは後ろで嬉しそうに頬を紅潮させた。前に一步踏み出し、ラウルを見上げた。

「カイル＝ハワードです。よろしくお願いします」

礼儀正しく挨拶をすると、深々とお辞儀をした。しかし、ラウルは冷たく一瞥しただけで、背を向け歩き出した。

「いつもああだ。気にするな」

「はい……」

サイファは落ち込むカイルの肩を軽くたたき、ラウルの後に続いた。カイルもしょんぼりしながら、その後についていった。

三人は、奥にある小さめの扉をくぐり、さらに狭くて暗い部屋へと進んだ。数人がやっと入れるくらいの広さだ。窓はなく、上に小さな電球がひとつあるだけである。部屋の中央には、古めかしい傷だらけの木机が幅を取っていた。その上には旧式の厚ぼったいモニタが鎮座している。机もモニタもまだらに埃を被っているが、画面部分だけは丁寧に拭かれているようだ。向かいには、薄汚れた二人掛けのソファが、取ってつけたように置かれていた。

「急ごしらえだが、一応モニタールームだ。ここで我々が監視を行う」

サイファはソファの背もたれに手を置いた。

「生徒たちに重圧を与えることのないよう、我々は姿を見せない。いいな」

「はい」

カイルはうなずきながら返事をした。サイファは、ラウルに振り向き尋ねた。

「設定もここで出来るのか？」

「ああ、そうしておいた」

ラウルは木机の下の棚からキーボードを取り出し、モニタの前に置いた。サイファは、手にしていたファイルをカイルに渡した。

「設定の方法はわかるか？」

「はい。何度かやったことがありますので」

「では、君に任せるよ」

「はいっ！」

カイルは顔を輝かせて歯切れよく返事をした。ファイルを机の上に広げ、モニタの電源を入れると、立ったまま中腰でキーボードを打ち始めた。なめらかに動く彼の指とともに、キーボードが軽快な音を立てる。それに連動するように、モニタではウィンドウが次々と開いては消えていった。

「どこへ行く」

無言で立ち去ろうとしていたラウルを、サイファがきつい口調で呼び止めた。

ラウルは扉に手を掛けたままわずかに振り向くと、冷たく威圧するような視線を送った。

「そろそろ始業時間だ。戻るまでにセッティングしておけ」

「そういう命令口調は感心しないな」

サイファは、腕を組んで壁に寄りかかった。そして、含みを持った挑発的な表情を浮かべた。ラウルはムツとして睨みつけた。

「話ならあとで聞く」

いらついたように言い捨てると、長髪をなびかせながら部屋を出ていった。サイファは眉をひそめて彼の背を見送ると、腕を組んだまま深くうつむいた。小さくため息をつく。

「カイル、手が止まっているぞ」

「あ、すみません！ もうすぐ終わります！」

彼はあわててモニタに向き直り、再びキーボードを叩き始めた。

設定作業が終わり、ふたりに確認をしていると、多くの足音とざわめきが聞こえてきた。隣に生徒が入ったらしい。

「準備は出来たか」

ラウルはふたつの部屋をつなぐ扉から顔を覗かせた。サイファは無言で右手を上げOKサインを作って見せた。ラウルはかすかにうなずいて扉を閉めた。

サイファはソファに腰を落とした。

「君も座れ」

「えっ……あ、はい！ 失礼します！」

嬉しいような困ったような微妙な表情で、ぎこちなくサイファの隣に腰を下ろした。二人掛けのソファゆえ、否応なく距離は近くなる。いつ肩が触れ合ってもおかしくない状態だ。カイルは口から心臓が飛び出しそうだった。息をひそめ、ちらりと隣に目を向ける。すぐ手の届くところにサイファの横顔があった。モニタからの光が、端整な輪郭をよりくっきりと浮かび上がらせている。

「私の顔に何かついているか？」

「いえっ。何でもありません」

視線に気づいたサイファが振り向いて尋ねると、彼は逃げるように前に向き直った。

「危険だと判断したら即座に止める。いいな」

サイファは、まだ何も映っていない白い画面に目を向け、冷静に言った。

「はい。でもあの設定なら、危険な状態なんてなりえませんか」

カイルは何気なく思ったことを口にした。しかし、サイファはそれに同意しなかった。

「人も機械も、絶対などということはありません。気を抜くな」

「すみません……」

カイルは自らの甘さを素直に反省した。同時に、仕事に対する厳しい姿勢を目の当たりにし、サイファへの尊敬を新たにした。

「始まるぞ」

サイファがそう注意を促すと、向かい合うふたりの生徒がモニタに映し出された。

監視を始めてから一時間ほどが過ぎた。問題となるようなことは何も起こっていない。この時点でちょうど半数が試験を終えていた。

「さすがにこの設定だと、早く決着がつきますね」

「そうだな。もう少しリミット値を高くしても良かったのかもしれない」

カイルの緊張はだいぶほぐれてきていた。サイファとの会話も、次第に自然なものになっていた。

「でも、少しうらやましいです。私がアカデミー生ときは、こんなものがあることすら知りませんでした」

「あとで私と戦ってみるか？」

サイファは前を向いたまま、まるで表情を動かさずにさりりと言った。カイルは驚いて顔を真っ赤にすると、あたふたと目を泳がせた。

「えっ?! あっ、いや、あの……。力の差がありすぎて、私では相手にならないと……」

「冗談だ」

サイファは無表情で彼を突き放した。

「……ですよ」

カイルは乾いた笑いを張りつかせた。安堵の息をつきながらも、どこか残念そうだった。

「次が始まるぞ」

画面にふたりの生徒の姿が浮かび上がった。互いに身構えると、合図とともに戦い始めた。

「なかなかいいですね、彼。冷静で、防御にもそつがないですし」

しばらくモニタを眺めていたカイルは、軽く感心したように言った。サイファもうなずいた。

「ああ、ずいぶん成長したな」

彼のその物言いに反応し、カイルは目をぱちくりさせながら振り向いた。

「お知り合いですか？」

「モニタから目を離すな」

カイルはあわてて前を向いた。

「娘の友人だ」

サイファがそう答えたとき、モニタの中では、リックの放った一撃で勝負が決まっていた。

カイルは横目で様子を窺いながら、遠慮がちに尋ねた。

「まさかこれ、お嬢さんのクラス……ですか？」

「そうだ」

サイファは短く返事をした。そして、冷静な表情を保ったままで言葉をつなげた。

「問題ないとは思いますが、万が一のときは頼む」

カイルは一瞬きょとんとしたが、すぐにはっとした。

「わかりました！万が一、気を失われたときは、精いっぱい介抱させていただきます！」

今度はサイファが驚いた。思わず彼に振り向く。監視を始めて以降、モニタから目をそらせたのはこれが初めてである。ふいに、気が抜けたようにふっと笑ってうつむいた。そして再び顔を上げると、真剣なまなざしでカイルを見た。

「君が見るのは、私ではなくモニタの方だ。私に構わず監視を続ける」

そう言うと、一瞬だけ視線を伏せ、すぐに戻した。

「あと、私が正当な理由なく戦いを中止しようとした場合には、君がそれを阻止してくれ。いいな」

「はい」

カイルは少しばつが悪そうに、しゅんとしていた。

「次が最後だな。ジーク、アンジェリカ」

試験は順調に進んでいき、とうとう最後の一組となった。ラウルが名を呼ぶと、ふたりはそろって前へ進み出た。そして、互いに顔を見合わせ、何も言わずに強気にニッと笑いあった。左右に分かれて、それぞれコクピットに乗り込む。

——絶対に負けないわ。

アンジェリカは表情を引き締めた。

——あの一ヶ月をまるまる活かせるチャンスだ。感謝するぜ、ラウル……！

ジークははやる気持ちを抑え、大きく深呼吸をした。

ウィィィ……ン。

電動音とともに蓋が閉まると、前面の大きなディスプレイにふたりの姿が映し出された。リックは祈るように両手を組み、不安そうにそれを見上げた。

「始め！」

ラウルはヘッドセットのマイクに向かって合図をした。

ジークは身構え、呪文を唱え始めた。しかし、アンジェリカは両手を上に向けただけで、呪文の詠唱なしに天から稲妻を落としてきた。ジークは飛び込むように地に臥せ、直撃の寸前で結界を張り、かろうじてそれを防いだ。だが、安堵している暇などなかった。彼女は光の矢を容赦なく雨のように降らせた。彼の頭上とそのまわりに切れ目なく打ち込んでいく。まわりの地面が次第にえぐれていった。

嘘だろ、もたねえ……っ！

身を屈めたまま、ジークはさらに二重に結界を張った。それでも結界ごしに衝撃が伝わって

くる。足元も心もとなく揺れる。このままでは上の結界か下の地面か、どちらかが崩れるのは時間の問題だ。

くそっ！ どうすれば……。

ジークは顔をしかめながら天を仰ぎ、様子をうかがっていた。

一瞬、わずかに攻撃が途切れた。彼はその好機を逃さなかった。すばやく結界を飛び出し、大きな溝を飛び越え、アンジェリカに突進していく。彼女は冷静に腕を前に突き出すと、手のひらから大きな光球を放った。

ジークは横に飛び退き、すんでのところをよける。が、完全にはよけきれなかった。熱いものが肩をかすめ、焼けるような痛みが走った。顔を歪ませ倒れ込みながらも、短く呪文を唱え反撃をする。瞬時に彼女の両腕は厚く凍りついた。

しかし、それよりわずかに早く、彼女は衝撃波を放っていた。ジークは地面を転がりながら攻撃をかわすと、その勢いのまま立ち上がった。そして、呪文を唱えながら、再び彼女に猛突進していく。

グワッ！！

アンジェリカを中心に風が起こったかと思うと、大きく渦を巻きながら、彼女を取り囲むように高く火柱が上がった。ジークは踏ん張って足を止めると、あわてて後ろに飛び退いた。あやうく火炎に巻き込まれるところだった。この炎につかまれば、完全にアウトだっただろう。

どうする……。この炎は防御壁にもなっていて、簡単には貫けそうもない。彼女が次の行動を起こすまで待つか、それとも――。

ジークは炎の壁の上方を見上げた。そして、決意を固めたように小さくうなずくと、短く助走をつけ強く地面を蹴った。同時に、地面に光球を叩きつけ、その反動を利用し、高く上へ飛び上がった。炎壁の倍ほどの高さで、彼の体は最高点に達した。下方に目をやると、その中央にたたずむアンジェリカの黒い頭がはっきりと見えた。

やっぱり頭の上はガラ空きだぜ！

ニッと笑うと、声をひそめて呪文を唱えようとした。しかしそのとき、下方で何かが白く強くキラリと光った。なんだろうと目を凝らした瞬間、その光は凄まじい勢いで自分に向かってきた。光の矢だ！ かわそうにも、自由落下中では思うように素早く身動きがとれない。彼は急いで前方に結界を張った。間一髪、間に合った……。かに思えたが、光の矢は軽々とその結界を突き破り、彼の腹を串刺しにした。

ふたりを映していたディスプレイが、そこでブラックアウトした。生徒たちはみな息を呑んだ。声を上げるものは誰もいない。その部屋は、水を打ったように静まり返っていた。

ウィィィ……ン。

静寂を切り裂く耳障りな電動音。それとともに、ふたつのコクピットが開いていった。

リックは固唾を飲んで、組み合わせた両手にぐっと力を込めた。

「作戦大成功！」

アンジェリカは無邪気に笑いながら、コクピットから飛び降りた。一方、ジークは青ざめた顔で、腹を押さえながら、よろよろと降りた。額には脂汗がにじんでいる。

「ジーク、大丈夫?!」

リックは大急ぎで駆け寄り、彼の肩に手を掛け覗き込んだ。アンジェリカは彼のただならぬ様子を目にし、顔から血の気が引いた。前回の対戦後のことがフラッシュバックする。

「なっさけねえ……」

ジークは引きつりながらも、なんとか笑顔を作って見せた。

「心配すんな。そう痛いわけじゃねえよ。腹を貫通したような気持ち悪い感触が残ってるだけだ」

しかし、彼の気分がすぐれない理由はそれだけではなかった。射抜かれる瞬間の激しい恐怖が、くっきりと脳裏に焼きついていたのだ。圧倒的な力に感じた戦慄、本能が予感した死への怯え、そして彼女に対する深い怖れ——。だが、それは言えなかったし、言うてはならないと思った。

「これで今回の試験は終わりだ。解散」

ラウルは静まったままの生徒たちに、一方的に終了を告げた。そして、ジークに顔を向けると、ゆっくりと腕を組んだ。いつものように冷淡なまなざしで睨むように見つめる。

「来い」

短く高圧的にそう言うと、あごをしゃくって背を向けた。

「なんだろう?」

リックは疑問と不安が入り混じり、怪訝につぶやいた。ジークはがっくりと肩を落としていた。

「たぶん説教だ。俺、いいとこなしだったしな。一ヶ月も修業してきて、結果このザマだ。殺されるかも……」

彼の顔はさらに青ざめていった。

「そんな! ジークだって頑張ってたよ!」

「そうよ、ジークが悪いわけじゃないわ」

ふたりの慰めも、今のジークには響かなかった。

「おまえらは先に帰ってくれ」

疲れたように投げやりにそう頼むと、覇気のない足どりでラウルの背中を目指し歩き出した。

リックとアンジェリカは、心配そうに顔を見合わせた。

「お嬢さん、すごいですね……。学生の戦い方じゃないですよ」

カイルは呆然としながら言った。

「ああ」

まさか、ここまでとは——。サイファは前かがみになり、膝にひじをついて手を組んだ。そして、何も映っていない真っ黒のモニタを、思いつめた表情で見つめていた。

ガチャ——。

扉が開き、ラウルともうひとりが入ってきた。

「連れてきたぞ」

「やあ、ジーク君」

サイファはソファから立ち上がり、にっこり笑いながら歩み寄った。暗い顔で視線を落としていたジークは、サイファの登場に思わず目を見開いた。

「サイファさん！ どうして……」

「ラウルのお目付役というところかな」

ラウルが隣で思いきり睨んでいたが、サイファはまるで視界に入っていないかのように話を続けた。

「今の試験、すべて見させてもらったよ」

ジークはこわばった表情でうつむいた。

「気にすることはない。君は頑張ったよ」

サイファは彼の肩をポンとたたいた。ラウルは無表情で腕を組み、冷たく付け加えた。

「浅はかな行動や愚かな判断もあったがな」

ジークはますます落ち込んだ。

「なあ、ジーク君」

サイファは真剣に、じっと彼を見つめた。ジークはわずかに目線を上げ、不安そうに顔を曇らせた。

「君も感じたと思うが、あの子は成長している。これからもまだ伸びるだろう」

ジークは無言でわずかにうなずいた。

「こんなことを言うのは酷だが、君はアンジェリカには勝てない。潜在能力が違いすぎる。今日の戦いを見て実感したよ」

サイファは淡々と語った。そして、どこか遠くを見やるように視線を空に泳がせた。ジークは口をきゅっと結んだ。

「君も知っているだろうが、魔導に関して言えば、持って生まれたものに依るところが大きい。努力だけでは乗り越えられない壁があるんだ」

サイファの表情がけわしくなった。重く、静かに、言葉をつなげる。

「アンジェリカは計り知れない力を持って生まれてきた。私でも適わないほどの力だ。……そうだろう？」

そう言って、ラウルに同意を求めた。鋭い視線を彼に流す。

「……そうだな」

ラウルは眉をひそめ睨み返し、ぶっきらぼうに吐き捨てた。

「そういうことだ」

サイファはジークに向き直り、急ににっこりと笑顔になった。

「もちろん、可能性を信じて挑戦しつづけるのは君の自由だが、あまり思いつめるとつらいぞ」

「戦いでは勝てないが、それ以外の試験なら可能性もないわけではないだろう。難しいと思う

がな」

ラウルは腕組みをしたままで、横から口をはさんできた。ジークは何も言葉が出なかった。ただ暗い顔でうなだれるだけだった。

「そう落ち込むな。そうだ、昼食をおごるよ」

サイファはジークの隣に並び、彼の背中に手をまわした。そして、思い出したように、ラウルに振り向いた。

「ラウル、おまえも来るか？」

「おまえに借りを作るのはごめんだ」

「おごるとは言ってないぞ」

ラウルは怒りをたたえた瞳で、ぞっとするほど冷たく睨みつけると、何も言わず部屋を出ていった。しかし、それに震え上がったのは無関係のジークの方で、当の本人であるサイファは平然としていた。

「カイル、明日までに報告書を作成しておいてくれ」

「あっ、はい！」

すっかり傍観者となっていたカイルは、突然に話を振られ、少しうろたえた。今が仕事であることをすっかり忘れていた。

「さ、行こうか、ジーク君」

サイファは彼の肩を抱き、ふたりで部屋を出ていった。

カイルはうらやましそうにその光景を眺めながら、いろいろ考えをめぐらせていた。サイファと少年はどういう関係なのだろうか。ラウルとの間には何かあるのだろうか。自分はお昼ごはんを誘われもしなかった……。そして、薄暗いモニタールームにひとり取り残された事実気がつくと、泣きたい気持ちでため息をついた。

62. 振れた一途

「こんなところに呼び出して、どういうつもりだ」

レオナルドは扉に背をくっつけ、こわばった面持ちで前を睨んだ。彼の視線の先には、頬杖をつき、何かの書類に目を落とすサイファがいた。ここは魔導省・最上階にある彼の個室である。背後の大きなガラス窓から見える空は紅に染まり、沈みゆく陽の光は最後の悪あがきのように強い輝きを放っていた。そして、赤みを帯びた逆光が、彼の濃青色の上着をふちどり、鮮やかな金の髪をよりいっそう眩しく煌めかせた。

「ひどいものだな。どれもこれも地を這っている」

サイファは呆れ顔でため息まじりに言った。レオナルドは、初めは何のことだかわからず怪訝に眉をひそめていたが、しばらくしてはっと気がついた。青ざめたみたいに脂汗がにじんだ。

「まさか、それ……」

「おまえの成績表だ」

サイファはひじをついたまま、無表情で書面を彼に向けた。レオナルドはカッと顔が熱くなると同時に、全身から血の気が引くのを感じた。

「き……汚いぞ！！ 職権濫用だ！！ そこまでして俺を馬鹿にしたいのか！！」

狼狽しながら唾みつくレオナルドに、サイファは鋭く冷たい視線を突き刺した。

「自惚れるな。おまえごときのために、そんな労力を使うと思うか」

静かだが威圧的な口調。レオナルドは息を詰まらせたじろいだ。ごくりと唾を飲み込む。

「じゃあ、何でそれがおまえの手元にある」

上目遣いでじっと睨み、低く抑えた声で問いかけた。

サイファはわずかに右の口端を上げた。

「おまえの担任が持ってきたんだよ」

「なっ……」

思いもよらない答えに、レオナルドは絶句した。なぜ担任が……。彼には皆目見当がつかなかった。

「親のところに行っても取り合ってもらえず、ラグランジェ家当主である私に泣きついてきたというわけだ」

サイファは涼しい顔でそう言うと、ゆったりと背もたれに身を沈めた。

「かわいそうに、必死だよ。名門ラグランジェ家の者を留年させるわけにはいかないと重圧を感じているようだ。特別措置で進級させ、補習を受けさせているが、それもずるけることが多い。いつまでたっても一向にやる気を見せない。このままでは、今度こそ留年させざるをえないそうさ」

レオナルドはいまいましげに歯噛みしてうつむいた。耳元から次第に紅潮していく。それでも精一杯の反発心を口にした。

「ラグランジェの名前に泥を塗るなどでもいいたいのか、ご当主さま」

「特別扱いせず、遠慮なく落とすようっておいた」

サイファは、レオナルドが言い終わるか終わらないかのうちに、それを打ち消すような強い語調で言った。

「なに?!」

レオナルドは顔を上げ、目を見開いた。サイファは厳しい視線を彼に向けた。

「当然だろう。アカデミーはすべての生徒が平等であるべき場所だ。ラグランジェの名前に胡座をかく奴など、いるべきではない」

一分の隙も迷いもない表情で、容赦なく言い放った。

「俺はあぐらなんてかいていない！」

レオナルドは感情的に言い返した。しかし、それはなんの釈明にもなっていなかった。

「特別措置であることはおまえに伝えてある、担任はそう言っていた。ならば当然ラグランジェの名前に救われている自覚はあったのだろう。そのうえで何の努力もしないというのはどう説明する」

サイファは論理的に問いつめた。完全に凶星をつかれたレオナルドに、反論する余地はなかった。だが、素直に反省をする彼ではない。青い瞳を激しくたぎらせ、燃やし尽くさんばかりの勢いで目の前の当主を睨みつけた。

しかしサイファはまるで意に介さず、冷淡なくらいに平静だった。レオナルドが何も言い返せないのを確認すると、彼を見据えたまま、さらに別の話題を持ち出した。

「今、ユールベルのところに転がり込んでいるそうだな」

「なっ……おまえには関係ないだろう」

レオナルドは強気に言い返しつつも、胸の内は大きくざわめいていた。

「出ていけ」

予想どおりの言葉がサイファの口から発せられた。しかし、予想以上にきつく端的な物言いだった。

レオナルドは奥歯を噛みしめ、キッと睨みつけた。

「そんなことまで口を出される筋合いはない！」

自分の気持ちを奮い立たせるように、大きく声を張り上げた。対抗するすべはそのくらいしかなかった。しかし、それもサイファの前では徒労に終わった。

「私は彼女の親代わりだ。彼女のためにならないものは排除するさ。それに、あの部屋は彼女と弟のために用意したものであって、おまえのためではない」

彼は一気にそう言うと、ぞっとするほど冷酷なまなざしでレオナルドを睨めつけた。

「偉そうに言うのは、一人前になってからにしてもらおうか」

有無を言わさぬ圧倒的な迫力。レオナルドは背筋に寒気が走り、腹の底に冷たいものが落ち込んだ。額から頬に汗が伝う。怯えたように目をそらし顔を歪ませると、小さくうわごとのようにつぶやいた。

「昔からおまえは嫌な奴だった。俺を目の敵にしていた。今だって俺のことを……」

「ああ、嫌いだよ」

サイファは事もなげに言った。あまりにはっきり認めたので、レオナルドは思わず動揺した。

そして、言いしれぬ不安と恐怖が沸き上がってきた。

レオナルドは疲弊した心を引きずって帰ってきた。帰るといっても自分の家ではない。ユールベルと彼女の弟アンソニーの住まいである。彼は当然のように自ら鍵を開け、中に入った。

「ユールベル？」

彼女は窓際の床に座り込み、空を見上げてぼうっとしていた。わずかに開いた窓の隙間から風が流れ込み、緩やかなウェーブを描いた金の髪を揺らす。

「アンソニーは？」

レオナルドは部屋を見回しながら尋ねた。

「買い物に出ているわ」

ユールベルは空に目を向けたまま、ぽつりと答えた。レオナルドは彼女に近づき、その隣に腰を下ろそうとした。

「いつまでこんなことを続けるの」

彼女のかぼそい声が、彼の動きを止めた。中腰のまま、彼女に振り向く。彼女はまだガラス越しの空を見上げていた。

「逃げてばかりでは何の解決にもならないわ。私たちにとっても、こんな……」

レオナルドの表情が立ち所にけわしくなっていた。

「出ていけっていいのか？」

ユールベルは何も答えなかった。レオナルドはそれを答えと受け取った。

「そうか、サイファに何か言われたんだらう！何を言われた？！」

細い手首をきつく掴み、感情を高ぶらせ迫りかかる。

ユールベルは顔をそむけ、眉間にしわを寄せた。

「何のこと？！痛い、離してっ……」

「それともジークか？！まだあいつのことを！」

レオナルドは激昂し、一方的に問いつめた。ユールベルは両手首を掴まれたまま逃れようともがいた。しかしそれは叶わず、バランスを崩し、後ろに倒れ込んだ。後頭部を打ちつけ、痛みに顔を歪ませる。床には、金の髪と白い包帯が広がった。それでもレオナルドは引かなかった。彼女の上に乗るかかり、我を忘れたかのように責めたてる。

「答えろ！どうなんだ！！」

「何してるんだ！！」

外から戻ったアンソニーが、目を見張り、大声で叫んだ。部屋に駆け込むと、自分より大きなレオナルドを必死にユールベルから引き離した。まだ幼さの残る顔に、激しい怒りを広げる。

「行くところがないって言うから仕方なく置いてやっていたのに！恩知らず！！出ていけっ！！」

「待て、待ってくれ、悪かった」

ようやく我にかえったレオナルドは、後悔の表情を浮かべ、うろたえながら懇願した。しかし、アンソニーは問答無用で外に押し出すと、扉をぱたんと閉めた。それとほぼ同時に、ガチャと

鍵をかける音がした。

「おいっ！ 待て！！」

バチッ——ドアに手を伸ばしたレオナルドの手は、すんでのところで弾かれた。その手を抱え込み、よろよると後ずさる。

「こんな強力な結界まで張りやがって……」

彼は赤く焼けた手のひらをじっと見つめ、惨めな思いでうなだれた。

「姉さん、大丈夫？」

アンソニーは手を差しのべて、ユールベルを助け起こした。彼女は無造作な横座りのまま、表情を隠すように、顔をそむけうつむいた。緩くなった左目の包帯を、右手で押さえる。

「レオナルドを怒らないで。……悪いのは、私なの」

「姉さんは悪くない！」

アンソニーは力を込めてそう言うと、彼女の隣に膝をつき覗き込んだ。

「どんな理由があっても暴力はダメだって、そう教えてくれたのは姉さんじゃないか」

ユールベルは肩を震わせた。白いワンピースの上に、いくつもの雫を落とす。

「僕が、姉さんを守るから」

アンソニーはひたむきな瞳を彼女に向けた。しかし、彼女はすすり泣きながら、かすかに首を横に振っていた。

レオナルドには行くあてがなかった。それでも家へ帰る気は起きない。ぶらぶらとあたりを歩いているうちに、足は無意識にアカデミーへと向かっていた。門をくぐり、閑散とした校庭を歩いていると、聞き覚えのある声が耳に入った。はっとして顔を上げる。そして、苦々しく眉をひそめた。

「いい気なものだな」

楽しそうに話をしながら歩いていたジーク、アンジェリカ、リックは、いっせいに顔を曇らせた。しかし、ジークは一睨みしただけで、言葉を返すことなく通り過ぎた。

「待て」

レオナルドはジークの腕を掴んだ。しかし、ジークは間髪入れず振りほどいた。

「おまえと言い争う気分じゃねえ」

面倒くさそうにそう言って、アンジェリカの腕を引き、さっさとその場を立ち去ろうとした。だが、レオナルドは肩に手をかけ、再び引き止めた。

「話がある。一緒に来てもらおうか」

「俺はおまえと話なんてしたくねえんだよ」

ジークはうっとうしそうに顔をしかめ、肩にのせられた手を払いのけた。レオナルドはニヤリと不敵に笑った。

「ここで話してもいいのか」

そう言うと、ちらりとアンジェリカに視線を流した。ジークは腹立たしげに眉間にしわを寄

せた。

「わかった」

苦渋に満ちた声で返事をする、アンジェリカの腕を離した。

「おまえらは先に帰ってろ」

「レオナルドなんか無視すればいいじゃない」

アンジェリカは、ジークがなぜ承諾したのかがわかっていなかった。ジークは心配をかけたま
いと、軽く笑顔を作ってみせた。

「心配すんな。適当にあしらってくる」

さよならの代わりに右手を上げると、レオナルドの後について校庭の向こうへ歩いていった。

「何の話かしら」

「うーん、ただ因縁をつけてきただけじゃないかなあ」

リックは、不安そうにしているアンジェリカに、にっこりと笑いかけた。

「気になる？」

「ちょっとね」

アンジェリカは肩をすくめた。

「でもいいわ。どうせたいしたことじゃないだろうから！」

軽やかにステップを踏みながら、吹っ切るように明るくそう言い、ぐるりと振り返ってリック
に笑いかけた。彼も笑顔を返した。

「大人になったね」

「何よそれ。誉めてるの？ けなしてるの？」

アンジェリカは顔を赤らめながら口をとがらせた。

レオナルドとジークは、アカデミーの隅にある小さな教会の前に来ていた。

「懺悔でもするつもりかよ」

「おまえを懺悔させるのさ」

ふたりはさっそく火花を散らしていた。

レオナルドは教会の扉を開け、中へ足を踏み入れた。ジークもすぐ後続く。案の定、中には
誰もいなかった。ジークは入口横の壁にもたれかかると、腕を組んだ。

「で、何の話だ。早くしてくれよ。テメーと一緒にいるだけで胸くそわりいんだ」

レオナルドの言動からして、アンジェリカに関する話である可能性が高い。不安と緊張を感じ
つつも、それを見せないようぶっきらぼうな態度を装った。

レオナルドも愛想なくジークを見た。

「アンジェリカとはどうなっている」

「はあ？」

ジークは素頓狂な声をあげた。耳元を赤らめながら困惑する。

「なんでおまえにそんなこと言わなきゃなんねえんだ！」

「やっぱりな」

レオナルドはわざとらしく大きくため息をついた。ジークはカッとして、ますます顔を赤くした。

「どういう意味だ」

「おまえがそんな中途半端な態度をとりつづけるせいだ」

一向に話が見えてこない。ジークは苛立ちを募らせていった。

「わかるように言え！」

「ユールベルだ！ いつまで彼女を苦しめれば気がすむ！」

レオナルドは強い口調で責めたてた。しかし、それを聞いたジークは、気が抜けたようにため息をついた。

「あきれたヤツだ」

レオナルドはぴくりと眉を動かした。ジークは彼に冷ややかに話を続けた。

「俺を責める前に自分を振り返れ、バカ。ユールベルを苦しめてんのはおまえじゃねえのかよ」

「なんだと?!」

「おまえと一緒にいて楽しそうに見えたことがねえぜ」

事実を突きつけられ、レオナルドはひどくうろたえた。

「そっ……それは、おまえのせいだろう！」

「つきあってられるか」

ジークは呆れ返って吐き捨てると、レオナルドに背を向けた。

「待て！」

レオナルドはジークの腕を掴んだ。しかし、ジークは即座にそれを振り払った。そして、顔をしかめ、思いきり睨みつけた。

「俺にどうしろって言うんだ。ユールベルに、おまえには興味がねえから俺のことはいいかげんに忘れろ、とでも言えば満足なのか？」

レオナルドは答えに窮した。

「懺悔でもしてろ」

ジークは捨て台詞を残し、再び踵を返した。レオナルドは歯ぎしりをして、その背中を睨みつけた。

「偉そうに……！ おまえにはひとつも懺悔することはないというのか」

「あいにく俺は神なんて信じてねえんだよ」

ジークは振り返ることなく答えると、重量感のある扉を押し開けた。教会の中央を光の帯が伸びていき、奥の祭壇を照らす。しかし、すぐにその光は細くなり、ボタンという音と同時に消えてなくなった。そして、光とともにジークも消えていた。

「おじさま……」

ユールベルはおずおずと扉を開けた。サイファは彼女に気がつくのと、にっこり穏和な笑顔を見せた。

「やあ、ユールベル。どうした？」

「おじさま、あの……レオナルドが……」

一瞬、彼の表情に陰が走った。

サイファはユールベルを隣に座らせ、詳しい話を聞いた。

「そうか、タイミングが悪かったね。私も彼に同じようなことを言ったばかりなんだよ」

優しくそう言うと、ゆっくりと頭を撫でた。それでも彼女の表情は晴れなかった。

「私、どうしてあんなことを言って……。居場所のなかった私を、レオナルドは助けてくれたのに。恩知らずは私の方だわ」

彼女はうつむき、自嘲ぎみにつぶやいた。

サイファは真摯な表情で彼女の肩に手をのせ、ぐっと力を込めた。そして、覗き込みながら、説き伏せるように語りかける。

「君がそう恩義を感じることはないよ。彼が好き好んでやったことだ。第一、彼は君の心までは救えなかった。そうだろう？」

ユールベルはきつく目を閉じ、何度も首を横に振った。

「でも、レオナルドだけだったのよ、私の話を聞いてくれたのは……私に温もりをくれたのは！」

白いワンピースの裾をぎゅっとなつかむと、細い肩を震わせしゃくり上げた。サイファはやるせない思いで彼女を見つめた。

「すまなかった」

涙で濡れた彼女の頬にそっと触れ、そして静かに抱き寄せた。ユールベルは温かく緩やかな鼓動を、頬を伝って感じた。自分の鼓動もそれに同調していく。心地よさを感じながら、とめどなく涙があふれた。

「私は、レオナルドの気持ちを利用していたのかもしれない」

落ち着きを取り戻したユールベルは、サイファに寄りかかりながら、つぶやくように言った。サイファは彼女の頭を片手で抱え込んだ。

「そんなふうに考えるな。君は何も悪くない。彼の方こそ君の気持ちを利用している」

「おじさま……」

「ユールベル、感謝の気持ちと人を好きになる気持ちは別物なんだ」

彼女は顔を上げ、無垢な子供のような瞳をサイファに向けた。

「君がそれを自覚し、偽りのない気持ちをレオナルドに伝える。そのうえで感謝は感謝として、それなりの態度で示せばいい」

サイファはにっこり笑って、彼女の頭に手をのせた。

ガチャ――。

ノックもなしに扉が開き、ラウルが入ってきた。彼はユールベルを目にしても、少しも反応することはなかった。まるきり眼中にない様子で足を進めた。

「あとにしてくれないか」

サイファは感情なく言った。しかし、ラウルが返答するより前に、ユールベルが口をはさんだ。

「いいわ、私、帰るから」

凍てついた表情で立ち上がり、髪をなびかせ早足で扉へ向かった。

「あなたなんか大嫌い」

すれ違いざま、ラウルをきつく睨み上げた。そして扉を開け外に出ると、振り返りざま、もういちど彼を睨みつけた。そして、怒りをぶつけるようにボタンと大きな音を立てて扉を閉めた。

サイファは頬杖をつき、にこにこしながらラウルを見た。

「彼女なりの甘え方だな、あれは」

「いや、本気で嫌っているはずだ」

ラウルは素っ気なく答えると、机の上に書類を投げ置いた。

「彼女の診療記録だ」

サイファはそれを手に取り、目を落とした。

「長い間、幽閉され人と関わることがなかったんだ。感情のコントロールが出来なかったり、極端な行動に出たり、矛盾した言動をとったりするのも無理はない。まだ小さな子供みたいなものだよ」

書類を読み進めながら、彼は淡々と言った。

「それだけではないだろう」

ラウルは腕を組んで、彼を見下ろした。サイファは手を止め、顔を上げた。

「ああ、だがそれも幼く不安定なものだ。おまえはわかっていたのだろう。だから拒絶することも受け入れることもしなかった」

ラウルは無表情のまま何も答えなかった。サイファは背もたれに寄りかかり、目を細め遠くを見やった。

「もっと、守ってやるべきだったな」

「おまえはよくやっている」

ラウルの言葉に、サイファはふっと表情を弛めた。

「おまえに慰められるとは、私も落ちたものだな」

茶化すようにそう言うと、にっこりと笑いかけた。

レオナルドはひとり教会に残っていた。ここを出ても行くあてがない。途方にくれ、最後列の長椅子に座り、ぼうっとしていた。

ギィ……。

かすかな軋み音とともに、中央に光が差し込んできた。誰かが入ってきたらしい。レオナルドは外に出ようと立ち上がった。

「レオナルド?! どうしてここに……」

レオナルドはその声に敏感に反応し、勢いよく振り返った。

「ユールベル?!」

彼女はぼかんとして立ち尽くしていた。レオナルドももちろん驚いた。だが、それよりも、とにかく謝らなければという思いが大きかった。

「さっきは悪かった。どうかしていた。許してくれ」

唐突にそんな言葉が口をついた。ユールベルは思い出したように、表情に暗い陰を落とした。

「私も、ごめんなさい……」

続けて何かを言おうとしたが、彼女は躊躇して言葉を飲み込んだ。レオナルドはその様子を見逃さなかった。

「もうあんなことはしない。冷静に聞くから言ってくれ」

落ち着きを見せながらそう言ったものの、心の中は慄然としていた。心臓は早鐘のように打っていた。

ユールベルはしばらく考え込んだあと、ためらいがちに口を開いた。

「……私、やっぱりあなたの気持ちに応えることは出来ないと思う」

わかっていた。わかっていたこととはいえ、彼女の口からあらためてはっきり聞かされると、やはりショックだった。

「ジークか」

感情的にならないよう、抑えた口調で尋ねる。ユールベルは目を伏せた。

「とっくにあきらめている。わかっているわ。でも、気持ちはどうしようもないの」

「それは俺も同じだ。でも俺は……あきらめない」

「……」

静かに決意を口にするレオナルドを見て、ユールベルは胸が詰まりそうになった。目を細めて彼を見つめる。そして、小さく声を漏らした。

「勉強……そう、一緒に勉強しましょう」

「……勉強？」

レオナルドは面くらった。話のつながりが見えない。

「レオナルドには、言葉で言い尽くせないほど感謝しているわ。だから、力になりたいと思っているの。だから……」

ユールベルは真剣に訴えた。だが、彼の表情はみるみるうちに陰っていった。

「サイファに言われたんだな」

「私の意思よ」

強い光を秘めた右目を彼に向け、きっぱりと言い切った。

「拒絶しておきながら力になりたいなんて、自分勝手だと思うけれど……」

「いや、嬉しいよ」

レオナルドは穏やかに表情を和らげた。ユールベルは固い面持ちの中に、わずかに安堵を覗かせ、小さく息をついた。

「言っただろう、俺はあきらめていないと。それに……」

感情を抑えたまなざしを、扉の方に向ける。

「これ以上、ジークに馬鹿にされたくないしな。サイファも見返してやりたい」

レオナルドは静かに闘志を燃やしていた。

「よろしく頼む」

差し出された右手を見て、ユールベルはとまどった。自信なさそうに、迷いながら右手を上げていく。レオナルドはその手を取り、優しく握った。

「ユールベル、おまえと一緒になら、おまえがそう言ってくれるなら、やれそうな気がする」

まっすぐに彼女を見つめ、少し緊張ぎみに、だがしっかりとした口調で言う。ユールベルは胸の中にあたたかいものが広がるのを感じた。傷だらけの乾いた心に沁み込む満ち足りた思い。自分を必要としてくれている——。そのことを初めて実感した。柔らかく、彼の右手を握り返す。

「今まで、近づきすぎて見えなかったのかも」

彼女はぽつりとつぶやいた。

「なんのことだ？」

レオナルドは怪訝に尋ねた。彼女はつないだ手に視線を落とした。

「ちょうどいい距離を見つけたかもしれない……ということよ」

「意味がさっぱりわからないが……」

難しい顔で首をかしげるレオナルドに、ユールベルはそっと微笑みかけた。ややぎこちないものの、作り物ではなく、心からの温かい笑顔。

レオナルドははっとして顔を上気させた。彼が初めて見る表情だった。その笑顔の理由はわからなかったが、そんなことはどうでもよかった。とにかく単純に嬉しかった。ずっとこの笑顔を待ち望んでいたのだ。彼は目頭が熱くなっていくのを感じた。

「レオナルド？」

「希望が見えた気がする……勉強、頑張るよ」

レオナルドはうつむき、かすかに震える声で言った。

63. 譲れないもの

「せっかくですが、今回は他を探します」

ジークは座ったまま、向かいの男に頭を下げた。茶色い口ひげをたくわえた中年のその男は、難しい顔でため息をついた。コーヒーをひとくち流し込み、紙コップを静かに机の上に置く。

「言うておくが、サイファ殿に頼まれたわけではないぞ」

閑散とした食堂に、重みのある低音が響いた。ジークは浮かない面持ちで視線を落とした。窓からの光を受けた白いテーブルが眩しくて、思わず目を細める。

「確かに話を持ちかけてきたのは彼だが、あくまでそれは提案にすぎない。私はスタッフと相談し、熟考した。そのうえでの決定だ。我々は君の能力を高く買っている」

男はまっすぐジークを見据え、はっきりとした口調で話しかけた。だが、それでもジークの表情は晴れなかった。

「ありがとうございます。ですが……」

「そう答えを急くな」

男は再びコーヒーを口に運んだ。そして一息つくと、真剣なまなざしをジークに向けた。

「長期休暇が始まるまで、よく考えてみてくれないか。気が変わったら連絡をしてほしい」

ジークは張りつめた固い表情で、再び頭を下げた。

「ジーク！」

アカデミーの校門の前で、リックとアンジェリカが出迎えた。ふたりともにここにこしながら手を振っている。ジークは目を丸くした。

「おまえら、待ってたのかよ。先に帰ってりゃいいのに」

「何の話か気になっちゃってね」

アンジェリカは後ろで手を組み、明るく笑いながら彼を覗き込んだ。

「あの人、魔導科学技術研究所の所長さんなんだってね」

リックも顔を輝かせながら、興味津々に食いついてきた。

しかし、ジークの態度はつれないものだった。

「たいした話じゃねえよ」

ふたりと目も合わさず、仏頂面でそっけなく答えた。そして、目を伏せて少し考えたあと、おもむろに言葉が続けた。

「リック、今年はおまえの趣味のアルバイトにつきあってやるぜ」

「え……？ どういうこと？」

リックはジークの横顔をうかがい見た。精一杯、感情を押し隠しているような表情。どこか思いつめているようにも見える。どう見ても楽しそうではない。

ジークが「趣味のアルバイト」と呼んでいるのは、子供向けヒーローショーのアルバイトのことである。おととしまではふたりで一緒にやっていた。だが、去年はジークだけ研究所のアルバイトだった。休暇前に彼がひとりで勝手に決めてきてしまったのだ。今年はまだ一緒にやってく

れるというのであれば嬉しい。しかし、研究所の所長に会ったすぐあとにこの話題、そしてこの表情である。所長と何かあったのだろうか。リックはそう訝った。

「所長さんとは何の話だったの？」

アンジェリカも彼と同様の不安を感じていた。

ジークは答えるべきか悩んでいたが、心配そうなふたりに目を見ると、何も言わないわけにはいけないような気になった。

「さっき所長にアルバイト誘われたけど、断ってきた」

「え?! どうしてよ!! もったいないじゃない!!」

過剰なまでに反応したのはアンジェリカだった。勢いよく捲し立て、ジークに詰め寄った。彼は逃げるように顔をそむけると、ふてくされたようにぼつりと答えた。

「気が乗らなかったんだよ」

「えーっ」

アンジェリカは不満げに声をあげた。

「赤とか青とかの着ぐるみショーには気乗りするわけ？」

口をとがらせて彼を見上げ、どこか責めるような口調で尋ねた。

「いいだろ、別に」

ジークは斜め下に視線を落としながら、ぶっきらぼうに答えた。

「もうっ、ジークがわからないわ」

アンジェリカは思いきり頬をふくらませ腕を組んだ。彼女にはジークの選択が歯がゆくて仕方なかった。

校門の前でアンジェリカと別れ、ジークとリックは並んで帰路に就いていた。ふたりともずっと無言のままである。リックは横目で曇り顔のジークをちらりと盗み見ると、前に向き直り口を切った。

「さっきのアルバイトの話さ、何か理由があるんじゃない? アンジェリカの前では言いにくいこと？」

「.....おまえ、やたら鋭いな」

ジークはうつむいたまま、困ったように微妙な苦笑いを浮かべた。リックはにっこり笑いかけた。

「ジークの態度がわかりやすいんだと思うよ」

ジークはそれでもまだ迷っているようだったが、やがて観念してぼつりぼつりと話し始めた。

「今回は分析とか、俺がやりたがっていた仕事も頼むつもりだって言われた」

「え? いいじゃない」

リックはきょとんとした。ジークはもともと沈んでいた表情を、さらに深くどんよりと沈ませた。

「でも、全部サイファさんの口添えだったんだ」

それを聞いて、リックはようやく理由がわかった。納得したように、「ああ」と小さくうなず

いてみせた。

ジークはつかえがとれたように、勢いづいて話を続けていった。

「サイファさんの知り合いでなければ、絶対に誘ってなんてもらえなかつたらうぜ。俺の力じゃねえんだよ」

こぶしを握りしめ、ひとりで熱くなっていく。

「そういうのって、やっぱ自分の実力で勝ちとりてえし、それが俺のポリシーでプライドで譲れねえ部分なんだ」

今までの落ち込みが嘘のように、力を込めて強気に語った。口に出すことで迷いを吹っ切ったようだった。

「そっか」

威勢のいいジークに戻った——リックは安堵してほっと息をついた。

「それに……」

ジークは頭の後ろで手を組み、ほんのり暗くなった空を仰いだ。

「あの研究所だと、サイファさんの知り合いってことで、特別扱いされたり、ごますってくるヤツがいたり、逆にやかむヤツがいたり、いろいろ面倒だよ」

「へえ、そんなことがあるんだ」

リックは少し驚いたように声をあげた。それは、彼が初めて聞く話だった。ジークは研究所でのことはあまり話さなかつたし、リックもあえて詮索することはしなかつたのだ。

ジークはふいに目を細め、空の彼方を見つめた。

「俺らが思ってる以上にすごい人みたいだぜ、サイファさんは。本来、俺らが軽々しく口をきける相手じゃねえんだらうな」

「うん……」

ふたりの会話はそこで途切れ、再び沈黙が訪れた。そのまま、家に着くまでふたりが口を開くことはなかつた。

「午前はこれで終わる。午後は図書室だ。遅れずに来い」

ラウルはいつもの調子で威圧するように言い放つと、教本を脇に抱え、教室を出ようと扉を開けた。

「やあ、ラウル先生」

そこに待ち構えていたのはサイファだった。軽く右手を上げ、にこにこ人なつこい笑顔を浮かべている。ラウルは思いきり嫌な顔をして睨みつけた。

「わざわざこんなところまで何をしにきた」

「おまえに用があるわけじゃないよ。私は……」

「お父さん?!」

教室にいたアンジェリカは、戸口にサイファの姿を見つけ、大きく目を見開いた。すぐさま彼に走り寄る。ジークとリックも軽く走りながら、そのあとを追った。

「どうしたの? 何をしにきたの?」

「ラウルと同じことを言うんだね」

サイファは苦笑いをした。

「誰でもそう思うだろう」

ラウルは腕組みをして、冷やかに彼を見下ろした。

「私は彼に話があって来たんだよ」

そう言って、サイファは顔を上げジークを見た。アンジェリカもラウルも、彼の視線をたどって振り返った。

「オ……俺？」

ジークは狼狽しながら自分を指さした。三人の視線に気おされ、思わず息を呑む。

サイファはにっこり笑ってアンジェリカに振り向いた。

「そういうわけだから、ジーク君を借りてもいいかな？」

「私たちがいてはダメなの？」

「頼むよ、ね」

口をとがらせるアンジェリカをなだめるように、その頭にぽんと手をのせた。

「ランチをふたつ」

サイファはウエイトレスに告げると、窓際に席を取った。彼に促され、ジークはその向かいに腰を下ろした。

高級感の漂うレトロなカフェといった装いのその店は、王宮内の奥の方にあった。昼どきにもかかわらず、特に混み合っている様子もなく、ゆったりとした時間が流れている。窓から外を見下ろすと、緑あふれる中庭が目に入った。噴水の水音が心地よく気持ちを和らげていく。

「ここは穴場でね」

サイファは外を眺めながら、皮張りのソファにもたれかかり腕を組んだ。ジークもつられて外に目をやりながら、かすかにうなずいた。もっと人が入っても良さそうな、いい雰囲気のお店なのに……。きっとここは高い店なのだろう、勝手にそう納得した。

「きのうはゴードン所長とランチだったのかい？」

サイファはにこやかに振り向いた。ジークはぎくりとして体をこわばらせた。しかし、その展開は予想どおりでもあった。サイファが自分を連れ出したのは研究所のアルバイトの一件に関係がある、ということは想像がついていた。

「放課後だったので、食堂でコーヒーだけです」

そう答えると、うつむいて膝の上でこぶしをぎゅっと握りしめた。

「せっかく気にかけてもらったのにすみません。断ってしまって……」

「謝る必要はないよ。君が決めることだ」

サイファは優しくにっこりと笑いかけた。

「自分の力で進んでいきたい。君はそう思っているんだろう？」

「はい……」

ずばりと言い当てられて、ジークは肩をすくめ小さくなった。自分の気持ちはすっかり見透か

されているようだ。わずかに視線を上げ、ちらりとサイファの表情をうかがった。機嫌を損ねているようには見えない。先ほどまでと変わらず穏やかな笑顔をたたえている。

「その心掛けは立派だ」

ジークはとまどいながら顔を上げた。怪訝にサイファを見る。彼は笑顔のまま表情を引き締めた。

「しかし、君の進もうとする道は、そう生やさしいものではない。目の前のチャンスを棒にふる選択をしては、前に進んでいくことはできないよ」

ジークは再びうつむいた。暗い顔で口を結ぶ。

「利用できるものは利用し、貪欲に好機を掴み取る。私を踏み台にして申し上がるくらいの気概がなければね」

サイファは優しい口調の中に、強さと厳しさを覗かせた。

「機を得たあとは実力次第だ。実力が伴っていなければ、いずれ淘汰される。今いる場所に見合うだけの、いや、それを大きく超える力をつけるよう努力していかなければならない。陰口をたたく者や反発をする者には、何も言えなくなるほどの力を見せつけてやればいい。私は今までそうやってきたよ」

ジークはずっと下を向いたままだった。

「納得がいかないか」

サイファに問いかけられても顔を上げられなかった。うつむいたまま、ためらいがちに口を開いた。

「……どうしてそこまでして上を目指すんですか？」

サイファは目を見張り、少し驚いた表情を見せた。しかし、すぐにふっと表情を緩めた。窓の外に視線を移し、遠き日に思いを馳せるように、目を細め真摯に遥かを見やる。

「私にはプライドより大切なものがある。その大切なものを守るには力が必要だった——そういうことだ」

そう言ってジークに向き直り、にっこりと笑いかけた。

「ねえ、何の話だったの？ お父さん」

午後の授業が終わるなり、アンジェリカはジークに駆け寄って尋ねた。だが、彼はどこかうつろで、何か考えごとをしている様子だった。

「ああ……」

何の答えにもなっていない気の抜けた返事。ゆっくりと鞆を肩に掛け立ち上がると、無言で図書室をあとにした。アンジェリカはムッとしながらも、小走りでそのあとについていった。本の返却に手間どっていたリックも、慌ててあとを追った。

校門の外に出ると、ジークはふいに口を開いた。

「リック、俺、やっぱり研究所でアルバイトすることにした。悪リィ」

「あ、サイファさんに説得されたんだ」

早い変わり身だが、相手がサイファでは仕方ないとリックは思った。雄弁なサイファなら、単

純なジークを丸め込むくらいわけではないだろう。サイファに連れられていったときから、こうなる予感はしていた。

「説得……っていうんじゃないくて、なんていうか、プライドは譲れないものじゃねえってことに気づかされたんだ」

ジークは前を向いて淡々と語った。アンジェリカは怪訝な顔で、彼を覗き込むようにして見上げた。

「なにそれ。わかるように説明してくれる？」

口をとがらせぎみにして問いかける。

「これ以上、説明しようがねえよ」

ジークは顔をそむけ、ぶっきらぼうに言った。アンジェリカは思いきり頬をふくらませた。しかし、すぐにあきらめたように軽くため息をつくと、鞆を胸に抱えて空を見上げた。

「私も研究所でアルバイトしてみたかったわ。どうして年齢制限なんてあるのかしら」

「サイファさんに頼めばなんとかなるんじゃない？」

リックは思いついたことを軽い気持ちで言ってみた。しかし、アンジェリカは強く反発した。

「それはダメ！」

けわしい表情で振り返る。

「お父さんの力とか、ラグランジェの名前とか、そういうものに頼りたくないの。自分の力だけでやっていきたいのよ」

迷いなく、きっぱりと強い決意を口にした。

「そうだね」

リックは素直に肯定した。にっこりとアンジェリカに笑いかける。ジークはばつが悪そうにうつむいた。

「まあ、私はしっかり勉強しておくことにするわ。ジークに負けないようにね！」

アンジェリカは明るい声を空に弾けさせた。

「おっまえ……頑張りすぎじゃねえか。俺、もう勝てる気しねえ……いや、あきらめたわけじゃねえけど……」

ジークは口ごもりながら、あいまいにぼそぼそと言うと、顔をしかめ頭をかいた。

「私にだって譲れないものはあるわ」

アンジェリカは急に真面目な口調になった。ジークはぼかんとして彼女を見た。彼女も大きな漆黒の瞳を、まっすぐ彼に向けた。

「ジークのことは好きだけど、絶対に負けるわけにはいかないのよ」

そう言って、にっこりと大きく笑った。

「……あ、ああ、そうかよ」

「それじゃ、またあしたね！」

彼女はふたりに手を振り、短いスカートをひらめかせ、元気に走り去っていった。

ジークはその後ろ姿が小さくなるまで呆然と見送った。

「良かったね」

リックはぼつりと言葉を落とした。

「な、なにがだ」

「好きだって」

ほとんど点となった彼女を指さしながらさらりと言うと、頬を赤らめているジークに振り向いた。彼はますます顔を上気させ、カッと頭に血をのぼらせた。

「ば……良かねえよ！ 何の気なしに言っただけだろうが！」

「うん、まあそうだろうね」

声を荒げむきになるなるジークに、リックは苦笑いしながら同意した。

「ったく……なんで俺がこんなうろたえなきやなんねえんだ、くっそう」

ジークは手の甲で冷や汗を拭った。

「だいたいあいつは何であんな普通にあんなこと言いやがるんだ。まるっきりガキじゃねえかよ。きっとあしたには言ったことすら忘れてんだぜ」

独り言のようにぶつぶつと言いながら、腕組みをして眉間にしわを寄せる。そして、片眉をひそめ、くしゃっと髪をかきあげた。

「あー、なんかだんだん腹立ってきた」

「でも“譲れないもの”なんだよね」

リックはにっこり笑いかけた。ジークは面くらって彼を見た。口を半開きにしたまま、再び顔が紅潮していった。

「知るかよ」

ふてくされてぶっきらぼうに言い捨てると、踵を返し早足で歩き始めた。後ろから見ても耳まで赤くなっているのがわかる。

「待ってよ」

リックは嬉しそうに顔をほころばせながら、駆け足で彼を追った。

64. 忘却の中の再会

「ジーク＝セドラックです。よろしくお願いします」

ジークは前を向いて、ぺこりと頭を下げた。パラパラと寂しい拍手が起こる。ほとんどはちらりと顔を向けただけで、すぐに自分の仕事に戻った。中には手を止めることすらしない者もいた。まるで歓迎されていないようだが、そういうわけではない。この研究所では手が離せないほど忙しい、もしくは仕事に手を離すことを嫌がる人が多いのだ。昨年も同じ状態だった。

ジークを連れてきた制服の女性・アンナは、気にすることなく声を張り上げた。

「今年も彼に来てもらうことになりました。今年は第三分析チームを手伝ってもらいます」

「足手まといにならなければいいけどな」

ジークのすぐ近くにいた若い男が、キーボードを打ちながらつんとして言った。昨年もよく突っかかってきた怒りっぽい男だ。ジークは眉をひそめた。

「ジョシュ！」

アンナは咎めるように彼の名を呼んだ。彼は仏頂面でモニタに向かったまま、返事をすることなく仕事を続けた。

「気にしない、気にしない」

アンナは、親しみを感じさせる丸顔でにっこりジークに微笑むと、どこか甘ったるい声で明るく元気づけた。ジークはふいに懐かしさを感じた。去年は彼女のもとで魔導のデータ提供を行っていた。その際、いつもこんな調子で声を掛けてくれていたのだ。今年も彼女のもとで仕事をすることになるのだろうか。

「君の席はそこね。仕事のことは彼に聞いて」

ジークの考えはどうやら違ったらしい。彼女はテキパキとそう言って席を指し示すと、忙しそうにフロアから出ていった。

取り残されたジークは、彼女の指さした方に目を向けた。ひとつの空席がある。そこはジョシュの隣の席だった。「彼」というのはジョシュのことだろう。ジークはわずかに顔を曇らせた。ジョシュはあえて無反応を装っているようだった。ひたすら無言でキーボードを叩き続けていた。

「ジーク！」

はつらつとした女性の声が、彼の名を呼んだ。アンナとは違う声だ。ジークは顔を上げた。

「こんなところでキミと会うなんてビックリ」

「あ！」

彼女には見覚えがあった。ユールベルの元ルームメイトだ。アカデミーではジークのひとつ先輩にあたる。だが、名前が思い出せない。

「えーと……」

彼女を指さしながら、顔をしかめて唸る。

「ターニャ。ターニャ＝レンブラントよ。ユールベルのルームメイトだった」

彼女はそう自己紹介すると、腰に両手をあて呆れ顔で彼を見た。

「頭はいいはずなのに、興味ないことはちっとも覚ええないのね」

「ていうか、何でここに……」

いまだに彼女を指さしたまま、ジークは不思議そうに尋ねた。

「ああ、私？ アカデミーを卒業したら、ここに就職するのよ。今は実習期間ってわけ」

ターニャは首からぶら下げていた職員証を見せた。肩書きは実習生となっている。

「私語は他でやってくれないか」

隣のジョシュが、モニタを見つめたまま苛ついた声をあげた。ターニャははっとして口を押さえ、肩をすくめながら小さく頭を下げた。ジークもムツとした表情で頭を下げた。

「それじゃ、またあとでね」

彼女はジークに顔を近づけ小声でそう言うと、小走りで自分の席へ戻っていった。

時はお昼をまわり、スタッフはばらばらと席を立ち始めた。ジークもひと区切りがついたところで立ち上がった。

「ジーク、お仕事順調？」

ターニャは軽い足どりで彼の席へやってきた。

「まあまあ、だな」

ジークがそう答えると、隣のジョシュはあからさまに不愉快な表情で彼を睨んだ。ジークは無言で顔をそむけた。ターニャはジョシュに背を向けるようにしてジークに並ぶと、声をひそめて話しかけた。

「ね、お昼一緒しない？ おごるから」

「ん、ああ」

ジークはとにかく一刻も早くこの場を離れたかった。

「いつからここに来てるんだ？」

食堂へ向かう道すがら、ジークは何気なく尋ねた。

「つい二日前よ。知った人がいなくて不安だったから、キミを見たときは嬉しかったわ」

ターニャは屈託なく笑いかけた。ジークは少し照れくさいような気持ちになった。別に自分がどうこうというわけではなく、単に顔見知りだからということは十分に理解している。それでもまっすぐにそう言われて悪い気はしない。

「ね、あそこの人、窓際にひとりで座ってる茶髪の」

ターニャはトレイを取りながらひじでジークをつつき、視線でひとりの男を指した。その若い男は、まっすぐに背筋を伸ばし、年季の入った分厚い本を読んでいた。どことなく神経質そうな感じがした。

「私と一緒に採用されたもうひとりの人なの。でも、なんか話しづらくて。一応アカデミーで同じクラスなんだけど、ほとんど口をきいたことがないのよね」

ジークはサラダをトレイに載せながらなんとなく振り返り、もういちど彼を見た。確かに話し

づらそうな雰囲気醸し出している。ジョシュといい勝負だと思った。

「やっぱりここに来る人って、ああいうエリートタイプが多いのかなあ」

ターニャはトレイを机に置いて、軽くため息をつきながら座った。

「自分だってここ受かったんだろ？」

ジークも彼女の向かいに腰を下ろした。

「んー……私は奇跡みたいなものかな」

ターニャは頼杖をつき視線を落とした。フォークを手にとり、ぼんやりとサラダをつつく。

「私の力じゃとても受かるとは思えないもの。ほんの力試しのつもりだったのに受かっちゃって」

彼女は申しわけなさそうに、肩をすくめて笑ってみせた。

「難しいのか？ ここ」

ジークはパンをほおばったままで尋ねた。

「そうよ、知らないの？」

ターニャはレタスを突き刺したフォークを彼の鼻先に向けた。

「魔導省の次くらいじゃないかな。まあキミならここでも魔導省でも行けちゃうだろうけどっ」

少し突き放したようにそう言うと、フォークの向きを変えレタスにぱくついた。

「キミももうすぐ進路を決めなきゃいけない時期でしょ？ 何か考えてるわけ？」

「いや……別に、まだ……」

ジークは口いっぱいにほおばりながら、あまり興味なさそうに返事をした。

「そろそろ考え始めた方がいいわよ。キミのとこの担任、手取り足取り教えてくれるタイプじゃなさそうだし」

「そりゃ、確かに……」

思わず「優しく指導するラウル」を想像してしまい、ジークは背筋が寒くなった。慌てて温かいスープを流し込み、小さく息をつく。ターニャはそんな彼を見て、あははと笑った。

「悪い人じゃないんだけどね」

「そうかあ？」

ジークは思いきり嫌な顔をして、パンにかぶりついた。

「根はいい人だと思うわよ。それに強くて頼りになりそうじゃない？」

「頼ろうなんてしたら、逆にボコボコにされるぜ」

意地でも認めようとしないうジークを見て、ターニャはくすりと笑った。

「ユールベルの担任なんか、かなり気弱そうよ。ずいぶんレオナルドに手こずってるみたい」

それを聞いて、ジークはようやく笑った。

「あ、そうだ」

ターニャは手を止めた。

「私、帰りにユールベルのところに寄ってくつもりだけど、せっかくだしキミも一緒に来ない？」

「せっかくの意味がわからねえよ」

ジークはサラダにフォークを突き立てた。

「減るもんじゃないんだし、会うくらい会ってあげてもいいんじゃない？」

ターニャはコーヒーカップを手にとり、軽い調子で言った。浮かない顔でうつむく少年を目に映しながらコーヒーを口に運ぶ。ジークはフォークの先をじっと見つめて顔をしかめた。

「会わねえ方がいいんだよ」

「そうかなあ？ たとえ望みがなくなたって、会えるだけで嬉しいものだと思うけど」

彼はその考えに納得がいかなかった。眉をひそめて首をひねる。

「あいつがそんなノーテンキだとは思えねえ」

「悪かったわね、ノーテンキで」

「は？」

素頓狂な声をあげ、きょとんとして顔を上げた。

「私は嬉しいわよ。ほんのちょっと姿を見られるだけでもね」

ターニャはにっこりと笑った。ジークはぼかんとして彼女を見つめた。

「言っとくけど、キミじゃないわよ」

「わ、わかってる！！」

いたずらっぽくからかうターニャに、彼は耳元を紅潮させて言い返した。

食堂から戻る途中、ふたりは廊下でサイファと出会った。大量の資料を抱えた若い研究員とともに、奥の会議室へ向かうところのようだ。

「やあ、ジーク君」

サイファは右手を上げ、にっこり笑って声を掛けてきた。

「こんにちは」

ジークは少し緊張ぎみに、しかしはっきりと挨拶をした。まっすぐサイファと目を合わせる。

「今日からだったな」

「はい」

「ここでの経験は必ず君のためになる。頑張れ」

「はい！」

サイファはジークの腕を、力づけるように軽く叩いた。そして、一步後ろで様子を窺っていたターニャに目を向けた。

「君は……ターニャ＝レンブラントか？」

「え？ あ……はい、そうです！」

彼女は大きくうろたえながら返事をした。息を詰まらせながらサイファを見つめる。彼はにっこりと笑顔を返した。

「ユールベルが世話になったね」

「世話だなんて、そんなっ！ 私たち、友達ですから」

ターニャは胸元で両手をひらひら振り、頬を赤らめながら慌てて訂正した。サイファは彼女を見つめて優しく微笑みかけた。

「ありがとう」

「サイファさん、急がないと……」

若い研究員が遠慮がちに口をはさんだ。

「ああ、すまない」

サイファはとたんに仕事の顔に戻った。

「また今度ゆっくり話そう」

ジークに振り向きそう言うと、ふたりは奥の会議室へと消えていった。

「嘘みたい。サイファさんが私のことを知ってくれたなんて……」

ターニャはほんのり頬を染めたまま、夢見心地でつぶやいた。

「声を掛けてくれて、笑いかけてくれて……そのうえありがとうだって！」

浮かれて嬉しそうに声を弾ませると、ジークの背中をバシッと思いきり叩いた。

「痛えな！ なんだよ！」

「最近、奇跡つづきで怖いくらい」

彼女は無邪気にえへへと笑った。ジークはムツとして顔をしかめていたが、彼女のその表情に毒気を抜かれた。疲れたようにふうとため息をつく。

「あっ」

彼はふいに短く声をあげた。脳裏にある考えがよぎった。

「まさかとは思うけど……」

疑いのまなざしを彼女に向ける。

「おまえの好きな人って、サイファさん……なわけないよな、いくらなんでも」

「あら、朴念仁かと思ったけど、意外とするどいのね」

ターニャはしれっとして言った。

「本気かよ！」

ジークは廊下の真ん中で叫んだ。あたりにいた何人かが振り返ったが、彼はまるで気に留めなかった。それどころではなかった。

「わかってんのか？！ サイファさんは……」

「わかってる、わかってるわよ！」

ターニャは彼の前で両手を広げ、必死に話をそこで止めた。これ以上、大声で続けられては、内容によってはあらぬ誤解を招きかねない。まわりをちらちら窺いながら、彼に顔を近づけた。

「知ってるわ。結婚してることも、アンジェリカの父親だってことも」

声をひそめて耳打ちする。

「だから言ったじゃない。姿を見られるだけで嬉しいって。それ以上の希望は持ってないわ」

ターニャはにっこりと笑ってみせた。

ジークは口を閉ざしたまま、複雑な表情でうつむいた。

「もうっ、そんな顔しないでよ」

ターニャは口をとがらせながら、腰に手をあて彼を覗き込んだ。そして、ふと思いついたよう

に尋ねた。

「ね、奥さん見たことある？」

「ああ」

ジークはレイチェルの笑顔を思い浮かべた。もともと実年齢よりも若く見える彼女だが、笑うとさらに若く見えた。あどけなささえ感じられるほどである。

「すごい綺麗な人だって噂だけど、本当？」

「ん……ああ」

ジークは少しのためらいのあと頷いた。綺麗というよりも可愛い感じだと思ったが、それを口に出すのはなんとなく気恥ずかしかった。

「やっぱりそうかあ」

彼女は上を向いて、残念そうに声を上げた。

「どのみち私じゃかなわないってことね」

「そうだな」

ジークはさらりと返事をした。ターニャはぽかんとして彼を見た。そして、我にかえると眉をひそめ腕を組んだ。

「あーもうっ。事実だとしても、そこであっさり同意するかなあ。傷心の女のコをいたわろうって気持ちはないわけ？」

「なんだよ、自分で言ったんじゃないか。わけわかんねえ」

ジークはムツとして言い返した。ターニャは彼の鼻先に人さし指を立てた。

「いいわ、今度アイスクリームをおごってね。それで手を打ってあげる」

「なんでだよっ！」

彼女はあははと笑って、再び歩き出した。

夕刻も終わりという頃、ジークは仕事を終え、帰り支度を始めた。定時は過ぎていたが、まわりはまだ忙しく仕事を続けていた。誰も帰ろうとしない。自分だけ帰るのは少し気がひけたが、だからといって単なるアルバイトの身では残ることもできない。目立たないように立ち上がりそっとフロアから出た。

「ジーク！」

廊下を歩いていると、後ろからターニャが声を掛けてきた。実習生である彼女も早く帰らされるようだ。

「ユールベルのところ、寄ってかない？」

「行かねえって言っただろう」

ジークは面倒くさそうに答えた。しかし、次の瞬間、はっとして彼女に振り返った。

「もしかして、おまえがユールベルに良くしてるのって、サイファさんに近づくためか？」

ターニャは大きく目を見張った。そして、弾けたようにあははと笑うと、急に怒った表情になり彼にぐいと顔を近づけた。

「違うわよ！」

ジークは目をぱちくりさせ、顔を赤くしながら身をそらせた。

「寮で同じ部屋になったのはただの偶然。私がどうこうしたわけじゃない。それに私、ユールベルのことは本当に可愛く思ってるわよ。サイファさんは関係ない」

一気にそれだけ言うと、彼から離れふうと小さく息をついた。

「ま、信じてくれなくてもいいけどね。そういう期待もまったくなかったわけじゃないし」

「悪かった、うたぐったりして」

ジークは神妙な面持ちで素直に詫びた。ターニャはくすりと笑った。

「じゃ、ユールベルのところへ行ってくれる？」

「それとこれとは話が別だ！」

今度はジークがため息をついた。腕を組み口をとがらせ首をひねる。

「そもそも何で俺なんだ？俺、あいつに別に何かしてやった覚えもねえし、まともに話したこともあんまりねえぞ」

「こら、そんな迷惑そうに言わないの」

ターニャは先輩ぶった口調でたしなめた。

「うん、でもそーよね。確かに私もすごく不思議。どうしてよりによってキミなのか」

そう言うと人さし指をあごにあて、斜め上に視線を向けた。そのとぼけた表情を見ているうちに、ジークは昼休みの彼女の言葉をそっくりそのまま返したい気分になった。

「……なんてね」

ターニャはいたずらっぽくくりっとした黒い瞳を彼に向けた。

「人を好きになるのに理由なんてないのよ。理由があったとしてもそれはあとづけ。好き嫌いは本能が決めるものよ。そう思わない？」

ジークは返答に困ってうつむいた。彼女は構わず続けた。

「だいたい理性で人を好きになるんだったら、10歳の女のこなんて好きにならないでしょ？」

「今は13だ。……あ」

ジークの顔から血の気が引いた。

「だっ、誰から聞いた?!」

今度は一気に顔を上気させ後ずさった。ターニャはそんな彼を見てにこにこしていた。

「聞かなくてもわかるわよ。なんとなくね」

彼女は研究所の外に足を踏み出した。ひんやりとした空気が頬をかすめた。空はすでにほとんどが紺色に塗り替えられ、わずかにその端に赤みを残しているだけである。その濃紺の空に両手を向け、大きく伸びをすると、冷えた空気を思いきり吸い込んだ。体の中からリフレッシュしたような心地よさを感じ、思わず顔もほころぶ。

だが、ジークはそれとは対極の表情を見せていた。ジーンズのポケットに両手を突っ込み、背中を丸め、恨めしそうに彼女を睨んでいる。先ほどの誘導尋問がよほどくやしかったようだ。

「じゃあね。あしたアイスクリームおごってよね」

門の外に出たところで、ターニャは陽気にそう言った。

「本気だったのかよ……」

ジークは呆れたようにつぶやいた。

「ターニャ……？」

ふいに横から彼女の名前が呼ばれた。弱々しく自信がなさそうな声である。ふたりが振り向くと、中年の女性がおどおどしながら近づいてきた。しっかりした身なりだが、どこかくたびれたような印象を受けた。

ターニャはきょとんとしてその女性を見た。

「え？ はい、ターニャ＝レンブラントですけど。どちら様でしょう？」

女性はじわりと目に涙をにじませた。しかし、それを必死にこらえているようだった。口元を震わせ、喉の奥から乾いた声を絞り出した。

「……覚えてなくても、当然……ね……」

ターニャはいぶかしげにその女性を見た。彼女はぎこちなく笑って言葉をつなげた。

「私は、ずっと会いたかった……ターニャ……大きくなったわね……」

「まさか……」

ターニャの表情はみるみるうちにこわばっていった。その瞳はまるで何かに激しく怯えているかのように震えていた。まばたきすら忘れていた。

中年の女性は、そんな彼女を見て顔を曇らせた。ためらいながら口を開く。

「あなたがここで働いてるって聞いて……」

ターニャはピクリとも動かない。それでも女性は言葉を続ける。

「いきなりごめんなさい。でも、どうしても、ひとこと謝りたくて……」

そう言いながら、足を踏み出し近づこうとする。ターニャはそれと同時にびくんと体を震わせ、身を庇うように両手と右足を同時に引いた。そして、じりじりと何歩か後ずさると、唇を噛みしめ深くうつむいた。額から汗が滴り落ちる。

「何を……何のことだかわかりません。失礼します」

感情を殺した声で口早に言うと、踵を返しその場から走り去った。

「ターニャ！ ごめんなさい……どう謝れば……どう償えば許してもらえるの?!」

女性は、彼女の背中に向かって泣きながら叫んだ。

ジークは何度かその女性とターニャを交互に見た。そして、迷ったすえターニャを追うことに決めた。全速力で駆け出す。

「待てよ！」

後ろから声を掛け、彼女の腕を掴んで止めた。彼女も本気で走っていたのでなかなか追いつけず、研究所からはだいぶ離れてしまった。もうあの女性の姿も見えない。

「もしかして、母親か？ さっきの……」

「知らないって言ったでしょ」

背中を向けたまま、強気な言葉を返す。しかし、その声は涙まじりだった。掴んだ華奢な腕も不規則に震えている。

「何があったか知らねえけど……あの人、あやまってたぞ」

「謝れば何をしても許されるって言うの?!」

ターニャはジークの手を振りほどき、勢いよく振り返った。瞳に涙を浮かべ、彼を睨むように強く見つめる。

「私、あの人に殺されかけたのよ」

「え……？」

ジークは目を見開いて絶句した。

65. 泡沫の奇跡

「きのうはごめんね」

昼どきの喧騒の中、明らかに自分に向けられた声。ジークはサンドイッチを持つ手を止め、顔を上げた。そこにはトレイを持ったターニャが立っていた。ぎこちない笑顔を浮かべている。

「ああ」

ジークは固い声で返事をした。それから、サンドイッチをひとくちかじると、ぼそりと小さな声で言った。

「座れよ」

「うん」

ターニャは彼の向かいにトレイを置き、音を立てないように静かに座った。黙々と食べ続ける彼を見ながら、言いにくそうに口を開いた。

「あのね、きのう言ったこと……」

「もういいぜ。あのことは忘れる」

ターニャは首を横に振った。

「きちんと話すわ。聞いてくれる？」

ジークの手が止まった。

「無理すんなよ」

「決めたから」

ターニャは緊張した面持ちできっぱりと言った。そして、かすかに笑みを浮かべ、肩をすくめた。

「あんまりごはんどきに話すような内容じゃないんだけど」

「気にしねえよ」

——あの人に殺されかけた。ターニャはきのう、そう言って泣いた。どう転んでも楽しい話であるはずがない。言われるまでもなくわかっている。

ターニャは温かいスープをひとくち流し込み、小さく息をついた。

「私の父はね、私が三歳のときに自殺したの。首をくくってね」

ジークは繕った無表情で、サラダにフォークを突き刺した。ターニャはうつむき、声のトーンを落とした。

「それを最初に見つけたのが私だった」

覚悟はしていたものの、思った以上の重さだった。ジークは口を開くことができなかった。

「でね」

ターニャは気を取り直すように明るい声を作り、ぱっと顔を上げた。

「あの人は……母は、ショックで精神を病んじゃったらしいのよ。それで私は何の世話もしてもらえないまま放置されていたのね。衰弱して死にかけていたところを近所の人が見つけてくれて。そのあと施設……孤児院ね、に預けられたわけ」

その内容とは不釣り合いなくらいに軽くテンポよく一気に言い切ると、大きく口を開けてサン

ドイツにかぶりついた。

「ああ、それで殺されかけたって……」

ジークは納得したように言った。ターニャはばつが悪そうに笑ってみせた。

「それから三年くらいは口がきけなくなっていたらしいわ。この頃の記憶もあんまりないのよね」

ジークは掛ける言葉を思いつかなかった。しかし、押し黙っている彼を見て、ターニャは口をとがらせた。

「今はこんなによくしゃべるのに信じられないとか思ってるんでしょ？」

「言ってねえよ！」

ジークが怒ったように否定すると、彼女はくすりと笑った。

「本題はここから」

「本題？」

ジークは怪訝に眉をひそめた。ターニャは真剣な顔で、身を乗り出した。

「母には私の居場所を一切教えないことになっているのよ。だから三歳のとき以来、一度も会ってないし、私がここで働いていることだって知るはずない」

「でも聞いたって言ってたぜ」

「でしょ？」

彼女は不機嫌に口をとがらせ、ほおづえをついた。空いた方の手でフォークをとり、サラダをつつく。

「どうもおかしいのよ。誰が知らせたのかしら」

「心当たりはねえのか？」

ジークはサンドイッチをほおばりながら尋ねた。

「母のことを知ってるのはごく少数よ。施設の先生とユールベルとキミの担任くらいかなあ」

「ラウルが？」

ジークは顔をしかめた。ターニャはこくりと頷いた。

「しゃべれなくなってたときに、診てもらったことがあるらしいの」

彼女はさらりと言ったが、ジークは難しい顔で眉間にしわを寄せた。

「あやしいぜ。あいつが犯人だろ」

ターニャは首をかしげた。

「どうして？ 動機なんてないじゃない。あの先生がそんなにおせっかいとも思えないし」

「そうだな……」

ジークはどことなく残念そうだった。

「ユールベルは母の居場所なんて知るわけない。とすると、施設の先生じゃないかなって」

「動機はなんだよ」

「うーん……私と母を仲直りさせよう、とか？」

ターニャは自信なさげに言った。ジークもいまいち納得のいかない表情で首をひねった。

「でね」

そんな彼を覗き込むように、ターニャは机にひじをついて身を乗り出した。

「帰りに施設に寄ってみようと思うの。確かめるだけ確かめたいし。一緒に行ってくれない？」

「なんでだよ。俺には関係ねえだろ」

ジークは無関心にそう言って水を飲んだ。ターニャはにこにこしながら両手でほおづえをついた。

「私の話を聞いたんだから関係なくはないでしょ」

「……」

ジークは弱ったように頭をかいた。

「じゃあ帰りにね！」

ターニャはジークの背中をポンと叩くと、軽やかに自席へ戻っていった。

「もう仲直りしたのか、色男。どんな手を使ったんだ？」

腰を下ろしたジークに、隣のジョシュがとげとげしく毒づいた。モニタを見つめ、無表情でキーボードを叩いている。

ジークは横目で睨んだ。

「なんの話だ」

むすっとしてそう言うと、モニタの電源を入れた。ブォンという鈍い音とともに、次第に画面に光が宿っていく。隣ではずっとカタカタと乾いた音が続いていた。

「きのう泣かしただろう、あいつを」

「俺じゃない」

ジークは小さく舌打ちをした。見られていたのか、よりによってコイツに——。彼は自分の運の悪さを呪った。

「おまえでなければ誰だというんだ」

「それは……」

本当のことはとても言えない。言うてはならない。言う必要もない。ジークはだんまりを決め込んだ。だが、ジョシュはいいわけを思いつかなかったのだと解釈したようだった。手を止め、冷ややかな視線を流した。

「俺はごまをすってお偉方に取り入る奴や、女を泣かすような奴は信用しない」

「俺がそうだと言いたいのか」

ジークは眉をひそめ睨み返した。ジョシュは答えなかった。前に向き直り、再び手を動かし始めた。

「ジーク、調子はどうだね」

ジークは声のする方に振り返った。

「所長！」

ジークが返事をするより早く、ジョシュが机にバンと手をつき、勢いよく立ち上がった。

「どうして私がこんな使えないアルバイトのお守りをしなければならないんですか！」

その直訴はフロア中に響きわたった。まわりのスタッフはみな振り返った。遠くでかすかにざわめきが起った。

だが、所長は動じることなく平然として言った。

「彼はきちんとなしているだろう」

「あんなもの、言われたとおりにやるだけのサルでもできる仕事です」

「君も最初はそこから入ったはずだが？」

「……」

ジョシュは言い返すすべを失くした。机に手をつき、苦々しい顔でうつむく。

所長は悠然と微笑んだ。

「これは君のためでもある。後輩の指導、よろしく頼むぞ」

「……はい」

ジョシュはうなだれたまま、苦渋に満ちた声で返事をした。

「ジーク、君も先輩と仲良くやってくれたまえ」

「あ、はい」

ジークは慌てて立ち上がった。所長は後ろで手を組み、満足げにうなずいた。そして、もう一度ふたりに念を押すように視線を送ると、奥へ消えていった。

ジョシュは机についた手を握りこぶしに変えた。そして、ぼつりと言葉を落とした。

「ひとつ言っておく」

ジークはその声に振り向いた。

「俺はいい仕事がしたいだけだ。出世欲なんてものはない。だから、いくらおまえが所長やラグランジェ家と懇意にしているといっても、俺には関係ない」

ジョシュは頭を垂れたまま、淡々と言った。

「そりゃ願ったり叶ったりだぜ」

ジークは無愛想に答えると、腰を下ろしモニタに向かった。

「お先に失礼しまーす」

ターニャは定時になるとすぐに仕事を切り上げ、ジークの腕を引っ張りながら研究所をあとにした。

「わかった、逃げねえから、腕、放せよ」

「ちょっと待っててね」

あたふたする彼に、ターニャはにこにこしてそう言い残し、どこかへ走っていった。そして、しばらくすると、自転車を引きながら戻ってきた。

「施設までは遠いからこれで行こ！」

「俺はねえぞ」

ジークは面倒くさそうに言った。しかし、ターニャはあっけらかんと切り返した。

「ふたり乗りでいいでしょ？」

「大丈夫か？ けっこう重いぞ」

ターニャは目をぱちくりさせた。

「なに言ってんのよ。キミがこぐのよ」

「は？ なんでだよ！ これおまえのだろ？」

ジークは面くらって赤い自転車を指さした。

「私のじゃなくて友達だよ。何のためにキミを呼んだと思ってんの。いいからこいで。男でしょ」

ターニャはにっこり笑って、自転車を強引に押しつけた。

「信じられねえ」

ジークはため息まじりにつぶやいた。

「かawaii女の口にこがせようとするキミの方が信じられないわよ」

かawaiiって誰が——そう思ったが、反論する気にもなれなかった。しゅしゅ自転車にまたがる。ターニャは横向きに荷台に乗り、彼の腰に手をまわした。

「ここからだと一時間半くらいかなあ」

「そんなにか?!」

「だからほら、急がないと帰りが遅くなっちゃう」

ターニャはジークの背中をポンと叩いた。

「本っ当に信じられねえ！」

ジークは歯をくいしばり、やけくそでこぎ始めた。

もう日は沈み、あたりは薄暗くなっている。汗だくのジークは小さな門の前で足をついた。ぜいぜいと荒い息で、中に目を向ける。細長い平家とこじんまりとしたグラウンドが見えた。家には暖かそうな光が灯っている。

「ここか」

「うん、久しぶりだなあ」

ターニャは荷台から降りると、両手を空に向け、大きく伸びをした。

「疲れたあ。おしりも痛いし」

「人にこがせて吐くセリフかよ」

ジークは呆れ顔でつぶやいた。聞こえていたのかいないのか、ターニャはそれには反応しなかった。勝手に門を開け、敷地内へと足を進める。ジークもそのあとについていった。

ターニャは玄関ではなく、どこかの部屋のガラス戸を開けて、中を覗き込んだ。雑然とした部屋の奥に、年輩の女性が座っているのが見えた。

「こんにちは、園長先生」

「……ターニャ？」

園長と呼ばれた白髪的女性は、目を凝らして立ち上がった。そして、戸口の彼女を確信すると、とたんに顔を輝かせた。

「まあ！ ずいぶん久しぶりじゃないの！ 三年ぶりくらいかしら」

「えへへっ」

ターニャは少し照れくさそうに笑った。

「元気そうで良かったわ。今日は彼氏を紹介しに来たの？」

ターニャの後ろに立っている、落ち着かない様子のジークを見て、園長はにっこり微笑んだ。

「あ、いや、俺は……」

「彼はそういうのじゃないわ」

しどろもどろのジークをさえぎり、ターニャは冷静に否定した。

「ただの友達。連れてきてもらっただけよ。園長先生、私が面食いだって知ってるでしょ？」

「あら、そうだったわねえ」

ふたりは愉快地笑いあった。ジークもつられて引きつりながら笑った。

「今日は母のことを聞きにきたんです」

ターニャは急に真面目な顔になり尋ねた。園長は心配そうに彼女を覗き込んだ。

「何かあったの？」

「研究所で待ち伏せされてて……。園長先生、誰か私のことを母に伝えましたか？」

そのしっかりした口調とは裏腹に、彼女の目はどこか怯えているようだった。

園長は優しく穏やかに答えた。

「いいえ、以前も今も一度もないわ。よほど特別なことでもない限り連絡はしない、それがあなたを預かるときの約束だったから」

「そう……」

ターニャは落胆したように、しかしどこかほっとしたように声を漏らした。

「でも研究所って？ まだアカデミーは卒業していないんでしょう？」

「あ、いま実習期間なんです」

園長は眼鏡の奥で瞳を輝かせた。

「まあ、就職が決まったのね！ でもそれならそうと連絡くらい頂戴よ」

「ごめんなさい」

ターニャは申しわけなさそうに肩をすくめた。

「研究所のことさえ知らなかったんなら、この人は確実に違うな」

ジークは後ろから口を挟んだ。

「うん……」

ターニャはうつむき、軽く握った手を口元に添えた。

「誰か他に、私のこと、母のことを知っている人に心当たりありませんか？」

「そうねえ」

園長は首をかしげ遠くを見つめた。

「あなたをここに連れてきたお役人さん、あなたのご近所だった方たち、あとは王宮医師のラウルさんくらいかしら」

「やっぱラウルがあやしいんじゃないかねえのか？」

ジークは何がなんでもラウルを犯人にしたいようだった。ターニャは難しい顔で考え込んだ。

「あ、ちょっと待って。もうひとりいるわ」

園長は両手を合わせて、うなずきながら言った。

「あなたの親戚よ」

ターニャは怪訝に眉をひそめた。

「親戚？ 誰もいないって聞いたわよ」

「ああ……ごめんなさいね。そういうことにしてあったの。あなたの引き取りを拒否したものだから」

園長はそこまで言うと、心配そうに彼女の顔色を窺った。

「誰なんですか？ その親戚って」

声も表情も動揺しているふうでなく、沈んでいるふうでもなく、落ち着いているように見えた。園長は安堵した。

「あなたの父の兄、つまり伯父さんにあたる方ね。名前まではわからないんだけど……。私たちも面識があるわけじゃないから」

園長は丁寧に答えたあと、思いついたように付け加えた。

「そう、その方の紹介でラウルさんがいらしたのよ」

「えっ？」

「やっぱりラウルがあやしいぜ」

ジークはそれ見ろと言わんばかりの口調だった。ターニャの表情が曇った。

「あしたにでもラウルのところに行ってみるか？」

「うん……」

ターニャは重い声でうなずいた。

「ターニャ！」

廊下からドタドタと子供たちが駆け込んできた。小さな子から14、5歳の少年少女まで、10人くらいが彼女を取り囲んだ。

「みんな！ 久しぶりっ！！」

ターニャは心から嬉しそうに、子供たちの頭を順番に撫でた。

「大きくなったなあ」

「それだけ来てなかったんだろ、バカ」

10歳くらいの少年が腕を組みながら、不機嫌に突っかかってきた。

「お、反抗期？ ナマイキになっちゃって」

ターニャは嫌がる少年の頭を楽しそうに撫でまわした。

「あ、ミナ先生もこんにちは！」

後方で控えめに立っていたエプロン姿の女性に気づくと、元気よく挨拶をした。

「本当に良かったわ。元気そうで」

ミナはにこにここと穏やかな笑顔をたたえていた。

「あなたは子供たちの希望なのよ。たまには顔を見せに来て」

「なんか照れちゃうな」

ターニャは笑いながら肩をすくめた。

「就職も決まったそうよ」

園長が後ろから声を掛けた。ミナは両手を組んで顔を輝かせた。

「まあ、おめでとう！ どこなの？」

「知ってるかな？ 王立魔導科学技術研究所ってところ」

「ええっ?! 本当に?!」

彼女は大きく目を見開き、声を裏返させて驚いた。

「そんなにすごいところなの？」

いつも冷静なミナの興奮ぶりに、園長は驚いた。

「それはもう！ エリート中のエリートが集まってるって話よ」

「まあ！」

「私は運が良かっただけよ」

あまりの持ち上げられように、ターニャは多少の居心地の悪さを感じた。複雑な笑みを浮かべる。

「運も実力のうちよ。もっと胸を張りなさい」

園長は骨ばった手で、彼女の背中を優しく押した。

離れてその様子を眺めていたジークのところに、子供たちがわらわらと集まってきた。ジークは視線を上を逃がし、こわばった表情で腕を組んだ。困惑したように眉をひそめる。

「だれだよ、このに一ちゃん」

男の子はジークを見上げた。髪の毛の長い女の子が首をかしげた。

「ターニャの恋人さん？」

「ちがうよ。ターニャは金髪のかっこいい人にしかきょーみないもん」

ジークが答えるより早く、男の子が反論した。

「わたしは悪くないと思うけど」

女の子は背伸びをして人さし指を口にあて、じっとジークを見つめた。ジークはよりいっそう顔を上に向けた。

「微妙ね」

おっぱいの女の子は、腕組みをしてピシャリと言った。

ジークは上を向いたまま苦笑した。どうにもこうにも居たたまれない。早くここから逃げ出したい気持ちでいっぱいだった。

「私、そろそろ帰るわ」

ターニャのその言葉が、ジークには天からの助けに思えた。

「せわしないわね。もう少しゆっくりしていきなさいよ」

園長はにっこり微笑んでターニャの肩に手をおいた。

——まずい！ ジークは群がる子供たちをかき分け、大慌てで飛び出した。

「ここから家まですごく遠いんですっ！！ だからもう帰らないと！！」

こぶしを握りしめ、引き留める園長に思いきり力説した。必死の形相で迫る。

「え、ええ」

園長は彼の迫力に圧倒され、目を点にしてうなずいた。

「それじゃ、また近いうちにいらっしやい。用がなくてもね」

彼女は再びターニャに向き直り、優しく微笑みかけた。ターニャも顔いっぱい笑顔を返した。

。

「来たばっかじゃん。もう帰んのかよ」

少年はむくれて頬をふくらませた。ターニャはいたずらっぽく白い歯を見せながら、少年の頭をぐりぐりと撫でまわした。

「また今度ね。反抗期もほどほどにするんだぞ！」

少年は頬を赤らめながら、去りゆくターニャの後ろ姿を睨んで口をとがらせた。

外はすっかり闇に覆われていた。街灯もない暗い道を、自転車の小さな灯りだけで進んでいく。

。

「今日はありがとね」

荷台に横座りしているターニャは、前で自転車をこぐジークの背中に話しかけた。

「本当は私、自転車に乗れないの。だから……」

「え？ なんだ？」

ジークは顔半分だけ振り返って尋ね返した。風をきる音に邪魔されたせいか、彼にその言葉は届いていないようだった。

ターニャは表情を緩めると、左手を口元に添えて声を張り上げた。

「あしたもよろしく！ って言ったの！」

「仕方ねえなっ！」

ジークも声を張り上げて返事をした。それきりふたりの会話は途切れ、再び静寂が訪れた。誰も通らない田舎道に、発電機の低い唸り音だけが響いていた。

翌日、ふたりは仕事帰りにラウルのもとへ向かった。ジークは医務室の扉をノックして開けた。

。

「何の用だ」

ラウルはふたりの姿を見るなり、つっけんどんに尋ねた。

「わーっ！ かわいーっ！！」

ターニャは、ラウルの質問そっちのけで、彼が膝の上で抱いていた赤ん坊に目を奪われた。小走りで駆け寄ると、にっこり笑って小さな手をとった。

「患者さんですか？」

ラウルは無表情でぶっきらぼうに答えた。

「娘だ」

「ムスメ……娘っ?!」

「血はつながってないけどな」

ジークは仏頂面で腕を組みながら補足した。

「あ、そうなんだ。ビックリした……」

ターニャは落ち着きを取り戻した。

「じゃあこの子の本当の両親は？」

ふいに浮かんだ疑問がそのまま口をついて出た。

「さあな」

ラウルは冷たく突き放すように言った。だが、ターニャにはそれが答えなのだとわかった。ふいに寂しげに表情を緩めた。

「お名前は？」

「ルナだ」

本人の代わりに、ラウルが答えた。

「ルナちゃん、こんにちは。ターニャよ、ターニャ」

ターニャは赤ん坊の頬を軽くつつきながら優しく笑いかけた。ルナはきょとんとして大きな瞳を向けると、小さな口を開いた。

「……アー……ニャ」

「あはっ！ かーわいーっ！」

「だから何の用だ」

ラウルは苛ついた声を上げた。

「あ、そうだった」

ターニャは現実には引き戻された。

「おまえに聞きたいことがあって来たんだ。正直に答えろよ」

ジークはラウルを睨みつけて、命令口調で言った。しかし、ターニャは左手で彼を制した。

「先生は最近、私の母と連絡をとりましたか？」

「お前の母とは面識もないし、連絡先も知らんな」

ルナを抱え直しながら、淀みなく即答した。

「では、私の父の兄をご存知ですか？ 昔、先生に私の診察を頼んだ人らしいんですけど」

ラウルは顔を上げ、じっと彼女を見た。

「知らないのか」

「え？」

「おまえが働いている研究所の所長だ」

ターニャは唖然とした。

「……うそ、だって名前が……レンブラントじゃないし……」

「自分で確かめろ」

ラウルは激しく狼狽する彼女にすげなくそう言うと、くるりと椅子をまわし背を向けた。

「テメー、何かもっと知ってることあるんじゃないか?!」

ジークはラウルの胸ぐらに掴みかかった。ラウルは凍りつくような冷たい瞳で睨みつけた。ジークも負けじと熱く睨み返した。

「……っ」

鋭く視線をぶつけあうふたりの下から、小さくしゃくりあげる声が聞こえた。ルナが今にも泣き出しそうに目に涙をため、ジークを見つめていた。

「……行くぞ」

ジークはくやしそうに顔をしかめながら、踵を返した。呆然とラウルの横顔を見つめていたターニャも、後ろ髪を引かれながら医務室を出た。

「こうなったら所長のところへ行くしかねえな」

ジークは左手に右のこぶしを叩きつけた。力づくでも聞き出さんばかりの勢いだ。だが、ターニャは違った。足がすくんでいた。不安におびえた瞳をジークに向けた。

「ジーク、私、こわい……。先生の言うことが事実だったら、もしかして、私……」

「やめるか？」

ジークは両手を下ろし、静かに尋ねかけた。ターニャは目を閉じ、首を横に振った。

「逃げるわけにはいかない。はっきりさせなきゃ」

顔にかかる横髪をかき上げ、自分に言い聞かせるようにつぶやいた。

ふたりは研究所に戻り、所長室を訪ねた。開け放たれた扉の奥に視線を送る。書籍と書類の山の谷間に、彼の姿を見つけた。

「所長」

戸口から、ジークは遠慮がちに呼びかけた。

「ジークにターニャも。帰ったのではなかったのか」

所長は書類をめくる手を止め、顔を上げた。

「どこか、誰にも聞かれないところで話できませんか」

ジークはけわしい表情で尋ねた。ターニャは彼の背中に隠れ、不安そうに所長を窺っていた。

「構わないが……」

所長は怪訝な視線を投げかけながら立ち上がった。

三人はいちばん奥の小さな会議室で話をするようになった。機密事項に言及するような会議に使う部屋で、しっかりと防音されており、会話が外に洩れることはない。ジークもターニャも入るのは初めてだった。

所長は内側から鍵を締めた。そして、並んで座っているふたりの向かいに腰を下ろした。

「話とは何だね」

机の上で手を組み、ふたりを穏やかに見つめる。ジークはターニャをちらりと流し見た。彼女はうつむいていたが、やがて意を決したように顔を上げた。

「単刀直入にうかがいます」

緊張で顔も体もこわばっている。固い声で言葉を続けた。

「所長は、私の父の兄ですか」

彼の顔から微笑みが消えた。

「誰からそれを聞いた」

「ラウル先生です」

「そうか……」

所長はふうと息をついた。

「どうなんですか？」

ジークは問いつめるように答えを急かした。曖昧な態度に少し苛ついていた。所長はゆっくりと目を閉じ、口を開いた。

「そのとおりだ」

ターニャは膝に置いた手をぎゅっと握りしめた。予想していたことよ——自分に言い聞かせ、早まる鼓動を懸命に鎮めようとした。

所長はさらに話を続けた。

「私の昔の名はフランシス＝レンブラント。今は妻の姓を名乗っている」

「母に私のことを話したのも所長ですか」

ターニャの口調は無意識にきついものになっていた。所長はうつむき、表情を曇らせた。

「すまない。あまりに嬉しくて、うっかり口がすべってしまった。彼女、来たのか」

「はい……」

ターニャの顔が大きく翳った。

「まだ、許す気はないのか」

「許す?!」

彼女は感情に流され声を荒げた。だが、すぐに我にかえった。意気消沈した様子で、ぽつりぽつりと話し始めた。

「許すも何も、恨んでなんかいません。ただ、思い出したくないだけです」

所長はつらそうに目を細めた。

「私は君を引き取りたかった。だが、妻の方の家族が反対をしてね。……いいわけだな。本当にすまなかった」

「施設にはいい先生がいて、いい仲間がいて、本当に楽しかった。そのことについては、所長を責めるつもりはありません。むしろ感謝したいくらい。でも……」

ターニャは目を閉じ、深く息を吸った。

「こういう罪滅ぼしの仕方は許せません」

バン！ 彼女は職員証を机に叩き置いた。所長は目を見開いた。

「私がここに採用されたこと、奇跡だと思いました。でも違った。あなたが私のことを知って、それで……」

「それは違う！」

ターニャの言葉をさえぎり、血相を変えて否定する。しかし、彼女は止まらなかった。

「何も知らずに浮かれていた自分が恥ずかしい。馬鹿みたい。さぞ滑稽だったでしょう」

涙声で自嘲した。次第に目が潤んでいく。しかし、泣き出しそうになるのを振り切り、強い視線をまっすぐ彼に向けた。

「今日限りで辞めさせていただきます。私はあなたに情けをかけてもらわなくても生きていけるわ」

そう言い終えると同時に立ち上がり、職員証を残して戸口に向かった。ジークと所長は同時に立ち上がった。

「待ってくれ！」

「おい！」

どちらの呼び止めにも彼女は反応しなかった。立ち止まることも振り返ることもなく、無言で会議室を出ていった。

ジークはすぐに彼女を追って外に出た。しかし、所長は力が抜けたように椅子に崩れ落ちた。そして、机にひじをつき、頭を抱え込んだ。

研究所を出たところで、ジークは彼女に追いついた。

「待てよ」

後ろから細い腕をつかみ引き留める。

「所長は違うって言ってるぞ」

「違わないわよ。わかるわ、そのくらい」

ターニャは顔をそむけたまま冷たく答えた。腕をつかむ手を振り切ろうとしたが、ジークは放さなかった。

「だとしても、このままやめていいのか？」

「そうするしかない」

彼女はきっぱりと言った。それでもジークはあきらめなかった。

「今は実力が足りないとしても、頑張っけて力をつけて見返してやればいいじゃねえか。サイファさんの受け売りだけだよ……」

彼なりの懸命の説得だったが、ターニャは唐突に肩を震わせ笑い始めた。ジークは唾然とした。だが、次第にその笑いはすすり泣きへと変わっていった。何度も大きくしゃくり上げ、拭いきれない涙が頬から流れ落ちた。

「無理よ、私には」

彼女は消え入りそうに言葉を落とした。ジークは掴んでいた彼女の腕を放した。

「さよなら。いろいろありがとう」

ターニャは背中を向けたままそう言うと、振り返ることなく走り去っていった。

ジークは声を掛けられなかった。彼女の姿が見えなくなるまで、その場に立ち尽くしていた。

その後、ターニャが研究所に来ることはなかった。フロアスタッフには、彼女は都合により内定を辞退したとだけ伝えられ、その理由についての説明はなかった。ジョシュはジークのせいで

はないかと勘ぐってきたが、ジークは何も答えなかった。

そして、一週間がすぎた。もう研究所にターニャのいた痕跡は見つけれられない。元々いなかったようにさえ感じられる。しかし、ジークの頭には、あの三日間の出来事がこびりついて離れなかった。

「久しぶり、かな？」

仕事を終え外に出ると、門の脇からターニャが声を掛けてきた。少し気まずそうに笑顔浮かべている。

「ああ……」

ジークもぎこちなく返事をした。突然のことで面くらったというのもあるが、あんな別れ方をした彼女にどう接すればいいのかわからなかった。

「新しい就職先が決まったから、一応キミには報告しようと思って」

「早いな」

ジークが本気で驚いているのを見ると、ターニャはにっこり笑ってVサインを見せた。

「これでもアカデミー生だもん。民間の小さな研究所だけどね。私の力を必要だって言ってくれたわ」

「そうか」

ジークは安堵の息をついた。ようやく心のつかえが取れた。

「あと、所長とも仲直りしたから」

ターニャは腰に手をあて、軽く口をとがらせた。

「問いつめたら白状したわよ。本当はひとり採用の予定だったけど、ふたりに増やして私を採ったんだって」

そう言って、肩をすくめて見せた。ジークは何とも言えない表情で彼女を見つめた。どう反応すればよいのかわからなかった。

だが、ターニャは笑いながらおどけて言った。

「公私混同するなって、お説教しておいた」

ジークは彼女の明るさに救われた思いだった。つられて笑顔になった。

「母親とは？」

「さあ」

調子にのって尋ねた彼の質問を、ターニャはまるで興味がないかのように素っ気なく流した。

ジークははっとした。まずいことを訊いてしまったと思った。

「悪りい」

申しわけなさそうにひとこと謝ると、目を伏せた。

「別に……母親とも思ってないし、思い出したくないだけ」

ターニャは無表情で無感情に言った。ジークは彼女の横顔を目を細めて見つめた。

「それって、寂しくねえか」

「……そう思える日がきたら、会いに行くわ」

静かにそう言うと、ジークに向き直りにっこりと笑ってみせた。

「それじゃ、ね」

「ん、ああ……」

ターニャが手を振ると、ジークも軽く手を上げた。そして、彼女は少し歩くと、振り返って声を張り上げた。

「たまにはユールベルに顔を見せに行っておいてよ！」

「行かねえって言ってんだろ！！」

ジークも大きな声で返事をした。ターニャは無言で大きく手を振ると、今度は振り返ることなく走り去っていった。

66. 若者と権力者

「えー、ルナちゃん、いないの？」

アンジェリカは不満げに声をあげた。王妃アルティナはティーカップを片手にくすりと笑った。

「アカデミーが休みの間はずっと一緒に過ごすって、ラウルがね」

「ラウルが……」

アンジェリカは半信半疑でつぶやいた。アルティナを疑っているわけではないが、ラウルがそんなことを言うとは、にわかには信じられなかった。

「あんなヤツでも怖いんじゃないかしら」

アルティナはやわらかい表情でほおづえをついた。

「娘が自分より私たちに懐くのが、ね」

ラウルが仕事をしている昼間は、アルティナが彼の娘ルナを預かることになっていた。そのためルナは、ラウルよりアルティナたちと過ごした時間の方が長いという日も少なくなかった。

「久しぶりに会えると思ったのに残念」

アンジェリカは軽く口をとがらせ、肩を落とした。その隣では、アルティナの息子アルスが、床にあぐらをかき大きなクッションを抱きしめながらむくれていた。

「ルナをとられた気分だぜ。さびしくて仕方ねえやっ！」

そう叫びながら、やり場のない怒りをこぶしに込め、そのクッションにぶつけた。

アンジェリカはぱっと顔を輝かせながら両手を合わせた。

「じゃあ、今からみんなでラウルのところに押しかけない？」

「駄目よ。ラウルには医者としてのお仕事があるんだから」

アルティナの向かいで紅茶を淹れていたレイチェルは、優しい口調で娘をたしなめた。アンジェリカは無言で口をとがらせた。

「じゃあよ、ジークのところに行くってのは？」

アルスは無邪気に言った。アンジェリカは目を見開いた。

「あいつ、ちっとも会いに来ないし、こっちから押しかけてやろうぜ。確かナントカ研究所ってところじゃなかったか？」

「え、でも……」

アンジェリカが何か言いかけたが、アルティナの声がそれを遮った。

「レイチェル、今日の私の予定って、会議ひとつだけだったわよね」

「ええ、行政改革推進委員会の定例会議。午後からね」

アルティナは腕時計に目を落とした。

「時間はじゅうぶんにあるわね。よし！ 行くわよ！」

気合いの入った声をあげると、勢いよく立ち上がった。

「え?!」

「ホントか！」

アンジェリカはとまどい、アルスは大喜びした。

「研究所って、ちょっと興味があったのよね」

アルティナは声を弾ませた。顔はにこにこ足どりは軽やかで、見るからに浮かれている。

アンジェリカは遠慮がちに切り出した。

「でも、あそこは関係者以外は入れてもらえないって……」

「なーに言ってんのよ。私は王妃よ、王妃！立派な関係者じゃない」

言われてみれば確かにそのとおりだ。しかし、彼女にはもうひとつの懸念があった。

「ジークの邪魔になるんじゃない……」

「ちょっと見学するだけよ。心配性ね」

アルティナは笑顔で彼女を覗き込み、頭を軽くぽんと叩いた。アンジェリカは納得しないまま黙り込んだ。

「外に出るのも久々ね。わくわくするわ！」

よく通る声でそう言いながら、息子とともにさっそく部屋を出ようとしていた。

「止めないの？」

アンジェリカは母親に振り返って尋ねた。レイチェルはにっこりと笑った。

「私も見てみたいと思っていたのよ」

「……………」

アンジェリカは不安な気持ちを抱えたまま、レイチェルとともに、アルティナたちのあとについていった。

「ターニャ＝レンブラントに所長のことを教えたんだってな」

サイファは窓枠にもたれかかり腕を組んだ。背後からの光が、彼の鮮やかな金髪をよりいっそう際立たせている。

ラウルは机に向かったまま、ペンを持つ手を止めずに答えた。

「口止めされた覚えはない」

「口止めしたところで、上手く取り繕ってくれはしないだろう」

サイファはふっと小さく笑った。

「長く生きているわりに嘘が下手だからな、おまえは」

細く開いた窓から緩やかに風が舞い込み、白いカーテンの端を静かにはためかせた。ラウルは無表情で自分の仕事を続けていた。その隣のベビーベッドでは、ルナがすやすやと寝息を立てている。

「教えてやろうか、嘘のつき方」

ラウルは手を止め、その声の主を鋭く睨みつけた。サイファは挑みかけるように不敵に笑った。その表情を見て、ラウルは眉をひそめた。

「必要ない」

吐き捨てるようにそう言うと、再び書類に目を向けた。

「必要ない、か……」

サイファはラウルの言葉を反芻し、目を伏せたため息をついた。

「清廉潔白な人間は言うことが違うな」

ラウルは再び睨みつけた。

「怒らせたいのか」

「怒る？」

サイファは顔を上げた。組んだ腕をほどもき、ラウルに歩み寄る。

「おまえが私を？」

彼の肩に腕をのせ、もたれかかるように顔を近づけた。

「逆じゃないのか」

ラウルは何も答えなかった。書類に目を落としたまま、無表情を保っていた。だが、彼の目は文字を追ってはいなかった。

サイファはふっと笑って体を起こした。

「冗談だよ」

そう言ってラウルの背中を叩き、後ろのパイプベッドに腰を下ろした。

「しかし、潔癖性だと大変だな。コネなどめずらしいことでもないのに。私は試験すら受けずに魔導省へ入ったぞ」

「何の自慢にもならんな」

ラウルは背を向けたまま、無愛想に返した。サイファは手を組み、ニッと口端を上げた。

「プライドなど些末なものだということさ。きれいなままでは、泥の河は渡れないんでね」

「おまえはやりすぎる」

「限度はわかっているつもりだよ」

今度はゆったりと穏やかに笑った。

「さて、と……そろそろ時間だな」

腕時計を見ながら立ち上がり、ラウルに振り向いた。

「おまえも来るか？」

「工作中だ」

彼は顔を上げることもなく、冷やかに言い放った。

「そうか。では、代わりに謝っておいてやるよ」

「余計なことをするな」

怒りを含んだ低い声とともに、鋭い視線をサイファに向けた。しかし、サイファはそれを待っていたかのようにだった。にっこり笑って小さく右手を上げると、医務室をあとにした。

「ちょっと！ ということよ！ 私は王妃よ！！」

アルティナは所長に詰め寄った。

「いくら王妃様といえど、関係者以外の方を、ここより先お通しするわけには参りません」

所長は涼しい顔で受け流した。

アルティナたちがいるのは、研究所に入ってすぐのところにある簡易応接室である。研究所内

で関係者以外の立ち入りが許可されている唯一の場所だ。簡易というわりには広いが、奥の応接室と比べると、机も椅子も簡素なものとなっている。

アンジェリカとアルスは、椅子に座ってふたりの応酬を見守っていた。

「王立の研究所で、王妃の私が関係者じゃないっていの？！」

アルティナはさらに声を荒げた。しかし、所長はまるで動じることはなかった。

「申しわけありませんが……」

「納得のいく説明をしなさいよ！」

アルティナは彼の胸ぐらを掴み、大きく揺さぶった。

「アルティナさん、落ち着いて！」

アンジェリカは立ち上がり、あわてて止めようとした

「いいぞ、行けー！」

アルスはその隣で煽るようにはやし立てた。レイチェルはその状況を見ながら、ただにここにこ
と微笑んでいた。

「どうしたんだい、こんなところで」

戸口からひょっこり顔を覗かせたのはサイファだった。アルティナの大きな声は、廊下まで筒
抜けだったのだろう。

「え？ お父さん？！」

アンジェリカは少しうろたえた。

「サイファ！ いいところに来たわ」

アルティナは所長を締め上げていた手をようやく放した。

「見学したいってだけなのに、この頑固ジジイが入れてくれないのよ。何とかしなさいよ」

サイファは所長に振り向いた。

「どうだろう。アルティナさんとレイチェルだけ、入れてやってももらえないだろうか」

「サイファ殿がそうおっしゃるのでしたら」

所長はあっさり了承した。ほんの数分前の、取りつく島さえなかった、あのかたくなな態度が
嘘のようである。アルティナはこめかみの血管が切れる音を聞いた気がした。再び彼の胸ぐらを
掴み、猛烈な剣幕で捲し立てた。

「アンタ、私とサイファとどっちが上だと思ってんの？！ だいたい所長ともあろう者が、こんな
若造にヘーコラしてんじゃないわよ！」

「入りたいのか入りたくないのか、どちらなんですか」

所長は冷静に尋ねた。

「入るわよ！ って、私とレイチェルだけだった？」

「私はダメなの？」

アンジェリカはかすかな曇り顔でサイファを見上げた。

「俺は王子だぜ」

アルスは自らを指さし、アピールした。

「すまないね。ここで待っていてくれ」

サイファはアンジェリカの頭を抱き寄せると、彼女の頬に自分の頬を重ね、なだめるように優しく後頭部を叩いた。すっかり無視されたアルスは、口をとがらせサイファを睨んだ。

レイチェルはにっこりとアンジェリカに笑いかけた。

「ジークさんと呼んであげるわね」

アンジェリカはとまどい、困ったような表情を浮かべた。

「でも、工作中……」

「ホントか?!」

アルスは、彼女とは対照的に、嬉しそうに目を輝かせた。アンジェリカは苦笑いした。

「へえ、機械ばかりなのね。白衣を着てフラスコ振ってるようなのを想像してたんだけど」

アルティナは一階フロアに入るなり、そう感想を述べた。やや拍子抜けしたような口調である。サイファはにこにこしていたが、隣の所長はため息をついていた。

「皆、少しのあいだ手を止めてこちらに注目してくれ」

フロアの中央まで進むと、所長は二度手を打ち鳴らし、声を張り上げた。

「突然だが、アルティナ王妃が視察にいらっしゃった」

フロア内はにわかに色めき立った。胸を張って立つ美しい王妃に、皆の視線が一斉に注がれた。

「お仕事の邪魔をするつもりはないから、構わず続けてちょうだい」

アルティナは威厳を感じさせる声を遠くまで響かせた。

「くれぐれも失礼のないように」

所長はスタッフたちに念押しした。そんな彼に、アルティナは白い目を向けた。

「それでは、我々は会議がありますので失礼します」

所長は淡々と言った。そして、通りがかった女性スタッフを呼び止め、アルティナの前に差し出した。

「あとはこのアンナに任せますので、何かありましたら何なりとお申しつけください」

「……ええっ?!」

アンナは突然のことに目を丸くし、裏返った声をあげた。所長に助けを求めようと振り返ったが、すでに彼とサイファは会議室に向かって歩き出していた。ひとり取り残されたアンナは、あたふたしながら勢いよくぺこりと頭を下げた。短いポニーテールがぴょこりと跳ね返った。

「そんなに緊張しなくていいわよ」

アルティナはカラカラと笑った。そして、思い出したように尋ねた。

「そうだ、ジークいる？」

「ジーク……? えと、ジーク=セドラックですか？」

アンナは怪訝に尋ね返した。

「そ。アルバイトで来てるって聞いたんだけど」

「はい、こちらです」

疑問を感じながらも、それを口には出さず、王妃とその付き人をジークの席まで案内した。

「ジーク！久しぶり！」

アルティナはまるで旧知の友と再会したかのように大袈裟に呼びかけた。まわりは驚いて振り向いた。当のジークも驚きうろたえていた。困惑した表情で立ち上がり、彼女に一礼した。

「全然顔を見せないから会いに来ちゃったわよ」

アルティナは無邪気にそう言って笑った。

「すみません」

ジークは好奇の視線にさらされ、居たたまれない気持ちになっていた。そこへレイチェルが近づいてきて、そっと耳打ちした。

「簡易応接室でアンジェリカが待っているわ。行ってあげて」

レイチェルはにっこり微笑んだ。アルティナも笑って頷いた。

ジークは顔を輝かせて再び一礼すると、はやる気持ちのまま飛び出していこうとした。

「工作中だ。どこへ行く」

ジョシュが冷たく呼び止めた。ジークはうざったそうに振り向いた。だが、返事をしたのはアルティナだった。両手を腰にあて、ジョシュの横顔を睨みつける。

「いいじゃないの、ちょっとくらい。そんな固いこと言ってんじゃないわよ。ジーク、いいから行きなさい」

彼女の言葉には、有無を言わさぬ力強さがあった。ジークはこくと頷いて、その場を離れた。

ジョシュは椅子から立ち上がり、アルティナに向き直った。

「邪魔するつもりはないと言っていましたが、はっきりいって邪魔です。見学するならもっと静かにしてください！」

「バカっ！！」

アンナは彼の側頭部をこぶしで思いきり殴りつけた。ジョシュは二、三步よろけた。

「申しわけありません！コイツ本当にバカで！いつもこんな調子なんです。本当に申しわけありません！」

アンナは青ざめながら何度も頭を下げた。

アルティナは口端を上げた。

「私、生意気なガキんちよって嫌いじゃないのよね」

ジョシュに顔を突きつけ、挑むように笑いかける。彼の額に汗がにじんだ。

「ちょっとつきあいなさい」

アルティナはジョシュの腕を掴んだ。彼はあわてて逃げようとしたが、彼女の力は思いのほか強かった。

「今は工作中なんです！」

「ごちゃごちゃ言ってんじゃないわよ！」

アルティナはそう一喝すると、彼を引きずるように連れ出した。レイチェルは、呆然とするフロアスタッフたちに笑顔でお辞儀をすると、ふたりのあとについていった。

「生きて帰って来られるかしら、アイツ……」

アンナは不安に顔を曇らせながら、三人の後ろ姿を見送った。

「へえ、けっこういい食堂じゃない」

研究所の規模のわりには広い食堂で、テーブルも椅子も安っぽい感じはしない。庭に面した大きなガラス窓からは、さわやかな陽光が射し込んでいた。朝の早い時間帯のためか、他には誰も来ていなかった。かすかに聞こえる鳥のさえずりが、静けさをよりいっそう強調していた。

アルティナはジョシュに向かって両手をひらひらさせた。

「勢いあまって手ぶらで来ちゃったのよね。コーヒーおごってくれる？」

「王族が平民にたかるのか」

ジョシュはぼそりとつぶやいた。

「まあまあ、そうとんがらないですよ」

アルティナは彼の肩をぽんと叩き、人なつこく笑いかけた。彼は疲れたように息をついた。

「そっちの人は何にしますか」

「あら、私にもおごってくださるの？」

レイチェルはにっこり笑って尋ね返した。

「この状況では仕方ないでしょう」

ジョシュはため息まじりに言った。

「では、パッションフルーツジュースを」

「あの！メニューから選んでもらえますか！」

「ごめんなさい。それでは紅茶を」

彼女は謝りながらも、終始にこにこしていた。もしかしたらからかわれているのかもしれないとジョシュは思った。

カウンターで飲み物を受け取ると、三人は窓際の席に座った。

「それで、私をどうするつもりですか」

ジョシュはまっすぐアルティナを見据えた。彼女はコーヒーを片手にほおづえをついた。

「別に。ただ話をしてみたかっただけよ。時代が時代なら牢獄にぶち込まれていたかもしれないけど」

そう言ってニッと笑った。ジョシュはぴくりと眉を動かした。

「権力者のそういうところが嫌いなんです。いつだって偉そうに権力を振りかざして、気に入らないものは徹底的に排除する」

「そうね。確かに権力で横暴なことをする人もいるわ。でも、権力は良いことにだって使えるのよ」

アルティナは淡々と言った。ジョシュは仏頂面で彼女を見た。

「自分はそうだと言いたいんですか」

「さあ。それを判断するのは私じゃないから」

彼女は素っ気ない答えを返すと、手にしていたコーヒーを口に流し込んだ。

「あんたも早く出世してみたら？ 少しはわかるかもよ」

難しい顔をしているジョシュに、アルティナは軽く言ってみた。彼はうつむいたままで答えた。

「興味ありません。私はただ、いい仕事がしたいだけです」

「バカね」

アルティナは呆れたように言うと、コーヒーカップを机の上に置いた。

「下っ端じゃ、いつまでたっても重要な仕事は任されないわよ。自分の裁量で出来ることが少ないんじゃない、いい仕事なんてできやしない。そうじゃない？」

ジョシュは机の上のコーヒーカップに両手を添え、眉をひそめて黒い液体を見つめた。

「あなたたちに何がわかるっていうんですか。いい暮らしをして、着飾って、毎日楽しく生きているだけのあなたたちに……」

アルティナは目をぱちくりさせた。そして、ため息をつきながら腕を組むと、椅子にもたれかかった。

「あんたねえ。それは偏見ってものよ」

ジョシュは下を向いたまま微動だにしない。アルティナは話を続けた。

「私だって仕事はしているし、思うようにならないこともたくさんある。レイチェルだって大変な目に遭ってきたんだから、ねえ」

隣でおとなしく聞いていたレイチェルに振り向き、同意を求めた。彼女は穏やかに微笑んだ。

「でも、そう疎まれるのも仕方ないと思っているわ。言われるとおりですもの。私は、ラグランジェ家に生まれたというだけで、いい暮らしをさせてもらっている。気に入らなくても当然ね」

ジョシュははっとして顔を上げた。彼女の微笑みはまっすぐ自分に向けられていた。次第にかたくなな心が融けていくのを感じた。体から力が抜けていく。

「熱っ！」

彼は突然、椅子から飛び上がった。ぼうっとしてカップを倒してしまい、まだ熱いコーヒーが脚にこぼれ落ちたのだ。

「大変！」

レイチェルもあわてて立ち上がった。

「アルティナさん、ふきんを濡らして持ってきて」

「わかった」

アルティナは素直に返事をして、走っていった。

レイチェルはレースをあしらった白いハンカチを取り出し、しゃがみ込んで彼の膝のあたりを拭き始めた。

「いい、自分でやります！」

ジョシュはうろたえ、思わずきつい調子で言ってしまった。しかし、彼女はまるで気に留めていなかった。

「やけど、しませんでした？」

顔を上げ、心配そうに尋ねる。

「……はい」

「良かった」

安堵の息をつき、可憐な笑顔を見せた。

ジョシュは呆然と彼女を見下ろした。体中が大きく脈を打つかのよう感じた。息がつまりそうだ。

「レイチェル、持ってきたわよー……ってアンタそれ！」

小走りで戻ってきたアルティナは、驚愕してジョシュの顔を指さした。その片方の鼻からは、赤い一筋が伝っていた。彼自身も驚き、あわてて右手で押さえた。だが、押さえきれなかった一部は、あごを伝って制服の胸元に落ちた。

「レイチェルによからぬ感情を抱いたんでしょ！」

「ちっ……違う、誤解だ！暑かったからで……」

「冷房のきいた部屋でのぼせてんのはアンタだけよ！レイチェル、こんな危ない男から早く離れなさい」

アルティナはレイチェルを後ろから抱き寄せ、ジョシュから引き離した。

「本当に誤解なんです」

ジョシュは泣きそうになりながら必死に訴えた。アルティナは濡れふきんを彼の顔面に投げつけた。

「とりあえず、その情けない顔をなんとかしなさい！」

レイチェルはくすりと笑った。ジョシュはますます恥ずかしくなった。彼女に笑われたことが何よりもショックだった。

ジークの心臓は早鐘のように鳴っていた。アンジェリカとは一ヶ月間ずっと会っていない。まさか彼女が会いに来てくれるとは思わなかった。

「アンジェリカ！」

ジークは簡易応接室に駆け込んだ。

「よお、ジーク。久しぶりだなっ！」

声を掛けてきたのはアルスだった。どういうわけか、アンジェリカの膝の上に座っている。

「テメーどこ座ってやがる！」

ジークは殴り掛からんばかりの勢いで怒鳴りつけた。あまりの怒りように、アンジェリカが驚いた。

「いいのよ、ジーク。そんなに重くないから」

「そういう問題じゃねえ！」

「じゃあどういう問題なんだ？」

アルスは意味ありげに笑った。

「いいから降りろ！」

ジークは小さな少年を激しく睨みつけた。アルスは彼の本気の怒りを感じて、おとなしく従

った。

「いきなり来てごめんね。迷惑だからって止めたんだけど」

アンジェリカは肩をすくめた。

「あ……」

ジークは落胆したように、沈んだ声を漏らした。アンジェリカが自分に会いたくて来たわけではなかったのだ。

「でも、来てよかった」

アンジェリカは屈託なく笑いかけた。ジークの暗い感情は一気に吹き飛んだ。頭をかきながら、顔を赤らめはにかんだ。

「休み中、どうしてるんだ？」

「勉強したり、本を読んだり、のんびりしているわ。ジークは？ お仕事大変？」

「ああ、大変なこともあるけど、仕事は楽しいぜ」

アンジェリカはじっと彼を見つめた。

「仕事は……って？ 何か他のことで問題があるの？」

ジークは顔をしかめて腕を組んだ。

「一緒に仕事しているヤツがな……」

「喧嘩しているのね」

アンジェリカは呆れたようにため息をついた。ジークはいらつきながら、面倒くさそうに反論した。

「ケンカじゃねえよ。あいつが俺のことを一方的に嫌ってんだよ」

彼との間に起きたさまざまなことが、次々と頭をよぎっていく。あからさまに不愉快そうに眉をひそめ、髪をくしゃっとかき上げた。

「この話はもうやめようぜ。せっかく久しぶりに会ったってのに」

「じゃあ、何の話をするの？」

アンジェリカは黒い大きな瞳を、まっすぐ彼に向けた。

「いきなりそう言われても……」

ジークは頭に手をあて、何気なく視線を落とした。

「それ、してくれてんだな」

「これ？」

アンジェリカは首から下げていたシルバーリングを手にとった。今年の誕生日にジークからもらったもので、サイズが大きかったため、鎖で首から下げネックレス代わりにしているのだ。

「毎日ちゃんと身につけてるわよ。魔除けだもの。アカデミーのときは服の中に入れてるんだけど」

そう言いながら、リングを中指にはめてみた。

「まだぶかぶかなのよね。はやく指が太くならないかしら」

「……そんなこと願うなよ」

真顔のアンジェリカを見て、ジークは冷や汗を浮かべた。彼女はきょとんとして彼を見上げた

。「
「どうして？ 指輪なんだから、ちゃんと指にはめたいわ」

だからといって、指を指輪にあわせることはない。

「次は指にあったやつを買うからよ」

「次って何？」

「えっ」

ジークは急にどぎまぎした。何も考えずに言ったことだが、そう聞き返されて思わず想像してしまった。耳まで真っ赤になっていく。

「ジーク？」

アンジェリカは怪訝に覗き込んだ。ジークはまっすぐ彼女に目を向けた。

「まだ、もう少し……だいぶ、先になる、かもしれねえけど……。その、な、いつか……」

「あのさ、オレがいること忘れてないか」

アルスは床にあぐらをかき、ふてくされていた。ジークは、思いきり嫌な顔をアルスに向けた

。「
「最初にここに来たって言ったの、オレなんだぜ。感謝しろよ」

彼はふてくされたまま、偉そうに言った。ジークは投げやりに尋ねた。

「どうしてほしいんだよ」

「オレを構えよ」

それを聞いて、ジークはニヤリと不敵に笑った。

「そう言ったこと、後悔させてやるぜ」

「おまたせー」

陽気に声を弾ませながら、アルティナはレイチェルとともに簡易応接室へ戻ってきた。

「あら、どうしたの？」

ジークは部屋の真ん中で、ぜいぜいと息をきらせ、へたり込んでいた。

「アルスの相手をして疲れちゃったみたい」

アンジェリカは肩をすくめて笑った。アルティナもあははと笑った。

「それは大変だったわね」

「後悔させるとか言って、自分が後悔してちゃ世話ないよな」

アルスは生意気に腕を組んで、ジークを見下ろした。アルティナは息子の後頭部をはたいた。

「ちゃんとお礼を言いなさいよ」

「楽しかったぜ。ありがとうな」

アルスは素直に礼を述べた。アルティナは息子の頭に手をおき、ジークににっこり笑いかけた

。「
「ジーク、今度また遊びに来なさいね。そのときにお礼をするから」

「あ、いや、たいしたことしてないんで……」

「来いっていったら来いよな」

アルスは命令口調でそう言うと、ニッと白い歯を見せた。ジークは複雑な表情で笑った。

「それじゃあね」

アルティナは右手を上げた。

「ジーク、またね」

アンジェリカは明るく笑って手を振った。

「お、おう」

ジークは頬を染めながら、小さく右手を上げた。

ジークは自分の席に戻った。ジョシュはいつものように無言でキーボードを打っていた。そんな彼を、ジークは不審な目で見つめた。

「……何だ？」

ジークの視線を感じ、ジョシュはちらりと顔を向けた。

「制服が新しくなってる」

「細かいことを気にするな」

ジョシュは無表情で前に向き直り、再び手を動かし始めた。

あの食堂での出来事のあと、アルティナが無理をいって新しい制服をもらってくれた。こういう規則に反する行動は嫌いなはずだが、今回ばかりはありがたく思った。コーヒーはまだしも、鼻血の染みはあまりにも恥ずかしい。しかし、同時に、信念を通せない自分を情けなく思っていた。

「変わった人たちだな」

ジークは驚いてジョシュを見た。彼から雑談を持ちかけてくることなど、これまでなかったことだ。アルティナたちと何かよほどのことがあったのだろうか——そんなことを考えながら返事をした。

「でも、いい人たちだぜ」

「そうだな……俺は偏見を持っていたのかもしれない……」

気味が悪いくらい素直な彼に、ジークは呆気にとられた。

「ジーク」

サイファが奥の会議室から戻ってきた。

「レイチェルがどこにいるか知らないか？」

「さっき帰りましたけど」

「そうか……昼食くらい一緒にとったんだが」

彼は残念そうに顔を曇らせた。

「サイファ殿」

フロアの隅から所長が呼びかけた。所長の他にもふたりの男が、ともに彼を待っているようだった。

「それではな」

サイファは右手を上げ、早足で戻っていった。ジークは軽く頭を下げた。

「やはりあいつは好きになれそうもない」

ジョシュはぼそりつつぶやいた。

「サイファさんもいい人だぜ」

ジークのその言葉に、彼は耳を貸さなかった。嫌悪感をあらわにして顔をしかめると、話を続けた。

「あんな若い子に色目をつかって、みっともないと思わないか。来たときも彼女を見つめていたし、今だって人目もはばからず食事に誘っている。愛妻家なんて噂らしいが、とんだデマだな」

ジークはポカンとした。

「あのな、レイチェルさんが奥さんだ」

「……は？」

「だから、サイファさんとレイチェルさんは夫婦なんだよ」

「……な?!」

ようやく理解したジョシュは、凄まじい形相で立ち上がった。何かを言いたそうに口をカクカクと動かす。

「やっぱりアイツは嫌いだ！」

そう叫ぶと、あわててハンカチを取り出し、鼻と口を押さえた。そして、焦ったように背を向け歩き出した。

「どこへ行くんだ？」

「どこでもいいだろう！」

かすかに涙声まじりで声を荒げると、足早にフロアを出ていった。

「いちばん変わってるのはあいつだよな」

ジークは彼の出ていった方に目をやりながら、ひとりごとをつぶやいた。

67. パーティ

「決まった！進級できるんだ！」

レオナルドはアカデミーの昇降口で待っていたユールベルに駆け寄り、彼女の手を取ると興奮して叫んだ。

「良かった」

ユールベルは安堵の息をつき、微かに表情を緩めた。レオナルドはじわりと涙ぐんだ。あわててうつむき、手の甲で拭った。

「全部おまえのおかげだ。あきらめずにずっと付き合ってくれて……。本当に何て礼を言ったらいいか……」

そこまで言うと、はっとして顔を上げた。

「そうだ。今から進級祝いのパーティをやらないか？」

「ごめんなさい。今日は先約が……」

「ユールベルっ！」

弾けた声がふたりの会話を遮った。

「ターニャ」

振り返ろうとしたユールベルに、彼女は後ろから飛びかかるように抱きついた。いつもとは違い、黒のブレザーで正装している。

「じゃーん、見て見て、卒業証書！」

ユールベルにのしかかったままで、手にしていた筒状の紙を開いて見せた。そこには彼女の名前や学科名などとともに、王の直筆サインが入っていた。王の名の入った卒業証書はこのアカデミーでしか手に入らない。優れた才能を備え、努力を惜しまなかった者だけに与えられる栄誉だ。

だが、ユールベルはほとんど興味を示さなかった。

「式、終わったのね」

見せられたものに対しては何も述べず、素っ気なく話題を変える。

だが、ターニャはまるで気にしていなかった。いつものことである。悪気がないのもわかっている。それを気にしているようでは、ユールベルの友達にはなれなかつただろう。

「うん、さっそく行こっか」

「先約って、コイツか？」

レオナルドはあからさまに嫌そうな顔でターニャを指さした。

「なに？レオナルドも何か？」

「進級祝いのパーティをしようって」

無言でそっぽを向いた彼の代わりに、ユールベルが答えた。

ターニャはいい事を思いついたとばかりに、ぱっと顔を輝かせ、両手をパチンと合わせた。

「じゃ、一緒にやっちゃおうよ。私の卒業祝いパーティと」

「誰がおまえなんかと。別の日にあらためてふたりだけでやるさ」

レオナルドは苦虫を噛み潰した顔で吐き捨てた。

「あ、ジーク！」

並んで歩くジークとアンジェリカを見つけ、ターニャは大きく手を振った。

「見て！私、今日で卒業なの」

彼女は嬉しそうに、再び卒業証書を広げた。

「そうか、良かったな」

ジークはまるで心のない返事をした。ターニャは腰に手をあて、口をとがらせた。

「そっけないなあ。そうだ、ふたりとも来ない？私の卒業パーティ。ユールベルの家でやるんだけど」

「行かねえよ」

ジークは即答して、すぐに立ち去ろうとした。

しかし、アンジェリカはその場に留まったまま動こうとしない。

「どうした？アンジェリカ」

ジークは足を止めて振り返った。

彼女は何かを言いたげな表情をしていた。ちらりとユールベルに目を向けたあと、困ったようにジークを見る。

「行きたいんでしょ？」

ターニャは優しく微笑み、横から助け舟を出した。

「ユールベルが、その、嫌じゃなければ……」

アンジェリカはそう言って口ごもった。うつむいて、ユールベルの様子を窺う。

彼女は無表情で口を開いた。

「別に構わないわ。もう、あなたのことを疎ましいとは思っていないもの。今はただ、少し気まぐずだけ」

そう言うと、顔をそらし、肩にかかった髪をはね上げた。緩やかなウェーブを描いた金の髪と、頭の後ろで結んだ白く柔らかな包帯が、緩やかな風になびいた。

「来たければ来て。……いいきっかけになるかもしれないわ」

小さいがはっきりとした声だった。

アンジェリカの顔がぱっと晴れた。

「ありがとう」

弾んだ声でそう言うと、満面の笑みを見せた。

ジークはあわてた。

「おまえ本気で行くつもりなのか？！」

「ええ。だって、ユールベルもああ言ってくれてるし」

アンジェリカはにこっと笑った。

ジークは弱り顔でため息をついた。彼女がこれほど嬉しそうにしているのに、止めることはできない。止めるだけの決定的な理由もない。ただ、少し心配なだけである。せめて、できることといえば、自分が付き添うことくらいだろう。

「おまえが行くんなら、俺も行くぜ」

少し疲れたような声で言った。

それを聞いて、今度はレオナルドがあわてふためいた。

「コイツが行くなら、俺も行く！」

「じゃ、みんな行くってことね」

ターニャは嬉しそうに笑って、ユールベルの手を引いた。

「おかえり！」

ユールベルが扉を開けると、エプロン姿のアンソニーが出迎えた。

「人数、だいぶ増えちゃったけど、大丈夫かな？」

ターニャはうしろのジークたちを指さしながら、少し申しわけなさそうに尋ねた。

「気にしないで。足りなければ買い足してきますから」

「上がって」

ユールベルは振り返ってジークたちを招き入れた。

「おう」

「お邪魔します」

ふたりに続いてレオナルドも入ろうとした。だが、アンソニーがそれを許さなかった。レオナルドを蹴り飛ばし、倒れた際に、扉を閉め鍵をかけた。

「おい！」

レオナルドは外からドンドンと扉を叩いた。

「おまえは出入り禁止だ！ おとなしく帰らないと、今度は火傷くらいじゃすまないぞ！」

アンソニーは鉄の扉に向かってフライ返しを振り上げた。

「アンソニー、今日はレオナルドの進級パーティを兼ねているの。入れてあげて」

ユールベルは無表情で頼んだ。アンソニーはもどかしげに眉根を寄せて叫んだ。

「ねえさん！ いいかげんあんなヤツ見限ってよ！」

「アンソニー」

ターニャはユールベルの肩ごしに声を掛けた。

「許せとは言わないけど、今日だけは入れてあげてくれないかな？」

ね、と両手を合わせて頼み込む。

「……ターニャさんがそう言うなら」

アンソニーはしぶしぶ鍵を開けた。ガチャッという音がするのとほぼ同時に、レオナルドが扉を開けて入ってきた。アンソニーは目の前を通り過ぎる彼を睨みつけた。

「今日だけだぞ」

「今度はおまえのいないときに来るさ」

「来るな！」

歯噛みするアンソニーの頭に、ターニャはぽんと手を置いた。

ジュ——。

食欲をそそる音と匂いが立ちこめる。アンソニーは料理をしながら、手際よく片づけや盛りつけもこなしていた。

「私も手伝うよ」

ターニャが台所に入ってきて声を掛けた。

「ありがとう、ターニャさん。じゃあ、これ運んでください」

「オッケー」

彼女は軽い調子で返事をする、大皿ふたつを手を取った。

「おまえの弟がひとりで作ってるのか？」

ジークはソファでくつろぎながら、親指で台所を指さした。ユールベルは淡々と答えた。

「ええ、腕はいいから心配しないで。最近、料理に目覚めたそうよ。作るのが楽しくて仕方ないみたい」

「お待たせっ」

ターニャは持ってきた大皿ふたつを机の上に置いた。チキンやサンドイッチなどのパーティ料理が、たっぷりときれいに盛り付けられている。ジークとアンジェリカは目を見開いて覗き込んだ。

「すげえ……ってか、量もすげえな。これで三人分のつもりだったのかよ」

「だからキミたちを呼んだのよ」

ターニャはウインクした。ユールベルはため息まじりに補足した。

「あの子、張り切って作りすぎるのよ」

「まだまだあるわよ」

ターニャは笑いながら台所へ戻っていった。

次はアンソニーが皿を運んできた。机の上にそれを置くと、アンジェリカをじっと覗き込んだ。

「なに？」

アンジェリカは少し怯えたように身を引いた。革のソファが小さく音を立てた。

「本家のアンジェリカさんですよ？」

アンソニーはにこにこしながら尋ねた。

「ええ……」

「間近で見るのは初めてです」

澄んだ青い瞳で、探るように彼女を見つめる。

「呪われてなんか、いませんよね？」

その場の空気が一瞬にして張りつめた。あまりに思いがけない言葉に、誰も反応できなかった。当のアンソニーは、その場の雰囲気を感じることなく、まだ笑顔のままだった。

「黒いから呪われているなんて、何の根拠もない話ですよ。僕は好きですよ。黒い瞳も、黒い

髪も。ターニャさんもそうだし」

彼は無邪気にそう言うと、台所へ戻っていった。

「何の話？」

入れ違いにターニャが新しい皿を持ってやってきた。

「ラグランジェ家以外の人間は知らなくてもいいことだ」

レオナルドは腕組みをして突っぱねた。

「えー、何よそれえ」

ターニャは不満げな声を上げた。

「ごめんなさい、本当に話せないことなの」

ユールベルは固い声で言った。

何か事情がありそうだ、とターニャは感じた。ラグランジェ家以外の人間に話せないというのは、本当のことなのかもしれない。レオナルドの言葉では信じられなかったが、彼女が言うと素直に信じられた。

「そっか……うん、わかった」

気にはなったが、それ以上の追求はしなかった。持ってきた皿を机に置くと、再び台所へ戻っていった。

「ごめんなさい。あの子に悪気はないの」

ユールベルは居たたまれない思いでうつむいた。

「ええ、わかってるわ」

アンジェリカはぎこちなく笑顔を作った。親に「呪われた子だから近づいてはいけない」とでも教えられてきたのだろう。容易に想像がついた。アンソニーだけでなく、ラグランジェ家の者はほとんどがそうなのだ。

「……帰るか？」

ジークはアンジェリカの耳元で声をひそめて尋ねた。彼女は頭を小さく横に振った。

「大丈夫。ちょっとビックリしただけ。何でもないわ」

「無理すんなよ」

ジークは前に向き直り、彼女の背中に手を置いた。アンジェリカははっとした。そして、その手の温かさを感じながら、ゆっくりと目を閉じ小さく頷いた。

「さ、始めましょ！」

ターニャとアンソニーは缶とスナック類を抱えて戻ってきた。

「はい」

ターニャは缶を一本、アンジェリカに手渡した。

「……ビール？」

「おい、なに渡してんだよ。ジュースか何かねえのかよ」

ジークはターニャに文句を言いながら、そのビールを取り上げようとした。しかし、アンジェリカはそれをかわした。

「これでいいわ。いちど飲んでみたかったの」

そう言って、にっこり笑った。ジークはあわてた。

「ダメだダメだ！ なに言ってんだオマエ」

「いいじゃないの、ちょっとくらい」

「絶対ダメだ！」

アンジェリカはムツとして口をとがらせた。

「もうっ、ジークがそんなに頭が固いとは思わなかったわ」

ジークは脱力した。泣きたい気持ちになっていた。自分だってこんな堅物の大人みたいなことを言いたいわけではない。だが、彼女の両親——サイファとレイチェルを裏切るようなことはできない。

「頼むよ。俺に保護者みたいなこと言わせんなよ」

「言いたくなければ、言わなければいいじゃない」

アンジェリカはますます反抗的な態度をとった。

「俺もジュースにするから、な」

ほとんど泣き落としの説得に負け、彼女はしぶしぶビールを返した。ターニャはビールとジュースを交換しながら、とぼけた調子でつぶやいた。

「残念。酔ったアンジェリカってかわいいだろうなあ。見てみたかったなあ」

ジークは含み笑いをさせるターニャから顔をそむけた。平静を装っていたが、耳元はほんのり赤みを帯びていた。

ターニャは缶ビールのプルタブを開け、おもむろに立ち上がった。

「それじゃ、私の卒業と、ついでにレオナルドのギリギリ進級を祝って」

「ギリギリは余計だ！」

レオナルドはあわてて噛みついたが、ターニャは無視して続けた。

「乾杯！」

その掛け声とともに高々と缶ビールを掲げた。そして、ささやかなパーティが始まった。

「あら、もう飲み物なくなっちゃったわね」

ターニャは冷蔵庫を覗き込み奥まで探したが、一本も残っていなかった。まだパーティを始めてから、それほどの時間はたっていない。料理は多めに作ってあったが、飲み物は三人分しか用意してなかったのだ。

「僕、買ってきます」

アンソニーは立ち上がった。

「私も行くわ」

「ひとりで大丈夫です。ターニャさんは主賓なんだから、ゆっくりしててください」

そう言ってにっこり笑いかけると、立ち上がりかけたターニャを座らせ、ひとりで出ていった

。

「残念だったな」

レオナルドは鼻先で笑った。

「下心だらけのキミと一緒にしないでよね」

ターニャはつんと顔をそむけ、ソファに腰を下ろすと、サンドイッチを手に取りほおぼった。

「そうだ、アンジェリカ。お母さんの写真、持ってないかな？」

彼女は唐突に身を乗り出して尋ねた。

「今は持っていないけど、どうして？」

アンジェリカは怪訝に尋ね返した。ターニャはぎくりとした。

「あ、その、美人って噂だから見てみたかっただけ」

「レオナルドなら持ってんじゃないかねえのか」

ジークはサンドイッチと唐揚げを交互にほおぼりながら、しれっと言った。

「なっ……なぜ俺がっ！！」

レオナルドはバンと机を叩きつけ立ち上がった。顔は上気し、耳まで赤くなっている。

「そうか、アイツか……アイツがしゃべったんだな。人のことをペラペラと……！」

奥歯をギリギリと噛みしめ、爪が食い込むくらいに強くこぶしを握りしめた。

「え、うそ、そうだったの？」

「知らなかった……」

ターニャとユールベルはそれの意味することがわかったようだった。ジークの言葉からというよりも、彼の過剰ともいえる反応から察したのだ。ふたりともぼかんとしてレオナルドを見上げている。彼はますます焦った。

「ちっ、違う！家が近くで、子供のころ遊んでもらったって、それだけだ。それだけなんだよ！」

必死の言いわけも虚しく空回りする。レオナルドは思いきりジークを睨みつけた。ジークは口いっぱいほおぼりながら、すっとぼけた表情で顔をそむけた。

アンジェリカは話がわからず、ただきょとんとしていた。

ガタン——。

玄関で大きな物音がした。

「もう帰ってきたのかしら。ずいぶん早いけど……」

ターニャが様子を見に行こうと立ち上がったそのとき、アンソニーが血相を変えて部屋に駆け込んできた。

「助けて！」

ただならない様子で叫び声をあげると、ターニャの懐に飛び込んだ。

「どうしたの？」

彼女は目をぱちくりさせながら、すがりつくアンソニーに尋ねた。ユールベルも立ち上がり、心配そうに覗き込んだ。

「待ちなさい、アンソニー」

威圧的な声を響かせ、女性が勝手に入り込んできた。豊かな巻き毛の金髪、夜の海を思わせる深い青の瞳――。

ユールベルはその女性を目にしたとたん、顔面蒼白で棒立ちになり固まった。レオナルドは彼女の手を引き座らせると、かばうように頭を抱き寄せた。

ターニャもその来訪者に睨みをきかせながら、アンソニーを自分の後ろにかばった。

「何の御用ですか？ お母さま」

彼女は皮肉たっぷりに、そう尋ねかけた。顔を知っているわけではなかったが、アンソニーとユールベルの様子から、それがふたりの母親であることは察しがついた。

その女性――ユリアは、ひととおり全員を見渡すと冷たく口を開いた。

「ラグランジェ家を汚す厄介者たちが、そろいもそろって何をしているの」

「何しに来たんだ！ 出ていけよ！」

ジークは感情的に声をあげた。このままだと、ユールベルとアンソニーだけでなく、アンジェリカにもとばっちりが来そうだ。なんとかして彼女だけでも守らなければ――そう思った。

ユリアは冷ややかに視線を流した。

「アンソニーを……息子を迎えに来たのよ」

「どうしてここが……」

ユールベルはレオナルドにもたれかかりながら、うわごとのようにつぶやいた。

ユリアは勝ち誇ったように笑った。

「いくらサイファに聞いても教えてくれなくて、途方に暮れていたわ。でも、神の御加護かしらね。偶然、この下でアンソニーと出会ったのよ」

ユールベルは血の気の引いた顔をユリアに向けた。右目を細め、まぶたを震わせながら彼女を睨む。

「出て行って」

小さく震える声だったが、きっぱりと告げた。

「あなたと議論するつもりはないわ。ここの家主はどこにいるの」

ユリアは皆の顔を順に見て、答えを求めた。しかし、誰も答えなかった。しんと静まり返る。

「どこにいるの？！」

彼女はいらついで声を荒げた。

「ここに住んでいるのは、アンソニーと私のふたりだけよ」

ユールベルは怯えながらも強気に答えた。

ユリアは目を見開いた。そして、顔をしかめてうつむくと、小さく舌打ちした。

「騙したのね、サイファ……。信用のおける人物に預けているから心配ないなんて言って、よりによっていちばん信用ならないこの子と一緒にだなんて！」

こぶしを震わせ腹立たしげにそう言うと、キッと刺すようにユールベルを睨みつけた。

「そうとわかれば、何が何でも連れて帰るわ」

ユリアはターニャの背後に隠れているアンソニーに手を伸ばした。彼はターニャの服を握り

しめ、きつく目をつぶり身をすくませた。

「嫌がってるじゃないですか！」

ターニャはユリアの手を払いのけた。ユリアはそのターニャの手を払いのけた。

「無関係の人間が口を出さないで！」

ユリアは再び手を伸ばした。

「さあ、いらっしゃい」

アンソニーは懸命に首を横に振った。精一杯の拒絶を示す。ターニャは、彼をかばいながら一歩下がった。

「アンソニー、あなたはユールベルに騙されているのよ」

それでもアンソニーは、言葉ごと払うかのように首を振り続ける。

ユリアはわざとらしく大きなため息をついた。

「これだけは言うまいと思っていたけれど……」

静かに一歩踏み出し、アンソニーとの間を詰める。

アンソニーはびくりとした。

ユリアは真剣な表情で彼を見つめ、静かに口を開いた。

「あなたは赤ん坊の頃、ユールベルに殺されかけているのよ」

「……え？」

アンソニーはきょとんとして聞き返した。

「殺さ……れ……？」

「いいかげんなこと言わないで！」

ターニャの心臓は大きく打った。額にうっすらと汗がにじむ。まさか、そんなこと、あるはずがない——そう思いつつも、まるきり出まかせを言うだろうかという疑問が頭をもたげる。ユールベルに振り向くと、彼女は青い顔で目を見開き、呆然としていた。

ユリアは身をかがめ、アンソニーに顔を近づけた。

「まだよちよち歩きのあなたを、ユールベルは階段から突き落としたのよ。私たちはあなたを守るためにユールベルとあなたを引き離れたの。ユールベルを閉じ込めていたのはあなたのため。わかるでしょう？」

「違う……」

ユールベルは頭を抱えながら、首を横に振った。顔にかかる乱れ髪を払おうともせず、何度も何度も首を振った。

「突き落としたんじゃない。私は、助けようと手を伸ばしたの！」

「まだそんな見え透いた嘘を言ってるの?!」

ユリアは嫌悪感をあらわにして顔をしかめた。

「どうして嘘って……」

そう尋ねたターニャに、ユリアは冷たく言い放った。

「この子が嘘つきだからよ」

「そんな……！ 何の証拠もないのに、決めつけてるの?!」

ターニャは黒い瞳を潤ませた。

「ユールベルが手に掛けようとしたのは弟だけじゃないわ。そこのお嬢さまもそうよ」

ユリアはそう言って、目でアンジェリカを指し示した。

彼女はびくりと体を震わせた。ジークは彼女の肩に手をまわし、力をこめて抱き寄せた。大丈夫だ、その思いを手に込めた。

「そんな子のことを信じろっていうの」

ユリアは嫌悪感をあらわにしながら、ターニャに尋ねかけた。

「娘なら……」

「娘だなんて思っていないわ」

反論しかけたターニャを遮り、ユリアは強い調子で言った。

「こんなおぞましい子が、私の子であるはずがない。そもそも生まれたことが何かの間違いだったのよ」

誰も言葉を返せなかった。あまりの言いように、ただ呆然とするだけだった。

「帰りましょう、アンソニー。お父さんも待っているわ」

ユリアは急に優しい口調に変わった。まるで別人のようだった。微笑みを浮かべ、細い手を差し出す。

アンソニーはうつむき下唇を噛みしめていたが、やがて決意したように口を開いた。

「僕は……ねえさんを信じる」

ユールベルははっとして弟に目を向けた。

「ねえさんはいつだって僕のことを考えてくれている」

「罪滅ぼしのつもりかもしれないわよ」

ユリアは冷めた口調で言った。

アンソニーは少し考え込んだあと、顔を上げた。

「昔に何かあっても、何もなくても、僕にとって大切なのは今のねえさんだ」

怯えたふうにはターニャの袖を掴みながらも、はっきりとそう言い切った。

ユリアはギリッと奥歯を噛みしめた。

「だいぶ……ユールベルに影響されたようね。その反抗的な目……」

こぶしをぎゅっと握りしめ、眉をひそめる。

「どうして？ 私がどんな思いであなたを守ってきたと思ってるの？ 今まで育ててあげた恩を忘れてユールベルを選ぶっていうの？！ いいかげんにして！」

彼女はカッと目を見開き、感情を高ぶらせ右手を振り上げた。

アンソニーは頭を抱え、身をすくませた。

しかし、それが振り下ろされる前に、ターニャが掴んで止めた。

「離しなさい！」

ユリアはターニャの手を振りほどこうとしたが、ターニャはそれを許さなかった。ユリアの手を痕がつくほど強く握り、ひねり下ろした。ユリアはよろけながら後ずさった。

「あなたもラグランジェ家の人だから、それなりに魔導は使えるんでしょうけど、五人のアカ

デミー生が相手では分が悪いわよ。私たちとやりあう？ それともおとなしく帰る？」

ターニャは挑発的に尋ねた。

「……また、来るわ」

ユリアは右の手首を左手で抱え、足早に出ていった。

「もう大丈夫よ」

ターニャはアンソニーの肩に両手を置き、安心させるように、にっこり笑いながら覗き込んだ。

アンソニーは歯を食いしばってうつむいた。

「僕、自分が情けない」

「情けなくなんかないわよ」

ターニャは優しくそう言ったが、彼自身は納得しなかった。悲しげに首を横に振る。

「僕が逃げ帰ってこなければ、ここを知られることもなかったんだ」

「それは、仕方ないわよ。キミはずっとあの人に抑圧されてきたんだもの。恐怖感は簡単に拭えるものじゃない。それなのに、ホント頑張ったよ」

アンソニーは目に涙をためた。あふれそうになると、あわてて服の袖でごしごしと拭った。

「でも、このままじゃダメなんです。もっと強くなしないと……ねえさんを守れるくらいに」

「うん、キミなら大丈夫。きっと強くなれるよ」

ターニャは力強く励ました。

ユールベルは右目から涙をこぼした。それを隠すように下を向き、両手を顔で覆った。

「私の方が……アンソニーを守らなければいけないのに……」

「おまえはあいつよりひどい目にあってきたんだ！ 自分を責めるな！！」

レオナルドはユールベルに向き直り、華奢な肩をつかむと必死になぐさめようとした。だが、その言葉は、彼女の心にはあまり響かなかった。

「守らなきゃ、なんて思わなくても大丈夫よ。アンソニーはしっかりしてるから」

ターニャはにっこり笑いかけた。

「さ、気を取り直してパーティの続きをしよう！」

明るく言ってみたが、彼女以外は沈んだままだった。特にユールベルは、顔を上げることも出来ずにいた。

「ジーク、何か声を掛けてあげてよ」

ターニャはずっと沈黙していたジークに話を振った。

「何で俺が……」

「なんでもいいから、ほら」

ターニャはもどかしげに急かした。ジークは眉根にしわを寄せた。この状況では嫌と言うわけにもいかない。さんざん悩んで、頭をかきながら口を開いた。

「あー……この唐揚げ、うまいぜ。おまえも食って元気出せ」

そう言って、唐揚げの大皿をユールベルに差し出した。しかし、彼女は下を向いたまま微動だに

しない。

ターニャは白い目をジークに向けた。

「もうちょっと気のきいたセリフは言えないわけ？」

「俺に期待する方が間違ってるだよ」

ジークはふてぶてしくソファの背もたれに両腕を掛けた。すっかり開き直っている。

「それ、自分で言ったら情けないわよ」

アンジェリカは呆れ顔でため息をついた。

ユールベルは涙を浮かべたまま、小さく肩を震わせくすくすと笑った。

「おかしな人たち……」

皆、いっせいに彼女に振り向いた。彼女がこんなふうには声を立てて笑うなど滅多にない。彼女を知る者なら驚くのも当然である。

アンソニーはジークをじっと見つめた。

「ジークさん！」

「あ？」

ジークは気の抜けた返事をして顔を上げた。アンソニーは真剣な表情で頭を下げた。

「ねえさんをよろしくお願いします！」

ジークはソファから半分ずりおちた。

「な、なんだ?! いきなりっ！」

「おまえ何を！」

レオナルドも同時に声を上げた。飛びかからんばかりの勢いで立ち上がる。

「おまえなんかよりジークさんの方が多分ずっといいよ。きっとねえさんを幸せにしてくれる!!」

アンソニーは力説した。

「おい待てよ! なに勝手に決めてんだよ」

ジークは困惑した。本人を目の前にして、あからさまに拒絶するわけにもいかない。だからといって曖昧な返事をしては、誤解されかねない。ここにはアンジェリカもいる。いちばん誤解されたくない相手だ。

「だめよ、アンソニー」

ユールベルはたしなめるように言った。

「どうして？」

アンソニーは不満そうに尋ねた。

「だめ……なのよ」

ユールベルは少し悲しげに笑って見せた。アンソニーは納得したわけではなかったが、その表情を目にすると何も言えなくなった。

ターニャは目尻をそっと指で拭くと、ぱっと顔を上げた。

「さ、パーティの続き！」

明るく笑い、ソファに腰を下ろそうとした。

ピンポン——。

来客を告げるチャイムが、その場にいた全員の表情をこわばらせた。

「私が出るわ」

ターニャは固い声でそう言うと、小走りで玄関へ向かった。皆は固唾を飲んで聞き耳を立てた。かすかに話し声が聞こえる。

ターニャはすぐに戻ってきた。

「ただのセールスだった」

皆の緊張が一気に解けた。同時に息をつく。ジークはサンドイッチにかぶりついた。

「ここ、引っ越したほうがいいんじゃないか？」

「そうね。せっかく落ち着いてきたのに残念だけど」

ターニャもソファに座り、サンドイッチを手にとった。

「でも、逃げまわっているだけじゃ、根本的な解決にはならないわよ」

アンジェリカは冷静に指摘した。

「そいつを渡せば解決だろう」

レオナルドはあごでアンソニーを指し示した。

「なに言ってんの！！」

ターニャは机を叩きつけ立ち上がった。

「それ、自分の都合でしょ！ さいってい！！」

「最低ね」

「最低だな」

アンジェリカとジークも口々に責めた。しかし、レオナルドは腹立たしげに言い返した。

「何か解決方法があるのか？ あるなら言ってみろ」

「それを今から考えるの！」

ターニャはいらついて睨みつけた。レオナルドはふてくされて腕を組んだ。そして、思いつめた顔でうつむくアンソニーに追い打ちをかけた。

「ユールベルのことを思うなら、おまえはさっさと母親のところに帰るんだな」

「やめて、レオナルド」

ユールベルはレオナルドの袖をつかみ懇願した。

「耳を貸しちゃダメ」

ターニャはアンソニーの瞳を覗き込んで言い聞かせた。

「でも、確かに僕が戻れば……」

「駄目！」

ユールベルは立ち上がった。

「行かないで。私にはあなたが必要な」

「ねえさん……」

アンソニーは複雑な表情でつぶやいた。

「絶対に、行かないで」

ユールベルは強く力を込めて言った。

「僕……本当に行かなくてもいいの……？」

「あなたがあの人のところへ行ったら、私は取り戻しに行くわ」

アンソニーは顔を歪ませ、両手で拭いきれないほどの涙をあふれさせた。

「さ、食べよ！ 食べて元気だそ！」

ターニャは明るく声を張り上げた。

それからパーティの続きを行った。パーティといっても、主に食べて話をするだけのささやかなものである。暗くなった雰囲気は救ってくれたのは、ターニャの明るさだった。いつも明るい彼女だったが、いつも以上に元気を振りまき、みんなを話に巻き込んでいった。

パーティが終わり、ジークとアンジェリカは帰ることにした。ターニャに言われ、ジークがアンジェリカを家まで送っていくことになった。もっとも、言われなくても、ジークはそうするつもりだった。

すっかり暗くなった道を、ふたりは並んで歩いた。月明かりがふたりの後ろにおぼろげな影を作る。

「行かなきゃよかったな。今さら言っても遅いけど」

ジークは下を向いてポケットに手を突っ込んだ。ひんやりした空気が頬をかすめ、火照りを冷ましていく。

「そんなことないわ。ユールベルやアンソニーのことをいろいろ知ることが出来たもの。上手く言えないけど、なんだか嬉しかった」

アンジェリカはにこにこして、本当に嬉しそうに言った。

「それに……」

「ん？」

ためらいがちにそう続けた彼女に、ジークは振り向いた。

「私は幸せだって思ったのよ」

「え？」

「人と比べてこんなことを思うのはいけないのかもしれないけど……私はお母さんにもお父さんにも、ちゃんと愛されている」

アンジェリカは少し遠慮がちに微笑んだ。

「ああ」

ジークはやわらかく笑顔を返した。

「それともうひとつ」

アンジェリカは後ろで手を組み、空を仰いだ。

「呪われた子だってずっと言われ続けてきて、そのことを忘れたことはなかったし、忘れてはいけないと思っていた。いつも見返すことだけを考えていたの」

ジークは彼女の横顔を見つめた。

「でもね」

アンジェリカは明るい声でそう言うと、前に飛び出し、くるりと体ごと振り返った。

「アカデミーに入って、ジークたちと出会って、毎日楽しくて……いつのまにか忘れていた時間が多くなっていったわ。それって、幸せなことなんじゃないかなって」

「そうだな」

ジークは大きく息を吸い込んで、濃紺色の空を見上げた。

「でも、これからもっと幸せになれる」

「どうして？」

アンジェリカはきょとんとしてジークを見上げた。彼はさらに顔を上に向けた。

「どうしてもだっ」

「根拠のない自信って、いちばんあてにならないわ」

アンジェリカは口をとがらせた。

「根拠がないわけじゃねえよ」

「じゃあなに？ その根拠って」

ジークはうっすら顔を赤らめた。

「なんでもいいだろ」

「なによそれ。はっきりしないわね」

アンジェリカはますます口をとがらせた。

「でも……うん、そうなるといいな」

「なるさ」

ジークは力強く言った。

アンジェリカは屈託のない笑顔を彼に向けた。

68. 過去から続く未来

「魔導省の最上階に個室をもらうなんて、ずいぶん出世したものね」

ユリアはとげとげしくそう言うと、腕を組み、ぐるりと部屋を見渡した。広くはないが整然と片付けられ、清掃も隅まで行き届いているようだった。

「まだまだこれからですよ」

サイファは奥の机でほおづえをつき、ニッと笑った。背後の大きなガラス窓には青空が一面に広がり、そこからの陽光が彼の鮮やかな金髪を煌めかせている。

「あなたをお招きした理由はわかっていますね」

彼の問いかけに、ユリアは眉をひそめた。

「あの子が告げ口したのね」

その口調には腹立たしさがにじんでいた。

「私も暇ではありません。仕事を増やさないでもらえますか」

「私を騙しておいてよく言うわ」

ユリアは怒りをあらわにしなが、半ばあきれたように言った。サイファは目を閉じ、ふっと口元を緩めた。

「嘘は言っていません。私はユールベルのことを信用していますから。あなたよりもずっとね」

彼女は片眉をぴくりと動かした。

「いちいち頭にくるわね」

吐き捨てるようにそう言うと、笑顔をとたえたサイファをキッと睨みつけた。

「私は間違ったことはしていないわよ。自分の息子を取り戻したいと思って何が悪いの」

強い口調でそう主張するユリアに、サイファは余裕の表情を見せた。机にひじをつき、静かに口を開く。

「ユールベルにしたことは、どうなんですか」

ユリアは口を結び、深くうつむいた。

「.....仕方ないじゃない。どうやっても、愛せないのよ」

左手で右腕をきつく掴み、苦しげに眉間にしわを寄せる。

「気持ち悪い.....自分の嫌な部分を見せつけられているような.....そう、多分、きっと私と似ているから.....」

「似ていませんね」

サイファは間髪入れずに否定した。ユリアは驚いて顔を上げた。その真意がわからず、困惑した表情で見つめる。彼はにっこり微笑み、答えを口にした。

「ユールベルは優しい子です。あなたと違ってね」

ユリアは顔を上気させ、サイファを睨んだ。だが、彼は動じることなく言葉を続けた。

「愛せないものを愛せというつもりはありませんが、せめてそっとしておいてくださいませんか」

「アンソニーを返してくれれば、もうあの子に会うこともないわ」

ユリアはいらついて言った。だが、サイファは悠然と構えたまま、落ち着いた声で答える。

「それはできません」

まっすぐに彼女を見据え、さらに容赦のない言葉を吐く。

「あなたの元には、彼が幸せになれない」

「私は愛しているのよ！ あの子を……アンソニーを！」

ユリアは逆上して、ヒステリックに声を荒げた。

「愛と自己満足を履き違えていませんか。アンソニーは自分の意思を持つひとりの人間だ。あなたの所有物ではない」

サイファは語調を強めた。ユリアは苦しげに目を細めうつむいた。

「私は……父の道具にすぎなかったわ」

低く落とされたその声は、かすかに震えていた。

「あなたと結婚して本家に入る……父にとって、それだけが私の存在価値だった」

サイファは無表情で机にひじをついた。ユリアは下を向いたまま、堰を切ったように言葉を溢れさせた。

「本家に気に入られるように、あなたに気に入られるように、私は常にその行動を強いられてきた。でも、レイチェルが生まれ、あなたと婚約をすると、私は父から見向きもされなくなった。私の人生は、あなたが生まれたことで狂い、レイチェルが生まれたことで終わったのよ」

次第に感情を高ぶらせ、目に涙を浮かべて訴えかけた。

「同情はします」

サイファは感情なく言った。

「だからといって、自分の子供に手を上げていい理由にはなりませんよ」

ユリアは目尻を拭って、強気にサイファを睨みつけた。

「手の早いあなたには言われたくないわ」

「はははっ。上手いこと言いますね」

サイファは軽い調子で、ユリアの攻撃を受け流した。彼女は大きくため息をついた。そして、にこやかに微笑む彼を見つめ、固い表情のまま目を細めた。

「もし、レイチェルが生まれていなかったら、そして、父の望みどおり、私とあなたが結婚していたら……私は幸せになれたのかもしれない」

「それはありえません」

ユリアの表情が曇った。

「どういう意味？」

「私があなただを愛せたとはいえないからです」

サイファはにっこりと笑った。

「言ってくれるわね」

ユリアは顔を赤らめ、キッと彼を睨んだ。

「私は何が何でもアンソニーを連れ帰る。親は私よ。裁判を起こしてあなたの不当を証明してもいい」

「やめた方がいいですよ」

サイファは片ひじをつきながら、手持ち無沙汰に書類をばらばらとめくり始めた。

「ラグランジェ家の人間が騒ぎを起こすことを、極端に嫌う連中がいてね」

ユリアは怪訝に眉をひそめた。サイファは書類に目を落としたまま、無表情で話を続けた。

「あなたも知っているでしょう。ラグランジェ家では、不可解な事故や行方不明事件が何件も起こっている。いずれも、実に都合のいいタイミングでね」

ユリアは額に汗をにじませた。ごくりと唾を飲み込む。目には怯えの色が見えた。震えながら口を開く。

「.....それは、脅し？」

「忠告ですよ。もっとも、あなたにとってはどちらでも大差はないでしょうが」

サイファはさらりとそう言うと、顔を上げてにっこりと笑いかけた。

「ユールベルたちの家には、もう二度と行かないでくださいね」

ユリアは両手で顔を覆い、その場に泣き崩れた。

「アンソニーが会いたいと言えば会わせます。そのときが来るのを待っていてください」

サイファは淡々と言った。

「そんなこと.....言うわけじゃない.....」

ユリアは肩を震わせすすり泣いた。

「悪いな、急に」

ラウルは、屈み込むレイチェルの背中に声を掛けた。彼女はルナを抱き上げると、にこやかに微笑みながら振り返った。

「気にしないで。サイファに呼び出されたのでしょうか？」

「ルナを預けてこいと言われた。長くなるのかもしれない」

ルナは嬉しそうにキャッキヤと笑い声を上げながら、レイチェルの顔に小さな手を伸ばした。レイチェルは、ルナに顔を近づけ、優しく微笑みかけた。薄地のカーテン越しに広がる柔らかい光が、ふたりをあたたかに包み込んでいる。細く開いた窓から緩やかな風が流れ込み、カーテンをふわりと舞い上げた。同時に、レイチェルの長い金髪をさらさらと揺らした。

ラウルはその光景を無言で見つめていた。レイチェルがふいに顔を上げると、彼はとっさにどうでもいいことを口走った。

「アルティナはどうした」

「今は会議中」

そう答えると、彼女は大きな青い瞳を彼に向け、ちょこんと首をかしげた。

「少し、散歩しない？」

「サイファに呼び出されていると言っただろう」

ラウルはつれない返事をした。しかし、レイチェルは引かなかった。

「私に付き合わされたと言えればいいわ」

そう言って、にっこりと笑いかけた。

ラウルは目を閉じ、大きくため息をついた。

人影もなく、静まり返った校舎内。ジークは大きなあくびをしながら、図書室へと続く廊下を歩いていた。中庭の木々は、太陽の光を浴び、きらきらと照り返している。ふいに足を止めると、窓から青空を見上げた。そのまぶしさに目を細め、ため息をつく。肩に掛けた鞆がずっしりと重い。

こんな天気の良い休日に、なんで——。

その元凶である憎らしい担任の顔が頭をよぎり、思わず眉間にしわを寄せた。

ジークは再びため息をつき、前に向き直ろうとした。そのとき、視界のすみにある人物が映った。はっとして目を向ける。見間違いではない。中庭に立っているのは、まぎれもなくラウルだった。焦茶色の長い髪を風になびかせながら、腕組みをして空を見上げている。そして、その隣にはレイチェルが座っていた。ルナを膝にのせ、柔らかな表情を見せている。

生徒には鬼のようにレポートを出しておきながら、自分は呑気にひなたぼっこか？

ジークは舌打ちをした。肩を上げ鞆を担ぎ直すと、腹立たしげに大股で歩き始めた。しかし、彼の足はすぐに止まった。そして、もう一度、中庭に目を向けた。

「休日はアカデミーの方が静かでいいわね」

芝生の上をトコトコと歩きまわるルナを見て、レイチェルは穏やかに微笑んだ。

「私もアカデミーに通ってみたいと思ったことがあったのよ」

ラウルは少し驚いたように瞬きをすると、隣で座る彼女に目を向けた。

「サイファが許さなかつたろう」

「その前に両親に止められたわ」

レイチェルは肩をすくめてみせた。

ラウルは再び空を望んだ。風が木々の緑を奏で、それに呼応するかのように小鳥のさえずりが重なる。

「何か、話があるのだろう」

「お見通しなのね」

レイチェルは笑いながら言った。

「何だ？」

ラウルが急かすように尋ねると、彼女は小さなルナに目を向けた。そして、少し遠慮がちに口を開いた。

「ルナは、あなたの本当の……血のつながった子供、だったりしない？」

ゆっくりと尋ねかけると、顔を上げ、ラウルの様子をうかがった。彼は大きな手で額を掴むと、次第に深くうつむいていった。まぶたを閉じ、なんともいえない表情を浮かべている。

「ずっと、疑っていたのか」

「疑うだなんて。そうだったらいいなって思ったのよ」

レイチェルは無邪気に声を弾ませた。

「ラウルがこの子を引き取ると言ったとき、様子が普通じゃなかったってサイファが言っていたし、アルティナさんが隠し子じゃないかと尋ねたときも、明確に否定しなかったって」

ラウルは疲れたように息を吐き、その場に腰を下ろした。長い脚を折り曲げ、その膝の上に腕を投げ出しうなだれた。

「ラウル？」

レイチェルは首をかしげ、彼を覗き込んだ。

「それはない」

ラウルは彼女の澄んだ瞳をまっすぐ見つめた。

「誓って言う。断じて隠し子などではない」

レイチェルはくすりと笑った。

「信じるわ」

ラウルは安堵の息をつき、後ろの木にもたれかかった。頭上でかすかに若葉がざわめく。

「でも、何か理由があったの？」

レイチェルは再び彼を覗き込んだ。ラウルは目を細め、遠い空を仰いだ。

「……似ていたのだ。見つけたときの状況が」

空の彼方に視線を送る彼を見て、レイチェルは確信した。

「例の、忘れられないひと、ね」

ラウルは固い表情でうつむき、左手で額を押さえた。

「名前も……」

「え？もしかして、ルナってその人の名前？」

レイチェルは大きな目をぱちくりさせた。

「いや、名前ではない……が、一部でそう呼ばれていた……」

ラウルは背中を丸め、大きくうなだれた。

「私は愚かだ……そうだ、最初から何もかもおまえに相談するべきだった。おまえなら私を止めてくれただろう」

「そうね。名前は、止めたわね」

レイチェルは肩をすくめ、少し苦笑いした。

「でも……」

小さくそう言うと、前に向き直り、陽の当たる芝生に座っている小さな女の子の名前を呼んだ。

。

「ルナ！」

小さな彼女は嬉しそうに笑顔で振り返ると、立ち上がってトコトコと走り寄ってきた。レイチェルは彼女を膝に抱き上げた。

「ルナは、もうこの子の名前になってしまったのよ」

ラウルは無言で背中を丸めたままだった。

「これからできることは、その人を重ねるのではなく、この子はこの子として愛していくこと」

レイチェルは彼を覗き込み、にっこりと笑いかけた。

「できるのでしょうか？」

ラウルはまいったと言わんばかりに、目を閉じ大きくため息をついた。

レイチェルは目を細め、日なたの匂いのするルナの頭を優しく撫でた。

「後悔をしては、この子がかわいそう」

彼女の瞳に強い光が宿った。

「だから、私は後悔をしない。愚かだったけれど、申しわけなかったけれど、それでも嘘はなかったもの」

ラウルは彼女の横顔を見つめた。光を受けて輝く金の髪が、少し眩しく感じた。彼女はラウルの視線に気づき、瞬きをしながら振り向いた。

「もしかして、少しは後悔しろって思ってる？」

「いや。だが、サイファは……」

レイチェルは穏やかに微笑んだ。

「生まれたときから今まで、ずっと変わらず大切にしてくれている。決して私を責めたりしないわ」

ラウルは後ろの木に身を預けると、腕を組み青空を見上げた。

「おまえにとっては良い夫というわけか」

「あなたにとっては良い教え子だった？」

レイチェルは茶化して尋ねた。ラウルは空を見たまま、眉をひそめた。

「憎らしい奴だ。だが、今までに会った誰よりも頭がいい」

端的にそう答えたあと、一拍の間をおいて付け加えた。

「ただ、魔導の潜在的な能力は、おまえの方が上だ」

「そうなの？ 嬉しい」

レイチェルは軽く無邪気に喜んだ。

「もう少し時間があれば、おまえの力を引き出せてやれた。そうすれば……」

「今さら言っても仕方のないことよ」

「……強いな」

ラウルはぼつりと言った。レイチェルはルナを抱きしめ、空を見上げた。

「守ってくれる人がいるから、かもしれないわね。ラウルもそのひとりよ」

そう言って、にっこりと笑いかけた。だが、ラウルは素っ気なく否定した。

「私は何もしていない」

「見守ってくれていたでしよう？」

レイチェルは大きな瞳で彼を覗き込んだ。

ラウルはうつむきながら頭を押さえると、ため息をついた。

「どうしておまえはそういうことを……」

——ガサッ。

はっとして音のした方に振り返る。一瞬だが、黒っぽい何かが茂みの中に隠れるのが見えた。

「誰だ！」

迫力のある声で叫びながら、その方に突進する。そして、あわてて逃げようとしていた人物を見つけると、首根っこを掴んで引きずり出した。それは、ジークだった。

「何をしている」

ラウルは低く唸るように問いつめた。その目は激しい怒りで熱く煮えたぎっている。ジークは芝生に手をついたまま、じりじりと身を引いた。

「レポートを片づけに来ただけだ。おまえが山のように出すからな！」

彼の額から汗が流れ落ちた。ラウルはギリッと奥歯を噛みしめた。そして、腹の底から声を絞り出す。

「なぜ盗み聞きをしていたのか、と訊いている」

「盗み聞きなんてしてねえ！姿が見えたから来てみただけで……いま来たところなんだよ！」

ラウルはジークの喉をわしづかみにし、体ごと木の幹に叩きつけた。ジークは後頭部を激しく打ちつけ、思いきり顔をしかめた。喉を押さえつけられているため声は出ない。それどころか息さえできない。今にも喉がつぶれそうだ。

「おまえの記憶を封じてやる。成人に施すのは危険だが仕方ない。失敗すれば数年単位で記憶が飛ぶ。最悪は廃人だ」

ジークは体をよじり逃れようとしたが、びくともしない。首を絞めつける大きな手に爪を立ててみても、その力が緩むことはなかった。

「下世話な好奇心を持った自分を恨め」

ラウルは冷酷に言い捨てると、開いた右手をジークの額にかざそうとした。

「待って」

レイチェルはその右手に自分の左手を重ねた。そして、大きな青い瞳をまっすぐ彼に向け、じっと訴えかけた。

ラウルの手から力が抜けた。ジークは飛び出すようにそこから逃れると、喉を押さえ激しくむせ込んだ。

「ジークさん」

レイチェルは膝をつき、体を屈めている涙目のジークを覗き込んだ。

「何も、聞いていないのね？」

真剣な表情で、静かに念押しするように尋ねかける。ジークはごくりと喉を鳴らした。

「……はい」

「わかったわ。行って」

レイチェルは凜とした声で、突き放すように短く言った。ジークはとまどいがちに何度か振り返りつつ鞆を拾うと、図書室へ向かって足早に歩き出した。

「甘いな」

ラウルは低い声で言った。

「たいしたことは言っていないでしょう」

「あいつはバカじゃないぞ」

「だったら安心ね」

レイチェルは後ろで手を組み、にっこり笑って振り向いた。

「彼は私たちの味方だもの」

「だといいがな」

ラウルはため息をついた。

「使って」

レイチェルは白いハンカチを差し出した。彼の手の甲からは血が滲んでいた。ジークに爪を立てられたときについた傷だ。それほど深くはないが、長く引っかかかっている。

「こんなもの、放っておいても問題はない」

「あら、医者の子供とは思えないわね」

レイチェルはからかうように言った。そして、彼の大きな手をとると、ハンカチで傷口をそっと押さえた。赤い血がハンカチに染みていく。

「汚してほしくなかったのよ」

ぽつりと落とされた彼女の言葉に、ラウルはぴくりと眉を動かした。

「この手は、ルナを抱き上げる手だもの」

レイチェルは顔を上げ、優しく微笑んだ。彼女の足元に座っていたルナも、無垢な笑顔で見上げていた。

「ジーク！ どこ行ってたの！ 心配したよ！」

図書室に入って来た彼を見るなり、リックは大きな声を上げた。隣のアンジェリカは、眉をひそめてリックに振り向き、口の前に人さし指を立てて見せた。図書室には、彼らの他にもレポートをまとめている生徒たちがちらほらいる。

リックは「あ……」と小さく声をもらして口を押さえると、今度は声をひそめて言った。

「先に行ったはずなのに来ないから、事故にでも遭ったんじゃないかって思ったよ」

ふたりは一緒にアカデミーに向かっていたが、リックは途中でセリカの家へ寄るからと、ジークには先に行ってもらっていたのだった。

「悪リィな」

ジークはまるで気のない返事をしながら、アンジェリカの隣に座った。リックはこれ以上の追求はしなかった。答える気がなさそうに見えたからだ。無事であればそれでいい。そう思いながら、本に目を落とした。

「何か、ついてるわよ」

アンジェリカはジークの頭に手を伸ばし、髪に絡まっていた深緑色の欠片を取った。

「葉っぱ？ 何をやってたの？ こんなものつけて」

首をかしげ、いぶかしげに尋ねる。ジークは困ったように目を泳がせた。

「天気が良かったから、つい中庭で昼寝……」

「え、昼寝？」

「もう、そんな悠長なことやってる場合？」

リックとアンジェリカはあきれ顔で口々に言った。しかし、ジークは言い返すこともせず、覇気なくぼうっとしている。考えごとをしているようにも見えるが、どちらにしろ彼の心はここになかった。

「ねえ、本当にどうしたの？」

アンジェリカは次第に不安になってきた。どう見てもいつもの彼ではない。何かがあったとしたか思えない。しかし、ジークはそれを認めなかった。

「なんでもねえよ」

どこか上の空で答える。

「なら、いいけど……」

引っかかるものを感じてはいたが、彼女もそれ以上は尋ねなかった。

ジークは鞆からノートと筆記具を取り出すと、席を立ち、奥の書棚へと向かった。

ラウルは魔導省最上階にあるサイファの個室へやってきた。軽くノックし、返事を待たずに扉を開ける。

サイファは大きなガラス窓の前に立ち、そこから広がる景色を眺めていた。

「遅かったな。待ちくたびれたよ」

背を向けたまま、静かに言う。ラウルはぶっきらぼうに言い返した。

「おまえの都合にばかり合わせてはいられない」

サイファは椅子に腰を下ろし、机に向き直った。

「猫とでもやり合ったのか」

目ざとくラウルの手の傷を見つけると、引き出しを開けながらさらりと尋ねた。ラウルはわずかに眉をひそめ、一言だけ返した。

「猿だ」

サイファは小さくふっと笑った。そして、唐突に、小さな何かを投げてよこした。それは弧を描き、ラウルの手の中におさまった。

「あのロッカーの鍵だ」

サイファは部屋の隅を指さした。ラウルは彼を軽く睨むと、そのロッカーへと足を進めた。スチール製のそれは、表面がでこぼこしており、見るからに古そうだった。ところどころ錆まできている。ラウルは渡された鍵で扉を開けた。中には小さめの段ボール箱がひとつ入っていた。蓋は閉じられていない。多くの紙の束やファイルが無造作に突っ込まれ、あふれ返っている。

「片付けるとでも言うのか」

「ある研究者が発表しようとしていた論文と、その裏付けとなる実験データだ」

サイファははっきりとよく通る声で言った。ラウルは彼を流し見た。

「揉み消したのか」

「表に出ては都合が悪いのでね」

サイファはひじをつき、軽く握った手をあごに添えると、不敵な笑みを浮かべた。

「利口なやり方とは思えないな」

「私が関わったことはわからないよう工作はしてある。ラグランジェ家の誰かの仕業だという察しはついているだろうが」

ラウルはじっとサイファを見つめた。サイファは軽く息をつきながら、肘掛けに手をのせ、背もたれに身を預けた。そして、まっすぐにラウルを見つめ返すと話を続けた。

「おまえに聞きたいのは、その論文の信頼性だ。私が読んだ限りでは、かなり高いとみている」

ラウルは段ボール箱の中から、論文と思しきファイルを取り出した。パラパラとめくり、ざっと目を通す。

「大筋、間違っていないようだ」

そう言うと、ファイルを閉じた。

「少し見ただけで何故そう言える。根拠は何だ」

サイファは鋭い視線をラウルに向け、畳み掛けるように問いかけた。

「私のいた世界では、とうに証明されていることだ」

ラウルは無表情で答えた。サイファは厳しい表情で目を細めた。

「何故、教えなかった」

「一度、言ったことがある」

「私は聞いていない！」

身を乗り出し語気を強めるサイファに、ラウルは淡々と返した。

「おまえの祖父にだ。おまえが生まれるずっと前にな」

「……聞く耳を持たなかったのだな」

「ああ、一笑に付された」

サイファは再び背もたれに身を沈めた。椅子が軽い軋み音をたてる。

「私なら、信じたよ」

ぽつりと言うと、くるりと椅子をまわし、ラウルに背を向けた。ガラス窓の向こうに広がる青い空を、深い蒼の瞳に映す。そして、静かに口を開いた。

「一族の中で婚姻が繰り返されることに、不自然なものは感じていた。血を濃くすることの弊害もあるのではないか、そんな懸念が頭をよぎったこともある。分家がいくつもできた今でこそなくなっただが、昔はきょうだい間での婚姻も、当然のように行われてきた」

サイファは大きく息をついた。

「すでに私たちの遺伝子はかなり損傷している、と考えるべきだろうな。つまり、爆弾を抱えているようなものだ。このままではいつか……」

「どうするつもりだ」

ラウルが低い声で尋ねると、サイファは椅子をまわし、再び彼に向き直った。

「さて、どうするかな」

含みを持った言い方をすると、ニヤリと不敵な笑みを浮かべた。その瞬間、嫌な考えがラウルの頭をかすめた。

「まさか、アンジェリカを……」

「アンジェリカを、何だって？」

サイファはほおづえをつき、ゆっくりと尋ねかけた。ラウルははっとしてけわしい表情でうつむき、口元を手で覆った。

「いいかげん気づいていないふりをするのはやめてもらえないか」

サイファは立ち上がり、腕を組むと、ガラス窓にもたれかかった。

「一瞬、アンジェリカが頭に浮かんだのは事実だ。だが、あの子をラグランジェ家に縛りつけるつもりはない。その考えは今でも変わらないよ」

腕を組んだまま、顔を横に向け、窓の外に視線を流す。

「それに、ラグランジェ家が変わらなければ、外部の者を受け入れることができなければ、結局は同じことさ。ただの延命措置にすぎない」

光に縁どられた彼の端正な横顔は、寂しげな翳りを落としていた。

「おまえが変えるつもりか」

ラウルが尋ねると、サイファはわずかに目を伏せた。

「いや、何もしない。滅びればいいさ。閉鎖的に自分たちの優位性を護ってきた、驕慢な一族の末路にはふさわしい最期だ」

静かにそう言ったあと、少しおどけて付け足した。

「ま、滅びるのは私の子孫ではないしね」

ラウルはため息をついた。

「あの連中がおとなしくそれを待つとは思えないが」

サイファは表情を引き締めた。

「おそらく彼らもこの情報を掴んでいる。そうであれば、当然、何らかの対策をとるだろうな。それが正当なものであれば、私も尽力するつもりだ。ただ……」

彼の目つきが急に鋭くなった。あごを引き、まっすぐ前を見据える。

「アンジェリカに手出しはさせない」

低く重いその声は、決意に満ちていた。

ラウルはロッカーの鍵を締め、それをサイファに投げ返した。

「無茶はするな」

無愛想にそう言うと、背中を向け足早に歩き出した。

「ラウル」

サイファはその後ろ姿に声を掛けた。ラウルはドアノブに手を掛けたまま、動きを止めた。

「おまえがいてくれて良かった」

「からかっているのか、それとも嫌みか」

ラウルは振り返ることなく尋ねた。

「本心だよ」

サイファはにっこり笑って答えた。

ラウルは乱暴に扉を開け、勢いよく出て行った。

「僕たちもとうとう四年生か……」

前を横切る初々しい新入生を見て、リックは感慨深げにつぶやいた。

今日はアカデミーの入学式である。授業は午前で終わり、三人は帰り支度をして食堂へ向かうところだった。

「学年が上がった実感はあんまりないけどな。担任、ずっと変わらねえし」

ジークは仏頂面でぶっきらぼうに言った。彼の頭にラウルの姿が浮かんでいることは明白だった。リックとアンジェリカは顔を見合わせてくすりと笑いあった。

「なんだよ、おまえら」

ジークは口をとがらせ、両隣りのふたりを交互に睨んだ。アンジェリカは顔を上げ、にっこりと笑いかけた。

「あと一年ね」

「ああ、さっさと卒業して働きてえよ」

ジークは面倒くさそうに、ジーンズのポケットに手を突っ込んだ。

「そう」

アンジェリカは無表情で素っ気なく返事をした。彼女のその態度に、ジークはうろたえた。あわてて付け加える。

「少し、寂しいけどな」

アンジェリカはきょとんと彼を見上げ、大きくまばたきをした。

「ラウルと離れるのが？」

「バカ！ おまえだよ！」

彼女を指さし勢いよく言ったあとで、はっとして目を伏せた。窓から射し込む陽光が、白い廊下に反射して少し眩しい。耳元が次第に赤みを帯びていく。

アンジェリカは後ろで手を組み、短いスカートをひらめかせながら、彼の前にまわりこんだ。

「卒業したって、会おうと思えばいつだって会えるわ」

大きな瞳で覗き込み、屈託のない笑顔を見せた。

ジークは目を見張った。

——いつだって会える。

彼女の言葉を頭の中で反芻すると、照れくさそうにはにかんだ。その様子をリックはにこにこしながら眺めていた。

「なんだよ！」

「別に」

突っかかってきたジークに、リックは笑顔のままでさらりと答えた。ジークはその余裕たっぷりの態度が気に食わなかった。キッと彼を睨み、指先を突き付けると、威勢よくがなり立てた。

「おまえ人のことばっか気に掛けてねえで、自分のことを考えろよ！」

「自分のこと？」

そう聞き返されて、ジークは言葉に詰まった。

「い……いろいろあるだろ！ えと……そうだ、進路とかな！ ラウルがまともに進路指導なんてやるわけねえし、自分でしっかり考えねえとな」

ほとんどターニャの受け売りだった。だが、ジークは上手く話を繋げられたことに安堵し満足していた。これならリックも悩み出すに違いない。意地悪くそんなことを思ったが、彼の口から発せられた言葉は予想とは違うものだった。

「ああ、それならもう考えてるよ」

「え？」

聞き返したジークの声は、情けなく裏返っていた。ずり落ちた鞆を肩に担ぎ直す。

「どうするの？」

アンジェリカはリックに振り返り、興味津々に尋ねた。彼はにっこり笑って答えた。

「先生になろうかと思って」

「アカデミーのか？」

ジークが尋ねると、リックは両手を前に出して振りながら、焦って否定をした。

「違う、違う、それは無理！ 普通の学校のだよ」

「なんか、もったいねえな。せっかくアカデミーまで来たのによ」

ジークは腕を組み、不満そうに言った。しかし、アンジェリカは顔を輝かせ、弾んだ声をあげた。

「いいじゃない！ リックに合ってると思うわ」

「ありがとう」

そう言い合って笑顔を交わすふたりを見て、ジークは表情にわずかな影を落とした。

「ジークはどうするの？」

アンジェリカは不意に彼に話を振った。目をくりっと見開き、いたずらっぽく覗き込む。

「まだ人柱になりたいとか思っているわけ？」

「人柱じゃねえよ、四大結界師だ！」

からかうように言ったアンジェリカの言葉を、ジークはむきになって訂正した。

「まあ、なりたいと思ってすぐになれるもんじゃねえし、とりあえず魔導省に入るのが順当なところらしいけどな」

「ジークがお役人……」

リックは呆然とつぶやいた。ジークは顔を赤くして言い返した。

「ガラじゃねえのはわかってるよ！」

アンジェリカは嬉しそうににっこりと笑いかけた。

「じゃあ、ジークはお父さんの部下になるのね」

「……そこがなあ」

ジークはとたんに苦い顔になった。アンジェリカは怪訝に顔を曇らせた。

「お父さんのこと、嫌いななの？」

不安そうに尋ねる。

「あ、いや、そうじゃねえよ」

ジークはあわてて否定した。

「サイファさんのことは尊敬してる。でも、なんていうか、あんまり関わりすぎると……なあ…
…いろいろやりづらいついていうか……」

はっきりしない物言いに、アンジェリカは首を傾げた。

「やりづらいついて、何が？」

「何がって言われても困るけどな……」

ジークは追いつめられ、弱った表情で口ごもった。

「それって、アンジェリカのお父さんだからってこと？」

リックが横から口をはさんだ。ジークはぎくりと体をこわばらせた。凶星であることは、表情にも思いきり表れている。

「それ、どういう意味？」

アンジェリカは眉根を寄せ、両手を腰にあて問いつめた。

「え、いや、あ、おまえはどうするんだよ、卒業後」

ジークはしどろもどろになりながらも、必死で話題を変えた。

「え？ 私？」

ジーク自身、こんな手にアンジェリカが引っかかるわけないと思ったが、意外にも彼女は追求をやめ、その話題に乗ってきた。

「実は、私も魔導省に入りたいと思ったの。でもね、年齢制限があったのよ。18歳未満はだめだって。ひどいでしょ？！ そんなの関係ないのに！」

よほどそのことを訴えたかったのか、右手をぐっと握りしめ、勢いよく捲し立てた。そして、口をとがらせると、腕を組んで考え込んだ。

「どこか他にいいところがあればいいんだけど」

「おまえ、無理して就職することもないんじゃないか？」

ジークは思いつくままにそう言った。年齢のこともあるが、何より彼女の家は裕福である。若いうちから働かなければならない事情は何もないはずだ。

しかし、アンジェリカはきっぱりと答えた。

「うちでじっとしているなんて嫌よ」

ジークは苦笑した。

「勉強しながらあと四年待って、それから就職でも遅くねえだろ」

彼なりに最良の案を提示したつもりだったが、彼女は納得しなかった。

「そんな時間、ないかもしれないもの」

ジークは怪訝に首をひねり、尋ねかけた。

「それってどういう……」

そのとき、アンジェリカの表情が途端にこわばった。体を小刻みに震わせながら、大きく目を見開いた。彼女がその瞳に映しているのはジークではない。彼を通り越し、その向こうを見ているようだ。

「どうした？」

ジークは彼女の視線をたどった。そこに立っていたのは、ロングコートをまとったひとりの男性だった。そこそこ年輩だと思われるが、体は大きくがっちりとして、背筋もしっかりと伸びている。老人という風情ではない。髪は半分ほど白くなっているが、残った色から元は鮮やかな金髪であったことがうかがえる。そして、瞳は深い青色——。ジークは直感した。この男はラグランジェ家の人間であると。

ジークはアンジェリカをその男の反対側に寄せ、庇うように肩を抱き、足早に通り過ぎようとした。彼女の体の微かな震えが、手を通し伝わってくる。

大丈夫だ——。

ジークは安心させるように、無言でその手に力を込めた。

「ジーク＝セドラックだな」

思いがけない言葉に、ジークははっと息をのみ顔を上げた。なぜ自分の名を……。とまどいを隠せない。

「君とは一度、話をしたいと思っていた」

男はジークを値踏みするように、上から下までじろりと見まわす。

「ちょうどいい機会だ。来てもらおう」

有無を言わさぬ威圧的な口調。ジークは得体のしれない恐怖を感じた。同時に、何の話だろうかという興味もあった。しばらく考えたのち、口を結んだまま男の方に足を踏み出した。

「私も行くわ！」

アンジェリカも彼のあとに続こうとする。そんな彼女を、男は冷たく睨みつけた。

「ジーク＝セドラックとふたりで話をしたい。おまえは来るな」

「どうして?! 私の話でしょう? だったら……」

「言うことを聞け、アンジェリカ＝ナール」

迫力のある低音が、体の芯に響く。アンジェリカはびくりと体をこわばらせた。もはや、動くことも言い返すこともできなかった。

「心配すんな」

ジークはそんな言葉を掛けることくらいしかできなかった。そして、ふたりは連れ立ってその場をあとにした。

「ジーク、図書室で待っているから!!」

アンジェリカは遠ざかる背中に向かって、乾いた喉から声を絞り出した。ジークはわずかに振り返り、微かな笑顔で応えた。

「誰なの、あの人」

リックは華奢な背中におずおずと問いかけた。彼女はふたりが消えていった方向をずっと見つめていたが、リックの声を耳にすると、目を細め口を開いた。

「私のひいおじいさまよ」

「ひい……おじいさま？」

リックは驚いて思わず聞き返した。それにしても若すぎると思ったのだ。アンジェリカはガラス窓にそっと手をつき、中庭の噴水を見つめた。

「昔から、ひいおじいさまの私を見る目はとても冷たかった」

無表情に、無感情に、淡々と言葉をつなげていく。

「誰よりも厳格で、誰よりもラグランジェ家のことを考えている人だから、異端である私が許せないんだと思う」

「そんな、アンジェリカが悪いわけじゃないのに……」

リックはそれだけ言うのが精一杯だった。彼女の横顔を見つめ、悲しげに眉をひそめる。

アンジェリカは彼に振り向き、少し寂しげに笑ってみせた。

「私の存在自体が許せないのよ」

リックはもう何も言葉が掛けられなかった。彼女がラグランジェ家の中で「呪われた子」などと呼ばれ、蔑まれていることは知っていた。だが、それを目の当たりにすると、やはりショックである。彼女はどんな思いでこれまで生きてきたのだろうか、ふいにそんなことを考えてしまう。

「どうして自分だけこうなんだろうって、何度も考えたし、自分なりに調べもしたわ」

アンジェリカは目を伏せ、自分の横髪を無造作に掴んだ。リックは胸が詰まった。

「答えは、見つかったの？」

ゆっくりと滑り落ちる彼女の手を見つめ、静かに尋ねかける。アンジェリカはぽつりと言葉を落とした。

「遺伝子の異常」

「え？」

リックはぼかんとしてまばたきをした。

「ただの憶測よ。根拠は何もないわ」

アンジェリカは笑って肩をすくめた。

「色素が作られなくて、肌や髪が白くなるっていうのはあるの。逆のケースは見つけれなかったけれど、ありえないことではないかなって」

そう言うと、今度は自嘲ぎみに小さく笑った。

「そうだとすると、穢れた血という言われ方も、間違っではないわね」

「間違ってるよ！！」

リックは身を乗り出し、両こぶしを握りしめて言った。アンジェリカはその迫力に驚いて少し身を引いた。目をぱちくりさせて彼を見る。そして、ふいに表情を緩めると、やわらかい笑顔を見せた。

「ありがとう」

リックはひとまず安堵した。彼女の肩にぽんと手を置き、優しく微笑みかけた。

ジークと年輩の男は、王宮の外れにある小さな森に来ていた。生い茂った枝葉の隙間から落ちる木漏れ日が、細い散歩道にまだら模様を作る。緩やかな風が吹くたび、模様は形を変え、頭上

からは木々のざわめきが降りそそいだ。

ジークは不安になってきた。こんな人気のない場所に連れ込んで、この男はいったい何を企んでいるのだろうか。もし、何かが起こったとしても、助けを呼ぶこともできない。

「誰なんだよ、おまえは」

沈黙と不安に耐えかねたジークは、半歩先を歩く男の背中に、無礼な口調で問いかけた。男は振り返ることなく答えた。

「先々代のラグランジェ家当主、それで充分だろう」

「で、今は長老会メンバーか？」

男の足が止まった。そして、ゆっくりとジークに振り返り、鋭い視線を向けた。瞳の奥には強い光が宿っている。

ジークはあごを引き、口端を上げ、挑みかけるようにニッと笑った。目はまっすぐ男を捉えている。だが、強気な態度とは裏腹に、額には脂汗が滲んでいた。

「そこまで知っているとはな。今すぐ始末したい気分だよ」

男は凍てつくような青い瞳でジークを突き刺し、凄みのある低音をゆっくりと響かせた。ジークは背筋に冷たいものが流れ落ちるのを感じた。小さく身震いをする。

「安心しろ。そんなつもりはない」

男はふっと笑って前に向き直り、再び歩き始めた。

「だが、他言をすればそうなるかもしれん。気をつけることだな」

「わかってる」

ジークは少し離れて歩きながら、短く答えた。そして、再び疑問をぶつけた。

「わざわざ俺と話をするためにアカデミーに来たのか？」

男の背中が笑った。

「自惚れるな。アンジェリカ＝ナールの成績をもらうために来たのだ」

コートの内側からファイルを取り出し、掲げて見せた。その青いファイルはかなりの厚みがあった。成績表だけではなく、試験や内部資料なども収められているのかもしれない。ジークはそう思った。

男はそれをコートの内側に戻すと、脇にひっそりと佇むベンチに腰を掛けた。古びた木製のそれは、ギィと鈍い軋み音を立てた。

「君の成績もついでに見させてもらった。優秀だな」

「一度もアンジェリカに勝てたことねえよ」

ジークは顔をそむけ、吐き捨てるように言った。嫌味を言われているのだと思った。くやしませに足元の小枝を踏みしめる。パキパキと甲高い音が森に響いた。

男はまぶたを閉じ、ふっと笑った。

「あの子には勝てんよ。君はもちろん、ラグランジェ家の人間でも、敵うものはほとんどいないだろう」

そう言ってジークを一瞥すると、さらに話を続けた。

「それだけの素質が彼女には備わっている。そういう血を持って生まれてきたということだ」

「やっと認める気になったのか」

ジークは呆れたように言った。フンと鼻を鳴らす。

「当たらずとも遠からず、といったところだな」

男はベンチから立ち上がり、コートポケットに手を入れた。広い背中をジークに向ける。

「彼女は我々にとって必要な存在となった。君には手を引いてほしい」

「は？」

男は悠然と振り返った。

「君とアンジェリカが懇意にされては、後々、差し障りが出てくるのだ」

ジークは訝しげに首を傾げた。

「わかるように言えよ。アンジェリカをどうするつもりだ」

「ラグランジェ本家を継いでもらう」

男はまっすぐジークを見据えて言った。

来た――。

ジークは唇を噛みしめうつむいた。いつかそういう話を聞かされるのではないか、心の片隅にずっと不安を抱えていた。同時に、呪われた子と言われている彼女に継がせないのではないかと、そんなふうにも楽観していた部分もあった。

「まだ正式決定ではないが、近いうちにそうなる予定だ。サイファにも、これ以上、好き勝手させはしない」

「赤ん坊の頃、殺そうとしたのはおまえらだろう。今さら勝手なことを言うな！」

威勢よく突っかかったあとで、ジークははっとした。わずかに身構えると、上目遣いでじっと睨めつける。

「今度は邪魔になった俺を殺すつもりか？」

頬を一筋の汗が伝う。そんなジークに、男は冷ややかな視線を送った。

「君は、我々のことを暗殺集団か何かのように聞かされているかもしれないが、そうではない」

しっかりと聞きかせるように、緩やかに抑揚をつけながら言葉をつなげる。そして、後ろで手を組み、無防備な背中をジークに見せた。

「部外者を巻き込まないことが、我々の基本方針でね」

「あくまで基本なんだろ」

ジークはぶっきらぼうに揚げ足をとった。男はゆっくりと振り返り、不敵な笑みを浮かべた。

「すべてを忘れ、ラグランジェ家と距離をおくことを約束してくれば、悪いようにはしない。君はこれから就職活動を始めるのだろう」

ジークは顔をしかめた。

「おまえの力なんて借りるつもりはねえよ。自分の力だけで十分だ」

「わかっていないな」

男は冷笑した。

「君自身も言っただろう、“あくまで基本”だと」

ジークはごくりと唾を飲み込んだ。

「裏を読み。手を引かなければどうなるかということ。おまえごときの人生を捻り潰すなど造作もないことだ」

男は真顔で言った。

ジークは奥歯を食いしばりうつむいた。爪が食い込むほどにこぶしを強く握り震わせる。ただの脅しではないと思った。彼らにはそれだけの力があり、また、そうすることにためらいもないだろう。いったいどうすれば……。頭が混乱して、まともに考えることもできない。

「なんで……なんでアンジェリカなんだよ。別にアンジェリカでなくてもいいだろう」

今にも泣き出しそうな声でつぶやくと、顔をしかめ髪を鷲掴みにした。

「残念ながら、そうはいかなくなったのだ。すべてはラグランジェ家を守るためだ」

その言葉を聞くと、ジークの頭に一気に血がのぼった。

「バカじゃねえのか！人があっての家だろう！」

顔を上げ、大声で食って掛かった。その声に驚いた森の鳥たちは、いっせいに羽ばたき飛び立っていった。木の葉がいくつか、ひらひらと舞い落ちる。だが、男は平然としたまま、ジークを一瞥した。

「おまえのような外部の人間にはわからんだろうな。二千年近く名家として続いてきたラグランジェ家の重みというものを。その伝統の前では、個人など取るに足りないものなのだ」

ジークはムツとして男を睨みつけた。

「少なくともサイファさんはそう思っていない」

男は嘲るように小さく笑った。

「君は随分サイファを慕っているようだが、気をつけた方がいい」

「おまえの言うことなんか信じるかよ」

ジークがそう言ったにもかかわらず、男は構わず話を続けた。

「守りたいものが違うだけで、本質は我々と変わらない。人を利用し、不要になれば排除する。そういうことが平気でできる男だ。嘘をつくのが上手い分、我々よりたちが悪いかもしれんな」

ジークは反論もせず、複雑な表情で立ち尽くしていた。この男の言うことを信用したわけではない。だが、何か引っかかりのようなものを感じる。些細なこととして気にしなかった、もしくは気にしないようにした、いくつかの小さな記憶。それらが一斉に呼び起こされるような、そんなざわめく感覚がわき上がった。

男はジークの肩に片手をおき、ぐっと力を込めた。

「君が利口な選択をしてくれることを願っている」

ジークは、その低音が腹の底にずっしりと沈んでいくのを感じた。額から汗が吹き出す。男はもう一度、ジークの肩においた手に力を込めると、彼を残して森から出ていった。

男の姿が見えなくなると、ジークは膝から崩れるようにその場にへたり込んだ。肩にはまだごつい手の感触が残っている。

森のどこかから、小鳥のさえずりが聞こえてきた。

「ジーク！！」

彼が図書室の扉を開けたとたん、アンジェリカは彼の名を呼び、急いで駆け寄ってきた。不安そうな表情で、じっと彼を見つめる。

「何の話だったの？」

少し緊張したような固い声。ジークには彼女の気持ちが痛いほど伝わってきた。それでも、あな話を伝えることなど、自分にはできない。彼女から目をそらせる。

「何でもねえよ」

精一杯の平静を装い、ぶっきらぼうに答えた。しかし、その答えはなんのごまかしにもなっていないかった。アンジェリカはさらに追求する。

「何でもないわけじゃない！ 私に関係がある話なんでしょう」

「違う」

ジークは難しい顔でうつむいた。アンジェリカは追求を緩めなかった。

「他に何の話があるっていうのよ」

ジークは言葉を失った。沈黙するしかすべがなかった。アンジェリカは真剣な表情でジークを見据え、落ち着いた声ではっきりと言った。

「自分のことくらい、自分で受け止められるわ。子供扱いするのはやめて」

「子供じゃねえかよ！」

追いつめられ、ついそんな言葉が口をついた。言い過ぎた——。ジークはすぐに後悔した。

アンジェリカは大きな漆黒の瞳を潤ませ、彼をキッと睨んだ。

「うそつき！」

「うっ……？」

ジークは尋ね返そうとして、言葉を詰まらせた。

アンジェリカは机の上に置いてあった鞆を乱暴に掴み、走って図書室を出ていった。

「アンジェリカ！ 待って！ わっ」

彼女を追いかけようとしたリックを、ジークはフードを掴んで引き留めた。

「何を言うつもりだ」

うつむき、喉の奥から乾いた声を絞り出す。

「何って……」

リックは口ごもった。そこまで考えていなかった。

「でも、あのまま行かせていいの？！」

「これは俺の問題だ」

「じゃあ早く追いかけてなよ！」

リックに急ぎ立てられても、ジークはただうなだれるだけだった。彼が何かに深く悩んでいることは、リックにもわかった。しかし、アンジェリカも同様に悩みと不安を抱えている。そんな彼女にあのような言葉を浴びせ、謝りも弁解もせずそのまま行かせるなど、あってはならないことだと思った。

「ジーク！」

苛ついて名を呼ぶ。行動を起こさない彼がもどかしかった。

「もう少し、考えさせてくれ……」

ジークは消え入りそうな声で、ようやくそれだけを口にする。

リックは目を細めて彼を見つめた。

70. 親子のかたち

「うそつき！」

「そうだよ、ジーク。ひどいよ！！」

アンジェリカとリックは口々にジークを責め立てた。

「違っ……」

言葉に詰まり、反論すらできないジークに、ふたりは冷淡な目を向けた。

「こんなヤツのこと、もう忘れなよ」

リックはわざとらしくため息をついた。

「言われなくても忘れるわ」

アンジェリカはつんと顔をそむけ、不機嫌に言い捨てた。そして、リックと腕を組むと、ふたりで笑いあいながら去っていった。

「待て！ おいっ！ おいっ！！」

引きちぎれるくらいに強く腕を伸ばすが、なぜか足は石のように動かない。追いかけたいの追いかけれない。みるみるうちに、ふたりの姿は小さくなっていった。

「ジーク、君には手を引いてもらうと言ったはずだ」

威厳に満ちた、腹の底に響く低音。どこからともなく男が現れた。ラグランジェ家の先々代当主だ。

「我々はリックを正式な後継者と認めた」

「なっ……」

ジークは目を見開いた。額から汗が流れ落ちる。男は静かに言葉を続けた。

「君も男なら、潔く諦めろ」

「う……嘘だ！！」

ジークは自分の叫び声で目を覚ました。心臓が痛いくらいに激しく強く打っている。自分の鼓動の音が、自分自身ではっきりと感じとれた。

「……夢……か……」

見なれた天井の木目を目にし、ようやく状況を把握した。途端に体中から力が抜けた。大きく息をつき、吹き出した額の汗を袖口で拭った。

——まったく、何て夢だ。

きのうの出来事が影響しているのは間違いない。自分の不安な気持ちがあんな夢を見せたのだろう。ただの夢だ——。懸命に自分に言い聞かせた。

ジークは冴えない顔で、のっそりと体を起こすと、よろよろ階段を降りていった。

「おはよ、ジーク。やっと起きたのね」

聞きなれない女性の声が、彼を出迎えた。

「へ？」

ジークは間の抜けた声を上げ、振り向いた。そして、啞然として固まった。口を開けたまま声

も出ない。

「ごはん、まだなの。もう少し待ってね」

再び彼女が声を掛けた。ジークははっとして我にかえると、慌てふためきながらあたりを見回した。間違いなく自分の家だ。もういちど声の主を見る。エプロン姿の彼女は、じゃがいもの皮を剥きながらくすりと笑った。

「おまえ、セリカ……か？」

「そうよ」

ジークは半信半疑で尋ねたが、彼女は当然のように肯定した。彼はますます混乱した。まだ夢の続きではないかと疑った。思わず頬をつねり確かめてみた。痛みを感じる。夢ではないようだ。わけがわからないといった顔で、唸りながら額を押さえる。

「ちょっと待て。なんでおまえがウチの台所で料理してんだ」

「私がお願いしたのよ」

隣の部屋で、母親のレイラが声を張った。彼女はダイニングテーブルで、マグカップを片手にくつろいでいた。セリカと視線を交わすと、意味ありげに笑いあった。

ジークはいまだに状況がさっぱり把握できないでいた。落ち着きなく、母親、セリカと何度も交互に目を向ける。このふたりは知り合いでも何でも無いはずだ。なのにどうして——。

狐につままれたような顔をしている息子を見て、レイラは耐えきれずに吹き出した。

「リックと彼女がウチの前を通りかかったから呼び止めたのよ。パンクしたままだった自転車を修理してもらおうかと思って」

ジークはようやく合点がいった。しかし——。

「リックはまだいいにしても、なんであいつに昼メシ作らせてんだよ」

セリカを指さし、呆れ口調で尋ねる。

「ただ待ってもらうのも何だから、ついでにお願いしちゃった」

年甲斐もなくかわいこぶる母親に、思いきり眉をひそめた。

「まったく、その図々しい性格、なんとかならねえのかよ」

「人のこと言うまえに、そのカッコなんとかしたら？ レディの前でみっともない」

レイラはすまし顔でそう言うと、お茶を口に運んだ。

ジークははっとして自分を見た。着古しすぎるほど着古したよれよれのパジャマ。その前のボタンを半分以上はずし、だらしなく胸をはだけさせている。髪も寝癖でぼさぼさになっていることは、容易に想像がつく。

「それを早く言えよ！」

ジークはカッと顔を赤くして、あわてて二階へと駆け上がっていった。

「顔も洗って来なさいよー」

レイラは淡々と追い打ちをかけた。

セリカはそんなふたりのやりとりがおかしくて、くすくすと笑った。

ジークは一応の身支度を整えると、再び階段を降りていった。ふいにごはんの炊きあがる匂い

が鼻をくすぐる。その瞬間、忘れていた空腹を思い出し、急に体から力が抜けるように感じた。ふらつきながら台所に目をやると、リックとセリカが湯気の立ちのぼる鍋をはさみ談笑していた。

「おはよう、ジーク」

リックは彼に気がつくのと、にこやかに挨拶をした。いつもと変わらない穏やかで人懐こい笑顔。ジークは、一瞬、今朝の夢が頭をよぎった。だが、この光景を見ていると、あれはやはりただの夢としか思えなかった。

「悪リィな。なんかこき使って」

「まあ、いつものことだし」

リックはそう言って笑った。ジークはますます申しわけない気持ちになった。

「リックは手先が器用だから助かるわ。ジークと違って」

当のレイラはほおづえをつき、呑気にそんなことを言っている。まるで悪びれる様子もない。ジークは腕を組み、白い目を彼女に向けた。

「ジーク、あれからどうしたの？ アンジェリカとはあのまま？」

リックは声をひそめて尋ねた。ジークは途端に顔を曇らせた。

「.....ああ」

沈んだ表情で、沈んだ声を落とす。

「なに、なに？ ケンカでもしたの？」

地獄耳のレイラは、脳天気にはしゃぎながら首を突っ込んできた。

「おまえは黙ってるよ」

ジークは苛立ちをあらわにした。

「これ、言おうか迷ってたんだけど.....」

リックはそう前置きをして、ジークの目をまっすぐ見つめた。ジークはごくりと唾を飲み込んだ。

「アンジェリカ、すごく悩んでるよ」

「ん？ ああ、わかってる」

それは、リックに言われるまでもないことだ。ジークは肩すかしを喰らったように感じた。アンジェリカが黒い髪と黒い瞳のせいで、親戚たちから蔑まれていたことは、ジークも知っていた。そのことで悩んでいることも、わかっていたつもりだ。ひょっとしたら、そんなこともわからない唐変木だとリックに思われているのだろうか。ジークは怪訝に眉をひそめた。

しかし、リックが続けて語った話は、ジークが初めて知るものだった。

「自分だけ髪や瞳が黒いのは、遺伝子の異常じゃないかって言ってた。色素がなくて白くなるってのがあつらしくて、自分はその逆なんじゃないかって」

ジークは腕を組んで首を捻った。

「難しいことを考えるな、あいつ.....。どうなんだよ、医学生」

「え？ 私？」

料理を終え、後片づけをしていたセリカは、裏返った声で聞き返した。すぐ背後でなされてい

るふたりの会話に、興味がないふりをしているつもりだった。が、ジークには耳をそばだてていることがばれていたのだろうか。

「おまえ以外に誰がいるんだよ」

ジークは面倒くさそうに言った。不機嫌に口をへの字に曲げ、彼女を睨む。

「いきなり言われてもわからないけど……」

セリカは手を拭きながら振り返った。

「役に立たねえな」

ジークは顔をしかめ、吐き捨てた。

「ジーク！」

彼のあまりにあからさまな態度に、温厚なリックも黙ってはいられなかった。

しかし、それを制したのはセリカだった。

「いいのよ、気にしてないから」

無理に笑顔を浮かべてそう言うと、話の続きを始めた。

「色素が出来なくて、髪が白かったり瞳が赤いってのは確かにあるわよ。アルビノっていうんだけど。でも、逆は聞いたことないわね」

「アンジェリカもそう言ってたよ」

リックは頷きながら言った。セリカは口元に人さし指をあて、斜め上に視線を流した。

「でも、たとえ突然変異だったとしても、彼女の場合、問題ないんじゃないかしら。アルビノは色素がないから、光に弱いとか健康上の問題があるけど」

ジークは目をつぶり、腕を組むと、深く頭を垂れた。懸命に考えを巡らせる。そして、うつむいたまま薄く目を開くと、ぽつりと言葉を落とした。

「違うな」

「え？ 何が？」

リックは大きく瞬きをして尋ねた。だが、ジークは独り言のようにぶつぶつとつぶやくだけだった。

「遺伝子の異常とかだったら、あのジジイがあんなこと言うわけねえ……」

「あのジジイって、アンジェリカのひいおじいさん？ 何を言ったの？」

リックは眉をひそめて再び尋ねた。ジークを覗き込んでその表情をうかがう。彼は考え込んだ様子で、眉根を寄せ、口をぎゅっと結んでいた。答えようという様子は見られない。

リックはあきらめたようにため息をついた。

「僕たちに言えないんだったらいいけど、アンジェリカにはちゃんと話した方がいいよ」

そう言いながら、椅子の上に置いてあった上着に袖を通した。セリカもエプロンを外し、代わりにジャケットを手にとった。

「おい、食ってかねえのか？」

リックたちが帰り支度をしていることに気づき、ジークはあわてて尋ねた。リックはにっこりと振り向いて言った。

「うちで母親が待ってるから。もともとそういう予定だったんだよ。ね」

セリカに同意を求めると、彼女も笑顔で頷いた。

「ふたりともありがとね。また来て」

レイラは立ち上がり、手を振ってふたりを送り出した。ふたりも手を振りながら去っていった。

「うん、おいしい！彼女、いいお嫁さんになるわよ」

セリカの作ったクリームシチューを食べながら、レイラは声を弾ませた。ジークは無反応で黙々と食べ続けた。おいしいとは思ったが、口には出さなかった。

「あのセリカって子、確か、あんたに会いにウチまで来たことあったわよねえ」

レイラは記憶をたどるように、ゆっくりと言葉を紡いだ。ジークはぎくりとして手を止めた。

「だから、何だよ」

下を向いたまま、つつけんどんに切り返す。しかし、その声には、少しの固さと動揺が感じられた。

レイラはニヤリと口端を上げた。

「リックにとられちゃったわけね。なっさけない」

「そんなんじゃねえよ。あいつが勝手につきまとしてただけだ」

ジークは顔を上げることなく反論すると、いらついた様子で白いごはんをかき込んだ。

そんな息子を見て、レイラはため息をついた。

「ま、本命はがちり掴んでおくことね」

軽い調子でそう言うと、彼の鼻先にスプーンを突きつけた。

「ケンカなんてしてる場合じゃないでしょ」

ジークはどきりとした。レイラはさらにきつい一撃を加えた。

「うかうかしてると、アンジェリカまでリックにとられちゃうわよ」

ダン！

ジークは机を叩きつけて立ち上がった。何か言いたげに、瞳を揺らし開いた口を震わせる。しかし、その口から言葉は出てこなかった。

「気にしてたんだ」

レイラは大きく目を開き、彼を見上げた。ジークは苦々しい顔で目を閉じ、崩れ落ちるように椅子に腰を落とした。顔を隠すように、深くうなだれる。

「あんたがひねくれた態度ばかりとってたら、冗談抜きでそうなっちゃうかもよ。少しは素直になることね」

母親の冷静で厳しい忠告が、ジークの胸に深く突き刺さった。膝の上にのせたこぶしを、爪が食い込むほどに強く握りしめる。

レイラはさらりと付け加えた。

「だからって、あちらの親御さんに顔向けできないようなことはするんじゃないわよ」

「するわけねえだろ！！」

ジークは顔を真っ赤にして、大声で言い返した。その一瞬で全身から汗が吹き出した。息を整

えながら、冷水が入ったコップを手にとる。

レイラは両手でほおづえをつき、にこにこして彼を見た。

「なんだよ」

ジークは少しびくつきながら、訝しげに尋ねた。

「あんたの顔立ちとかさ、だんだんリュークに似てきてるわよね」

レイラは嬉しそうにそう言った。ジークはそれを聞いて、母親が笑顔で自分を見ていたわけがわかった。リュークとはジークの亡くなった父親のことだ。亡くなってから、もう十年以上になる。確かに似てきているかもしれない——ジーク自身にもそんな自覚はあった。一息ついて、手にしていた水を口に運ぶ。

「だから私、ちょっと心配だったのよ」

レイラは思い出したように笑った。

「息子に恋しちゃったらどうしようって」

ジークは飲みかけの水を吹いた。

「でも、内面はいつまでたってもバカなガキンチョのまんまだから、ゼーんぜんそんな気は起こらないけどね」

そう言って、レイラはカラカラと笑った。ジークは布巾で机を拭きながら、疲れきったようにため息をついた。

「悪かったなバカで。半分は母親の血を引いてんだから仕方ねえだろ」

「それもそうね、あはははは！」

思いきり嫌味を言ったつもりだったが、あっさり認められてしまった。どうも調子が狂う。ジークはもう一度ため息をついた。

「リュークか……」

そうつぶやいたレイラの声には、懐かしさがあふれていた。ジークもつられて父親を懐かしむ。真っ先に思い浮かぶのは、バイクに向かう寡黙な背中と油の匂い。父親の仕事をしている姿を見るのが好きだった。学校帰りにこっそり覗きに行ったりもした。

「生きていれば男どうしていろんな話ができただのにね」

レイラはいつになく優しい顔で言った。

「実際生きてたら、あんま話なんてしてねえと思うけどな」

ジークは目をそらし、ぶっきらぼうに答えた。だが、聞いてみたいことや話したいことはたくさんある。父親と今の自分が話をしている光景を思い浮かべて、思わず胸が熱くなった。だが——。

「って、こんな話、意味ねえよ。もう生きてねえんだし」

心の幻を打ち消すかのように、冷めた口調でぼそりつつぶやき、仏頂面でほおづえをついた。

「たまにはいいじゃないっ」

レイラはいつものように、明るい声を張り上げた。

「死んだ人は記憶の中でしか生きられないんだから」

「……それ、ちょっとくさくねえか？」

ジークはほおづえをついたままで、じとっと母親に視線を流した。

「やっぱり？」

レイラはおどけて頭に手をあてた。

「ま、たまにはいいけどよ」

ジークが無愛想にそう言うと、レイラはにっこりと笑った。両手でほおづえをつき、まっすぐジークの瞳を覗き込む。

「あんたがいてくれて良かった」

「なんだよ、急に」

柄にもないことを口にする母親に、ジークは少しうろたえた。

「ひとりだったら、とっくに挫けてたわ」

「そうか？ ひとりでも結構たくましく生きてくだろ」

照れくさいものを感じながら、それを見せないようつれない返事をする。レイラは大袈裟に肩をすくめて見せた。

「わかってないわねえ。女ってものが」

「おまえが女を語るなよ」

ジークは冷ややかに言った。

「あら、少なくともあんたよりはわかってるつもり……ですわよ？」

レイラはふざけてそう言うと、自分自身で吹き出した。ジークもそんな彼女につられ、笑顔を見せた。だが、それはすぐに消えた。いつまでこうやって気楽に笑っていられるのだろうか。ふいに表情に翳りを落とすと、ためらいがちに口を開いた。

「あのな……俺、もしかしたら、ヤバい奴を敵にまわすことになるかもしれねえ」

「なに？ ケンカ？」

レイラは腕まくりしながら身を乗り出した。わくわくして、顔を輝かせている。

「なんで嬉しそうなんだよ！ 冗談じゃなくて本当の話だぞ！」

ジークが呆れたように怒鳴りつけると、レイラは急に真面目な顔になった。

「相手はなんて言ってるの？」

ジークは返答に困った。どこからどこまで言えばいいのだろうか。少し考えてから、差し障りのない部分をかいつまんで話した。

「手を引かなければ、俺のことを潰すつもりらしい。多分、裏から手をまわして就職できないようにするとか……そんなことじゃねえかと思う」

「あんたの気持ちは決まってるわけ？」

レイラはまっすぐにジークを見据えた。ジークは逃げるように視線を外した。

「正直、怖え。でも……」

そこで言葉が途切れた。そのままうつむき、唇を噛みしめる。

「そうね。よく考えて、後悔の少ない方を選ぶことね」

レイラはきびきびと言った。

「考えなしにバカやるのは止めるけど、しっかり考えて覚悟のうえでなら、何も言わない」

めずらしく真剣な母親の言葉が、ジークの心に静かに響く。彼はうつむいたまま目を細めた。

レイラはぱっといつもの明るい表情に戻った。

「ま、ホントに社会から干されたとしても、あんたひとりくらい私がなんとかしてあげるわ。だてに四十年、生きてないのよ」

あははと笑いながら、大きく胸を張った。

ジークはそう言われても、少しも安心できなかった。ラグランジェ家の仕打ちがそんなに生易しいものとは思えなかったのだ。それでも、母親のその気持ちはありがたかった。

「四十二年だろ」

ジークはいつもの憎まれ口を返した。レイラはニッと笑って彼を見た。

「細かい男は嫌われるわよ」

そう言って、まだ暗い顔をしている息子の鼻をつまんだ。

昼食を終え、ジークは自分の部屋に戻ってきた。敷きっぱなしの布団の上に、ごろりと転がる。カーテンは半分だけしか開かれていなかったが、真昼の強い陽射しが差し込み、眩しいくらいだった。光から逃れるように背を向けると、体を丸め、ゆっくりと目を閉じた。

アンジェリカ——。

頭の中に広がる暗闇で、小さくその名をつぶやいた。彼女の笑った顔、怒った顔、悲しそうな顔、さまざまな表情が次々と浮かんでくる。

——笑うときも怒るときも、あいつはいつもまっすぐ俺を見てたな……。俺は、どうだった。顔をそむけてはいなかったか。

ジークはゆっくりと目を開いた。仰向けになり、天井を見つめる。

——あいつの気持ちはわからない。だけど、もし、俺といることを望んでくれるとしたら……。そうしたら、俺は……。

その顔に次第に赤みがさしていく。とっさに枕元に落ちていた上着をつかみ、頭に覆い被せた。

アンジェリカは窓を開け、濃紺色の空を見上げた。かすかな夜風が、ほてった頬を冷まし、薄いレースのカーテンをひらひらと揺らす。

うそつき——。

きのう、ジークに言ってしまったひとこと。それが頭から離れない。何度も何度もリフレインする。

ジークが嘘つきなら、私は卑怯ものね。

黒髪がさらさらと頬にかかる。潤んだ目を細め、窓枠にもたれかかりながら、今日何度目かのため息をついた。

アンジェリカは部屋を出ると、階段を降り、リビングルームに向かった。その途中、ダイニン

グルームの明かりがついていることに気がつき、何気なく覗き込んだ。

「あら、アンジェリカ」

萌黄色のネグリジェを纏ったレイチェルが、笑顔で振り返った。右手にはコーヒーカップ、左手には牛乳瓶を持っている。

「あなたも飲む？ ホットミルク」

「うん」

アンジェリカは言葉少なにテーブルについた。

「お父さんはまだ帰ってないの？」

「今日は帰れそうもないんですって。最近、また忙しいみたいね」

レイチェルは牛乳を火にかけながら答えた。

「そう」

アンジェリカは無表情でほおづえをついた。そして、口をついて出そうになったため息を、ぐっと呑み込んだ。

「どうしたの？ 今日はずっと沈んだ顔をしていたけど」

レイチェルは背を向けたまま尋ねた。アンジェリカは顔を上げ、目をぱちくりさせた。

「そう、だった？」

「ええ、隠しているつもりだった？」

そう尋ね返されて、困ったような複雑な表情ではにかんだ。

かすかに甘い匂いが立ちのぼる。レイチェルはカップをふたつ手に持って振り返った。ひとつをアンジェリカに手渡し、自分も席についた。

「ありがとう」

アンジェリカはそのホットミルクにそっと口をつけた。ほっとするような優しい温かさが体の中から広がる。固かった表情も次第にほぐれていった。

「おいしい」

「そう、よかった」

レイチェルは大きくにっこりと笑った。そして、自分もホットミルクを口に運んだ。

「ねえ、お母さん」

アンジェリカはカップに両手を添え、顔を上げた。

「なあに？」

レイチェルは微笑みながら、大きな瞳を彼女に向けた。

「今日、一緒に寝てもいい？」

アンジェリカは遠慮がちに尋ねた。

レイチェルは目を見開き、きょとんとした。しかし、すぐに優しい笑顔を浮かべると、あたたかい声で答えた。

「もちろんよ」

その言葉を聞いて、アンジェリカは少し照れ笑いしながらほっと息をついた。

「さあ、どうぞ」

レイチェルに促されて、アンジェリカは両親の寝室に足を踏み入れた。もちろん初めてというわけではないが、あまりここに入ることはなかった。前に来たのは数年前——アカデミー入学以前である。だが、そのときに見た光景とほとんど変わっていない。懐かしさを感じながら、彼女はベッドにもぐり込んだ。レイチェルも、明かりを消すと、反対側からベッドに入った。

「おやすみなさい」

「おやすみなさい」

ふたりは挨拶を交わすと、暗い中でおでこを合わせ、にっこりと笑いあった。

「……きれいな髪」

アンジェリカは唐突にぽつりとつぶやいた。

「え？」

もう眠ったかと思っていた娘の声に、レイチェルは少し驚いて振り向いた。アンジェリカは横になったまま、彼女の長い髪を指でなぞった。カーテンの隙間からわずかに漏れ入る月明かりが、その柔らかな金の髪をほんのりと白く光らせる。まるで上品なプラチナを思わせる輝き。それは、神秘的とさえ形容できるものだった。アンジェリカは小さくため息をついた。

「本当にきれい」

「アンジェリカ、あなたの髪もきれいよ」

レイチェルは感情を込めてそう言うと、彼女の手をとり包み込んだ。だが、その返答は素っ気ないものだった。

「そうかしら？」

彼女の言葉には否定的な響きが含まれていた。それでもレイチェルはあきらめなかった。黒髪をゆっくりと撫でながら、にっこりと笑いかけた。

「私は好きだわ」

「この髪のせいで、お父さんとお母さんに迷惑を掛けてる」

アンジェリカは眉根を寄せた。レイチェルは彼女の額に、自らの額をコツンと付けた。

「あなたに迷惑を掛けられたなんて、少しも思っていないわ」

「でも、事実よ」

「あなたのせいじゃない」

ピシャリと言い放ち、そっとアンジェリカの頭を抱き寄せる。

「誰かのせいにしたいのなら、私を責めて」

アンジェリカは目を見開き、息を呑んだ。耳元で静かに落とされた母親の声は、何かを深いものを秘めているように感じた。つらいのは自分だけではない。そんなことはわかっていたつもりだったのに。こんなことを言っても困らせるだけなのに——。

「でもね」

アンジェリカが謝ろうとした矢先に、再びレイチェルが口を開いた。抱えていた娘の頭を離し

、まっすぐに黒い瞳を覗き込む。

「私は、あなたが私の……私たちの娘でよかった、心からそう思っているわ。それは信じて」
アンジェリカの胸に、熱いものがこみ上げてきた。自分が不安になったとき、信じられなくなったとき、黒い気持ちが沸き上がったとき——そんなときはいつだって、父も母も、迷わずそう言ってくれた。何度も何度もこの言葉に救われた。そして、今も——。

「私も、お父さんとお母さんの娘でよかった……って……」

うっすらと潤んだ目を細め、言葉を詰まらせる。レイチェルは優しく微笑み、娘の頬にそっと手をのせた。

「何か、あったの？」

そう尋ねられるのも仕方ないとアンジェリカは思った。一緒に寝たいなどと言ったのは初めてだったし、普段は触れないようにしている髪の色話題を持ち出したり、確かに普通ではなかった。

そして、実際に“何か”あった。

きのうの出来事が頭をよぎる。曾祖父のこと、ジークのこと——。

「……私、ジークにひどいことをやってしまったの」

天井を見つめ、掛け布団をぎゅっと握りしめた。

「悪いことをしたと思うなら、素直に謝ることね」

レイチェルは穏やかな口調で、諭すように言った。アンジェリカは口元まで布団を引き寄せた。

「許してくれるかしら」

横目でちらりと母親を窺う。

「さあ、それはわからないわ。ジークさんが決めることだから」

穏やかな声だが、その内容は厳しいものだった。アンジェリカはわずかに顔を曇らせた。レイチェルは彼女の前髪を、ゆっくりと掻き上げた。

「でもね、謝るということは、許しを請う行為ではなくて、自分の非を認めてそれを伝える行為なのよ」

アンジェリカははっと目を見開いた。

「だから、許してくれるかを考えて行動するのは、間違ってるんじゃないかしら」

レイチェルは淡々と言った。だが、その言葉には優しさがあふれていた。アンジェリカも十分にそれを感じとっていた。

「そうね、そうよね」

彼女は自らに言い聞かせるように言った。そんな娘を見て、レイチェルは包み込むように笑いかけた。

「お母さん……」

アンジェリカは母親の胸元に顔を寄せた。あたたかく、柔らかい。

「もっと、こうやって甘えてくればよかった」

「今からでも遅くないんじゃない？」

レイチェルは彼女の背中に手をまわし抱き寄せた。アンジェリカはぬくもりの中でゆっくりと目を閉じた。

目の覚めるような冷たい空気が頬を刺す。空が白み始めた中を、サイファは家路についていた。

さすがに疲れたな——。

首をまわし、凝り固まった肩をほぐすと、小さく息をついた。このところ仕事が忙しいうえ、ラグランジェ家の雑務や個人的な調べものなどで、帰りの遅い日が続いている。今日のように明け方になることもたびたびあった。普通ならいっそ帰らないという選択肢もあるだろうが、彼には考えられなかった。どんなに短い時間であったとしても帰りたい、帰ってレイチェルの顔を見たいという思いが強かった。

サイファは裏口から家へ入った。静まり返った広い屋敷に、乾いた靴音が響く。かろうじて足元が見えるくらいの薄明かりの中を、まっすぐ寝室へと歩いていく。

ギ……。

サイファはそろそろ扉を押し開けた。音を立てないよう足先に神経を集めながら、そっと中に入る。

——アンジェリカ？

レイチェルに寄り添う黒い頭が目に入り、一瞬、息が止まった。だが、ベッドを覗き込み彼女であることを確認すると、安堵して胸を撫で下ろした。なぜここにいるのかという疑問が頭をかすめたが、すやすやと眠っているふたりを見ていると、そんなことはどうでもよくなった。自然と頬が緩んでくる。疲れさえも忘れてしまう。いつまでもこの光景を見ていたい、そんな思いにとらわれた。

「う……ん……」

アンジェリカは小さく声を漏らしながら、寝返りを打った。そして、ぼんやりと目を開いた。

「お父さん？」

「ごめんね、起こしてしまったね」

サイファはしゃがんで彼女を覗き込み、にっこりと笑いかけた。アンジェリカは目をこすりながら、あたりを見回した。

「そうだわ……ここはお父さんとお母さんの寝室……」

いまだにはっきりしない頭で、確かめるようにつぶやくと、ぼうっとしながら体を起こした。

「ごめんなさい、自分の部屋に戻るわ」

「いや、ここにいてくれ」

不思議そうな顔を向けるアンジェリカの頬に、サイファは手を添えた。

「ひとつのベッドに三人並んで寝るのも、たまには悪くないだろう？ アンジェリカは嫌か？」

「ううん、嬉しい」

アンジェリカは眠そうな声でゆったり答えると、とろけるように微笑んだ。そして、彼の袖を掴み、自分の方へ引っ張った。

「急かさなくても逃げはしないよ。まずは着替えないと……」

サイファはそう言いかけて、思い直した。とりあえずはこのままでもいいか。アンジェリカが寝ついてから着替えれば——。ふっと表情を緩めると、彼女にせがまれるままベッドに入り、その隣に体を横たえた。ふたりは顔を見合わせて、小さく笑いあった。

「お父さん、大好きよ」

囁くようにそう告げられて、サイファはくすぐったいものを感じた。愛おしげに目を細め、微笑みかける。そして、彼女を抱き寄せると、やわらかな頬にそっと口づけた。

しばらくすると、アンジェリカは父親の胸の中で、静かに寝息を立て始めた。サイファは優しく彼女の頭に手をまわした。

いつのまにか目を覚ましていたレイチェルは、そんな彼を見て、にっこり微笑んでいた。それに気づいたサイファも微笑みを返した。言葉はなくとも、ふたりにはそれだけで通じ合うものがあった。

71. 一緒にいたい

リックは居心地の悪さを感じていた。その原因はジークとアンジェリカである。ふたりはまだ休日前の言い合いを引きずっているようだった。まったく口をきかないということはなかったが、ときどき交わす言葉はぎこちなく、その間には妙な緊張感が漂っていた。互いに思いつめた表情を浮かべ、何か機会をうかがっているように見えた。

リックにはそれがもどかしかった。よほどおせっかいを焼こうかと思ったが、ふたりで解決すべき問題だと思い直し、この空気に耐えることにした。

「アンジェリカ」

放課後になり、ジークはようやく切り出した。いつになく固いその声に、彼女はびくりとした。だが、それを悟られないよう平常を装った。

「……なに？」

「話がある。ちょっと付き合ってくれ」

ジークは視線を外し、ぶっきらぼうに言った。アンジェリカは、彼の横顔を見上げた。

「私も、話があるの」

「あ、ああ……」

ジークは彼女に背を向け、口ごもりながら返事をした。

リックはにこにことして、その様子を見守っていた。ジークはそれに気がつくや、後ろから乱暴に彼の首に腕をまわした。そして、ぐっと力をこめ、首を絞めるようにして耳打ちした。

「おまえ、ついて来るなよ。絶対に、来るんじゃねえぞ」

「そんな野暮なことはしないよ」

リックは苦しそうに笑いながら、声をひそめて言った。

「おまえには覗きの前科があるからな。クギ刺しとかねえと」

「人聞きの悪いこと言わないでよ。あれは出ていくタイミングが掴めなかつただけだって」

以前、ジークとセリカが話しているときに、リックがこっそりと隠れて聞いていたことがあった。ジークは、そのときのことをまだ根に持っているようだった。大雑把な性格のわりには、細かいことをいつまでも覚えている。リックは苦笑いした。

「とにかく、来るんじゃねえぞ」

ジークはもういちど念押しすると、リックを解放した。そして、ポケットに両手を突っ込むと、アンジェリカの前を足早に横切った。

「行くぞ、アンジェリカ」

扉に手を掛けると、後ろでぼんやりしていた彼女に声を掛けた。

「あ、うん」

アンジェリカは小走りで彼のあとを追っていった。

ふたりはアカデミーを出て、無言で歩き続けた。ジークはポケットに手を突っ込んだまま、無

表情で歩を進める。アンジェリカは、彼がどこへ向かっているのか気になったが、尋ねることはできなかった。

突然、視界が広がり、風が吹き上げた。

アンジェリカは短いスカートを押さえながら、ぐるりと見渡した。

「ここって……前に来たところね」

下方に広がる白い川原と透明なせせらぎ。上方に広がる青い空。それらが交わる場所を、沈みゆく太陽が朱色に染め上げている。細やかに揺れる水面がきらきらと輝きを放ち、緩やかな流れがさらさらと上品な音を立てている。

「覚えてたのか」

ジークは薄汚れたガードパイプに手を掛け、振り返った。

「忘れるわけじゃない」

彼女も並んでガードパイプに手を置いた。にっこり笑って彼を見上げる。

「試験中だったのに、ジークに言いくるめられて連れてこられたのよね」

「言いくるめてって何だよ」

ジークは少し頬を赤らめながら言い返した。

「あのときは確か、ふたりとも転んで水をかぶって……」

アンジェリカはそこまで言うと、急にうつむき口をつぐんだ。ジークも同じようにうつむいた。ガードパイプに掛けた手に、ぐっと力を込める。そして、川原へと続く石段を無言で降り始めた。アンジェリカも黙ってそのあとに続いた。

「座れよ」

ジークは下から二段目の石段に腰を下ろすと、その隣をパンパンと叩いた。アンジェリカはこくりと頷くと、スカートの後ろを押さえながら素直に座った。しかし、そこは二人が並んで座るには狭い場所だった。少しでも動くと、腰や肩が触れてしまう。ふたりはぎこちなく体をこわばらせた。

「ジーク」

アンジェリカは下を向き、膝を抱えたまま呼びかけた。彼は、視線だけを彼女に流した。

「私の話から聞いてほしいの。いい？」

「ん、ああ……」

そういえば、彼女も話したいことがあると言っていた。ジークは自分のことに精一杯で、今まですっかり忘れていた。何の話だろうか、急に不安が湧き上がってきた。

アンジェリカは意を決したように、ジークに振り向いて言った。

「ごめんなさい、わたし、うそつきなんてひどいことを言ってしまうって」

「ああ、そのことか」

ジークは前を向いたまま、固い声で言った。すぐ横に彼女の顔がある。近い。動くことも目を向けることもできない。

「別にそんな気にしてねえよ。俺も悪かったし」

「本当に？」

アンジェリカは首を伸ばし、さらに顔を近づけた。ほとんどジークの肩に寄りかかるような格好になっている。

「ああ」

ジークは息が止まりそうになりながら、ようやくそれだけの返事をした。

「よかった」

アンジェリカは短いスカートをひらめかせながら、軽やかに川原におりた。そして、後ろで手を組むと、くるりと振り返った。心のつかえがとれたように、屈託のない笑顔を見せている。

ジークはほっと息をつき、少し疲れた顔で笑った。それから、斜め下に視線を落とすと、ぼつりと尋ねかけた。

「ひとつ、聞いてもいいか？」

「なに？」

「うそつきって、どういう意味で言ったんだ？」

「あ、それは……」

アンジェリカは口ごもりながら目を伏せた。

「ひいおじいさまの話が……私とは関係ないって言ったから……」

どこか不安定な表情で、自信なさげに訥々と言葉を落としていく。

「だよな、そうだよな」

ジークは自分に言い聞かせるようにつぶやいた。膝に腕をつき深くうなだれると、自嘲の表情を浮かべ、声なく笑った。

「じゃあ、次はジークの話」

アンジェリカは明るい声を作り、少しあわてたように話題を切りかえた。

ジークは体を起こし、まっすぐ彼女を見つめた。

「おまえがアカデミーに入学したのは、何のためだ」

「え？」

アンジェリカは首をかしげ、怪訝に彼を見た。怖いぐらいの真剣な顔。彼女は気圧されて息を呑んだ。とまどいながら話し始める。

「私のことを認めさせたかったから……。こんな髪で、こんな瞳だけど、私もラグランジェ家の人間だって、呪われた子なんかじゃないって、魔導の実力で証明したかった」

「証明して、どうするつもりだったんだ」

ジークは彼女を見据え、静かに尋ねた。アンジェリカは困惑して眉をひそめた。

「どうするって、別に……。ただ、見返したかっただけよ」

ジークは背中を丸め、大きくため息をついた。

「バカ。もっと考えてから行動しろよな」

「バカって何よ！」

アンジェリカはカッとして言い返した。腰に手をあて、口をとがらせ、ジークを睨む。だが、彼はうつむいたまま、ぼつりと言った。

「証明……しちまったのかもしれねえな」

「えっ？」

「認める気になったかって聞いたら、当たらずとも遠からずって言ってたぜ、あのジイさん」
アンジェリカはきょとんとした。

「ひいおじいさまが……？」

「ああ」

「それってどういう意味かしら」

ジークは目を細め、暮れかかった空を見上げた。

「おまえの魔導の実力だけは認めたってことかもな」

「……………」

アンジェリカは複雑な表情で立ちつくした。後ろから風が吹き、黒髪をさらさらと舞い上げる。

ジークは空を見つめたまま、眉根を寄せた。

「もうすぐ正式決定になるらしいぜ。おまえが本家を継ぐって話」

「……そう」

彼女はたじろぎもせず、そのひとことだけを口にした。ジークはぐしゃぐしゃと頭を掻いた。

「だから、あれ、おまえが言ってたっていう遺伝子がどうとかって話、あれは違うんじゃないかねえのか？ もし異常があるんだとしたら、本家を継がせたりしねえだろ」

アンジェリカは大きく瞬きをした。

「リックに聞いたの？」

「ああ」

確かに、口止めはしなかった。彼を責めることはできない。ただ、リックが口外するとは思わなかった。アンジェリカは何ともいえない顔で目を伏せた。

「心配してたぜ、あいつも」

ジークはそう言ってリックをかばった。だが、その表情は浮かないものだった。

「……なんでリックなんだよ。俺ってそんな頼りねえか？」

アンジェリカは不思議そうに彼を見た。

「別に相談したわけじゃなくて、話の流れで言ってしまっただけなんだけど……」

「それにしてもだな」

ジークはそこまで言うと、顔をしかめて自分の額を叩いた。

「悪リィ。言いたいのはそういうことじゃなくてだな、とにかくおまえはどこも悪くなんかねえってことだ」

「ひいおじいさまたちが気づいていないだけ、かもしれないじゃない」

「そんなに抜けてるヤツじゃねえだろ」

「……だったらいいんだけど」

アンジェリカはあまり信じていない様子だった。後ろで手を組むと、敷き詰められた小石に踵を打ちつけた。ジャツ、と濁った和音を奏でる。

ジークは、彼女の言動に不安を掻き立てられた。

「おまえは望んでねえんだろ、本家を継ぐなんてこと」

少し早口で尋ねかける。アンジェリカは目を細め、じっと彼を見つめた。

「……昔は、望んでいたかもしれない」

不安は現実になった。後頭部を殴られたかのような衝撃。一瞬、めまいがして目の前が暗くなった。

「今は、違うんだろ？」

乾いた喉から言葉を絞り出す。一縷の望みにすぎる気持ちだった。額には汗がにじみ、眉はかすかに震えていた。必死であることは一目瞭然だ。

だが、アンジェリカはそれには答えず、質問を返した。

「相手のこと、言ってた？」

「いや……」

はぐらかされた。そう思ったが、もういちど尋ね直すことは怖くて出来なかった。

「ひいおじいさまは、どうして私の話を、わざわざジークにしたのかしら」

アンジェリカは目を細めて広い空を見上げた。ジークは困ったように顔をしかめた。

「それは……」

少し言い淀んだあと、慎重に言葉を選び答えていく。

「おまえと仲良くすんな……って言うため、だったんだろうな」

「そう、言ったの？」

「そんなようなことをな。でも、俺は……」

「もう、一緒にいない方がいいわね」

アンジェリカはぼつりと言った。ジークの顔から一気に血の気が引いた。

「おまえ、本気なのかよ！」

石段から飛び上がるように立ち上がる。

「なんでだよ！まさか、本当に本家を継ぐ気なのか？！」

アンジェリカは無言で目を伏せた。ジークはこぶしを握りしめ、彼女に詰め寄った。ジャッ、と小石が耳をつんざく音を立てる。

「おまえはそれでいいのかよ。レオナルドか誰かわかんねえけど、そんな男と……！」

「これは私の問題なの！」

アンジェリカはよく通る声で、彼の言葉を遮った。そして、凜とした瞳を向け、静かにはっきりと言った。

「ジークは巻き込めない」

「もう巻き込まれてんだよ！」

ジークはむきになって言い返した。だが、彼女は冷静だった。淡々と言葉を紡いでいく。

「だから、ここで手を引いて。取り返しがつかなくなる前に」

「冗談じゃねえぞ。絶対に引かねえからな」

ジークは奥歯を噛みしめ、低く唸るように言った。

「ジークがいたって何も変わらない。無駄にひどい目に遭わされるだけよ」

「そんなのわかんねえだろ！」

ジークは必死に食らいついた。ここであきらめたら何もかもが終わってしまう。そんなふうに感じていた。

アンジェリカの表情がわずかに揺れた。

「……私が本家を継ぐことを望んでるって言ったら？」

「うそつきって言葉を返してやるよ」

ジークは彼女の瞳をまっすぐ見つめた。その大きな漆黒の瞳は、次第に潤んでいった。

「ジークは知らないのよ。ひいおじいさまのことを、ラグランジェ家のことを」

「わかってるさ」

ジークは実感をこめて言った。もしかしたら、アンジェリカよりも——。そう思ったが、口には出さなかった。真摯なまなざしで、じっと彼女を見つめる。

「覚悟は決めてんだ」

アンジェリカは泣きそうに目を細めた。

「どうして？ いつも私のせいで、かぶらなくていい火の粉をかぶって……。私、そんなのもう耐えられない」

「耐えろよ！」

ジークは彼女の両肩に手をのせ、ぐっと力をこめた。

「少しでも俺のことを思ってくれるなら……」

「何よそれ、むちゃくちゃよ。ジーク、おかしいわ」

アンジェリカは顔をゆがめ、ゆっくりと首を振りながら、ジークから逃れようとした。しかし、彼は手を緩めようとはしなかった。

「おまえはさっき自分の問題だって言ってたけど、おまえだけの問題じゃねえ。俺の問題でもあるんだ」

「なに言ってるの？ 全然わからない」

「わかれよ！！」

もどかしげに眉をしかめながら、大声で叫んだ。彼女の肩を掴む手には、無意識に力が入る。食いしばった奥歯から、くっと小さく声が漏れた。

限界だった。

説得する言葉が見つからない。

「俺は……！」

耐えかねたかのように、彼女を勢いよく引き寄せた。その小さな背中に手をまわすと、力いっぱい抱きしめた。

「わかれよ……ガキじゃ、ねえんだろ」

微かに甘い匂いのする黒髪に頬を寄せ、耳元でつぶやくように言葉を落とした。彼女の華奢な体を、腕に、胸に感じる。あたたかく、そして柔らかい。ジークはさらに腕に力をこめた。

「……ジーク、苦しい」

アンジェリカは小さくかすれた声を漏らした。ジークははっと我にかえると、あわてて腕を離れた。顔を赤らめながら横を向き、うつむいて額を押さえた。

「悪かった……でも、俺、おまえに何を言われても、引く気はねえからな」

アンジェリカは眉根を寄せ、彼の横顔を見つめた。ぎゅっと握りしめた手を、胸元に押し当てる。冷たい風が吹き抜け、頬の微熱をさらっていった。同時に、落陽の最後の余韻も掻き消した。

「ジーク、まだ寝てるんですか？」

リックが驚いて尋ねると、レイラは扉にもたれかかり、困り顔で肩をすくめた。

「寝てるっていうか……きのうずいぶん落ち込んで帰ってきたと思ったら、ごはんも食べないで部屋に閉じこもっちゃって。それきりなのよ」

リックは眉をひそめて顔を曇らせた。

「僕、様子を見てきます！」

そう言うなり家に駆け込み、二階へと突進していった。

「ジーク！」

大声とともに、乱暴に扉を開け放つ。彼は狭い部屋で頭から布団をかぶり、体を丸めていた。

「俺、休む……」

布団からくぐもった弱々しい声が聞こえた。

「きのう、アンジェリカと何があったの？」

リックは戸口に立ったままで尋ねた。だが、布団がほんの少し動いただけで、返事はなかった。

「売り言葉に買い言葉で、ケンカをこじらせちゃった、とか？」

「……もっと悪い」

ジークは布団の中でさらに丸まった。膝を抱え、頭をうずめる。

——最低だ。自分の気持ちばかり押しつけた。感情が高ぶっていたとはいえ、あれはひどい。怖がられても嫌われても、当然の報いだ。彼女の曾祖父に引き裂かれるまでもなく、もう口もきいてもらえないかもしれない。そう思うと、いくら後悔してもし足りない。そのくせ、彼女を抱きしめた感触を思い出しては胸が熱くなる。顔が赤くなる。本当に最低だ。とことん自分が嫌になる。

「逃げてでも解決しないよ。悪いと思うなら、謝らなきゃ」

リックの言うことはもっともだった。わかってはいるが、そうするだけの勇気はなかった。とても顔など合わせられない。

「ジーク！！」

リックは勢いよく掛け布団を剥ぎ取った。

ふたりは遅れてアカデミーにやってきた。もうとっくに授業が始まっている時間だ。それでもジークの足どりは重い。リックは、そんな彼を急ぎ立て、引っ張っていった。

教室まで来ると、ふたりは後ろ側の扉を開け、身を屈めながらそっと入っていった。教壇のラウルはそれに気づいたが、冷たく一瞥しただけで何も言わなかった。アンジェリカもちらりとジークに目を向けた。ジークは彼女の視線を感じたが、顔を向けることは出来なかった。どんな表情をしているのか、見るのが怖かった。

「どうしたの？ ふたりとも。遅刻なんて初めてじゃない？」

授業が終わるなり、アンジェリカはジークの席に駆け寄った。少し心配そうにしているが、怒ったり呆れたりしているようには見えない。リックは拍子抜けした。ジークの様子からすると、取り返しのつかない喧嘩をしたものとばかり思っていた。なのに、彼女の方はいたって普通で、いつもと何ら変わったところはない。どういうことなのだろうと首を傾げながら、ジークに振り向いた。だが、彼もまた驚いていた。その驚き方はリックの比ではない。ぽかんと口を半開きにしたまま、呆然と彼女を見上げている。

「……あ……きのうのこと……」

うわごとのように声を漏らす。アンジェリカは後ろで手を組み、にっこり笑って彼を覗き込んだ。

「私ね、ジークのことを、もっと信用することにしたの」

「え？」

ジークは、近すぎる彼女から逃れようと、上体を後ろに引いた。椅子から落ちそうになり、あわてて背もたれに手を掛ける。

アンジェリカは顔の前で両方のこぶしをぎゅっと握りしめ、ぐっと気合いを入れた。

「だから、ひいおじいさまに負けないでね！」

「あ、ああ……」

ジークはわけがわからないまま、彼女の勢いに圧されて何となく返事をした。アンジェリカは不満げに口をとがらせた。

「もうっ！ もっと強気な返事を聞きたいわ」

「……絶対に、負けねえ」

ジークはぼつりと言った。いまだに状況が飲み込めない。

「ちょっと力強さが足りないけど、まあいいわ」

アンジェリカは顔を弾けさせて笑った。

「おまえ、なんで……」

ジークはとまどいながら尋ねた。

「わかれよって言ったのはジークじゃない」

アンジェリカは当然のように言った。

「それに……」

真顔でジークを見つめる。そして、肩をすくめるとにっこり笑った。

「私も、本当は、ずっとジークと一緒にいたいもの」

ぎゅるぎゅるぎゅる――。

ジークのおなかが派手に鳴った。三人は顔を見合わせた。アンジェリカとリックは同時に吹き出し、くすくすと笑った。ジークの顔は、みるみるうちに真っ赤になっていった。

「そういや、今朝もきのうの夜も、何も食ってなかった……」

「じゃあ、早く行きましょう、お昼を食べに。三回分、食べなきゃね」

アンジェリカは彼の腕を引っ張った。

「そんなに食ったら、ハラ壊すって」

ジークは頭を掻きながら立ち上がった。

「ジークなら大丈夫よ」

「おまえ、俺を何だと思ってんだよ」

ふたりは顔を見合わせて、そんな会話をしていた。いつものように、いつもより近い距離で、並んで歩いている。リックは、事情はよくわからなかったが、上手くおさまった様子なのを見て、ほっと安堵した。

「リック、何してるの？ 行きましょう」

足が止まったままの彼に気づき、アンジェリカは笑顔で呼びかけた。その隣で、ジークは照れたような、ばつが悪いような、複雑な笑みを浮かべていた。

「ごめん、いま行く」

リックはにっこりと笑って駆け出した。あとで、ジークから詳しい話を聞き出そうと心に決めた。

72. あきらめ

むせ返るような強い消毒液の匂い。

レオナルドはあからさまな嫌悪を示した。腕を組みながら壁にもたれかかり、うつむき加減に顔をしかめる。

「治らないと言ったくせに、いつまでこんなことを続けるんだ」

吐き捨てるように言うと、あごを引いたまま、上目づかいで前を凝視した。その先にいたのは、ラウルとユールベルだった。向かい合って椅子に座っている。ラウルは彼女の目を診察すると、手際よく包帯を取り替え始めた。

「嫌なら来なくていい。何度も同じことを言わせるな」

面倒くさそうに、突き放した答えを返す。レオナルドはますます顔をけわしくした。

「おまえは優秀な医者だという話だが、たいしたことはないんだな。それとも手を抜いているのか？」

ラウルはまるで取り合わなかった。無言でユールベルの頭に包帯を巻きつけている。しかし、彼女の方が、その言葉に反応した。大きく右目を開き、ラウルを見つめる。

「……治せるの？」

「レオナルドの言葉など真に受けるな」

ラウルは彼女を引き寄せ、頭の後ろで包帯を結んだ。そして、頬に軽く手を置くと、椅子をまわし机に向かおうとした。だが、彼女が腕をつかみ、それを止めた。

「私のことが嫌いだから手を抜いているの？ 私があなたを困らせてばかりだから、その仕返し？」

張りつめた表情で問いかける。ラウルは目を閉じ、ため息をついた。

「治せないものは治せない」

「お願い、私が悪かったのなら謝るわ。目は見えるようにならなくてもいい。せめて、醜い傷跡だけでも……」

ユールベルは、彼の腕をつかむ手に力を込めた。細い指がかすかに震えている。それでも、ラウルの心は動かなかった。

「何度言われても答えは変わらない」

素っ気なく彼女の手を払い、机に向かう。そして、薄く黄ばんだカルテに万年筆を走らせた。さらさらと軽い音が部屋を舞う。ユールベルは目を伏せた。

「アンジェリカは治したんじゃないのか」

レオナルドが思い出したように口を切った。ラウルが振り向くと、彼は無言で脇腹を指さしてみせた。どうやらセリカに刺されたときのことを言っているらしい。

「わずかに痕が残っているはずだ」

「わずかに、か」

ラウルの言葉の一部を、レオナルドは嫌みたらしく強調して繰り返した。

「あれとは状況も状態も違う」

ラウルは冷静に答え、机に向き直った。再び手を動かし始める。レオナルドは腕を組み、口をへの字に曲げ黙り込んだ。

「嘘よ！」

静寂を裂く叫び声。それはユールベルが発したものだ。椅子から立ち上がり、握りしめたこぶしを震わせている。

「やっぱり私だからなのよ」

だが、ラウルはカルテに向かったまま、視線を上げようとしなかった。ユールベルは彼の冷淡な横顔をきつく睨みつけた。その目には涙がにじんでいた。

「弁解くらいしたら？ それでも医者なの？」

震える声で責め立てる。それでも、彼はまるで無反応だった。ユールベルは唇を噛みしめうつむいた。そして、ゆっくりと、思いつめた顔を上げた。

——シャッ！

ラウルの頬に冷たい刃が押し当てられた。ユールベルの仕業だった。机の上のペン立てからカッターを取り、その刃をあてがったのだ。

「ユールベル！」

レオナルドは壁から跳ねるように身を起こした。

「あなたも少しは思い知るといいわ」

彼女にはレオナルドの声など少しも届いていないようだった。まっすぐにラウルを睨み、カッターを持つ手にぐっと力を入れた。固い頬に、わずかに刃が沈む。

だが、ラウルは平然として微動だにしなかった。

ユールベルの顔がこわばった。微かなとまどいの色が浮かぶ。怯えるようにわななく手でゆっくりと刃をずらしていった。彼の頬に赤い一筋が浮かぶ——。

「いいかげんにしろ」

ラウルは横目でギロリと睨めつけた。彼女が怯んだその瞬間、彼は素手で刃をつかみ、強く握りしめた。手から赤い血が滴り、手首、肘へと伝っていく。そして、さらに力を入れると、刃だけを根元からへし折った。

ユールベルは青ざめ、呆然と立ち尽くしていた。柄だけになったカッターが手から滑り落ち、床の上で乾いた音を立てた。

ラウルは血まみれの刃を、机の上に投げ捨てた。そして、おもむろに立ち上がると、真っ赤に染まった手を彼女へと伸ばした。

「い……いや……」

顔を引きつらせ、震えながら後ずさる。頭をぎこちなく横に振り、精一杯の拒絶を示した。だが、ラウルは容赦なく距離を縮め、流血する手のひらを、彼女の眼前に突きつけた。顔に生温いものが滴り流れる。それは、白いワンピースにも落ちていき、胸元を赤く染めた。

「見ろ。おまえの行動の結果だ」

「違う……私、こんなつもりじゃ……私じゃ……私じゃない！」

ユールベルは顔をそむけ、目をつむり、声の限りに叫んだ。その直後、糸が切れたように、膝からガクンと崩れた。ラウルは素早くそれを抱きとめた。床に倒れ込むすんでのところだった。意識を失った彼女は、力の抜けた体を、すっかりラウルに預けている。

レオナルドは動くことも声を発することもできず、ただその光景を目に映すだけだった。顔からは血の気が失せ、足はカクカクと震えている。立っていることさえ危うい状態だ。

「出ていけ」

ラウルはぞっとするほど冷たい視線を彼に向けた。

「お、おまえ、なんで……」

「出ていけ」

同じ言葉を、語気を強めて繰り返す。そして、血で染まった手をレオナルドに突き出した。

「うわあ！」

彼は情けない悲鳴を上げ、しりもちをついた。ラウルは乱暴に引き戸を開けると、レオナルドを医務室から蹴り出した。間髪入れずに扉を閉め、ガチャリと鍵を下ろす。あっというまの出来事だった。

レオナルドは蹴られた腹を押さえ、うめきながら立ち上がった。扉を引いてみたが、ガタガタと音を立てるだけで、開くことはなかった。扉に手を掛けたまま、下唇を噛みしめる。そして、怒りをぶつけるように、力いっぱい扉を叩きつけた。

「どいてくれないか」

頭上から降る高圧的な声。扉を背に座り込んでいたレオナルドは、口を真一文字に結んだ。その一言だけで、嫌悪するに十分だった。間違いなくあいつの声だ——。睨みをきかせながら、ゆっくりと顔を上げる。そこに立っていたのは、案の定、サイファだった。大きな黒い紙バッグを脇に抱えている。

「ここに用があるんでね」

彼は冷たく見下ろしながら、親指で医務室の扉を示した。レオナルドははっとして立ち上がった。

「中に入るなら、俺も一緒に入れてくれ！」

サイファは詰め寄る彼を制した。

「おまえは追い出されたんだろう。気が立っているときのラウルは何をするかわからないぞ。下手をすると殺されるかもな」

「脅かそうたってそうはいかない。もしそうなら、おまえだって……」

レオナルドは食い下がった。だが、そんな彼を見て、サイファはふっと口元を緩めた。

「残念ながら私は特別でね。ラウルが私を殺すことはできない」

レオナルドにはその意味がわからなかった。怪訝に眉をひそめる。しかし、それを追求するよりも、今はもっと重要なことがあった。

「だったら、おまえから俺のことを頼んでくれ。ユールベルに会わせてくれ」

「それが目上の人間に物を頼む態度か？」

サイファは尊大にそう言うと、レオナルドを押しつけ、扉をノックした。レオナルドはこぶしを震わせながら歯噛みした。怒りで上気した顔を深くうつむけると、押し殺した声で唸るように言った。

「……お……お願いします」

彼にとっては耐えがたい屈辱だった。よりによって、最も腹立たしく、最も疎ましい相手である。しかし、自尊心をかなぐり捨ててもユールベルに会いたい。会わなければならない。その思いの方が強かった。

サイファは冷めた目で彼を見やった。まだ足りないとはばかりにあごをしゃくる。レオナルドは切れそうになる自分を必死につなぎ止めた。半ば自棄になりながら、床に手をつき頭を下げた。

そのとき、中から扉が開いた。薄暗い廊下に光の帯が伸びる。そして、そこにラウルと思われる影が映った。サイファはさっと医務室に入ると、後ろ手で扉を閉め、鍵をかけた。

レオナルドは土下座したまま、その場に残された。何かを言う間もなかった。ただ、啞然として扉を見つめるだけだった。手から廊下の冷たさが染みてきた。

「着替えだ」

サイファは黒い紙バッグを机の上に放り投げた。カタンと固い音がした。中にはいくつか箱が入っているようだった。

ラウルは疲れたように椅子に身を投げた。そして、あきれ口調でため息まじりに言った。

「私は殺人鬼か」

「感謝してほしいくらいだよ」

サイファはにっこり笑った。

「レオナルドを追い払うためさ。どうせ扉の前でしつこく座り込んで耳をそばだてているだろうが」

扉がガタンと音を立てた。レオナルドが動揺して体勢を崩したのだろう。サイファは失笑した。

「それに、言ったことは間違っていないと思うがね」

後ろからラウルの肩に腕をのせ、挑発的な笑みを口元にのせた。

「私を殺せないということも」

耳元で囁くように言葉を落とす。

「囷に乗るな。何もかもどうでも良くなることもある」

ラウルはむっとしてそう言うと、サイファの頭を押しつけようとした。だが、彼はそれをひよいかわし、軽い調子で笑った。

「おまえと本気でやりあえるのなら、それはそれで本望だよ」

ラウルは無言で眉をひそめた。

「それで、ユールベルはどうしている」

サイファは急に真面目な顔になり尋ねかけた。ラウルは、紙バッグを床に下ろしながら答えた

。

「気を失っただけだ。今は私の部屋で休ませている」

「あまり、いじめないでやってくれよ」

サイファは彼の左手に目を向けて言った。そこには真新しい白い包帯が巻かれていた。

「刃物を持ち出したのはあいつだ。何の覚悟もなくな」

「必死だったんだよ。おまえもそのくらいわかっているだろう。もう少しソフトに受け止めてやってくれよ」

「おまえがやれ。父親代わりはおまえだろう」

ラウルはいらだたしげに、冷たいまなざしを向けた。

「私に出来ることはやっているよ」

サイファはパイプベッドに腰を下ろした。

「ただ、彼女がすぎるのはいつもおまえなんでね」

「迷惑だ」

ラウルはすげなく答えた。無表情で背を向ける。そんな彼を見て、サイファはにこりとした。

「私よりおまえのほうが優しいことを、無意識のうちに感じとっているのかもな」

ラウルはわずかに振り返り、肩ごしに鋭く睨みつけた。しかし、サイファは軽く笑ってそれを受け流した。

「少なくとも、今の彼女に必要なのは、レオナルドではなくおまえだ。落ち着くまで、せめて一晩くらい一緒にいてやってくれ」

「断る」

ラウルは即座に拒否した。微塵のためらいもない。にもかかわらず、サイファは勝手に話を進めていった。

「ルナのことは心配するな。一晩、預かってくれるよう頼んでおこう。いや、私が預かるか……そうだ、それがいい」

「おまえなどにルナを預けられるか」

「面倒を見るのはレイチェルだぞ」

ラウルは少し間をおいてから答えた。

「……レイチェルに迷惑は掛けられない」

「やはり優しいな、ラウル先生は」

サイファは含みをもった口調で、からかうように言った。ラウルは固く口を結んだ。

「たまにはいいだろう？ アンジェリカもルナに会いたがっていたよ」

今度はにっこり微笑んで言った。それでもラウルは無言だった。背を向けたまま、振り返ろうともしない。

サイファはそれを承諾と受け取った。

「よし、決まりだな。彼女の弟には、私から連絡しておこう」

「おまえはいつも強引だ」

ラウルはあきれたようにため息をついた。サイファはニヤリとしてパイプベッドから立ち上が

った。腰に手をあて、背筋を伸ばす。

「嫌いじゃないんだろう。レイチェルもあれでけっこう強引だからな」

ラウルは何も答えなかった。前を向いたまま机の上でこぶしを握りしめた。白い包帯が千切れそうなくらいに引っ張られ、微かに音を立てた。

「大丈夫なのか。かなり出血したようだが」

サイファはそのこぶしに目を落とした。

「たいしたことはない」

「無茶はするな」

気づかうように言うと、ポンと肩に手をのせた。それから、はたと思い出したように付け加えた。

「そうだ、今度どこかを切ったときは、手当てをする前に私を呼んでくれ」

ラウルはぴくりと眉を動かした。椅子をまわし、サイファに向き直る。

「まさか、くだらん噂を信じているわけではないだろうな」

「おまえの血は青色だとか、緑色だとか、飲めば不老不死になるとか？」

サイファはどこか楽しむような声音で、悪戯っぽく尋ねかけた。そして、挑むようにラウルを覗き込んだ。

「血が赤いということは知っているけどね」

そう言いながら、彼の頬につけられた浅い傷を親指でなぞる。その傷は、わずかに赤黒かった。

「だが、不老不死の方は、試してみないことには、わからないだろう？」

「おまえがそこまで愚かだったとはな」

ラウルは小さく息をつきながら、彼の手を払いのけた。焦茶色の長髪を大きく波打たせ、再び背を向ける。

サイファはにっこり笑い、軽く右手を上げると、医務室をあとにした。

レオナルドは深くうなだれ、扉の脇で座り込んでいた。左右に長く続くガラス窓には、一面紺色の景色が映し出されている。行き交う足音も次第にまばらになっていき、あたりは寂寥としていた。

鍵の開く音、そして扉の開く音――。

中から出てきたのはサイファだった。レオナルドは凄まじい形相で睨み上げた。

「俺をいじめてそんなに楽しいか」

「まあな」

サイファは悪びれもせず、あっさり肯定した。

「我々の話は聞いていたな」

「……………」

レオナルドは目をそらせ、口をつぐんだ。聞き耳を立てていたことは、サイファにばれている。それはわかっていた。だが、素直に認めることには抵抗があった。

サイファはそのことについて、それ以上の追求はしなかった。

「ユールベルはラウルのところに預けた。今日は帰った方がいい」

「冗談じゃない、なぜラウルなんだ！」

レオナルドは立ち上がり、サイファに噛みついた。サイファは横目で彼を一瞥した。

「今のおまえではユールベルを支えてやれないからだ」

「そんなことはない！」

「おまえは不安定になったユールベルの行動を見ていながら、止めることができなかった」

レオナルドは何も言い返せなかった。唇を噛みしめうつむく。

「そもそも、おまえが日頃から彼女の悩みを、痛みをわかってやっていれば、それを受け止めてやっていれば、彼女があんな極端な行動には出ることはなかった。違うか？」

サイファは淡々と追いつめた。

「好きだという気持ちは大切だ。だが、おまえの場合はそれが強すぎる。自分の気持ちを押しつけるばかりで、相手を見ようとしめない」

「違う！俺はいつも見ていた！」

レオナルドは必死に否定した。サイファは冷めた視線を投げた。

「見ていてわからなかったのなら、なおのこと悪いな」

レオナルドは完全に負けた。返す言葉などなかった。くやしさと情けなさに肩を震わせた。

「冷静になれ、心にゆとりをもて、そして相手の気持ちを考えろ。そうすれば、今まで見えなかったものが見えてくるはずだ」

サイファは腕を組んで、壁にもたれかかった。

「彼女を支えるには、多少のことでは動じない精神が必要だ。ラウルのようにというのは無理な話だが、せめてもう少し大人になれ。彼女が安心して寄り掛かれるようにな」

レオナルドは怪訝に眉をひそめ、彼の端整な横顔を睨みつけた。

「……何を企んでいる。普段のおまえなら、ユールベルと引き離そうとするんじゃないのか？」

「アンジェリカの婚約者を決めろという声が、最近また強くなってきている。おまえの名前も上がるかもしれない」

「そういうことか」

レオナルドは鼻先で笑った。

「断ってくれるんだろう？ 親に逆らっても、何を敵にまわしても」

サイファは腕を組んだまま、視線を流して尋ねた。レオナルドは真剣な表情で答えた。

「当然だ、見くびるな。おまえのためじゃない。自分自身のためだ」

「固い決意が聞けて良かったよ。おまえが息子だなんてゾッとするからな」

サイファはそう言って、ニヤリと笑ってみせた。レオナルドも口端をつり上げ、負けじと言い返した。

「それはこっちのセリフだ。おまえが父だなんて、この世の終わりだ」

「この点においては、私とおまえは利害の一致する仲間というわけだ。ただし、私はユールベルの父親代わりでもある。彼女を不幸にするようなことはしないつもりだ。わかるな」

「俺は、不幸になんてしない」

レオナルドはまっすぐな瞳をサイファに向けた。しかし、不意にあることが頭をよぎった。はっとすると、眉根を寄せ、首を傾げる。

「ちょっと待て。ユールベルの父親代わりってことは……」

「父親代わりであって、父親ではない。そこは流せ」

確かにそこにこだわるより、もっと大切なことがある。引っかかるものはあったが、そのことについては考えないようにした。

「じゃあな。一晩、頭を冷やしてよく考えろ」

サイファはレオナルドの額にポンと手をのせ、踵を返した。レオナルドは顔をしかめながら、手の感触の残る額を何度も拭った。そして、小さくなる後ろ姿を、奇妙な面持ちで見送った。

ユールベルはベッドの中で目を覚ました。見覚えのある天井。

ここは――。

首を動かし、あたりを見回す。こじんまりとした飾り気のない部屋。だが、とても懐かしい光景、懐かしい匂い。ラウルの寝室だった。以前と違うのは、ベビーベッドがあることくらいだ。

彼女はベッドの上で上半身を起こした。そのとき、何も身に纏っていないことに気がついた。それと同時に、医務室での記憶もよみがえった。目の前を滴り落ちる赤い血、体を伝う生温い感触。思わず吐き気をもよおし、口を押さえてうつむいた。

「目が覚めたか」

ラウルは無遠慮に扉を開け入ってきた。あいかわらずの無表情で、怒っているのかいないのか、押し量ることもできない。

ユールベルは包帯を巻かれた彼の左手に目を落とした。

「ごめんなさい……」

目をそらし、力なく謝る。

「謝るくらいなら、初めからするな」

ラウルは冷淡な言葉を返した。ユールベルの蒼い瞳はじわりと潤んでいった。彼女はまぶたを震わせながら目を細めると、そのまわりの傷跡にそっと指を這わせた。

「本当に治らないのね」

「何度も言ったはずだ」

どれだけ尋ねても、彼の答えが変わることはなかった。白いシーツをぎゅっと握りしめる。それから、小さな声で訥々と語り始めた。

「初めのうちは平気だと思っていたわ。人に何と思われようと関係ないって。それまでの仕打ちに比べたら、好奇の目で見られたり、陰で何かを言われたりすることなんて、なんてことはないって。なのに、どうしてかしら、次第につらくなっていったのよ。どうして……。もしかしたら、人の優しさを知って、人の冷たさも身にしみるようになったのかもしれないわね」

そこまで言うと、さらに深く顔をうつむけた。長い金の髪が、彼女の表情を覆い隠す。

「……こんなことなら、ずっと心を閉ざしていればよかった」

ラウルはじっと黙って聞いていた。そして、彼女が話し終わると、静かに自分の言葉を落とした。

「誰にでも、あきらめるしかないことはある」

ユールベルは頭をもたげ、潤んだ瞳で彼を見つめた。

「あなたにも？」

「誰にでもだ」

「だったら教えて。あなたは何をあきらめたの？」

探るように彼の黒い瞳を覗き込む。だが、彼女にはその奥にあるものを掴むことはできなかった。

ラウルは何も答えず、部屋を出ようとした。

「待って、行かないで。聞かないわ。だから、一緒にいて」

ユールベルはあわてて懇願した。ラウルはドアノブに手を掛けたまま、わずかに振り返った。

「誰かにすがりたいのなら、サイファを頼れ。あいつがおまえの父親代わりだろう」

「おじさまには迷惑を掛けたくない」

「ラグランジェの人間は、どいつもこいつも勝手ばかり言う」

ラウルはその語調に腹立たしさをにじませた。

「勝手ついでに、もうひとつお願いしてもいいかしら」

そう言ったユールベルを、冷たく刺すように睨めつける。彼女はそれに動じることなく彼を見据え、小さな口を開いた。

「私、あなたと一緒にここで暮らしたい」

「前に断ったはずだ」

ラウルはにべもなくはねつけた。

「私、なんでもするわ。あなたの役に立てるように頑張る。あの子の世話だってするわ。だから、私をここに置いて」

ユールベルは必死に訴えかけた。

「おまえは逃げ込もうとしているだけだ」

「逃げて何が悪いの?!」

表情ひとつ変えないラウルを、涙目で睨みつける。しかし、彼の気持ちが揺らぐことはなかった。徹底的に彼女を突き放す。

「他へ行け。迷惑だ」

「どうしてっ……」

ユールベルは涙をこぼしながら、両手で顔を覆った。細い肩を震わせ、何度もしゃくり上げている。

「あきらめるしかない。そういうことだ」

「だったらあなたがあきらめて！」

勢いよく顔を上げ、強い視線を彼に向けた。濡れた頬も濡れたまつげも拭わず、いまだ小さ

くしゃくり上げてる。

ラウルはまっすぐに黒い瞳を返した。そして、静かに言った。

「弟はどうするつもりだ」

ユールベルははっとしてうつむいた。微かに自嘲の笑みを浮かべる。

「忘れていたわ」

目を細め、奥歯を噛みしめる。

「最低だわ。自分のことしか考えていなかった。姉だなんていう資格ないわね。……いいえ、元からそんなものはなかった」

膝を引き寄せ、シーツごと抱えると、そこに顔をうずめた。

「それでも……それでも、やっぱり、あの子は私が守るしかない」

弱々しい声だが、きっぱりと言い切った。おもむろに顔を上げると、細く白い腕を伸ばし、ラウルに手のひらを向けた。

「帰るわ。服と包帯、返して」

きつい口調で、精一杯、強がってみせる。ラウルは無表情で彼女を見下ろした。

「今晚だけ泊まっていけ。弟にも連絡を入れておく」

ユールベルの腕から力が抜けた。軽い音を立てて、シーツの上に落ちる。

「優しくするか冷たくするか、どちらかにしてほしいわ」

伏目がちに複雑な表情を見せると、ぼそりつつぶやいた。

ラウルは前に向き直り、部屋を出ようとした。

「待って！ 行かないで！」

ユールベルは怯えた声で引き止めた。ラウルは背を向けたまま足を止めた。

「私はおまえと違って暇ではない。……あとで戻る。大人しく寝てろ」

淡々とそう言うと、部屋を出て、静かに扉を閉めた。

チチチチ……。

小鳥のさえずりが遠くに聞こえる。木々のざわめきがそれに重なる。細く開いた窓から、ひんやりとした空気が流れ込み、薄地の白いカーテンをふわりと舞い上げた。窓からの柔らかな光が大きく揺らめく。机に向かうラウルにもその風は届いた。彼の長い髪がさらさらとなびいた。

——ガチャッ。

奥の部屋からユールベルが姿を現した。真新しい上質な白いワンピースに、黒いエナメル靴、おろし立ての白い包帯、緩やかなウェーブを描く金色の髪。すっかり身支度を整えている。

彼女はゆっくりと足を進めていった。

「帰るわね」

机に向かうラウルに、後ろから声をかける。

「ああ」

ラウルは振り返らずに返事をした。ユールベルは目を細め、彼の背中をじっと見つめた。

「……また、来てもいいかしら」

「診察にならな」

素っ気ない答えを返す。ユールベルは後ろから彼に腕をまわした。広い背中に頬を寄せ、そのあたたかさを感じながら目を閉じた。

「さようなら」

囁くように告げられたその言葉は、微かに震えていた。

ユールベルは医務室を出て、扉を閉めた。そのとき、脇でレオナルドが座り込んでいることに気がついた。服にも顔にも、血がついたままだった。すでに変色して、赤というよりも黒に近くなっている。

「ずっと、ここにいたの？」

「情けないな。俺ではラウルの代わりにもならないのか」

レオナルドはうなだれたまま、自嘲ぎみに言った。ユールベルの胸に痛みが走った。何も答えることが出来なかった。ただ、眉根を寄せ、うつむくだけだった。

「おまえはもう俺のことを必要としなくなっていた。それは、だいぶ前からわかっていた」

「……頼んでおきながら、勝手よね」

「勘違いするな。おまえを好きになったのは、頼まれたからじゃない」

レオナルドは、隣で立ち尽くすユールベルに、ちらりと目を向けた。

「だから、これからも勝手におまえのことを好きでいる」

「私なんかのどこがいいのよ」

ユールベルは後ろで手を組み、壁にもたれかかると、投げやりに言った。

「理由が欲しいなら、いくらでも挙げてやる。それとも、迷惑ってことなのか？」

レオナルドは淡々と尋ねた。ユールベルは困惑して顔を曇らせた。

「私は、どうすればいいの？」

レオナルドはじっと考え込んだ。そして、静かに口を開いた。

「俺を見ていてくれ。きっと、おまえを受け止められるような男になってみせる。ラウルの代わりでなく、ジークの代わりでなく、俺を俺として好きになってくれるまで待つさ」

穏やかだが、力強さを感じさせる声。いつもの彼にはない落ち着きもあった。

ユールベルは遠くを見て、目を細めた。

「前にも言ったわ。あなたの気持ちには応えられないかもしれないって」

レオナルドはふっと笑ってうつむいた。

「前にも言っただろう。それでも俺はあきらめない。未来のことは誰にもわからない、そうだろう？」

ユールベルはゆっくりと彼に振り向いた。そして、静かに尋ねかける。

「あなたは、何かをあきらめたことはあるの？」

「……あるさ」

レオナルドは低い声で短く答えた。頼りなく目を伏せている。しかし、すぐにその表情を引き締めると、瞳に決意をみなぎらせた。

「でも今度は、おまえのことだけは、絶対にあきらめるつもりはない」

「あなたのそういうところ、うらやましいわ」

ユールベルは足元を見つめながら、少し寂しげに微笑んだ。そして、そっと顔を上げると、窓の外の青い空を遠望した。

73. 進路

ガラガラガラ——。

ジークは引き戸を開け、中に入った。いつもは賑やかな教室が、今はしんと静まり返っている。

そこにいたのはラウルひとりだけだった。窓際の椅子に座り、青色のファイルに目を落としていた。ファイルを持つ左手は、白い包帯で覆われていた。

ジークは乱暴に椅子を引き、向かいの席に腰を下ろした。ふたりの間の机には、窓からの強い光が落ちていた。その照り返しのまぶしさに、思わず目を細める。わずかに顔をそむけ腕を組み、正面に座る担任の言葉を待った。

「魔導省か」

ラウルはファイルを閉じると、感情のない声でつぶやいた。ジークはむっとして眉をひそめた。

「文句あるのかよ」

ぶっきらぼうな口調でふてぶてしく突っかかる。だが、ラウルは無表情のままだった。彼を見もせず、ファイルを机に置くと、冷淡に言い放った。

「やめておけ。おまえには向いていない」

「なんだと？」

ジークは顔をしかめた。そして、身をのり出すと、いきり立って語気を荒げた。

「いきなりそれかよ！ おまえにそんなことわかるのか？ 俺の何を知ってるっていうんだ！」

「あそこは理不尽なことが平然とまかり通るところだ。おまえにはそれを受け入れる覚悟があるのか」

ラウルはジークを見据え、静かに言った。ジークは当惑の表情を浮かべた。考えもしないことだった。返答に窮し、目を泳がせる。

「忠告はした。あとは勝手にしろ」

ラウルは冷たく言い捨てた。ジークはカチンときた。途端に強気になり言い返す。

「ああ、言われなくても勝手にするぜ」

「おまえが望めばサイファがどうとでもするだろう」

ラウルはファイルを手に取り、すっと立ち上がった。ジークの頭に一気に血がのぼった。奥歯を噛みしめると、目の前の長身の男をキッと睨み上げた。

「俺の実力じゃ受かるわけねえって言いたいのか？」

怒りを込めた低い声で尋ねる。ラウルは冷たい目で彼を見下ろした。

「魔導の実力やアカデミーの成績は問題ない。問題はおまえのその態度だ」

ジークは息を呑んだ。

「気に食わないからといって、そういうあからさまな態度をとってはいは受かりはしない。受かったとしても昇進は見込めない。」

ラウルは淡々とそう言うと、ファイルを脇に抱えた。

ジークは苦々しく顔をしかめた。言葉もなく目を伏せる。痛いところを突かれた。その自覚はあった。だが、ラウルに対しては意地を張りたかった。

「……これは、相手がおまえだからだ。いざとなれば、上手くやる」

精一杯の反抗心は、自信なさげな弱々しい声で語られた。

ラウルは無言で背を向け歩き出した。

「た、たとえ！」

ジークは去り行く背中に向かって声を張り上げた。ラウルの足は止まった。

「たとえ、上手くいかなかったとしても……」

そこでいったん言葉を切った。グッと表情を引き締め、瞳に強い光を宿らせると、彼の大きな背中を凝視した。

「俺は、サイファさんに頼ろうなんて思ってねえ。自分の力でやっていく」

今度は決意をみなぎらせた声で、きっぱりと言い切った。

ラウルはわずかに振り返った。

「ならば、はっきりとサイファにそう言うておくんだな。放っておくと、あいつは勝手なことをやりかねない」

「ああ、そうするぜ」

ジークは投げやりに答え、フンと鼻を鳴らした。ラウルは再び背を向けた。そして、ふいに口を切った。

「サイファに関わるとろくなことがない。あいつには近づきすぎるな」

その声には、苛立ちと反感のようなものが微かに含まれていた。ジークは怪訝に眉をひそめた。

「俺は進路指導に来たんであって、人生相談に来たんじゃねえぞ」

彼のその言葉に、ラウルは何も答えなかった。無言のまま、大きな足どりで教室を出ていった。ちらりと見えた横顔は、相変わらずの無表情だった。

ひとり残されたジークは、大きく息を吐きながら、机に突っ伏した。机の表面は、昼下がりの強い陽射しに照りつけられ、熱いくらいだった。しかし、今の彼には、それがちょうど心地よく感じられた。

ジークは教室を出ると、食堂に向かい歩き出した。あたりは多くの生徒が談笑しながら行き交い、騒がしいくらいに賑やかだった。誰も皆、楽しそうに見える。彼は無意識に足を早めた。ときおりスニーカーがキュッと軽い音を立てた。

小走りで階段を駆け降りると、彼ははっとして足を止めた。その視線の先にいたのは、レオナルドとユールベルだった。ここは彼らの教室の近くだった。そうでなくても同じアカデミーにいる以上、校舎内のどこで出会ってもまったく不思議ではない。だが、できれば出会いたくない相手だ。

彼らも気づいたらしく、同様にはっとしてジークを見ていた。ジークはわずかに身構えた。また、いつものように、レオナルドが嫌味のひとつでも吹っかけてくるだろうと思った。だが、

彼は不機嫌な顔を見せただけで、つんと無視をして通りすぎた。彼に手を引かれたユールベルも、とまどいがちに顔をそむけた。ジークの視界の隅を、白い包帯が流れた。

ジークは思わず振り返っていた。首を傾げながら、階段を上がるふたりの後ろ姿を睨んだ。肩すかしをくらった脱力感、無視されたことの腹立たしさ、ふたりの態度への疑問など、さまざまに入り混じった感情が、彼に複雑な表情を作らせていた。

「ジーク！ここだよ！」

リックは食堂に入ってきた彼を目ざとく見つけ、声を張り上げた。笑顔で大きく手を振っている。アンジェリカも隣でにっこり微笑んでいた。先に進路指導の面談を終えたふたりは、ここでジークを待っていたのだ。

ジークは軽く右手を上げて応えると、コーヒーを買ってから、ふたりのいる窓際の席についた。一面の大きなガラス窓から陽光が射し込み、まぶしいくらいに明るい。食堂には彼らの他にもちらほら生徒がいて、遠くで笑い声やはしゃぎ声が上がっている。のどかな昼下がりの光景だ。

「どうしたの？」

そんな中でひとり冴えない顔をしているジークを見て、リックは心配そうに声を掛けた。ジークはコーヒーをひとくち流し込むと、膨れっ面で頬杖をついた。

「ここに来る途中でレオナルドに会った」

「また喧嘩したのね」

アンジェリカは呆れ口調で言った。

「そうなるかと思ったけど、あいつ、完全に無視しやがった。嫌味を言われるよりも腹が立つぜ。ユールベルも俺を避けるみたいに目を逸らすしな」

ジークは面白くなさそうにそう言い、口をとがらせた。

「ユールベル、来てたんだ」

ぽつりと漏らしたアンジェリカのひとことに、ジークははっとして振り向いた。

「違っ……別に、だからどうってわけじゃねえんだ！」

慌てふためいて、とっさに稚拙な弁明をする。だが、曖昧な言い回しは彼女に通じなかった。ぽかんとしてジークを見ている。彼の顔にわずかな赤みがさした。リックは隣で声をひそめて笑っていた。

「ええ、別に来ていてもいいんだけど……」

アンジェリカとジークの話は噛み合っていなかった。だが、ジークは訂正しなかった。黙って彼女の話の続きを聞いた。

「きのうはユールベル、事情があって家に帰れなかったみたいなの。だから、今日アカデミーに来ているとは思わなくて。そう、それできのうだけアンソニーをうちで預かったのよ」

「アンソニーって、ユールベルの弟だったな」

ジークはエプロン姿の彼を思い出していた。ターニャの卒業祝いパーティで、張り切って料理をしていた姿が印象深い。まだ顔立ちはあどけなかったが、その言動は姉のユールベルよりもし

っかりしていた。

「ええ、それにルナちゃんも来ていたのよ。もうけっこう歩けるし、言葉もしゃべるの。とっても可愛いわ」

アンジェリカは声を弾ませた。だが、ジークはまるで興味を示さなかった。ぼんやりと聞き流しながら、ふと、ラウルの左手の包帯のことを思い出した。ルナを預けたのは手を怪我したせいなのだろうか。あのラウルが怪我をするとは、いったい何が原因だったのだろうか。彼の関心はそちらに向かっていた。

「楽しそうだね」

リックはにこにこして相槌を打った。アンジェリカも顔をほころばせて頷いた。

「本当、賑やかで楽しかったわ。私にも弟や妹がいればいいなって思っちゃった」

「今からでも遅くないかも」

リックが言い終わらないうちに、ジークはテーブルの下で彼のすねに蹴りを入れた。横目で睨みつける。リックは痛みをこらえて苦笑いした。ふたりのおかしい様子に、アンジェリカは目をぱちくりさせた。

「じゃあ、お兄さんはどう？」

リックは話題を変えた。人さし指を立てて尋ねかける。

「そうね、リックみたいな優しいお兄さんだったら、いいかもしれないわ」

アンジェリカは少し考えながらそう言うと、彼に明るく笑いかけた。

ジークは頬杖をつき、コーヒーを口に運んだ。彼自身は、気にしていないふうを装ったつもりだったが、表情ににじむ不機嫌さは隠しきれなかった。

「ジークがお兄さんだったら？」

リックは軽い調子で質問を続けた。ジークはぎょっとして彼を見た。あやうくカップを滑り落とすところだった。

アンジェリカは首を傾げながら、じっとジークを見つめた。

「毎日、喧嘩してそう」

真顔でぽつりと言った。しかし、すぐに笑って付け加えた。

「でも、きっと楽しいわね」

ジークの頬は赤く染まった。そして、嬉しいような困惑したような、ぎこちない笑顔を返した。

「なによ、私が妹じゃ不満？」

アンジェリカは口をとがらせた。ジークは弱り顔でぼそりと答えた。

「不満ていうか、妹って……」

「生意気だから妹には似つかわしくないってこと？」

彼女はさらにきつく問いつめた。

「そうじゃねえよ！」

ジークは反射的に言い返した。だが、それきり言葉を繋ぐことが出来なかった。困ったように顔をしかめ、前髪をくしゃりと掴む。

アンジェリカは怪訝に彼を覗き込んだ。

「そうじゃなくて、何なの？」

「まあまあ、落ち着いて、ふたりとも」

リックがふたりに割って入った。ジークにとってはありがたい助け舟となった。ふうと安堵の息をついた。

「そうだ、進路指導はどうだったの？」

リックの質問に、ジークの心は落ち着く間もなく波立った。けわしい顔で頬杖をつくのと、口をとがらせた。

「俺は役人に向いてねえからやめとけてよ。自分こそ教師に向いてねえくせに」

「でも、やめる気はないんでしょう？」

アンジェリカはくすりと笑って尋ねた。

「当たりまえだ。忠告だなんて偉そうに。よけいな世話だぜ」

ジークは腹立たしげに答えた。そのとき、ふいに、進路指導でラウルが口にしたもうひとつの忠告を思い出した。そして、あのとき頭の隅をかすめた疑問――。

「なあ、ラウルとサイファさんって、仲が悪いのか？」

窓の外に目をやりながら、その疑問を彼女にぶつけた。ガラスの向こうでは、木々の緑がかすかに揺れている。

「どうして？」

アンジェリカは驚いて尋ね返した。

「なんとなく。さっきも、ラウルのヤツ、サイファさんに関わるなとか言ってやがったし」

「それは、お父さんについていうよりも、ラグランジェについて意味じゃないかしら。今までも私のことで巻き込まれているから、心配しているのよ」

彼女は冷静に答えた。だが、ジークは腑に落ちない表情で眉をひそめた。

アンジェリカは淡々と話を続けた。

「私の見た限りでは、お父さんとラウルは仲が悪いってことはないと思うの。お父さんが軽口を言って、ラウルに睨みつけられるってことは、よくあるけれど」

その光景が目につかんで、ジークは軽く吹き出した。しかし、すぐにはっとして考え込んだ。まさか、それが原因で、ラウルはサイファさんを嫌うようになったのだろうか――。同時に、それくらいのことで嫌うようになるだろうかとも思った。

難しい顔をしている彼を見て、アンジェリカは付け加えた。

「お父さんが子供の頃、ラウルが家庭教師をしていたみたいなのよね。それ以来の長い付き合いだから、軽口も言えるんだと思うわ」

「家庭教師？」

ジークにとって、それは初耳だった。ふたりの姿とその事実を重ね合わせると、その関係がとても不思議なものに思えた。ますますわからなくなった。

「……レイチェルさんとは？」

ついだと思い、ジークはもうひとつ気に掛かっていたことを尋ねた。アカデミーの中庭で話

していたふたりの姿が、ずっと頭から離れなかった。話は一部しか聞いていないので、内容はよくわからなかった。だが、何かがあったらしい。ラウルのあの怒り様も、ただ事ではないと思った。

アンジェリカはきょとんとしながらも、素直に答えた。

「ラウル？ お母さんの家庭教師だったこともあるらしいわよ。ふたりがしゃべっているところはあまり見たことないけれど、仲が悪いつてことはないんじゃないかしら」

ジークはじっと考え込んだ。アンジェリカは訝しげに彼を覗き込んだ。

「どうしてそんなことを訊くの？」

「ちょっと気になっただけだ。別に深い意味はねえよ」

ジークは素っ気なく答えた。それから、再び頬杖をつくと、口をへの字に曲げた。

「でも、なんか引っかかるんだよな、いろいろと。隠しごとをされてるって言ったら、言い過ぎかもしれねえけど」

「もしかしたら、あのことかしら」

アンジェリカは軽く握った手を口元に添え、ぽつりと言った。

「心当たり、あるの？」

リックは抑えた声で尋ねた。

「ええ」

アンジェリカはこくと頷いた。

「お父さんとお母さんが結婚する前に、私ができたことかなって」

ガタガタン！

ジークは勢いよく立ち上がった。椅子が倒れ、食堂に大きな音が響いた。驚愕の表情でアンジェリカを見下ろし、口をカクカクと震わせた。

「おっ、おまえっ！ なんでそれ知ってた！！」

右足を後ろに引いて、彼女を指さしながら、大声でわめき立てた。彼の顔は耳まで真っ赤になっていた。隣では、リックがゲホゲホとむせこんでいた。

「え？ ジーク、知っているの？ どうして？」

アンジェリカも驚いて、逆に聞き返した。

「お、俺は、サイファさんに聞いた……」

ジークは狼狽しながら、次第に消え入りそうな声で答えた。どうしていいかわからないといった様子で目を泳がせている。

「お父さん、ジークにそんなことまで話していたのね」

アンジェリカは大きな黒い瞳で彼を見つめ、ひとりごつのように言った。

「ていうか、おまえこそ何で……」

ジークの心臓は、いまだに早鐘のように打っていた。一方のアンジェリカは、いたって冷静だった。

「親戚たちがよく私の近くで、ひそひそとそんな話をしているのよ。聞こうと思わなくても聞こえるわ」

さらりとそう言ったかと思うと、急にむっとして眉根を寄せた。

「だから呪われているんだとか罰だとか、そういうことを言うのよ、あの人たち。非科学的にもほどがあるわ。そう思わない?!」

彼女は強い口調で同意を求めた。

「あ……ああ……」

ジークは勢いに押され、まごついた返事をした。

「このことをジークに話していたってことは、隠していることはこれじゃないわね」

アンジェリカはそうつぶやきながら、真剣に考え始めた。

ジークとリックは隠れるようにして身をかがめ、こっそり囁きあった。

「俺、あいつがわからねえよ」

「僕はいろんなことに驚きすぎて、わけがわからないよ」

リック乾いた笑いを浮かべた。彼は彼女の話した事実さえ知らなかった。当然の反応といえるだろう。

「なにふたりでひそひそ話しているの？」

アンジェリカは怪訝にふたりに振り向いた。

「アンジェリカの進路指導はどうだったのかなって」

リックはとっさに取り繕った。彼女はそれに素直に答えた。

「やっぱり年齢がネックなのよね。比較的、融通がきくのは研究所らしいわ」

「研究所って、俺がアルバイトしていたところか？」

ジークは倒れた椅子を起こして座った。

「他にもいくつかあるみたい。でもやっぱり、あそこがいいかしら」

「悪くねえと思うけど……」

そう言いながら、ジークは研究所でのことを思い起こした。あの研究所では、サイファの影響力がとても強いように見受けられた。特別扱いされたくない彼女にとって、居心地は良くないかもしれない。いや、どこへ行ったとしても、多少は特別扱いされるに違いない。ラグランジェ本家の娘という肩書きに加え、働くには若すぎる年齢がある。他とまったく同じというわけにはいかないだろう。彼女自身はそのことをわかっているのだろうか。

「リックはどうだったの？ 進路指導」

アンジェリカはふいにリックに話題を振った。

「僕は、教師になるのか確認されて、それで終わりだったよ」

ジークとアンジェリカは啞然として彼を見た。

「それだけか？」

「問題がないってことね」

アンジェリカはうらやましそうに言った。

「リック！」

セリカが小走りで駆け寄ってきた。上品な顔立ちを明るく輝かせている。薄手のジャケットと

短いタイトスカートが、すらりと背の高い彼女によく似合っていた。

「何か深刻な話？」

曇り顔のジークとアンジェリカを目にすると、彼女は遠慮がちに尋ねた。リックは優しく微笑んで答えた。

「ちょっと進路の話だね」

「そっか、もう四年生なのね」

セリカは少し感傷的に言った。彼女はもともとリックたちとクラスメイトだったが、一年生のときに自主退学をしていた。もし退学していなければ、彼女も同じ四年生になっていただろう。今を後悔しているわけではないが、ふとそんな気持ちが心を通り過ぎた。

彼女はジークを見て、にっこりと笑顔を作った。

「ジーク、夢、かなえてね」

彼は一瞬、呆気にとられた。しかし、すぐにむっとした表情に変わった。ぷいと横を向くと、つんとして答えた。

「おまえに言われるまでもねえよ」

「そうね」

予想どおりの反応に、セリカはくすりと笑った。

リックは肩をすくめて苦笑いした。いつまでたっても、ジークはセリカに冷たいままだ。過去のことを引きずっているのか、ただ単に彼女のことが気に食わないのか、どちらかはわからない。ただ、彼女の方は気にしてなさそうなのが救いだった。

「それじゃ、僕はこれで」

リックはジークとアンジェリカにそう告げると、鞆を取り立ち上がった。

「ええ、またあしたね」

アンジェリカはにっこりとして手を振った。ジークは仏頂面のまま軽く右手を上げた。

リックとセリカは仲良く並んで食堂を出ていった。

「……外、歩くか？」

窓の外があまりにいい天気だったので、ジークはそう言ってアンジェリカを誘った。彼女も嬉しそうに応じた。

ふたりはあてもなく、校舎のまわりを歩いた。強い陽射しがふたりの後ろに濃い影を作っている。アンジェリカは後ろで手を組み、ピンと背筋を伸ばして顔を上げた。心地良さそうに目を閉じ、光を浴びている。ときおり吹く優しい風が、黒髪をさらさらとなびかせた。ジークは体の中にもあたたかい光が広がるように感じた。

「ねえ、ジーク」

一歩前を歩いていたアンジェリカが、軽いステップを踏みながら、くるりと振り返った。短いフレアスカートがひらりと舞い上がる。ジークは下から覗き込んでくる彼女の笑顔にどきりとした。

「なんだ？」

アンジェリカはさらになっこりとして笑いかけた。

「まだ誰にも言ってないんだけど、私、卒業したら家を出ようと思っているの」

「家出?!」

ジークは素頓狂な声を上げた。

「そうじゃなくて、一人暮らし!」

アンジェリカは眉根を寄せ、強く力を込めて訂正した。

「いつまでも親元で甘えてはいけないと思うのよね」

「いつまでもって、おまえまだ……」

ジークはそこまで言って口をつぐんだ。しまったという表情が見え隠れしている。アンジェリカはむっとして口をとがらせた。

「なによ、子供だって言いたいなの?」

「大変なんだぞ。わかってんのか?」

「わかっているわよ」

アンジェリカはむきになって言い返した。

「だから、今から料理とか洗濯とか、きちんと勉強しているわ。他の人に出来て、私に出来ないわけはないでしょう?」

「本を読んでもただじゃ、料理は出来ねえぜ」

ジークは淡々と言った。アンジェリカはますますむきになった。

「ちゃんと作っているわよ。本職のコックさんには及ばないけれど、けっこう美味しいのよ」

ジークはなんとも言えない表情で彼女を見た。

「なによ、その疑いのまなざしは」

「自分で食ってみたのかよ」

「当たりまえでしょう?」

アンジェリカは、少しも信用しようとしないうジークに、半ばむくれ、半ばあきれていた。だが、突然ぱっと顔を輝かせると、思いきり声を弾ませた。

「そうだわ、今度、食べに来て。ごちそう作るから! ねっ!」

屈託のない笑顔でジークを覗き込む。

「え、あ、ああ……」

ジークはどぎまぎしながら返事をした。思わず彼女のエプロン姿を想像していた。ついさっきまで料理の腕を疑っていたことなど、どこかへ吹き飛んでいた。

「それじゃ、約束」

アンジェリカは小指を立ててになっこり笑うと、ジークの小指に絡ませた。こんなガキくさいこと、とジークは思ったが、彼女の指が触れた瞬間、何も言えなくなった。無邪気に指切りをする彼女が、無性に愛おしかった。しかし――。

「どうしたの?」

ジークが急に顔を曇らせたことに気づき、アンジェリカは不安そうに尋ねた。

「なんか俺、平和ボケしそうでぜ」

「平和なんだから、いいじゃない」

アンジェリカは当然とばかりにさらりと言った。ジークはため息をついた。

「おまえの問題、片付いてねえよ」

「きっと大丈夫よ」

彼女は笑顔を見せた。

「もし、ひいおじいさまがジークに何かしたら、お父さんが仕返しすると思うし、簡単には動けないはずよ。私だって黙っていないわ。だから、心配しないで」

そう言って、右のこぶしをぎゅっと握りしめた。意気込む彼女を見て、ジークは複雑な気持ちになった。ため息をつき、青い空を仰いだ。白く薄い雲が、緩やかに流れていく。

「ホント情けねえな、俺。おまえを守りたいと思ってんのに、逆に守られてんのか」

「情けなくなんかないわ！」

アンジェリカはまっすぐ真剣に彼を見つめた。

「私が毎日、笑ってられるのは、ジークのおかげよ」

「俺、何もやってねえよ」

ジークはとまどいながら、ぶっきらぼうに言った。しかし、そんな彼を見て、彼女はにっこりと笑った。

「生きるのがこんなに楽しいって教えてくれたのは、ジークよ」

ジークは何も言葉を返せなかった。ただ気恥ずかしくて目を伏せるだけだった。嬉しく思う気持ちもあったが、それだけのことをした自信が持てなかった。

アンジェリカは後ろで手を組むと、くるりと背を向けゆったりと歩き出した。そして、足をそろえて止めると、空を見上げた。

「卒業しても、ずっと仲良くしてね」

静かな落ち着いた声。ジークははっとして顔を上げた。

彼女はゆっくりと振り返ると、彼と視線を合わせた。神妙な面持ち、何かを訴えかけるような瞳。いつもより数段、大人びて見える。ジークはごくりと唾を飲んだ。

「……あっ……当たりまえだろ！今さらなに言ってんだ！俺は何があっても引かないって言ったはずだぜ。忘れたのかよ。ずっと、俺はおまえを……俺たちは、これからも……ずっと……！」

彼は不格好に、しかし懸命に言った。

アンジェリカはふと口元を緩めると、無邪気な笑顔を見せた。強い陽射しを浴びた黒い髪が、その表情とともにきらきらと輝いていた。

74. 動き始めた長老

「ユールベル＝アンネ」

ずっしりと体に落ち込むような重みのある低音が、アカデミーの廊下に響いた。背後から名を呼ばれた彼女は、びくりと体をこわばらせた。並んで歩いていたレオナルドも、けわしい顔で足を止めた。ふたりが振り返ると、そこには気難しい顔をした年輩の男が、後ろで手を組み立っていた。堂々たる恰幅を見せつけるように胸を張り、背筋をピンと伸ばしている。その佇まいからは強い威厳が感じられた。

「おまえに話がある。一緒に来てもらおうか」

男は有無を言わせぬ口調で、一方的に告げた。ユールベルの目に怯えの色が浮かんだ。レオナルドは一步踏み出すと、彼女を庇うように、その前に右手を伸ばした。

「どうしてあなたが……」

「レオナルド＝ロイ、おまえに用はない」

口をはさみかけたレオナルドを、男は冷徹な視線で鋭く射抜いた。レオナルドは体をすくませた。喉が乾き、張りつきそうになった。無理やり唾を飲み込もうとする。

男はユールベルに目配せをすると、後ろで手を組んだまま歩き始めた。

「レオナルド、先に帰って」

ユールベルは固い声でそう言うと、早足で男のあとを追った。

「待て！」

レオナルドは手を伸ばし、引き止めようとした。しかし、気持ちとは裏腹に、足は凍りついたように動かない。自分を圧倒する者に対する防衛本能が、足を進めることを拒絶していた。自分の情けなさが腹立たしくて仕方なかった。下唇を噛みしめ、爪が食い込むほどにこぶしを握りしめた。

ユールベルと男は、アカデミーの外れにある寂れた教会へとやってきた。こじんまりとして古びているが、手入れは行き届いているようだ。床も、長椅子も、スタンドグラスも、祭壇も、丁寧に磨き上げられていた。

カツーン、カツーン――。

男はゆったりと靴音を打ち鳴らしながら、教会へ足を踏み入れた。そして、中央まで足を進めると、踵を返し、扉付近で立ち尽くしているユールベルをまっすぐに見つめた。扉から射し込む夕陽が、彼女を後ろから照らし、金の髪を鮮やかに縁取った。床に落ちた長い影は、男の足元まで伸びている。

「おまえにやってもらいたいことがある」

「私なんかは何を頼むっていうの」

彼女はあごを引き、上目遣いでじっと男を睨んだ。

「そう構えるな。簡単なことだ」

男は幾分、柔らかに言ったが、彼女の警戒心が緩むことはなかった。彼を見据えたまま、無言

で次の言葉を待った。男はそれに応じ、核心を口にした。

「アンジェリカとジークの仲を裂いてほしい」

ユールベルは目を見開いた。

「男を誘惑するのは得意だろう？」

彼はさらに畳み掛けた。表情を動かさず、しかし、意味ありげに彼女を見る。ユールベルはカッと顔を紅潮させ、その瞳に激しい怒りをたぎらせた。

「断るわ。他をあたって」

抑制されたその声は、微かに震えていた。声だけではない。肩も、腕も、背中も、小刻みに震えていた。そして、耐えかねたように背を向けると、教会から出ていこうとした。

「今夜はシチューの予定だったようだな」

男は声を張った。ユールベルは足を止め、怪訝に振り返った。話の流れが掴めない。戸惑いの表情を浮かべ、瞳で問いかける。

「アンソニーを預かっている」

男は静かに答えた。彼女ははっと息を呑んだ。みるみるうちに顔が青ざめていく。

「監禁がどんなものか、おまえには言うまでもないだろう」

「アンソニーはどこ?!」

彼女は長い髪を揺らし、切迫した声を上げた。男はふっと小さく笑った。

「役目を果たせば帰すと約束する。変な気は起こすな。おまえには常に見張りがついていると思え」

ユールベルの右目が潤んだ。今にも泣き出しそうに顔を歪ませた。何か言いたそうに口を開こうとしたが、何も言えなかった。はぁと息を吐くと、弾けるように教会から飛び出した。緩やかなウェーブを描いた金の髪を煌めかせ、夕陽の中へと消えていった。

レオナルドは腕を組み、アカデミーの門前を落ち着きなくうろついていた。一分が一時間にも感じる。難しい顔で、何度も何度も校舎の方に目を向けた。

「ユールベル！」

レオナルドはようやく彼女の姿を捉えた。ほっとしたように呼びかけ、走り寄った。しかし、彼女はうつむいたまま、彼を無視して走り過ぎた。

「待て！」

レオナルドは焦って振り返ると、彼女の細い肩を掴んで止めた。

「何があった？」

「何も……」

ユールベルは顔を背けたまま、感情を押し殺して言った。だが、その声にはわずかに涙が混じっていた。レオナルドは彼女の正面にまわりこみ、両肩を掴んで覗き込んだ。

「何も、って顔じゃないだろう」

「ごめんなさい……。今はひとりにして。お願い」

ユールベルは涙を浮かべ懇願した。レオナルドは目を細めうつむいた。彼女の肩にのせた手に

、ぐっと力を込める。

「……わかった」

自らを抑えるようにそう言うと、肩からそっと手を放した。ユールベルはすり抜けるように彼から離れ、走って校門を出ていった。

——ひとりにして良かったのだろうか。

レオナルドは自分の判断に自信が持てなかった。彼女の表情を思い返し、後悔と自己弁護の狭間で揺れた。

ユールベルは全力で走り、息をきらせて自宅へ戻った。ドアノブに手を掛けまわすと、引っかかることなく半回転した。鍵はかかっていないようだ。荒い息を整えるように大きく呼吸をし、ごくりと唾を飲み込む。そして、意を決して扉を開くと、中へ駆け込んだ。

しんと静まり返った部屋には、人の気配はない。だが、ソファの上には、アンソニーが学校へ行くときに使っている鞆が置いてあった。ユールベルの鼓動はますます早く強くなっていった。他の部屋をひとつづつまわっていく。どこにも彼の姿はない。最後に台所を覗く。そこには、シチューの材料と思われる食材が準備してあった。まな板の上には、人参が切りかけのままで放置されていた。

——今夜はシチューの予定だったようだな。

彼女の脳裏に男の低い声がよみがえった。彼はこのことを知っていた。おそらく、ここからアンソニーを連れ去ったのだろう。彼女は両手で顔を覆い、その場に泣き伏した。

ひとしきり泣いたあと、彼女は駆け足でアカデミーに戻った。まもなく日が落ちようかという頃だ。校舎内には、もうまばらにしか人はいない。その中を、彼女は靴音を響かせ走りまわった。あてはない。ここにいるとは限らない。既に帰ったかもしれない。それでも今はこれしか出来ない。

「ホント頭に来るぜ、ラウルのヤツ」

「ジーク、いつも同じこと言っているわよ」

「それで気が晴れるんならいいけどね」

「晴れるわけねーだろ」

ジーク、リック、アンジェリカの三人は、他愛もない話をしながら図書室から出てきた。

「やっと、見つけた……」

ユールベルは肩を大きく上下させ、切れ切れに言葉を落とした。思いつめた顔でジークを見つめる。ジークも彼女の存在に気がついた。様子が普通でないことは、ひと目でわかった。怪訝な視線を彼女に向ける。リックとアンジェリカも、つられて彼女に目を向けた。

ユールベルはまっすぐジークを見つめながら、距離を縮めていった。息づかいまで感じられるほどに近づく。ジークはうろたえ、後ずさろうとした。だが、彼女がそれを許さなかった。踵を上げ、彼の首に手をまわし、体を寄せて抱きついた。

「え？ ちょっ……おまえっ、おいっ！」

ジークは激しく狼狽した。ふわりと舞い上がった甘い匂いが鼻をくすぐる。そして、胸元に感じる柔らかなふくらみ、首筋にかかる温かい吐息——。一瞬、頭の中がぐらりと揺れたように感じた。

しかし、彼女が次に口にした言葉が、彼の理性を呼び戻した。

「弟が人質に取られているの。私も見張られている」

ジークにだけ聞こえるように、耳元で小さく言った。彼ははっとした。それだけで、何が起きたのかおおよその見当がついた。

「詳しい話、聞かせてくれ」

彼女の頭に手を添えると、その耳に触れるくらいに口を近づけ、囁くように言った。ユールベルは浅くこくりと頷いた。

「悪い、俺、今日はユールベルと帰る」

ジークは、呆然としているリックに振り返り、さらりと言った。なるべく何でもないふうを装った。だが、アンジェリカには何も言えなかった。目を向けることすらできなかった。

「……何か、あったの？」

アンジェリカが後ろからぽつりと問いかけた。

「別に」

ジークは背を向けたまま、素っ気なく答えた。そして、ユールベルの手を引き、足早に去っていった。

アンジェリカは無言でふたりの後ろ姿を見送った。リックは心配そうに彼女の横顔を窺った。

あたりは紺色に包まれていた。頬にあたる風も、ずいぶんひんやりとしてきた。ジークとユールベルは、急ぎ足で校庭を横切り、教会へとやってきた。扉は閉まっていた。だが、ジークは躊躇することなく両開きの扉を引いた。

ギィ——。

軋み音が静寂を裂いた。扉がゆっくりと開かれていく。

中はだいぶ薄暗かった。暖色の明かりがほのかに祭壇を浮かび上がらせている程度である。しかし、そのことが、昼間よりも教会らしい雰囲気醸し出していた。

ジークは無遠慮にドタドタと音を立てながら踏み入った。ユールベルの手を引き、祭壇に向かって進んでいく。そして、いちばん前の長椅子に彼女を座らせると、自分も隣に腰を下ろした。

「少し前に、ルーファス＝ライアンに連れられてここに来たの」

ユールベルは声をひそめて言った。

「それ、アンジェリカのひいじいさんか？」

ジークも小声で尋ねた。直感的にそう思った。それ以外に思い当たる人物はいなかった。

ユールベルは小さく頷いた。

「ラグランジェ家の先々代当主よ。知っているの？」

「ああ、一度、話をしたことがある」

「そう」

彼女の胸に漠然とした不安が広がった。ジークがここまでラグランジェ家に関わっていたとは思わなかった。

「それで？」

ジークは続きを催促した。ユールベルは頷いて本筋に戻った。

「彼は、弟を預かっていると聞いたの。家に帰って確かめたけど、実際に夕食を作りかけでいなくなっていたわ」

そこまで言うと、目を細めうつむき、右手で額を押さえた。

「帰してほしいければ、あなたとアンジェリカの仲を裂けて。私を常に見張っているとも……」

ジークはあたりを見渡した。姿は見えないが、確かに人の気配のようなものは感じる。見張られているのは事実かもしれないと思った。

「仲を裂くって、どうすればその役目を果たしたことになるんだ？」

ユールベルは首を横に振った。

「わからないわ。見張りがいるとすれば、その見張りが判断するのもかもしれない」

ジークは背もたれに両腕を掛け、天井を仰いだ。

「ヤツらにそう思わせて返してもらうか、それとも乗り込んで行って奪い返すか……」

「乗り込むってどこへ？」

「監禁場所に心当たりはねえのか？」

ユールベルは固い顔でうつむき、首を横に振った。ジークはため息をつきながら、再び天井を仰いだ。

「弟も魔導は使えるんだろ？ 逃げ出して来ないってことは、多分、結界を張られてるんだろうな」

ユールベルの顔からさっと血の気が引いた。膝の上にのせた小さなこぶしをきつく握りしめると、うつむいたまま顔をこわばらせた。細い肩は、何かに耐えるようにわなないている。

ジークはそれを目にして気がついた。彼女は自分の過去を思い出しているのだと。

「悪リィ。嫌なことを思い出させちゃったな」

彼は申しわけなさそうに顔を曇らせた。ユールベルは顔を上げ、すがりつくように彼の袖を掴んだ。

「アンソニーをあんな目に遭わせたくない！ はや……」

ジークはあたふたとして彼女の口を手でふさいだ。

「声がでかいっ」

ユールベルはしゅんとして黙り込んだ。ジークは安心させるように、今度は落ち着いた口調で言った。

「大丈夫だろ。あいつを傷つけるのが目的じゃねえんだ。ひどい扱いはされてねえよ」

「自宅……かもしれない」

「え？」

ジークはぼかんとした。ユールベルは彼を見上げた。

「部屋がひとつあればいいもの。結界を張ってあるとはいえ、誰が近づくかわからない外より、自分の家の方がよほど安全だわ」

「確かにな」

ジークは腕を組み、考え込んだ。

「あいつの家はどこかわかるか？」

「いいえ、アンジェリカやおじさまなら知っていると思うけど……」

ユールベルはうつむき、言葉を詰まらせた。

「訊くわけにはいかねえよなあ」

ジークがそのあとを引き取って続けた。ため息をつき、腕を組んだまま視線を上げた。口をきゅっと結び、目を細める。

「ラウル……」

ユールベルはぼつりと言った。そして、驚くジークに振り向き、彼と視線を合わせた。

「ラウルも知っているかもしれないわ」

「ラウルか……」

ジークはあからさまに嫌そうに言った。顔をしかめ、頭を掻く。ユールベルは意気消沈してうなだれた。

「心配すんな。訊きに行くって」

ジークは彼女の肩をぽんと叩くと、立ち上がってジーンズのポケットに手を突っ込んだ。

「行くぞ」

ユールベルは立ち上がり、彼のあとについて行った。

「おまえら……！」

ジークは目を見開いた。そこにいたのはリックとアンジェリカだった。教会の外で待ち構えていたのだ。リックは心配そうに顔を曇らせた。アンジェリカは、後ろで手を組みうつむいた。

「帰れよ」

ジークは視線を落とし、感情のない声で告げた。リックは彼の正面にまわりこんだ。

「何か事情があるんだったら、僕らにも話してよ、ね？」

優しく笑顔を作り、訴えかける。しかし、ジークは苛ついたように舌打ちして、顔をそむけた

。「なんもねえよ。俺が誰とどう過ごそうと関係ねえだろ」

突き放すように答えると、ユールベルの手首を掴み、足早に校舎へと向かった。

「ジーク！」

リックは彼を引き止めようとした。だが、アンジェリカはそれを静かに制止した。

「リック、帰りましょう」

そう言って、まっすぐ門へと歩き出した。

リックは、別々に去り行くふたりの背中を、交互に目で追った。そして、悩みながらも、ア

ンジェリカの方に足を向けた。

「ごめんなさい」

ユールベルは消え入りそうな声でそう言うと、申しわけなさそうに目を伏せた。

「いや、俺のせいでおまえを巻き込んだんだからな」

ジークは彼女に背を向けたまま、その言葉を噛みしめた。それは、まるで自らに言い聞かせるかのようだった。

ユールベルは沈痛な面持ちで首を横に振った。

「元はといえば、ラグランジェ家の問題なの。巻き込まれたのはあなたの方だわ」

「どっちのせいかなんて議論は意味ねえよ。解決することだけを考えようぜ」

ジークは淡々と言った。しかし、その言葉が彼女の胸を熱くした。あふれそうになる涙を必死にこらえた。

「弟を取り戻したら、私からアンジェリカにきちんと説明するわ」

それは、彼女なりの精一杯の誠意だった。

「そうしてもらえると、ありがたいな」

ジークは少し疲れたようにため息をつきながら笑ってみせた。

「くそっ、留守かよ！」

ジークは明かりの消えた医務室を睨み、鍵のかかった扉を蹴りつけた。ガシャンと派手な音が虚しく響く。

「待つしかねえか」

ため息まじりにそう言うと、扉を背に座り込んだ。ユールベルは立ったまま壁にもたれかかった。薄明かりの蛍光灯の下、ふたりは無言でラウルを待った。あたりに人影は見えない。気まぐずい沈黙だけが、静かに流れていく。

——カッ、カッ。

うとうとしていたジークは、その靴音に反応し、勢いよく顔を上げた。しかし、それはラウルではなく、パンプスを履いた女性だった。彼女は怪訝な顔を見せたが、そのまま何も言わず通り過ぎていった。

ジークは深く息を吐いた。ここで待ち始めてからどのくらい経つだろうか。二時間、いや三時間くらい経っている。その間、ユールベルはずっと立ったままだった。表情に見える疲労の色は、だいぶ濃くなっていた。

ジークは立ち上がった。

「今日はもう帰ろう。あした出直そうぜ」

ユールベルは不安そうに顔を上げた。捨てられた子猫のような目で、彼を見つめる。

「弟なら大丈夫だろ。あいつらだって悪党ってわけじゃねえんだし」

ジークは彼女を納得させるためにそう言った。彼自身もそう思おうとしていた。だが、心の片

隅には、拭い去れない不安がわだかまっていた。そして、それはユールベルも同じだった。

「だと、いいんだけど……」

「大丈夫だ」

ジークはもう一度、今度は力強く言った。彼女は固い表情で、ぎこちなく頷いた。

ふたりは並んで歩き、アカデミーの門を出た。空はもう完全に闇に覆われている。街灯の小さな明かりだけが、歩き進める頼りだった。

「じゃあな」

ふたりの帰路の分かれ道で、ジークは右手を上げた。そして、自分の帰路へと足を進めようとした。

「待って！」

ユールベルは思いつめた声を上げ、後ろからジークに抱きついた。細い腕にぐっと力を込め、彼の背中に顔をうずめる。そして、桜色の小さな口を開いた。

「ひとりになりたくない……怖いの」

かぼそい声が背中から伝わってきた。ジークは困惑して顔を歪ませた。

「そう言われてもな……」

「いてくれるだけでいいの」

ユールベルは哀願を続けた。森の湖を思わせる蒼い瞳は、緩やかに揺らめいていた。

結局、ジークはユールベルに押し切られた。自分の家に帰ることをやめ、彼女と食事を取り、それから彼女の家へと向かった。ふたりとも口には出さなかったが、もしかしたらアンソニーは戻っているかもしれない——そんな淡い期待が胸をよぎった。

しかし、それは単なる期待で終わった。部屋は真っ暗で、人の気配などまるでない。ソファに投げ置かれた鞆に、作りかけのシチュー。それらは、ユールベルが出ていったときと何ら変わらない状態でそこにあった。

彼女は落胆した表情で、台所を見つめた。

ジークはソファにごろんと横になった。

「あしたは決戦になるかもしれねえ。しっかり寝とけよ」

「アンソニーのベッドがあるから使って」

ユールベルは奥を指さした。ジークは起き上がり、彼女の指先を目で追った。そこには寝室があった。扉は大きく開け放たれている。そのため、明かりは消えていたが、容易に中を窺うことが出来た。寝室としては十分すぎるほどの広さがあるが、飾り気はまるでない。目につくのは両脇にあるベッドくらいだ。彼女は右側を指し示しているのだから、そちらがアンソニーのものなのだろう。サイズは大人のものとは変わらないようだった。

ジークは遠慮することなく、その上に体を投げ出した。仰向けに寝転がり、両手を上げ大きく伸びをする。ユールベルはうっすらと穏やかな笑顔を見せた。

「俺はもう寝るぜ。おまえも早く寝ろよ」

ジークはぶっきらぼうにそう言うと、布団にもぐり込んだ。彼女に背を向け、目を閉じる。

「おやすみなさい」

ユールベルは白いシーツを見下ろしながら、ぽつりと言葉を落とした。

——眠れない。

あれから何時間が過ぎただろうか。ユールベルも自分のベッドに入っていたが、一向に寝つけなかった。何度も無意味に寝返りを打つだけだった。

眠れない理由のひとつは、左目を覆っている包帯だった。いつもは、就寝時には外しているのだが、今日はジークがいるために外せないでいた。醜い傷跡を見られたくなかったのだ。

そして、もうひとつの理由は、ジークそのものだった。彼はアンソニーのベッドでぐっすり眠っているようだった。静かに寝息を立てている。

ユールベルはベッドから下りた。何とかあたりが見渡せるくらいの薄明かりの中、彼女は足音を立てないようにジークに近づいていった。ベッド脇で立ち止まり、無防備な寝顔を見下ろす。じっと見つめているうちに、ふいに右目から涙がこぼれ落ちた。あわてて両手で口を押さえ嗚咽を飲み込むと、素早くそっと寝室を出ていった。リビングルームのソファに座り、膝を抱え顔をうずめた。そして、音を立てないように静かに忍び泣いた。

「そろそろ起きろよ」

遠くに聞こえたその声に、ユールベルは目を覚ました。あたりはさわやかな明るさに包まれている。ぼんやりとした頭で起き上がり、自分のまわりを見まわした。そこはリビングルームのソファの上だった。泣きながらそのまま眠ってしまったらしい。体の上には毛布が掛けられていた。

「おまえ何でこんなところで寝てんだ？ もしかして俺、いびきとか寝言とかうるさかったか？」

ジークは、トーストとコーヒーを手に台所から戻ってくると、ソファに座りながら尋ねかけた。不安げに彼女を覗き込む。彼女は目を伏せ、無言で首を横に振った。

「あ、勝手に風呂とかタオルとか借りたぞ」

その言葉どおり、彼の髪は濡れていたし、首からはタオルが掛かっていた。それだけではなく、彼が手にしていたトーストもコーヒーも、勝手に台所から調達したものだだった。

ユールベルは両手で顔を覆い、すすり泣き始めた。肩を大きく揺らしている。

「え？ あ、まずかったか？ 悪かった。えっと、どうすればいいんだ？」

ジークはトーストを片手におろおろした。ソファから腰を浮かせ、困り顔で彼女を覗き込む。彼女は小刻みに首を左右に振った。

「そうじゃない。私、自分のことがとことん嫌になったの！」

ジークは真面目な表情になった。ゆっくりとソファに腰を下ろす。彼女は小さくしゃくり上げながら話を続けた。

「あなたの良心や優しさにつけ込んで、引き止めてしまった。あなたと一緒にいたかったから……。アンソニーがさらわれたのに、私はこんなことばかり考えて……」

そこまで言うと、うっと言葉を詰まらせた。大粒の涙が、右目から手の甲にこぼれ落ちた。膝の上の毛布をぎゅっと掴み、こぶしを小さく震わせる。

「私、自分がどれほどひどい人間か思い知ったわ」

きつく目を閉じ、涙声で吐き捨てるように言った。そして、背中を丸め、さらに深く顔をうつむけた。こんなひどい表情を見られたくなかった。何より彼の反応が怖かった。

「……そんなもんじゃねえのか」

ジークはソファの背もたれに深く身を沈め、大きく息を吐いた。

「そんなこと、思ったとしても、普通わざわざ言わねえよ」

ユールベルはうつむいたまま、眉根を寄せた。

「俺は気にしてねえから、おまえも気にするな。それより早く準備しろよ。授業が始まる前にラウルのところに行くからな」

ジークは淡々とそう言うと、手にしていたトーストにかじりつき、口いっぱい頬張った。ユールベルは小さくすすり泣きながら、こくりと頷いた。

「おい、ラウル！」

ジークは医務室の扉を乱暴に叩いた。鍵は締まっている。また留守なのだろうか、それともまだ帰っていないのだろうか。そう思ったが、しつこく叩き続けた。

——ガチャ。

鍵を開く音がした。間髪入れず、引き戸が開かれた。

戸口にはラウルが立っていた。左手にはまだ包帯が巻かれている。彼は思いきり不機嫌な顔で、上からジークを睨み下ろした。ジークはぎょっとして後ずさった。

「朝早くから何の用だ」

ラウルはいつもと変わらない冷淡さで尋ねた。ジークは突っかかるように答えた。

「あのジジイの住所を教えろ」

「誰のことだ」

「あいつだ、えーと……」

「ルーファス＝ライアン＝ラグランジェ」

後ろに立っていたユールベルが助け舟を出した。ラウルはその名を聞いて、わずかに眉をひそめた。

「聞いてどうする」

「おまえには関係ねえ」

ジークは苛立たしげに声を荒げた。

「なら、関係あるやつに訊け」

ラウルはすげなく言うと、扉を引いた。ジークはあわてて体を挟み込んだ。扉が彼の腕に直撃し、ガシャンと音を立てて止まった。

「どうしても聞かなきゃなんねえんだ！」

扉に打ちつけられた痛みをしかめながら、必死に訴えかけた。

「お願い、ラウル」

ユールベルも後ろからすがるように懇願した。ラウルはじっと彼女を見つめた。

「そこで待っている」

静かにそう言うと、ジークを押し出して扉を閉めた。彼は、今度はおとなしく従った。扉の前で立ち尽くして待った。

一分ほどすると、再び扉が開いた。戸口に現れたラウルは、二つ折りにされた小さな紙切れを手をしていた。

「それが住所か?!」

「よく考えてから行動しろ」

「わかってる」

ラウルが差し出したその紙切れを、ジークは引ったくるように受け取った。

「今日は遅刻するからな」

仏頂面でそう言うと、踵を返し、早足で歩き始めた。

ユールベルは何か言いたげに、じっとラウルを見つめた。しかし、結局は何も言わず、小走りでジークのあとを追いかけた。

アカデミーの門を出たところで、ふたりはアンジェリカとばったり出くわした。彼女はこれからアカデミーへ行くところだった。ふたりを見て、一瞬、目を丸くしたが、すぐに無表情に戻り、無言ですれ違った。

ジークは唇を噛みしめた。そして、彼女の遠ざかる足音を振り切るかのように走った。

ふたりは住所をたどり、ルーファスの家の前へとやってきた。それなりに立派な家ではあるが、ラグランジェ本家よりはだいぶ小さい。もっとも、非常識に大きい本家と比べること自体が間違っているともいえる。

ジークはユールベルの様子がおかしいことに気がついた。うろたえながらあたりを見まわしている。

「どうした?」

「あれ、私の住んでいたところ……」

彼女は斜め裏の家を指さした。ジークは驚いて目を見張った。

「すぐ近所じゃねえか」

「……ええ」

彼女はそれだけ答えるのが精一杯だった。ジークと同様に、いや、それ以上に驚いていた。彼女はアカデミー入学前、何年もの間、自宅の二階に幽閉されていた。知らなくても、もしくは忘れていても無理はない。

彼女は自分が住んでいた家の二階を、目を細めて見つめた。改築のため、窓の形が変わっている。厚い遮光カーテンも引いていない。もうあの頃の面影はなかった。しかし、それでも忘れられるものではない。ふいに過去の出来事が鮮明に蘇ってきた。光のあたらない部屋、湿った不

快な匂い、結界の外から冷めた目を向ける父親——。思わず吐き気をもよおし、下を向いて両手で口を押さえた。

「大丈夫か？ しばらく休むか？」

ジークは心配そうに顔を曇らせた。ユールベルは眉を寄せた。冷や汗が、ひたいから頬に伝い、床に落ちた。

「……いいえ、平気よ」

アンソニーを早く助けなければ。あの子にこんな思いはさせたくない。だから、姉である自分がしっかりしないと——。彼女は胸を押さえ、大きく息を吸い、顔を上げた。気持ちを立て直し、表情を引き締めた。

ジークも表情を引き締め頷いた。そして、ルーファスの家を見渡した。

「でも、ホントにここにいるのかわかんねえな。あやしい結界が張られてるようには感じねえし……」

「いくらでも偽装はできるわ。優秀な魔導士や結界師なら」

ユールベルは自分の父親のことを思い浮かべていた。彼女の父親も、監禁していた結界を偽装して、外部からわからないようにしていた。

「行ってみるしかねえか」

ジークは緊張しながら呼び鈴を鳴らした。すぐに扉が開いた。彼はさっと身構えた。だが、扉を開けたのはルーファスではなく、メイドらしき女性だった。ジークよりやや年上くらいだろうか。地味な黒いドレスに、白のエプロンをつけている。彼女は、ふたりを値踏みするような目でじろりと見た。

「えーと、ルーファス＝ライアン＝ラグランジェに用があって来た」

ジークは彼女の視線にたじろぎながら、とりあえず用件を伝えた。

「お約束でしょうか」

メイドは感情なく尋ねた。

「約束は、ねえけど……」

「では、お引き取りを」

彼女は扉を閉めようとした。

「ちょっと待て！」

ジークは閉まりかけた扉を力づくでこじ開け、中に押し入った。

「な……何を?!」

弾き飛ばされたメイドは、よろけながら甲高い声を上げた。しかし、素早く体勢を立て直すと、小さな声で呪文を唱え始めた。

「マジかよ！」

ジークはユールベルの手を引き、後ろにかくまうと、前面に結界を張った。ユールベルも、後ろからふたりの周囲に結界を張った。

メイドは胸の前で両手を向かい合わせた。その間に強い光が生まれ、あたりを青白く照らした。黒髪がさらさらと波打ち舞い上がる。呪文の詠唱が止まると同時に、彼女はその光をジークた

ちに放った。

——ドン！！

正面から結界にぶつかり、光は消滅した。その下の大理石の床は、白く凍りついていた。

彼女は大きく肩で息をしながら、再び呪文を唱えようとした。

「下がっている、フラウ」

低い威厳のある声が、玄関ホールに響いた。その声の主が、カツン、カツンと靴音を響かせながら、ゆったりと歩いてくる。それは、アンジェリカの曾祖父・ルーファスだった。

「はい」

メイドは一礼すると、すっと奥へ消えていった。

ルーファスは後ろで手を組み、鋭い目でふたりを見た。ユールベルはびくりと体をこわばらせ、ジークの袖をぎゅっと掴んだ。

「何をしに来たのだ、ユールベル。まさか、もう役目を果たしたなどと言うつもりではないだろうな」

「ああそうだ。だから早く返せよ、弟」

ユールベルが答える前に、ジークが勝手に答えた。彼女はとまどいがちに彼を見た。彼は刺すような視線をルーファスに向けている。今にも飛びかからんばかりだ。

だが、ルーファスはまるで動じなかった。

「ならば、証しを立ててもらおうか」

「証し？」

ジークは怪訝に眉をひそめた。ルーファスは真顔で答えた。

「そうだな、アンジェリカを呼び、あの子の目の前で、おまえたちが口づけをするというのはどうだ」

「てめえ、バカか！ ふざけてんじゃねえぞ！！」

ジークは顔を真っ赤にして、彼の胸ぐらを掴んだ。

「愚かだな」

ルーファスはそれでも余裕綽々だった。

「アンソニーは私の手中にあるのだ。合図を送るだけで、私の思うように出来るのだぞ」

ジークは歯噛みした。彼の胸ぐらを掴んだまま、その手を震わせる。

「聞こえた……！」

ユールベルは、突然はっとして右目を開いた。ジークは驚いて振り返った。

「どうした？」

「アンソニーの声が聞こえたの！」

そう答えたときには、彼女はすでに走り出していた。屋敷内へと駆け込んでいく。ジークも急いで彼女のあとを追った。

——バン！

彼女は勢いよく扉を開けた。

「アンソニー！」

彼はいた。そこは台所だった。年輩の女性と向かい合って座り、ボールの中の卵を、泡立て器で攪拌していた。

「ねえさん、どうしたの？ そんなに息をきらせて」

アンソニーは目をぱちくりさせて、戸口の姉を見た。彼女は呆然と彼を見た。

「あなた、ここで何を……」

「ケーキを作ってるんだよ。出来たらねえさんも食べて！」

アンソニーは無邪気に笑った。

「そうじゃなくて、どうしてここにいるの？！」

ユールベルは強い口調で問いつめた。アンソニーは、不思議そうな目を彼女に向けながら説明をした。

「ねえさんがまた帰って来られなくなったって、ルーファスさんが僕を迎えに来たんだ」

ユールベルははっとした。つい先日、ラウルのところに泊まったとき、サイファが彼を迎えに行き、一晩、預かってくれた。それと同じパターンだ。おそらくルーファスは知っていて利用したのだろう。もし、先日のことがなければ、そう簡単についていかなかったのではないか。自分ももっと彼のことを考えていれば……。ユールベルは泣き崩れた。膝をつき、両手で顔を覆って嗚咽する。

「ねえさん、どうしたの？」

アンソニーは彼女のもとに行き、心配そうに覗き込んだ。

「てめえ、嘘ついてコイツを連れてきたってわけか」

ジークは、あとから入ってきたルーファスを睨みつけた。

「私は平和主義者なんでね」

彼はしれっと言った。

「どこまでふざけた野郎なんだ！」

「今回はほんの挨拶代わりだ。君が折れない限り、今後はこんな生易しいことではすまんぞ。手駒はどこからでも調達できるからな」

「手駒だと？」

ジークは眉をひそめた。

「人の弱みにつけ込んで脅すなんて、やること汚ねえんだよ！ いいかげんにしやがれ！」

再びルーファスの胸ぐらを掴み、締め上げる。

「きれいごとだけで守れるものなら、喜んでそうするがな。恨むなら、ラグランジェに関わった自分自身を恨め」

そう言うと、ルーファスは意味ありげな笑みを浮かべた。

「次は君の親友のリックか、それとも母親のレイラか……」

ジークはカッとなった。凄まじい形相で、我を忘れて殴りかかる。

「ジーク、駄目っ！！」

ユールベルは声の限りに叫んだ。ジークはルーファスの顔を外し、後ろの壁にこぶしを打ち込んだ。壁に大きく穴があき、破片がばらばらと落ちていく。それにより舞い上がる粉塵で、足元は何も見えないほどに白く煙っていた。

「フラウ、保安に通報しろ」

「はい、かしこまりました」

後ろに控えていたメイドは、ルーファスに一礼すると、部屋から出ていった。

ジークの顔から血の気が失せた。ユールベルは息を呑んで、彼を見上げた。

77. 難しい選択

「あの、これからどこへ行くんですか」

ジークは、サイファの半歩後ろを歩きながら尋ねた。サイファは彼を一瞥すると、淡々と答えた。

「さっきのアンジェリカとの話は聞いてなかったのか？ 私の上司のところだよ」

「あ……」

ジークは返事に困った。その話は聞いていた。だが、あくまでアンジェリカを説得するための話で、本当にそうだとは思わなかった。疑ってしまったことがばれたらどうかと、少しびくついていた。

ふたりは魔導省の塔へやってきた。

ジークは目の前にそびえ立つその塔を仰いだ。これほど間近で見たのは初めてだった。ずいぶん大きく、高い。思わず、はあと感嘆の息を漏らした。

サイファは微笑みながら、彼の背中に手を置いた。ジークは促されるまま、中に入った。煌々と灯りのついた廊下。その両側にオフィスが広がっていた。オフィスは廊下よりもさらに明るかった。たくさんの机が整然と並び、座って仕事をこなしている人、その間を足早に歩きまわっている人などであふれ、活気に満ちていた。

サイファは立ち止まることなく廊下を進み、突き当たりの小さな四角い部屋に入っていった。部屋というにはあまりにも小さい。五、六人がやっと入るくらいの広さである。無機質で何の装飾もなく、ただの箱のようだ。

ジークも、少しためらいながら、そのあとに続いた。

サイファは彼が入ったのを確認すると、入口の横にあるパネルのボタンをいくつか押した。厚い扉がゆっくりとスライドして閉まった。

ジークは漠然とした不安を感じ、何となく天井を見上げた。その直後、突き上げるような強い力が足にかかった。どうやらその小さな部屋が急上昇しているようだ。しかし、長くは続かなかった。驚いているうちに止まり、ゆっくりと扉が開いた。目の前には、先ほどとは違う光景が広がった。

「最上階だよ」

サイファはにっこり笑って振り向いた。

ジークは外に出ると、落ち着きなくあたりを見まわした。目の届く範囲に窓がないため、どのくらいの高さなのかはわからなかった。

サイファは颯爽と歩き出した。ジークもそのあとについて歩いた。片側にはずらりと部屋が並んでいた。ガラス張りの下とは違い、中の様子は窺えない。窓もないため、廊下から見えるのは扉だけである。音もなく、静寂があたりを包んでいる。息が詰まるような、閉塞的な雰囲気だ。

「ここが私の部屋だ」

サイファは足を止め、扉のひとつを示した。扉にはプレートが掛かっていた。金属製で、名前

と所属が彫り込まれているものだ。上品な光沢で、高級感がある。ジークの目は釘付けになった。この年齢で最上階に個室をもらえるなんて、やはりすごい人なんだ——あらためてそう思った。

サイファは自室には寄らず、再び歩き出した。分岐した廊下を細い方へ曲がり、奥まったところに入って行く。その行き止まりに、他とは違う重厚な造りの扉があった。だが、他と同じように名前のプレートが掛かっている。

「ここだ。私の上司、魔導省長官の部屋だよ」

「長官……」

ジークはぼんやりした声で繰り返した。

「わかりやすくいうと、魔導省でいちばん偉い人ってことだね」

サイファのその説明は、彼にとってさらなる重圧となった。表情がこわばる。そんな人が、自分なんかには何の用があるというのだろうか——。

サイファは扉をノックした。

「サイファです。ジークを連れてきました」

「入れ」

中から低い声が聞こえた。サイファは扉を開け、ジークを促しつつ、一緒に中へ入った。そこは個室とは思えないほどの広さがあった。天井も高い。全体的に物は少ないようだ。目立ったものといえば、両脇の本棚と、奥の大きな机くらいである。贅沢な空間の使い方だ。

「よく来たな、ジーク＝セドラック」

奥に座っていた男が、低音を響かせた。おそらくこの男が長官だろう。サイファと同じ濃青色の制服を身に着けている。年はサイファよりもずいぶん上のようだ。ジークは怪訝に会釈をした。だが、長官は無表情のままだった。目線だけをサイファに動かし、悠然と命令する。

「サイファ、君は下がっていたまえ」

「はい」

ジークはその答えにうろたえ、サイファに振り向いた。守ってくれるはずでは……。そう思ったが、そんな情けないことを口に出すわけにはいかない。ぐっところえ、口を固く結ぶ。

「ジーク、終わったら私の部屋へ来てくれるか？」

サイファはにっこり笑いかけた。

「あ、はい……」

ジークは心細そうに返事をした。そして、部屋から出て行くサイファの背中を、目で追いつがった。

「掛けたまえ」

長官は、ジークのために用意したと思われる椅子を示した。ジークは素直に座った。長官の真正面だった。座り心地は良かったが、居心地は悪かった。

「あの……」

「そんな顔をするな。取って食いはしない」

そう言われても、何もわからないこの状況で、落ち着けるはずがない。ジークは膝にのせた手を握りしめた。

「俺に、何の用ですか」

長官はふっと笑った。

「ラグランジェ家に喧嘩を売った、無謀な学生に興味があつてね」

ジークの眉がびくりと動いた。

「喧嘩を売ったつもりはありません」

不愉快さを押し隠しながら、きっぱりと言う。

長官は口の端を吊り上げた。挑むように笑いかける。

「つもりはなくても売っているぞ。現実として」

ジークは言葉につまった。

「君のことは調べさせてもらった」

長官は机にひじをつき、両手を組んだ。

「どこかで聞いたような名前だと思ったが、まさかあのリューク＝セドラックの息子だったとはな」

「……………」

ジークは眉をひそめ、訝しげに首を傾げた。

「彼は幼い頃、魔導の天才児として注目されていてね。だが、あるとき、ぱたりと魔導を使うことをやめてしまったんだ。まわりがどれだけ説得しても、頑として使おうとはしなかった。我々の間では、ある意味、有名人だった」

長官は淡々と語った。

ジークは奇妙な顔で眉根を寄せた。いきなりそんな話をされても、何の実感も湧かない。

「それ、誰か他の人と間違ってますか」

長官は目を閉じ、ふっと口元を緩めた。

「君は彼の才能を受け継いだというわけだ。だが、君は彼と違って魔導が好きだ」

腹の底に響くような重い声でそう言うと、鋭い視線をジークに向けた。ジークはたじろいだ。瞳の奥まで探られるように感じた。椅子に座ったままわずかに身を引き、ごくりと唾を飲み込んだ。

長官は組んだ手を机の上に下ろし、背筋を伸ばした。

「君の進路希望先は魔導省となっていたが、それは今も変わらんか？」

「はい、一応……」

ジークは歯切れ悪く答えた。魔導不正使用などという事件を起こした以上、いくら採用試験を頑張っても受かることはないだろう——その考えが彼を萎縮させた。

「君を採用する」

長官は厳かに言った。

「……は？」

突然のことに、ジークの思考は混乱したまま停止した。

「君を採用する、と言ったんだ」

長官はもう一度、ゆっくりと丁寧に行った。

「どういうことですか」

ジークの額にうっすらと汗がにじんだ。自分の鼓動がやけに大きく聞こえる。

「年にひとりくらいなら、私の裁量で採用してもいいことになっている。暗黙の了解というやつだがね」

「どうして俺なんですか」

気持ちを立て直し、まっすぐ長官を見据える。長官はかすかな笑みを口元にのせた。

「君が優秀だからだ。父親から受け継いだ才能は確かなものだ。アカデミーの成績も申し分ない。民間へやるには惜しい人材だよ」

ジークはひざの上のこぶしを強く握りしめた。自分でも理由はわからなかったが、長官の返答に不快感を覚えた。表情に出ないように必死にこらえたが、まぶたは微かに痙攣していた。

「俺は、試験を受けて自分の力で入ります」

低く抑えた声で、毅然と言った。真剣な表情で、長官を睨むように見据える。

だが長官は、鼻先で笑って受け流した。

「それは無理だな。魔導で問題を起こした人間を採ると思うかね」

ジークは目を伏せ、表情を曇らせた。何も言い返すことができない。

「つまらない意地やプライドは、捨てた方が身のためだ。それで君の希望が叶うのだ」

長官は声を張り、尊大に言った。

ジークは眉をひそめ、唇を噛み締めた。

——コンコン。

ジークはサイファの部屋の扉をノックした。

「どうぞ」

中から歯切れの良い声が聞こえた。ジークは緊張しながら、そろそろと扉を開けた。そこは、長官の部屋の半分ほどの広さだった。天井も高くない。両脇には本棚やロッカーが並び、奥にはスチール机が置かれていた。机の上には、乱雑な書類の山がいくつもできている。サイファはその紙束に囲まれるようにして座っていた。背後は一面ガラス窓になっており、青空と薄い筋状の雲が映し出されていた。

「今、きりが悪くてね」

サイファはにっこり笑ってペンを掲げた。

「もう少し待ってもらってもいいかな」

「はい」

「椅子はそこにあるから」

そう言いながら、壁に立てかけられたパイプ椅子を指さした。

「部屋の中は自由に見ていいからね」

「はい」

ジークはあらためてぐるりと部屋を見まわした。そして、本棚へと足を進めた。上から下へ、ざっと目を走らせる。並んでいるのは主に魔導書のようなものだ。隅にはひっそりと医学書も置いてあった。ジークはそのうちの一冊に目を奪われた。難しい医学用語が並ぶ背表紙に「遺伝子」という単語が見えた。

遺伝子の異常——アンジェリカが言ったというその言葉が頭をよぎった。まさか、本当に？ いや、ただの偶然だ。ジークはそう思おうとした。しかし、偶然にしては出来すぎている気がしてならない。なぜサイファはこの本を持っているのだろうか。読んでみたいという衝動に駆られた。だが、この状況では断念せざるをえないと判断した。今、サイファがこちらを見ているわけではないが、いつ顔を上げないとも限らない。なぜその本を手にとったのかを尋ねられては、返答に窮する。

代わりに魔導の本を一冊、本棚から抜いた。立ったままパラパラとめくりながら、横目でサイファの様子を窺った。彼は真面目な顔で書類に向かい、何かを書きつけているようだった。

「もう少しだよ」

突然、彼は顔を上げ、にっこり微笑んだ。

「え、あ、はい」

ジークはどきりとして、しどろもどろに返事をした。持っていた本を落としそうになった。ふうと小さく息を吐き、心を鎮めると、本に集中することにした。だが、どうしてもサイファのことが気になり、文字を追うだけで内容が頭に入ってこなかった。

「お待たせ」

サイファはペンを置いて顔を上げた。ジークはほっとして本を閉じ、元の場所に戻した。

「君は行儀がいいね」

サイファは頬杖をつき、ニッと笑った。

ジークはとまどった。彼の真意が読めなかった。ただ、なんとなく褒められたようには思えなかった。

「部屋の中を引っかけまわせば、面白いものが見つかったかもしれないのに」

「面白いものって……？」

「さあ、私が面白いと思うものと、君が面白いと思うものは違うからね」

自分は試されているのだろうか、とジークは思った。何を、というのはわからない。奇妙な面持ちで口をつぐんだ。

「こっちへおいで」

サイファは立ち上がり、大きなガラス窓に向かうと、後ろで手を組んだ。ジークは言われるがまま、彼の隣に並んだ。

「いい景色だろう」

ガラス窓の向こうには、青空が大きく広がっていた。濃い青色にかかった薄い雲が、ゆっくりと流れていく。そして、下方には小さく森や街が見えた。行き交う人々は、かろうじて点として認識できるくらいだった。ジークは足がすくんだ。これほど高いところに立つのは初めてだった。

サイファはそんな彼を見て、満足そうに微笑んだ。

「長官の話は何だったんだい？」

ジークは現実に戻された。サイファに振り向き、とまどいがちに答える。

「俺を、採用するって……」

「やはり、その話だったんだな。良かったじゃないか」

サイファは明るく言って、ジークの肩に手を置いた。だが、ジークは難しい顔でうつむいた。

「前にも言ったと思うが」

サイファはそう前置きしながら、腕を組み、ガラス越しに空を見上げた。

「君は、君のいる場所に見合う実力をつけなければいいだけのことだ。プライドのために好機を棒に振る選択は、愚かだと思うよ」

「……はい」

以前にその話を聞いたときは納得した。今も間違っているとは思わない。しかし、今回はなぜかすっきりしない。迷いが拭えない。

「もうすぐお昼だな」

サイファは腕時計を見て言った。

「一緒に食べようか。もちろん私のおごりだよ」

彼はにっこりとして、ジークの背中をぽんと叩いた。

「サイファさん、あの……」

ジークは少し言いにくそうに切り出した。隣を歩くサイファは、にこやかに振り向いた。

「何だい？」

「父のこと、ご存知でしたか？」

「君の父親か？」

サイファは不思議そうに尋ね返した。ジークは頷いて話を続けた。

「さっき長官が言ってたんですけど、俺の父親、子供の頃は魔導の天才児だったって……」

サイファは興味深げに目を見開いた。

「子供の頃？」

「あるとき急に使わなくなっただけなんです。それで、長官たちの間では有名だったとか」

ジークは下を向き、言葉を切った。

「いや、私は知らなかったよ」

サイファは前を見て、真面目な顔で言った。それからジークに振り向き、にっこりと笑った。

「君のお父さんが子供の頃は、私も子供だからね」

「あっ……」

ジークは小さく声を漏らした。そう言われてみれば、確かにそうだ。サイファは父親より若い。まだ生まれていなかった可能性もある。

サイファは再び前を向いた。

「でも、たまにそういう子はいるよ。魔導を使える子が、みんな魔導が好きというわけではない

からね」

ジークは長官の話を出した。父親は魔導が好きではなかった——やはり、そういうことなのだろうか。もしそうなら、嬉々として魔導を使っていた息子のことを、どう思っていたのだろうか。訊きたくても、もう本人はいない。

サイファは淡々と話を続ける。

「それでもたいていはまわりの期待に応え、魔導の道へ進む。よほど意志が強くないと、魔導を封印し続けることはできないよ。天才児となれば、なおさらね。」

サイファはジークに微笑みかけた。

「君のお父さんは、自分の意志をしっかり持った人だったんだね」

ジークは顔を上げることができなかった。悩んで流されてばかりの自分が、とても情けなく思えた。

「やあ、ラウル」

サイファはにこやかに右手を上げた。その視線の先には、無表情のラウルがいた。脇に教本を抱えている。ジークは話に夢中で気がつかなかったが、そこはラウルの医務室の前だった。授業を終え、戻ってきたところのようだ。

「一緒にお昼を食べよう」

サイファは朗らかに言った。ジークはぎょっとして彼に振り向いた。まさかラウルを誘うとは思わなかった。誘うためにわざわざここへ来たのだろうか。

「断る」

ラウルはムツとして答えた。背を向け医務室の鍵を開ける。

「私のおごりだぞ」

「いらん」

「受け持ちの生徒の進路についての話もあるんだがね」

サイファは軽い調子で言った。ラウルは扉に手を掛けたまま、肩ごしに彼を睨みつけた。そして、その鋭い視線を、隣のジークにも向けた。ジークはびくりとした。

「待っている」

ラウルは低い声でそう言うと、乱暴に医務室の扉を開け入っていった。

「早くな」

サイファはにこやかに見送った。

三人は王宮内の喫茶店に入った。内装は上品なアンティーク調で統一されている。静かで落ち着いた店だ。ジークは以前にもここでサイファと昼食をともにしたことがあった。

サイファは窓際に席をとった。その隣にジーク、向かいにラウルが座った。

ジークは落ち着かなかった。メニューを見ていたが、どうにも視点が定まらない。手のひらは次第に汗ばんできた。サイファだけでも緊張するのに、ラウルまで一緒である。昼食など、もうどうでもよかった。一刻も早く帰りたかった。

「ジーク、決まったか」

「あ、はい、カレーライスを」

とっさに目についたメニューを答えた。サイファはにっこりとした。

「いいね。ここのカレーは美味しいんだ。私もカレーにするよ。ラウルは決まったか？」

ラウルはメニューを見ようともせず、腕を組み、不機嫌な顔で目を閉じていた。

「何でもいい。おまえが決める」

「好き嫌いくらい、あるんだろう」

「ない」

サイファは頬杖をつき、ふっと笑った。

「程度の多少はあれ、好き嫌いがいい人間なんていないと思うけどね」

ラウルは眉をひそめ、サイファを睨んだ。サイファは窓の外に視線を流した。

「好き嫌いがいいという人は、それを見せないように振る舞っているだけだ。しかし、人である以上、完璧には振る舞えないものさ」

「何がいいたい」

ラウルは低く唸るように言った。

「一般論だよ」

サイファは外を向いたまま、無表情で答えた。

ジークは何ともいえない張りつめた空気を感じ、いたたまれない気持ちでコップの水をじっと見つめた。

サイファはウェイトレスを呼び、注文を告げた。

「カレーライスをふたつ、それとお子さまランチを」

ジークは飲みかけの水を吹きそうになった。ラウルはものすごい形相でサイファを睨んだ。

「あの、お子さまランチは取り扱っておりませんが……」

ウェイトレスは困惑して言った。サイファは彼女に振り向き、にっこりと微笑んだ。

「そう、じゃあカレーライスを三つ」

「かしこまりました」

ウェイトレスは愛想よく微笑み返した。

「サイファ、おまえ……」

ラウルの低い声は、怒りで震えていた。

「何でもいいと言ったのはおまえだろう」

サイファは事も無げに言った。ラウルは刺すように鋭く睨みつけた。

「ラウルはね、都合が悪くなると、いつもこうやって睨むんだ」

サイファはカラッと笑いながら、ジークに言った。

「からかいすぎるととんでもない行動に出ることがあるからね。適度なところで引くといいよ」

「はあ……」

ジークは曖昧に返事をした。忠告されなくても、ラウルをからかうこと自体、ジークには無理な芸当だった。いや、ジークだけでなく、ほとんどの人間には無理だろう。

「サイファさんの家庭教師はラウルだったって聞いたんですけど、本当ですか？」

ジークは気になっていた話をぶつけてみた。先日アンジェリカから聞いた話である。

「本当だよ」

サイファはさらりと答えた。

「子供の頃の話だけだね。それ以来のつきあいだから、ラウルとは長いな。いや、ラウルからすれば短いのかな」

含みのある笑みをラウルに向ける。彼は不機嫌にため息をついた。

「くだらないことばかり言ってないで、本題に入ったらどうだ」

「ああ、ジークの進路の話だね」

ジークは緊張して体をこわばらせた。視線を落としたまま、背筋を伸ばし、手を膝の上ののせる。

サイファはそんな彼を見て微笑むと、ラウルに向き直った。

「魔導省に採用されることが決まったそうだ。おまえの生徒で内定第一号じゃないか？良かったな」

サイファは明るく言った。ラウルは冷ややかな目を向けた。

「おまえ……また余計なことをしたな」

「私は今回は無関係だよ。長官の独断だ」

サイファはにこやかに反論した。だが、ラウルは信じなかった。

「おまえがそう仕向けたのだろう」

「まさか」

サイファは笑った。

「私はとことん信用されてないらしい」

そう言いながらジークに振り向くと、大袈裟に肩をすくめて見せた。

「お待たせしました」

会話の切れ目のちょうどいいタイミングで、ウェイトレスが三人分のカレーライスを運んできた。湯気とともに、スパイスの刺激的な香りが漂う。ジークは思い出したかのように、急に空腹を感じた。

その後、三人はほとんど無言で昼食を食べた。たまにサイファが口を開き、ジークが相槌を入れるくらいだった。そして、食べ終わるとすぐに店を出た。

「それじゃ、またな」

サイファは軽く右手を上げ、塔の方へ戻っていった。

ラウルとジークは方向が同じだったので、何となく並んで歩いた。ふたりとも無言のままだった。ジークはこの気まずさに必死に耐えていた。

「奴らの言いなりになってもいいのか」

ラウルがふいに口を切った。ジークは驚いて彼を見上げた。奴らとは長官やサイファのことだろうか――。

「魔導省にこだわらなければ、就職はできるはずだ。前にも言ったが、そもそもおまえは役人に向いていない」

ラウルは前を向いたまま、はっきりした口調で言った。ジークは言い返すことなく、ただ黙って目を伏せた。

「今ならまだ断れる。逆にいえば、断ることができるのは今だけだ。よく考えるんだな」

そこまで言うと、ラウルは足を止めた。医務室の前だった。一度ジークに視線を投げると、長い髪を揺らしながら、さっと医務室へ入っていった。

ジークはひとり教室へと向かった。まだ昼休みは続いている。アカデミーはとても賑やかだった。だが、ジークの耳にはほとんど何も入ってこない。彼は思考を巡らせていた。ラウルの言葉、サイファの言葉、長官の言葉――それぞれを何度も反芻しながら歩いた。

「ジーク！」

教室に入ると、アンジェリカとリックが心配そうに駆け寄ってきた。

「何の用だったの？」

アンジェリカは早口で尋ねた。

「あ、ああ……何か、俺を魔導省に採用するって」

ジークは何でもないふうを装って答えた。

アンジェリカは黒い瞳を大きく見開いた。そして、表情をけわしくすると、床を蹴り駆け出した。ジークは慌てて腕を掴み、引き止めた。

「どこ行くんだよ」

「お父さんに文句を言ってくるわ！」

アンジェリカは勢いよく振り返り、怒りまかせに大声で言った。ジークはまっすぐ彼女を見つめた。

「サイファさんは関係ない。今回は長官の独断だって」

「どうかしら？」

彼女の声はとげとげしかった。表情からも、あからさまに疑っている様子が見てとれた。

ジークは冷静に言った。

「いいんだ。俺が考えて答えを出す」

「断らないの？」

アンジェリカはきょとんとして言った。ジークは彼女の腕を放した。そして、視線を落とし、薄笑いを浮かべる。

「魔導省に入るには、これしか手がない」

「どういうこと？」

「きのうの事件のこと、記録に残されてんだ。だから、普通に採用試験を受けても受からねえ

って」

「そんな……」

アンジェリカは眉根を寄せた。うつむいて目をつむり、胸を押さえてつぶやく。

「私のせいだわ。こうなる前に、もっと早くに……」

「え？」

ジークは覗き込むようにして尋ね返した。アンジェリカは顔を上げた。

「ごめんなさい、本当に。ジークの人生をめちゃくちゃにして」

今にも泣き出しそうに謝る。

「おいおい、勝手にめちゃくちゃにすんなって」

ジークは笑いながら言った。

「今日のことは、むしろラッキーかもしれねえだろ」

「うそ、思ってもないくせに」

アンジェリカは潤んだ目で睨んだ。

キーンコーン——。

昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴った。

アンジェリカはくるりと背を向け、目尻を拭いながら席に戻った。ジークも表情を曇らせ、自席についた。引き寄せられるように、机に突っ伏す。もう起き上がれないかと思うほど、体中が鉛のように重かった。

75. 取引

狭く薄暗い部屋。その中央にジークは座っていた。無骨なスチール机に手をのせ、うつむき眉を寄せている。安っぽいパイプ椅子は、彼が動くたびに不快な軋み音を立てた。扉の両脇には、制服の男がひとりずつ立っていた。後ろで手を組み、無言でジークを見張っている。

——ガチャ。

扉が開き、颯爽とサイファが入ってきた。その表情はけわしかった。小脇にはいくつかの書類を抱えている。彼は金の髪をさらりと揺らし、戸口の見張りを振り返った。

「下がっている」

「はい」

ふたりの見張りは一瞬、怪訝な顔を見せたが、すぐに一礼をして部屋を出ていった。

サイファはジークの向かいに座った。耳を裂く軋み音が狭い部屋に響いた。ジークはうつむいたまま体をこわばらせた。

「すまないな、仕事だ」

サイファは書類を机に置きながら、素っ気なく言った。ジークは手を膝に下ろし、弱々しく頷いた。

「だいたいの話はユールベルから聞いた」

サイファは目を伏せ、話を続けた。

「昨晚、アンジェリカの様子がおかしかった理由がわかったよ」

「すみません」

ジークは眉を寄せ、膝にのせた手をぐっと握りしめた。

「責めてはいないよ」

サイファは静かにそう言い、ファイルを開いた。無表情で目を落とし、事務的な口調で読み上げ始めた。

「住居不法侵入、暴行未遂、器物破損、魔導不正使用……認めるか」

「……はい」

ジークは少しためらったあと、小さな声で返事をした。ルーファスに殴り掛かったとき、感情が高ぶり、思わずそのこぶしに魔導の力をのせてしまった。そうでなければ、壁を打ちつけても崩れることはなかっただろう。

サイファは軽くため息をついた。

「魔導の不正使用は罪が重い。君も知っているだろう」

「脅迫は、罪にはならないんですか」

ジークは低く抑えた声で言った。その声には憤りが滲んでいた。サイファはわずかに目を細めた。

「証拠がない。客観的に見れば、君が制止を振り切って上がり込み、無抵抗な老人に暴行しようとした、そういうことになる」

感情を見せずに淡々とそう言うと、じっとジークを見つめた。ジークはうつむいたまま肩を震

わせた。

「あいつは……俺の母親やリックも利用しようとしていた！」

抑え込んだ怒りが噴出した。冷静にと努めたが、やはり堪え切ることはできなかった。

サイファはファイルを閉じ、机の上に置いた。

「それはおそらくハッターだ。ラグランジェ家は何よりも騒ぎを起こされることを嫌う。外部の人間を利用すれば、当然そのリスクは高くなる。だから、無関係な者を軽々しく巻き込むようなことはしないよ」

安心させるように、優しい口調で言った。しかし、ジークの表情が和らぐことはなかった。思いつめた顔でサイファを見つめ、口を開いた。

「絶対にないとは、言い切れませんよね」

「ああ」

サイファは動じることなく素直に認めた。

ジークは再びうつむいた。それきり沈黙が続いた。それほど長くはなかったかもしれない。だが、ジークには時間が止まったかのように感じられた。

サイファは瞬きをして、静かに切り出した。

「ラグランジェ家と関わるのをやめるというなら、祖父にそう伝えよう。私は君の意思を尊重する。どのような結論を出そうとも、私はそれを受け入れるつもりだ。君を恨んだりはない」

ジークは目を閉じ、まぶたを震わせた。

「考えさせてください」

「わかった」

サイファは深い声を落とした。そして、一息つくつと、再び口を開いた。

「私もできる限りのことはするつもりだ。だが、あまり期待はしないでくれ」

ジークに返事はなかった。ただ、硬い顔でうつむいたままだった。サイファは眉根を寄せた。

「本当に、すまなかった」

重々しくそう言うと、椅子を引いて立ち上がり、取調室から出ていった。

ジークはやるせない思いで、彼の後ろ姿を見送った。無機質な靴音が遠ざかり、代わりに静寂が訪れた。

ガラガラガラ――。

アカデミーへやって来たサイファは、教室の前扉を開けた。教壇のラウルも、生徒たちも、いっせいに振り向いた。

「授業中だぞ」

ラウルは眉をひそめ、冷やかに言った。

「悪いが来てくれ」

サイファは落ち着いた声で頼んだ。その青い瞳は真摯にラウルを見つめていた。

ラウルは小さくため息をつくつと、教本を机に置いた。

「しばらく自習にする」

生徒たちにそう言い残し、教室をあとにした。

ジークと何か関係があるのだろうか――。

リックは不安になった。ジークはきのうからずっと、様子が普通ではなかった。アンジェリカを避け、ユールベルと親密そうにしていた。昨晚は家にも帰らなかった。今日はアカデミーにも来ていない。

彼は頼りない顔でアンジェリカに振り向いた。だが、彼女は席にいなかった。

「えっ？」

リックは驚いて立ち上がり、あたりを見渡した。やはり、彼女の姿は見当たらない。

「まさか……」

彼の顔からさっと血の気が引いた。あわてて廊下へ飛び出したが、もう彼女の姿も、ラウルとサイファの姿も見つけられなかった。

サイファはラウルを連れ、王宮の外れにある小さな森へとやってきた。ひっそりとした静かな散歩道に、強い木漏れ日が落ちている。サイファはその中をゆっくりと歩いていた。ラウルはさらさらと流れる金色の髪を見ながら、そのあとに続いた。

サイファは足を止めた。そして、背を向けたまま淡々と言った。

「ジークがルーファスの家へ乗り込んで事件を起こした。今、魔導省で留置している」

ラウルも足を止めた。焦茶色の長髪が風になびいた。

「私にどうしろというんだ」

サイファは振り返り、微かな笑みを見せた。

「君の生徒だろう。一応、知らせておこうと思っただけだ」

そう言うと大きくため息をつき、額を押さえてうなだれた。

「いや、おまえの顔が見ただけかもしれない。正直、どうすればいいのかわからないよ」

弱音を吐いたその声には、はっきりと疲れが滲んでいた。ラウルは無表情で彼の顔色を窺った

。

「少し休め」

サイファはその言葉に驚き、薄笑いを浮かべた。

「おまえに気づかしてもらえとは、ありがたいな」

「医者として言っている」

ラウルの反応はすごいものだった。だが、サイファはにっこりと笑顔を見せた。

カサッ――。

脇から草の踏みしめられる音が聞こえた。サイファははっとして機敏に振り向いた。

「アンジェリカ！」

彼女は大きな樹の後ろから姿を現した。真剣な表情でサイファを見据えている。

「ジークのところへ連れて行って」

「だめだ、教室に戻れ」

サイファは顔つきを厳しくし、毅然と言った。しかし、アンジェリカは引かなかった。逆に前へ踏み出し、詰め寄った。

「私のせいなんでしょう？ ジークに会わせて」

「あとで取りはからう。今は引くんだ」

アンジェリカは反抗的な目で睨んだ。

「いいわ、自分で探すから」

「待て！」

踵を返したアンジェリカを引き止めようと、サイファは彼女の細い手首を掴んだ。

その瞬間。彼女の体全体から魔導の力が発せられた。体が強く光ると同時にバチッという音がして、サイファの手を弾いた。そして、間髪入れず、彼のまわりに強力な結界を張った。

「な……」

サイファは、自分のまわりで淡く光る結界を、呆然と見上げた。アンジェリカはそのまま振り返りもせず、散歩道を走り去っていった。軽い足音が次第に小さくなっていく。サイファは自嘲ぎみにふっと笑った。

「見てないで解除してくれないか。内側からは魔導が使えない結界だ」

「油断していたにしても情けないな」

ラウルはあきれたように言うと、呪文を唱えることなくサイファのまわりの結界を消滅させた。

「仕方ないさ」

サイファは大きくため息をつき、森の緑を見上げた。

「魔導の潜在能力は、私より遥かに上だからな。おまけに、教えているのはおまえだ」

そう言ってラウルに視線を流し、意味ありげに含み笑いをした。だが、その表情にはどこか鬩りのようなものがあつた。

ラウルは無表情で視線を返した。

「それは、おまえ自身が望んだことだ」

「ああ、アカデミーの担任はね」

サイファは背を向けながら言った。ラウルは太い眉をぴくりと動かした。

アンジェリカは薄汚れた建物に駆け込んでいった。窓が少なくこじんまりとして、陰気な雰囲気漂っている。いくつかある魔導省管轄の建物のひとつで、容疑者の取り調べや留置がなされているところだ。おそらくここだろうと、あたりをつけてやってきたのだ。

入ってすぐのロビーにユールベルがいた。長椅子に腰かけ、膝の上で祈るように手を組んでいる。

「ユールベル！ ジークは？」

アンジェリカは彼女に駆け寄り、焦ったように早口で尋ねた。ユールベルは驚いて顔を上げ、右目を見開いた。アンジェリカが思いつめた顔で自分を見つめている。その視線に耐えきれず、

逃げるように目を伏せた。

「奥に連れていかれて、それきりよ」

彼女は小さな声で答えた。

アンジェリカは奥へと続く廊下に、鋭い目を向けた。その入口には、ふたりの衛兵が立っていた。彼女を目にすると、互いに顔を見合わせ、とまどった表情を浮かべている。ラグランジェ本家の令嬢が押し入ろうとしたら、どのように対応すれば良いのだろうか。そもそも、止めようにも止められる自信はまるでない——。ふたりはそうならないことを祈った。

だが、アンジェリカにその祈りは通じなかった。まっすぐその廊下へ向かって走り出した。衛兵たちの表情が引きつった。

「行ってはだめ！！」

ユールベルは後ろからアンジェリカに抱きつき、彼女を止めようとした。

「放して！！」

アンジェリカは一気に魔導力を高めた。あたりの空気が、彼女を中心に渦を巻いた。ユールベルの長い髪は絡み合うように舞い上がった、ワンピースはバタバタと音を立ててはためいた。それでもユールベルは放さなかった。必死でアンジェリカにしがみついた。

「冷静になって！ ジークはそんなこと望んでいない！」

精一杯の声で訴えかける。

アンジェリカははっとした。それをきっかけに落ち着きを取り戻し、魔導力も鎮まっていった。

あたりは再び静寂を取り戻した。

ユールベルは力が抜けたように、その場に座り込んだ。

「何があったの？ 話して」

アンジェリカは彼女を見下ろし目を細めた。ユールベルは床に手をつき、大きくうなだれた。

「ごめんなさい、私のせいなの……」

そう切り出すと、訥々と話し始めた。きのうルーファスに弟を人質に取られ脅されたこと、そして今日、彼の家で起こったこと——。

アンジェリカは神妙な面持ちで聞いていた。そして、ユールベルが話し終わると、複雑に顔を歪ませ、走って出ていった。

アンジェリカはルーファスの家へとやってきた。呼び鈴を鳴らすと、すぐにメイドが扉を開けた。

「私はアンジェリカ＝ナル＝ラグランジェ。ひいおじいさまはいるかしら」

アンジェリカは背筋をピンと伸ばし、自分より背の高いメイドを睨みながら、冷たく尋ねた。

「どうぞ」

メイドは丁寧にお辞儀をし、彼女を中へと案内した。

ルーファスはリビングルームで悠然と椅子に腰かけていた。背もたれに身を預けたまま、小さ

く光る蒼い瞳を彼女に流した。

「アンジェリカ＝ナル。随分と早かったな。手間が省けたよ」

「あなたの目的は私なんでしょう？」

アンジェリカはきつい表情で曾祖父を睨みつけた。

「今さらあらためて言うことでもないがな」

彼はそう前置きすると、静かに話し始めた。

「一族の者と結婚し、子をなし育てる。そうやってラグランジェ家を次世代へ繋ぎ、守っていくことが、本家に生まれた者の定めだ。みなそうやってきた。おまえひとり好き勝手していい道理はない」

アンジェリカはごくりと唾を飲み込んだ。鼓動が強く打っている。じっと曾祖父を見つめ、ためらいがちに口を開いた。

「……私が承知すれば、ジークを助けてくれるの？」

「そのように取りはからおう」

ルーファスは真剣な表情で答えた。

アンジェリカは目を伏せた。そのまま考えを巡らせる。様々な想定をした。様々な未来を思い浮かべた。様々なものを天秤に掛けた。

やはり、私の選択はこれしかない――。

決意を固めたように、ぐっと表情を引き締めた。ゆっくりと顔を上げ、強いまなざしを彼に向けた。

「わかったわ。あなたの望みどおりにする。でも、アカデミーを卒業するまで待つて」

「ならん」

彼はきつい口調で即答した。そして、冷たい目でアンジェリカをじろりと睨みつけた。

「アカデミーは今すぐ辞めてもらう。そもそも、あそこでおまえは悪影響を受けたのだからな」

「お願い、せめて卒業させて。あと一年もないわ」

アンジェリカは顔を曇らせながら懇願した。

ルーファスはおもむろに腰を上げた。一步、また一步と、彼女との間を詰めていく。大きな体が近づくと、小さな彼女は威圧された。まばたきすることも忘れ、彼を見上げている。彼女は完全に彼の影に覆われた。

「何を企んでいる」

ルーファスは体の芯まで響く低音を、彼女の頭上から降らせた。

「何も」

アンジェリカは強気にそう言い、キッと睨み上げた。額から頬に汗が伝った。

「ただ、最後までやり遂げたいだけよ。初めて自分の意志で進んだ道だから」

ルーファスは探るように彼女の瞳の奥を見つめた。アンジェリカはまっすぐ見つめ返した。

「約束は必ず守るわ。私にはそれしか道がない。そのことはよくわかったから」

「許さん、と言ったらどうする」

ルーファスは重々しく尋ねた。アンジェリカの瞳に強い光がともった。

「何もかも、むちゃくちゃにするわ。あなたも道連れよ」

ゆっくりと魔導力を高めていく。まわりの大気が激しく揺らぎ、カーテンが舞い上がりはためく。

ルーファスの背筋に冷たいものが走った。初めて彼女に対して恐怖を感じた。彼女は本気だ。そうなれば、自分も無事ではすまない。本当に何もかも台無しになってしまう。彼女にはそれだけの力がある――。

「まあいいだろう。卒業までは待とう」

彼は威厳を保ったまま答えた。アンジェリカは小さく息を吐き、力をゆっくりとおさめていった。

ルーファスは彼女の顎を掴み、ぐいと持ち上げた。

「くれぐれも言うておく。妙なことは考えるな」

「くどいわね」

アンジェリカは眉をひそめ、少し苦しげに言った。しかし、ルーファスは容赦しなかった。さらに彼女の顎を持ち上げる。アンジェリカはつま先立ちになり、思いきり顔をしかめた。

「その身を大切にしろ。もはやおまえひとりのものではない。おまえがラグランジェ家のすべてを背負っているのだ」

ルーファスは覆いかぶさるように彼女の黒い瞳を覗き込んだ。

「ユールベル、アンジェリカは来なかったか？」

サイファは小走りで駆け寄りながら尋ねた。ユールベルは長椅子から立ち上がった。

「来たわ。中に押し入ろうとしたのを止めたら、出て行ってしまったけれど」

「そうか……」

サイファは難しい顔で何かを考えながら、ぼんやりと相槌を打った。

ユールベルは不安げに瞳を揺らした。自分の行動は間違っていたのだろうか、そんな考えが湧き上がった。

サイファは彼女の暗い顔に気がつく、その頭に優しく手を置き微笑みかけた。

「止めてくれてありがとう」

ユールベルはそれでもまだ表情を曇らせていた。

「疲れただろう。帰って休んだ方がいい」

サイファは彼女を気づかった。しかし、ユールベルは首を横に振った。

「いいえ、ここにいるわ。いたいのに」

力を込めて懇願した。サイファはにっこりと笑顔を見せ、もういちど彼女の頭に手をのせた。

「わかった。無理はするな」

ユールベルは彼の手の温もりを感じながら、こくと頷いた。

サイファは魔導省の最上階へとやってきた。早足で廊下を歩く。自室があるため、毎日のように通る場所だ。しかし、今回は自室を通り越し、さらにその奥へと向かった。

コンコン――。

突き当たりの扉を軽く二度ノックし、返事を待った。

「どうぞ」

中から男性の落ち着いた声が聞こえた。サイファは扉を開け、中へと進んだ。その部屋は、サイファの部屋の倍ほどの広さがあった。こざっぱりと整頓され、床もきれいに磨かれていた。

奥の窓際には、サイファと同じ濃青色の服を着た男性が立っていた。サイファよりやや背が高いくらいで、体格はよく似ていた。彼は入口に背を向け、後ろで手を組み、大きなガラス窓から外を見下ろしていた。

サイファは彼へと足を進めた。無言で隣に並ぶと、目を細め、ガラス越しに空を望んだ。一面に広がる青のグラデーションに、白い筋状の雲がかかっていた。緩やかな風が、少しずつそれを流していく。

「ジーク＝セドラックを釈放していただけますか、長官」

サイファが口を切った。長官と呼ばれた男は、前を向いたままきっぱりと答えた。

「通報があった以上、そういうわけにもいかん」

「彼は嵌められたんです。お察しでしょう」

サイファは淡々と抗議した。長官は彼を一瞥した。

「彼と君とはどういう関係だ」

「娘の友達です。アカデミーのクラスメイトでしてね」

サイファは愛想よく言った。

「ただの学生が、なぜルーファス＝ライアン＝ラグランジェの不興を買ったのか知りたいね」

長官は外を見ながら、鷹揚に尋ねかけた。

「娘と仲良くしすぎたからでしょう」

サイファはさらりと答えた。長官は怪訝な顔で振り向いた。

「つまらない冗談など期待していないのだが」

「いえ、事実ですよ。これ以上のことは、ラグランジェ家の内情に関わることなので、お話できませんが」

サイファは真顔で言った。その表情を見て、長官はようやく信じる気になった。軽くため息をつき、椅子に腰を下ろした。そして、机に向かうと、肘をついて両手を組み合わせた。

「だとすれば、不憫な話だな。……だが、釈放するわけにはいかんよ」

「私より祖父の方が大きな影響力を持っているから、ですか」

サイファは長官に振り返り、落ち着いた声で尋ねた。

「そうだ」

長官はたじろぎもせず答えた。

「あの方の意向に逆らえば、私の首など簡単に飛ぶ」

強いまなざしで前を見据え、重々しく言葉を落とす。

サイファは端整な顔を、鋭く引き締めた。青い瞳に小さな強い光が宿った。

「いずれ、あなたよりも祖父よりも、私の方が強大な権力を握ることになりますよ」

「そうになったときには、君のご機嫌を窺うよ」

長官の声はいたって真面目だった。ゆっくりサイファに振り向くと、口元に不敵な笑みをのせた。サイファは隙のない表情で、同じように笑みを返した。

「こんなときのために、あなたの弱みを握っておくべきでした」

冗談とも本気ともつかない口調でそう言うと、今度は大きくにっこりと笑ってみせた。

長官は強い視線を送り、低い声で詰問した。

「君がそこまで彼に肩入れする理由は何だ」

「娘を悲しませたくないんですよ」

サイファは穏やかに微笑した。長官はそれでもなお、けわしい表情を崩さなかった。

「それだけか？」

再度、低い声で問いただす。

サイファの顔から、ずっと笑みが消えた。一呼吸すると、静かに話し始めた。

「彼は、私が持ちえなかったものを持っています。だから、それを守ってやりたいと思うのかもしれない」

「……なるほどな」

長官は椅子の背もたれにもたれかかった。

「君にそう言わしめる彼に、興味が出てきたよ」

かすかに楽しむような声だった。天井を見つめ、わずかに口角を上げた。

ジリリリリ——。

けたたましく電話のベルが鳴った。長官は身を起こし、素早く受話器をとった。

「はい。……なに？ ……………わかった」

そう言い終わると、ゆっくりを受話器を戻した。視線を落としたまま、怪訝な面持ちで眉間にしわを寄せる。

「どうかしたのですか」

サイファは嫌な予感を押し隠し、平静を装って声を掛けた。

長官は彼に振り向いて言った。

「君にとっては朗報だ……多分な」

サイファは再びジークの取調室へ入っていった。

ジークはパイプ椅子に座りうなだれていた。が、サイファに気がつくと、驚いて立ち上がった。机に手をつき、身を乗り出して、思いつめた表情で口を開いた。

「サイファさん、俺、やっぱり……」

「釈放だ」

「え？」

ジークはきょとんとした。サイファの言葉がとっさに理解できなかった。

「釈放だよ」

サイファはもう一度、繰り返した。ジークの表情はみるみるうちに晴れていった。

「ありがとうございます！」

力いっぱい礼を言うと、大きく頭を下げた。

「私は何もしていない」

サイファは顔を曇らせた。だが、ジークはそれを謙遜としか受け取らなかった。言いようもないくらい彼に感謝した。

サイファはけわしい表情でジークを見つめた。

「釈放はされるが、魔導の不正使用については記録に残る。一生、君についてまわることになる。覚悟しておけ」

「……はい」

ジークは嘔みしめるように返事をし、ごくりと唾を飲み込んだ。

ジークはサイファにつれられて、取調室をあとにした。狭く薄暗い廊下を歩き、広いロビーへと出た。

「ジーク」

鈴を鳴らしたような声。

ジークははっとして視線を上げた。息を呑んだ。そこにいたのはアンジェリカだった。彼の真正面に立ち、安堵した表情で目を潤ませていた。

「おかえり」

ジークはその声を耳にすると、張りつめていたものが一気にとけた。倒れ込むように彼女の肩に額をのせ、腕を掛けて寄りかかった。

「……ただいま」

あたたかい吐息まじりの小さな声。だが、それで充分だった。彼女にだけ届けばよかった。

ユールベルは離れたところからその様子を見ていた。ジークは自分の存在にも気づいていない——。そんなふたりに割って入ることなど出来なかった。無言でその場から立ち去った。

サイファは腕を組み、訝しげに娘を見つめた。

——まさか、アンジェリカが……。

ジークの突然の釈放を知ってから、ずっとその考えが頭にこびりついていった。彼女を目にすると、その疑惑はよりいっそう膨らんだ。杞憂であってほしい。サイファはそう願わずにはいられなかった。

76. 特別な普通の日々

「ただいま」

「お帰りなさい」

サイファが荘厳な扉を押し開けて声を張ると、レイチェルはパタパタと小走りで出迎えた。いつものように、彼女は愛らしく微笑んでいた。だが、彼の方はいつもと違っていた。顔色が冴えない。レイチェルはコートを受け取りながら、心配そうにじっと覗き込んだ。

「どうしたの？ 疲れているみたい」

「いろいろあってね。でも、心配ないよ」

サイファはにっこり微笑み、彼女の頬に軽く口づけた。

「アンジェリカはいるか？」

そう尋ねた彼の声は、無意識に硬くなっていた。レイチェルの表情もつられて硬くなった。当惑して、彼を見つめ返す。

「ええ……呼んでみましょうか？」

「ああ、頼む」

サイファは淡々と答えると、応接間へと向かった。

「お父さん？」

アンジェリカはきょろきょろと見まわしながら、応接間へ入っていった。レイチェルからサイファが呼んでいると聞いてきた。だが、彼の姿は見当たらなかった。ふと、カーテンがはためていることに気がつき、その方へ足を進めた。カーテンの後ろの大きなガラス窓は全開になっていた。

外に目を遣ると、サイファの後ろ姿が見えた。まだ濃青色の制服のままだった。ズボンのポケットに片手を掛け、空を見上げているようだ。

空は半分ほど紺色に塗り替えられていた。地平近くの鮮やかな朱色が、最後の抵抗を見せるかのように、強い存在感を示している。その上を、オレンジ色の雲がゆっくりと流れていく。

サイファは彼女に気がつくやうに、にっこり笑って振り返った。

「アンジェリカ、降りておいで。風が気持ちいいよ」

「うん」

アンジェリカは庭に降り、サイファの隣へ駆けていった。ひんやりした風が、頬を心地よく撫でた。黒髪がさらさらとかすかな音を立てて揺れた。思わず顔がほころんだ。後ろで手を組み、背筋を伸ばすと、大きく深呼吸した。そして、にっこりとして隣の父親に振り向いた。

だが、彼は、朱い光を正面から受けながら、思いつめた顔で遠くを見つめていた。アンジェリカの胸に不安が湧き上がった。

「お父さん？」

「空の向こう側が見たいと思ってね」

サイファは穏やかにそう言うと、アンジェリカに微笑んだ。

「空に向こう側なんてあるの？」

「さあね、ラウルがそう言ったんだ」

「本当にあるんだったら、私も見てみたいな」

アンジェリカは無邪気に笑った。

サイファは、再び、空に目を向けた。

「ルーファスのところへ行ったのか」

「……ええ」

アンジェリカも空を見上げた。その顔から笑みは消えていた。

「何を言ったんだ」

「アカデミーを卒業したら、言うとおりにするって」

サイファは険しい顔で彼女に振り向いた。ルーファスが簡単にジークを釈放させるはずはない。そうしたの、彼を利用する必要がなくなった——つまり、アンジェリカがルーファスの要求を受け入れたからではないか。それがサイファの推測だった。外れていればいいと思っていた。しかし、彼女の答えは、彼の推測そのものだった。

「何か、考えがあるのか？」

低く抑えた声で尋ねる。彼女は目を細め、遠くを見つめたまま、抑揚のない声で答えた。

「言葉のままよ。約束は守るわ」

「どういうことかわかっているのか！」

サイファはつい感情的になった。声を荒げ、詰問する。

アンジェリカはキッと睨みながら振り向いた。

「わかっているわよ！ ラグランジェ家の誰かと結婚して、本家を継げばいいんでしょう？」

彼女のまなざしには強い決意が表れていた。軽い気持ちで行動したわけではないのだろう。そのことは、サイファにもよくわかった。だからといって、納得できるものではない。

「本当に、それでいいのか」

重々しく尋ね掛ける。

「もう決めたことよ」

アンジェリカは素っ気なく答え、再び空を見上げた。

「不幸だなんて思わないで。それはそれで幸せなことかもしれないじゃない。お父さんとお母さんのようになれば、いうことないわ」

サイファの胸に小さなとげが刺さった。

「私たちとおまえでは、状況が違う」

「どんな状況でも、幸せになる努力はするわ」

アンジェリカは大きな漆黒の瞳をサイファに向けた。真剣な面持ちで、まっすぐに彼を見つめる。サイファの鼓動は大きくドクンと打った。返す言葉を見失った。

「私の結婚相手も、お父さんみたいな人だといいいんだけど」

アンジェリカはにっこり笑って、小さく肩をすくめた。いじらしい彼女の笑顔に、サイファの胸は強く締めつけられた。

「ジークには、言ったのか」

アンジェリカの顔に陰が落ちた。目を伏せ、ぼつりと答える。

「言わないつもり」

「おまえが良くても、彼を傷つけることになるぞ」

「わかっているわ」

アンジェリカは後ろで手を組み、くるりと背を向けた。短いスカートがふわりと舞った。

「でも、言ったら、きっとまた危ないことをしちゃうから」

「だからといって……」

「それに」

アンジェリカの凜とした声が、サイファの言葉を遮った。サイファは大人しく口をつぐんだ。目の前の小さな背中を見つめた。彼女はわずかに振り向き、かすかな笑みを浮かべた。

「卒業までは、普通に過ごしたいから」

「普通？」

サイファは怪訝に尋ね返した。アンジェリカはくるりと体をまわし、彼に向き直った。

「そう、アカデミーで勉強して、ジークやリックと話をして、笑いあって、ときどき喧嘩もして……そんな普通の日々が、私にとっては特別なの」

そこまで言うと、彼女は急に真剣な顔になった。

「卒業までにそんな思い出をいっぱい作っておきたい。そのためには、ジークに何も言わない方がいいと思うの。確かにひどいと思うけど……私の最後のわがまま、許してほしいな」

アンジェリカは寂しげな瞳で曖昧に笑った。

「アンジェリカ……」

サイファは何も言えなくなった。

「ジークさんには、いつ言うつもりなの？」

ふいに、レイチェルの声が割り込んだ。その声は後ろの窓際からだった。どうやらそこでふたりの会話を聞いていたようだ。

「言わない……言えないわ、きっと」

アンジェリカはうつむいた。

「駄目、それだけは駄目よ」

レイチェルは庭に降り、アンジェリカへと足を進めた。怖いくらいに思いつめた顔で、まっすぐに彼女を見つめている。

「ジークさんを傷つけることになる。あなたはそのことに傷つくことになる。ふたりとも、きっとずっと引きずってしまうわ。時が経てば忘れるだろうなんて、思わない方がいい」

「でも、私、わかってもらえないから……」

アンジェリカはとまどいがちに、弱々しく言葉を落とした。

レイチェルは優しく彼女の髪を撫でた。

「それでも、あなたが自分の口から伝えなければならないことよ」

アンジェリカは顔を上げ、すがるように母親を見た。彼女は穏やかな微笑みで、娘を包み込んだ。無言で勇気づける。

「……わかったわ。卒業式の日伝える」

アンジェリカは小さく頷き、しっかりした声で答えた。覚悟を決めた彼女の表情には、もう弱さは見られなかった。

アンジェリカは家の中へ戻り、庭にはサイファとレイチェルが残った。

「すまない」

「え？」

レイチェルはきょとんとして振り向いた。サイファは眉根を寄せ、つらそうな顔で彼女を見ていた。

「君の口から告げる機会を奪ったのは、私だ」

重々しく声を落とす。レイチェルは目をつむり、静かに首を横に振った。

「あのときは、ああするしかなかった、そうでしょう？ 悪いのは私だもの」

「違う」

サイファは足を踏み出し、強い調子で否定した。

レイチェルは後ろで手を組み、空を仰いだ。長い金色の髪が風に揺れ、夕陽を浴びて煌めいた。

「この話はやめましょう。しない約束だったじゃない」

「……ああ」

サイファは喉の奥から絞り出すように返事をした。その約束をさせたのも、自分だった。

「アンジェリカのことはどうするの？」

レイチェルは話題を変えた。過ぎ去ったことよりも大事な、いま、最も考えなければならぬことだ。

サイファは表情を引き締めた。

「このままにはしない」

低い声で鋭く答える。

レイチェルは視線を落とした。

「もしかしたら、アンジェリカの選択は正しいのかもしれないわ」

複雑に顔を曇らせながら、小さな声で言った。しかし、サイファの決意は揺らがなかった。腕を組みながら前に歩み出ると、紺色の空を見上げ、目を細めた。

「君もわかっているだろうが、あの子の選択は次善のものだ。一番に望むことではない。だから、私はあきらめないよ。アンジェリカを幸せにするためなら……」

ふいに、レイチェルは彼の背中に頬をつけ、そっと寄りかかった。

「意地になっているの？」

「いや、アンジェリカのことを大切に思っているだけだよ」

背中 of 彼女を安心させるように、サイファは優しく誠実に答えた。

「無茶はしないで」

レイチェルは静かにそう言うと、彼の体温を感じながら目を閉じた。

空は抜けるように青かった。鮮やかに色づく緑は、まぶしいくらいに輝いている。アンジェリカは軽い足どりでアカデミーへ向かっていた。

「おはよう」

校門をくぐったところでジークとリックを見つけ、駆け寄りながら声を掛けた。

「おはよう、アンジェリカ」

リックはにっこりと微笑んだ。その隣で、ジークは照れくさそうに顔を赤らめ、目を泳がせていた。原因はきのうのことだった。釈放されたときに、安堵して思わず彼女に寄りかかってしまった。あとで考えると、そのことが少し情けなく思えた。

「きのうのこと、お母さんに話したの？」

アンジェリカは彼の心情を察することなく、無遠慮に覗き込んで尋ねた。彼女の大きな瞳に見つめられ、彼の顔はますます熱を帯びていった。

「あ、ああ……。帰ったらもう知ってた。サイファさんから連絡があったって」

微妙に視線を外しながら、なんとか冷静に答えを返した。

「お母さんに何か言われた？」

アンジェリカは気遣わしげに尋ねた。ジークは少し考えて、ぽつりと答えた。

「バカ……ってな」

アンジェリカはくすりと笑った。ジークもつられて笑った。

本当は、母親の言葉には続きがあった。

——やり方に問題はあったけど、まあよくやったんじゃない？ 連れ去られた子を助けようとしたんでしょ？

ぶっきらぼうだが温かみのあるその言葉に、ジークは涙が出そうになった。そんなこともあり、なんとなく気恥ずかしくて、アンジェリカには続きの言葉は言えなかった。

「これからどうすりゃいいんだろ」

ジークは足元を見ながら、ため息まじりにつぶやいた。目の前の小石を軽く蹴飛ばした。

「何が？」

アンジェリカはきょとんとして尋ねた。ジークは顔をしかめ、頭に手をやった。

「あのじいさん、あれで挨拶代わりにとか言ってやがったし、今度はどんな手でくるか……」

「もう大丈夫よ、きっと」

アンジェリカはにっこり微笑んだ。ジークは怪訝に眉をひそめた。

「なんでだよ」

「そんな気がするだけ」

アンジェリカは青い空に向かって、明るく声を弾ませた。

「根拠のない自信はアテにならないって言ったの、誰だっけな」

ジークは呆れたように言った。しかし、アンジェリカは笑顔を崩さなかった。

「私の勘はよく当たるのよ」

屈託なくそう言うと、大きな瞳をくりっとさせ、後ろで手を組み、ジークを覗き込んだ。

「今から悩んでたって仕方ないじゃない。何か起こったら、そのとき考えましょう」

「うん、そうだね」

リックが横から相槌を打った。

しかし、ジークは難しい顔をして首を傾げた。彼は、ふたりほど楽観的にはなれなかった。

三人は校舎に入り、教室へ向かっていた。そのとき、前から歩いてきたレオナルド、ユールベルのふたりと鉢合わせした。ジークとレオナルドは、互いにムツとした表情で睨み合った。ジークはすぐに視線を外し、無視して通り過ぎようとした。だが、レオナルドはジークを見据え、口をひらいた。

「ユールベルから話は聞いた」

ジークは反射的に足を止めた。話というのは、おとといからきのうにかけてのことだろう。彼女に頼まれ、彼女の弟を救おうとした。簡単にいえば、そういうことになる。彼女がどう説明したのかはわからないが、ジークにとってはどうでもいいことだった。止めた足を再び動かそうとした。そのとき――。

「一応、礼は言っておく」

レオナルドの口から、思いもよらない言葉が発せられた。ジークは驚いて顔を上げた。ジークだけではなく、アンジェリカとリックも大きく目を見開いている。

レオナルドは不機嫌な顔で続けた。

「だが、勘違いするな。ユールベルがおまえを頼ったのは、おまえ以外に話せない状況だったからであって、おまえが頼りになるとか、頼もしいとか、頼りたいとか、そんな理由じゃない」

ジークはうんざりして脱力した。やはりレオナルドはレオナルドだと、妙に納得した。

ユールベルはレオナルドの隣で、困惑した表情を浮かべていた。

「ねえ、ユールベル」

「え？」

アンジェリカはユールベルに声を掛けた。ユールベルはびくりと振り向いた。アンジェリカはにこにこ微笑んでいた。

「今度、ふたりだけで話せないかしら」

「ええ、いいけど……」

「ふたりきりなんてダメだ！」

ジークは慌てて割り込んだ。ユールベルを信じていないわけではなかったが、ふたりきりにするには漠然とした不安があった。

「おまえ、何を企んでいる?!」

今度はレオナルドだった。きつい口調でアンジェリカを問いつめた。

「話をするだけよ」

アンジェリカは口をとがらせた。

「行くぞ」

レオナルドはユールベルの手を引き、逃げるように大股で歩き出した。

「また連絡するわ」

アンジェリカはユールベルの背中に声を送った。彼女は振り返って何か言いたげな顔を見せたが、レオナルドは立ち止まらず強引に連れ去った。

「おまえ、何の話をするつもりなんだよ」

ジークは腕を組み、むすっとしてアンジェリカに振り向いた。まさか、自分の話か——？ 仏頂面の後ろで、鼓動が高鳴った。

「ジークのことじゃないから安心して」

まるで彼の心を見透かしたように、アンジェリカはさらりと答えた。

「別にっ……んなこと……」

ジークの顔に一気に血がのぼった。とっさに反論しようとする。だが、すぐにトーンダウンし、口ごもっていった。うつむいて腕を組み、困ったように眉をひそめた。

「そうだわ」

アンジェリカは急に何かを思い出し、目を大きく見開いた。

「ジーク、前に私の手料理を食べたいって言ってたじゃない？」

「いっ、言ってねえよ！！」

ジークは焦った。今度は思いきり否定した。確か、それは彼女が言い出したことであって、自分が言った記憶はない。

「何よ、そんなに嫌なの？」

アンジェリカは口をとがらせた。

「えっ、あ……い、嫌とは言ってねえだろ……」

ジークはきまり悪そうにうつむいた。耳元が赤くなっていく。いつものことながら、すっかり彼女のペースである。少し悔しい思いはあったが、不思議と嫌な気はしない。

「じゃあ、今度、ジークの家に作りに行くわ」

アンジェリカは顔を輝かせて言った。

「俺んち?!」

ジークは自分を指さし、素頓狂な声を上げた。アンジェリカはちょこんと首を傾げた。

「だめ？」

「母親にきいてみねえと……」

ジークは難しい顔で唸った。断られることはないと思うが、きっと何かとからかわれるだろう。そのことだけが心配だった。

アンジェリカはにっこり笑った。

「それじゃ、きいておいてね。リックも食べに来てね！」

「いいの？ 楽しみだなあ」

リックは素直に嬉しそうな声を上げた。自分も誘ってもらえるとは思わなかった。ジークだけというなら、それはそれで構わないと思っていたが、やはり少し寂しさはある。当然のように誘ってくれた彼女に感謝した。もっとも、ジークはふたりきりの方がいいと思っているかもしれないが——。リックは彼の顔色を窺った。

ジークは眉根を寄せ、考え込んでいた。

リックは苦笑いした。

だが、ジークの頭の中は、リックの想像とは掛け離れていた。ジークは、明るく振る舞う彼女を見て、微かな不安を感じていた。無理をしているのではないか、そんなふうに思えた。もしかしたら、責任を感じ、自分を元気づけようとしてくれているのかもしれない。それとも、今だけでも嫌なことを忘れていたいのだろうか。

「ジーク？」

アンジェリカが目をぱちくりさせて、下から覗き込んだ。

「あまり難しい顔ばかりしてたら、眉間のしわ、取れなくなっちゃうわよ」

「しわなんて寄ってねえよ」

そう言いつつも、ジークはこっそり下を向き、人差し指と中指で眉間を伸ばした。

「え？ お父さん？！」

アンジェリカは口に手をあて、息を呑んだ。教室の前で壁に寄りかかっていたのは、彼女の父親のサイファだった。彼は三人に気がつくやうに、人なつこい笑顔を見せた。

「やあ、きのうは大変だったね」

壁から体を離すと、軽く右手を上げ、ジークに声を掛けた。ジークは少し驚きながらも、挨拶を返そうとした。だが、そのとき、アンジェリカは彼を庇うように前に飛び出した。あごを引き、上目遣いで父親を睨みながら、声をひそめて問いつめる。

「何をしに来たの？」

「ジークに用があって来たんだよ」

サイファは優しくなだめるように言った。しかし、彼女は警戒を解かなかった。それどころか、ますます態度を硬化させた。

「だめ！！」

首を横に振りながら、必死に押し返そうとする。

「どうしたんだよ、アンジェリカ……」

ジークは彼女の後ろで呆然とつぶやいた。ついさっきまでの楽天的な明るさとは、まるで正反対の挙動である。多少、無理をしているのではないかと思ったが、ここまでの落差を見せられては、さすがに驚く。

サイファは彼女の細い腕を掴み、引き寄せた。抵抗する彼女を抱きしめ、彼女にだけ聞こえるように耳元でそっと囁いた。

「心配するな。あのことは彼には言わない。アンジェリカの大切な日常は守るよ」

「じゃあ、何の用なの」

アンジェリカは父親を見上げ、きつい口調で尋ねた。ジークたちにも聞こえる声だった。サイファも小声をやめ、通常の声で答えた。

「上司にジークを連れてくるように言われたんだ」

「どうして」

アンジェリカはサイファの服をぎゅっと掴み、潤んだ揺れる瞳を彼に向けた。

サイファは申しわけなさそうに肩をすくめた。

「私にもわからないんだ」

「そんな……」

「彼のことは守るよ。信じてくれるかい？」

アンジェリカは不安そうな顔のまま、かすかに頷いた。

サイファはにっこりとして、彼女の頭に手をのせた。

「そういうわけで、一緒に来てくれるか？ ジーク」

「でも、これから授業が……」

ジークは嫌な予感がして腰が引けた。とっさにその場しのぎの言いわけを口にする。

サイファは愛想よく微笑んだ。

「ラウルの許可は取ったよ」

逃げ道は塞がれていた。ジークには、他に断る理由が思い浮かばなかった。観念するしかない。素直に「はい」と返事をする、サイファのあとについていった。

「心配ないよ」

ひたむきにふたりを見送るアンジェリカの肩に、リックは優しく手をおいた。アンジェリカは沈んだ顔でうつむいた。

「そうだといいんだけど」

「もう大丈夫って、さっき自分で言ってたじゃない。アンジェリカの勘はよく当たるんでしょ？」

リックは同意を求めるように、にっこり微笑み掛けた。

「ええ、そうね」

アンジェリカも顔を上げて、微笑み返した。だが、今の自分の心にあるのは不安ばかりだった。嫌な想像が次から次へと頭に浮かぶ。こんな勘は当たらなければいい。当たらないでほしい。懸命にそう願った。

78. ずっと忘れない

「こんにちは」

アンジェリカはにっこりと挨拶をした。戸口で出迎えたジークは、呆然と彼女を見つめた。

「家出でもしてきたのか？ その荷物……」

「違うわよ」

アンジェリカは口をとがらせた。

「材料とか、調味料とか、準備するものがたくさんあるの」

「言ってくれば迎えに行ったのに」

ジークはあきれたように言いながら、彼女がリュックサックを下ろすのを手伝った。そのリュックサックは、彼女が中にすっぽり入るくらいの大きなものだった。しかも、ずっしりと重い。

「こんなものを担いで、よくここまで歩いてきたな」

「日頃から鍛えているもの」

身軽になったアンジェリカは、腰に手をあて、ふうと大きく息をついた。そして、ぐるりと部屋の中を見まわした。

「リックはまだなの？」

彼女はジークに振り返って尋ねた。ジークはぎくりとした。頭に手をやり、片目を細めながら答える。

「ああ、あいつな……。なんか用が出来たみたいで来られねえって」

「そう」

アンジェリカは沈んだ声を落とした。

ジークの胸にずきりと痛みが走った。リックが来なかったのは、おそらく自分に気を遣ったことだろう。もちろん、そんなことを頼みはしない。だいたいリックが遠慮したところで、アンジェリカとふたりきりになれるわけではない。そう、ここには他にもうひとりいるのだ。遠慮のかけらもない人間が――。

「いらっしゃい、アンジェリカ！」

不必要に大きな声が耳をつんざいた。そのもうひとり、母親のレイラである。ジークはうんざりしてため息をついた。

「すごく楽しみにしてたのよ。おいしい手料理、期待してるわ」

レイラは満面の笑顔で声を弾ませた。

「任せてください」

アンジェリカはにっこり笑い、両方のこぶしをぎゅっと握ってみせた。

「それじゃ、全部お任せしちゃうわね。台所はもうホント好きなように使っていていいから」

レイラは左手を大きく開き、腕を勢いよく伸ばすと、狭い台所をオーバーに示した。まるで舞台上の司会者のようだった。

アンジェリカはさっそく料理に取りかかった。フリルのついた淡いピンク色のエプロンを身に

つけると、リュックサックから材料を取り出し、丁寧に並べていく。ジークは背後からその様子をじっと見ていた。

「何を作るんだ？」

「シチューよ」

アンジェリカは流し台に向かったまま答えた。

「シチューか……」

ジークは難しい顔で腕を組んだ。前にセリカが作ったものと同じである。比べたくはないが、無意識に比べてしまいそうで怖い。それでも、自分は心の中に留めるつもりだ。しかし、母親は危険である。なにせ、考えなしに思ったことをすぐ口に出すのだ。そのせいで幾度、肝を冷やしたか知れない。

「何か問題？」

アンジェリカは包丁を手に振り返り、眉をひそめた。

ジークは鈍く光る刃を見て、顔から血の気が引いた。慌ててぶるぶると首を横に振った。

「俺も何か手伝うよ」

「今日はひとりで作るって決めたの」

アンジェリカは、腕まくりをするジークを制止した。ジークはまくった袖を下ろし、後ろから見守ることにした。強情な彼女の事だ。ひとりでやると決めたのなら、必ずそれを貫くだろう。他の人がどういう提案をしようと、簡単にそれを受け入れるはずがない。

アンジェリカは野菜を洗い、包丁で皮を剥き、一口大に切っていった。手つきは悪くなかった。丁寧にそつなくこなしていく。動きも計算されているようで無駄がない。ただ、あまりにも真剣な顔つきのせいか、きっちりしすぎているせいか、家庭的な雰囲気は微塵も感じられず、まるで化学実験でもしているかのようだった。

ひとつおりの材料を炒め、水を加えると、エプロンのポケットからストップウォッチを取り出した。それを首に掛け、親指でボタンをカチカチと押す。

「しばらく休憩」

アンジェリカはくるりと振り返り、ようやく表情を和らげた。

「ねえ、料理と魔導って似ていると思わない？」

アンジェリカは両手で頬杖をついて尋ねた。

「は？ どこが？」

ジークは椅子に腰掛けながら、不思議そうに彼女を見た。

「プリミティブなものを組み合わせで高度なものを構成していくところとか、応用次第で無限のバリエーションを創り出せるところとか。レシピどおりに作っても個性が出ちゃうのも似てるわね」

アンジェリカはニコニコしながら答えた。ジークは腕を組み、首をひねって考え込んだ。

「まあ、なんとなくわかるような気もするけどな」

「でしょう？」

アンジェリカは嬉しそうに身を乗り出した。しかし、視線を斜め上に流すと、少し不満げに付け加えた。

「ただ、料理の場合は手続きを短縮できないのがもどかしいわね」

そう言いながら、首に掛けたストップウォッチの紐を、くるくると指に巻きつけたり、ほどこいたりした。せっかちな彼女には、そのことがいちばんの問題だった。こういう待ち時間がじれったいのだ。

それは、ジークも同じだった。彼もときどき簡単な料理を作るが、待ち時間を待ちきれず、苛つていることが多い。だが、今日の待ち時間はまったく苦にならなかった。彼はちらりとアンジェリカを盗み見た。

ピピッ。

短く電子音が鳴った。アンジェリカはストップウォッチの表示を確認して立ち上がった。

「あと少しよ。待っててね」

にっこり笑ってそう言うと、短いスカートをひらめかせ、パタパタと鍋の方へ駆けていった。ジークは椅子に座ったまま、彼女を目で追った。

やがて、台所からシチューらしい匂いが漂ってきた。ジークはそわそわした。

「お、そろそろかな？」

匂いにつられ、レイラも再び居間へやってきた。ジークの隣に座り、頬杖をついた。そして、優しく目を細め、アンジェリカの後ろ姿に視線を投げた。

「一生懸命でホント可愛いわよねえ。ねえ、ジーク」

「ん……ああ、まあ……」

ジークは口ごもりながら曖昧に返事をした。

「お待たせ」

アンジェリカはシチューをトレイに載せて運んできた。レイラ、ジーク、そして自分の席へ、順に配っていく。

ジークは目の前に置かれた皿の中をじっと覗き込んだ。とりあえず、見た目は普通のクリームシチューだ。どこもおかしなところはない。匂いも普通に美味しそうだ。

レイラは息子の頭を小突いた。

「そんなにジロジロ見ないの」

アンジェリカはくすりと笑った。そして、ロールパンが山盛りになったバスケットを、テーブルの中央にどんと置いた。

「パンは時間がかかるから、家で焼いてきたの」

「焼いたって、まさか、おまえが作ったのか？」

ジークはパンを指さしながら顔を上げた。アンジェリカはエプロンを外しながら、むっとして

口をとがらせた。

「そうよ、疑っているの？」

「いや、驚いただけだ」

ジークはまじまじとパンの山を見つめた。味はまだわからないが、少なくとも見た目は、市販のものとは比べても遜色ない。

「さ、それじゃ、食べましょうか」

レイラは明るく声を張ると、両手を合わせた。

「いただきまーす」

「いただきます」

レイラのあとに続いて、ジークとアンジェリカも手を合わせて言った。

ジークはシチューをスプーンですくい、口に運ぼうとした。だが、その手が途中で止まった。軽くため息をつきながら、ゆっくりと顔を上げる。

「あのな、そんなに見られてたら食べねえって」

「だって、ジークの反応が気になるんだもの」

アンジェリカは真面目な顔で、黒い大きな瞳をまっすぐ彼に向けていた。彼女だけでなく、なぜか母親もじっと彼の方を見ていた。

ジークはもう一度ため息をつくと、覚悟を決めて、山盛りのスプーンにぱくりと食らいついた。

「どう？」

「……うまい」

口をもぐもぐと動かしながら答える。

「本当？」

アンジェリカは疑わしげに下から覗き込んだ。

「ああ、本当にうまいって」

どんなふうに表現すればいいかわからなかったが、お世辞ではなく本当に美味しかった。ひいき目もあるかもしれないが、セリカのよりも美味しいとジークは思った。手を止めることなく、ガツガツと頬張っていく。

彼のいつも通りの豪快な食べっぷりを見て、アンジェリカはようやく安堵し、顔をほころばせた。

「ごちそうさま！ 本当においしかったわ。想像以上よ」

レイラは陽気に笑いながら、歯切れよく言った。それが本心だということは、少なくともジークにとっては一目瞭然だった。もっとも、彼女がどんなものを想像をしていたのかはわからないし、聞かない方がいいだろうと思った。

「俺も、ごちそうさま」

ジークは椅子にもたれかかり、満足そうに腹に手を置いた。多めに作ったシチューも、山のようであったパンも、すべてなくなった。ほとんど彼が平らげたようなものだ。

アンジェリカは本当に嬉しそうだった。笑顔をあふれさせている。そんな彼女を見て、ジークも嬉しくなった。

「置いとけよ。あとで俺がやっつく」

後片づけを始めたアンジェリカに、ジークは後ろから声を掛けた。

「ダメよ。後片づけまでが料理だって、うちのシェフも言っていたもの」

彼女は皿を洗う手を止めずに言った。ジークは腕を組み、柱に寄りかかった。そして、口元を緩め、小さな後ろ姿を見つめた。

「やっぱすげえよ、おまえ」

「ありがとう」

アンジェリカはちらりと振り返り、くすりと笑った。

「お茶、入ってるわよ！」

後片づけを終えたアンジェリカに、レイラは大声で呼びかけた。

「ありがとうございます」

アンジェリカは台所からパタパタと駆けてきて、席についた。ジークもその後ろからのんびり戻ってくると、彼女の隣に座った。

レイラは紅茶をふたりに差し出した。そして、興味津々に身を乗り出すと、アンジェリカに尋ねかけた。

「それにしても、料理に興味を持つなんて、どういう心境の変化？」

アンジェリカは両手でティーカップを持ち、にこやかに微笑んだ。

「自立することに憧れていたの」

そう言って、熱い紅茶をひとくち流し込むと、小さく息をついた。

「本当は、料理も掃除も出来なくたって、何の不自由もないんだけど」

「でも、他へお嫁に行ったら、そういうわけにもいかないでしょ？」

アンジェリカはきょとんとした。だが、すぐになっこりすると「ええ」と答えた。

ジークは耳元を赤くしながら、横目で母親を睨みつけた。自分をからかっているに違いない。いや、自分だけならいい。だが、アンジェリカを巻き込むのはやめてほしいと思った。変なふうに見えるかもしれないだろうか——。心配だが、尋ねることもできない。下を向いて額を押さえると、大きくため息をついた。

「どうしたの？ ジーク」

アンジェリカは首を傾げ、覗き込んだ。

「そろそろ帰るだろ、送ってく」

ジークは腕時計を見て立ち上がった。アンジェリカの家はここから遠い。のんびりしていたら、真夜中になってしまう。

アンジェリカは座ったままで、目をぱちくりさせた。

「今日はここに泊まっていくのよ。言ってなかったかしら」

「な、なに言ってんだよ、おまえ」

ジークの声はうわずっていた。しかし、アンジェリカは真顔だった。大きな瞳でじっとジークを見つめる。

「お父さんとお母さんの許可はちゃんと取ったわよ」

「えっ……」

パコン。

レイラが丸めた新聞紙でジークの頭を叩いた。

「あんたなに顔を赤らめてんのよ。アンジェリカは私の部屋で寝るの。あたりまえでしょう？」

思いきり冷たい目を息子に向ける。ジークは一気に上気し、激しく狼狽した。

「わっ……わかってるよ！！」

本当はわかっていなかったが、そう言うしかなかった。きまり悪そうに顔を背けながら、しかめ面で舌打ちをした。そして、ふいに何かを思いついた様子ではたと動きを止めると、唐突にアンジェリカの腕を引いた。

「上へ行こう」

「え？ ええ」

彼女はとまどいながらも、手を引かれるまま彼についていった。

ジークは、彼の部屋がある二階を通り過ぎ、さらに上へ向かった。

三階は屋根裏部屋だった。そこは物置きとして使われているようだ。埃っぽく、段ボール箱が無造作に積まれている。天井は低く、屋根の形そのままに斜めになっていた。電灯はなかった。天窓から射し込む月明かりだけが、ぼんやりとその部屋を照らしていた。

ジークはその天窓を開け、スチールの梯子を掛けた。彼自身には必要ない。アンジェリカのためである。

「屋根の上に出るの？」

「ああ、気をつけろよ」

アンジェリカは不安そうに怖々と梯子を上っていった。

「わあ……」

屋根の上立つと、彼女の顔がぱっと晴れていった。澄み渡った濃紺の空には、たくさんの星が瞬いていた。今にも頭上から降り注いできそうだった。夜の冴えた風は、頬を心地よく刺激し、さらさらと黒髪をなびかせた。

ジークは天窓から顔を出し、彼女を見上げると、ふっと表情を緩めた。母親から逃げたい一心の思いつきだったが、ここに来て本当に良かったと思った。

「上ばっか見ると、よろけて落ちるぞ。座れよ」

「うん」

アンジェリカは緩やかな傾斜に腰を下ろした。ジークも天窓から屋根に出ると、彼女の隣に脚を投げ出して座った。

「ねえ、星って何だと思う？」

アンジェリカは膝を抱えて、真上を見上げた。

「太陽の小さいやつだろ？ 小さい光球」

「いったい何の意味があるのかしら」

「さあ……」

ジークは眉根を寄せた。正しい答えはわからないし、気の利いた答えも思い浮かばない。

「おまえはどう思うんだよ」

逆にアンジェリカに聞き返してみた。彼女を空を見上げたまま、真顔で答えた。

「空に開いた穴じゃないかしら」

「は？」

「穴から光が漏れているのが星なの」

今までに聞いたこともないような突飛な意見だったが、それを否定するほどの知識もジークにはなかった。

「じゃあ、おまえのいう“空”って何だよ」

「結界かしら。この国を維持しているのは四大結界師でしょう？」

アンジェリカは小さく人差し指を立てた。

「きっと、空の向こう側には別の国があって、そこから守るために結界を張っているのよ」

「なるほどな……」

ジークは後ろに手をつき、空を見上げて目を細めた。一応、筋は通っている。

「ただの想像だけど」

アンジェリカは笑って肩をすくめた。そして、ジークに振り向くと、無邪気に声を弾ませる。

「もし、ジークが四大結界師になったら、こっそり教えてくれないかしら。この国を維持する仕組み」

ジークは苦笑いした。

「それ、きっと国家機密だぜ」

「誰にも言わないわ、ね？」

アンジェリカは口元で両手を合わせ、ぐいっと顔を近づけた。

「まあ、覚えてたらな……」

ジークはどぎまぎしながら、曖昧な返事でごまかそうとした。

「じゃあ、約束」

アンジェリカはにっこり笑って小指を立てた。

「二十年先か、三十年先かわかんねえぞ」

「だから、忘れないように指きりするの」

軽く口をとがらせそう言うと、ジークの小指に自分の小指を絡ませ、勝手に指きりをした。

「……ねえ、ジーク」

少しの沈黙のあと、ためらいがちに呼びかけた。その声には微かに鬩りのようなものが感じられた。ジークははっとして振り向いた。

「就職のこと、決めたの？」

彼女は膝を抱えうつむき、ぽつりと尋ねた。

ジークは表情を引き締め、はっきりとした声で答えた。

「魔導省に行くことにした」

「そう」

アンジェリカは複雑な面持ちで相槌を打った。

「俺さあ」

ジークは頭の後ろで手を組み、仰向けに寝転がった。

「アカデミーに入る前まで、あんまり怖いものなんてなかったんだ。自分がいちばんすごいんだって本気で思ってた。今にして思えばバカみたいだけどな」

そこで言葉を切ると、遠くを見つめ、ふっと笑った。

「それが、アカデミー入学試験から、いきなりおまえに負けるしよ。王宮にはラウルとかサイファさんとか、すごい人がごろごろしてる。今はびびってばかりだ」

「ラウルのことを認めるなんて、どうしちゃったの？」

アンジェリカは膝の上に頬をのせ、いたずらっぽく笑った。ジークは真面目な顔で答えた。

「だんだん、相手の力量が感じられるようになってきたんだ」

それは、紛れもなくアカデミーで学んだ成果である。その方法を教わるわけではないが、魔導について学び、鍛錬していくうちに、副次的に身につけていくのだ。

「ラウルは底知れねえな。好きにはなれねえけど、魔導に関してはすごいヤツだと思う」

「私は先生としても立派だと思うけど」

アンジェリカは笑って付け加えた。

ジークは顎を引き、彼女の背中をじっと見つめた。ラウルだけではない。彼女にも底知れないものを感じていた。深く探ろうとすれば、体の芯から凍りつきそうになる。だが、そのことは口には出さなかった。

「だから、魔導省へ行くの？」

アンジェリカは前を向いたまま、落ち着いた声で尋ねた。

「ああ、そういうすごい人たちの中で働いてみたいんだ」

ジークは淡々と、しかし、迷いなく答えた。

アンジェリカもジークの隣で仰向けになった。星空が視界一面に広がった。他に見えるものは何もない。遠近感が掴めなくなり、少し目眩がして、空に落ちていきそうな錯覚を起こした。

ジークはすぐ横に彼女がいるのを感じ、心拍が上昇した。

「おまえはあの研究所か？」

少し早口で尋ねる。

アンジェリカは胸元で手を組み、ゆっくりと目を閉じた。

「そうね、行けたらいいわね」

小さくつぶやくように答える。

「なんだよ、めずらしく弱気だな」

ジークは驚いて、アンジェリカに顔を向けた。彼女は目をつむったままだった。前髪が、かす

かに風に揺れた。

「ねえ、ジーク」

小さな唇が、小さく動いた。

「ん？」

「今日はありがとう」

「礼を言うのは俺の方だ」

ジークは柔らかく微笑んだ。

「今日のことは、ずっと忘れないから」

アンジェリカは囁くように言った。

「大袈裟だな、おまえ。こんなこと、またいつでも出来るだろ。今度こそリックも呼ぼうぜ、な」

ジークは明るく言った。だが、アンジェリカの返事はなかった。仰向けで目を閉じたまま、人形のように動かない。ジークの心臓がドクンと強く打った。弾けるように起き上がると、彼女を覗き込んだ。

「アンジェリカ？ おい、アンジェリカ！」

何度も肩を揺すりながら、必死に呼び掛ける。

アンジェリカはうっすら目を開いた。ぼんやりとジークの顔を見る。

「……あんまり心地いいから、つい眠っちゃった」

ジークは安堵した。全身から力が抜け、へたり込んだ。

「張り切りすぎて疲れたんだろ。降りようぜ」

「もう少し、ここにいたいな」

アンジェリカは潤んだ黒い瞳に、星空を映しながら言った。

「また寝ちまうかもしれねえだろ。ここ屋根の上だぜ？ 危ねえって」

「ジークがいてくれるでしょう？」

そう尋ねかけると、にっこりと微笑んだ。ジークはわざと大きくため息をついた。

「……ったく、あと少しだけだぞ」

「ありがとう」

アンジェリカはしばらくの間、無言で星空を眺めていた。しかし、それは長く続かなかった。やがて、目蓋が落ちていき、静かに寝息を立て始めた。

ジークは片膝を立て、彼女の様子をじっと見守っていた。

ふいに風が冷えてきたのを感じた。自分の上着を脱ぎ、彼女の上にそっと掛け置いた。

そのとき、彼はどきりとした。近くで見た彼女の寝顔が、やけに白いような気がしたのだ。月明かりのみが頼りのこの場所では、正確な顔色などわかりようがない。ただ、重なって見えた。一ヶ月もの間、目を覚まさないあのときと——。自分の許容以上のことがなだれ込んだとき、自衛のため脳が活動を停止する、つまり、眠ったまま起きないことがある。サイファはそう言っていた。

——違う、ただ疲れて眠っているだけだ。

ジークは自分に言い聞かせるように、心の中で強くつぶやいた。アンジェリカが現実から目を背けたくなるほどの出来事など、最近は起こっていないはずだ。……いや。もしかしたら、曾祖父に怯えているのかもしれない。彼女は大丈夫だと言っていたが、根拠は何もない。まわりに心配を掛けないように明るく振る舞っていただけかもしれない。

「……アンジェリカ？」

おそるおそる声を掛け、手の甲でそっと頬に触れた。しかし、彼女は目を覚まさない。ジークは不安そうに目を細めた。鼓動は早く強くなっていく。

もういちど呼び掛けようか迷った。もし、眠っている原因が精神的なものだとしたら、無理に起こしてはいけないらしい。結論が出ないまま、じっと彼女を覗き込み、手のひらで柔らかい頬を包み込んだ。

アンジェリカのまつげが小刻みに震えた。彼女はゆっくりと目を開いた。目の前をぼうっと見つめる。次第に焦点が合っていき、ぼやけた輪郭がはっきりしていった。そこには、思いつめたジークの顔があった。頬には彼の手が置かれている。そこだけ、とてもあたたかい。

「だいぶ、寝てた……？」

「いいよ、寝てろよ」

ジークは優しく言った。

「ダメ……だって、夢を見たいわけじゃないもの……」

彼女は手をつき、懸命に起き上がろうとした。だが、崩れるように再び意識を失った。ジークは、それを予期していたかのように、しっかりと抱きとめた。無言で手に力を込めた。そして、そのまま彼女を抱えて立ち上がると、天窓の梯子を降りていった。

79. それぞれの覚悟

「おはよう」

アンジェリカは校門前のジークとリックに駆け寄ると、いつものようににっこりと挨拶をした。だが、ふたりの反応はいつもとは違った。リックは目をぱちくりさせて尋ねた。

「家出でもするの？」

「違うわよ！」

アンジェリカは肩をいからせて言い返した。

「少し大きな荷物を持っているだけで、どうしてすぐに家出って思われてしまうのかしら」

腕を組み、不満げに眉根を寄せる。その背中には大きなリュックサックが負われていた。少しどころではなく、かなり大きい。彼女自身がすっぽり入ってしまうくらいだ。どう考えても、アカデミー通学には相応しくない鞆である。

「リック、この前は どうして来てくれなかったの？ 楽しみにしていたのに」

彼女は顔を上げ、思い出したように言った。彼女が言っているのは、ジークの家で手料理を作ったときのことだ。それが一昨日で、きのうも休日だったため、リックと顔を会わせるのは、その後、初めてである。

「ごめんね、急に用事が出来ちゃって」

リックは申しわけなさそうに微笑んだ。詳しい内容は言わなかった。

「もしかして、セリカに関係があるの？」

アンジェリカはそんな気がして、何となく尋ねた。別に、だからどうというつもりもなかった。だが、リックはそれに答えようとはしなかった。

「ごめんね」

にっこりと謝るだけで、肯定も否定もしなかった。

「まあ、いいけど」

アンジェリカは、彼の態度に引っかかるものを感じながらも、おとなしく引き下がった。これ以上の追求は無駄だと悟ったのだ。セリカに気を遣っているのだろう、そう思うことにした。

ジークは心配そうに彼女を見つめていた。

あの夜、アンジェリカは屋根の上で意識をなくした。そして、そのまま翌日の昼過ぎまで眠り続けた。だが、目を覚ましたときには、すっかり元気を取り戻していた。

「起こしてくれればよかったのに。だいぶ寝過ぎしちゃった」

小さく肩をすくめ、笑いながらそんなことを言っていた。

結局、何が原因なのか、何が起こったのか、ジークにはわからないままだった。ただ、あの夜の彼女の状態は、普通ではなかった。確かなことはそれだけだ。

サイファにはまだ言っていない。その機会がなかったからだ。だが、言うべきかどうか迷っていた。今の彼女を見ていると、あのときはただ疲れていただけかもしれない、そう思えてくる。それでも一応、知らせておいた方がいいのだろうか――。

「それで、その荷物は何なの？」

リックは非常識なリュックサックを指さして尋ねた。アンジェリカはにこにこして答えた。

「今日はユールベルのところへ行くのよ」

「本気か?!」

今まで黙り込んでいたジークが、突然、大声で割り込んできた。リックを押しつけ、慌てた様子で詰め寄る。しかし、彼女は嬉しそうに、明るく声を弾ませた。

「ええ、料理も作るの。楽しみだわ」

「ダメだ！」

ジークは強く言った。だが、彼女は涼しい顔で切り返した。

「もう約束したもの」

「どうしてもっていうなら、俺も一緒に行く」

ジークは負けじと食らいついた。

「私はユールベルとふたりきりで話がしたいの」

アンジェリカは口をとがらせた。

「ダメだ！」

あんなことがあったすぐ後だ。何がなんでも止めなければならない。ユールベルとふたりきりなんて——。ジークは必死だった。

アンジェリカはますます不機嫌になった。眉根を寄せ、ジークを睨みつける。

「どうしてジークにそんなことを言われなければならないの？ お父さんとお母さんの許可は取ったのに」

「え……」

ジークは何も言えなくなった。まさか、両親の許可を取っているとは思わなかった。ユールベルとふたりきりなんて、よく許したものだ。心配ではないのだろうか。ジークは不思議でならなかった。

「行ってもいいのね？」

アンジェリカは下から覗き込んで尋ねた。

「あ、ああ、まあ……」

ジークは困り顔で口ごもった。

アンジェリカはにっこりと満面の笑みを浮かべた。

「良かった」

そう言うと、重そうなリュックサックを揺らしながら、軽い足どりで校舎へと駆けていった。

ジークとリックも、彼女を追って駆け出した。

キーン、コーン——。

何ごともなく夕方になり、終業のチャイムが鳴った。

「今日はここまでだ」

ラウルは教本を閉じ、授業を切り上げた。彼の授業は、どんなにきりが悪くても、必ずチャイムとともに終わる。このことに関しては、クラスの誰もが好評価をしていた。彼は無造作に教本と抱えると、焦茶色の長髪を揺らし、大きな足どりで出ていった。そのとたん、教室は賑やかになった。いつもと変わらない日常の光景だ。

アンジェリカは嬉しそうに、大きなリュックサックを背中に担いだ。

「じゃあね。私はユールベルの家に行くから」

「ああ、無理すんなよ」

ジークは鞆に教本を投げ込みながら、素っ気なく答えた。だが、それは繕ったもので、本当は心配で胃に穴が開きそうだった。

アンジェリカはにっこり微笑むと、手を振って教室を出ていった。彼女の大きなリュックサックは、常にまわりの注目を集めていたが、彼女自身はまるで気づいていない様子だった。

「行かせてよかったの？」

リックは鞆を肩に掛けながら、ジークの席へやってきた。

「仕方ねえだろ」

ジークはため息まじりに答えた。そして、鞆を掴み、立ち上がった。

「リック、おまえは先に帰ってろ」

「どこへ行くの？」

リックは不安を顔いっぱいに広げた。まさか、こっそりとユールベルの家に行って、覗きや盗み聞きをするつもりでは——。思いつめた今のジークならやりかねない。疑惑の目で彼を見る。

「おまえ、何か勘違いしてねえか？」

ジークは眉をひそめて振り返った。

「サイファさんのところだよ」

そう言って、王宮の方向を指さした。

「君の方から会いに来てくれるなんて、嬉しいよ」

サイファは椅子から立ち上がり、机の上に散乱した書類を片づけ始めた。ここは魔導省の塔、その最上階にあるサイファの個室である。彼の背後の大きなガラス窓には、青い空と赤い空、それらを繋ぐグラデーション、そして、傾きかけた太陽が映し出されていた。

「アンジェリカの手料理はどうだった？」

サイファは手を止めずに尋ねた。

「あ、はい、おいしかったです」

ジークは不意の質問に少し慌てた。答えてしまってから、もっと感情のこもった言い方は出来なかったものかと後悔した。

しかし、サイファはその答えで十分に満足しているようだった。

「そうだろう」

声を弾ませ、満面の笑みをたたえた。

「それで、何の話だい？ あ、座っていいよ」

「はい」

ジークは示されたパイプ椅子にゆっくりと座った。気をつけたつもりだったが、それでもギギッという耳障りな軋み音は止められなかった。

机の上は大雑把に片づいた。サイファはようやく手を止め、大きな椅子に腰を下ろした。ひじを机につき、両手を組むと、深い蒼色の瞳をまっすぐジークに向けた。

ジークはびくりとした。心の中を探られているかのように感じた。

「アンジェリカのことなんですけど」

少し早口でそう切り出した。サイファはじっと彼を見つめたまま、無言で次の言葉を待った。「その、料理を作りに来た夜、話している途中で眠るように意識をなくしたんです。次の日にはちゃんと、ていうか昼頃に目を覚ましたんですけど……。疲れていただけかもしれませんが、少し気になって……」

ジークはそこまで一気に話すと、心配そうに顔を曇らせた。膝にのせた手を握りしめる。

サイファはわずかに目つきを険しくした。

「そのとき、何の話をしていたんだ？」

「えっと……確か、就職の話だったと思います」

ジークは考えながら答えた。

「そうか」

サイファは小さく息をつき、革の背もたれに身を預けた。ゆっくりと顔を上げ、目線を天井に向ける。

ジークはそれを見て、不安が湧き上がった。

「あの……」

「教えてくれてありがとう。大丈夫だとは思いますが、気をつけて様子を見るよ」

サイファは体を起こし、にっこりと笑いかけた。だが、ジークは笑顔を返せなかった。責めるように尋ねる。

「心配じゃないんですか。そんな状態でユールベルのところへ行かせて」

「何かあれば、彼女が連絡をくれるだろう」

サイファは冷静に答えた。

ジークは難しい顔で、目を伏せた。サイファがそこまでユールベルを信用していることが意外だった。いや、いつまでも過去のことにこだわっている自分の方がおかしいのかもしれない。今のユールベルは、確かにもう危険ではないと思う。だが、アンジェリカとふたりきりにするには、やはり抵抗がある。ジークはそんな考えの間で揺れていた。

「そうだ、ジーク、今からうちに来ないか？」

サイファは突然、思いついたように言った。ジークはきょとんとした。

「実は、既にひとり来ることになっていてね。君が来てくれると、彼も喜ぶだろう」

「彼？」

怪訝に尋ね返す。

サイファは口元に笑みをのせ、椅子から立ち上がった。

「ちょうど来たようだ」

タタタ……と軽快な足音が、遠くから近づいてきた。ジークもつられて腰を上げ、音のする方を振り返った。それとほぼ同時に、ガシャンと弾けるように扉が開く。

「こんにちは！」

澆漑とした元気の良い挨拶とともに、金髪の少年が飛び込んできた。

ジークはその少年を指さし、記憶をたどりつつ口を開いた。

「おまえは確か……」

「あれ？ ジークさん？」

少年はくりっとした青い目をぱちくりさせた。

「こんにちは」

戸口で出迎えたユールベルに、アンジェリカはにこやかに挨拶をした。ユールベルは、包帯で覆われていない方の目で、彼女の背負っているものをじっと見つめた。

「あなた、家出してきたなんてことは……」

「違うわよ！」

アンジェリカは思いきり頬を膨らませた。そして、むすっとしたまま、無遠慮にすたすたと中に入った。ここへは一度、遊びに来たことがあるので、間取りは知っている。ユールベルの案内は不要だった。

リビングルームに入ると、アンジェリカはリュックサックを下ろした。

「これは、今日の夕食の材料とお泊りに必要なものよ」

ファスナーを開け、中を覗き込み、両手を突っ込む。

「あと、これ……」

そう言いながら、上目遣いでユールベルを見ると、そこからガラスの瓶を取り出して掲げた。赤みがかった黒色のボトルに、金と銀で箔押しされた、上品な薄赤色のラベルが貼られている。

「それ、お酒？」

ユールベルはぼつりと尋ねた。アンジェリカはにっこり微笑んだ。

「どれが美味しいかわからなかったから、適当に持ってきちゃった」

ユールベルはため息をついた。

「おじさまは知っているの？」

「まさか。告げ口する？」

「わざわざそんなことしないわ。でも、聞かれたら正直に答えるわよ」

「ええ」

アンジェリカは肩をすくめながら、ボトルを机の上に置いた。

「弟はいないって言っていたけど、どうしたの？」

ユールベルはソファに腰かけた。

「おじさまのところへ行っているわ。つまり、人質ってことね」

感情のない声で、淡々と答える。アンジェリカは腰に手をあて、軽くため息をついた。

「素直じゃないわね。お父さんのことは、信頼しているんでしょう？」

「ええ、でも、おじさまは私のことを信用していないのよ」

ユールベルはまっすぐ前を向いて言った。

「勘違いしないで。悲観しているわけじゃないし、責めているわけでもない。おじさまがそうするのは当然だと思っているわ」

アンジェリカの顔がわずかに翳った。

「そんなつもり、ないと思うけど……」

そこでいったん言葉を切ると、軽く息をつき、腕を組んだ。

「まあいいわ。どちらにしる、何も起こりはしないもの、ね」

「ええ、そうね」

ユールベルは無愛想に答えた。

アンジェリカは気を取り直し、笑顔を作った。

「それじゃ、さっそく夕食を作るわね。作るっていても、お手軽なパスタなんだけど」

そう言いながら、フリルのついた淡いピンクのエプロンを身につけた。そして、重いリュックサックを抱え、パタパタと台所へ向かった。

「お帰りなさい」

レイチェルはリビングルームから姿を現すと、高く澄んだ声で出迎えた。いつものようにロングドレスを身にまとっている。ウェストがきつく締められ、スカートが腰から丸く膨らんだ形のものだ。

「ただいま」

サイファは優しい笑顔で応えた。

「あら、ジークさん？」

レイチェルは大きく瞬きをし、少し語尾を上げて言った。サイファの後ろには、ジークとアンソニーが立っていた。アンソニーが来ることは聞いていたが、ジークのことは知らなかった。

ジークはぺこりと頭を下げた。動作がややぎこちなかった。サイファとはよく会っていたが、レイチェルとはしばらくぶりに顔を合わせる。そのため緊張していたのだ。

「いらっしやい」

レイチェルは華やかに微笑みかけた。

ジークは微かに頬を染めながら、引き寄せられるように彼女を見つめた。

——ドクン。

彼の鼓動は強く打った。

澄んだ大きな瞳、意志の強そうな目元、柔らかそうな頬、小さな口——。

そのどれもが、アンジェリカとよく似ていると感じたのだ。レイチェルは変わっていない。アンジェリカがレイチェルに似てきたのだろう。それだけアンジェリカが成長したということかもしれない。もっとも、まだまだ成長の追いついていない部分もあるが——。

「ジークさん？」

レイチェルは小首を傾げて、尋ねるように呼びかけた。

ジークははっとして我にかえた。

「あ、いえ、よろしくお願いします」

慌てふためいて耳元を真っ赤にしながら、もういちど頭を下げた。

「僕、夕食の準備をしにいったいいですか？」

隣のアンソニーが、落ち着きなく尋ねた。待ちきれないといった様子である。

「どうぞ」

レイチェルは笑いながら答えた。

ジークは驚いてアンソニーに振り向いた。

「おまえが作るのか？」

「ジークさんの分もちゃんと作ります」

人なつこい笑顔でそう言い残し、台所へと駆けていった。

ジークは小さく息をついた。彼の料理好きは知っていたが、まさかここに来てまで作るとは思わなかった。

「大丈夫だよ。彼はなかなかいい腕をしているから」

サイファはそう言いながら、濃紺色のコートを手を伸ばした。そのとき――。

グイッ。

サイファはその手を強く引いた。長い金色の髪がふわりと揺れる。彼女は倒れこむように彼の胸に寄りかかった。彼女はきょとんとしていたが、サイファは何の説明もせず、彼女の細い腰に手をまわしてぐっと引き寄せた。そして、顎を軽く持ち上げると、小さな唇に口づけをした。ふたりの足元に、ばさりとコートが落ちた。

ジークは棒立ちのまま固まった。あまりに突然のことに面くらった。どうすればいいのかわからなかった。目のやり場に困ったが、あからさまに逸らすことも出来なかった。

サイファはゆっくり顔を離すと、彼女の肩に手をのせた。大きな蒼い瞳を見つめたまま、流れるような横髪を撫で、愛おしげに微笑みかける。レイチェルも彼から目を逸らすことなく、にっこりと微笑み返した。

サイファは床に落ちたコートを拾い上げ、無言でレイチェルに手渡した。そして、踵を返すと、足早にリビングルームへ向かっていった。彼の端正な横顔はきりりと引き締まっていた。そこから彼の思考を読み取ることはできなかった。

「ごめんなさい、驚かれたでしょう？」

レイチェルは肩をすくめて、くすりと笑った。

「いえ……」

ジークはきまり悪そうに答えた。だが、話しかけてくれて少しほっとしていた。

レイチェルはそっと彼に歩み寄り、顔を近づけた。

「サイファ、子供みたいなのところがあるの」

声をひそめてそう言うと、立てた人差し指を唇に当て、片目を瞑って見せた。

ジーク頬を赤らめながら、少し体を反らした。冷静に頭を働かせることができなかつたせいか、彼女の言わんとするところがさっぱりわからなかつた。

「お待たせ」

アンジェリカはふたり分のパスタとサラダを机に並べると、ユールベルの隣に腰を下ろした。柔らかいソファは大きく沈み、彼女をふんわり包み込むように支えた。

「いよいよね」

嬉しそうに声を弾ませると、家から持参したワインのボトルを手にとった。コルク栓を抜くところは何度も見たことがあったが、実際にやるのは初めてだった。コルク抜きをねじ込み、力を込めて引っ張る。見よう見まねだったが、なんとか抜くことができた。多少、不格好だったものの、特に問題はない。

グラスを近くに引き寄せ、ワインを注いでいく。ワイングラスはなかったので、ユールベルがいつも使っているストレートのグラスである。

「きれいな色……」

ユールベルはようやく口を開いた。グラスに注がれた液体は、赤寄りのピンク色をしていた。見事なくらい透きとおっている。緩やかに揺れる表面は、電灯の光を受け、きらきらと輝きを放っていた。まるで宝石のようだ。

「乾杯しましょう」

アンジェリカはユールベルにグラスのひとつを手渡した。彼女は無表情で受け取った。

「それじゃ、乾杯」

アンジェリカはにっこり微笑んだ。自分のグラスを、ユールベルのグラスに重ねる。カン、と短い音が、鈍く響いた。

ユールベルはひとくち流し込むと、グラスを置いた。フォークを手に取り、パスタの皿を引き寄せる。茄子のトマトソーススパゲティだった。トマトの鮮やかな色が、食欲を刺激する。彼女は少しずつフォークに巻きつけ、口に運んだ。茹で加減も、味の濃さもちょうど良かった。アンジェリカが夕食を作ると言い出したときには、まともなものが作れるのか疑っていたが、出されたものは意外にもまともすぎるくらいのものであった。少し見直した——そう思って、隣の彼女に目を向けた。

アンジェリカはグラスの中の液体を覗き込んでいた。固い表情だった。ワインには、まだ口をつけていないようだ。しかし、覚悟を決めたように頷くと、ぐいっとグラスを傾けた。

ごくり。

喉が小さく動き、ワインを飲み込んだ。

彼女は次第になんともいえない表情になり、首を傾げて口を開いた。

「……思っていたのとまるで違う味……甘くないのね」

眉根を寄せ、じっとグラスを見つめる。

「麻醉薬にお酢と唐辛子を入れたみたいな感じ」

「あなた、味覚は大丈夫？」

ユールベルは半ばあきれたように、半ば心配そうに尋ねた。アンジェリカ言葉は、ワインの味を表現したものとはとても思えなかった。第一、麻酔薬を飲んだことなどあるのだろうか。

「喉が焼けるように熱いわ。舌もしびれてきたみたい」

アンジェリカは胸元を押さえ、顔をしかめた。

「無理することはないわ。やめた方がいいわよ」

ユールベルはワインを口に運びながら、淡々と忠告した。

アンジェリカは挑発されたように感じた。ムツとして強気な表情になる。

「平気よ、グラスに注いだ分くらい、きちんと飲みきるわ」

力をこめてそう言うと、もういちど口をつけた。だが、彼女のグラスの中身は、ほとんど減っていないかった。

ユールベルはパスタを食べ終わり、ソファにもたれかかりながら、のんびりとワインを飲んでいた。二杯目である。一方、アンジェリカはまだ一杯目と格闘していた。少しづつ口に運び、ようやく半分くらいになったところだ。

「何か、話があるんでしょう？」

ユールベルはグラスを机に置き、そう切り出した。そもそも、アンジェリカの当初の目的は、料理でもワインでもなく、話をするため、だったはずだ。

「えっ？ あ、そうだったわ」

彼女は一瞬、きょとんとした表情を見せたが、すぐにユールベルの言葉を飲み込んだ。グラスをそっと机に置くと、ソファの背もたれに身を預け、まっすぐ前を見つめた。そして、小さな口を開き、凜とした声で言った。

「私、ラグランジェの本家を継ぐことになったの」

ユールベルは右目を大きく見開いた。アンジェリカは天井を仰ぎ、静かに畳み掛ける。

「ラグランジェの誰かと結婚して、新しい後継者を産んで、育てるの」

「ジークは知っているの？」

ユールベルは感情を抑え、冷静に尋ねかけた。

アンジェリカは首を横に振った。

「まだ言っていないわ」

「いつ言うつもりなの」

ユールベルの口調が少しきつくなった。アンジェリカは儂い笑顔を浮かべた。

「私が自由でいられるのは、アカデミー卒業までなの。だから、卒業式の日と言おうかなって」

「それでいいの？ いえ、あなたが良くてジークが良くないわ」

ユールベルの口調はますますきつくなった。責めているかのようだった。

アンジェリカは視線を落とした。

「そうね、きっとジークを怒らせることになるわね。嫌われるかもしれない。でも、いっそ、その方がいいのかも……」

「あなたのことを嫌いになれば、ジークも楽でしょうけど」

ユールベルは腹立たしげに、突き放すように言った。

アンジェリカは困惑して顔を曇らせた。

「一生、会えないってわけじゃないのよ。ジークは王宮で働くことになると思うし……」

ユールベルは鋭く睨んだ。

「一生、会えないよりも、余程つらい目を見るわよ」

「えっ？」

アンジェリカは目を大きくして、不思議そうな顔をした。

ユールベルはため息をつきながらうつむき、額を押さえた。

「ごめんなさい、わかっているわ。あなたがこうするしかなかったってこと」

わずかに頭を振りながら、沈んだ声を落とす。後頭部で結んだ白い包帯が、小さく揺れた。

「でも、どうして私にこんな話をするの？」

ゆっくりと顔を上げ、険しい視線をアンジェリカに向ける。

「まさか、ジークを譲るなんて言い出すつもりじゃないでしょうね」

「ジークは物じゃないわ。譲るも譲らないもない」

アンジェリカは真面目な顔で彼女を見つめ、落ち着いた声で言った。

今度はユールベルが顔を曇らせた。確か、アンジェリカには以前にも同じようなことを言われた。そう、自分はこういう発想しかできない、とても浅ましい人間なのだ。しかし、それはずっと前から気がついてきたこと。ユールベルはうつむき、自嘲ぎみに笑った。

「私の結婚相手、まだ決まっていないみたいなの」

アンジェリカは話を本筋に戻した。

「レオナルド……かもしれない」

ぽつりと落とされたその名前を聞いて、ユールベルは大きく目を見開いた。何も言葉が出てこなかった。

「可能性としては、いちばん高いと思うの。年齢的に合う人って、他に思い浮かばないし、レオナルドは過去にも候補に挙がったことがあるもの」

アンジェリカはまるで他人事のように、推論を披露する。

「どうなるかわからないけれど、あなたにはあらかじめ言っておいた方がいいと思って」

「そう……」

ユールベルはやっとのことで相槌を打った。

「もしかしたら、あなたにとってはその方が都合がいいかしら」

アンジェリカは口元に人差し指を添え、斜め上に視線を流した。ユールベルは怪訝に眉をひそめたが、アンジェリカは真顔で彼女に振り向いた。

「あなた、レオナルドと一緒にいても、少しも幸せそうじゃないもの。嫌なら嫌って言った方がいいわよ」

ユールベルはうつむいて目を閉じた。

「怖いのよ」

アンジェリカは不思議そうに首を傾げた。

「レオナルドが？」

「ひとりになることが、よ」

ユールベルは顔を上げ、目を細めた。

「私のことを見てくれるのは、レオナルドだけだもの」

「そんなことないんじゃない？ お父さんだって、ラウルだって、あなたのことを気に掛けているわ」

アンジェリカは即座に反論した。ユールベルはゆっくりと首を横に振った。

「そうじゃないの。あなたにわかるように説明できないけれど……」

「どういうこと？」

アンジェリカは覗き込むようにして尋ねた。ユールベルは遠くに目を向けて答える。

「私は、あなたほど純粋じゃないもの」

「なにそれ、バカにしているの？」

アンジェリカはムツとして、強い口調で問いただした。しかし、ユールベルはふっと寂しげに笑っただけで、何も答えなかった。

アンジェリカはますます頭に来た。完全にバカにされていると思った。何もわからないことが腹立たしさを倍増させる。腹立ちまぎれに、半分ほど残っていたワインを一気に飲み干した。ガン、と叩きつけるように、空になったグラスを机に戻す。

「それで、レオナルドと私が結婚することになったら、あなたどうするの？」

アンジェリカは喧嘩腰で詰問した。

「どうもしないわ。どうしようもないでしょう」

ユールベルは抑揚なく答えた。

アンジェリカはソファに手をついて身を乗り出し、彼女にぐいっと顔を近づけた。真剣な面持ちで、囁くように尋ねる。

「祝福してくれる？」

「してほしいの？」

「ええ、どうせなら」

アンジェリカはにっこりと頷いた。

「変わっているわね、あなた」

ユールベルはあきれたように言った。ため息をつき、グラスを手にとろうとする。

そのとき、ふいに肩に重みがかかった。

驚いて振り向くと、アンジェリカがくてんと倒れるように寄りかかっていた。

「酔ったの？」

ユールベルは彼女の様子を窺った。その視線は、何もない空間に向けられていた。焦点が定まらないというわけではない。目に見えない何かを見据えているようだった。

「せめて、あなたとは、ずっと友達でいたいわ」

彼女の大きな瞳から、一筋の涙が頬を伝って落ちた。

今ごろあいつ、どうしてるかな——。

ジークはベッドにごろんと寝転がり、ぼんやりとそんなことを考えていた。

ここはラグランジェ家のゲストルームである。夕食をごちそうになり、その後すぐに帰ろうとしたが、サイファに強く引き止められ、断りきれず泊まっていくことになったのだ。

——コンコン。

扉が小さくノックされた。

「はい」

ジークは慌てて起き上がり、姿勢を正した。

「ジークさん」

扉がガチャリと開き、アンソニーが入ってきた。人なつこい笑顔を見せている。

「なんだおまえか」

ジークはふうと息を吐き、体から力を抜いた。

アンソニーはにこにこしながら、ジークの隣にちょこんと腰かけた。

「僕の Pasta、おいしかったですか？」

「ああ、うまかったよ」

ジークはぶっきらぼうに答えた。

「今度はもっと手の込んだものを作りますね」

アンソニーは屈託なく言った。だが、今度といっても当てはない。

「何しに来たんだよ、おまえ」

ジークはため息まじりで尋ねた。背中を丸め、面倒くさそうに頬杖をつく。

アンソニーはにっこりと微笑んだ。

「僕たちの将来について話し合うためです」

「はあ？」

ジークは素頓狂な声を上げた。

「今日ここで会えたのも、天のお導きです」

アンソニーは両手を組んで、うっとり顔と顔を上げた。ジークはぽかんと口を開けた。

「……おまえ、アタマ大丈夫か？」

アンソニーは途端に真面目な顔になり、ジークに振り向いた。

「僕のお兄さんになってください」

「何だよそれ」

「つまり、姉さんをお願いしましてことです。姉さんと結婚すれば、ジークさんは僕のお兄さんです」

人差し指を立て、なぜか得意げに説明する。

ジークは額を押さえ、大きくうなだれた。頭痛がしてきた。

「レオナルドなんかじゃダメなんです。一緒にいても、姉さん、少しも幸せそうじゃないし。姉さんにはきっとジークさんみたいな人がいいんです」

アンソニーは力説した。ジークは疲れたようにため息をついた。

「あのな、そういうことは他人が頼むようなことじゃねえだろ」

「他人じゃなくて、きょうだいです」

「本人じゃねえって意味だよ」

「姉さんは奥ゆかしい人だから、僕が頑張らないと幸せになれないと思うんです」

アンソニーは次々と淀みなく言い返してきた。

ジークは奥ゆかしいという形容に疑問を感じたが、あえて反論はしなかった。アンソニーに背を向け、ごろんと寝転がった。ベッドのスプリングが微かに軋んだ。

「いくら頼まれても俺は無理だからな。他を当たれ」

突き放すように言い放つ。

アンソニーは困ったように顔を曇らせた。

「どうして？ 姉さんのこと、嫌いですか？」

ジークは背を向けたまま、ゆっくりと口を開いた。

「……俺にはいるんだ、大切な奴が。何があっても、そいつとずっと一緒にいるって、そう決めたんだ」

訥々と言葉を落としていく。その声は静かだったが、内に秘めた強い決意がにじんでいた。

「姉さんには、少しの望みもないんですか？」

「ない」

アンソニーの質問に、ジークは迷いなくきっぱりと答えた。

アンソニーは一瞬うろたえた。軽く握った右手を口元に当てると、じっと考え込んだ。沈黙が続く。やがて、ふっと表情を緩め、にっこりと微笑んだ。

「わかりました。仕方ないですよ」

物わかりの良い態度に、ジークは安堵した。彼としても、これ以上きついことは言いたくなかった。

「じゃあ、せめて誰だか教えてください。ジークさんが心に決めた人」

アンソニーはニコニコして尋ねた。ジークを覗き込もうと首を伸ばす。

「何でおまえにそんなことまで言わなきゃなんねえんだよ」

ジークは顔を隠すように、背中を丸めた。

アンソニーはわずかに首を傾げた。

「アンジェリカ、ですか？」

「……知ってんなら聞くなよ」

ジークは少し頬を赤らめ、ぼそりと言った。誰に教えたわけでもないのに、なぜか知られているという状況にも、いいかげん慣れてきた。

「言ってみただけです。他に思い当たる人がいなかったから」

アンソニーはあっけらかんと言った。そして、人差し指を口元に当てると、考えを巡らせながら視線を上に向けた。

「でも、アンジェリカは本家の後継ぎですよ？」

「……わかってる」

ジークは下唇を噛み、白いシーツをぎゅっと握りしめた。まっさらなシーツに深い放射状のしわが刻まれる。

「でも、俺が何とかしてみせる……絶対に……あきらめたりなんか、しない……」

力のこもった低い声で唸る。それは、自分自身に対する決意の言葉だった。

サイファは寢室の扉を開け、静かに足を進めた。中にはレイチェルがいた。鏡に向かい、ブラシで長い金髪をとかしている。サイファに気がつくと、にこりと笑いかけた。サイファも笑顔を返し、ベッドに腰を掛けた。

「ジークと話をしようと思ったんだが、先客がいてね」

「もう機嫌は直ったの？」

レイチェルは鏡に向かったまま、悪戯っぽく尋ねた。サイファは小さく肩をすくめた。

「少し、大人げなかったね」

「ええ」

レイチェルは彼に振り返り、にっこりと笑った。

「こんなにむきになったのも久しぶりだな」

サイファは頭に手をやると、小さくため息をついた。

レイチェルは鏡に向き直り、再び髪をとかし始めた。

「ジークさんだから、かしら」

ちらりとサイファに視線を流して言う。

「かもしれない」

サイファは目を伏せ、ふっと笑った。背中を丸め、膝に両腕をのせると、重々しく口を開いた。

「彼は覚悟を決めている」

レイチェルは手を止め、ゆっくりと振り返った。サイファは真剣なまなざしを向けていた。固い表情で話を続ける。

「君は反対するかもしれないけれど、私はできるだけのことはしてやりたいと思っている」

「反対なんてしないわ」

レイチェルは即答した。

「それが最良と思うなら、そのように行動して」

瞬きもせずサイファを見つめ、凜とした声ではっきりと言った。

「君につらい思いをさせるかもしれない」

サイファは陰しい表情を見せた。

「私はサイファに従うわ。この指輪を嵌めたときに、覚悟は決めたもの」

レイチェルは左手の薬指に嵌められた細い銀の指輪を、右手でそっと包み込んだ。彼女の透き通った深い蒼色の瞳は、まっすぐにサイファを捉えていた。それが彼女の答えだった。

80. 天使の名を持つ少女

サイファは呼び鈴を鳴らした。

中で濁った鐘の音が響いた。

すぐに、古めかしい重厚な扉が、ギィと音を立てて開いた。中から姿を現したのは、小柄な若い女性だった。肩よりやや長いくらいの黒髪、わずかに茶色がかった黒い瞳。そして、地味な黒いワンピースと白いエプロンを身につけている。どうやらメイドのようだ。

「サイファ様、ですね」

彼が名乗るより早く、彼女は抑揚のない声で尋ねた。

「ああ」

サイファは短く返事をした。ズボンのポケットの中に左手を入れる。

「どうぞ、こちらへ」

メイドは彼を中へ招き入れ、先導した。広い廊下から細い廊下へと進んでいき、突き当たりの扉の前で足を止めた。

コンコン。

軽く二度、扉を叩く。

「サイファ様をお連れしました」

「入れ」

中から低い声が聞こえた。重く、威圧的な響きである。

メイドは静かに扉を開けた。

その部屋は書斎だった。広くはないが、小奇麗に片付けられている。微かに、古い本の黴びたような匂いがした。奥にはがっちりとした体格の男が座っていた。アンティークな机に肘をつき、戸口のふたりにじっと視線を送っている。

「フラウ、おまえは下がれ。茶もいらん。しばらく近づくな」

「かしこまりました、ルーファス様」

メイドは一礼すると、すっと下がり、静かに扉を閉めた。軽い足音が遠ざかり、消えていく。

「すまないな、当主であるおまえを呼びつけてしまって」

ルーファスは素っ気なく言った。すまないなどと思っていないことは明白だった。

「いえ、長老の命令には逆らえませんから」

サイファはにっこりと大きく微笑んだ。

ルーファスはわずかに眉をひそめた。

「まったく、おまえという奴は……。わかっていても口には出さぬ慣わしだ」

「あなたこそ、しらを切らなくても良いのですか」

サイファは笑顔を保ったまま切り返した。

長老会はラグランジェ家の重要事項に関する決定権を有している。その存在は当主以外には隠され、個々のメンバーについては当主にさえ知らされない。そのため、メンバーの察しがついても、それについては語らないのが暗黙のルールとなっているのだ。

ルーファスは顔の前で両手を組み、ため息をついた。

「まあ、今は異常時だ。互いの立場をはっきりさせた方が、都合が良いだろう」

「今日の話のためにも、ですね」

サイファがここへやってきたのは、話があるとルーファスに呼ばれたからだった。彼の話がどのようなものかは見当がついた。おそらく、アンジェリカのことだろう。正式にラグランジェ家の後継者とするための準備を進めるつもりには違いない。だが、サイファには、彼らの思いどおりにさせるつもりはなかった。

「あなたの話の前に、私の提案を聞いていただけませんか」

険しいくらいに真面目な顔になり、丁寧な口調で頼んだ。

ルーファスは鋭い目つきで彼を見上げた。

「良かろう」

重々しい声で許可を出す。

サイファは顎をわずかに上げると、口元に微かな笑みをのせた。

「ラグランジェ家を解体しましょう」

ルーファスの眉がわずかにぴくりと動いた。

「冗談にしては面白みに欠けるな」

ほとんど表情を変えず、抑えぎみに低音を響かせる。

サイファはにっこりと微笑んだ。

「純血に拘泥することをやめ、本家筋のみを残して解体すれば、すべての問題が解決する、そう思いませんか」

そこまで言うと、脇に抱えていた青いファイルを机の上に置いた。ノート数冊分ほどの厚みがある。表紙には何も書かれていない。

ルーファスはそれを一瞥すると、ギロリとサイファを睨んだ。

「これは何だ」

「ラグランジェ継承に関する提案書です。現状の分析、新しい細則の草案、それを採用した場合の影響予測などをまとめてあります」

「細則の草案だと？」

声が大きく、きつくなった。それでも、サイファは動じることなく、凜として説明を続けた。

「かいつまんでお話ししますと、基本的には第一子が継承すること、子がなければラグランジェの血を引く近親者を養子に迎え、継承させること、継承者の配偶者はラグランジェ家の者以外でも可とする。ただし、魔導の力を相当に有する者とする——といったところですね」

ルーファスは身じろぎもせず聞いていた。青い瞳で、睨むようにサイファを見つめる。

「ラグランジェとランカスターの最大の違いは何だ」

「魔導力の有無ですか」

サイファは面倒くさそうに答えた。ルーファスは自分たちのラグランジェ家と王家であるランカスター家を、何かにつけ比較していた。そして、結論はいつも自分たちの優秀性を示すものだった。サイファにはそれが有意義なこととは思えなかったし、聞き飽きてうんざりもしていた。

「そうだ」

ルーファスは低く声を落とした。

「ランカスターはその名を守れば良い。ランカスターの名こそが王家の証だからだ。だが、ラグランジェは魔導の力を守らねばならん。ラグランジェの名に力を与えているのは、我々の魔導力だからだ。そして、ラグランジェが二千年もの間、魔導力を失わなかったのは、純血を守ってきたからだ」

その声は次第に力を帯び、演説めいた口調になっていった。

サイファは腕を組んで横を向き、ため息まじりに言った。

「だが、それが過ちの始まりでしょう」

「過ちなど何ひとつない」

ルーファスは間髪を入れずに抗弁した。高圧的に声を張り、サイファを睨み上げる。

「強がりにしか聞こえませんか」

サイファは肩をすくめた。

「アンジェリカを利用しても、一時凌ぎにしかならない。数世代後には、また同様の問題が起こるはずですよ」

「その頃には医学が発達しているだろう」

ルーファスは事も無げに言った。

サイファは薄笑いを浮かべた。

「遺伝子に手を入れるつもりですか。実に、あなたらしい考えだ」

横髪を振り乱し、勢いよくルーファスに向き直る。

「だったら、アンジェリカを利用しなくても、それまで待てばいいでしょう」

「それでは間に合わん可能性もある」

ルーファスはおもむろに立ち上がると、サイファに背を向けた。レースのカーテンを半分ほど開き、ガラス越しに空を見上げる。もう随分と陽が落ち、光は急速に力を失いかけていた。

「アンジェリカ、か……上手い名をつけたものだな」

空を見上げたまま、独り言のようにつぶやいた。

「我々を破滅から救い、さらなる飛躍をもたらす新たなる血——まさに天からの使いだ」

後ろで手を組み、ゆっくりと振り返ると、ニッと片側の口端を吊り上げた。

サイファはにっこりと微笑んで応酬した。

「ラグランジェにとってではなく、私にとっての天使ですよ」

「ある日、不意に舞い降りた、というわけか」

ルーファスは含み笑いを見せる。

サイファはうつむいて下唇を噛んだ。ルーファスの云わんとしていることはわかっていた。

「参考までにお聞かせください。いつ、気づかれたのですか」

「あの子が生まれたときだ。証拠はなかったが、最も有りうる推測から導いた結論だ」

サイファはふっと息を漏らした。

「私の父も、レイチェルの父も、長老会のメンバーですからね。推測に必要な情報を集めるのは

わけもなかった、というわけだ」

ルーファスはカーテンを引き、サイファに向き直った。

「アルフォンスはおまえを殴ってしまったことを、随分と気に病んでいた」

サイファはにっこりと笑顔を作った。

「あの状況では手を上げるのも無理からぬことです」

「そうだ、嘘をついたおまえが悪い」

ルーファスは強い語調で責めた。

「しかし、嘘をつかなければ、アンジェリカは生まれていなかったかもしれない」

サイファは冷静に切り返した。

ルーファスは冷たく凍りつくような青の瞳で、刺すように彼を睨みつけた。

「……結果的に、おまえには感謝しなければならないようだ」

抑えた声でそう言うと、ゆっくりと椅子に腰を下ろした。目を閉じ、背もたれに身を沈める。革がギュッと音を立てた。

「生まれたばかりのアンジェリカを手に掛けようとしたのは、あなた方、長老会ですね」

サイファは静かに尋ねかけた。

ルーファスは目蓋を上げた。天井を見つめ、ゆっくりと口を開く。

「あれは私の独断だ。合意を取りつけていては手遅れになると思ったのだ。そのことは、他のメンバーに相当、非難されたよ」

「なるほど、だからそれ以降、動きがなかったわけですか」

サイファは得心した。腕を組み、軽く息をつく。

ルーファスは顔を上げたまま、目を細めた。

「我々の間でも意見が割れていてな。膠着状態が続いていた」

「そこへ、例の論文が出てきた」

サイファがあとを続けた。

「そうだ、あれで我々の採るべき道は決まった。アンジェリカを後継者にすると」

ルーファスの声に力がこもった。

サイファは冷淡にルーファスを見下ろした。

「少々、勝手すぎやしませんか。殺そうとしたり、蔑んだり、散々なことをしておきながら、必要となれば強引に後継者に据えるなど」

「勝手なのはおまえの方だ」

ルーファスは低く唸り、ギロリと睨めつける。

「子供が家を継ぐのは至極当然のことだ。おまえも、おまえの父も、そして私も、皆、そうやってきた。アンジェリカだけが好き勝手していい道理などない。ましてやラグランジェを解体するなど、愚劣極まる行為だ」

サイファはふっと笑い、肩をすくめた。

「良い案だと思えますけどね。次第に出生数が減ってきていますし、その面においても無理が生じてきています。このままではいずれ血筋は途絶えますよ。その提案書に詳しくまとめてありま

すので、あとでゆっくりとご覧ください」

にっこりとして、机の上の青いファイルを示した。

ルーファスはフンと鼻を鳴らした。

「期待はせぬことだ。我々はラグランジェの名を形骸化させるつもりはない。このままでは途絶えるというのなら、新たな方策を探すまでだ。純血を保ったままでのな」

「言っていることが矛盾しています」

「アンジェリカのことには葉だと割り切る。我々よりも強い魔導力を持つ、優秀な血だからな」

「自分勝手に都合のいい解釈ですね」

サイファは冷めた視線を送った。

「互いにな」

ルーファスは気難しい顔で立ち上がった。戸口の方へ歩いていき、扉の横のスイッチを押す。パチンという音とともに、薄暗くなった部屋に、人工的な白い明かりが満ちた。

「私は、何もおまえたちを苦しめたいわけではない。できれば、幸せになってほしいと思っている」

「それは、ありがたいですね」

サイファは笑顔で応じた。本心を隠すために表情を操作することには馴れているし、それが得意だという自負もあった。だが、乾いた口から発せられたその声は、少し掠れていた。

ルーファスはゆっくりと戻り、再び席についた。そして、机の上で両手を組むと、ふっと意味ありげな笑みを浮かべた。

「私の提案は、おまえにとっても悪い話ではないはずだ」

「まずは、聞きましょうか」

サイファは悠然とした口調で、余裕の態度を装った。

ルーファスは真剣な面持ちで、まっすぐサイファを見据えた。

「アンジェリカの配偶者については、おまえに決定権を与える。ラグランジェの男子なら誰でも良い。自由に選べ」

「それで譲歩したつもりですか」

サイファは鼻先で笑った。

しかし、ルーファスは無視して話を続けた。

「ただし、その配偶者は表向きのものだ。別にもうひとり、事実上の夫を据える。こちらは既に決定していてな」

サイファは怪訝に表情を曇らせた。話がきな臭くなってきたと思った。そもそも、なぜこのような繁雑なことをする必要があるのかが見えなかった。

ルーファスは陰しい目つきで彼を捉えた。

「おまえだ、サイファ」

低い声が静かに響いた。

サイファは目を見開いた。その言葉がずっしりと腹の底に落ち込む。頭の中がぐらりと揺れた。額に汗が滲んだ。

「……な……にを……」

やっとのことで、それだけの言葉を絞り出す。鼓動が次第に激しくなっていく。全身が脈打っているのがわかる。暴れる心臓が痛く、苦しい。

ルーファスは淡々と説明を始めた。

「本家筋を途絶えさせるわけにはいかんのでな。それに、今、ラグランジェで最も優秀なのはおまえだ。優れた血統を残すという意味でも、おまえ以外の選択は有り得ない」

「馬鹿な、娘だぞ！」

サイファは身を乗り出し、両手でバンと机を叩きつけた。ギリ、と奥歯を食いしばり、ルーファスを激しく睨みつける。額から頬に、汗が伝った。

「何の問題もないと思うが」

「問題だらけだ！」

反射的に噛みつく。

ルーファスはゆったりとした動作で、机に肘を立てた。

「もちろん、生まれた子は、表向きの配偶者の子ということにしておく。世間的に非難されることもない」

「そういうことを言っているのではない」

怒りを押し込めた低い声は、微かに震えていた。

そんなサイファを見て、ルーファスはふっと笑みを漏らした。

「おまえの愛する娘を、誰の手にも渡さずに済むのだぞ？」

語尾を上げ、挑発するように問いかける。

「私はあの子の父親だ！」

サイファはカッと頭に血がのぼり、大きな声を張り上げた。机についた手はわななき、その指先は白くなっていた。

ルーファスは追い打ちを掛ける。

「苦しい強がりだな。素直になれ」

「話にならない」

サイファは舌打ちをした。くるりと背を向け、大股で歩き出す。そして、乱暴に扉を開けると、そのまま部屋を出ていった。

ルーファスは何も声を掛けなかった。

外は薄暗くなっていた。太陽の姿はもう見えない。すでに、空の大半を濃紺が支配している。

振り切るように屋敷を飛び出したサイファは、冷たい空気を吸い込み、少し落ち着きを取り戻した。それでも、今はただ、この場を離れたいという思いでいっぱいだった。うつむき加減で足早に歩く。金色の髪が、緩やかな風になびき、さらりと揺れた。

「サイファ」

前方から太い声がした。

サイファははっとして顔を上げた。そこにいたのはアルフォンスだった。レイチェルの父親である。大きなごつい体に似合わない、上品で可愛らしいクリーム色の紙袋を携えている。

「もう帰るのか。一緒に食べようと思ったんだが」

そう言って、その紙袋を掲げた。前面に有名なケーキ店のロゴマークが入っていた。

サイファは何ともいえない複雑な表情を浮かべた。表情を上手く操作することができなかった。そもそも、どういう表情を作ればいいのかさえわからなくなっていた。

「話は、聞いたんだな」

アルフォンスは真剣な顔になり、重い声を落とした。

「レイチェルに話しづらいのなら、私の方から……」

「お気遣いは無用です」

サイファはアルフォンスを遮り、突き放すように冷たく言った。

アルフォンスの顔に陰が落ちた。

「すまない。ずっと君に謝りたい、謝らねばならないと思っていた。それに、言葉では言い尽くせないほど感謝している。君が……」

「そんな必要はありません」

サイファは毅然としてアルフォンスを見据えた。

「ですが、私たちのことを少しでも思ってくれているのなら、祖父を……ルーファスを説得してください」

静かにそう言うと、返事を待たず足を進めた。アルフォンスのすぐ横をすれ違う。後ろから呼び止める声が聞こえたが、振り返らなかった。逃げるように、いっそう足を速めた。

ルーファスの屋敷が見えなくなった頃、サイファはカチャリという小さな音を聞いた。ズボンのポケットの中からだった。はっとして足を止めた。左手をそっとポケットに忍ばせると、奥歯を噛みしめ、深くうなだれた。

「遅かったな。サイファはもう帰ったぞ」

書斎に入ってきたアルフォンスを一瞥すると、ルーファスは無愛想に言った。

「家の前で会いました」

アルフォンスは隅に立てかけてあったパイプ椅子を広げ、どかりと腰を下ろした。ミシミシと嫌な音が部屋に響く。

「随分と怒っていたようです。彼が受け入れる望みは薄いのではないですか」

ルーファスの表情を横目で窺う。彼は、微かに笑みを浮かべていた。

「いや、良い反応だ。サイファがこれほどまでに狼狽した姿を見せたのは初めてだろう。それだけ揺さぶられたということだ」

アルフォンスはため息をついた。

「私は複雑な気持ちです。これではレイチェルが……」

「あの女に拒否する権利はない。当然の報いだ」

ルーファスは冷然と言い放った。

アルフォンスは押し黙ってうつむいた。何も言い返すことができなかった。

コンコン。

扉が軽くノックされた。

「入れ」

ルーファスは顔を上げて言った。

ガチャリと扉が開き、メイドが姿を現した。彼女が手にしている銀製のトレイには、二人分のケーキと紅茶が載せられている。ケーキはアルフォンスが持参したものだ。

彼女は一礼して書斎に入ると、それをルーファスの机の上に置いた。芳醇な甘い匂いがほのかに漂う。彼女は再び一礼すると、すっと下がって部屋を出た。

アルフォンスはフォークを手に取り、さっそくケーキを食べ始めた。ルーファスはそんな彼に、呆れたような冷めた目を向けた。

「いい年をしてケーキなど、情けない」

「このチーズケーキは絶品ですよ」

アルフォンスは真顔で言った。

ルーファスはケーキには手をつけずに、紅茶だけを口に運んだ。

「それは？」

アルフォンスはフォークを持っていない方の手で、机の上の青いファイルを指さした。

「サイファが置いていったものだ。提案書とか言っていたな。下らん。私が受け入れるとでも思ったか」

ルーファスはティーカップを置き、吐き捨てるように言った。

アルフォンスはフォークを置き、そのファイルを手に取った。パラパラめくり、ざっと目を走らせながら、要所要所で手を止めじっくりと読む。

「数値については、多少、誇張された感はあるが、良く出来ている」

最後まで目を通すと、ファイルを閉じ、そっと机の上に置いた。

「ラグランジェ解体か……思い切ったことを考えたものだ。いや、彼は昔から家や血筋に対するこだわりはなかったな」

「愚かな男だ」

ルーファスは鼻を鳴らした。

アルフォンスは目を伏せ、難しい顔をした。

「私は……これでも良いのではないかと思う。少なくとも血筋は途絶えない。これ以上、無理を重ねても、我々に未来があるとは思えない。過去の過ちを素直に認め、変わらねばならないのかもしれない」

「馬鹿を言うな」

ルーファスは迫力ある低音で叱りつけた。

「ラグランジェは最善の方法で優秀な血を守ってきた。その証が我々の存在だ」

「サイファによれば、魔導力は減少するが70パーセント程度で収束するという予測だ。悪くないと思うが」

アルフォンスは遠慮がちに意見した。

ルーファスは鋭くギロリと睨みつけた。

「机上の空論だ。人選に誤りがなかった場合の話だろう。不確定要素も多すぎる。どちらにしろ、ラグランジェの血が薄くなるのは止められまい。すべて外部の者と婚姻した場合、七代後にはラグランジェの血は1%以下になる。それをラグランジェと言えるのか」

「魔導力を保つことと、純血を守ること、どちらが重要ですか」

「どちらも譲れん」

アルフォンスはふうと息をついた。

「やはり、あなたを説得するのは無理のようだ」

「愚か者、今ごろわかったのか。何十年の付き合いだ」

ルーファスは無表情で紅茶を口に運んだ。

「そろそろあなたの切れ味も鈍くなっている頃ではないかと思ったんですよ」

アルフォンスはしれっとそう言うと、ルーファスの前に置かれたもうひとつのケーキに手を伸ばした。

ルーファスは片肘を立て、手の甲に顎を載せた。

「この問題が片づくまでは、老け込むわけにはいかん」

「楽しそうですね」

アルフォンスは口をもぐもぐさせながら、上目遣いでルーファスの表情を窺った。彼は嬉しそうに目を細めていた。

「ああ、サイファがどう出るか、実に楽しみだ」

その言葉は本心なのだろうと、アルフォンスは直感した。ラグランジェ家の一大事だということに、それを楽しむなど不謹慎だと思ったが、口には出さなかった。彼はルーファスとは違い、ただ平和的に解決することを願っていた。

81. 絡み合う矛盾

サイファは王宮の廊下を、早足で歩いていた。人々が行き交う雑踏の中で、自分の靴音だけが際立って聞こえる。まるで、自分ひとりが隔離された空間にいるかのように感じていた。

彼は足を止めた。ラウルの医務室の前だった。難しい顔で扉を見つめ、きゅっと口を結んだ。コンコン――。

軽く二度、ノックをした。返事を待たずに扉を引き開ける。素早く中に入り、扉を閉めると、背中から倒れ込むようにもたれかかった。がしゃんと派手な音が部屋に響いた。

「何だ」

机に向かっていたラウルは、顔を上げ、短く詰問した。だが、サイファの返事はなかった。うなだれたまま顔すら見せない。前髪と横髪が陰を作っている。

サイファは後ろ手で扉を探ると、がちゃりと鍵をかけた。

「どういうつもりだ」

ラウルは机に手をつき、立ち上がった。大股で彼へと足を進める。ぶつかるほど近くまで体を寄せると、背筋を伸ばして腕を組み、威圧的に睨みつけながら見下ろした。だが、うつむいている彼の表情は窺えない。

「どけ」

ラウルはサイファの肩を掴もうと手を伸ばした。だが、逆にサイファがその手を掴んで止めた。震えるほどに強く力を込める。

「これは、おまえが受けるはずだったものだ」

抑えた声でそう言うと、キッとラウルを睨み上げ、勢いよく殴りかかった。右の拳が一直線に伸びる。ラウルは避けることも防ぐこともせず、それを頬で受けた。微動だにしない。ただ、目だけをギロリとサイファに向けた。

サイファは顔をしかめながら手を引き、その手を軽く振った。

「なんて固い顔だ……」

「説明しろ」

ラウルは凄みのある低音で唸った。腕を組み、行く手を阻むように立ちはだかる。

「あとでな」

サイファは彼の脇をすり抜け、医務室の中央へ躍り出た。さらに奥へ進み、ほとんど壁と同化した目立たない扉を開けると、躊躇することなく中へ入っていった。その先はラウルの居宅だった。そのことはサイファも知っているはずである。

ラウルは彼の勝手な行動に驚き、慌てて後を追った。

サイファはリビングにいた。腰に手をあて、ぐるりと部屋を見回している。

「いい部屋じゃないか。きれいに片付いている」

「出て行け」

ラウルは上腕を掴み上げた。サイファはそれを振りほどくと、ラウルに背を向けうなだれた。

「今晚だけでいい、泊めてくれ」

弱々しく、息を吐くように言葉を落とす。肩が小さく揺れた。

「断る。帰りたくないのなら、魔導省の宿泊施設を使えばいいだろう」

ラウルは冷たく撥ねつけた。後ろからサイファの肩を掴み、乱暴に引く。彼の体がよろけた。そのまま追い出そうとする。だが、サイファはその手を払いのけると、逆に奥の部屋へと駆け込んだ。すぐに鍵をかけ、扉全体に強い結界を張る。青白い光が、鈍く浮かんで消えた。

サイファは前髪をくしゃりと掴むと、ふうと息を吐き、暗い部屋を見渡した。

そこは寝室だった。大きなベッドの横に、小さなベビーベッドが置かれている。それは、以前、ラウルとともに組み立てたものだった。サイファの表情がわずかに緩んだ。幼子の成長は速い。ルナもそろそろベビーベッドが不要になる頃だろうか。そんなことを考えながら、壁を背に、崩れるように座り込んだ。立てた膝の上に腕をのせ、深くうなだれる。

扉には、自分の精一杯の力を込めて結界を張った。しかし、ラウルならこのくらい軽々と解除できる。鍵も外から簡単に開けられる構造のものだろう。きっとすぐに入ってくるに違いない。そう思ったし、それを少し期待もしていた。しかし、扉は沈黙を保ったままだった。

サイファはため息をついた。呆れられたか、諦められたかのどちらかだろう。いや、どちらも同じ意味だ。一抹の寂しさを感じながらも、それならここで一晩じっくりと頭を冷やすことにしようと思った。

そのとき。

激しい爆裂音とともに、扉が砕けた。大小多数の破片が勢いよく飛び散る。サイファは目を見張った。とっさに頭の前に手をかざし、身を庇う。いくつもの破片が近くを掠め、いくつかの破片は体に当たった。

パラパラと軽い音が聞こえる。小さな礫が床を打つ音だ。飛散が落ち着いたようである。サイファはゆっくりと顔を上げた。

バシャン！

待ち構えていたかのように水が飛んできた。避ける間もなく顔面から冷水を浴び、全身ずぶ濡れになった。サイファは水を滴らせながら、呆然として前を見た。

砕けた扉の向こうに、青いバケツを持ったラウルが立っていた。白い雑巾をサイファの顔に投げつけ、空のバケツを乱暴に転がした。

「後始末をしておけ」

ラウルは無表情でそう言い残すと、外へ出て行った。

サイファは啞然として大きく瞬きをした。遠くで戸が閉まる音を耳にすると、ふと我にかえた。なぜか不意に笑いがこみ上げてきた。手の甲で顔を拭いながら、肩を揺すって笑った。情けなくて、可笑しくて、たまらなかった。

数十分後、ラウルは戻ってきた。

サイファは膝をついて床を拭いていたが、彼を一瞥すると、雑巾をバケツに掛けて立ち上がった。

「とりあえず、破片は一箇所に集めた。床も拭いた。扉は明日、人をよこして修理させるよ」

「少しは頭が冷えたか」

ラウルは斜めに構え、愛想なく言った。

「ああ、風邪をひきそうだ」

サイファは肩をすくめた。髪も服も、まだ生乾きだった。

ラウルは脇に抱えていた紙袋をサイファに投げた。サイファは怪訝な顔で受け取ると、中を覗き込んだ。そこには着替えが入っていた。顔を上げ、ラウルを鋭く睨みつける。

「レイチェルに何を言った」

「言われて困るようなことをするな」

ラウルは冷ややかに切り返した。サイファはわずかに顔をしかめた。

「おまえがそんなにお節介だとは知らなかった」

ラウルはため息をつき、腕を組んだ。

「おまえのせいでルナを連れ帰れなくなった。レイチェルに世話を頼むしかない。それには理由が要る」

あからさまに面倒くさそうな口調で説明をする。サイファは眉をひそめ、じっと彼を見つめた。

「浴室、借りるぞ」

無反応な横顔に声を掛けると、紙袋を脇に抱え、浴室に向かった。

サイファは冷えた体を熱いシャワーであたためた。

本当に風邪をひくかと思った。いや、もしかしたら、もうひいてしまったかもしれない。そのときはラウルにうつしてやる——心の中でそう毒づいた。だが、ラウルが風邪をひくのだろうかという疑問が、ふと頭に浮かんだ。少なくともサイファはそのような姿を見たことがなかったし、話に聞いたこともなかった。

サイファは部屋着に着替えて浴室から出てきた。ラウルはダイニングでひとり紅茶を飲んでいた。

「勝手にバスタオルを使わせてもらった。あとハンガーも」

サイファはラウルの隣に座った。疲れたように、軽くため息をつきながら頬杖をつく。ラウルはちらりと彼に目を向けた。

「手を見せろ」

「ん？ ああ、これか？」

サイファは右手の甲を見た。小指の付け根あたりから、斜めに赤い線が入っている。ラウルが扉を蹴り壊したとき、その破片が当たってついた傷だ。すでに血は止まっている。それほど深いものではない。だが、傷のまわりが少し赤く腫れていた。

ラウルは立ち上がり、長髪を揺らしながら、隣の部屋へ入っていった。そして、すぐに小さな救急箱を持って戻ってきた。それをテーブルの上に置き、椅子に腰を下ろすと、サイファの右手

をとり、手際よく消毒を始めた。サイファは痛みに顔をしかめた。

「ここだけか」

ラウルは手を動かしながら尋ねた。サイファは不機嫌な顔で、頬杖をついた。

「全身、調べるか」

ラウルは取り合わなかった。薬を塗りながら話を変えた。

「情けないな、あれしきのことで傷を作るなど」

「まさか結界ごと扉を蹴破るなんて思わないよ、普通は」

サイファはふてくされて言った。

「おまえは昔から、予想外に攻撃を受けたときの対処がなっていない。致命的な弱点だ」

ラウルは大きめの絆創膏を貼った。サイファはひったくるように手を引き抜いた。

「もういちど、おまえに教えを請おうかな」

「見込みはない、やめておけ」

ラウルは素っ気なく言った。

「冗談だ。真に受けなくてくれ」

サイファは肩をすくめ苦笑した。ラウルは無表情で、救急箱を片付けた。

「落ち着いたら腹が空いてきたな。何か作ってくれるんだろう？」

サイファは台所を眺めながら言った。使い込まれているが、きれいに片付いている。乳児用と思われる食器もいくつか目についた。

「外で食ってこい」

ラウルは冷たく一蹴した。サイファには目もくれず、紅茶を口に運ぶ。

「そんな気分じゃないんだ」

「だったら、何か出前をとれ」

サイファは微かに笑って頬杖をついた。

「おまえの手料理を食べてみたいんだよ。ずっと、そう思っていた。作ってくれるんだろう？ 私にも」

私にも、のところに力を込めて言うと、まっすぐに視線を送り、ニヤリと意味ありげに笑った。

ラウルは刺すような鋭い目をサイファに向けた。

「贅沢は言わない。簡単なものでいいよ」

サイファは一転して軽い調子になった。明るく笑いながら言う。

ラウルはじっと睨みつけていたが、やがて立ち上がり、流し台へ向かった。観念して何かを作り始めたようだ。サイファはにこにこして、その後ろ姿を眺めた。

ラウルは皿をふたつ手にして戻ってきた。ふたつとも同じスパゲティだった。細やかな霧のような湯気が立ち上っている。それを机の上に置くと、力任せに椅子を引き、どかりと座った。サイファに振り向くこともなく、無言のまま食べ始めた。

サイファは皿を引き寄せた。スパゲティをフォークに巻きつけ、口に運ぶ。ゆっくりと噛みしめ、じっくりと味わう。

「……美味しいよ」

微かに笑ってうつむくと、ぽつりとつぶやいた。

サイファが食べ終わると、ラウルは待ち構えていたかのように立ち上がり、後片付けを始めた。湯を沸かしながら、手慣れた様子で皿や鍋を洗う。

「ルーファスに呼ばれたんだ」

サイファは静かに口を切った。机の上に、組んだ手をのせる。ラウルは動きを止めることなく皿を洗っていた。水の流れる音が続く。聞いているのかいないのかわからなかったが、サイファは話を続けた。

「アンジェリカについての通告だったよ」

ラウルは皿洗いを終え、水を止めた。そして、沸騰したやかんの火を止めると、紅茶を淹れ始めた。相変わらず、聞いているのかどうか判別できない態度である。だが、聞こえていないということはないだろう。

「長老会は、私を彼女の事実上の夫にすると決定したそうだ」

サイファはさらりと言った。まるで他人事のようにだった。

ラウルの手が一瞬、止まった。

「どういうことだ」

背を向けたまま静かに尋ねた。サイファは表情を変えず、落ち着いた声で答える。

「私に、彼女と子をなせと……」

ラウルはティーカップをふたつ持って戻ってきた。サイファの隣に腰を下ろすと、ティーカップのひとつを彼の前に差し出した。

「了承したのか」

「逃げてきた」

サイファはうつむいて答えた。ティーカップを手にとり、紅茶を口に運ぶ。そして、小さく息をついた。

「怖かったんだ。馬鹿なと思いつつ、気持ちが傾いていた」

サイファは再び机の上で手を組んだ。

「彼女を意に添わない男にやるくらいなら、と考えてしまったよ。それだけじゃない。それ以上に、積極的に惹かれたことがあった。抗いがたいほどの魅力のあるもの……」

その手が微かに震えた。

「子供だ」

ぽつりと言葉を落とす。ラウルは無表情で、彼に視線を流した。

「だって、奇跡だろう？」

サイファは声を張り、勢いよく振り向いた。横髪が揺れ、ぱさりと頬を打つ。

「成し得ないはずのことが実現するんだ。私たち三人の絆の完成形だよ。ラグランジェ家にとっ

ても、私個人にとっても、最高の存在となるはずだ」

右手を広げながら、そう力説した。だが、すぐに強気な表情は崩れた。自嘲ぎみに笑うと、額を掴むように押さえた。

「私は狂っている。自分でも呆れるよ。ルーファスがここまで知っていたのかは不明だが、まったく、上手い策を考えたものだ」

「わからないな」

ラウルがようやく口を開いた。

「おまえは私を憎んでいるのではないのか」

「ラウル、おまえ……何もわかっていなかったのか」

サイファは額に手を置いたまま、背中を丸めて笑った。ラウルは眉をひそめ、彼を睨んだ。サイファは笑うのをやめ、背もたれに寄りかかり、目を細めて天井を見つめた。

「ときどき腹立たしく憎らしく思うことはあっても、結局はおまえのことが好きなんだ。子供の頃、そう言ったことがあったらう？ その気持ちは、今もずっと変わらない」

柔らかい声でそう言うと、ふっと笑って目を閉じた。

「家庭教師としておまえに来てもらって、いろいろな話を聞いたな。新しい魔導も教えてもらった。毎日、世界が広がっていくように感じたよ。あの頃はただ無邪気に楽しかった」

「家庭教師としての役割を果たしただけだ」

ラウルはつれなかった。無愛想にそう言うと、ティーカップに手を伸ばした。

「そう言うだろうと思った」

サイファはにっこりと笑った。

「私にとって、おまえは最高の師であり、兄のような父のような存在、そして、かけがえのない友だ。もっとも、すべて私の一方的な思いにすぎないが」

「話が脱線している」

ラウルは腕を組んだ。

「そうだな」

サイファは頬杖をつき、顔を斜めにしてラウルを見つめると、口元を緩めた。

「では、おまえの意見を聞かせてくれ」

「私には関わりのないことだ」

ラウルは腕を組んだまま、サイファには目も向けずに答える。

「よく平然とそんなことが言えるな」

サイファは呆れたように言った。

「元はと言えば、おまえの行動が招いた結果だろう。助言のひとつくらい、くれてもいいと思うがな」

「……レイチェルはどうするつもりだ」

ラウルは前を向いたまま、口だけを動かして尋ねた。サイファは彼の横顔をじっと見つめ、真剣な面持ちで答える。

「彼女は私の決定に従うさ。たとえそれがどんなものだとしても」

ラウルはわずかに振り向き、横目で睨みつけた。組んだ腕の中で、こぶしを握りしめる。

サイファは顎を引き、負けじと強い視線を返した。

「言いたいことがあるなら、口に出して言ったらどうだ」

しかし、ラウルは口を開かなかった。サイファはさらに挑発を続ける。

「私は利用できるものは何でも利用する。必要とあれば、負い目を盾に優位に立つことも辞さない。相手が誰であろうとな。そのことは、おまえがいちばん知っているはずだ」

「おまえがそういう人間だということは知っている。だが……」

ラウルはいったん言葉を切った。奥歯を噛みしめ、わずかに眉をしかめる。

「レイチェルだけは大切にすると考えていた」

低く抑えた声で言った。

サイファは微かに笑みを漏らした。

「ああ、とても大切だよ」

涼しい声で答える。

「彼女がこの世に生を受けたときからずっと、変わらずに愛情を注いできた。私なりに全力で守ってきた。そして、これからも……」

ゆっくりと目を伏せていく。そして、祈るように両手を組むと、その上に額をのせた。

「だが、今、気持ちが揺らいでいるんだ。彼女を悲しませる奴は許さないと思いつつ、私自身がそういう決定をしてしまうかもしれない。いや、今回だけじゃない。あのときだってそうだった。彼女の気持ちも聞かず、私の一方的な決断を押しつけたんだ。もしかしたら、彼女は……」

そこで言葉を切った。おもむろに顔を上げ、ラウルに振り向く。

「最低だろう？」

憂いを含んだ瞳で問いかける。ラウルは険しい表情で、激しく睨めつけた。

「私に何を言わせたい」

「無関心でいてほしくないだけさ。どんな非難の言葉でも、何もないよりはずっといい」

「甘えるな」

ラウルは冷たく突き放した。

「おまえにしか甘えられない」

サイファは真顔で言った。

ラウルは大きくため息をついた。

「まだ、頭が冷えていないようだな」

「水責めだけは勘弁してくれ」

サイファは苦笑した。

「もう寝ろ」

ラウルは面倒くさそうに言った。

「ああ、その方が良さそうだ」

サイファは残りの紅茶を一気に流し込んだ。もうすっかり生ぬるくなっていた。カップを机に戻して立ち上がると、扉が壊れたままの寝室へ向かった。

「おまえにとって家族とは何だ」

背後からラウルの声が聞こえた。サイファは目を大きくして足を止めた。ゆっくりと振り返る。

「今まで何のために守ってきた」

ラウルは背を向けたまま、再び問いかけた。

サイファは目を閉じ、ふっと息を漏らすと、再び寝室へと足を進めた。

あたたかい――。

サイファはぼんやりと目を覚ました。カーテンの隙間から射し込む光が、顔に当たっていた。眩しさに思わず目を細める。

ここは――。

手をかざして光を遮りながら、あたりを見回した。見知らぬ天井、見知らぬカーテン、懐かしい匂い、ベビーベッド、壊れた扉の破片、手の甲の絆創膏……。

そうだ、ここはラウルの寝室――。

きのうの出来事が、一気に頭に蘇った。

サイファは体を起こした。顔を上げ、時計を探す。掛時計の針は、いつも起きる時間よりも前を指していた。寝過ごしたわけではない。安堵してほっと息をついた。

扉のない入口からは、人工的な光が微かに漏れ入っていた。ダイニングからのようだ。サイファはベッドを降り、引き寄せられるように歩いていった。

そこは蛍光灯の明かりで満ちていた。その下で、ラウルは紙の束に囲まれていた。生徒たちのレポートらしい。ペンを片手に読み進めている。

「おはよう」

サイファは微笑んで挨拶をした。

「ああ」

ラウルはレポートに目を落としたまま、気のない返事をした。

「もしかして、一晩中、起きていたのか」

サイファはラウルの向かいに座った。目の前のレポートを手にとり、頬杖をつきながらパラパラとめくる。ラウルはサイファの手からレポートを奪い返した。

「寝る場所がない」

「ソファがあるだろう」

サイファは平然と言った。ラウルは眉をひそめて睨みつけた。しかし、サイファはまるで意に介していないようだった。

「おまえのベッド、寝心地が良くないな。マットレスが古いんじゃないのか」

「人のベッドを占領しておいて言うセリフか」

ラウルはため息まじりに言った。そんな彼を見て、サイファはニコニコとしていた。

「少しは落ち着いたか」

ラウルは再びレポートに目を落として言った。サイファは肩をすくめた。

「きのうのことを思い返すと恥ずかしいな」

「まるで子供だ」

「大目に見てくれ。まだ三十数年しか生きていないヒヨッコだからな」

上目遣いにラウルを見て、ニッと笑う。ラウルは下を向いたまま、わずかに顔をしかめた。

「どうするか、決めたのか」

「ジークに頑張ってもらうことにしたよ」

サイファはさらりと答えた。ラウルは顔を上げた。険しい表情だった。

「何をさせるつもりだ」

「それは彼自身に考えてもらおう。彼が無茶をしても、アンジェリカには危害は及ばないだろうからね。思う存分、暴れてもらおうさ」

サイファの口調は、どこか楽しそうだった。

「あいつには無理だ」

ラウルはペラリとレポートをめくった。

「気楽に見守るよ。どちらに転んでも、私には悪い話ではないからね。ジークの力が及ばなかったときのことを考えると、私は表立って動かない方がいいだろうな」

ラウルはひと睨みしただけで、何も言わなかった。

「最低だと思っているか」

「ああ」

「それはどうも」

サイファはにっこりと微笑んだ。そして、机の上に置いてあったペンを手にとると、指でぐるりと回した。

「私のやり方が気に入らないのなら、自分で行動を起こせばいい。最低なのは、傍観者を決め込んでいるおまえも同じさ」

そう言うと、ニッと挑むように笑い、ペンをラウルの額に突きつけた。彼は無表情のままだった。

「さ、朝食の時間だ」

サイファは軽い調子で言うと、机の上で腕を組んだ。

「もう帰れ」

ラウルは苛ついた様子で命令した。しかし、サイファはそれに従うつもりなど微塵もなさそうだった。ニコニコしながらラウルを見ている。

「今朝はコーヒーが飲みたい気分だな。ブラックで頼むよ。インスタントは駄目だからな」

ラウルは呆れ果てて、何も言い返す気になれなかった。下手に言い返しても、よけいに疲れるだけだと悟ったのだ。黙って立ち上がると、レポートを脇に置き、台所へと向かった。

82. 決意のゆびきり

キーン、コーン——。

終業を告げるチャイムが鳴った。

「今日はここまでだ」

ラウルは教本を閉じ、脇に抱えた。

「このレポートの提出期限は明日だ。忘れるな」

生徒たちを鋭く見まわしてそう言うと、大きな足取りで教壇を降り、勢いよく扉を開けた。

「やあ、昨晚はどうも」

そこにはサイファが待ち構えていた。軽く右手を上げ、にこやかにラウルを見上げている。ラウルは眉をひそめて睨んだ。

「何の用だ」

「おかげさまで風邪がみだよ。どうにも仕事に身が入らなくてね」

ラウルは無言でポケットを探った。小さな白い紙包みをふたつ取り出すと、サイファに手渡した。

「ずいぶんと用意がいいんだな。まさか毒じゃないだろうな」

サイファはその紙包みを指でつまみ、透かすように高く掲げた。

「こういう用件なら医務室に來い」

ラウルは苛ついて言った。

ふたりの会話はクラス中の注目を集めていた。終業後にしてはいつになく静かである。アンジェリカとジークも驚いたように前扉のふたりに目を向けていた。

「いや、おまえに用があるわけじゃない」

サイファはラウルの肩をポンと叩くと、教室の中へと足を進めた。そして、軽く右手を上げ、にっこりと笑う。

「やあ」

それはジークに向けられたものだった。ジークは席に着いたまま、不安そうな面持ちで会釈した。

「お父さん、こんなところでラウルと喧嘩しないで。恥ずかしいわ」

ジークの隣に立っていたアンジェリカは、顔を赤らめながら口をとがらせ、上目遣いで父親を見た。

「喧嘩じゃないよ」

サイファは優しく微笑み、彼女の頭に手をのせた。

「……ねえ、お父さん」

「何だい？」

「ジークに何の用なの？」

アンジェリカは心配そうに尋ねた。黒い瞳がわずかに揺れた。

「たいしたことじゃないよ」

サイファは笑顔を保ったまま軽く答えた。

「ごまかさないで！」

アンジェリカは語気を強めて言い返した。真剣なまなざしで、睨むようにサイファを見つめている。一步も引くつもりはないようだ。

サイファはふっと表情を緩めた。彼女の横髪に手を伸ばし、撫でるように後ろに流す。そして、あらわになった耳元にそっと顔を近づけた。

「約束は守るから」

柔らかい声でそう耳打ちをした。それはアンジェリカの疑念に対する答えそのものだった。しかし、それでもまだ彼女の心は晴れなかった。訝しげに顔を曇らせている。サイファは安心させるように大きくにっこりと笑って見せた。

「そう時間はかからないよ。アンジェリカとリックは図書室で待っていてくれ。終わったらジークを行かせるから」

「はい」

リックは素直に返事をした。だが、アンジェリカは複雑な表情で口を結んだままだった。

「ジーク、行こうか」

「あ、はい」

ジークは急いで鞆の中に教本を放り込み、サイファのあとについていった。

ふたりは連れ立って教室を出た。終業直後の廊下は、いつもと変わらず賑やかだった。話し声や靴音、扉の開閉などの雑多な音が交じり合っている。ガラス窓から射し込む光は、だいぶ柔らかくなっているものの、まだ色づいてはいない。

ラウルはまだ扉の近くに留まっていた。壁にもたれかかり、険しい顔でサイファを睨みつける。だが、サイファは余裕の微笑を返した。

「それじゃあな、先生」

涼やかな声でそう言うと、立ち止まることなく颯爽と通り過ぎた。ジークはラウルを気にしながらも、遅れないよう足を速めた。

「サイファには深く関わるな」

背後からラウルの声が聞こえた。ジークははっとして振り返った。ラウルは壁にもたれたまま、無表情でジークに視線を流していた。しかし、目が合うと途端に背を向けた。焦茶色の長髪が大きく波を打った。そのまま早足で立ち去っていく。

「ジーク」

サイファは足を止め、呼びかけた。ジークは慌てて前に向き直った。後ろ髪を引かれたが、それを振り切り、再びサイファについて歩き始めた。

「アンジェリカ、どうしたの？」

「ええ……」

リックの問いかけに、アンジェリカは曖昧に返事をした。心ここにあらずという感じである。

眉根を寄せ、じっと考え込んでいる。

「図書室、行こうよ」

「ええ……」

サイファはあのことをジークに告げるつもりではないか、自分が本家を継ぐと決めたあのことを——アンジェリカはそう疑っていた。サイファはジークには知らせないと約束してくれた。今日も約束を守ると言ってくれた。しかし、だとしたら、いったいジークに何の用があるというのだろうか。後ろめたいことがないのなら教えてくれればいい。なのに、ごまかして隠しているのが怪しい。やはり、サイファは嘘をついているのかもしれない。

アンジェリカは思考を止めた。疲れたようにため息をつく。こんなにも疑り深い自分が嫌になった。自分の父親くらい、どうして素直に信じられないのだろう。

「ねえ、アンジェリカ？」

リックは心配そうに覗き込んだ。あまりにも上の空なので、肩を揺すってみようか迷った。——お父さんのこと、信じるわ。

アンジェリカは自分の気持ちを決めた。顔を上げると、にっこりとリックに微笑んだ。

「行きましょう、図書室」

ようやく返ってきたまともな反応に、リックは安堵しながら頷いた。

ジークが連れてこられたのは、薄暗い部屋だった。ただでさえあまり広くないにも拘らず、ロッカーや段ボール箱が多く、また、乱雑に取りとめなく物が散らばっていて、人が立てる場所はますます少なくなっていた。わずかに埃っぽく感じる。倉庫だろうか、とジークは思った。

サイファはロッカーのひとつを開け、ハンガーに掛かった服を取り出した。それは濃青色の上下だった。サイファが身に着けている魔導省の制服と同じものようだ。

「君の制服だよ」

「えっ？」

ジークは素っ頓狂な声を上げた。サイファはにっこりと笑った。

「背格好は私と同じくらいだから、おそらくこれで大丈夫だろう。着てみてくれるか。合わなければ調整するか取り替えるかするから」

そう言いながら、押しつけるようにそれを渡し、ふたりの間に仕切りのカーテンを引いた。

ジークはとまどいながら、腕の中の制服を眺めた。

「ずいぶん早いんですね。まだ何ヶ月も先なのに」

「その間に成長したら、ちゃんと取り替えてあげるよ」

薄いクリーム色のカーテンの向こうから、冗談めいた声が返ってきた。確かに、もうそれほど成長するような年齢でもない。ジークは苦笑しながら着替え始めた。

「実は、これは単なる口実でね」

サイファは静かに切り出した。

ジークは手を止めた。仕切りのカーテンに目を向ける。サイファの影が薄く映っているのが見

えた。腕を組んで、壁にもたれかかっているようだ。表情を窺えないのがもどかしい。

「本当は、君に話しておきたいことがあって来てもらったんだ」

「何ですか？」

ジークはカーテンを開けた。まだ上着を脱いだだけの状態だ。不思議そうな顔でサイファを見ている。

サイファはそんな彼を見て、にっこりと微笑んだ。

「着替えをしながら話そう」

「あ、はい」

ジークはカーテンを閉め、言われるままに着替えの続きを始めた。

「ジーク」

「はい」

「アンジェリカのことは好きか？」

不意打ちにも近い、唐突の質問だった。ジークの心臓は大きく打った。痛いくらいに強く膨張と収縮を繰り返す。頬が火照り、額に汗がにじんだ。しかし、迷いはなかった。

「はい、好きです」

噛みしめるように答える。

「ありがとう」

サイファの声は優しかった。だが、次の瞬間には、鋭く険しいものに変っていた。

「これから話すことは、アンジェリカに口止めされている」

ジークの顔から熱が引いた。何か、嫌な予感がした。

「だが、やはり君に知らせないわけにはいかないと思ってね」

サイファは淡々と話を続ける。

「アンジェリカの前では知らないふりをしてほしい。出来るか？」

ジークは難しい顔で考え込んだ。アンジェリカが口止めしている話を聞くことは、彼女を裏切ることにならないだろうか——そんな疑問が頭をもたげた。断ろうか迷った。だが、話の内容は気になる。サイファの口調からすると、相当に重要なことのようなのだ。口止めされていることをあえて話すのは、それなりの理由があるからに違いない。聞かなければ後悔するかもしれない。

「……はい」

迷ったすえ、低い声で返事をした。知らないふりなどという器用なことができるか自信はなかったが、話を聞くためには肯定するしかなかった。

「くれぐれも頼むぞ」

カーテンに映ったサイファの影が少しだけ動いた。

「では、話そう」

ジークは固唾を呑んだ。サイファは表情を引き締め、ゆっくりと口を開いた。

「アンジェリカはラグランジェの人間と婚姻し、ラグランジェ本家を継ぐ。彼女自身がルーファスとそう約束した。彼女が自由でいられるのはアカデミーを卒業するまでだ。それ以降は君と会うことも敵わないだろう」

「……えっ？」

ジークはすぐにはその話を理解できなかった。いや、頭が理解することを拒絶したのかもしれない。鼓動が早鐘のように打っていた。頭の中が強く脈打っていた。汗が頬を伝った。そして、ようやく理解が追いついた。

「そ、んな……嘘だ！！」

ジークはカーテンを引きちぎらんばかりの勢いで開け、叫びながら飛び出した。まだ着替えはほとんど進んでいない。上半身の服を脱いだところのようだった。

サイファは無表情で彼を見た。

「いや……あの……冗談、ですよね？」

冷めた視線を向けられ、ジークは途端に萎縮した。しどろもどろになりながら、自分のきつい言葉を取り繕うように尋ね直した。

「本当だよ」

サイファは素っ気なく言った。

「どうしてだと思う？」

「……わかりません」

ジークは唇を噛み締めうつむいた。本当に見当もつかなかった。

「君のためだよ」

「え……？」

ジークは大きく目を見開いた。サイファは彼の瞳を奥まで覗き込むように見つめた。

「君を助けるために、アンジェリカはその条件を呑んだんだ」

「俺を、助ける……？」

ジークは眉をしかめて考え込んだ。そして、はっとして顔を上げた。

「まさか、あのとき?!」

「そう、君がルーファスの家で騒ぎを起こしたときだよ。おかしいと思わなかったか？ すぐに釈放されて」

サイファはじっとジークを見据えて言った。ジークは責められているように感じた。確かにあのとき不思議に思った。なのに、なぜ気がつかなかったのだろうか。なぜ深く考えなかったのだろうか。

「俺のせいで……」

ジークは歯を食いしばり、こぶしを強く握りしめた。爪が食い込んでいたが、痛みなど気にならなかった。

「俺が……俺が何とかします。俺がやめさせます！」

思いつめた表情でサイファに詰め寄り、懸命に訴える。そんな彼を、サイファは右手で制した。

「いつまでも裸でいると、君も風邪をひくぞ。着替えながら話そう」

「……はい」

ジークは勢いを削がれ、肩を落としてカーテンの向こうに戻った。ゆっくりカーテンを閉め

ると、真新しい白いシャツを手を取った。

「君は何とかすると言ったが、いったい何をするつもりだ？」

サイファの落ち着いた声が背後から聞こえた。ジークは眉根を寄せた。

「それは……これから考えます」

「勝てると思うか」

「やってみないとわからないです」

ジークはシャツの袖に、乱暴に腕を通した。こんな返答しかできない自分が、無性に腹立たしかった。何とかする——今まで何度もそう思ったのに、具体的に何をすべきか未だに見いだせていない。それは、本気で考えていなかったからに他ならない。常に受け身だった。自分の不甲斐なさをあらためて痛感した。

サイファは目を細めて遠くを見やった。

「君もそろそろ大人になってもらわないとね」

「それは、あきらめろ……ってことですか」

ジークは湧き上がる激しい感情を抑え、努めて冷静に尋ねた。

「諦めを知ることは大人への入口に過ぎない。何を諦め、何を諦めるべきでないか——それを見極められるのが、本当の大人だ」

サイファは真摯に答えた。

ジークは握りこぶしをぐっと胸に押し当てた。

「これは、俺にとって、あきらめてはいけないことです」

「感情に流された結論は、見極めたとはいわない」

サイファは冷淡に指摘した。ジークは返す言葉がなかった。強く唇を噛み締めた。

「君は、自分のしようとしていることが正しいと思うか」

サイファは再び問いかけた。ジークは声の方へ向き直った。

「当然です！ アンジェリカが望んでもいない、こんなこと……」

カーテンに映る影に、むきになって答える。カーテンが微かに揺れ、それに沿って影も揺らいだ。

「彼女は望んだよ。自分でそうすることを選んだんだ」

「それは、仕方なく……俺のせいで……」

ジークの声はみるみる沈んでいった。

「家のために望まない婚姻に身を委ねるなど、そうめずらしい話でもない。私とレイチェルの婚姻も、そもそもは親どうしが決めたものだ。そうやって家が護られ、伝統が護られ、この国が護られてきたんだ」

「誰かを不幸にしなければ護れないものだったら、無い方がいいです」

ジークはまっすぐに言った。サイファは小さくふっと笑った。

「君のそういうところは好きだよ。でも、そう簡単にはいかない」

「サイファさんはどうすべきだと思ってるんですか」

「何事も0か1というわけではないからね。どこかで折り合いがつけられることもある。アンジ

エリカは不幸にはならないよ」

「え？」

ジークは奇妙な面持ちで眉をひそめた。

「最初こそ寂しい思いをするだろうが、その生活の中で幸福を見つけていこう。もしかしたら、君といるよりも大きな幸福を得られるかもしれない」

「それって、どういう……」

ジークの顔がこわばった。

「君が思うほど、人も世界も単純ではないということさ。手は動かしているか？」

「あ、いえ……」

ジークは慌てて濃青色の上衣を手を取った。さっと袖を通し、前を閉じる。だが、その手は次第に動きを止めていった。

「ひとつ忠告するならば、自分の行うことを正しいなどと思わないことだ」

サイファは凜然と言った。ジークはゆっくりと顔を上げた。困惑したように目を細める。

「正しいか否かの議論では、君は必ず負ける」

サイファは厳しく断定した。

「君自身もわかっていると思うが、君は正義のためにやろうとしているわけではない。ただ身勝手な望みを実現させようとしているに過ぎない。そのことを認め、下手な理論武装はやめるべきだ」

その鋭い指摘は、ジークの胸に深く突き刺さった。サイファは軽く息を継ぐと、幾分、語調を和らげた。

「たとえ正しくなくとも、すべてを敵にまわそうとも、迷わずにやり通すくらいの気概がなければ、君に勝ち目はないよ」

ジークは少し怯んだ。簡単にいかないことくらい、わかっているつもりだった。だが、もしかしたら、本当は何もわかっていなかったのかもしれない。自分が進もうとしている道は、想像もつかないほど険しいのだろう。しかし――。

「よく考えるんだ。後悔のないようにな」

サイファは優しく諭すように言った。

「俺はあきらめません」

ジークは低く落とした声で即答した。それは、どれだけ考えても、何が起ころうとも、変えようのない強い意思だった。

サイファは口元を緩めた。

「君の決意はわかった。着替えているかい？」

「あっ……」

ジークはすっかり手が止まっている自分に気がつき、思わず声を上げた。これで何回目だろう。どうも、考えることと手を動かすことが同時にできないようだ。顔を赤らめながら、また着替えにかかった。

「このまま何の取っ掛かりもない状態では、君もどうしていいかわからないだろう。いくつか質

問を受け付けるよ。答えられる範囲で私が答えよう。そうでないとフェアじゃないからね」

——フェア？

ジークはその言葉に軽い引っかけりを覚えた。だが、それはすぐに意識の奥深くへ沈んでいった。代わりにサイファに尋ねたいことが、次々と浮上してきた。頭の中で整理をする。

「質問、していいですか？」

顔を上げ、カーテンに映る影に向かって尋ねる。

「どうぞ」

サイファは短く答えた。どこか楽しんでいるふうな声音だった。ジークはごくりと唾を飲み、口を開いた。

「アンジェリカの髪と瞳の色は関係ありますか」

「そうだね……」

サイファは相槌を打つと、一息おいて話を続けた。

「色がどうだからというわけではないけれど、そうなった原因は関係するね」

ジークは緊張しながら、さらに踏み込む。

「その原因は何ですか」

「それは答えられない質問だ」

サイファはきっぱりと言った。以前と同じ答えだった。知らないから答えられないのか、知っているが都合が悪いので答えられないのか、どちらだろう——。ジークは後者ではないかと思った。根拠はないが、確信に近いものを持っていた。

「遺伝子……が関係しますか」

ずっと気になっていた単語をぶつけてみる。

サイファは少し間をおいてから、静かに答えた。

「いいところを突いてきたね。さあ、次の質問は何だ」

間髪入れず、次を促す。もうこの話題は終わりにするという意思表示なのだろう。それは、核心に近づいた証左とも取れる。

「これで終わりか？」

「いえっ」

ジークは慌てて声を上げた。続けて質問を口にしようとして、一瞬、躊躇った。耳元をほんのり赤く染める。

「……あの……アンジェリカの婚約者は誰ですか」

サイファはくすりと笑った。

「まだ決めていないんだ。ラグランジェの人間なら誰でもいいことになっている。君は誰がいいと思う？」

「えっ？」

思いもよらない逆質問に、ジークは凍りついたように固まった。

「君に決めてもらってもいいかなと思っているよ」

サイファの声は穏やかだった。冗談なのか本気なのか、ジークには判別がつかなかった。泣き

そうに顔を歪ませ、奥歯を噛みしめる。

「他に質問はあるか？」

サイファは軽快に尋ねた。ジークはきゅっと眉根を寄せた。

「サイファさんは味方ですか？ それとも……」

そこで言葉を切った。それ以上は口にできなかった。

「私はアンジェリカの幸せを願っている。ラグランジェの人間として生きるのもひとつの道だろう。現状では、それが最も平和的な解決方法だね」

サイファは淡々と答えた。ジークは黙って彼の言葉を噛みしめた。

「だからといって、君が起こそうとしている行動を阻害したりはしない。君は君で、信じる道を進めばいい」

「わかりました」

ジークは沈んだ声で答えた。

シャツ——。

カーテンが開き、濃青色の制服に身を包んだジークが、サイファの前に姿を現した。うつむき加減に視線を落とし、ふさいだ表情で立ちつくしている。

「いいね、ぴったりだ」

サイファはにっこりと微笑んだ。すっとジークへ歩み寄ると、外れていた詰襟のフックを掛けた。彼の細い指が首筋に触れ、ジークはどきりとした。思わず顔を横に向ける。そのとき、不意にガラス窓に映った自分の姿が目に入った。

「なんか、変……ですよね。似合ってませんよね」

弱気につぶやくように尋ねかける。

「すぐに馴染むさ。そうなってもらわないと困るしね」

サイファは笑いながらジークの肩に手を置いた。ジークにはその手がとてつもなく重く感じられた。この制服が似合う人間になれば、ということサイファは言っているのだろう。今の自分には、そんな自信はまるでなかった。

サイファは腕時計に目を落とした。

「今日はこれで終わりだ。アンジェリカたちが待っている。行ってやってくれ」

「はい」

ジークは再びカーテンを引こうとした。だが、その手をサイファが掴んだ。そして、にっこりと微笑みかける。

「このままでよ」

「え？」

ジークはきょとんとした。

「このまま図書室へ行って、アンジェリカたちに制服姿を見せるんだ」

「え、どうして……」

「アンジェリカは、私が約束を破るのではないかと疑っているからね。違う理由で君を呼んだと

信じさせなければならない」

サイファは論理的に説明した。

ジークはうろたえた。サイファの言い分はよくわかったが、問題はそこではない。

「だからって、これで歩きまわるのはまずいんじゃない……まだ働いてもないのに……」

「誰も気づかないと思うよ。もし何か言われるようなことがあれば、私の名前を出せばいい」

サイファは事も無げに言った。ジークはもう反論することができなかった。従うしかないと思った。あきらめたように気弱な笑顔を浮かべた。

ジークはきょろきょろと廊下を見まわしながら外へ出た。幸い、近くには誰もいない。ひとまず、ほっと胸を撫で下ろした。

「くれぐれも勘づかれないよう頼むよ」

サイファも部屋を出て、扉を閉めた。

「アンジェリカは君を巻き込みたくないと思っている。そして、残された自由な時間を普通に過ごしたいと願っているんだ。そこを汲んでやってくれ」

「わかりました」

ジークは一礼すると、鞆を胸元に抱え、顔を伏せるようにうつむきながら戻っていった。

サイファは彼の背中を見送った。

——苛めすぎたかな。

扉にもたれかかり腕を組むと、小さく息を吐いた。少し頭がぼうっとしている。熱が上がってきたようだ。ポケットに手を入れ、ラウルからもらった薬の存在を確かめた。

ガラガラガラ——。

図書室の扉が開いた。アンジェリカとリックは、何気なくそちらに目を向けた。その瞬間、ふたりはぽかんと呆気にとられた。

「ジーク、どうしたのそれ」

アンジェリカは上から下まで眺めながら尋ねる。

「ああ、なんか制服のサイズ合わせだったみてえだ」

ジークはぎこちなく笑った。アンジェリカはため息をつき、白い目を向けた。

「だからって、そのまま来ることないじゃない。いいの？ そんな格好で歩きまわっても」

リックは頬杖をついて笑った。

「アンジェリカに見せたかったんだよ、きっと」

「ば……違うって！！」

ジークは顔を真っ赤にして、あたふたと否定した。

「どう？ 感想は」

リックはそんな彼を無視して、楽しそうにアンジェリカにマイクを向ける振りをする。アンジェリカはじっとジークを見ながら、わずかに首を傾げた。

「なんだか不思議な感じ」

ジークは力なく笑った。

「やっぱ似合わねえよな」

「そんなことはないわ。見慣れていないだけで、悪くないわよ」

「そうだよな。ジークはいつもラフな格好だから」

リックも重ねてフォローする。

「自信なさそうにしているからいけないのよ。もっと背筋を伸ばした方がいいと思うわ」

アンジェリカはにっこり笑いかけた。

ジークは胸が締めつけられた。彼女の笑顔が痛かった。しかし、それを表情に出すことは許されない。

「おまえら俺のことばっか言ってねえで、自分のこと考えろよ。就職活動、ちゃんとやってんのか？」

ごまかすように、無愛想にそう言うと、ふたりの前の席に腰を下ろした。

「僕はもうすぐ決まりそうだよ。たぶん大丈夫だと思う。アンジェリカは？」

リックは隣の彼女に話を振った。

「うん……私は、いいの」

アンジェリカは歯切れが悪かった。

「今だと年齢のせいで難しいから、やっぱり四年後にしようかなって」

取り繕うように付け加えると、肩をすくめて笑った。

「じゃあおまえ、卒業したら何するつもりなんだ」

ジークは頬杖をつき、目をそらせて尋ねた。

「これから考えるわよ」

アンジェリカは口をとがらせた。

「気楽なもんだな」

ジークはぶっきらぼうに言った。アンジェリカは少し顔を曇らせただけで、何も言わずうつむいた。

「ジーク、言い過ぎだよ」

リックは眉をひそめてたしなめた。

ジーク自身も十分にわかっていた。きっとリックが思う以上に言い過ぎている。サイファから本当のことを聞いた今の自分なら、彼女の答えが嘘であることも、どんな思いでこの嘘をついているのかも、察することは容易だった。なのに、なぜこんなひどいことをやってしまったのだろう。

「悪かった」

ジークは素直に謝った。アンジェリカはうつむいたまま小さく頷いた。その表情は、何かを必死にこらえているように見えた。

「……なあ」

ジークは少しためらいながら声を掛けた。慎重に言葉を選びながら紡いでいく。

「俺らの関係は、卒業してもずっと切れることなく続くんだ。そうだろう？」

アンジェリカはどきりとした。だが、すぐに笑顔を作って見せる。

「なに？ どうしたの、急に。もう感傷に浸っているの？」

軽く、明るく、からかうように問いかけた。しかし、ジークは真顔のままだった。立てた小指を彼女に差し出す。

「えっ？」

「約束」

アンジェリカは動揺を見せた。

「そんな子供じみたことって、いつもジークが言っているのに……」

「いいだろ、たまには」

ジークは掲げた小指を、さらに彼女の鼻先に近づけ催促した。アンジェリカは仕方なく、おずおずと小指を出した。ジークはそれに自分の小指をがっちりと絡ませた。

——必ず、俺がおまえを自由にしてやるから。もう少しだけ待っててくれ。

心の中で強く語りかける。

「約束、したからな」

ジークは真剣な顔で、まっすぐ彼女を見つめた。つないだままの小指は、互いに熱を帯びている。アンジェリカは漆黒の瞳をわずかに潤ませた。小さな口が微かに動いたが、何も言葉は出てこなかった。

83. 優しい研究者

「ごめんなさい、待った？ だいぶ遅れちゃった」

セリカは小走りで駆け寄ると、申しわけなさそうに両手を合わせた。

「いや、呼び出したのは俺の方だし」

ジークは椅子に座ったまま、淡々と答えた。

そこはアカデミーの食堂だった。全面ガラス張りの窓から柔らかい光が降り注ぎ、白いテーブルを眩しく照らしている。終業後のため、それほど人も多くなく、落ち着いたざわめきが穏やかに広がっている。

セリカはジークの向かいに座った。膝の上に鞆を載せると、上目遣いに彼を見た。視線を落としたまま、じっと何かを考え込んでいるように見える。何となく、声を掛けるのが躊躇われた。沈黙が続き、気まずい空気がのしかかる。

ジークは突然、立ち上がった。

「何か飲むか？ 奢る」

ちらりと彼女に視線を流し、無愛想に尋ねる。

「あ……じゃあ、コーヒー」

「わかった。待ってろ」

そう言うと、ジーンズのポケットに右手を突っ込み、カウンターへと向かった。

セリカは身を乗り出して振り返り、訝しげに彼の後ろ姿を眺めた。

しばらくして、ジークは紙コップをふたつ手にして戻ってきた。ひとつをセリカの前に置き、席に着く。

「リックには内緒にしてきたか？」

「ええ……でも、なんだか悪いことしているようで落ち着かないわ。何なの？」

セリカは眉をひそめて尋ねた。

「心配かけたくねえだけだ」

ジークは素っ気なく答えた。しかし、それは彼女が聞きたかった答えではなかった。不満そうなまなざしを彼に向ける。

ジークはコーヒーを口に運び、一息つくと話を続けた。

「おまえ、医学科だろ？ 遺伝学とかそっち方面に詳しい人を知ってたら、紹介してほしいんだ」

「それって、アンジェリカの関係で？」

セリカは身を乗り出し、声を低くして尋ねた。

「ああ、少しでも手がかりを見つけねえと」

ジークは眉根を寄せうつむいた。そのままじっと考え込む。

セリカはわずかに顔を曇らせた。

「言っても無駄でしょうけど、あまり深入りしない方が……」

「あいつは自分の人生を懸けて俺を救ってくれたんだ。今度は俺があいつを救う番だ」

ジークは机の上で手を組み、思いつめたように言った。怖いくらい真剣な顔だった。

セリカは何か言いたげに彼を見つめていたが、やがてあきらめたように小さく息をついた。

「わかったわ。じゃあ、私の元担任の先生に連絡をとってみる」

「元担任？ 医学科は持ち上がりじゃねえのか？」

ジークは不思議そうに尋ねた。アカデミーでは4年間ずっと同じ先生がひとつのクラスを受け持つものと思っていた。少なくとも魔導全科ではそうである。

「基本はそうだけど、先生の都合でね。本業の研究が忙しくなって、辞めてしまったの」

「自分勝手なヤツだな」

「仕方ないわよ。予定が変わっちゃうことだってあるでしょう？」

セリカは肩をすくめた。

「そいつが遺伝の研究をしてるんだな」

ジークは本題に戻り、念押しした。セリカはこくりと頷いた。

「ええ、第一人者らしいわよ」

「頼む」

ジークは頭を下げた。セリカは驚いて目を見開いた。彼が自分に頭を下げるなど、想像もしなかった。それだけ必死であるということだろう。

「任せて」

彼女は力強く答えると、にっこりと笑って見せた。

「それじゃ、また連絡するわね」

「ちょっと待ってくれ」

立ち上がろうとしたセリカを、ジークが慌てて引き止めた。

「何？ まだ何かあるの？」

「ラグランジェ家について聞いてえんだ」

「そういうことなら、包帯の子に聞いた方がいいんじゃないの？」

セリカはさらりと言った。

ジークはぴくりと眉を動かした。ユールベルのことはおそらくリックに聞いたのだろう。どの程度、知っているのかわからなかったが、それを尋ねようとは思わなかった。

「必要ならあいつにも聞く。今はおまえに聞いてるんだ」

ぶっきらぼうにそう言うと、腕を組み、椅子にもたれかかった。

セリカは彼の態度に困惑した。何が彼の気に障ったのかわからなかった。少しびくつきながら答える。

「え、ええ、わかったわ。でも、ここじゃちょっと……」

「外、歩きながらならいいか？」

ジークは親指で窓の外を指し示した。仏頂面はまだ崩れていない。

「ええ」

セリカは神妙にこくりと頷いた。

ジークは残りのコーヒーを一気に流し込み、立ち上がった。

王宮の外れにある小さな森。緩やかな風が枝葉を揺らし、ざわざわと音を立てている。ふたりはその下の小径を並んで歩いていた。近くに他の人影は見えない。セリカは彼の横顔に視線を流すと、話を切り出した。

「それで、何が聞きたいの？」

「何でもいいんだ。知っていることがあれば、どんなことでも教えてほしい」

ジークは真摯に尋ねた。まっすぐなまなざしを彼女に向ける。セリカはどぎまぎしながら目をそらした。

「そう言われても困るんだけど……」

口ごもりながら後ろで手を組み、小さく息をつく。

「だいたい私だって、そんなに詳しいわけじゃないのよ。確かに祖父はラグランジェの人だったけど、そのこともあまり口外してはいけないことになってたし、ましてやラグランジェの内情なんて……。ラグランジェ家を出るとき、誓約書まで書かされたそうよ」

「は？ 誓約書？」

ジークは面食らい、大きく語尾を上げて聞き返した。

「ええ、みんながみんな、ラグランジェの人間どうして結婚するわけじゃなくてね。祖父のように外部の人間と結婚する人もいるわけ。そのときに、ラグランジェの名を捨てることと、ラグランジェの内情について口外しないことを、誓約書に書かされるのよ。血判まで捺したらしいわよ」

そう言って、彼女は人差し指を立てて見せた。

「こういうことも、本当は言ってはいけないんだけど」

「そのわりにはペラペラしゃべってんな、おまえ」

ジークは呆れたように言った。その途端、セリカはカッと顔を上気させた。

「ジークが教えろって言うからじゃない！ せっかく力になろうと思ってたのに、もういいわよ、言わないから！」

逆上して感情的に喚き立てると、ぷいと背を向けアカデミーに戻ろうとした。

ジークは焦った。何気なく言ったことが、彼女の逆鱗に触れることになるとは思わなかった。今の自分にとって、彼女は唯一の糸口である。失うわけにはいかない。慌てて肩を掴み、引き止める。

「悪い、すまねえ、悪気はなかったんだ、機嫌直せよ」

何とかなだめようと、思いつく限りの言葉を並べた。

セリカは口をとがらせ、ジークの手をじっと睨んだ。彼の手は意外と大きかった。その大きな手を広げ、がっちりと自分の肩を掴んでいる。

「わかったわよ」

彼女はため息まじりにそう言うと、肩の手を払いのけた。

「それで、何の話だったかしら」

ジークはほっと息をついた。右手で額の汗を拭いながら、元の話を開いた。

「ラグランジェを出るときの話だ。名を捨てるって言ってただろ。あれ、どういうことだ？」

セリカは歩きながら、きびきびと答える。

「ラグランジェを名乗ってはいけないってこと。つまり、男性女性にかかわらず、ラグランジェではなく、相手の姓になるわけ」

「そういや、おまえのところもそうだな」

ジークはぽつりと言った。セリカは前を向いたまま頷いた。

「ええ、だからラグランジェの名を持つ者は、みんな純血ってことになるわね」

「なるほどな」

ジークは難しい顔で、ジーンズのポケットに手を突っ込んだ。今までぼんやりと理解していたものの輪郭が、はっきりと見えてきたように感じた。

「それだけじゃないの。ラグランジェ家の人間だと吹聴してもいけないし、そのことを利用して商売をしてもいけない。家系図も決してラグランジェ家に繋げてはいけないそうよ」

セリカは人差し指を立てて、口に当てた。

「ラグランジェであることを隠せとまでは言われなくても、結構それに近いものがあるみたい」

「厳しいな」

短く落とされたジークの声は固かった。セリカはちらりと彼を見た。

「そうでもしないと、ラグランジェの名と血を守ってこられなかったでしょうね。だからこそ、二千年近く経った今でも、名門として絶大な力を持っているってわけ」

ジークはごくりと唾を飲み込んだ。

「もしかして、怖じ気づいたのかしら？」

セリカは悪戯っぽい目を彼に向け、くすりと笑った。

「バカやろう！ んなわけねえだろ！」

ジークは顔を真っ赤にして言い返した。

次の休日、ジークはマーティン＝ヘイリーの自宅に向かっていた。セリカが紹介してくれた遺伝学の研究者である。彼女に会う約束を取りつけてもらったのだ。ジークはひとりで行くつもりだったが、なぜか彼女もついてきた。

「別におまえまで来ることねえのに」

「いいじゃない。君もおいでって先生に言われたし、私も久しぶりに先生に会いたかったし」

セリカは弾んだ声を上げた。青い空を見上げて、にっこりと笑う。

ジークは疑わしげな視線を彼女に向けた。

「やけに嬉しそうだな」

「え？ ちょっと、勘違いしないでよ！ お世話になった先生ってだけなんだから」

セリカは大慌てで弁明した。ジークは面倒くさそうにため息をついた。

「それよりこれ、どっち行けばいいんだよ」

彼が指差した正面は行き止まりで、道は左右に分かれていた。セリカはハンドバッグから小さな紙切れを取り出した。それを広げ、何度か回しながら眺める。

「えーと、この道の突き当たりね」

彼女は左の道を指差した。その指を追いかけるように、ジークは左側に目を向ける。そして、その先を見て唖然とした。

「突き当たりって、あれか？」

「……あれみたい、ね」

そこに建っていたのは、個人の邸宅とは思えないほど立派なものだった。建物は左右に分かれており、向かって右側は角張った小さな平屋、左側は緩やかな曲面で覆われた、ガラス張りの大きな二階建てである。その洗練された近代的な外観には、まるで生活感がない。ふたつの建物は、渡り廊下で繋がっていた。

「研究業って儲かるのか？」

「さあ……」

セリカも驚いているようだった。とまどいながら、門柱のボタンを押す。遠くでチャイムが鳴った。

すぐに小さな建物の方の扉が開いた。白衣を着たひょろりとした男性が、中から姿を現した。まだ二十代後半くらいに見える。助手だろうか、とジークは思った。

「お久しぶりです、先生」

セリカはその男性ににっこりと微笑みかけた。

「よく来てくれたね」

男性も門を開きながら微笑み返した。

どうやら彼がマーティン＝ヘンリー本人のようだ。ジークは驚き、まじまじとその男を見た。白衣はくたびれ、くすんだ茶色の髪は、くせ毛なのか寝癖なのか、ところどころ大きくはねている。この冴えない男が名の通った研究者とは、にわかには信じがたい。

「先生のご自宅があまりに立派なので驚きました」

セリカは感情を込めて言った。

「研究所も兼ねてるんだよ」

男は照れくさそうにはにかんだ。

「あ、そうだわ。先生、こちらが先輩のジーク＝セドラックです」

セリカは思い出したようにジークを紹介した。ジークは先輩という言葉に違和感を覚えたが、一応、彼女の二学年上なので間違っていない。何かむずがゆかったが、あえて否定はしなかった。無言でその先生に一礼する。

「マーティン＝ヘイリーです。よろしく」

男は丁寧な口調で名乗り、痩せて骨張った右手を差し出した。ジークも右手を差し出し、ふたりは軽く握手を交わした。

「さあ、上がって」

マーティンはにっこり笑って、ふたりを小さい方の建物へ招き入れた。

三人は応接間に向かっていった。マーティンとセリカが並んで歩き、ジークはその一步後ろをついていく。セリカはマーティンと思い出話に花を咲かせていた。というよりも、ほとんどセリカが一方的にしゃべっている状態だった。マーティンにはこにこしながら彼女の話の聞き、時折、相槌を打っていた。

ジークは何気なく窓の外に目を向けた。その途端、目つきを陰しくし、足を止めた。

「あっちは研究施設ですか？」

前を歩くマーティンに、窓の外を指差して尋ねた。その指の先には大きい方の建物があった。

「そうだよ。私たちは研究棟と呼んでいる」

マーティンは振り返って答えた。ジークは顎を引き、もういちどその建物を窺った。

「……見せて、もらえませんか」

「いいよ」

マーティンはあっさり承諾した。力んでいたジークは拍子抜けした。絶対に渋られると思った。あの建物から感じたものは気のせいだったのか——？ 釈然としない思考を抱えながら、しかめ面で腕を組んだ。

一方、セリカは顔を輝かせ、無邪気に喜んでいた。

「わぁ、見せてもらえるんですか？」

胸元で両手を組み、声を弾ませる。

マーティンは目を細め微笑むと、研究棟へと繋がる廊下に案内した。

「すごい設備！ アカデミー以上だわ」

研究棟に入るなり、セリカは感嘆の声を上げた。ぐるりと一回転しながら、全体を見渡す。正面には大きな機械、小さな機械、反対側には器具や薬品を収納した棚、実験用と思われる小動物の飼育棚などが並んでいる。そのどれもが真新しい。彼女はマーティンに説明を求めながら、ひとつひとつじっくりと見てまわった。

「先生はおひとりで研究なさってるんですか？」

彼女は大きな機械を覗き込みながら、背後のマーティンに尋ねかけた。

「まさか、助手をふたり雇ってるよ。今日は休日だからいないけどね」

「どうりできれいに片付いていると思いました」

「相変わらずきついなあ、君は」

マーティンは笑いながら言った。セリカも肩をすくめて笑った。だが、ジークはひとり陰しい顔でうつむいていた。

「どうしたの？ ジーク」

その様子を目にしたセリカは、気遣わしげに声を掛けた。

「何でもねえよ」

ジークはぶっきらぼうに答えた。ポケットに手を突っ込み、取り留めなく歩きまわる。ここへ来たいと言い出したのは彼だが、あまり楽しんでいるふうには見えない。セリカには、彼の考え

ていることがさっぱりわからなかった。

一通り研究棟をまわった後、三人は小さい方の建物に戻り、応接間へとやってきた。マーティンはお茶を用意すると言って、隣の台所へ入っていった。残されたふたりは、狭いソファに並んで座り、彼が戻ってくるのを待った。互いに前を向いたまま口を開こうとはしない。重苦しい沈黙が流れる。

「ビンゴかもしれねえな」

「え？」

ジークはぼつりと言葉を落としたあと、再び黙り込んでしまった。セリカは不安そうに彼の横顔を窺った。

「たいしたおもてなしは出来ないけど」

マーティンがマグカップを三つ持って戻ってきた。三つとも形も柄も大きさも違う。それらを机の上に置き、ジークたちの向かいに腰を下ろした。

「お構いなく」

ジークは素っ気なく言った。

「いただきます」

セリカはにっこりと微笑んで、マグカップを口に運んだ。中は紅茶だった。濃すぎて少し渋いくらいに感じた。

「それで、私に何が聞きたいんだ？ ジーク君」

マーティンはマグカップ片手に尋ねた。ジークはまっすぐ彼を見据えた。

「どんな研究をしているか教えてもらえますか」

「遺伝関係なら何でも。今はゲノム塩基配列の解読と平行して、遺伝子疾患についての研究をしている」

マーティンはさらりと答えた。難しい専門用語が並び、ジークにはよくわからなかったが、顔には出さないようにした。

「この分野の研究は、最近ようやく本格的に始まったばかりでね。専門で研究しているのは、今のところ、私を含めて三人だけだ。それだけ未開拓で研究のしがいがあるよ。何かと風当たりは強いけどね」

「風当たりって？」

セリカは両手でマグカップを持ったまま尋ねた。

「倫理的な問題だ。神の領域だから踏み入るべきでない」と主張する人は多い」

マーティンは感情のない声で答えた。これまでとは違う客観的な口調だった。ジークはそのとき初めて、彼が研究者であることを実感した。

「それでも先生は、医学の発展のために頑張ってるんですよね」

セリカはにっこりと微笑みかけた。マーティンは薄く笑みを浮かべ、目を伏せた。

「そんなにかっこいいものじゃないよ。ただの知的好奇心かな。だから、研究さえ続けられれば、それでいいんだ」

「そういえば、あの研究はどうなりました？」

セリカは身を乗り出して尋ねた。

「ほらあれ、えっと、何でしたっけ。アカデミーを辞める前に言ってましたよね。もうすぐ論文が完成するって」

「ああ、あれね……あれは、駄目になったよ」

マーティンはうつむき、曖昧に笑った。

「え？ もう出来かけていたんじゃない？」

「上手くいかないこともあるよ」

「もしかして、圧力をかけられたんですか？」

突然、ジークが口を挟んだ。

マーティンははっとして顔を上げた。血の気の失せたその表情からは、あからさまな動揺が見て取れた。

「い……いや、違う。そうじゃない。失敗しただけだ」

「この家、まだ新しいようですが、いつ建てられたんですか」

ジークはさらに質問を積み掛けた。マーティンは眉をひそめた。

「……何が言いたいんだ」

ジークは答えの代わりに、じっと視線を送った。マーティンの額にじわりと汗がにじんだ。

「まさか君たちは彼らの手のものか？ 何を探りにきた？！ 私は何も……！」

机に手をついて身を乗り出し、早口で捲し立てる。額から頬に、汗が伝って落ちた。

「先生？ どうしたの？ 彼らって……？」

セリカは困惑し、怪訝に顔を曇らせながら尋ねた。

彼女の声を耳にし、マーティンははたと我にかえった。肩を上下させ大きく息を吐くと、ソファの背もたれに身を預けた。吹き出た汗を、白衣の袖で拭う。

「すまない、ちょっとした勘違いだ。忘れてくれ……お茶のおかわりを持ってくるよ」

そう言ってぎこちなく笑いながら、自分の飲んでいたマグカップを掲げて見せた。まだ中身は半分ほど残っていた。

ジークは、台所に向かうマーティンの背中をじっと見つめた。そして、彼の姿が見えなくなると、隣のセリカにこっそりと耳打ちした。

「おまえ、10分ほどあいつを外に連れ出してくれ」

「え？ どういうこと？」

セリカはジークに振り向いた。だが、顔の近さに驚き、慌てて前に向き直った。

「気になることがあるんだ。調べたい」

ジークの声は真剣だった。

「気になることって？」

セリカも声を小さくした。少しうつむき、彼の方に視線を流す。

「研究棟の方に結界を張ってあったところがあったら」

「そうなの？」

「……おまえ、魔導の感覚が鈍ってるだろ」

ジークは呆れたように、冷めた目を向けた。セリカは頬を赤く染めながら、眉をしかめた。

「だって仕方ないじゃない。それで？ それは何？」

「怪しいだろ、結界まで張るなんて」

ジークは当然のように言った。しかし、セリカは首を傾げた。

「研究者だもの。それくらいのもの、あるんじゃない？ 未発表の研究に関するものとか。怪しいだなんて決めつけたら、先生に失礼だわ」

「だから、調べてみるって言ってんだよ。さっきのあいつの態度も気になるしな。何もなければそれでいい。だから頼む、10分だけ」

ジークは思いつめたようにセリカに詰め寄った。すでに近かった顔が、さらに近くなる。

「そんなこと言われたって……」

セリカは彼から逃げるように顔をそらすと、困ったように口を閉ざし、目を伏せた。

「すまなかったね」

マーティンにはこやかに戻ってきた。右手のマグカップからは、白い湯気が立ちのぼり、甘い匂いがあたりに広がった。今度はココアだった。ソファに腰を下ろすと、それをひとくち飲んで息をついた。

セリカは不意にすくっと立ち上がった。

「どうしたんだい？」

マーティンはマグカップを机に置き、驚いたように彼女を見上げた。

セリカはとびきりの笑顔を作って見せた。

「素敵なお庭ですね」

明るい声でそう言うと、窓の方へと小走りで駆けていった。

「そうかい？ 何も手入れしてないけど……」

窓の外のお庭は、雑草が伸び放題になっていた。

「あ、えっと……私、人工的な庭より、こういう野性的な方が好きなんですっ」

セリカは懸命に取り繕った。ジークは無関心を装い、素知らぬ顔で紅茶を口に運んでいたが、内心はヒヤヒヤしていた。ただひたすら上手くいくことを祈っていた。

「ね、先生。いっしょにお庭を歩きますか？」

セリカは小首を傾げ、じっと彼の目を見つめて問いかけた。

マーティンは答えに詰まっていた。複雑な面持ちで目を泳がせる。

「ね？ いいでしょう？」

セリカは少し甘えるように、もう一押しした。

マーティンはふっと息を漏らした。

「わかったよ」

そう言って優しく微笑み、腰を上げる。それから、ふと思い出したようにジークに振り向いた

。

「あ、君もいっしょに……」

「俺はいいです。草にかぶれやすいんで」

ジークはマーティンを遮って言った。

真顔でスケールの小さな嘘をつく彼の姿がおかしくて、セリカは思わず吹き出しそうになった。慌てて下を向き、口元を手で押さえる。

ジークは本棚を指差した。

「あの辺の本とか、貸してもらえますか？ ここで読んでます」

「ああ……」

マーティンは怪訝な表情を浮かべながらも、言われたとおりに本棚から冊子をふたつ取り出し、ジークに手渡した。

「行きましょう、先生」

セリカは飛びつくように彼の腕をとり、外へと急かした。部屋を出る間際、彼女はちらりと振り返り、こっそりジークにウインクした。

空の青は濃く、降り注ぐ光は痛いくらいに強かった。むっとする草いきれの中を、ふたりは並んで歩いていた。踏みしめられた雑草が、カサカサパキパキと軽い音を立てている。

セリカは後ろで手を組み、空を見上げていた。すらりとした細い脚に、細身の白いパンツがよく似合っている。ショートカットの明るい栗毛は、陽の光を受け鮮やかに輝き、長めの前髪は、風になびき微かに揺れている。

そんな彼女を見て、マーティンは眩しそうに目を細めた。

「いいのかい、彼氏を放っておいて」

「彼氏？ 違いますよ。ただの知り合いです」

「ずいぶん親しげに見えたけど……」

「先生、観察力が足りないんじゃないですか？」

セリカは彼に振り向き、くすりと笑った。マーティンもつられて笑った。

「勉強、頑張っているかい」

「ええ、もちろん」

セリカは胸を張って答えた。

「すまないね」

「え？」

マーティンは申しわけなさそうな、儂い笑顔を浮かべた。

「途中で君たちを放り出してしまった」

「仕方ないですよ。研究が忙しくなったんですものね」

セリカは優しく微笑んだ。

マーティンは白衣のポケットに手を突っ込み、顔を曇らせうつむいた。

「私がアカデミーの教師を引き受けたのは研究費のため、ただそれだけだったんだ。ひどい話だ

ろう？」

「辞めたのは研究費を調達する目処が立ったから、ですか？」

「ああ、ある人が私の研究を支援したいと申し出てくれてね。この家もその人に建ててもらったんだよ」

「良かったですね」

セリカは屈託のない笑顔を見せた。マーティンは目を細めた。

「優しいね、君は、本当に……」

そう言いながら、彼女に振り向く。そのとき、ふと、あることに気がついた。

「あれ、彼がいない」

セリカの背後はちょうど応接間になっていた。窓ガラス越しに見える部屋の中には、どこにもジークの姿がなかった。机の上には無造作に冊子が置かれている。マーティンは応接間の方へと足を向ける。

「きっとお手洗いに行ってるんですよ」

セリカは焦った。ちらりと腕時計を見る。まだ5分しか経っていない。

「でも、場所がわからないんじゃない……」

マーティンは窓ガラスに手をつき、もういちど部屋の中を覗き込む。

「いいじゃないですか、ジークのことなんて」

「しかし……」

「先生！」

セリカは後ろから抱きついた。

「セリカ……」

「私、先生のこと好きなんです！」

なんとか引き止めようと、ついそんなことを口走ってしまった。しかし、これで少し持たせられるかもしれない。先生ならきっと、傷つけないように断ろうとするだろう。自分が食い下がれば、5分くらいは——セリカはそう思った。

「本当なのか？」

「え、ええ……」

「夢が叶った」

「え？」

予想と違う反応に、彼女は狼狽した。彼の体にまわしていた手を放し、一步、二歩、後ずさる。

マーティンは背を向けたまま、抑えた声で噛みしめるように言った。

「私も、ずっと、君のことが好きだった」

う、うそっ——。

セリカは目を大きく見開き、呆然とした。頭の中がぐらぐらと揺れる。嘘をついて騙した罪悪感、泣きたいほどの謝罪の気持ち、この場から逃れたいという無責任な願い、あと5分の約束——。どう行動すればいいのか、答えは出ない。

「セリカ……」

マーティンはまっすぐ彼女に向き直ると、優しくその名を呼んだ。そして、肩にそっと手をのせ、濃い蒼色の瞳をじっと覗き込んだ。

ジークは応接間を抜け出し、研究棟へ来ていた。脇目も振らず、目をつけてあった場所へと向かう。そこはフロアの隅だった。取り立てて何かがあるようには見えない。だが、魔導を使える人間ならば、床の表面に張られた不可視の結界に気付くだろう。

床には金属がふたつ、並んではめ込まれていた。それらの間に一本、そして、囲むように四方に切れ目が入っていた。金属は引き出すと把手になり、床が開くようになっているものと思われる。中は収納、もしくは地下室といったところだろうか。

ジークはまず結界を解除することにした。そうしないと、把手に触れることもできない。彼にとっては難しい結界ではなかった。小さく呪文を唱え、そっと結界に手を触れる。その瞬間――。

ドン！！

マーティンははっとして振り返った。研究棟の方から、灰白色の煙が薄く上がっていた。ここからは何が起こったのか、確認することができない。彼はセリカを放し、険しい表情で駆け出した。

「あ……待って！」

セリカは呆然としていたが、我にかえると、慌ててそのあとを追いかけた。走っているうちに、次第に頭が冴えてきた。

まさか――。

鼓動が速く強くなっていく。湧き上がる嫌な予感を払うように、きゅっと目をつむり、頭を横に振った。

ふたりは研究棟へ駆け込んだ。爆発は奥の方で起こったようだ。天井とガラス窓が一部、崩れ落ちている。広い机や大きな機械の陰になっていて、爆発が起こったと思われる部分はよく見えない。急ぎ足で近づく。

黒く焦げた瓦礫とガラスの破片が、小さな山となっている。その脇で、体を丸めながら倒れている人影が見えた。

「ジーク！！」

セリカが悲鳴のような声を上げた。駆け寄って抱き起こそうとした。しかし、彼はそれを制止し、自力で起き上がった。

「大丈夫だ。とっさに結界、張ったから」

彼の体に大きな傷は見当たらなかった。顔と手にいくつかかすり傷がある程度である。セリカはほっと安堵の息をついた。

「トラップか？」

ジークは少し離れて立っているマーティンに尋ねた。彼は固い顔で頷いた。

「ああ、防犯システムを切らずに結界を解除すると、爆発する仕組みになっている」

「危なすぎるだろ！死ぬところだったぞ！」

「君はやはり彼らの手のものだったんだな！」

マーティンはジークを睨んだ。だが、その瞳には怯えの色が浮かんでいた。

ジークは落ち着いた声で尋ねた。

「彼らってラグランジェ家ってことか？」

「何をとぼけている」

マーティンは眉をひそめた。額にうっすらと汗が滲んでいる。

「とぼけてねえよ。俺はそのラグランジェ家のことを調べてるんだ。おまえはラグランジェ家とどんな関係があるんだ」

「か……関係などない」

「おまえこそ、今さら何とぼけてんだよ」

ジークはマーティンのまわりに結界を張った。四角く、薄青色の光が浮かび上がる。マーティンは驚いてそれに手を伸ばした。だが、光が壁となり通り抜けることは出来なかった。

「何のつもりだ」

「そこで大人しくしてろ。この地下室にあるんだろ、その証拠が」

ジークは爆発で大きく崩れた穴から、下の地下室に飛び降りた。

そのフロアには、セリカとマーティンがふたりきりで残された。マーティンはため息をつき、床に座り込んだ。

「先生……あの……」

セリカは泣きそうな顔で立ち尽くしていた。マーティンはうなだれたまま、寂しそうに笑った。

「私を足止めするための嘘だったんだろう」

「ごめんなさい……」

セリカはそれ以外の言葉を見つけられなかった。何を言っても、自分を正当化するための言い訳にしかない。うつむいて唇を噛みしめる。

「馬鹿みたいだったね、ひとりで舞い上がって」

マーティンはぼそりと言った。そして、視線を上げると、微かに口元を緩めた。

「でも、いい思い出ができたよ。君が忘れるのは自由だが、私に忘れろとは言わないでくれよ」

「先生……」

セリカは口元に手を添え、目を閉じた。目蓋の内側が熱くなった。

「これだな」

ジークはクリップで止められたいくつもの紙束を抱えて、地下室から戻ってきた。その表紙は

、タイトルと日付が入っていたと思われる部分が黒塗りにされていた。地下室に置いてあったそれらしきものは、これだけだった。他は、埃を被った机や椅子などの大きな家具ばかりである。「ラグランジェの圧力を受けて、この論文の公表を取りやめた。そして、その代わりに研究の金銭的援助をしてもらうことにした。違うか？」

ジークは紙束のひとつを掲げて尋ねた。

マーティンは床に座り込んだまま彼を一瞥すると、小さく笑い、肩をすくめた。

「論文とそれに関係する一切の物は、彼らに渡したことになっている。それらと引き換えに援助をしてくれることになったんでね。だから、それがここにあると知れたら、私は研究を続けられなくなる」

「ジーク……」

セリカはさすがのようにジークを見た。だが、ジークは彼女を相手にしなかった。まっすぐマーティンだけを見据え、質問を続ける。

「この研究とアンジェリカとは、どういう関係があるんですか」

「アンジェリカ？ 誰だそれは」

マーティンは無表情で尋ね返した。ジークは眉をひそめた。

「本当に知らないのか？」

「私は自分の研究をただけだ。たまたまそれがラグランジェ家にとって都合が悪かった、というだけだろう」

マーティンは淡々と言った。嘘をついているようには思えない。ジークは難しい顔でうつむくと、じっと考え込んだ。

「悪いですけど、これは借りていきます」

低く抑えた声でそう言い、紙束を脇に抱える。

「俺、ラグランジェ本家の当主と知り合いなんで、今度はそっちから支援してもらえるように頼んでみます。了承してもらえるかわかりませんが、ルーファスよりは話せる人だと思うんで……」

「何を言ってるんだ、君は」

マーティンは奇妙な面持ちでジークを見上げた。

「本当です。ジークはラグランジェ家の当主と知り合いです」

セリカが援護した。しかし、マーティンの表情は変わらなかった。

「そうじゃない。私の論文を揉み消し、取引を持ちかけてきたのが、そのラグランジェ本家の当主なんだが」

「え？」

ジークとセリカが同時に声を上げた。マーティンは静かに付け加える。

「サイファ＝ヴァルデ＝ラグランジェだよ」

ジークは大きく目を見開いた。抱えていた紙束が、バサバサと床に滑り落ちた。

84. 遠くの空と冷たい床

「ここだと思ったわ」

突然、頭上から降ってきた声に、ジークは驚いて顔を上げた。

そこにはセリカが立っていた。にっこりと微笑み、ジークの向かいに座る。

「おまえ、何しに来たんだよ」

ジークは彼女を睨み、広い机の上に散乱した本や書類を掻き寄せた。山となったそれらを隠すように、両腕で覆う。

セリカはその様子を見て、寂しげに笑った。

「手伝うわ、それを読むの」

「帰れよ」

ジークは冷たく撥ねつけた。

「きっと役に立てるわ」

「なんでそうおせっかいなんだよ。いらねえって言ってんだろ」

「だって、知ってしまったんだもの。こんな中途半端なところで引けない。それに……」

セリカは一瞬、躊躇した様子を見せたが、すぐに強い語調で言った。

「あなたのためじゃない、アンジェリカのためよ」

真剣なまなざしを、まっすぐ彼に向ける。

「少しは罪滅ぼしさせて」

ジークは怪訝に眉をひそめた。彼女の言う罪滅ぼしとは、アンジェリカを刺したことに対するものに違いない。なぜいきなりその話を持ち出してきたのだろうか。本気でそう思っているのだろうか。それとも、こう言えば断られないと思っただけのことだろうか——。彼女の本心はわからない。だが、少なくとも軽い気持ちでないだろうことは、その表情から察しがついた。

ジークはしばらく迷っていたが、気難しげにため息をつくと、書類から腕をどけ、椅子の背もたれに身を預けた。そして、腕を組みながら、タイトルを黒塗りにされた表紙を目線で指し示した。

「それ、読めよ」

セリカは安堵したように息をつき、こくりと頷いた。

そこはアカデミーの図書室だった。休日の午前という時間のためか、人の姿はほとんどなく閑散としている。あたりはとても静かだった。耳につくのは、ときおり聞こえる廊下を歩き交う靴音くらいである。

マーティンから手に入れた論文を読むために、ジークは早朝からここへ来ていた。関連書を片っ端から調べつつ解読しようとしていたが、思うように進まなかった。ただでさえ最先端の研究である。医学などかじったことすらない彼にとっては、無謀な挑戦と言わざるを得ない。なので、実際のところ、彼女の申し出はありがたかった。ただ、サイファが関わっていると聞き、反射的に誰にも知られてはならないと意固地になっていたのだ。無意識に彼を庇おうとしたのかもし

れない。

セリカは論文を手にとると、無言で読み進めた。何時間も休むことなく、ひたすら読み続けた。昼食すらとっていない。ジークも目を通してはいたが、彼女ほど集中力が持続しなかった。魔導書であればいくらでも読み続けられるが、専門外のものでは行き詰まってばかりで疲れ方が違う。休憩をとらずにはいられなかった。何度となく窓の外を眺めたり、本を探すふりをして歩きまわったりした。

「なるほどね」

セリカは唐突にそうつぶやくと、ため息をつきながら論文を閉じた。

「確かにこれは都合が悪いわ。隠蔽するのも無理ないかも」

「わかったのか？ 書いてあること」

ジークははっとして身を乗り出すと、早口でせつつくように尋ねた。

「大まかにはね」

「もったいつけてねえで教えろよ」

セリカは表情を引き締めた。そして、まっすぐに彼を見据えると、しっかりとした口調で話し始めた。

「簡単にいえば、近親者どうしでの婚姻を繰り返すと、遺伝子疾患を起こしやすくなるってことね」

「それって、ラグランジェ家……」

ジークは眉根を寄せ、つぶやくように言った。

セリカは彼から目をそらさず、小さく頷いた。

「そう、この論文は、ラグランジェ家があと数世代のうちに滅びる可能性を示唆しているのよ」

「でも、ラグランジェ家がそうやってきたのは、強い魔導力を維持するためだったんだろ？」

ジークは釈然としない顔で、首を捻りながら尋ねた。

「だから、彼らのやってきたことが否定されてるってわけ。確かに、魔導力のことだけを考えるならば、優秀なラグランジェ家どうしで子孫を作っていくのは間違いじゃないけど、生物学的には良いことではなかったのよ」

セリカはうつむき加減に頬杖をつき、小さくため息をついた。浮かない様子でひとり物思いに耽っている。だが、ジークの理解は追いつかなかった。少しきまり悪そうに頼む。

「もう少しわかるように説明してくれねえか」

「あ、ええ……」

セリカは頬杖を外し、思考を巡らせた。そして、軽く握った手を口元に添えると、ゆっくりと話し始めた。

「つまりね……一族の中だけで婚姻を繰り返すと、みんな遺伝子的に似てくるのよ。強いところはより強くなるけれど、弱い部分はより弱っていくの。ラグランジェ家は二千年近く続けてきたんだから、そうとう遺伝子に綻びがきているはず」

ジークは机にひじを立て、額を掴むように押さえた。苦しげに顔をしかめる。

「その綻びが表面に現れたのが、アンジェリカなのか」

「そうかもしれない。そういう例は書かれていないけど……」

セリカは顔を曇らせ、控えめに言った。

「あいつら……ラグランジェの奴らは、アンジェリカを必要だって言ってたぜ。遺伝子の病気とかだったら必要なわけねえだろ」

ジークは必死に反論した。

セリカは下を向いた。困ったように眉根を寄せる。考えついたことを言うべきかどうか迷っていた。ジークの神経を逆なでするだけかもしれない。でも、自分では正しい可能性の方が高いと思っている。だったら、やはり言った方がいいのではないか。いや、言うべきだ——。ためらいつつも、小さな声で言う。

「治療方法を見つけるための実験台にするつもりかも……」

冷静な推論だった。だが、ジークにとっては冷酷すぎる話だった。呆然と目を見開いたまま、固まっている。

「……ジーク？」

セリカが心配そうに呼びかけると、彼は弾けるように立ち上がった。机に散乱した書類を掻き集め、鞆の中に放り込む。そして、その鞆を乱暴に引っ掴み、戸口へ向かって早足で歩き始めた。

「待って！」

セリカは机に手をつけて立ち上がり、慌てて呼び止めた。

「おまえはもう帰れ」

ジークは背を向けたまま、つれない言葉を返した。しかし、彼女は引かなかった。

「私も行くわ。ここまで付き合ったんだもの」

「ここからは俺ひとりでやらせてくれ。頼む」

ジークは低く押し込めた声で懇願した。その声には激しい感情と強い決意が滲んでいた。

セリカは何も言えなくなった。きゅっと口を結び、目を伏せた。

「……今までいろいろ助かった。いつか、礼はする」

ジークは振り返らずにぼそりと言った。

「楽しみにしているわ」

セリカは、彼の背中に、精一杯の笑顔と明るい声を送った。

「アルティナはいないのか」

「すぐに戻ってくるわ。待っていてくれる？」

レイチェルはにっこり微笑みかけた。ラウルは短く「ああ」と答え、腕を組んだ。

少し離れたところで、アルスとルナは積み木で遊んでいた。ふたりはまるで兄妹のように見えた。実際、アルスは彼女の面倒をよく見ていた。手がかからなくていいわ、と、アルティナはよく笑いながら言っている。

「お茶を淹れるわね」

「いや、いい」

レイチェルはラウルの横顔をじっと見上げた。彼は無表情だった。どこか遠くを見ているようで、何も見ていないような目をしている。

「ベランダに出ましようか」

レイチェルは柔らかく声を掛けた。そして、大きな両開きのガラス扉を押し開けると、光の射すベランダへと足を進めた。緩やかな風が、彼女の細い髪をさらさらと揺らした。朱く色づいた光を浴び、きらきらと煌めく様は、まるでプラチナのようだった。

ラウルはわずかに目を細めた。

レイチェルはくるりと振り返った。ボリュームのあるドレスが、大きく波を打って揺れる。

「何か、言いたいことがあるんじゃない？」

鈴を鳴らしたような声でそう問いかけると、まばゆい光を背に受けながら、部屋の中のラウルににっこりと微笑みかけた。

「なぜだ」

「そんな顔をしているから」

彼女は子供の頃から勘が良かった。いつもそうやって無邪気に人の心を見透かす。人の気も知らずに——ラウルはため息をついた。彼女の隣へと足を進める。眼前には、朱色に染まった空が一面に広がっていた。

「ずっと、迷っていた」

「ラウルでも迷うことなんてあるのね」

レイチェルはにっこりと微笑んだ。

「重要なことだからだ。だが、今、決めた」

ラウルはほとんど表情を動かさずに言った。レイチェルは不思議そうに彼の横顔を見つめた。

「.....一緒に、行かないか」

「どこへ？」

ラウルは顔を上げ、遠くの空を見上げた。風が吹き、焦茶色の長髪が大きくなびいた。

「ラグランジェの名が意味を成さないところだ」

「そんなところ、あるのかしら」

レイチェルは笑いながら言った。しかし、ラウルは無表情のままだった。

「この国が世界のすべてではない」

深く静かに言葉を落とす。そして、ゆっくりと振り向くと、大きな蒼色の瞳をじっと覗き込むように見つめた。

レイチェルはきょとんとした。だが、自分に向けられた黒い瞳を見ているうちに、不意に彼の意図を理解した。それは、受け入れられることではなかった。曖昧に笑いながらうつむくと、小さく首を横に振った。

「私と同じ時を生きられるとしても、答えは変わらないか」

「えっ？」

小さな口を開いて顔を上げた彼女に、ラウルは真剣なまなざしを送った。

「私の国に来れば、おそらくおまえの時の流れは私と同じになる」

レイチェルは混乱した。次から次へと疑問が頭に浮かんだ。だが、何も尋ねはしなかった。ただ無言で首を横に振った。

「ここにおまえの未来はない。おまえはまだ知らないだけだ。サイファが何を考えているのかを」

ラウルの声は、彼にしてはめずらしく熱を帯びていた。

レイチェルは笑顔を作って見せた。

「私はサイファについていくと決めたのよ」

「あいつがおまえを裏切るとしてもか」

ラウルは低い声で問いつめた。

「ええ、それでも」

レイチェルは微笑みを保ったまま、躊躇いなく答えた。

沈みかけた太陽は、向かい合うふたりを強く照らし、冷たくなった風は、顔から熱を奪っていく。

「愚かな女だ」

ラウルは、彼女を見つめたまま、静かに言った。レイチェルはくすりと笑った。

「久しぶりにその言葉を聞いたわ」

「おまえは少しも変わっていない」

ラウルは手を伸ばした。ゆっくりと彼女に向かう。指先が頬に触れようかという、そのとき――。

「ひとの妻に向かって、愚かな女とはひどいんじゃないかな」

部屋の方から声が聞こえた。はっとして振り向く。

そこにいたのはサイファだった。彼は腕を組み、扉近くの柱にもたれかかっていた。顎を引き、横目でラウルを見ると、ニヤリと挑戦的に笑った。

ラウルは眉をしかめた。

「いつからそこにいた」

「10秒ほど前かな。子供たちから目を離すなんて感心しないな」

サイファはそう言いながら、近くで遊んでいたルナを抱き上げた。

「おい、おっさん！！」

隣でアルスが騒いでいたが、意に介さなかった。

「大きくなったね」

真正面からルナを見て話しかける。ルナは大きな目をさらに大きくして、びっくりしていた。

「汚い手で触るな」

ラウルは肩をいからせながら歩み寄り、ルナを奪い返そうと手を伸ばす。だが、サイファはそれを阻んだ。彼の手首をがっしりと掴み、指が食い込むほどに強く力を込める。

「その言葉、そのままおまえに返すよ」

抑えた声で淡々と言う。だが、その声とは裏腹に、手首を掴む力はますます強くなっていった。ラウルを見上げた彼の瞳は、激しく燃える青い炎のようだった。ラウルも負けずに、強く鋭い視線をぶつけた。

レイチェルは困惑しながらふたりを見ていた。

「こら！ あんたたち！！」

威勢のいい声と同時に、パソコンパソコンという軽い音が部屋に響いた。

その声の主は王妃アルティナだった。手には丸めた薄い冊子が握られている。これでふたりの頭を叩いたのだ。たいして痛いものでもないだろう。

「私の部屋まで来て喧嘩しないでよね！ ルナも驚いちゃってるじゃない」

彼女はサイファの腕からルナを奪うと笑顔であやした。ルナもほっとしたように顔をほころばせた。何が起きているかは理解していなかったが、緊迫した空気は感じていたようだ。

「まったく、男っていつまでたっても子供のままなのよね。嫌になるわ」

面倒くさそうに文句を言うアルティナを見て、ふたりの男たちは毒気をなくした。このふたりに遠慮なくこういうことを言うのは彼女くらいである。彼女が王妃だからではない。元来、そういう性格なのだ。誰に対しても、媚びることも、気後れすることもない。

「それで、サイファ、あんたは何の用なの？ 工作中じゃないの？」

「ええ、その仕事がやっかいでね。行き詰まってしまったんですよ」

「へえ、めずらしい。それで息抜きってわけ？」

アルティナは少し驚いたように言った。彼の仕事に関する弱音を聞いたのは、初めてかもしれない。

レイチェルは大きく瞬きをした。

「もしかして、そのお仕事って……」

「私の手には負えないから、ラウルの力を借りようと思ってね」

サイファは彼女の言葉をさえぎって言った。微かに笑みを浮かべながら、人差し指を口に当て、こっそりとウインクする。レイチェルはくすりと笑った。

「断る」

ラウルは苛立たしげに一蹴した。

「それは困ったな」

サイファは軽い口調で言った。困っているようにはとても聞こえない。だが、レイチェルとアルティナは口々に彼を援護した。

「ラウル、サイファを手伝ってあげて。本当に困っていると思うの」

「ラウル、行ってあげたら？ ルナならちゃんと預かってあげるわよ」

ラウルは思いきりサイファを睨んだ。

ふたりは魔導省の塔へと来ていた。最上階の廊下を並んで歩いている。下の階は活気にあふれているが、最上階は人も少なく、いつも静かである。今もふたりの靴音が響いているだけだった。

「どうやらわかっていないようだから、もういちど言うておくが」

サイファは前を向いたまま切り出した。

「レイチェルは決して私を裏切らないよ」

「そう思うなら、私が何をしようと放っておけばいいだろう」

ラウルは冷静に言い返した。

「無駄な努力をするおまえを哀れに思って、忠告してやっているのさ」

サイファは涼しい顔で言った。ラウルはその挑発には乗らなかった。

「おまえにしては下手な嘘だな」

「じゃあ、本音を言おうか」

サイファはズボンのポケットに手を入れ、軽く息を吸い込みながら顔を上げた。

「レイチェルのことは信じている。心配などしていない。ただ、面白くないんだよ、勝手なことをされては」

ラウルはそれでも無表情だった。サイファは小さく息をつき、目を閉じた。

「私からレイチェルを説得してやろうか」

「何をだ」

ラウルはようやくサイファに目を向けた。サイファは微かに笑った。

「連れて行きたいんだろう？ おまえの故郷へ」

「.....どういうつもりだ」

ラウルは眉をひそめて睨みつけた。

「それで彼女が救われるなら、それもひとつの方法だということさ。ただし条件がある」

サイファは真剣な顔でラウルの瞳を見つめた。

「そのときは私も一緒だ」

ラウルはじっと彼を見つめ返した。

「おまえは誤解をしているようだが、私と同じ時を生きられるのはレイチェルだからであって、おまえではそうならない」

サイファはラウルを睨み上げた。

「私を連れていきたくないから、つまらない嘘を言っているんじゃないだろうな」

「そう思いたければ好きにしろ」

ラウルは素っ気なく突き放した。サイファはうつむき、眉根を寄せじっと考え込んだ。

「.....魔導力の差か？」

「私の推論だがな」

ラウルは遠くに目をやり、腕を組んだ。

「とことん私は除け者というわけか」

サイファはため息をついた。

「馬鹿な男だよ、おまえは。騙して連れて行って、寿命が尽きるのを待っていれば良かったんだ」

「レイチェルが苦しむことになる」

ラウルは無表情で切り返した。サイファは彼を一瞥し、薄く笑みを浮かべた。

「……嘘だよ、全部」

ぽつりと言葉を落とす。

「彼女を説得することなんて、私にも出来ないさ。あれでさうとう頑固だからな。おまえの反応が見たかっただけさ」

淡々とそう言うと、ラウルの表情をちらりと窺った。だが、そのときの彼の意識は他に向いていた。

「いつからそこにいた」

鋭く切りつけるように詰問する。

サイファは彼の視線を追った。その先にいたのはジークだった。少し離れたところで立ち尽くしてこちらを見ている。

「い……今さっき来たところだ」

彼は怯みながらも、精一杯の虚勢を張った。いつものようにラウルを睨もうとする。だが、あからさまに目は泳いでいた。

ラウルは醒めた顔を向けた。

「その答えは当てにならない。人によっては10秒がずいぶん長いからな」

「彼は悪くないだろう。悪いのは往来で聞かれたくない話をしていた私たちの方だ」

サイファの擁護に、ジークはほっと胸を撫で下ろした。このふたりをそろって敵にまわしたくはない。

「あの、サイファさん、今日は少し訊きたいことがあって……」

安心したところで、遠慮がちに本題を切り出す。

「ちょうど良かった」

「え？」

サイファは人なつこい満面の笑顔をジークに向けた。

ガチャ——。

サイファは自室の鍵を開け、扉を押し開いた。

「どうしたんですか、これ……」

ジークは目の前の光景に啞然とした。

部屋の中はまるで荒らされたかのように乱雑だった。あちらこちらに段ボール箱が散在している。どれも中途半端に物が入っていて、何が目的なのかわからない。他にも、本や書類がそこかしこに積み上げられていた。無造作で崩れているものも多い。

「引っ越しをするんだ。といっても、数十メートル先の部屋だけだね」

「これはおまえの仕業か」

ラウルは部屋を見渡しつつ、冷やかに尋ねた。

「ひとりでやろうと思ったんだが、なかなか難しいものだな」

サイファは真顔で答えた。

ラウルは無表情のまま呆れ返った。レイチェルが懇願した理由がわかった。彼女は知っていたに違いない。引っ越しのことも、サイファがそれを苦手とすることも。

サイファは笑顔でジークに振り向いた。

「ジーク、君も手伝ってくれるか？」

「あ、はい」

ジークは素直に了承した。この状況ではとりあえず手伝うしかないだろうと思った。

三人はそれぞれ段ボール箱を抱えて廊下に出た。サイファが先頭を歩き、ラウルとジークはその後ろをついて歩く。いくつかの部屋の前を通り過ぎた。

「さ、ここだよ」

サイファが示した扉には、他と同じように金属製のプレートが掛かっていた。

「魔導省副長官……」

ジークは目を大きくして、呆然と読み上げた。魔導省長官に次ぐ役職である。もちろん、その役職名の下にはサイファの名前が刻まれている。

「正式には明日からだよ」

サイファは軽い調子で言った。

「これでもまだルーファスの影響力には及ばないけどね」

ジークは固い表情で目を伏せた。だから、サイファは逆らおうとしないのだろうか。そして、暗に自分のことを当てにするなといっているのだろうか——。さまざまな疑問と憶測が頭に浮かぶ。だが、尋ねることはできなかった。

サイファは扉を開いた。

中は広かった。今までの部屋の倍ほどはある。机と本棚は備えつけられていたが、それ以外の物は何もなく、殺風景な印象だった。正面は、以前と同じように一面ガラス窓になっている。

サイファは机の上に段ボール箱を下ろした。にっこりとして、後ろのふたりに振り返る。

「さ、どんどん運んでくれ」

「おまえは命令するだけか」

ラウルは呆れたような目を向けた。

「私はここで運び込まれたものを片付けていくんだよ。作業は分担しないとな」

サイファは当然のように言った。

ラウルとジークは乱雑な部屋に戻って来た。正面の大きなガラス窓には、紺とオレンジのグラデーションが映し出されている。部屋の中とは対照的に、すっきりとした空模様である。

ふたりはどちらともなく互いに別々の方を向き、背中合わせで作業を始めた。ラウルは机の上の書類を、ジークは床に散らばった本を片付けている。

「おまえは何をしに来た。深入りするなと忠告したはずだ」

ラウルは背を向けたまま、責めるように言った。手際よく段ボール箱に詰めていく。

「ヤバいことはわかった。でも、引くつもりはねえよ」

ジークはぶっきらぼうに答えた。小さくため息をつくとき、面倒くさそうに前髪を掻きあげた。

「ラウル、おまえ全部、知ってたんだな。サイファさんと親しいし、それに医者だし」

ラウルは何も答えず、黙々と作業を続けた。ジークはそれを肯定と受け取った。さらに一方的に質問を浴びせる。

「さっきの話、何だったんだよ。レイチェルさんに何かさせようとしてたのか？ サイファさんが除け者ってどういうことだ？」

「おまえには関係ない」

ラウルは冷淡に突き放した。ジークはむっとして顔をしかめた。本を持った手が止まる。

「じゃあ、俺のこともテメーには関係ねえだろ」

「おまえが動くと、事態がよけいにややこしくなる」

「なんだと?!」

カッとして噛みつきながら、勢いよく振り返る。だがその瞬間、はっとして動きを止めた。

「もしかして.....おまえも救いたいのか？ サイファさんやレイチェルさんを」

「サイファなどどうでもいい」

ラウルは抑揚のない声で言った。手は休むことなく動き続けている。

「レイチェルさんは.....？」

その質問には何も答えなかった。

ジークは一筋の光明を見いだしたと思った。立ち上がって彼に振り向くと、熱っぽく問いかける。

「もし、俺と目的が同じなら、一緒にやらねえか？ 方法はこれから考えるところだけど、おまえと一緒にならきっと.....」

「やりたければひとりでもやれ。私はこの国に関わるつもりはない」

「は？ さんざん関わってんじゃねえかよ」

「そうだ、関わりすぎた。関わるべきではなかった」

ラウルは独り言のように言った。ジークは怪訝に眉をひそめる。

「わけわかんねえ」

「おまえに理解されようとは思っていない」

「ああそうかよ」

ラウルの受け答えを聞いていると、次第に頭に血が上っていく。

「おまえなんかに頼もうとした俺がどうかしてたぜ」

嫌悪感をあらわにし、吐き捨てるように言う。そして、重い段ボール箱を抱え上げ、広い背中を睨みつけた。

「俺は逃げねえ、絶対にな」

毅然とそう宣言すると、大股で部屋を出て行った。

部屋には蛍光灯の明かりが満ちていた。眩しさを感じるくらいだった。一方、窓の外は薄暗くなっていた。すでに陽は落ち、あとは急速に光を失っていくだけである。

「これで最後です」

ジークは段ボール箱を抱えて入ってきた。彼の言葉どおり、これが最後の一箱だった。ラウルと何度も往復をして、ようやく運び終えることができたのだ。力仕事は苦手ではなかったが、これだけ重いものばかりが続くと、さすがに疲労感を覚える。大きく息を吐きながら、部屋の中央に段ボール箱を下ろした。

「ご苦労さま」

サイファは笑顔でねぎらった。部屋の片付けの方もだいぶ進んでいるようだ。ラウルはこちらを手伝っていた。運ぶ荷物が少なくなってきたところで、サイファに指示されたのだ。あいかわらず無言で作業を進めている。

「ロッカーの中も運んでくれたか？」

「え？ あの開かないロッカーですか？」

「そうだ、鍵を掛けっ放しだったな」

サイファはズボンのポケットから小さな鍵を取り出し、ジークに投げてよこした。空中に弧を描き、慌てて差し出した彼の手にすっぽりと収まる。

「中のものを持ってきてもらえるかな」

「はい」

ジークは素直に従った。鍵を握りしめ、部屋を後にする。

「サイファ、おまえどういうつもりだ」

ラウルは手を止め、睨みつけた。

サイファは腰に手をあて、反り返るくらいに背筋を伸ばしながら、ゆっくりと振り返った。

「彼と話をしてくるよ。邪魔をするなよ」

そう言って、ニッと不敵な笑みを浮かべた。

サイファの個室だったその部屋は、もう以前の面影はなかった。すっかり荷物が運び出され、がらんとしている。薄暗さも手伝って、どことなくもの寂しさが漂っている。

ジークは渡された鍵で、古びたロッカーを開けた。中には段ボール箱がひとつあった。紙束が山のように詰め込まれている。詰め込まれているというよりも、無造作に放り込まれているという方が近い。彼はそれを抱え上げると、何気なく視線を落とした。

——これは！

はっとして段ボール箱を床に置き、しゃがみ込むと、その中のひとつを手にとった。そして、部屋の隅に置いてあった自分の鞆を引っ掴み、中から紙束を取り出した。マーティンのところから持ってきた論文のひとつである。ふたつの表紙はまったく同じに見えた。黒塗りにされている部分も寸分違わない。一枚、二枚、三枚——ふたつを同時にめくって見比べていく。やはり同じものだった。

これがここにあるということは、やはり——。

「それは、ヘイリー博士のところまで手に入れたのかい？」

ジークはぎくりとして振り返った。そこにはサイファが立っていた。開け放たれた戸口に寄り

かかり、微かな笑みを浮かべながら見下ろしている。

「あ……」

ジークはまともな返事ができなかった。額から汗が吹き出した。膝をつき、口を半開きにしたまま、呆然とサイファを見上げている。

「ヘイリー博士がコピーを隠し持っていることは、薄々、勘づいていたよ」

サイファはそう言いながら、静かに扉を閉めた。廊下からの明かりが遮断され、部屋はますます暗くなった。窓の外はほぼ紺色が支配していた。

ジークの恐怖心はますます募った。逃げ道を塞がれたかのように感じた。サイファはなぜ扉を閉めたのだろうか。聞かれたくない話であることは確かだが――。

サイファは話の続きを始めた。

「だが、それを使ってどうこうするつもりはなく、単に自分の研究の成果を手元に置いておきたかっただけなのだろう。金にも名声にも興味を示さない人だからね。だから、見逃したのさ」

「やはり、サイファさんが揉み消したんですか？」

ジークは眉根を寄せた。額から頬に汗が伝い、床に落ちる。

「非難している顔だね。だが、これは正当な取引だったんだよ。彼にとっても悪い話ではない。金銭面での心配をせずに、好きな研究に打ち込めるんだからね」

サイファは少しも悪びれず、平然と言った。

そう言われてみれば、確かにそうかもしれない。だが――。

そこまで考えて、ジークは複雑な顔でうつむいた。とっくにわかっていることだった。正しいことかどうかなど、サイファにとってはさして重要ではない。彼は別の基準で動いている。今さら反論など無意味だ。

代わりに、もうひとつ気になっていたことを、質問としてぶつけてみた。

「彼への支援は、打ち切るつもりですか」

「いや、続けるよ」

サイファはさらりと答えた。

「我々の未来のためには、彼の研究が不可欠だからね」

ジークは眉根を寄せた。サイファは無表情で彼を見下ろした。

「その論文は読んだか」

「はい」

「ならば、私の言ったことの意味はわかるね」

ジークは顔を上げた。思いつめた声で尋ねる。

「あの、アンジェリカはこの論文とどう関係するんですか？ 教えてください、アンジェリカは……」

「質問は受け付けない」

サイファは彼の言葉を遮り、冷たく拒絶した。

ジークは唇を噛んだ。力が抜けたようにうなだれる。

「君はそんなことを訊くためにここへ来たのか？ 大事な手がかりを持って、のこのこと」

サイファは後ろ手で、がちゃりと鍵をかけた。

「……え？」

ジークはきょとんとして顔を上げた。そのとき――。

ガシャン！！

ロッカーが派手な音を立てた。それは、ジークが打ちつけられた音だった。サイファが彼の右手首を掴み、後方のロッカーに押しつけた、いや、叩きつけたのだ。ジークは仰向けにひっくり返った。腕と頭を強く打ち、その痛みに顔をしかめた。

サイファは倒れたジークにまたがり、覆いかぶさるように顔を近づけた。

「私がこの気になれば、一瞬でこの論文は灰になる」

「なっ……」

ジークの顔から血の気が引いた。ようやく手に入れた大切な証拠だ。ルーファスと対峙するためには、これがなければ話にならない。必死に精一杯の抵抗をする。だが、サイファは意外と力が強かった。体勢の違いもあるだろうが、ジークがどれだけ力をこめてもびくともしなかった。右手はロッカーに、左手は床に押しつけられている。それでも、右手に握っている論文は手放さなかった。

「わかっていただろう、それは私にとって都合の悪いものだというのを。もう少し警戒心を持つべきだったな」

サイファの顔に冷たい笑みが浮かんだ。端正な顔立ちだけに迫力がある。ジークは背筋が凍りついた。言い知れぬ恐怖を感じた。畏怖といってもいいかもしれない。息が止まり、うめき声すら出ない。

ガシャン！！

鍵を閉めたはずの扉が、激しい音を立てて開いた。ラウルが蹴り開けたのだ。扉は原形を留めていたが、鍵の部分は破壊されている。

「何をしている」

「おまえなあ、少しは扉を壊すことに躊躇いを持てよ」

サイファは呆れたようにため息をついた。ラウルは無表情で腕を組む。

「鍵を掛けるおまえが悪い」

「邪魔するなと言っただろう。せつかく面白いところだったのに」

サイファは文句を言いながら立ち上がった。

ジークは呆然としていた。起き上がる気力もなく、床に体を投げ出したまま、天井を見つめている。不意に思い出したように右手の論文の感触を確かめた。まだ灰にはなっていないようだ。

「忠告だよ」

サイファは笑って言った。ジークの手を取り、体を引っ張り起こす。彼の背中は埃にまみれていた。髪にもゴミが絡まっている。しかし、彼にはそんなことを気に掛ける余裕などなかった。何がなんだかわからないといった顔で、サイファを見上げた。

サイファは真面目な顔になった。

「君の行動の甘さと判断の遅さは、いつか命取りになる。身をもって実感しただろう」

ジークはぐっと強く口を結び、うつむいた。返す言葉もなかった。

「ルーファスは手強いよ。それだけは言うておく」

サイファは段ボール箱を抱え上げた。

「あとは私たちだけでやるから、君はもう帰っていいよ。ありがとう、助かった」

「あの、これ……」

背を向けたサイファに、ジークはとまどいがちに声を掛けた。右手の論文を掲げる。

サイファは鋭い視線を流した。

「切り札は慎重に扱え」

「公表することになるかもしれません」

ジークは表情を引き締めた。

サイファはふっと小さく息を漏らした。

「よく考えたうえで、君が最善と思う行動をとればいいさ。基本的に君の行動は阻害しない。だが、許容範囲を超えた場合は全力で阻む。それだけだ」

ジークは息を呑んだ。

「行くぞ、ラウル」

サイファは戸口のラウルに横柄に声を掛けると、颯爽とした足取りで部屋を出て行った。

ラウルは冷たくジークを見下ろした。何か言いたげだったが、何も言わずに部屋を出て行った。鍵の壊れた扉は、開け放たれたままだった。

ジークはすっかり暗くなった部屋にひとり残された。冷たい床に座り込んだまま、手にした論文を握りしめる。

——俺は、逃げない。

奥歯を噛みしめ、自らを鼓舞するように、心の中で強くつぶやいた。

85. 最強の敵手

ジークは革張りのソファに腰を下ろしていた。背筋をピンと伸ばし、軽く握った手を膝の上のせている。体も表情も緊張でこわばっていた。目だけを動かし、部屋の様子を探る。

そこは応接間だった。アンジェリカの家と同等に広い。何も物が置かれていない空間が、中央に大きく取られていた。自分の座っている窓際には、レースのカーテン越しに柔らかい自然光が広がっている。全体的に明るい雰囲気だ。調度品は、新しくはないが、どれも上質で、手入れが行き届いているように見えた。

ガチャ——。

扉が開き、年配の女性が入ってきた。ティーカップを載せたトレイを手にしている。ジークの元に足を進めると、上品な物腰で紅茶を机に置き、彼へと差し出した。

「どうぞ」

「どうも」

ジークは小さく頭を下げた。だが、それには手を伸ばそうとしなかった。疑惑の目つきでじっと覗き込むだけである。

「毒なんて入っていませんよ」

老婦人はくすりと笑ってそう言いながら、部屋をあとにした。

自分の心を見透かされ、ジークはばつが悪そうにうつむいた。しかし、それでも、その紅茶には手をつけなかった。

しばらくして、再び扉が開いた。

「待たせたな」

ルーファスが尊大に低音を響かせながら、ゆったりとした足取りで入ってきた。ジークの向かいに腰を下ろす。ソファが軋み音を立てた。

ジークは険しい顔で睨みつけた。だが、ルーファスは余裕の表情でそれを受け流した。

「まさか再びここへ乗り込んでくるとは思わなかったな」

ルーファスは軽く笑いながら、顎で戸口の方を指し示す。

「向こうの台所だ、おまえが壁を壊したのは。覚えているか」

「本題に入ってもいいですか」

ジークは挑発には乗らなかった。鞆の中から紙束を取り出し、机の上に置いた。表紙がところどころ黒塗りにされている。

「知ってますよね」

上目遣いに、目の前の男を窺う。

ルーファスは冷たい目でその紙束を見下ろした。

「サイファから手に入れたのか」

「いや、ヘイリー博士からだ」

ジークはきっぱりと答えた。

ルーファスはそれを手にとり、ペラペラとめくった。

「サイファが回収したものと思っていたがな」

眉ひとつ動かさず、独り言をつぶやく。

「あいつのやり方はぬるくていかん。私なら徹底的にやる。逆らう気など起きぬようにな」

ジークはごくりと唾を飲んだ。淡々とした言い方だったが、だからこそ真実味があるように感じた。対処したのがサイファで良かったのかもしれない。

——ブワッ。

突然、鈍い音とともに閃光が走った。その一瞬で紙束は灰燼と化し、ルーファスの手から机の上に崩れ落ちた。細かな燃え殻が、埃のように舞い上がる。

「それで？」

ルーファスは手についた灰を払いながら、涼しい顔で尋ねた。

ジークは何の前触れもなく起こったことに、目を丸くしていた。紙の焼けた匂いが現実を伝えている。しかし、すぐに気を落ち着け、冷静に口を開いた。

「コピーはとってあるぜ。誰にもわからないところに隠してある」

「ほう、少しは頭が働くようだな」

ルーファスは冷ややかに言った。少しも動揺している様子はない。ジークはこのとき初めてサイファの忠告に感謝した。あの忠告がなければ、コピーを取ることはなかつただろう。

「頼みがある」

「頼みではなく脅迫ではないのか」

ルーファスは鼻先で笑いながら言った。

ジークはぎこちなく口角を吊り上げた。その額には薄く汗が滲んでいる。

「そうとってもらっても構わないぜ。聞き入れてもらえない場合は、さっきの論文を公表するつもりだ」

「何の伝手もない君が、どうやって公表するつもりだ」

「わかりそうな学者や学生に配りまわれれば、噂にくらいはなるんじゃないか。見る人が見れば、正しいかどうかわかるだろうしな」

ルーファスは口元に微かな笑みをのせた。

「なるほど、思ったより頭が働くようだ。それで、要求は何だ」

「わかってんだろ。アンジェリカを自由にしろ」

ジークは昂る感情を抑えながら、低い声で言った。怒りで我を忘れては、以前の二の舞になりかねない。もう同じ過ちを繰り返さないと心に決めている。

「それは無理だ。我々にはあの子が必要でね」

ルーファスは考える素振りすら見せずに即答した。

ジークは眉をひそめ、鋭く睨みつけた。

「いくらラグランジェ家を救うためでも、実験台なんて絶対に許さねえからな」

「何の話だ」

「今さらとぼけるな！ あの論文は読んだぜ」

ルーファスは目を伏せ、ふっと笑った。

「そうか、この論文以外の真実は、何も知らんというわけだ」

ジークは怪訝な面持ちで首をひねった。

「どういうことだ」

「アンジェリカは実験台などではない。滅びゆく我々の救世主となるべき存在だ」

「救世主？」

ジークはますます訝った。

「だって、あいつの遺伝子は綻びがきてるんじゃ……」

「逆だ。あの子だけが唯一、正常な血を持っている」

「え？ 何で……」

ルーファスはまっすぐにジークを見据え、今までにない真摯な口調で言う。

「アンジェリカは丁重に扱うと約束しよう。君は黙って手を引けばいい。あの論文を公表すれば、ラグランジェ家の威信は失墜する。サイファもアンジェリカも、皆が不幸になるだけだ」

「このままじゃ、どのみちアンジェリカは不幸だ！」

ジークはこぶしを机に叩きつけ、勢いよく立ち上がった。再び灰が舞い上がり、静かに落ちていく。

ルーファスはそれにも動ずることはなかった。

「サイファがついている。不幸になどしないだろう」

「いくら父親がついてるっていても……」

「夫だ」

「は？」

ジークはぼかんとした。話の繋がりがわからなかった。

ルーファスはソファの背もたれに身を預けた。革が摩擦音を立てる。恰幅のいい腹の上で手を組み、悠然とジークを見上げた。

「サイファがアンジェリカの夫となる予定だ」

「……ちょっと待て」

ジークは額を押さえ、崩れるようにソファに腰を下ろした。頭が混乱して、何がなんだかよくわからない。嫌な汗が体中から滲んでいる。

ルーファスは淡々と説明を始めた。

「もちろん、表向きには別の夫を用意するがな。事実上の夫はサイファだ。サイファとの子をなし、後継者として育てるのが、アンジェリカの役目だ」

ジークはうつむいたまま眉根を寄せた。そして、ゆっくり顔を上げると、ルーファスをじっと睨む。

「何もかも間違ってるだろ、それ。だいたいそれじゃ、ますます破滅へ向かうだけじゃねえか。俺をからかってんのか？ バカにしてんのか？ 試してんのか？」

「真面目な話だ」

ルーファスは青い瞳でまっすぐに見つめ返した。

「それで何でラグランジェ家が救われることになるんだよ！」

「心配無用だ。我々は君より多くの事実を知っている」

「説明しろよ！」

一向に話が見えてこない。ジークは苛立ちを募らせていった。受け答えが感情的になっていく

。

そんな彼を、ルーファスは冷淡に突き放す。

「その義務はない」

ジークは顔をしかめた。

「アンジェリカは、あいつは承諾してんのかよ」

「近いうちに話をするつもりだ。逆らうことはないだろう。我々に従うと約束したのだからな、君を助けるために」

ルーファスは嫌みたらしくそう言うと、ニヤリと口元を歪めた。

ジークは唇を噛み、うつむいた。

そうだ、俺のせいだ――。

だからこそ、自分が彼女を救い出さなくてはならない。ラグランジェ家では家の存続がすべてなのだ。そんな捻れた家では、絶対に彼女は幸せになれない。

「大人しく帰れ」

ルーファスは大きく息をつきながら体を起こした。そして、ジークの前に置かれたティーカップに手を伸ばした。少し灰が浮かんでいたが、気にせず口に運ぶ。

「まだ答えを聞いてねえ」

ジークは強気に言った。

「引く気はないようだな」

「当然だ」

「一日だけ時間をくれ」

ルーファスはティーカップを机の上に置いた。

「私ひとりで決断するわけにはいかんのでな」

「長老会で討議して決めるってわけか」

ジークは険しい目つきでルーファスを窺った。彼は感情のない視線をジークに向けていた。口を閉ざしたまま、何も答えようとはしない。

「明日のこの時間、答えを聞きに来るぜ」

ジークはソファから立ち上がった。そして、ルーファスをひと睨みすると、腹立たしげに鞆を引っ掴み、足早に出て行った。

「アルフォンスたちを呼んでくれ」

ルーファスはソファに身を沈めながら、背後の妻に頼んだ。彼女は胸元で両手を重ね、心配そうに立ち尽くしていた。

「あなた……」

口をついて出たその声は、か細く弱々しかった。だが、ルーファスの声は、いつもと変わらず力強かった。

「心配はいらん。何もかも上手くいく。何もかも、な」

ルーファスは目を細め、天井を見つめた。

ジークは後ろの扉から教室に入った。すでに授業は始まっていた。教壇のラウルは冷たく一瞥しただけで、何事もなかったかのように授業を続けた。

だが、何人かの生徒は後ろを振り返っていた。その中には、リックとアンジェリカもいた。リックはほっと安堵したような表情を見せていた。しかし、アンジェリカは心配そうに顔を曇らせ、何か言いたげに大きな瞳を潤ませていた。

ジークはすべての視線を振り切り、無言で席に着いた。

レイチェルは王妃アルティナの部屋にいた。

だが、アルティナはここにはいない。彼女は、国王、つまり夫に呼ばれて出て行ったのだ。めずらしいことではなかった。むしろ、よくあることと云ってもいい。つまらないことですぐ呼びつけるのよ、と彼女自身も笑ったり怒ったりしながらよく言っている。つまらないことというのが真実かどうかはわからないが、実際、たいていの場合はすぐに戻ってきていた。

レイチェルは目の届くところでアルスとルナを遊ばせながら、ひとり紅茶を飲んでいた。

「レイチェルさん」

「はい……？」

突然の呼びかけに、彼女は少し驚いたように返事をして振り向いた。ティーカップをソーサに戻す。

声の主は若い衛兵だった。王妃の部屋の前には、必ずふたりの衛兵が常駐している。彼はそのうちのひとりである。開け放たれたままの戸口から、覗き込むように上半身を乗り出していた。

「お父上がいらしています」

「お父さまが？」

レイチェルはきょとんとして立ち上がった。父親は、退職して以来、ここへ来たことなど一度もない。何か大変なことでも起こったのだろうか——ふとそんな考えが頭をよぎった。不安が膨らみ、小走りで部屋を出た。ほてった桜色の頬に、ひんやりとした空気が触れる。

「お父さま？」

あたりを見まわしながら声を掛けた。長い金髪が薄暗い廊下で波を打つ。だが、父親の姿は見つからない。

そのとき、背後から大きな影が彼女に忍び寄った。

魔導省の塔。その最上階の一室にサイファはいた。今日から彼は副長官となる。そして、ここは彼の新しい個室である。今までより広く、明るい雰囲気だ。引っ越しを済ませたばかりで、机の上もまだきれいに片付いている。だが、すぐに書類の山に覆われることになるだろう。

——コンコン。

扉がノックされた。サイファは書類をめくる手を止め、顔を上げた。

「どうぞ」

その声と同時に扉が開き、ルーファスが入ってきた。机の前まで足を進め、後ろで手を組むと、座っているサイファを無愛想に見下ろした。

「その若さで副長官とはな。どんな手を使ったのだ」

「真面目に仕事に取り組んだ結果ですよ。ラグランジェの名前の力も大きいでしょうけどね」

サイファは机の上で手を組み、にっこりと微笑んだ。

「少しは感謝しているようだな」

「価値は適正に評価していますよ。そうでなければ利用することも出来ませんから」

淡々とそう言うと、面倒くさそうに頬杖をつき、ルーファスを見上げた。

「それで、何の御用ですか。昇進祝いに来たわけではありませんよね。手ぶらですし」

ルーファスはふっと笑った。

「手ぶらではないぞ」

その口調はどこか楽しんでいるふうだった。

サイファは嫌な予感がした。こういうときのルーファスは、何か良からぬことを企んでいることが多い。警戒心をあらわにした厳しいまなざしを彼に向ける。

ルーファスは上着のポケットに手を入れ、何かを取り出した。そっと机の上に置く。カタン、と小さな音を立てた。

それは、プラチナの指輪だった。何の飾りもないシンプルなものだ。だが、その内側には、見まがうことのない刻印があった。

まさか——。

サイファははっとして、表情をこわばらせた。

「ジーク、どこへ行っていたの？ 心配したわよ」

授業が終わるなり、アンジェリカは一目散にジークに駆け寄った。いったんアカデミーへ来ていたジークが、いつのまにか姿を消していたのだ。何かに巻き込まれたのではないか、危ないことに首を突っ込んでいるのではないかと気が気でならなかった。

ジークは椅子から立ち上がった。思いつめた顔を彼女に向ける。

「アンジェリカ、俺の家へ来い」

「え？ いいけど、いつ？」

アンジェリカはきょとんとしながら尋ねた。

「あ……そうじゃなくて……」

ジークは困ったように頭に手をやった。斜め上に視線を流し、考えを巡らせる。そして、再び真剣な顔になると、彼女の細い両肩に手をのせた。

「おまえ、あの家を出て、俺の家に住め」

「えっ……？」

アンジェリカは大きく目を見張った。

「ジーク、いくらなんでもいきなりすぎ」

隣で見ていたリックは苦笑した。事情を知らない彼には、ジークの発言は非常識なものとしか思えなかった。

「危ねえんだよ、おまえの家は」

ジークはまっすぐに彼女の瞳を覗き込んで言った。

アンジェリカは怪訝に眉をひそめ、首を傾げた。彼が冗談を言っているようには見えない。いや、そもそもこんな冗談を言う人間ではない。

「わかるように説明してくれる？」

「今は、言えねえ……けど、俺を信じろ」

ジークは手に力を込めた。彼女の肩をぐっと掴む。

アンジェリカは納得のいかない様子だった。不満そうな顔でじっと考え込む。

「……じゃあ、お父さんとお母さんに相談してみる」

「ダメだ！」

ジークは即座に否定した。

アンジェリカはむっとして口をとがらせた。

「いったい何なの？ そんなの無理に決まってるじゃない。ジーク、おかしいわ」

「俺はおまえを守りたいんだ！」

ジークは必死だった。できれば、例の論文のことも、サイファのことも知らせないでおきたい。それが彼女のためだと思った。しかし、それを言わなければ危機感を上手く説明できない。伝わらない、伝えられないことがもどかしかった。

「やあ、ジーク君」

ジークの背筋に冷たいものが走った。何度も聞いて耳に馴染んだ声、そして、今は最も耳にしなくなかった声。なぜこのタイミングで——きゅっと口を結び、振り返る。

サイファは戸口で愛想良く微笑み、右手を上げていた。軽快な足取りで教室に入り、ジークたちに近づく。いつもと何ら変わったところはない。

「お父さん、今度は何の用なの？ 来すぎじゃない？」

アンジェリカは眉をひそめて尋ねた。彼女の指摘ももっともだった。前回、ここへジークを訪ねて来たのは、ほんの数日前のことである。

「今日は個人的なことだね」

サイファは受け流すように言うと、引き締まった端正な顔をジークに向けた。深い蒼の瞳が鋭く光る。

「一緒に来てくれるかな」

「俺も話をしたいと思ってたところです」

ジークは固い声で言った。緊張を滲ませながらも、毅然とした表情で見つめ返す。ふたりの間の空気がピンと張りつめた。

アンジェリカは息を呑んだ。

「ねえ、いったいどうしたの？」

ただならぬ雰囲気不安を感じ、どちらにともなく尋ねる。

「何でもないよ」

サイファは柔らかく言った。

「でも……」

「心配性だね、アンジェリカは」

今度は包み込むように優しく微笑んだ。そして、顔を曇らせる彼女の頬に、そっと手を伸ばす

。

だが、その手が彼女に触れることはなかった。

ジークが彼の手首を掴んで止めたのだ。必要以上に強い力を込めている。握り潰さんばかりの勢いだ。

サイファは目を大きくして振り向いた。

「行きましょう」

ジークは低く抑えた声で言った。表情を隠すためなのか、深くうつむいている。

サイファはふっと小さく息を漏らした。

「そうだね」

落ち着いた声で同意する。

ジークはようやく手を離した。サイファの手首には、薄く指の跡が残っていた。サイファは何も言わず、さり気なく袖を引き下げた。そして、ジークににこりと微笑みかけると、彼の背中に手をまわした。

「どうしたのかしら、やっぱり変だわ」

アンジェリカは不安を拭えなかった。小さくなるふたりの後ろ姿を、横目でちらりと見る。

「うん、確かに」

リックも彼らの姿を目で追いながら頷いた。

「ジークとお父さん、喧嘩しているのかしら」

アンジェリカは口元に手を添えうつむいた。何ともいえない微妙な表情をしている。

「喧嘩っていうより、一方的にジークが反発してるみたいだったけどね」

リックは冷静に指摘した。そうだとすると、不思議なことには違いなかった。ジークはいつもサイファのことを信用し、慕っているように見えたからだ。それが壊れるような何かがあった、ということなのだろうか。

アンジェリカも同じことを考えていた。

「なんだか心配。こっそりあとをつけようかしら」

「それはダメだよ」

リックは優しくたしなめた。

「そうよね」

アンジェリカは気落ちして、深くため息をついた。ふたりが向かった方に顔を向ける。だが、彼らの姿は昼時の雑踏に掻き消され、もう目にする事は敵わなかった。

サイファとジークは道場へとやってきた。魔導耐性に優れた、また物理的にも頑丈な建物である。魔導の実戦訓練などを行う場所だが、今はあまり使われていない。

「どうして道場なんですか」

ジークはサイファの背中に尋ねかけた。

「誰にも邪魔されたくないんでね」

サイファは鍵を開けながら、素っ気なく答えた。

「それなら別にここでなくても……」

「さあ、入ろう」

ジークの反論を無視するようにそう言うと、扉を開き、軽やかに中へ入っていった。

ジークはあとに続けなかった。足が重い。進むことを拒絶しているかのようだった。この捉えどころのない空間が苦手なせいかもしれない。それとも、閉塞した空間でサイファとふたりきりになることに恐怖を感じているせいだろうか。

しかし、いつまでも入口に突っ立っているわけにはいかない。意を決して足を進めた。

白い床、白い壁、白い天井——眩しいくらいに真っ白で何の飾りもない部屋。その中央にふたりは立っている。

「まずは君の話を聞こうか」

サイファは腕を組み、振り返った。無表情でじっとジークを見つめる。

ジークは少し怯んだが、負けじと強い視線を返した。そして、率直に尋ねる。

「サイファさんが、アンジェリカの事実上の夫になるって本当ですか」

サイファはふっと表情を和らげた。

「やはりその話を聞いたんだね。さっきの君の態度から、そうじゃないかと思ったよ」

ジークは奥歯を噛みしめた。彼が否定してくれることを期待していた。だが、その淡い期待は脆くも崩れ去った。どうしようもなく頭に来た。

「それで本当にアンジェリカを幸せに出来ると思ってるんですか。そんな歪んだ環境じゃ、誰も幸せになんてなれない。だいたいレイチェルさんはどうするんですか！」

怒りまかせに一気に捲し立てる。

サイファは曖昧に笑った。

「君の言うとおりで。君は正しい。うらやましいよ、まっすぐに物事を考えられる君が」

「皮肉ですか」

ジークは気色ばんだ。

「本心だよ」

サイファは真顔で言った。

「だから、君に託したんだ、私たちの未来を。君なら、私たちを、アンジェリカを解き放ってくれるのではないかと期待していた」

ジークははっとした。サイファのこれまでの言動が、次々と頭を駆け巡った。自分を導いてくれた、道を示してくれた、現実の厳しさを教えてくれた。もし、本当にアンジェリカの夫になるつもりであるのなら、こんなことをする必要などない。ラグランジェ家の当主という立場から、拒否することが出来ずにいただけかもしれない。

「サイファさん、俺……」

「だが、君は期待に応えてくれなかった。いや、私の落ち度かな」

サイファは何もかもあきらめたように言った。憂いを含んだ顔でうつむく。横髪がはらりと頬にかかった。

ジークは慌てて食い下がる。

「まだ終わってません！ 結果が出るのはこれからです！」

「残念だが、もう終わるんだよ」

サイファはゆっくりと視線を流した。白い空間の中で、鮮やかに蒼が光る。

「君は、ここで死ぬ」

「……え？」

呆然としているジークの前で、サイファの魔導力が一気に高まる。彼の周囲に竜巻のような風が起こった。

「ここは……」

薄く開いた目に映る、見知らぬ天井。

レイチェルは、真上の小さな灯りに眩しさを感じ、目を細めて左手をかざした。そのとき、薬指の指輪がなくなっていることに気がついた。右手をつき、ゆっくりと体を起こして立ち上がる。体も頭も、異様に重い。それでも状況を把握しようと、ぼんやりあたりを見まわした。

部屋はそう広くない。天井も低い。おまけに窓もなく、陰鬱な雰囲気である。天井、壁、床は、コンクリートで塗り固められているだけのようだ。空気にはわずかな湿り気と、土の匂いを感じる。地下に違いない。普通に人が住まう部屋ではないだろう。物置と考えるのが自然だが、物は何も置かれていなかった。強いていえば、自分の下に敷かれている毛布くらいである。

ふと、部屋の隅に石段があることに気がついた。それを上りきったところに、出入り口らしき扉が見える。

だけど――。

レイチェルは壁に手をあてた。強力な結界が、部屋全体を囲むように張られている。この結界を破らない限り、外に出ることは出来ない。

一歩、二歩と後ろに下がり、壁から離れると、呪文を唱え始めた。向かい合わせた手の間に、白い光が満ち、たちまち溢れそうになった。慌てて指先に力を込めて押し止める。それが安定したところで、勢いよく両手を突き出すと、壁に向けて一気に放った。速度はあった。だが、衝突する手前で静かに消滅した。まるで吸収されたかのようなだった。

私の力では無理ね――。

結界を強引に破るには、そこに込められた魔導力を遥かに上回る力をぶつけなくてはならない。先ほどのものがまるで及ばないことは、自分でもよくわかっていた。結界を解除する呪文も得意ではない。簡単なものなら可能だが、このような複雑で強力なものを解除する知識など、持ち合わせていない。

魔導の勉強、真面目にしておくんだったわ――。

彼女はため息をついて座り込んだ。だが、今さら後悔しても手遅れである。成り行きに任せるしかない。壁にもたれかかり、目を閉じて深呼吸をした。

ギギギギ……。

突然、嫌な軋み音が部屋に反響した。

レイチェルは目を開き、音のする方へ視線を向けた。その音を発していたのは、石段の上の錆びた扉だった。誰かが外から押し開けているようだ。ゆっくりと扉が動く。そこから伸びた光の帯が、流れるように石段を駆け下りた。

ジークは結界を張った。サイファが放った大きな光球を防ぐ。だが、その反動で後方に弾き飛ばされた。背中から壁に叩きつけられ、げほっと咳き込む。

「サ……サイファさん！ どうして！！」

痛みに顔をしかめながら、必死に問いかけた。

サイファは腕を下ろした。

「レイチェルが人質に取られている」

「えっ？」

ジークは目を見開いた。

「君を殺さなければ、レイチェルが殺されてしまうんだ」

サイファが語った答えは明快だった。しかし、その内容は重かった。ジークは頭の中が真っ白になり、何も言葉に出来なかった。

「アンジェリカに危害を加えられることはない、その確信が油断に繋がったのだろうな。レイチェルのことまで考えが及ばなかった。私の最大の弱点であることは明白にも拘らずだ。私の落ち度だよ」

サイファはまるで他人事のように、落ち着いた口調で話した。

「だ、だったら助けに行きましょう！ 俺もいきます！」

ジークはこぶしを握りしめ、一步前に踏み出した。

しかし、サイファの反応は冷やかだった。

「五人もの手練の術士を相手に、そんなことが可能だと思っているのか」

「やってみなければわかりません！！」

「そうだな、救出できる可能性もある。だが、私にそのリスクを冒す理由はない。君を始末する方が確実なんだよ」

ジークはぞっとして身をすくませた。実に合理的な判断、そして冷酷な決断だった。微塵の迷いも見られない。これ以上、いくら反論を重ねても徒労に終わるだろう。

サイファはさらに畳み掛けた。

「それに、今回は助け出せたとしても、君がいる限り状況は変わらない。私たちはラグランジェの人間だ。逃れる術はない」

「俺が、いる限り……」

ジークは嘔みしめるようにつぶやきながら、懸命に解決策を探った。

自分が手を引けば……いや、それはどうしても譲れない。手を引くふりをしてこの場を収め、アンジェリカを連れ出してどこかへ逃げれば……どこか？ どこへ？ どこへ行ってもラグランジェ家を相手に、逃げ切れるとは思えない。

そもそも、手を引くと言ったところで、収まるものでもない気がしてきた。きっと自分は知りすぎてしまった。手を引いたとしても、彼らにとって危険因子であることに変わりはない。だからこそ、有無を言わず始末しようとしているのだろう。いったいどうすれば……。

「君を巻き込んだのは私だ。申しわけなく思う。だが——」

サイファの青い瞳が鋭く光を放った。

「私は君を殺す。死にたくなければ、君が私を殺すしかない」

「サイファさん！！」

ジークは哀願するように名を呼んだ。

だが、サイファはそれに応えることなく、両手を向かい合わせ、再び呪文を唱え始めた。

「お父さま、おじいさま……」

レイチェルは驚いて立ち上がった。開いた扉から姿を現したふたりは、彼女の父親アルフォンズと、義理の祖父にあたるルーファスである。ルーファスとはほとんど交流はなく、面と向かって話したことは数えるほどしかない。

ルーファスは後ろで手を組み、戸口から冷たく彼女を見下ろした。

「レイチェル＝エアリ。おまえがなぜここへ連れてこられたか、わかるか？」

「人質ですか？ 指輪がありません」

そう言って、彼女は左手を掲げた。薬指の根元に細い痕が残っている。ここに来る前までは、そこに指輪が嵌められていた。サイファから結婚指輪として贈られたものである。それがなくなっているということは、人質に取った証として持ち去ったのだろう。そして、それを見せる相手は、おそらくサイファ——。

レイチェルは顎を引き、上目遣いで睨みつけた。

しかし、ルーファスは気にも掛けなかった。平然としたまま、眉ひとつ動かさずに言う。

「処刑だ」

「えっ？」

レイチェルは思いがけない言葉にきょとんとした。まるで事態を飲み込めなかった。そんな彼女を見て、ルーファスは丁寧に言い直す。

「おまえを処刑することに決定した。心当たりがないとは言わせんぞ」

レイチェルは無言で目を伏せた。小さな口はきゅっと固く結ばれている。ルーファスは満足そうに鼻先で笑った。

「その前に人質として使わせてもらったがな。今頃、サイファがジークを始末にかかっているだろう。おまえの処刑はそれが済んだあとに行く」

レイチェルははっとして顔を上げた。

「アンジェリカは？ あの子はどうなるの？」

胸元で両手を組み合わせ、すぐるように尋ねる。

「アンジェリカ＝ナールは、我々にとって必要な存在だ。心配せずとも処刑などしない」

その答えに、彼女はほっと胸を撫で下ろした。

しかし、ルーファスは意味ありげに口元を斜めにした。

「あの子はサイファが幸せにするだろう」

「サイファ……？」

「そうだ、サイファがアンジェリカの夫になるのだ」

レイチェルは大きく目を見開いた。しかし、その意図はすぐに理解できた。本家筋を途絶えさせないため、そして、強い魔導の力を残すため——。

「だから、私が邪魔なのですね」

そう言って視線を落とし、寂しげな笑みを浮かべた。

「サイファがなかなか首を縦に振らないのは、おまえの存在のせいだ。おまえが死に、ジークが死ねば、あのふたりは大切な存在を失った者どうし、身も心も寄せ合って生きていくしかないだろう」

ルーファスは筋書きを語った。どこか楽しんでいるふうな声音だった。

「覚悟は決まったか、レイチェル＝エアリ」

狭い地下室に、高圧的な声が反響する。

「怖れを知らぬ裏切り者、そして、我らが救世主の母——最期に望みがあれば、出来うる限り聞き入れよう」

レイチェルは視線を落とし、じっと考え込んだ。そして、何かを決意したように表情を引き締めると、ゆっくりと顔を上げた。澄んだ蒼い瞳には、強い力が宿っていた。ルーファスを見据え、静かに凜と訴える。

「処刑はお父さまの手で、お願いします」

「検討しておこう」

ルーファスは感情なく答えた。その隣で、アルフォンスは隠しきれない苦悩を滲ませていた。

「ルーファス」

思いつめたように名を呼ぶと、真剣な顔を彼に向けた。

「少しの間でいい、レイチェルと話させてほしい、抱きしめさせてほしい」

堰を切ったように懇願する。しかし、そんな彼に、ルーファスは冷淡な視線を流した。

「処刑のときでもいいだろう」

「抱きしめたその手で殺せというのか」

アルフォンスは唸るように言った。声が僅かに震えていた。

ルーファスは横目で彼を見つめた。

「まあ、よかろう。ただし、妙なことは考えるな」

「そこまで愚かではない」

アルフォンスは無愛想にそう言うと、呪文を唱え、結界の一部を開いた。人ひとりがようやく通れるくらいの大きさだ。彼は身を屈めながらそこをくぐり、しっかりとした足どりで石段を下りた。薄暗い中で待ち構えていたレイチェルを、つらそうに目を細めて見つめる。

「助けてやれなくてすまない」

「お父さまが責任を感じることはありませんわ」

レイチェルはにっこりと笑った。いつもと変わらない屈託のない笑顔——この状況で、なぜこんなふうに笑えるのか、アルフォンスにはわからなかった。やるせない思いに、目頭が熱くなる。小さな彼女の体を、大きな腕で思いきり抱きしめた。

「お父さ……ま……？」

レイチェルは目を大きく見開いて、顔を上げようとした。だが、アルフォンスは、そんな彼女の頭を、自分の胸に強く抱え込んだ。彼女は口が塞がれるような格好になり、声を出すことが出来なくなった。

「アルフォンス」

しばらくして、戸口からルーファスが呼びかけた。もういいだろう、というニュアンスだった

。アルフォンスは腕を緩め、レイチェルを放した。彼女は大きく息をすると、ゆっくりと顔を上げた。深い蒼色の瞳と、半開きの小さな唇で、何か言いたげに目の前の父親を見つめる。

アルフォンスは薄く微笑んだ。彼女の髪を撫で、頬にそっと口づける。そして、無言で背を向けると、ルーファスの元へ戻っていった。

「処刑までは、あと数時間ほどだろう。祈りを捧げながら待つがいい」

ルーファスは非情にそう告げると、結界を張り直し、錆びた扉を閉めた。

部屋は再び暗くなった。

足音が遠ざかったのを確認すると、レイチェルは背中に手を伸ばした。ドレスの隙間に挟まれた何かを取り出し、手のひらに載せる。それは、オレンジ色の宝石らしきものだった。長い鎖が通してあり、首飾りになっているようだ。だが、まるで洗練されておらず、アクセサリと呼ぶには程遠い。

彼女はそれを見つめながら、父親の言葉を反芻していた。

魔導増幅器だ。おまえは生きろ——。

先ほど抱きしめられたときに、そう耳打ちされた。それと同時に、この宝石をドレスに差し込まれた。これで魔導の力を増幅し、結界を破って逃げろ——それがアルフォンスの思惑に違いない。しかし、どこへ逃げろというのだろうか。逃げる場所などどこにもない。自分が大人しく処刑されさえすれば、すべてが終わるのではないか。

でも——。

レイチェルはその宝石を握りしめた。サイファを止めたい。ジークを殺させてはならない。もし、止めることができるのなら、ここを脱出する価値はある。今ならまだ間に合うかもしれない。

彼女は心を決めた。そろりと手を開き、魔導増幅器と思われる結晶を見つめた。だが、そのまま困ったように首を傾げた。肝心の使い方がわからなかったのだ。

増幅器ということは、これに魔導の力を込めればいいのかしら——？

悩んでいる時間はない。とりあえず実行してみることにした。長い鎖を首に掛け、オレンジ色の結晶を両手で包み込み、そっと目を閉じる。魔導の力を高め、結晶に注ぎ込んでいく。

彼女のまわりに緩やかな風が起こった。ドレスが大きく波打ち、長い金髪がさらさらと舞い上がる。

「……えっ?!」

彼女は不意にとまどい声を上げた。突然、結晶が強く激しい光を放ち始めたのだ。それと同時に、体から急激に力が抜けていくのを感じた。立ってられなくなり、その場に膝をつく。危険を感じ、慌てて結晶から手を放した。だが、もう手遅れだった。その結晶は空中に浮かんだまま、直視できないほどの光をほとばらせていた。そのまわりに風が大きく渦巻き始める。

レイチェルの意識は次第に遠のいていった。ゆっくりと後ろに倒れていく。そのとき、彼女の

瞳には、大きな光の柱が映っていた。

「ラウル！！ いるんでしょ！！ ラウルっ！！」

アルティナは医務室で大きな声を張り上げ、奥の部屋へ通じる扉をドンドンと何度も叩いた。

「何だ」

ラウルは思いきり迷惑そうな顔で扉を開けた。午前の授業を終え、昼食をとりに自室へ戻ってきたところだった。まだ何も口にしていない。

「レイチェル来てない？！」

アルティナは切迫した声で尋ねた。

「……なぜそんなことを訊く」

「いるの？ いないの？ どっち？！」

ラウルの胸ぐらを掴み、必死の形相で詰め寄る。ラウルは動じることなく、冷静に答えた。

「いない。いるはずないだろう」

「そう……」

アルティナは途端に勢いを失った。力が抜けたように手を下ろす。

ラウルはため息をつきながら腕を組んだ。

「レイチェルが、どうした」

「いなくなったのよ。子供たちを置いたまま、何も言わずに」

アルティナはうつむいたまま眉根を寄せ、きゅっと下唇を噛んだ。

「いつの話だ」

「一時間くらい前。私がちょっと部屋を空けている間に消えちゃったのよ」

「急ぎの用でもあったのだろう」

そう言いつつも、ラウルは少し気になり始めていた。

アルティナは顔を上げ、怒りを含んだきつい視線を彼に向けた。

「子供たちだけを残していくなんてありえない。用事があるなら、代わりの人を手配していくわ。何人かはすぐ近くに待機してるし、時間なんてかからないもの。それに……」

そこまで言うと、軽く握った右手を口元に添え、難しい顔でうつむいた。

「どうした」

「衛兵が、何か隠している気がするの。反応がぎこちなかった。問いただしても知らないの一点張りだけど……サイファにも連絡がつかないし……嫌な予感がするのよ」

ラウルは無表情のまま考え込んだ。確かに妙だ。彼女の言っていることが真実ならば、レイチェルの身に何かが起こったという推測も十分に成り立つ。

「ねえ、あなたの魔導の力で探せないの？」

アルティナは顔中に不安を広げて尋ねた。だが、ラウルは呆れたような冷ややかな目を返した。

「魔導は超能力とは違う」

「もうっ！ 役立たず！」

「保安に連絡しろ」

「えっ？」

アルティナは目を大きくして聞き返した。

「おまえの付き人で、なおかつラグランジェ本家の人間なら重要人物だ。搜索のために人を出してもらえるだろう」

ラウルは淡々と説明をした。

「そうね、そうする」

アルティナは真剣な顔で頷いた。言われてみれば当たり前のことである。気が動転し、正しい判断力を欠いていたようだ。

「あなたにも経過は知らせるわ。あなたも何かわかったら……」

その話の途中、ラウルは突然はっとして窓際に駆け出した。乱暴にガラス窓を開けながら、身を乗り出す。どこか遠くを見ているようだ。

残されたアルティナは呆気にとられていた。

「どうしたの？」

「魔導力が急激に高まっている」

ラウルは目を離さずに答えた。

「それってどういうこと？」

彼女は首を傾げ、窓際に駆け寄った。ラウルの隣の窓を開け、同じように身を乗り出すと、彼が見つめている方に視線を向ける。だが、そこにあったのは、いつもと変わらない風景だった。

「ラウル、いったい何を見てるわけ？」

訝しげに眉をひそめて問いかけた。

まさに、そのときだった。

まるで答えを示すかのように、遠くで大きな光の柱がほとばしった。爆音とともに天を突き抜けていく。この建物にも僅かに振動が伝わってきた。ただ、木々や建物に阻まれ、それが起こった場所を目にすることは出来なかった。

「今の……」

アルティナは何が起こったのか把握できなかった。だが、とんでもない何かが起こったということは察しがついた。説明を求めるようにラウルに振り向く。彼は深くうつむいていた。窓枠に掛けた手は、小刻みに震えている。

「くっ」

小さく苦悶の声を漏らすと、凄まじい勢いで医務室を飛び出した。

「待って！！」

アルティナは慌てて彼のあとを追った。

「な……何よこれ……」

アルティナは息を切らせながら、呆然と立ち尽くした。目の前には信じがたい光景が広がっていた。町の一部が消えていたのだ。正確に言えば、建物が崩壊していた。数軒分の広さが平ら

になっている。地面には瓦礫が積もり、あたりは埃で煙っていた。周辺を見渡すと、立ち残った家も多くが半壊しているように見受けられる。その光景は、さながら廃墟のようだった。

ラウルは迷うことなく、その中心部へ向かう。アルティナも瓦礫を踏みしめながら、彼についていった。

「レイチェル！！」

アルティナは悲鳴に近い声を上げた。

レイチェルは一段低いところで、仰向けに倒れていた。まわりは瓦礫の山となっていたが、彼女の上には少しの欠片が散らばっているだけだった。ドレスは多少汚れているものの、ほとんど損傷はしていない。首には細い鎖が掛かっていた。その鎖に繋がったオレンジ色の宝石は、首もとの地面に落ちていた。

ラウルは彼女の隣に膝をつき、首筋に手を当てた。脈があることを確認すると、覗き込みながら静かに声を掛けた。

「レイチェル」

頬に手を当て、軽く二度叩く。

彼女は目蓋を震わせながら、うっすらと目を開いた。ラウルの顔を認識すると、何かを伝えようと苦しげに唇を動かした。

「何だ」

ラウルは自分の長い髪を押さえながら、彼女の小さな口元に耳を近づけた。

「サイファを……止め……て……ジークさんを……殺してしま……う……」

彼女は喘ぎながら懸命に言葉を紡いだ。そして、何とかそれを伝えきると、再び意識を失った。

「レイチェル！！」

アルティナは彼女の隣に座り込み、肩に手を掛けて揺すろうとした。だが、ラウルがそれを制止した。

「おそらく衰弱しているだけだろうが、念のため動かさない方がいい。医者を呼んで詳しく診てもらえ」

「医者はあなたでしょう?! ふざけないでよ!!」

アルティナは涙ぐみながら責め立てた。

「私はサイファを止めに行く」

ラウルはそう言って、レイチェルに掛かっていた首飾りをそっと外した。それをぐっと握りしめながら立ち上がる。

「レイチェルを、頼む」

感情を抑えた声だったが、怖いぐらいの迫力があつた。激しい怒りが端々から滲んでいた。

「わかった」

アルティナは涙を拭いながら、強く頷いた。

ラウルは道場へ向かい始めた。サイファたちの本気の魔導戦に耐えられる建物は限られている

。相手がジークであることを考えると、アカデミー内の道場を使うと考えるのが妥当だ。

ふと、後方から微かな話し声が聞こえた。ラウルは足を止め、振り返った。

そこにいたのは三人の男たちだった。足元の何かを囲み、沈痛な面持ちでひそひそと話し合っている。

あいつらは――。

ラウルは切りつけるようなまなざしで睨みつけると、大きな足どりで彼らに近づいていった。

サイファは長い呪文を詠唱していた。突き出された両手に光が満ち溢れていく。彼の姿はそれに飲み込まれるようにして見えなくなった。

大きい――！

ジークは目を見張った。大きさだけではなく、その強さも桁外れだった。これほどのものを実際に目にしたのは初めてである。ぞくりと震えがきた。

しかし、見入っている場合ではない。

我にかえると、自分も呪文を唱え始めた。振り絞るようにして力を注ぎ、前面に結界を張った。まわりすべてを囲むよりも、この方が強い結界を作ることができる。一面だけに力を集中させるためだ。そうでもしないと防ぎきれない。これでも防ぎきれるか自信はない。

奥歯を噛みしめながら、睨みつけるように大きな光球を見つめる。そろそろだろうか――。

タタッ。

不意に横から軽い音が聞こえ、ジークはびくりとして振り向いた。

「えっ?!」

彼が目にしたのは、大きく腕を引き、自分に殴りかかろうとしているサイファだった。考える間もなく、反射的に右腕で防いだ。しかし、それは無謀なことだった。サイファのこぶしには魔導の力が込められていた。そのため、通常の何倍もの破壊力がある。魔導的にはほとんど無防備の状態、まともに受け止められるものではない。ジークの腕からは鈍い音がした。同時に、弾かれるように後ろに倒れ込んだ。

「……ぐっ」

突き刺さるような腕の痛みに、低いうめき声を上げた。体中から汗が流れ出す。

サイファは無表情で近づいてきた。

ジークは背筋に冷たいものが流れるのを感じた。歯を食いしばり、痛みに耐えながら上体を起こす。そして、床に座り込んだまま、自分のまわりに結界を張った。魔導だけでなく、あらゆる物体を遮断する強力なものだ。

しかし、サイファは難なくそれを解除した。

「互いの魔導力に歴然とした差がない場合は、正面から戦っても消耗戦になるだけだ。いかに早く相手を不意打ちにするか、また、その一撃でどれほど決定的なダメージを与えられるかが重要になる」

淡々と語りながら近づいてくる彼を、ジークは呆然と見上げた。吹き出す汗は止まらない。白い床にポタポタと落ちる。それは、痛みのためだけではなく、死を意識した激しい恐怖が、

彼の体から平常を奪っていた。

サイファは再び殴りかかってきた。今度は防がずに避けた。右腕を庇いながら床の上を一回転し、その勢いで立ち上がった。だが、それと同時に脇腹に熱い衝撃を受けた。魔導の白い閃光が直撃したのだ。体が弾き飛ばされ、肩から壁にぶつかった。崩れるように床に倒れ込む。苦悶の表情で体を丸め、喉から絞り出すようなうめき声を上げた。

それでも、彼はあきらめていなかった。そのままの体勢で、呟くように呪文を唱えた。そして、足元まで歩み寄ったサイファに、左手を突き出し、白い光を放った。

不意をついたつもりだった。

だが、サイファには少しの焦りも見られなかった。広げた右手に小さな結界を作り、あっけなく跳ね返した。そして、それはジークの左腕に命中した。

「ぐあっ……」

ジークはつぶれたような声を上げ、顔を引きつらせた。白い床に赤い血が広がった。だが、出血はそれほど多くない。むしろ、骨が砕けたことの方が問題だった。これで両腕とも使えなくなったのである。

サイファは攻撃の手を緩めなかった。短く呪文を唱えると、彼の左右の大腿部に向け、二度、連続して放った。小さなものだったが、彼の自由を奪うには十分だった。

ジークは仰向けのまま、ぐったりとしていた。何とか意識は保っていたが、もはや逃げることも不可能な状態だった。起き上がることすらできない。

サイファはジークの隣に跪いた。無表情で呪文を紡ぐ。白い光が手から溢れ、光の剣へと姿を変えた。両手で柄の部分握ると、先端を下に向け、ジークの胸の上方でまっすぐに構えた。

朦朧としたジークの瞳に、剣の切っ先とサイファが映っている。

「こんなことになってしまって残念だ」

サイファは端正な顔で、ジークを見つめながら言った。少し目を細めると、続けて、静かに言葉を下す。

「君のことは、本当に好きだったよ」

ジークは無反応だった。彼の耳に届いているかどうかもわからなかった。かろうじて目は開いているが、意識が混濁しているように見えた。

サイファは光の剣をわずかに引き上げた。

すまない――。

心の中で詫びると、奥歯を噛みしめ、一気にジークの胸に突き降ろした――はずだった。が、彼の手からは剣がなくなっていた。勢いのついた手だけが、虚しく空を切った。

サイファは眉をひそめた。光の剣が突然、掻き消えた。それと同時に空気が変わった。魔導自体が使えなくなっているようだ。こんなことが出来るのは――。おもむろに立ち上がり、入口に目を向け、腕を組んだ。

ギィ――。

扉が開いた。そこから姿を現したのはラウルだった。サイファは青く冷たい瞳で睨みつけた。

「事情を知れば、おまえも私の行動を支持するはずだ」

「すべては終わった」

ラウルはきっぱりと言った。そして、扉の外から男を引きずり込んだ。胸ぐらを掴み、乱暴に道場の中へ放り込む。それに続いて、二人の男性がおずおずと中へ入ってきた。怯えたようにラウルの顔色を窺っている。

サイファはこの三人の男たちをよく知っていた。ラグランジェ家の者である。そして、おそらく長老会の五人のメンバーのうちの三人だ。

「あと二人いるはずだ」

「死んだ」

ラウルは素っ気なく答えた。

サイファは小さく息を呑んだ。

「おまえがやったのか？」

ラウルはポケットからオレンジ色の宝石がついた首飾りを取り出し、サイファに放り投げた。サイファは片手でそれを受け取ると、手のひらの上で一瞥した。

「魔導増幅器の試作品だな。なぜおまえが持っている」

「持っていたのはレイチェルだ」

「なにっ？」

サイファは眉をひそめた。深刻な表情でうつむく。

「まさか、それでは……」

何かを言いかけたが、はっとして言葉を切り、勢いよくラウルに詰め寄った。

「レイチェルは無事なのか？！」

「魔導を吸い上げられ、かなり衰弱していたが、命に別状はなさそうだ」

ラウルは簡潔に答えた。

サイファは安堵の息をついた。だが、すぐに厳しい表情に戻った。長老たちを鋭く睨みつけ、無造作に掴んだ首飾りを前に突き出す。

「なぜこんなものをレイチェルに渡した」

「知らん！ 私たちではない！」

いちばん前の男が、険しい顔で言い返す。しかし、後ろの男は、難しい顔でうつむいていた。

「アルフォンス、かもしれんな」

ぽつりと落とされたその言葉に、三人の男たちは一様に顔を曇らせた。

「自業自得だな」

ラウルは吐き捨てるように言った。

長老のひとり逆上して振り向いた。ラウルをキッと睨みつけ、激しい非難を浴びせる。

「何が自業自得だ！ すべてはおまえのせいではないか！！ おまえが———」

なっ……そん……な……。

仰向けで倒れたまま放置されていたジークは、薄れゆく意識の中で、彼らの会話を耳にした。

その内容はとても信じがたく、受け入れられるものではなかった。

嘘だ。

何かの間違いだ。

そんなこと、ありえない……。

大声で叫びたい衝動に駆られたが、彼の体は微動さえ叶わなかった。目を開くことも出来ない。せめてもの抵抗なのか、頭の中で懸命に否定を繰り返す。そのまま、意識は暗い闇に沈んでいった。

「嘘だ！！」

ジークは自分の叫び声で目が覚めた。直前まで何かの夢を見ていたはずだが、目を覚ました瞬間、すっと闇に沈み込むように記憶ごと消え去った。嫌な夢だったという感覚だけは残っているが、その内容は思い出せない。

起き上がろうとして、体が動かないことに気がついた。手足が固定されているようだ。右腕にはギプス、左腕には固定器具らしきもの、シーツの下で見えないが、脚にも何かを取り付けられているような感触がある。あたりは妙に消毒くさい。病院なのか？首を動かしてあたりを窺おうとする。

「気分はどうだい？」

突然、降ってきたその声に、ビクリと体がすくんだ。おそろおそろ声の方に振り向く。

そこにいたのはサイファだった。パイプ椅子に腰掛け、にこやかな微笑みをたたえている。

「怯えなくても、もう君を殺そうなんて思っていない。その理由がなくなったからね」

ジークは少しずつ記憶が蘇ってきた。道場でサイファと戦ったこと、手も足も出なかったこと、殺される寸前でラウルに助けられたこと、そして――。

あれは夢でも幻聴でもない。

信じがたい内容だったが、その確信はあった。あのとき、確かに自分の意識はあった。確かにこの耳で聞いた。それが事実なのかはわからない。確かめる術はひとつしかない。しかし――。

ジークはもの言いたげな視線をサイファに送った。

「両手両足とも骨折だよ。当分は入院になるが、完治するそうだ」

サイファはまっすぐに彼を見据えたまま、落ち着いた声で言った。

「そうですか、よかった」

ジークはうわの空だった。だが、自分の声を耳にし、その冷たさに驚いた。取り繕うように、慌てて付け足す。

「レイチェルさんは無事だったんですか」

「ああ……」

サイファの返事は歯切れが悪かった。表情も暗く沈んでいる。あまり無事だったようには思えない。だが、彼女に何かあったのならば、もっと取り乱しているだろう。

ジークは気になったが、何も尋ねられなかった。

「サイファ」

半開きの戸口から、ラウルが姿を見せた。相変わらずの無表情だった。腕を組んだまま、目で呼びつけている。

「眠ってて」

サイファはジークの頬に軽く触れて微笑んだ。その微笑みを残しつつ立ち上がり、颯爽とした足どりで外に出ると、後ろ手で扉を閉めた。

その途端、彼の顔つきは険しくなった。目線を上げ、声をひそめてラウルに尋ねる。

「被害状況は？」

「死者3名、重傷者8名、軽傷者21名」

「そうか……」

サイファは重々しくそれだけを口にした。すぐには二の句が継げなかった。

ラウルは淡々と報告を続ける。

「長老たちの証言によれば、暴発が起こったとき、アルフォンスは自らの結界を張らず、ルーファスの結界を解除したらしい」

「そうだろうな。直撃を受けたとしても、あのふたりが結界を張っていれば、助からないはずがない。アルフォンスは計算ずくでレイチェルに魔導増幅器を渡したのだろう」

サイファは難しい顔で腕を組んだ。

「しかし、なぜそこまで……私がジークを殺せないと思っていたということか……」

考え込みながらつぶやく彼を、ラウルはじっと見つめた。

サイファはその視線に気づき、訝しげに顔を上げた。

「何だ？」

ラウルは一拍おいてから、静かに答える。

「レイチェルは、どのみち処刑される予定だったらしい」

サイファは息を吞んで、大きく目を見開いた。

「……そうだな、確かに彼らにとっては邪魔な存在だ。処刑する理由はあっても、生かす理由はない。私との約束を破ったところで、彼らに何ら不利益はない。そんなことさえ気づかずに、私は彼らの思うままに行動してしまったというわけか」

うつむきながらそう吐き捨てる、自嘲の薄笑いを浮かべた。

「少し休め」

ラウルは無表情で言いつけた。

「心配してくれているのか」

「医者としての命令だ」

サイファは目を伏せ、ふっと息を漏らした。

「何かをしていないと、よけいにおかしくなるよ」

「……勝手にしろ」

ラウルはひと睨みすると、腹立たしげにため息をついた。

サイファはそんな彼を見て、にっこりと微笑んだ。

しかし、それはすぐに真面目な表情へと変わった。隣の病室に険しい目を向ける。扉は閉まっていた。

「レイチェルは？」

声を落として質問する。

「さっき見たときはまだ眠っていた」

ラウルは無愛想に答えた。

サイファは音を立てないように扉を開け、中へ入っていった。部屋は薄暗かった。灯りは消されており、窓にはクリーム色のカーテンが引かれている。そして、中央にはパイプベッドがひとつ置かれていた。

「死者3名、重傷者8名、軽傷者21名」

力のない小さな声が聞こえた。そのベッドに横たわるレイチェルの口から発せられたものだった。

サイファはドキリと心臓が縮み上がった。同時に歩みも止まった。

「起きていたのか」

平静を装って返事をする、何事もなかったかのように再び足を進めた。だが、心の中では、自分の軽率さに舌打ちをしていた。部屋の前でする話ではなかった。もう少し配慮すべきだった。彼女にはまだ告げるつもりはなかったのだ。今は受け入れられる状態ではないはずだ。大丈夫だろうか——ベッドの横に膝き、不安そうに様子を窺う。

彼女は天井を向いたままだった。目を開けてはいたが、焦点は定まっていなかったように見えた。白い肌は、いつもよりさらに白く、まるで血の気がなかった。小さな唇にだけ、微かな赤みが差している。

サイファは柔らかな頬にそっと触れた。ほとんど温かさを感じられない。

「お父さまは？」

レイチェルは彼に目を向けずに尋ねた。

サイファは、一瞬、言葉に詰まった。しかし、すぐに真剣な顔になった。ここまで知られてしまった以上、ごまかすことが良策とは思えない。ゆっくりと語りかけるように口を切った。

「レイチェル、落ち着いて聞いて。アルフォンスは……」

「亡くなったのね」

レイチェルは先回りをしてぽつりと言った。

サイファは眉根を寄せ、うつむいた。

「私の力が足りないばかりにこんなことになってしまった。申しわけない」

噛みしめるように、詫びの言葉を口にする。

レイチェルは首を横に振った。目からは大粒の涙が溢れ出した。

「すべて私のせい。私がお父さまを殺してしまった。たくさんの人を傷つけてしまった」

「違う！ 君は悪くない！ 悪いのは処刑しようとしていた奴らの方だ。それに君の意思じゃない。魔導増幅器のせいで力が暴走してしまっただけだ。君も被害者じゃないか！」

サイファは必死に擁護した。思いつく限りのことを捲し立てる。しかし、彼女を納得させることは出来なかった。むしろ、過敏になっている神経を刺激しただけだった。

「違うの！ 私さえいなければこんなことにならなかった！ すべての原因は私にあるの！ サイファだって知ってるじゃない！！」

激しく感情を昂らせ、震える声で泣き叫ぶ。

「レイチェル、聞いて」

サイファは上から彼女の両肩を押さえるようにして覗き込んだ。

「私がいけないの！！」

レイチェルは切り裂くような悲痛な叫びを上げた。右腕で目を覆い、何度も首を横に振った。流れる涙は止まらない。苦しそうに嗚咽を続ける。

「レイチェル……」

サイファは途方に暮れた。

彼女から否定の言葉を聞いたのは、今日が初めてだった。彼女はいつだって前向きだった。逃げることなくすべてを受け止めてきた。だが、今回のことはあまりに大きすぎた。いや、本当はずっと無理をしていたのかもしれない。そして、その無理を強いたのは自分だったのではないか――。

「ごめんね……」

弱々しく紡がれた謝罪。彼女には届いていないかもしれない。だが、そんなことはどうでもよかった。ただ、口にせずにはいられなかった。温もりを求めるように、彼女の肩に頭を埋めた。

コンコン――。

扉をノックする音が聞こえた。

サイファは返事をしなかった。レイチェルの肩に額をのせたまま、顔さえ上げない。ラウルだろうと思ったが、今は邪魔をされたくなかった。もちろん、泣き続けているレイチェルも、何も答えはしなかった。

だが、扉は開いた。

「レイチェル」

戸口から聞こえた女性の声。

サイファははっとして振り向いた。ラウルではない。そこに立っていたのは、小柄で上品な雰囲気のある婦人だった。薄い金色の髪を後ろでまとめ、深い蒼色の瞳をこちらに向けている。

「アリス……」

サイファは呆然と名をつぶやいた。我にかえると、慌てて立ち上がり、自分の居た場所を譲る。彼女は柔らかい物腰でサイファに頭を下げ、流れるような動作でベッド脇に膝をついた。

レイチェルは彼女の姿を瞳に映すと、怯えたように顔を引きつらせた。

「お母さま、ごめんなさい……私がお父さまを……っ！」

「落ち着きなさい」

威厳と優しさを同時に感じさせる声だった。アリスは柔和に微笑み、人差し指で彼女の頬の涙を拭いた。

レイチェルはしゃくりあげながら、濡れた瞳で頼りなく母親を見つめた。

「アルフォンスはあなたを助けたかった。これが、望んだ結果だったのよ」

アリスは小さな子供に言い聞かせるように、ゆっくりとした口調で語りかけた。

「違う……」

レイチェルは強く目をつむり、小刻みに首を横に振った。

「私には助けてもらう資格も価値もないわ！」

「価値の基準はそれぞれが持っているものよ。アルフォンスにとっては、自分の命を懸ける価値があった。だから、そう行動したの」

アリスはレイチェルの細い手を取り、その上に自分の手を重ねた。

「アルフォンスの想いを無駄にしないで。あなたに幸せに生きてほしいと願っていたのよ」

「だって……」

レイチェルは泣き続けた。声は掠れている。

アリスはぎゅっと手に力を込めた。

「しっかりしなさい。あなたは母親でしょう？ 母親としてしなければならないことがあるはずよ」

「私……アンジェリカにどんな顔をして会えばいいのかわからない……」

レイチェルは顔を歪め、泣きながら息苦しそうに喘ぐ。

「休ませたほうがいい」

背後から抑えた低い声が聞こえた。いつのまにかラウルが部屋に入ってきていた。サイファたちに背を向け、注射の準備をしているようだった。それを片手にベッドへと足を進め、アリスを押しつけるように割り込むと、空いた方の手でパイプ椅子を広げて座った。そして、いまだ呼吸の荒いレイチェルの腕を取り、手際よく鎮静剤を打った。

「出る。今日はもうそっとしておけ」

押し込めた声でそう言うと、睨みつけるような視線をふたりに送り、大きな足取りで病室を出て行った。

レイチェルの嗚咽は、次第に浅くなっていった。薬が効いてきたのだろう。

アリスは言われるままに病室を出た。だが、サイファはまだ離れられなかった。ラウルが座っていたパイプ椅子に、崩れるように腰を下ろした。静かな病室に、ギシ、と耳障りな音が響く。彼女を刺激してしまったかと少し焦ったが、目を閉じたまま反応はなかった。もう眠りに落ちていたようだ。呼吸は規則正しいリズムを刻んでいる。

彼はそれを聞きながら、ぼんやりと彼女を眺めていた。そのとき、ふと、シーツからはみ出している左手に気がついた。白く細い指先は、ベッドから落ちかかっている。彼は、その手をシーツの中に戻そうとした。

だが、不意に何かを思い出したように中断した。ズボンのポケットを探る。そこから取り出したものは、プラチナの指輪だった。結婚指輪として彼女に贈ったものである。ルーファスを経て、再び彼の手に戻ってきたのだ。

彼は、そっと彼女の左手をとった。その仕種は、まるで壊れ物を扱うかのようなようだった。反対の手に持った指輪をゆっくりと近づけ、薬指に嵌めようとする。

だが、寸前で手が止まった。

そのまま、微動だにせず、じっと考え込む。

刻が止まったかのような、長い、長い沈黙――。

それは、小さな吐息によって終わりを告げた。

目をつむり、そっと手を引くと、指輪をポケットに戻した。

サイファは病室を出た。アリスはまだ廊下にいた。窓枠に手を掛け、ガラス越しに夕空を仰いでいる。先ほどまでは眩しいほどの茜色だったが、今はもう大部分が濃紺に侵食されていた。地平近くでわずかに光が放たれているが、それもあと数分で消えてしまうだろう。

「アリス、私の力不足だ。申しわけない」

サイファは背後から声を掛けた。うなだれるように頭を下げる。

「どうしてあなたが謝るの？」

アリスは片手を離して振り返った。

「謝らなければならないのは私たちの方だわ」

「謝らないでください」

サイファは硬い声で言った。彼女を気遣っているわけではない。ただの我が儘だった。謝られてしまったら、今まで積み上げてきたものがすべて崩れ去ってしまう、そんな気がした。

アリスはもの悲しげに微笑んだ。

「いつでも、どんなときでも、あなたは全力でレイチェルを守ってくれた。言葉にはしようのないくらい、深く、深く感謝しているわ。アルフォンスも同じ思いよ」

優しく穏やかな音色で、包み込むように言う。

だが、サイファは険しい表情で眉を寄せた。一步、二歩と足を進めると、窓枠に手を掛け、紺色に覆われた空を見上げた。いくつかの星が薄く煌いた。

「私はただ、レイチェルを手放したくなかっただけなんだ。それが彼女の望んでいたことかどうかはわからない」

「めずらしく弱気ね」

アリスはくすりと笑って、彼の頭を手の甲で軽く叩いた。

「そういうときもありますよ」

サイファは穏やかにそう答えると、にっこりと笑顔を返した。

そのとき、地平を照らす最後の光は、世界の裏側に吸い込まれるようにすっと消え去った。

サイファはジークの病室に戻った。

ジークは起きていた。ベッドに横たわったまま、気遣わしげなまなざしをサイファに送る。

「レイチェルさん、大丈夫ですか」

「聞こえていたんだね」

サイファはそう言いながら、パイプ椅子に腰掛けた。驚きはしなかった。隣室であれだけ泣き叫べば、聞く気がなくとも耳に入るだろう。

「今は薬で眠っているが、どうかな……心の傷が癒えるには時間がかかるだろうな……」

それは、ジークに答えているというより、ほとんど独り言だった。

ジークは、考え込むサイファをじっと見つめた。そのまましばらく逡巡していたが、口元を引

き締めると、意を決して切り出した。

「サイファさん、あの……」

「ジーク！！」

彼を遮った高い声。それと同時に、叩きつけるように扉が開かれる。そこから飛び込んできたのは、血相を変えたアンジェリカだった。ベッドの上のジークを目にするなり、小さく息を呑んだ。

「……ひどい……」

そうつぶやいて絶句した。包帯やギプスで固定された彼の姿は、彼女にとってあまりに痛々しいものだった。

少し遅れて、リックも駆け込んできた。苦しそうに息を切らせている。ようやく追いついたという感じだ。彼もジークの姿に言葉を失った。荒い息のまま、呆然と立ちつくした。

「事故だなんて嘘！！お父さんが連れて行ったすぐあとなのよ？何があったの？！」

アンジェリカはサイファに振り向くと、責めるように激しく詰問した。

サイファは両膝に手をのせ、視線を落としていた。しかし、ジークにちらりと目を向けると、おもむろに椅子から立ち上がり、まっすぐ彼女に向き直った。

「私が、ジークを殺そうとした」

「えっ……？」

アンジェリカは目を大きく見開いた。その漆黒の瞳には、サイファの真剣な顔が映っていた。

「レイチェルが人質にとられてしまってね」

「え？人質……？人質ってどういうこと？お母さんは無事なの？！」

縋るようにサイファの服をぎゅっと掴み、混乱した面持ちで見上げる。

「ああ、なんともないよ。隣の部屋で眠っている」

サイファは安心させるように、彼女の肩に手をのせて言った。

アンジェリカはほっと胸を撫で下ろした。

「でも、いったい何が……」

「ここで簡単に説明できることではないんだ。家に帰ってから話すよ」

サイファは穏やかに、しかし、どこか寂しげに微笑んだ。

アンジェリカはうつむいて唇を噛みしめた。曇り顔でジークに振り向き、ベッドの横に跪く。

「ごめんなさい、ジーク。本当に……なんて言ったらいいか……」

祈るように両手を組み合わせ、泣きそうにジークを見つめた。理由があったとはいえ、自分の父親が彼を殺そうとしたのである。簡単に許されることではないはずだ。詳しい事情はまだわからないが、それでもとりあえず謝らなければと思った。

ジークは柔らかく微笑んだ。

「なんて顔してんだよ。たいしたことねえって。だいたいなんでおまえが謝るんだよ」

「私のせいだし、お父さんがやったことだし」

アンジェリカは沈んだ声で訥々と言う。

「おまえのせいじゃねえよ。俺が勝手にやったことだ」

「でも、私のためなんだもの！」

「俺自身のためだ」

ジークは毅然と言い放つと、ふっと口元を緩めた。そして、優しい目で彼女を見つめる。

「良かった、もういちどおまえに会えて」

「ジーク……」

アンジェリカは何ともいえない複雑な表情で目を伏せた。

サイファは後ろから彼女の両肩に手をのせた。

「アンジェリカ、今日はこのくらいに」

「……お母さんのところへ行ってもいい？」

アンジェリカは下を向いたままで尋ねた。

「眠っているから起こさないようにね」

サイファは優しい口調で答えた。ラウルからはそっとしておけと言われたが、眠っている間であれば問題ないだろうと考えた。いくらなんでも会うなというのは酷だろう。

アンジェリカはこくりと頷いた。そして、ジークに目を向けると、ぎこちなく笑いかけた。

「ジーク、あしたまた来るわ」

「ああ」

ジークは笑って手を上げようとしたが、動かせる状態ではなかった。腕が固定されていることを忘れていた。もどかしさに苛立ちが募る。

「ジーク、じゃあね」

リックも声を掛けた。アンジェリカの背後で、温厚な微笑みを浮かべながら、軽く右手を上げた。

「ん？ あ、ああ」

ジークはしどろもどろの返事をした。彼の存在をすっかり忘れていた。このとき初めてしゃべったのではないだろうか。自分やサイファ、アンジェリカに遠慮していたのだろう。少し、申しわけないような気持ちになった。

アンジェリカとリックは連れ立って部屋を出て行った。すぐに、扉を開く音が聞こえる。隣のレイチェルの部屋へ入っていったようだ。しばらくして、再び扉が開閉された。長い時間ではなかった。ふたつの足音は、空虚な音を響かせながら遠ざかっていく。

「君の怪我は、表向きは魔導使用中の事故ということになっている」

サイファは唐突に切り出した。アンジェリカたちが離れるのを待っていたのだろう。

「そうみたいですね」

ジークは素っ気なく返事をした。それは、アンジェリカが「事故」と口にしたときに悟ったことだった。サイファならそのくらいのことはやるだろう。驚くことではない。だが、やはりどこかで残念に思っている自分がいた。

「私を告訴するか？ 君にはその権利がある」

「告訴しても、揉み消しますよね」

「さあ、どうかな」

サイファは口元に笑みを浮かべた。

ジークには彼の考えていることが読めなかった。本当に揉み消すつもりなのだろうか。だとしたら、なぜこんな話をするのだろうか。その笑みの意味は何なのだろうか。

——考えても仕方ない。

小さく息をつき、目を細めて天井を見つめる。

「事故でいいです。別にサイファさんのことを恨んでません。ああするしかなかったんです。それに、これ以上、アンジェリカを苦しませるようなことをしたくないですし」

あきらめたような拗ねたような口調。だが、言った内容は本心だった。

サイファは少し寂しげに微笑んだ。

「アンジェリカにはすべてを話すよ」

「俺にも話してください」

ジークはじっとサイファを見つめた。強い、真剣なまなざしだった。

「そうだね、君はどこまで知っていたかな」

「サイファさんはルーファスに脅されていたんですよね」

「ああ、レイチェルを無事に返してほしいければ、君を始末しろと。だが……」

サイファはわずかに眉を寄せた。

「彼らはどちらにしてもレイチェルを殺すつもりだったそうだ」

「えっ？」

ジークは目を丸くした。

「レイチェルの処刑は決定事項だったんだ。私も欺かれていたということだ」

サイファは淡々とそう言うと、疲れたように小さくため息をついた。

「君の言うとおりにすべきだったな。ふたりで救出に向かえば良かったんだ」

「サイファさん……」

冷静な声音の中に、彼のやるせなさを感じ取り、ジークは胸が締めつけられた。

サイファはすぐに元の引き締まった表情に戻った。

「彼女の父親も長老会のメンバーのひとりでね。娘を助け出そうと、魔導増幅器の試作品を、密かに彼女に渡したらしい」

「魔導増幅器？」

初めて聞く名称だった。ジークは思わず訊き返す。

サイファはポケットから首飾りを取り出した。長めの鎖に、オレンジ色の結晶がついている。それを、ジークの眼前に掲げた。

「君がアルバイトをしていたあの研究所で作っていたものだ。試作品でまだ完成はしていない。だが、アルフォンスなら容易に手に入れられただろう。以前、あそこで所長を務めたことがあったからね」

ジークは研究所の立入禁止区域のことを思い出していた。一度だけ、サイファに連れられて見

学したことがある。レベルS区域で見たものは、巨大な円筒に入ったオレンジ色の液体——エネルギー増幅素子だった。その結晶化を研究をしているとも聞いた。おそらくその技術を使ったものなのだろう。

サイファは固い表情で話を続けた。

「彼女はそれを使って結界を破ろうとした。だが、この増幅器に誘発され、彼女の力が暴発してしまったんだ。あたりの家々は消し飛び、死者3名、重傷者8名、軽傷者21名の惨事となった。ルーファスと彼女の父親も亡くなった」

「……………」

ジークは愕然とした。何も言葉にならなかった。

サイファは首飾りを軽く投げ上げ、薙ぐように掴んだ。

「不幸中の幸いというか、この魔導増幅器が出来でね。ある一定以上の力が流入した場合、増幅機構が上手く働かず、むしろ減衰してしまうようだ。だから、これだけの被害ですんだといえる」

「え……？ 減衰、してたんですか？ それで…？」

ジークは声を詰まらせながら尋ねた。

サイファは手の中のものをポケットに戻しながら、小さく笑った。

「レイチェルの魔導の潜在能力は、私などまるで及ばない。ただ、彼女は魔導が好きではなくてね。あまり訓練をしてこなかったんだよ。そのため、力のコントロールもままならない。普段は無意識のうちに力を封印していたようだが、魔導増幅器の作用で無理やり引き出されてしまったのだな」

そこまで言うと、ポケットから手を出し、再びジークに視線を戻した。

「ルーファスは暴発が起こる寸前に気づき、結界を張ったが、彼女の父親がそれを解除したそう。ルーファスが生きている限り、娘の未来はないと思ったのだろう。レイチェルを助けるために、自分の命を犠牲にして、ルーファスを道連れにしたんだ」

ジークは息をすることも忘れ、聞き入っていた。

「ラウルは爆発に気づいて駆けつけた。そこに倒れていたレイチェルから私のことを聞き、道場に止めに来たというわけだ」

サイファは一気に言い切った。一呼吸おいてから、静かに付け加える。

「これで、すべてだ」

だが、ジークの方は終わっていなかった。サイファの青い瞳を挑戦的に見つめる。

「……まだ、ありますよね」

「何かな？」

サイファは前屈みになり、ジークを覗き込みながら尋ねた。

ジークは顔の近さにどぎまぎした。一瞬、言おうとしていたことを忘れそうになった。

「えっと……」

そう言いながら、思考を手練り寄せる。

「道場で、長老のひとりが言ったことは、本当なんですか？ ラウルが、あの……」

そこから後が続かなかった。尋ねる決意は固めたつもりだったが、実際に口にするには躊躇いがあった。言いよどんだまま、唇を噛みしめる。

だが、サイファにはそれだけで十分に通じた。大きく目を見開いてジークを見たのち、小さく息をついた。

「聞いていたのか。てっきり気を失っているものとばかり思っていたよ」

「じゃあ……」

ジークの鼓動が早くなった。

「本当だよ」

サイファはさらりと言った。

ジークは泣きそうに顔を歪ませた。サイファを直視できず、わずかに視線をそらす。

「アンジェリカは、知ってるんですか」

震える声で質問をする。

「いや、知らなくていいことだ。君も黙っていてほしい」

サイファの答えは当然といえるかもしれない。ジークは微かにこくりと頷いた。彼が秘密にしたがる心情は痛いくらいに理解できる。そして、彼女自身のためにも、それが最善なのかもしれない。

「サイファさんは、いつから知ってたんですか」

「最初から。あの子が生まれる前からだね」

端整な表情を崩さず、冷静に答える。

「それで、どうして……」

ジークはそこまで言いかけて、はっと口をつぐんだ。投げかけようとした質問の残酷さに気がついたのだ。気まずそうに目を泳がせる。

だが、サイファは逃げることなく真摯に答えた。

「ただ、幸せになる選択をただけだよ。それが最良で最善の選択だと確信したんだ。間違っていたと思ったことは一度もない」

「……つらいと思ったことは、ないんですか」

「ない、といえば嘘になるかな。でも、それ以上に幸せだったよ」

サイファはそう言って、にっこりと笑った。

ジークは何かをこらえるように頬を震わせていたが、彼の笑顔を目にすると、突然、ぼろぼろと涙をこぼした。

サイファはぎょっとした。

「どうして君が泣くかな」

困ったように笑って肩をすくめた。

ジークは自分でも理由がよくわからなかった。だが、どうしても止められなかった。体の不自由なこの状態では、顔を隠すこともできない。止めどなく溢れる涙は、頬を濡らし、耳を濡らし、髪を濡らし、枕をも濡らしていく。

「まいったな」

苦笑いしながら自らの額に手をやったサイファには、その言葉どおり、困惑がありありと見てとれた。

ジークは気恥ずかしさと申しわけなさを感じながらも、ただ、しゃくりあげながら泣き続けるだけだった。

「涙も拭えない状態で泣くものじゃないよ」

サイファはハンカチを取り出し、彼の目尻にあてがった。そっと優しく涙を拭う。薄いハンカチ越しに伝わる温度は、とてもあたたかかった。少しだけ、一緒に泣きたいような気持ちになった。

「ホントに何なの?! この寒さっ!!」

レイラはソファで膝を抱え、頭から毛布を被り、歯を鳴らしながら震えていた。

「だから帰れって言っただろ」

ジークはベッドの上から、呆れたような声を投げた。彼にも数枚の毛布が上乘せされている。寒いのは彼も同じだったが、情けない母親の姿を見ていたら、寒いと言葉にするのもバカらしくなった。

「帰っても寒いのは変わらないわよ!」

レイラは嘔みつくように言った。

ジークはため息をつきながら、窓の外に目を向けた。鈍色の空から、絶え間なく白いものが舞い降りてくる。体が起こせないで空しか見えないが、街中、白くなっているのだろうと思った。薄暗いにもかかわらず、どことなく眩しさを感じる。白という色がなせる業に違いない。

ここは負傷したジークが搬送された医療施設である。王宮の敷地内にあるらしい。母親のレイラは、昨晚、ここへやってきた。ジークが入院したとの連絡を受け、取るものも取りあえず、バイクを飛ばしたのだ。

サイファは彼女に事の顛末を説明した。ジークは事故ということにしてもいいと思ったが、サイファは正直に話すことを選んだ。弁解も正当化もせず、淡々と事実のみを告げていた。一部の事柄については、敢えて触れなかったが、それは保身とは無関係のものである。

レイラは黙って聞いていた。感情を抑えるように、口を固く結んでいた。

サイファが話し終わると、彼女は無言で目を伏せた。じっと何かを考え込んでいるようだった。そして、ふいに顔を上げると、大きく腕を振り上げ、彼の頬を平手で打った。

バチンと大きな音がした。

サイファの顔は、横向きのまま動きを止めた。打たれた左頬は、じわりと赤みを増していった。

「これで、許すわ」

レイラは嘔みしめるように言った。

「死んでたらどうしたかわからないけど、生きてるし、ちゃんと治るっていうし……」

微かに震える涙声で続ける。しかし、表情はしっかりとしていた。わずかに潤んだ瞳でサイファを見つめ、少し疲れたように微笑した。

「あなたも、つらかったわね」

いたわるような、優しい口調だった。

サイファは黙って深く頭を下げた。長い間、そうしていた。ジークには、彼の背中が泣いているように見えた。

その後、サイファは、早く帰るようにとレイラに忠告した。次第に冷え込み、雪が降ってくるだろう、というのがその理由だった。

つまり、この国を守る結界に異常があるということだ。

この国は一年を通して過ごしやすく、それほど大きな気温の変動はない。氷点下にまでなるのは、結界に何らかの異常があるときのみである。滅多に起こることではない。通常、人の一生のうちで一度あるかないかだろう。

だが、前回からわずか三年で、今回の異常が起きた。また、今までのほとんどは四大結界師の死亡、すなわち結界のバランスを欠いたことに起因するものだったが、今回はもっと直接的なことが原因である。レイチェルの魔導の暴発で、結界が損傷したのだ。天高く走った魔導の力が、結界を突き抜けたらしい。

このようなことは今までになかった。そのため、まだ影響の予測はついていない。

ジークは慄然とした。その威力をあらためて思い知らされた。レイチェルにそんな魔導力があるとは信じがたい気持ちだった。小柄な彼女の柔らかい微笑みと、国防をも脅かすほどの強大な魔導力が、どうしても結びつかなかった。

だが、レイラには実感のない話だったようだ。きちんと理解したのは、寒くなり雪が降ることだけである。いや、それだけで十分だった。帰らなければならない理由は伝わったのだ。ジークも同様に、帰ることを勧めた。ここにいても、できることは何もない。

しかし、彼女はふたりの忠告を聞こうとはしなかった。今晚くらいはジークのそばにいたいと言い張った。それは、母親として当然の思いかもしれない。

サイファは強くは言わなかった。そもそも、強く言える立場にはなかった。彼女のために毛布とソファを用意すると、ふたりを残して部屋を出た。

そして、翌朝。彼が言ったとおりのこの寒さ、というわけである。

「もう帰った方がいいんじゃないかねえのか？ そのうちホントに帰れなくなるぞ」

途切れる気配のない雪を見ながら、ジークは心配そうに言った。

「うーん、そうね……あんたも元気そうだし……」

レイラは窓の外を眺め、それからジークの様子を窺った。体に重傷を負っているものの、表情や声の調子は普段と少しも変わらない。むしろ、何かすっきりしているように思える。心にまで傷を負ったわけではなさそうだ。

「わかった、今日は帰るわ」

ソファから立ち上がり、被っていた毛布をそこに置く。途端に寒さが沁み入ってきた。ゾクッと身震いする。だが、毛布を被ったまま帰るわけにもいかない。帰るまでの我慢だ。動いてさえいれば、なんとか大丈夫だろうと思った。

「また来るわね」

「無理して来なくてもいいからな」

一人前に気遣いする息子を見て、ふとレイラの悪戯心が顔を出した。ニッと笑って振り向く。

「アンジェリカとふたりっきりになれないから？」

「ばっ……バカ言ってんじゃねえよ！」

ジークは顔を真っ赤にして反論した。本当にそんなつもりはなかったのだが、これではまるで凶星を指されたかのようなようだ。ますます焦ってしまう。しかし、おかしように声を殺して笑う母親を見て、からかわれているのだと悟った。相手の期待どおりの反応をしてしまう自分が恨めしい。

「まったく、早く帰れよ！ バイクは押してけよな」

「わかってるって」

レイラはからりと笑って、ひらひらと手を振った。そして、寒そうに肩をすくませながら、小走りで部屋を出て行った。

軽い足音が遠ざかり、あたりは急に静かになった。不安になるほどの静けさだった。この世界にひとり取り残されたかのような錯覚すら覚える。ありえないことはわかっている。だが、頭とは別のところで感情が生まれていた。これほど臆病になったことは、かつてなかった。

ガラガラガラ——。

耳障りな濁った音によって、静寂は打ち破られた。

扉が開き、そこからラウルが入ってきた。普段とまったく変わりのない格好だった。右手には小さな薬箱を下げている。

ジークはほっと安堵した。知った人間を目にして、根拠のない不安はたちまち消え去った。ラウルを見て嬉しく思ったのは、これが初めてかもしれない。

「おまえ、寒くねえのか？」

「耐えられないほどではない」

ラウルは素っ気なく答えると、ベッド脇にパイプ椅子を広げて座った。ジークの左腕を毛布から出し、手早く固定具と包帯を外す。左腕は、骨折だけでなく、裂傷も負っていた。その部分の消毒を行い、薬の塗布をする。あいかわらずの手際良さだ。

ジークは彼の横顔をじっと見つめた。

——こいつが……。

きのうの話が無表情な横顔に重なる。信じたくなくても、それが真実である。それは受け止めている。しかし、いったいなぜ、いったい何が——そんなことを考えているうち、次第に苛立ちが募っていった。

「聞いたぜ、本当の話」

ジークは重々しく口を切った。どうしても黙っていられなくなった。

ラウルは無言のままだった。新しい包帯を巻き、固定具を取りつけていく。焦った様子は見られない。その余裕の態度が、ジークにはたまらなく腹立たしかった。

「言い訳のひとつでもしてみろよ」

睨みつけながら、責めるように言う。

しかし、ラウルがしおらしさを見せることはなかった。凍りつくようなまなざしで、冷たくじろりと睨み返す。

「何を聞いたかは知らんが、少なくともおまえに言い訳をすることなど何もない」

その声は、静かではあったが、凄まじい迫力を秘めていた。

一瞬、ジークはたじろいだ。だが、引くつもりはなかった。臆することなく強気に言い返す。

「俺は無関係だっていうのか？」

「関わるなと忠告したはずだ」

逃げ口上としか思えないその言葉に、カッと頭に血がのぼる。

「答えになってねえよ！」

「無関係だ。おまえは他人だ」

ラウルは厳然と答えた。

ジークは面食らった。あまりにもはっきりと言われ、返す言葉をなくしてしまった。言われてみれば、確かに他人だ。自分が立ち入っていい問題ではないかもしれないと思えてきた。ぐっと唇を噛みしめる。

ラウルは包帯や薬を片付け始めた。

「私はこれからアカデミーへ行く。何かあったら看護師を呼べ」

「アカデミー……」

ジークは忘れていた現実を思い出した。

「俺、卒業できるのかな」

顔を曇らせ、弱気につぶやく。彼にとっては重要な問題だった。卒業できなければ、せっかく決まった就職もふいになってしまう。

「卒業論文の評価次第だ」

ラウルは振り向きもせず、無愛想に答えた。

もうすぐアカデミーの授業は終了し、その後、各自卒業論文に取りかかる予定になっている。そのことはジークも聞いていた。だが――。

「この腕じゃ、書けねえよな……」

「特別扱いはしない」

「だろうな」

ジークはため息まじりに同調した。ラウルならそう言うだろうと思った。期待など微塵も持っていなかったはずだが、それを聞いた途端、闇に閉ざされたような絶望的な気持ちになった。

「その腕を折った張本人に何とかしてもらえ」

ラウルは薬箱の蓋をバタンと閉めた。

ジークは怪訝に片眉をしかめる。

「何とかって、何だよ」

「自分で考えろ」

ラウルは突き放すようにそう言うと、椅子から立ち上がった。長い焦茶色の髪が大きく揺れた

。

「待てよ！」

ジークは慌てて呼び止めた。

ラウルはわずかに振り向き、睨むように彼を見下ろした。

「外……見てえんだけど……」

ジークは遠慮がちに言った。少し恥ずかしそうに、薄く耳元を赤らめる。

「体に障る」

ラウルは素気無くはねつけた。

だが、ジークはあきらめなかった。

「構わねえ。それでも見ておきたいんだ」

起こせない体で首だけを伸ばし、必死に食らいつく。

ラウルは、ジークと視線を絡めた。その瞳を探るように見つめる。強く率直なまなざし。簡単に引きそうもない。あきらめたように小さくため息をつく、面倒くさそうに薬箱を置いた。ベッドの半分に角度をつけて固定し、ジークの上半身を起こしてやる。

「す、げえ……」

ジークの視界に、一面の銀世界が広がった。その眩しさに、思わず目を細める。主要な道路以外はほとんど白で覆われているといっても過言ではない。その上に、さらに粉雪が降り積もっていく。まるで、世界を塗り替えようとしているようだ。美しいような、恐ろしいような光景——

「脆弱な世界だな」

思いがけず、ラウルが口を開いた。背筋を伸ばして腕を組み、まっすぐ外を見ている。

「人の手で創り出したものは、人の手でしか維持できない」

「……俺に、守れるかな」

ジークは外を見つめたまま、ぽつりと言った。

ラウルは冷ややかな視線を彼に流した。

「世界を守る前に、すべきことがあるだろう」

「……ああ」

ジークは白い息を吐きながら、天井に向き直った。

アンジェリカは純白の平原を眺めていた。

きのうまでは家が立ち並んでいたはずだが、今は大きく視界が開けている。瓦礫も土台も地面も、すべてが白い雪に覆い隠され、そこに何かあるのかわからない。目に入るのは、白くなめらかに波打つ表面だけである。その周囲には、立入禁止と書かれた黄色のテープが緩やかに渡されていた。

——これは、私のせいで起こったこと。

眉根を寄せ、顔を大きく上げる。灰色の空から、絶え間なく降り注ぐ白い雪。それを眺めると、空に吸い込まれそうになる。ふわふわの綿雪が、頬をくすぐるようにそっと舞い降りた。体温がそれを融かし、雫へと変えていく。

サイファから何が起こったかを聞いた。彼は、アンジェリカには責任はないときっぱり断言した。レイチェルに聞いても、ジークに聞いても、きっと同じことを言うだろう。しかし、アンジェリカには、そうは思えなかった。

——私の存在が起こしたこと。

まぶたを震わせながら目を閉じる。

呪われた子、不吉な子、穢れた血——頭の中でたくさんの声が鳴り響く。畳み込むように追い詰めてくる。忘れていた、忘れようとしていた闇が押し寄せてきた。さらわれ、呑み込まれそうになる。息ができない。

——怖い、助けて、誰か……！

はっとして目を開いた。その瞳に映ったものは、暗い闇ではなく、白い世界。そのまぶしさに、一瞬、目まいを覚えた。胸に手を当て、深呼吸する。

目を閉じても開いても、つらいものしか見えない。

ふいに、頬を伝って透明な雫が落ちた。涙ではなく、融けた雪だった。その道筋を手の甲でそっと拭う。

これから、私、どうやって生きていけばいいの？

生きていていいの？

生きていかなければならないの？

アンジェリカは、もういちど、鉛色の空を仰いだ。苦しげに目を細める。そして、汚れのない雪を踏みしめながら、その場をあとにした。

「ジーク」

アンジェリカは、半開きの扉からひょっこり顔を覗かせて、ベッドの上の彼に声を掛けた。しかし、返事はない。

「ジーク、寝てるの？」

もういちど声を掛けた。やはり返事はない。不安そうに顔を曇らせながら、電灯が消されたままの薄暗い部屋へ入っていった。

彼は眠っていた。真上を向いたまま目を閉じ、微かな寝息を立てている。

アンジェリカはほっと胸を撫で下ろした。ベッド脇に立てかけてあったパイプ椅子を広げて座る。

——ジークも、ひどい目にあわせてしまったわね。

そう心の中でつぶやきながら、安らかな寝顔を見つめた。

彼は自分自身のためだと言った。きっと本気でそう思っているのだろう。だが、そもそも自分とジークが出会っていなければ、こんなことにはならなかったはずだ。自分の存在がすべての元凶なのだ。

——本当に、どうしたらいいの？ 私……。

昨夜から一睡もせずに考えていた。しかし、何の結論も導き出せなかった。同じことをぐるぐると悩み続けるだけである。頭も心も、すでに疲弊しきっていた。

アンジェリカは大きく息をつくとき、ベッドの端に、こてん、と倒れ込むように頭をのせた。毛布があたたかく心地いい。凍えた頬が、混乱した頭が、ゆっくりと融けていくように感じる。そのまま、包み込まれるように眠りに落ちていった。

窓からの雪明かりが、ふたりをほのかに照らしている。

しかし、その光は、ふたりを温めてはくれない。

部屋は冷たさを増していた。

ジークは目を覚ました。象牙色の天井をぼんやりと目に映す。考え事をしているうちに、いつのまにか眠ってしまったらしい。昨夜、ほとんど眠れなかったせいかもしれない。

ふと、毛布が引っ張られているように感じ、何気なく横を見た。

「えっ……?!」

自分の肩のすぐ横にあったのは、アンジェリカの頭だった。ここから見えるのは後頭部だけで、顔までは見られないが、間違いなく彼女であると断言できる。小さな背中が規則正しく上下していた。どうやら眠っているようだ。

ジークは申しわけなく思った。自分が寝ていたせいで、待ちくたびれてしまったのだろう。声を掛けようか迷ったが、起こすのも悪いような気がしてやめた。きっと彼女も昨夜は眠れなかったに違いない。

しかし、この状態のままというのも落ち着かない。無性にそわそわする。少し動くだけで触れるくらい近いところに彼女が眠っているのだ。おまけに、微かな甘い匂いが鼻をくすぐってくる。なのに、自分はまるで身動きがとれない。これでは逃れることもできない。ただ、心拍を早くしたまま、状況が変わるのを待つだけだった。

いくつもの白い結晶が、窓の外を緩やかに通り過ぎる。

まだ止む気配はない。

「……ん……?」

アンジェリカは小さく声を漏らし、目を開いた。ぼんやりと顔を上げる。一瞬、自分がどこにいるのかわからなかった。あたりを見まわし、ジークの姿を目にすると、ようやくそれを思い出した。はっとして、少し慌てたように口を開く。

「あ、ごめんなさい、いつのまにか寝てしまって……」

「いや、俺の方こそ悪かった。せっかく来てくれたのに、寝てみたいで」

ジークは胸の奥がふわりと温かくなった。彼女とこんな何気ない会話をしたのは、ずいぶん久しぶりのように感じた。

アンジェリカは小さく肩をすくめて笑った。

「寒いだろ。この毛布、掛けてろよ」

ジークは自分の上にのっている毛布を、顎で指し示した。彼女の格好は、普段と比べればかなりの厚着だが、それでもまだ寒そうに見えた。

「大丈夫、平気よ」

「俺は暑いくらいだから遠慮すんな」

「本当に大丈夫、寒くないから」

アンジェリカはにっこりと微笑み、下がっていたジークの毛布を掛け直した。

「ジーク、何か私に出来ることはある？」

「いてくれるだけでいいよ」

それは、ジークの本音だった。そして、一番の願いだった。それを阻むものはもう何もない。少なくとも、このときのジークにはそう思えた。

アンジェリカは少しとまどったように、薄くはにかんだ。

ふたりの間に沈黙が流れた。

ふたりそれぞれが考えに耽っていた。

外は、白い世界が作る、深い静寂。

雪の積もりゆく音さえ聞こえそうだ。

「.....なあ」

ジークは天井を見つめて切り出した。そして、大きく深呼吸をすると、ゆっくりとアンジェリカに顔を向けた。とても真剣な顔だった。まっすぐ射抜くように彼女の瞳を見ている。

彼女はきょとんととして、小首を傾げた。

「なに？」

「俺は、おまえが好きだ」

ジークは目をそらさず、はっきりと言った。この気持ちは、何を言われても、どんな事実を聞かされても、揺らぐことはなかった。これからも決して変わることはない——その自信があった。

「.....うん」

アンジェリカは小さく相槌を打った。

「だから、伝えておきたいことがある。こんな動けない状態でってのも情けないけど.....どうしても、今、伝えておきたいんだ」

ジークは言葉を選びながら、ゆっくりと続けた。穏やかだが、少し固い声だった。微かな緊張が、その声から伝わってくる。

「返事は、今じゃなくていい。ただ、聞いてくれればそれでいい」

アンジェリカは訝しげに顔を曇らせた。彼は何を言おうとしているのだろう。返事とは何なのだろう。話が見えない。落ち着かない。次第に鼓動が早くなる。

ジークは真摯に彼女を見つめた。

「俺は、おまえを幸せにしたい」

「えっ？」

アンジェリカは大きく目を見開いた。

ジークはさらに畳み掛ける。

「ずっと一緒に生きていきたいと思ってる」

「あ……」

アンジェリカは微かな声を漏らすと、口をきゅっと結び、うつむいた。黒髪がはらりと頬にかかる。手は膝の上に置いたままだった。スカートを掻き寄せるように掴む。薄い布地に、ひび割れのような深いしわが、放射状にいくつも走った。

ジークは彼女の変化に気づく余裕などなかった。懸命に話を続ける。

「だから、今すぐってわけじゃねえけど、そのうち、おまえにはラグランジェ家を出てほしいんだ」

そこでいったん切り、小さく呼吸をする。

「そして、俺と……」

「やめて」

震える小さな声。

「え？」

予想外の反応に、ジークはうろたえた。

そのとき、初めて彼女の異変に気がついた。声だけではない。肩も腕も震えていた。そして、顔を隠すように深くうつむいている。

「そんなの、駄目、無理……」

さらに小さく、消え入りそうな声。

「なん、で……」

ジークは混乱した頭で、ようやくそれだけの言葉を口にした。

彼女は何も答えなかった。

「アンジェリカ……？」

とまどいがちに名前を呼びかける。

それでも返事はなかった。

ジークは焦った。頭は燃えるように熱く、背筋は凍りつくように冷たくなった。

「アンジェリカ、顔を上げろ、俺を見ろ」

「ごめんなさい」

それが最後の言葉だった。

アンジェリカは口元を押さえて立ち上がり、彼には目を向けず、逃げるように部屋から駆け出していった。

「アンジェリカ！！」

ジークは声の限りに叫んだ。しかし、彼女の足は止まらなかった。この体では追いかけること

も出来ない。ただ、離れていく足音を聞くしかなかった。

——どうして……。

ジークは愕然とした。いったい何が彼女を傷つけたのかわからなかった。混沌とした頭で必死に考えようとする。だが、まるで思考が働かない。はっきりしない後悔と自責の念に、押しつぶされそうになっていた。

窓の外では、いまだ雪が降りしきっていた。

木の枝にのしかかった冷たい綿帽子が、ばさりと音を立てて崩れ落ちた。

89. 伸ばした手の先

ユールベルは机に頬杖をつき、窓越しに空を見上げた。午前中よりも雲が厚くなっているような気がする。傘を持ってこなかったが、帰るまでもつだろうか——ぼんやりとそんな心配をした。

授業がつまらないわけではなかったが、丁寧すぎる担任の解説は、彼女をときどき退屈にさせた。もっとも、レオナルドはそれでもついていくのがやっとなのである。担任の進め方が間違っているわけではないのだろう。

ガラガラガラ——。

ノックもなしに、引き戸が開けられた。

授業中の担任と生徒たちは、いっせいにそちらに目を向けた。扉を開いたのは、見知らぬ男だった。アカデミーの教師でも生徒でもなさそうだ。

「ユールベル＝アンネ＝ラグランジェはいるか」

男は教室を見まわしながら尋ねた。

ユールベルは怪訝な顔で手を挙げた。見ず知らずの男に、なぜ自分の名前が呼ばれているのか、まるでわからなかった。頭を巡らせてみたが、思い当たる節はない。

「一緒に来てください」

男は丁寧な口調で言った。

ユールベルはますます訝った。授業中に呼びつけるなど、よほど重要なことに違いない。だが、やはり何も思い当たることはない。まさか、アンソニーに何か——一瞬、不吉な考えが頭をよぎった。そんなはずはないと、懸命にその思考を振り払う。

「ユールベル」

男は急かすように名を呼んだ。

ユールベルは不安そうな面持ちで立ち上がり、男に促されるまま教室を出た。扉が閉められ、彼女の姿が見えなくなる。

レオナルドは弾けるように立ち上がった。

「おい、レオナルド！ どこへ行くつもりだ！」

担任が呼び止めたが、完全に無視をした。振り向きもせず堂々とその前を横切り、彼女を追いかけ教室を飛び出していった。

ユールベルは、応接室の前へ連れてこられた。どうやらこの中で何かがあるらしい。二年以上、アカデミーに通っているが、ここに入るのは初めてだった。

男が扉を開いた。

「姉さん！！」

応接室のソファに、弟のアンソニーが座っていた。彼女の姿を見るなり立ち上がり、落ち着いた様子で駆け寄ってきた。

「アンソニー、どうしてここに……」

彼が元気そうなのでとりあえずは安堵したが、アカデミーになぜ彼まで呼ばれたのか不思議だった。

「ふたりとも、掛けて」

応接室の中にいた年配の男性が、ソファを示しながら言った。彼も教師ではないようだ。おそらく王宮の関係者だろう。サイファのものと似たような濃青色の制服を身に着けている。

ユールベルは、自分より背の高くなった弟の手を引きながら、中へと足を進めた。並んでソファに腰を下ろすと、睨むように目の前の男を見た。

「何の用なの？」

「単刀直入に言います」

男性は膝の上で手を組み合わせ、真剣な表情をふたりに向けた。

「あなた方の母親が重傷を負い、入院しています」

「え...？ どういうことですか？」

アンソニーが身を乗り出して尋ねた。

「本日昼頃、ルーファス＝ライアン＝ラグランジェ宅で大規模な爆発が起きました。それに巻き込まれたようです」

ユールベルはうつむき、無言で立ち上がった。長い横髪が肩から滑り落ち、顔に陰を作る。何かをこらえるように固く結ばれたこぶしは、体の横でわずかに震えていた。

「私たちに、親はいません」

小さな口を開き、重々しくそう告げる。そして、いまだ座っている弟の手首を掴み、乱暴に引いた。

「待ってよ、爆発に巻き込まれたって.....」

アンソニーは手を引っ張られたまま、それでも立ち上がろうとしなかった。困惑した顔で姉を見上げる。

彼女の表情には、焦りと怒りが滲んでいた。

「他人よ、関係ない」

「僕らの母親だよ」

「違う」

ユールベルはぎゅっと心臓を鷲掴みにされたように感じた。弟はまだあの人のことを母親だと思っている——そのことがたまらなく悔しく、そして怖かった。

「姉さん、僕は、やっぱり気になるよ」

アンソニーは、ユールベルがどう思っているかは察していた。それでも、母親の様子を知りたい、見に行きたいという思いは消せなかった。もし、このまま会わずに母親が死んでしまうようなことがあれば、きっと一生後悔してしまうだろう。

「どうして？ せっかく忘れかけていたのに.....」

ユールベルの右目は、今にも泣き出しそうに潤んでいた。その悲しげな瞳は、アンソニーの胸を深く貫いた。一瞬、気持ちが揺らいだ。だが——。

「ごめん、僕は、やっぱり母さんのところへ行くよ」

「勝手にすればいいわ」

ユールベルは、涙をこらえた声で、突き放すように言った。そして、掴んでいた手首を離すと、足早に応接室をあとにした。

戸口にはレオナルドがいた。話を立ち聞きしていたのだろう。心配そうな顔を彼女に向けたが、声は掛けなかった。早足で歩く彼女のあとを、ただ無言でついて歩く。

彼女は教室には戻らなかった。昇降口から外に出る。せり出した厚い雲が、昼下がりの強い日差しを遮り、どんよりと重く湿った空気を作っていた。

アカデミーの門を出たところで、彼女は不意に足を止めた。

「どこまでついてくるの？」

後ろのレオナルドに、振り返らないまま尋ねる。

「家に帰るんだろう」

「駄目、来ないで」

語気を強くしてそう言うと、振り切るように、よりいっそうの早足で歩き始めた。緩やかなウェーブを描いた長い金髪が、頭の後ろで結ばれた白い包帯と絡み合うように揺れる。

レオナルドは彼女の嘆願を聞き入れなかった。遅れることなくついていく。

「今にも壊れそうなおまえを、ひとりにはできない」

「もう、あなたを利用したくない」

ユールベルはかすれた小さな声で言った。

「俺は利用してくれて構わない。それだけでいい」

「私が、駄目になるの」

苦しげにそう言うと、足を止めた。ゆっくりと振り返り、レオナルドの青い瞳を見つめる。

「お願い、ひとりになりたいの」

「ユールベル……」

レオナルドは手を伸ばした。彼女を抱きしめようとする。

しかし、ユールベルは拒絶した。顔をそむけ、手を伸ばし突き放す。一步、二歩と後ずさると、くるりと背を向けて走り去った。長い髪が大きく波を打ってなびいた。

「ユールベル……」

レオナルドは追いかけることが出来なかった。足が、地面に根を下ろしたように動かない。小さくなる後ろ姿を見つめながら、ただ彼女の名前をつぶやくしかなかった。

ユールベルは自宅に帰った。ガラス窓に寄りかかり、崩れるように座り込むと、ぼうっと空を見上げた。灰白色の雲が緩やかに流れていく。

そのまま、数時間が経った。

彼女はずっと動かず、窓際に座り込んでいた。いまだにぼんやりとしている。すでに陽は落ち、空は濃紺色に塗り替えられていた。部屋も暗くなっていたが、灯りはつけていない。

はあっ……。

彼女は息を吐いた。いつになく寒く感じる。気のせいかもしれない。自分の心が、そう感じさせているのだろうと思った。

——バルタスもアンソニーも、私ではなくあの人を選んだ。

その事実が彼女の心を蝕んだ。大きな穴が開いたように感じた。焦がれるように痛く、そして寂しい。

バルタスはともかく、アンソニーだけは自分を選んでくれると信じていた。だが、その幻想は見事に打ち砕かれた。しかし、冷静に考えれば考えるほど、この結果が当然のここのように思えてきた。自分は選んでもらえるような人間ではないのだ。そんなことはわかっていたはずなのに、どうして忘れていたのだろう。

手足が冷たくなってきた。痺れたように感覚が薄い。これも気のせいなのだろうか。

不意に、空から白いものが舞い降りてきた。

——雪？

凍てついた涙と呼ばれる、白い小さな雫。三年前にも目にしている。閉じ込められた二階から、結界ごしに見ていた。今の状態とそれほど変わらない。あの頃は、自分の行動を奪う結界がなければ、もっと自由に生きられると思っていた。だが、自分の心は、いまだに過去に囚われたままである。

ガチャッ。

玄関の扉が開く音が聞こえた。

ユールベルはびくりとした。確か、鍵は掛けたはずだった。一瞬、レオナルドかと思ったが、鍵はとうの昔に返してもらっていた。

「姉さん？ いないの？」

廊下から聞こえてきたその声は、よく知っているものだった。聞き違えるはずはない。

でも、いったいどうして……？

ユールベルはわけもわからず、声のする方に目を向けた。

リビングルームの扉を開けて入ってきたのは、まぎれもなく弟のアンソニーだった。彼は、暗がりの中に姉の姿を見つけると、ほっとしたように息をついた。

「良かった、いたんだ」

そう言いながら、パチンとスイッチを入れた。部屋に人工的な灯りが満ちた。

ユールベルはまぶしさに目を細めた。

「真っ暗だったからビックリしたよ。帰ってないのかと思って心配しちゃった」

アンソニーは、あどけなさの残る笑顔を見せた。

「まだそんな格好をしてたんだ。寒くないの？」

ユールベルの隣に座り込むと、細い指先を取り、優しく包むように握りしめた。

「アンソニー……？」

ユールベルはとまどったように呼びかけると、下を向いている彼を見つめた。

「だいぶ冷えてるね」

アンソニーはぼつりと言った。そして、自分のジャケットを脱ぐと、彼女を抱き込むようにして羽織らせた。華奢な彼女にとっては、大きいくらいのものであった。一緒に暮らし始めて以来、成長期の弟は驚くほど背が伸びていった。身長はもう追い越されている。

「なんか、結界に穴が空いたらしくて、これからもっと冷え込むって」

ユールベルの肩に手を置いたまま、ガラス越しに空を見上げる。空からは、白い雪がひらひらと舞い降りていた。その数は次第に増してきているようだ。

「夜ごはん、まだだよ。温まるものを作るから」

「どうして……戻ってきたの？」

ユールベルは不思議そうに尋ねた。どことなく、怯えているようだった。

アンソニーは質問の意味がわからず、きょとんとした。

「どうしてって、ここ、僕の家だよ？僕と姉さんの家」

「あの人のところに行ったんじゃない……」

「心配だから様子を見てきただけなんだけど……もしかして、僕が母さんと一緒に暮らすことになったと思ったの？」

ユールベルは返事の代わりに涙をこぼした。真珠のようなきれいな丸い雫が、頬をかすめて落下し、彼の手の甲で弾けた。

アンソニーは肩をすくめて笑った。母親からは、新しい家で一緒に暮らそうと、しつこいくらいに懇願された。だが、それははっきりと断ってきた。

「心配しないで、僕はどこにも行かないから」

ユールベルはうっと声を詰まらせ、彼に縋りついて泣いた。右目からあふれる涙が、白いシャツを濡らしていく。

アンソニーは、小さい子供をあやすように、彼女の頭に優しく手を置いた。

翌日、ターニャがユールベルたちの家へ遊びにきた。

話題は昨日の爆発のことだった。巻き込まれた人々の多くがラグランジェ家の人間だったと知り、その中にユールベルたちの家族がいたのではないかと心配をしていたらしい。どうやら、遊びにきたというよりも、そのことを聞くために来たという方が正しいようだ。

「はい、母親が巻き込まれました」

ターニャの問いかけに、アンソニーはいたって落ち着いた様子で答えた。

「え？ホントに？」

ターニャは目を丸くし、白い息を混じらせながら言った。飲みかけの紅茶を机に戻す。自分で質問しておきながら、そんなことはないだろうと心のどこかで思っていたのだろう。

「うちは爆発が起こったところのすぐ近くだったんです。父さんは仕事で家にいなかったけど、母さんは家にいたから……」

アンソニーは淡々と説明した。

「それで、無事なの？」

「命に別状はないそうです。骨折だけって聞きました」

「そう、よかった」

ターニャはほっと胸を撫で下ろした。はっきり言えば、あの母親のことは嫌いだった。一度会っただけだが、恐ろしく印象は悪かった。それでも、知った人間が亡くなるというのは、気持ちのいいものではない。

「やめて、あの人の話は……」

ユールベルは弱々しい声で、ぼそりと言った。ソファの上で膝を抱え、顔を曇らせている。

「あ……」

ターニャは配慮が足りなかったと反省した。この姉弟と母親の事情は、少しは知っているつもりだった。アンソニーはともかく、ユールベルはいまだに異常なほど母親を怖れている。彼女の前でする話ではなかった。

「ごめんね」

素直に謝罪の言葉を口にすると、ユールベルの隣に移動する。そして、安心させるように彼女の肩を抱きながら、そっと寄りかかった。

ユールベルは気を持ち直しかけた。寮のときから、彼女はいつもこうやって温もりをくれた。初めは馬鹿なことと思っただが、案外これで落ち着いた。彼女の気持ちが嬉しかったのかもしれない。

だが、そのとき――。

「でも、逃げてばかりじゃ、何も変わらないんじゃないかなあ」

出し抜けに、ターニャがそうつぶやいた。ほとんど独り言のようだった。そのときの彼女の目は、ここではないどこか遠くを見ていた。

ユールベルは体をこわばらせた。

「わた……し……」

震えながら、細くかすれた声を漏らす。膝に顔を埋め、厚手のスカートの裾を、何かをこらえるようにきつく掴んだ。

ターニャははっと我にかえった。

「あ、ごめん！今の忘れて！」

勢いよくそう言うと、ユールベルをぎゅっと抱きしめた。今日二回目の失態だ。顔をしかめながら、激しく自分を責めた。

ユールベルは、ターニャの腕の中で、彼女の言葉をぼんやりと反芻した。

それから一週間が過ぎた。

事故から二、三日ほど雪が降り続き、この世界は一面、白色に覆われたが、それ以降は新たに降ることはなかった。だが、まだ冷え込みは続き、地面には固くなった雪が残っている。

ユールベルは、半分凍りついた雪を踏みしめながら、大きな建物を見上げた。

アンソニーはあれから何度かユリアの見舞いに行っていた。そのたびに、もう帰ってこないの

ではないかという不安に押しつぶされそうになった。だが、行くなどとは言えなかった。ただ、祈りながら彼の帰りを待つだけだった。

彼は必ずここへ帰ってくると言っている。その言葉を信用していないわけではない。だが、どうしても、怯える心は止められなかった。

——逃げてばかりでは、何も変わらない。

ユールベルは表情を引き締め、足を踏み出した。ジャリ、と氷の砕ける音がした。

「良かったわ、レイチェルが元気になって」

アルティナはカラリと笑って椅子に座った。

ベッドのうえで上半身を起こしたレイチェルも、穏やかに微笑みを返した。萌黄色の寝衣に、厚手のカーディガンを羽織っている。現在、病棟にはある種の結界が張られており、そこそこの暖かさが保たれていた。そのため、毛布にくるまるような必要はなくなっていた。

アルティナは、サイファから大体の事情を聞いていた。爆発事故を起こしたのはレイチェルの魔導が原因であることも、そのせいで父親が亡くなってしまったことも——。

レイチェルは事故から三日ほどの間、ほとんど口を開くこともなく、壊れたように動かなかった。ベッドに横になったまま、生気のない表情でぼんやりしているか、眠っているかのどちらかだった。

しかし、次第に表情を取り戻し、一週間が過ぎて、ようやく起き上がれるまでになった。

アルティナは素直にそのことを喜んだ。まだ心の傷が癒えたわけではないだろう。だが、彼女はあえて普段どおりに接した。こういうとき、まわりに必要以上に気を遣われるのが、何よりもつらいはずだと思ったからだ。

「今度は子供たちも連れてくるわね……って、その前に退院しちゃうかしら」

そう言って、あははと笑う。

「ね？ いつから復帰できるの？」

「そのことなんだけど……」

レイチェルは遠慮がちに前置きした。

「何？」

アルティナは軽い調子で続きを促した。一瞬、嫌な予感がしたが、無理やり心の隅に追いやった。

レイチェルは表情を硬くして、彼女を見上げた。

「私、辞めさせてもらおうと思っているの」

「なっ……辞める？！何を言いだすの？！ふざけないで！！」

アルティナは取り乱したように叫んだ。椅子を蹴飛ばすように立ち上がり、ベッドに手をつくくと、正面から彼女に顔を突きつける。

だが、レイチェルは冷静だった。すぐ近くまで寄せられた顔に引くこともなく、薄い微笑みを見せる。

「本気で言っているのよ」

「あれは事故なのよ?! あなたが悪いわけじゃない。責任を取る必要なんて……」

「そうじゃないの、聞いて」

落ち着いた声でそう言うと、まっすぐに視線を向けて理解を求める。

アルティナは澄んだ瞳に気圧され、言葉をなくし口をつぐんだ。倒した椅子を起し、静かに座る。それは、彼女の話を書くという意思表示だった。

レイチェルは真剣な表情で口を切った。

「私は自分の力を制御することができない。このままでは、いつかアルティナさんも巻き込んでしまうかもしれないの」

しっかりとした口調で、ひたむきに説明する。

だが、アルティナは納得しなかった。

「今まで十年間、何事もなかったじゃない」

「今後もないって保証はないわ」

「そんなものいらない!」

冷静なレイチェルの言葉に、彼女は全力で反論した。感情が昂り、声が大きくなっていく。

「未来を保証するものなんて、あるわけじゃない!」

「私は、アルティナさんを大切に思っているから……」

「大切に思ってくれているなら傍にいて。万が一、今回みたいなことが起こって、巻き込まれて命を落とすことがあっても、私は本望よ。レイチェルを恨まないし、後悔もしない。私が軽い気持ちで言ってるんじゃないってことは、わかってくれるわよね」

レイチェルの両肩に手をかけ、覗き込むようにして熱く見つめる。その瞳からは強い決意が見てとれた。彼女の言うように、軽い気持ちでないことはよくわかった。

「ええ、でも……」

「頼んでるわけじゃない、これは命令よ。私の付き人を続けて。辞めることは許さない」

アルティナは無言を言わせぬよう、強い口調で命じた。だが、そこに傲慢さは窺えなかった。そこから感じたのは、縋り付くような必死さだけだった。だからこそ、レイチェルは何も言えなくなった。

「レイチェル、あなたは私のたったひとりの友達なの」

そう言ったアルティナは、怖いくらい思いつめた顔をしていた。瞳がわずかに潤んだ。彼女はそれを隠すようにうつむくと、突然、レイチェルの首に腕を絡めて抱きついた。ぎゅっと力を込める。長い銀色の髪が、レイチェルの頬をさらりと撫でた。

「お願い、私をひとりにしないで……」

普段のアルティナからは想像もつかない弱々しい声だった。

レイチェルは彼女の背中に手を置こうとした。だが、その手は途中で止まった。彷徨う指先は空を掴み、何事もなかったようにベッドの上に戻った。

ココン、コン――。

弱く不安定なノックの音が聞こえた。

ユリアはベッドから体を起こした。扉の方に目を向ける。夫のバルタスではないだろう。彼は、もっとはっきりとした力強いノックをする。

「どうぞ」

豊かな巻き髪を軽く手で整え、よそ行きの声で返事をする。

ガラガラ、と扉が開いた。

そこから姿を現したのは、思いもよらない人物だった。

「ユールベル……」

そう言ったきり、絶句した。

「重傷って聞いたけど、ずいぶん元気そうね」

ユールベルは挑発的に言った。だが、その声は固かった。装った無表情もどことなくぎこちない。緊張をしているのは明らかだった。

「……何をしに来たの。まさか、お見舞いってわけではないでしょう？」

ユリアは眉間に力を込め、あからさまに嫌悪感を示した。

ユールベルは顎を引き、小さな口をきゅっと結ぶと、上目遣いに彼女を睨めつけた。

「もう、あなたに怯えるのは嫌だから……決着を、つけにきたの」

「決着？」

ユリアは眉をしかめた。その意味するところがわからなかった。怪訝な表情のまま逡巡する。

「ま、さか……」

あることに考えが至った。みるみるうちに顔色が失せていく。喉もカラカラに乾いていった。

「まさか、私を、殺そう……っていうの？」

「そんなことはしないわ」

ユールベルは軽蔑するように言い捨てた。

タン……。

ゆっくりと重い足を踏み出した。一步、一步とユリアの方へ歩みを刻んでいく。

「な、何……？」

ユリアは怯えたように、狼狽した声を発した。

だが、ユールベルは何も答えなかった。歩みも止めなかった。ベッドの傍らまで来ると、ようやく足を止め、まっすぐにユリアを見る。手を伸ばせば、互いに触れられる距離——彼女にとっては、身の危険を感じる距離である。

すう、っと大きく息を吸い、緊迫した面持ちで口を開く。

「私はもう逃げないし、あなたを怖れたりもしない。アンソニーは、絶対に渡さないから」

「……何なの、それ」

ユリアは拍子抜けしたように、啞然として尋ねた。

「私の決意。あなたに宣言しておこうと思ったの」

ユールベルにも、子供じみた馬鹿なことだという自覚はあった。だが、彼女にとっては精一杯の行動だった。そして、この行動にかけていた。ユリアに自らの意思で会い、目の前で宣言する

ことができたなら、自分の中の恐怖心を克服することができるのではないかと――。

ユリアは急に強気に戻った。ユールベルが自分に危害を加えるつもりはないと悟ったためだ。ふっ、と鼻で笑う。

「決着なんて偉そうに言ったわりには、その程度なの？ 呆れたわ」

「近づいただけであれほど怯えていた人が、よくそんなこと言えるわね」

ユールベルも負けじと言い返す。体中がびくついていた。この距離が怖い。後ずさりしたい気持ちを懸命に抑える。

「久しぶりだったから、あなたが虚勢だけの人間だということを忘れていたのよ」

「結界まで張って、二階に私を閉じ込めていたのは、私を怖れていたからじゃないの？」

ユリアは言葉に詰まった。シーツを掴み、憎々しげに顔をしかめた。

「……そう……いえ、違うわ」

「怖れていたから、優位に立とうとしたんでしょう？」

ユールベルの首筋には、薄く汗が滲んでいた。

ユリアも同様に、額に汗を滲ませている。

「母親なんだから、優位に立って何が悪いの」

「あなたに母親の自覚があったなんて驚きだわ」

ユールベルの声に冷たい響きが加わった。単なる反撃のための言葉ではない。心の奥底からの言葉だった。娘とも思っていないくせに、母親などと口にするのに驚き、そして呆れた。

ユリアは完全に追い込まれた。深くうつむき、シーツを引きちぎらんばかりにきつく握りしめる。

「……ああ言えば、こう言う……少しも変わっていない……人を怒らせるしか能のない子……」

「言いたいことがあるなら、私に向かってはっきりと言ったらどうなの」

ユールベルの挑発に、ユリアの中の何かが切れた。

「どこまで馬鹿にすれば気がすむの！ いいかげんにして！！」

怒りで顔を真っ赤にすると、爆発したように叫び、大きく腕を振り上げた。

空気を切る音が聞こえた気がした。

ユールベルは息を呑んだ。一瞬、怯えた顔を見せたが、目をそむけることはなかった。

パシン――。

何かを打つような高い音が、部屋に弾けた。

ユールベルの頭が薙ぎ払われた音ではない。

頬が打たれた音でもない。

勢いよく振り下ろされたユリアの腕を、ユールベルが片手で受け止めた音だった。

「なっ……」

ユリアは驚き、目を丸くした。

行動を起こしたユールベルの方も呆然としていた。

防御することなど今まで出来なかった。その考えすらなかった。手を上げられれば、ただ受けるしかなかった。彼女の中では、それ以外の選択肢はゼロだった。きっと、アンソニーも同じだ

ろう。

だが、防ぐことは出来たのだ。

その腕は、思ったよりもずっと細かった。力も決して強くなどない。ずっと、圧倒的なものと感じていたのは、小さな子供の頃に受けた記憶のせいだろうか。

時は流れていた――。

ユールベルの目から、涙が零れ落ちた。

「あなたを怖れる理由なんて、とっくになくなっていたんだわ！」

泣きながらそう言うと、弾くように腕を押し返した。そして、潤んだ瞳でひと睨みすると、踵を返し、走って部屋を出て行った。

うなだれたユリアの耳に、遠ざかる靴音がこびり付いた。

ユールベルはユリアの病室が見えないところまで走ると、ゆっくりと足を止めた。壁に寄りかかり、しゃくり上げながら涙を拭う。

心の重しが少しだけ軽くなったような気がした。それと同時に、心に大きな穴が空いたようにも感じた。安堵と寂寥の入り混じったような、複雑な心境だった。

これで少しは何かを変えられたのだろうか。その自信はない。結局、何も変わっていないのかもしれない。それでも良かった。きっかけにくらいにはなるかもしれない――彼女にしてはめずらしく、そんな希望を信じる気持ちになっていた。

「あなたから説得してくれない？」

「そういうことはサイファに頼め」

ふと、そんな会話がユールベルの耳に入った。片方はとてもよく知っている声だ。その声を聞いただけで、胸が熱く痛んだ。

何を話しているのだろう。誰と話しているのだろう。

熱が彼女を衝動のままに突き動かす。靴音をさせないように忍び足で廊下の角に移動すると、身を隠しながら声の方を盗み見た。

そこにいたのは、ラウルと王妃アルティナだった。ふたりきりで、他には誰もいない。廊下の中央に立ったまま、向かい合って話をしている。

「自信がないわけ？」

「おまえの命令を受ける義務はない」

「義理はあるでしょう？」

「ルナのことを言っているなら、レイチェルにも同じだけの義理がある」

互いに喧嘩腰だった。双方とも腕を組み、厳しい顔で睨み合っている。

「いいわよもう」

先に折れたのはアルティナだった。腰に手をあて、面倒くさそうに大きくため息をつく。反撃の言葉はいくらでもあった。だが、ラウルはそう簡単には落ちないだろう。言い合うだけ時間の無駄である。

「サイファに頼むことにするわ」

「期待は持たないことだな。レイチェルを説得など、誰にも出来はしない」

ラウルは冷ややかに忠告した。

アルティナはわずかに顎を上げ、鋭い目を彼に向けた。真顔で瞳の奥を探る。

「そうやって、いつもあきらめてばかりなのね、あなたは」

「何がしたい」

ラウルは目つきを険しくした。

「わかってるくせに」

アルティナはとぼけた口調で軽く言った。

ラウルには無表情で目を伏せた。自分の中で思い当たることはあった。だが、彼女がそれを知っているはずがない。自分の考えているものと、彼女の考えているものは、まったく違うものなのだろう。そう思うことにした。

「それじゃ、またね」

アルティナは、身を翻しながら右手を上げ、気持ちを切り替えるように軽い調子で言った。

ラウルは軽く視線を送ったあと、無言で踵を返した。

ユールベルは慌てて顔を引っ込めた。柱の陰に回り込み、身を隠す。

その理由はアルティナだった。ラウルとの話を終えた彼女が、ユールベルのいる方へ向かってきたのだ。艶やかな銀色の髪をなびかせながら、大きな足取りで闊歩している。まっすぐ正面を向いているせいか、隠れたユールベルに少しも気づくことなく通り過ぎ、階段を降りていった。小刻みな靴音が、複雑に反響しながら遠ざかっていく。

ユールベルはもういちど廊下の角から顔を出し、ふたりがいた場所に目を向けた。だが、そこにラウルの姿は見つけられなかった。

——え？ どこ？

慌てて飛び出し、駆けながら何度もあたりを見まわす。緩やかなウェーブを描いた金の髪が、白い包帯とともに振り乱れた。だが、今の彼女にそれを気にする余裕はなかった。

「体調はどうだ」

病室のひとつから、低い声が聞こえた。

扉が閉じられているため、中の様子は窺えない。だが、それはラウルの声に間違いなかった。

ユールベルはその病室に近づき、息をひそめて耳をそばだてた。

「ええ、もう大丈夫」

レイチェルはにっこりとして答えた。いつもと変わらない愛らしい微笑みだった。

ラウルは無表情で、彼女の前のパイプ椅子に腰を下ろした。

「無理して笑わなくてもいい」

「無理なんてしていないわ……？」

レイチェルは不思議そうに、やや語尾を上げて答えた。

ラウルはわずかに眉を寄せた。

「すまない」

「えっ？」

レイチェルは困惑した。先ほどからの発言が理解できない。とまどいの眼差しを彼に送る。

ラウルはそれに答えるように口を開いた。

「おまえにばかり、重荷を背負わせている」

「……………」

レイチェルは無言のまま、薄く微笑んだ。そして、ゆっくりと目を閉じ、緩やかに首を横に振った。カーディガンの上で、彼女の金髪が静かに揺らめいた。

彼女は、すべて自分の責任だと思っている。他人がどれだけ違うと言っても、それを受け入れることはないだろう。謝罪も慰めも望んでいない。ラウルにはわかっていた。わかっているながら、どうしても口にせずにはいられなかった。

「私に出来ることがあれば、何でも言え。おまえの頼みは出来る限り聞くつもりだ」

彼女に背負わせたものと比して、あまりにも小さな償いかもしれない。だが、彼女の意思を尊重した上で、自分にしてやれることといえば、このくらいしかなかった。

レイチェルは少し思考を巡らせたあと、ぽつりと言った。

「りんごが食べたい」

「りんごだな、わかった」

ラウルは真顔で確認すると、おもむろに立ち上がった。

「そこにあるわ」

レイチェルは後ろの棚を指さした。

彼女の指先を辿ると、そこに籠盛りのりんごが置いてあった。誰かの見舞いの品のようだった。果物ナイフもその中に入った。

ラウルは隣の洗面台で軽く手を洗ったのち、籠からひとつを手にとると、ナイフを使って皮を剥き始める。

「やっぱりすごいわね」

その手際の良さを見て、レイチェルが感嘆した。くるくると回転するたびに、赤い衣がほどかれていく。まるで手品のように見えた。

ラウルは感心されるほどのことではないと思ったが、彼女が嬉しそうだったので、黙ってそれを見せていた。いい気になっているわけではない、と自分に言い訳をする。ただ、少しだけ昔を思い出した。

りんごはすぐに剥き終った。小さく切って小皿に盛り、レイチェルに差し出す。

「ありがとう」

レイチェルは、にっこりと笑って、両手でそれを受け取った。小さなフォークで、そのひとかけらを口に運ぶ。

「おいしい」

彼女は子供のように素直な感想を述べ、柔らかく微笑んだ。

ラウルもつられて、ごくわずかだったが、口元を緩ませた。

ふたりの間に流れる平穏な時間。だが、それは、ほんのひとときのことだった。

「サイファは何か言っていた？ 私のこと」

彼女のその一言で、ラウルはいつもの無表情に戻った。

彼女は何か察しているのだろうか。それとも尋ねてみただけなのだろうか。確かにサイファとあることを話し合った。しかし、それは彼女にとって歓迎するような内容ではない。伝えるべきかどうか迷った。

「隠さないで」

見透かしたように、レイチェルは凜とした声で言った。

ラウルは軽くため息をついた。嘘はつけない。手を拭きながら、あきらめたように椅子に座る。

「サイファから、おまえの記憶を消せないかと相談を受けた」

「えっ……？」

「一連の事故の記憶だ」

「やめて！ それは駄目！！」

レイチェルは取り乱したように哀訴した。ベッドから身を乗り出し、縋るようにラウルの袖を掴む。りんごがのった小皿は、今にも手から滑り落ちそうだった。

ラウルはその小皿をそっとすくい上げ、隣の棚に置いた。そして、縋り付く小さな手に、自分の大きな手を重ねた。

「安心しろ、おまえの了承なしに、そんなことはしない」

レイチェルは我にかえると、安堵の息をついた。

「そもそも、成人では上手くいかない可能性の方が高いからな」

ラウルは抑揚のない声で、そう付け加えた。

レイチェルは難しい顔でうつむいた。成人の記憶を消すのは困難である——サイファもそのことは知っているはずだ。なのに、なぜ……。忘れるくらいに焦燥していたのかもしれない。それとも、一縷の望みに託すつもりだったのだろうか。

どちらにしろ、そこまで追い詰めたのは自分なのだ。心を閉ざし、起き上がることさえできない状態を、何日も見せつけてしまった。助けるためには記憶を消すしかない、という極端な考えに至ったとしても、彼を責めることは出来ない。全力で自分を守ろうとしてくれた、その結果なのだから——。

彼女はラウルの腕から手を引こうとした。ラウルもそれに応じるように、彼女に重ねた手を退けた。

「忘れたくはないのか」

「忘れてはいけないもの」

レイチェルの小さな口が、迷いなく動いた。

ラウルは目を閉じ、小さく息をついた。

「あのとき、無理にでも、おまえをここから連れ去るべきだった」

そうすれば、こんなつらい目に遭わせることはなかった。さらなる重荷を背負わせることはなかった。ラウルの胸に、悔恨の思いが湧き上がった。

レイチェルは穏やかに微笑んだ。

「後悔するなんておかしいわ。ラウルは、何度、同じ状況が巡ってきても、きっと同じ選択をする。同意なしに連れていくなんてこと、ラウルにはできないもの」

ラウルはじっと彼女を見つめた。無表情だったが、心の中はざわめいていた。

「甘く見るな。おまえは私のごく一部しか知らない」

「それで十分だわ、今のラウルを推測するには」

レイチェルはにこやかに切り返した。

ラウルは気色ばんだ。彼女の余裕ある言動に腹が立った。自分のことをどれだけ知っているというのだ——急に怖い顔になり、鋭く睨めつける。そして、激しさを喉元で抑えた、迫力のある低音で言った。

「ならば、おまえが間違っていると証明してやる。今からおまえを連れ去る。同意は得ない……それでもいいのか」

「ちゃんと同意を得ようとしているわね」

レイチェルは肩をすくめて笑った。

ラウルは肩を落としてうなだれた。顔を隠すように手で押さえる。自分の間抜けさに羞恥を覚えた。同時に、彼女には敵わないとも思った。すっかり見透かされている。やはり、自分には強引に実行することなど無理なのだ。

サイファなら手段を選ばないのかもしれない。それが必要だと思えば、躊躇なく行動に移すだろう。それが、うらやましくもあり、憎らしくもあった。

——そうやって、いつもあきらめてばかりなのね、あなたは。

脳裏にアルティナの声がよみがえった。あまりにも、今の状況にぴったりとはまる。彼女がいたかったのは、やはりこのことなのだろうか。

「アルティナが、おまえを説得しろと言ってきた」

ラウルは不意に話題を変えた。

ずいぶんと唐突だったが、レイチェルには何の話なのかすぐにわかった。少し前に、病室の外でふたりが言い争うような声が聞こえていた。話の内容までは判別できなかったが、ラウルのその言葉を聞いて、付き人の件に思い当たったのだ。

「説得するつもり？」

「いや、断った」

ラウルは素っ気なく言った。そして、一拍おいて言い添えた。

「私も付き人を続ける方がいいとは思っている。だが、アルティナに頼まれて説得したのでは、あいつの肩を持つことになるからな」

「子供みたいなことを言うのね」

その茶々に気を取られることなく、ラウルは真剣に話を続ける。

「私は常におまえの味方でいたい。断ったのはそういう理由だ。だから、今後、私の意思で話を持つことがあるかもしれない」

レイチェルは真面目にこくりと頷いた。

「だが、今は体を休めることだけを考えろ」

ラウルは医者としてそう告げたあと、表情を変えずに付け加えた。

「今度、とびきり美味いりんごを持ってくる」

「ありがとう、嬉しい」

レイチェルは顔をほころばせた。小さな花が咲いたような、可憐な笑顔だった。

ラウルは、その愛くるしい表情に意識を絡めとられた。それは、あの頃を思い出させるものだった。拒絶しておきながら、忘れようとすれば妨害する。いつもそうだ。自覚がないだけにたちが悪い。ふう、と疲れたように小さく息をつく。

「今からでも遅くない。一緒に行かないか」

どこへ、などと言わなくても通じるだろう。いったいこれで何回目なのか。自分の往生際の悪さに呆れつつ、それでも止めることができなかった。しかし、これが最後だと心に決めた。

「行ったらアルティナさんの付き人を続けられないわ」

レイチェルは冗談めかして言った。

だが、ラウルは真顔で返した。

「続けるつもりはないのだろう」

「.....」

レイチェルは何も答えられなくなった。表情に陰を落とし、うつむいた。

「悪かった、追い詰めるようなことを言って」

ラウルは低い声で言った。そして、じっと彼女を見つめると、今度は力強く語りかける。

「レイチェル、おまえがここに留まることを望むなら、私もこの国に留まり、おまえの傍らで力になる」

レイチェルは顔を上げた。嬉しいというより、むしろ苦しかった。彼にはつらい思いばかりさせている。きっとこれからもそうだろう。なのに、彼はいつまでも味方でいようとしてくれている。その気持ちに報いることはできないのに.....。せつなげに彼を見つめた。

ラウルは彼女の瞳に吸い込まれそうになった。ほとんど無意識に手を伸ばす。大きな手のひらが、彼女の白い頬に触れた。

「ラウル？」

レイチェルは不思議そうに瞬きをした。

「.....少し熱っぽいな。休んだ方がいい」

ラウルは事務的な口調で言った。そして、ゆっくりと手を引いていく。名残惜しげな指先が、彼女から離れた。

「無理をするな」

そう言い残して立ち上がると、彼女の視線を振り切るように背を向け、大きな足どりで病室を出て行った。

「なに、さっきの……」

扉を開くと、そこにはユールベルが立っていた。体の横でこぶしを握り、怒りを抑えたような怖い顔をしている。レイチェルとの会話を聞いていたのだろう。どこから聞いていたのかはわからない。だが、そんなことはどうでもよかった。

ラウルはすぐに扉を閉めた。レイチェルに悟られたくなかった。そして、素知らぬ顔でユールベルの前を通り過ぎようとした。

だが、ユールベルが逃すはずはなかった。彼の正面にまわり込むと、行く手を阻むように立ちはだかる。

「どうして？ どういうことなの？ わた、し……」

ずいぶん混乱しているようだった。混乱というより、動揺かもしれない。顔を歪ませながら、懸命に言葉を探している。

「そう、よ……私にも、あのくらい優しくしてほしかった！！」

激情とともに、固く握りしめた両手をラウルの胸に叩き付けた。涙があふれた。それを拭うことなく、何度も何度も叩き続ける。それでも、彼にとっては何の痛みにもならなかった。

「私がほしかったものなのにつ……！！」

「ここは病室の前だ。静かにしろ」

ラウルの口調は冷淡だった。それが、ますますユールベルを激昂させた。

「何が病室よ！ あの人に聞かれたくないだけじゃない！！」

「ユールベル？」

不意に、扉の向こうから声がした。レイチェルのものだ。部屋の前でこれだけ喚いていれば、聞こえない方がおかしい。

「すまない、今、黙らせる」

ラウルは扉越しに声を投げた。ユールベルをぐるりと逆に向かせると、背後から片手で体を抱き寄せ、もう片方の手で口を塞いだ。彼女はラウルに抱き上げられるような格好になり、ほとんど宙に浮いていた。かろうじて地面に触れているつま先が、心もとなさそうに彷徨っている。

そのまま、離れたところへ連れていこうと足を踏み出しかけた、そのとき――。

「ラウル、ユールベルとふたりきりで話をさせて」

レイチェルが予想外のことを口走った。さすがのラウルも驚き、慌てた。

「何を言っている。こいつは危険だ。何をしでかすかわからない。ふたりきりになどできるか」

ユールベルの胸に、締めつけられるような痛みが走った。苦しくて意識が遠のきそうだった。口を塞がれたまま、新たな涙があふれる。心の深いところから湧き上がってきたような、熱い涙だった。

「ラウル、私の頼みは聞いてくれるんでしょう？」

レイチェルは冷静に返した。

ラウルは返答に窮した。彼女の頼みを聞く——それは、ラウル自身が彼女に告げたことだった。つい今しがたのことである。もちろん、嘘ではなく本心だ。だが、このようなことは想定していなかった。

「ラウル、お願い」

もう一度、畳み掛けるように頼み込む。

ラウルはもう拒むことは出来なかった。無言で扉を開けた。そして、いまだ泣いたままのユールベルを、病室の中へ押しやった。

レイチェルはベッドの上で穏やかに微笑んでいた。

「い、嫌……わ、わたし……」

ユールベルはうろたえながら、ラウルのもとに戻ろうとした。だが、ラウルは手を突き出し、それを阻んだ。

「レイチェルに危害を加えるような真似をしたら、ただではおかない」

凍りつくような冷たい声だった。だが、その瞳は激しく燃えたぎっていた。

本気だ、とユールベルは思った。ぞくりと身震いをする。体が内側から凍りつくようだった。涙も止まった。その瞬間、悲しみよりも恐怖が勝っていた。彼に対して、ここまでの戦慄を覚えたことはなかった。

ラウルは静かに扉を閉めた。

閉ざされた病室の中で、ユールベルとレイチェルはふたりきりになった。

ユールベルは、ラウルを求めるように伸ばした手を、いまだ下ろせずにはいた。その先には扉しかない。縫りたい人の姿はもう見えない。

「ユールベル」

背後から、鈴を鳴らしたような声が聞こえた。びくりとして、体をこわばらせた。だが、観念したかのように表情を引き締めると、ゆっくりと振り返った。

レイチェルは優しい笑顔をたたえていた。化粧をしていないその顔は、大人っぽさが抜け、普段よりも若く感じた。まるで少女のようだった。肌は雪のように白く、頬にはわずかな赤みがさしている。小さな唇はほのかな薄紅色をしていた。可憐でいて、儂げ——そんな表現がふさわしかった。

おじさまのいちばん大切な人。

レオナルドの好きだった人。

そして、多分、ラウルも——。

まるで、愛されるために生まれてきたような人——。

ユールベルは胸の少し下をぐっと押さえた。何も持っていない自分、すべてを手に入れている彼女。あまりにも違いすぎる。ずるい、と思った。

「ここに座って。ふたりで話をするのは初めてかしら」

レイチェルは、ラウルが座っていたパイプ椅子を示した。

ユールベルは緊張しながら足を進めた。言われるまま椅子に座る。わずかに残っていた座面の温もりに、彼女の心が小さくさざめいた。

「お母さまのお見舞いに来たの？」

「私に親はいないわ」

「そうだったわね」

レイチェルはあっさりと同意した。

「それで、何の話？」

ユールベルは努めて無愛想に尋ねた。それは、今の自分にできる唯一の防御だった。

「特にこれといってないんだけど……今まであまりあなたと話したことがなかったから、何かお話できればと思って」

レイチェルは親しみをこめた笑みを向ける。

だが、ユールベルはそれを受け付けなかった。表情を凍らせたまま、ずっと椅子から立ち上がった。

「話がないのなら帰るわ」

レイチェルの微笑みが、寂しげに翳った。

「私、やっぱりあなたには嫌われているのね」

「……ただ苦手なだけよ」

ユールベルは顔をそむけて、ぼそりと言った。それは、本当のことだった。子供の頃からそうだった。嫌いというほどの感情はなかったが、一緒にいるのが苦痛だった。とても居心地が悪かった。だから、いつもあからさまに避けて、話もしないようにしていた。今にして思えば、すべて自分の劣等感からきていたのかもしれない。

「お願い、少しここにいてくれないかしら」

レイチェルは小首を傾げて、控えめにせがんだ。

そういうふうにかわいらしく頼み込む彼女に、ユールベルは腹立たしさを覚えた。黒い気持ちが湧き上がる。

「私の質問に、答えてくれる？」

「ええ、いいわ」

レイチェルは嬉しそうに、ぱっと表情を明るくした。

ユールベルは、彼女を見つめながら、再びゆっくりと腰を下ろした。ギィ、と嫌な音を立てて、パイプ椅子が軋んだ。

「……あなたも、あの爆発に巻き込まれたの？ 家は離れていたはずだけど」

本当はこんなことではなく、ラウルとのことを訊くつもりだった。徹底的に問いつめようと思っていた。だが、無垢なまでの彼女の笑顔を見ていたら、つい違うことを口を上らせていた。

「巻き込まれた……んじゃないわ、私が、起こしたの」

「えっ？」

あまりにも突飛だったため、にわかには理解できなかった。言葉のままに受け取れなかった。

目を見開き、思わず尋ね返す。

レイチェルは淡々と説明を続ける。

「魔導の実験中に起こった事故ということになっているけれど、私の魔導の力が暴発してしまったのが、本当の原因」

「あなたが……」

ユールベルは信じられない思いだった。国の結界を損傷するほどの魔導を、彼女がひとりで発したというのだろうか。彼女にはそれほどの魔導力が備わっているようには見えなかった。

「子供の頃、魔導の訓練から逃げてばかりだったの。だから、かしら、自分の力をコントロールできないことがあるみたい。自分にこんな力があるなんて知らなくて……なんて、ただの言い訳ね。我が侏だったから、私」

遠くに思いを馳せるような口調に、自嘲と後悔の色が入り混じっていた。

「だったら、どうしてそんなに平然としていられるの。あなたの我が侏のせいで、たくさんの人が死んだり怪我をしたりしているのに」

ユールベルは厳しい追及をする。

「どうしてかしらね」

レイチェルは他人事のように言った。背中の枕に体重を掛け、ぼんやりと視線をさまよわせる。

ユールベルはその態度に苛立った。自分のしでかしたことに、何の自覚も持っていないように思えた。彼女を責めるように睨みつける。

「少くくらい心が痛まないの？ どうして笑っていられるの？ どうしてはしゃいでいられるの？ ラウルと楽しそうに話なんかして……。何人もの人を殺しておいてすることじゃないわ」

「ラウルのこと、好きなのね」

レイチェルは柔らかく微笑みかけた。

思わぬ反撃に、ユールベルは顔を紅潮させた。

「違う、ラウルのことなんて好きじゃない、あんなひと嫌いだよ！」

身を乗り出し、躍起になって否定する。だが、むきになればなるほど、その言葉は虚しいものになっていった。

だが、レイチェルは優しさをもって、それを受け止めた。

「わかったわ、変なことを言ってごめんなさい」

ユールベルはスカートの裾をぎゅっと握りしめた。

「あなた、は……」

ためらいがちに口を開き、震えるような声を絞り出した。こわばった顔でレイチェルを見つめる。そして、ひと呼吸ののち、意を決したように、いちばん知りたかったことを尋ねる。

「あなたは、ラウルのこと、好きなの？」

「ええ、好きよ」

レイチェルはためらいなく答えた。

ユールベルはカッとした。どうしようもなく頭にきた。無邪気な顔で、何の屈託もなく、平然

と答える彼女を許せなかった。顔を隠すようにうつむき、肩を小刻みに震わせながら立ち上がった。

「……私は……やっぱり、あなたのこと、嫌いだよ」

レイチェルは彼女を見上げ、寂しげに微笑んだ。薄紅色の唇が動き、何かを告げようとする。だが、ユールベルはそれを聞くことを拒絶した。片耳を塞ぎながら弾けるように駆け出し、病室を飛び出していった。

廊下にはラウルがいた。

彼のことをすっかり忘れていた。話はすべて聞かれたに違いない。その内容を思い返し、ユールベルはカッと顔が熱くなった。目の奥も熱くなった。左目から涙があふれ、頬を伝い落ちた。

「笑いたければ、笑えばいいわ！」

無表情のラウルを睨みつけ、自暴自棄な叫びを上げる。

今日は泣いてばかりだった。自分は今、ひどい顔をしているだろう。目が腫れているような気がした。こんな顔を見られたくない——ユールベルは額を掴むように押さえ、深くうつむいた。

「……なっ！！」

立ち去ろうとした彼女の細い腕を、ラウルは無造作に掴み、引っぱり上げた。ユールベルの体は引き戻され、正面からラウルに倒れかかった。視線を上げれば、近いところに彼の顔がある。

「放して！！」

この状況に驚き、反射的に逃れようとした。力一杯もがくが、彼に掴まれた腕はびくともしなかった。せめてもの抵抗に、顔だけはそむけた。

「ひとつ言っておく」

感情を抑えた低い声で、ラウルが前置きした。

ユールベルは、横目でそっと視線を戻した。

「笑っている人間が、笑わない人間より気楽に生きているなどと決めつけるな」

ラウルはまっすぐに彼女の目線を捉えて言った。

ユールベルは涙目で、キッと睨み返した。心の中にいろんな感情が渦巻いた。悲しくて、悔しくて、怖くて、苦しくて、頭がおかしくなりそうだった。

「放して！！」

「このまま帰すわけにはいかない。包帯を直す。来い」

ラウルはユールベルの手首を掴んだまま歩き出した。彼女の目を覆う包帯は、ずいぶんと緩くなり、ずれかかっていた。

ユールベルは手を引かれながら、おとなしくついて歩いた。そうするしかなかった。ラウルの手を振り払うなどということは不可能に近い。手の甲で涙の跡を拭う。もう泣いてはいなかった。だが、本当は広い背中に縋り付いて、泣きじゃくりたかった。

厚い雲の切れ間から、太陽が顔を覗かせた。

ずいぶん久しぶりに見た気がする。レオナルドは忘れかけていたその眩しさに目を細めた。

「レオナルド！」

不意に、背後から自分の名を呼ばれた。訝しげに振り返る。足の下で、固くなった雪が、ジャリ、と濁った音を立てた。

視線を向けた先にいたのは、自転車に乗った黒髪の女性だった。手を振りながら、ふらふらと走っている。どうやらこちらに向かってくるようだ。

彼女はレオナルドの横まで来ると、ブレーキをかけて止まろうとした。だが、前輪を雪にとられたらしく、ぐらりとバランスを崩した。わっ、と焦った声を上げながらも、とっさに足をつけて体勢を戻した。

ふう、と小さく安堵の息をついた。そして、ぱっと顔を上げると、親しげな笑みを見せる。

「久しぶりっ」

「……誰だおまえは」

「はあ？」

思いもよらないレオナルドの返答に、彼女は素っ頓狂な声を上げた。口をとがらせると、下からじっと覗き込むようにして睨む。

「それ、本気で言ってるわけ？」

「声はどこかで聞いたことがあるような気が……あっ！」

「思い出した？」

彼女はくすりと笑う。

「ターニャか？」

「正解」

レオナルドは、啞然として彼女を見た。上から下まで、まじまじと視線を巡らせる。ずいぶんと雰囲気が変わっていた。髪は胸のあたりまで伸び、薄く化粧もしているようだ。そして、細身のパンツスーツを着こなしている。以前よりも大人っぽく、そして、女らしくなった気がした。

「そんなに変わった？」

「性格はそのままだよ」

「まあね」

レオナルドは嫌みのつもりだったが、ターニャは素直に受け取った。もともと、その嫌みも、半分は照れ隠しのようなものだった。

「これから帰るの？」

「ああ」

「じゃあ、途中まで一緒に帰る。方向、同じみたいだし」

ターニャは一方的にそう言うと、返事を待たずに自転車を降りた。それを引きながら、レオナルドと並んで歩き始める。

「こんな雪の積もっているときに、自転車なんてよく乗るな」

レオナルドは半ば呆れたように言った。

「雪のない部分でしか乗ってないわよ」

細い道はまだ雪や氷で覆われているが、大通りは早い段階から除雪されていた。特に、王宮に

近いこのあたりは、細めの道でも除雪されていることが多い。そういう道を選んで通っているということだろう。この道も、隅の方は雪が残っているが、中央部分はきれいに除雪されている。

「ついてないのよね、ワタシ」

ため息まじりにそう言うと、ターニャは面白くなさそうに口をとがらせた。

「練習してようやく乗れるようになったと思ったら、急に雪が積もっちゃうんだもん。しばらく乗ってないと、感覚を忘れそうだったし、仕方なくってところかな」

「今まで乗れなかったのか」

レオナルドは驚いたように言った。自転車など、幼い頃にみんな乗れるようになるものだと思っていた。

ターニャは少し恥ずかしそうに、頬を赤らめながら、上目遣いで彼を睨んだ。

「そうよ、悪い？」

「いや、悪くはないが、天然記念物モノだな」

「いくらなんでも、そこまでめずらしくないでしょ」

「俺はどっちも見ることがない」

レオナルドは無遠慮に言葉を重ねる。

「なんで今さら乗ろうと思ったんだ？」

「ああ、それ？ えーっと……」

ターニャは空を見上げながら、言葉を探した。

「私ね、母親に会いに行こうと思ったの。ずっと会いたくなかった母親だけど……。そのために、自転車を練習したのよ」

「なんで自転車なんだ。他に手段はいくらでもあるだろう」

「どうしてかなあ」

レオナルドの率直な疑問は、彼女自身にも疑問だった。ハンドルに両腕を置いてもたれかかり、視線を落として考え込む。

「何か、克服したかったのかな。それとも、自分を試してたのかも……」

「そんなに嫌なら、会わなければいいだろう」

「逃げてばかりじゃ、何も変わらないから」

ターニャは少し照れたように言った。

だが、レオナルドはたいして興味なさそうだった。

「ただの自己満足じゃないのか」

「それでもいいの」

ターニャはにっこりと笑った。

「ねえ、レオナルドのお母さんってどんな人？」

「口うるさいだけだ。子供の頃はよくゲンコツくらった」

レオナルドは面倒くさそうに、しかし思いのほか丁寧に答えた。

「へえ、ちゃんと親子してるんだ…って、あ！レオナルドの家は大丈夫だったの？例の爆発」

ターニャは突然、思い出したように尋ねた。

「ああ、俺の家は離れてたから」

レオナルドは前を向いたまま、素っ気なく答えた。もし、何かあったとしたら、こんなところで呑気に母親の話などしていないだろう。そのくらいわかって然るべきだと思ったが、今さらこんな質問をしてくるなど、彼女は思ったより抜けているようだ。

「そう、良かった。少し心配してたんだ」

「少しだけか」

「心配しただけ有り難がってよ」

レオナルドのひねくれた発言にもめげず、ターニャは明るく笑って言い返した。

「そういえば、今日はユールベルと一緒にじゃないのね」

しばしの沈黙のあと、ターニャはふとそんなことを口にした。

レオナルドの心は、その一言で掻き乱された。

「アカデミーを休んでいたんだ。……ラウルのところへ行っていたみたいだ」

ターニャと会う少し前、アカデミーの近くでユールベルを見かけた。声を掛けようと思ったが、新しい包帯を見て、声を掛けられなくなった。その巻き方や結び方は、ラウルのものだったからである。

「そっか」

ターニャは寂しげに言った。ちらりと横目でレオナルドを盗み見る。彼はまっすぐ前を見据えていた。だが、その表情はどこか疲弊しているようだった。

「キミたち、どうなってるの？」

ユールベルには訊けなかった不躰な質問をぶつけてみる。ずっと気になっていたことだった。レオナルドには、これだけで意味するところは通じるはずだ。返答を拒まれるかもしれないと思ったが、意外にも冷静に答えてくれた。

「どうにもなってないさ。ずっと、よくわからない状態が続いている」

「それでいいの？」

「俺の問題じゃない、ユールベルの問題だからな。……正直、どうしていいか、俺にはわからない」

レオナルドは足元を見ながら、ため息をついた。

「ずいぶん弱気ね」

ターニャは少し驚いていた。いつも傲慢なまでの態度をとっているレオナルドが、自分にこんな弱音を吐露するなど信じられなかった。だが、一年、二年とこんな状態が続けば、不安になるのも、疲れるのも、無理ないのかもしれない。

レオナルドはさらに、信じがたいことを口にした。

「あいつが幸せになるのなら、俺は身を引いてもいいと思っている」

「ええっ?! 本気で言ってるの……?」

「ああ、でも、あいつはジークやらラウルやら、どう考えても無理っぽいところばかりに行くからな……今はやっぱり目を離せない」

レオナルドは、もう一度、深くため息をついた。

「だったら、もうちょっと頑張ってみたら？」

「これ以上、頑張ったら、完全にストーカーだぞ」

「イイ男になれって言ってんの！」

ターニャは元気づけるように明るく笑いかけた。

レオナルドは何と返事していいかわからず、むすっとして顔をそむけた。

「俺はこっちに曲がるが……」

十字路に差し掛かり、レオナルドは右を指差した。

「じゃあ、ここでお別れね。あ、ちょっと待って」

ターニャはポケットを探り、小さな紙片を取り出した。

「これあげる。私の名刺。かっこいいでしょ」

嬉しそうにえへへと笑って、レオナルドに差し出した。だが、それはどう見ても、何の変哲もないごく普通の名刺だった。左上に勤めている研究所の名前が記されている。特段、自慢するようなものでもない。

レオナルドはそれを受け取ると、視線を落としてじっと見つめた。なぜか異様に真面目な顔をしている。ターニャが不思議そうに見ていると、彼は顔を上げて尋ねた。

「これ、勤め先だろう。連絡してもいいのか？」

「……は？」

「……ん？」

ふたりは互いの反応が理解できなかった。思いきり怪訝な表情で、探るように顔を見合わせる。

「貸して」

先に動いたのはターニャだった。レオナルドの指から名刺を取り上げると、ポケットからボールペンを取り出し、裏に何かを書き記した。

「連絡するならこっちにして。自宅だから」

手書きの面を掲げ、もう一度レオナルドに手渡した。

「ああ？ わかった……」

レオナルドはどうにも腑に落ちないといった様子で、それを受け取った。最初から自宅の連絡先をくれればよかったじゃないか、と心の中で毒づいた。

「じゃあね。完全にふられたりしたら連絡ちょうだい。晩ごはんくらいおごってあげるから！」

ターニャは自転車にまたがり、笑いながら言った。手を振りながら走り去って行く。ようやく乗れるようになったという言葉が裏付けるように、彼女の走行はふらふらして危なっかしげだった。

「おごるって……あいつ、貧乏人のくせに何を言ってるんだ……」

レオナルドは首を傾げながら、奇妙な面持ちでつぶやいた。そして、名刺を掴んだ手をジャケットのポケットに入れると、右側の道へ足を踏み出した。

緩やかな風が吹いた。柔らかい髪がふわりと舞い上がった。頬をかすめるその温度は、まだ暖かいとはいえなかったが、少しだけ冷たさが和らいでいた。

90. 責務

「アンジェリカ！！」

ジークは声の限りに叫んだ。しかし、彼女を止めることは出来ない。次第に遠ざかっていく足音が、棘のように心に突き刺さる――。

あれから一週間が過ぎた。

ジークはまだ病院のベッドに縛り付けられたままだった。比較的、軽い骨折だった左腕は、まもなく器具が外される予定だと聞いた。だが、右手は当分ギプスのままで、両足も固定され動かすことを禁止されている。完治までにはほど遠い。

何もすることが出来ない今の状態では、母親やリックの見舞いが唯一の楽しみだった。ひとりしていると、どうしても暗い思考に陥ってしまう。誰かとたわいのない話をしている間だけは、気を紛らわすことができた。

「すまないな、あまり顔を出せなくて」

サイファは魔導省の制服のまま、ジークの病室にやってきた。仕事の合間に抜けてきたようだ。いつものように、ベッド脇にパイプ椅子を広げて座る。正面のカーテンは開けられており、少し汚れたガラス越しに、鈍色の空が広がっていた。その厚い雲の切れ目からは、わずかに太陽が顔を覗かせている。

「いえ」

ジークはベッドの上に横たわったまま返事をした。目線だけを彼に向ける。

あまり顔を出せなくて――などと言っているが、サイファは一日一回、必ずこうやって顔を見せに来ていた。彼なりに責任を感じているのだろう。もっとも、仕事が忙しいらしく、二、三の言葉を交わすだけで終わることが多かった。もちろん、ジークにそれを責めるつもりは微塵もない。むしろ、多忙な状況にもかかわらず、自分のことを気に掛けてくれることが嬉しかった。

「後始末も落ち着いてきたから、これからは時間が取れそうだよ」

「後始末……？」

あまり穏やかではない言葉の響きに、ジークはおずおずと聞き返した。

サイファは小さくくすりと笑った。ジークの反応が無性に可笑しかった。自分はよほど信用されていないらしい。彼にしたことを思えば、それも当然のことだろう。

「結界の修復、被害者への補償、その他事後処理などだね」

軽くそう答えると、膝の上で手を組み合わせた。続けて説明をする。

「結界は修復の目処が立ったよ。応急処置は完了している。これから一ヶ月かけて、徐々に元の強度へ戻していくことになった。あと、被害者との話し合いもほぼ終わった。ラグランジェ家の人間、つまり身内が多いから、あまりややこしいことにはならず済みそうだよ。不幸中の幸いといったところかな」

「そうですか」

ジークは安堵の息をついた。サイファの後始末の内容は、いたって正当なものだった。不穏なことを考えそうになっていた自分を反省した。

サイファは軽い調子で話を続ける。

「この一週間、寝る間もないほど忙殺されていてね。家にもほとんど帰っていないんだ。アンジェリカの顔も、もう三日も見ていないよ。あの子は元気にしているか？」

「あ……」

ジークは沈んだ声を落とし、表情を曇らせた。眉根を寄せて顔をそらす。

サイファは驚いたように、目を少し大きくした。

「どうした？」

「来て、ないです、一週間……」

ジークは訥々と答えた。

隣のレイチェルのところへは、何度か見舞いに行っているようだった。話の内容まではわからないが、薄い壁を通して彼女の声が微かに聞こえた。たまに笑い声も混じっていた。

そのたびに、こちらにも来てくれるのではないかと、無駄な期待をしてしまう自分がいた。病室の前の軽い足音に、痛いくらいに胸を高鳴らせていた。だが、それはいつも通り過ぎるだけで、決して扉を越えてくることはなかった。

「喧嘩でもしたのか？」

「いえ、喧嘩じゃ……なくて……」

ジークは眉間に皺を寄せた。どう説明しようかと頭を巡らせた。

「言いたくなければ聞かないよ」

サイファは安心させるように、柔らかく微笑みかけた。気にはなったが、無理に問いつめるのも不憫だと思った。何か言いにくい事情があるのだろう。ぽん、と彼の肩に手を置く。

ジークは彼を見上げた。その手から温もりが沁みてきた。不意に胸が締めつけられ、泣きたいような気持ちになった。

「俺……ダメです……ひとりでバカみたいに焦って、勝手なことばかり言って、自分の気持ちを押しつけて……」

「プロポーズでもしたのかい」

サイファは笑いながら言った。重い空気を払拭しようと、軽くからかってみたつもりだった。

しかし、ジークの反応は予想外のものだった。

「どうしてわかったんですか？」

目を見開き、きょとんとして尋ね返す。それは、肯定の返事でもあった。

今度はサイファの方が驚いた。

「本当なのか？」

ジークがこんな嘘や冗談を言う人間でないことはわかっているはずだった。それでも、確認せずにはいられなかった。それほど動揺したのだろう。彼がこのために頑張ってきたということは理解していたが、アンジェリカはまだ13歳である。いきなりそうくるとは思わなかった。

ジークは視線を落とし、自嘲の笑みを浮かべた。

「最後まで聞いてもらえませんでしたけど……」

「そうか……」

サイファは大きく息をついた。アンジェリカの考えはおおよそ理解できた。彼女はこの事件に責任を感じている。自分だけ幸せにはなれないと思ったのだろう。昨日の今日では無理からぬことだ。

だが、ジークの気持ちもわからないではなかった。

「焦るのは仕方ないよ。殺されかけたうえに、あんな話まで聞かされたんだからな。すべて私のせいだ、すまなかった」

「違います。俺が悪いんです。俺が、アンジェリカの気持ちをわかってやれなかったから……。それどころか、ぜんぶ終わったと思って、ひとり浮かれてた……最低だ……」

ジークは苦しげに胸の内を吐き出した。少し涙目になっていた。それを隠すように、顔をそむける。そして、小さくすすり上げると、弱々しい声で続けた。

「きっとアンジェリカには、俺なんかより、サイファさんの方が……」

サイファは大きく目を見開いた。そして、少し呆れたように言う。

「まだあの話を気にしているのか」

あの話とは、サイファがアンジェリカの夫になるという話である。彼自身が望んだことではない。ラグランジェ家の存続と繁栄のために、長老会が決定したことだった。ルーファス亡き今、その話も白紙に戻った。いや、戻したのだ。ジークにはまだ伝えていなかったが、ラグランジェ家どうしでの婚姻しか認めないという規則も撤廃していくつもりだった。

ジークは顔をそむけたまま、拗ねたように口をとがらせた。

「そういうわけじゃ……ただ、サイファさんの方がアンジェリカを幸せにできるんじゃないかって思っただけです」

「幸せにするよ」

サイファはさらりと言った。息を吞んで振り返ったジークを、真顔で見つめて付言する。

「ただし、父親としてね」

「あ……」

ジークの口から、はっとしたような安堵したような声が漏れた。

サイファは真剣な表情のまま、厳しい口調で問いかける。

「君はあきらめるのか？ どれだけ忠告しても引かなかったあの気概はどこへ行ったんだ」

「すみません……」

ジークは目を伏せ、消え入りそうに謝った。

サイファは小さくため息をついた。彼を奮起させようとしたが、失敗に終わってしまった。方法を誤ったのかもしれない。彼には時間が必要なのだろう。もうしばらくは、そっとしておくことにした。

「アンジェリカに伝えることはあるか？」

「……わかりません」

ジークはゆっくりと首を横に振った。伝えたい気持ちは山ほどあるが、自分には何も言う資格

はないような気がした。何を言っても説得力がないように思えた。

「伝言役はいつでも務めるよ。ゆっくり頭の中を整理するといい」

サイファは優しく言った。

ジークは胸が熱くなった。彼の穏やかな微笑みを見上げながら、わずかにこくりと頷いた。

「さあ、本題に入ろうか」

サイファは体を起こして背筋を伸ばし、気持ちを切り替えるように声を張った。

「本題？」

ジークは何気なく聞き返した。

サイファはズボンのポケットから手帳を取り出しながら答えた。

「そう、今日は君の卒業論文について聞きにきたんだ。テーマは決めたか？」

「あ、いえ……」

ジークは沈んだ声で返事をした。右手は完治までに二ヶ月ほどかかると聞いている。脚の方は、リハビリもあるため、もう少しかかるらしい。論文の締切がいつなのか詳しくは知らないが、確か三ヶ月後くらいのはずだ。とても間に合うとは思えなかった。

「私の予定もあるから、早めに取り掛かってもらわないとな」

サイファは手帳に目を落としつつ、ページを繰りながら淡々と言う。

「サイファさんの予定……？」

「なんだ、ラウルに聞いてないのか？」

本気でわかってなさそうなジークの顔を見て、サイファは少し驚いたように言った。

「私が君の論文の手伝いをするんだよ。今の君の状態では、文献を探しにいくどころか、読むこともままならないだろう。念のため、ラウルには代筆の許可ももらってある」

「え、でも……」

「もちろん、内容を考えるのは君だよ。私は君の手足になるだけだ」

「そ、そこまで迷惑は掛けられません！」

ジークはあわてて断った。手足と聞いてたじろいだ。相手はラグランジェ家当主であり、魔導省副長官である。そんな人を手足として使うなど、一介の学生にすぎない自分には出来ない。とんでもないことだ。

そんなジークの様子を見て、サイファは悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「君をこんな状態にしたのは誰だったかな？」

「それは……」

ジークは言葉に詰まった。難しい顔で考え込む。眉間には皺が刻まれていた。

サイファは、そんな彼を後押しするように畳み掛ける。

「君には卒業してもらわないと困るんだ。魔導省の内定のことを忘れたわけではないだろう？」

「でも……」

「互いのためだよ。遠慮など不要だ」

「そう、ですね」

ジークも卒業したくないわけではない。いや、卒業できなければ、彼自身も困ってしまうだ

ろう。だからといって、リックに頼むのも気が引ける。彼にもジークと同じように卒業論文があるからだ。こうなったら、腹を括ってサイファの申し出を受けるしかない。

「よろしくお願いします」

ジークはやや気後れしながら言った。その声には、まだ少しの迷いが含まれていた。サイファはにっこりと微笑みを返した。

——コンコン。

不意に扉がノックされた。

母親ではないだろう。彼女ならノックなどせずに飛び込んでくるからだ。この時間だとアカデミーに行っているはずのリックでもない。当然、アンジェリカであるはずはない。

「はい」

誰だろうと思いながら、ジークは返事をした。

それを待っていたように、静かに扉が引き開けられる。そこから姿を現したのは、レイチェルだった。寝衣ではなく、きっちりとドレスを着込んでいる。可憐な微笑みをたたえながら、軽く頭を下げた。

「早かったね」

サイファは椅子から立ち上がり、彼女へと足を進めた。細い髪を指で梳くように撫でる。

「もう準備はできたのかい？」

「ええ、荷物は部屋の前にまとめてあるわ」

レイチェルは彼を見上げ、にっこりと返事をした。そして、少し真面目な顔になると、サイファの手から離れ、ジークに向き直った。ゆっくりと一歩前に歩み出る。

「ジークさん、私、今日で退院することになりました」

「良かったですね」

ジークは微かに表情を緩めて答えた。サイファとの会話から、退院することは察しがついていた。彼女は怪我をしているわけではなく、魔導力の消耗による衰弱だけだった。回復までにそう時間がかかるものではない。

ただ、精神的に大きなショックを受け、寝込んでいると聞いていた。自分の魔導力により、あんな事故が起こってしまったのだ。そのせいで父親まで亡くなっているのだ。無理もないだろう。だが、先ほどの彼女の様子を見る限り、少なくとも表面上は元気を取り戻したようだ。

「いろいろと、申しわけありませんでした」

レイチェルはきゅっと表情を引き締めると、厳粛な声で謝罪の言葉を口にした。

「ジークさんには随分とご迷惑をお掛けしました。……お聞きになったのですよね？」

「……はい」

ジークにはそれだけしか言えなかった。複雑な表情で目を伏せる。

「言い訳はしません。すべて私の行動が起こした結果です。本当に申しわけありませんでした」

レイチェルは真摯にそう言うと、深々と頭を下げた。長い髪がさらさらと肩から滑り落ちていく。

「俺は……」

ジークは低い声でためらいがちに切り出すと、顔をそむけ、視線を窓の外に流した。軽く息を吸い、ゆっくりと言葉を繋げていく。

「俺は、アンジェリカに会えたから、だから……」

そこまで言うのが精一杯だった。それ以上は声にできそうもなかった。言おうとしていることは嘘ではない。だが、心の中にさまざまな葛藤があった。サイファへの遠慮もあった。口を結び、眉間に力を入れる。

「良かった……」

背後からの吐息まじりの声。ジークは驚いて振り向く。

「良かった、あの子のことを否定しないでくれて」

レイチェルは微笑んで言った。儂い微笑みだった。だが、声には安堵したような響きがあった。

「それだけが心配だったから……ありがとうございます」

彼女は胸に手をあて、もういちど頭を下げた。

ジークは何か言わなければと思いつつ、言葉が出てこなかった。もどかしさに眉をしかめる。顔を上げた彼女と目が合うと、ぎこちない微笑みを見せた。

「レイチェル、そろそろ行こうか」

壁に寄りかかっていたサイファが、タイミングを見計らって口を開いた。後ろから彼女の腰に手をまわすと、寄り添いながら病室を出て行った。戸口でちらりとジークに視線を流し、軽く手を挙げる。そして、後ろ手でそっと扉を閉めた。

ジークは小さく息をついた。少し疲れてしまったようだ。目を細め、象牙色の天井を見つめる。

そのとき、ふいに、扉の向こうの会話が耳に入った。

「家まで歩ける？」

「ええ」

「じゃあ、一緒に歩いて帰ろうか」

「お仕事はいいの？」

「少しくらい抜けても平気だよ」

「また部下の子に怒られるわよ」

くすくすと笑い声が混じる。

それは、本当に仲の良さを感じさせるものだった。穏やかであたたかい空気が流れている。おそらくさまざまなことを乗り越えてきたのだろう。そのうえに彼らの今があるのだ。

自分は……自分たちは、この状況を乗り越えられるのだろうか――。

ジークはガラス越しの空を見上げて、深くため息をついた。わずかに覗いていた太陽は、いつのまにか再び厚い雲に隠されていた。

リックたち最終学年生にとっては、今日がアカデミー最後の授業だった。これからは授業はなく、各自卒業論文に取りかかることになっている。

「アンジェリカ、これからジークのお見舞いに行くんだけど、一緒に行かない？」

リックはアンジェリカの席に歩み寄り、覗き込むようにして声を掛けた。

彼女は帰り支度の手を止めると、にっこりと笑顔を作って彼を見上げた。

「ごめんなさい。今日は行くところがあるから」

「今日はじゃなくて、今日もでしょう？」

リックの反対側から聞こえた、不機嫌そうな女性の声。それは、セリカのものだった。彼女はリックとともにジークの見舞いに行くことが多い。今日もそのために来ているのだろう。

「ええ、そうね」

アンジェリカは彼女に振り向くこともなく、素っ気なく答えた。まともに相手をするつもりはなさそうだった。

セリカはムツとして何かを言い返そうとしたが、リックが無言でそれを制した。そして、アンジェリカに向き直り、穏やかに尋ね掛ける。

「ジークのお見舞い、行ってる？」

もしかしたら、彼女は自分たちと一緒に行くより、ひとりで行きたいと思ってるのかもしれない。ひとりでやっているのなら、それはそれでいい。そうであってほしい——その期待を込めての質問だった。

だが、アンジェリカの返答は、期待とは逆のものだった。口を閉ざしたまま、首を横に振った。

それを見て、セリカは逆上した。

「どういふつもりなの？ 何があったか知らないけど、あんまりじゃない？」

「セリカ、僕らが口を出すことじゃないよ」

リックは落ち着いた口調でたしなめた。

だが、セリカの気持ちはおさまらなかった。かえって昂っていった。

「だって、こんなのひどすぎるわ！ ジークはずっとずっと頑張ってきた。すごく頑張ってきた。全部あなたのためなのよ？ あなたのために、あんな大怪我まで負ったのよ？ 下手すれば死んでた。しかも、それをやったのはあなたの父親っていうじゃない。少しは申しわけないと思わないの？！ 自分が自由になったら、ジークはもう用なし？！ 利用してただけ？！」

激情に突き動かされるままに、一気に捲し立てて非難した。

アンジェリカはずっと無表情でそれを聞いていた。セリカが言い終わると、鞆を閉め、椅子から立ち上がった。うつむいたまま机に手をつき、ぽつりと言葉を落とす。

「わかっているわ。私がひどい人間だってことくらい」

「どうして反論しないの？！」

「そのとおりだからよ」

「ちゃんとこっちを見て言って！」

セリカはアンジェリカの華奢な肩を引いた。

だが、アンジェリカは振り向かず、その手を払いのけた。そして、鞆を手にとると、自分からセリカに向かい合った。真剣な表情で、背の高い彼女を見上げる。

「私は、もうジークに会うつもりはない」

きっぱりとした口調だった。迷いなど感じられなかった。

セリカは小さなアンジェリカに圧倒された。彼女を説得することは不可能に思えた。何を言っても自分の意志を曲げることはないだろう。彼女の強情さは以前から知っている。おそらく、自分にはどうすることもできない。だったら、せめて――。

「……理由くらい聞かせて」

かぼそい声だった。瞳も悲しげに揺らいでいる。

だが、アンジェリカの漆黒の瞳は、強い光をたたえていた。まっすぐにセリカを見つめて言う

。

「私がそう決めたからよ」

「理由になってない！」

セリカは泣きそうになりながら叫んだ。

それでも、アンジェリカの心が揺さぶられることはなかった。

「何とでも言えばいい。気の済むまで罵倒すればいい」

そう言って、セリカの横をすり抜け、教室から出ていこうとした。

「アンジェリカ！」

リックの呼び声に、アンジェリカの足が止まった。ほとんど無意識だった。条件反射のようなものだったかもしれない。

「ジークは、きっと、いつまでも待ってるよ」

背後から聞こえたその声は、とても優しくだったが、どこか寂しげだった。

アンジェリカは胸がズキリと痛んだ。顎を引き、ぎゅっと目をつぶる。そして、その痛みを振り払うかのように駆け出すと、教室から走り去っていった。

小さくなる彼女の足音を聞きながら、セリカは額を押さえてうなだれた。

「私、随分ひどいこと言っちゃった」

「そうだね、ちょっとひどかったね」

リックは微笑みながら応じた。小さく肩をすくめて見せる。

セリカはうつむいたまま、顔中に後悔を広げた。

「あそこまで言うつもりじゃなかったのに、止まらなくなっちゃって……」

そこで言葉を詰まらせると、泣きそうに瞳を潤ませた。それでも、涙を零さないよう精一杯こらえた。自分は泣く立場にはない。

「多分、アンジェリカも苦しんでるんだと思うよ」

リックは冷静に言った。

セリカは神妙にこくりと頷いた。彼女もアンジェリカの言葉がそのまま本心だとは思っていない。きっと何か理由があるはずだ。目尻を拭い、顔を上げる。

「私たちに何か出来ることはないの？」

「うーん、難しいね……」

リックは腕を組み、首を傾げて考え込んだ。

「ずっとふたりと友達でいること、くらいかな？」

そう言って、にっこりと微笑みかける。

「……ええ、そうよね」

セリカはうつむいて、わずかに表情を緩めた。きっと、自分たちに出来ることはそのくらいしかない。しかし、それはとても大切なこと——。

「行こうか、お見舞い」

「ええ」

リックは包み込むように彼女の手をとると、病院に向かって歩き出した。

——コンコン。

アンジェリカは緊張した面持ちで、医務室の扉をノックした。

「開いている」

すぐに、中から声が聞こえた。

アンジェリカはぐっと表情を引き締めた。そっと引き戸を開け、中へ入る。

「何の用だ」

机に向かっていたラウルは、冷たく彼女を一瞥して言った。

「聞きたいことがあるの」

「何だ」

アンジェリカはきゅっと口を結び、彼の横顔を見つめた。そして、小さく息を吸い、意を決したように口を開く。

「私の髪と瞳が黒い理由。知っているんでしょう？」

「知らんな」

ラウルの返答は少しのためらいもなかった。そして、取りつく島もないくらいに素っ気ないものだった。

だが、アンジェリカは挫けなかった。そのくらいのことは想定済みである。すぐに答えてもらえるなどとは、初めから思っていない。今日は粘れるだけ粘るつもりで来たのだ。

「これが事件の始まりなんでしょう？ お父さんは隠しているけど、そのくらいわかるわ」

「ならば、サイファに聞け」

「お父さんは無理よ……ラウルなら嘘をつかないと思ったから」

「知らんと言っている。それを信じたらいいだろう」

ラウルは振り向くこともなく淡々と答えた。机に向かったまま、ペンを持つ手を動かし続けている。

アンジェリカはじっと彼を見据えた。

「ラウルは医者だから知っているはずだわ。いえ、きっとラウルが突き止めたんだわ。私がまだ

赤ん坊だった頃に」

ラウルは一瞬、手を止めた。だが、すぐに筆記を再開する。

アンジェリカはうつむき、胸元をぐっと押さえた。

「私、遺伝子の異常なの？ 長くは生きられないの？」

落ち着いた静かな声。だが、その中に微かな震えがあった。

再び、ラウルの手が止まった。今度は一瞬ではなかった。カタンとペンを置き、椅子をまわして彼女に向かい合った。その不安そうな顔を、険しい表情で見つめる。

「誰がそんなことを言った」

「そうとしか思えないもの。呪われているなんて非科学的なことを除外すれば、これくらいしか思い当たることがない。ひいおじいさまが事を急いだのは、私の先が短いことを知ったからよ。私が死んでしまう前に、私の魔導力を子孫に受け継がせたかったんだわ。お父さんとお母さんが、私の婚約者を決めなかったのも、私をこんなに自由にさせてくれているのも、きっと長く生きられないことを知っていたからね」

アンジェリカはほとんど確信しているような口調で言った。そして、心の中で付け加える。

——ジークだって、あんなに急いでいたし。

まだ13歳の自分にあんなことを言うのは、きっと、自分の先が短いことを知ったからに違いない。そう考えれば辻褄が合う。

ジークの気持ちは嬉しかった。しかし、自分だけ幸せになることなど許されない。自分の存在が、多くの人を不幸にしてきたのである。そして、ジークさえも不幸にしてしまう。一緒にいられる時間は長くないのだろう。だったら、もう会わない方がいい。

「何を勝手な推測ばかりしている」

ラウルは眉をしかめて言った。

「私は本当のことが知りたいの。ユールベルのときみたいに、私だけ何も知らないなんて、そんなの許されないわ。もう小さな子供じゃない。私のせいで起こったことなら、その原因を知らなければならぬのよ」

アンジェリカは一步踏み出し、胸に手をあて、必死に訴えかけた。まっすぐ彼を見つめ続ける。

だが、不意にその瞳が揺らいだ。

きっと、生まれてしまったことが罪——。

優しい両親は、それが事実であっても、絶対にそうは言わないだろう。だから、自分も絶対に口には出さないと決めた。だが、こんな子だと知っていれば、生まなかったに違いない。そのことを思うと、胸が押しつぶされそうになる。

ラウルは腕を組み、ため息をついた。

「おまえの言っていることが的外れだということだけは、はっきりと言える」

「的外れ……ってことは、本当のことを知っているのね?!」

アンジェリカは目を見開いて身を乗り出した。

「そうではない。おまえの遺伝子に異常などない、それがわかっているというだけだ」

ラウルは面倒くさそうに答えた。くるりと椅子をまわし、机に向かう。

だが、アンジェリカはその答えに納得しなかった。両手を祈るように組み合わせ、ラウルの横顔に懇願する。

「お願い、ラウル。私、聞いたことは誰にも言わない。もちろん、お父さんにもお母さんにも。自分の胸だけに留めておくわ。だから……」

「知らんと言っている。信じるも信じないもおまえの勝手だ。これ以上おまえに言うことはない」

ラウルは、鞆に書類を投げ込みながら、苛ついた口調で突き放した。

アンジェリカは暗く表情を沈ませた。眉根を寄せながら目を伏せる。こうなってしまっっては、もう何を聞いても答えてはくれないだろう。これが、最後の望みだったのに――。

「もう出る。私はこれから往診に行く」

「往診？ もしかして、あの事件の……？」

「そうだ」

ラウルは鞆の口を閉めて立ち上がった。

アンジェリカははっとして、彼の袖を掴んだ。思いつめたような表情で見上げる。

「私も連れて行って、手伝わせて！」

「断る。とっとと帰れ」

ラウルは冷たく言い捨てた。鞆を取り、医務室を出ようとする。

だが、アンジェリカは手を離さなかった。袖を掴んだまま、彼を見上げ、懸命に訴えかける。

「私のせいなのよ？ 何か出来ることがあれば、少しでも償えるなら……」

「おまえに責任などひとつもない」

「私の存在のせいで起こったのは事実でしょう？」

ラウルは迫力のある眼差しで、ギロリと睨み下ろした。

「迷惑だ、帰れ」

凄みをきかせた低音で唸るように言う。

「これは人の命を預かる仕事だ。思いつきの自己満足などに付き合ってもらえん」

それは、反論しようのない正論だった。アンジェリカの表情が翳った。

「確かに思いつきだし、自己満足かもしれない……」

そう言いよどみながら、ゆっくりと視線を落とした。黒い髪がはらりと頬にかかり、横髪が表情を隠していく。

「……でも！」

体の奥から絞り出したような声。

彼女は勢いよく顔を上げた。そこにあったのは、迷いを払拭した真摯な双眸だった。

「私、一生懸命に、真剣にやるわ。半端な気持ちなんかじゃない」

ひたむきに力説しながら、袖を掴む手に力を込めた。白い布に深い皺が刻まれる。

だが、ラウルは表情を凍らせたまま、ますます冷酷に拒絶する。

「医学の知識どころか、用具や薬品の名前すらわからない素人など役に立たん。足手まといだ」

「勉強するわ！役に立てるよう努力するから」

アンジェリカはしつこく食い下がった。口をきゅっと結び、大きな瞳で訴えかける。

ラウルは眉をしかめた。彼女は何を言っても引き下がる気配がない。こうなったら行動で示すしかないだろう。この小さな手を振り払って、完全に無視をしてしまえば――。

だが、体が動かなかった。なぜか実行することが出来なかった。いや、「なぜか」ではない。その理由は自分でもわかっていた。深くため息をつく。

「……明日からだ。今日は帰って勉強しろ」

疲れたようにそう言うと、本棚に手を伸ばして一冊の本を取り、アンジェリカに投げるように渡した。それは、看護技術の本だった。

「最低限のことは覚えてこい。使えないとわかれば、いつでも切る。いいな」

「わかったわ」

アンジェリカはその本をぎゅっと抱えた。そして、時間が惜しいとばかりに、急いで戸口に向かった。そこできると振り返ると、真剣な表情でラウルを見つめた。口元にわずかな笑みをのせる。

「ありがとう、ラウル。チャンスをくれて」

そう言うと、スカートをはひらめかせながら、駆け足で医務室を出ていった。

――今は、自分の出来ることをするだけ。

本当のことは聞けなかったが、果たすべき務めが見つかった。ラウルの言うように、自己満足なのかもしれない。自責の念から逃れるための行動なのかもしれない。それでも、少しでも役に立てるのならば、行動を起こす価値はあるはず――彼女はそう信じていた。

アカデミーの外に出ても、足を止めることなく走り続けていく。頬を打つ風はまだ冷たかったが、今の彼女には心地よいくらいだった。

91. 自分の足で

「やあ、ラウル」

サイファは軽く手を挙げながら、ラウルの医務室へ足を踏み入れた。ニコニコと人なつこい笑顔を浮かべている。

机に向かっていたラウルは、それを一瞥すると、ムツとした表情を見せた。サイファを目にしたときのいつもの反応である。そして、関心がないと云わんばかりに、すぐに手元に視線を戻すと、再びペンを動かし始めた。

「何の用だ」

「ジークの卒業論文を持ってきたよ。提出はおまえのところでいいんだろう？」

サイファは右脇に携えていた水色のファイルを、表紙を見せるように掲げた。それを机の隅にそっと置く。

ラウルはその表紙にちらりと目を走らせた。

「ずいぶん早いな。締め切りまでまだ一ヶ月ある」

「頑張ったからね。ジークも私も」

サイファは腰に手をあて、満足そうに言った。まるで褒められたがっている子供のようなだった。もちろん、目の前の先生がそう簡単に優しい言葉を掛けてくれないことは、とてもよく知っている。

案の定、ラウルは何も言わなかった。無表情でファイルを手に取ると、中央あたりを開いた。目だけを左右に動かし、文字を追っていく。

「なかなか新鮮な体験だったよ。論文など書いたことがなかったからな」

サイファはそう言いながら、ベッドの端に腰を下ろした。布団に倒れ込みたがっている体を両手で支えると、焦茶色の長髪がかかる広い背中に視線を流す。

ラウルは何の反応も示さなかった。口を閉ざしたまま論文を読み続ける。

だが、不意に眉を寄せた。

パタンとファイルを閉じると、椅子をくるりとまわし、正面からサイファを睨みつけた。

「これはおまえが書いたものだろう」

手にしていたファイルを掲げ、その表紙をパンと軽く叩いた。

「代筆は認めると言っただろう？」

サイファは体を起こし、不思議そうに言った。

ラウルは、彼がとぼけているのだと思った。苛立ちながら言い返す。

「そうではない。この文章はおまえのものだ。ジークの文章はもっと垢抜けない」

サイファはそれを聞いて、ようやくラウルの言わんとすることがわかった。ふっと笑みを漏らす。そして、ゆっくりと目線を上げると、凜と表情を引き締めた。鮮やかな青い瞳は、まっすぐにラウルの眼差しを捉えている。

「内容については、いっさい口出ししていない。すべてジークが考えたものだ。私は彼の言ったとおり文字を書いたにすぎない」

彼の言葉には、少しの迷いも揺らぎも窺えない。真剣そのものだった。

だが、次の瞬間には、一転してカラリとした笑顔を見せた。

「まあ、文章の書き方については、多少アドバイスしたけどね」

先ほどとはまるで違う、きわめて軽い調子で言い足した。

ラウルは眉をひそめた。無言で彼を睨みつける。おそらく「多少」ではなく「相当」口を挟んだはずだ。そうでなければ、ここまで急激に文体が変わるはずがない。

「いいだろう？ そのくらい」

サイファはまったく悪びれることなく了解を求めた。

「……まあいいだろう」

ラウルはため息まじりに言い、ファイルを机の上に置いた。いくらサイファが責任を感じているからといって、ジークの代わりにすべてを引き受けたとは考えにくい。たとえサイファが申し出ても、ジークがそれを許さないはずだ。おそらく、サイファの言うように、文章を書く上でのアドバイスを行っただけなのだろう。サイファには腹が立っていたが、冷静に考えれば許容範囲内である。

「これでひとつ肩の荷がおりたよ」

サイファは両手を上げて伸びをしながら、そのまま仰向けに倒れ込んだ。パイプベッドが軋み、白いシーツに緩やかな皺が走る。

「二日ほど徹夜でね。そろそろ限界だ。しばらく休ませてくれ」

そう言うと、寝転んだまま濃青色の上着を脱ぎ始めた。

ラウルは眉根を寄せ、睨みつける。

「これは病人のためのベッドだ」

「一眠りして病気を未然に防ぐんだよ」

サイファは涼しい顔で屁理屈を捏ねた。脱いだ上着を隣のベッドに放り出し、革靴を脱ぐと、布団に入って横になった。

「一時間後に起こしてくれ」

「ふざけるな。魔導省の仮眠室へでも行け」

ラウルは机を叩き付けるようにして立ち上がった。

だが、サイファの返事はなかった。すでに目は閉じられている。冗談ではなく、本当にここで眠るつもりのようなようだった。

ラウルはため息をついた。レイチェル同様、サイファも言い出したら聞かない性格だ。これ以上の応酬も面倒なだけである。もう諦めることにした。ベッドのまわりにクリーム色のカーテンを引き、脱ぎ捨てられた上着をハンガーに掛ける。

「悪いな」

カーテンの向こうから声が聞こえた。その声はいつもの明瞭さを欠いており、彼が眠りに落ちかけていることを感じさせるものだった。

「ええっ？ 卒論、もう出来たの?!」

リックの素っ頓狂な声が、病室を突き抜けた。間違いなく廊下まで響いただろう。

「声、大きすぎよ」

隣のセリカが、片眉をひそめながらたしなめた。立てた人差し指を、唇に当てて見せる。

リックは肩をすくめ、申しわけなさそうに笑った。

「それで、提出はしたの？」

「ああ、ついさっきサイファさんが持っていったところだ」

ジークは淡々と答えた。パイプベッドの上で、無造作に脚を投げ出して座っている。

すでに、骨折は治癒していた。だが、入院生活は続いている。リハビリのためだ。右腕のギブスはきのう外されたばかりで、まだしっかりと字は書けない。両足も簡単なリハビリを始めたところで、歩行訓練はこれからである。

「すごいね、きっと一番乗りだよ」

リックは両手を握りしめ、興奮ぎみに言った。自分のことのように喜んでいる。

だが、当の本人は醒めたままだった。

「まあ、他にやることなかったしな」

斜め下に視線を落とし、素っ気なく言う。

「それに、サイファさんの都合もあったんだ。明日からあんまり時間がとれなくなるみたいで、できれば今日までに仕上げたいって急がされたんだよ」

「サイファさんも大変そうだよな」

リックは微笑んだ。詳しいことを知っているわけではなかったが、ラグランジェ家当主として、魔導省副長官として、また個人としても、他にやらなければならないことがたくさんあるだろうことは想像がついた。

ジークは真面目な顔で頷いた。

「あの人はホントすげえよ。忙しいはずなのに、申しわけないくらい、いろいろやってくれるんだ。それも、何もかも早くて的確だしな。曖昧な頼み方をしても、ドンピシャのいい文献を持ってきてくれるし、文章についてのアドバイスまでしてくれたし、清書するのもめっちゃくちゃ早かったし……仕事もしてるのに、そんな時間どこにあるのか不思議なんだよな。もしかしたら、あんまり寝てねえのかも」

「ジークにしたことを思えば、そのくらい当然だわ」

セリカは腕を組み、刺々しく言った。

ジークはうんざりして顔をしかめた。

「いつまで根に持ってんだよ。だいたいおまえには関係ねえだろ」

「ジークが根に持たなさすぎるのよ。自分を殺そうとした人を褒めてどうするわけ？」

「うっせえな。俺が納得してんだからいいんだよ」

面倒くさそうに言い捨てる。

セリカはため息をついた。彼の思考がさっぱりわからなかった。好きな人の父親とは仲良くしておいた方がいいとか、そういう打算ならまだ理解できる。だが、ジークの場合は違う。間違いなく本気で尊敬している。いったいどこまでお人好しなのだろうか。無性に腹立たしくなって

くる。

リックはそんな彼女をなだめるように、背中に優しく手を置いた。

「セリカ、ジークがいいって言うんだからさ」

彼女はじとりとリックを睨んだ。彼までジークやサイファの味方をしたことが面白くなかった

。

「人のこと気にかけてる場合？ あなたの卒論はどうなのよ。手伝ってくれる人はいないわよ。

私だって手伝ってあげないんだから」

ツンとして口をとがらせる。ほとんど八つ当たりである。

だが、リックは笑顔でそれを受け止めた。柔らかい口調で答える。

「大丈夫だよ。締切までには間に合う予定」

「あいつは……ちゃんとやってんのかな」

ふいに、ジークがつぶやいた。

「ラウルの手伝いで手一杯なんてことはねえのかな」

片膝を立て、その上で頬杖をつくとき、ぼんやりと窓の外に視線を流す。青い空に、筋状の白い雲がゆっくりと流れている。

アンジェリカがラウルの手伝いをしていることは、サイファから聞いていた。おそらく例の事故に責任を感じてのことだろう。どんな思いでそれを申し出たのか、どんな思いで往診にまわっているのか、想像すると胸が痛い。

「それは大丈夫だよ。もうすぐ提出できるって言ってた。ラウルの手伝いも、今は週に二回くらいみたいだし」

リックは努めて明るく言った。

「そうか」

ジークは小さく安堵の息をつき、表情を緩めた。

だが、今度はセリカが顔を曇らせた。

「まだ、一度も来てないのね、アンジェリカ」

「来ないって言ったら来ねえだろ、あいつは」

ジークはあきらめたような口調で言った。

セリカには、それがかえって痛々しく感じられた。その気持ちを押し隠し、おどけたように肩をすくめる。

「ホント強情よね。アンジェリカだってジークに会いたいはずなのに」

「さあ、どうだろうな……それでもねえのかもな……」

ジークはうつむき、寂しげに自嘲の笑みを浮かべた。

思い返してみれば、いつも自分が勝手に盛り上がっているだけで、アンジェリカはいつも冷静だった。自分にもリックにも、同じように接していた。そして、本人の口から何を聞いたわけでもない。考えれば考えるほど自信がなくなってきた。自分が滑稽に思えてきた。

「大丈夫だよ、信じようよ」

「そうよ、弱気になるなんてジークらしくないわ」

ふたりは口々に励ました。何の解決にもならない言葉だったが、その気持ちが嬉しかった。

「ああ、そうだな」

そう答えて、微かな笑顔を見せた。それが、今の彼にできる精一杯の感謝の表現だった。

「一時間、過ぎたぞ」

ラウルは椅子から立ち上がり、ベッドの方へ歩いていった。薄いクリーム色のカーテンを開く。シャッと軽い音が医務室に響いた。

サイファは無言で体を起こした。まだ眠そうだ。ぼんやりした表情で腕時計を見る。

「ちょうど一時間だ」

「おまえが一時間で起こせと言った」

「律儀だな」

笑いを含んだ声で言う。

ラウルは気色ばんだ。カーテンレールに掛けてあった上着を、ハンガーごと投げつける。

「さっさと仕事に行け」

「その前に、ジークのところへ卒論提出の報告に行ってくるかな」

サイファは靴を履き、上着を抱えてベッドから立ち上がった。

ラウルは腕を組み、睨むように彼を見た。

「おまえ、ジークにばかり構っていていいのか」

「それは嫉妬か？」

サイファは顔を上げ、からかうような挑戦的な笑みを向ける。

ラウルは眉をしかめ、不快感をあらわにした。苛つきながら口を開く。

「自分の娘のことも気にかけてということだ」

予想外の言葉に、サイファは驚いて目を見張った。

「めずらしいな、おまえがそんなことを言うなんて」

上着をばさりと強く振ってから、マントのように背中にまわし、腕を伸ばして袖を通す。

「そういえば、今、おまえの手伝いをやってるんだってな。半端なことはしない子だ。役に立っているだろう？」

「元々ひとりでまわるつもりだった。いなくても困りはしない」

ラウルは愛想なく答えた。

サイファはくすりと笑った。素直に答えていないが、否定もしていない。遠まわしに認めているようなものだった。追及して困らせようかとも思ったが、とりあえず今はやめておいた。これ以上、本題から逸れるのは本意ではない。

「アンジェリカのことは、もちろん気にかけているよ。あの事件に責任を感じていることも知っている。だが、あの子はそれを乗り越えようとしているだろう？ 自分の意思で、自分の足で立って前に進んでいる。だから、余計なことはせず、見守っているんだよ」

「責任を感じているだけならいいがな」

何か含みのある言い方だった。

サイファは手を止めた。合わせようとしていた上着の前がはらりと開く。

「どういう意味だ？」

だが、ラウルは答えを返さなかった。腕を組んだまま、眉ひとつ動かさない。

「知ってることがあるなら言えよ」

サイファは険しい表情で詰め寄った。青く燃えるような瞳で、鋭く睨めつける。だが、その奥には不安の影が揺らいでいた。

ラウルはじっと探るように見つめ返した。

「アンジェリカが言っていたことだが」

そう前置きをして、静かに話し始める。

それは、以前アンジェリカがラウルを問いつめたときに語ったものだった。自分は遺伝子の異常を抱えていて、そのせいで髪や瞳の色が黒いのだと。そして、長くは生きられないのだと——。彼女が口にした言葉を、ラウルは漏らさず伝えていく。

サイファは黙って聞いていた。腕を組み、眉根を寄せる。そして、話が終わると、小さくため息をついた。

「そんなことを考えていたのか……」

困惑と苦渋を滲ませながら、独り言のようにつぶやく。

「突拍子もないが、筋は通っているな」

破綻している論理なら簡単に崩せるが、一応、矛盾なく組み立てられているのが厄介だ。しかも、ラウルの口ぶりだと、そうとう強く思い込んでいるらしい。生半可に対峙したのでは、こちらが玉砕しかねない。

組んだ腕をほどき、両手を腰に置くと、ラウルを見上げて尋ねる。

「それで、おまえはどう対応したんだ？」

「知らんと突っぱねた」

ラウルは無表情で簡潔に答えた。

サイファは薄く笑った。

「まあ、そうするしかないよな。それが正解だよ。おまえの下手な嘘では、必ず綻びが出るからな」

「ならば、おまえが上手い嘘をついて何とかしろ」

「難題だね。でも、あんな思い違いをさせたまま、放っておけないよな」

真面目な顔でそう言いながら、手早く上着の前を閉め、詰襟のフックを掛けた。前髪をさらりと掻き揚げる。

「何かいい策がないか考えてみるよ。おまえは知らん振りを通せ」

「言われなくてもそうする」

ラウルはムツとして言った。

サイファはふっと表情を緩めると、手を振りながら医務室を出て行った。

翌日——。

その日はラウルの往診の日だった。

本来、ラウルの仕事は医務室での診察のみである。だが、サイファの依頼により、例の事件の被害者を往診することになった。基本的には、入院するほどではない者、退院したが全快していない者をまわる。一回の巡回につき、二、三箇所ほどだ。初めの頃はほぼ毎日まわっていたが、順調に回復した者も多く、今では週に二回ほどになっていた。そろそろ週一回にしても良さそうなくらいだった。

往診にはアンジェリカが同行した。被害者にはラグランジェの人間も多く、「呪われた子」である彼女には、嫌悪の眼差しを向けられることが度々あった。また、ラグランジェ以外の人間からも、別の理由で嫌悪されることが何度もあった。爆発事故の原因については、魔導の実験中の過失ということになっていたが、それを起こしたのがラグランジェ家であることは本家も認めており、公式発表もされている。被害者の前に姿を現せば、怒りをぶつけられるのは当然のことといえる。

彼女はどんな目で見られても、どんな罵声を浴びせられても、ただひたすら耐えていた。事件のことを責められれば、頭を下げて謝罪した。すべては自分の責任だと思っているからだろう。そのうち耐え切れなくなり、また長い眠りに陥ってしまうのではないか——ラウルはそう危惧したが、彼女にその兆候は見られなかった。

往診を続けるうちに変化が現れた。アンジェリカにではなく、周囲の方にである。彼女に対する態度が軟化したのだ。もちろん、そうでない者もいる。だが、半数以上は変わったといってもいい。それは、まぎれもなく彼女の真摯な態度によるものだった。

コンコン。

医務室の扉がノックされた。

「入れ」

ラウルは頬杖をついたまま、無愛想に返事をした。

ガラガラと扉が開く。

そこから姿を現したのはアンジェリカだった。往診に同行するために来たのだ。軽い足どりで中に入って行く。

彼女を一瞥すると、ラウルは机に手をつけて立ち上がった。床に置いてあった鞆を手に取り、椅子の上に荒っぽく投げ置いた。机の上にはカルテらしき書類が広げられている。どうやらこれから準備をするようだ。

「来るの、少し早かったかしら」

「座って待っている」

「ええ」

アンジェリカは、壁に立てかけてあったパイプ椅子を広げ、行儀よく座った。両手をきちんと膝の上にのせ、背筋をピンと伸ばし、大きな瞳でラウルを見つめる。

「卒業論文は進んでいるか」

ラウルは手を動かしたまま、唐突に尋ねた。

「もうすぐ提出できるわ」

アンジェリカはにっこりと微笑んだ。

「ジークはもう提出したのよね？」

「……誰に聞いた」

ラウルは手を止めて彼女に振り向いた。まさか、彼女がその話題を振ってくるとは思わなかった。しかも、何の屈託もないように見える。

「リックが教えてくれたの。きのうでしょう？ 一番乗り？」

「そうだ」

「すごいわね」

アンジェリカは嬉しかった。ジークはしっかりと頑張っているのだ。両手両足が不自由な状態で、誰よりも早く仕上げるなど、並大抵のことではない。もちろん、サイファが手伝ったことは知っていたが、それでも彼の努力がなければ叶わなかっただろう。自分も負けてはいられない、頑張らなければ——心の中で決意を新たにした。

「今日はどこへ行くの？」

機嫌よく弾んだ声に、ラウルは短い返答で応じる。

「病院だ」

「えっ？」

「ジークが今日から本格的にリハビリを始めた。その様子を聞きに行く」

机の上に広がっていたカルテを、ファイルにまとめて鞆に入れる。

「でも、往診って、病院には行かないんじゃない……」

アンジェリカはうろたえた。胸を押さえ、顔を曇らせる。

ラウルは無表情のまま、じろりと冷たい目を向けた。

「何だ？」

「……………」

アンジェリカは彼の視線から逃げるように背中を丸めた。何も答えられなかった。

「嫌なら帰れ。患者を選び好みする奴に用はない」

ラウルは凄みのある重低音で突き放した。

アンジェリカは顔を上げ、強気にキッと睨んだ。

「そんなこと言ってない。行くわ」

力を込めてそう言うと、椅子から立ち上がる。そして、小さな口をきゅっと結び、まっすぐにラウルを見つめた。意志の強そうな漆黒の瞳には、小さな決意の光が宿っていた。

リハビリ室は明るかった。大きなガラス窓から自然光を採り込む設計になっている。

ほとんどずっと病室に縛り付けられていたジークは、その開放感に気分が高揚した。ここなら気持ちよくリハビリに打ち込めるだろうと思った。

「ジーク、調子はどうだい？」

「あ、先生」

リハビリ室にジークの担当医が入ってきた。清潔感のある短髪に、黒のタートルネック、その上に白衣を身に着け、柔和な笑顔を浮かべている。まだ若い。20代後半くらいだろう。彼もアカデミー出身だと聞いた。そのこともあって、ジークは彼のことを良き先輩のように感じていた。

「頑張ってるね。無理してるんじゃないか？」

「大丈夫です。俺、鍛えてましたから」

ジークは歩行訓練の足を止め、手すりにつかまったまま元気よく答えた。だが、隣の若いトレーナーは、眉をひそめて口を挟んだ。

「無理しすぎなんですよ。もう二時間ぶっ続けで、休憩さえ取ろうとしない。初日からこれじゃ、体がもちませんよ。僕の言うことは全然聞かないし……先生から何か言ってやってください」

担当医は、彼をなだめるように笑顔で頷くと、ジークの肩にぽんと手をのせた。

「そんなに焦っちゃいけないよ」

「平気です。俺、一刻も早く、自分の足で歩けるようになりたいんです。走れるようになりたいんです」

ジークは思いつめたように熱っぽく言葉を重ねていく。

だが、担当医がそれを遮った。

「ん？ ちょっと顔が赤くないか？ それに汗も……」

「あ、それは体を動かしたからですよ」

顔を覗き込んできた担当医を、ジークは上体をひねってかわした。

そのとき――。

「あっ！！」

部屋中に響き渡るほどの大声。

担当医はジークの視線を辿るように振り返った。その目に映ったのは長身の人物――ラウルだった。入口からまっすぐこちらへ足を進めている。

「テメーずいぶん久しぶりだな。二ヶ月もほったらかしかよ」

ジークは前のめりになりながら、乱暴な言葉で噛みついた。

「おまえの治療はこの病院に任せてある」

ラウルは事も無げに答えた。

それを聞いて、ジークはますます頭にきた。

「少しは責任、感じてねえのかよ。元はといえば全部テメーのせいだろう。サイファさんは、毎日、来てくれてるぜ」

「私の顔など見たくないだろう」

「ああ、見たくねえよ！ けど、そういう問題じゃなくて、気持ちの問題だって言ってんだよ！」

感情的に捲し立てたせいか、頭がくらくらしてきた。おまけに息苦しい。

「今さら何しに来たんだよ……ったく……」

疲れた声でぼそりと言うと、頭を押さえ、ふうと息を吐いた。

そのとき、一瞬、ラウルの後ろに小さな人影が見えた。

ドクン、と心臓が飛び跳ねる。

まさか、今の……。

体を傾け、首を伸ばし、その正体確かめる。

「久しぶり、ね」

懐かしい声、夢にまで見た姿——。

アンジェリカだ。

彼女は、ぱつが悪そうなきこちない笑顔を浮かべていた。ジークに見つかり観念したのか、ラウルの後ろに隠れるのをやめ、遠慮がちに出てきた。薄いピンク色のブラウスに、紺色のカーディガンを羽織っている。短めの白いスカートがふわりと揺れた。

「あ……アンジェリカ……」

ジークは頭が真っ白になった。呆然と彼女を見つめる。そして、何かに操られているかのように、手すり伝いに一步、また一步とふらふら足を進めていく。

「ちょっ……あの……」

アンジェリカは困惑して後ずさった。

ジークは歩みを止めなかった。手すりを放し、心もとない足どりで彼女に向かう。

だが、彼の足はそれに耐えられるほど回復していなかった。

床につまづき、膝がガクリと折れた。

ぐらりと視界が揺れる。

彼の体は斜めにつんのめった。

「ジーク！」

アンジェリカはとっさに地面を蹴った。倒れ込むジークの体を受け止める。しかし、その重みに耐えかね、彼を抱えたまま崩れるように床に座り込んだ。

「だ……大丈夫？」

「やっとな……つかまえた……」

ジークは苦しげに、荒い息を吐きながらそう言うと、彼女の背中に腕をまわした。ぎゅっと力を込める。アンジェリカの首筋に、熱い吐息がかかった。

「ジーク……ク……？」

背中の手がだらりと落ちた。頭の重みが肩にのしかかる。

アンジェリカははっとした。

「意識をなくしてる。それに、すごい熱だわ」

助けを求めるように、ラウルを見上げた。

彼は素早くジークを引き離すと、額に大きな手をのせて熱を診た。そして、その体を抱えて立ち上がる。

「病室で休ませる。501号室か？」

「あ、はい、エレベーターで行きましょう」

担当医はそう返事をする、すぐに誘導を始めた。

ジークを抱えたまま、ラウルは彼について歩く。アンジェリカも小走りで、その後を追う。ラ

ウルの腕の中でぐったりするジークを見つめながら、彼女は心配そうに顔を曇らせた。

「大丈夫なの？」

「たいしたことはない」

ラウルは感情なく言った。

「急激に無理をしたせいで、疲れが出たのだろう。こいつは限度を知らん奴だからな」

「すみません」

担当医は申しわけなさそうに謝った。少し落ち込んでいるような声だった。

ラウルはジークをベッドに寝かせ、汗を拭いた。

ジークの顔はまだ熱を帯びているようだった。息も少し苦しそうだ。ラウルはたいしたことはないと言っていたが、それでもアンジェリカの不安は拭えなかった。祈るように両手を組み合わせる。

「おまえはそいつに付いている」

「わかったわ」

アンジェリカが真剣な顔で頷くと、ラウルは担当医とともに出て行った。リズムの違うふたつの足音が、次第に遠ざかっていく。

足音が聞こえなくなると、静寂だけが残った。奇妙なくらいに音がしない。この階には他の入院患者はいないのかもしれない。そう思えるくらいだった。

アンジェリカはベッド脇のパイプ椅子に、音を立てないようそっと腰を下ろした。彼の火照った顔をじっと見つめる。胸がズキリと痛んだ。

——ごめんなさい、ジーク。

心の中で詫びた。ラグランジェの問題に巻き込んでしまったこと、こんな目に遭わせてしまったこと、そして、ずっと会いにできなかったこと——彼には謝るべきことが山のようにある。いくら謝罪しても足りない。

だが、どうやって償えばいいかわからなかった。出来ることなら償いたい。だが、自分の命が残り少ないのだとしたら、軽率な行動はすべて彼を傷つけることになる。自分に出来るのは、もう彼に会わないこと。それだけ。そう思っていたのに……。

彼女は固く口を結び、膝の上にのせた両手をぎゅっと握りしめた。

それから一時間ほどが過ぎた。

病室の扉が静かに開き、そこから担当医が入ってきた。振り返ったアンジェリカに、にっこりと微笑んで尋ねかける。

「どう？」

「まだ眠っているわ。だいぶ落ち着いたみたい」

彼女の言葉どおり、ジークは規則正しい寝息を立てていた。顔はまだ赤かったが、息苦しそうにはしていない。

「ラウルは？」

今度はアンジェリカが尋ねた。

「ジークの骨折の経過とリハビリの様子を聞いてから帰ったよ。君はジークが落ち着くまで付き添うようになって」

「そう」

彼女は素っ気なく答えて、立ち上がった。

「もう落ち着いているから、私も行くわ。あとはお願いします」

「起きるまで待ってあげたら？」

担当医は穏やかに微笑んで言った。

「いえ……」

アンジェリカはとまどいながら目を伏せた。

「ジークは君に会いたがっていたようだけど」

「……会うわけには、いかないから」

「どうして？」

「中途半端な思い出なら、ない方がいいでしょう？」

下を向いたままそう言う彼女を、担当医は怪訝に見つめた。

「そうかな？」

考えを巡らせながら首を傾げ、自分の細い顎に手を添える。

「君たちの事情はよくわからないけれど、思い出がないことの方が悲しいんじゃないかな？」

「見解の相違ですね」

アンジェリカはそう言って、にっこりと満面の笑顔を作って見せた。緩やかにお辞儀をすると、病室から出て行こうとする。

「逃げているのかい？」

後ろから投げかけられた担当医の言葉に、彼女の足は止まった。

——逃げている？ 私が……？

アンジェリカの鼓動は次第に強くなっていく。胸が壊れそうに痛い。頬を一筋の汗が伝った。

——違う、そうじゃない。こうするしかないの。事件の責任は私にあるから。そして、何よりジークを傷つけないから……。

ずっとそう思ってきた。そのつもりだった。

なのに、たった一言で、こんなにも心が掻き乱されている。

それは、彼の言ったことが真実だからではないのだろうか？

本当は、自分が傷つきたくないだけ、怖がっているだけでは——。

「ごめん」

担当医の謝罪が、彼女を現実に戻した。頬の汗を手の甲で拭う。

「ジークのこと、お願いします」

背中を向けたまま、感情を抑えた声で言った。

担当医は華奢な後ろ姿を見つめた。

「ジークに伝えることはある？」

「……無理しないで、って」

アンジェリカはそっと扉を開けると、振り返ることなく出て行った。五歩を歩き、十歩を早足で歩き、そこからは全力で駆け出した。

ジークは目を覚ました。

「あれ？ 俺……」

状況が把握しようと、ぼんやりとあたりを見まわす。見慣れた天井、見慣れた窓の外の景色、薄汚れた自分の鞆、図書室で借りっ放しの本——。ここが自分の病室であることはわかった。

少し離れたところに、担当医が足を組んで座っていた。

「目が覚めたかい？」

人当たりのよい微笑みをジークに向ける。

「熱を出して倒れたんだよ。やっぱり無理しすぎてたね」

ジークは言われてようやく思い出した。ガバリと勢いよくシーツを捲り上げながら飛び起きる。

「アンジェリカは?!」

「もう帰ったよ。しばらくそこに座って君を看ってたんだけどね」

担当医が指差したのは、ジークのすぐ隣に広げられたパイプ椅子だった。今は誰も座っていない。夢のあとのような空虚な空間。

だが——。

「夢、じゃない……」

広げた両の手をじっと見つめる。あのときの感覚が、感触が甦ってくる。この腕で、この体で、確かに抱きしめたのだ。ようやく捕まえた、もう離さない——そう、思った。

しかし、それはほんの一瞬のことだった。感覚が残っていなければ、ただの幻想と区別できなかったかもしれない。せめて一言、二言でも言葉を交わしたかった。あんなタイミングで意識をなくすなど、自分の情けなさに涙が出そうだ。ギリ、と奥歯を噛みしめる。

「伝言があるよ」

「えっ？」

ジークの心臓がドクンと強く打った。聞きたいけれど、聞くのが怖いような気がした。

そんな彼の気持ちを知ってか知らずか、担当医はさらりと言う。

「無理しないでって」

「あ、ああ……」

ジークは拍子抜けしたような声で返事をした。

「おまえが逃げるから無理するんじゃないか」

うつむいてシーツを握りしめ、苦笑しながら小さく独り言をつぶやく。

「彼女、ラグランジェ家のお嬢さんだよな？ どういう関係？」

担当医は微笑みを保ったまま、穏やかに尋ねかけた。

「アカデミーのクラスメイトです。……それだけです」

ジークは低い声で答えた。それ以外に答えようがなかった。

「彼女とはもうすぐ会えなくなるの？」

「えっ？」

担当医の質問に、きょとんとした顔を上げる。もうすぐ会えなくなる、などという、まるで今は普通に会っているみたいだ。彼女とは二ヶ月間ずっと会えていなかった。質問と現実がちぐはぐで、頭が混乱した。

そんな彼を見て、担当医は自分の勘違いだったのかもしれないと思った。自信がなさそうに説明をする。

「彼女がそんなようなことを言ってたから……中途半端な思い出はない方がいい、だから会うわけにはいかない、とか……」

「なんだよ、それ……」

ジークはそう言ったきり絶句した。膝を立て、頭を抱える。

彼女の結婚話はなくなったと聞いていた。アカデミー卒業後には会えなくなるというのも、当然それとともに白紙に戻ったはずだ。なのに、なぜ……。

サイファからは何も聞いていない。隠しごとをされているのだろうか。嘘をつかれているのだろうか——彼に対する不安と疑念が渦巻いた。

92. 本当のこと

翌朝、ジークは早朝に目が覚めた。

高熱のため、昨日は夕食も摂らないうちに眠った。そのため、目が覚めるのも早かったようだ。時間的には十分すぎるほど眠ったはずだが、疲れはとれていない。ただ、熱はもう下がっているような気がする。棚に置いてあった体温計に手を伸ばし、脇に挟んで計測を始める。

コンコン——。

扉がノックされた。

「はい」

少し掠れた声で返事をした。声を出したのは随分と久しぶりのような気がした。

「もう起きていたのか」

そう言いながら入ってきたのは、サイファだった。濃青色の制服を身に着けている。

ジークは慌てて起き上がった。こんな時間に来るのは先生か看護師だと思い込んでいたので、心の準備が出来ていなかった。

「寝たままでいいよ。ちょっと様子を見に来ただけだから」

サイファは軽く右手を上げてそう言ったが、ジークは再び身を横たえることはしなかった。上半身を起こし、彼に顔を向ける。

「倒れたって聞いたけど、大丈夫かい？」

「ちょっと熱が出ただけです。もう下がりました」

そう答えたあと、脇に挟んだ体温計のことを思い出した。そろそろ計測時間の三分だ。そっと取り出し、横に伸びた銀色の棒を目で追う。起き抜けにしてはやや高めだが、平熱といってもいい数値だった。

サイファもそれを覗き込んだ。そして、にっこりと笑う。

「焦って無理をしては、逆に遠回りになってしまうこともある。先生の言うことは聞いたほうがいいよ」

「はい」

ジークは素直に答えた。ラウルに説教されると無条件に反発したくなるが、サイファが相手だと従順になることが多い。好き嫌いもあるが、それとは別に、彼には逆らいがたい雰囲気があるのだと思う。

「じゃあな」

サイファは軽く右手を上げて、踵を返した。

「あ、あの！」

ジークは身を乗り出して呼び止めた。

サイファは振り返った。

「何だい？」

だが、ジークは何も答えられなかった。唇を噛み、うつむいている。何か言いたいことがあるが、切り出せずにいるようだ。サイファにはそれがわかったが、無理に聞き出すことはしな

った。

「あしたまた来るよ」

にっこりと笑ってそう言い、扉に向かって足を進めようとする。

ジークはとっさに彼の手首をガシッと掴んだ。かなり強い力だった。

サイファは驚いた面持ちで振り返った。

「す、すみません」

ジークは我にかえり、顔を赤らめて謝った。慌てて手を放す。自分でもこんな行動に出てしまったことに驚いた。それほど思い悩んでいたのだろう。

サイファはわずかに微笑んだ。

「言いたいことがあるんだね」

「……はい」

ジークは目を伏せ、小さく頷いた。

「あまり時間はとれないんだ。単刀直入に言ってくれるかな」

そう言ったサイファの声には、普段の柔らかさはなかった。

ジークは固い表情で話し始めた。

「アンジェリカが俺に会いに来ないのは、そのうち会えなくなるから……みたいなことを言ったらしいんですけど、それってどういう意味ですか？ サイファさん、何か知ってるんですか？」

冷静にと思っていたが、感情の起伏の激しい彼にとって、それは難しかった。口調が次第にきつくなっていった。顔を上げ、責めるような強い眼差しを向ける。

「ああ、それか」

サイファは軽い調子で言った。

やはり知っていた——ジークは頭に血が上っていく。奥歯をぎり、と噛みしめる。

「私もつい先日、ラウルに聞いたばかりなんだけどね」

ジークとは対照的に、サイファはさらりと話していく。

「どうやらあの子、自分はもうすぐ死ぬと思っているらしいんだ」

「えっ？」

ジークの目が大きく見開かれた。

「完全な思い違いだよ。自分の髪や瞳が黒いのは、遺伝子に異常があるせいだと考えているようだ」

「あっ……」

ジークは思わず声を漏らした。

その話は知っていた。一時期、自分もそれが真実ではないかと思っていたことがある。

「知っていたのか？」

サイファは驚いたように目を大きくした。

ジークは申しわけなさそうに身を小さくした。

「リックから聞いたんですけど……確か、四年生になったくらいの頃に、アンジェリカがそう言っていたらしいです。でも、すっかり忘れてて……」

「そうか、そんなに前からか……」

サイファは腕を組み、難しい顔でうつむいた。軽くため息をつき、窓際へと歩き出す。革靴がタイルの床を打ち鳴らす。無機質な音が病室に響いた。

「何とか誤解を解いてやりたいとは思っているんだけどね。いい手が、思い浮かばないんだ」

窓枠に左手をおき、ガラス越しの空を見上げた。青色の空に薄いレースのような雲が掛かっている。枯茶色の小さな鳥が二羽、目の前を横切った。

「ジーク、どうしたらいいと思う？」

ゆっくりと振り返り、薄い笑みを浮かべ、ベッドの上の彼を見つめる。鮮やかな青の瞳が小さく揺れた。

ジークは何も答えられずに目を伏せた。サイファに思いつかないものを、自分が思いつくとは思えない。自分が考えついた方法はひとつだけ——おそらくサイファもそれはわかっているはずだ。わかっていて尋ねているのだろう。決心がつかないのだ。迷っているのだ。

そして、それは自分も同じだった。アンジェリカにとって、彼女の家族にとって、それが良い方法なのかわからない。だから、それを口にすることが出来なかった。彼を後押しすることが出来なかった。

ギュッとシーツを握りしめた。力を込めた手は、わずかに震えていた。体中からじわりと汗が滲んだ。

沈黙がふたりの間に横たわる。ふたりとも身動きすらしなかった。

遠くで鳥のさえずりが聞こえた。

微かな木々のざわめきが聞こえた。

何も聞こえなくなった。

何も……。

「本当に、まいるよ」

サイファが長い静寂を打ち破った。落ち着いた声だった。

ジークが顔を上げると、彼は寂しげに微笑んでいた。

アンジェリカはゆっくりと目を開いた。それとともに、意識も現実に戻される。

「私、眠っていたのね」

額に手の甲をのせ、ぼんやりとつぶやく。独り言だ。ここは自分の部屋で、自分のベッドで、自分以外に誰もいないことは知っている。

布団も掛けていなかったことに気がつく。薄手のネグリジェ一枚で、少し肌寒い。

昨晩からずっと考えを巡らせていた。ジークのこと、事件のこと、自分のこと、そして、これからのこと——。

一睡もできないだろうと思っていた。だが、いつのまにか眠ってしまったらしい。自分は思ったよりも図々しく出来ているようだ。

だが、眠ったおかげで冷静になることができた。頭が冴えた。もういちど考えを巡らせる。

会わないのはジークのため、そう思っていたのは事実。

でも、自分が怖れていたことも事実。

ジークと一緒にいれば、その時間を手放すことに未練が生まれる。きっと死ぬことが怖くなる。恐怖心に対する恐怖を感じていた。だから、そのことから逃げていたのだ。

それは認めざるをえない。

だが、自分の気持ちを除外して考えたとしても、やはり会わない方が良いのではないか。

一緒に時間が幸せであればあるほど、いなくなってしまうからの傷が深くなる。

今、自分が身を引けば、ジークの傷はまだ浅くてすむ。

だから……。

そこで考えが行き詰まる。いや、これが結論なのだろうか。

目を細め、ベッドの天蓋を見つめる。

何かが引っかかっている。とても大切な何かが……。見えそうで見えない、手が届きそうで届かない。その何かを掴むように、額にのせていた右手を上方に伸ばした。指先が不安そうに空をさまよう。

『思い出がないことの方が悲しいんじゃないかな？』

ふいに、ジークの担当医の言葉が脳裏によみがえる。あのとき、激しく揺さぶられた言葉だ。

思い出がない？

思い出が、欲しい……？

思い出……。

突然、閃光のような何かが頭の中を駆け抜けた。

はっとして大きく目を見開く。鼓動が跳ね上がる。それを鎮めるかのように、両手を重ねてぎゅっと胸を押さえる。

そう、だった。

思い出した。

曾祖父にジークに会うなと言われたとき、自分はアカデミー卒業まで時間をくれるように懇願した。

それは、思い出が欲しかったから。

いつか、それが自分を傷つけることがあったとしても、何も無いよりはずっといいと思ったのだ。

この先、強く生きていくために、必要だと思ったのだ。

——私、自分勝手だった。

大きく瞬きをする。涙が一筋、流れ落ちた。耳を濡らす。髪を濡らす。

自分は思い出を欲したくせに、ジークには与えようとしなかった。

彼のためだなんて決めつけて。

自分が逃げるための口実にして。

今からでもまだ間に合う。会いに行かなければ――。

アンジェリカはベッドから飛び降り、ネグリジェを脱ぎ捨てた。

コンコン――。

本日二回目のノックだ。

ジークはパジャマからジャージに着替え終わったところである。これから歩行訓練のため、リハビリ室に向かうつもりだった。

「はい？」

少し語尾を上げて答える。

こんなに朝早くに誰だろうと思った。サイファは出て行ったばかりだ。今度こそ担当医か看護師だろうか。

ガチャ――。

そろりと遠慮がちに扉が開く。

「えっ……？」

ジークの動きが止まった。目だけが大きく見開かれていく。

「おはよう」

少し照れたようにそう言いながら、アンジェリカが開いた扉から入ってきた。ジークに向かってまっすぐに立ち、後ろで手を組みニコリと笑う。

ジークは弾かれたように身を乗り出した。

「アンジェリカ！！」

「待って！！」

アンジェリカは開いた両手を前に突き出し、大きな声で制止した。

「逃げないから、落ち着いて」

ゆっくりとなだめるように言う。

「あ、ああ」

ジークはまだしっかり歩けもしないのに、ベッドから飛び降りようとしていた。彼女に止められなければ、間違いなく転倒していただろう。

アンジェリカは扉を閉め、中へと足を進めた。そして、ジークの隣にちょこんと腰掛ける。ベッドのマットがわずかに沈んだ。彼を見上げると、にっこりと笑いかける。

ジークは動揺した。顔が熱くなるのを感じた。顔だけでなく、頭も沸騰したように熱い。彼女がなぜここへ来たのか、なぜここに座っているのか、なぜ微笑んでいるのか――様々な疑問が浮かぶ。だが、何も考えられない。

「ごめんなさい、ずっとお見舞いに行かなくて」

「あ、いや……」

「今さらかもしれないけれど、これからは毎日、お見舞いに行くから」

アンジェリカはしっかりとした口調で、明るく歯切れよく言った。屈託のない笑みを見せる。

しかし、ジークの疑問は解決していない。呆然としながら口を開く。

「どうして急に……」

「迷惑？」

アンジェリカは首を斜めに傾げて尋ねた。大きな瞳で見つめながら、じっと彼の返事を待つ。ジークは慌てて、首をぶんぶんと横に振った。

「良かった」

アンジェリカは胸に手をあて、ほっと息をつきながら笑った。

これは、夢だろうか、幻だろうか——ジークは混乱していた。あまりに唐突すぎて、現実だという実感を持てなかった。目の前の少女が実体だという自信がなかった。手を伸ばして、触れて、確かめたかった。だが、近すぎる距離に身じろぎさえ出来ずにいた。

「今日は手ぶらだけど、これからは何か持ってくるわね」

「いいよ、手ぶらで。来てくれるだけで」

ジークはあやふやな思考にとらわれたまま、ほとんど反射的に答えを返す。

アンジェリカはくすりと悪戯っぽく笑った。

「手ぶらじゃなくてもいいんでしょう？」

「ああ、まあな……」

ジークは複雑な表情で彼女を見た。

まるで夢を見ているようだった。彼女が去ったあの日から、ずっと求めてやまなかった光景が、今、自分の目の前にある。何よりも嬉しいことのはずだった。それなのに、なぜか素直に喜べないでいた。それは、まだ現実としての実感がないから、そして、棘のように引っかかっていることがあるから——。

彼女は今まで頑として来ようとしなかった。きのうも会うわけにはいかないと言っていたらしい。なのに、今朝になっていきなりこれである。今までの真逆と言ってもいい。

この一日でいったい何があったのだろうか。どういう心境の変化があったのだろうか。尋ねようとしたが、彼女はそれをはぐらかした。答えたくないということだろう。

無理に追及すれば、またいなくなってしまうのではないか。そんな不安を感じて、何も訊けなくなってしまった。情けないくらいに臆病になっていた。せっかく戻ってきた彼女を、再び失うことだけは避けたかったのだ。

アンジェリカはジークの黒いジャージに目を落として口を開いた。

「ジーク、もしかしてこれからリハビリ？」

「まあな。朝食前の自主練」

「車椅子で行くの？」

「ああ」

その答えを聞くと、アンジェリカは跳ねるように立ち上がり、嬉々として隅に畳んであった車椅子を広げた。やけに手際がいい。ラウルの手伝いで覚えたのだろうか。

「私が押して行ってあげる」

「いい、自分で行ける」

ジークは慌てて言った。照れたように頬を赤く染めている。

アンジェリカはくすりと笑った。

「じゃあ、少しだけお手伝い」

そう言うと、ジークの前にすっと手を差し延べた。

ジークは呆然とその手を見つめた。細い指先はきれいに揃えられ、自分の目線よりやや下に留まっている。

心臓が高鳴った。

おそるおそる手を伸ばし、その上に自分の手を重ねる。

その瞬間、何かが体中を駆け抜けた。ゾクリと震えがきた。だが、次の瞬間には、小さく柔らかな手の温もりに、大きな安らぎを感じた。そのとき、初めて、現実なのだ実感した。

「立てないの？」

アンジェリカが心配そうに顔を傾げて覗き込んだ。

「いや、大丈夫だ」

ジークはふっと息を漏らして口元を上げると、彼女の手を掴んで立ち上がった。ゆっくりと体の向きを変え、車椅子に腰を落とす。そして、車輪に手を掛け、移動する準備を整えた。

「さあ、行くか」

「行きましょう」

ふたりは顔を見合わせて小さく笑いあった。

それから二週間が過ぎた。

アンジェリカは宣言どおり、毎日、ジークの見舞いに来た。

そのおかげ、というわけでもないだろうが、ジークの足はみるみる回復していった。走るのはまだ無理があるが、普通に歩けるまでにはなっていた。

「いいお天気！」

アンジェリカはよく通る声を響かせ、廊下から中庭に飛び出した。高く青い空を仰いで、身軽にくるりとまわる。光を受けた黒髪が煌めきながら舞い上がり、薄地の短いスカートがふわりと風をはらんだ。

「おい、気をつけろよ、転ぶなよ！」

「平気よ！」

ヒヤヒヤしながら注意したジークの言葉を、彼女は目映い笑顔で受け流す。

ジークは諦めたようにため息をついた。だが、その表情は柔らかくほころんでいた。彼女のあとに続き、緑の芝生に足を踏み入れる。真上から強い光が降り注いだ。眩しくて目を細める。

アンジェリカは藤のバスケットを後ろ手に持つと、両足を揃えてジークに向き直り、くすりと笑った。

そこは病院の中庭だった。鮮やかな緑の木々と、絹のカーテンのような噴水が、心地よい空間

を作り出していた。時折、鳥のさえずりも聞こえる。ここだけ時間の流れが違うような、そんな錯覚さえしてしまいそうだ。

一角には、木製のベンチが置かれていた。三人がけくらいの大きさだろう。

ふたりはそこに並んで腰を下ろした。

ジークは背もたれに両肘をかけ、目を細めて空を仰ぎ見る。パジャマでもジャージでもなく、まったくの普段着だった。とても入院患者には見えない。アンジェリカは彼の反対側にバスケットを置き、その横顔を見つめて微笑んだ。

アンジェリカは毎日のように、ジークをここへ連れ出していた。薬品くさい病室に閉じこもりきりでは、治るものも治らないと思ったのだ。

ジークも、最初こそ乗り気ではなかったが、実際に来てみると、すっかりこの場所が気に入ってしまった。正確に言えば、この場所でアンジェリカと過ごす時間が気に入っている、ということだが――。

とはいえ、いつもふたりきり、というわけではなかった。

偶然、同じ時間に見舞いに来たリック、セリカと一緒にいたときもあった。もともと、彼らはそれ以降、アンジェリカとかち合わないように、時間をずらすようになった。ジークに気を遣っているのだろう。

また、サイファと一緒にいたときも何度かあった。アンジェリカとサイファに挟まれてベンチに座っていると、ジークは必要以上に緊張してしまった。それを悟られないように、平常を装っているつもりだったが、傍から見れば、ほとんど無駄な努力といってよかった。

アンジェリカもサイファも、そんなジークの気持ちをわかっていて、反応を楽しんでいるようだった。ジークはますます居たたまれない気持ちになった。だが、嫌ではなかった。そういう時間もいい思い出になるだろうと素直に思えた。

「ジーク、今日ね、私も卒論を提出したわ」

「えっ？ まだ出してなかったのかよ」

ジークは驚いて振り向いた。自分が提出した頃、アンジェリカももうすぐだと聞いていた。あれから二週間以上が過ぎている。もうとっくに提出しているものと思い込んでいた。

アンジェリカは肩をすくめて笑った。

「早さではジークに負けちゃったから、質で勝負しようと思って、仕上げに時間をかけたの」

「おまえ、どこまで負けず嫌いなんだよ」

ジークは呆れたように言った。だが、顔はそれほど呆れていない。

「ジークだって負けず嫌いでしょう？」

「おまえほどじゃねえよ」

「ほら、やっぱり負けず嫌い」

アンジェリカはくすくす笑って、小さく彼を指さした。

ジークはぱちくりと大きく瞬きをした。そして、彼女の言うことを理解すると、ばつが悪そう

に目をそらせた。ベンチにもたれかかり、耳元を赤らめながら空を見上げる。

「まあ、お互いさま、だな」

「ええ、そうね」

アンジェリカはにっこりと微笑んだ。

ジークは横目で彼女の向こう側を盗み見た。

「今日は、何だ？」

「えっ？」

唐突で言葉足らずなジークの質問に、アンジェリカはとっさに反応できなかった。彼の催促するような視線の先をたどる。そこにあったのは、彼女が持参した藤のバスケットだった。ようやく彼の言いたいことに気がついた。

「ああ、今日はチーズケーキよ」

そう言うと、チェック柄の布をめくり、中から皿に載せたチーズケーキを取り出した。透明の薄いラップを外し、銀のフォークを添えて差し出す。

「どうぞ」

「悪りいな」

言葉とは裏腹に、表情は嬉しそうだった。それを受け取ると、さっそく大きなひとかけらを口に運ぶ。

アンジェリカは横から覗き込むよう彼を見つめる。

「どう？ 美味しい？」

「ああ、うめえよ」

ジークはケーキを口に入れたまま、子供みたいに無邪気に答えた。本心からの率直な言葉で、ひいき目やお世辞は抜きである。彼の様子を見ていれば、それを疑う余地はない。

「良かった」

アンジェリカは安堵の息をつき、幸せそうに顔をほころばせた。

これは、今日だけではなく、毎日のことだった。

アンジェリカは差し入れと称し、来るたびに食べるものを作ってきた。クッキー、マドレーヌ、プリンなど、主に菓子類である。サンドイッチだったことも二度ほどあった。

もちろん、彼女の一方的な押しつけなどではなく、ジークの方もそれを心待ちにしていた。お菓子が食べられることもそうだが、彼女が自分のために作ってくれるということが、何よりも嬉しかった。しかも、それが美味しいのだから申し分がない。

アンジェリカはゴソゴソと何かをバスケットから取り出した。それは、小さめの水筒と、大きめのマグカップだった。水筒の中には温かいコーヒーが入っている。それをマグカップに注ぎ、チーズケーキを食べ終わったジークに手渡した。代わりに、彼は空になった皿を返した。

バスケットの中を片付けながら、アンジェリカは尋ねる。

「ジーク、いつ退院できるの？ そろそろ？」

「あ、いや、実は、もう退院していいって前から言われてんだ」

ジークは事も無げに言った。マグカップを傾け、コーヒーを口に流し込む。熱くはないが、ぬるくもない。飲むには適温である。

「え？ どういうこと……？」

アンジェリカは顔を上げ、目をぱちくりさせた。

ジークは空を見ながら答える。

「退院してもどうせ通院しなきゃなんねえし、面倒だから完治するまで居座ろうかと思って」

「何よそれ。ジークってそんなに横着者だったの？」

アンジェリカは呆れたように尋ねかけた。

ジークは彼女にちらりと視線を投げると、微かに口元を緩めた。

アンジェリカが見舞いに来てくれるのが嬉しいから、だから、出来ることならまだ退院はしたくない——本音をいえば、その気持ちが大きかったが、そんな馬鹿みたいなことは、口が裂けても言えない。

だが、彼女はまるで見透かしたかのように言った。

「私なら、ジークの家にだって、毎日お見舞いに行ってもいいんだけど」

「ばっ……お、俺んちは遠いぞ……」

本当に見透かされたのか、ただの偶然なのか、ジークにはわからなかった。照れ隠しにもならない、意図不明の返答をしまい、ますます恥ずかしくなる。顔が熱くなった。

アンジェリカは隣でくすくす笑っていた。

「ま、居座ってもせいぜいあと一週間ってとこだろうけどな」

ジークはベンチの背もたれに両肘を掛け、大袈裟に空を仰いだ。風が心地いい。火照った頬の熱をさらっていつてくれるかのようだ。

「退院したら、何かしたいことってある？」

「そうだなあ……全力疾走してえなあ」

緩やかに流れる薄い雲を眺めながら、のんびりと答えた。

アンジェリカはにっこりと微笑んだ。とてもジークらしい答えだと思った。

「じゃあ、川辺にでも全力疾走しに行く？」

「いいな、それ」

彼女の提案に、ジークは声を弾ませて同意した。

川辺と聞いて、いつかの光景を思い出す。煌めく水面、冷たい水、浅く流れる水音、砂利の音、小石の音、沈む夕陽、真っ赤な夕景、細い石段、薄汚れたガードパイプ——それほど昔のことでもないのに、なぜだかとても懐かしい気がした。再び、あの場所にアンジェリカと一緒に行く。そう思うだけで、胸がこそばゆくなる。

「他には？」

「うーん……今は思いつかねえな」

ジークは斜め上に視線を流し、コーヒーを口に運ぶ。考えているような素振りを見せたが、実

際のところは、川辺での全力疾走で頭がいっぱいだった。

アンジェリカは大きな瞳で、じっと彼の横顔を見つめる。

「じゃあ、私の行きたいところへ一緒に行ってくれる？」

「ああ、いいぜ。どこだ？」

ジークは浮かれた気持ちを抑えようとしたが、あまり効果はなかった。声は素直に弾んでしまった。

「遠いんだけど、海へ行ってみたいの。まだ見たことがなくて、一度、見てみたいって思ってたの。あと、静かできれいな森の湖があるって聞いたから、そこへも行ってみたい。ジークの家でまた星も見たいし……まだまだたくさんあるわ。毎日、出かけても足りないくらいね！」

アンジェリカははしゃぎながら言った。ジークに負けなくらいだった。無邪気な笑顔を見せている。

ジークは空に向かって笑いながら答える。

「おまえ、欲張りすぎだって。そんなに急がなくてもいいだろ」

「……どうして？」

少しうわずった声。それまでの雰囲気とは違う、ためらいがちな、張り詰めたような問いかけである。

ジークは驚いて振り向いた。

彼女は目を伏せ、何かに耐えているような顔をしていた。懸命に無表情を取り繕っている。

「おまえ……まさか、まだ、遺伝子の異常だとか思ってんじゃねえだろうな」

ジークは眉をひそめて尋ねた。

「思っているわよ」

アンジェリカは当然のように答えた。今度はしっかりとした声だった。視線をまっすぐ前に向け、何事もなかったかのように、普通の表情に戻っている。

ジークは顔をしかめた。ほとんど忘れかけていた。彼女が見舞いに来るようになってから、毎日、楽しいことばかりだった。彼女も楽しそうで、気にする素振りなど見せなかった。だから、大切なはずのことなのに、隅に追いやられていた。実際は何も解決していなかったのだ。

「それは違うんだ。おまえの誤解だって」

「いいの、私、もう逃げないから」

「だから、違うって言ってんだろ！」

いくら違うと言っても、その理由がなければ、納得させることは出来ない。それはわかっていた。だが、自分ではどうしようもないのだ。ただ、違うと言い続けるしかなかった。

「ジークは知っているんでしょう？」

アンジェリカは目を細めた。ゆっくりジークへと振り向く。微かに潤んだ黒い瞳で、まっすぐ彼を見つめる。黒髪がさらさらと風に揺れた。

「本当のこと、教えてくれる？」

緩やかな口調で、旋律を奏でるように尋ねかける。

ジークはどきりとした。鼓動が速くなっていく。ここで言い淀んでは、ますます誤解されてし

まう。しかし、焦れば焦るほど言葉が出てこない。唇を噛んだ。

彼女の思っている本当のことと、自分の知っている本当のことは、違うものだ。だが、それを答えるわけにはいかないのだ。

「あっ……ごめんなさい、困らせるようなことを言って」

アンジェリカははっとして肩をすくめると、申しわけなさそうに笑った。そして、明るい声で力強く言う。

「私は大丈夫だから」

ジークは表情を曇らせた。

彼女が無理をしていることくらいわかる。こんな無理をさせてしまうことが耐えられなかった。何も出来ない自分が歯がゆくて仕方なかった。

——サイファさん……。

助けを求めるように、心の中でその名前を呼んだ。苦い響きが胸に広がった。

サイファはふたりに気づかれぬように、そっとその場を離れた。

ジークの見舞いに来たのだが、中庭のふたり声を掛けようとしたとき、空気が変わったのを感じ、柱の陰に身を隠したのだ。

——本当のこと、教えてくれる？

その言葉が心をえぐる。

良い方向に向かっているのではないか、このままでいいのではないか、そう思っていた矢先だった。

だが、アンジェリカは忘れたわけでも納得したわけでもなかった。このままでは、この先ずっと彼女を苦しめることになる。彼女だけではない。ジークまでも苦しめてしまう。

「どうすればいい……」

ふたりから十分に離れたところで、サイファは足を止めてつぶやいた。

窓枠に手を掛け、ガラス越しに空を見上げる。無垢な青さが目にしみて痛かった。

93. 結婚式

太陽は高い位置にあり、日射しはとても強かった。

鮮やかな青の空を、薄い雲が流れていく。少しのあいだ眺めているだけで、動いていることが認識できるくらいだ。地上は穏やかだが、上空には強めの風が吹いているのだろう。

その空よりも濃い青色の制服が、人気のない小径を進んでいた。サイファである。ややうつむき加減で、思いつめたような難しい顔をしていた。時折、わずかに眉根を寄せたりもする。何か考えごとをしているようだった。

ほんの十数分前、彼はジークを見舞うために病院へ行っていた。もっとも、会わずに引き返してしまったので、その目的は果たせなかった。偶然に聞いたアンジェリカの言葉が原因である。

——本当のこと、教えてくれる？

何度も、何度も、その言葉を反芻し、解決策を頭から捻り出そうとする。しかし、どうしても良い方法が思い浮かばない。当然のことだろう。すでに幾度となく検討し、考え抜いているのである。今さら簡単に思いつくはずもない。

深くため息をつく。

いや、本当はひとつだけあるのだ。誰もが思いつく最善の方法が。

それは、彼女の望むまま、真実を告げること——。

おそらく、このことが頭にあるせいで、思考が停止しているのだろう。これ以上の解決方法は存在しないのだから仕方がない。

頭では理解していても、心はそれを拒否をしている。結論を受け入れることから逃げていた。だが……。

——潮時、だな。

足を止めると、ふっと息をつき、諦めたような寂しげな微笑を浮かべた。遠くを見上げ、目を細める。そのとき、空から降りてきた緩やかな風が、細い金の髪をさらさらと吹き流した。

サイファは重厚な扉を引き、広い玄関に足を踏み入れた。非常識なほど大きな屋敷であるが、彼にとっては、生まれたときから過ごしてきた場所、住み慣れた我が家である。

だが、このときはひどく緊張していた。

家に入ることで湧き上がった感情だったが、根本的な原因はもちろん別のところにあった。

重い足を騙しながら、いつもの歩調でリビングルームに向かう。

「レイチェル？」

名前を呼びながら、柔らかな自然光が広がる部屋を見渡した。だが、彼女の姿はなかった。

ふと、ガラス窓のひとつが半開きになっていることに気がついた。そちらに歩み寄り、庭に目を向ける。探していた人はそこにいた。

彼女は小さな花壇にじょうろで水を遣っていた。花壇といっても、成長途中の茎と葉だけで、

花もつぼみも見られない、いささか地味な状態だ。彼女が退院してから自分で作ったものである。

例の事故ののち、彼女はアルティナの付き人を辞めた。もっとも、正式には辞任ではなく休暇ということになっている。だが、彼女に戻る意思はなかった。二ヶ月間、一度も王宮には行っていない。

そのため、彼女には時間が有り余っていた。花壇はその時間を埋めるために作っているようなものだった。また、気持ちを落ち着けるためでもあったのだろう。何でもないように振る舞ってはいたが、自分が引き起こした惨事の重みを忘れたわけではない。

サイファは知っていた。今でもときどき彼女が夢にうなされていることを。いくら気丈な彼女とはいえ、眠っているときは心が無防備になるのだろう。そんなとき、自分に出来ることは少ない。どうしようもなく無力だと思う。

レイチェルは振り返ることなく、水やりを続けていた。窓際からの視線には気づいていないようだ。後ろ姿がとても無防備に見えた。

サイファは足音を立てないよう庭に降りた。背後からそっと近づいていき、小さな彼女を包み込むように抱きしめる。金色の髪がふわりと空気をはらんだ。

「え？ サイファ？」

レイチェルは傾けていたじょうろを水平に戻した。そして、抱きすくめられたまま、わずかに首をまわして彼を見た。大きな目をぱちくりさせて尋ねる。

「どうしたの？ ずいぶん早かったのね」

「ただの休憩だよ。君に会いたくなかった」

サイファは彼女にまわした腕に、ぎゅっと力を込めた。

「何か、話があるんじゃない？」

レイチェルは優しい声で尋ねた。いつもより緩やかな口調だった。

サイファは腕を放した。体ごと振り向いた彼女と視線を合わせ、ふっと柔らかく微笑む。

「少し、歩こうか」

「ええ」

レイチェルは上品に頷いた。長い髪がさらりと小さく揺れた。

そこは、王宮の外れにある小さな森だった。生い茂った枝葉の隙間から、幾多の細い光が地面に降りている。風が吹くたびに、光が揺らぎ、緑のざわめきが起こった。

その森の散歩道を、ふたりは並んで歩いた。他に人影はない。

「アンジェリカのこと？」

レイチェルは唐突に切り出した。

「よくわかったね」

サイファはにっこりと微笑みを向ける。彼女のこういう鋭さは今に始まったことではない。特に驚きはしなかった。おそらく、庭で抱きしめたときには、すでに見透かされていたのだろう。

「相談、なんだけどね」

サイファはそう前置きをして語り始めた。緩慢とした足どりで歩きながら、アンジェリカが誤解していること、そして、どのように誤解しているかを、順を追って丁寧かつ明瞭に説明する。「つまり、まだあの子は自分が長くは生きられないと思っているんだ」

「そう……」

レイチェルは顔を曇らせた。アンジェリカが何か悩んでいることは感じていたが、まさかこのような突拍子もないこととは、そして、ここまで深刻なこととは思わなかった。

「私たちは、どうすればいいと思う？」

サイファは前を向いたまま、険しいくらいに真剣な顔で尋ねた。

レイチェルは深く顔をうつむけて考え込んだ。横髪が頬にかかり、顔に陰を作っている。そのまま固まったように、微動さえしない。

しばらく沈黙が続いた。

やがて、小さな口だけが動く。

「真実を、話すしかないんじゃないかしら」

重々しく紡がれた言葉。その響きから、浅い考えではないとわかる。話せばどうなるか、彼女なりに熟慮したのだろう。そのうえで、そうするしかない結論を出したのだ。

サイファは苦しげに目を細め、無言で空を見上げた。木々の切れ間から、濃い青色が覗いている。ここから雲は見えなかった。

レイチェルは頭を持ち上げ、彼の端整な横顔をじっと見つめた。

「サイファもそう思っているんでしょう？」

「ああ、でも、今日までずっと決心がつかなかったんだ。怖かったんだ」

サイファは淡々と答えた。ズボンのポケットに手を入れると、ふっと笑って顔をうつむける。「情けないね」

「私だって、怖いわ」

レイチェルは静かに言葉を落とした。強い光をたたえた瞳を、まっすぐ彼に向ける。

サイファは薄く微笑んだ。

彼女の強さがうらやましかった。怖いと言っているものの、すでに覚悟を決めた目をしている。自分は決心をつけるまで幾日かかっただろうか。いや、いまだに迷いが捨てきれていない。

「レイチェル、君はそれでいいの？」

最後の意思確認をする。答えは聞かなくてもわかる。それでも尋ねたのは、彼女のためではなく、自分のためだったのかもしれない。

「サイファさえ良ければ」

レイチェルはしっかりと彼を見据えて言った。静かだが、芯のある声だった。そして、その内容は、彼の思ったとおりのものだった。

わずかに残っていた心の砦が崩れた。

サイファは彼女に手を伸ばし、薄紅色の頬をそっと包み込んだ。そして、愛おしげに微笑みかけて言う。

「腹をくくるよ」

「ええ、私も」

レイチェルも同調し、柔らかな微笑みを返した。

サイファは腕を組むと、険しい顔で空を仰いだ。難しい現実に向き合わなければならない。

「何をどう話すか、考えておかないとな」

「ねえ、私が話してもいいかしら」

レイチェルは訴えかけるような眼差しで、少し遠慮がちに言う。

サイファ目を大きくして彼女に振り向いた。それは、一家の長としての自分の役目と思っていた。彼女が話すなどということは選択肢にさえなかった。だが、言われてみれば、確かに彼女の思いも理解できる。

「話しづらくはないか？」

「それでも、私の責任だから」

凜とした表情、凜とした声、凜とした佇まい。彼女はすべてを受け止めているようだ。いつかこういう日が来ることを予測していたのだろうか、とサイファは思う。彼女を見つめたまま、じっと考え込み、静かに口を開く。

「わかった、任せるよ。私はいない方がいいかな」

「ええ……」

レイチェルの瞳がわずかに揺れた。申しわけなさそうに目を伏せる。

サイファはそんな彼女を気遣い、安心させるように微笑んだ。だが、うつむいたままの彼女に、伝わったかどうかはわからない。

「いつ、話すんだい？」

「今日にでも」

レイチェルは短く即答した。アンジェリカが悩み続けている以上、少しでも早いに越したことはない。サイファにも異存はなかった。神妙な顔で頷く。

「わかった。私は今夜は帰らない。じっくり話すといい」

「ごめんなさい」

レイチェルは胸の前で手を組み合わせ、心苦しそうに謝罪の言葉を口にした。このことだけでなく、これまでのすべてのことについて謝罪したかった。だが、それをどう言えばいいのか、それ以前に、言っているのかさえわからなかった。言葉は続かなかった。

それでも、サイファには十分に伝わった。

彼は、彼女が何を言いたがっているのかを理解していた。彼女の口をつぐませたのは自分であることも自覚していた。たとえ二人きりのときであっても、そのことは二度と口にしない——そう約束させたのは自分なのだ。もう14年以上も前のことである。

「謝るのは私の方だ。ずっと秘密を守り続けるのはつらかっただろう」

「いいえ、サイファの判断が正しかったことは知っているから」

強い突風が吹いた。レイチェルの細い髪が舞い上がった。ドレスの形が大きく変わった。木々のざわめきが波を打って空に抜けた。いくつかの木の葉が空からはらはらと舞い降りてきた。

サイファは目を細め、ふっと笑った。

「そろそろ仕事に戻るよ」

レイチェルは急に不安に襲われた。彼の笑顔がどこか寂しげだったからかもしれない。どこか諦めたような声音だったからかもしれない。彼の右手を取り、両手で包み込んだ。

「サイファ、帰ってきてね」

「ああ、あしたね」

サイファは彼女の肩に左手を置き、柔らかい頬に、そっと触れるだけの口づけを落とした。

魔導省の塔、その最上階の一室がサイファの個室だった。

少し狭い部屋から、この広い部屋に移り、はや数ヶ月が経過していた。初めは広すぎると思ったこの場所も、今ではもう違和感を覚えることはなくなった。むしろ、仕事をするには理想的と感じるようになっていた。彼は部屋に、部屋は彼に馴染んでいた。

だが今日は、この理想的な部屋でさえ、仕事が手につかなかった。

頭の回転がやたらと鈍く、集中力が途切れてしまう。かつてこのようなことはなかった。思考の切り替えは得意なはずだった。だが、今日は切り替える余裕もないくらいに、思考領域のほとんどが他のことに占められている。

とはいえ、今日中に終えなければならないものもある。それだけは何とか片付けた。すべて書類上の仕事だった。会議はひとつもなかった。そのことには心から安堵した。今日はまともな議論が出来る状態ではない。

革張りの背もたれに身を預けながら、疲れたように大きく息をつく。

椅子を180度まわし、一面のガラス窓から外を眺めた。いつのまにか、すっかり闇が空を覆っていた。眼下には家々の灯りが点在している。色も形も大きさも様々だ。その灯りのもとには、人が、家族がいるのだろう。灯りと同じように、様々な人が、様々な家族が――。

顎を上げ、目を閉じた。わずかに目蓋が震えた。

くるりと椅子を戻し、外界に背を向ける。机上に散らばる書類を重ね、棚の中にしまった。――切り上げよう。

心の中で踏ん切りをつけると、部屋の鍵を手に取り立ち上がった。

アンジェリカは夕食のあと、リビングルームでくつろぎながら本を読んでいた。アカデミーの勉強とは関係ないが、魔導の本である。趣味のようなものだ。

「アンジェリカ、お茶を淹れたから休まない？」

レイチェルがトレイにティーカップを載せて入ってきた。にこやかに微笑みかける。

「ありがとう」

アンジェリカは屈託のない笑顔を返すと、しおりを挟んで本を閉じ、すぐ隣に置いた。

レイチェルはふたつの紅茶をテーブルに配り、アンジェリカの向かいに腰を下ろした。ソファが軽く沈む。

「どうぞ」

きれいに指先が揃えられた手で促しながら、その紅茶をアンジェリカに勧めた。

そして、レイチェル自身もソーサとティーカップを手にとった。熱い紅茶を少しだけ口に運ぶと、流れるような所作でソーサに戻した。

「ねえ、アンジェリカ」

「ん？」

アンジェリカはティーカップに口をつけたまま視線を上げた。

「お父さんのこと、好き？」

「もちろんよ。どうして？」

紅茶を手にしたまま、不思議そうな顔で尋ね返す。母親からの質問は、随分と唐突なものだった。今までこんな質問をされたことがあっただろうかと考える。自分が記憶している限りではなかったはずだ。何かあったのだろうか。漠然とした不安が湧き上がった。

だが、レイチェルは何も答えを示さなかった。ただ優しい微笑みを見せるだけだった。

コンコン――。

扉が軽快にノックされた。

ダイニングテーブルで生徒の卒業論文を読んでいたラウルは、手を止めて立ち上がった。掛時計にちらりと目をやる。まだそれほど遅い時間ではない。患者だろうかと思う。無言で玄関へ向かい、鍵をまわして扉を開いた。

「やあ、ラウル」

そこに立っていたのはサイファだった。いつものように軽い笑顔を浮かべながら、軽い口調でそう言い、軽く右手を上げた。左手は皺だらけの紙袋を無造作に掴んでいる。

ラウルは眉根を寄せ、強く睨みつけた。

「何の用だ」

「入れてくれ」

サイファは質問には答えず、自分の要求のみを口にした。

「帰れ」

ラウルは冷たくあしらい、扉を閉めようとする。

だが、サイファはそれを阻んだ。靴の裏で蹴りつけるようにして、扉を元の位置に戻した。顎を引き、挑戦的な鋭い視線を突きつける。

「おまえに断る権利はないんだよ」

氷のような冷たさでそう言うと、肩をぶつけながらラウルの横を通り抜け、許可のないまま部屋へと足を踏み入れた。

ラウルは眉をひそめ、その背中を睨みつけた。だが、もう止めはしなかった。こういうときのサイファには、何を言っても無駄である。ため息をつきながら扉を閉めた。

サイファがここへ来るのは二度目だった。最初的时候も強引に押し入った。招かれたことは一度もない。

「何の用かくらい言ったらどうだ」

あとから入ってきたラウルが、不機嫌そうな低い声で尋ねた。少し離れたところで、立ったまま腕を組む。

サイファは茶色の紙袋に覆われた物を、ダイニングテーブルの上にドンと置いた。そして、外側の紙袋だけを乱暴に引き破る。中から、琥珀色の液体が入ったボトルが姿を表した。かなり上等そうに見える。まだ封は切られていない。新品のようだ。

「一晩、付き合えよ」

「静かにしろ、ここには……」

ラウルが何かを言いかけたとき、寝室から小さな影が現れた。それは、小さな女の子——ラウルの娘のルナだった。目を擦りながら、寝ぼけた様子でぼうっと立ち尽くしている。

サイファは驚いてその女の子を見下ろした。もちろん、ラウルに娘がいることは知っていた。何度か会ったこともある。だが、親子一緒にの姿を目にすることが少ないせい、あまり実感はなく、このときはすっかり頭から抜け落ちていた。

——静かにしろ、ここには……。

先ほどのラウルの言葉がよみがえる。その続きは「ルナがいる」だったのだろう。

「ラウル……？」

「起こしちゃってごめんね」

サイファはしゃがんでルナと視線を合わせると、人なつこく微笑みかけた。そして、驚いて目を丸くしている彼女を、両腕でゆっくりと抱き上げた。思ったよりも重かった。

「おじさん、だれ？」

ルナは少し怯えた様子で尋ねた。サイファとは何度か顔を会わせているはずだが、幼すぎたため記憶に残っていないのかもしれない。もしくは、単に寝ぼけているだけという可能性もある。どちらにしろ、たいした問題ではない。

「ラウルの友達だよ」

「赤の他人だ」

満面の笑みで口にしたサイファの返答を、ラウルは間髪入れず横から否定した。その素早さと必死さが可笑しくて、サイファは吹き出しそうになった。

「あかのたにん？」

ルナはラウルに振り向き、大きな目をぱちくりさせて尋ねた。

「説明してやれよ」

サイファは明らかに面白がっていた。声がすでに笑っている。

ラウルはムツとして睨みつけた。大またでサイファに歩み寄ると、その腕から娘を奪い取った。片手で抱きかかえたまま、暗い寝室へ連れていく。

「今度きちんと説明してやる。今日はもう寝ろ」

「はあい」

そんな会話が寝室から聞こえてきた。

サイファは目を細め、表情を緩めた。父親としてのラウルが見られて、少しだけ嬉しかった。

しばらくして、ラウルがひとりで戻ってきた。ルナを寝かしつけてきたのだろう。寝室の扉をそっと閉める。

「ずいぶん喋るようになったね」

サイファは勝手に椅子に座っていた。ダイニングテーブルに頬杖をつき、にこにこ笑顔を浮かべている。

ラウルは立ったまま腕を組んだ。上からサイファを見下ろして命令する。

「ルナを起こさないよう静かにしろ。出来なければ帰れ」

「父親としての自覚が芽生えてきたか」

サイファは目をそらさずにそう言うと、意味ありげに小さく笑った。

ラウルは眉をひそめて睨みつけた。

「何が言いたい」

唸るような低音で詰問する。

だが、サイファはまるで動じなかった。静かな笑みを浮かべたまま、穏やかな口調で続ける。

「おまえの家族ごっこは、いつまで持つかな」

「追い出すぞ」

「グラスを二つ、頼む」

ラウルはため息をついた。

「私は飲まない。ひとつなら出してやる」

「飲めないわけじゃないんだろう。今日くらい付き合えよ」

「理由があるなら言え」

「今日で終わるかもしれない。私の“家族ごっこ”がね」

サイファは感情を見せず、淡々と言った。テーブルの隅に視線を落とす。そこに何かがあったわけではない。ただ、少し逃げたかっただけだろう。

ラウルは無言で台所へ向かった。戸棚からグラスをふたつ手に取ると、大きな足どりで戻ってきた。それをボトルの横に置き、卒業論文の束を後ろの棚に片付け、サイファの向かいに座る。

「雰囲気のないグラスだな」

「贅沢を言うな。これしかない」

グラスは生活感あふれる無骨なものだった。水やジュースを飲むためのものだろう。高級酒に相応しくないことは、誰が見ても明らかである。

サイファはボトルを開け、ふたつのグラスに琥珀色の液体を注いだ。底から指二本分ほどの量だった。氷をもらおうと思ったが、このままでもいいかと思い直す。ひとつをラウルの前に差し出し、もうひとつは自分の前に置いた。

「何に乾杯しようか」

「乾杯などしなくていい」

ラウルは冷ややかに撥ねつけた。

サイファはくすりと笑い、自分のグラスを手を取った。

「ふたりの父親に乾杯、かな」

どこか楽しげな口調でそう言うと、睨みをきかせているラウルに、掲げたグラスを小さく傾けて見せた。

ふたつのティーカップが、ほぼ同時にテーブルに戻された。両方とも底が見えている。

「もう一杯いる？」

「私はもういいわ」

アンジェリカは笑顔で断った。中断していた読書を再開しようと思い、隣に置いてあった本を手にとろうとする。

「ねえ、アンジェリカ」

「なに？」

母親に呼びかけられ、本に手を掛けたまま顔を上げる。

レイチェルは優しい微笑みを浮かべて言った。

「サイファから聞いたわ」

「え？何を？」

「あなたの自分自身についての推測」

アンジェリカは口を閉じたまま、大きく目を見開いて母親を見た。具体的な説明はなかったが、彼女が何について言っているのかは、これだけでも十分に理解できた。そう、遺伝子異常のことだ。父親にも言ったことはなかったが、おそらくラウルから聞いたのだろう。緊張のためか、頭が熱くなり、手が冷たくなった。ぎこちなく口を開く。

「間違っ、いないでしょう？」

「間違っているわ」

レイチェルは滑らかに答えた。

だが、それでもアンジェリカは信じなかった。苦い顔で目を伏せる。母親も嘘をついているのだろうと思った。違うというのなら、本当のことを教えてほしい。出来るわけではない——心の中で毒づく。

「真実を、聞きたい？」

「えっ？」

思いがけない発言を耳にし、アンジェリカは驚いて顔を上げた。自分の聞き違いかと思った。

レイチェルは優しく微笑んでいた。

「あなたに聞く覚悟があれば、今、ここで話すわ」

アンジェリカは片眉をひそめながら、身を乗り出して尋ねる。

「本当に、本当のことなの？作り話で私を騙して納得させようとしていない？」

「本当の話よ」

深く澄んだ蒼い瞳が、正面から彼女を捉えた。

アンジェリカはその双眸に吸い込まれそうに感じ、少し目眩を覚えた。

——きっと、嘘は言っていない。

それは直感だった。論理的な根拠は何もない。だが、信じていいと思った。信じようと決めた

その途端、急に怖くなった。

うつむいてきゅっと口を結び、じっと考え込む。頬に黒髪がかかった。本の上に置いた手を、ゆっくりと握りしめる。手のひらに汗が滲んだ。

自分は何を悩んでいるのだろう。悩むことなど何もないはずだ。ずっと知りたかったことである。その機会を逃すなど、ありえないことだ。ただ心の準備が出来ていないだけ。落ち着こう——。胸に手をあて、深呼吸をする。

「教えて」

静かにそう言うと、緩やかに顔を上げる。そして、強い力を秘めた漆黒の瞳を、まっすぐレイチェルに向けた。

ラウルとサイファは向かい合ったまま、静寂の中でグラスを傾けていた。最初は文句を言っていたラウルも、今は大人しくサイファに付き合っている。ふたりとも緩いペースで飲んでいた。最初に注いだ量の半分も減っていない。

「美味いだろう？ とっておきだったんだ」

サイファはグラスを目線の高さまで持ち上げ、深みのある澄んだ琥珀色を見つめると、満足そうに口元を上げた。この液体を通してラウルを見ようと思ったが、量が少ないせいか上手くいかなかった。

ラウルはグラスを手を持ったまま、冷めた目を向けた。

「酒に逃げるとは感心しない」

「今日だけさ」

サイファは澄ました顔で言った。

ラウルはグラスをテーブルに置いた。

「レイチェルにすべて押しつけてきたのか」

「違うよ、彼女の希望だ。ひとりで真実を話すとね」

サイファはそう言うと、おもむろに頬杖をつき、じっと目の前の彼を見つめた。

「だから、今晚は帰れない。朝まで付き合ってもらおうよ。それくらいはしてくれるんだろう」

ラウルはムツとして眉をひそめた。

「何がそれくらいだ。今までさんざん利用してきただろう」

「それでもまだ足りないと思ってるんだけどね」

サイファは無邪気なくらい笑顔を見せると、一気にグラスの残りを飲み干した。それほど量はなかったが、それでも喉の奥がカツと熱くなった。テーブルの中央に置いてあったボトルを手に取り、自分で自分のグラスに注いだ。最初よりも少し多かった。

「飲み過ぎるな」

「それは、友としての助言か？ 医者としての忠告か？」

「巻き込まれて迷惑なだけだ」

ラウルはつれない答えを返すと、サイファの手元にあったボトルを、テーブルの中央に引き戻した。

アンジェリカの真剣な表情を見て、レイチェルは柔らかく頷いた。暫しの時間、顔を下に向ける。そして、ゆっくりと顔を上げる。微笑みは消えていた。

アンジェリカの緊張はさらに強くなった。それに耐えるように、小さな口をきゅっときつく結んだ。額には薄く汗が滲んでいた。胸が張り裂けそうで、もう声が出せる状態ではない。ただ無言で母親の言葉を待つ。

「アンジェリカ」

桜色の唇がそっと開き、優しい音色で名前を呼んだ。そして、一呼吸おいて続ける。

「あなたは、ラウルの子供なのよ」

「……えっ？」

ごく短い言葉を発したきり、アンジェリカの動きが止まった。表情も固まっている。

「あなたは、ラウルの子供なの」

レイチェルはもういちど同じ抑揚で言った。

アンジェリカは懸命に頭を働かせる。

「わ、私……このうちの子じゃなかった……って、こと……？」

「いいえ、そうじゃないの。あなたを産んだのは私よ」

「それって、どういう……」

まるで謎掛けだった。少なくとも彼女はそう感じた。ますます混乱した。糸がもつれるように思考が絡まる。やがて、諦めたように思考が停止する。もしかすると、理解することを無意識のうちに拒絶していたのかもしれない。

レイチェルは少し困ったように微笑んだ。

「あなたは、私とラウルの間の子供なの。意味はわかるわね？」

「あっ……」

喉の奥から小さく声が漏れた。

これが、真実。

これが、本当のこと。

言えなかった理由。

私がラグランジェの他の人とは違う理由。

でも、どうして？

どういうこと？

大きく開いたままの瞳から、無意識のうちに涙の粒が零れ落ちた。

「そうよね、驚くわよね」

レイチェルは申しわけなさそうに、曖昧な微笑みを浮かべて言った。

アンジェリカの涙は止まらなかった。

悲しいわけではない。つらいわけではない。いや、それらもあったかもしれない。言葉では説

明しようのないくらい、雑多で、複雑で、矛盾した感情が、内側から一気に湧き上がった。それは、彼女の許容量を遥かに超えていた。自分の中で処理しきれなかった分が、涙となって溢れ出しているのだろう。

流されるままの涙は、頬を伝い、手の甲やスカートに落ちていく。

レイチェルはただ穏やかに見守っていた。

やがて、アンジェリカは少しずつ落ち着きを取り戻した。レイチェルから差し出されたハンカチで涙を拭い、深呼吸して息を整える。

「お父さんは、このこと……」

「知っているわ、あなたが生まれる前から」

レイチェルの小さな口から、落ち着いた声が紡がれる。

アンジェリカは濡れた瞳で彼女を見つめ、無言で耳を傾けた。

「サイファのおかげなのよ。今、私たちがこうしていられるのは。ラグランジェ家に真実を知られていたら、あなたが生まれることはなかったし、私も生きていなかったかもしれない」

アンジェリカは胸を押さえて息を呑んだ。決して大袈裟な物言いではない。ラグランジェ家なら、曾祖父なら、平気でそのくらいのことはするだろうと思った。

「サイファはただの一度も私を責めず、すべてを引き受けてくれたの。何もわかっていなかったあの頃の私と、おなかの中のあなたを、身を呈して全力で守ってくれたわ」

目頭が熱くなる。鼻の奥がつんとする。

父親の顔を思い浮かべた。笑顔だった。そう、彼はいつだって笑顔を向けてくれていた。

——お父さん。

心の中で呼びかける。再び、涙が溢れ出した。先ほどとは違い、とても熱い涙だった。

うつむきながら、濡れた頬をハンカチで拭いた。

「でも、どうして……」

とまどいがちにそう切り出し、ゆっくりと顔を上げる。漆黒の瞳は、不安に怯えるように小さく揺れていた。

「お母さんにとって、お父さんとの結婚は、望まないものだったの？ 親が決めたから仕方なく？ お父さんのこと、好きじゃなかったの……？」

レイチェルは生まれたときから、サイファのもとへ嫁ぐことが決められていた。親どうしが決めた結婚だった。そのことは知っていた。だが、そんなことを感じさせないくらいに、ふたりはとても仲が良さそうに見えた。仲が良いと信じていた。だから、どうしても聞きたかった。

レイチェルは優しい声できっぱりと答える。

「いいえ、ずっと大好きだったわ。もちろん、今も」

「ラウルは？」

アンジェリカはさらに尋ねかけた。瞳の奥を探るようにつめる。

レイチェルはわずかに目を細めた。遠くに思いを馳せるような、どこか物憂げな微笑みを浮かべた。

「ラウルも、好きだったわ」

「……今も？」

「ええ」

迷いのない答え。とても落ち着いた声だった。

アンジェリカは複雑な表情でうつむいた。どう反応すればいいかわからなかった。それ以前に、どう受け止めればいいのかさえ、わかっていなかった。

「軽蔑されても当然だと思っているわ」

レイチェルは、一瞬だけ、つらそうな表情を見せた。それを微笑みで包み隠す。

「でも、サイファとともに生きていくと決めたから、今は……」

「お父さんに恩があるから？」

アンジェリカはうつむいたまま、遠慮のない率直な質問を投げかけた。

レイチェルは小さく息を呑んだ。ゆっくりと目を閉じ、そして、ゆっくりと目を開く。

「……そう、かもしれないわね」

「ラウルは？ ラウルもお母さんのことが好きだったんじゃないの？」

今度は、顔を上げて尋ねた。問いつめるような強い口調だった。その声の厳しさに、自分自身で驚いた。感情が昂ってきたせいかもしれない。

レイチェルの蒼い瞳が揺れた。

「申しわけなく思っているわ。結果的に裏切ってしまったから。きっと、傷つけたから……」

「ああ……」

アンジェリカはため息まじりの声を上げ、つらそうに顔を歪めると、ソファの上に膝を立てて顔を埋めた。両手で頭を抱え込む。

一気になだれ込んできた信じがたい事実が、心に重くのしかかる。

でも、実感はない。自分の知っている現実と繋がらない。

頭が混沌としていた。頭痛がする。ぎゅっと目をつむり、後頭部を押さえる手に力を込めた。

ダイニングテーブルで向かいあったまま、ラウルとサイファは静かに飲み続けていた。ときどきサイファが話を振り、ラウルが面倒くさそうに答える。その繰り返しだった。

「飲まないと言ったわりには、よく飲んでるよな」

サイファは呆れたように言った。

ボトルの中身はもうほとんどなくなりかけていた。その八割くらいはラウルが飲んだ。だが、顔色も口調もまったく変わらず、酔っている気配はない。

「私が飲まなければ、おまえが飲むだろう。強くもないくせに」

「へえ、気遣ってくれているのか」

サイファは頬杖をつき、ニッと口の端を上げた。上目遣いでラウルを見る。

だが、彼の答えはつれないものだった。

「ここで酔いつぶれられたら、私が迷惑を被るからな」

「そのつもりで来たんだよ。おまえに迷惑をかけたくて、な」

サイファはグラスの口を爪で弾いた。高い音が小さく鳴った。

ラウルはムツとして彼を見下ろした。

「謝れといたいのか」

「いや、謝れと言っても謝らないだろう？」

「ああ」

当然のようにそう答え、グラスを口に運んだ。残りを一気に流し込む。

サイファはふっと笑った。

「おまえに迷惑をかけるのは、私の趣味だと思ってくれ」

「甘えているだけだろう」

「まあな。気兼ねなく甘えられるのは、おまえくらいだからな」

「少しは気兼ねしろ」

ラウルはボトルを手に取り、残り少なくなっていた液体を自分のグラスに注ぎきった。

「いつまで居座るつもりだ」

空のボトルをテーブルの隅に置きながら、ぶっきらぼうに尋ねる。

「夜が明けるまでさ」

サイファはさらりと答える。

ラウルは掛時計に目を向けた。

「そろそろだ」

「ああ」

サイファは重い声で同意すると、グラスを持って立ち上がった。窓の方へ足を進め、そっとカーテンを開ける。まだ太陽は見えないが、ほんのりと空の下方が白み始めていた。

窓枠に手を掛け、外の一点を見つめながら、間もなく訪れるであろうそのときを無言で待った。ラウルも無言だった。物音さえしない。部屋は静寂に包まれていた。

やがて、地平の向こうから光があふれた。解き放たれたように空へ広がる。部屋へも飛び込んできた。正面からその光を受けたサイファは、眉根を寄せ、目を細めた。グラスの残りを一気に呷る。

「夢から醒める時間、かな」

その声には寂寥感が滲んでいた。ゆっくりと部屋の中のラウルに振り返り、窓枠にもたれかかる。そして、空疎な笑みを浮かべると、静かに口を開いた。

「これまで必死に守ってきた。どんな手を使っても守り通そうと思っていた。だけど、アンジェリカには敵わなかったよ。最も手強い相手だったね」

顔を隠すように深くうつむく。金の髪がはらりと頬にかかった。

「知らせたくはなかった。ずっと、“本当の父親”でいたかったよ」

低く沈んだ声で、つぶやくように言った。

ラウルはうなだれたままの彼を見つめた。肩がわずかに揺れていた。

「諦めるのが早いな」

「現実を見ているだけさ」

サイファの声はもう平常に戻っていた。すっと背中を伸ばし、まっすぐラウルに目を向ける。背後から照らす光が、金の髪を鮮やかに煌めかせた。

ラウルはテーブルに肘をつき、深いため息を落とした。

「この14年という年月も現実だろう」

「14年、か……」

サイファには、それが長いのか短いかわからなかった。アンジェリカが生まれて、ここまで成長したことを思えば、それなりに長い時間といえるだろう。だが、実感としては、あっというまだったような気がする。

ラウルは無表情で続ける。

「家族は血で作られるわけではない、共に過ごした時間で作られていくものだ——それが、おまえの考えではないのか」

「ああ、だけど理想論だよ。アンジェリカがそれを受け入れるかはわからない」

サイファは真面目な顔で答えた。それはあくまで自分の理想であり、アンジェリカの理想は違うものかもしれない。もし、同じ理想を持っていたとしても、その理想を現実としては受け入れられないかもしれない。理想と現実は、得てして乖離しているものだ。

そんなことを考えながら、ふっと寂しげに表情を緩めた。

「さてと、そろそろ帰るよ」

寄りかかっていた窓枠から体を離し、ラウルの方へ歩いていく。

「こんな時間まで悪かったな」

そう言いながら、空のグラスをそっとテーブルに置いた。

ラウルは立ち上がった。口を閉じたまま、無言で立ち尽くしている。何か言いたげに見えたが、サイファは何も訊かなかった。

「じゃあな」

軽い別れの言葉を口にすると、扉の方へ颯爽と足を進めた。だが、ドアノブに手を掛けたところで、急に動きを止めた。背を向けたまま、つぶやくように言う。

「もしかしたら、今度のことで、おまえにも迷惑を掛けることになるかもしれないが……」

そこで言葉を切った。暫しの間ものち、小さくふっと息を漏らした。

「いや、自業自得だな」

笑いを含んだ声でひとり納得したように言うと、振り返ることなく、軽く片手を上げて出て行った。医務室の扉を開閉する音が、ラウルの耳に微かに届いた。

頬を撫でる空気が冷たい。吸い込むとさらに冷たい。痛いくらいに染み渡っていく。

サイファは酔いが醒めるのを感じた。

まだ明るくなりきっていない空を見上げ、息を吐きながら目を細める。グラデーションはすでにかなり拡散していた。そろそろ人々が動き出す時間に差し掛かろうとしている。

家へ近づくにつれ、自分の鼓動が強くなるのを感じた。

レイチェルは起きているだろうか。さすがにこの時間まで待っていることはないだろう。帰ら

ないと言ってあったのだ。寝ていたら起こそうかどうか迷う。出来れば、先にアンジェリカの様子を聞いておきたい。対応方を考えたいのだ。

迷っているうちに、家に着いてしまった。

眠っていたら、一度、優しく起こしてみよう。それで起きなければ、起きるまで待とう——そう結論を出し、重厚な扉に手を掛けた。そろりと音を立てないように開く。

だが——。

「お父さん遅い！朝帰りじゃない」

アンジェリカがリビングルームから飛び出してきた。寝るときの格好ではない。ハイネックの黒いセーターにチェック柄のミニスカート、つまり、まったくの普段着だった。サイファの前に駆けつけると、両手を腰にあて、頬を膨らませた。少し前屈みになり、上目遣いで睨むようにして覗き込む。

それは、幻聴でも幻覚でもない。まぎれもなく彼女はここにいる。

想定外の展開に、サイファは驚きを隠せなかった。

「そんな言葉、どこで覚えたの」

そのことに驚いたわけではない。だが、なぜかそんな重要度の低いことを口にしていた。そう言いながら、考える時間を稼いでいたのかもしれない。

アンジェリカは怪訝な表情で、首を傾げた。

「お酒くさくない？」

「ああ、ラウルのところで飲んでて……」

突然、アンジェリカは正面からサイファに飛びついた。胸に顔を埋め、背中に手をまわし、ぎゅっと力を込める。

サイファは大きく目を見開いた。

少し離れたところにはレイチェルが立っていた。優しい眼差しでふたりを見守っていた。

「お母さんから、本当のことを聞いたわ」

静かな落ち着いた声。

「つらくは、なかったの？」

サイファの胸に顔を寄せたまま、アンジェリカは囁くように問いかける。

「……少しはね」

サイファは正直に答えた。今さら嘘をつくことに何の意味もない。彼女も本当のことが聞きたいはずだ。ずっとそれを望んでいたのだ。

「私のこと、憎くないの？」

「そんなふうに思ったことは、一度だってないよ」

それは、嘘偽りのない事実だった。だが、信じてもらえるだろうか、と少し不安に思う。彼女の華奢な背中に両手をまわし、そっと優しく抱きしめた。

「私ね、生まれてきて本当に良かった。今は、心からそう思っているわ」

そう言ったアンジェリカの声は少し固かった。体も少し強張っていた。大きく息を吸い込んだのが、体を通して伝わってきた。腕の中の少女に、サイファは気遣うような目を向けた。

アンジェリカは顔を上げ、彼と視線を合わせた。にっこりと微笑む。

「だから、ありがとう。私を生かしてくれて。私とお母さんを守ってくれて」

精一杯の感謝を込めてそう言った。サイファがいなかったら、サイファの判断が違うものだったら、自分はここにはいなかった。そのことを想像するだけでも怖い。だから、この気持ちだけは伝えたかった。

そして、出来れば――。

「これからも、ずっと私のお父さんでいてくれる？」

「いいの？」

サイファは思わず尋ね返した。

そんな彼に、アンジェリカは口をとがらせ、少し怒った顔を見せる。

「訊いてるのは私なんだけど」

サイファは柔らかく微笑んだ。愛おしげに彼女を見つめると、黒髪に手を差し入れ、梳くように滑らせる。

「ああ、もちろんだよ。これからも、ずっと私の娘でいてくれると嬉しい」

「良かった」

アンジェリカはほっと安堵の息をつきながら笑った。笑いながら、次第に瞳を潤ませていく。慌ててうつむくと、目元を人差し指でそっと拭った。

「なんだか安心したら眠くなっちゃった」

明るく言ったその声には、微かに涙が混じっていた。

「私、寝てくるわ。今日もジークのお見舞いに行かなくちゃいけないし」

そう言いながら、顔を隠すようにしてサイファから離れ、階段へと駆けていく。数段上がったところで、くるりとスカートをひらめかせて振り返り、照れくさそうにはにかんで見せた。

「おやすみなさい、お父さん、お母さん」

サイファとレイチェルは、意地っ張りな愛娘に微笑みを向けた。

「おやすみ、アンジェリカ」

「おやすみなさい」

ふたりはそれぞれ挨拶を返し、二階へ駆け上がっていくアンジェリカを見送った。

「お帰りなさい」

「ただいま」

玄関に残されたふたりは、いつもどおりの挨拶をして、微笑みを交わした。どちらともなく手を伸ばし、自然な流れで抱き合う。互いの温もりを確かめるように、そのまま動きを止めた。

「ずっと、起きてたの？」

サイファは囁くような優しい声で尋ねかける。

レイチェルは、彼の温かい胸元に頬を寄せたまま、小さく微笑んだ。

「ええ、今夜は帰ってこないって言ったんだけど、あの子、いつまででも待つってきかなくて」

「ずいぶん待たせてしまったね」

サイファも目を細めて微笑んだ。彼女の背中にまわした腕に、少しだけ力を込める。

レイチェルは顔を上げ、大きな瞳を彼に向けた。

「ずっと、ラウルのところにいたの？」

「ああ、一晩中、酒を飲みながら、嫌味を言って絡んでいたよ」

「まあ」

レイチェルは口元に指を添え、くすくすと笑った。彼女にはわかっていた。そして嬉しかった。その行動は、憎しみからくるものではなく、彼なりの甘えである——。彼もまた、ラウルに好意を持ち、慕っているのだ。子供の頃から今に至るまで、その気持ちの根本的な部分は変わっていないのだろう。

サイファは彼女の細い髪に指を絡めた。その一本一本は薄く透き通っているように見えた。とてもきれいだが、とても頼りない。

「壊れてしまうと思っていた」

「私も、覚悟はしていたわ」

レイチェルの声には、どことなく固さが感じられた。そのときの心情を思い出したせいだろう。

「強い子だね」

サイファは二階の方へ視線を向けて言った。

「すぐに結論を出したわけじゃないのよ。すごく思い悩んでいたわ」

「思い悩んで出した結論なら、なおさら嬉しいよ」

アンジェリカのことだ。あらゆる現実を思い巡らせ、あらゆる可能性を想定し、そのうえでこの結論を選び取ったのだろう。真剣に悩んだ分だけ、その結論には重みがある。

「アンジェリカには、いくら感謝してもしたりないな」

ゆったりと熱い吐息まじりに言う。

レイチェルは優美な微笑みを浮かべた。

「私たち三人が家族として過ごした、この14年の積み重ねがあったからだと思うわ」

サイファは一瞬だけ目を見開き、それからふっと小さく笑った。

レイチェルは不思議そうに小首を傾げた。

「どうしたの？」

サイファは帰宅する少し前の会話を思い浮かべていた。

「ラウルにも同じようなことを言われたんだ」

「ラウルに？」

レイチェルは目をぱちくりさせた。

「私は血を否定していたつもりだったが、実際のところは、誰よりも血にこだわっていたのだろう。心のどこかで血のつながりには敵わないと思っていた。信じきれなかったんだよ。情けな

いな、本当に」

サイファは落ち着いた口調で、淡々と心情を吐露した。最後の部分に、軽くため息が混じった。

レイチェルは彼を見つめたまま、ゆっくりと首を横に振った。そして、再び、彼の胸に寄りかかった。

「サイファ、これからも、ずっと私の夫でいてくれる？」

「ああ、もちろん。君がずっと妻でいてくれると嬉しい」

それは、アンジェリカのと看と同じ言いまわしだった。ふたりは顔を見合わせ、穏やかに笑い合った。

「じゃあ」

レイチェルは体を起こし、顔の横に左手を立てて見せた。指先をまっすぐに揃え、手の甲をサイファに向けている。

「持っているんでしょう？」

わずかに首を傾げて尋ねる。

主語はなかったが、サイファには何のことかすぐにわかった。ズボンのポケットに右手を差し入れて探る。そして、ゆっくりと手を引き、彼女が催促したものを取り出す。それは、プラチナの指輪だった。14年前、結婚指輪としてレイチェルに贈ったものである。先日の事故のときに、ルーファスの手を通して彼の元へ戻ってきたのだ。

「知っていたの？」

「そうじゃないかと思っただけ。指輪がないことに気づいていたはずなのに、何も言わなかったから」

サイファはふっと表情を緩めた。彼女には敵わないと思った。

「君を縛り付けてしまう気がして、迷っていたんだ」

「今なら、もう迷うこともないでしょう？」

レイチェルは可憐に愛らしく笑った。

その笑顔に後押しされるように、サイファは彼女の左手をとった。細く、小さく、そして透き通るように白い。

「これからもずっと、私とともに歩んでいってくれるかい？」

「はい」

レイチェルはサイファの目を見つめ、凜とした声で答えた。迷いは微塵も感じられなかった。

サイファはプラチナの指輪を、彼女の左手の薬指にゆっくりと嵌めた。

「結婚式みたい」

レイチェルは無邪気にくすりと笑った。

「そのつもりだよ」

サイファは真面目な顔で答えた。彼女の左手を柔らかく包み込むように握る。

レイチェルは顔を上げ、深く澄んだ双眸を彼に向けた。

ふたりは手を繋いだまま、まっすぐに見つめ合った。

互いに小さく一歩ずつ歩み寄る。

そして、ゆっくりと口づけを交わした。

言葉はなくとも、ふたりはその意味をわかり合っていた。

それは、ともに生きる決意、そして、誓い。

14年前に交わしたもののよりも、もっと強く、もっと深い――。

朝の光がステンドグラスを通し、周囲に彩りを添えた。

朝の鐘が王宮で打ち鳴らされ、同時に鳥の羽ばたきが空へ舞い上がった。

それらは、まるで、この儀式を祝福しているかのようだった。

鐘の余韻が消える。

ふたりはそっと目を開き、互いの姿をその瞳に映した。

そして、視線を合わせたまま、優しく微笑み合った。

94. 未来へ繋ぐ一歩（最終話）

「おはよう！」

ジークとリックの姿を見つけると、アンジェリカは大きく手を振りながら駆け出した。

校門をくぐろうとしていた二人は、足を止め、声のする方に振り向いた。それぞれ軽く片手を上げ、笑顔で挨拶を返す。

「おう」

「おはよう」

アンジェリカは二人の前まで来ると、もの珍しげに、まじまじとジークを見つめた。

「ジーク、スーツなんて持っていたのね」

「買ったんだよ。最後くらいはちゃんとしてえし」

ジークはぶっきらぼうに言い返した。

スーツのことについては、母親からもリックからも、すでにさんざんからかわれていた。アンジェリカからも言われるだろうことは覚悟していた。しかし、思ったよりもあっさりした反応で、内心ほっとした。魔導省の制服を見せたときの恥ずかしさと比べれば、随分ましだと思った。

今日はアカデミーの卒業式だった。その主役はジークたちの学年である。クラスメイトは全員そろっての卒業となった。ただ、当然だが、そこには途中で自主退学したセリカは含まれていない。

卒業式での服装に決まりはなく、普段と同様、まったくの自由となっていた。ジークがスーツを選んだのは、彼の意思に他ならない。彼自身の言葉どおり、最後くらいはきちんとした格好をしたいという、けじめのような思いからだった。

「私のも新しい服なのよ。今日のために買ったの」

アンジェリカは両手を広げ、その場でくるりとまわった。短いプリーツスカートが遠心力で広がった。

彼女の服装は、黒のスーツに薄桜色のブラウスを合わせたものだった。スーツとはいっても、肩の部分にはふんわりと丸みがあり、スカートも短いプリーツという可愛らしい形のものである。ブラウスにもフリルやレースがあしらわれていた。そこには、上品でいながら、なおかつ華やかな雰囲気か漂っていた。

「すごく可愛いよ。ね、ジーク」

リックは微笑みながらそう言うと、隣のジークに同意を求める。

だが、返事はなかった。

ジークは難しい顔をして腕を組み、じっと彼女を見つめて考え込んでいた。

「スカート、それ、短すぎねえか？」

「そう？ いつもと同じくらいのはずだけど」

アンジェリカは自分のスカートの裾を確認しながら答えた。

「おまえ、今日は壇に上がるんだろ？ だから……」

ジークは途中で言い淀んだ。困ったような顔をして目を伏せる。耳元はうっすらと赤みを帯びていた。

アンジェリカは疑惑の眼差しを向けた。

「……ジーク、変な想像してない？」

「ばっ……！ 心配してんだよ！！」

ジークは必死になって言い返す。

「そんなことになったら、恥をかくのはおまえなんだぞ！ だからっ！！」

凶星を指されたせいか、狼狽して焦ったせいか、彼の顔はさらに赤みを増していた。

アンジェリカは立てた人差し指を唇にあて、斜め上を見ながら考え込んだ。ジークに指摘され、少し不安になっているようだ。だが、すぐに明るい表情に戻る。

「大丈夫よ、きっと」

「そうだよ。ジークは心配のしすぎ」

リックも笑いながら同調した。

「それより、アンジェリカ、答辞の方は大丈夫なの？」

「ええ、ありきたりのことしか言わないから、期待されても困るけれど」

彼女にしては控えめな答えだった。肩をすくめ、やはり控えめな笑みを浮かべている。

卒業式の答辞は、全学科で最も優秀な成績を修めた者に任される。それを選ぶのはアカデミーの全教師と学長である。履修内容や成績基準は各学科によって違うため、その中からひとりを選ぶことは難しい問題であり、揉めることも少なくないらしい。だが、今年は満場一致でアンジェリカに決定した。文句のつけようもないくらいに、彼女の成績が突出していたのだ。ラグランジェの名によるものではない。たとえラグランジェの名がなくとも、彼女が選ばれることは間違いないだろう。

「書いた紙を忘れた、なんてことねえだろうな？」

ジークは眉をひそめて尋ねた。

だが、彼女の答えはあっけないものだった。

「紙には書いてないわよ」

「暗記したの？」

リックは大きく目を見開いて尋ねた。その隣で、ジークもポカンと口を開いた。

アンジェリカは人差し指を立て、口元に添えた。

「だいたいの流れは押さえてあるから、あとはその場で考えながら話していけば、何とかなるんじゃないかしら」

「なんか、俺の方が胃が痛くなってきた」

ジークは顔をしかめながら脇腹を押さえ、そこから体を斜めに傾けた。

「そこ、胃じゃないわよ」

「細かいこというなよ！」

「ジークってがさつなくせに神経質なんだから」

「がさつは余計だ！」

いつものような二人のやりとりを聞きながら、リックは優しく微笑んだ。

「ジークってさ、昔はもっと図太かったよね」

「そうだったか」

ジークはとぼけたが、言われたことに対する自覚はあった。アカデミー入学以来、年々、臆病になっている気がする。以前はここまで神経が細くなかったと思う。だが、それは単にまわりを見ていなかっただけなのかもしれない。鈍かっただけなのかもしれない。

「あ、ラウルが来たよ」

リックの声に反応して、講堂の方に目を向ける。ちょうどラウルが裏口から入っていくところだった。彼は普段と変わらない格好をしている。いかにも彼らしい。正装などしていたら、頭でも打ったのかと心配しただろう。

腹の立つ奴だったけど、今日でさよならなんだよな——。

なぜか、そんな感傷的な気持ちが胸をよぎった。彼の姿を眺めながら、複雑な表情で、僅かに目を細める。

「そろそろ行かなきゃ」

「ええ」

リックとアンジェリカは、軽い駆け足で講堂に向かった。だが、ジークの足は止まったままだった。それに気づいたアンジェリカは、くるりと体ごと振り返った。黒髪がさらりと舞う。

「ジーク、どうしたの？ 行くわよ？」

大きく瞬きをして、僅かに首を傾げてジークを見つめる。

「あ、ああ」

ジークは我にかえったように返事をする、ゆっくりと風をきって駆け出した。

卒業式は講堂で行われる。

出席するのは、主役である卒業生、それ以外は教師たち学校関係者のみである。在校生も保護者も来賓もなく、いたって質素なものだ。アカデミーでは入学式も卒業式もこのような形式で執り行っている。それが、アカデミー創立以来の伝統だった。

入学式と同様に、学科別の成績順で立ち位置が決められる。一列目は魔導全科、二列目は医学科、三列目は工学科で、それぞれ成績の良い順に右から並ぶのだ。椅子はなく、全員が立ったままである。

最前列の最も右側がアンジェリカ、その隣にジーク、中ほどにリックがいる。

ジークは横目でちらりとアンジェリカを見た。

何かとても懐かしかった。四年前——入学式のときも、右隣にいたのはアンジェリカだった。今も小さいが、あの頃はもっと小さかった。本当に子供だった。そんな幼い少女に、自分の立つべき場所を奪われたことが、たまらなく悔しく腹立たしかった。

入学以降、その位置を奪おうと躍起になった。もちろん、正々堂々としてである。だが、彼女はいつも自分の上にいた。そして、ついにただの一度も勝てないまま、この日を迎えることとなった。完敗である。

しかし、それを悔やむ気持ちはない。自分は持てる力のすべてを出し切ったつもりだ。それでも彼女には勝てなかった。その事実がすべてである。言い訳など何もない。彼女の努力と才能を、今は素直に認めている。

彼の視線に気がついたのか、アンジェリカが振り向いた。

ジークは慌てて目を逸らせた。だが、少し遅かったようだ。

「こっちを見てた？」

アンジェリカは声をひそめて尋ねた。責めている口調ではない。

「……少し」

ジークは前を向いたまま、正直にぼそりと答えた。

アンジェリカは小さくくすりと笑った。

「私、入学式のときのことを思い出していたの」

「え？ 俺も……」

ジークは大きく瞬きをして振り向いた。

アンジェリカはまっすぐに彼を見上げていた。柔らかい表情だった。

二人は密やかに笑いあった。

「これより、王立アカデミー、卒業証書授与式を開式いたします」

独特の張りつめた静寂が破られ、卒業式が始まった。

まずは、卒業証書の授与である。ひとりずつ壇に上がり、筒に入った卒業証書を学長から受け取る。最初はアンジェリカ、次はジークと、これも学科ごとの成績順である。

ジークは卒業証書を受け取り、元の位置に戻ってきた。正面を向いてその場所に収まると、残りの生徒に授与されるのを待つ。その間、隣のアンジェリカに何度も目を向けた。彼女は常に正面を見据えていた。その凜とした横顔は、ずっと見ていたいと思うほどきれいだった。

全員に卒業証書を授与すると、学長はそのまま壇上で祝辞を述べた。

生徒が学長と顔を合わせるのには、特別なことがなければ、入学式と卒業式くらいである。実際、ジークもそうだった。入学式以来、一度も顔を見た記憶はない。そのため、この人が学長であるという実感はなかったし、祝辞にもあまりありがたみを感じなかった。それでも真面目に耳を傾け、話の終わりには拍手を送った。

「続いて、卒業生代表による答辞」

司会の落ち着いた声が、式を粛々と進めていく。

「魔導全科、アンジェリカ＝ナール＝ラグランジェ」

「はい」

アンジェリカは、よく通る声で返事をした。そして、手にしていた卒業証書の筒を、隣のジークに預ける。そういう段取りになっていた。事前に司会の先生に指示されたのだ。毎年、そうしているらしい。これも伝統ということだろう。

ジークはそれを受け取りながら、「頑張れ！」の気持ちを目で送った。こぶしをぐっと握りしめて見せる。声を出すわけにはいかないのに、それが精一杯だった。

アンジェリカはその思いをしっかりと受け止めたようだった。僅かに緊張したような微笑みを浮かべ、小さくこくりと頷く。そして、背筋をピンと伸ばして前に向き直ると、しっかりとした足どりで壇に上がっていった。

講演台を挟んで、学長と向かい合わせになる。

ゆっくりと、深く一礼した。

小さな口を開き、澄んだ声を講堂に響かせる。

「四年前、私は、張りつめた気持ちで、この講堂に立っていました。

将来の目標など持っていませんでした。

アカデミーで学びたいという希望すらありませんでした。

ただ自分のことを認めさせたい、そんな小さな意地だけで、

ここへ来ることを選んだのだと思います。

そんな私でも、このアカデミーで学ぶことは、

純粹に楽しいと感じました。

高度な理論と実技を、仲間とともに学び、競い合える――。

それはアカデミーでしか手に入らない最高の環境です。

しかし、もちろん、楽しいことばかりではありませんでした。

強い不安に苛まれたこともありました。

傷つけられたことも、傷つけたこともありました。

アカデミーを一ヶ月にわたって欠席したこともありました。

それでも、それらの困難を乗り越え、

この場に立つことができたのは、

指導してくださった先生、ともに学んだ仲間、

そして、いつも見守ってくれていた両親、

皆の支えと助力によるものです。

この場を借りて、感謝の意を表したいと思います。

つらいことも良い経験だった、とはまだ思えません。

ただ、いつか振り返ったときにそう思えるよう、

その経験が無駄にせず、これから生きていきたいと考えています。

私たち59名は、今日、アカデミーを卒業します。

今は、目指すべき未来の欠片を、ようやく見つけたところです。

それはまだ、遠くに見える小さな光に過ぎません。

しかし、それはとても大切な光です。
時には踵を上げて背伸びをしながら、
時には歩んできた道を振り返りながら、
その未来に向かって、着実に進んでいきたいと思います」

ジークは夢中でそれを聞いていた。瞬きも、呼吸さえも忘れるほどだった。

この四年間の思い出が呼び起こされた。次々と頭の中を駆け巡る。本当に様々なことがあった。波乱に満ちた四年間だった。つらく苦しく、そして幸せだった。

アンジェリカとクラスメイトになれたことは、奇跡みたいな偶然が積み重なった結果だ。それは、運命といってもいいかもしれない。そのくらいのことを考えても、罰は当たらないだろうと思った。彼女が10歳でアカデミーに入ることを決意しなければ、決意しても彼女の両親が許さなければ、クラスメイトになることはなかった。それ以前に、赤ん坊の頃に長老たちの手にかかって殺されていたかもしれないし、下手をすれば生まれることすらなかったかもしれない。彼女が生きていることが、すでに奇跡のようなものなのだ。

アンジェリカは壇上で一礼した。拍手が沸き起こる。だが、感傷に浸っているジークの耳には、ほとんど入ってこなかった。拍手をすることすら忘れていた。ただ、壇上の彼女を眩しそうに見つめていた。

卒業式はあたたかな余韻を残して終了した。

終始無表情だったラウルは、終了するとすぐに踵を返し、大きな足どりで裏口に向かった。他学科の担任のように、生徒と名残を惜しむことはしなかった。実に淡白な別れだった。

「おつかれさま」

講堂を出たところで、背後から声を掛けられた。その声だけで誰だか認識できた。眉根を寄せて振り返る。

そこにいたのは、案の定、サイファだった。講堂の外壁にもたれかかり、ゆったりと腕を組んで、僅かに口角を上げている。周囲には他に誰もいない。

「何をしに来た」

「娘の晴れ姿を見に来たんだよ」

サイファはすました顔で、当然のように言った。ふっと小さく笑って付け加える。

「自分に会いに来たとでも思ったか？ 少し自惚れが過ぎるんじゃないか？」

「用がないなら呼び止めるな」

ラウルは低い声で唸るように凄んだ。怒りを込めた眼差しで、相手を凍りつかせんばかりに睨みつける。

だが、サイファはにこやかにそれを受け流した。

「この四年間に対する労いの言葉を、と思ってね」

組んだ腕をほどき、軽く両手を広げる。

ラウルは睨みを利かせたまま、サイファを見つめた。そのまま、静かに口を開く。

「約束は果たした」

その約束とは、アカデミーの担任としてアンジェリカを見守る、というものだった。五年ほど前に交わされたものである。約束というより、命令といった方が近いかもしれない。ラウルには強くは断れない理由がある。サイファはそれを承知で、強引に頼んできたのだ。

「ラウル、おまえは教師に向いているよ。また推薦しておこうか」

サイファは穏やかに微笑み、ゆっくりとした口調で言った。

「こんな面倒なことは二度と引き受けん」

ラウルは無愛想に却下した。特殊な事件は抜きに考えても、日々の授業やその準備、試験問題作成に採点、課題の評価など、かなりの仕事量になる。教師という職業に意義を見出している者でなければ、ただ面倒としか思えないだろう。

「そうだな。おまえには他に頼みたいこともあるからな」

「おまえの頼みも二度と聞かん」

「さあ、それはどうかな」

サイファは顎を引き、上目遣いで視線を送ると、意味ありげに口の端を上げた。

ラウルは眉をひそめて睨みつけた。サイファが何を企んでいるのか知らないが、巻き込まれるつもりはなかった。何を言ってくるにしても拒絶するだけである。勢いよく背を向けると、そのまま足を止めずに立ち去る。

「またな、ラウル先生」

サイファは引き止めることはしなかった。からかうように笑いを含んだ声でそう声を掛けると、去り行く背中を笑顔で見送った。

ラウルは医務室へ向かった。人通りの少ない廊下を、大きな足どりで進んでいく。アカデミーの教師としての仕事はすべて終了した。これからはただの医師に戻ることになる。

「ラウル」

折れそうな細い声。それは、ユールベルが発したものだ。彼女は医務室の前で、壁にもたれかかっていた。そこでラウルを待っていたのだ。緊張のためか、表情が硬い。

ラウルはひと睨みしただけで、彼女の呼びかけには応えなかった。無言で鍵を開け、扉をガラガラと大きく開く。

「入れ」

ちらりと彼女に横目を流し、愛想なくそう言うと、扉を開いたまま医務室に入っていった。

ユールベルは彼に従い、医務室に足を進めた。後ろ手でそっと扉を閉める。そのまま、その場に立ち尽くした。うつむき加減にラウルを窺う。

「座れ」

机に向かって席についたラウルが、隣の丸椅子を顎で示しながら言った。

ユールベルは促されるままに大人しく座った。だが、彼がカルテや薬を準備しているのを目にすると、抗議の声を上げる。

「目を診てもらうために来たわけじゃないわ。話したいことがあったから」

「先に目を診せろ。しばらく来ていなかっただろう」

ユールベルが最後に診察を受けたのは、例の事故の後、母親と対峙するために病院へ行ったときだった。そこで偶然にレイチェルやラウルと話をすることになり、核心をつかれ、核心を知り、泣きじゃくった。そのあとのことである。あれから五ヶ月ほどが経過していた。恥ずかしくて、悔しくて、腹立たしくて、ずっと会う気になれなかったのだ。

ラウルは洗面台で手を洗い、椅子に戻ると、正面から彼女と向かい合った。彼女の頭を抱えるように引き寄せ、後頭部に作られた包帯の結び目を解いた。そして、少しくたびれた包帯を、頭から巻き取るように外していった。

ユールベルは、彼の腕に寄りかかり、目を閉じた。

残りの包帯がはらりと落ち、隠していた左目と火傷の痕が現れた。完治しないと宣告されたものだ。この傷を意識するとき、心の底に淀んだ黒く重い気持ちが、無理やり掻きまわされるように感じる。忘れてしまえたらどれだけ楽だろうと思う。だが、それが不可能なことはわかっていた。過去ではなく、切り離すことのできない今現在の現実なのだから――。

ユールベルは目を開いた。

ラウルの顔が近かった。冷たい手で彼女の頬を押さえ、じっと覗き込んでいる。彼が見ているのは、彼女ではなく彼女の傷だ。

「ラウル」

ユールベルは小さな声で呼び掛けた。反応はなかったが、続けて質問をする。

「死にたいほどつらいと思ったことはある？」

「定義が曖昧だ。人によって基準が違いすぎる」

「あなたのことを聞いているの」

「さあな。あったかもしれないが、思い返しても仕方のないことだ」

ラウルは診察しながら淡々と答えた。一通り状態を診ると、手早く消毒して薬を塗り、頭を引き寄せて新しい包帯を巻く。そして、いつものように、頭の後ろでそれを結んだ。

ユールベルはゆっくりと彼から身を離した。息を詰めて、彼を見つめる。

「私、今日で最後にしたい」

「何をだ」

「あなたに心を煩わされることを」

「そうか」

ラウルは素っ気なくそう言うと、薬や包帯を片付け始めた。彼女には一瞥もくれない。

ユールベルは顔を曇らせ、哀願する。

「ラウル、お願い。今だけ私を見て」

ラウルはじろりと横目で睨んだ。迷惑だと云わんばかりだった。だが、彼女の思いつめた表情を目にすると、ふと動作を止めた。体ごと彼女に向き直り、真正面から強く見据える。

「言いたいことがあるなら言え」

静かな低音が冷たく響いた。

ユールベルは目をそらさなかった。小さな口を開き、緊張した硬い声で言う。

「私、はっきりとさせたいの」

ラウルは無反応だった。身じろぎもせず、彼女を見つめている。

ユールベルは、微かに震える声で言葉を繋ぐ。

「だから、教えて、あなたは私のことをどう思っているのかを」

「患者だ」

ラウルは即答した。

ユールベル眉をひそめた。そういうことを聞きたかったのではない。だが、彼の言いたいことは伝わる。これで十分だったのかもしれないが、今日はどうしても妥協したくなかった。

「私にどういう感情を持っているのかを訊いているの」

「おまえが望むような感情を抱いたことは一度もない」

ラウルはきっぱりと言った。何の躊躇いも感じられなかった。

「少しも好きじゃないってこと？」

「そうだ」

ユールベルの瞳が揺らいだ。答えはわかりきっていたが、面と向かって言われると、やはり気持ちが悪くなる。

「だったら、どうしてこれほど私の面倒を見てくれるの？」

「患者だからだ」

「他の患者とは扱いが違うわ」

「サイファに頼まれている」

ユールベルは小さく息を継ぎ、折れそうな心を立て直す。

「私のことは迷惑？」

「医者としては何とも思わない。個人的には迷惑だ」

「迷惑をかけないようにすれば、私をあなたのそばに置いてもらえる？」

「その考えが迷惑だ」

ラウルは突き放すように、取り付く島のない答えを返す。

ユールベルは唇を噛んだ。それでも、怯むことなく質問を続ける。半ば意地になっていたのかもしれない。

「あなたが想っているのは、レイチェル？」

「そうだ」

「あの人にはおじさまがいるわ」

ラウルの眉が僅かに動いた。だが、無表情は崩さない。

「おまえに言われなくても知っている」

「自分に望みがあるとでも思っているの」

「思っていない」

「だったら、どうして……」

ユールベルはそこまで言いかけて口をつぐんだ。聞くまでもないことだった。理屈ではないのだろう。それは自分も同じだった。膝の上でスカートの裾をぎゅっと握りしめる。

「私では、あの人の代わりになれない？」

「代替など求めていない」

ユールベルは、はっと息を呑んだ。

冷たかった彼の声が、急に熱を帯びた。少し怒っているように、そして、むきになっているように聞こえた。冷静でいられなかったのは、レイチェルのことに触れたからだろうか。誰も彼女の代わりになどなれないと主張したかったのだろうか。

「そうよね」

ぽつりとつぶやくと、首が折れそうなくらいに深くうつむく。長い髪がカーテンのように表情を覆い隠した。

どうしようもない敗北感だった。

彼の想いの強さを思い知らされた。そして、自分の心の弱さを思い知らされた。自分がかつて、寂しさを埋めるために代替に縋ってしまった。代替を求めないと言い切った彼と比べ、あまりにも情けない。所詮その程度だと非難されても反論できない。

「わかったわ……」

彼女はゆっくりと顔を上げた。目が少し潤んでいた。

「あなたはどうするの？」

「どうもしない。何も変わらない」

ラウルの声は平静に戻っていた。いつものとおり、何の感情も感じさせない声だった。

「つらくはないの？」

「仕方のないことだ」

ユールベルは目を細めた。

「変わるの、いけないこと？」

「変わりたいと思えば、変わればいい。変わりたくないと思えば、変わらなければいい。選ぶのは自分だ」

ラウルは迷いなく言う。

ユールベルは彼の変わらない表情を見つめた。

そろそろと細い手を伸ばす。

彼の長い横髪を掴み、自分の方に引っ張る。

自分からも顔を近づける。

彼の唇にそっと口づける。

右目から涙が零れた。

頬を滑り落ち、彼の手の上で弾けた。

うつむきながらゆっくりと顔を離し、手を放した。

「私は、変わるわ」

「そうしろ」

ラウルは相変わらず無表情のまま言った。

ユールベルは涙を拭いて立ち上がった。震える声で言う。

「さようなら」

「今後も目を診せに来い。医者としての命令だ」

ラウルは僅かに顎を上げて言った。

ユールベルは少し迷ったあと、小さくこくりと頷いた。背中を向け、早足で医務室をあとにする。緩やかなウェーブを描いた金の髪と、真新しい白の包帯が、ふわりと波打つように揺れた。

ラウルは椅子から立ち上がった。窓際へ歩いていくと、クリーム色のカーテンとガラス窓を開けた。眩しい光と新鮮な空気が医務室に滑り込んだ。消毒液の匂いを掻き消していく。

遠くで若いどよめきが起こった。

それが、卒業生たちのものか別のものかはわからない。彼にとってはどちらでもいいことだった。窓枠に肩を寄せて腕を組んだ。目を細めながら青空を見上げ、小さくため息をついた。

「リック！！」

講堂の外で話をしている三人を見つけると、セリカは大きく右手を上げて駆け出した。

「卒業おめでとう！」

弾けるような笑顔でそう言うと、手にしていた花束を差し出した。柔らかな色合いのものだった。ふわりとやさしい香りが周囲に広がった。

リックは目を丸くして、花束と彼女を交互に見た。

「僕に？」

「お祝いよ」

セリカはきれいに微笑んで言った。

リックは顔をほころばせて、両手で花束を受け取った。

「ありがとう。花なんてもらったの、初めてだよ」

「なんだよ、リックだけかよ」

ジークは腕を組み、しらけた顔で言った。

「あら、欲しかったの？」

「いらねーよ！」

セリカはからかうように尋ねかけ、ジークはムツとして言い返す。ふたりは顔を合わせるたびに言い合いをしていた。主にジークがつっかかっているのだが、セリカもたまに挑発するようなことを言う。だが、それは過去の遺恨によるものではない。少なくともセリカの方には遺恨などなかった。

「もう、ふたりとも仲良くしてよ」

リックはなだめるように言った。少し困ったように、肩をすくめて苦笑する。

セリカはくすりと悪戯っぽく笑った。

「仲良くしすぎても困るでしょう？」

「うん、それはちょっと」

「心配するな。絶対に、ありえねえから」

ジークは「絶対に」のところに思いきり力を込めた。言葉だけでなく、こぶしにも力を込めている。眉間には縦じわが刻まれていた。

あまりの必死さが、逆にコミカルに見えた。リックもセリカもそろって吹き出した。

だが、アンジェリカだけは静かに見ていた。セリカが来てからずっと静かだった。セリカのことや苦手だという気持ちは、今も変わっていないらしい。そう簡単に変わるものでもないだろう。あからさまに態度に出していないだけ、成長したのかもしれない。

彼女に話しかけようかどうしようか、セリカは迷う。だが、アンジェリカの方はそれを望んではいないだろうと考えて、やめることにした。代わりにリックの袖を軽く引っ張り、小声で耳打ちするように言う。

「ねえ、リック。そろそろ行かない？」

「あ、そうだね」

リックは軽い調子で同意すると、ジークに向き直った。

「ジーク、あのさ」

「ああ、ふたりだけでお祝いするとか言うんだろ？ 行ってこいよ」

ジークは先回りして言った。わかりきったことと言わんばかりだった。このパターンは過去にも何度かあったので、いくら鈍感なジークといえど察することができたのだろう。

「うん、ごめんね」

リックはあまり申しわけなく思ってなさそうな口調で謝った。

「じゃあ行こうか、セリカ」

「ええ」

セリカは微笑んで答えた。リックといると、自分は大切にされているのだと感じる。とても安心できる。だから、穏やかな気持ちでいられるのだと思う。

「じゃあ、またね。あとで連絡するよ」

リックはジークにそう言うと、手を振りながら、セリカと連れ立って校門を出て行く。

ジークとアンジェリカも小さく手を振って、ふたりの背中を見送った。

「俺らはどうする？」

ふたりだけになり、ジークは隣のアンジェリカに尋ねかけた。彼としてはこのまま帰るつもりはない。もうしばらく一緒にいたい。彼女も同じ気持ちであってほしいと願いつつ、返事を待つ。

アンジェリカは大きな漆黒の瞳でジークを見上げた。

「私、あの川原へ行きたいんだけど」

「ああ、あそこな」

ジークにはすぐにわかった。自分たちが共通で知っている川原は一箇所しかない。

「ええ、話したいこともあるし」

「話したいこと？」

「それは、あとでね」

アンジェリカはにっこりと微笑んで言った。

ジークは怪訝に彼女を見つめた。なぜわざわざ川原で話すのだろうか。他の人に聞かれたくない話なのだろうか。だが、表情からすると、深刻な話ではなさそうだ。気にはなったが、ここで問い詰めても喧嘩になるだけである。あとで話してくれるというのだから、大人しく川原まで待とうと思った。

「やあ」

サイファが講堂の方から歩いてきた。軽く右手を上げ、人なつこい笑顔を見せている。今日も濃青色の制服を身に着けていた。仕事を抜け出してきたのだろう。

「サイファさん」

「お父さん」

ふたりは同時に振り向いた。

「もしかして、式、見てたの？」

アンジェリカは頬を赤らめ、少し責めるように尋ねた。

だが、サイファはまるで気にすることなく平然と答える。

「アンジェリカの晴れ姿だからね」

「もう、恥ずかしいから来ないでって言ったのに！」

アンジェリカは恨めしそうに睨み、口をとがらせた。

それでも、サイファが悪びれることはなかった。にこにこ微笑みながら言う。

「ごめんね。でも、いいものが見られたよ」

アンジェリカはその言葉にピクリと反応した。スカートの後ろを両手で押さえ、顔を真っ赤にしながら眉をひそめる。

「もしかして、見えたの？」

「ん？ 何の話？」

「ジークが……」

「な、何でもないですっ！！」

ジークは慌ててふたりの間に割って入った。開いた手を小刻みに振り、何事もないことをアピールする。あんな話をしていたとサイファに知られたくはない。呆れられるか冷たい目を向けられるかしそうだ。それより何より恥ずかしい。

ガシッ——。

サイファは彼の手首を掴んだ。

「えっ？」

「ジークを借りたいんだけど、いいかな？」

とまどうジークを無視して、アンジェリカに尋ねかける。ジークの手首は掴んだままである。それほど強い力ではなかった。振り切ろうとすれば振り切ることはできるだろうが、ジークにその勇気はない。

「何の用なの？」

「少し話をするだけだよ」

サイファは彼女の警戒を解くように、優しい笑顔を浮かべた。

彼の笑顔は油断ならないということを、ジークはよく知っている。アンジェリカもそのくらいのことはわかっているだろう。わかっている、なぜかいつも押し切られてしまうのだ。

「……じゃあ、少しだけ」

アンジェリカは抵抗しても無駄だと悟ったのか、不満そうにしながらも承諾した。声が思いきり不機嫌なのは、せめてもの自己主張なのかもしれない。

「ジーク、私、先に川原に行っているわね」

ジークに向けられた声は、もう普段どおりだった。だが、表情は少しだけ心配そうである。

「ああ、わかった。あとでな」

ジークは片手をサイファに掴まれたまま、もう片方の手を上げて返事をした。安心させるために軽く笑ってみせようとしたが、引きつったぎこちない笑顔しか作れなかった。

アンジェリカが校門を出るまで見送ると、サイファはようやくジークの手を放した。

「人目につきすぎるから、歩きながら話そうか」

「あ、はい」

ジークが周囲を見まわすと、確かにこちらを見ている生徒が何人かいた。視線を集めている原因は、サイファの制服に違いない。魔導全科の生徒ならば、教室で何度も目にしているのだから、彼がアンジェリカの父親であることは知っているだろう。だが、ここには他学科の生徒も多い。なぜ魔導省の人間が来ているのか、と不思議に感じる人がいるのも頷ける。

ジークはサイファの半歩あとをついて歩いた。いったい何の話なのだろうか、どこへ行くつもりなのだろうか、様々な不安が募る。サイファはまだ話を切り出さない。ちらりと彼を盗み見た。端正な横顔からは、何の感情も読み取れなかった。

ふたりは校庭を横切り、アカデミーの外れにある寂れた教会近くまで来た。まわりには誰もいない。三本の大きな木だけが存在感を示している。

サイファはその木の下で足を止め、にっこり微笑んでジークに振り向いた。

「卒業、おめでとう」

「えっ？」

ジークは驚いて聞き返した。わざわざ人気のないところまで連れてこられ、まさかそんなありきたりなことを言われるとは思わなかったのだ。

サイファは別の表現でゆっくりと言い直す。

「君が無事に卒業してくれて良かったよ」

ジークはそれでようやくサイファの意図がわかった。ジークに重傷を負わせてしまったことを気にしていたのだろう。そのせいで卒業が危ぶまれたが、サイファの助力により卒業することができたのだ。

「ありがとうございます。サイファさんのおかげです」

素直に感謝を口にする。

何か少し気恥ずかしかった。入院中は一日として途切れることなく彼と顔を会わせていたが、退院してからは今日まで一度も会っていなかった。約二ヶ月ぶりである。そのためだろうか、ふたりきりで会話をすることに、緊張や照れのようなものを感じていた。

だが、サイファの態度は普段どおりだった。

「そもそも私の責任だからね。感謝されるのもおかしい話だよ」

笑いながらそう言うと、大きな木の幹に軽くもたれかかった。片手をポケットに差し入れ、ジークに視線を流し、穏やかに尋ねかける。

「就職の準備は進んでいるか？」

「はい、引っ越しはこれからですけど」

引っ越しは勤務の都合である。一年目は現場での仕事になるため、事件が起これば緊急招集がかかることも少なくない。そのため、少しでも早く出てこられるように、なるべく近くに住むようにとの指示が出たのだ。母親をひとりで置いていくのは心許無いので、一緒に連れていくつもりだが、本人にはそのつもりがないらしく、どうなるかまだわからない。

「そうか、困ったことがあったら相談してくれよ」

「はい」

ジークは歯切れよく返事をした。それから、少しはにかんで続ける。

「今度会うときは、上司と部下ですね」

ずっと不思議な感じがしていたが、言葉に出すとますます変な感じがする。あまり想像がつかない。想像しようとする、何かくすぐったくなってくる。

サイファはにっこりと笑った。

「厳しいから覚悟しておけよ」

「殺されかけたことを思えば、何だって耐えられると思います」

ジークも笑顔になり、つられて調子よく言った。しかし、ちょっと調子に乗り過ぎたかもしれない。サイファの機嫌を損ねたのではないかと心配になる。少しびくつきながら、彼の様子を窺う。

サイファは僅かに口の端を上げた。

「さあ、どうかな。死んだ方がましだったと思うかもしれないよ」

「……えっ？」

ジークは強張った声で聞き返した。一瞬で顔から血の気が引いた。

「まあ当分は、直接、君と関わることはないだろうけどね」

サイファは軽く流した。

だが、先ほど言ったことを否定はしなかった。冗談ではなかったのかもしれない。死んだ方がましだと思えるようなこともあるのかもしれない。少なくとも厳しいというのは本当なのだろう。ジークは顔を引き締め、身を引き締める。

「早く上がってこいよ」

サイファは微かな笑みを浮かべ、挑発的に言う。

「はい」

ジークは真剣な顔で頷いた。

サイファは副長官である。彼のいる場所はとても遠い。簡単な道のりではないだろうことは想像がつく。だが、今のジークには、逃げずに進んでいこうという強い意気込みがあった。

突然、強い風が吹いた。

頭上で木々が大きく波打つようにざわめいた。

緑の木の葉がいくつか舞い上がり、ゆっくりと舞い降りてきた。

サイファは腕を組んだ。木々の緑を見上げながら、口を開く。

「アンジェリカとは仲良くやっているようだね。君が退院してから何度か遊びに行ったと聞いたよ」

「はい、うちに来たり、遊園地へ行ったりしました」

アンジェリカはいつも両親の許可をとって行動しているようだ。この二ヶ月のことも、当然、サイファの耳には入っているだろう。彼女が遊びに行くことを反対しなかったのは、自分を信頼してくれているからだろうか、とジークは都合よく考えた。

「君から見て、アンジェリカの様子はどう？」

サイファは上方を見たまま尋ねた。声にあまり抑揚がない。感情を抑制しているようだ。そうしなければならない理由があるからだろう。アンジェリカのことについて不安を感じているに違いない。

ジークも同様に不安を感じていた。だが、サイファと違って、彼はあまり感情を抑えられない。すぐに表面に出してしまうのだ。顔に暗い陰を落とし、暗い声で答える。

「特に変化はないです。悩んでる様子は見られません。でも、それは……」

「表面上、明るく装っているだけだ、と？」

サイファがジークの言葉を引き取った。

ジークはこくりと頷いた。

「一度だけ病院で本心を見せたことがあって、そのときはかなり思いつめた感じでした」

「多少は悩むこともあるかもしれないと思ったが、そこまでとはな……」

サイファは眉根を寄せて腕を組み、小さく独り言をつぶやいた。それから、ジークに視線を向けて尋ねる。

「あの子は何と言っていた？」

「本当のことを教えてほしい、自分は遺伝子の異常なんじゃないかって」

それを聞いて、サイファは僅かに首を捻り、怪訝に眉をしかめた。

ジークは伏し目がちに淡々と話を続ける。

「もちろん口止めされてたので自分は答えてません。アンジェリカはずっと誤解したままです。これからも解いてやることは出来ないんですよ。だとしたら、自分はせめてそれを忘れることのできる時間を作ってやりたいって思って、それで……」

「ちょっと待って」

サイファは左手を開き、ジークの話を遮った。やや早口で尋ねる。

「そのアンジェリカの話というのは、いつ、どこでのこと？」

「退院する数週間前です。病院の中庭で話してて……」

ジークは不思議そうに答えた。なぜサイファがそんなことを訊くのかわからなかった。しかも、彼にしてはめずらしく焦っているように見える。

「その後、アンジェリカから話は聞いてないの？」

「何の話ですか？」

ジークはますますわからなくなった。

サイファは彼の問いに答えず、顎に手を添えて考え込んだ。やがて、ひとり納得したように頷く。

「どうやら私たちは意思の疎通が出来ていなかったようだね」

「どういうことですか？」

「いずれあの子から話があるだろうから、それを聞けばわかると思うよ。悪いね、これ以上は言えないんだ。アンジェリカに口止めされているからね」

「はあ……」

ジークはよくわからないまま、サイファに押し切られるように曖昧に返事をした。

そんな彼の様子を見て、サイファは笑いながら言う。

「そんなに不安がらなくても大丈夫だよ。事態は君にとって悪い方には転がらない。それは保証する」

それでもジークの表情は冴えなかった。サイファを疑っているわけではないが、あまりにもわからないことが多すぎて掴みどころがないのだ。これで不安を払拭できるほど楽天家ではない。

サイファはにっこりと微笑みかける。そして、元気づけるように、手の甲で軽くジークの頬に触れた。

「アンジェリカを幸せにしてやってね。いや、君も幸せになれよ」

ジークは胸の動悸が速くなった。滑らかな感触が残る頬に自分の手を運びながら、サイファの言葉を咀嚼する。深く息を吸い、ゆっくりと目線を上げる。にこやかなサイファを目にすると、ジークの顔はぱっと晴れた。

「はい！」

今度は自分の意思で、力強く肯定の返事をする。先ほどまでの霏のかかった気持ちは、一瞬でどこかへ飛んでいってしまった。自分は案外と楽天家なのかもしれない、とジークは思い直した。

「さあ、今日のところはこの辺で話を切り上げようか」

サイファはジークの肩にポンと手をのせた。ふっと笑みをもらして言う。

「あまりアンジェリカを待たせると、あとで私が怒られるからな。走って行けよ」

「はい！ 全力で走って行きます！」

ジークは元気よくそう言うと、ペコリと一礼した。そして、言葉どおり全力の速さで校庭を

横切っていった。走りにくいスーツと革靴だったが、魔導省の制服も似たようなものである。これで走ることに慣れておくのも悪くないと思った。

小高い丘の上で、レイチェルは青い空を見上げていた。顔はほぼ真上を向いている。長い金色の髪は、緩やかな風にさらさらと揺れ、上品にきらきらと煌めいた。

「レイチェル」

サイファは背後から声を掛けた。

レイチェルはゆっくりと振り返った。彼女にしてはめずらしく、黒のドレスを身に着けていた。手には白バラの大きな花束を抱えている。

「待たせてしまってすまない」

「私も今さっき来たところよ」

彼女の微笑みは、バラにも負けないくらい優美だった。

サイファは小径を通り、彼女の隣に足を進める。彼もまた、白バラの花束を手にしていた。

ふたりの正面には、大きな石碑と、大きな白い十字架があった。ラグランジェ家の墓である。例の事故以来、サイファは何度か訪れていたが、レイチェルは今日が初めてだった。入院していたため、葬式にすら出ていない。つまり、彼女にとっては、これが最初の追悼の儀式となる。

レイチェルは両膝をつき、白バラの花束をそっと石碑の上に置いた。そのまま両手を組み合わせ、静かに目をつむる。桜色の可憐な唇が、微かに動いた。声には出していないが、父親に祈りを捧げ、言葉を掛けているのだろう。

サイファも、腰を屈め、石碑に花束を置いた。ふたつの花束が隣り合わせに並んだ。ズボンのポケットに右手を掛けると、顔を上げ、大きな十字架を見つめた。

ルーファスとの様々な応酬が脳裏に浮かんだ。

彼のことは、今となっては恨んでいない。自分には自分の事情があったように、彼には彼の事情があった。守りたいものが違っただけだ。どちらが正しいか、その絶対的な判断は誰にも下せない。正しい、正しくないの基準など、人によって違うものだ。だから、自分は自分の信じる道を進んだ。それが非難されることであるのなら、罰を下されるというのなら、甘んじて受けよう。ただし、今はまだ――。

「私は……」

不意に耳に届いたレイチェルの声。サイファは思考の海から引き戻された。その声の方に目を向ける。

「私は何の罰も受けていない」

彼女はまっすぐに立ち、大きな十字架を見つめながら硬い声で言った。

「罰は死んでから受ければいいさ」

サイファはさらりと流した。そして、引き締めた真剣な顔を十字架に向ける。

「生きている間は、私が君を守るよ。たとえ君自身が望まなくても」

強い意志を秘めた口調でそう言い、隣の小さな手に触れた。血の気がなく冷たい。それを温めるように包み込む。自分の存在を示すように、決意を伝えるように、ぎゅっと力を込めて握りし

めた。

レイチェルはゆっくりと振り向いた。無言のまま、微かに揺れる蒼の双眸で問いかける。

「君が生きて幸せになることは、アルフォンスの遺志でもあるんだよ」

サイファは優しく答え、微笑んだ。

「アルティナさんのところへ戻るつもりはない？」

それは、王妃の付き人として復帰しないか、という意味である。

レイチェルは静かに首を横に振る。

「アルティナさん、いまだに毎日のように文句を言いに来るんだよね」

サイファは可笑しそうに言った。大袈裟ではなく、本当にしつこいくらいに来ていた。いつになったらレイチェルは復帰するのか、説得はしているのか、そんなことを息巻きながら詰問するのだ。時には泣き落としで攻めてくることもある。彼女にとって、それほどレイチェルの存在は大きかったのだろう。

「ごめんなさい」

レイチェルは力なく詫びた。

彼女が拒み続ける理由を、サイファは理解していた。

いつか魔導が暴発してアルティナを巻き込んでしまうかもしれない——そんな懸念がどうしても払拭できないのだろう。アルティナは魔導はまったく使えない。いざというとき、結界などで自衛することは不可能なのだ。

「魔導の暴発なんて、普通にしていれば起こらないよ」

それはすでに何度か話したことである。過日の暴発は魔導増幅器によって起こされた特殊なものということも、その仕組みを交えて理論的に説明をした。それで理屈はわかってくれたようだが、心までは動かせなかった。暴発時の記憶が、彼女を臆病にしているのだろう。

サイファは僅かに目を細めた。

「もし、あの規模のものが私たちの家で起こったとしたら、間違いなく隣接の王宮も巻き添えだ。悪くすれば壊滅かもしれない。つまり、君が付き人をしてようが、してなかりようが、アルティナさんの危険度にそれほど変わりはないんだよ」

レイチェルははっと息を呑み、大きく目を見開いた。ひどく動揺している様子が垣間見える。

そんな彼女を落ち着けるように、サイファは優しく言葉を繋ぐ。

「だからね、自信がないのなら、克服したらどうかな」

「克服？」

レイチェルは困惑して聞き返した。

サイファは頷いた。

「もう一度、ラウルに家庭教師を頼もうと思う」

レイチェルの息が止まった。胸に手を当て、大きく瞬きをする。

「……本気？」

それだけ言うのが精一杯のようだった。

サイファは口元を上げた。

「ああ、そもそもラウルがきちんと役目を果たしていれば、こんなことは起こらなかったかもしれないんだ。責任は取ってもらうよ。断らせはしないさ」

「でも、それは、私が魔導を嫌がっていたから……」

レイチェルは遠慮がちにラウルを擁護した。彼女にそのつもりはなかったかもしれないが、サイファには庇ったようにしか聞こえなかった。

「子供の言いなりでは家庭教師失格だよ。それも含めてラウルの責任さ」

彼は腰に手をあて、涼しい顔で断罪した。

レイチェルは複雑な表情で考え込んだ。結論の出ないまま視線を上げ、気遣わしげに尋ねる。

「サイファは、それでいいの？」

「君のことは信じてるからね」

サイファはにっこりと大きく微笑んだ。

正直に言えば、面白くない気持ちも少なからずある。それでも、ラウル以外には預ける気にならない。結局、誰よりも彼のことを信頼しているのだ。魔導力の面からいっても、レイチェルを任せられるのは、ラウルの他にはいない。いざというとき、彼女を抑え込める力がない人間には危険すぎる。彼女の強大で不安定な魔導力を指導できるのは、それ以上の魔導力の持ち主だけである。

「それで、ある程度の自信がついたら、アルティナさんの付き人に復帰してほしい」

その要望は、もちろんアルティナのためであるが、同時にレイチェルのためでもあった。家に閉じこもっているより、気の合う友人と過ごした方がいいに違いない。サイファはそう考えていた。

「……わかったわ」

レイチェルは小さな口をきゅっと結び、覚悟を決めたようにこくりと頷いた。

「そんなに思いつめた顔をしないで」

サイファは微笑んだ。

「難しいことじゃないよ。ただ、少しだけ勇気を出して」

彼女に手を伸ばし、桜色の頬を包み込むと、優しく諭すように言う。

レイチェルは澄んだ蒼の瞳で、じっとサイファの瞳を見つめた。何かを考えている様子だった。まだ不安は拭いきれていないように見える。しかし、ゆっくりと目を閉じ、一呼吸してから開くと、きれいにそれは消えていた。代わりにあったのは、凜とした迷いのない表情だった。

「ありがとう」

透き通った綺麗な声でそう言うと、少女のような愛らしい微笑みを浮かべた。

ジークは息を荒くして川辺まで駆けつけた。視界が開け、青空が大きく広がった。さらさらと水の流れる音が両耳に届いた。心が洗われるようだった。気のせいか、空気も澄んでいるように感じた。

白いガードパイプに手を掛け、川原を左右に見渡す。探していたのはアンジェリカだった。だが、誰の姿も見つけれなかった。

——何で、いないんだ？

彼女はジークより前に出たはずだ。先に行くと言っていた。遅すぎたので怒って帰ったのだろうか。いや、そこまでの時間はかかっていない。途中で追い越したのだろうか。それならば気づかないはずがない。別の道を通っているのだろうか。寄り道しているのだろうか。途中で何かあったのだろうか——。様々な状況を、矢継ぎ早に想像する。だが、正解はわからない。不安だけが膨張していく。鼓動が速く強くなっていく。

「アンジェリカー——っ！！」

ガードパイプを握りしめ、あらん限りの声で腹の底から叫んだ。

「何よ」

下方から、少し怒ったような声が聞こえた。彼女の声だ。ガードパイプから上半身を乗り出して覗き込む。

彼女は石段に座っていた。口をとがらせながら、恥ずかしそうに顔を赤らめ、睨み上げていた。

そこはジークのいたところのほぼ真下だったので、死角になっていたようだ。安堵してほっと息をつく。

「良かった」

「いきなり人の名前を絶叫しないでほしいわ」

「いなくなったかと思ったんだよ」

「逃げたりなんかしないわよ」

アンジェリカはムツとして言い返した。

ジークはガードパイプの切れ目から、川原へと続く石段を駆け下りた。急ぐあまり、足がもつれて転げ落ちそうになった。慣れない革靴だったことも影響していたのかもしれない。

「ちょっとジーク、落ち着いて！ 私は逃げないって言ってるでしょう？」

「わかってるけど」

照れ笑いしながら、彼女の隣に腰を下ろした。その石段は細いため、ふたりが並んで座るには窮屈なくらいだった。必然的に身を寄せることになる。彼の右腕に、彼女の左肩が触れた。微かに日だまりの匂いがした。

「お父さんの話って何だったの？」

アンジェリカはジークに振り向き、顔を斜めにして尋ねた。

「卒業おめでとうって」

「それだけ？」

「まあだいたい……」

ジークは答えを濁した。もうひとつはアンジェリカの話だったが、それを言うわけにはいかなさう。それ以前に、一体どういう話だったのか、ジーク自身がさっぱりとっていいほど理解できていない。

「ふーん……」

アンジェリカはどこか疑わしげにそう言ったが、それ以上の追及はしなかった。

「それより、おまえは何の話なんだよ」

「えっ？」

「話したいことがあるとか言ってただろ？」

ジークは彼女に人差し指を向けて尋ねた。そのとき、ふと先ほどのサイファとの会話を思い出す。そのうちアンジェリカから話があるだろうと彼は言っていた。何についての話か見当もつかないが、今からの話がそれなのだろうかと思う。

だが、アンジェリカはその期待を根本から裏切った。

「そうだったかしら？」

彼の視線から逃げるように空を見上げ、軽い口調で言う。

ジークはわけがわからず、眉をひそめて睨む。

「何でとぼけてんだよ。おまえが言ったんじゃないか。話したいことがあるって」

「あ！あのね、私、就職先が決まったの」

アンジェリカは唐突に思い出したように言った。胸元で両手を合わせてジークに振り向く。

「え？ そうなのか？」

ジークはその話題に食いついた。目を大きくして彼女を見る。話を逸らそうという彼女の策略にまんまと引っかかった形である。もちろん、このときのジークはそれに気づいてなどいない。

アンジェリカはにっこりと微笑んだ。

「きのう決まったばかり」

「どこだ？」

「アカデミー」

「えっ？」

ジークは目を見開いて聞き返した。彼女の答えはとても信じられるものではなかった。彼女の言い間違いか、自分の聞き間違いか、とにかく何かの間違いではないかと思った。

アンジェリカはくすっと小さく笑って説明する。

「先生じゃないわよ。先生のお手伝い。助手みたいなものかしら。テスト問題を作ったり、採点をしたりするの」

ジークは納得した。ほっとしながら言う。

「へえ、そんなの募集してたのか」

「お父さんの紹介なの。その先生、研究の方が忙しいから、個人的に探してたみたいで」

「サイファさんの？ あれ？ おまえ、そういうのに頼らないって言ってなかったか？」

アンジェリカは自分の実力以外のものに頼ることを極端に嫌っていた。そのため、ジークは不思議に思って尋ねたのだが、これではまるで彼女を責めているみたいである。

「あ、いや、悪いっていうんじゃないくてな……」

慌てて弁明しようとしたが、上手く言葉が続かなかった。自己嫌悪に陥る。彼女を傷つけていないだろうか、それだけが心配だった。

アンジェリカはふっと表情を緩めた。

「私、あの頃はちょっと肩ひじを張りすぎていたのかも」

ジークは驚いて顔を上げた。彼女は小さく笑って肩をすくめていた。どことなく恥ずかしそうにしている。強情すぎた過去の自分を思い出しているせいだろうか。

「ああ、そうだな」

ジークもふっと表情を緩めて同意した。

「あまり頼りすぎるのも問題だと思うけれど」

アンジェリカは微笑みながら言った。

ジークは眉をひそめた。

「それ、俺のことか？」

「ううん、お父さんのこと」

アンジェリカは笑いながら言った。

ジークもつられて笑った。だが、サイファの場合は、頼るというより利用しているのだと思う。アンジェリカにしてみれば、どちらもたいして違いはないのかもしれないが、ジークにはその違いが明確に見えていた。

「でも、今回は素直に感謝するわ。おかげでアカデミーで働けるんだもの」

「そういや、おまえを雇った先生って誰なんだよ」

ジークは少し身を乗り出した。

「今度の一年生の担任よ。新任だから、ジークは知らないんじゃないかしら。私も一度会っただけけど、お父さんはいい人だって言っていたわ」

アンジェリカは明るく言った。

ジークは微妙に顔を曇らせた。アンジェリカと一緒に仕事をする相手なので、もちろん良い人である方がいいに決まっている。サイファも安心して任せられる人間だからこそ、アンジェリカに勧めたのだろう。だが、ジークとしては、サイファが認めているというのが何となく面白くなかった。それに――。

「それって、男か？」

「ええ、男性よ。30歳って聞いたわ」

年齢を聞いて、ますます顔が曇った。

「もしかして、心配？」

アンジェリカは悪戯っぽい笑みを浮かべながら、複雑な表情のジークを覗き込んだ。

「そんなじゃねえよ」

ジークはふてくされたようにそう言うと、頬杖をつき、少しだけ顔をそむけた。

彼女にはすっかり見透かされてしまっているようで、どうにもきまりが悪かった。器の小さな男だと思われはしないだろうかと不安になった。そもそも、そんな不安を抱えること自体が、器が小さいということの裏付けに他ならない。自分の情けなさに気持ちが深く沈んだ。

そのとき――。

腿の上に重みがかかった。

仄かな甘い匂いが鼻をくすぐった。

そして、唇の端に何かが触れた。

あたたかく、柔らかい——。

一瞬の出来事だった。何の反応もできなかった。

だが、それが何かくらいはわかる。

「おまえ……」

ジークは口元を押さえ、何ともいえない表情で、ゆっくりと振り向いた。眉根を強く寄せ、眉間に深く皺を刻んだ。顔は燃え出さんばかりに赤く、そして熱い。

だが、アンジェリカの方はいたって普通だった。無邪気なくらいの笑みを見せている。

「なんで……っ」

ジークは彼女を指さして突っかかったが、それ以上の言葉が出てこなかった。口だけを何か言いたげに動かす。顔だけでなく、頭にも血が上っていた。冷静に考えられる状態ではない。

アンジェリカはちょこんと首を傾げた。

「もしかして、嫌だった？」

「そうじゃねえ、けど……」

ジークは言い淀む。

「ならいいじゃない」

アンジェリカは事も無げに言う。まるきり何とも思っていない口調だった。

ジークは瞬間的にカッと沸騰した。

「おまえバカか！」

思わず怒鳴りつける。だが、その勢いは続かなかった。

「何でこんな簡単に……不意打ちみたいな……ってか、おまえからなんて……」

次第にしどろもどろになっていく。言いたいことが上手く説明できない。ああ……、と苦悶の表情で頭を抱えた。

アンジェリカは澄んだ青空を見上げ、立てた人差し指を口元にあてた。

「うーんと、いつかの返事のつもりだったんだけど」

「……………？」

ジークは怪訝な顔で彼女を見た。

「忘れたの？ 入院したとき、私に言ったこと」

「え？ えーっと……」

彼女にそう言われてギクリとした。何だっただろうか——人差し指を頭に当て、必死に考えを巡らせる。だが、焦れば焦るほど、頭が働かなくなっていく。

「本当に忘れてるの？」

アンジェリカは眉をひそめる。

「ずっと一緒に生きていきたいって」

「あ……」

ジークは思いきり間の抜けた声を発した。ようやく思い出した。入院した翌日に言ったことだ

。平たくいえばプロポーズである。

「あ、じゃないわよ」

アンジェリカはため息まじりに言った。少し顎を引き、上目遣いで不安そうに彼を窺う。

「もしかして、もう気が変わった？」

「んなことはねえ！！ すごえ、すごえ嬉しい！！」

ジークは彼女の細い肩を掴み、がむしゃらに気持ちを伝える。喜んでいる表情ではなく、必死の形相だった。

「本当にいいんだよな？！」

「ええ、私はね」

アンジェリカは落ち着いた声で言った。

「でも、ジークはいいのかしら？ よく考えた方がいいかもしれないわよ」

「何でだよ！ もう十分すぎるくらい考えてんだ！」

ジークはカッとして言い返した。彼女に疑われたのが心外だった。自分はずっと真剣だった。まだ信じてもらえないのかと思うと、たまらなく悔しい。

アンジェリカは斜め上に視線を流すと、とぼけた顔でさらりと言う。

「私、ジークが毛嫌いしているラウルの娘なんだけど」

「……え？」

ジークは混乱した。アンジェリカはこのことを知っていたのだろうか。いや、知るはずはない。サイファは秘密にすると言っていた。では、彼女の推測なのだろうか。自分は試されているのだろうか。だとしたら、知らないふりをしなければならない。今からでは遅いか？ いや、どうにかして取り繕わなければ――。

「鎌を掛けているわけじゃないわよ」

アンジェリカはにっこりとして言った。

「お父さんとお母さんから聞いたの、本当のことを」

ジークはポカンとした。きっと相当に間の抜けた顔をしていただろう。

アンジェリカは首を傾げる。

「ジークも知ってるって聞いたけど？」

「あ、ああ……」

ジークは噴き出した汗を手の甲で拭った。ようやく少し落ち着いてきた。それとともに頭も回ってきた。

「おまえ、いつからそれ……」

「ジークが退院する少し前かしら。もう少し早く言いたかったんだけど、なかなか言い出せなくて」

アンジェリカはそう言って、小さく肩をすくめた。

それから二ヶ月以上が経っている。その間も自分はずっと悩んでいた。早く言ってくれれば――ジークはそう思ったが、彼女を責める気にはなれなかった。彼女にずっと黙っていた自分に、そんな資格はない。それに、言い出しにくかった彼女の気持ちもよくわかる。

先ほどサイファと話が噛み合なかった原因もわかった。真実を知ったということをアンジェリカ自身から既に聞いている、サイファはその前提で話していたのだろう。

アンジェリカは前に向き直り、膝の上に両肘をつくと、開いた手の上に顎をのせた。

「何だか恥ずかしいわ。ずっと勝手に勘違いして、もうすぐ死んでしまうなんて悲劇のヒロインぶって。思い返すと顔から火が出そうよ」

「悲劇のヒロインにしちゃ、強情すぎたけどな」

ジークは苦笑いしながら言った。

「どうせ強情よ」

アンジェリカはむくれて、口をとがらせた。

ジークは小さく笑った。彼女のそんな表情でさえも、ただ素直に愛おしく思える。重かった心のつかえが取れたせいかもしれない。

しかし、気掛かりなことは残っている。その真実について、彼女がどう思っているのかがわからない。彼女の様子には何も変化が見られない。悩んではいないのだろうか。

サイファが知りたかったのは、おそらくこのことだったのだろう。当事者の彼の前では、たとえ悩んでいたとしても、アンジェリカがそれを見せることはない。だから、わざわざ自分に尋ねたのだ。

そんなことを考えるうちに、自分がそれを聞き出してサイファに伝えなければならないような気持ちになってきた。勝手な使命感である。自分に出来ることであれば、彼の力になりたいと思ったのだ。横目で彼女を窺いつつ、思いきって率直に訊いてみる。

「それで、おまえさ……どうなんだ？ その真実を聞いて」

「どうって？」

「だから、どう思うかっていうか、どうするかっていうか……、悩んだりしてねえのかなと思って」

アンジェリカは優しく微笑んだ。

「何も変わらないわよ。お父さんはお父さん、お母さんはお母さん、ラウルは先生。誰も変わる事なんて望んでいないもの。私もこのままがいい。だからずっとこのままよ。悩むこともないわ」

淀みなくいつもと変わらない口調で答える。無理をしているようには見えない。きっと本心からの言葉なのだろう。彼女の話の聞いていると、それがとても自然で当たり前のように思えてくる。何も心配することはなかった、とジークは胸を撫で下ろした。

「ジークは？ 私がラウルの娘でもいいの？」

「何も変わらねえよ。おまえはおまえだしな」

彼女と同じ言葉で説明をして、ジークははにかんだ。彼女の出自を知ったときは驚いたし、ショックも受けた。それは事実だ。だが、彼女に対する気持ちだけは、少しも変わることはなかった。そもそも入院中にあの話をしたときは、すでにラウルの娘であることを知っていた。知ったうえで彼女と生きていく決意を固めたのだ。

「よかった」

アンジェリカは胸に手をあて、安堵したような笑顔を見せた。

会話が途切れ、急に静かになった。

川を流れる水音が、やけに大きく聞こえた。

視界の端できらきらと輝く水面が眩しい。

「あのね」

アンジェリカが硬い声で沈黙を破った。その声から緊張が伝わってくる。

「私、お母さんみたいにならないから」

「……ああ」

ジークは頬杖をついたまま、静かに相槌を打った。

唐突で少し驚いたが、彼女の言いたいことは理解できた。彼女なりに心配させまいと気を遣っているのだろう。それを言わせたのは自分に違いない。呆れるくらいに心配性で嫉妬深いことを、彼女はきっと知っている。

この後どう反応すべきか悩んだ。僅かに目を伏せる。

暫しの沈黙のあと、訥々と言葉を繋いだ。

「俺、サイファさんみたいに、心、広くねえから」

「うん」

アンジェリカは重い声を落としてうつむいた。

「そんなんなったら、俺、発狂するかも」

「うん……」

これがジークの飾らない気持ちだった。サイファのような行動をとる自信はない。受け入れる、受け入れない以前に、自分が自分でいられなくなるだろうと思う。こうやってその事態を想像するだけで、気が変になりそうなのだ。情けないことこの上ないが、彼女には正直なところを伝えておこうと思った。

不意に、立てた小指が視界に差し出された。

ジークは面食らった。まさか、と思いながら、その小指の主へと視線を滑らせる。

「ゆびきり」

アンジェリカはにっこりと微笑んで答えた。

彼女は何かというとすぐに指切りを求める。今まで何度させられたかわからない。だからといって、いくらなんでもこの場面で出てくるとは思わなかった。ジークは呆れながらため息をつく。

「こんな大事なことで指切りかよ」

「大事なことから指切りなの！」

アンジェリカは立てた小指をしっかりと見せながら、少し怒ったように力説した。

「仕方ねえな」

ジークは渋々といった仕草で、軽く握った右手を持ち上げた。わずかに小指を出しているが、

いかにもやる気なく丸まっている。

アンジェリカはそれでも嬉しそうに、彼の小指に自分の小指をしっかりと絡ませた。

「約束成立ね」

小首を傾げてくすりと笑うと、指を切った。

——ったく……。

ジークは心の中で嘆息した。彼女は子供扱いすると怒るが、こういうところはまるで子供である。それが嫌なわけではない。だが、そういう子供っぽさに付き合わされるのは、大人の男としては少し複雑な気分である。だいたい、こういうときの約束は、指切りではなく普通は——。

そこまで考えて、はっとした。彼女に振り向いて尋ねる。

「おまえ、あれ持ってるか？」

「あれ？」

「えっと、シルバーリング」

それは、ジークが誕生日プレゼントとして彼女に贈ったものである。12歳の女の子に魔除けとして贈るという古い風習に基づいたものだ。ただ、サイズが合わなかったため、彼女はネックレスにして身につけているらしい。毎日、身につけていると言っていたが、それはだいぶ前のことである。今でも身につけてくれているだろうか、と少し心配になった。

「ええ、持っているわ。サイズが合わないままだけど」

アンジェリカは襟元から指を差し入れると、ネックレスの細い鎖を引っ張り出した。その鎖に通されたシルバーリングが襟からこぼれる。太陽を反射してきらりと光った。

ジークは手を差し出した。

「ちょっと貸してくれ」

「ええ、いいけど……」

アンジェリカは怪訝にそう言うと、首から外し、ジークの手の上に鎖ごと置いた。

ジークはその指輪から鎖を外した。

「左手」

「左手？」

アンジェリカは不思議そうに尋ね返しながらも、素直に左手を差し出した。手のひらが上になっていたが、ジークはそれをひっくり返し、手の甲を上にした。

「何なの？」

「指切りより、こっちの方がそれっぽいだろ」

細い薬指に、そっと銀の指輪を滑り込ませる。彼女が言ったように、サイズは合っていない。かなり緩かった。

「今だけ、それ、嵌めてくれねえか？ ちゃんとしたのは、そのうち買うから」

ジークは目を伏せたままで言った。彼女の大きな瞳に見つめられたら、動揺してしまい、しどろもどろになりそうだと思ったのだ。しかし、結局、曖昧なことしか言っていない。自分の意図が彼女に通じているか不安になった。

アンジェリカは大きく瞬きをした。薬指の指輪をじっと見つめ、くすりと笑う。

「一緒に生きていく約束ね」

「……ああ」

ジークは彼女の肩を抱こうと、背後から手を伸ばした。だが、それが届くより早く、彼女はすっと立ち上がった。ジークは宙にさまよう手を慌てて引っ込める。逃げられたわけではなく、タイミングが悪かっただけだろうが、少しだけ気落ちした。

アンジェリカは軽いステップで石段から川原に下りた。まだ小石の上で歩くのは慣れないらしい。不安定な足元にふらつきながら振り返る。黒髪がさらりと舞い、小石がジャッと鈍い音を立てた。

「大事なこと、言い忘れていたわ」

石段のジークに届かせるように、声の音量を上げた。

にっこりと笑みを浮かべる。

後ろで手を組み、胸を張って大きく息を吸う。

そして――。

「私、ジークのこと大好きよ！」

屈託のない笑顔を弾けさせながら、彼女はありったけの声を張り上げた。澄みきった声が、澄み渡った青空に拡散した。

「なっ……」

ジークは顔を真っ赤にして狼狽した。思わず周囲を見まわす。自分から見える範囲に人影はなかった。ふう、と細くため息をつき、前髪を無造作に掴みながら額を押さえた。そして、下を向いたまま声を立てずに笑う。背中少し揺れていたかもしれない。

アンジェリカは予測もつかない行動や反応をすることがよくある。ジークははいつも振り回されっぱなしだった。入学したときからずっと彼女のペースに巻き込まれてきた。それでも不思議と嫌だとは思わなかった。むしろ、そういうところが可愛いとさえ思う。彼女と一緒にいると飽きることがない。

「ねえジーク、見て！」

ジークはまだ熱の残る顔を上げた。

彼女は左手を高々と掲げていた。太陽にかざしているらしい。手を動かすたび、光を受けたシルバーリングがきらりと煌めいた。

ジークはふっと笑みをもらし、誘われるように立ち上がった。その眩しさに目を細めながら、それでも目をそらすことなく、確かな一歩を踏み出す。

きっと彼女となら、一緒に歩いていける。

きっと彼女となら、ともに支え合っていける。

自分が守っていくなんていう自信はないけれど、

楽しいときも、つらいときも、

晴れた日も、嵐の日も、

つないだ手を離さない自信だけはあるから――。

空は奇跡のように果てしなく青かった。太陽は祝福の光を世界に遍く降り注ぐ。彼女の手にあるのは、その一部を受けて輝く夢のひとしずく。それは、ふたりの約束の形、望むべき未来への道しるべ。

ジークはこの光景を生涯忘れることはないだろうと思った。